

東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 2

東京大学本郷構内の遺跡

法学部 4 号館・文学部 3 号館  
建設地遺跡

東京大学遺跡調査室 編

1990



## 序 文

法学部4号館・文学部3号館の建設地の発掘調査報告書が刊行されることになった。本年3月に刊行された理学部7号館の建設地の発掘調査報告書に続いて、2冊目の、本郷構内における「行政調査」の報告書になる。この地点の調査は、遺跡調査室が公費で実施した初めての調査である。1983年および84年は、学内の建設工事に伴う埋蔵文化財の事前調査に係わる問題が、一挙に表面化した年であった。1983年夏の、御殿下記念館・山上会館のための建設予定地の予備調査によって、当初予想されていた弥生時代の遺跡に代り、思いもかけぬ江戸時代の遺跡が、きわめて良好な状態のまま残されていることが判明した。そこで平野龍一元総長のもとに臨時遺跡調査委員会が設けられ、その傘下に遺跡調査室が発足した。ついで翌1984年冬に実施されたこの地点の予備調査によって、やはり江戸時代の遺構・遺物が、これまた大量に、土中に眠っていることが明らかとなり、ここでも本格的な調査が必要になった。幸い関係者の努力によって調査体制が整えられ、1984年4月に調査は始まった。

江戸時代の遺跡、それも大名屋敷の調査は、調査の主体になる考古学の関係者にとっても初めての体験であり、その遺構と遺物の豊かさには、驚きの連続であったと聞いている。調査が軌道に乗り出した矢先の6月末、工事にかかっていた医学部附属病院中央診療棟建設地点から、江戸時代の遺物を含む遺構の出土を見た。工事に着手しているところでの遺物の大量出土であり、他方、調査室はすでに手一杯であった。急遽、協議が重ねられ、結局、法学部・文学部の調査地点から人を割り、小人数による調査が10月から開始された。つづいて理学部7号館の建設問題が浮上し、予備調査の結果、ここでも本格的な調査が必要であるとの結論が出た。学内ではそれまでほとんど問題になっていなかったことだけに、各種の意見が入り乱れ、調査関係者が厳しい局面に立たされたこともあったようである。

遺跡調査室も一度に4箇所の発掘調査を抱えこめば、当然、多くの人員が必要になる。調査そのものも、大規模な遺跡が上下に重なっている。しかも地表下8メートル近くまで発掘しなければならぬ部分もある、などの事情から、費用と時間が多大なものにならざるをえない。それが、学内で種々の批判を誘ったのは事実である。だがともあれ、調査は各所で終了し、建物も竣工して、それぞれがいま所期の目的に利用されている。困難な局面を乗り切った多くの関係者の努力の賜物であろう。このような経験を、今後も続くであろう本郷構内の建設に伴う埋蔵文化財の調査に、いかに生かしていくかが問題である。

本郷構内は埋蔵文化財の宝庫である。江戸時代の加賀藩本郷邸に関係するものばかりでなく、今話題になっている弥生時代の名称は本郷に因んでいるし、その最初の調査は本学の教官によって実施されたものである。建物を建設しようとすれば、それに先だって建設地区での「行政調査」

が必要になる。このことを考慮して、新たに本年7月埋蔵文化財調査室を発足させたが、調査室だけで調査が進むわけではない。多くの関係者による、機に臨み変に応じた理解と協力がなければ、調査を順調に進め、建物を円滑に建設することは不可能である。関係者の十分な話し合いの上立った体制により、今後の調査ならびに建物建設が進められることを望みたい。

過去5年余の本郷構内の調査を通じて、新しい学問分野の成立する状況が生まれているようである。それは、日本の近代化の基礎をなす江戸時代のもつ意味を、従来とは全く異なる視点から究明しようとする学問、すなわち「近世考古学」の登場である。その中心対象が当時の世界最大の都市、江戸にあることはいまでもないが、新分野の開拓者は、調査室に関係した研究者であると聞く。一つの新しい学問分野が、本学構内の資料を基礎にし、本学の関係者を担い手として成立しようとしているわけである。学問を志す一人として、まことに喜ばしい限りである。今後の進展を大いに期待したいと思う。

このように由縁こそ建設工事に伴うという受身のものであったが、そこから新たな学問の基盤が得られた。一方、学内の諸設備は、残念ながら、貧困の一語につきるであろう。その改善が強く望まれており、改築・新築が陸続と実現することが期待される。そこで、円満に建設計画がすすむよう、考古学調査と建築計画との調和をどのように計っていくかが、今後の最大の課題である。学内の叡智を集め、よりよい方向を求めていきたいものである。

紆余曲折をへながらも、ここに公費による調査の最初の報告書が出版される。この記念すべき報告書が、「近世考古学」の確立を志す多くの関係者によって、十二分に活用されることを念願している。

最後に、本報告書の完成は、東京大学文学部考古学研究室の藤本 強教授および東京大学埋蔵文化財調査室の大塚達朗助手を始めとする諸氏の、献身的な努力に負うものであることを記しておきたい。発掘の開始からほぼ6年の長きにわたる、藤本教授ほかの研究者の粘り強い調査研究に対して、心から敬意と感謝の意を表したい。加えてまた、文学部考古学研究室の上野佳也教授と埋蔵文化財調査室の寺島孝一助教授には、この発掘調査ならびに本報告書の作成にあたる過程で、様々のご指導を賜った。ここに厚くお礼申し上げる次第である。

1989年11月3日

東京大学総長

有 馬 朗 人

## 序 文

1984年2月のことであった。当時の法学部長であった田中英夫名誉教授を初めとして法学部の教官が、その日に行なわれた埋蔵文化財の予備調査の結果を聞くために、文学部の応接室に集まった。予備調査の状況は文学部側はともかく、法学部側は、本格的な調査が必要であるというものであった。長年の懸案であったアネックスによる法学部4号館建設計画が、風致地区の問題を初めとする種々の難問を何とかクリアーして、ほぼ実現できるめどがついて来たちょうどその時、埋蔵文化財の調査をしなければならないという新たな問題が生じたのである。その後、各方面に問い合わせもし、また種々協議したが、本格的な発掘調査は避けられないということが明らかになってきた。文学部と協議を重ね、それぞれが出来るところで協力しあうということが確認され、法学部は調査員のために定員を融通し、文学部は発掘調査技術を提供して、臨時遺跡調査委員会の下にこの調査を進めることになり、事務の担当は文学部にお願いすることになった。

いざ調査が始まると、なかなか捗々しく進展しているとは見えない。従来経験にないほどに大量の遺物を含む遺構が密集しているとのことではあったが、法学部の研究室からは調査地点は丸見えであり、その悪戦苦闘ぶりをつぶさに見ることができた。初秋の頃であったか、調査地点に調査員がほとんど見えない日々が続いた。よくよく見ると土だけが穴の底から外に出ている。折しも松尾浩也法学部長（当時）を初めとする教授会メンバーによる見学会が催され、調査は江戸時代に特有の地下式土坑と呼ばれるものの探査に進んでいて、調査員全員が穴ぐらのなかに入っていたので地上から姿が消えていたことを知った。やきもきして待っていた調査も法学部側は1984年中には終り、若干残っていた文学部側の調査も年明け早々には終了した。それに合わせるように建設工事の予算交付の示達があって、1985年3月には工事が開始され、翌年完成、それ以降、文学部、法学部の研究・教育に大きな力となっている。他部局の話を知るとこちらの調査は順調に進行した方に入るというべきであろう。相互理解と信頼があったからこそその結果と思われる。その報告書が出版される。関係者の努力に感謝したい。

1989年11月

東京大学法学部長

新 堂 幸 司

## 序 文

法学部4号館・文学部3号館の発掘調査報告書が、ようやく刊行されることになった。1984年に調査が開始されてから5年余、建物が完成してからもすでに2年余りが経過している。考古学の調査・整理・分析には時間を要すると聞いていたが、時間も、それに費用もまた、かなりのものであることが周知されたというべきであろう。その間、文学部としては、遺跡調査室の開設に努力された二宮 敬名誉教授、その維持に心を砕かれた久保正彰教授、そして埋蔵文化財調査室への転換に尽力された戸川芳郎教授と、3代にわたる学部長がご苦労になったわけである。

遺跡調査室は考古学の関係者が主体であったことから、文学部とはもっとも縁が深く、室員も文学部でお預かりするという不安定な状態が続いていた。だが、上野佳也、藤本 強の両考古学教授と二宮、久保、戸川の歴代3学部長の熱意が実り、埋蔵文化財調査室は、今年7月から、総長管轄下の組織として独立することになった。とはいえ、ごく小さな組織であるから、学内各部署のご理解とご協力がなければ、学内埋蔵文化財の調査・分析という、その所期の目的を達することはできない。各方面から寄せられた、これまでのご支援に厚く御礼申し上げるとともに、今後のご協力を是非ともお願いしたい。

日本の今日あるは、じつは、江戸時代の文化の賜物ではないのか。明治以降の急激な社会発展を可能にしたのは、一つには、江戸時代に培われた種々の文化的要因であろう。その江戸を、考古学的に解明しようとする近世考古学の本格的な誕生が、本郷構内の遺跡の資料を駆使しながら、調査室に関係した研究者によって担われようとしている。この報告書の中にも、すでに多くの新しい知見が盛り込まれている。近世の遺構群はきわめて複雑なあり方を示すが、その分析のために開発された、遺構の方位と遺構の密度の濃淡との組合せという斬新な手法、あるいは近世の魚の調理法の、具体的な遺物に即しての解明等々、多くの研究方法が、この調査を通じて芽生えているという。しかも、新しく開発された方法は、単に江戸時代の考古学だけではなく、より古い時期の研究にも適用可能なものであるという。

新しい学問の胎動——これが実現にいたれば、不幸にして消滅した遺跡も救われることになるだろう。関係者の学問成果に期待すると同時に、この報告書がその基礎になることを願ってやまない。そしてまた、この新分野の確立こそが、ご支援を頂いた学内各部署に対して報いる途でもあろう。学内の各位におかれても、この考古学の新分野の健やかな成長・発展のために、今後とも変らぬご理解とご協力を賜わるよう、重ねてお願い申し上げます次第である。

1989年11月

東京大学文学部長

吉 田 民 人

## 例 言

- 1) 本書は、1984年4月～1985年3月にかけて東京大学遺跡調査室が東京都文京区本郷東京大学構内の法学部4号館・文学部3号館建設地で行った遺跡調査及び研究成果の報告である。
- 2) 調査によって得られた動物遺骸については早稲田大学金子浩昌氏に鑑定を依頼し、論考を寄せて頂いた。顔料については、正倉院事務所成瀬正和氏に分析を依頼し、論考を寄せて頂いた。
- 3) 執筆は調査参加者の所見に従い、報文末尾に氏名を記した者が行った。報文の責任はそれぞれの執筆者が負うものである。
- 4) 遺構の実測は調査参加者全員があたり、遺物の実測は石井聖子・上田 真・津野 仁・菅谷通保が、遺構・地形図の浄書は菅谷通保が、遺物の実測図の浄書は上田 真・津野 仁が、主として行った。
- 5) 遺構・遺物の写真は主として藤本強が撮影した。
- 6) 遺物の縮尺は1/3を基本としたが、必要に応じて1/2, 1/4とし、各図にスケールを添付した。遺構の縮尺は1/40を基本とし、必要に応じて他の縮尺も用いた。
- 7) 遺物観察表中の図版番号は、遺物図版に付される右端 ( ) 内の番号に連動する。例えば、「第149図 陶器・磁器・土器 (1) 図版内の3」の遺物は陶器・磁器・土器観察表「表1」中の「図版番号1-3」となる。もう一例挙げると、「第401図 瓦 (2) 図版内の4」の遺物は「表19」中の「図版番号2-4」となる。
- 8) 本書の編集は大塚達朗が行い、石井聖子、菅谷通保、小寺 律、犬木 努がこれを補佐した。

### 発掘参加者・整理参加者・執筆者一覧

#### ・発掘参加者

上田 真, 大塚達朗, 小川 望, 小俣 悟, 倉林真砂斗, 桜井英治, 佐々木彰, 菅谷通保, 鷹野光行, 田口昌平, 中村慎一, 成瀬晃司, 藤本 強, 堀内秀樹, 前田昭代, 松下理恵

#### ・整理参加者

石井聖子, 上田 真, 内田知子, 大塚達朗, 大森フミ井, 小俣 悟, 加藤 晃, 金子浩昌, 倉林真砂斗, 小寺 律, 桜井英治, 菅谷通保, 田多井用章, 津野 仁, 長佐古真也, 中村慎一, 成瀬晃司, 藤本 強, 堀内秀樹, 山形真理子

#### ・執筆者

石井聖子, 上田 真, 大塚達朗, 小川 望, 小俣 悟, 加藤 晃, 金子浩昌, 倉林真砂斗, 桜井英治, 佐々木彰, 菅谷通保, 鷹野光行, 津野 仁, 長佐古真也, 中村慎一, 成瀬晃司, 成瀬正和, 藤本 強, 堀内秀樹

# 目 次

序文

例言

報告篇

第一章 調査の経緯 .....	1
第二章 先土器時代・縄紋時代の調査	
第一節 調査の概観 .....	11
第二節 先土器時代調査各説 .....	14
第三節 縄紋時代調査各説 .....	28
第三章 江戸時代の調査 I	
第一節 調査の概要 .....	41
第二節 遺構各説	
(1) B~I= 2 ~ 6 区の遺構 .....	69
(2) B~G= 7 ~ 8 区の遺構 .....	126
(3) B~H= 9 ~ 11 区の遺構 .....	196
第三節 遺物各説	
(1) 陶器・磁器・土器 .....	246
(2) かわらけ .....	388
(3) 瓦類 .....	403
(4) 焼塩壺 .....	445
(5) 玩具類 .....	459
(6) 石製品 .....	461
(7) 金属製品 .....	468
(8) 古銭 .....	474
(9) 貝・角製品 .....	478
(10) 動物遺存体 .....	481
第四章 江戸時代の調査 II	
第一節 調査の概要 .....	527
第二節 遺構各説	
(1) P~S= 5 ~ 10 区の遺構 .....	565
(2) U~V= 3 ~ 5 区の遺構 .....	645



(3) T～V= 5～10区の遺構	654
(4) V～Y= 5～10区の遺構	700
第三節 遺物各説	
(1) 陶器・磁器・土器	711
(2) かわらけ	742
(3) 瓦類	745
(4) 焼塩壺とその他の容器	770
(5) 玩具類	773
(6) 石・ガラス製品	775
(7) 金属製品	778
(8) 古銭	780
(9) 角製品	780
(10) 動物遺存体	785
第五章 遺物各説補論—印刻—	788
研究篇	
第一章 加曾利 B 式土器学史抄論	797
第二章 江戸藩邸内土地利用研究の一指針	813
第三章 江戸における井戸の有する二側面	832
第四章 「地下式坑」の系列と変遷	844
第五章 近世江戸市場の動向と窯業生産への影響	860
第六章 近世瓦の編年学的考察 (I)	882
第七章 かわらけの編年学的及び機能論的考察	895
第八章 焼塩壺の考古学的視点からの基礎的研究	901
第九章 加賀藩江戸藩邸内出土の動物質食料残滓研究の一例	917
第十章 絵図調査による遺跡の分析	959



# 報 告 篇

## 第一章 調査の経緯

### 1

1984年2月3日の午後5時を若干まわった時のことであった。当時筆者は文学部付属の北海文化研究常呂実習施設に勤務しており、集中講義と卒業論文の審査をおえ、北海道の常呂に帰るべく、種々の後始末をしている時であった。電話で呼ばれ、御殿下グラウンドの遺跡調査室で、西本文学部建築委員長、金子文学部事務長、高柳会計掛長（いずれも当時）と会うことになった。おもえば、これがその後二年余にわたる野外調査暮しの発端であった。

話はかねてから建築を要望し、法学部・文学部の長年の夢であった法・文アネックス計画の実現のメドがたった。については埋蔵文化財の有無を確認するため、2月15日までに建設予定地の試掘をしてくれないかということであった。文学部に所属していることでもあり、またグラウンドの百年記念館、山上会議所跡地の調査が、1983年11月に発足した遺跡調査室によって開始された時でもあり、試掘調査だけならということ引き受けることにした。作業員の手配、関係方面の連絡を文学部事務室に依頼し、筆者は調査の助力を頼む大学院学生の手配および出土が予想される前田家上屋敷関係の絵図による位置の比定を行うことにした。

この年は殊のほか雪の多い、また寒さの厳しい冬であった。調査地点は図書館にさえぎられて冬はほとんど陽の当たらない場所であった。2月8日に試掘地点を大学院学生の上田・野口・西秋3君と設定し、2月9日の試掘調査をまったが、舗装のない部分は深さ20cmをこえる積雪があり、舗装部分ではこれが一度は溶けたが、氷になって一日中溶けないという状況であった。2月9日の当日、暖くなることを念じたが、暖かくはならず、雪中の試掘調査になった。

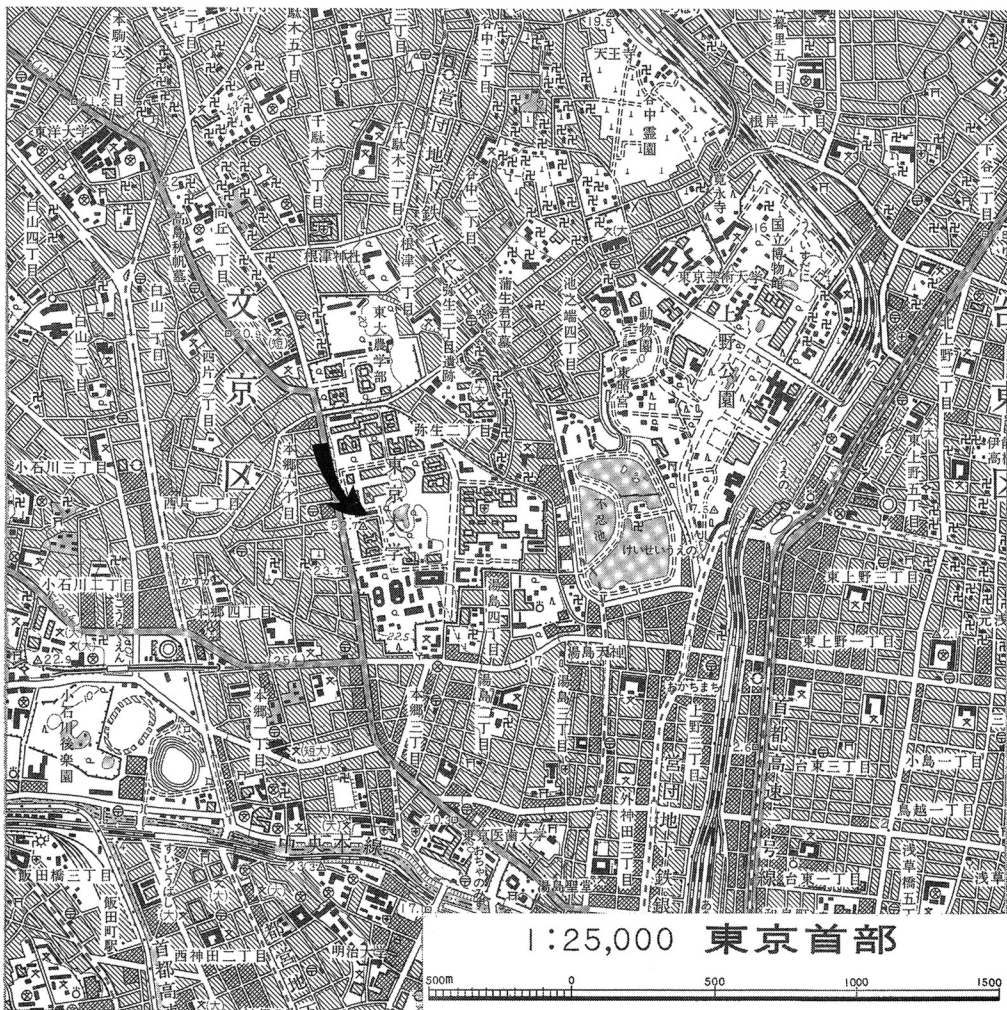
試掘地点は植込のなかに、しかも植樹のないところを選んで実施した。法学部側では、D8・D10区の西北の2×2mを、文学部側では、S8・S9区にかかる2×2m、X6区、W8区、X10・X11区にかかる2×2mである。このうち法学部のD8区では、地表下ほぼ1mで多量の江戸時代の陶磁器が出土し、法学部側では本調査が必至の情勢となった。文学部側ではS8・S9区にまたがる試掘坑でロームの盛土の上面が地表下1mを若干きるところで出現したが、残る3試掘坑では地表下2mになっても、煉瓦・コンクリート混りの近・現代以後の盛土であり、結論はより広範囲の試掘をしてからということになった。

こうした結果をふまえて、数度にわたり法学部・文学部の関係者間で協議がもたれた。種々の紆余曲折はあったが、法学部側は4月以後に本調査を実施する。文学部側は3月下旬に再度試掘を行い、その結果をみることに決定した。

3月の試掘調査は文学部と図書館の間の舗装部分に、直交する20×2mのトレンチを2本入れ

ることとした。東西のトレンチはQ～T区まで8ラインの南北1 m ずつ、南北のトレンチはTラインとTラインの東2 mの間を7ラインの北3 mから10ラインの南2 mまでである。これは施設部から設備関係の図面をもらい、施設部との間で障害になるものが何もないことを確認した上で設定したトレンチであった。大学院学生である大塚・小川・中村3君の助力を頼み、調査を実施した。舗装はたいへんしっかりと作られているものであった。最上層は1辺10cmの立方体の自然石をセメントでとめたもの、この下に厚さ15cmの鉄筋の入ったコンクリート、この下は厚さ20～25cmのグリ石となっており、この破碎に多くの時間を要した。

施設部の話では、何の障害もないということであったのに、東西に入れたトレンチの端から端まで、その中央に花崗岩による蓋石が出現した。蓋石の下は煉瓦積みであり、明らかに近・現代のものであった。重機によって、蓋石をこじあげると、中は暖房の配管になっていた。この掘り



第1図 遺跡位置 (国土地理院1986, 1:25,000「東京首部」より)

## 報告篇第一章 調査の経緯

方は後に関東大震災後に盛ったと考えられる焼土まじりの土を切っていることが明らかになった。当初からこのトレンチは全く用をなさないものになってしまったので、北側に1 m 拡張することにした。関係部局の設備用の図面も、担当者の言も全く信用できないことを思い知った最初である。これ以後こうした事態にたちいたることはしばしばであった。

東西のトレンチの西側では、自然堆積の面がでるが、東ではなかなかでない。破壊も深部にまで及んでいることが明らかになった。南北のトレンチでは、地表下2 m になっても類似の状況が続き、明治末年に増設された図書館の東部分の軒飾り、壁面最下部の煉瓦積みの部分がつぎつぎに出てくる。南北トレンチでは、地表下2.2m で、砂利を若干含むロームを主体とした黄褐色土の盛土面が広がっていることを確認することができた。東西トレンチでは、東にいくに従って、深くなることが判ってきた。遺物はでることはでるが、量は少く、どの程度遺構・遺物があるか不明という状況であった。2月の予備調査の際に試掘坑を入れたX 6区、W 8区もその試掘坑をさらに地表下2.8m までさげたが、全く様相は変わらず、近・現代と考えられる盛土が続いていた。文学部では、さらにトレンチを増して残存状態を把握することにし、法学部側の全面発掘と平行して調査を実施することが決定された。

この調査と平行して、調査スタッフの採用も進められた。助手として大塚達朗君を、教務補佐員として成瀬晃司、堀内秀樹、田口昌平の3君を4月1日から採用することになった。事務は文学部事務室の高橋正敏氏を中心に行なうことも決まり、4月1日から本調査を開始することに決定した。

2度の調査に際して、東京都文化課の川崎義雄氏が現場にきて、行政面から調査の体制作りについてあるべき姿の方向性が示された。

## 2

かくして、4月1日から本調査になったのであるが、植樹の移転、通路の問題など調査の本質と関わりのないところで、種々の面で学内の色々な方面との調整がつかず、タテ割り行政の官僚組織のなかで、従来なかった発掘調査という仕事をしていくことの多難さをイヤというほどに味あわされた。4月中はこうした問題の学内調整にかけずり廻った。二宮文学部長、金子事務長(いずれも当時)を初めとする文学部の支援体制がなければ、投げだしたくなるような日々の連続であった。また本部にあって、終始暖かく見護っていただいた篠澤事務局長、小口広報企画課長(いずれも当時)の存在も忘れられない。

植樹の移転ができなかったこと、依頼してあった建物建設予定地の現場での墨だしがラチがあかないため、調査室で図面をもとにやることになったことなどの理由で、最初の1週間は国土座標系をグリッドにかぶせることぐらいしかできなかった。グリッドの軸は現在の文学部・法学部の建物の方向にそって設定した。

当地点が前田家の上屋敷であり、今後各地点で調査がなされることを考えるとグリッドを国土

座標系につないでおくことは必須のことと考えられた。幸い大学の図書館屋上の塔屋のなかには、三角点「大学」があった。他の三角点は上野公園内と御茶の水・水道橋の間にあることになっているが、現地では発見できなかったため、国土地理院に問い合わせたところ行方不明という。基点としての三角点の利用はあきらめざるを得なかった。

幸い文京区が多角点測量をしていて、そのうちの2つが学内にあることが判ったので、それを利用し、図書館屋上の三角点との間で閉塞をすることにした。利用したのは附属病院北病棟上の多角点 P26 とその地上点 P26-1 である。P26-1 を出発点として、三角点「大学」と閉塞するトラヴァースは既にグラウンドおよび山上御殿跡地の調査グリッドについて実施し、かなりの精度であることが実証されていた。そこで同様の方法を取り、P26-1 を出発点として、グリッド基点の G11 と S11 を通り、三角点「大学」に結び閉塞するトラヴァースを行い、1/13635 という精度を得た。必ずしも良い値ではないが、実用上は大きな障害もないものと考え、若干の補正を加え、基準として使うことにした。これによると、グリッドの南北軸は12度32分30秒西になる。高さの基準は赤門の前にある水準点からもってきて利用している。

試掘調査によって、法学部側では地表から0.8~1.0m、文学部側では地表下1.0~2.0mまでは近・現代の盛土であることが明らかになっていたので、法学部側は全面、文学部側はさらにトレンチを開けるということで、重機によって、舗装の破碎、残土の撤去を開始したが、舗装が固く厚いことおよび多くの配管の出現で仕事はなかなか進まなかった。特に文学部の舗装道路の下は電気・ガス・上下水道・電話といった設備関係の配管の幹線ルートにあたっていたため、多くの図面にはない配管が出現し、別項でも触れる通り、調査の進展に多大の障害となった。また南西端近くには、地表下3mより下に旧図書館の基礎が出現し、深くまで破壊が及んでいることも明らかになった。

重機で近・現代の盛土を除去したところから、調査に入ったが、当初ははっきりしなかった文学部側でも、多くの遺構が残存していて全面調査をせざるを得ないことになった。しかしながら、東側には現用の数多くの配管の入っている共同溝があり、さらに種々の機能をもっている藤棚があり、ここは少なくとも地表下4~5mの調査が必要であることが、試掘坑を深掘りして明らかになっていた。藤棚、共同溝は現用のものであるので、すぐに破壊することはできないので、この部分は建築工事の際に調査することにして、他の部分を全面調査することにし、Uラインの東3mまでの範囲を本調査の時に調査することにした。

重機による掘削にはほぼ4週間を要し、終了したのは5月初めであった。この間に、図書館基礎によって作られたローム層の断面から先縄文時代の剥片2が発見され、江戸時代ではない時期の調査も必要になった。4月中にトレンチの断面を精査し、土層図を作り基本的な堆積を確認することができた。その結果、法学部側においても、文学部側においても隅から隅まで数多くの遺構が複雑にからみあっていることも確認された。

## 3

5月になり、ようやく本格的な調査にかかったが、すぐに法学部側においても、文学部側においても多くの遺構がしかも複雑に切りあってあることが明らかになった。本格的な調査になったので大学院学生であった小川、中村、倉林、桜井の4君の応援を得ることにした。

文学部側は西と東で遺跡の状況に大きな差があり、また南側は旧図書館の基礎で大きく破壊されているというのがおおまかな状況であった。西側はロームがでていところ、盛土が版築状になっているところに比較的少ない遺構があり、東側は黄褐色の盛土上に多くの土坑と思われるものが顔を出していた。当初は土層断面および盛土上面の整理をし、まず東側の土坑群のなかで、黄褐色盛土面からはっきりとプランの判るものを半割しつつ掘り始めた。かなり複雑に切りあっていることが判り、新しいものから順に進めた。遺物をかなり含むものも出現する。居住と関係する地点であることは明らかであった。一方南側では、図書館の基礎にかなりの部分を壊されて、道が2本現れた。これは当初道か溝か不明であったが、1985年の4・5月に行なった調査によって道であることが確定した。この頃後に触れるように電気の管で泣かされた。

西側では、盛土面を追いかける作業を行なった。これはローム・砂・砂岩粉末まじりの黒褐色土・黒色土・砂岩粉末まじり暗褐色土………となっており、何度か盛ったり、削ったりしながら作られたものであることが判ってきた。幅は9 mで、調査区を横ぎっていることも判った。

法学部建設予定地点では、南半から遺構の確認調査に入ったが、表面からプランが判るだけで180もの遺構が南半にあり、南端にある旧図書館基礎の間にも、数多くの遺構があることが判ったので、それまで旧状のままにしていた旧図書館の束石をすべて撤去することにした。確認された遺構を半割にしつつ調査を進めた。法学部南半のもの多くは植栽に関係するものであり、遺物もほとんどないものが多かったが、なかにはB10-2号土坑のように多数のかわらけと動物骨を含んでいるものもあった。法学部地点の東端には、焼けたものを含む瓦が多数あるものも発見された。遺構の数が多いことと複雑にからみあっていることで、調査はたいへんに難航した。

南側の遺構の調査を進めるとともに北側の遺構確認作業も実施した。遺構はつぎつぎに増え、しかも平面的にはっきりと確認できないまま広く自然堆積のないという状況のところほとんどを占め、先がおもいやられるという状況になった。確認された遺構は500近くになり、全員が遺構を掘りはじめたのは7月のなかばになってからであった。

7月からは菅谷君、8月からは佐々木君が入ってくれて、陣容は整ったが、遺構の多さにはかたず、比較的ゆっくりしたペースにならざるを得なかった。7月なかばになり、地下式土坑がかなりの数でることがほぼ確実になってきた。しかも遺物をかなり含むものが多いことも判ってきた。また1遺構を掘りあげるとさらに下に遺構が現れるという形で掘りあげた遺構の数は増えてもこれから掘らなければならない遺構はいっこうに減らないという日々が続いた。建物の基礎と思われる石の入った土坑なども現われ、また井戸も複数でてくるという形で居住区としての性格

がどんどん強くなっていった。

8月～9月にかけては、調査現場の地上には人影が全く見えないという日々が続いた。ただ土だけがどこからともなくあがってくるという光景は異様なものであった。全員が地下式坑のなかで作業をしていたからである。

このようにして、11月末にはほぼメドがたつてきはしたが、法学部南玄関前の一画はなかなか終了できなかった。D8区を中心にする地域である。試掘調査の際に多量の遺物がでた周辺である。ここは大型の土坑が複雑に切りあい、周辺から1つずつ手をつけていっていたのだが、なお残ることになった。ここもサブ・トレンチを多数入れ、ようやくその全容を掴むことができたのは12月末であった。

こうした江戸時代の調査と平行して、先縄文時代の遺物を探るべく、もっともロームの残りのよい6ライン付近で深掘りを実施したが、ついにその痕跡を把むことができなかった。

文学部建設地点では、6月～7月にかけ、渡り廊下になるU3～U5区の調査をし、ここにも多くの土坑が黄褐色の盛土をはさんであることが判った。一方東側の部分では、盛土上面の遺構を終え、盛土を除去し、盛土下の遺構の調査をした。ここはほとんどが円形の土坑であり、植栽に関するものであることが明らかになり、東側の部分は8月上旬にほぼメドがついた。

西側の部分は盛土（たたきしめ面）の上部に小さな杭列を伴う浅い溝があり、塀の跡であろうと考えられた。盛土面を1枚1枚剥がしていったが、そこから切りこまれるものはあまりなく、一時にかなりの部分が作られた可能性が強くなってきた。この盛土の下にはドーナツ状の遺構と呼んだ大型の中央部にロームの柱を残し、周辺をさげた遺構が現われた。何の用途をもったものか不明である。また井戸もあり、居住区とその他の機能を兼ね備えた地点であったことも判ってきた。

11～1月にかけ、先縄文時代の調査も行なった。複数のユニットと礫群をかなりの部分が破壊されてはいたが、比較的まとまった状態で検出することができた。12月～1月にかけての文学部の調査は先縄文時代の遺物の検出作業が主要なものであった。これも12月21日までは順調にいていたが、それ以後寒さが厳しくなり、一夜で土が凍ってしまった。東京で凍土になった土を掘ることはあまり経験のないことである。ちょっと移植ゴテや竹べらを強く入れると、5 cm厚内外の土の板が剥がれるという状況になった。ここの部分は一日中陽の当たらない所であったので、放置しておけば凍結はどんどん深部におよぶ。そこで、当面手をつけないところは、落葉を集め、ロームの上に敷き、さらにその上に土をかぶせることにし、凍結を防止した。

調査する部分に関しては、石油缶に入れた焚火を並べ、凍結を溶かしてから調査をするということを行なった。夕刻には、この上に落葉と土を置き、朝またとるといふことの繰り返しであった。

このようにして、1985年1月末には、法学部調査地点も文学部調査地点もその調査をすべて終了することができた。10ヶ月にわたる調査であった。



4

しかし、これは決して平坦なものではなかった。遺構・遺物の複雑さもさることながら、6月にはたいへんショッキングなことが生じた。その後遺症が法・文学部の調査に大きく影をおとしたからである。

1984年6月末、既に都の文化課との打ちあわせもおわって工事に入っていた医学部附属病院の工事現場で、江戸時代の遺物が多量に出土するということがあった。明治時代の建物の基礎の間に江戸時代の遺構が良好な状態で残っていることは明らかであった。山上会議所跡地の調査、法・文学部の調査で手いっぱいであるところに、この事態である。しかも既に工事に入っているため、緊急度は高い。これをどうするかということで、種々の交渉がもたれた。結局、法・文学部の現場から人をさいて、細々でもいいから病院の調査を開始するという事になった。

10月からは筆者が、11月に筆者が勤務地の北海道に帰ってからは、小川望助手が病院の調査を担当することになり、法・文学部の現場からぬける形になった。

病院を担当することを条件に大学院学生であった小川望君が助手に、教務補佐員であった成瀬晃司君と堀内秀樹君が教務職員になった。3君はそのまま病院地区の調査にかかることになったため、1986年5月末までの2年2ヶ月を野外調査で暮すことになった。

この間には、理学部の調査問題も生じ、激動の1984年であった。グラウンドの予備調査が実施されたのが1983年8月、遺跡調査室の発足が同年11月、短期的な見通しにたった調査も学内のあちこちで調査せざるを得ない状況になったのが、1984年の夏から秋にかけてのことである。学内には、これまで若干のこうした問題がありはしたが、大きくなることはなく、過ぎていた。それが一時に噴きあがったのが1984年である。

学内はすべてにわたりこうしたことに未経験であり、不慣れであった。しかも一時にあちこちで噴きあがってきたため、なんとかその場、その場で対処していかなければならないということになり、対処主義的に埋蔵文化財問題にあたってきた。短期的な見通ししかもたずにスタートをしてしまった。ところが一年もたたないうちにあちらでも、こちらでもということが出てきた。しかもグラウンドと病院地区はいずれも5000m<sup>2</sup>をこえ、しかも盛土が数度にわたって繰り返され、深いという超弩級の遺跡である。法・文学部にしても2000m<sup>2</sup>をこえている。出土する遺物の量はたいへんなものであり、従来の調査とは量的にというより質的に異なる調査ということが出来るほどである。

5

1985年4月～5月に藤棚周辺の調査を実施した。3月に建築工事の施工が決定し、多くの障害物の除去が終了した段階である。ここは後にも述べるように破壊が予想外に進行しており、屋敷から「育徳園」にさがる新・旧3本の道と井戸・土坑若干を調査したに過ぎない。2週間ほどの

調査であった。厚い近・現代の盛土，深い近・現代の構造物ということで，非常に深いところでの調査であった。そもそも遺構が激減している場所であったものと考えられる。

1985年7月にも，A 5区で法学部の建物から西にのびて，主共同溝につなぐ共同溝建設部分の調査をすることになっていたが，重機であけたところ大部分は電気のマンホールであり，調査不可能であった。僅かに残っていた所で，ローム主体の黄褐色土のつまった一辺0.5m の方形のピットの一部が残存していた。底面には20×30cm の円礫があった。方向は江戸時代の遺構の方向と一致する。その中心はA 5ポイントの南3.60m，西1.48m であり，深さは0.5m である。北側は破壊されている。

## 6

以上のような調査が実施されたが，調査にあたった全員が江戸時代の遺跡ははじめてであり，とまどうことが多かった。先史・原始時代の遺跡と異なり，土地利用はさまざまのものがあつた。また一度決った土地利用の体系は踏襲される。さらに大名屋敷ということもあつてか土木工事はきわめて大規模なものが実施され，面喰らうことの連続であつた。さらに近・現代の構築物がいちたるところにあり，十分な状況で遺構の把握ができない。

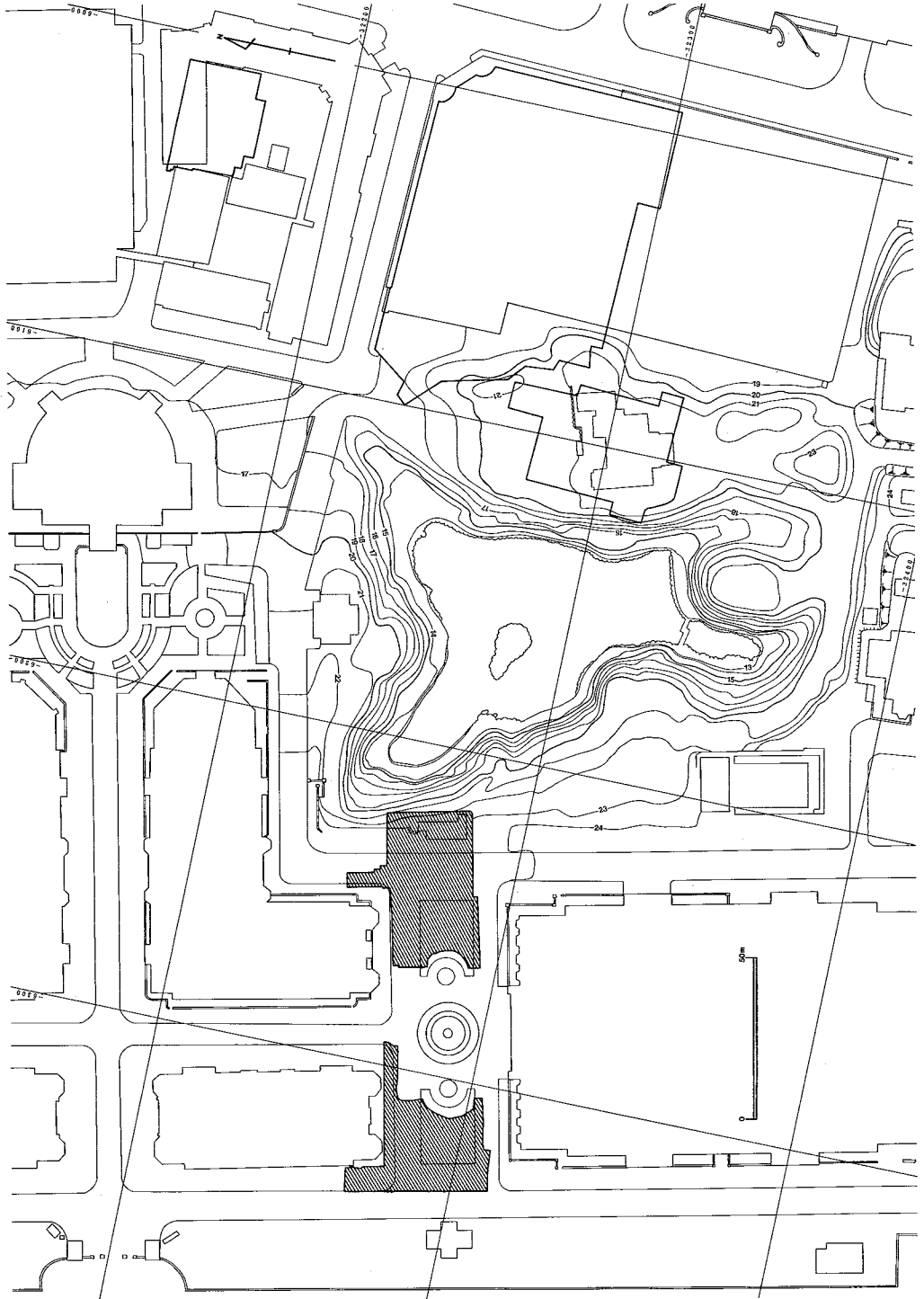
また，従来の調査にあつては，何らかの面を削り，それをどこかにもっていってしまうということはほとんど考へてのなかに入っていないものであつたが，ここではしばしばそういう状況に遭遇した。この地点内に近世の建物はかなりあつたと思われるが，近世もしくは近・現代の前半にあつて，建物の跡を直接示す礎石は全くみられず，地下深くに掘削されたもののみが確認できるという状況である。

土坑の配列は必ずしも規則的ではないが，地下式土坑の場合には一定の線上に列をなして並ぶことが判り，さらに作りなおす場合でも土留めの板を杭でとめて，先にあつた地下式土坑の埋土が崩れてこないようにしながら，頑固に従来の線を踏襲する。

これらを利用して，その上部にあつたものを復原すると文学部側においても，法学部側においても真南北東西を示すものがほとんどである。文学部で古い時期と考えられるものは真北に対して20度ほど西に偏るが，18世紀以後と思われるものは最大1～2度の偏りがあることもあるが，ほぼ真南北東西を示すものが圧倒的である。地割りの基礎が真南北にあつたことを示すものであろう。これは他の調査地点についても同様のことが云え，病院地区の支藩の大聖寺藩の屋敷内においても同様のことが云える。齊一的な規格性があつたものとみることができよう。

法学部側では，北側の部分は居住区，南側は居住区として利用されることがあつたとしても，それはきわめて短く，植樹がある庭としての利用が長期間におよんでいたものと考えられる。

文学部側では，東側は「育徳園」の一部という性格が強く，居住区になつたことはほとんどなく，U～T区はまず庭園，ついで居住区という形になろう。より西の部分では，居住地になつたとしても，その時期は短かく，道もしくは居住地と居住地の境というような性格が強かつたように



第2図 遺跡発掘区位置 (斜線で囲まれた二地区)

思われる。東南は、「育徳園」と屋敷を結ぶ道であることがほとんどであったのであろう。

以上が江戸時代のこの地点の土地利用の概要である。詳細は法学部側の調査の概要・文学部側の調査の概要・遺構各説の項をみられたい。

前にも若干触れたが、先縄文時代の石器のユニットと礫群が発見された意義はきわめて大きなものがある。ちょうど台地から斜面にかかる傾斜変換線のところでの発見である。直接に海(川)に臨む台地端での発見ということに意味があろう。遺物群は多くはなく、また石器が決定的に少ないという点はあるが、これまでにあまり多くない環境での出土だけに意味があろう。遺物からみて、ごく少人数・短期間の居住であったものと考えられる。

最後に国土座標系のデータについて触れておく。先にも述べたように文京区の多角点 P26-1 と三角点「大学」を結んだものである。cm 未満の補正を施し、公値と測量値をあわせている。

グリッドの S11 (東西：-6244.22, 南北：-32288.22), G11 (東西：-6302.78, 南北：-32301.25) はそれぞれ ( ) 内の国土座標系第 IX 系の値をもっている。現在図書館前に H12 と N12 の基点が残っている。H12 (東西：-6296.81, 南北：-32305.04), N12 (東西：-6267.53, 南北：-32298.53) である。

(藤本 強)

## 第二章 先土器時代・縄紋時代の調査

### 第一節 調査の概観

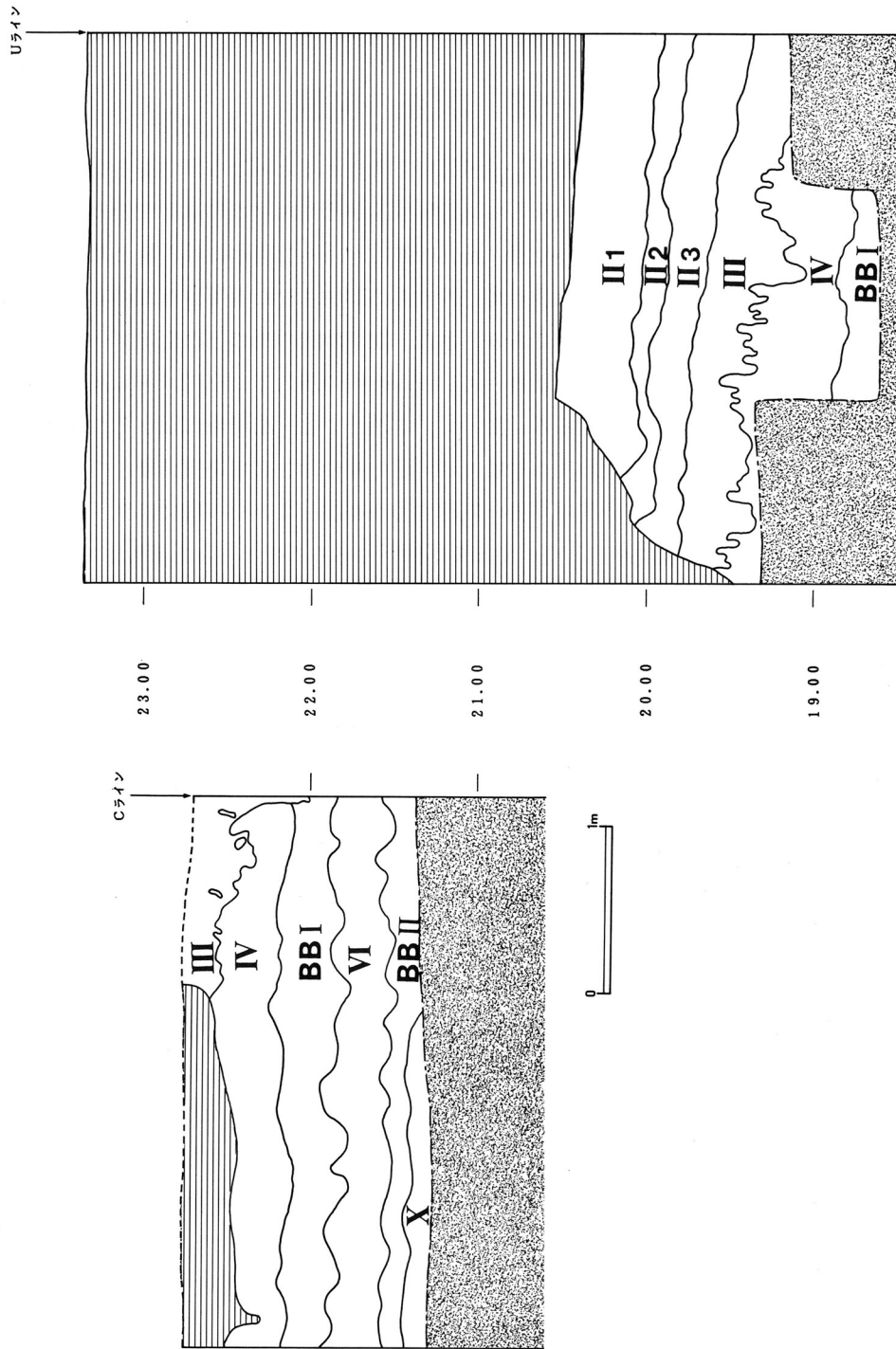
本遺跡の層序（第3図、第27図、第290・291図）を見ると、もっとも厚い層をなしているのは江戸時代に形成された層であり、そのうえに明治時代及びそれ以降の攪乱層がのっているのである。明治時代の層を現場で区別していた際、煉瓦の伴出を以って明治時代の層と認定した。便宜的すぎたかもしれないが、遺跡全面に於いて、人為的に形成された各層は煉瓦の有無でうまく上下区別できたので、これを利用したのである。また、江戸時代の層の下に立川ローム層が広く存在し、そして、文学部3号館建設地区に於いて、江戸時代の層の下に立川ローム層との間に縄紋時代の自然堆積層が残っていたのである。従って、本遺跡では、江戸時代及びそれ以降に形成された層に〔I〕層、その下の縄紋時代の層に〔II〕層と番号付けして適宜分層して各々アラビア数字で番号をつけた。尚、江戸時代層で狭い範囲でしか存在していない層にはアラビア数字だけをつけてしめた。江戸時代の層序については別に掲げてあるのでそちらを参照して頂きたい（第27図、第290・291図）。〔II〕層以下は立川ローム層に対する土層番号付けを利用した。

各土層の説明は以下の如くである。

- II-1層：黒色土層で、粘性があり遺跡調査区の東側で厚く堆積し、比較的締まっていた。
- II-2層：暗褐色土層で、上層に比して粘性はやや弱く、少しバサバサした手触りであった。
- II-3層：暗黄褐色土層で、粘性は弱く、かなりバサバサしていた。所謂漸移層と認識した。
- III層：黄褐色ローム層で、所謂ソフトローム層である。
- IV層：褐色ローム層で、非常に固結している層で、赤色スコリアを含む。
- V層：暗褐色ローム層で、粘性強く締まりのある層で、赤色スコリア（径1～2 mm）、炭化物を含む。第一黒色帯（BBI）である。
- VI層：明褐色ローム層で、粘性強く締まりのある層で、レンズ状に黄色～褐色細粒火山灰を含み、赤色スコリア（最大径3 mm、平均径2 mm）を含む。所謂AT包含層であった。
- VII・IX層：黒褐色ローム層で、やはり粘性強く締まりのある層で、赤色スコリア（最大径5 mm、平均径2～3 mm）を含む。第二黒色帯（BB II）であるが、これ以上には分層できなかった。とりあえず一つの層としておく。
- X層：褐色ローム層で、軟らかく非常に粘性が強く、果粒状（最大径4 mm、平均径3 mm）スコリアを含む。

先史時代の調査は江戸時代の遺構群の発掘調査の後、適宜開始したのであるが、先史時代の遺跡の遺存状態は発掘当初からよいものでないことが判っていた。

発掘区は二地区（第1図・第4図・第5図上）に分かれているが、法学部4号館建設地区ではほぼ立川ローム層上部（ソフトローム層）の上面近くまで自然堆積層は削られていた上に、立川



第3図 先土器時代・縄紋時代の層序

## 報告篇第二章 先土器時代・縄紋時代の調査

ローム層・ハードローム層まで江戸時代の遺構底面、明治時代の建物の基礎等々が掘り込まれていて、平面的に見るとほぼ虫食い状態でローム層が残っていたにすぎない。一方、文学部3号館建設地区側では立川ローム層にまで削平は達しておらず、より上に堆積していた自然堆積層も比較的安定してのこっていた。しかし、ここでも江戸時代及びそれ以降の攪乱がローム層中深くまで達しているところが多く、平面的に見ると自然堆積層はやはり虫食い状態でしか残っていなかった所が多い。従って、江戸時代の遺構構築あるいは削平、及び明治時代における東京帝国大学建築に伴う作業によってそれ以前の時代の遺跡は壊されてしまった可能性が強く、それ以前の遺跡の調査には余り希望がもてなかった。それでも、一抹の希望を抱いて、法学部4号館建設地区では第4図の様に先土器時代の発掘調査区を設定して調査を行い、文学部3号館建設地区側では、縄紋時代の遺跡の確認を目的とした調査を第5図の範囲で行い、引き続き先土器時代の調査を第5図上に示してある広さでおこなった。第5図下は立川ローム層上面(Ⅲ層—ソフトローム層)での地形測量図である(等高線は25cm間隔である)。これから判断すると、調査区の東側に小さな谷が入っているのがよくわかる。立地上は先史時代の遺跡がこの谷の周辺に存在する可能性が高いのである。そして、江戸時代の遺構はこのような小さな谷を埋め立てたところにも構築されていることが本調査で具体的に把握できた次第である。

先史時代の遺跡確認を目指した調査の結果、法学部4号館建設地区側では先土器時代の遺物は検出できなかったが、幸運にも、文学部3号館建設地区側では調査によって先土器時代の石器ブロックが三箇所(第1ブロック・第2ブロック・第3ブロック)検出され、第1ブロックは同一母岩(チャート)による石屑、剥片、石核、ツール(ナイフ形石器)で構成されていることがわかった。また、第2ブロックの直下から礫群が検出できたことも注目すべきことであろう。割れているものが大半であった。その内、接合関係を有するものもあった。

そして、立川ローム層の上に堆積しているⅡ層からは縄紋時代の遺物が検出されている。Ⅱ—2層の調査によって、P6区とT6区からそれぞれ石槍、礫器が単独出土した。出土層準をみるとⅡ—2層の上部から中部にかけてであった。石槍には表面に夥しい数のネズミの噛み傷痕が付いていた。かなり移動していた可能性が高い。縄紋草創期の遺物であろうと考えている。また、Ⅱ—1層の調査では縄紋土器のブロックが二箇所検出できた。そのうちの一つからは加曾利B1式がややまとまって検出できた。

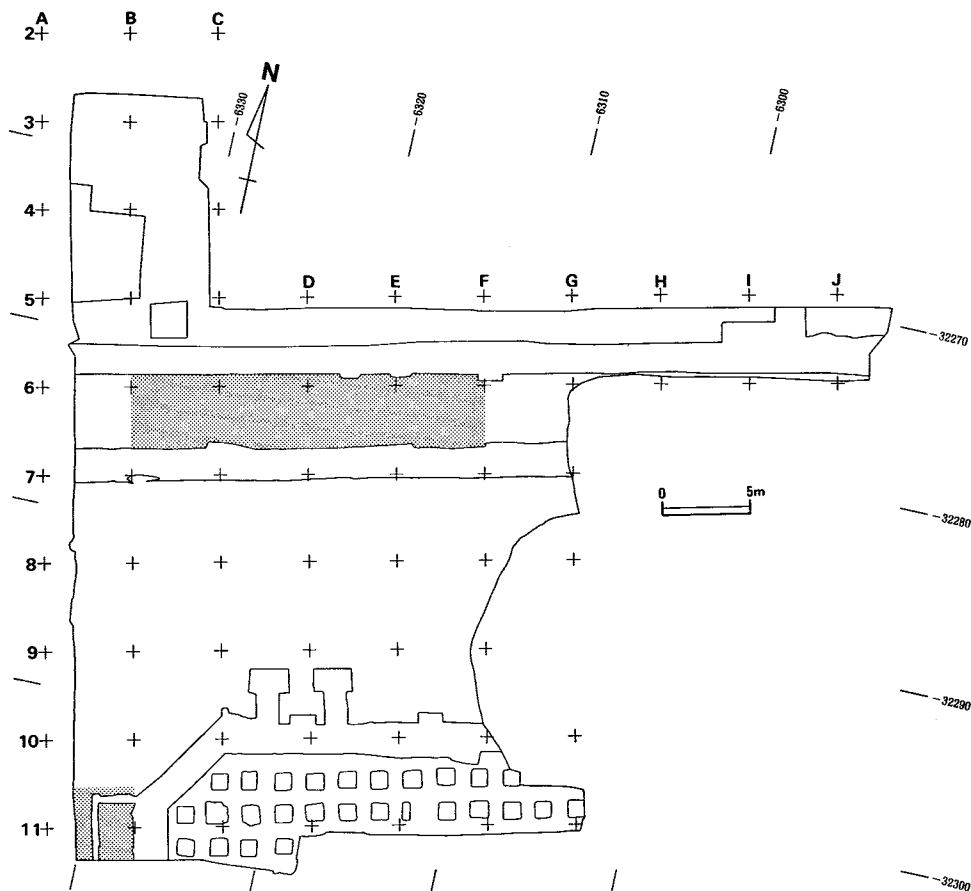
以上、遺跡の規模としては極めて小さいものであるが、先土器時代・縄紋時代の遺跡が確認できたことは、遺跡破壊が進行している都内中心部としては特筆に値するであろう。

(大塚 達朗)

## 第二節 先土器時代調査各説

文学部3号館建設地区において、旧図書館基礎のコンクリート塊による攪乱が大きくはいており、それを重機によって取り除いたところ、その最下端は立川ローム層下部にまで達していた。その断面を利用しローム層の堆積状況を観察していたところチャート製の剥片が2点検出され先土器時代の文化層の存在が予想された。これが先土器時代調査のきっかけとなった。

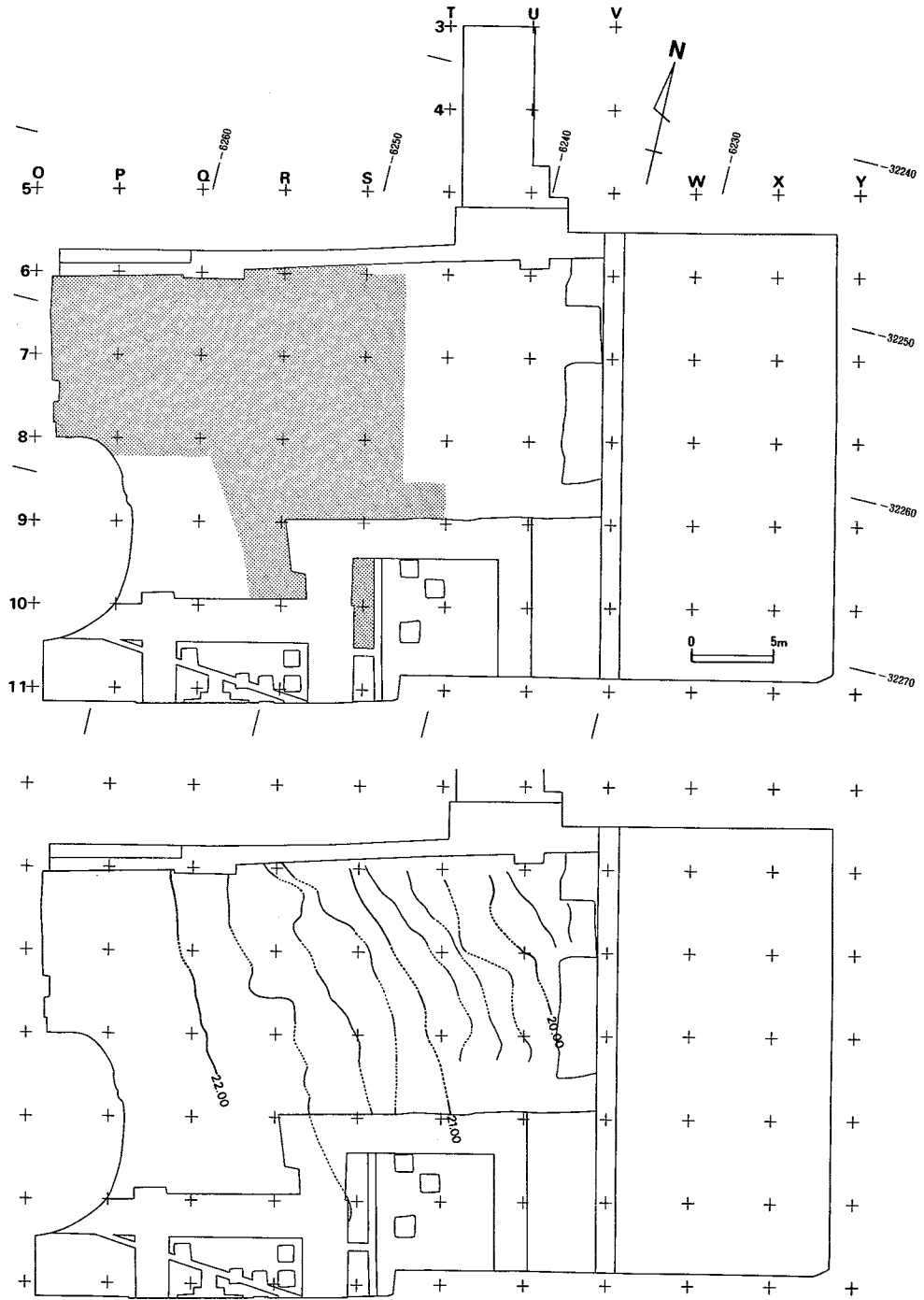
剥片が検出されたT-8グリッドを中心に、千鳥に試掘を行い遺物が検出されればその周辺を範囲、深度ともに拡げるといった行程で調査を進行した。結果的には文学部側のTライン以西と法学部側のスクリーン部分まで拡げた(第4、5図)。その結果文学部側より3ヶ所の遺物集中地点と1ヶ所の礫群が確認された。但し江戸期の遺構、近代遺構の攪乱がローム層をかなり



第4図 先土器時代調査区(1)一法学部4号館建設地区



報告篇第二章 先土器時代・縄紋時代の調査



第5図 先土器時代調査区(2)一文学部3号館建設地区

深く掘り込んで入っており、遺存状態が悪いものもあり、なかには総点数が数点に満たないものもあるが便宜上一括した。

#### 第1ブロック（第5～9図）

本遺物集中地点は平面的にはT-8グリッド南半部に拡がりその中心は直径約1mにおさまる。層位的にはIV層からIII層下部にかけて分布するがその中心はIV層上部にあるものと捉えられる。南側に旧図書館コンクリート基礎が隣接しており多少の破壊は免れていないにしても幸いにもブロックの中心が基礎範囲より北側によっているためほぼその全容を捉える事ができる（第6図）。遺物総数は99点を数えるがその内訳はナイフ形石器2点、石核1点、剥片92点、破碎礫4点である。石材別にみると破碎礫を除き黒曜石2点の他は全てチャートである（第7図）。

#### 第1ブロック出土遺物（第8・9図：図版5）

1はナイフ形石器で横長剥片を素材にしている。その打面は石器の背縁部側にくるように用いられている。打点側は切断されたと思われる、主要剥離面に打瘤は残存していない。主要剥離面と背面では打点方向に180°のずれがある。断面形は長方形を呈し、ブランディングは両側面に丁寧に施されている。

2はナイフ形石器で下半部を欠損している。横長剥片を素材にしており、ブランディングは左側縁に先端部からみられるが、右側縁に関しては不明である。主要剥離面と背面の打点は同一打面からのものである。

3は横長の石核である。打面は稜を利用したものではなく、180°の打面転換を行い左右にずれながら直線的に打点が後退し、その最終段階として打点が面から稜に変わったものと考えられる。この石核より剥離された剥片は横長剥片である。

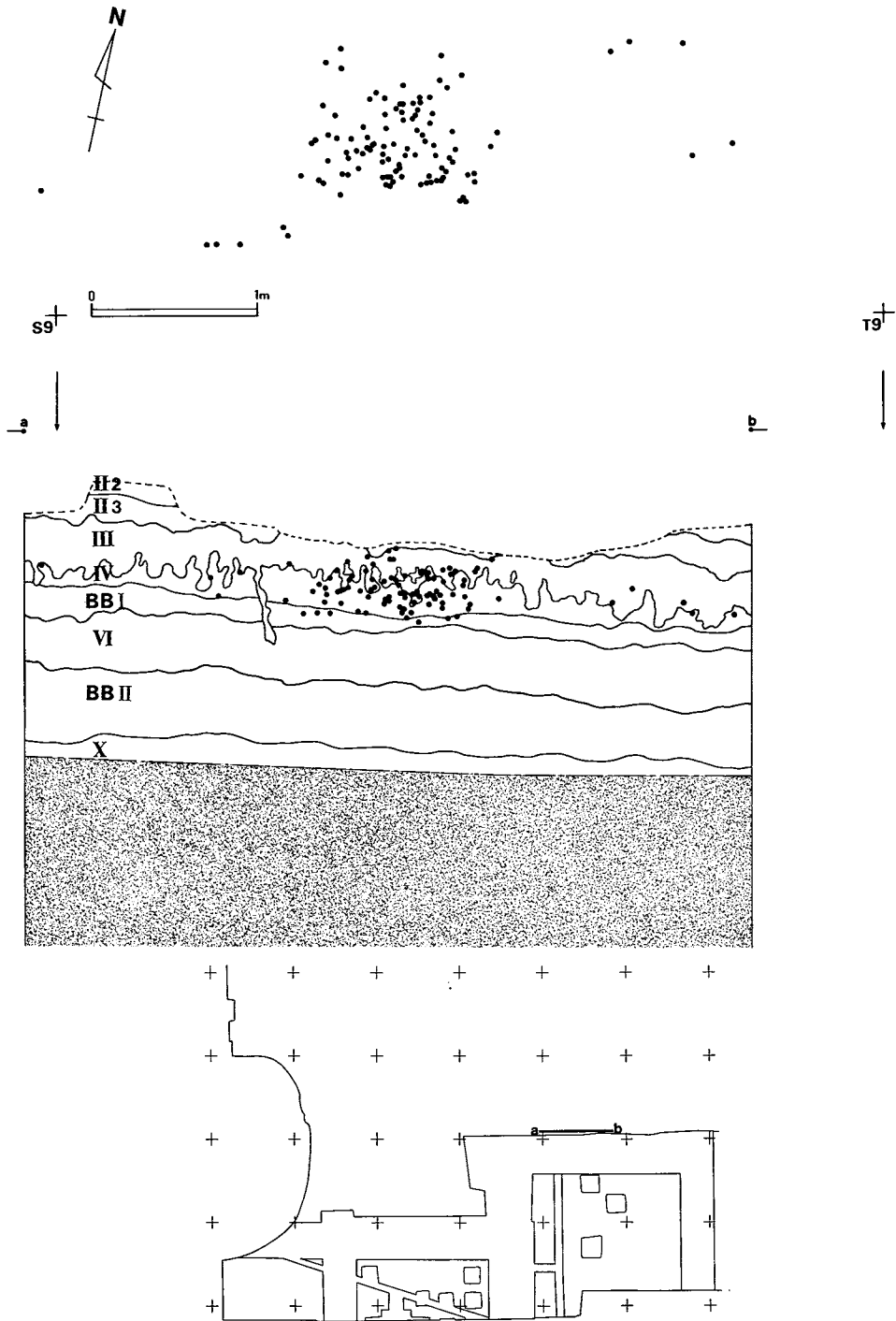
4～8は縦長剥片である。5、8には表面に節理面がみられる。7以外の剥片は主要剥離面とほぼ90°異方向の剥離面がある。

9、10は黒曜石製の縦長剥片である。ともに背面には主要剥離面と90°、180°異方向の剥離面がみられる。

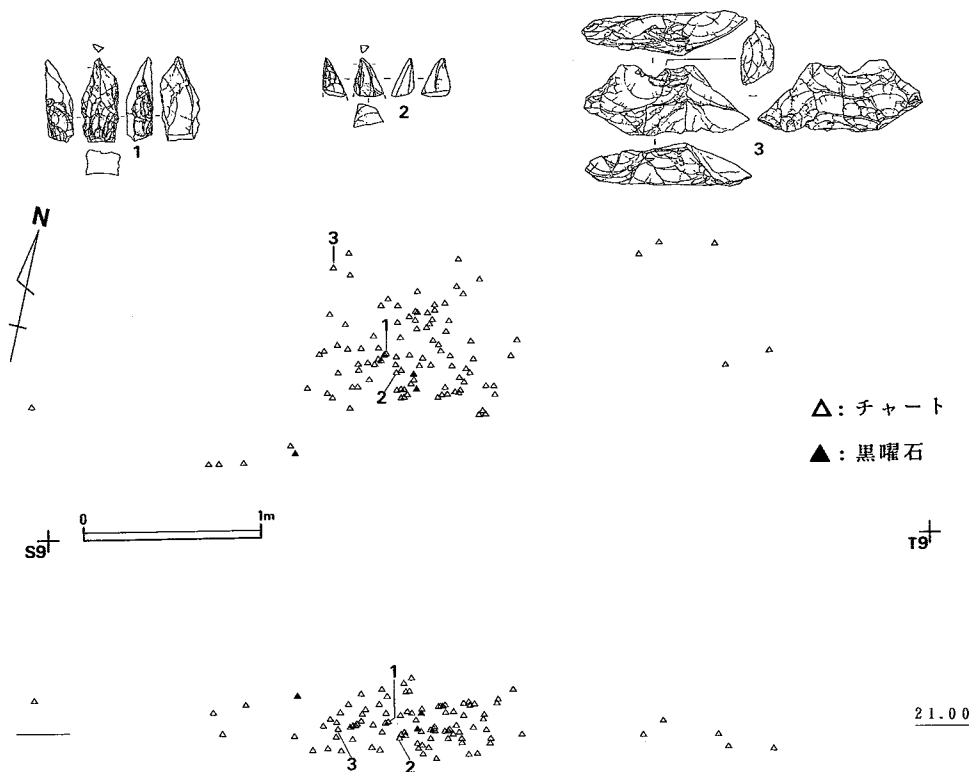
#### 第2ブロック（第5図、第10～12図）

本遺物集中地点はR9～S9グリッドの南半部に集中しているがそのなかでも特に東側において密である。これは旧図書館基礎によって東側が大きく削平されているためブロックの中心はおそらく攪乱内にあったものと推測される（第11図）。よって本ブロックの遺存状況は悪い。層位的にはIV層の堆積が薄くクラックがV層にまで達している部分もみられるが、遺物はIV層上部（クラック上部）からIII層にかけて分布している。また本ブロックと重なり合うように礫群が存在しているがその垂直分布はV層からIV層にかけて認められほぼ本ブロックの直下に位置する。遺物総数は42点を数えるが全て剥片である。石材別にみると黒曜石30点、チャート12点から構成さ

報告篇第二章 先土器時代・縄紋時代の調査



第6図 第1ブロック



第7図 第1ブロック石材別分布図

れているがこれらはそれぞれ同一母岩であり、またその集中範囲は R ラインを境に東側に黒曜石、西側にチャートと綺麗に分離している事が特徴的である。

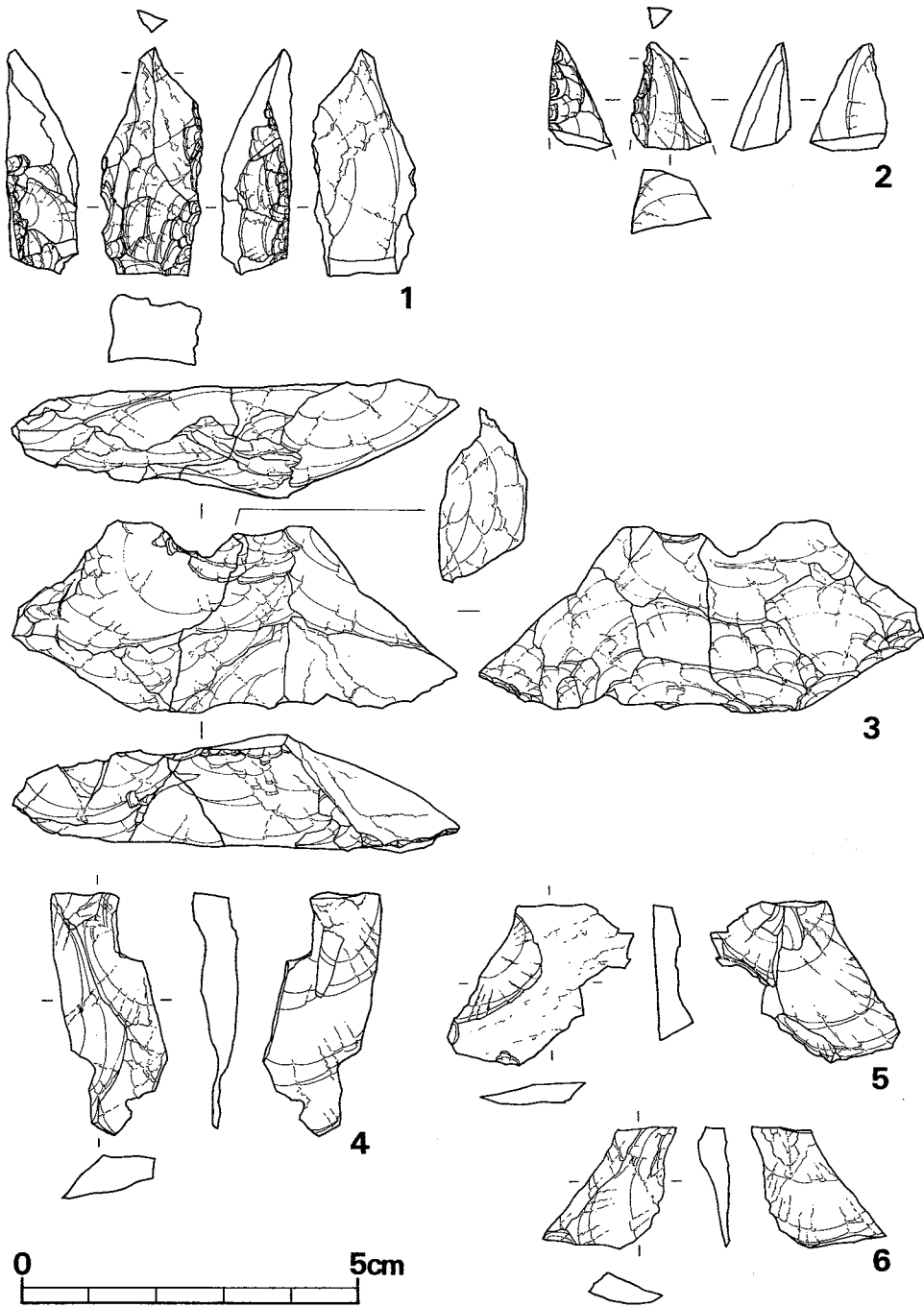
#### 第2ブロック出土遺物 (第13図)

1, 2は黒曜石製の剥片である。1は横長剥片で右側面に礫面を残す。主要剥離面には同一打面からの剥離によって打瘤が剥離されている。背面の剥離も主要剥離面と同一方向からの剥離によるものである。2は縦長剥片で背面の剥離には90°, 180°の打面転換による剥離がみられる。

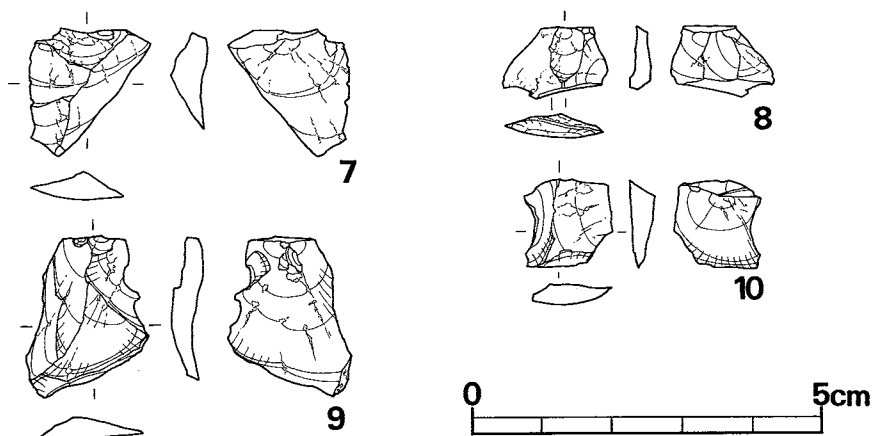
3~7はチャート製の剥片である。3~5は接合関係にある。6の背面には90°の打面転換がみられる。7は主要剥離面右側に礫面を残し、打点は礫面からのものである。背面には主要剥離面と同一方向及び90°の打面転換による打撃がみられる。

#### 第3ブロック (第5図, 第16図)

本ブロックは Q 8 グリッド北半部に位置するが南側の攪乱のためにそのほとんどが残存していないものと思われる。そのため遺物も黒曜石製の剥片が2点しか検出されなかった。層位的にはⅢ層中である。2点の剥片は同一母岩によるものだが色調は不透明な灰褐色を呈し第1, 2ブ



第8図 第1ブロックの石器(1)



第9図 第1ブロックの石器(2)

ロックのものとは別母岩である。

### 第3ブロック出土遺物 (第16図)

1は黒曜石製の横長剥片である。背面左半部に礫面を残している。背面の剥離は右側縁からのもので90°の打面転移が行われている。

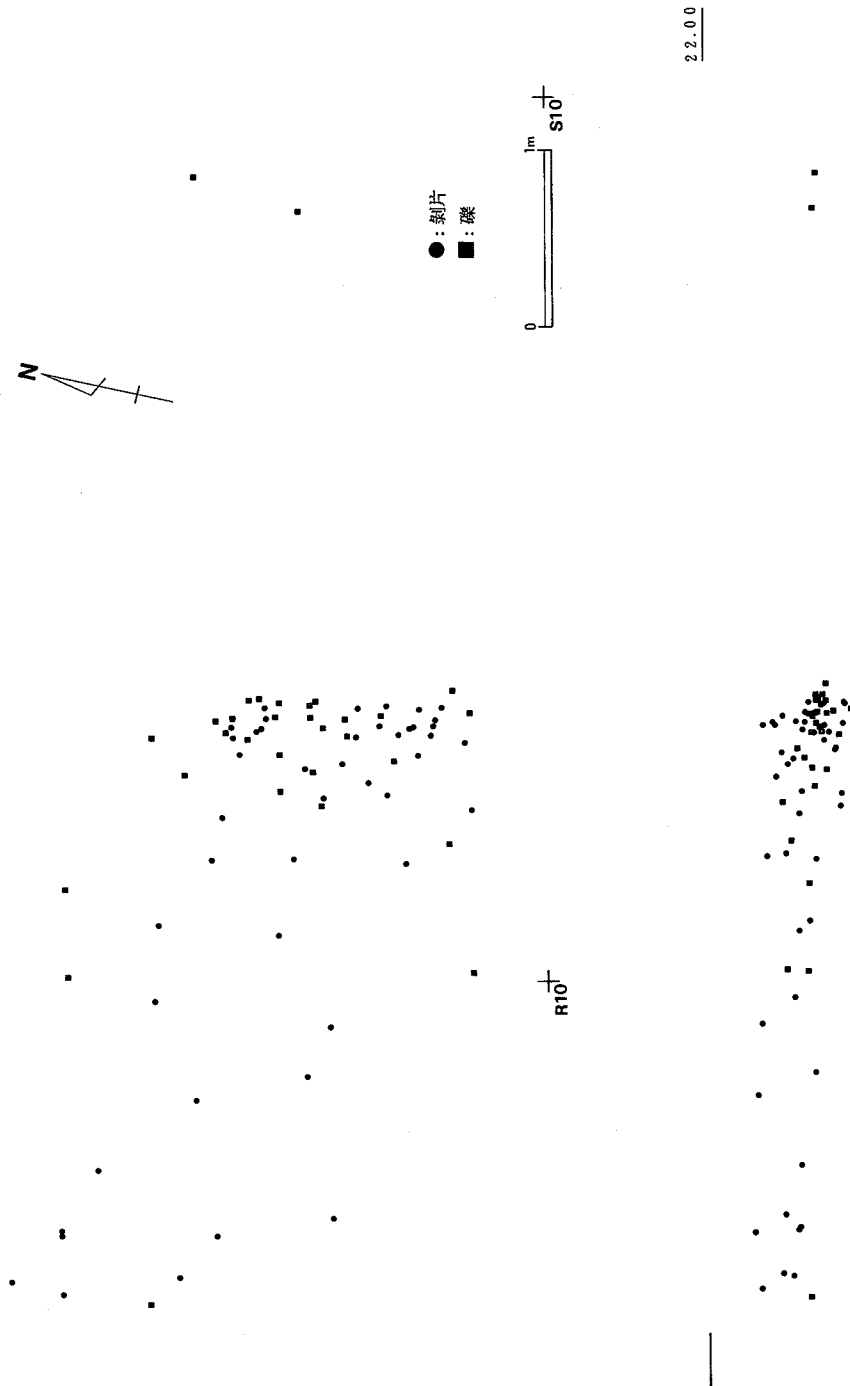
### 第1礫群 (第5図, 第14・15図)

本礫群はS-9グリッド南半部に位置し、先述した第2ブロックの直下V層上半からIV層にかけて分布している。中心部を旧図書館コンクリート基礎によって破壊され遺存状態は極めて悪い。構成礫は総数34点、赤化礫30点、スス付着礫9点、完形礫1点から成りそのほとんどは砂岩である。接合例は破損礫33点中、11点4例が認められた。

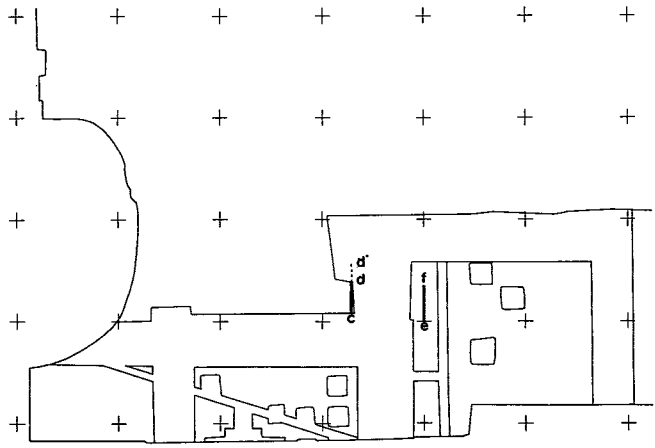
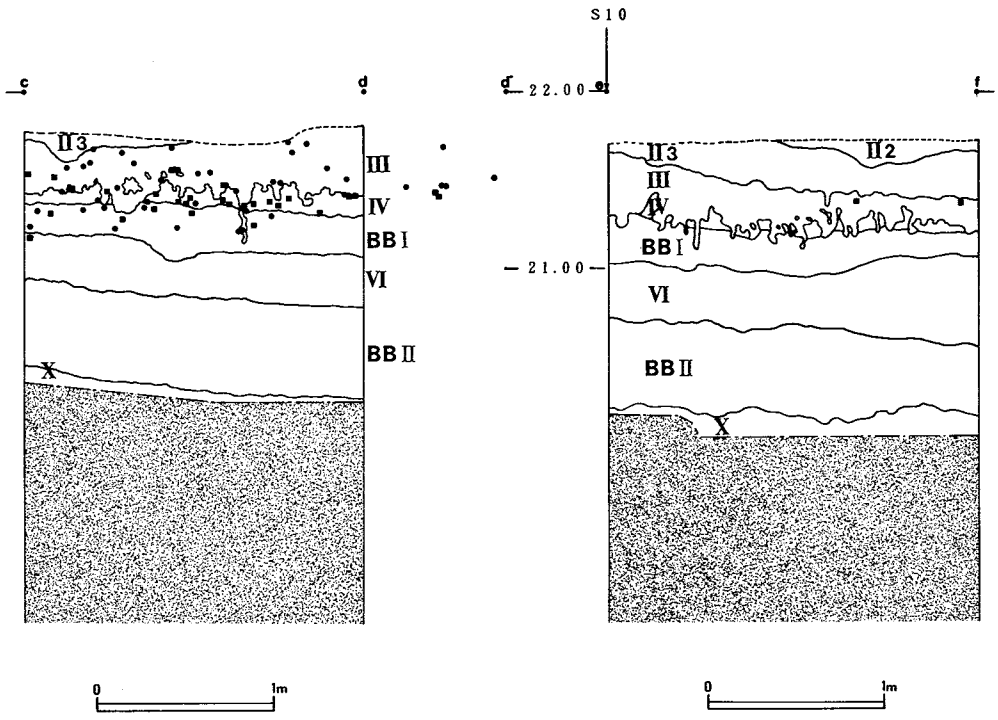
### まとめ

本遺跡より検出された遺構は前述した3ブロック、1礫群より構成されているが、調査区域の制限、近代遺構の攪乱によるところが大きくこれらの遺構がそのまま遺跡全体を網羅しているとはいえない。よって調査結果にみられる遺構の特徴が遺跡全体に反映されるものとは断言できないがそれらに共通する特徴をあげてみたい。

検出されたブロックを構成している遺物を石材別にまとめてみると第1ブロックではチャート93点、黒曜石2点、第2ブロックではチャート12点、黒曜石30点、第3ブロックでは黒曜石2点という内訳になる。各ブロックの同一石材は同一母岩によるもので、第1ブロックと第3ブロックの黒曜石以外は各々比較的密に集中している。特に第2ブロックでは東側にチャートの西側に黒曜石の集中区と石材別に集中範囲が二分されたことが大きな特徴といえる。また個々のブロックを構成する遺物は各説で記述した通りほとんどが調整剥片で長さ1cm、幅1.5cm、厚さ2.5mm

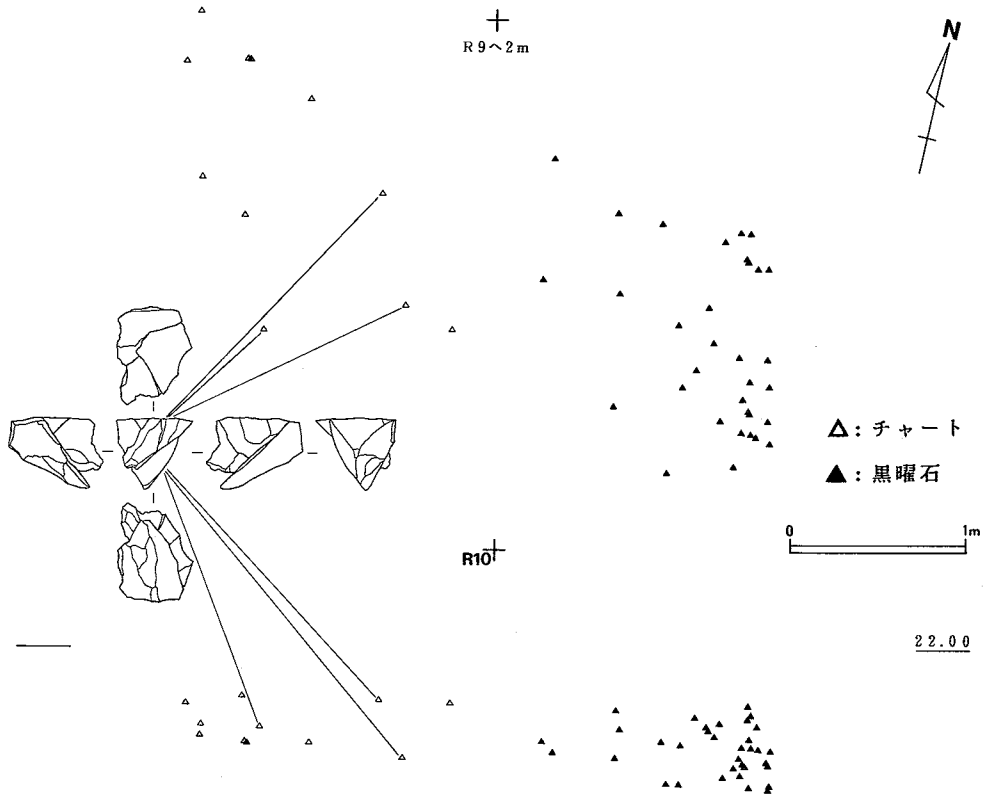


第10図 第2ブロック(1)



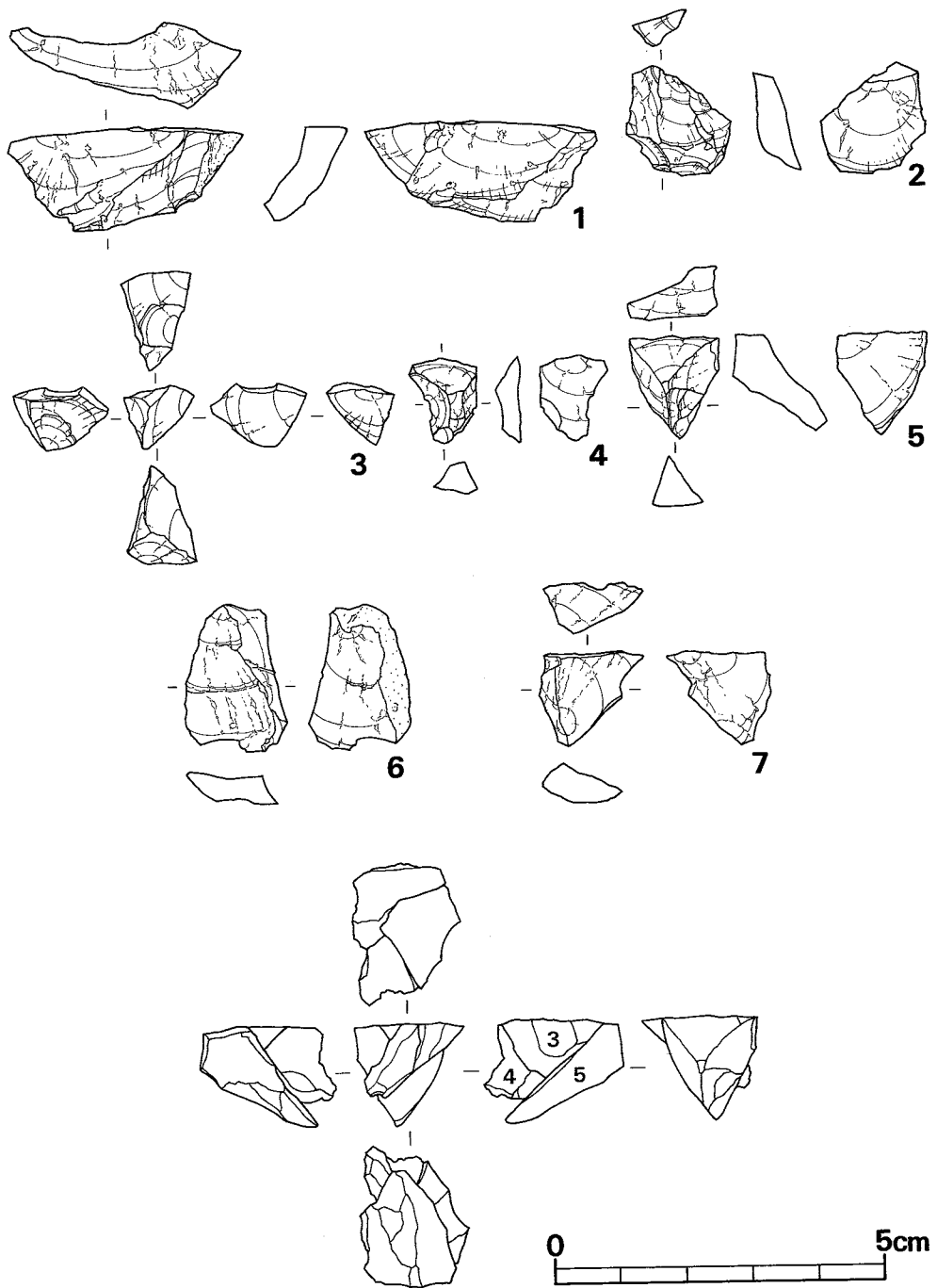
第11図 第2ブロック(2)



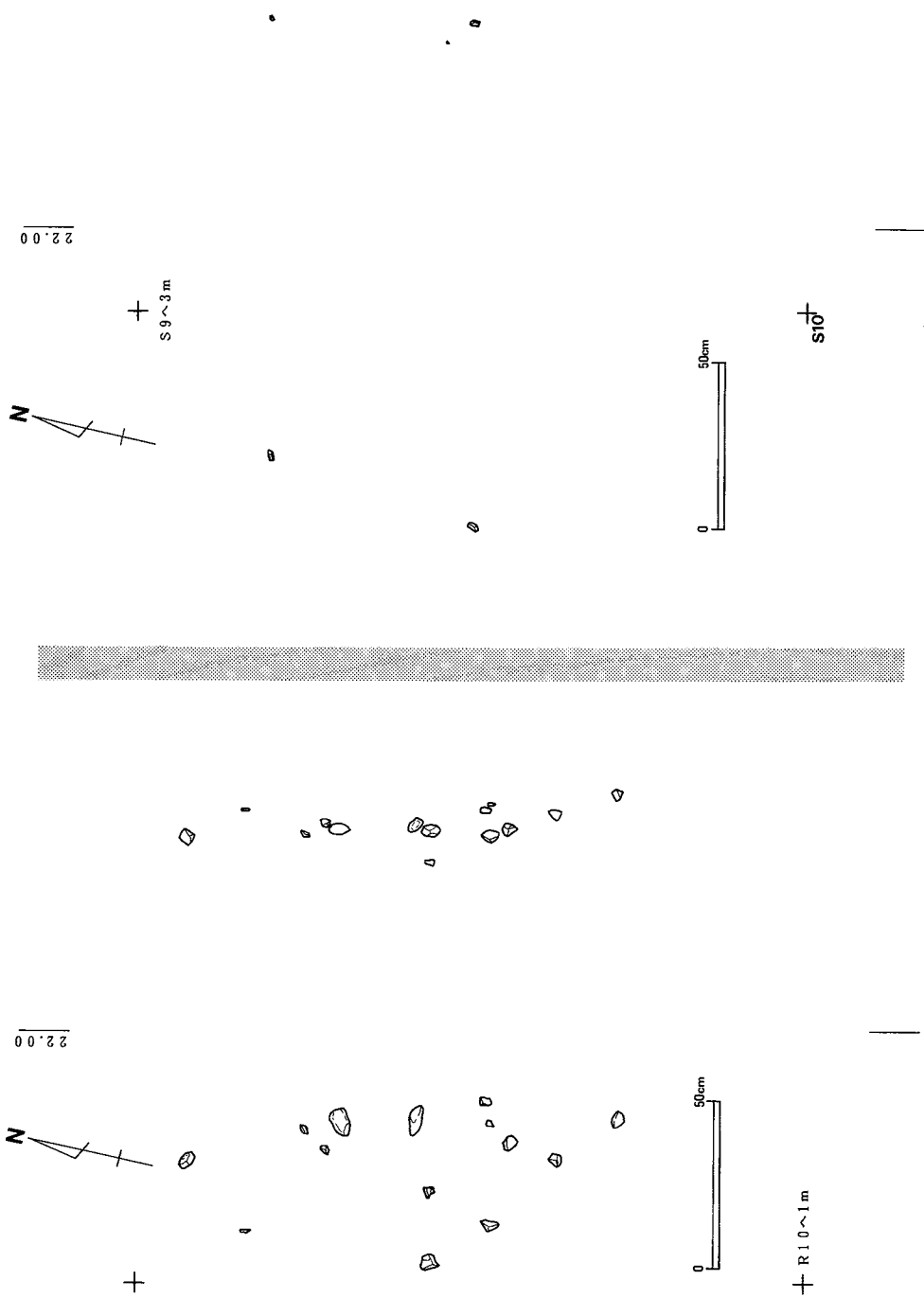


第12図 第2ブロック石材別分布図

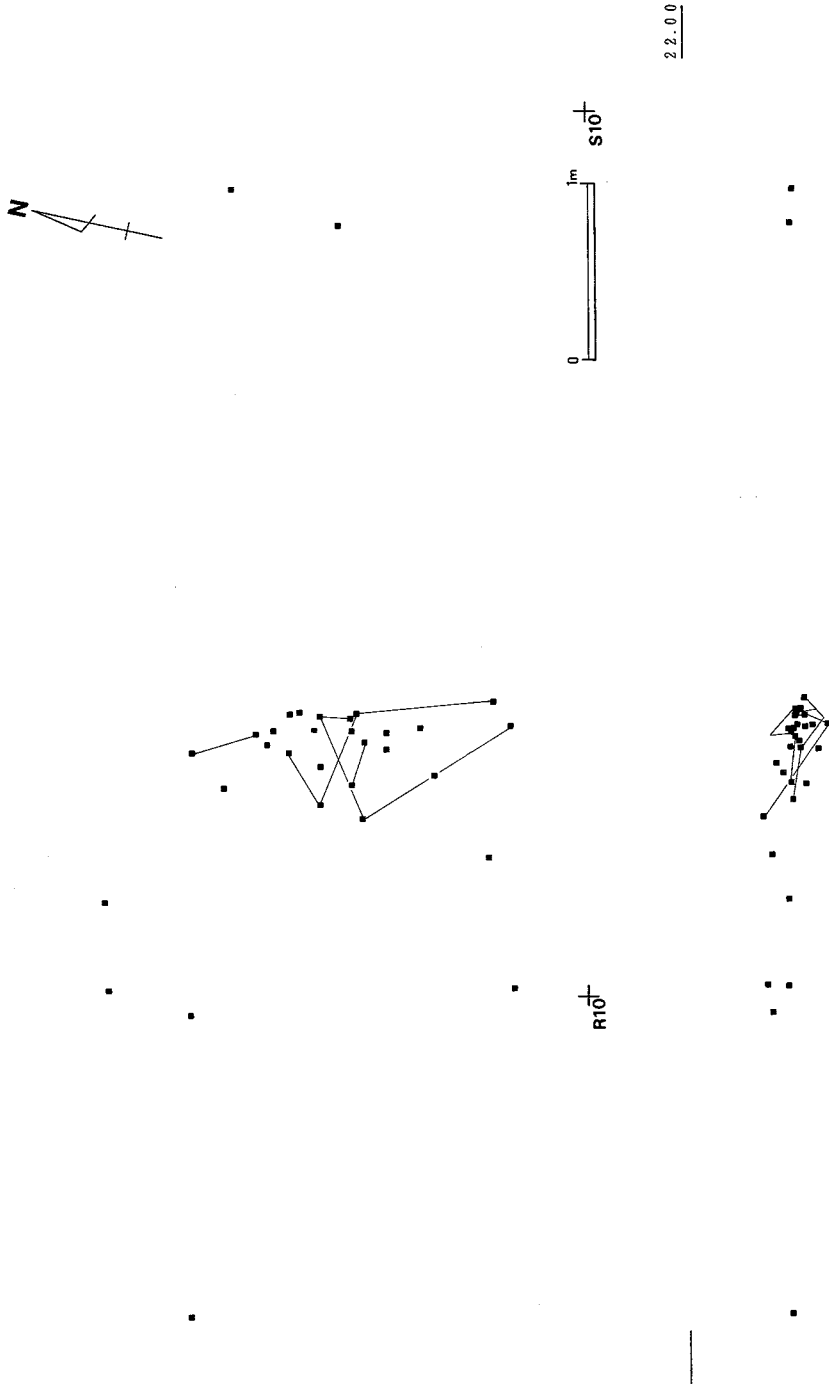
以内に集中しており、特に第2ブロックでは5 mm 四方に満たない剥片が大半を占めている。このことは本遺跡が短期間の利用にとどまっていたことを示すものであり、想像をたくましくすれば狩猟中のキャンプサイトとして位置付けられようか。  
(成瀬 晃司)



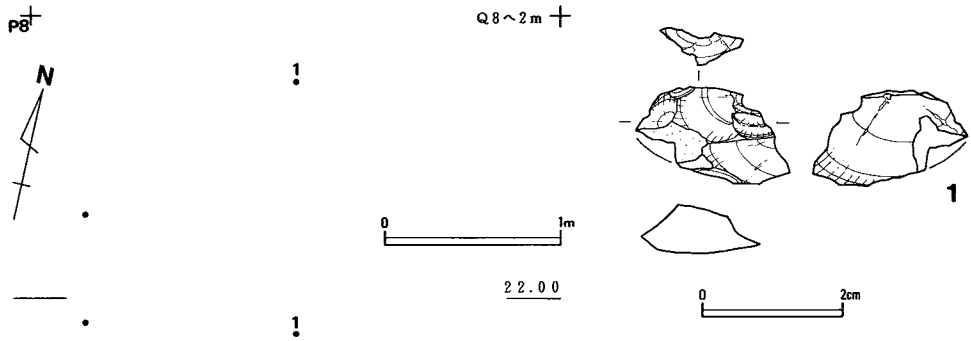
第13図 第2ブロックの石器



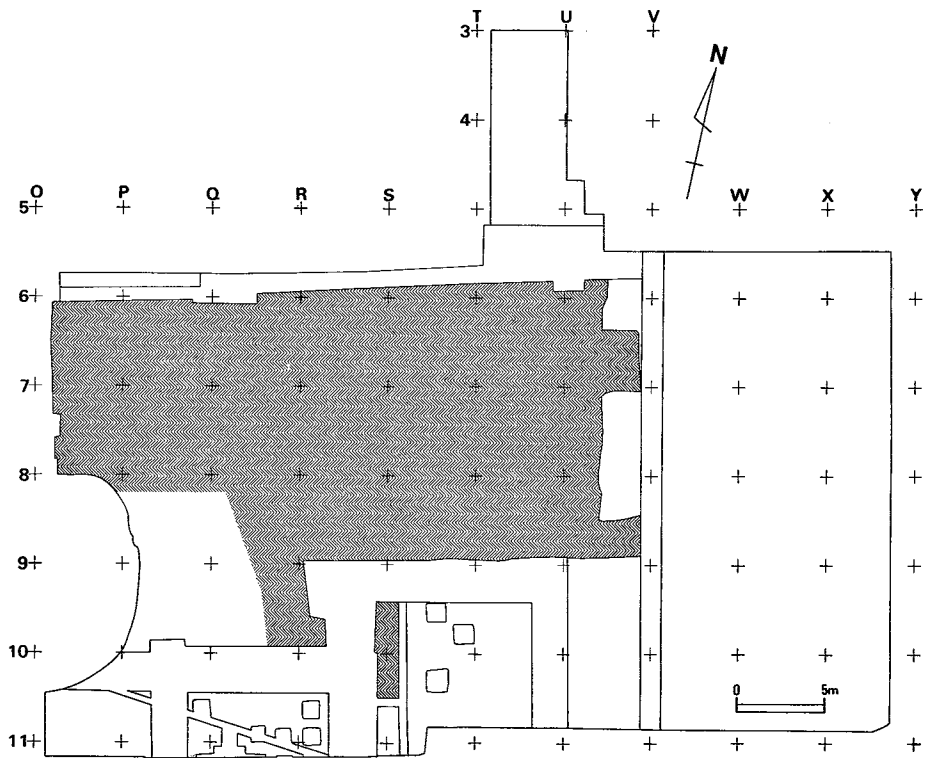
第14図 第1礫群



第15図 第1 礫群接合関係図



第16図 第3ブロックとその石器



第17図 縄紋時代の調査区—文学部3号館建設地区

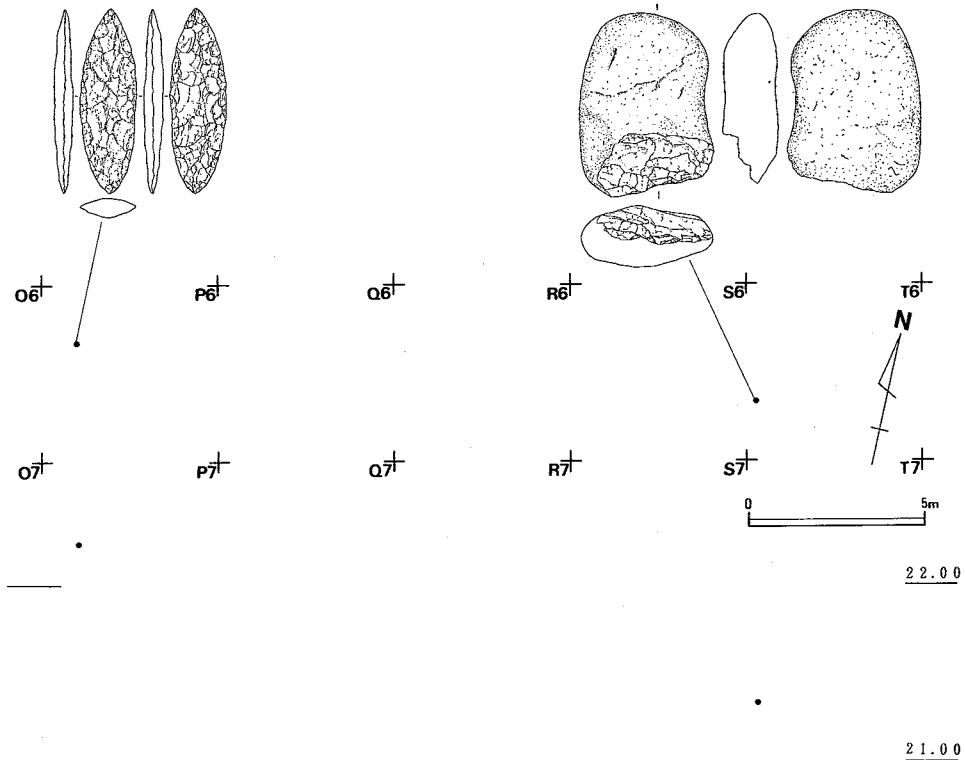
### 第三節 縄紋時代調査各説

#### (1) 暗褐色土層 (II-2層) の調査と出土遺物

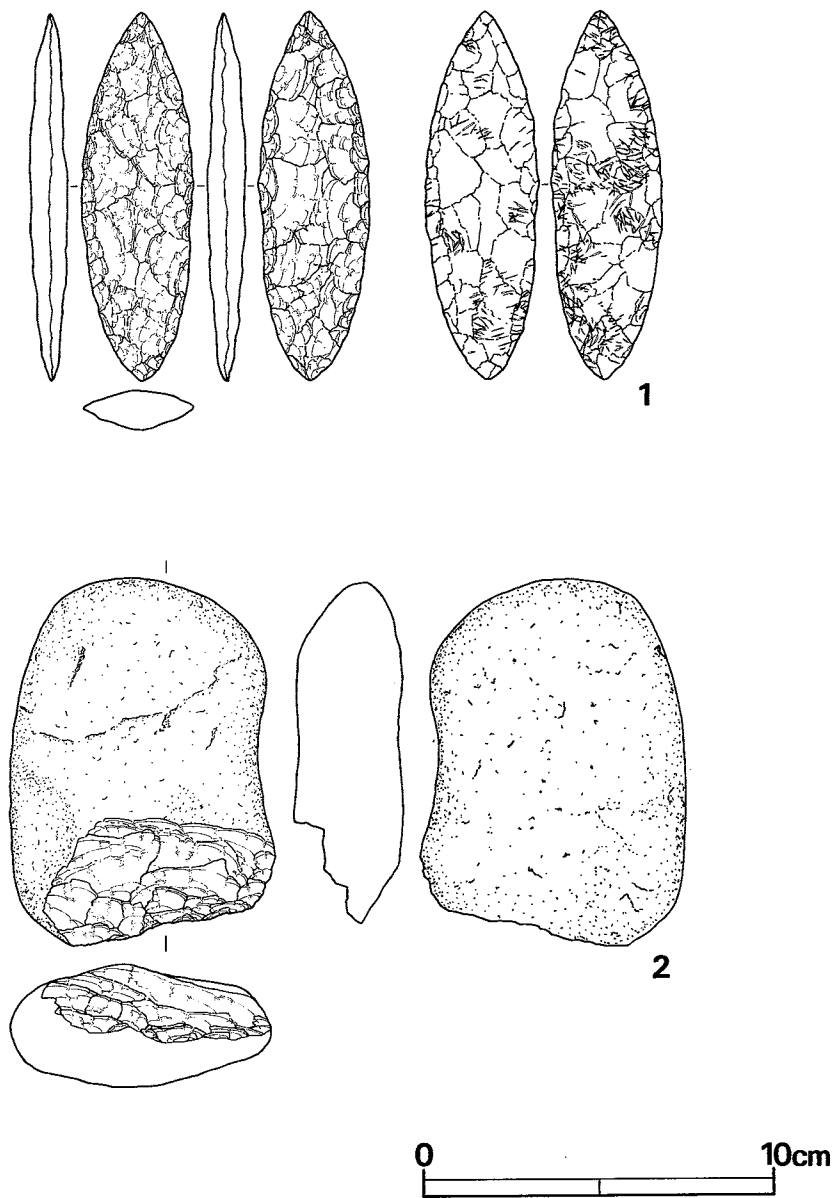
法学部側では近代以降の攪乱層によって沖積層は削平され遺構確認面がローム層まで達していたが、文学部側では三四郎池に続く緩斜面が近世の盛り土によってパックされていたため縄紋時代の遺物包含層が良好な状態で遺存していた。沖積層はII-1層～3層に分層されるが石器はII-2層より石槍1点、礫器1点が検出された。

1は柳葉形の両面加工石槍である。調整は表裏を比較的大きな調整で整形した後、細かい剥離で側縁の調整を行っている。軟質な素材を利用しているため両面ともに風化が著しく、稜は丸味を帯びている。形態はほぼ左右対称に整えられ、断面形は凸レンズ状を呈している。両面にいわゆるストーン・リッターがみられる。

2は片面加工の礫器である。扁平の礫の一端に片面加工の刃部を施している。調整は比較的粗



第18図 II-2層の遺物分布



第19図 II-2層出土石器

い加工を施した後に縁片に細かい調整を加えている。

(成瀬 晃司)

## (2) 黒褐色土層 (II-1層) の調査と出土遺物

本層の調査によって、加曾利 B 1 式がややまとまって出土する地点を検出しえた。ほぼ U 7 グリッドの南半から U 8 グリッド北辺の範囲に収まる広さである。場所としては、谷地形の緩い斜面になっているところである。この付近はかろうじて江戸時代遺構による攪乱から難を逃れられた地域である。残っていたのは幸運であったと言えよう。遺物の垂直分布をみると、土層の傾斜にほぼ対応した垂直分布を呈している様に見えるが、廃棄された後さほど移動していないのだろうか。接合関係をみると(第20図参照)、口縁部片二点が接合し第23図1のように深鉢形土器に復元されたが、他に同一個体となる破片は識別できなかった。さらに、口縁部片一点と突起一点が第22図1のように接合したが、この例は鉢形土器であり、他に接合しないが、第22図2～4が同一個体であることが識別できた。他の破片はそれぞれ別個体の破片一深鉢形土器六個体一と考えられる。以上の破片で粗製土器の一部と思われる破片はないようにみえた。精製土器の破片で構成される二次廃棄のブロックであろうか。土器表面にはネズミの噛み傷と思われるような損傷痕がついているのが特徴で、破片に損傷痕の加わる経緯からは単純に原位置は維持しているとは言いがたいようである(菅谷報告参照)。

地形的には谷頭から離れ比較的平坦な P 6 グリッドの中央付近では、加曾利 E 3 式の底部破片が三点接合しているが、他の土器小片は別時期の単独出土品であった(第21図参照)。この周辺は江戸時代の遺構による攪乱が激しい地域であるので、あるいはもっと多くの土器が検出できていたかもしれないが想像の域を出ない。

尚、調査区からは竪穴などの遺構及び石器、土製品、石製品等々は検出できなかった。本来の生活址は別地域にあると推察している。しかしながら、遺物の一生と人間行動といった観点(藤本1985)から考えた場合、このような小ブロックと小片といえどもこちらからのアプローチ如何によっては興味ある情報を提供してくれるであろう。

(大塚 達朗)

### 文 献

藤本 強 (1985) 考古学を考える, 雄山閣

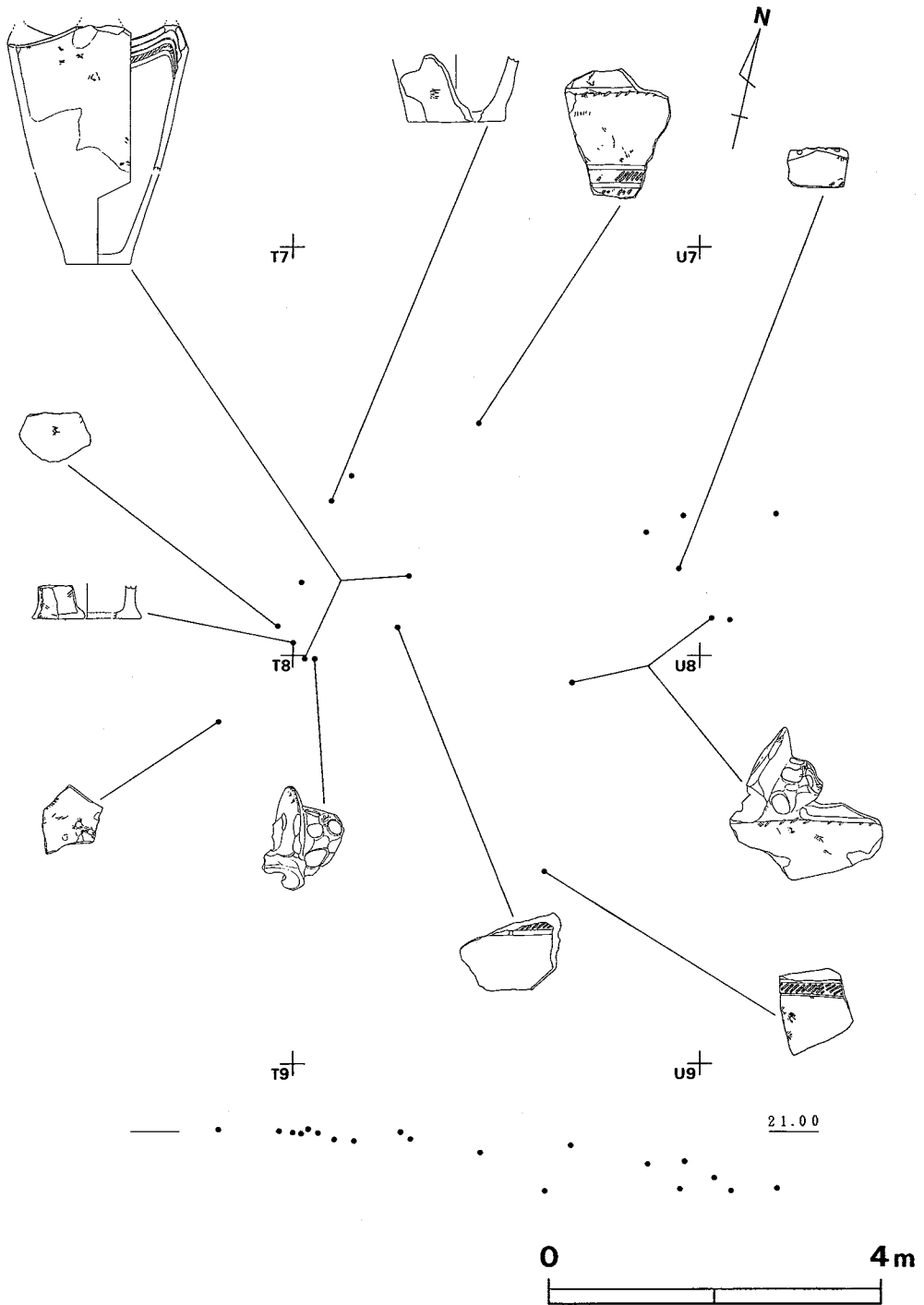
## 出土土器

**土器型式** 出土した縄紋土器は極めて少なく、土器型式に対比して概観すると、前期黒浜式土器が一点、中期加曾利 E 3 式が一個体、後期加曾利 B 1 式が数個体、晩期安行 3 c 式が一点であった。

### 前期

・黒浜式(第24図3)：小片が一点だけあった。内外面とも暗褐色を呈し、焼成は比較的良好であ





第20図 II-1層の遺物分布(1)

る。繊維を混入している状態がよく観察できる。器表は荒れていてはっきりしないが、無節の斜縄紋が施紋されているようである。内面は平滑に仕上げられている。以上の特徴から当該型式と判断した。器形は深鉢形となろうか。

#### 中期

・加曾利 E 式 (第24図1) : 一個体あった。底部の破片である。色調は褐色である。縄紋 (LR) が施紋され、縦沈線によって区画され縦方向に縄紋を磨消している。加曾利 E 3 式の深鉢形土器かと考える (註1)。

#### 後期

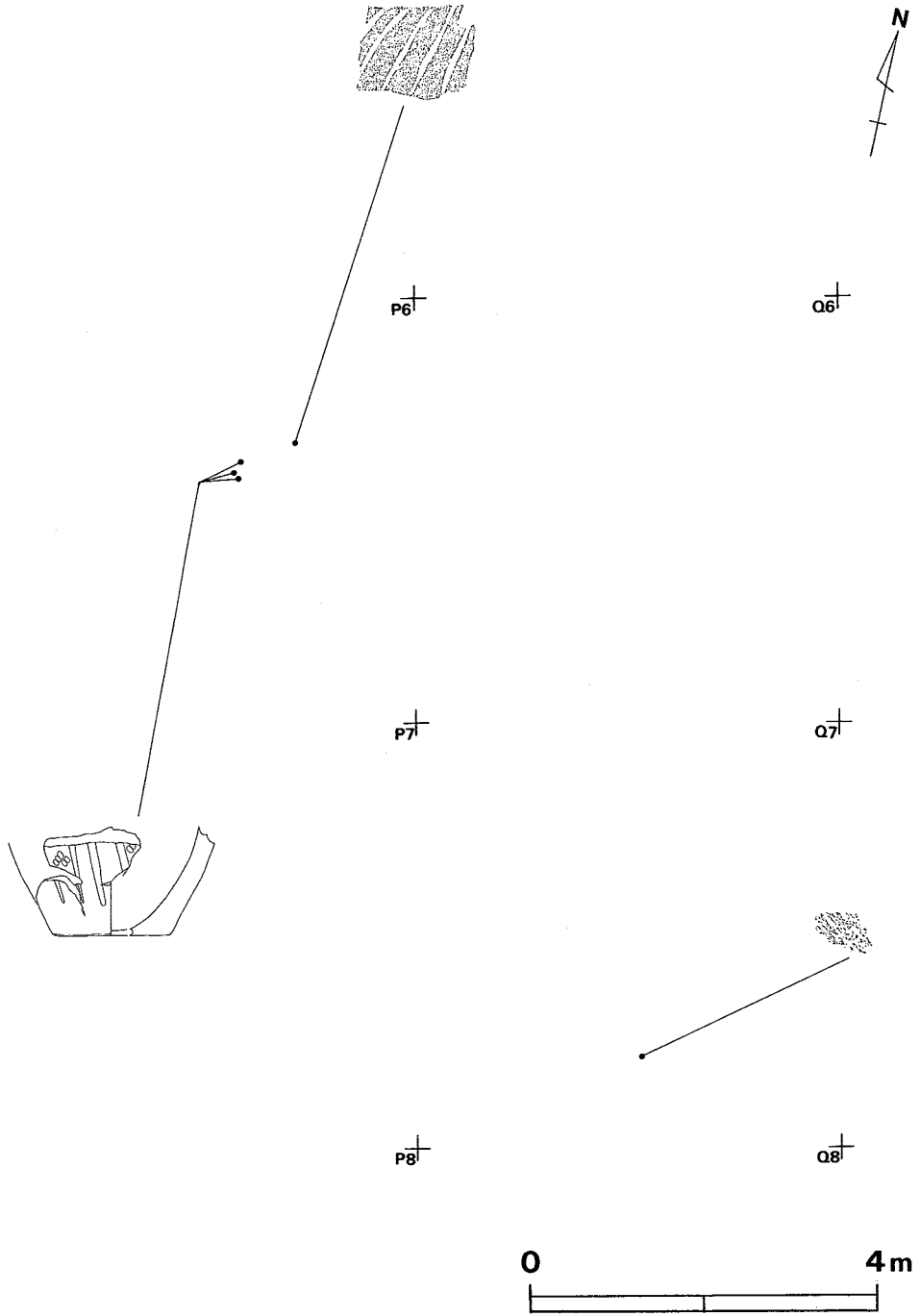
・加曾利 B 式 (第22図, 第23図) : 数個体 (暗褐色～黒褐色の色調を呈する) 出土しているが、全て欠落する部分の方が圧倒的に多い。第23図1は小型の深鉢形土器で推定口径8.8cmで、器表面には紋様はない。「口端の外側が斜面をなし」、その結果、加曾利 B 1 式独特の尖った口唇部断面形態を形成する (註2)。口端からやや内側にかけて細かく刻み目がつけられている。内側には口唇下に隆線があり、隆線の上下端にそってナゾリが加えられているため、隆線の上にはやや幅広く浅い溝が走ることになり、同下にもやや幅狭の溝が巡っている。さらにその下には内面紋が見られ、二条の沈線紋が巡り、その間に刻紋が充填されているものである。器面は内外とも比較的良好に研磨されている。三単位の波状口縁を有する深鉢形土器であるが、波頂部の欠損状態を観察すると本例は突起を持つ形式のようである。同2も深鉢形土器の口縁部付近の小破片である。内面に巡る隆線と内面紋の観察から波状口縁であろう。隆線の上には斜め方向から四箇所刺突が加えられている。その下には内面紋の一部 (二条の沈線と刻紋) が残っていた。同3も紋様の形状から判断して波状口縁を有する深鉢形土器の体部上方の破片であろう。表面には「並行線的な磨消縄紋」(LR) の一部が残り、内面には横線が二条ある (本来はもっと多条の横線を配していたであろう)。この二例も加曾利 B 1 式である。

第22図1～4は同一個体で、三単位の突起を口縁部に持つ鉢形土器である。突起は耳状の部分とそれに付属する瘤状の部分とから成る。耳状の部分の中央には円い窪みがあり、瘤状の部分には耳状の部分にあるものよりはややこぶりな円い窪みがみられる。口唇部はやや内屈する。体部から口唇へと屈曲がかわる部分 (最大径の部分) には沈線が巡り、突起のある所で鉤状になって途切れる。この沈線の直下に沿っては刻紋が巡らされる。突起下にも配されていて、刻紋は口縁屈曲部を全周することが分かる。屈曲部からやや下の所には「並行線的な磨消縄紋」(LR) がある。4にはこれを縦に区切る沈線紋の一部も観察できる。この土器もやはり加曾利 B 1 式である。

第23図6・7は加曾利 B 1 式の深鉢形土器の底部で、6は所謂網代底である (別項目参照)。同4・5も器厚・器面調整の特徴から当該型式に属する深鉢形土器の体部破片と考えている。

#### 晩期

・安行式 (第24図2) : 口縁がやや内湾する砲弾形の深鉢形土器の口縁部片であろう。暗黄褐色を呈する。ややざらついた器表である。残存部からは斜めに沈線紋が施されているのが観察できる



第21図 II-1層の遺物分布(2)

が、そのまま斜走して終わる紋様ではないであろう。安行3c式に比定できるであろう。

本郷台に位置する東京大学構内遺跡としては既に『向ヶ岡貝塚』で鷹野光行氏が各時期の縄紋土器を報告している。報告者に従うならば、縄紋早期(田戸下層式、子母口式、茅山式)、前期(黒浜式)、中期(阿玉台式)、後期(堀之内I式、加曾利BII式、曾谷式、安行I式)、晩期(安行IIIb式)が検出されている。本学構内に於いても縄紋人の活動の足跡が大分辿れるようになったといえるであろう。

(大塚 達朗)

#### 註

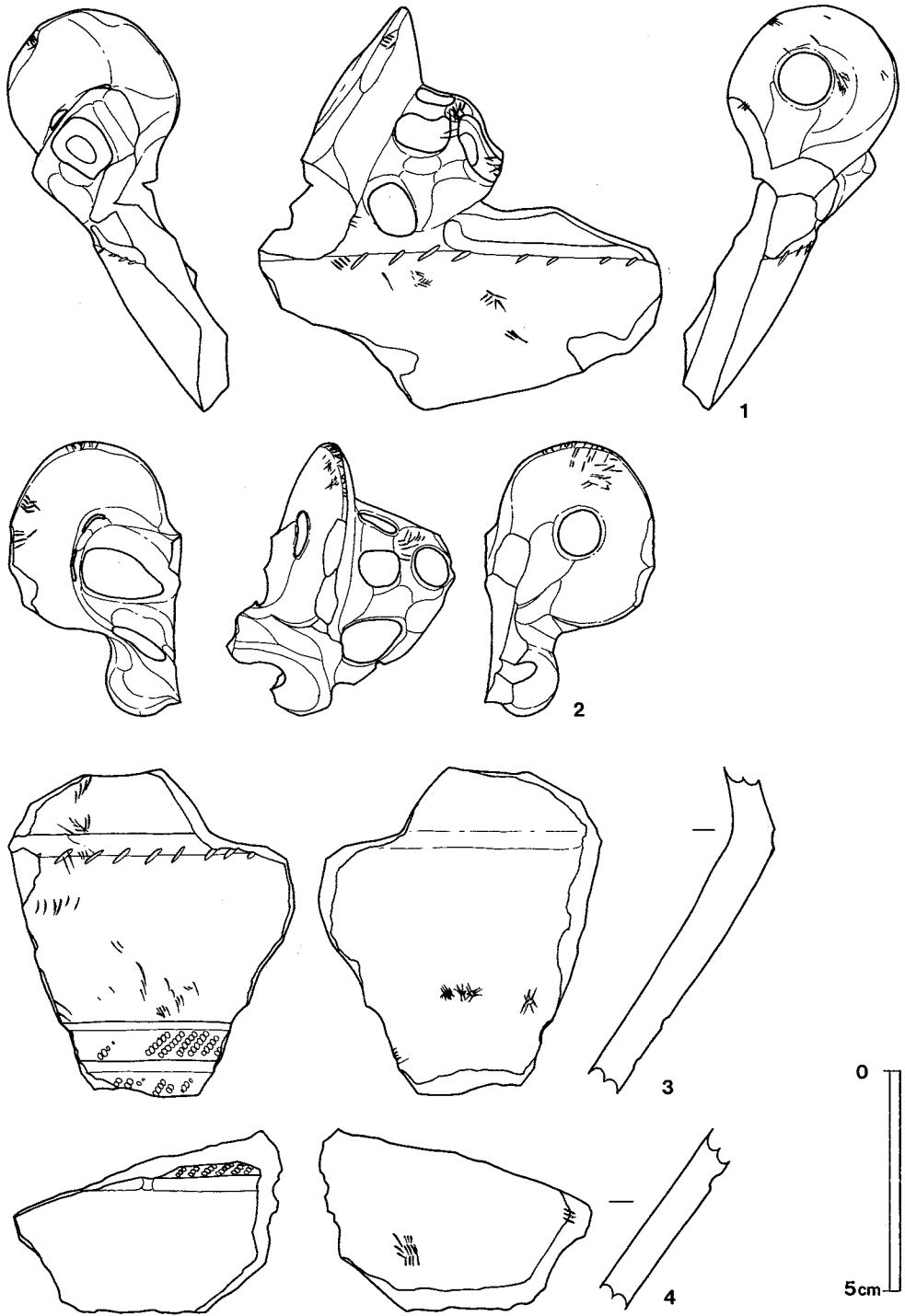
- 1) 加曾利E3式とは山内清男博士によって区分された細別型式のことである。そして、最近、柳澤清一氏が学史的考察からあらためてその内容をどう捉えるかを明確にしている。その柳澤氏の研究を参考にして型式認定をしたものである。
- 2) 加曾利B1式とは山内清男博士によって区分された細別型式のことである(加曾利B1式標本参照)。本報告での土器の認定はそれに従っている。最近、安孫子昭二氏が山内清男博士の研究に基づかない別の土器配列を研究者に強要しているようだが、非常に疑問である。その理由は研究篇の大塚論文(「加曾利B式土器学史抄論」)を参照して頂きたい。

#### 文 献

- 大塚達朗(1983) 縄文時代後期加曾利B式土器の研究(I)——最近の成果の検討と新たなる分析——, 東京大学文学部考古学研究室研究紀要2
- (1986) 型式学的方法—加曾利B式土器, 季刊考古学17
- 鷹野光行(1979) 縄文土器, 向ヶ岡貝塚, 所収
- 柳澤清一(1985) 加曾利E式土器の細別と呼称(前編), 古代80
- (1986) 加曾利E式土器の細別と呼称(中編), 古代82
- 山内清男(1939a) 日本先史土器図譜, 第三輯
- (1939b) 日本先史土器図譜, 第四輯
- (1940) 日本先史土器図譜, 第九輯

**土器の傷**(第22図～第24図・図版6) 今回の調査では検出した縄紋土器に擦過痕や摩耗痕あるいは剥離などと異なる焼成後の細かい傷が観察できる例が多い。以下第22図～24図の各土器片の傷についての観察所見を記す。

第22図1～4は同一個体の破片である。1は鉢形土器の突起を中心とした口縁部破片である。傷は表裏に認められるが、特に突起の部分に目立つ。突起の円盤状の部分の縁から内側に向かって、中央の孔の縁の周囲のやや盛り上がった部分からは外側に向かってそれぞれ放射状に集中しているが、その中間のやや窪み気味の部分では殆ど見られない。また右側の瘤状の部分では孔と孔との間の狭い橋状になった部分に集中する傾向がある。胴部では表裏に傷を認められるが、表面では散漫に広い範囲に渡って認められるのに対し、裏面では数箇所の狭い範囲に集中して認められ器表面の剥離した上に付いている部分もある。2(図版6-2)は突起のみが器壁から完全



第22図 II-1層出土の土器(1)

に剝離している。傷の付き方、集中する場所は1と同様だが、ややこちらの方が少ない。剝離面には全く傷は認められない。3は口縁部直下から胴部にかけての破片である。傷は表面では全体に散漫である。裏面では器壁の弾けた部分を中心に放射状に数箇所見られるほか、破片の縁にも集中する場所がある。4は3の破片の下に続く部分と思われるが接合しない。傷は表面では認められないが裏面で一箇所集中する場所がある。傷の集中が著しいので判然としなが、3の場合と同様器面の弾けた部分を中心に行っているようである。尚裏面の右端の部分で器面から破損面にかけて続く傷が認められた。

第23図1は波状口縁深鉢形土器の波頂部及び左右の波底部から胴部にかけての破片である。傷は表面及び内面に認められる。表面の傷は右下がり及び左下がりの二方向が重なって付いている部分もある。内面では凶化できなかったが下側の沈線の内部とその沈線の縁から直下にかけて確認できた。沈線内部では沈線に直交するように、沈線の直下ではやや左下がりに一方向についている。

同図2は、深鉢形土器の口縁部直下の破片である。同図3と同一個体の可能性が高い。傷は表面では散漫で、上及び右下の縁にやや集中している。裏面では左右の縁及び沈線の上側の縁に限取ったように傷が集中している。

同図3（図版6—3）は、深鉢形土器の胴部破片である。やはり表裏に傷が認められる。表面は左側の縁に集中している他、縄紋帯の内側やその直下にも僅かに集中している。裏面を見ると沈線の縁に集中しておりここでは沈線に直交する方向に傷がつくが、破片の中央付近では二～三方向の傷が重なっており、破片の右側には縁に限取るように傷が付いている。

同4（図版6—4）は深鉢形土器の胴部破片である。表面では縁に限取る位置にある傷は縁に対して直交する方向に、破片中央部の傷は器壁の弾けた部分からその外側に向かっている。裏面では傷を確認できなかった。

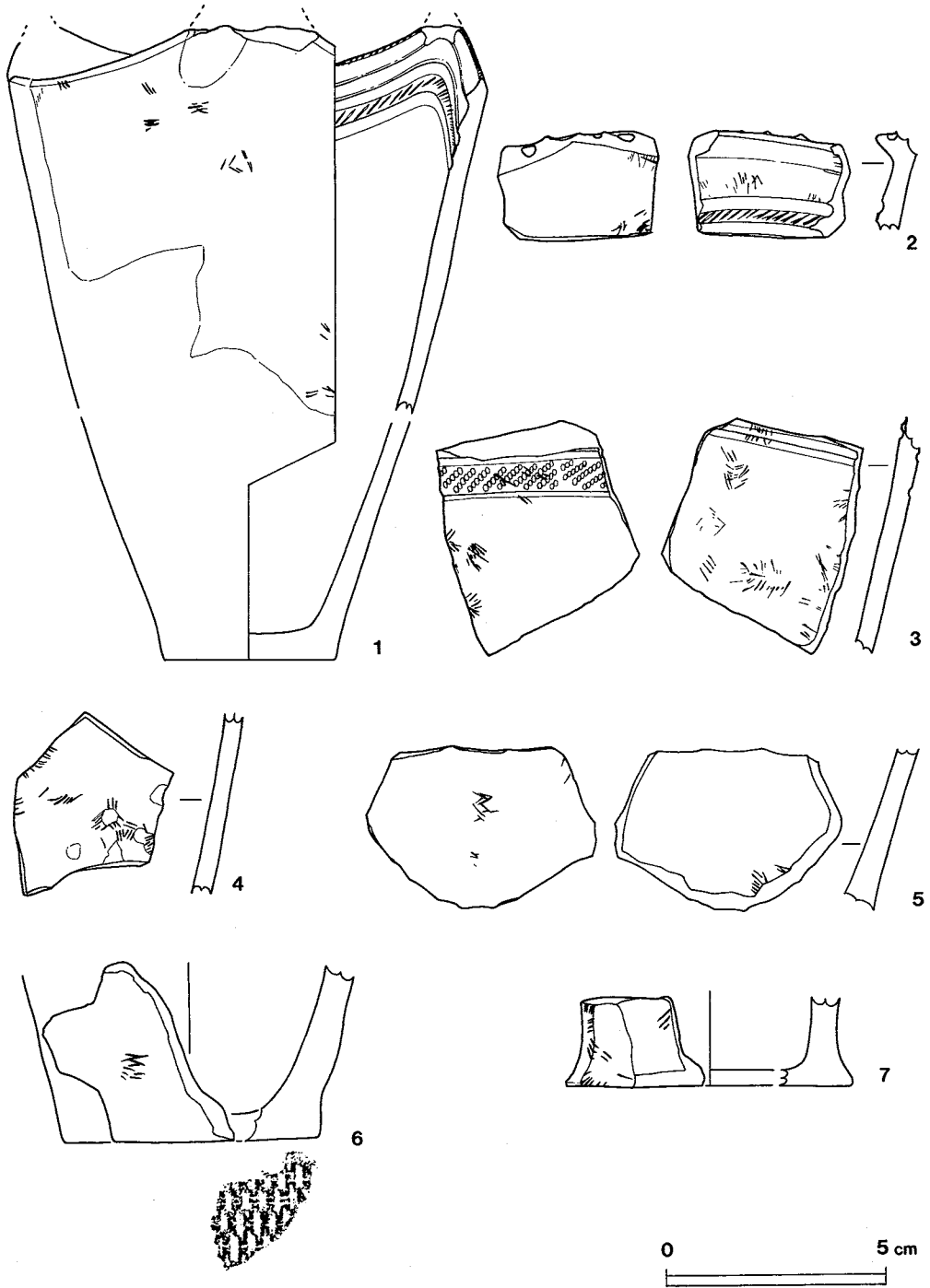
同図5は深鉢形土器の底部に近い胴部破片でやはり表裏に傷を持つ。表面は破片ほぼ中央に傷の集中があり、二方向認められる。裏面は右下の縁にやや集中する。

同図6は深鉢形土器の底部破片である。底部直上の篋状工具による器面の調整の痕が明瞭であるが、調整の際にやや削り残して器面が盛り上がったようになった部分に傷の集中が認められる。尚裏面には傷は見られない。

同図7（図版6—6）は深鉢形土器の底部の破片である。表裏及び底面のそれぞれ縁の部分に傷が集中しているが、図に示したように破損面に明瞭な傷が付いていることが注意される。

第24図1（図版6—5）は深鉢形土器の底部破片である。三片が接合しているが傷を確認したのは底面からみて向かって右側の破片のみである。表面並びに底面に傷を確認したが、裏面では確認できなかった。傷は何れも破損部の縁の一点を中心として放射状に付いている。底面では傷の集中する部分で他の破片と接合していることが注意される。

以上説明してきたように、土器片の傷は器面全体に認められるものではなく、所々に集中して



第23図 II-1層出土の土器(2)

付いている。傷の集中のしかたを見ると破損部の縁や器面の弾けた部分の縁、沈線の縁、突起の頂部等“引っ掛かり”のある部分から始まる場合があって、そうした“引っ掛かり”の部分で最も幅が広く反対側の端が鋭く尖る細長い三角形を呈する例が多い。一方器面の平らな部分に集中する場合もあって、大抵二～三方向の傷が重なり合う状態である。そのため部分的に格子目状や籠目状になる部分もある。傷の両端が尖る三ヶ月状のものが目立ち、“引っ掛かり”の有る場合と比べると集中の度合いはやや弱い。

こうした傷がなにによって付けられたものか、類例を他の報告例から探してみると、埼玉県針ヶ谷北通遺跡でやはり土器の器面や破損面に見られる例（埼玉県遺跡調査会1975）があり、また千葉県石神2号墳では石室内に副葬された石製品に類似した傷が見られたことが報告されている（千葉県文化財センター1977）。針ヶ谷北通遺跡例について土肥孝氏はネズミの歯痕としており、石神2号墳例については今泉吉典氏によって「クマネズミかドブネズミ、すなわち、クマネズミ属 *Rattus* のかじりきずと思われる」（今泉吉典1977）とされている。以上二例と別に安藤洋一・中村喜代重氏が「Stone-retoucher とと思われる礫と類似した傷のある土器片」として報告した事例（安藤・中村1975）があるが、本遺跡例についてはネズミの歯痕と考えるべきであろう。“引っ掛かり”の有る部分に残される傷が集中の度合いが強く比較的明瞭な痕跡を残すのに、器面の平らな部分に付くものがやや散漫で浅い傷であること、複数の方向の傷が重複する傾向のあることなどは、これがネズミの歯痕とすれば理解しやすい。安藤・中村両氏も弥生土器・土師器に同様の傷が見られることから土器に見られる傷については石器製作の傷との断定は避けている。

さて、以上のように本遺跡の土器の器面に見られる傷をネズミの歯痕と考えるならば、第23図7（図版6-6）のように破損面に見られるものは土器が破片の状態になってから噛まれたものと理解でき、第24図1（図版6-5）のように接合する破片の一方のみに破損部から始まる傷のある例も同様に考えられようし、接合してはしないものの破損部から始まる傷の見られる例が図示した傷のある土器片12点8個体中8点7個体に認められること、逆に傷が破損部で切られている例がまったくないことから大部分が破片となった後に噛まれたものと理解できる。とすれば第22図3や第23図3のような表裏両面に傷の認められる例の存在から、破片として廃棄された後の地表面において「かなりローリングを受けて、表になったり裏になったりしていた状態が把握される」（土肥孝1975）のであって、土器廃棄時の正確な位置は我々の発掘調査以前に失われていたものと判断できる。

（菅谷 通保）

#### 文 献

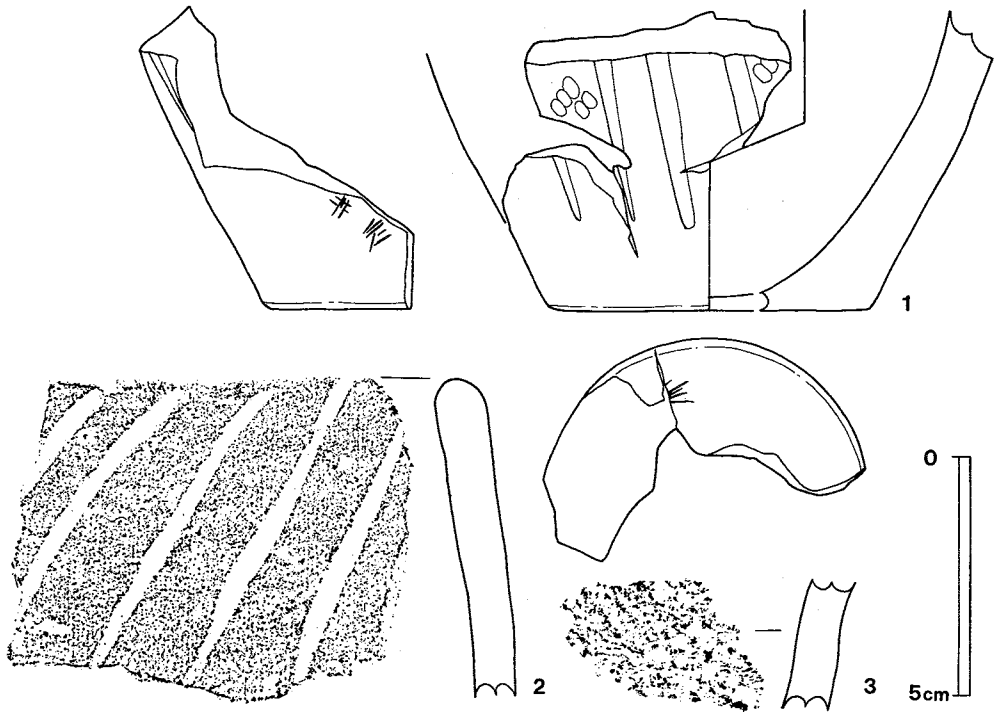
埼玉県遺跡調査会（1975）『針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書』

千葉県文化財センター（1977）『東寺山石神遺跡』

今泉吉典（1977）「千葉市石神2号墳出土石製品にしるされた動物の歯痕について」、『東寺山石神遺跡』  
千葉県文化財センター、所収

安藤洋一・中村喜代重（1975）「Stone-retoucher とと思われる礫と類似した傷のある土器片」、考古学  
ジャーナルNo.107





第24図 II-1層出土の土器(3)

土肥孝 (1975) 「縄文式土器」, 『針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書』, 埼玉県遺跡調査会, 所収

土器底の圧痕(第24図6) 第24図6の底部破片には土器製作の際に敷物にしたと思われる編み物の痕跡が残されている。編み方は

タテ一本潜り, 二本越え } 右へ二本送り  
 ヨコ三本越え, 二本潜り }

であり, タテヒネは肉を, ヨコヒネは皮を使っている。ヨコヒネとタテヒネのほぼ半分の幅のものである。遺存部分が少なく判然としないがザル編みによるものと思われる。

(菅谷 通保)

文 献

吉川國男 (1984) 「10 編み物遺存体」埼玉県教育委員会編『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—(分析調査・考察・総括)』所収

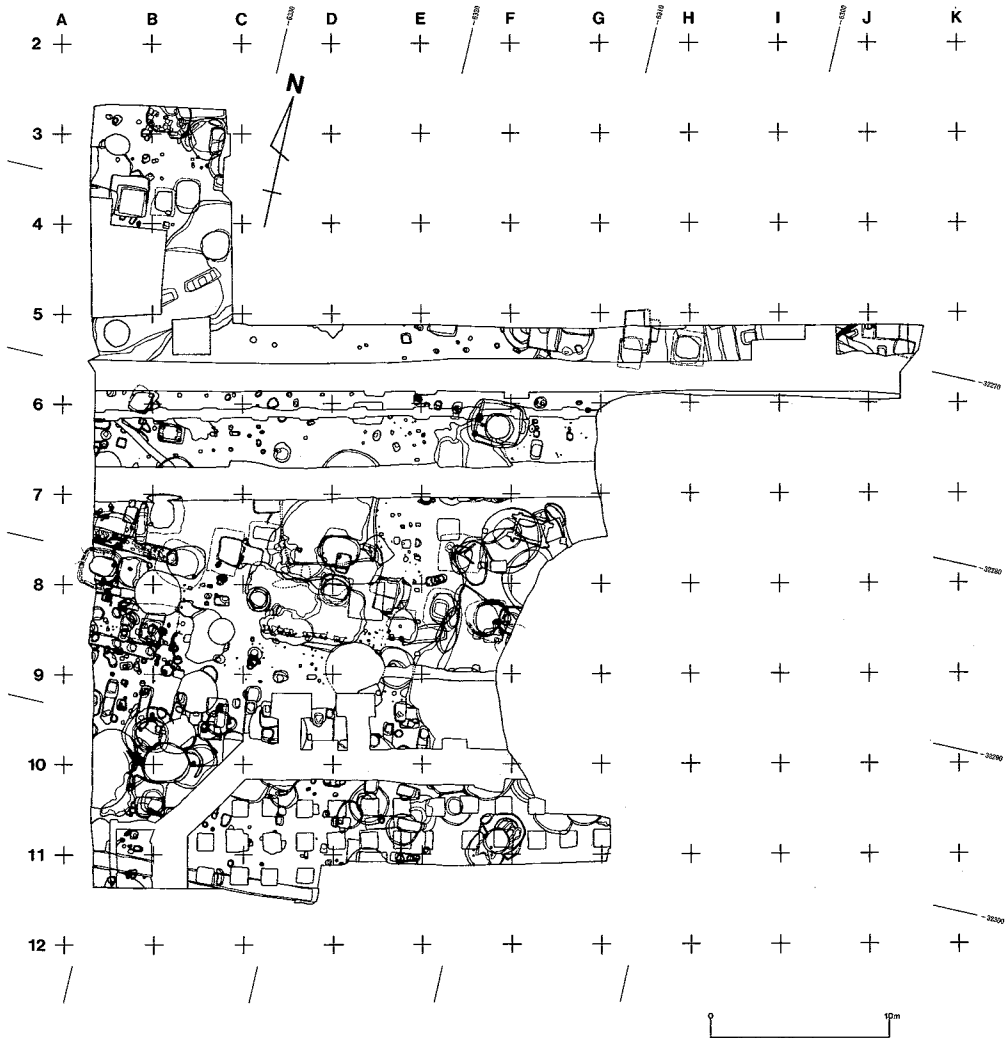


加曾利 B1 式標本 (山内1939a より)

# 第三章 江戸時代の調査 I

## 第一節 調査の概要

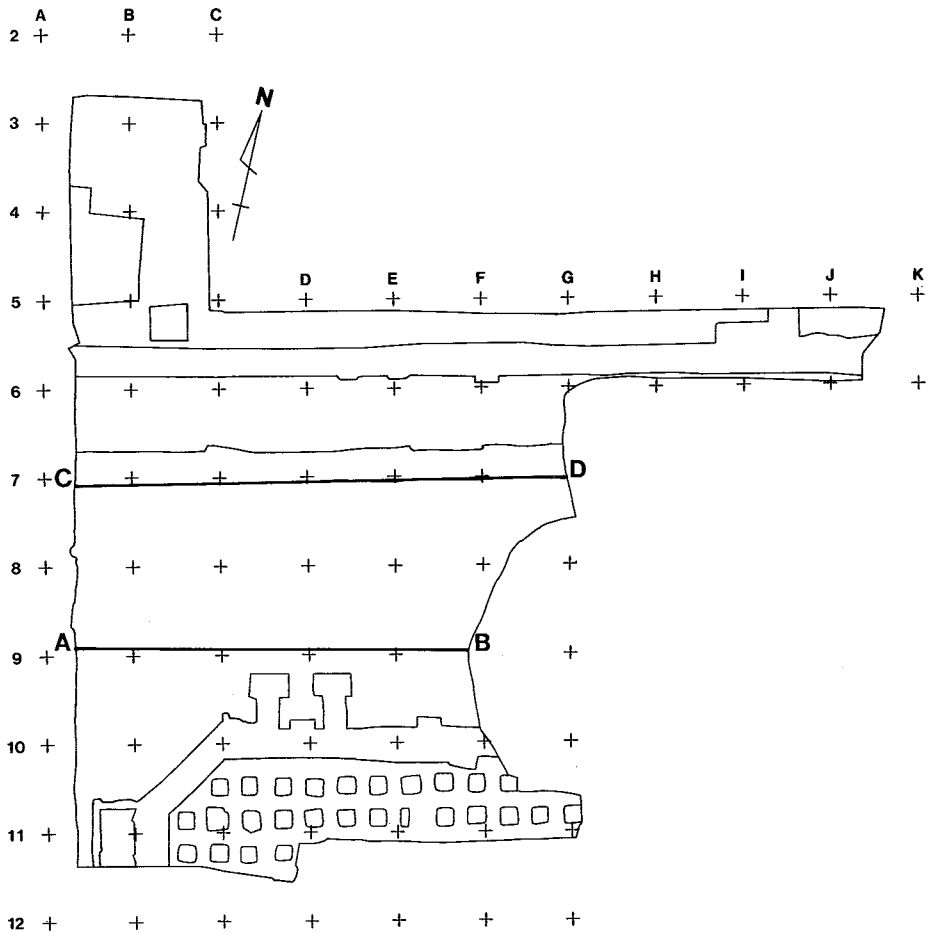
法学部4号館建設地区(第2図, 第25図)では, 調査区が7ライン北を東西にのびる共同溝と10ライン近くまで広がる旧図書館の基礎によって, 結果的に大きく三つに分けられている(B



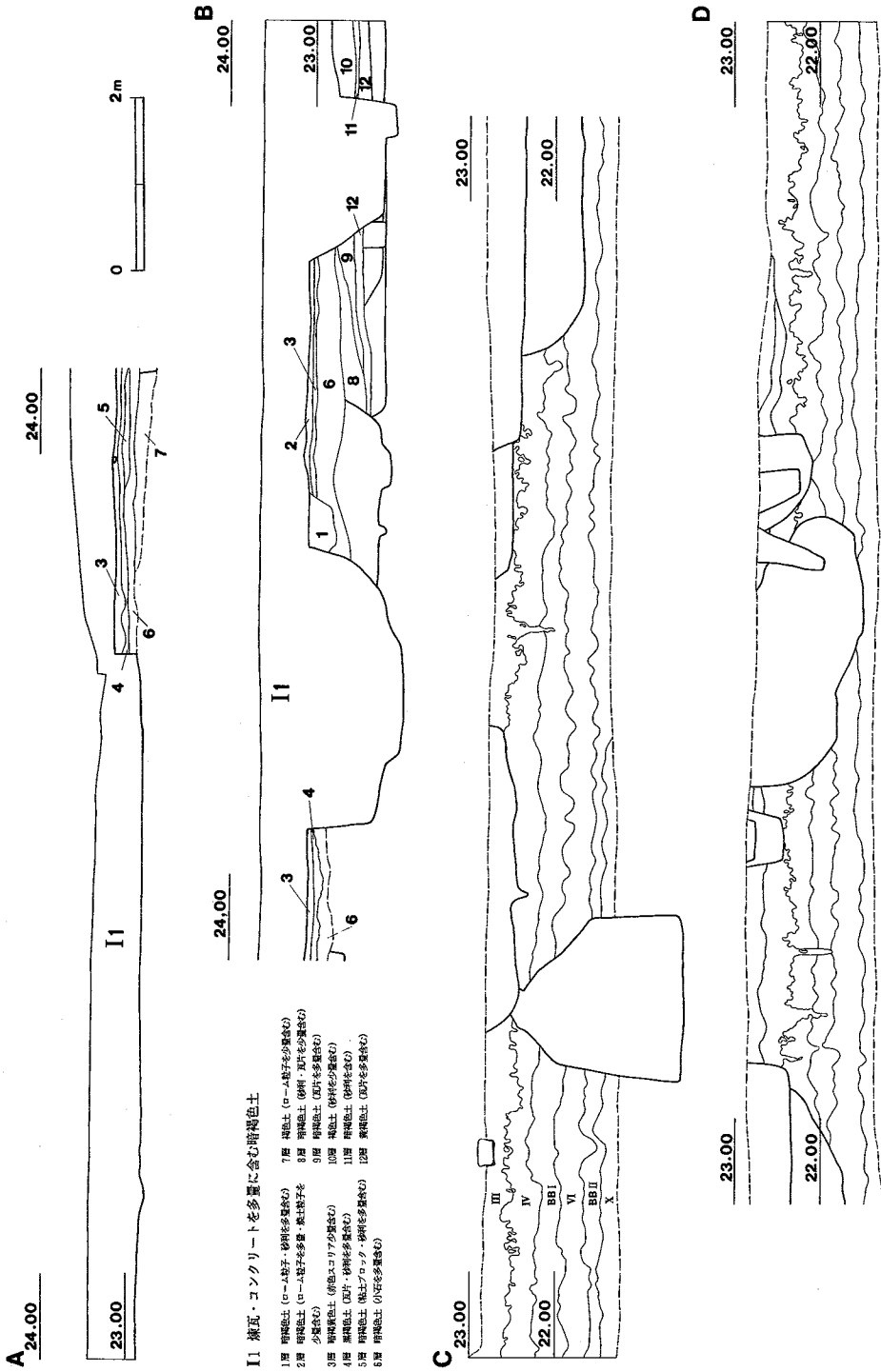
第25図 法学部4号館建設地区江戸時代遺構全体図

～I=2～6区, B～G=7～8区, B～H=9～11区)上に, これらの三地区に遺構確認の段階でそれぞれ様相が違う遺構群が各地区内に帯状に存在していることがわかった。そこで, それぞれを並行して発掘することにしたのである。

まず, 本地点の層序を概観しておこう(第27図参照)。本地域は江戸時代に加賀前田藩の上屋敷であったことが判明している所である。いわば江戸という大都市を構成しているその一部である。周知のように江戸という大都市は江戸城を中心に, 大名・旗本等の武家屋敷, そして, 町屋, 寺社などで構成されているのであるが, そのような都市の形成に於いて広く平坦な面を獲得するた



第26図 土層断面図の位置



第27図 江戸時代の層序

め自然地形を大幅に改変していることが知られている。本遺跡は正にその具体例を提供したと言えるであろう。この地区では江戸時代に行われた削平作業が立川ローム層上面のソフトローム層(Ⅲ層)にまで達していたり、そうではなくてもその直上の漸移層(Ⅱ-3層)には達していた(Ⅱ層以下が自然堆積層であるが、それについては第二章・第一節、及び第27図参照)。さらに、明治時代の東京帝国大学の各種建物の建築や構内の路面整備によっても削平されているようである。特に、本遺跡Cラインより以西は明治時代以降の削平によって江戸時代に形成された層も大半がなくなっていたようである。遺跡全体を覆っているのは、コンクリート・煉瓦で構成される層(Ⅰ-1層)で、明治時代以降の大正時代の関東大震災の際の瓦礫層が中心と考えられたので細かくは分層しなかった。この層の下、Cラインより東側半分に人為的に形成されたと思われる層が1~12層残っていた(土層注記参照)。各層は固く締まっていた。瓦の破片や砂利を多量に伴う場合が多く、整地作業に伴う盛り土・版築と考えるが、具体的に江戸時代、明治時代の層に区別するのは難しい。4層が瓦を含む層では最上層であるが、瓦の破片が再利用されていると考えられ、時期を考えるには役立たない。一方、下位の6層は比較的広く存在した層であるが、この層から掘りこまれる遺構が東京大学の建物の方向に並ぶので、6層は大学構内の路面整備の際の整地面の可能性があるかと判断している。確実に加賀前田藩上屋敷が存在していた時期に形成された層は7層以下であろうと思われる次第である。

## (1) B~I=2~6区の調査

本地区は7ラインに沿って東西に共同溝が埋設されていることにより、立川ローム層・ハードローム層まで攪乱され、そのためこれにかかった遺構は消失してしまったであろう。また、6ラインやや北に電話回線が埋設されていることによって調査が不可能な地域が生じてしまった。そのような制約下で調査を開始したが、Ⅰ-1層を剥いだ段階でこの地区はソフトロームの上面に達していたり、そこまで達しなくても直上の漸移層(Ⅱ-3層)には到達してしまった。従って、遺構確認面はソフトロームの上面になった。

この地区ではCライン以東、5ライン以北が発掘区外になるため、遺構配置について把握しにくい点もあるが、大規模な遺構の密集する(重複する遺構が多いのが特徴)地区とそうではなく大規模な遺構の存在が希薄な地区が全体図から読み取れるであろう(第25図、第28~34図)。大規模な遺構が密集するところは、調査区5ラインより北、Cラインより西の範囲が先ずあげられる。次に、5ラインと6ライン以北の電話回線埋設溝の間でFラインより東の帯状の発掘区内に大規模な遺構が多く存在しているようである。発掘外の区域が多いことや本遺跡が上屋敷跡であることを考慮に入れると、遺構の密集地点が点在するという状況を想定するより、東西に帯状に存在する遺構群の一部が発掘区との関係で今記述したような状況で検出されたと考えべきであろう。例えば、大規模な遺構群の中心をなす地下式土坑(掘り方が深く、壁の一部あるいは全体がオーバーハングする遺構を仮にそう呼ぶ)が本地区には9基(B3-1b号土坑、C3-1号土

坑, C 3-4号土坑, C 4-1号土坑, H 5-1号土坑, H 5-2号土坑, H 5-3号土坑, I 5-1号土坑, K 5-2号土坑) 確認されているが, K 5-2号土坑を除いた8基の地下式土坑が一定の方向に並んでいることが窺えるのであって, そのことが帯状に遺構群が存在することを例証しているであろう。K 5-2号土坑は別方向に沿う遺構群に所属する可能性がある。最初に挙げた遺構密集地区では, 地下式土坑のほかに, 地下式ではない深い掘り方の土坑や浅い掘り方の土坑がある。小ピットも相当数存在する。特筆すべきは, カマド跡と思われる遺構(C 2-1号組石遺構)の検出であろう。調査区外に遺構は広がっているため全体のプランは確認できなかったが, 大量の焼土を伴う, 凝灰岩で構築された石組みの遺構であった。恐らく, 上部は明治時代あるいはそれ以降の削平によってこわされたのであろう。この近くには井戸(B 3-3号土坑, C 3-4号土坑)が検出されており, C 2-1号組石遺構の性格を推定する際問題となるであろう。もう一つの遺構密集地区を見ると, 地下式土坑(H 5-3号土坑)を壊して構築されているやはり地下式土坑であるH 5-2号土坑が土留めの工夫をしているのが注意される。この地点でも深い掘り方の土坑, 浅い掘り方の土坑があるが, その他に, 溝が検出されているのを報告しておきたい。浅い掘り方のG 5-1号溝は円環状になるかもしれない。H 5-1号溝, I 5-1号溝は比較的深くしっかりした掘り方をもつが, 狭い区域での検出のため規模は分からない。但し, I 5-1号溝の伸びている方向は, 帯状に存在するであろう既述の遺構群のとは異なり, 文学部3号館建設地遺跡側の江戸第二面上の遺構群の並ぶ方向とほぼ一致する点は意味のあることであろう。

大型の遺構密集地区から希薄な地区(7ライン以北で6ラインやや北までの帯状の調査区)に目を転じると大型の遺構で性格がはっきりしているものとしては井戸2基(B 5-1号土坑, G 6-1号・4号土坑)があげられるだけで, G 6-2号土坑も大型の遺構であるが, 不整形である。中型の規模としてはC 5-1号土坑, C 6-2号土坑が挙げられるのみである。C 6-3号土坑, E 6-1号土坑は大型の遺構の可能性があるが, 大半は共同溝でこわされている。この地域ではちいさなピットが多数存在するのが特徴となるが柱穴として規定できるものは判然としなかった。

## (2) B~G=7~8区の調査

本地区9ラインのやや北にセクションラインを設定したが(第26図A-Bライン), 江戸時代, 明治時代及びそれ以降の土層が観察されたのはCライン以東だけであった。これらの土層は盛り土, 版築であって硬化した面を形成していたが, 8ラインから7ラインの間ではI-1層を除去すると明治時代以降の削平がII-3層あるいはIII層までたっていることがわかり, これらの硬化面は壊されていたと判断した。この時, この地域ではすでに多数の遺構の存在が確認できたので, 重複関係に留意しながら遺構発掘に取り組んだ。8ライン以南では, 先に説明した様に7層以下が江戸時代の層であろうと判断できたので, 小石を多量に伴う6層を削って行ったが, 6層を除去した段階で確認出来た遺構は僅かであった。この段階で確認できたしっかりした遺構とし

てはD 8-1号組石遺構があげられる。その後遺構が確認できるまで土層を削っていき、Dライン以西では7層を削った段階で遺構を確認し、Dライン以东では12層を削った時点で遺構を確認した。この間の各層中に形成された遺構は確認できなかった(第35~38図)。

Cライン以西では、I-1層を剥いだ時点で多数の大規模な遺構が重複しながら密集していることが判明した。重複関係を注意しながら発掘に着手した次第である。

本地区は結果的に大規模な遺構が多数密集し、しかも、重複関係を有しているものも多いことがわかった。また、その周辺にちいさなピットがやはり多数あったが、形態、深さ様々であった。大規模な遺構を概観すると、本地区を特徴付けるのはやはり地下式土坑で、合計17基(B 7-2号土坑, B 7-7号土坑, B 7-8号土坑, B 7-9号土坑, C 7-2号土坑, C 7-3号土坑, C 8-1号土坑, D 7-4号土坑, E 7-5号土坑, E 7-1号土坑, E 7-6 a号土坑, E 7-6 b号土坑, E 8-2号土坑, F 7-6号土坑, F 8-1号土坑, F 8-2号土坑, G 8-1号土坑)確認された。地下式土坑は場所によっては重複関係をもちながら、東西に並び、発掘区の西端、東端にかかって一部だけ発掘された地下式土坑もあり、東西により広くのびている可能性は強く、B~I=2~6区の地下式土坑群と並列するようである。この点は重要であろう。しかも、地下式土坑はそれどうしで切り合い関係をもつものがあるが(その場合、古い遺構の覆土が流入しないように土留めの工夫がなされているものがある。B 7-7号土坑, F 8-2号土坑)、他種類の大規模遺構とも切り合い関係をもっている。他種類の大規模遺構との切り合い関係から判断すると、各所で最初に構築されているのが、地下式土坑のようである。このことも重要であろう。

地下式土坑の再利用に簡単に触れておく。形態の上でいくつかに分類が可能だが、その中で、C 7-2号土坑, C 7-3号土坑, E 7-5号土坑, F 8-1号土坑, G 8-1号土坑は形態的に近い関係にあるとともに、覆土に大量の食物残滓(魚骨, 鳥骨, 貝殻)と多量のカワラケ及び炭化物そして焼塩壺等々が廃棄された層をもつことでも共通している。恐らく宴会時の塵が一時期に捨てられた可能性が高く、この地下式土坑を捨て場に二次的に利用したのであろうと考えている。これらの地下式土坑をカワラケ土坑と呼んでいる。

尚、地下式土坑群より古く構築された大規模な遺構はないようであるが、周辺の遺構に切られているB 8・C 8区の柱穴(B 8-21号ピット, B 8-24号ピット, C 8-22号ピット)が一定の配列に復元できるので、それ以前の建物跡を示す数少ない例かもしれない。

本地区でも井戸(D 8-7号土坑)が検出されているが、1基だけである。これは、東西に伸びる地下式土坑列の近くに掘削されている。時期的関係が気になるところである。

次に、東西に帯状に並ぶ地下式土坑を切っている遺構を見ると、帯状に並ぶ地下式土坑の西側はCライン以西で7ラインと9ラインの間に、建物跡と思われる遺構(C 7-1号ピット, C 8-3号ピット)が伸びてきている。東側はEラインから東に発掘区外にまで広がる大きな遺構(G 7-7号遺構, F 7-3号遺構)があることに注意しなければならない。このG 7-7号遺構, F 7-3号遺構の平面形態は不整形であるが、底面は平坦で凹凸は少ない。F 7-3号遺構からは



多量の焼土・焼けた瓦が出土している。そして、本地区中央部付近では大きな土坑(E 7-3号土坑, E 8-5号土坑, E 7-8号土坑, E 7-7号土坑)が重複しながら存在している。地下式土坑群の形成後の遺構群の変遷を考える時、これらの遺構の編年的位置付けが大事である。先にふれたD 8-1号組石遺構はこの地区では一番新しい遺構であるが、調査区全体のなかでも、最も新しい遺構となろう。

### (3) B~H= 9~11区の調査

この地区もI-1層を剥いだ段階でII-3層あるいはIII層にたっしてしまった。従って、遺構確認面はIII層上面になったものが多い。また、旧図書館の基礎が本地区に広く存在するため、それによってこわされている遺構も多い(第39~43図)。

上記二地区と同様、本地区も遺構群は東西に帯状に重複関係をもちながら密集していた。この地区では地下式土坑は1基だけであった(E11-1号土坑)。この遺構は発掘区外にかかるため完全には発掘していない。また、地下式ではないが、B~G=7~8区の例と同様に、B10-2号土坑の覆土には多量食物残渣とカワラケが廃棄された層が形成されていた。伴う遺物から判断してB~G=7~8区の例と同時期に廃棄層が形成されたと考えている。本地区の大規模な遺構は、地下式土坑が中心であった上記二地区とは異なり、比較的浅い円形の土坑であった。これが東西に伸びているのである。たらいあるいは皿状といった形状に近い掘り方をもち、底面は概して凹凸が顕著で、その凹凸のなかには木の根によるものと思われるものもあった。覆土をみると一気に埋め戻された様子をしめしている。そのような特徴を鑑みると、植栽痕と考えるのが妥当であろう。簡単に考えれば、ある時期樹木が並んで植えられていた景観を想定できるであろう。本発掘区北辺9ラインと10ラインの間には礎石を伴う柱穴(B 9-4号土坑, B 9-5号土坑, C 9-3号土坑, D 9-6号土坑, E 9-2号土坑, F 9-1号土坑, D 9-4号ピット)が並んでいた。これらは皆植栽痕と考えられる円形の土坑を壊して構築されている。さらに、東西にのびるかも知れないが、西は発掘区の端で区切られ不明であり、東はB~G=7~8区から広がってきているG 7-7号遺構によって壊されているかもしれない。他に大規模な遺構を挙げるならば、本地区南辺、即ち発掘区南辺には溝(D11-1号溝)が西から伸びてきてD11区で終わっているのを指摘しておこう。

簡単に纏めるならば、法学部4号館建設地の江戸時代遺跡は、東西に伸びる遺構群によって特徴付けられるであろう。又、それが複数列並行して存在することが確認出来たことが重要であろう。B~I=2~6区の東西の並ぶ地下式土坑群、B~G=7~8区の東西に並ぶ地下式土坑群、B~H=9~11区の東西に並ぶ円形土坑群が本遺跡の性格を考える上で最も手掛かりとなるであろう。また、7ラインと9ラインの間、Cラインより西には建物址があり、9ラインと10ラインの間には礎石を伴う柱穴がやはり東西に並び、発掘区南辺に西から溝が伸びてきている。そして、遺跡の中央付近、9ラインと7ライン、CラインとEラインで囲まれる範囲には不整形ながらおお

きな土坑が切りあっており、さらに、組石遺構が構築されていた。7ラインと10ライン、Dラインと発掘区東端で囲まれる範囲に、不整形ながら大きく広がる遺構が検出できた。これらが土地利用、計画性といった観点で本地域の遺構群の変遷を考える時重要であろう。井戸も5基確認されていることも見逃せないであろう。尚、東西に帯状に存在する既述の遺構群とは方向を異にするI5-1号溝にも再度注意を喚起しておきたい。

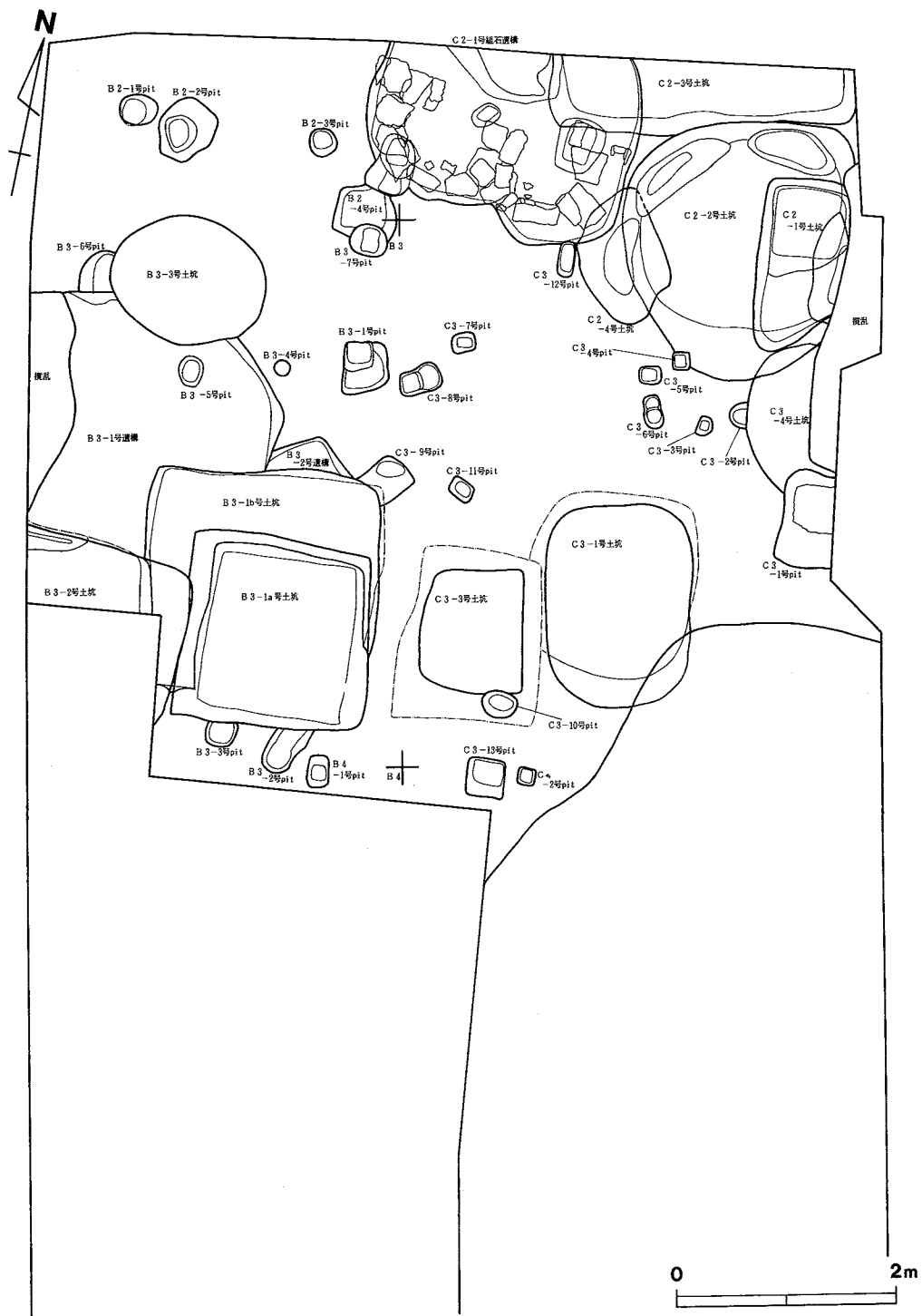
最後に、直接には切り合い関係を持たない遺構間で遺物が接合することが判明したので、詳細は遺物各説を参照して頂きたいが、簡単に触れておく。一個体の接合資料を二遺構で共有する場合、一個体の接合資料を三遺構で共有する場合に別れる。前者をケースA、後者をケースBと仮に呼んでおこう。・印が関係遺構を表示し、( )内に遺構間接合資料の件数を示すと以下のようになる。

ケースA：C3-1号土坑・C4-1号土坑(1)、C4-1号土坑・C7-3号土坑(1)、C7-3号土坑・B7-7号土坑(4)、C7-3号土坑・C7-2号土坑(2)、C7-3号土坑・B7-2号土坑(1)、C7-3号土坑・C8-3号ピット(1)、C7-2号土坑・F7-6号土坑(1)、B7-2号土坑・C8-1号土坑(1)、F7-6号土坑・E7-4号土坑(1)、F7-6号土坑・F8-1号土坑(1)、F7-6号土坑・E8-2号土坑(1)、E8-2号土坑・E7-6号土坑(1)、E8-2号土坑・I5-1号土坑(1)、E8-2号土坑・F8-1号土坑、F8-1号土坑・G8-1号土坑(1)、B3-1a号土坑・C3-3号土坑(1)、E7-3号土坑・E6-1号土坑(1)、E7-3号土坑・D7-2号土坑(1)、E7-7号土坑・E8-2号土坑(2)、G5-1号土坑・G6-1号土坑(1)、B7-1号土坑・B8-3号土坑(2)、C3-3号土坑・B3-1号土坑(1)、C3-3号土坑・B3-3号土坑(1)、B3-3号土坑・B3-1号土坑(1)

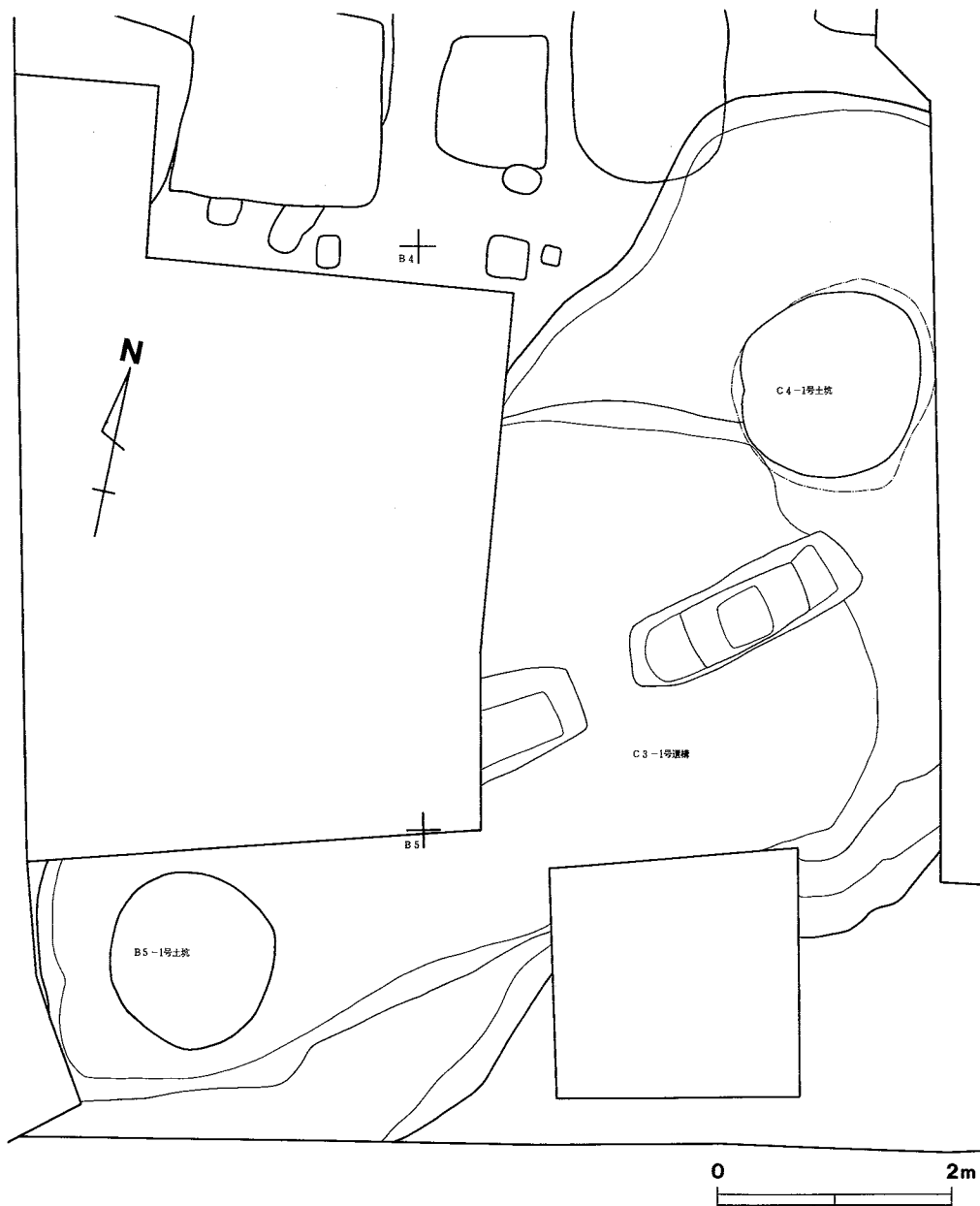
ケースB：C7-3号土坑・B7-7号土坑・C7-3号土坑(1)

そこで、遺構間で遺物が接合する、その遺構の分布をみると9ライン以北であることが分かる。様々な解釈が可能であろうが、9ライン以北・以南での遺跡空間の利用の仕方の違い、あるいは、遺構群の使用時、廃絶時の同時性を考えるうえで参考になるデータであろう。かつ、本地区での遺構群の変遷を辿るうえでも重要な手掛かりとなる筈である。尚、遺構構築時の関係、切り合い関係の詳細は第44～47図を参照していただきたい。

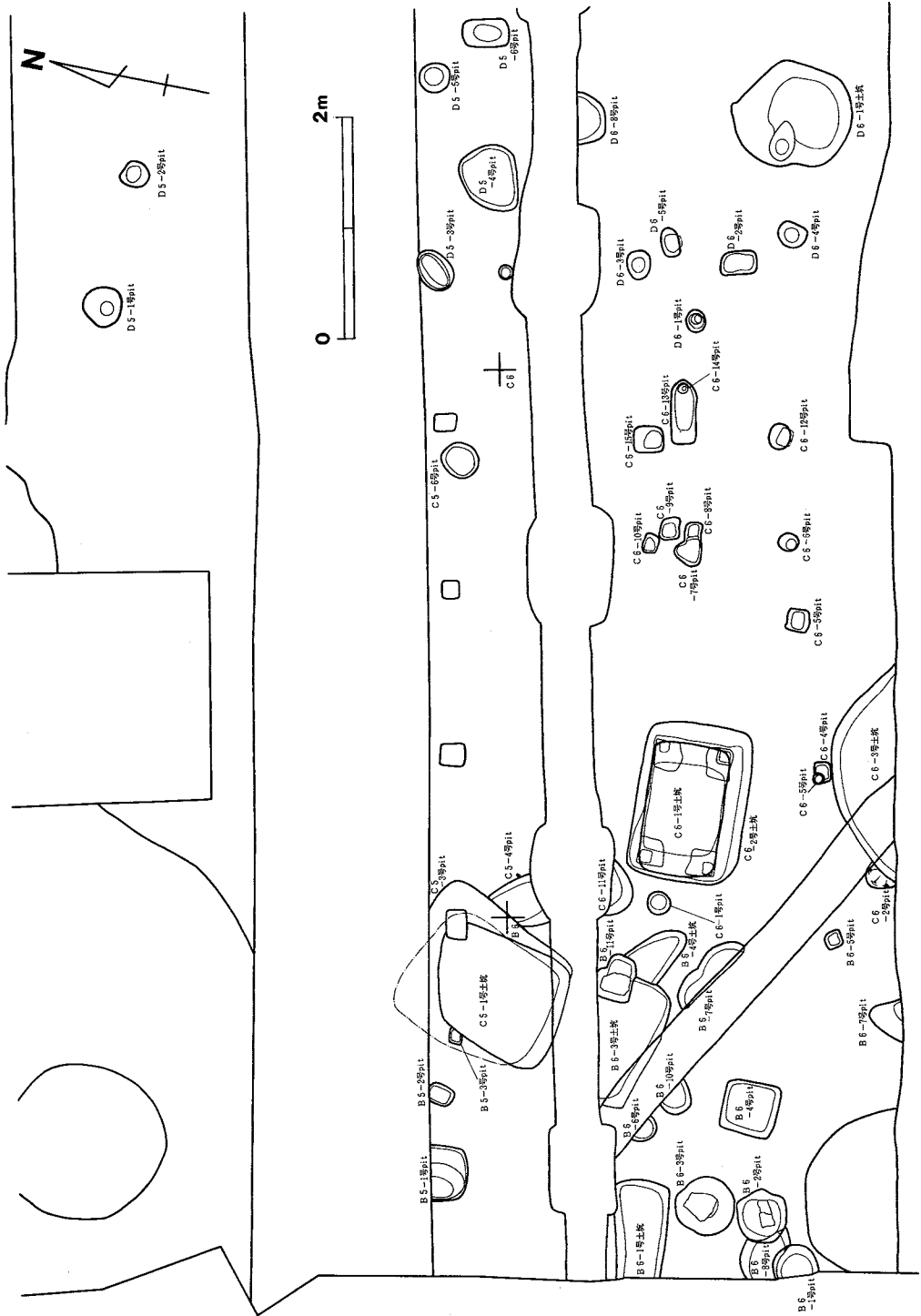
(大塚 達朗)



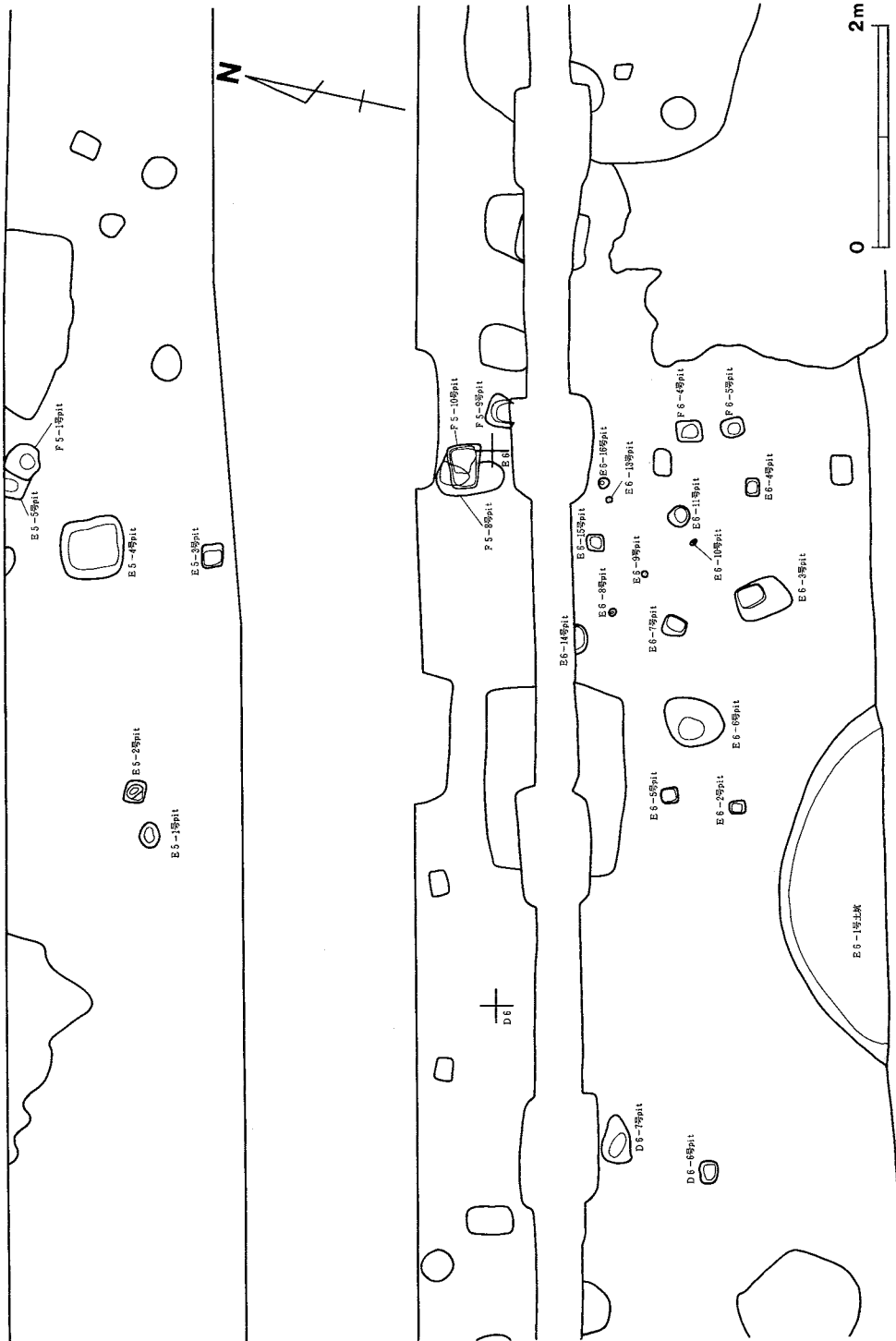
第28図 B~I = 2~6区の調査(1)



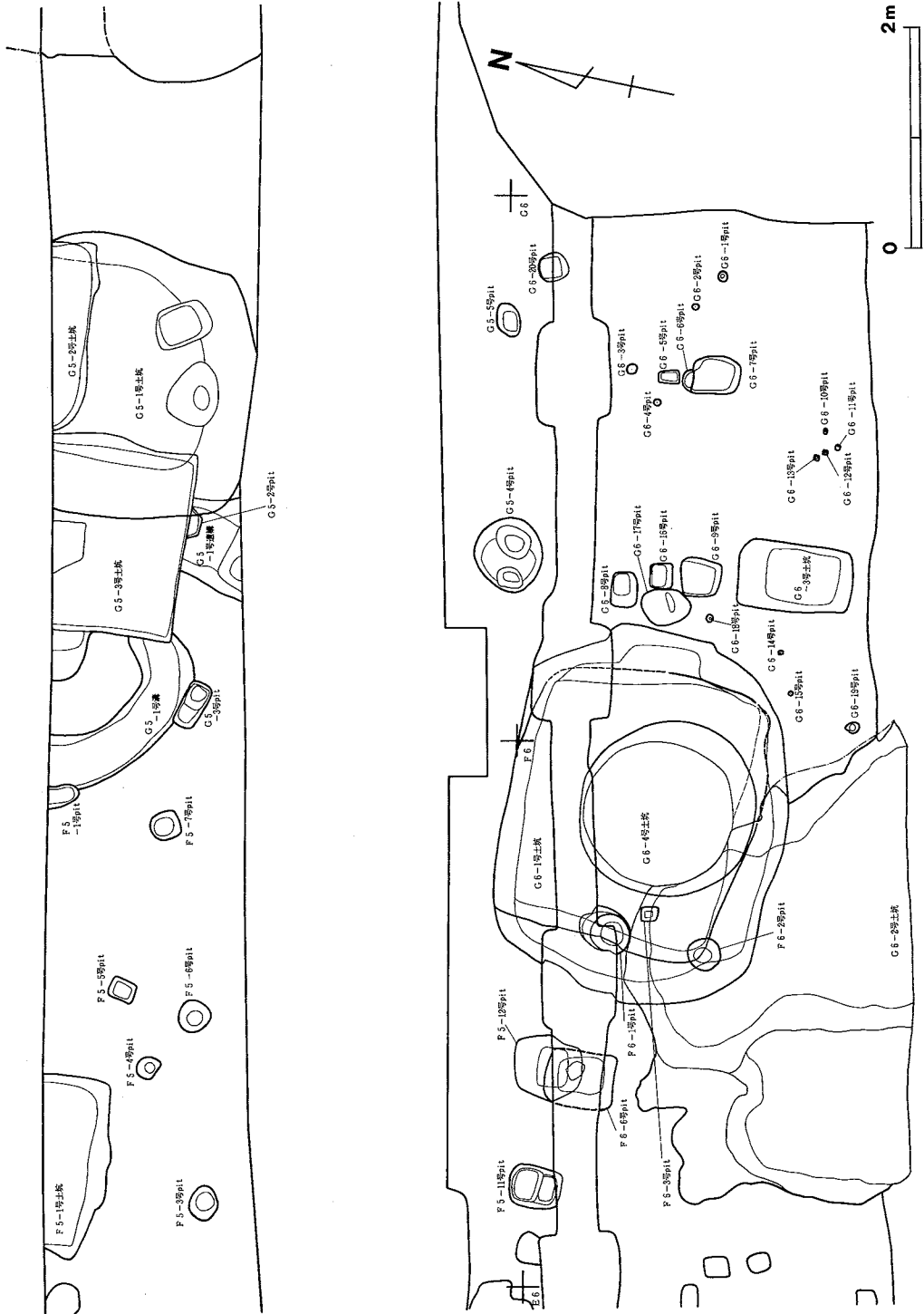
第29図 B～I=2～6区の調査(2)



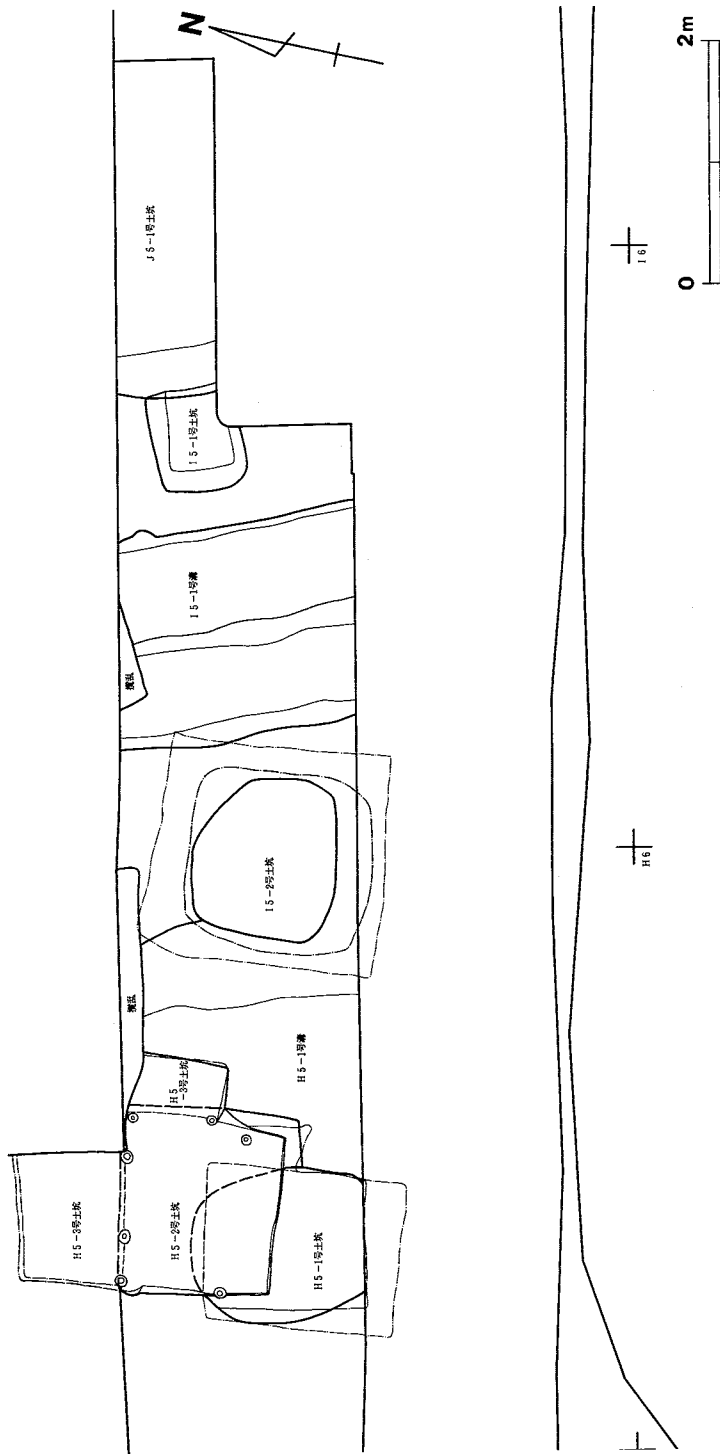
第30図 B～I = 2～6 区の調査(3)



第31図 B～I = 2～6区の調査(4)

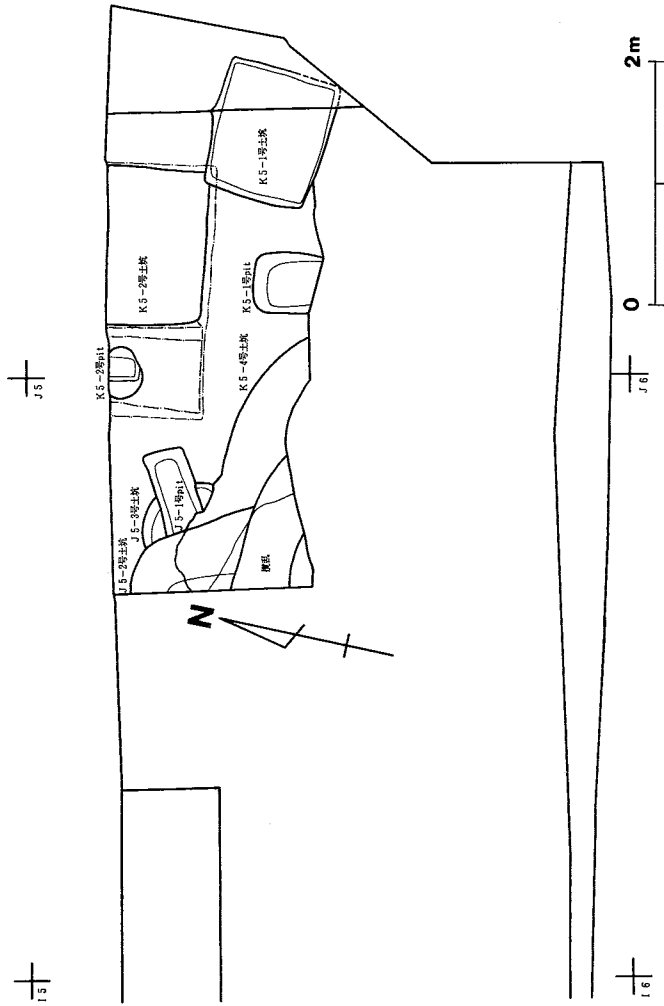


第32図 B ~ I = 2 ~ 6 区の調査(5)



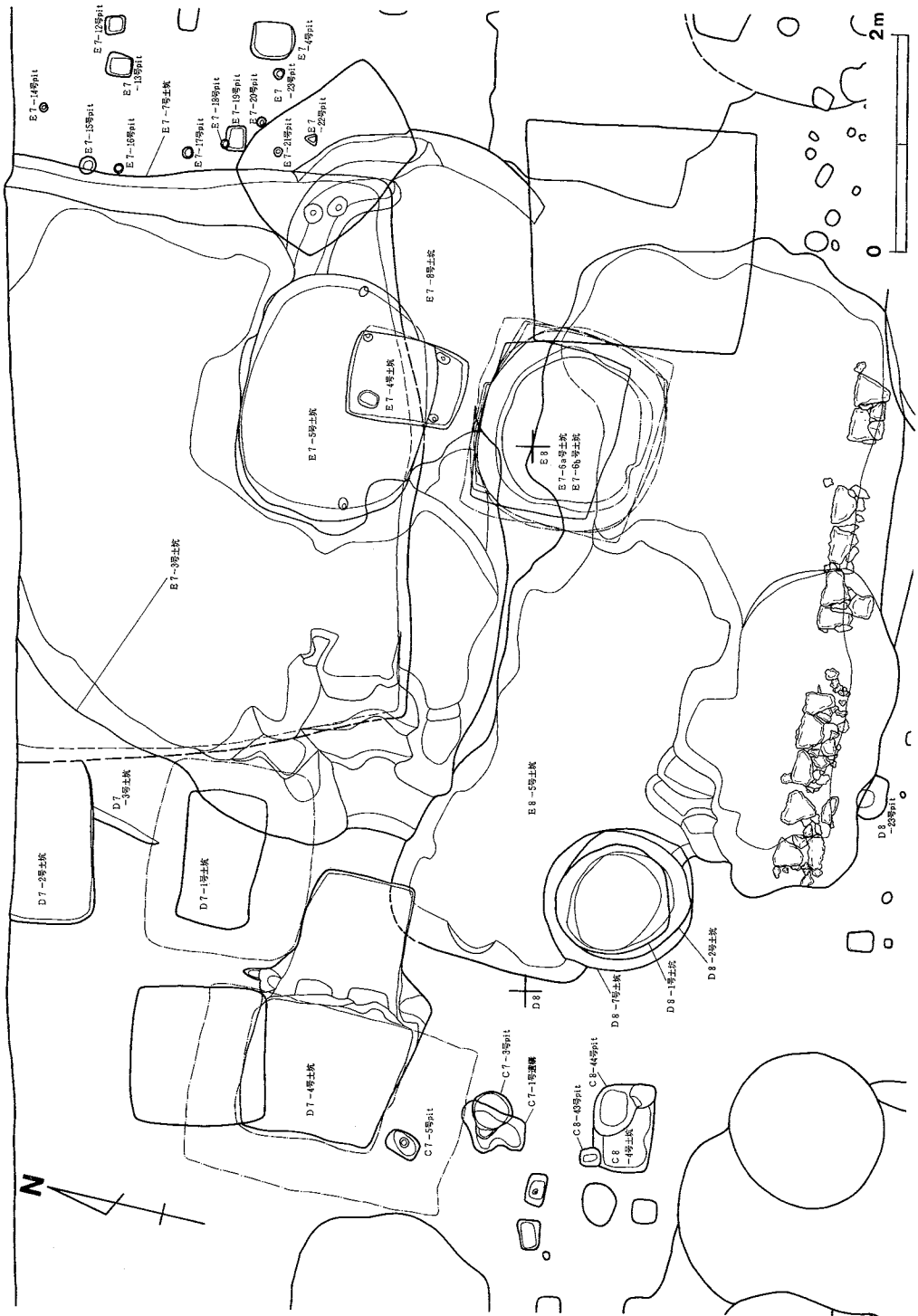
第33図 B～I = 2～6区の調査(6)



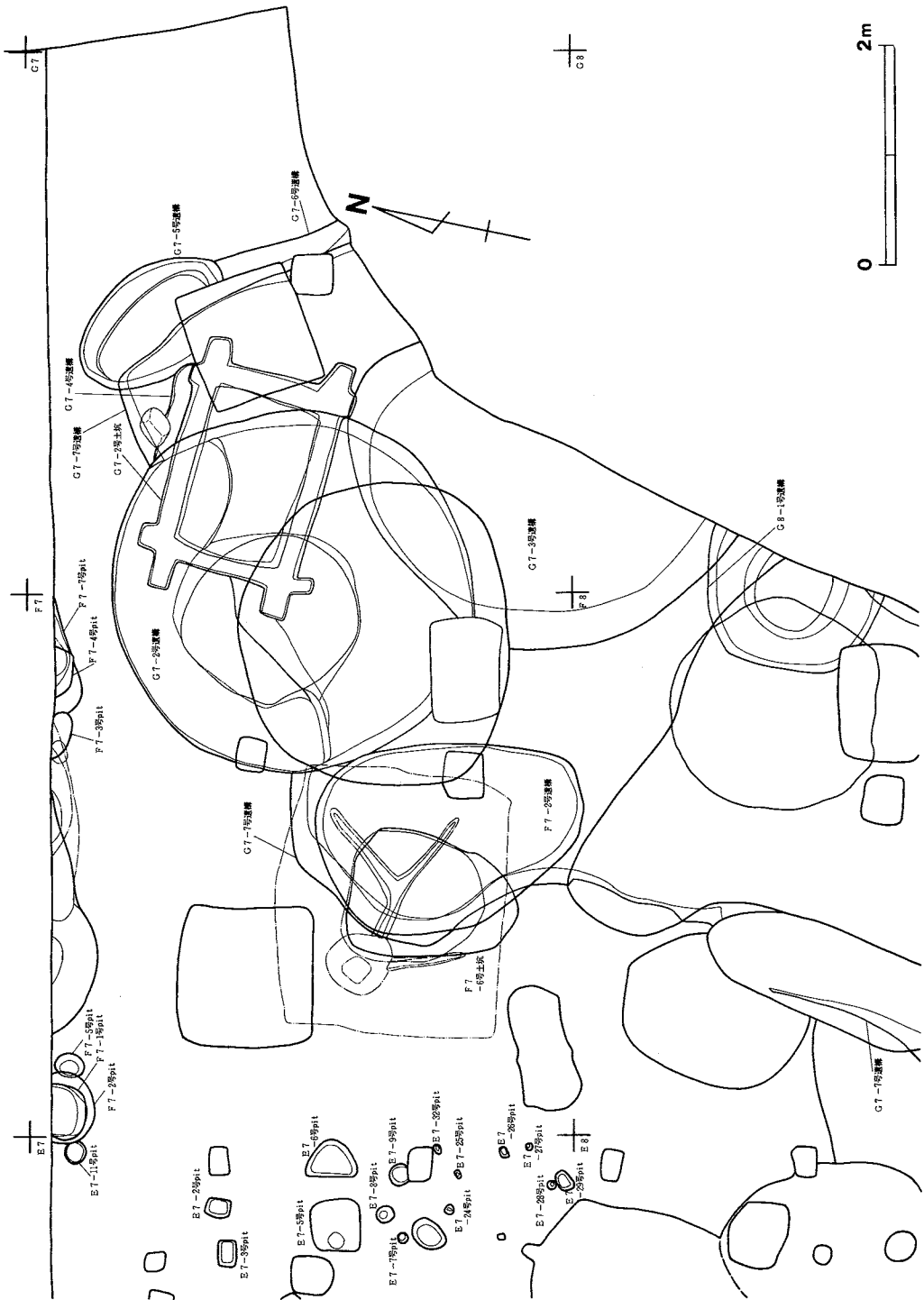


第34図 B～I = 2～6区の調査(7)

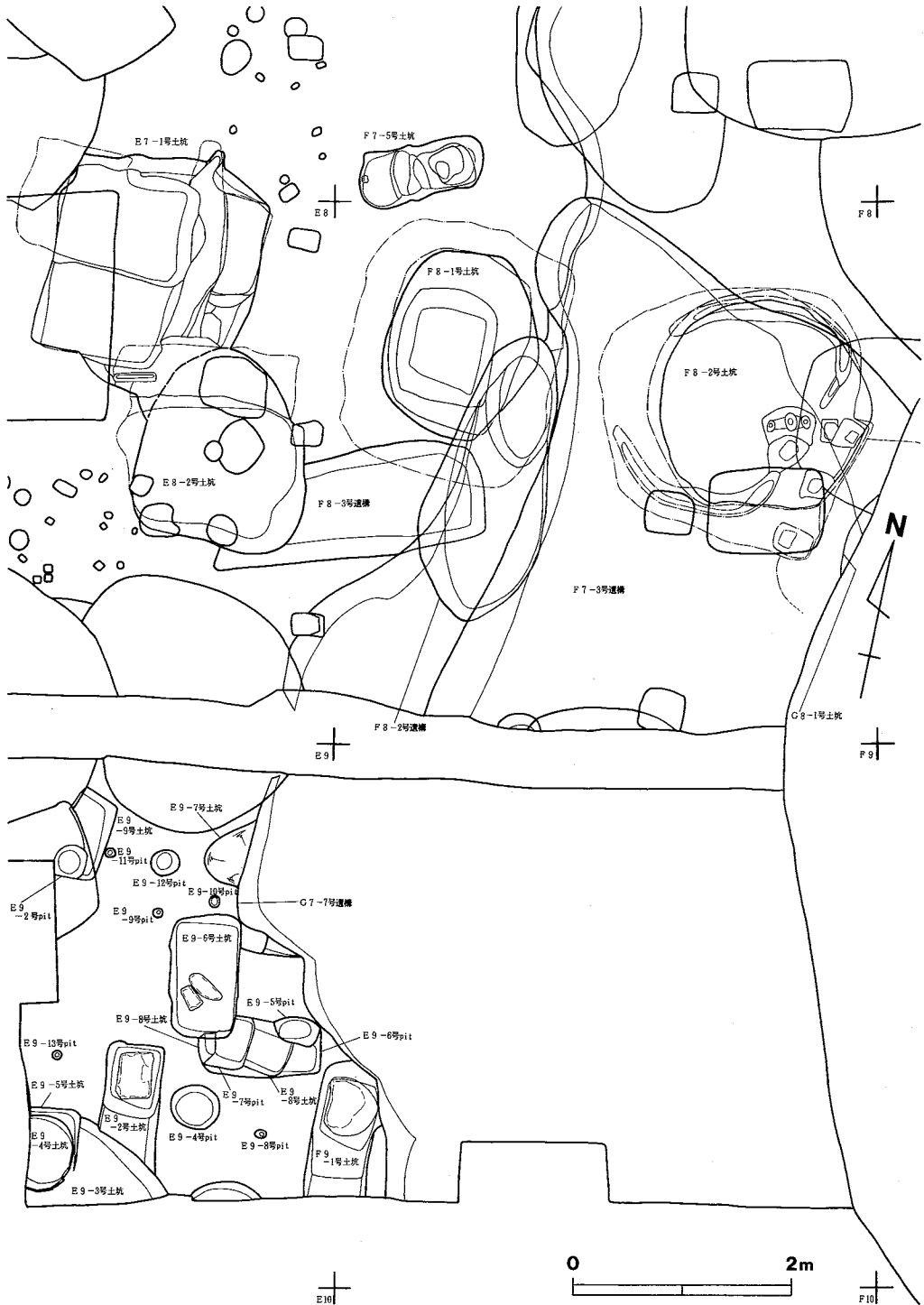




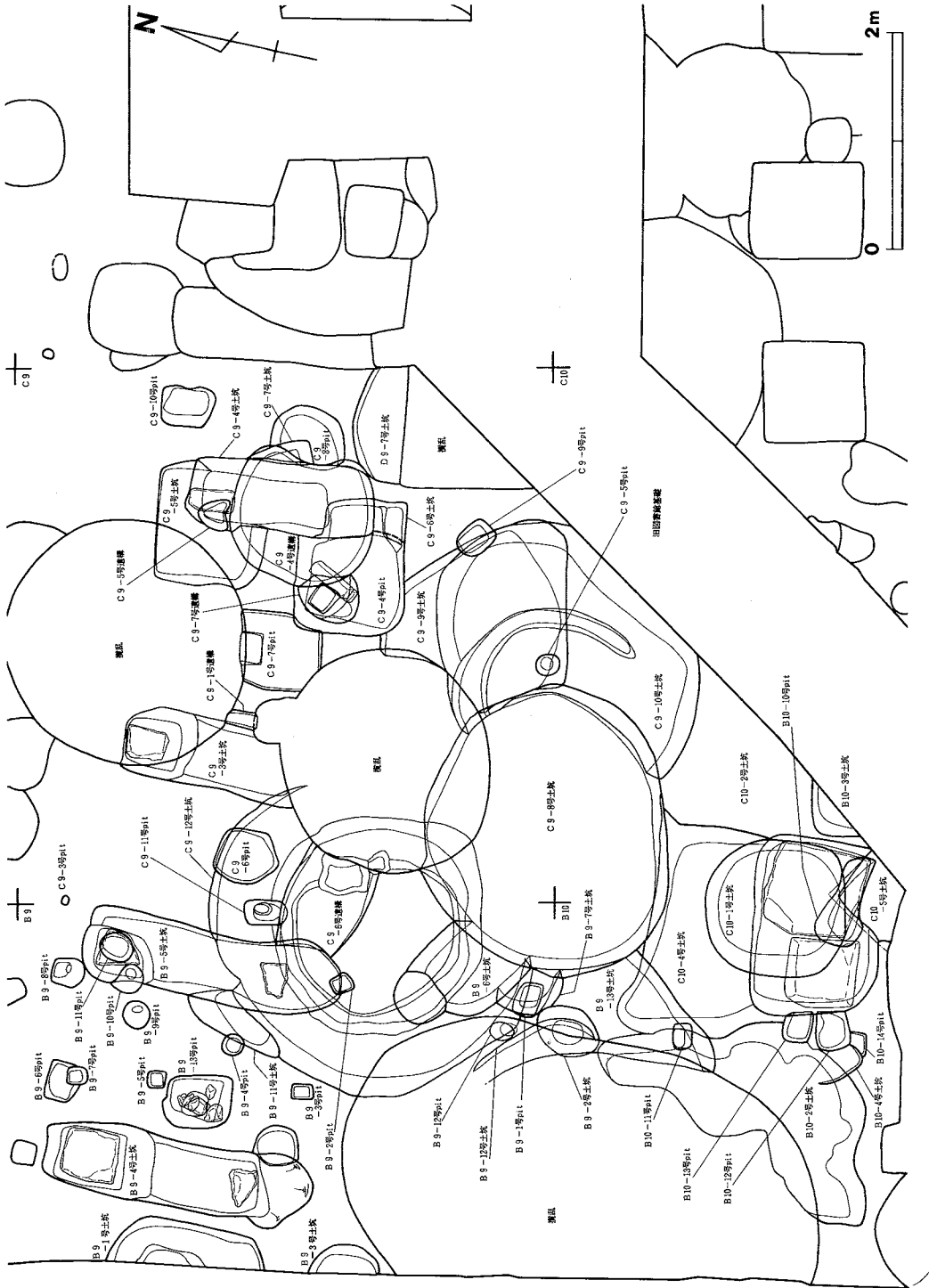
第36図 B~G=7~8区の調査(2)



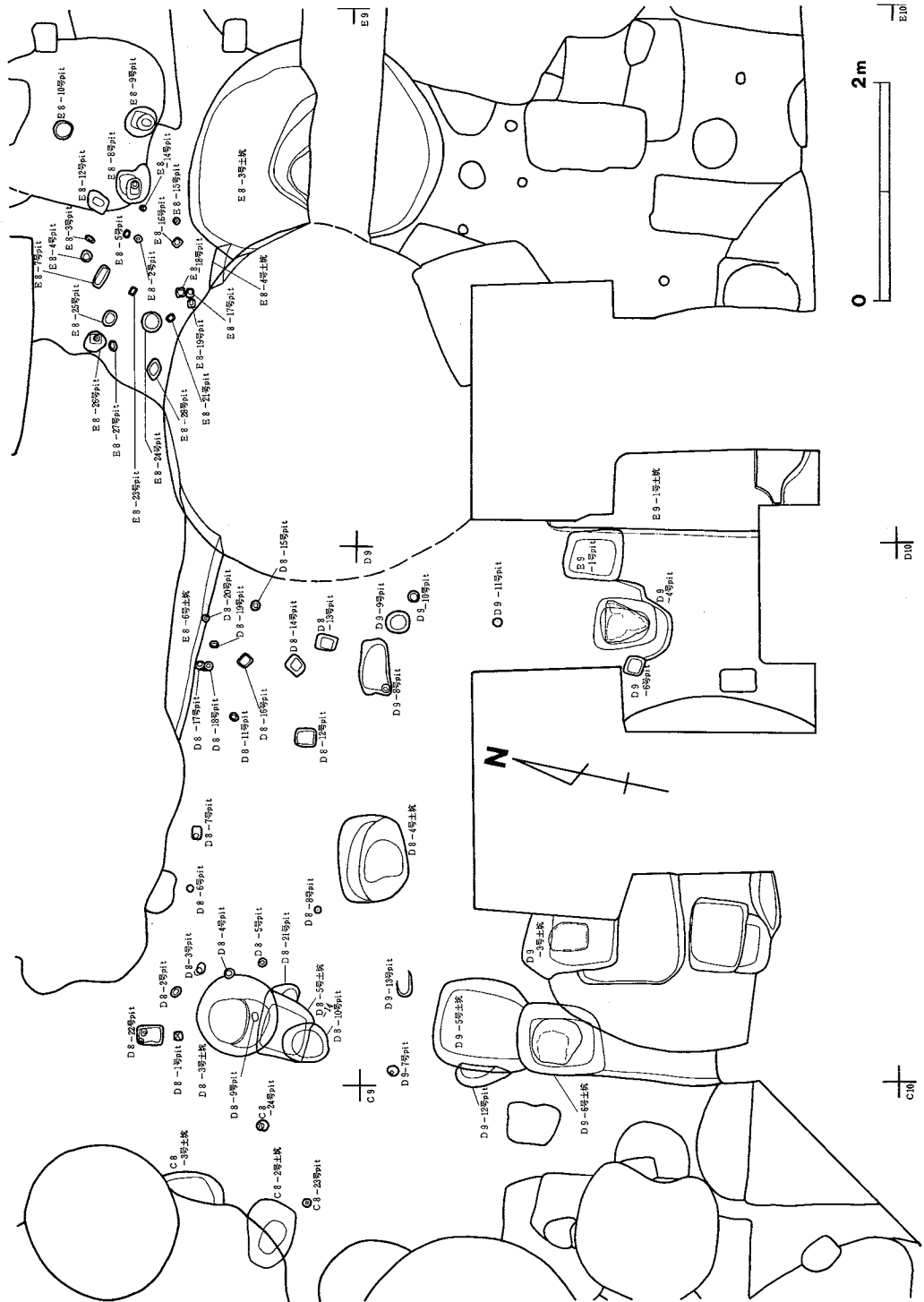
第37図 B~G=7~8区の調査(3)



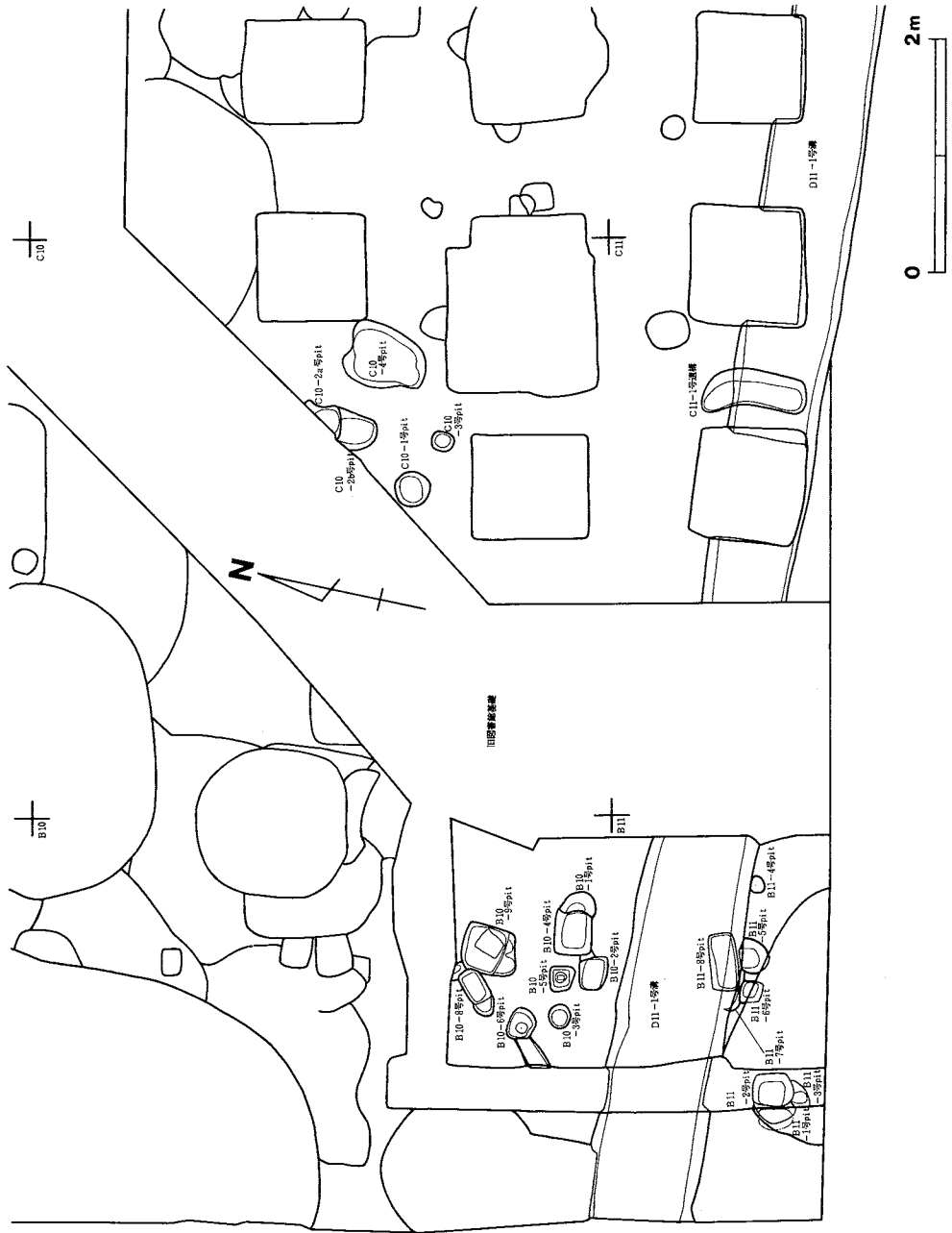
第38図 B~G=7~8区の調査(4)



第39図 B～H=9～11区の調査(1)

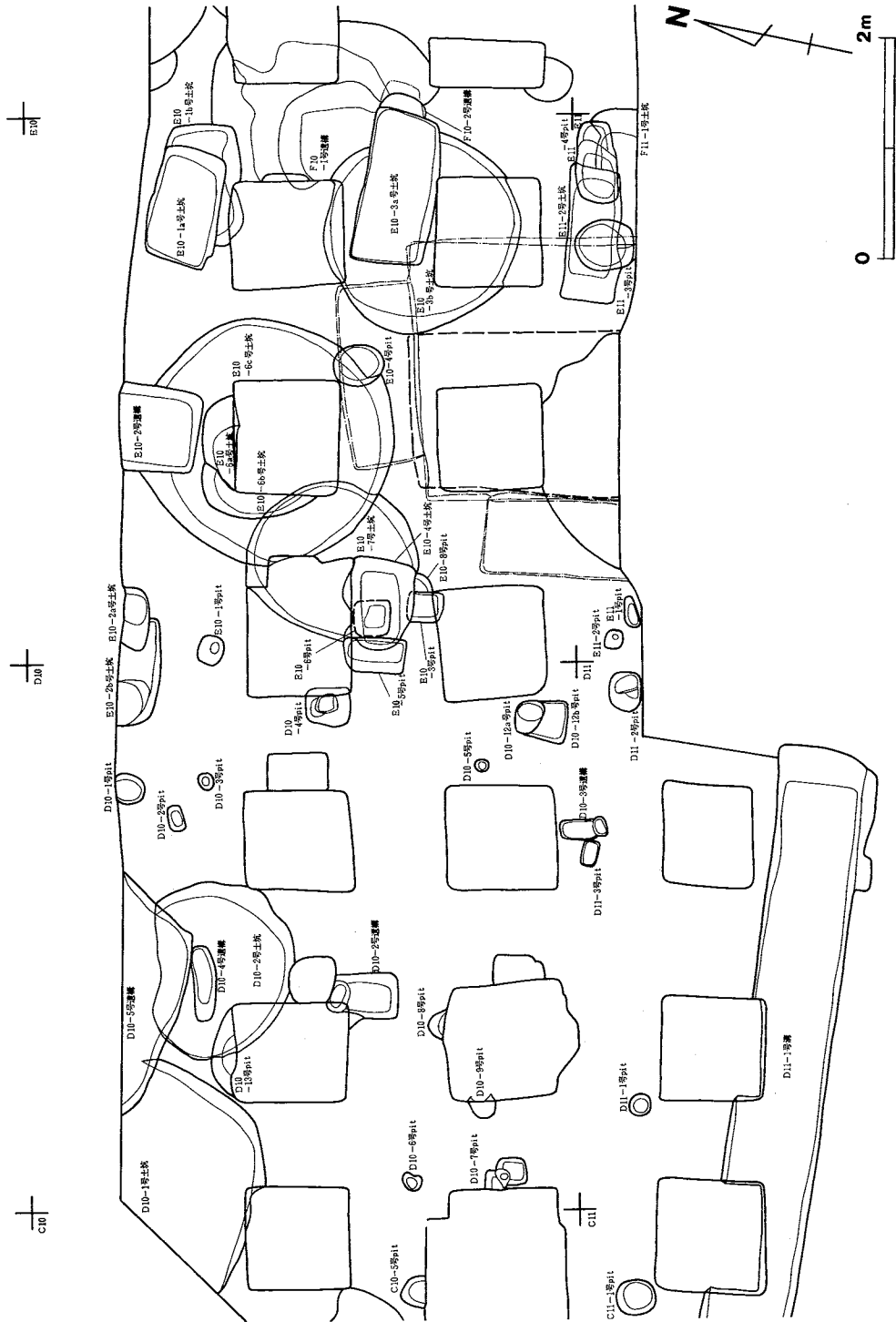


第40図 B~H=9~11区の調査(2)

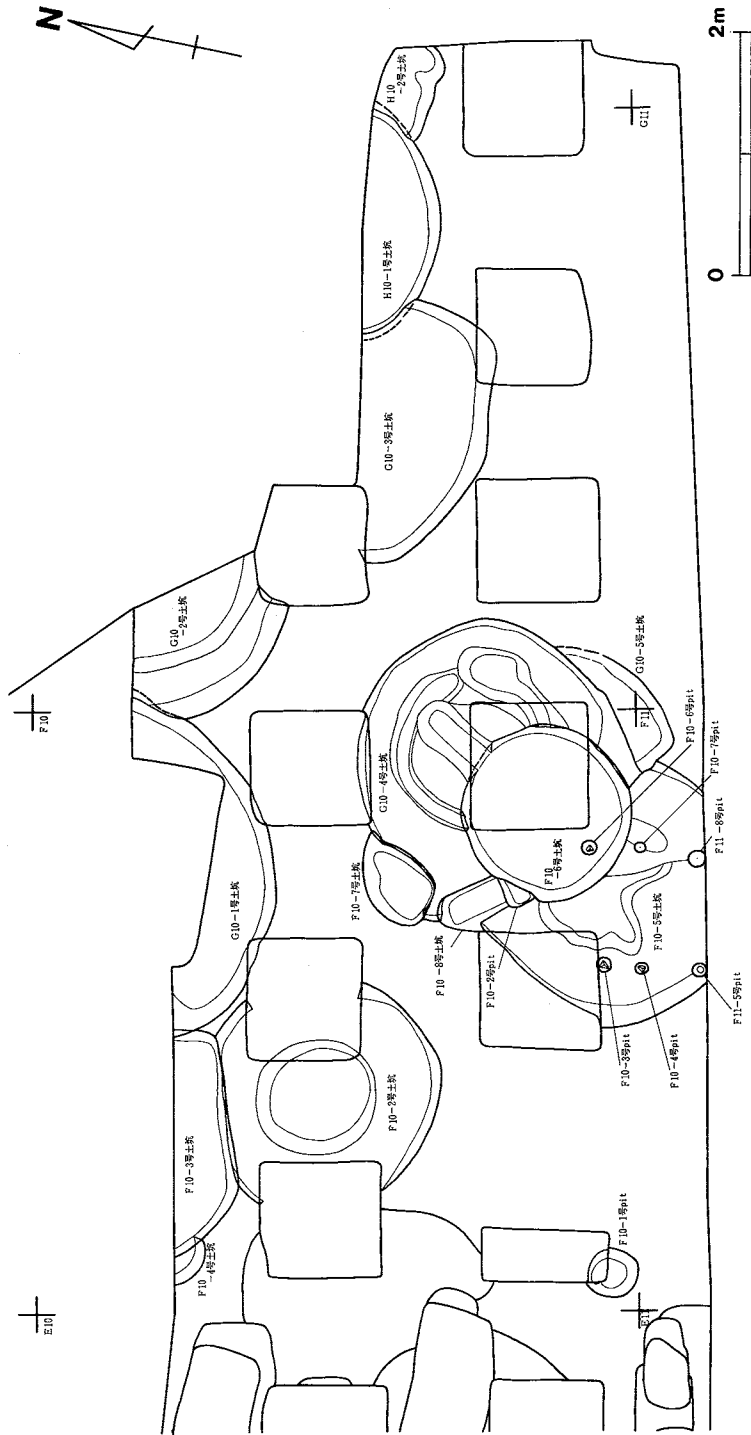


第41図 B~H=9~11区の調査(3)



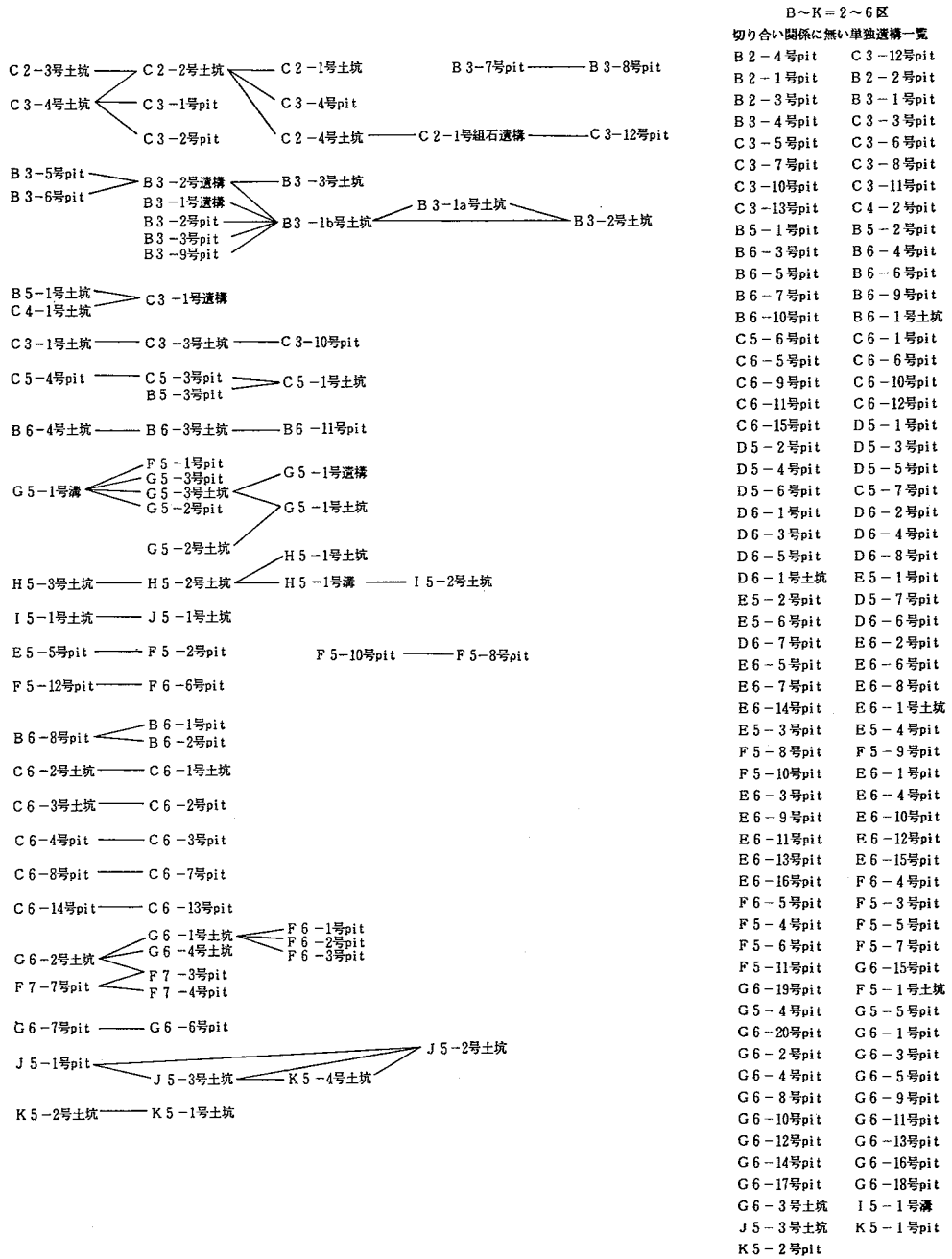


第42図 B～H=9～11区の調査(4)

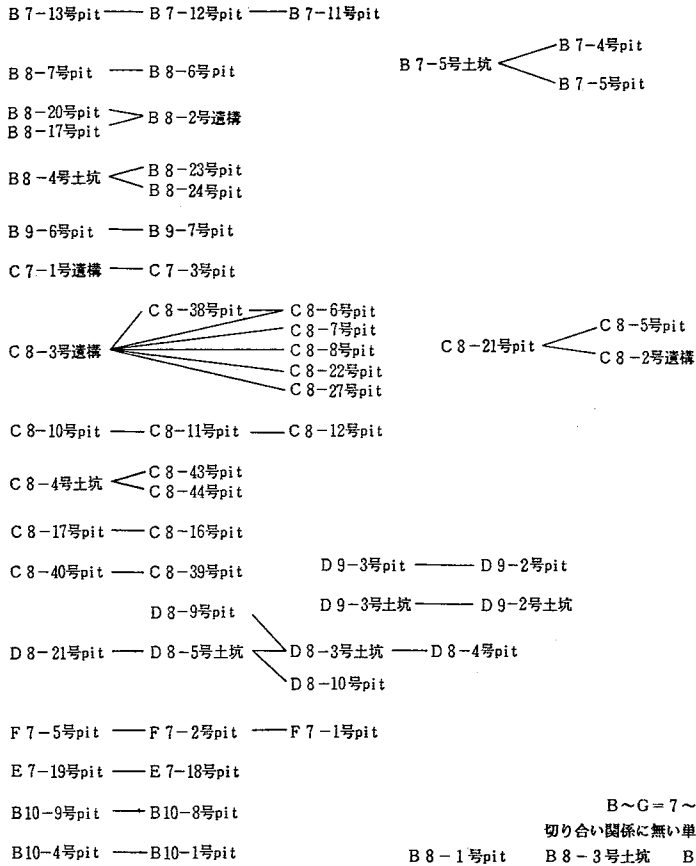


第43図 B~H=9~11区の調査(5)

報告篇第三章 江戸時代の調査 I



第44図 切り合い関係図(1)



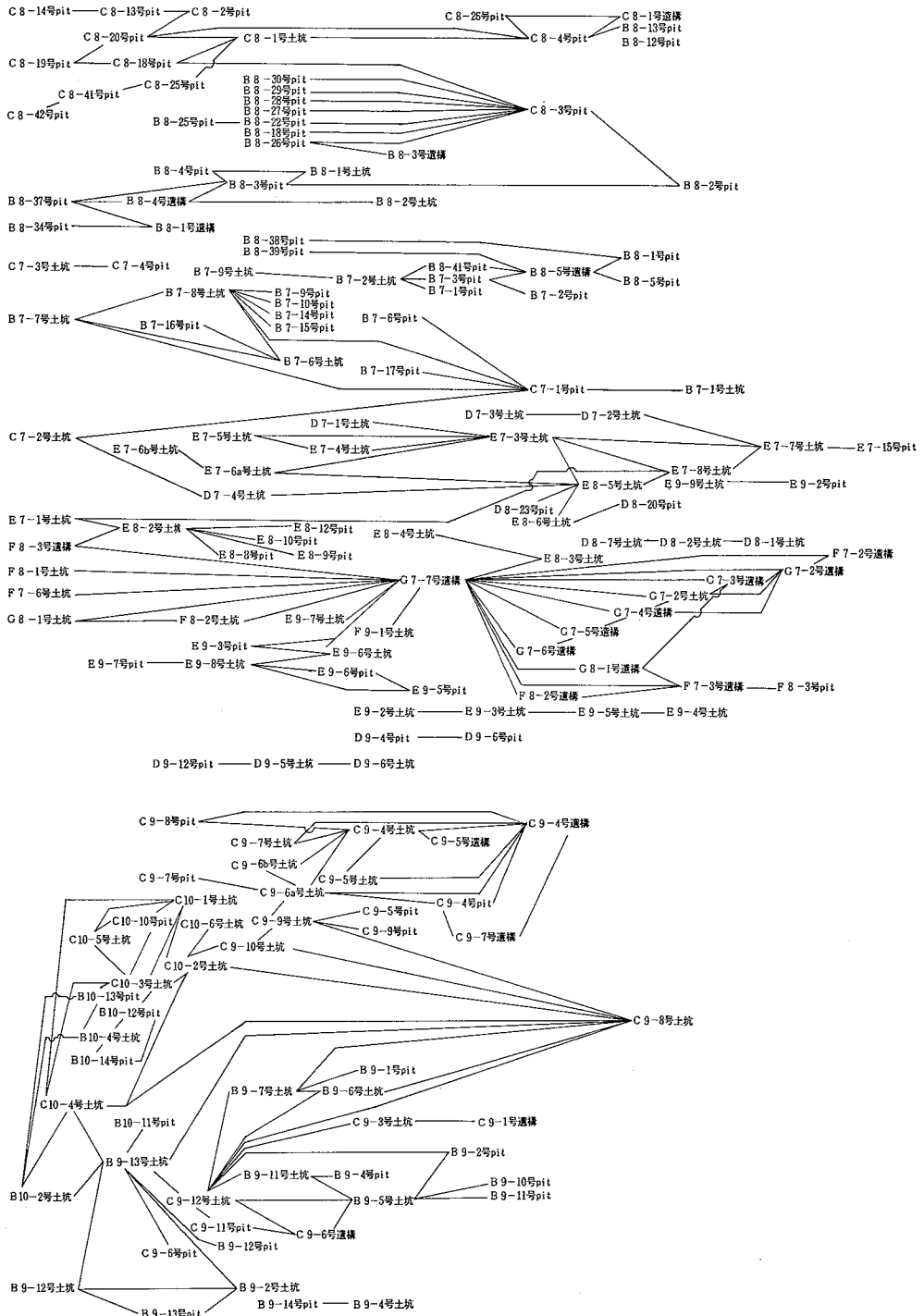
B~C=7~8区

切り合い関係に無い単独遺構一覧

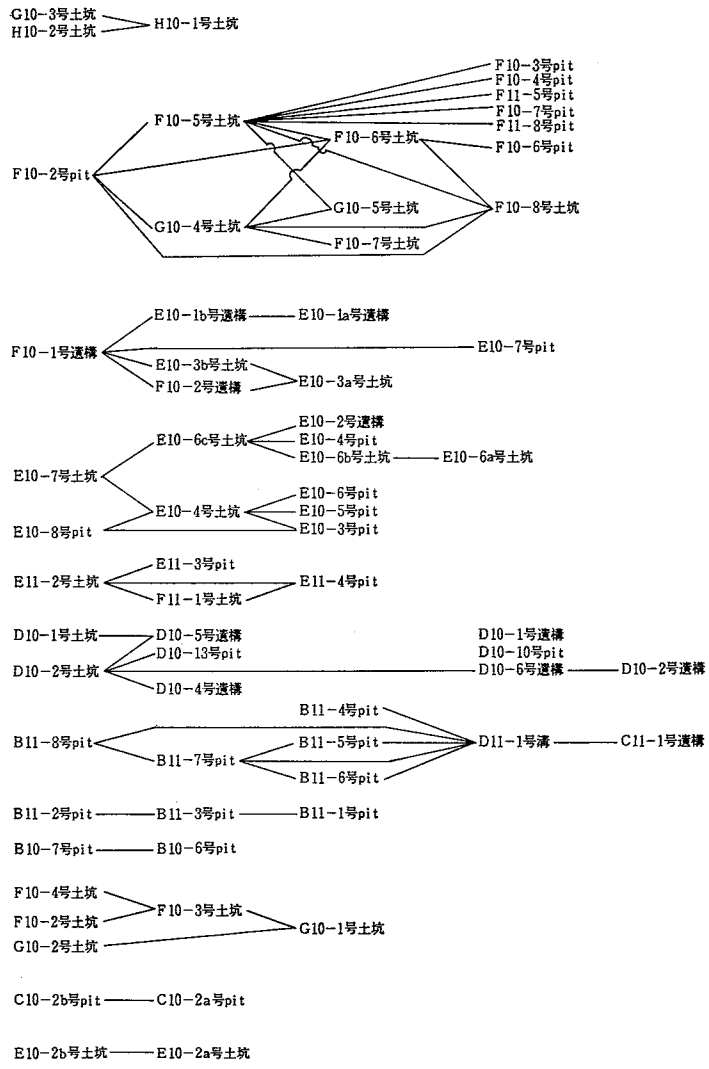
B 8-1号pit	B 8-3号土坑	B 8-5号pit	B 8-12号pit
B 7-4号pit	B 7-5号土坑	B 7-5号pit	C 8-5号土坑
C 8-2号遺構	C 8-5号pit	C 8-21号pit	B 7-2号pit
B 7-7号pit	B 7-8号pit	B 7-16号pit	B 8-8号pit
B 8-9号pit	B 8-10号pit	B 8-11号pit	B 8-14号pit
B 8-15号pit	B 8-16号pit	B 8-19号pit	B 8-21号pit
B 8-31号pit	B 8-32号pit	B 8-33号pit	B 8-35号pit
B 8-36号pit	C 7-2号pit	C 8-1号pit	C 8-9号pit
C 8-15号pit	C 8-28号pit	C 8-29号pit	C 8-30号pit
C 8-32号pit	C 8-33号pit	C 8-34号pit	C 8-37号pit
C 8-4号遺構	B 7-9号土坑	E 7-4号pit	E 7-12号pit
E 7-13号pit	E 7-14号pit	E 7-15号pit	E 7-16号pit
E 7-17号pit	E 7-18号pit	E 7-19号pit	E 7-20号pit
E 7-21号pit	E 7-22号pit	E 7-23号pit	C 7-2号pit
C 7-5号pit	F 8-3号pit	E 7-2号pit	E 7-3号pit
E 7-5号pit	E 7-6号pit	E 7-7号pit	E 7-8号pit
E 7-9号pit	E 7-11号pit	E 7-24号pit	E 7-25号pit
E 7-26号pit	E 7-27号pit	E 7-28号pit	E 7-29号pit
E 7-30号pit	E 7-31号pit	E 7-32号pit	E 7-33号pit
F 7-5号土坑	E 9-4号pit	E 9-8号pit	E 9-9号pit
E 9-10号pit	E 9-11号pit	E 9-12号pit	E 9-13号pit

第45図 切り合い関係図(2)

報告篇第三章 江戸時代の調査 I



第46図 切り合い関係図(3)



- B~H=9~11区  
切り合い関係に無い単独選構一覧
- B 8-16号pit
  - B 9-3号pit
  - B 9-5号pit
  - B 9-8号pit
  - B 9-9号pit
  - C 9-7号选構
  - C 9-3号pit
  - C 9-5号pit
  - C 9-9号pit
  - C 9-10号pit
  - D 9-7号土坑
  - B 9-4号土坑
  - B 9-1号土坑
  - B 9-3号土坑
  - B 9-14号pit
  - E 8-2号pit
  - E 8-3号pit
  - E 8-4号pit
  - E 8-5号pit
  - E 8-7号pit
  - E 8-8号pit
  - E 8-9号pit
  - E 8-10号pit
  - E 8-12号pit
  - E 8-14号pit
  - E 8-15号pit
  - E 8-16号pit
  - E 8-17号pit
  - E 8-18号pit
  - E 8-19号pit
  - E 8-21号pit
  - E 8-23号pit
  - E 8-24号pit
  - E 8-25号pit
  - E 8-26号pit
  - E 8-27号pit
  - E 8-28号pit
  - D 9-2号土坑
  - D 9-3号土坑
  - D 9-2号pit
  - D 9-3号pit
  - C 8-3号土坑
  - D 8-4号土坑
  - C 8-23号pit
  - C 8-24号pit
  - D 8-1号pit
  - D 8-2号pit
  - D 8-3号pit
  - D 8-5号pit
  - D 8-6号pit
  - D 8-7号pit
  - D 8-8号pit
  - D 8-11号pit
  - D 8-12号pit
  - D 8-13号pit
  - D 8-14号pit
  - D 8-15号pit
  - D 8-16号pit
  - D 8-17号pit
  - D 8-18号pit
  - D 8-19号pit
  - D 8-20号pit
  - D 8-22号pit
  - D 8-23号pit
  - D 9-7号pit
  - D 9-8号pit
  - D 9-9号pit
  - D 9-10号pit
  - D 9-11号pit
  - D 9-13号pit
  - D 9-5号pit
  - E 9-1号pit
  - E 9-1号土坑
  - B10-2号pit
  - B10-3号pit
  - B10-5号pit
  - C10-2号pit
  - C10-2号pit
  - C10-3号pit
  - C10-4号pit
  - C10-5号pit
  - C11-1号pit
  - D10-1号pit
  - D10-2号pit
  - D10-3号pit
  - D10-4号pit
  - D10-5号pit
  - D10-6号pit
  - D10-7号pit
  - D10-8号pit
  - D10-9号pit
  - D10-11号pit
  - D10-12号pit
  - D10-3号选構
  - D11-1号pit
  - D11-2号pit
  - D11-3号pit
  - E10-1号pit
  - E11-1号pit
  - E11-2号pit
  - E10-2a号土坑
  - E10-2b号土坑
  - E10-8号pit
  - E11-1号土坑
  - G10-1号土坑
  - C10-2号土坑
  - F10-3号土坑
  - F10-2号土坑
  - F10-4号土坑
  - F10-1号pit

第47図 切り合い関係図(4)

## 第二節 遺構各説

### (1) B~I= 2 ~ 6 区の遺構

#### C 2-1 号組石遺構 (第48図)

C 2-1 号組石遺構は、C 2-3・4 号土坑の西側を掘り込んで構築された遺構である。表土を除去した段階で、すでに幅 2 m にわたって焼土や石組が露出しており、調査は石組の明確な範囲を確定することから始まった。焼土は東西 2ヶ所に集中し、それを取り囲むように石組があることが理解され、すなわち石組は 2 基一対の竈であることが判断された。竈の石組は 2 段に積み上げられていたが、北側壁の観察によると西側の石組はさらにもう一段上にのり、3 段になっていた可能性もある。石組の石材は不整な形のものもあったが、ほぼ方形になるようノミもしくはタガネによって整形されていた。ただし大きさはそれぞれ異なっており、目的に応じて配置が考えられていたようである。例えば東西の竈とも、奥壁にはていねいなつくりの大型の石材を直立させて用いていたが、袖部などそれ以外では比較的小さく、形もあまり整っていない石材を横積みにし、2 段に重ねていた。また東側の袖部に使用されていた石材は細長く、直立させるには不適当なものであったが、下底面に一辺 0.5m の方形ピットを掘りこみ、このピットに石を埋置することによって、適当な高さに固定し直立させていた。さらにこのような石材の空き間や上面からは多量の粘土も確認されている。これらの粘土は石材間を繋ぐ接着剤としての役割を果たすものと考えられた。

石組および粘土の状況からすると、竈は当初から 2 基一対として構築されていたようである。東西の竈とも形態的に多くの類似点をもっていたが、細かに検討すると相違点も認められる。第一に組石の規模が、図でも判断できるように西側で大きく、従って燃焼部の規模も大きい。またそれぞれに焼土が認められたが、特に西側から良好に確認されており、厚い堆積を示していた。反対に東側では黒褐色土が混入しており、焼土は薄い堆積であった。使用頻度が東西の竈で異なっていたためかもしれない。なお、東側竈の焚口付近からは、炭化物塊も出土している。

石組を取り除いた段階での東西の長さはおよそ 2.5m をはかり、北側が調査範囲外であるので不明であるものの、確認された限りでの南北方向は西側で 1.4m、東側で 1.7m をはかる。両竈とも焚口から奥壁にかけて確認面からわずかに 0.2m の掘込みしかないが、全体的に浅い遺構であり、特に中央辺ではわずかな高まりも認められた。

C 2-1 号組石遺構からは、遺構内外よりピットも確認されている。すでに記しているように、遺構内からは石材を埋め込んだピットが、西側の奥壁に近い組石下部からは粘土・炭化物・焼土を覆土にもつピットがそれぞれ確認されている。ただ後者のピット上面にはローム土が張り込まれており、組石はこのローム土を覆うように積み込まれていた。はたしてこのピットが遺構に伴うものかは不明である。遺構外のピットとしては、深さ 0.4m の B 3-7 号、浅くピットかどうか

不明な B 3—8 号、および東側竈の南壁にある 0.4m の深さをもつ C 3—12 号ピットなどがある。これらのピットは一括して竈の上屋を構成する柱穴とも考えられたが、それぞれのピット間の形態や配列などから考えると、疑問が残る。

さて、この竈の構造については第 148 図が参考になろう（柳田國男『火の昔』（昭和 19, p155～162））。この図を注意して見ると竈の下部分が石材によって構築されており、さらに弧状に配列されている。石材の上には“黒い漆喰で塗り固められ”た竈が備え付けられてある。図は“五つ竈”となっているが、この図が掲載された昭和 19 年頃でも中部以西の“少し福々しい家”で用いられているとされ、おそらく図もこのような家の竈を模したものであろう。柳田は竈の変遷について一つ穴の竈からこのような形に発展したと述べており、また竈に改良を加えられ普及したのは近世以降であるということから、この点でも組石遺構は発展過程を示す貴重な資料と思われる。

出土遺物としては、遺構が浅いせいもありあまり見るべきものはない。瓦片は多数出土しているが、形態のわかるものは少なく、ただ瀬戸・美濃の灰釉壺の底部片が目されるのみである。他に焼土内より鉄器片が数点出土している。

このように遺構からは出土遺物が少なく、遺構の営まれた時期を明確にすることはできなかった。ただし C 2—3・4 号土坑を掘り込んでいること、“炊事場”とする観点から比較的新しい時期の遺物が出土した B 3—3 号もしくは C 3—4 号土坑（井戸）との関連が考えられ、さらに竈の構造などからも、この遺構は近世後半期に位置づけてよいようである。（佐々木 彰）

#### C 2—1 号土坑（第 50 図）

プラン確認の段階では C 2—2 号土坑と同一遺構と考えられていた C 2—1 号土坑は、サブトレンチによる覆土の堆積状況の検討から、それとは異なった土坑であることが確認された。

形態その他は、覆土同志の切り合い関係にあるため判断が難しく、特に下層ではそれが顕著であった。このため明確ではないが、平面形は南北方向に長く、南側でやや不整な隅円方形を想定している。規模は南北で 1.6m、東側が調査範囲外であるため明確ではないが、ほぼ 0.8m 前後をはかると推定された。底面は 2 段に構築されているようであり、北側で深く、南側で浅いらしい。確認面より、深さはだいたい北側で 0.4m、南側で 0.2m をはかる。さらに、壁の状況は北側では明瞭な立ち上がりを示していたが、南側のそれはゆるやかな立ち上がりを示す。

覆土は黒褐色土を基調とし、それに炭化物が多量に混入する土層からなっている。特に上層の一部分には炭化物層が認められる。下層では焼土も混入する。

C 2—1 号土坑は C 2—2 号土坑と切り合い関係を持ち、さらに調査当初は C 2—2 号土坑と同一と考えられていたために、遺物の取り上げに問題が残った。事実、出土した陶磁器類の接合関係を検討すると、C 2—1～4 号土坑間で接合する陶磁器類が多かった。

C 2—1 号土坑出土と思われる陶磁器類のなかでは、肥前の染付皿、瀬戸・美濃の天目茶碗、京焼系の色絵皿などが注目された。ただし、天目茶碗は 2 号土坑との南側境付近から出土しており、



2号土坑出土の可能性もある。その他には、肥前の三島象嵌の鉢・仏匱具、志野系の碗、肥前系色絵合子の蓋の破片がそれぞれ出土している。瓦は、小片がわずかに確認されているのみである。

(佐々木 彰)

#### C 2-2号土坑 (第50図)

C 2-2号土坑は、C 2-1号組石遺構調査時にすでに確認されていた土坑である。最初、単一の土坑を想定していたが、サブトレンチの段階でこの周辺から4基の土坑が重複して確認された。土坑はC 2-1号土坑・C 3-4号土坑によって掘り込まれていたが、C 2-3・4号土坑を掘り込んで構築されている。

東側が攪乱のため判然としないものの、平面形は南北にやや長い不整な円形を描くようである。規模は南北で2.4m、東西で推定2.3mをはかる。深さは下底面で凹凸があり、一様ではないが、中央部分で確認面より約0.3mをはかっている。さらに下底面北側からは、明確にそれと分かる落ち込みが見られた。落ち込みの深さは5～10cm程度である。

覆土は大きく2層に分けられるが上層(3層)は黒褐色土を主体とし、下層(6・7層)はローム土を主体とした土層である。上層には炭化物・焼土なども混入する。下層からは、粘土(4層)さらには焼土のみによって構成される土層(5層)も確認されている。

C 2-2号土坑出土の陶磁器および瓦類は、遺構が大きいこともあって多量に出土している。C 2グリット確認の土坑間における陶磁器の接合関係の存在については、C 2-1号土坑の項で述べているが、このC 2-2号土坑を中心とした関係でとらえられるらしい。例えば、赤絵合子の身部の場合、主要な破片はこの土坑から出土しているが、これと接合する破片はC 2-1・3号土坑から出土している。それ以外の主要な陶磁器としては肥前系の白磁碗、白磁小坏、染付仏匱具、瀬戸・美濃の御深井釉の蓋、鉄釉尿瓶などがあげられる。さらにC 2-1号土坑出土のものと同接合関係をもつ土師質の火鉢なども出土している。

瓦類もC 2-2号土坑から多量に出土している。主要なものとしては、軒丸瓦瓦当部、丸瓦、軒平瓦、平瓦などの半完形品があげられる。

(佐々木 彰)

#### C 2-3号土坑 (第50図)

C 2-3号土坑は、C 2-4号土坑同様、C 2-1号組石遺構の下底面精査の際に確認された土坑である。C 2-1号組石遺構、C 2-2号土坑によって掘り込まれている。この周辺では、最も古い土坑である。

C 2-3号土坑は、土坑北側が調査範囲外にあたるため、判明しているのは南側の一部分のみである。このため、平面形は推測の域を出ないが、隅円方形と考えられる。規模は東西方向で約2.7m、南北方向は不明である。ロームを掘り込んで構築されている底面は、C 2-2・4号土坑同様比較的平坦であり、確認面より深さ0.6mをはかる。立ち上がりは垂直に近い。このC 2-3号土坑を重複している他の土坑と比較すると、平面形が方形を示すらしいこと、底面が平坦であること、立ち上がりがはっきりしていること、また次に述べる覆土とともに相違点が認められる。た

だしこの違いが、C 2-3号土坑の用途、性格等の違いを示すものかは不明である。

覆土は3層に分けられるが、大部分はロームを多量に混入する黒褐色土である(8層)。ただロームも含むが黒褐色土を主体とした土層(9層)が底面近くに堆積しており、この堆積が他の土坑群とは異なっている。

C 2-3号土坑は比較的瓦の出土が豊富であったが、それと反対に陶磁器類の出土が少ないことが特徴的であった。その中でも瀬戸・美濃の灰釉菊皿の底部片、ほぼ完形の土師質の皿、C 2-1および、2号土坑出土のものと同一体と思われる瓦質火鉢の底部片、C 2-4号土坑出土の破片と接合関係を持ち、かろうじて全体の器形がわかる信楽系の播鉢などが比較的重要なものとして示される。

これに対して瓦類の出土は豊富である。しかし大型の破片は少なく、軒丸瓦の瓦当部、丸瓦部の出土が目立った程度である。 (佐々木 彰)

#### C 2-4号土坑 (第50図)

C 2-4号土坑は、C 2-1号組石遺構精査の際にすでに確認されていた土坑である。C 2-3号土坑同様、この周辺で最も古い土坑の一つである。

この土坑は2つの遺構によって掘り込まれており、形態・規模等は判然としないが、平面形は南北に長い楕円形を示すものと考えられる。推定の規模は南北1.3m、東西0.8mである。図では一応底面として示しているが、平坦な面はなく、中央より急な立ち上がりを示す。確認面より最も深い部分までの深さは0.5mをはかる。

覆土で主体となる土層は、炭化物・焼土・粘土・ロームなどを混入する黒褐色土(11層)である。下層からは、粘土(12層)やローム土(13層)も確認されている。

C 2-4号土坑は小規模な遺構であり、従って陶磁器などの遺物出土量はあまり多くはない。その中でも比較的重要な遺物として、ほぼ器形のわかる肥前の緑釉皿、口縁部を欠くがほぼ完形の肥前の緑釉碗、C 2-3号土坑出土の破片と接合関係をもつ半完形の瀬戸・美濃の鉄釉小壺等を示すことができる。なお寛永通宝も1点出土している。

瓦類の出土も少なく、わずか13点のみの出土であるが、大型の破片のものが多く、特に瓦当面に三巴文を配したほぼ完形の軒丸瓦、梅鉢文を配した半完形の軒丸瓦などが目立っている。

(佐々木 彰)

#### B 3-1 a号土坑 (第51図・52)

B 3-1 a号土坑は、B 3グリッド全面に広がる黒色土を精査している段階で、すでにB 3-1号土坑、B 3-1号遺構などと平面プラン上で漠然とながら区別され、調査当初よりその存在が予想されていた。しかし、B 3-1 bおよび、B 3-2号土坑との重複関係までは判断できずに、単一の土坑として覆土を除去する結果となってしまった。これら3基の遺構群は、土層の堆積状況から判断して、B 3-1 b号土坑が最も古く、B 3-1 a号土坑、B 3-2号土坑と新しくなることが理解できる。

この土坑は、方形プランのB 3-1 b号土坑の東・南側の壁を利用して構築された遺構である。従って、確認面での平面形は一边が1.7m 前後の比較的整った方形であった。壁は西側でやや傾斜をもつものの、ほぼ垂直な立ち上がりを示している。遺構の上方ではB 3-1 b号土坑と重複しているため、壁面の状況は不明であるものの、下方はローム土を掘り込んでいるため比較的明らかであり、縦方向の鑿もしくは鑿痕が顕著であった。土坑は非常に深く、確認できただけでも深さは遺構確認面より約3.5mをはかる。しかし、安全性の配慮からこのレベルで調査を断念しなければならず、従って底面までの深さは不明とせねばならなかった。

この土坑の性格として、井戸としての可能性を考えているが、B 3-3号土坑およびC 3-4号土坑の平面形が円形もしくはそれに近い形状であるのに対し、この土坑のそれは方形であり、しかもB 3-1 b号土坑を利用しながら、さらにそれを掘り込んで構築している。すなわち、これらの様相は他の井戸跡と異なり、井戸の可能性は強いものの、断定することはためられた。

覆土は34層を境として大きく2つに分けることができる。上層の特徴として19層から32層にかけての黒褐色土とローム土との互層による縞状の堆積があげられる。土層は全体的にやわらかく、遺物もそれほど多くはない。34層のような覆土中層からは、上層よりの崩落と思われるロームブロックも散見される。

34層以下は、暗褐色土を主体とした土層である。18・20層のように焼土を混入する土層も確認されている。暗褐色土中には、ロームやロームブロックも多量に確認されている。

この遺構からは、遺物はそれほど多く出土していない。覆土最上層からは、半完形の肥前の青磁香炉が出土している。その他の出土としては、砥石の破片が目撃された程度であった。

(佐々木 彰)

### B 3-1 b号土坑 (第51図・52)

B 3-1 b号土坑は、B 3-1 aおよびB 3-2号土坑によって掘り込まれたいわゆる地下式土坑である。調査中、しばらくはB 3-1 a号土坑と同一の遺構であると考えられていた。

調査された土坑の平面形は、一边が2 m内外の方形であり、深さは確認面より1.9mをはかる。土坑北側を除く壁は、ほぼ垂直な立ち上がりを示しており、ていねいな縦方向への鑿・鑿痕がみられる。B 3-1 a号土坑によって、土坑中央部のほとんどが破壊されており、周辺の観察のみであるが、この状況は下底面も同様であり、やはり鑿・鑿によるきれいな整形が行なわれていた。さらに、この土坑北側では、ロームを削り出した張り出しも観察されている。張り出しの部分は崩落してすでないが、北側壁および東・西壁の一部分ではその痕跡が明瞭である。ただ、北・東側ではそれが明確であるのに対し、西側ではそれほど明確ではない。張り出しはどの程度南側に広がっていたのかは不明であるが、厚さは痕跡から判断して0.5m前後と推測される。

覆土はB 3-1 a号土坑をはさんで東西で大きく異なっている。B 3-1 a号土坑東側では、44・45層のようにほとんどロームブロックからなる土層が見られる。壁づたいに入り込んだ根による浸食をうけ、壁が部分的に崩落した痕跡であると考えている。西側でも48層を中心にローム

ブロックが確認されているが、これは張り出し部分が崩落した際に剥落したロームブロックであると考えられた。その他、層中より炭化物・灰を多量に含んだ暗褐色土も確認されている。

B 3-1号土坑は、当初B 3-2号土坑と同一の遺構であると考えられていたために、遺物のとり上げに問題が残った。その中でも、確実にこの遺構に伴う重要な遺物として、北東隅の下底面近くから出土した完形に近い瀬戸・美濃の鉄釉播鉢が示される。それ以外は、B 3-2号土坑に伴う可能性もあり、確実ではないものの、瀬戸・美濃の灰釉丸碗、鉄釉香炉、御深釉の鬘盥、肥前としては染付蓋などが出土している。しかし、いずれも半完形品もしくは大型破片としての出土であった。それ以外にもこれらの大型破片に混じり、瀬戸・美濃の灰釉碗の小片が多数出土している。

瓦も多数出土しているが、先に述べた理由によって、この土坑に伴うものかは明らかではなく、しかも小片の出土が多かった。その中で比較的重要なものとしては、梅鉢文を瓦当面に配した軒丸瓦、同じく巴文を配した軒丸瓦、さらに瓦当面に刻印をもつ軒平瓦・軒棧瓦、側面に文様をもつ熨斗瓦などが注目されている。

(佐々木 彰)

### B 3-2号土坑 (第51図)

B 3-2号土坑は、B 3-1 a号土坑、B 3-1 b号土坑を掘り込んでいる土坑である。

土坑は遺構のほとんどが調査範囲外にあるため、形状等については不明な部分が多い。確認できたのは、北・東の壁の一部分である。壁の形状から判断すると、B 3-1 a号土坑、B 3-1 b号土坑と同様に、方形もしくは方形に近い平面形をもつ土坑としてとらえたが、規模等についても不明な部分が多い。深さは約2.7mをはかる。さらに、遺構北側の壁際から深さ10cmの溝および東側壁から2段の屈曲部も認められている。屈曲部は、確認面より1.1mおよび2.2mのところで認められた。東側壁の場合、B 3-1 a号土坑、B 3-1 b号土坑の覆土を掘り込んでいるので、北側壁のように垂直に掘り込めず、このような屈曲部をつくりだしたのかもしれない。

覆土は大きく3層に分けられる。上層は2層のローム土によって特徴づけられる。小さなロームブロックを主体とした層であり、遺物等をあまり含まない。しかし、この土層の存在によって3基の土坑の切り合い関係の把握が可能となり、重要な層となった。中層は、灰・焼土・炭化物・ローム土などを混入した暗褐色土である。特に8層で灰が多く確認されているが、これは灰を内部にもったままの火鉢が多く確認されたことにもよっている。火鉢以外に、この層を中心として陶磁器類・貝類も多く確認されている。下層は灰・焼土もわずかに確認されているものの、ローム土を主体とした暗褐色土から構成されており、遺物は中層に比べ少なくなっている。

遺物は中層を中心に豊富である。完形品が多いこともこの土坑の特色であった。注目される完形の陶磁器類としては、京焼系の色絵蓋、瀬戸・美濃の鉄釉徳利などがあげられる。陶磁器以外の完形品も多く、土師質の透明釉乗燭、セットの可能性をもつ灯明皿・灯明受皿、植木鉢、形態の類似した土師質火鉢、またそれとはやや異なる土師質火鉢も出土している。完形品以外でも重要なものが多く、例えば瀬戸・美濃の灰釉丸碗などの大型破片が出土している。

調査当初、B 3-2号土坑もB 3-1号土坑と同一の土坑であると思われていたため、遺物の取り上げに問題が残り、確実にB 3-2号土坑出土と判断された瓦は20片内外である。その中でも比較的重要な遺物としては、瓦当面に唐草文がわずかに残る軒丸瓦があげられる。

(佐々木 彰)

#### B 3-2号遺構 (第51図)

B 3-2号遺構は、B 3-1号土坑の平面プラン確認の際にB 3-1号土坑北側から検出された遺構である。調査当初は、B 3-1号土坑に付帯する何らかの施設とも考えられたが、土坑に伴うものではなく、B 3-1号遺構と類似した、人為的かどうかの不明な遺構であった。

平面形は南側でB 3-1号土坑の存在のため明らかでないものの、不整な方形を呈するようである。遺構は、B 3-1号土坑と切り合い関係をもつものの、新旧関係などは不明である。ただしB 3-1号遺構とは下底面の深さで異なり、別遺構であることは判断された。なお、確認された限りでの東西・南北の辺の長さは、双方とも0.5m、深さは0.1mである。底面は比較的平坦であった。遺物の出土はない。

(佐々木 彰)

#### B 3-3号土坑 (第53図)

B 3-3号土坑の周辺は、黒色土の落ち込みが全面にわたって確認され、調査当初はB 3-1・2号土坑、B 3-1号遺構などととも、同一の遺構であると考えられていた。

平面形は、東西1.5m、南北1.2mをはかる、東西にやや長い整った楕円形である。井戸跡であるため全掘は断念しなければならず、確認面から2.5mほど掘り下げるとどまった。したがって深さなどの全容は不明である。壁面全体には、掘削した当時の縦方向の鑿・鑿痕が顕著であった。

確認した限り、覆土は大きく3層に分けられるようである。上層は焼土・炭化物などをあまり含まない黒褐色土(1~4層)、中層はそれを多量に混入する黒褐色土である。炭化物の中にはムシロもしくは量が炭化したと思われるものも含まれていた(5~13層)。下層は再び焼土・炭化物が認められなくなり、ロームを混入した暗褐色土層となる(14層)。なお、この層からは大きな礫も確認されている。

覆土上層から中層にかけて、この遺構からは比較的多くの陶磁器片・瓦片が出土している。遺物は特に2層の焼土・炭化物層から確認されているが、焼塩壺および徳利の出土が注目された。それ以外の陶磁器類は小片のみであった。層位が不明ながら、砥石も確認されている。陶磁器と同様、瓦も小片が多く、やはり2層を中心に出土している。軒丸瓦、軒棧瓦の出土が注目された。

(佐々木 彰)

#### B 3-1号遺構 (第53図)

B 3-1号遺構は、B 3-3号土坑とともに同一の遺構と考えられていたが、この周辺に設定したサブトレンチの段階で、B 3-3号土坑と異なる別の落ち込みであることが確認された。落ち込みは、B 3-3号土坑南側からB 3-1・2号土坑北側まで及んでいたが、平面プランや壁の状況、そして出土遺物がないことなどから、結局人為的な構築物とは断定できずにB 3-1号

遺構と命名した。

南北2.2m、東西2.0mの不整な円形を呈する遺構とも思われたが、B 3-3号土坑、B 3-1・2号土坑などによって周辺を掘り込まれており全容は不明である。下底面は一様に平坦ではなく、遺構中心部と思われる付近から壁に向かって次第に浅くなる傾向をもつ。ただ、図には一応壁として示しているが、壁と下底面の区別は明瞭ではなく、ゆるやかな立ち上がりを示していた。なお、北側壁および下底面から、それぞれB 3-5・6号ピットが確認されている。

覆土は、2層に分けられたが、ローム土を主体とした土層であり、特に下層はロームブロックが主体となる土層である。遺物の出土はない。 (佐々木 彰)

#### C 3-1号土坑 (第54図)

C 3-1号土坑は、C 3-3号土坑によって、西側土坑底面をわずかに掘り込まれた土坑である。発掘当初は、覆土上面から比較的新しいガラス片などが出土しているため、近代の遺構を推定していた。しかし、その後の調査で、壁がオーバーハングしていること、覆土中層から近世の陶磁器片および火鉢の破片などが出土していることなどから、近世に構築された土坑であることが明らかとなった。

確認時における平面プランは、南北1.8m、東西1.3mをはかる南北にやや長い隅円方形に近い形状を示すが、下底面では不整な方形を示す。壁は確認面から0.5mの深さまではほぼ垂直であるが、それより下方では外側に向かって張り出している。張り出しの規模は南北でそれぞれ異なり、北側では20cmをはかるが、南側ではわずかしか張り出さない。深さは北側でやや落ちこんでおり最も深く、約1.1mをはかる。下底面の状況は、北側部分を除いてほぼ平坦である。

この土坑の覆土は多量のローム土が含まれていたことで特徴づけられる。特に2層は、下底面と見誤るほどローム土のみの単一の土層からなっている。中層はローム土を含んだ暗褐色土である。下層も暗褐色土を主体とした土層であり、ローム土の他に焼土・炭化物も確認されている。下層からは陶磁器片も出土している。

この遺構からは陶磁器・瓦類がやや多く出土している。陶磁器類の比較的様相のわかるものとして、京焼風の碗、口縁部のみであるが肥前の青磁香炉、やはり口縁部のみであるが瀬戸・美濃の鉄釉徳利などが出土している。さらに全体の様相は不明であるものの、土師質の角火鉢の大型破片なども出土している。

瓦類も多量に出土しているが、小片のものが多く、わずかに軒丸瓦、丸瓦のそれぞれの小破片が目立ったにすぎない。 (佐々木 彰)

#### C 3-3号土坑 (第54図)

C 3-3号土坑は、C 3-1号土坑を掘り込んで構築された土坑である。当初はC 3-1号土坑とともに、同一の近代の構築物を想定していた。しかし、掘りすすむにつれ、C 3-1号土坑とは近接しながらも、上面では切り合い関係をもっていない近世の遺構であることが判断され、C 3-1号土坑および、B 3-1・2号土坑との関連性が注目された。

C 3-3号土坑は下底面に近づくとつれ、壁が張り出すいわゆる袋状土坑である。しかし、同じ袋状土坑でもC 3-1号土坑とは異なり、平面形は方形、断面形は下底面に向かい撥形に開く形態を示している。確認面での平面形は、南北1.1m、東西0.9mの方形であり、下底面は南北1.6m、東西1.3mの長方形に近いプランであった。深さが約2mの下底面は、ていねいに削られ平坦である。壁は外に撥形に張り出していると記したが、東側の張り出しは垂直に近い。これはすでに指摘しているように、C 3-1号土坑と東側で密に接するため、これを避けようとした結果であると考えられた。

覆土はC 3-1号土坑同様、ローム土を含んだ土層が主体をなしている。ただ上層には2層のように小礫(2~3cm大)も多く含まれる層が見られた。下層にいくにつれ、ローム土の割合も多くなり、特に5層より下方ではローム土を多量に含む土層となる。下層では焼土・炭化物もわずかに認められた。なお7層からは瓦片が比較的多く出土している。

C 3-1号土坑同様、この遺構からも遺物が多量に出土している。注目すべき陶磁器類としては、ほぼ完形の鉄釉双耳壺、同じくほぼ完形の土師質の乗燭などが示される。ただ壺の場合、小片となった状態で確認されている。その他に肥前の染付皿の破片、京焼風の鉄絵碗、肥前の青磁壺の口縁部片、焙烙の口縁部片なども出土している。

瓦類も7層を中心に比較的多く出土している。その中でも注目される遺物としては、ほぼ完形の平瓦、側面に文様をもつ厚い熨斗瓦片などが示される。(佐々木 彰)

#### C 3-1号ピット (第55図)

C 3-1号ピットは、C 3グリッドの精査の段階で、C 3-4号土坑とともに確認されたピットである。この遺構は、規模などの点でピットに分類したが、掘り込みの深さや形態などから小型の土坑として把握されるものである。

C 3-1号ピットは北側でC 3-4号土坑を掘り込んで構築されているが、東側が調査範囲外であるため、詳細は規模・形態などは不明である。確認された限りでは、平面形は方形もしくは長方形が推定され、南北の長さ0.8m、東西のそれは不明である。深さは確認面より0.8m掘り下げた段階で、大形の切り石が現われ、それ以上の掘り下げはできず、したがって不明である。

覆土は4層に分かれるが、暗褐色土を基調にしている。上層は小礫が、中層は灰が混入するのが特徴的であった。遺物は、陶磁器・瓦の小片がそれぞれ数点ずつ出土している。

(佐々木 彰)

#### C 3-4号土坑 (第55図)

B 3-3号土坑と同様、C 3-4号土坑も調査当初付近一帯に黒色土の落ち込みが認められ、C 2-1・2・3・4号土坑と一連の遺構と考えられていた。この遺構の平面形は、整った楕円形を描くものと考えられ、さらに壁が垂直な立ち上がりを示していることから、井戸跡と推定された。C 3-4号土坑は、C 2-2号土坑を掘り込み、C 3-1・2号ピットによって掘り込まれていた。

平面形は南北にやや長い楕円形が推定され、規模は南北方向で約1.4m前後をはかる。しかし、東西方向は東側のほとんどが調査範囲外にあたるため、さらには東側に攪乱も確認されているため明確ではない。このため、井戸跡と判明しているものの、0.8mを掘り下げたにとどまった。

確認した限りでは、覆土は大きく2層に分かれるようである。上層はあまり遺物を含まない、ローム土・砂利などを多く含む非常に固い土層である(5～7層)。ほぼ0.6mを境とした下層(8層)でも砂利を多く含んでいたが、上層と異なり比較的やわらかい土層であった。7層と8層の境付近からは、貝類が集中して見られる箇所もあった。

遺物は覆土上層からあまり出土しておらず、下層からわずかではあったが陶磁器類や瓦片が出土している。注目される遺物としては、半完形の染付碗および肥前の染付小碗があげられる。瓦としては、平瓦の破片が目立った程度である。それ以外は、陶磁器、瓦片とも小片のものが多く、ただこれらの遺物は、井戸跡全体として見た場合、覆土最上層から確認されたものである。

(佐々木 彰)

### C 3-1号遺構 (第56・57図)

C 3-1号遺構は、B 5・C 4・C 5グリッドにまたがる、規模の大きい不明の落ち込みである。東・西・南側にそれぞれ未調査区をもつため全容は明らかでないものの、平面形は北東方向に主軸をもつ不整な長方形、もしくは楕円形が考えられる。なお、この遺構の底面から、C 4-1号土坑・B 5-1号土坑などが確認されている。

確認された限りのC 3-1号遺構の規模は、長軸約23m、短軸約11mであり、中央の最も深いところで、確認面より約1.17mをはかる。壁は、北側および南側では2段にわたって認められている。特に北側壁の上段では、ほぼ垂直な立ち上がりを示し、人為的な掘り込みの箇所と考えている。北側上段の壁高は約65cm、下段のそれは約45cmである。なお、下段の壁は東側で南へと屈曲し、南側下段の壁に連結している。北側上段の壁が垂直な立ち上がりを示すのに対し、南側のそれは上・下段とも立ち上がりの傾斜はゆるやかである。さらに壁の形状も不整であり、この部分が人為的構築であるかどうかは、不明であった。上段の壁高35cm、下段のそれは30cmである。底面は凹凸が激しく、また中央部が最も深く、周辺に向かい浅くなる傾向をもっていた。このため、南北両下段の壁立ち上がりとの境は明確でなかった。その上、覆土下層はロームブロックを主体とした土層であり、底面との境もまた明確ではない。なお、底面から、2つの長方形の掘り込みが確認されている。西側の掘り込みは、調査範囲外に延びているため規模等は不明であるが、東側のそれは東西2.1m、南北0.6m、深さは最も深いところで40cmをはかっている。底面にはこの掘り込みを構築した際の工具痕が顕著であった。

覆土は大きく2層に分かれる。上層は小礫を多く混入するローム土、下層はロームブロックが主体となる土層である。どちらも粘性しまりがほとんどなく、周辺の近世遺構などの覆土とは大きく異なっている。

この遺構からは陶磁器・瓦片などの出土が多かったが、覆土を除去する段階で問題があり、陶



磁器は B 5—1 号土坑に、瓦類は C 4—1 号土坑にそれぞれ関連するものと考えている。確実にこの遺構にともなうと思われる陶磁器・瓦類は小片のものが多かった。さらに、覆土下層からは、ガラス片やステンレス製の釣針が出土しており、C 3—1 号遺構は、きわめて近年の近い時期に埋没していることが明らかとなった。

(佐々木 彰)

#### C 4—1 号土坑 (第56・57図)

C 4—1 号土坑は、C 3—1 号遺構の範囲確認のためのサブトレンチを設定した際に検出された土坑である。他の土坑とはやや離れた位置での単独の確認であり、さらに C 3—1 号遺構が全体を覆っているため、他の遺構と検出時のレベルも異なっていた。

確認時の平面プランは、約1.5mの直径をもつ不整な円形を描いていた。深さは、確認面より約1.2m、下底部の規模は直径1.8mの、上面と同様の不整な円形を描いている。C 3—1・3号土坑同様、この土坑も袋状土坑であるが、確認面から0.3m下方ではほぼ垂直に掘り込まれ、それより下方は南北とも撥形になる急な張り出しを示している。張り出しの規模は最大で0.2m前後をはかる。土坑の形状としては、C 3—1号土坑と類似する点も見られそうである。なお、下底面は、かたく平坦である。下底面からは、砂鉄状の黒色の粒子が、敷きつめられた状態で確認されている。

他の土坑と位置的に離れており、しかも他の遺構との切り合い関係ももたず単独の確認であった。このためか、覆土の堆積状況も他とは異なっている。覆土の特徴として、ロームブロックを多く含んでいる点があげられる。特にこの傾向は上層で顕著であった。下層にいくに従い、様相は異なったものになり、ローム土を含むものの、暗褐色土主体のしまりのある固い土層となる。さらにこの土坑の特徴として、瓦片が非常に多く出土したことがあげられる。次に詳しく述べるが、瓦片はほとんど全ての層から確認されており、特に6層からは瓦片が密になった状態で確認されている。

この土坑からは瓦片が多量に確認されたが、陶磁器片も比較的多く出土している。陶磁器類の最も重要なものとしては、2個体出土の完形の肥前染付碗(1・2)があげられる。その他に、半完形の重要なものとして、瀬戸・美濃の鉄釉皿、肥前の大皿、瀬戸・美濃の灰釉丸碗、京焼風の鉄絵碗、肥前の染付坏、瀬戸・美濃の鉄絵香炉、鉄釉播鉢、カワラケの大皿なども出土している。

瓦片は多量の出土をみているが、完形となるものは一点もなく、全て破片のみの出土である。代表的なものとしては、梅鉢文を配した軒丸瓦瓦当部、丸瓦、唐草文を配した軒平瓦瓦当部、側面に文様をもつ熨斗瓦などがあげられる。

(佐々木 彰)

#### B 5—1 号土坑 (第58図)

B 5—1 号土坑は、C 3—1 号遺構底面の精査の段階で確認された井戸跡である。やや距離があるものの、B 3—3号土坑・C 3—4号土坑もこの周辺から検出されており、この B 4 グリッドを中心とした地区では、井戸跡が密に分布していることが理解された。他にも、竈跡である C 2

—1号組石遺構なども確認されており、地下式土坑等の土坑群が主体となっている他の地区とは様相を異にしている。

B 5—1号土坑は、南北にやや長いもののほぼ円形であり、直径約1.4mをはかる。覆土の除去は確認面より2mのところにとどめた。壁はきれいに整形されて、いくぶん外に張り出すようである。確認した限りでは、覆土は大きく2層に分かれる。上層（1～6層）は確認面より1m、灰色粘土などを含む褐色土である。下層（7～13層）は暗褐色土であり、ローム土が含まれる。遺物は近世の陶磁器片などが出土しているが、上層を中心に分布していたようである。

（佐々木 彰）

#### B 6—2号ピット（第59図）

B 6区に位置する平面形ほぼ円形を呈するピットであり、B 6—8号ピットを切って構築されている。規模は、径40cm、深さ8cmを計測するが、調査区の遺構の数や、重複関係などよりから推定される年代幅を考慮に入ればある程度上面より切りこんでいた可能性が強い。壁は、フラットな坑底よりやや開いて立ち上がる。覆土は、二層に分層され、上層は焼土粒子、焼土塊、炭化物などが混じる。

遺物は、確認面付近において、平瓦が1点面を上にした状態で検出されているが、上部構造物の基礎である可能性は少ないと考える。

（堀内 秀樹）

#### B 6—3号ピット（第59図）

B 6区に位置する平面形ほぼ円形を呈するピットである。規模は、径53cm、深さ29cmを測る。壁は、やや小さい平坦な坑底より播鉢状に開く。坑底直上には、周囲を暗褐色土に固定された24×24cm、厚さ20cmを測る台形の切り石が、面をうえにして検出されており、礎石として機能されていたと推定される。土層は、礎石固定の為の非常にしまりのある下層と、炭化物が混入する上層に分層される。遺物は、検出されていない。

（堀内 秀樹）

#### D 6—1号土坑（第60図）

D 6区に位置する不整形の土坑である。規模は、東西94cm、南北110cm、深さ16cmを計測する。坑底は、ほぼフラットに構築されており、それより壁は、緩やかに立ち上がる。付属する施設として、西側の壁付近に長径36cm、短径20cm、深さ19cmを測る東西方向に主軸を有するピットが確認されている。覆土は二層に分層され、上層は焼土の混じる黒褐色土、下層は焼土を含まない層である。

遺物は、検出されていない。

（堀内 秀樹）

#### C 5—1号土坑（第61図）

表土を除去した時点で確認された。C 5—3号ピットを切っている。東西1.0m、南北1.25mの隅丸の不整形で、確認面よりの深さは1.6mである。床は水平、壁は東北側がややオーバーハングしている他は垂直に近い。埋土は暗褐色土を主体とし、南から北へ低くなる層位の傾きがある。遺物は、陶磁器片、瓦片、煉瓦片が層の上下を問わず、少量ずつ出土している。（上田 真）

C 5-3号ピット (第61図)

表土を除去した時点で確認された。南北を土管溝に、西側の大部分をC 5-1号土坑に切られ、僅かに東壁周辺が残存している。南北の推定幅1.4mとC 5-1号土坑とはほぼ同規模であるが、壁の立ち上がりはC 5-1号ピットに比べて緩い。東西幅は不明である。埋土はローム混じりの暗褐色土で、埋土中より瓦片が数点出土している。(上田 真)

C 6-1号土坑 (第62図)

C 6区に位置する平面形隅丸方形を呈する土坑である。C 6-2号土坑の中央付近に主軸を同じくして入れ子状に構築されており、あるいはC 6-2号土坑に伴う施設である可能性も考えられるがその性格は断定できない。規模は、長辺119cm、短辺72cm、深さ最大30cmを測る。坑底はフラットで、東西壁は比較的緩やかに、南北壁はほぼ直立する。覆土は三層に分層されるが全て粘性の強い灰褐色粘土が多量に混入する。

遺物は、瓦片が多量に出土した他、陶磁器片十数点、漆喰、鉄製品が少量検出されたが、特異な例として穿孔された上に釘が貫通した平瓦が検出されている。(堀内 秀樹)

C 6-2号土坑 (第62図)

C 6区に位置する坑底のコーナーに四基のピットを伴う長方形の土坑である。調査の当初C 6-1号土坑とは、覆土の様子や遺物の混入状態にかなりの相違が認められたため別遺構として扱ったが、本遺構に伴うなんらかの施設であった可能性も考慮に入りたい。平面形は、確認面、坑底とも長方形を呈し、規模は、東西144cm、南北101cm、深さ70cmを測る。坑底は、平坦であるが、そのコーナーには一辺約20cm、深さ40~50cmのピットが4基確認されている。ピットのそれぞれの外側のコーナーには、土層図で示した様に周囲をロームで固定された角柱の痕跡が、明瞭に認められる。覆土は、三層に分層され、その最下層は坑底にロームを付き固め、貼り床状を呈している。

遺物は、陶磁器片、瓦片が少量と、鉄製品が数点検出されている。(堀内 秀樹)

G 5-1号土坑 (第66・67図)

G 5-1号土坑は、壁の検討からG 5-3号土坑を掘り込んで構築されていたことが確認され、しかも遺構の掘り込み面が、確認面より0.5m以上上方であることが知られていた。すなわち、表土を除去した段階で遺構のほとんど大部分を破壊してしまったが、掘り込みの状況および覆土の内容物から判断して、近代以降のいわゆる“攪乱”として把握できる土坑である。なお、この土坑の底面より、G 5-2号土坑が検出された。

形状は、不整な方形が推定され、確認できる範囲内での規模は、北側が調査範囲外にあたるため南北は不明であるものの、東西の長さは2.6mをはかる。深さは約1mである。壁は東側ではほぼ垂直であるが、南および西側ではゆるやかな立ち上りを示している。底面は凹凸が激しく、特に遺構面側では、不整なプランをもつピットも確認されている。両ピットの深さは、底面より10~15cmをはかる。

覆土はいわゆる“瓦礫”である。2～3 cm 大の小礫・瓦片・ローム土・焼土からなり、特に小礫と瓦片の量が多い。遺物は、瓦片の他、陶磁器類では肥前の仏匱具、瀬戸・美濃の茶入等が出土している。

(佐々木 彰)

#### G 5-2 号土坑 (第66図)

G 5-2 号土坑は、近代の遺構であると思われる G 5-1 号土坑の底面精査の際に確認された土坑である。

土坑の平面形は、遺構北側が調査範囲外にあたるため、明確ではなく、確認できたのは遺構南側の一部分のみである。土坑西側隅では隅円を描くものの、東側隅は角ばっており、さらに南辺は直線であることから、方形もしくは長方形を描くプランを想定している。南辺の長さは1.6m である。深さは、確認面が G 5-1 号土坑底面であるため西側で浅くなっているが、東側では0.8m をはかる。壁は西側でほぼ垂直な立ち上がりを示しているものの、東側のそれは袋状の立ち上がりを示している。確認された限りでは、底面は平坦である。

覆土は、5～7 層でローム土を含んだ黒褐色土、同様に8層もローム土を混入する暗褐色土である。陶磁器・瓦片・貝類などは上層から下層に至るまで、数少ないながらも確認されている。

出土遺物の中の完形もしくは完形に近い陶磁器として、肥前染付仏匱具、覆土中層より完形で出土した瀬戸・美濃の鉄釉双耳壺などが重要なものとして示される。その他としては、瓦小片および貝類などが出土している。

(佐々木 彰)

#### G 5-3 号土坑 (第66図・67)

G 5-3 号土坑は、G 5-1 号土坑とともに精査の段階で確認されていた土坑である。遺構東側は G 5-1 号土坑によって掘り込まれており、G 5-1 号土坑の調査終了をまって、覆土を除去した。なお、本土坑は、G 5-2 号土坑とほとんど境を接しているが、確認した限りでは切り合い関係をもっていない。

G 5-3 号土坑は、G 5-1・2 号土坑と同じく、北側が調査範囲外であるため規模等は不明であるが、方形もしくは長方形の形状が推定されている。東西の辺の長さは1.7m である。深さは、確認面より1.8m をはかる。壁は全ての面でほぼ垂直であり、丁寧な整形が施されている。底面も壁と同じくきれいな整形が施され、ほとんど水平である。ただし、土坑西側に張り出しが見られた点が注目された。当初、土坑とは無関係のピットを想定していたが、埋土が同様であるため、本土坑に付随する掘り込みであることが確認された。掘り込みの規模等は北側で明らかではないものの、東側に0.5m 前後張り出しており、深さは約1 m である。性格等は不明である。

覆土は大きく3層に分かれた。上層はローム土を混入した粘土層である(10層)。中層は、ローム土・小礫などを混入する暗褐色土である(11～13層)。下層は黒褐色土(14層)。中層から下層にかけて瓦片が含まれる。中層からは大形の整形された石材が確認されている。おそらく、瓦片とともに投棄されたものであろう。

遺物は瓦片が多く見られたが、大形のものではなく、ほとんど小破片のみである。わずかに丸瓦

および棧瓦の破片が注目された。陶磁器類も破片のものが多く、半完形の焼塩壺が注目されたにすぎない。

(佐々木 彰)

#### G 5-1号遺構 (第66・67図)

G 5-1号遺構は、G 5-3号土坑と同一の遺構であると考えられていたが、覆土を除去する段階で、3号土坑をわずかに掘り込んでいるらしい別遺構であることが明らかとなった。

G 5-1号遺構は、確認された限りでは、主軸がやや東に傾く幅0.5m、深さ0.3mの溝状の遺構である。この遺構は、北に向かって壁が立ちあがるため、G 5-3号土坑との新旧関係は明確でなく、南側では攪乱によって掘り込まれる。底には平坦な面はなく、それぞれの壁立ちあがりには定まった角度をなしていない。すなわち、人為的かどうか疑問のもたれる土坑である。覆土は粘性・しまりのないやわらかい、ロームブロック・礫を混入する黒褐色土である。遺物の出土はない。

(佐々木 彰)

#### G 5-1号溝 (第66・67図)

G 5-1号溝は、G 5区の精査の段階から円形の溝状遺構として確認されていた。G 5-3号土坑によって、東側を掘り込まれているこの溝は、確認された範囲内では全長1.8m、幅0.5m、深さ0.2mをはかる。この遺跡では、他にも性格不明の円形周溝状の遺構が確認されているが、この溝は規模が小さく、掘り込みも浅い点で、それらの溝とはいくぶん異なるようである。また、この溝からは2基のピットが確認されている。F 5-1・G 5-3号ピットである。両ピットがそのまま溝にもなっていたとは断言できないが、両ピットの形態が類似していること、さらに両ピットとも溝外側の壁に掘り込まれている点など、何らかの関連性を伺わせる。遺物は、瓦片が何点か出土しているのみである。あるいは、立木を移植する際の根を切り取った跡かも知れない。

(佐々木 彰)

#### F 5-1号土坑 (第67図)

F 5-1号土坑は、遺構の大部分が北側で、調査範囲外にあたるため、検出されたのは土坑南半のわずかの部分のみである。

確認された限りでは、平面形は一辺の長さ約1.6mをはかる方形を呈する土坑と考えられた。壁は東側でわずかに内側に向かい傾斜をもつものの、ほぼ垂直な立ち上がりを示している。深さは確認面より2.3mをはかる。下底面は平坦であり、一辺の長さは1.5mである。

覆土は4層に分かれたが、大きく2層に大別される。上層はロームブロック・ローム土を主体とした土層(1・2)であり、下層(3・4)は暗褐色土が主体となる土層である。

発掘当初、遺構周辺で確認されている、いわゆる“地下式土坑”等の性格を考えたが、形状・覆土の堆積状況などから判断して、地下式土坑とは別な性格の遺構であることが推定される。

なお、時期等に関しては、遺物の出土がなく不明としなければならないが、覆土の状況から隣接するG 5-1・2・3などととともに、近世の遺構であることは判断される。

(佐々木 彰)

#### G 6-9号ピット (第68図)

調査区の東側 G 6 区に位置する平面形方形を呈するピットである。規模は一辺35cm、深さ40cmを計測する。坑底は平坦で、壁は北側で若干オーバーハングするが、ほぼ直立している。覆土は、北壁付近で認められた柱の痕跡とおもわれる軟質の木片が多量に含まれた1層と、それを固定していた2層、3層の三層に分層される。本ピットは、柱痕が確認されているため、なんらかの上部構造物を想定されるが、伴うような遺構は確認できなかった。

遺物は、検出されていない。

(堀内 秀樹)

#### G 6—3号土坑 (第68図)

調査区の東側 G 6 区に位置する平面形長方形を呈する土坑である。南北方向に主軸を有し、規模は、長辺110cm、短辺50cm、深さ30cmを測る。主軸方向の北、南壁は、やや緩やかに立ち上がり、東、西壁はほぼ直立する。坑底は緩やかに南より北に傾斜を有する。覆土は、柱の痕跡であると思われる4層と、それを補強する層(5～8層)とに大別される。

遺物は、陶磁器片、瓦片が少量検出されている。

(堀内 秀樹)

#### G 6—1号・4号土坑 (第69図)

調査区の北東側 G 6 区、F 5 区、F 6 区に位置する付帯施設を持つと思われる井戸である。遺構の南西側において G 6—2号土坑と重複関係にあり、新旧は、G 6—1号土坑が新である。調査の当初入れ子状に重複した二基の別の遺構があると考えたが、調査を進めている段階で外側の G 6—1号土坑は、井戸である G 6—4号土坑の付帯施設であることが判明した。中央の G 6—4号土坑は平面形円形を呈し、規模は、確認面で径160cmを測るが次第にすぼまり、調査を行なった確認面下200cmでは、径120cm程になる。深さは、確認面下200cm程で調査を取り止めているので不明である。壁面は、全体に丁寧に整形されており、また、東南側 G 6—2号土坑と切り合っている部分の壁には、その覆土の崩落、流入を防ぐ為に、黄褐色粘土およびロームで構成される粘性の強い土を20cm程の厚さに詰め込んで、G 6—1号土坑の坑底面と共に補強している。土層は、十三層に分層されるが、部分的に桶側の痕跡が認められ(土層図中6層、13層)、東側の一部では不良な状態ではあるが、木部も確認されている。桶側の中の土であると思われる1～4層、9～12層は、比較的水平的な堆積状態を示している。

外側の G 6—1号土坑は、二重構造を呈しており、外側の胴張りの長方形の土坑の中に、坑底を共有してローム、灰褐色粘土を後づめにするような形で入れ子状に長方形を呈する土坑が構築されている。主軸は、東西方向に有し、規模は、外側の土坑が東西330cm、南北260cm、内側の土坑は東西250cm、南北220cm、深さは、両土坑とも74cmを計測する。両土坑は、北側で壁を一部共有しているが、内側の土坑の壁は、比較的丁寧に整形が施されているのに対し外側の土坑はかなりの凹凸を有する。坑底は、フラットで井戸の壁同様に G 6—2土坑と重複している場所は、黄褐色粘土とローム土によって補強されている。覆土は、八層に分層され、内側の土坑は、ロームを主体としたしまりのある土(図中15・16・17・18層)で構成されるが、後づめであると思われる外側の土坑は、黄褐色粘土を多量に含むしまりの非常にある土(図中19・20・21・22層)で

固定されている。G 6—1号土坑は、井戸に伴う施設であるが、どのような性格を有するかは判然としないが、上部構造に関連するものである事は土層図14層が柱痕であろう事からも想像に難くない。

遺物は、G 6—4号土坑の井戸桶側内より上層から下層までまんべんなく陶磁器片を中心として比較的多く出土を見ているが、G 6—1号土坑は少量である。(堀内 秀樹)

#### G 6—2号土坑 (第70・71図)

調査区の東側 G 6区, F 6区, F 7区にまたがって位置する土坑であるが、その中央を、東西に走る共同溝およびその埋設坑によって大きく削平を受けている。F 7—3号ピット, G 6—1号土坑, 4号土坑と重複しており、新旧はその何れよりも旧である。平面形は、不整形で、図のように東側の深い部分と西側の浅い部分とでなる。規模は、東西440cm(うち深い東側の部分は280cm), 南北は460cm, 深さは、東側で確認面より120cm, 西側では、70cmを計測する。壁は、東側で若干オーバーハングしており、坑底と共に平状の工具で構築された痕跡が明瞭に観察され、かなり凹凸を有する。また、G 6—1号・4号土坑に切られている北東部の坑底は、その構築の際に補強されたと思われる褐色の粘土が認められている。覆土は、最上層のロームを多く含む7層はほぼ水平に、下層の黒褐色土が西から東に傾斜を有して堆積しており、その間に暗褐色土がかなり厚く認められる。

遺物は、深い部分の北西側に瓦の大型破片が集中的に確認された他、陶磁器片、破碎瓦片、煙管の吸い口、止め金状の補強金具などが検出されている。(堀内 秀樹)

#### H 5—1号土坑 (第72・73図)

ローム土上面での H 5 グリッド精査の際、この付近に、広い範囲にわたる不整の方形の落ち込みが認められ、H 5—1号土坑と命名し調査を開始した。調査は、第一にサブトレンチを北側の調査範囲外に沿って設定し始められたが、攪乱などの存在もあり、当初は4基の遺構の切り合いを予想することができなかった。遺構の重複は、覆土を除去する段階でようやく認められ、このため詳細は土層観察はできなかったものの、平面形とも照合して、以下の重複関係を推定した。すなわち、H 5—3号土坑が最も古く、次に H 5—2号土坑が掘り込まれ、その後に H 5—1号土坑が、そして最後に H 5—1号溝が掘り込まれたと推定している。しかし、上述の理由により、詳細は不明としなければならない。

H 5—1号土坑は、開口部の南側を攪乱により、北側を H 5—2号土坑によって掘り込まれているものの、ほぼ全容のわかる“地下式坑”である。開口部は南北に長い不整の楕円形と考えられ、推定の長軸1.6m, 短軸1.3mをはかる。確認面からの深さは1.6mである。壁は、東および北側で確認できなかったものの垂直であったと考えられ、西・南側では、オーバーハングしていた形状が考えられる。例えば、西側の壁では、確認面より0.6mの深さまではほぼ垂直な立ち上がりであるが、そこから壁は20cmほど外側に張り出し、張り出した壁は下方に向かい再び垂直になり、底面へと続いている。このため、西側の壁には横走する2本の稜線が見える。このような状

況は、南側でも同様であった。壁は全面にわたってきれいに整形されていた。底面は、南北1.6m、東西1.3mをはかる整った長方形であり、開口部の形状と対応してないが、壁と同様、底面もきれいに整形されていた。覆土はロームが多量に混入する黒褐色土であり、H 5-2・3号土坑の土層と類似している。遺構底面では、H 5-2号土坑の立ち上がりに沿って焼土が確認され、確実にH 5-2号土坑より新しいことが認められている。

遺物は、瓦類の破片は少なかったが、陶磁器類は比較的多く出土している。陶磁器類には、ほぼ完形の染付丸碗、同じく完形の鉄釉徳利、頸部を欠く仏花器、カワラケ、かろうじて全体のわかる土師質の角火鉢などがあり、一部を欠損する砥石なども出土している。瓦はすべて小破片のみの出土である。

(佐々木 彰)

#### H 5-2号土坑 (第72・73図)

H 5-2号土坑は、遺構南側大半をH 5-1号土坑によって掘り込まれているものの、H 5-3号南側袖部を掘り込んでいることが確認された土坑である。

遺構は、すでに述べている覆土を除去する段階の問題、すなわち遺構の大半が覆土同志の切り合い関係をもつことなどから、正確な形状は不明とせねばならない。しかし、遺構東・西・北側に分布する柱穴列、遺構東南隅およびH 5-2号土坑北側天井部に確認されている壁立ち上がりなどから、おおよその形状は推定できる。すなわち、H 5-2号土坑は、一辺1.5mの方形の平面形をもち、壁立ち上がりはほぼ垂直、深さは約1.8mをはかると推定される土坑である。断片的に残る壁、および遺構北側で確認できる杭列からの強引な推定である。深さ10~20cmの杭列は、H 5-3号土坑の覆土の崩落を防ぐための土留めの痕跡であると考えられ、この杭列を結ぶ線と、残存する壁を対応させると整った方形となり、これを平面形とした。壁は東南隅および北側の一部分のみに確認されているが、その双方ともまっすぐな立ち上がりであり、杭跡との関連からしてもオーバーハングしている形状は考えられず、垂直な掘り込みを推定した。底面は、H 5-1号土坑とほぼ同じレベルを推定している。底面はH 5-2号土坑覆土下層の焼土を掘り込んでいたため、あまり硬化面は形成されず、やや凹凸をもつ。

覆土は、灰・焼土・炭化物・ローム土などを含む暗褐色土である。土層断面に、壁際に平行するほぼ垂直な暗褐色土が確認されているが、土留めと壁にはさまれた埋土である。遺物は陶磁器、瓦とも比較的多くの破片が出土している。ただし、破片資料のみであり、肥前染付皿、瀬戸・美濃の灰釉拳骨茶碗、肥前の象嵌鉢などは、いずれも半完形もしくはそれに近いものである。瓦も出土点数は多かったが、いずれも小破片のみである。

(佐々木 彰)

#### H 5-3号土坑 (第72・73図)

H 5-3号土坑は、H 5グリッド周辺に広がる遺構の中で、最も古いと考える地下式土坑である。土坑南側は、すでに述べているように、大半をH 5-2号土坑によって掘り込まれ、北側は法学部に関連すると思われる攪乱によって破壊され、その上部分的に調査範囲外にも相当している。このため、H 5-3号土坑の詳細な平面形までは不明とせねばならないが、土坑の形状は、



開口部が1.1m内外の方形、底面は凸形であり、いわゆる“両袖型”の地下式土坑と考えられる。壁は、遺構南側を除く東・西・北の面では垂直であり、深さは確認面より約1.9mをはかる。北および西側の確認できた壁面を観察する限り、きれいな整形がほどこされていた。底面は、南北が2m、東西は開口部からの計測によると1.9m、それを含まないと1.3mになる。天井部は、西・南側では遺構間の重複のため認めることはできなかったが、北側にわずかに残っており、土層中には、天井部の痕跡である大形のロームブロックも認められている。これらを考え合わせると、天井部は開口部を除く全面に広がっていたと推定される。天井部の厚さの推定は約1mである。なお、階段等の施設は認められていない。

覆土は、東側の開口部および北側でわずかに観察された。土層は焼土・炭化物をわずかに含む暗褐色土である。特に底面近くの覆土下層からは焼土層が確認されている。粘性・しまりともない荒い土質であった。この土層は、東側を除く全面に確認されており、この遺構のプランを決定する際の、重要なきめ手となった。

遺物は、遺構のほとんどが攪乱を受けているためか、あまり確認されていない。開口部の南東隅よりは金属片が、北側からは陶磁器・瓦の小破片、そして貝類が見られた。わずかに、平瓦を砥石に転用したと思われる破片が目された。

(佐々木 彰)

#### H 5-1号溝 (第72・73図)

H 5-1号溝は、H 5グリッド精査の際に検出されたが、調査当初は、H 5-1・2・3号土坑とともに、1グリッドの大半を占める大形の遺構であると考えられていた。このためこの溝は、これら一連の遺構の覆土除去の際に大半を掘り込んでしまい、その上遺構の南北に攪乱もはしり、土層の堆積すら判断できない状況にあった。さらに、溝の延長と考えられるH 6グリッドでもこの溝は確認できず、したがって“溝”として区分しているものの、詳細は不明の遺構である。

H 5-1号溝は、I 5-2号土坑と重複関係をもつ東側で最も深く、約0.8mをはかるが、西側では先に述べた理由により確認できていない。ただ、H 5-1・2号土坑の0.7m東側に幾分ロームの高まりが見られ、この付近が溝西側を画するらしい。ここを立ち上がりと考え、上面の幅1.7m、底面の幅は0.8mとなる。確認できた底面は平坦であった。H 5-1・2号土坑との新旧関係は不明であるが、H 5-3号土坑よりは新しいらしい。覆土を除去する際の観察では、覆土の状況はH 5-2号土坑に類似しており、近世の遺構であることに疑いはない。しかし、遺物等の出土もなく、詳細な時期および性格等については不明である。

(佐々木 彰)

#### I 5-2号土坑 (第74図)

I 5-2号土坑、H 5グリッド精査の際に確認された土坑であり、H 5-1号溝を掘り込んで構築された地下式土坑である。土坑の南側の一部分は、攪乱によってわずかに壊されているものの、全体の保存状態は極めて良好である。

開口部の平面形は、隅が丸みをおびる台形であり、東西1.3m、南北1.2mをはかる。確認面より底面までの深さは、ほぼ2.2mである。壁は四方ともオーバーハングしており、特に開口部より

6～70cm内外のところから傾斜が急に変わり、外に向かって開いている。この傾向は、特に北側において顕著である。すなわち、壁の全体の形状は瓶形である。壁は全体に丁寧に整形されていた。底面はやや不整であるものの、一辺1.8m内外の方形を呈する。底面は壁際でわずかに落ち込んでいるものの、全体的には平坦であり、壁と同様丁寧に整形されている。

土層は大きく2層に分かれるようであるが、その変化は漸移的であり明確ではない。すなわち、開口部から1.4mほどのローム土混入の暗褐色土を主体とする土層(1～7層)およびその下層の暗褐色土を主体とする土層(8～17層)に分けられる。上層ではロームのみの土層(4・7層)もみられたが、どの層にも特にロームブロックを多く含んでいるのが特徴的であった。下層は粘土層・瓦の堆積層(14)およびその直下から灰層(16)が確認されている。床面直上では、黒色土の硬化面も見られた。

遺物は、瓦片が特に覆土下層を中心に出土しているが、陶磁器類も、下層、特に瓦の堆積層を中心に比較的多く出土している。代表的な遺物としては、半完形の染付碗、完形の灰釉蓋、同じく完形の瀬戸・美濃の鉄釉徳利などがある。底部裏に墨書のある完形の瀬戸・美濃の鉄釉徳利は土坑底面近くの南隅より出土した。その他には、焙烙の大型破片および半完形の赤絵筒茶碗なども出土している。瓦類は多く出土しているが、完形に近いものは少なく、わずかに注目される遺物として、次のものが出土している。梅鉢文を配した軒丸瓦瓦当部、丸瓦片、唐草文様の瓦当面をもつ軒平瓦、側面に文様をもつ熨斗瓦片などである。(佐々木 彰)

#### I 5-1号溝(第75図)

I 5-1号溝は、I 5グリッドの北半に確認された遺構である。遺構北側は調査範囲外に延び、南側は土管等による攪乱、さらにI 6グリッドでも重複関係が激しいせいか、ここでも確認できなかった。したがって、溝としたものの、形状・規模等は不明である。

確認できる範囲では、溝はやや西に傾くものの、ほぼ南北方向に認められた。掘り込みは二段である。西側の掘り込みが深く、確認面より1.4mをはかり、底面は平坦である。下底面の巾は0.7mをはかる。注目すべきことに、底面は非常に固くつきかためられた状況にあった。つき固められた痕跡は、巾0.8mの東側の掘り込みでも確認されているが、掘り込みは浅く、深いところで確認面より0.2mをはかるにすぎない。底面は西側に向かい、すなわち深い西側溝に向かい、ゆるやかな傾斜を示している。下底面の中は、西側溝とほぼ等しく0.7mをはかる。ここでも底面は固くつきかためられた状況にあった。当初この溝は、2本の溝の切り合いかとも思われたが、覆土は同一であり、単一の遺構であると考えられるが、東側の溝は、西側のそれに伴う何らかの付帯施設である可能性が強い。覆土は、ローム土および礫を含むものの、非常に緻密で固い黒褐色土が主体であり、住居跡の床面に近い感があった。

出土遺物には陶磁器などはなく、わずかの瓦片と西側溝の覆土中層から出土した下白の受けの破片が注目されたのみである。(佐々木 彰)

#### J 5-1号土坑(第76図)

J 5-1号土坑は、東・南・北側のそれぞれが未調査区であり、わずかに西側の一部分が確認されたにすぎない土坑である。したがって、遺構の大半が明らかでなく、土坑と分類したものの、形状その他については不明である。なお、この土坑は、I 5-1号土坑を掘り込んで構築されていた。

J 5-1号土坑は、形状等は不明であるものの、西側壁および底面の状況は比較的明らかである。約1.8mをはかる西側壁はほぼ垂直であるが、わずかに内湾する立ち上がりを示している。壁には、丁寧な整形痕等は認められなかった。底面は平坦である。注目すべきことに、硬化面が確認されている。やや凹凸があり、表面はひび割れていたが、I 5-1号溝底面と著しい類似を示している。硬化面の厚さは約5 cmである。

覆土は大きく2層に分かれる。上層(1~2層)は、礫および粘土を混入する暗褐色土である。下層(3~4層)は、礫も含まれるがほとんど灰白色の粘土を主体とする土層である。上層・下層とも非常に固い土層であり、土質こそ異なるものの、底面と同様、I 5-1号溝との類似を示している。ただこの土坑は、底面の状況や覆土に粘土をもつことなど、他で確認されている近世の土坑とは異なる点も見られるのであり、構築された時期その他にも不明な点が多い。

遺物は、陶磁器片・瓦片などがあるが、量的には少なく、またほとんど小片のみの出土である。その中でも、小片ではあるが口縁部を含む瀬戸・美濃の灰釉皿が比較的重要なものとして示される。

(佐々木 彰)

#### I 5-1号土坑 (第76図)

I 5-1号土坑は、精査当初にはJ 5-1号土坑と一連の土坑であると推定された遺構である。しかし、覆土に大きな相違が見られ、また土層の堆積等から判断して、J 5-1号土坑に掘り込まれた小土坑であることが判断された。

東側で形状・規模等に不明な点があるものの、南北で0.7mをはかる隅円長方形のプランが推定された。壁は急な立ち上がりを示し、壁高は0.5mである。

覆土は、黒褐色土を主体とした土層であり、下層にはそれにローム土が含まれる。なお、この土坑からはわずかの瓦片しか出土しなかった。

(佐々木 彰)

#### J 5-2号土坑 (第77図)

調査区の北東端J 5区に位置する土坑であるが、南、西側を共同溝及び、鉄管の埋め込み穴によって切られ、北東壁を残すのみである。J 5-1号ピット、3号ピット、K 5-4号土坑と重複関係にあり、新旧はその全てより新である。遺存している規模は、東西80cm、南北150cm、深さ約40cmを測る。壁は、ほぼ平坦であると思われる坑底より緩やかに立ち上がる。覆土は単層で、黄褐色砂質粘土層である。遺物は、陶磁器片が少量出土している。

(堀内 秀樹)

#### K 5-4号土坑 (第77図)

調査区の北東端K 5区、J 5区にまたがって位置する土坑であるが、上部をJ 5-2号土坑、東、南側を近代以降の攪乱によって削平され、遺構全体の様子は窺うことはできない。平面形は、

以上の理由で不明であるが、南北の断面形は、壁は坑底よりやや開いて立ち上がっている。遺存規模は、東西220cm、南北50cm、深さ110cmを測る。土層は、五層に分層されるが、全て壁に沿って北側より南に向かって傾斜を有している。遺物は、検出されていない。(堀内 秀樹)

#### K 5-2号ピット (第77図)

調査区の北東端 K 5 区, J 5 区にまたがって位置し、北側の一部は調査区域外に出ている。平面形は、確認面で円形、坑底で方形を呈し、規模は、東西42cm、南北30cm、深さ37cmを測る。坑底は、フラットで、壁は、ほぼ直立するが、西側では一段有し、それ以上は緩やかに立ち上がる。覆土は、ローム混じりの暗褐色土一層である。遺物は、検出されていない。(堀内 秀樹)

#### K 5-1号土坑 (第77図)

調査区の北東端 K 5 区に位置する平面形方形を呈する土坑であり、東壁の一部を南北に走る近代以降の土管穴によって攪乱されている。北西コーナーで K 5-2号土坑と重複しており、新旧は、K 5-2号土坑より新である。主軸方位は東西に有し、規模は、東西110cm、南北100cm、深さ110cmを測る。壁、坑底は、非常に丁寧に整形され、各コーナーも直角に作り出している。土層は、八層に分層され、壁際より中央に向かって傾斜を有して堆積している。遺物は、陶磁器片、瓦片、釘等少量検出されている。(堀内 秀樹)

#### K 5-2号土坑 (第77図)

調査区の東北端 K 5 区, J 5 区にまたがって位置する地下式の土坑である。遺構の北側が調査区域外であるため全体の様子は窺うことはできなかったが、壁、坑底、室部共に天井の崩落などもなく、遺存状態は良好である。東南のコーナー付近において K 5-1号土坑と重複関係を有し、新旧は土層の堆積状態より本土坑が旧である。確認面における平面形は、方形もしくは長方形と推定され、開口部より南、東壁は垂直に落ちて坑底に至るが、西側は、室部を設けている。規模は、確認面で東西130cm、南北84cmで、深さは150cmを計測し、室部は確認面から約80cmの深さより西側に70cmほど張り出している。壁および坑底は、直線的に構築され、丁寧に整形されている。土層は、九層に分層され、使用時のものと思われるよく踏みしめられ、しまりのあるローム土層(9層)の上は、坑底の中央付近より順次埋められている状態が看取できる5~8層が山形の堆積をみせ、3層は、東壁より室部へ向かって傾斜を有している。

遺物は、陶磁器片二十数点、瓦片三十数点、銅銭、釘などが検出されている。(堀内 秀樹)

### その他の遺構

概述の他に小規模な遺構を多く検出している。多くは杭あるいは掘立柱の痕と考えられるものであるが、性格不明の不定形な遺構もある。以下そうしたものを図版毎に概観して行く。

#### 第48図

B 2-4号ピットは約57×47cmの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは14cmを測る。B 3-7号ピットは34×28cmの楕円形を呈し深さ36cmを測る。C 3-12号ピットは32×15cmの長

方形の平面形を有し深さ36cmを測る。以上の3基のピットはC2-1号組石遺構に伴う可能性がある。

#### 第49図

B2-1号ピットは36×28cmの楕円形を呈し深さ35cmを測る。B2-2号ピットは58×49cmのほぼ円形の平面形を有し深さ32cmを測る。柱痕を確認しているので掘立て柱の痕であろう。B2-3号ピットは直径26cmの円形を呈し深さ15cmを測る。B3-1号ピットは45×40cmの不整形を呈し深さ33cmを測る。坑底が二段になっている。B3-4号ピットは直径15cmの円形を呈し深さ23cmを測る。B3-8号ピットは28×20cmの長方形を呈し深さ26cmを測る。C3-3号ピットは27×14cmの楕円形を呈し深さ18cmを測る。C3-5号ピットは20×16cmの長方形を呈し深さ24cmを測る。C3-6号ピットは30×10cmの長方形を呈し深さ40cmを測り、坑底が二段になっている。C3-7号ピットは22×18cmの長方形を呈し深さ11cmを測る。C3-8号ピットは37×22cmの長方形を呈し深さ34cmを測る。坑底は二段となる。C3-10号ピットは33×24cmの楕円形を呈し深さ34cmを測る。C3-11号ピットは23×18cmの長方形を呈し深さ22cmを測る。C3-13号ピットは36×34cmの方形を呈し深さ40cmを測る。C4-2号ピットは一辺15cmの方形を呈し深さ26cmを測る。

#### 第50図

C3-4号ピットは一辺16cmの方形を呈し深さ50cmを測る。

#### 第51・52図

B3-2号ピットは短径37cmの楕円形を呈していたと思われ深さ23cmを測る。B3-3号ピットは直径28cmの円形を呈したと思われ深さ22cmを測る。以上の2基はB3-1a号土坑によって切られている。C3-9号ピットは短辺35cmの長方形を呈したと思われ深さ41cmを測る。B3-1b号土坑の天井崩落の為南西側にどれだけ延びていたか不明である。

#### 第53図

B3-5号ピットは27×22cmの楕円形を呈し深さ10cmを測る。B3-1号遺構の坑底から検出した。B3-6号ピットは恐らく円形を呈していたものと思われるがB3-3号土坑、B3-1号遺構によって切られている為規模は判然としない。深さは24cmを測る。

#### 第55図

C3-2号ピットは短径23cm前後の楕円形を呈すると思われるが、C3-4号土坑に切られているため明らかではない。深さは22cmを測る。

#### 第59図

B5-1号ピットは一部調査不能区域に掛かるが、一辺51cmの隅丸方形を呈したと思われる。坑底は東側が深い二段になっており、深さ23cmを測る。B5-2号ピットは25×20cmの長方形を呈し深さ29cmを測る。B6-1号ピットは東側の一部が調査区域外にかかるため全形は不明だが、直径40cmの円形を呈したと思われ深さ9cmを測る。B6-4号ピットは一辺49cmの方

形を呈し深さ6cmを測る。B6-5号ピットは一辺16cmの方形を呈し深さ10cmを測る。B6-6号ピットは攪乱によって一部を壊されているが、直径36cmの円形を呈したものとわれ、深さ3cmを測る。B6-7号ピットは共同溝の掘り方によって一部を破壊されている。残存する部分は三角形に近い形状となるが本来の形は不明である。深さ16cmを測る。B6-8号ピットはB6-1号・2号ピットによって切られ一部調査区域外にかかる。楕円形を呈していたと思われ深さは10cmを測る。B6-9号ピットは攪乱に東側を壊されているが、残存部からすると瓢箪形を呈していたものであろうか。深さ11cmを測る。B6-10号ピットも攪乱によって一部を失っているが直径30cm程の円形を呈していたと思われ、深さは10cmを測る。B6-11号ピットは42×33cmの長方形を呈し深さ46cmを測る。東壁に寄って礎石を持つ。B6-1号土坑は東側が調査区域外にかかるが、現存で東西90cm南北50cmを測る長方形の土坑で深さは8cmと浅い。B6-3号土坑は北側を攪乱によって破壊されている。東西120cm南北67cmの長方形の土坑と思われ、深さ40cmを測る。B6-11号ピットに切られている。B6-4号土坑は楕円形を呈したと思われるがB6-11号ピット・B6-3号土坑によって東側を壊されているため全形は不明である。現存で長軸58cm、深さ8cmを測る。C5-6号ピットは35×29cmの楕円形を呈し深さ30cmを測る。C6-1号ピットは直径20cmの円形を呈し深さ16cmである。C6-2号ピットはC6-3号土坑によって切られるスリバチ状のピットで、直径30cmの円形を呈すると思われる。深さは現存で16cmを測る。C6-3号ピットは直径7cmの円形で深さ27cmを測る。C6-4号ピットは19×16cmの長方形を呈し、深さ20cmを測る。C6-3号ピットによって切られている。C6-5号ピットは一辺20cmの方形を呈し、深さ20cmを測る。C6-6号ピットは直径16cmの円形を呈し、深さ5cmである。C6-7号ピットは24×22cmの不整形を呈し、深さ13cmを測る。C6-8号ピットは深さ8cm、一辺15cmの方形を呈すると思われるが東側をC6-7号ピットに切られている為東西に長い長方形であった可能性もある。覆土中に瓦の小片が含まれていた。C6-9号ピットは深さ25cm、一辺18cmの方形を呈する。C6-10号ピットは16×13cmの方形で、深さ25cmを測る。C6-9号ピット・C6-10号ピットの2基は鉄釘を出土している。C6-11号ピットは攪乱によって北側を破壊されている。現存で東西51cmを測り、恐らくは円形を呈したであろう。深さは20cmである。C6-12号ピットは24×19cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。陶磁器の小破片を出土している。C6-15号ピットは27×24cmの隅丸方形を呈し、深さ20cmを測る。C6-3号土坑は南側を共同溝によって破壊されており全体は不明だが、恐らく円形を呈したと思われる。現存で東西200cm、深さ40cmを測る。陶磁器を出土している。

#### 第60図

D5-1号ピットは直径35cmの円形を呈し深さ14cmを測る。D5-2号ピットは27×23cmの楕円形を呈し深さ38cmを測る。D5-3号ピットは40×28cmの楕円形を呈し深さ11cmを測る。D5-4号ピットは56×53cmの不整形を呈し深さは8cmである。D5-5号ピットは直径39cmの円形を呈し深さは13cmである。D5-6号ピットは40×25cmの隅丸方形を呈し深さ

36cmを測る。C 6—13号ピットは60×24cmの細長い五角形を呈し、深さ15cmを測る。C 6—14号ピットは直径6 cmの円形を呈し深さ5 cmを測る。C 6—13号ピットを切っている。D 6—1号ピットは直径20cmの円形を呈し深さ50cmを測る。坑底は二段になっている。瓦の小破片を出土している。D 6—2号ピットは35×20cmの隅丸長方形を呈し深さ14cmを測る。D 6—3号ピットは26×21cmの楕円形を呈し深さは10cmである。D 6—4号ピットは直径24cmでほぼ円形を呈し深さは6 cmである。D 6—5号ピットは28×18cmの楕円形を呈し深さ25cmを測る。D 6—8号ピットは北側を攪乱によって破壊されているが、残存部分からみて直径45cm前後のほぼ円形を呈していたものと思われ、深さは10cmを測る。

#### 第61図

B 5—3号ピットはC 5—1号土坑によって切られる。一辺12cm程のほぼ方形を呈していたと思われる。深さは8 cmである。C 5—4号ピットはC 5—3号ピットと攪乱によって東西端を破壊されており全形は不明であるが、現状から考えて細長い楕円形を呈していたものと思われる。現状で東西方向の長さ46cm、深さ19cmを測る。

#### 第63図

E 5—1号ピットは21×18cmの楕円形を呈し深さ18cmを測る。E 5—2号ピットは20×16cmの長方形を呈し深さ12cmを測る。坑底は二段になっている。D 5—7号ピットは21×16cmの長方形を呈し深さ12cmを測る。坑底は二段になっている。D 5—7号ピットは21×16cmの長方形を呈し深さは12cmを測る。E 5—6号ピットは23×17cmの長方形を呈し深さ12cmである。D 6—6号ピットは20×16cmの長方形で深さ12cmを測る。D 6—7号ピットは42×25cmの不整形で深さ15cmである。E 6—2号ピットは12×15cmの長方形を呈し深さ5 cmを測る。E 6—5号ピットは一辺12cmの方形を呈し深さは4 cmである。E 6—6号ピットは58×43cmの不整形を呈し深さ10cmを測る。瓦片を出土している。E 6—7号ピットは20×18cmの台形を呈し深さ20cmである。E 6—8号ピットは直径6 cmの円形を呈し深さ11cmである。E 6—14号ピットは北側を攪乱によって破壊されているが、直径30cm前後のほぼ円形の平面形を呈すると思われる。深さは5 cmと浅い。E 6—1号土坑は南側を共同溝によって破壊されているが、残存部から考えて円形の平面形を呈していたと思われる。現状で東西325cmを測る。覆土は砂利を多量に含んでいた。

#### 第64図

E 5—3号ピットは21×18cmの台形を呈し深さ30cmを測る。E 5—4号ピットは57×54cmの隅丸長方形を呈し深さ10cmである。E 5—5号ピットは北側が調査区域外にかかり、西側でF 5—2号ピットに切られている。恐らくは方形を呈していたと思われ、現状の各辺20cm深さ27cmを測る。F 5—2号ピットは直径31cmの円形を呈し深さ30cmである。E 5—5号ピットを切っている。F 5—8号ピットは60×39cmを測る楕円形を呈し深さ30cmである。ピット内から石を検出しているが、坑底から浮いているため礎石か否かは不明である。F 5—10号ピットを切っ

ている。F 5-9号ピットは南側を攪乱によって破壊されている。方形もしくは長方形と思われ、現状で東西28cm、深さ19cmを測る。F 5-10号ピットは37×29cmの長方形を呈し深さ45cmを測る。坑底に密着して一辺約20cm、厚さ5cmの方形の礎石を検出している。E 6-1号ピットは25×20cmの長方形を呈し深さ30cmを測る。E 6-3号ピットは45×30cmの隅丸方形を呈し深さ14cmを測る。E 6-4号ピットは15×20cmの長方形を呈し深さ10cmである。E 6-9号ピットは直径5cm深さ12cmの円形の杭穴で坑底が尖っている。E 6-10号ピットは6×3cmの楕円形を呈し深さ12cmを測る、やはり坑底が尖る杭穴と思われる。E 6-11号ピットは直径18cmの円形を呈し深さ7cmを測る。E 6-12号ピットは22×14cmの長方形を呈し深さ13cmを測る。瓦片を出土している。E 6-13号ピットは一辺5cm深さ15cmの方形の杭穴で坑底が尖る。E 6-15号ピットは一辺15cmの方形を呈し深さ15cmである。E 6-16号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ10cmを測る。E 6-10号ピット等と比べてやや太いが、坑底に向かって著しく窄まっているので丸杭の杭穴かと思われる。F 6-4号ピットは22×20cmの長方形を呈し深さ15cmである。F 6-6号ピットは22×19cmの楕円形を呈し深さ25cmを測る。

#### 第65図

F 5-3号ピットは32×26cmの楕円形を呈し深さ10cmである。F 5-4号ピットは23×19cmの楕円形を呈し、深さ29cmを測る。F 5-5号ピットは24×19cmの長方形を呈し深さ29cmを測る。F 5-6号ピットは30×28cmの円形を呈し深さ8cmを測る。F 5-7号ピットは26×25cmの隅丸方形を呈し深さ23cmである。F 5-11号ピットは48×35cmの長方形を呈する。坑底は二段になっており深いほうで30cmを測る。浅いほうの坑底に20×13cm、厚さ5cmの長方形の礎石が密着している。F 5-12号ピットはF 6-6号ピットに切られるが現存で南北82cm東西62cm、深さ70cmを測る。長方形を呈する。F 6-1号ピットは北側を攪乱に切られる。現状で50×37cmの楕円形を呈するが東側から北側にかけて壁が緩やかに広がっているため、攪乱に切られた部分がより北方に延びて坑底が二段になっていた可能性もあろう。深さは83cmである。F 6-2号ピットは33×28cmのほぼ円形を呈し深さ8cmを測る。F 6-3号ピットは15×13cmの長方形を呈し深さ15cmを測る。以上のF 6-1号～3号の3基はG 6-1・4号土坑を切っている。F 6-6号ピットは中央を東西に攪乱によって破壊されているが南北両端が残っており62×52cmの長方形を呈することが判る。深さは44cmを測り、坑底からやや浮いて15×13cm、厚さ5cmの礎石と思われる石を検出した。F 5-12号ピットを切っている。G 6-15号ピットは一辺4cmの方形を呈し深さ4cmを測る。杭穴と思われる。G 6-19号ピットは直径5cmのほぼ円形を呈し深さ13cmを測る。

#### 第68図

G 5-4号ピットは68×62cmのほぼ円形を呈し深さ36cmを測る。坑底の東西の壁際に直径25cm前後の円形の小ピットがある。G 5-5号ピットは30×22cmの楕円形を呈し深さ34cmを測る。G 6-1号ピットは直径8cmの円形を呈し深さ12cmを測る。G 6-2号ピットは直径6



cmの円形を呈し深さ13cmを測る。G 6-3号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ13cmを測る。G 6-4号ピットは直径6cmの円形を呈し深さ4cmである。以上G 6-1号~4号の4基は坑底が尖り気味で径が細い。丸杭の杭穴と思われる。G 6-5号ピットは20×13cmの長方形を呈し深さ10cmを測る。G 6-6号ピットはG 6-7号ピットに南半を切られているが直径20cmの円形を呈していたと思われる。深さは15cmを測る。G 6-7号ピットはG 6-6号ピットをきる44×34cmの長方形を呈し深さ60cmである。G 6-8号ピットは30×24cmの長方形を呈し深さ55cmである。G 6-10号ピットは6×4cmの長方形を呈し深さ3cmである。G 6-11号ピットは一辺5cmの方形を呈し深さ8cmを測る。G 6-12号ピットは一辺4cmの方形を呈し深さ9cmを測る。G 6-13号ピットは一辺5cmの方形を呈し深さ11cmを測る。G 6-14号ピットは一辺4cmの方形を呈し深さ5cmを測る。以上G 6-10号~14号の5基は坑底が尖り、角杭の杭穴と思われる。G 6-16号ピットは23×20cmの長方形を呈し深さ26cmを測る。G 6-17号ピットは45×35cmの楕円形を呈し深さ22cmである。G 6-18号ピットは直径5cmの円形を呈し深さ13cmである。丸杭の杭穴と思われる。G 6-20号ピットは25×25cmの隅丸台形を呈し深さ22cmを測る。

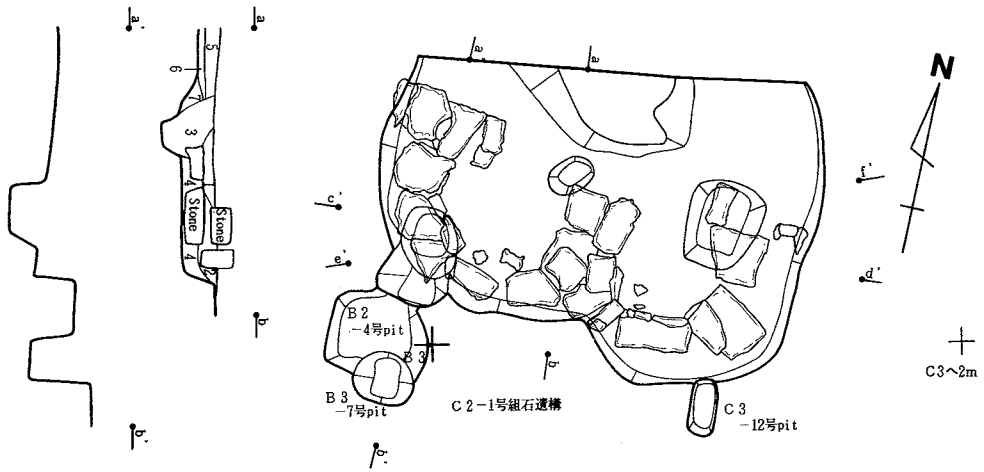
第66・67図

F 5-1号ピットは短辺19cmの長方形を呈すると思われるが北側が発掘区外にかかるため全形は不明である。深さは15cmを測る。G 5-1号溝を切っている。G 5-3号ピットは44×22cmの長方形を呈し深さ25cmを測る。坑底は二段になっている。G 5-2号ピットはG 5-3号土坑に北側を切られ全形は不明である。現存で東西27cm 深さ33cmを測る。

第77図

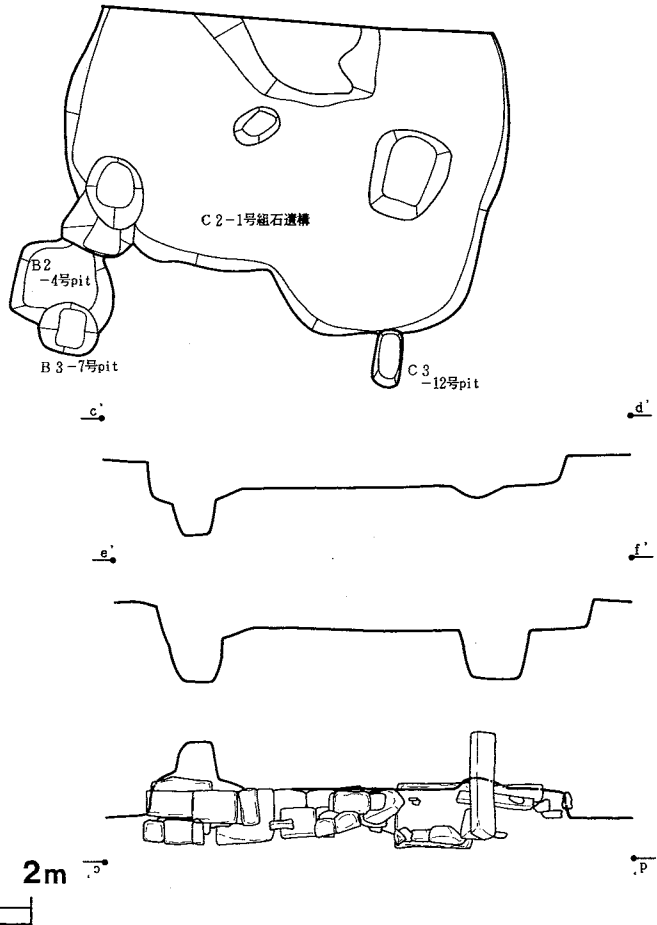
J 5-3号土坑はJ 5-2号土坑、K 5-4号土坑に切られ、J 5-1号ピットを切っている。現状からみて直径100cm弱の円形を呈していたと思われ、深さは10cmである。J 5-1号ピットはJ 5-2号土坑、K 5-4号土坑、J 5-3号土坑に切られる長方形を呈していたと思われる。短辺32cm 長辺は現存で80cmを測り、深さは20cmである。K 5-1号ピットは南側が調査不能区域にかかるため全形は不明であるが、恐らく隅丸長方形を呈したと思われる。短辺50cm 長辺は現存で58cm、深さ7cmを測る。

(菅谷 通保)



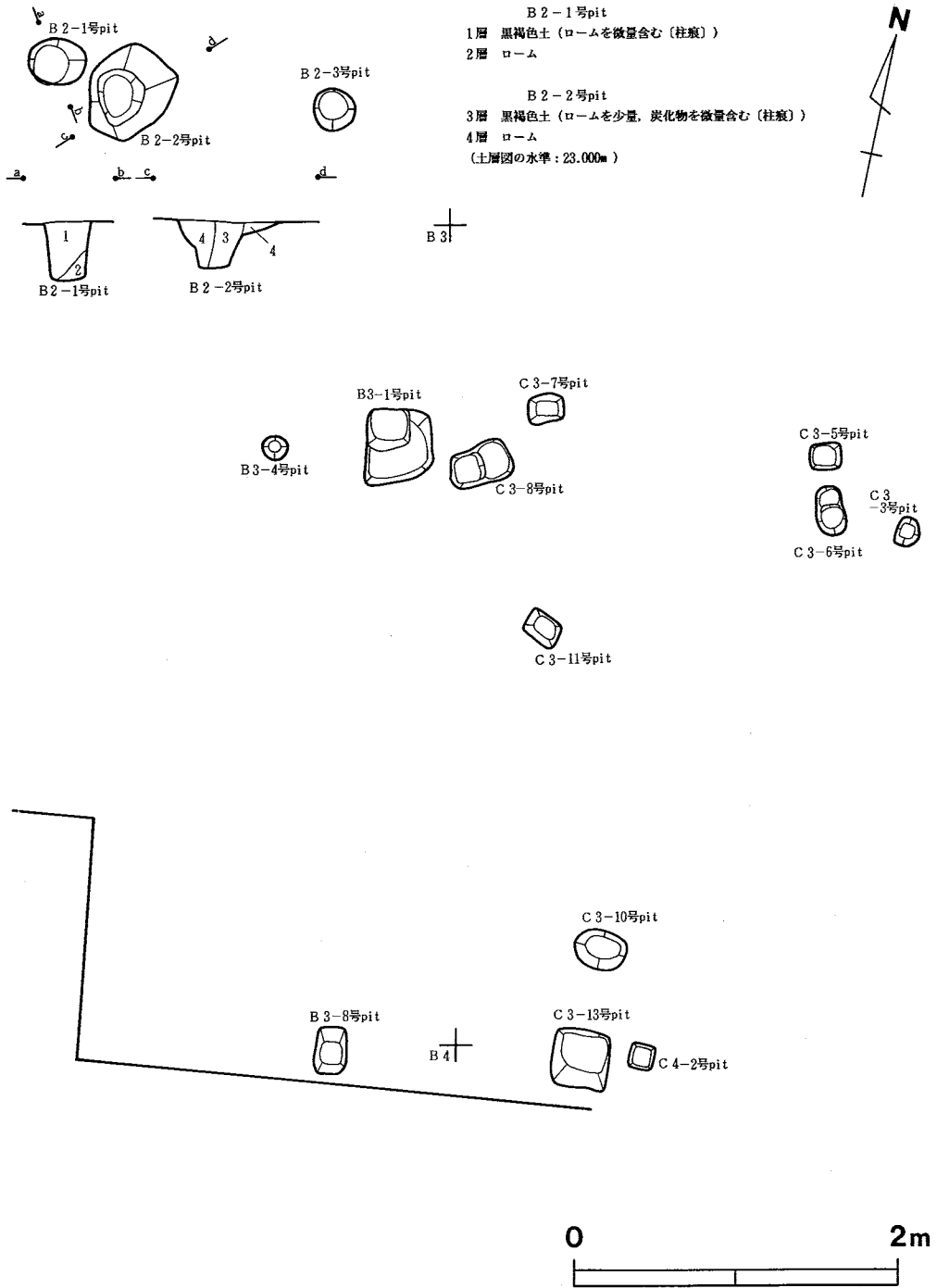
C2-1号組石遺構

- 1層 焼土層
  - 2層 青色粘土層
  - 3層 暗褐色土層 (礫を含む)
  - 4層 粘土層 (暗褐色土を微量含む)
  - 5層 粘土層 (炭化物を多量、小石を少量含む)
  - 6層 炭化物層 (粘土を微量含む)
  - 7層 黄色土層
- (土層図の水準：23.000m)

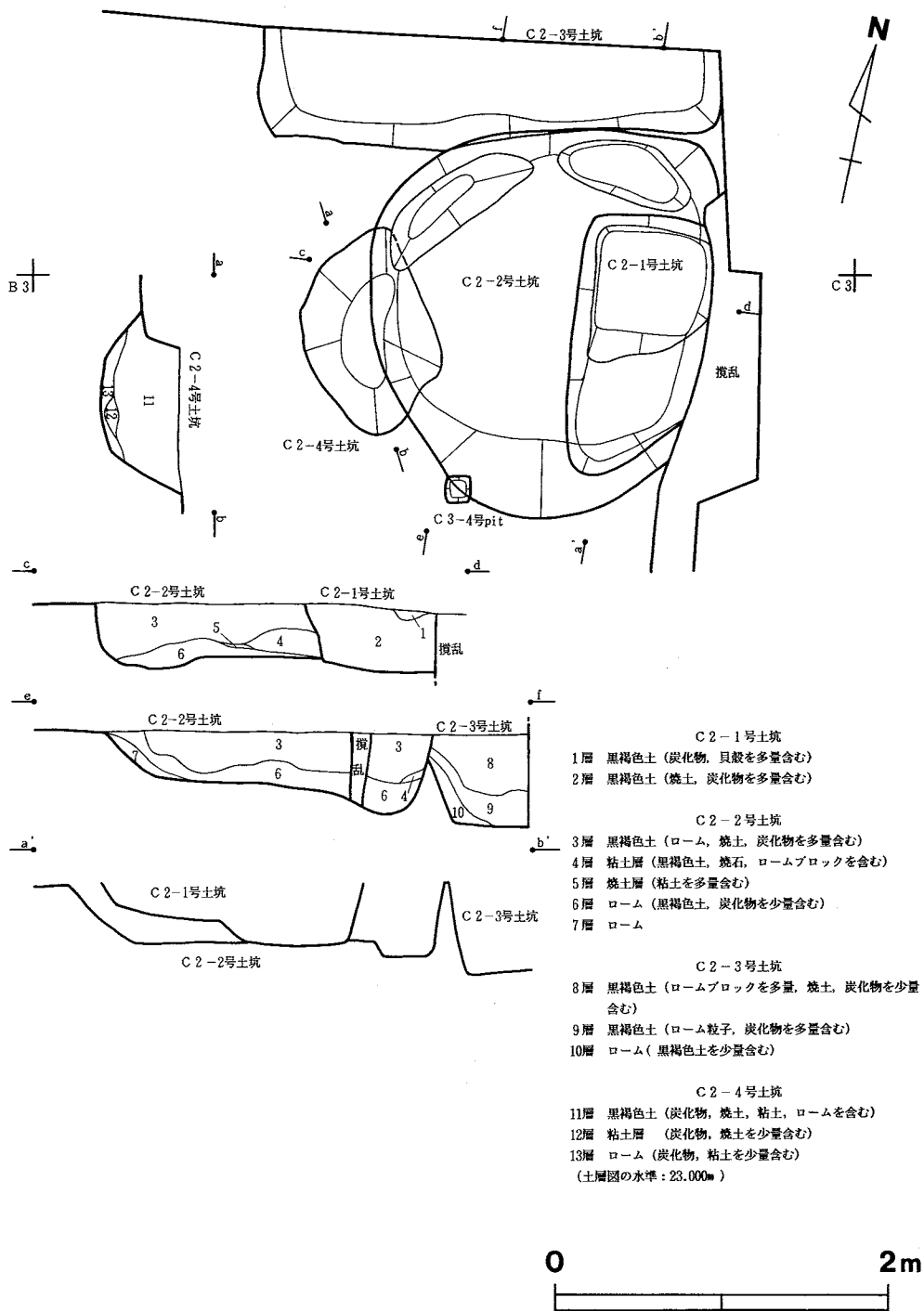


第48図 B~I=2~6区の遺構(1)

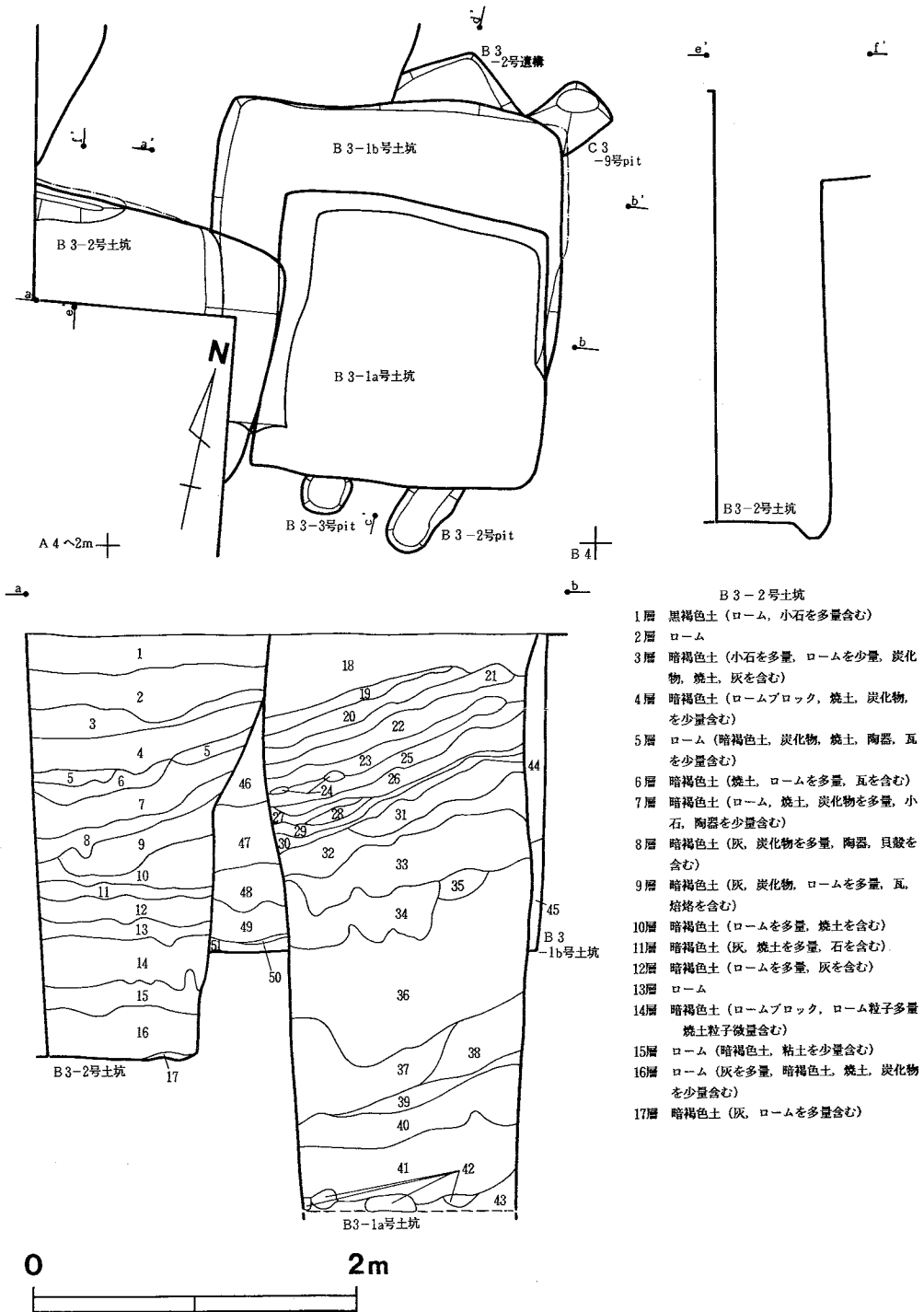
報告篇第三章 江戸時代の調査 I



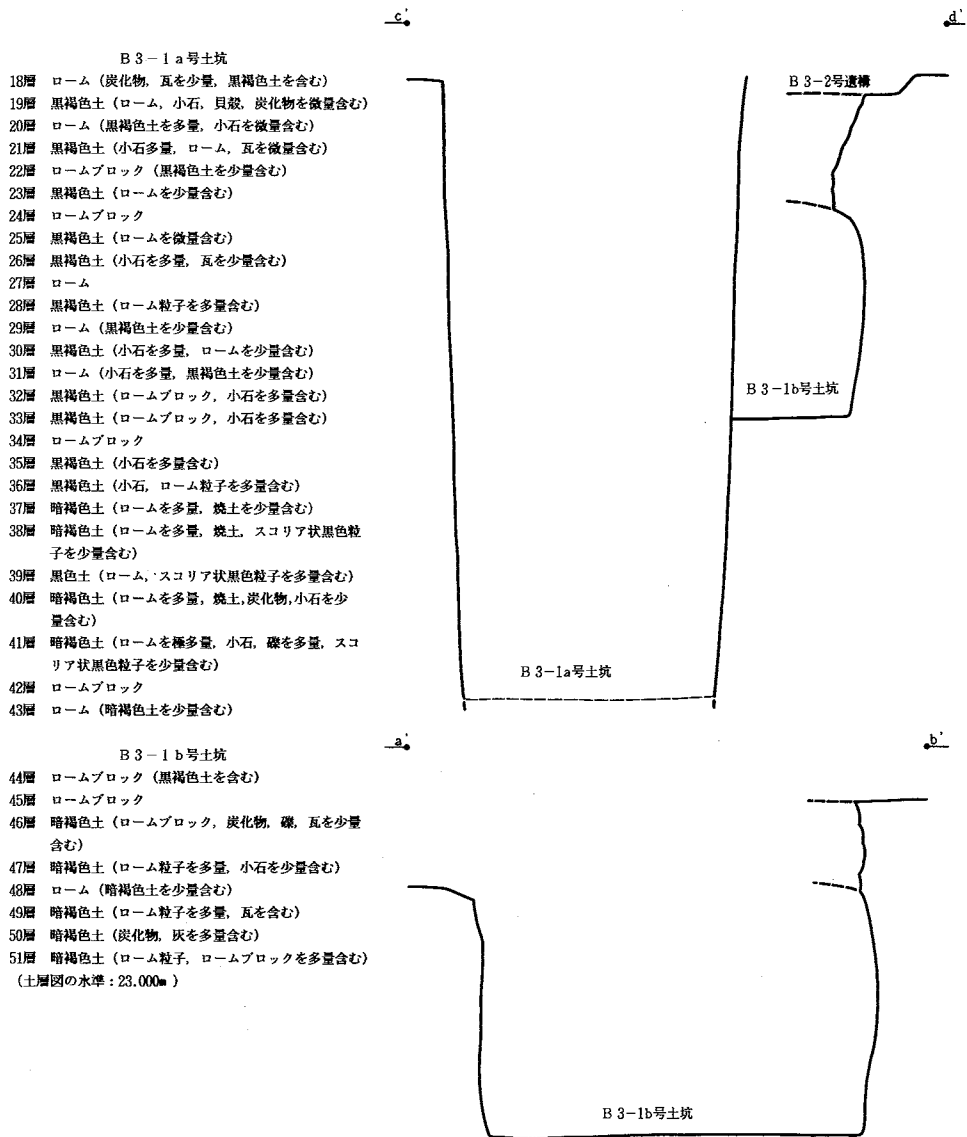
第49図 B~I=2~6区の遺構(2)



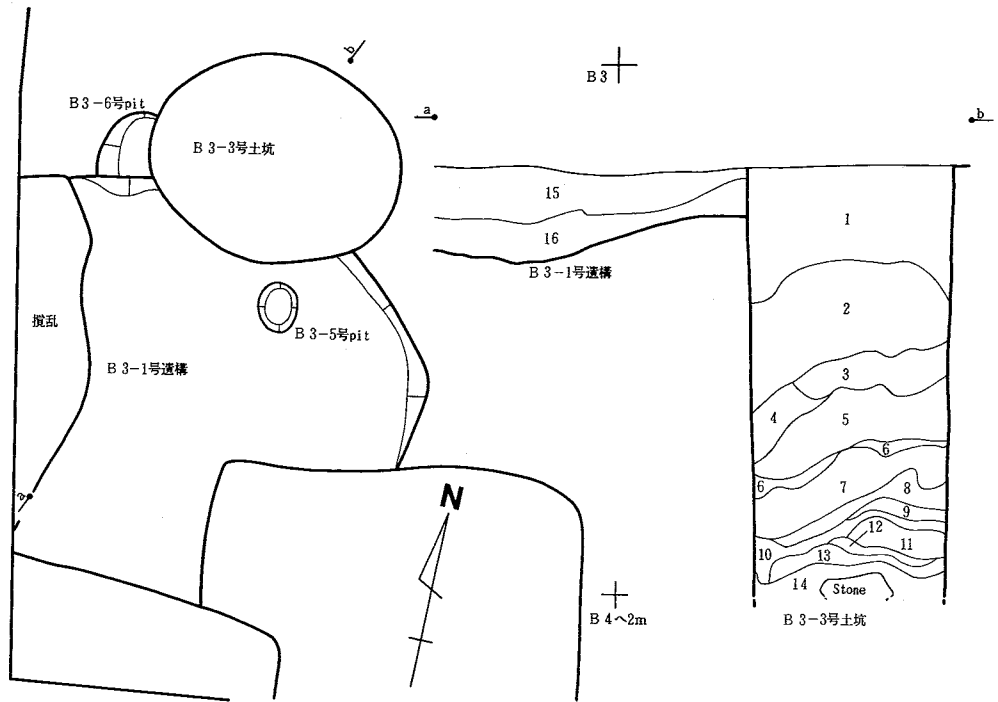
第50図 B～I = 2～6区の遺構(3)



第51図 B~I=2~6区の遺構(4)



第52図 B~I = 2~6区の遺構(5)



B 3 - 3号土坑

- 1層 黒褐色土 (瓦を多量, 炭化物を微量含む)
- 2層 黒褐色土 (ローム, 瓦, 陶器を含む)
- 3層 黒褐色土 (ロームを多量, 焼土を少量含む)
- 4層 黒褐色土 (ロームブロック, ローム粒子を多量, 焼土を少量含む)
- 5層 黒褐色土 (炭化物, 焼土を多量, 小石を少量含む)
- 6層 焼土 (黒褐色土を少量含む)
- 7層 黒褐色土 (焼土, 炭化物, ロームを多量含む)
- 8層 黒褐色土 (焼土, 炭化物を多量含む)
- 9層 黒褐色土 (炭化物, 焼土を多量含む)
- 10層 黒褐色土 (焼土, 炭化物を多量含む)
- 11層 黒褐色土 (ロームブロックを多量, 瓦を少量, 焼土, 炭化物を含む)
- 12層 黒褐色土 (炭化物, 焼土, ロームを多量含む)
- 13層 炭化物 (黒褐色土を少量含む)
- 14層 暗褐色土 (ローム粒子を多量, 小石を少量含む)

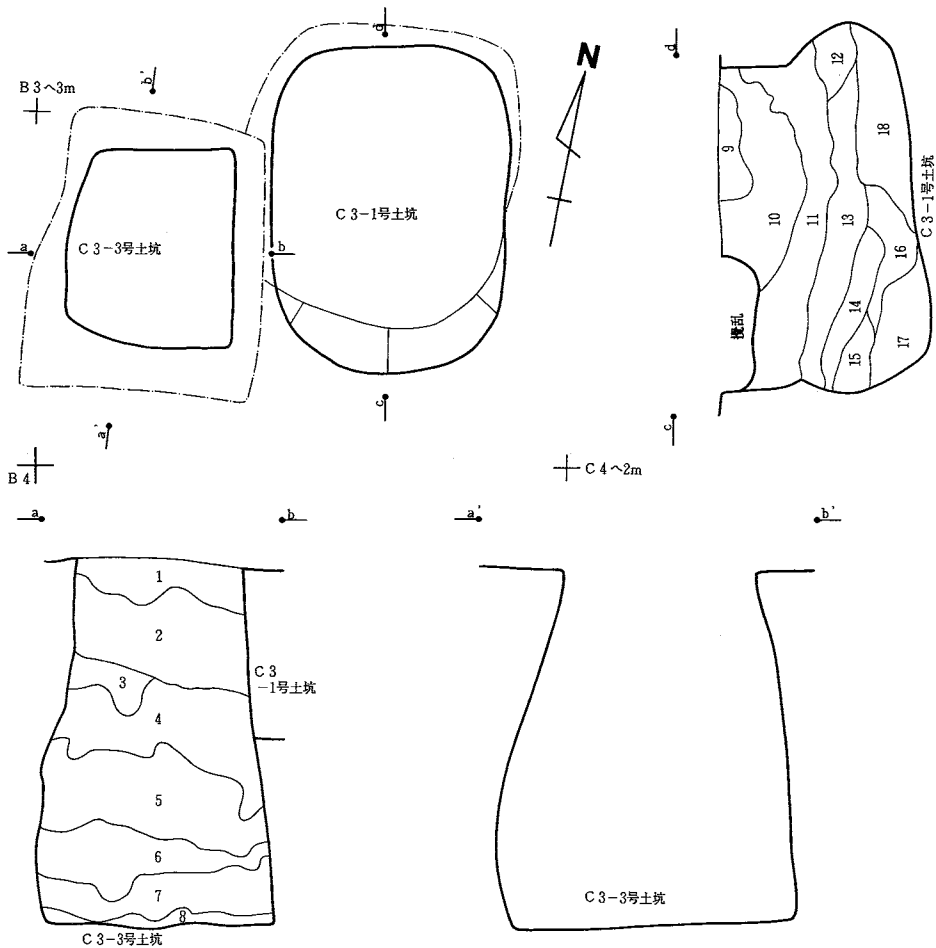
B 3 - 1号遺構

- 15層 黒褐色土 (ロームブロック, ローム粒子, 小石を多量含む)
- 16層 ローム

(土層図の水準: 23.000m)

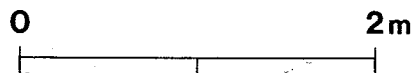


第53図 B~I = 2~6区の遺構(6)



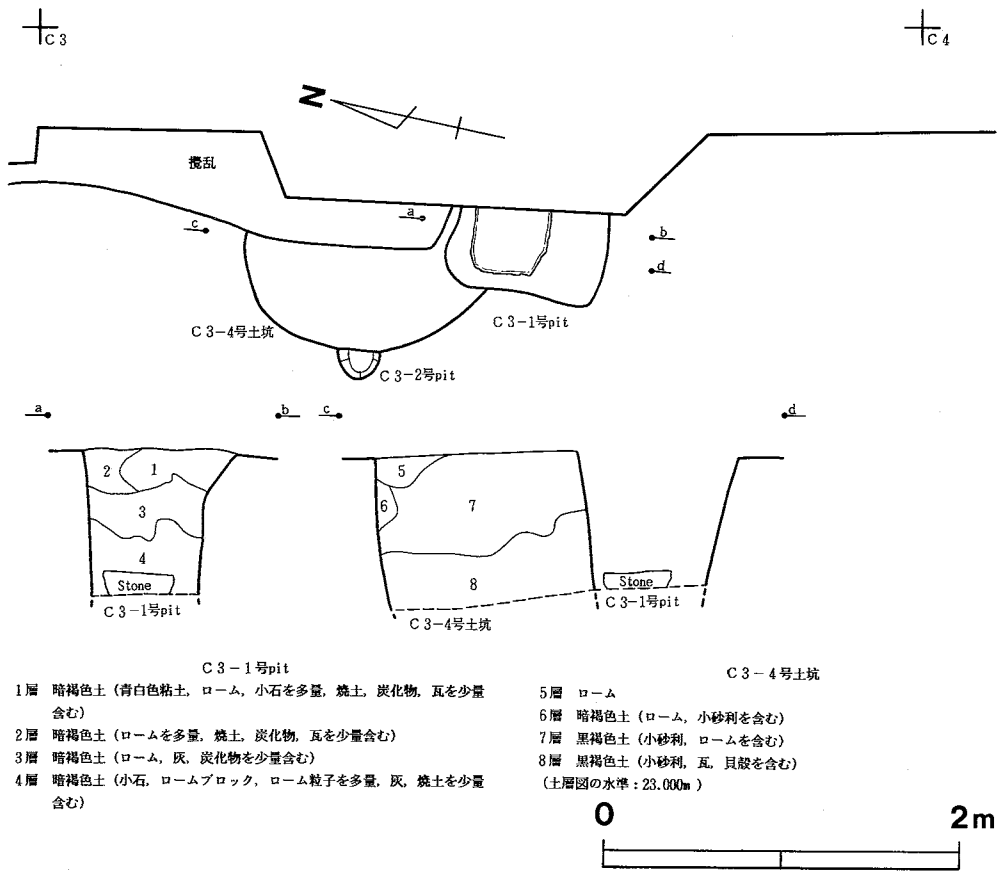
- C3-3号土坑
- 1層 暗褐色土 (小石, 焼土を多量, ローム粒子を少量含む)
  - 2層 暗褐色土 (小石, ローム, スコリア状黒色粒子を多量, 炭化物, 焼土を微量, 瓦を含む)
  - 3層 暗褐色土 (ロームブロック, ローム粒子, スコリア状黒色粒子を多量, 炭化物, 小石を微量, 瓦を含む)
  - 4層 暗褐色土 (ロームブロック, ローム粒子, スコリア状黒色粒子を多量, 小礫, 炭化物, 焼土を微量含む)
  - 5層 暗褐色土 (スコリア状黒色粒子を多量, 焼土, 炭化物を微量, ロームを含む)
  - 6層 暗褐色土 (ロームを多量, 炭化物, 焼土を微量含む)
  - 7層 暗褐色土 (ロームを多量, 瓦, 炭化物, 粘土を微量含む)
  - 8層 暗褐色土 (ロームブロック, ローム粒子を大量, 炭化物, 粘土を微量含む)

- C3-1号土坑
- 9層 黒褐色土 (焼土を少量, ローム, 小石を含む)
  - 10層 ローム
  - 11層 暗褐色土 (ローム, 粘土を多量, 炭化物を少量含む)
  - 12層 暗褐色土 (ローム粒子を多量含む)
  - 13層 暗褐色土 (粘土を極多量, ロームを多量, かわらけ, 瓦を含む)
  - 14層 ローム (焼土, 炭化物を少量含む)
  - 15層 暗褐色土 (ロームを多量, 焼土, 炭化物, 貝殻, 陶器を多量含む)
  - 16層 暗褐色土 (焼土, 炭化物を多量, ロームを含む)
  - 17層 ローム (黒褐色土を多量, 炭化物, 焼土を多量含む)
  - 18層 ローム (炭化物, 焼土を多量, 灰を含む)
- (土層図の水準: 23.000m)



第54図 B ~ I = 2 ~ 6 区の遺構(7)

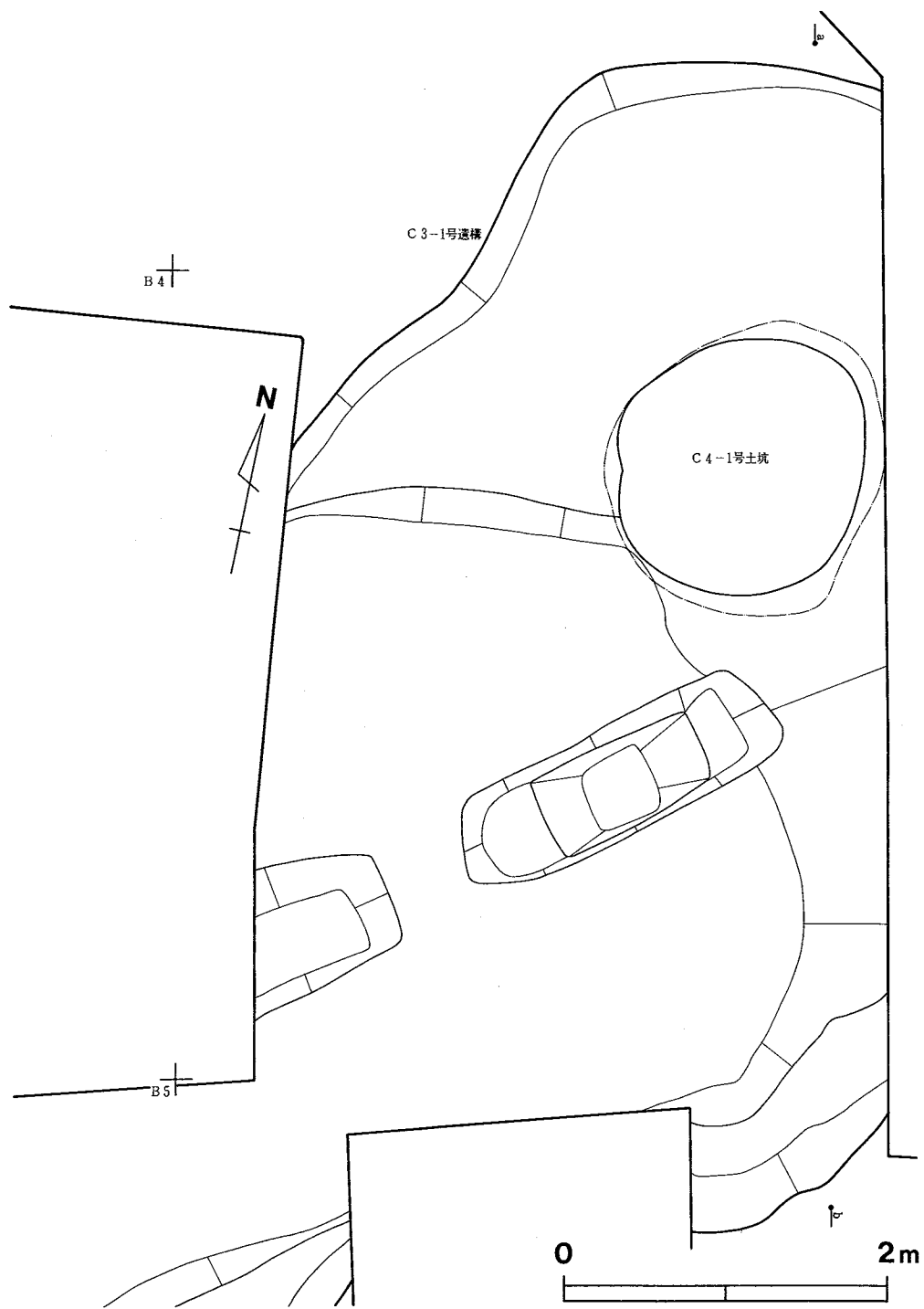




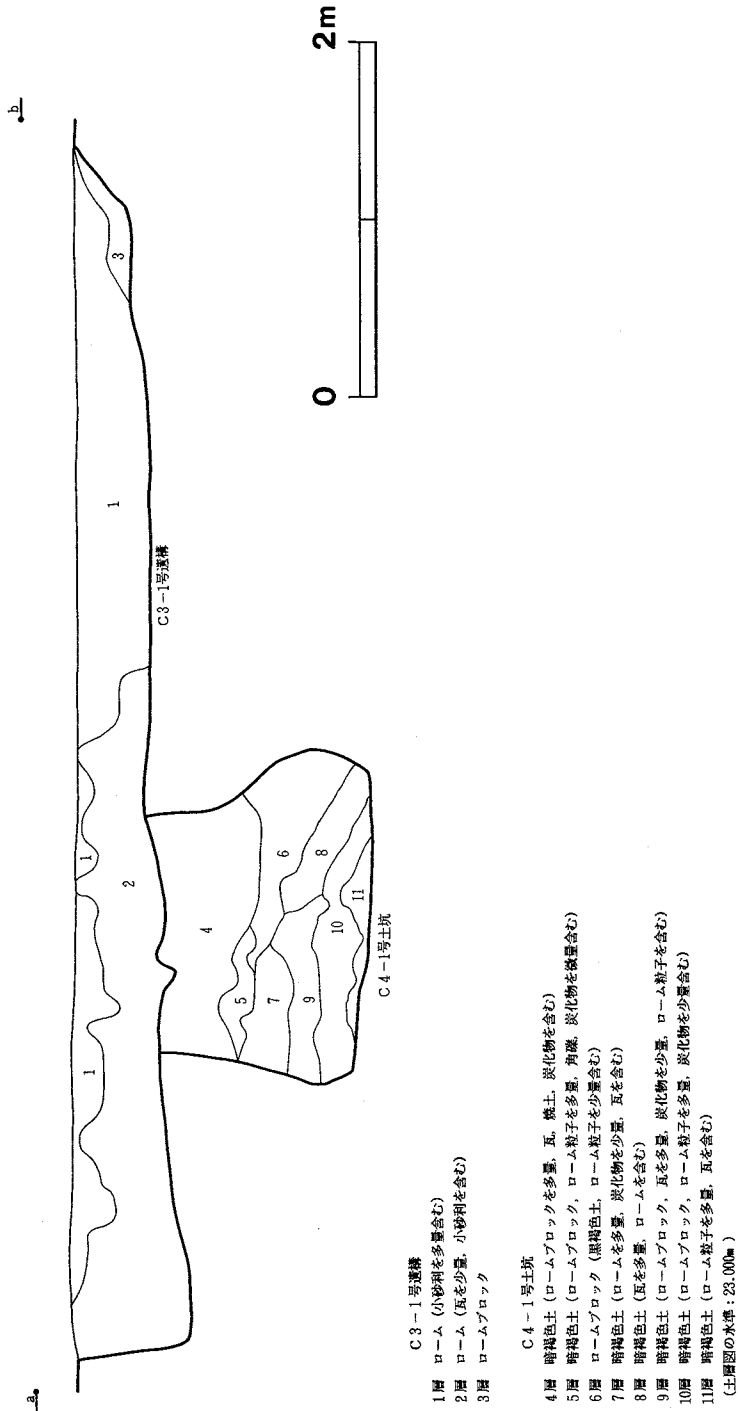
- C3-1号pit
- 1層 暗褐色土 (青白色粘土, ローム, 小石を多量, 焼土, 炭化物, 瓦を少量含む)
  - 2層 暗褐色土 (ロームを多量, 焼土, 炭化物, 瓦を少量含む)
  - 3層 暗褐色土 (ローム, 灰, 炭化物を少量含む)
  - 4層 暗褐色土 (小石, ロームブロック, ローム粒子を多量, 灰, 焼土を少量含む)

- C3-4号土坑
- 5層 ローム
  - 6層 暗褐色土 (ローム, 小砂利を含む)
  - 7層 黒褐色土 (小砂利, ロームを含む)
  - 8層 黒褐色土 (小砂利, 瓦, 貝殻を含む)
- (土層図の水準: 23.000m)

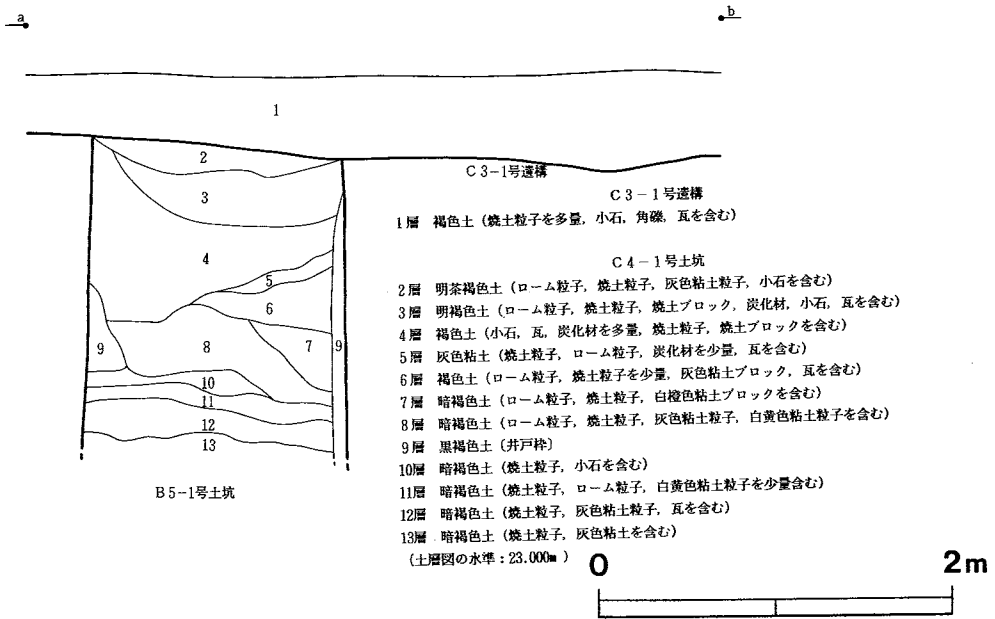
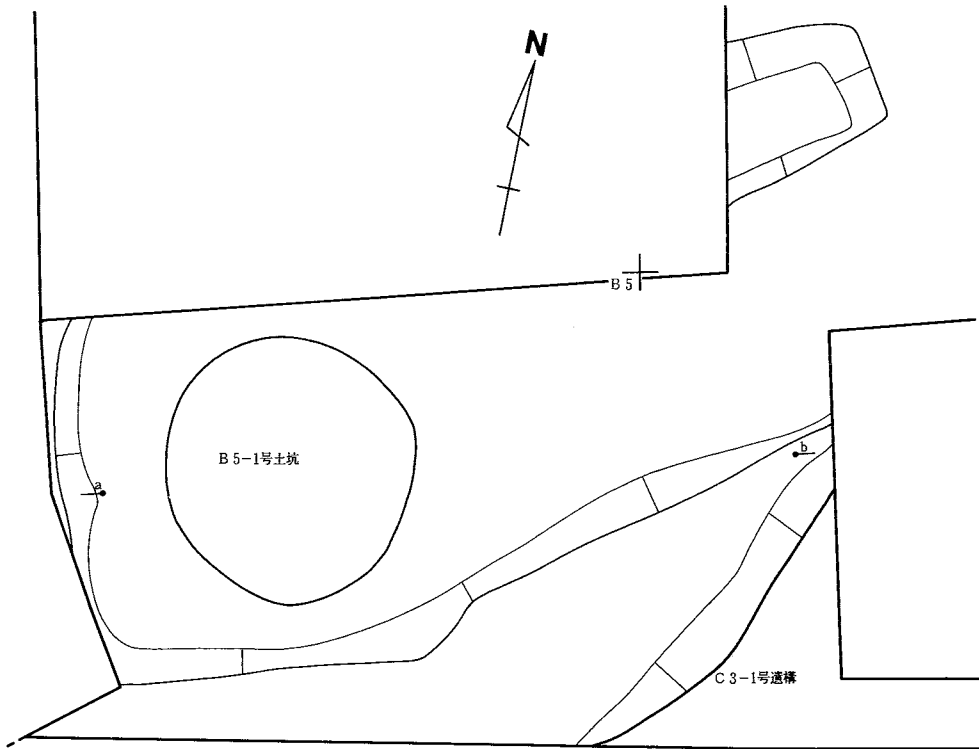
第55図 B~I = 2~6区の遺構(8)



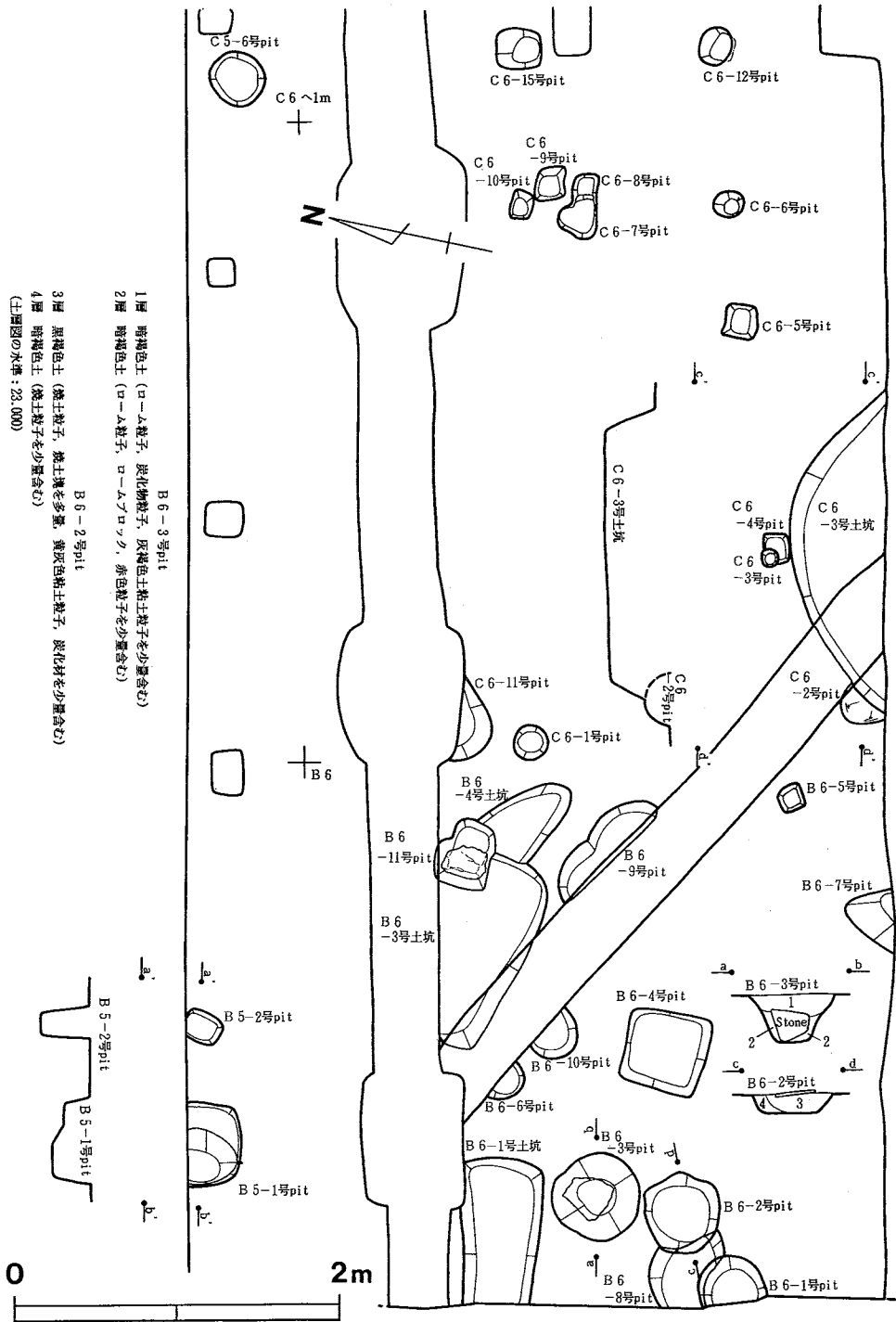
第56図 B～I = 2～6区の遺構(9)



第57図 B~I = 2~6区の遺構(10)

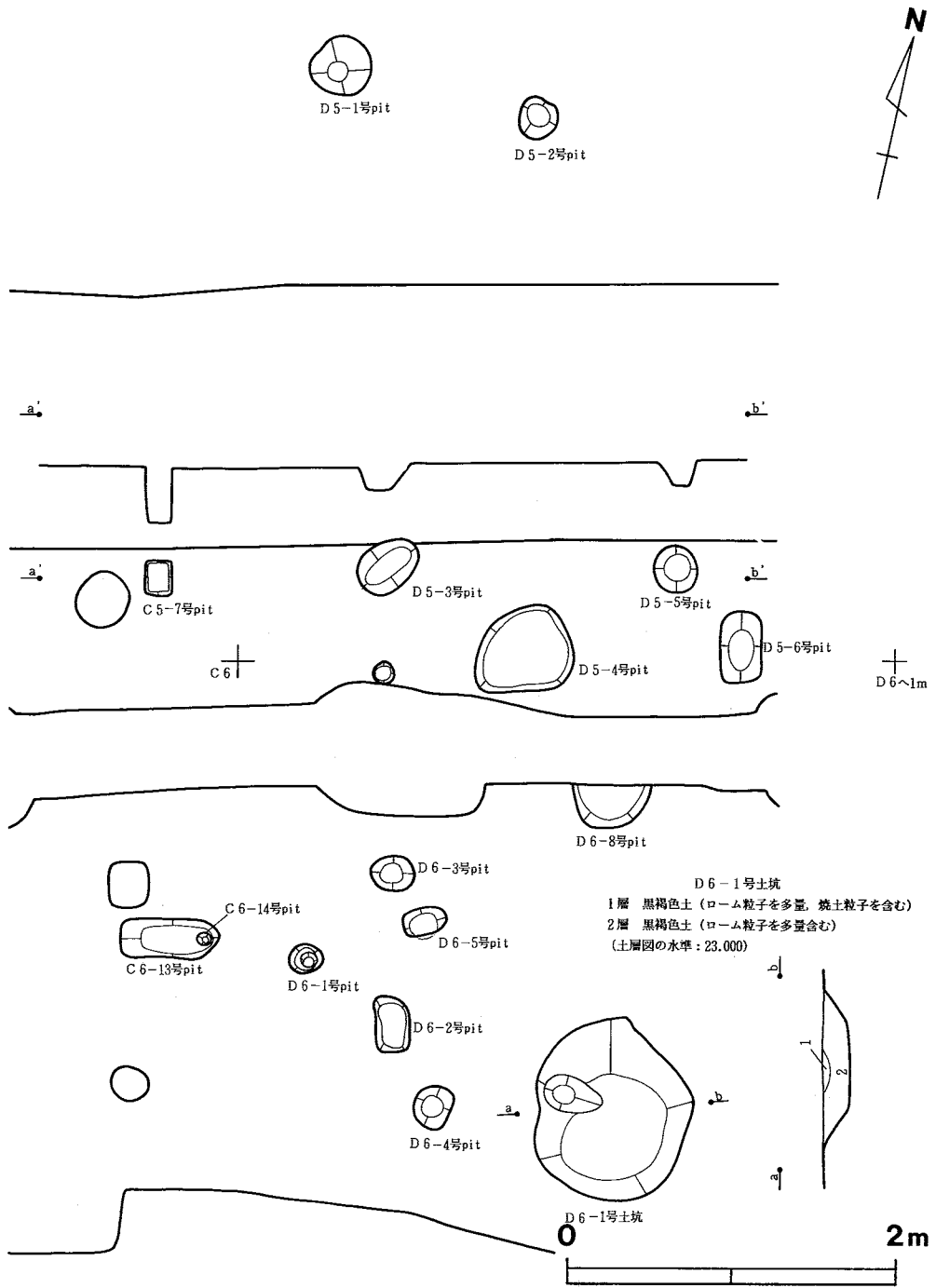


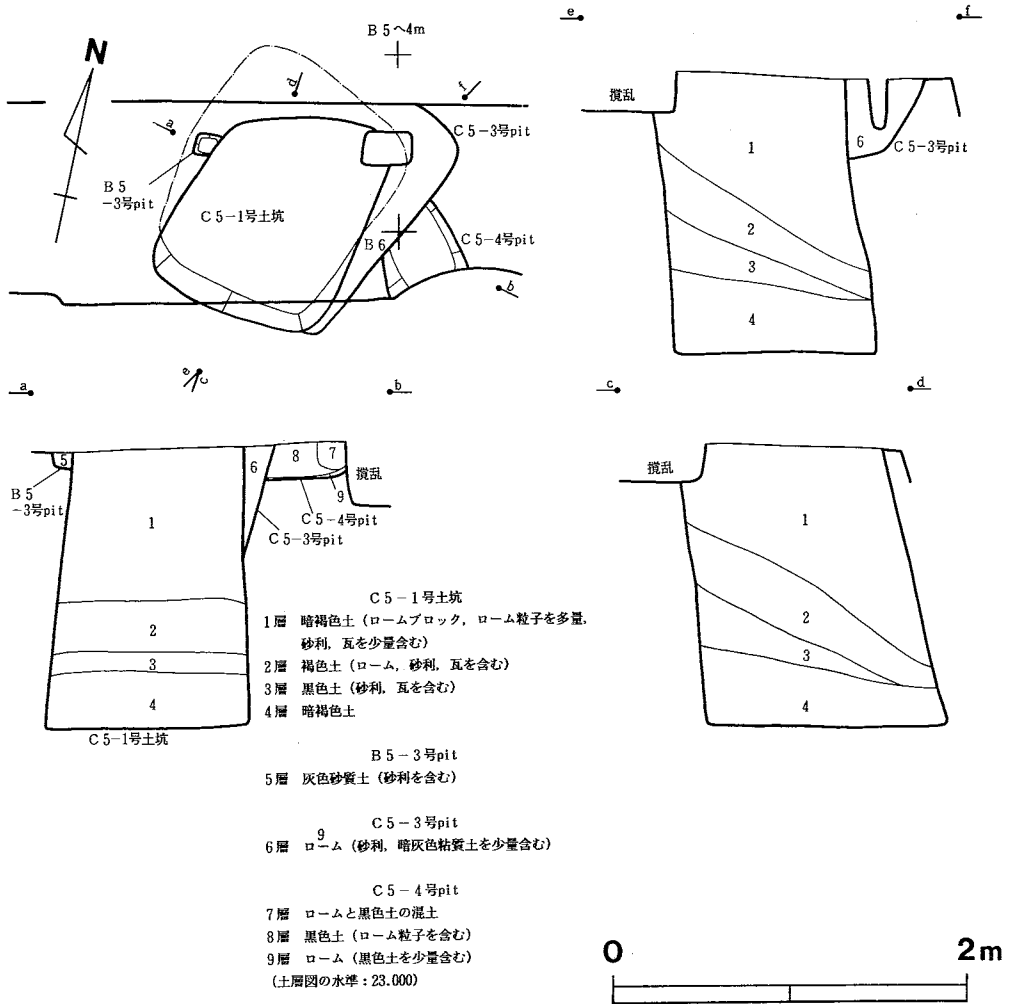
第58図 B ~ I = 2 ~ 6 区の遺構(11)



- B 6-3号pit  
1層 暗褐色土 (ローム粒, 炭化物粒, 灰褐色土粒を少量含む)  
2層 暗褐色土 (ローム粒, ロームアロワ, 赤色粒を少量含む)
- B 6-2号pit  
3層 黒褐色土 (黄土粒, 黄土塊を多量, 黄灰色黄土粒, 炭化材を少量含む)  
4層 暗褐色土 (黄土粒を少量含む)  
(土層図の水準: 23.000)

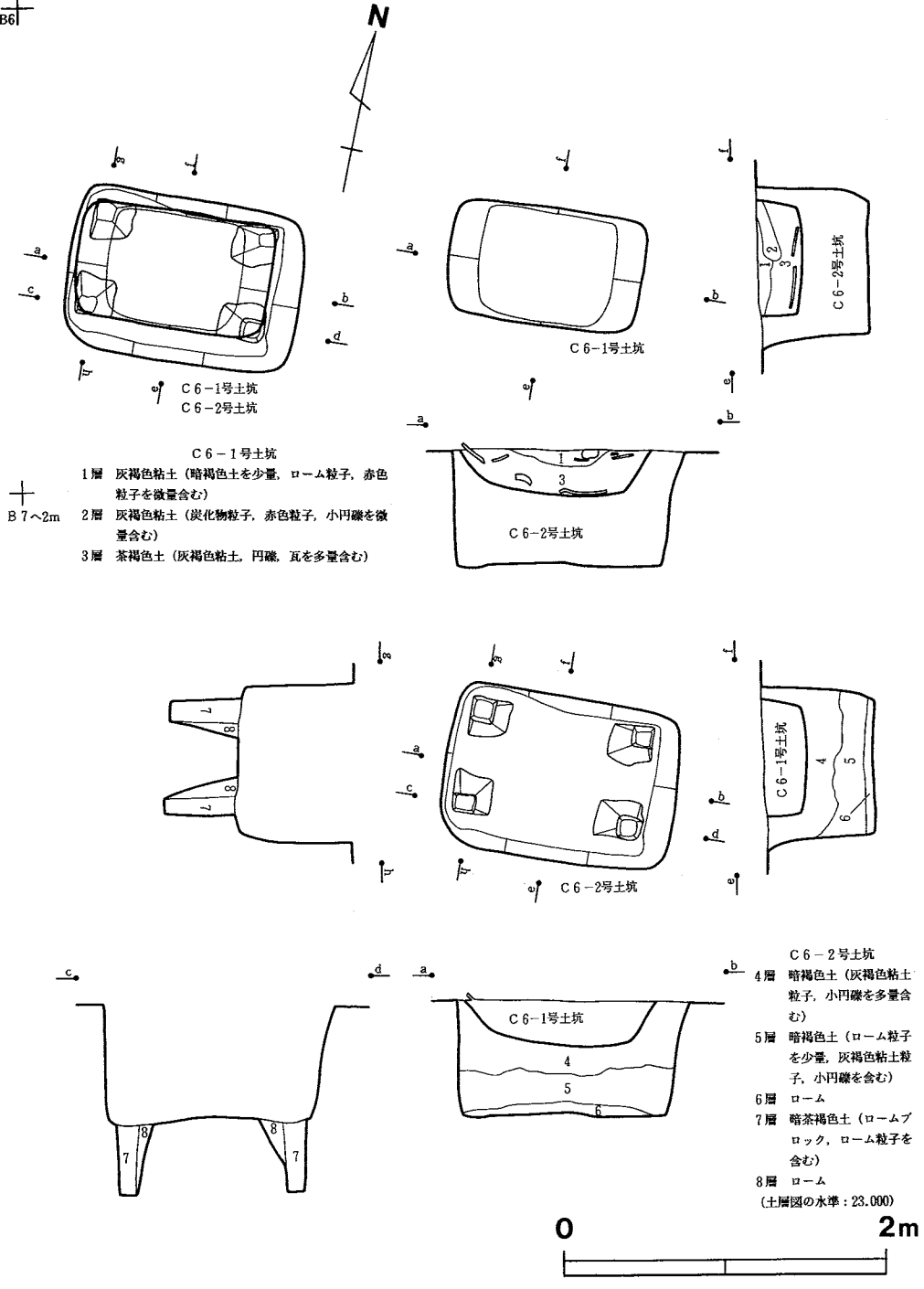
第59図 B-I=2~6区の遺構(12)





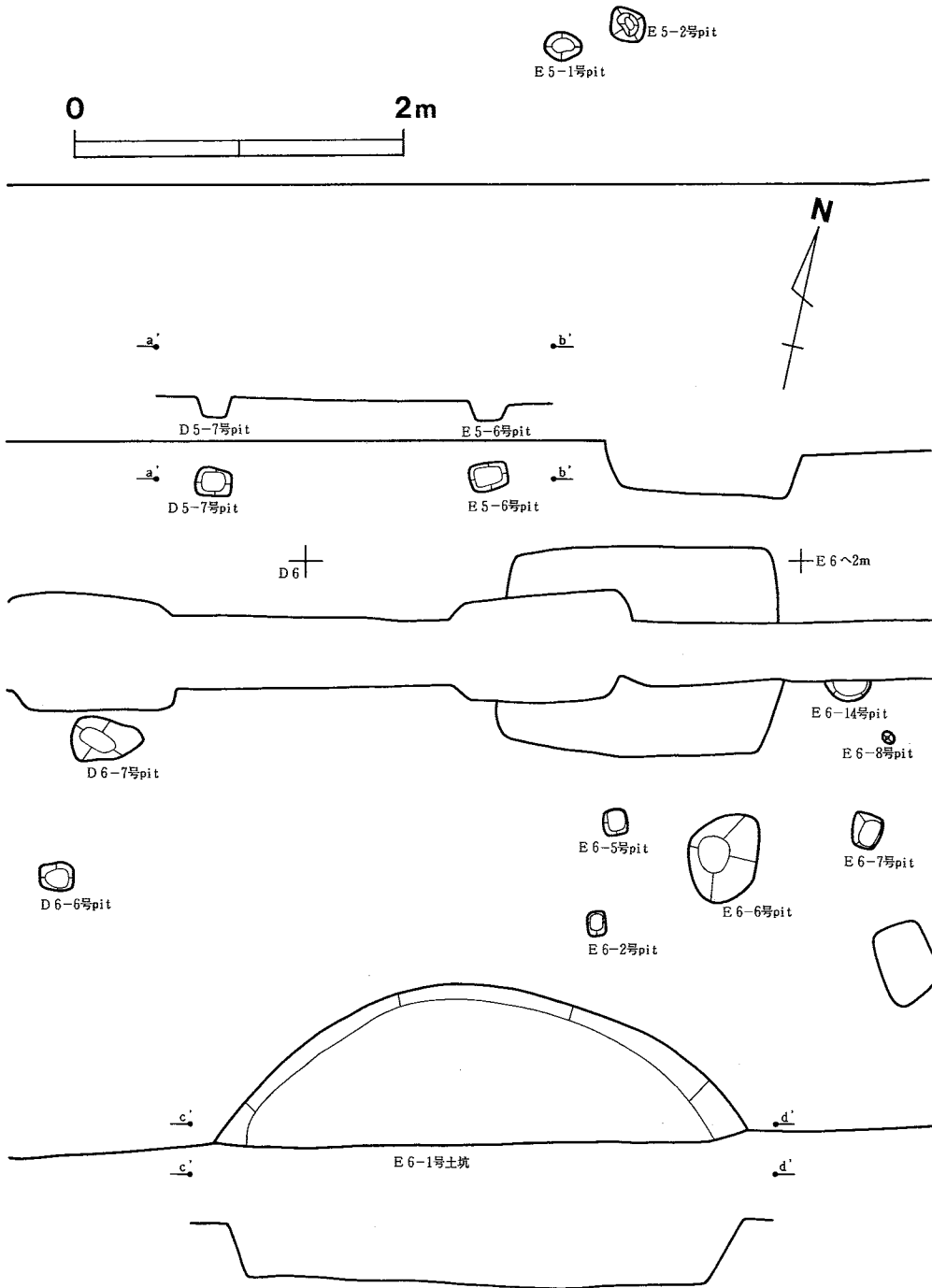
第61図 B~I = 2~6区の遺構(14)

B61

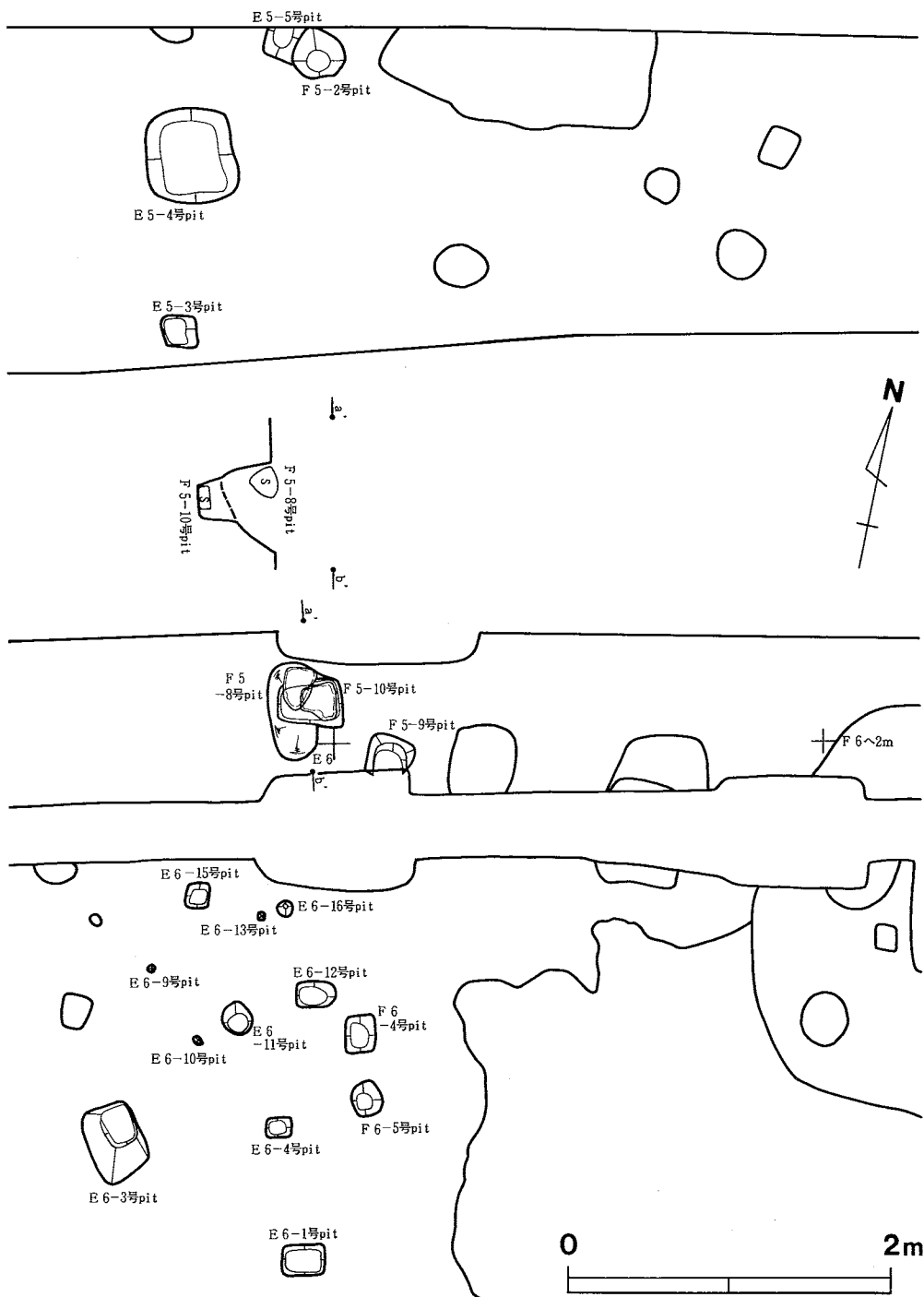


第62図 B～I=2～6区の遺構(15)

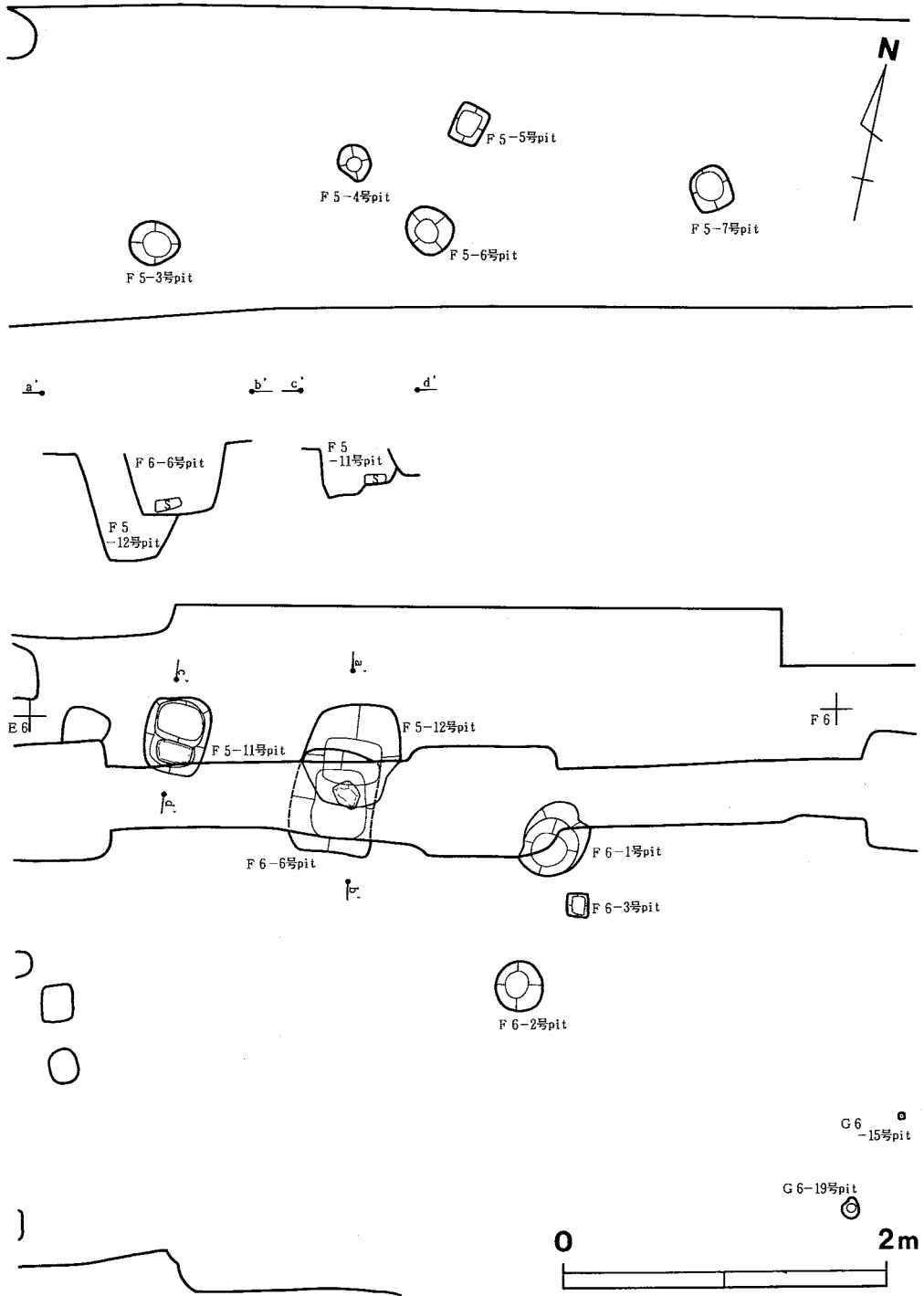




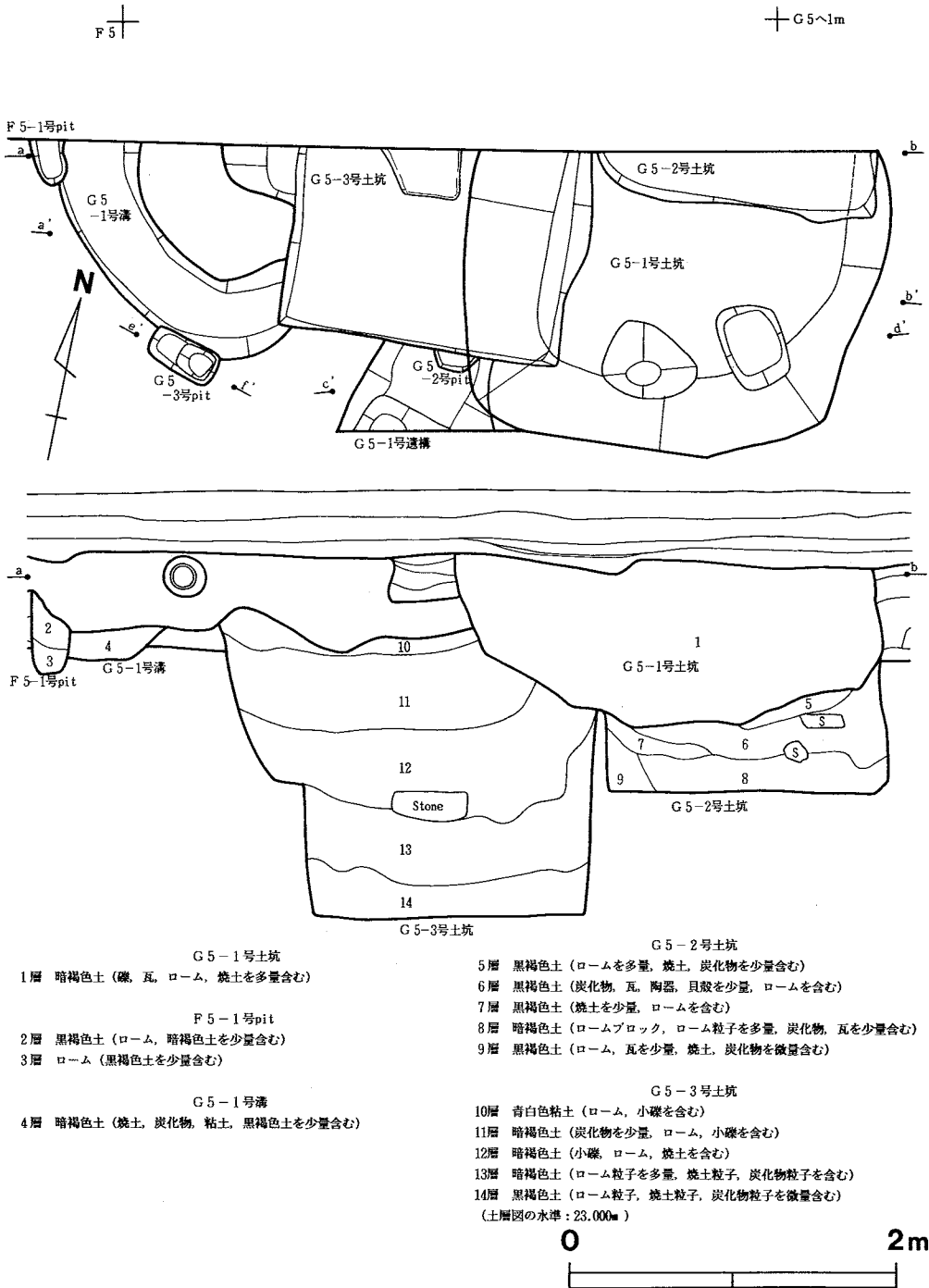
第63図 B~I = 2~6 区の遺構(16)



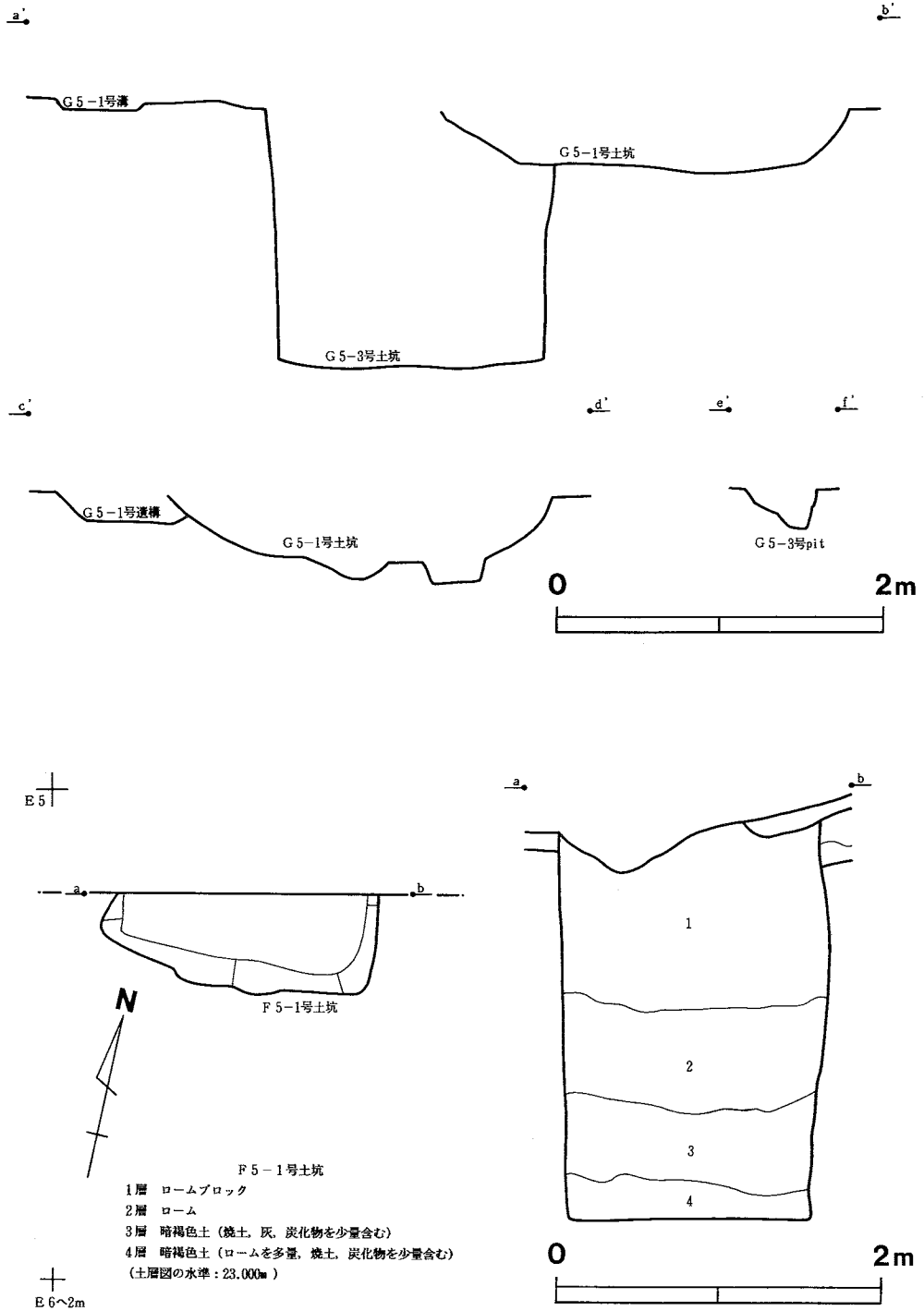
第64図 B ~ I = 2 ~ 6 区の遺構(17)



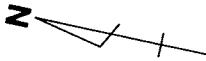
第65図 B~I = 2~6区の遺構(18)



第66図 B~I = 2~6区の遺構(19)

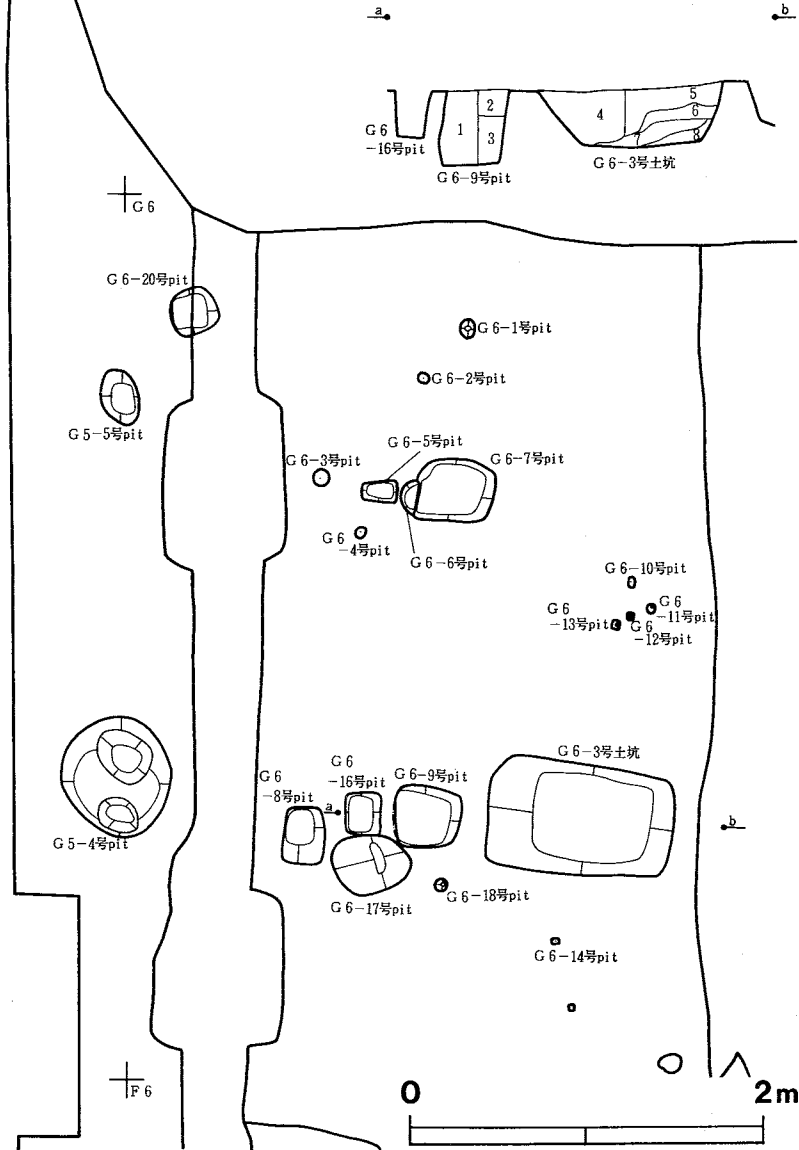


第67図 B~I = 2~6区の遺構(20)



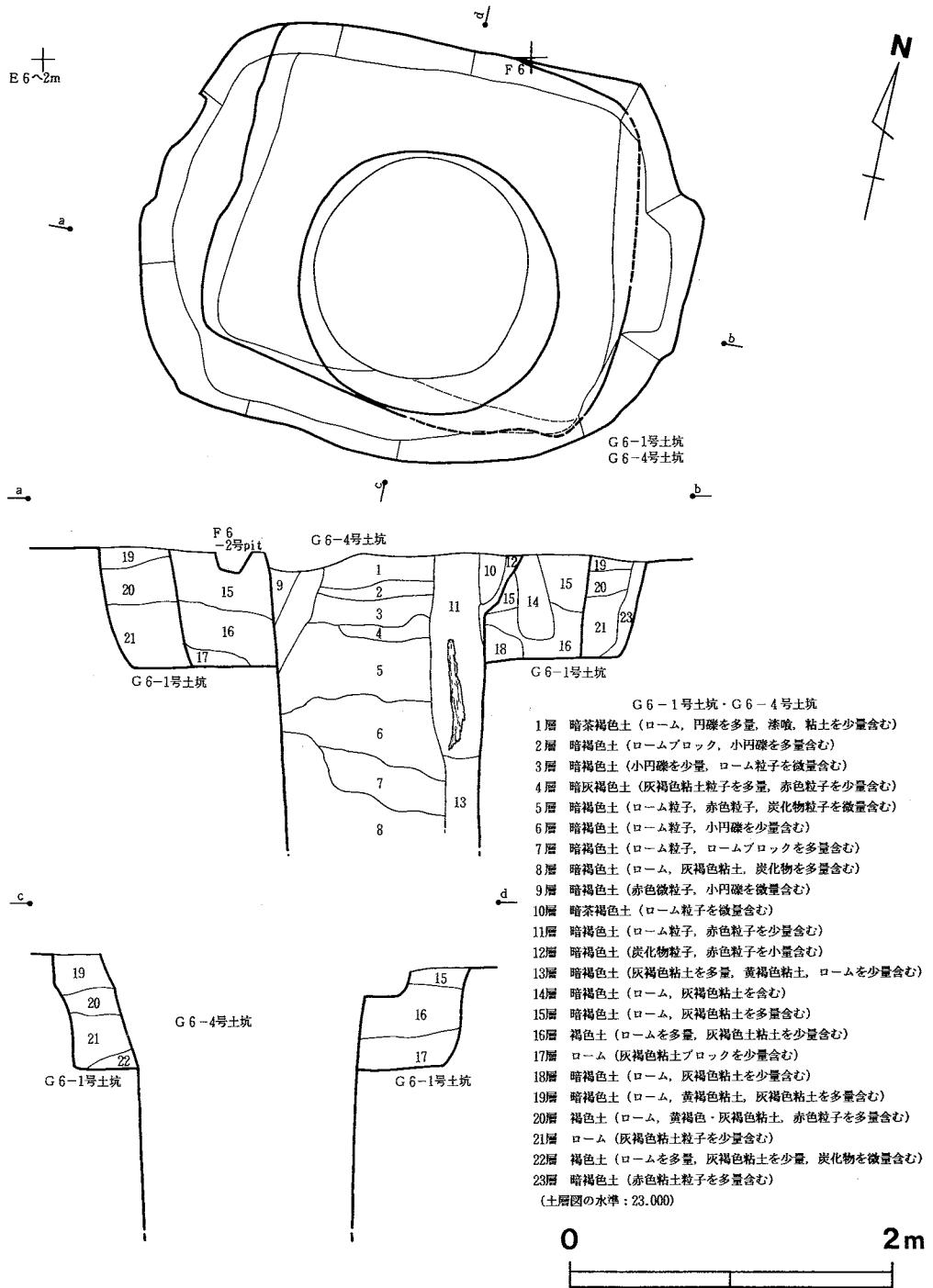
- G 6-9号pit
- 1層 暗褐色土 (ローム粒子を少量含む)
  - 2層 褐色土 (ローム粒子を多量含む)
  - 3層 暗褐色土 (ローム粒子を少量含む)

- G 6-3号土坑
- 4層 暗褐色土 (炭化物粒子, 灰褐色粘土粒子を微量, ローム粒子, 小円礫を含む)
  - 5層 褐色土 (ローム粒子を多量, 灰褐色粘土粒子を少量含む)
  - 6層 暗褐色土 (赤色粒子を微量, ローム粒子を含む)
  - 7層 ローム (暗褐色土を少量含む)
- (土層図の水準: 23.000m)

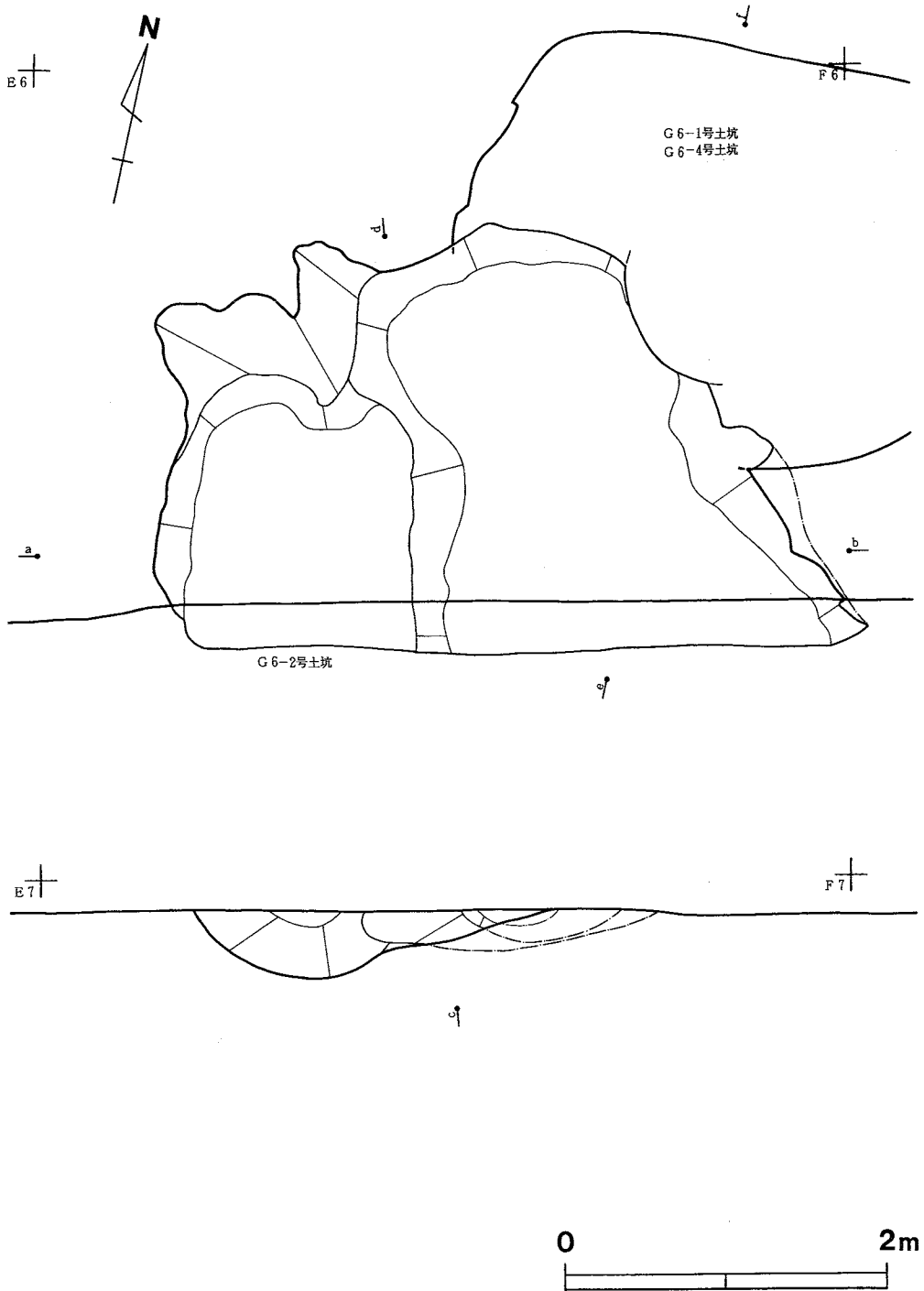


第68図 B~I=2~6区の遺構(21)

報告篇第三章 江戸時代の調査 I



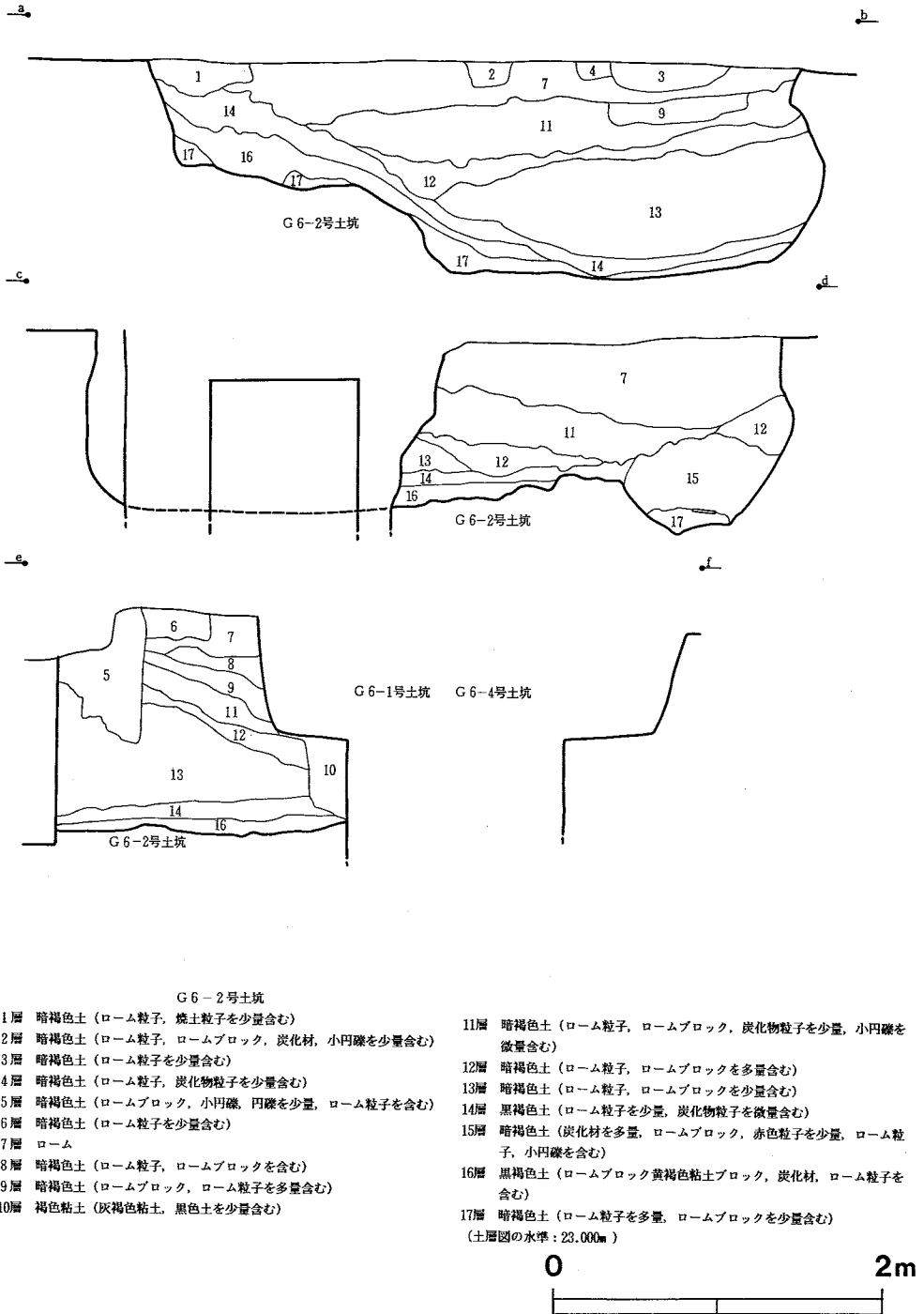
第69図 B~I = 2~6区の遺構(22)



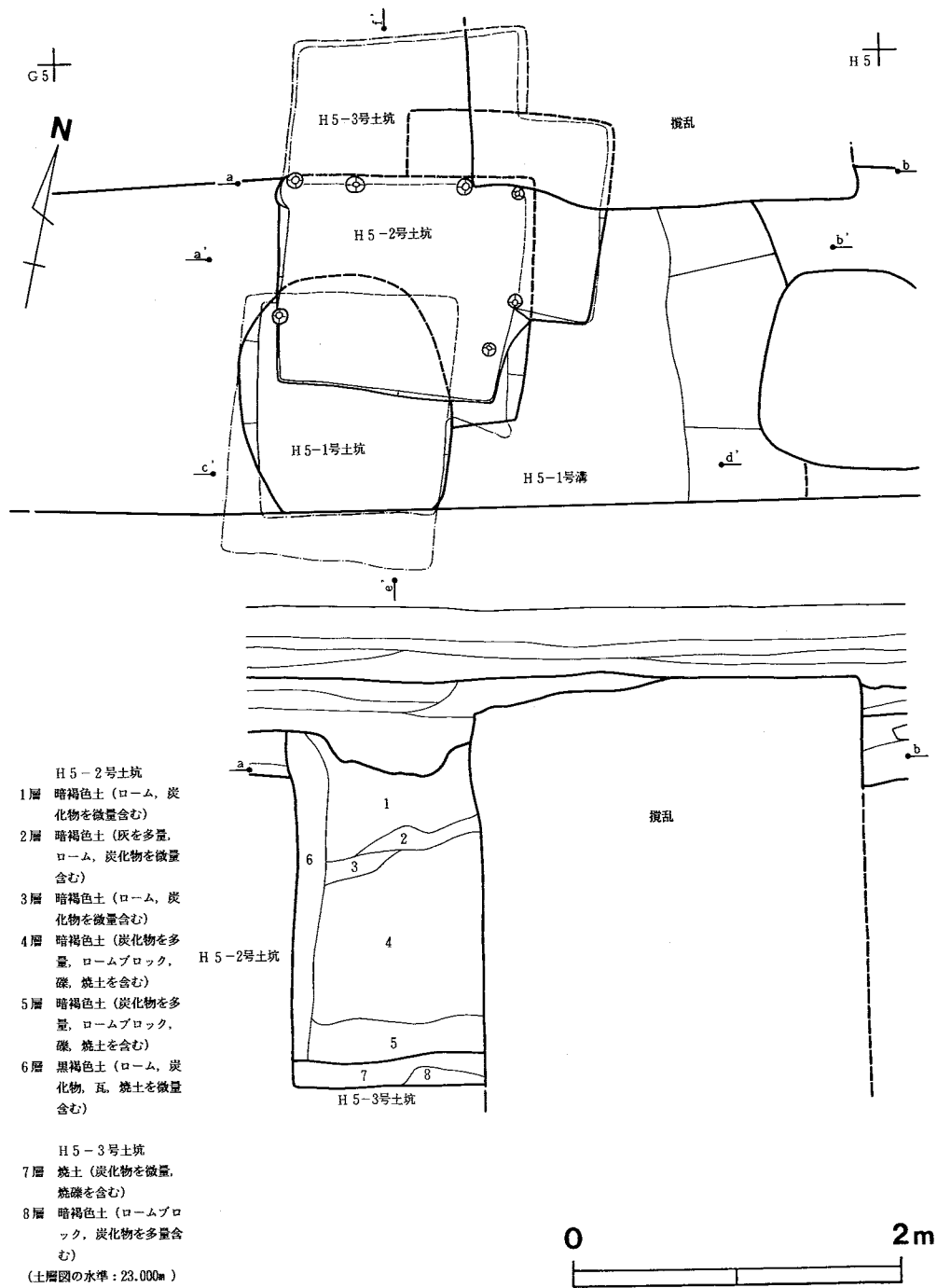
第70図 B～I=2～6区の遺構(23)



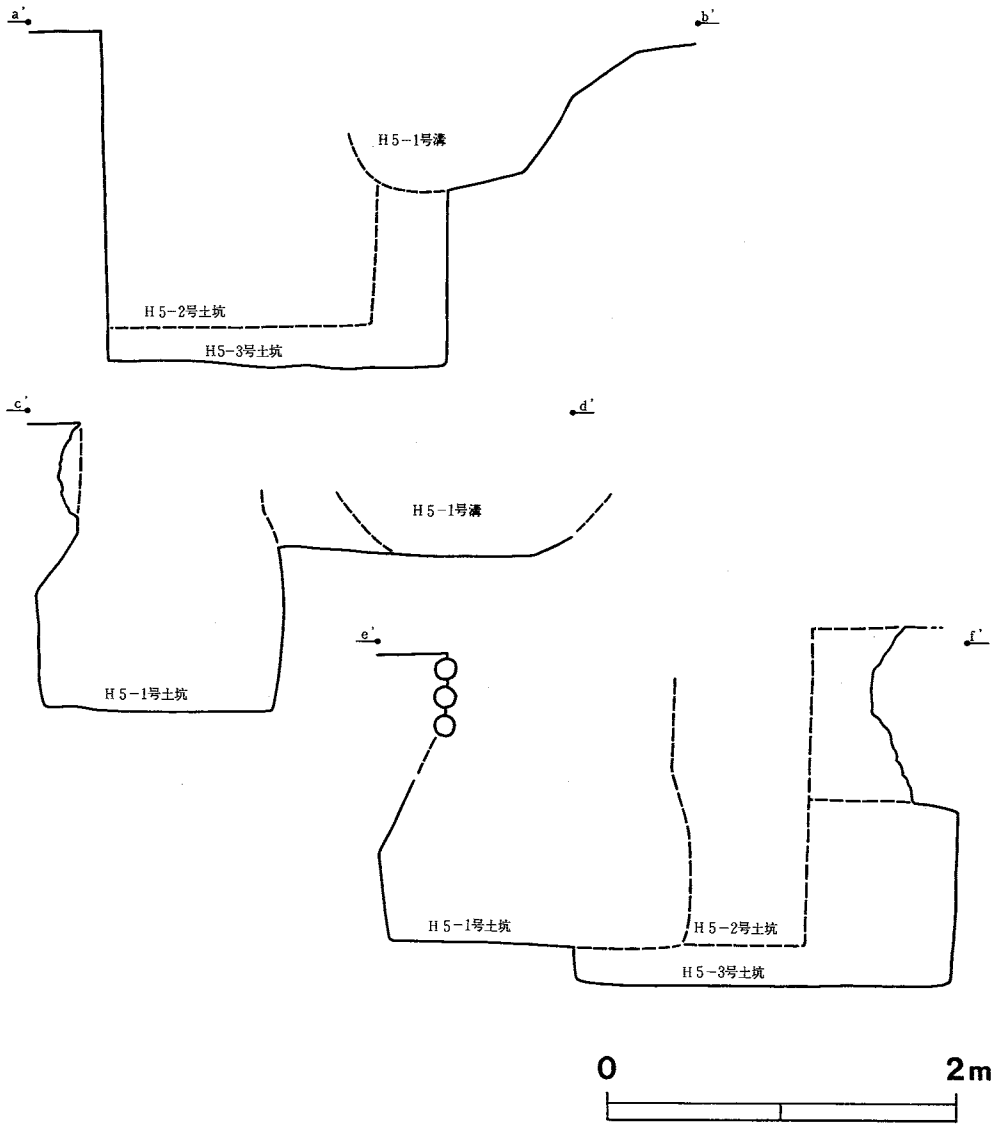
報告篇第三章 江戸時代の調査 I



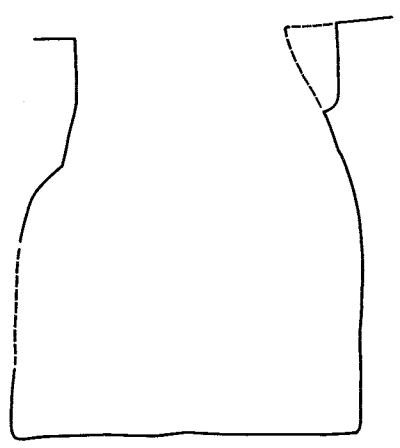
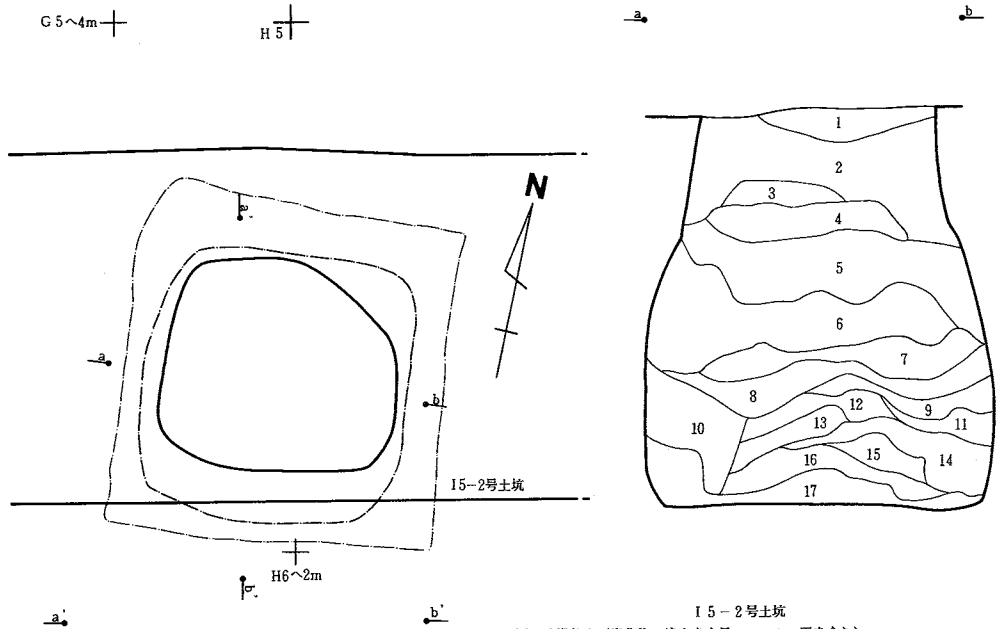
第71図 B~I=2~6区の遺構(24)



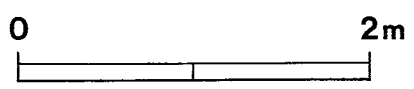
第72図 B~I=2~6区の遺構(25)



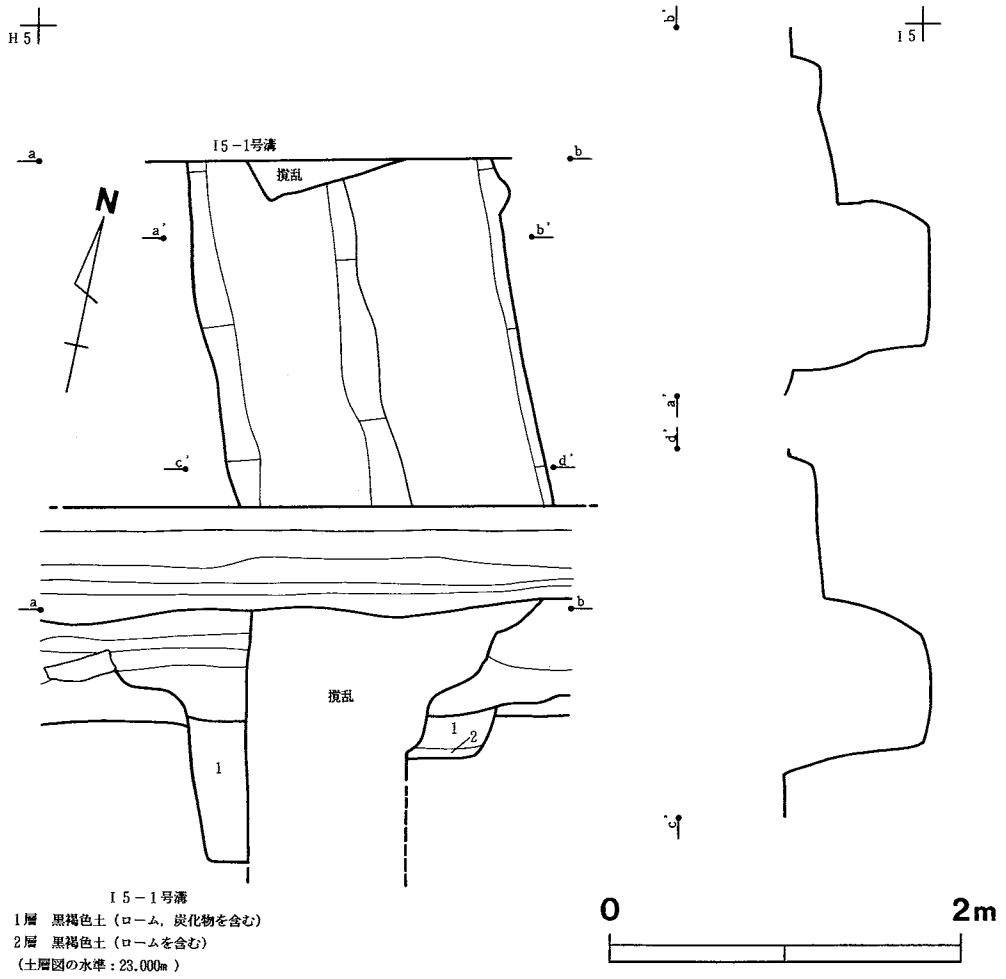
第73図 B~I=2~6区の遺構(26)



- 15-2号土坑
- 1層 暗褐色土 (炭化物, 焼土を少量, ローム, 灰を含む)
  - 2層 暗褐色土 (ローム粒子を多量, 礫, 炭化物を含む)
  - 3層 暗褐色土 (ロームブロックを多量, 焼土, 炭化物を少量含む)
  - 4層 ローム (炭化物を少量含む)
  - 5層 暗褐色土 (ロームブロック, ローム粒子を多量, 炭化物, 焼土を微量含む)
  - 6層 暗褐色土 (ロームブロック, ローム粒子, 炭化物, 焼土, 貝殻, 瓦を含む)
  - 7層 ローム
  - 8層 黒褐色土 (ローム粒子, 炭化物, 焼土を少量含む)
  - 9層 暗褐色土 (ローム, 炭化物, 焼土を含む)
  - 10層 黒褐色土 (ロームブロックを多量, 炭化物を含む)
  - 11層 ローム
  - 12層 暗褐色土 (ロームを多量, 炭化物, 焼土を含む)
  - 13層 黒褐色土 (ロームを多量, 貝殻, 漆喰を含む)
  - 14層 暗褐色土 (ロームを多量, 炭化物, 焼土を少量含む)
  - 15層 黒褐色土 (ローム, 灰を多量, 漆喰, 瓦を含む)
  - 16層 灰 (ローム, 黒褐色土を多量, 炭化物を少量含む)
  - 17層 暗褐色土 (ローム粒子, 炭化物を多量, 焼土を少量含む)
- (土層図の水準: 23.000m)



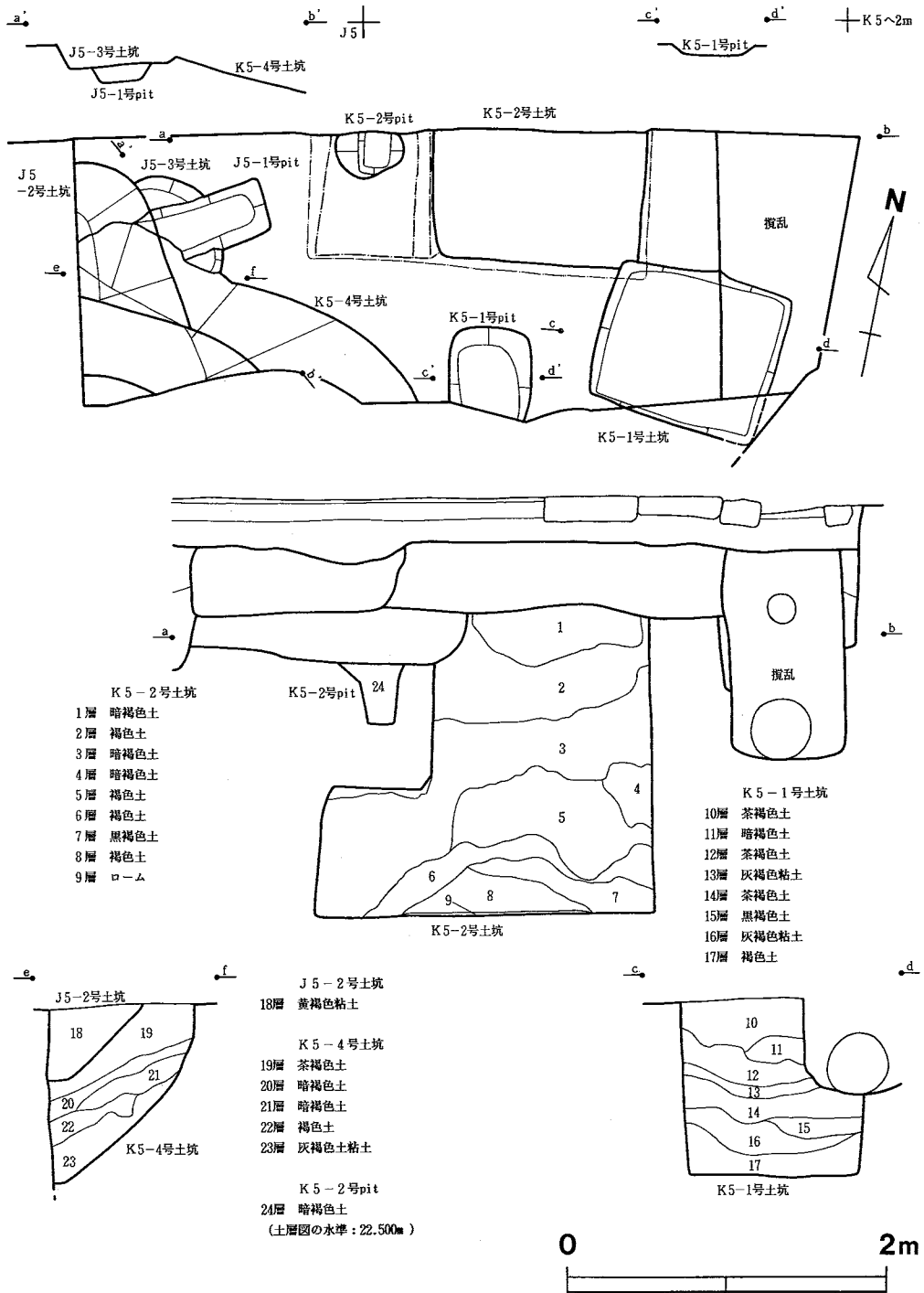
第74図 B~I=2~6区の遺構(27)



第75図 B~I = 2~6区の遺構(28)



報告篇第三章 江戸時代の調査 I



第77図 B~I = 2~6区の遺構(30)

## (2) B~G=7~8区の遺構

### B7-1号土坑(第78図)

平面形は不正長方形を呈し、その規模は最長部に於いて南北233cm、東西68cmを測る。東、西各壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南、北各壁は各々1段、2段のテラスを有しており、平面形、断面形共に不整形を呈している。坑底は長方形を呈しており、南北105cm、東西48cmを測る。また南に向かいやや傾斜しており、最深部では90cmを測る。覆土は北から南に向かい傾斜して堆積しており、第3、4層がその大半を占めている。

遺物は第3、4層から多数検出されたが、特に第4層からは多量の瓦片を中心に陶磁器片、金属製品と、魚貝類などの自然遺物が多数検出された。本層の色調は暗灰褐色土を呈し、炭化材を多量に含有している特質を持つ。これは、B10-2号土坑、C7-3号土坑などにみられる覆土と共通する。即ち、本遺構は廃絶後(もしくはその不整形態より、芥溜を目的として掘られた可能性も考えられる。)に芥溜として二次利用され、人工、自然遺物が随時廃棄される事によって覆土が形成されたものである。また先にも述べたがその層厚より多量の一括廃棄も想像される。

(成瀬 晃司)

### B8-3号土坑(第78図)

西側は調査区域外に達しているため約3/5を調査したにとどまる。平面形は楕円形を呈すると思われ、その規模は南北74cm、東西(60)cm、確認面からの深さ22cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。覆土はローム粒、焼土粒を含有する暗褐色土を基調とし、ほぼ水平に堆積している。

遺物は、陶磁器片、瓦片、銅製品等が検出された。

(成瀬 晃司)

### B8-5号ピット(第78図)

東西54cm、南北48cm、深さ25cmを測る長方形のピットである。坑底は東西40cm、南北35cmを測る長方形を呈し、そのほぼ中央部に長径30cm、短径25cm、深さ4cmを測る楕円形のピットを有す。覆土は水平堆積を呈しローム粒を含有する褐色土を基調としている。本遺構の性格を確定させるものはないが、坑底のピットの存在から柱穴としての利用が考えられる。

(成瀬 晃司)

### B8-2号ピット(第79図)

南北75cm、東西60cm、確認面からの深さ42cmを測る楕円形の柱穴で、礎石を有している。壁は緩やかに立ち上がり、礎石上面付近で一段稜を持ちさらに緩やかになる。坑底は北壁寄りにあり、そのため南壁は一段と緩やかに立ち上がっている。本遺構は、北側でB8-3号土坑を、南側でC8-3号ピットを切っている。

礎石は2点検出されたが北側のものは、東西25cm、南北20cm、最大厚14cmを測る断面形カマボコ型の破碎礎石を用い、自然面である曲面を上面にしている。その南側に隣接する礎石は東西24cm、



南北13cm, 厚さ12cm を測る断面六角形を呈する角礫を用いている。 (成瀬 晃司)

#### B 8-3号ピット (第79図)

南北100cm, 東西60cm, 確認面からの深さ50cm を測る長方形のピットである。坑底は段差を持ち南側が約4 cm 低いが, 各々はほぼ平坦である。壁はやや緩やかに立ち上がっているが, 南壁はB 8-2号ピットに切られているためほとんど残存していない。覆土は水平堆積の様相を呈している。

坑底直上にはローム土が堆積しているが, 層の上面より梅鉢が施された軒丸瓦の瓦当部が刻印を上にはび割れた状態で検出された。瓦を外したところ, 第7層の該所が極めてしまっており, この瓦は礎石の代用品として利用された可能性がある。但し, 柱痕は確認されなかった。

(成瀬 晃司)

#### C 7-1号, C 8-3号・4号ピット (第80・81図)

建物址と思われる。礎石を有する溝が南北に2本約540cm(三間)間隔で平行に並んでいる。南側の礎石列をC 8-3号ピット, その北東部に隣接するものをC 8-4号ピット, 北側のものをC 7-1号ピットとした。

C 8-3号ピットの西部は, 調査区域外に及んでおり未調査である。調査区における東西長は380cm を測り, 南北幅は70~80cm を測る。確認面から坑底までの深さは約15cm を測る。

礎石は各々石厚の約1/2の深さのピットに埋設され, 周囲をロームで固定している。このロームはピット内ばかりでなく坑底全体に詰められている(第13, 15, 17層)。個々の礎石を東から a, b, c, d とすると, a-b間100cm, b-c間90cm, c-d間125cm を測り, 規則性は低い。使用されている礫はd以外は, 全て破碎角礫であり, dに関しても円礫の上面を剥離し平坦に加工している。

C 7-1号ピットも西部は調査区域外に及んでいる。区域内の東西長は480cm, 幅は約80cm を測り, 確認面からの深さは約30cm を測る。C 8-3号ピットにみられた礫石のための掘り方は存在しない。坑底上には拳大から人頭大までの偏平破碎礫が敷き詰められ, ロームによって固定されている。これらの上面はC 8-3号ピットの礎石下面とほぼ同一レベルであり, 地固めの「ぐり石」としての機能を有していたと推定される。

破碎礫の上部には遺構東部に角礫が2点存在する。礫間は150cm を測り, これらは各々第3層, 第4層に包含されている。土質, 含有物の相違はみられるが, いずれもしまりが強く, 礫を固定するために埋められたものであろう。その西側に堆積する第5層から礫は検出されなかったが, 土質は第4層に類似しており, またしまりもあり, 構築時に埋められたものと考えられる。

C 8-4号ピットは, 1辺135cm を測る方形のピットで, C 8-3号ピットに切られている。坑底上に偏平礫が2個南北に並んで検出された。礎石下の落ち込みは, 本遺構がC 8-1号土坑の覆土上という地盤の軟弱な場所に構築されているため, 圧力により凹んだものと思われる。本遺構はC 8-3号ピットに切られていることもあり, この建物址との共伴には疑問が持たれる。

遺物は陶磁器片が出土している。

C 8-3号ピットに配された礫は、前述したとおり礫間に規則性がみられず、C 7-1号ピットにいたっては、礎石として捉えられる礫を有さない部分が大半を占めている。この状況では礫上に柱を建てるのは不可能であり、これらの礫は礎石としてではなく、根石として機能していたと捉えるのが妥当である。 (成瀬 晃司)

#### B 8-5号遺構 (第80・81図)

東西に伸びる溝であるが、西端は調査区域外に達しており不明、東端もC 7-1号土坑に切られ不明である。また東部をB 8-1号ピットに、南壁の一部をB 8-5号ピットに切られている。尚、B 8-1号ピットは覆土中より煉瓦片が検出されており、近代以降の遺構である。

幅は約50~60cm、確認面からの深さは12cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底はほぼ平坦である。

坑底には東西34cm、南北28cmを測る卵形のピット1基を有するが、坑底からの深さは10cmと浅く、覆土はロームブロックを含有する褐色土の単一層で柱痕等の痕跡はみられない。

本遺構の性格は、周辺遺構と照らし合わせてみると、建物址と考えられるC 7-1号ピット、C 8-3号ピットのほぼ中間に位置し、また主軸方位にも差がないことから、これらとなんらかの関連性を持つ可能性が指摘できる。 (成瀬 晃司)

#### B 7-4号ピット (第82図)

南北54cm、東西35cm、確認面からの深さ25cmを測る長方形の礎石を伴う柱穴である。坑底は南北20cm、東西25cmを測る楕円形を呈している。そのため東、西各壁がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、南、北各壁は緩やかに立ち上がっている。本遺構はB 7-5号土坑の埋没後、その覆土を切って構築されている。

礎石は平面三角形、断面長方形を呈し、その規模は東西30cm、南北36cm、厚さ20cmを測る。その形態より石垣、もしくは石組溝に使用された側石を再利用したものと考えられる。礎石は直接坑底に置かれたものではなく、掘り方との間に土を詰めて固定されている。覆土、掘り方、坑底とも圧力を受けたため極めてしまっている。 (成瀬 晃司)

#### B 7-5号土坑 (第82図)

一辺約170cmを測る隅丸方形を呈す。坑底は凹凸が激しく、東部でテラス状にみえるのはそのためである。確認面からの深さは最深部で23cmを測る。本遺構中央部には覆土を切ってB 7-4号ピットが構築されており、その掘り方は坑底下にまで及んでいる。また、本遺構の東側にはB 7-5号ピット、C 7-1号土坑とが重複しているが、何れも本遺構より新しいものである。覆土はロームブロック、ローム粒を多量に含有したものが主体を為している。本遺構の性格について断定はできないが、その形態、覆土などより植木穴の可能性が指摘できる。 (成瀬 晃司)

#### B 7-6号土坑 (第83図)

平面形は長方形を呈し、その規模は南北92cm、東西64cmを測る。確認面からの深さは7cmと

浅い。北壁の一部がB 7-16号ピットにより切られている。坑底は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は北から南に傾斜しており、すべての層においてローム粒を含有している。

遺物は壁コーナーより、釘が壁に密着した状態で数点検出された。その出土状態および遺構の規格性より、本遺構には掘り方内側に板材による板囲いがあったものと推察され、検出された釘は、板材の接合に使用されたものであろう。(成瀬 晃司)

#### B 7-16号ピット (第83図)

東西34cm, 確認面からの深さ10cmを測る長方形の礎石を有する柱穴である。北壁は共同溝の掘り方によって破壊され残存していない。また南側においてB 7-6号土坑を切っている。掘り方と礎石の間にはほとんど隙間はみられず、礎石を想定して掘ったものであろう。

使用されている礎の規模は長軸37cm, 短軸30cm, 厚さ17cmを測る。平面形はほぼ長方形を呈し、両面ともに平坦に加工されている。また加工面には工具痕を残しているが、幅は約1cmを測りノミ状の工具を使用したものである。(成瀬 晃司)

#### B 7-3号ピット (第84図)

直径約40cmを測る円形のピットである。北側をB 7-2号ピットに、南側を2号溝によって切られている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは10cmを測る。坑底はほぼ平坦である。覆土は坑底壁際の一部を除き暗褐色土一層である。

覆土中より瓦片が2点検出されたが、これらは土圧により割れており、礎石の代用品として使用された可能性もある。(成瀬 晃司)

#### B 8-14号ピット (第84図)

1辺約28cmを測る正方形を呈し、確認面からの深さは35cmを測る。土層断面には柱痕が観察されるが、それは幅15cmを測りほぼ垂直に建てられている。また、周囲はロームブロック、粘土ブロックにより固定されている。(成瀬 晃司)

#### B 8-21号ピット (第84図)

東西66cm, 南北38cm, 確認面からの深さ36cmを測る長方形のピットである。壁は緩やかに立ち上がっている。坑底には1辺15cm, 深さ約4cmを測る方形の浅い落ちこみを有する。土層断面にみられる第11層は、その形態、土質より柱痕と考えられ、第12, 13層によって固定されている。また、坑底の落ちこみは柱痕の真下に位置するため、柱圧により凹んだものであろう。

(成瀬 晃司)

#### B 8-34号ピット (第84図)

東西70cm, 南北40cm, 確認面からの深さ34cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は7層に分層されるが、そのうち第3, 4層は柱痕である。使用された柱は1辺15cmの角材で、ロームブロックなどを混入する土によって固定されている。また、坑底の柱の下に当たる部分は、柱圧のため極めてしまっている。

本遺構の掘り方及び柱の規模、形態は、南側約360cm（二間）に位置している B 8—21号ピットと高い類似性を持つため、共伴関係にあるものと考えられる。またこれらの延長線上には類似する遺構がみられないことより、この2基で機能を持つ建造物が想像される。ただし2基を結んだ方位は近接する遺構とは異なり、遺構の主軸方位は一般に当時の土地利用に大きく規制されていることを考えると、本址は他遺構とは時期を異にしているといえる。（成瀬 晃司）

#### C 7—2号土坑（第85図）

C 7—2号土坑はC 7グリット南西隅に位置し、開口部をC 7—1号ピットに、床面近くの東壁をD 7—4号土坑に切られている。開口部は東西220cm、南北175cmの楕円形、床面では東西270cm、南北240cmの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは180cmを計る。

床面は平坦でほぼ水平であるが東側及び南側の壁際でやや窪みかげんになっている。断面図 a'—b'の部分ではやや深くなっているが、全体としては不明瞭で周溝と呼べるものではない。

壁は平坦な部分が全く見られず、また工具痕も不明瞭であった。床面からやや拡がりながら曲線的に立ち上がるが、60～90cmのあたりで強く内側に屈曲しオーバーハングする。この部分では西～南東の壁に四箇所の小規模な窪みが見られた。更に床面より100～120cmのあたりでほぼ直立するが開口部全体としては東側に傾いており、また開口部の南東側から北側にかけて比較的ゆるやかな傾斜を持ったテラス状の部分がありここが出入口であったと思われる。このテラス状の部分の南東側に南北20cm、東西18cm、深さ36cmを計る楕円形のピットがある。覆土1層を除去した段階で確認し、覆土も1層と区別出来なかったため本土坑に伴うものとして番号を付さなかったが、或いは本土坑に先行するものであったかも知れない。

覆土は1～24層に分層した。1～5層は何れも良く締まっており、陶磁器、かわらけの小破片が少量含まれる以外に遺物は出土しない。6～16層は（10層を除き）炭化物、魚骨、貝殻等を含み、ほぼ完形のかかわらけを多量出土した土層である。B10—2号土坑や本土坑に近い形状を示すC 7—3号土坑、F 8—1号土坑等で認められた土層と同様のものと考えるが、本土坑では非常に厚く堆積しているだけでなく、炭化物を主体とする間層があったため分層できた。15層・16層は魚骨、鱗等とかかわらけを含む土層と炭化物を主体とする層が数mmから数cmの厚さで交互に堆積しているものであった。17層以下はロームブロックもしくはローム粒子を主体とする層と、暗褐色土、黒褐色土、褐色土を主体とする層とが交互に堆積しており、陶磁器の小破片を数点出土したのみである。

遺物はかわらけを中心に多量に出土したが、先述のように大部分が6～16層に含まれていたものである。1～5層、17～24層からも極少量の遺物の出土があったが、図示していない。6～16層（以下「かわらけ層」と仮称する）出土の遺物はかわらけが大部分を占めるが、大中小三通りの大きさの違いが認められた他、小形のかかわらけを用いた耳皿等も出土している。その他に「かわらけ層」出土の注目される遺物としては焼塩壺がある。身及び蓋が出土しているが、身に見られる刻印は全て「泉州麻生」銘のものである。陶磁器は遺物全体の中では量的には少ないが、他

の遺構と比し接合する破片が多い。

本土坑の廃絶は「かわらけ層」出土の陶磁器・焼塩壺等から18世紀前半に位置づけられよう。

(菅谷 通保)

#### C 7-3号土坑 (第86図：図版1)

入口部不整楕円形、坑底隅丸方形を呈する地下式坑である。北壁の上半部は共同溝の掘り方によって破壊されているが、遺構としての残存状態は比較的良好である。

入口部は南北約155cm (推定)、東西83cmを測る。坑底は中央部がやや低く、その規模は一辺216cm、確認面からの深さは230cmを測る。壁は内湾して入口部に接続し、入口部の中心は坑底に対し、やや西側に位置している。

覆土は17層に分層され、中央部に厚みを持つ凸レンズ状の堆積状況を呈している。そのうち灰褐色土層 (第8, 13, 17層) 中より極多量の人工、自然遺物が検出された。第8層は、多量の炭化材を含有し、素焼土器、陶磁器、金属製品、石製品などの人工遺物、魚骨、鳥骨、貝などの自然遺物が検出された。特にかわらけと、自然遺物が大半を占める。かわらけは、第8層上部に人為的に割られたと思われる細片が密集し、下部及び壁際に完形、半完形のもの密集していた。その他の人工遺物はこれに混在して検出されている。自然遺物のうち魚貝類は北壁側に集中し、その中には鱗、卵殻なども含まれている。また西壁壁際にはサザエが集中して遺存していた。その他の遺物として鞆の付着した脇差し、銅製の錠前などが検出された。

第9層は小砂利を含有する暗褐色砂質土層で、陶磁器片、瓦片が検出された。

第13層は炭化材、焼土粒を含有する灰褐色土層で第8層と類似しており、かわらけ、魚貝類が多量に検出された。それら以外には陶磁器、煙管、釘などが検出された。

第17層は灰褐色土層であるが、第8, 13層にみられたかわらけ、自然遺物は含まれず、人頭大の破碎礫、瓦片が多数検出された。

第16, 17層は水平堆積を呈しており、人為的にならされた形跡と思われる。第8, 9層は凸レンズ状の堆積を呈し、地上からの投げ捨てにより埋め戻されたものと思われる。また、それらの直上にはローム粒、ロームブロックを多量に含有する黄褐色土が厚く堆積しており、廃棄物をパックするために埋められたものと推定される。

(成瀬 晃司)

#### C 8-1号土坑 (第87図)

開口部方形、坑底長方形を呈する地下式坑である。開口部はC 8-4号ピットと重複し、それに切られている。

開口部は確認面で東西122cm、南北115cmを測り、確認面下約115cmで天井部へ移行する。ここでは東西140cm、南北125cmと確認面よりやや拡がっている。入口部と天井部との接点は「面取り」されている。壁及び天井には丁寧な調整が施されており工具痕等は残存していない。それに対し、「面取り」部分は弧状の刃部形態を呈する刃部幅約15cmの工具痕が全面に観察される。これは、本遺構使用時に該所に剝落、またはひび割れが生じたため、再加工したものであろう。

室部は東西270cm、南北220cmを測り、入口部からの奥行は西壁66cm、北壁85cm、東壁72cmを測る。壁は垂直に立ち上がっており、壁高は75～90cmを測る。天井部は入口部に向かって高くなっており「面取り」部との接点では90～110cmを測る。坑底はほぼ平坦であり確認面からの深さは250cmを測る。また坑底北東部には東西60cm、南北55cmを測る不整長方形の浅い落ち込みがある。壁はやや緩やかに立ち上がり、坑底は凹凸が著しい。覆土はロームブロックを多量に含有する暗褐色土で第6層と同一である。遺物は検出されず、その性格は不明である。

覆土は南から北へわずかに傾斜して堆積しているが、各層は色調、土質とも類似しており、含有物の差がみられる程度で、おそらく一気に埋め戻されたものであろう。また第4 a、5層はしまりの差を除いては同一のものであり、後者が天井に保護され土圧の影響を受けにくかったために生じたものと考えられる。

入口部の南、西各壁面には、それぞれ2箇所の掘り込みがみられる。南壁では、床面上100cmと150cmに、西壁では150cmと185cmに位置し上下に並び、南壁の下のを除き掘り込みの下場は平坦である。そのことよりこの掘り込みは出入り時の足場として使用されたものと考えられる。

遺物は覆土中より瓦片、陶磁器片、かわらけ片等が検出されたが、一括廃棄の様相は呈していない。また床面直上より漆器碗が1点検出されたが、木質は残存しておらず遺存状態は悪い。

(成瀬 晃司)

#### B 7-2号土坑 (第88図：図版2)

地下式坑である。開口部は東西150cm、南北100cmを測る隅丸長方形を呈す。室部は明確な天井を有さず緩やかに拡がり坑底に接続する。断面形は袋状を呈している。東壁には粗い工具痕が残されているが、他の壁は比較的丁寧な調整が施されている。

坑底は東西220cm、南北230cmを測り、ほぼ隅丸方形を呈する。確認面からの深さは245cmを測る。

覆土は上部ではほぼ水平堆積を呈しているが、下部では中央がふくらむ凸レンズ状の堆積を呈す。最下層の第22層は多量の粘土塊を含有する灰褐色土で、多量の遺物を含んでいる。第22層上には第18、20、21層といったロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が堆積している。この3層は多少の土質の差はみられるが、1度に埋め戻されたものと考えて差し支えなく、直下の遺物廃棄層をバックする意味を持つものとも考えられる。

坑底には壁溝が巡っている。幅は15～20cm、深さは6～8cmを測り、断面形は三角形を呈する。南東コーナーにおいて不整長方形の落ち込みに接続している。この落ち込みの坑底は壁溝のそれより低い。この壁溝は排水溝として用いられたものと思われ、溝内に集まった水は南東コーナーの落ち込みに流れたものであろう。

西壁を除く3壁の天井際にそれぞれ1基杭穴が検出された。杭は天井に向けて差し込まれているが、木質は腐敗して残存していない。その角度、深さには規則性がみられず、性格は不明である。

遺物は、第22層中、床面直上より多量の瓦片を中心とし陶磁器片、煙管などの金属製品、素焼土器などが多数検出された。これらはその出土状態より一括廃棄されたものと考えられる。瓦片には熱を受けた痕跡が認められず、層中にも焼土粒が含有されていない事より、火災後の廃棄とは考えられない。素焼土器には、かわらけ、ほうろく、火鉢が含まれるが、中でもかわらけは特徴を持つものが多い。一つは、薄手で非常に丁寧な整形がみられるもの、一つは墨書を有するものである。墨書を有するかわらけは本遺構出土のかわらけ総数の中でかなり高い割合を占めている。本層には自然遺物は含まれず、他のかわらけなどが多量に廃棄された遺構とは異なった様相を示している。 (成瀬 晃司)

#### B 7-9号土坑 (第88図)

B 7-9号土坑は B 7-2号土坑調査中に西壁の床面上約40cmの付近で確認した土坑であるが、その全てが調査区域外にあるため覆土の一部を調査したに止まる。このため規模・形状については明らかではない。B 7-2号土坑の内部からのボーリング探査では、切り合った部分から左右に広がっていることが判明しており、また掘り込みの深さ等から考えて「地下式坑」であると思われる。覆土は焼土粒子を多量に含む黒褐色土である。遺物はかわらけ1点を採集したのみである。覆土の堆積状況から、B 7-2号土坑に先行するものである。

(成瀬 晃司・菅谷 通保)

#### B 7-8号土坑 (第89・90図)

本遺構は地下式坑である。調査区の西端に位置し、その大半が調査区域外に及ぶため東側の一部分を調査したにとどまる。東西幅は不明、南北幅は推定140cm、確認面からの深さ180cmを測る。

本遺構はC 7-1号ピットに切られて構築されている。また、東側ではB 7-7号土坑を切っている。そのためB 7-7号土坑の覆土を壁としており、それを補強するために板囲いを用いている。土層断面を観察すると東壁は緩やかに立ち上がり、確認面ではB 7-7号土坑の壁近くまで及んでいる。これは構築中に強度の低いB 7-7号土坑覆土が崩落したために生じたものと考えられる。それによる壁の構築及び補強をするために、坑底に直径約10cmを測る丸杭を3本壁面に沿って約45cm間隔で打ち込んでいる。杭穴の深さは約50cmを測り、先端は四角錐に加工されている。これらの杭の外側に板材を打ちつけ板囲いとし、それと掘り方の間に土を詰め込んでいる。それは南北ではほぼ水平に、東西ではやや西に傾斜して堆積しているが、ロームブロック、ローム粒を多量に含有している層が主体を成しており、本遺構構築時に生じた排土を利用したのであろう。

坑底は平坦で壁際ではやや丸味をもって立ち上がる。南壁は垂直に立ち上がっているが、北壁は坑底上約40cmよりオーバーハングし棚状の施設を作出している。その規模は奥行約25cm、奥壁高約40cmを測るが、幅は西側が調査区域外に及んでいるため不明である。棚部の天井部は内傾して室部の天井部に接続する。また、坑底は室部に向かって傾斜しており、物を置く為の施設と

は考え難く用途は不明である。遺物は陶磁器、瓦片等が出土している。 (成瀬 晃司)

#### B 7-7号土坑 (第89・90図)

入口部、坑底ともに隅丸長方形を呈する地下式坑である。B 7-6, 8号土坑, B 7-9, 10, 14, 15ピット, C 7-1号ピットに切られている。入口部は外反して立ち上がり, その規模は, 確認面で東西約170cm (推定), 南北150cm, 天井部で東西約120cm, 南北110cmを測る。確認面から天井部までは約120cmを測る。

室内では明確な天井を有さず, 丸味をもって袋状に拡がり坑底に至る。坑底の規模は東西205cm, 南北185cmを測り, 確認面からの深さは205cmを測る。また入口部からの奥行最大値は北壁で30cm, 東壁で33cm, 南壁で48cmを測る。坑底は平坦である。覆土は, 坑底より天井までは凸レンズ状に, それ以降は水平に堆積している。ロームブロック, ローム粒を多量に含有する層が主体を成しているが, 第43, 45層は炭化物粒を含有する暗灰褐色粘土層である。特に第43層からは火鉢の半完形品, 紅皿に利用した二枚貝等が検出されており, 遺構廃絶後に芥溜として利用されたことを示している。 (成瀬 晃司)

#### B 8-4号土坑 (第90図)

西側が調査区域外にかかり, 約1/3を調査するにとどまる。規模は最長部で南北92cm, 東西30cm, 確認面からの深さ10cmを測り, 平面形は楕円形を呈すると思われる。壁は緩やかに立ち上がり, 坑底はほぼ平坦である。 (成瀬 晃司)

#### B 8-27号ピット (第90図)

調査区域西端にあり, 約1/2を調査したにとどまる。南側でC 8-3号ピットと重複しており, それに切られている。

平面形は隅丸方形を呈すると思われる。南壁は緩やかに立ち上がるが, 北壁はほぼ垂直に立ち上がり, 中場を有して外反する。坑底はやや丸味を持ち中央部が低い。確認面からの深さは46cmを測る。

南北セクションには, 坑底北壁よりに柱痕を観察することができる。その幅は坑底部で17cm, 確認面で26cmを測る。柱痕の周囲には, 柱を固定するためにローム粒, 粘土粒などを含有する粘性の強い暗褐色土が用いられている。柱痕内から第3層直上より平板が南北に2枚並んで検出された。北側のもは幅約7cm, 南側のもは約9cmを測る。板材の下にはローム粒を含有する暗褐色土, 極多量の小砂利を含有する暗褐色土, 微量のローム粒を含有する暗褐色土の3層が堆積しているが, いずれの層もしまりがなく, 板材を礎石の代用としてその上に柱を建てたとは考えられず, 性格は不明である。 (成瀬 晃司)

#### E 7-7号土坑 (第92・93図)

E 7-7号土坑はE 7グリッドからE 8グリッドにかけて検出した。次に述べるE 7-3号土坑, E 7-8号土坑と切り合っており, E 7-7号土坑が最も新しいことが土層断面図a-b, c-dによって判る。以上の三基及びE 8-5号土坑は, 平面確認の段階ではD 7・D 8・E 7・



E 8 グリッドに跨がる広範囲の黒色土の不整形の広がりとは捉えられなかった。しかし単一の遺構としては面積が広すぎたこと、部分的に砂利を多く含んでいたことなどから、数基の遺構の切り合いが想定された為、グリッドに沿って幅1 m のサブトレンチを設定し覆土の堆積状態を観察しながら調査を進めた。

東西4.6m、北側は共同溝に破壊されているため不明だが、現存で3.7m を計る。グリッドの方向と軸を同じくする正方形に近い平面形を持っていたと思われる。確認面からの掘り込みは東壁では34cm を計りほぼ垂直に立ち上がり明瞭であるが、E 7-3 号土坑と切り合う西側及び南側では不明瞭であった。特に西壁はコーナーと北側のロームを削った一部分を確認したのみで、この間は確認し得ないまま削平してしまった。

覆土は黒褐色で粘性が高い。砂利を多く含んでおり、特に下部では直径2～3 mm 程の細かなものが密集した状態であった(E 7-8 号土坑、E 7-3 号土坑と重なり合う部分ではこの砂利によって床面が確認できた)が、土層としては覆土の上部と下部は明瞭に分層できるものではない。E 7-3 号土坑の覆土と色調は良く似るが、本土坑の方が締まりが強く、砂利を多く含みやや粘性に乏しい。

遺物は覆土中に満遍なく大量に含まれているが床面に直接接する物は無い。陶磁器・焙烙・塩壺(ロクロ整形で小形、刻印を持たず二次焼成が認められない物のみ)の出土が目立つ。

本土坑は後述する E 7-3 号土坑、E 8-5 号土坑と同様ゴミ穴として埋められたものである。一方、構築当初の機能が何を意図していたかは不明と言わざるをえない。

時期については、塩壺の出土、陶磁器から考えて18世紀末から19世紀初頭の廃絶である。

(菅谷 通保)

#### E 7-8 号土坑 (第93図)

E 7-8 号土坑は E 7 グリッド南西側から E 8 グリッドにかけて位置する。E 7-7 号土坑の項で述べたように、当初平面形を確実に捉えることが出来ず、サブトレンチを設けて調査を進めた遺構の内のひとつである。北側を E 7-7 号土坑及び攪乱によって削平されており、また西側は調査時に設定したサブトレンチによって南側は本調査に先立つ試掘溝 E によって破壊してしまっているが、東側に残存する壁と東側から北側にかけて底面上に見られる溝状の落ち込み、更にグリッド 8 ラインに沿って設定した e-f セクションから考えて、直径およそ 3 m の円形の平面形を持つと思われる。

確認面からの掘り込みは床面中央で約30cm を計るが、床面は大小の凹凸を持ち一定しない。北側の壁際では僅かに段差を持ち溝状の落ち込みも見られる。

本土坑は土層断面図 a-b, c-d, e-f によって判るように E 7-7 号土坑に切られ、E 8-5 号土坑を切って構築されている。E 7-3 号土坑との切り合いはサブトレンチで破壊してしまった為直接知り得ないが、後述するように E 7-3 号土坑は E 8-5 号土坑に先行することが明らかであるから、本土坑がより新しいものである。

覆土は二層に分層が可能であった。1層はE 7-7号土坑, E 8-5号土坑と良く似るが、僅かに砂利を含む割合が多い。2層は逆に砂利や瓦を全く含まずローム小ブロックを含む。

遺物は陶磁器, 瓦の小破片を極僅か出土したのみで, 図示し得るものは無い。

本土坑の性格は旧図書館基礎の近辺で多く検出した移植痕と思われる円形の浅い土坑と共通すると思われる。

時期については, E 7-7号土坑, E 8-5号土坑との切り合い関係から18世紀末から19世紀初頭と言う時間幅の中で捉えられる。

(菅谷 通保)

#### E 8-5号土坑 (第94・95図)

E 8-5号土坑はE 8グリッドからD 8グリッドにかけて位置し, 土層断面図a-b, c-d, e-fによって明らかなようにE 7-8号土坑に切られ, E 7-3号土坑, E 7-6号土坑, D 7-6号土坑を切っている。

東西7.10m, 南北最大4.00mの不整隅丸長方形を示す土坑だが, 南壁は東側半分が直線的であるのに対し, 西側半分は弧状に張り出している。北壁は大部分がE 7-3号土坑と重複しており平面的には捉えられなかったが, c-d, e-fセクションから見てほぼ直線的であったと思われる。東壁は試掘溝Eによって大部分を壊してしまっているが残存する床の立ち上がりから考えてほぼ南北に等しい直線であったと考えられる。

床面は三段になっており, 南壁側西半が最も低く絶対高21.90m, 次いで東壁側が21.96m, 北壁側西半が最も高く22.20mを測る。こうした床の高低と壁の凹凸が対応しており, それぞれ別の遺構かとも考えられたが, 壁際に堆積する13層が南壁の東側から西壁にかけて連続して確認できたこと, 覆土上層の2層が全体に渡って確認できたこと, 12層が三段の床の全てで直上に堆積していることなどから単一の土坑と判断した。

覆土はa-b, c-d, e-fの三本のセクションで総計十三の層を確認した。いずれも粘性に富んだ土層である。上層では砂利や瓦を多量に含んでおり, 陶磁器などの遺物は大部分1層から10層にかけての層に含まれる。下層においてはローム粒子(12・13層), 漆喰(11層)などを含み, 砂利や瓦その他の遺物も含まない。覆土の堆積状況を見ると, e-fセクションでは2層から4層がそれ以下の層を削平したかのような状態を示しているが, c-dセクションでは4層が床面と壁に接しておりこれも別の遺構とするより, 本土坑の埋没の過程に於いて, 部分的に廃土の表面を均したり削平したりといった行動を示していると考えらるべきであろう。更に南壁に沿って, E 8-1号組石遺構が覆土の上面に見られるが, これらの石はe-fセクションに見るように2層, 4層によって支持されており本土坑の埋没の最終段階で埋置したものと思われる。

既述のように遺物は覆土の1層から10層にかけて主に出土し, 床面に伴うものは無い。遺物の量は豊富である。特に陶磁器(徳利第IV期の出土が目立つ)と瓦が主体を占めており, 焼塩壺(ロクロ成形で小形のもの), かわらけ(小形のもの)などがある。このほか1層中より家犬骨が纏まって出土しているがこれは骨格の全てが揃っているわけではなく埋葬されたにしては不自然な状態

であった。他にアカガイを利用した顔料容器（第287図2）等が出土している。

本土坑の機能は不明だが、覆土形成に関しては、遺物の多量であること、わずかながら貝殻、骨、漆器等も含まれることを考えると塵捨て場として利用されていたと思われる。特に覆土が粘性に富む点は、塵として投棄された有機質の腐食に起因するのであろう。

本土坑の廃絶の時期は徳利第IV期、ロクロ成形の焼塩壺の単純な出土からみて18世紀末から19世紀初頭の間位置づけられるであろう。 (菅谷 通保)

#### E 8-1号組石遺構（第94・96図）

E 8-1号組石遺構はE 8グリッドからD 8グリッドにかけてE 8-5号土坑の南壁際に位置する。長さ約4.80m、幅約0.40mを計る石組みの遺構である。四角錐状の割り石を主に用い、四角錐の底面を北側に向けて一列に並べ錐の頂部の上下左右に偏平な礫を裏込めする。石組の上面の高さは標高23mでほぼ一定している。

当初は文学部側発掘区において見られたような石組の溝状の遺構（Q 6-1号組石遺構）かと考えられたが対応すべき石組がなく、またこれと直交する土層断面e-fにおいても溝と考えられるような掘り込みは捉えられないため別種の遺構と判断した。

本石組遺構はE 8-5号土坑の覆土3層・4層によって支持され、又E 8-5号土坑の範囲と一致している。土層の観察から考えて、E 8-5号土坑の覆土形成の最終段階に構築されたものと考えざるをえない。このため直接伴う遺物は無いが、構築の時期はE 8-5号土坑廃絶と同時期の18世紀末から19世紀初頭と考えられる。

本遺構の機能は、構築の過程から考えてE 8-5号土坑の存在と関連すると思われる。恐らくはE 8-5号土坑の軟弱な覆土の上に何らかの建物を構築する必要があり、そうした建物の基礎として構築されたと思われる。 (菅谷 通保)

#### E 8-6号土坑（第94・95図）

E 8-6号土坑はE 8-5号土坑の南側で深さ16cmの掘り込みとして確認した。大部分をE 8-5号土坑及び近代以降の攪乱によって破壊されており、規模・平面形は明らかでない。ほぼ直線的な南壁がおよそ1.80m程現存するのみである。

覆土はローム粒子を含む暗褐色土で、粘性・締まりともに無い。

遺物は全く出土しなかった。

本土坑は覆土の観察から塵捨て場として使用されたものでないことだけは判断できるが、その性格を推定しうるものは全く無い。時期もE 8-5号土坑に先行することが判るのみである。

(菅谷 通保)

#### E 7-3号土坑（第97・98図）

E 7-3号土坑はE 7・D 7グリッドにかけて位置する不整形の土坑である。東壁はE 7-7号土坑とE 7-8号土坑によって、南壁はE 8-5号土坑によって削平されているが、本土坑自体の掘り込みが深いため、共同溝によって破壊されている北壁を除きほぼ全体を伺うことができ

る。本土坑において特徴的な点は、第36図で良く観察できるように先行するE 7-5号土坑を避けるように掘り込んでいることであり、E 7-5号土坑の存在が無ければ不正方形の掘り方が意図されていたのではないと思われる。

東西の最大幅約5.56m、南北では現存約4.40m。確認面よりの深さは最深120cmを計るが床面は凹凸が激しく部分的に段を持つ為一定しない。北側中央部が最も深く、壁に近づくに従って浅くなる傾向がある。壁はほぼ全周にわたって緩やかに立ち上がるが、南西隅では断面図c-d'に示したように階段状の段差を持つ。南東側ではE 7-5号土坑を避けるように一旦立ち上がり更に緩やかに傾斜しながら上方に続くと思われるが、サブトレンチの設定時に破壊してしまっているため本来の上場は捉えられなかった。第97図にはE 7-7号土坑、E 7-8号土坑によって削平された状態を想定した上場線を破線で示している。

覆土は七層を確認した。いずれも暗褐色土または黒褐色土を主体とする層であり、粘性に富む。このうち7層は遺物を全く含まず床面の大小の凹凸（工具痕と思われる）を埋めるように堆積している。2層及び4層は他の層を掘り込んだ状態で堆積しており、E 8-5号土坑の項で述べたような覆土の堆積過程に於ける削平や掘り返しが行われたものと考えられる。

遺物は7層を除く各層中に多量に含まれており、陶磁器、焙烙、かわらけ（小形のもの）、焼塩壺（ロクロ成形の小形のもの）、瓦、加工痕のある鹿角（第287図3～5）、煙管の雁首・吸い口などがあり、他に漆器の出土を確認しているが木質が腐朽していたため取り上げることができなかった。

E 8-5号土坑と同様、覆土の形成は塵捨て場として利用されることによると思われるが、本来の用途が塵捨て場であったかどうかは不明である。

本土坑の廃絶の時期は徳利第IV期、ロクロ成形の焼塩壺の出土から18世紀末から19世紀初頭と思われる、更に切り合いからE 8-5号土坑に先行するものである。（菅谷 通保）

#### E 7-4号土坑（第99図）

E 7-4号土坑はE 7グリッド南西隅に位置し、E 7-5号土坑を切って構築されており、E 7-8号土坑、E 7-3号土坑によって上部を削平されている。

南北1.08m、東西0.82mの長方形の土坑で、E 7-8号土坑の床面からの掘り込みは40cmを計る。

本土坑を確認した時点で、覆土は平面的に三層が認められた。ローム粒子、焼土粒子を含む暗褐色土（1層）が中央に0.8m×0.7mの長方形をなし、北南西の三方に1層を囲む形で幅約1cmの黒褐色土（2層）が廻り、更にその周囲をロームブロックを含む暗褐色土（3層）が囲む状態であった。そこで土坑の中央に東西方向のセクションベルトを設定し1層から順に覆土の除去を進めた。1層を除去した時点で床面上それぞれのコーナーの内側に四本の柱穴を検出した。1層及び2層の立ち上がりはほぼ垂直で壁と言ってもよい状態であり、2層の厚さが常に約1cmで一定しており部分的に木質が確認できたこともあって、柱穴に柱を立てて板で囲ったうえ掘り方

との隙間を3層をもって埋めたものと判断し、1層、2層を除去した段階の上場、下場も図に示している。

本土坑からは遺物は出土していない。用途を推定することは困難であるが、規模や覆土の状態から考えて、塵穴として使用されていたものでないことは明らかである。

本土坑の時期は、18世紀前半の廃絶と思われるE7-5号土坑より新しく、同末から19世紀初頭と思われるE7-3号土坑より以前という時間幅の中で捕えられる。(菅谷 通保)

#### E7-5号土坑 (第99図)

E7-5号土坑はD7・E7両グリッドに跨がって位置する。E7-3号土坑、E7-4号土坑、E7-8号土坑によって上半を削平されている。C7-2号土坑等に近い形状を示す「地下式坑」と思われる。

底面は長軸202cm、短軸163cmを計り、長軸はほぼ東西に並行する。長軸上の断面では壁は比較的緩やかに拡がりながら立ち上がり、底面から60cm程のところ屈曲した後、ほぼ垂直に立ち上がって開口部に到るようである。短軸上の断面では底面から内側にすぼまりながら立ち上がる。断面で見るとかぎり壁はC7-2号土坑等と比べて直線的である。底面から壁の立ち上がる際に二本の柱穴状のピットが見られる。なお本土坑の底面は標高21.70mを計るが、他の同種の遺構は概ね20.50m前後であり、非常に浅い。

覆土は九層に分層した。土層断面図a-bで見ると堆積は南側からの片流れであるが東西方向ではレンズ状の堆積を示す。3層及び4層は炭化物、灰、魚骨、貝殻等を含む「かわらけ層」である。尚、図示出来なかったが厚さ数mmのローム粒子からなる層が4層の上面を覆っており、3層と明瞭に区別できた。

遺物は3層と4層からそれぞれ纏まって出土しているが、いずれもかわらけを主体としており、大部分は3層の出土である。3層からはかわらけ以外に「泉州麻生」銘と「御壺塩師 堺湊伊織」銘を持つ焼塩壺の身が1個体ずつ出土しており、両者の平行関係を考えるうえで貴重な資料となろう。他には3層・4層のそれぞれから少量の陶磁器を出土している。(菅谷 通保)

#### E7-6 a号・6 b号土坑 (第100図)

E7-6 a号土坑はE7-3号土坑、E7-8号土坑、E8-5号土坑を掘り上げた段階で確認した。当初単一の土坑と考えて調査を進めたが、E7-6 a号土坑の床面下から平面的に完全に重複する土坑を検出したためこれをE7-6 b号土坑とした。

E7-6 a号土坑は開口部は南北1.26m、東西1.56mの長方形、底部は南北1.65m、東西1.78m、確認面(E7-8号土坑の床面)からの深さ1.92mを計る。四方の壁は丁寧に調整された平面をなしており、床から垂直に立ち上がる。東西及び北側では床から約1.3mから1.5mのところ軽く、南側では約1.5mから1.75mにかけて強くオーバーハングし更に垂直に立ち上がる。床面に対して開口部は北側に偏った位置にある。

E7-6 a号土坑の覆土は1~14層に分層できた。オーバーハングする部分でやや斜めになる

ものの、全体としてはほぼ水平の堆積で、厚い層と薄い層が交互に折り重なる状態である。土層はいずれも非常に締まっており、堆積の状態から考えても人為的に埋め戻されたものである。遺物は陶磁器、瓦の小破片が極少量出土したが図示しうる物はなく、各層中にまともなく含まれている。

E 7-6 b号土坑はE 7-6 a号土坑の床面下から検出した。幅20~25cm・深さ約10cmの周溝を持つ床面で、周溝を含め東西約1.9m、南北約1.7mの楕円形の平面形を持つ。僅かに残った壁から判断すると、ややオーバーハング気味に立ち上がるもののようで、B 7-2号土坑に近い形状を示すのではないかと考えられる。またE 7-6 a号土坑の開口部南側中央がやや曲線的に膨らむが、E 7-6 b号土坑の開口部の名残を留めたものかも知れない。

覆土は15・16の二層とも締まりのある土層である。ロームブロックが主体となる15層は埋め戻しの土層と判断できるが、周溝を埋めた16層は混入物のない褐色土からなっており自然堆積の可能性も否定できない。いずれからも遺物の出土はない。

周溝よりやや上の壁が、南西側を除く三方で角を持つように削り出されている。この段はE 7-6 a号土坑の床面下で10層によって埋められているが、周溝の曲面に対応していない部分が見られる点で、E 7-6 b号土坑に伴うものかどうか、若干の疑問が残る。

「地下式坑」と通称されるものの切り合いは他にB 7-7号土坑・B 7-8号土坑、F 8-2号土坑・G 8-1号土坑等部分的に重複したものである。そうした切り合いと区別して、本例のような重複の状態を「反復」と呼んでも良いかと思う。北壁を除き、壁はE 7-6 b号土坑からE 7-6 a号土坑にかけて良く連続し、床面の長短軸の方向、長短比はほぼ完全に一致している。単なる偶然ではなく、E 7-6 a号土坑の構築に際して何らかの形でE 7-6 b号土坑の掘り方を利用していることは確実と思われる。このように考えてきた場合、15層がどのように埋められたのかが問題となろう。仮にE 7-6 b号土坑をB 7-2号土坑に近い形状と考えた場合、壁の四隅を削ることで容易にE 7-6 a号土坑の形状を成すのであるが、その際のロームを踏み固めて床としたのが15層ではないだろうか。またそのように考えるならば、E 7-6 b号土坑の周溝の上の角を成す段はE 7-6 a号土坑を構築する際に作られ、そのまま埋められた可能性が考えられる。

E 7-6 a号土坑・E 7-6 b号土坑の時期は、前述のように出土遺物からは判断し難い。E 7-6 a号土坑はE 7-3号土坑の時期(18世紀末から19世紀初頭)以前、E 7-6 a号土坑は更に其に先行することが判るのみである。 (菅谷 通保)

#### D 7-1号土坑 (第101図)

D 7-1号土坑はD 7グリッドの西に位置する。開口部で東西約1.25m・南北約0.7m、床面で東西約1.75m・南北約1.50m、確認面からの掘り込み約1.80mのオーバーハングする土坑である。開口部、床面共に隅丸長方形を呈する。E 7-3号土坑によって東側開口部が削平されている。

覆土は1~10層に分層できるが、いずれも締まりのない土層である。

遺物の出土状態は10層と1～9層とははっきりとした違いを見せている。10層の出土遺物はかわらけ・陶磁器等が主体を占め、他に銭（寛永通宝）・煙管がある。完形或いは器形の判明するものが多く、その大部分は壁と床の立ち上がり部分から出土している。これに対し1層から9層にかけては陶磁器・かわらけは出土するものの、器形の判明するものは少なく、小破片での出土が圧倒的に多い。また瓦の破片は8層・9層を中心に出土しているが、10層からは全く出土していない。こうした点から10層出土の遺物は、本土坑廃絶後投棄されたものであり、良好な一括性を持つと考えるが、1～9層出土の遺物は埋め戻しの土層中に本来含まれていた物か、もしくは埋め戻す際に混入したと思われる。

本土坑の時期は染付碗等の出土から18世紀前半と思われる。

(菅谷 通保)

#### C 7-3号ピット (第101図)

南北40cm, 東西35cm, 確認面からの深さ35cmを測る楕円形のピットである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底はほぼ平坦である。西側をC 7-1号遺構によって切られている。覆土は水平堆積を呈しているが、柱痕は確認されず本遺構の性格は不明である。

(成瀬 晃司)

#### D 7-4号土坑 (第102・103図)

D 7-4号土坑はC 7・D 7グリッドにかけて位置する。E 8-5号土坑に切られ、また全体図では表現できなかったが地中でC 7-2号土坑を切っている。当初D 7グリッドの南西隅に南北0.9m・東西0.6m程の長方形の土坑として確認したが、これはほぼ純粋なロームからなる1層が遺構確認の段階では地山のロームと区別ができなかった為である。この中央に南北方向のセクションを設定し(c-d)調査を開始したが、覆土の除去を進めるにつれて西側の壁と思われたローム(1層)の下に2層以下の覆土が潜り込んでいく様子が窺えた為、急遽東西方向のセクションを設定し調査を進めた。従ってa-bセクションの東側に破線で示した部分はc-dセクションを参考に調査時の所見に基づいて想定したものである。3～8層が主体部の落ち込みに到らず途切れることは覆土の除去作業中に確認している。

開口部で東西約2.45m・南北約0.9m～1.35m, 「地下式坑」と通称されているものである。

D 7-4号土坑は開口部が東側に張り出す独特の形状を持っている。いま仮に深い掘り込みを持つ室状の部分を主体部、張り出した浅い掘り込みを入口部として説明する。

主体部は床面で東西約170cm・南北250cm, 確認面からの掘り込み250cmを計る。壁は床からほぼ垂直に立ち上がり、北側では床面より約150cmから180cm, 南側では95cmから185cm, 西側では105cmから180cmにかけてオーバーハングし、その後垂直に立ち上がって開口部に至るが、入口部側に当たる東側の壁はオーバーハングせずに入部部の床面に達する。北壁及び西壁では壁面に竹管状のものを差し込んだと思われる直径1cm前後の円形の痕跡を多数確認した。断面見通し図a-b, a'-b'に表現したのはそのうち比較的太い痕跡で、全てを記載したものではないが、垂直の壁面の比較的高い位置にあり、オーバーハングする部分では西壁のほぼ垂直に差し込まれた二本を除き確認できなかった。上方を向くように斜めに差し込まれたものが多いが、中には水平

に近いものもある。また西側の壁には半割竹管によると思われる断面 U 字状のものもみられた。このほか東壁では床面より130cmの高さで中央に幅16cm、高さ10cm、奥行き8cmを測る長方形の足掛けと思われる掘り込みがある。壁はいずれも平滑で刃幅の広い工具で入念に仕上げているようである。床面はほぼ平らだが中央部がやや窪んでいる。

入口部は東西115cm、南北95cm(中央部)確認面からの深さ70cmのほぼ長方形の掘り込みである。壁は北・南・東ともほぼ垂直に立ち上がり主体部同様丁寧に仕上げている。主体部と接する位置では北と南に向かい合うように壁が挟られている。床面は非常に平坦でほぼ水平であり、やはり主体部と接する位置に幅35cmの長方形の掘り込みが14cmの間隔を置いて二つ設けられている。北側の深さ2～5cm、南側9～12cmで主体部に向かってやや傾斜している。

本土坑の覆土は1～14層に分層できる。ローム粒子もしくはロームブロックを主体とする層が厚く堆積し、その間に黒褐色土或いは暗褐色土を主体とする層が挟まれる状態である。主体部においてはほぼ水平に堆積し、入口部では主体部に向かって傾斜している。層の厚さも主体部においては概ね厚く、入口部では薄い傾向が見られる。1層・2層・9～14層はいずれも良く締まっており、特に1層はローム地山と区別し難い程度であったが、3～8層は比較的締まりがない。全て埋め戻しに伴う土層と思われ、9～14層が主体部を埋め戻す際に零れて堆積したのが入口部のみに見られる3～8層であると考えられる。

遺物は1層と2層との境から平瓦の破片を一点検出した他は入口部の3～7層にかけて陶磁器の小破片を数点出土したのみで、本土坑の時期を推定し得るものはないが、本土坑が切っているC7-2号土坑が18世紀前半、本土坑を切るE8-5号土坑が18世紀末から19世紀初頭と思われるので、この時間幅の中に位置づけられよう。(菅谷 通保)

#### D8-1号・2号・7号土坑(第104図)

D8-1号土坑はD8グリッド北西隅に位置する。南北105cm、東西102cm、確認面からの掘り込み23cmを計るほぼ円形の土坑である。覆土は1～3層に分層されるが、このうち2層は10～20cm角の瓦片が詰め込まれた状態であった。

床面は平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。北側の壁は本土坑に先行するD8-2号土坑の壁を利用している。

2層の瓦以外の遺物は無い。

D8-2号土坑はD8-1号土坑直下に検出した。南北128cm、東西118cm、確認面からの掘り込み30cmを計る南北がやや長い楕円形の土坑で、D8-1号土坑よりひとまわり大きい。覆土は4・5の二層で、黄褐色粘土を主体とする4層の上面がD8-1号土坑の床面となっている。4層はD8-1号土坑構築の際に貼られたのかもしれない。床面は中央がやや低いが平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。

遺物の出土は無い。

D8-7号土坑はD8-1号土坑・D8-2号土坑の直下に、E8-5号土坑調査中に確認し



た井戸である。南北135cm, 東西128cmと本遺跡の他の井戸と比べやや小形であった。D 8-1号土坑・D 8-2号土坑のセクションと重なるようにセクションを設定し掘り下げたが、調査途中で土層が崩落するなど危険であったため確認面から約130cmまで掘り下げた段階で調査を打ち切った。

覆土は6・7の二層を確認しているがこのうち6層はローム粒子を少量含む以外E 8-5号土坑の覆土6層(第95図)と区別できず、またセクション面で本土坑の壁の立ち上がりも、E 8-5号土坑の床の延長も確認できなかった。

遺物は6層・7層から陶磁器を少量出土している。

以上の三土坑とE 8-5号土坑との関係を考えてみたい。D 8-7号土坑とE 8-5号土坑とは切り合いで前後関係を確認し得ないが、これはD 8-7号土坑の上部がE 8-5号土坑と同時に埋められたためと考えるべきであろう。そうした場合、D 8-7号土坑→E 8-5号土坑、E 8-5号土坑→D 8-7号土坑、両者共存の三通りの前後関係が考えられるが、D 8-7号土坑が井戸として深い掘り込みを持っていたことを考えるとD 8-7号土坑が先行する可能性が高いと思われる。或いはE 8-5号土坑構築の時点でほぼ埋まりきっていたものがE 8-5号土坑の使用中に沈みこんだ可能性も考えられる。

D 8-1号土坑・D 8-2号土坑は、E 8-5号土坑廃絶後更にD 8-7号土坑の覆土が沈み込んだ窪みを利用したためにD 8-7号土坑とほぼ重なることになったのではないと思われる。又D 8-2号土坑の覆土4層が張られてD 8-1号土坑の床を形成していることから、両者を併せて一つの土坑と考えるべきかもしれない。(菅谷 通保)

#### D 7-2号土坑 (第104図)

D 7-2号土坑はD 7グリッド北西隅に位置し、北側を共同溝、東側をE 7-7号土坑によって切られる。現存で東西150cm, 南北70cm, 確認面からの掘り込み7cmの浅い土坑である。覆土は砂利を含む黒褐色土で締まりのある土であった。

遺物は陶磁器を少量出土している。

(菅谷 通保)

#### D 7-3号土坑 (第104図)

D 7-3号土坑はD 7グリッド北西隅に位置し、D 7-2号土坑に切られる。確認しえたのは西側の壁のみで、正確な平面形、規模は不明である。覆土はD 7-2号土坑に似た黒褐色土であるが砂利を含まない。

遺物は出土していない。

(菅谷 通保)

#### F 7-2号遺構 (第105図)

平面形は長円形を基本とし(あるいは卵形と呼んだ方がよいかもしれない)、長軸2.94m, 短軸1.76m, 現確認面から深さ0.30m程度の規模の遺構である。壁の立ち上がりはしっかりしており、長軸より東側は比較的急傾斜な壁となっている。ロームブロックを含む黄褐色土(3層)が覆土であり、覆土中及び床面からは遺物は出土していない。

本遺構の性格は不明であるが、発掘時に G 7-4 号遺構と G 7-2 号遺構を切っていることが確認された。

(大塚 達朗)

#### G 7-2 号遺構 (第105・106図)

円い溝状の遺構で、外径3.3m、内径1.45mのしっかりした掘り込みを呈している。遺構の南半分は攪乱によってかなり削られてしまっているところもあるが、北半分の溝はさらに一段深くになっており、確認面から0.42mの深度を有する。北側のこのより低くなった溝の床上にはしまりのない黄褐色土(2層)が堆積しているが、その上及び他の部分は、小石が多量に混じり、ロームブロックも含むかたくしまった暗褐色土(1層)が覆っている。遺物は出土していない。

本遺構は F 7-2 号遺構によって西側の立ち上がりの一部が壊され、一方、G 7-2 号土坑の上部と G 7-3 号遺構を一部削っている。遺構の性格は判然としない。

(大塚 達朗)

#### G 7-2 号土坑 (第106図)

確認面から約1.8mの深さを持つ土坑で、当遺構の上部は、「井」の字状とも言うべき溝状の掘り方と木質部が含まれる黒褐色の覆土(2層)から判断して木枠が組まれていたと推定できるであろう。ハードロームまで掘り込まれている部分はほぼ垂直な壁で約1.5×0.95mの長方形の平面形を構成する。尚、この壁面、床面には覆土を除去した際に暗赤褐色の付着物(鉄分か)が見られたことは遺構の性格を考える上で重要であろう。水を溜めて置くのに用いられた遺構と推定している。遺構覆土(1・3～6層)はロームブロックやローム粒子を含む暗い褐色土・黄褐色土が互層をなしていて、一気に埋められて廃絶されたかのようなものである。遺物はない。

既に触れたようにこの遺構は上部を G 7-2 号遺構によって壊されていて、そして、G 7-7 号遺構の床面を掘り抜いている。

(大塚 達朗)

#### G 7-4 号遺構 (第106図)

G 7-2 号土坑と F 7-2 号遺構によって遺構の大半が壊されていると思われ、全形は復元できない。残った部分は非常に浅く、ややしまりのある暗褐色土が覆土であった。遺物はなかった。本遺構平面図に比較的大きな石が表現されているが、後に混入したものである。当遺構の性格を判断するにはあまりにも手掛かりが少ないとしか言えないであろう。

(大塚 達朗)

#### G 7-5 号遺構 (第106図)

遺構の一部を G 7-4 号遺構と明治時代以後の攪乱によって壊されているが、長円形を呈すると見做していいだろう。長軸1.56m、短軸1.10m、確認面からの深さ0.16mの規模の遺構であるが、長軸に沿った北東側では床面が一段高くなっている。遺構内には明褐色土(8層)、黒褐色土(7層)の順で堆積した覆土が観察された。人為的に埋められたのではないであろう。遺物は出土していない。性格は判然としない。

(大塚 達朗)

#### G 7-6 号遺構 (第106図)

周辺の遺構(G 7-2 号遺構、G 7-4 号遺構、G 7-5 号遺構、G 7-3 号遺構)と明治時代以降の攪乱によってかなり壊されている上に、発掘区外にも遺構は広がっているため平面形態

は分からない。深さは、確認面から0.18m程度である。壁は比較的緩やかに立ち上がっている。本遺構は多量の粘土塊を含む暗黄褐色土に覆われ、瓦の破片がかなり出土しており（他に釘が少量）、この暗黄褐色土と共に瓦片が廃棄されているのであろう。遺構の本来の性格は不明である。

（大塚 達朗）

#### G 7-3号遺構（第107図）

遺構の一部は発掘区外に伸びているが、恐らくやや不整形な長円形となるのではなからうか。長軸3.56mで、発掘区に沿ったところから最大幅1.96mで、確認面から0.26mの深さがある。壁の立ち上がりは緩やかであり、床面は平坦で凹凸が目立たないのは遺構の性格と関係するであろう。多量に瓦と炭化物を含み、焼土塊も混じる暗赤褐色土（1層）が覆土となっていることから、判断して火災の後始末として本遺構にそれらが棄てられたと考えられるであろう。本来の用途は別であったと考えている。尚、この遺構は南隣のG 8-1号遺構とG 7-7号遺構とを切っている。

（大塚 達朗）

#### G 8-1号遺構（第107図）

一部は発掘区外であるが、G 7-2号遺構と同様の、円い溝状の遺構と考えて問題はないであろう。しかし、G 7-2号遺構に比して規模は遙かに小さい。外径1.64m、内径0.62mで残りが比較的いい部分で判断すると、確認面から0.27mの深さとなる。覆土（2層、3層）はかたくしまっていた。遺物はない。この遺構はF 7-3号遺構によって南半分程にわたってかなり削られ、北端をG 7-3号遺構によって少しく壊されている一方、G 7-7号遺構床面を掘り込んでいる。

（大塚 達朗）

#### F 7-3号遺構（第108図）

F 8、F 9グリッドにかけて広がり、発掘区外にも及んでいるようである。不整形の平面形態の遺構であるが、床面は平坦で壁は緩やかに立ち上がっている。遺構全体に瓦（火を受けたと思われるものもかなりある）を多量に含み、釘も比較的よくまとまっているほかに、炭化物も相当混じっている暗赤褐色土（1層）が覆っていたことから判断して、この遺物は火災の後始末として本遺構に棄てられたものであろう。しかし、平坦な床面からして、塵棄てのために急遽掘られたものとは考えられないが、遺構本来の性格は不明である。この遺構の床面をF 8-3号pitが掘り抜き、当遺構自体はG 8-1号遺構、F 8-2号遺構、そして、G 7-7号遺構を切っている。

（大塚 達朗）

#### F 8-2号遺構（第108図）

F 7-3号遺構に切られ、G 7-7号遺構を切っている遺構で、長さ1.74m、最大幅0.84m程の大きさである。北側の床面は円形に一段深くなっている。焼土塊を含む暗褐色土（2層）を覆土とし、遺物は含まれていなかった。

（大塚 達朗）

#### G 7-7号遺構（第108図）

F 7、G 7、F 8、G 8、F 9区に広がり、これらの区に構築された各種遺構（既述のF 7-2

号遺構～F 8—2号遺構)によって切られている。尚、当遺構の範囲は発掘外にも及んでいる。平面形はアメーバ状とでも呼ぶしかない変化に富んだ形態が特徴的である。そして、この遺構の床面も F 7—3号遺構や G 7—6号遺構の場合と同様に平坦で凹凸は顕著ではない。覆土(3層)中から瓦、陶磁器等々が少し出土している。一方、下の4層は植物繊維を多量に含む硬くしまった暗黄褐色土で特殊なものと考えざるを得ない。植物繊維を多量に混ぜた粘質の暗黄褐色土を掘り方の底全体に貼ったものである。この3層上面を遺構使用時の面と考えている。平面の形は整っていないが、やはり、明確な意図の下に構築されたと判断せざるを得ないが、これだけでは本来の性格は特定できない。(大塚 達朗)

#### F 7—6号土坑(第109図)

開口部が「卵」形(南北1.56m・東西最大幅1.1m)を呈し、坑底が僅かに隅丸の方形(長辺2.16m×短辺1.93m;北辺はやや脹らむ)となる地下式坑である。確認面からの深さは1.82m程ある。坑底にはしっかりした掘り方のピットがありそこにやや浅い溝が二本接続し、うち一本からはさらに溝がわかれている。この遺構の機能と関係する施設と考えられる。壁は坑底からやや内湾ぎみに立ち上がり、さらに大きくオーバーハングし、その上に開口部の立ち上がりが接続しているのである。開口部は、下の坑底に対して中央ではなく南辺よりに位置し、G 7—7号遺構に切られている。遺構覆土の性状、堆積状況から判断して自然に埋まったとは考えにくい、一回で埋め戻されたのではなかろう。出土遺物は瓦が多く、次に陶磁器となるが、いずれについても小片になったものが目立った。床面の遺物はない。(大塚 達朗)

#### E 8—2号土坑(第110・111図)

一部壁がオーバーハングするところがある土坑で、底面はやや歪だが、方形となり北側が一段高くなり、低い床(確認面から1.46m くらいの深さ)の方にはやや楕円形のピットがある。開口部北側は構築時に円く掘られていて壁が少しオーバーハングするように掘り込んでいる(この北側の開口部の西半部から底面かけての部分が E 7—1号土坑を壊すようになっている)が、その後、この開口部からオーバーハングする壁にかけてローム塊が張りつけられ(c—dラインの土層断面図参照)、結果的、方形の開口部(やや細い実線とやや太い実線でかこまれる部分)が作られている。これが遺構使用時の開口部となる。覆土最下層(10層)は水平堆積しており、これは本土坑使用当時の堆積であったかも知れないが、それより上層は一気に人為的に埋め戻した際に形成された層であろう。焼土と炭化材を含む層が互層をなして、火災の後始末とうしてこの遺構のなかに投棄されたのであろう。多量の陶磁器が覆土中からの出土遺物としては特筆するに値するであろう(各層から出土した陶磁器は相互に接合関係を持っている)。(大塚 達朗)

#### E 7—1号土坑(第110・111図:図版1)

複雑な掘り込みを有し、一部地下式となる土坑である。北側の一部を E 8—2号土坑によって壊されている。遺構の東側に階段状の掘り方があり、西側が深く掘り込まれて土坑の底となる。底は段(段差は12cm程)を有しており、北側の底面が最も深くなっている(確認面から2.43mあ

る), 且つこの底面に至る最西部と北半分の壁がオーバーハングしているのである。覆土は水平堆積した層の上に斜めに堆積した層がありまたその上は水平堆積おり, 明らかに人為的に埋め戻されたであろう。遺物は覆土から瓦の破片, 陶磁器の破片などが出土している。(大塚 達朗)

**F 8-3号遺構 (第110・111図)**

G 7-7号遺構に切られ, E 8-2号土坑に西側のかなりの部分を壊されているが, しっかりした掘り込み(確認面から0.89mの深さ)の長方形の平面形態(2.50m×0.96m程)をもつ遺構である。床面と壁には暗赤褐色の付着物(鉄分か)があり, 水が溜められていたのではないかと推定している。覆土は焼土塊を含む層と炭化材もかなりはいつている土が互層を成していて, 火事後始末のものが棄てられたと考えられよう。火を受けた陶磁器などが比較的多く出土している。

(大塚 達朗)

**F 8-1号土坑 (第112図)**

地下式土坑である。底の平面形は隅丸方形(長軸2.44m×短軸1.92m)を呈し(確認面からの深さは約2m), 真上にやや広い開口部が位置する。床面にはやや大きめの方形の掘り込みがあり, 遺構本来の施設であろう。壁はやや緩やかに開きぎみに少し立ち上がった後, 真っ直ぐ立ち上がってさほど急ではないオーバーハングの部分形成して開口部にいたるやや開きぎみの立ち上がりに連なる。

この土坑は一次利用, 二次利用に関して複雑であったようである。まず, 底面に水平堆積層が形成されている。これは最初の使用当時の堆積であったと思われる。次に, 人為的と考えられる盛り上がった状態の堆積層が形成されているが, この中に火鉢が正位置で埋設されていて(10層中), 火鉢のなかには灰がぎっしりと詰まっていた。この土坑のなかで火鉢が使われできた灰と考えている。最初の使用とは違った使われ方をしているのかもしれない。この後に, 大量の, 食物残滓(魚骨, 貝殻), カワラケと, 「泉州麻生」銘(外・長方形, 内・二段角切りの長方形)の焼塩壺の身, 陶磁器の破片, 灰, 粘土等々が一括投棄されて廃棄層(9層)が形成されて遺構がいったん廃絶されたようである。そして, 再び, 小土坑として使われた時を経て最終的に遺構は埋められて廃絶されたのであろう。尚, 当時下式坑はG 7-7号遺構によって開口部の一部が壊されている。

(大塚 達朗)

**F 8-2号土坑 (第113・114図)**

地下式坑で, G 7-7号遺構に切られている。深さは確認面から1.98mある。開口部は円形に近いが東側では直線的になっている部分もある。その規模は, 東側の直線的な部分の中央を通る軸を仮に設定すると, その間1.93mあり, そして, 最大幅1.95mとなる。坑底の平面形はやや不整形で, G 8-1号土坑を切っている部分では直線的で, 南側も直線的であり, 他は円くなっている。開口部と坑底の位置関係と坑底の平面形のために, 底から壁の立ち上がり方, オーバーハングの度合いが異なっている。G 8-1号土坑を切っている部分では特別な施設を設けたようである。図に示しているように三個深い柱穴が並んでいるのがその施設に関係する。恐らく, G 8

一1号土坑の覆土がこちらの遺構の中に流れ込まないように板を立て掛けたようで、その板を押さえるために柱を建てていたと考えられる。底には他に溝やピットがあり、この土坑の使用時に機能していたものであろう。

覆土の堆積状態を見ると、この土坑は一回、一気に埋め戻されたと考えられるが、1・2層(包含するものの量的な違いから分層した)はその埋土とは不整合な関係にあり、ある程度掘りこまれ、利用され、再度埋め戻されたと推定できるであろう。遺物は覆土(1～9層)中から瓦の破片、陶磁器の破片等々が出土していた。(大塚 達朗)

#### G 8-1号土坑(第113・114図)

F 8-2号土坑に切られているが、開口部の一部とオーバーハングしている部分と坑底の一部を検出できたことで地下式坑であることが分かった。確認面から深さは1.82mあった。主体部は発掘区外にあり遺存状態はよさそうである。当土坑は覆土の在り方から何回かにわたって人為的に埋め戻されていったと考えられ、最終的には11層であたかも蓋をされるかのようにして廃絶されている(特殊な遺物廃棄層の形成と無関係ではないと考えている)が、僅かな調査範囲のなかでもぎっしりと動物遺存体(魚骨、貝殻)やカワラケと炭化物を含む遺物廃棄層(17層)が確認できたことは二次的利用を考える上で見逃せない。発掘時にはこのような廃棄層を土器を代表させて〔カワラケ層〕と呼んでとくに注意していた。この地下式坑が同趣の〔カワラケ層〕を有する地下式坑列の発掘区に於ける東端に位置する例である。(大塚 達朗)

#### F 7-5号土坑(第115図)

長円形の平面形をもつ土坑で、長軸1.18m×短軸0.51m程の規模で、底は三段の段をもち南の方へ向けて深くなっていて、確認面から0.96m程の深さになっていた。底の南端には小さなピットがあって、角錐状に掘りこまれていたことやその覆土から判断して木の杭が打ち込まれていたようである。覆土(8～10層)は北から南にかけて斜めに堆積し、遺物はこれらの層に瓦と陶磁器の小破片が少量散在していた。人為的に埋められたのであろう。本来の用途に関しては分からない。(大塚 達朗)

#### E 9-6号土坑(第116図)

E 9区に位置し、重複するE 9-3号ピット、8号土坑を切って構築されているが、遺構の中央を、東西に走る近代以降の土管の埋設溝に攪乱を受けている。平面形は、南北に主軸を有する長方形を呈し、規模は、長辺114cm、短辺64cm、深さ50cmを計測する。坑底は、フラットで、壁も直立する。土層は、二層に分層されるが、共に褐色土である。

遺物は、陶磁器片数点、瓦片三十点程度検出している。(堀内 秀樹)

#### E 9-6号ピット(第116図)

調査区の東側E 9区に位置する東西方向に主軸を持つ隅丸方形を呈するピットである。E 9-5号ピット、8号土坑と重複関係を有し、新旧はE 9-5号ピットより旧で、E 9-8号土坑より新である。規模は、長辺75cm、短辺40cm、深さ30cmを計測する。坑底は、フラットで、壁

はそれよりほぼ直立する。土層は、二層に分層されるが、ともに褐色土である。

遺物は、陶磁器片、瓦片が少量検出されている。(堀内 秀樹)

**E 9-8号土坑 (第116図)**

E 9区に位置する長方形を呈する土坑である。E 9-5号ピット、6号ピット、7号ピット、6号土坑と重複関係にあり、新旧は、E 9-7号ピットより新しい他はすべてに旧である。規模は、長辺84cm、短辺47cm、深さ50cmを計測する。坑底は、フラットで、壁も平滑でほぼ直立する。土層は、五層に分層され、暗褐色土および褐色土がサンドイッチ状に壁より中央に向かって傾斜を有して交互に堆積する。

遺物は、陶磁器片、瓦片が少量検出されている。(堀内 秀樹)

**E 9-4号土坑 (第117図)**

E 9区に位置する平面形円形を呈すると思われる土坑である。重複するE 9-3号土坑、5号土坑を切って構築されているが、西半を旧帝国大学の図書館の基礎に攪乱を受けており、全体の様子は窺うことはできない。残存規模は、東西40cm、南北70cm、深さ45cmを計測する。本土坑の壁際には、板材を周囲に隙間なく巡らし、その下土層図3層と4層の間には、籠状の竹製品の痕跡と思われる彎曲した炭化物層が認められている。覆土は、籠状の炭化物層より上層では焼土、炭化物が多量に含まれており、下層は、灰褐色土、暗褐色土を呈する。

遺物は、陶磁器片、かわらけ片が少量出土している。(堀内 秀樹)

**E 9-3号土坑 (第117図)**

E 9区に位置する平面形円形を呈すると推定される土坑であるが、南、西側を旧帝国大学の図書館の基礎に大きく削平され、遺構全体の様子は、窺うことはできない。E 9-2号土坑、4号土坑、5号土坑と重複関係にあり、新旧は、E 9-4号土坑、5号土坑より旧で、E 9-2号土坑より新である。壁は、若干東より西に傾斜を有する坑底からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、三層に分層されるが、いずれもローム土を含む暗褐色土を呈する。

遺物は、陶磁器片、瓦片少量、釘等検出されている。(堀内 秀樹)

## その他の遺構

これまで述べた以外の小規模な遺構について、各図版毎に以下に概観する。

**第78図**

B 8-1号ピットは東側を攪乱によって破壊されているが、現状で80×55cmの長方形を呈し深さは40cmである。坑底は西側が深い二段になっている。B 8-1号遺構は110×38cmの不整長方形を呈し深さ7cmを測る。B 8-1号土坑は80×54cmの楕円形を呈し深さ12cmを測る。B 8-2号土坑は62×47cmの楕円形を呈し深さ9cmを測る。B 8-12号ピットは35×35cmの台形を呈し深さ10cmを測る。B 8-13号ピットは35×30cmの方形を呈し深さ20cmを測る。C 8-1号遺構は50×41cmの楕円形を呈し深さ8cmを測る。以上のうちB 8-1号ピット、B 8

—12号ピットは覆土上層より煉瓦片を検出しているため攪乱として扱うべきであったかも知れない。

#### 第79図

B 8—4号ピットはB 8—3号ピットに西側を切られるため全形は不明だが、現状から直径80 cm 前後の円形を呈していたと思われる。深さは25cm である。

#### 第82図

B 7—5号ピットは35×26cm の長方形を呈し深さ12cm を測る。B 7—5号土坑に切られている。

C 8—2号遺構は東西71cm 南北66cm の不定形の遺構で、確認面からの深さは7 cm である。C 8—21号ピットを切っている。C 8—5号ピットは24×15cm の長方形を呈し、深さ20cm を測る。C 8—21号ピットを切っている。C 8—21号ピットは70×65cm のほぼ円形を呈し、坑底南西隅が28×23cm 程の楕円形に柱穴状に深くなっており、この部分で柱痕（土層図7層）を確認している。C 8—5号土坑は南側を攪乱によって破壊されており全形は不明である。現状から推定して、恐らく直径1 m 前後の円形と思われる。確認面からの深さは8 cm である。

#### 第83図

B 7—1号ピットは22×22cm の不整形を呈し深さ29cm を測る。B 7—2号ピットは一辺20 cm の方形を呈し深さ19cm を測る。B 7—6号ピットは26×33cm の不整長方形を呈し深さ6 cm を測る。B 7—7号ピットは一辺21cm の方形を呈し深さ21cm を測る。一辺6 cm の角材と思われる柱痕を確認している。B 7—8号ピットは21×17cm の長方形を呈し深さ4 cm を測る。B 7—9号ピットは一辺16cm の方形を呈し深さ12cm を測る。B 7—10号ピットは25×17cm の長方形を呈し深さ34cm を測る。

B 7—11号ピットは21×15cm の不整形を呈し坑底は直径10cm の円形に一段深くなって21cm を測る。直径10cm の丸材と思われる柱痕を確認している。B 7—12号ピットはB 7—11号ピットに切られているが、27×18cm の長方形を呈するものと思われる。深さは19cm をはかり、坑底は非常に締まっている。B 7—13号ピットはB 7—11号・12号ピットに切られている。35×20cm 程の三角形あるいは長方形を呈していたものであろうか、深さは5 cm である。B 7—14号ピットは22×20cm の不整形を呈し深さは5 cm である。B 7—15号ピットは20×20cm の方形を呈し深さ26cm を測る。B 7—17号ピットはC 7—1号ピットに切られる円形を呈すると思われるもので、現状で東西27cm、深さ15cm を測る。C 7—4号ピットは一辺20cm の方形を呈し深さ12cm である。

#### 第84図

B 8—6号ピットは一辺25cm の円形を呈し深さ15cm を測る。B 8—7号ピットは20×15cm の長方形を呈し深さ5 cm を測る。B 8—6号ピットに切られている。B 8—8号ピットは直径8 cm の円形を呈し深さ14cm を測る。B 8—9号ピットは直径6 cm の円形を呈し深さ8 cm を測る。



る。B 8-10号ピットは直径8 cmの円形を呈し深さ13cmを測る。以上B 8-8号~10号の3基は先端が尖る丸杭の杭穴と思われる。

B 8-11号ピットは一辺15cmの方形を呈し深さ15cmを測る。B 8-14号ピットは38×28cmの不整形を呈し深さ34cmを測る。中央に直径10cmの柱痕(土層図14層)を確認している。B 8-15号ピットは20×24cmの長方形を呈し深さ15cmを測る。B 8-16号ピットは一辺22cmの方形を呈し深さ29cmを測る。柱痕を確認している。B 8-17号ピットは27×17cmの不整形を呈し深さ11cmを測る。B 8-2号遺構に切られている。B 8-18号ピットはC 8-3号ピットに切られるが、現状で21×17cmの長方形を呈し、二段になった坑底の深さは8 cmである。B 8-19号ピットは一辺20cmの方形を呈し深さは3 cmである。B 8-20号ピットは25×19cmの長方形を呈し深さは20cmを測る。B 8-2号遺構に切られている。

B 8-21号ピットは68×37cmの長方形を呈し、坑底は三段に深くなり最深43cmである。柱痕(土層図11層)を確認している。B 8-22号ピットはC 8-3号ピットに切られ、57×44cmの楕円形を呈し深さ8 cmを測る。B 8-23号ピットは直径10cmの円形を呈する。斜めに打ち込んだ杭穴であるため深さは計測不能であった。B 8-24号ピット直径11cmの円形を呈し深さ21cmを測る。丸杭の杭穴と思われる。B 8-25号ピットは一辺9 cmの方形を呈する角杭の杭穴である。B 8-22号ピットを切っている。B 8-26号ピットは42×28cmの楕円形を呈し深さ14cmを測る。C 8-3号ピット・B 8-3号遺構に切られている。B 8-28号ピットは一辺23cmの方形を呈し深さ8 cmである。B 8-29号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ5 cmを測る。B 8-30号ピットは一辺が8 cmの三角形を呈し深さ21cmを測る。

B 8-31号ピットは一辺8 cmの方形を呈する。B 8-32号ピットは一辺6 cmの方形を呈し深さ5 cmを測る。以上B 8-30号~32号の3基は断面方形或いは三角形の杭の杭穴と思われる。B 8-33号ピットは直径8 cmの円形を呈し深さは5 cmである。坑底が非常に締まっている。B 8-35号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ4 cmを測る。B 8-36号ピットは直径9 cmの円形を呈し深さ2 cmを測る。坑底が非常に締まっている。以上のB 8-33号・35号・36号の3基は丸杭の杭穴と思われる。B 8-37号ピットは一辺22cmの方形を呈し深さ17cmを測る。坑底が非常に締まっている。B 8-38号ピットは7×5 cmの楕円形を呈する。B 8-39号ピットは一辺6 cmの隅丸方形を呈する。B 8-40号ピットは一辺5 cmの方形を呈する。以上B 8-38号~40号の3基は杭穴と思われる。深さは何れも計測できなかった。

B 8-41号ピットは直径12cmの円形を呈し深さ80cmを測る。覆土中に先端を四角錐に加工した丸杭を検出している。B 8-2号遺構は52×32cmの楕円形を呈し深さは14cmである。B 8-17号・20号ピットを切っている。B 8-3号遺構は104×44cmの不整形楕円形を呈し深さは7 cmである。B 8-26号ピットを切っている。B 8-4号遺構は35×30cmの不整形を呈し深さは4 cmである。B 8-37号ピットに切られている。

C 7-2号ピットは28×20cmの長方形を呈し深さ10cmを測る。C 8-1号ピットは24×17

cmの長方形を呈し深さ10cmを測る。C 8-2号ピットは34×16cmの長方形を呈し深さ7cmを測る。C 8-14号ピットを切っている。C 8-6号ピットは52×38cmの不整楕円形を呈し深さ9cmを測る。C 8-7号ピットは一辺21cmの方形を呈し深さ4cmを測る。C 8-8号ピットは一辺15cmの方形を呈し深さ12cmを測る。C 8-9号ピットは一辺20cmの隅丸方形を呈し深さ6cmを測る。C 8-10号ピットはC 8-11号ピットに切られ、現状で30×19cmの長方形を呈し深さ23cmである。

C 8-11号ピットは41×18cmの長方形を呈し坑底は階段状に三段のテラスを持つ。最深で34cmを測る。C 8-12号ピットはC 8-11号ピットに切られており、現存で14×13cmの不整形を呈する。深さは4cmである。C 8-13号ピットは24×16cmの長方形を呈し深さ16cmである。C 8-14号ピットは20×12cmの長方形を呈し深さ6cmを測る。C 8-2号・13号ピットに切られている。C 8-15号ピットは22×17cmの長方形を呈し深さ3cmを測る。C 8-16号ピットは22×18cmの方形を呈し深さ7cmを測る。C 8-17号ピットに切られている。C 8-17号ピットは一辺22cmの方形を呈し深さ5cmを測る。C 8-16号ピットを切っている。C 8-22号ピットは48×46cmの不整形を呈し坑底は二段に窪んでおり最深部で22cmを測るが、この位置に柱痕を確認している。C 8-3号遺構に切られている。C 8-27号ピットは直径8cmの円形を呈し深さ12cmを測る。C 8-28号ピットは東側を攪乱によって切られる。現状で44×36cmの不整形を呈し深さ12cmを測る。坑底の中央が非常に締まっており柱穴の可能性がある。C 8-29号ピットは12×10cmの長方形を呈し深さ53cmを測る。C 8-30号ピットは直径9cmの円形を呈し深さ13cmを測る。以上の2基は杭穴と思われる。

C 8-32号ピットは一辺が22cmの方形を呈し深さ35cmを測る。坑底はほぼ平坦である。C 8-33号ピットは一辺が22cmの方形を呈し深さ12cmを測る。坑底西側が締まっている。C 8-34号ピットは39×29cmの楕円形を呈し深さ49cmを測る。南壁寄りに一辺12cmの柱痕を確認している。C 8-37号ピットは直径6cmの円形を呈し深さ40cmを測る。C 8-38号ピットは30×22cmの長方形を呈し深さ38cmを測る。C 8-6号ピットに切られ、C 8-3号遺構を切っている。C 8-39号ピットは29×16cmの長方形を呈し深さ31cmを測る。C 8-39号ピットの坑底で検出したC 8-40号ピットは、直径7cmの円形を呈し深さ7cmを測る。C 8-3号遺構は東側を削平されているため全形は不明で、現状で南北150cmを測る。C 8-6号～8号・27号・38号ピットに切られ、C 8-22号ピットを切っている。C 8-4号遺構は東西端を攪乱によって切られている不定形の遺構で、南北96cm東西は現状で152cmを測る。

以上の述べたもののうち、柱痕の確認されたB 8-34号ピット・B 8-21号ピット・C 8-22号ピットの3基は各柱痕を結んだ線がほぼ直角となりC 8-34号ピットとC 8-21号ピットの間が2間、C 8-21号ピットとC 8-22号ピットが2間半となり、建物となる可能性が高い。

#### 第87図

C 8-18号ピットはC 8-3号・20号ピットによって切られており、C 8-19号ピットを切っ

ている。現状では42×24cmの不定形で深さは10cmを測る。C8-19号ピットはC8-3号・4号・18号・20号ピット、C8-1号土坑に切られている。現存は35×35cmで、恐らく楕円形を呈していたと思われる。深さは20cmを測る。C8-20号ピットはC8-2号～4号ピット・C8-1号土坑に切られ、C8-18号・19号ピットを切っている。残存している東側の壁から楕円形の平面形を有していたと思われるが規模は不明である。深さは9cmを測る。C8-25号ピットはC8-4号ピット・C8-1号土坑に切られ、C8-41号ピットを切っている。深さは11cmを測る。C8-26号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ48cmを測る。C8-41号ピットはC8-4号ピット・C8-1号土坑・C8-25号ピットに切られ、C8-42号ピットを切っている。直径20cm前後の円形を呈していたと思われるが、深さは僅かに2cmに過ぎない。C8-42号ピットはC8-25号・41号ピットに切られる。一辺25cm前後の方形を呈したと思われ、深さは4cmである。

#### 第91図

E7-4号ピットは40×37cmの隅丸方形を呈し深さ4cmを測る。E7-12号ピットは19×15cmの長方形を呈し深さ10cmを測る。E7-13号ピットは23×18cmの長方形を呈し深さ5cmを測る。E7-14号ピットは直径7cmの円形を呈し深さ7cmである。E7-15号ピットは直径15cmの円形を呈し深さ4cmである。E7-16号ピットは直径7cmの円形を呈し深さ4cmを測る。E7-17号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ8cmである。E7-18号ピットは直径8cmの円形を呈し深さ6cmを測る。E7-19号ピットは23×15cmの長方形を呈し深さ3cmを測る。E7-20号ピットは直径6cmの円形を呈し深さ5cmである。E7-21号ピットは直径7cmの円形を呈し深さ6cmを測る。E7-22号ピットは一辺10cmの三角形を呈し深さ2cmである。E7-23号ピットは10×8cmの楕円形を呈し深さ2cmである。

以上のうちE7-14号～18号・20号～23号の9基は杭穴の可能性があろう。

#### 第101図

C7-1号遺構は64×40cmの不整形を呈し深さ6cmを測る。C7-3号ピットを切っている。C7-3号ピットは直径35cmの円形を呈し深さ35cmを測る。C7-5号ピットは32×20cmの長方形を呈している。坑底中央が直径6cmの円形に低くなっており、この部分での深さ30cmを測る。C8-43号ピットは20×16cmの楕円形を呈し深さ7cmである。C8-44号ピットは45×35cmの楕円形を呈し深さ28cmである。以上の2基はC8-4号土坑を切っている。C8-4号土坑は80×52cmの長方形を呈し深さ16cmを測る。C8-43号・44号ピットに切られている。

#### 第108図

F8-3号ピットは南側をメインセクション観察用のトレンチに切られているため全形は不明だが、残存部から見て直径40cm前後の円形を呈していたと思われる。F7-3号遺構を切る。

#### 第115図

E7-2号ピットは26×18cmの長方形を呈し深さ16cmを測る。E7-3号ピットは26×18

cmの長方形を呈し深さ16cmを測る。E 7-5号ピットは48×45cmの隅丸方形を呈し深さ27cmを測る。E 7-6号ピットは46×34cmの不整形で深さ12cmを測る。E 7-7号ピットは直径9cmの円形を呈し深さ18cmを測る。E 7-8号ピットは直径15cmの円形を呈し深さ8cmである。E 7-9号ピットは直径16cmの円形を呈し深さ7cmである。E 7-11号ピットは直径20cmの円形を呈し深さ4cmを測る。E 7-24号ピットは一辺5cmの方形を呈し深さ7cmを測る。E 7-25号ピットは7×4cmの楕円形を呈し深さ4cmである。E 7-26号ピットは9×6cmの長方形を呈し深さ15cmである。

E 7-27号ピットは直径7cmの円形を呈し深さ15cmである。E 7-28号ピットは直径8cmの円形を呈し深さ4cmを測る。E 7-29号ピットは18×13cmの長方形を呈し深さ8cmを測る。E 7-30号ピットは33×25cmの楕円形を呈し深さ5cmである。E 7-31号ピット一辺5cmの方形を呈し深さ8cmを測る。E 7-32号ピットは7×4cmの長方形を呈し深さ7cmである。E 7-33号ピットは直径4cmの円形を呈し深さ3cmである。

F 7-1号ピットは北側を共同溝によって破壊されており全形は不明であるが、残存部分から考えて直径50cm前後の円形を呈していたものと考えられる。深さは10cmを測る。F 7-2号ピットはF 7-1号ピットと重複して検出しており、F 7-1号ピットに切られF 7-5号ピットを切っている。やはり共同溝に北側を破壊されているが、平面形は楕円形を呈していたと思われる。東西で65cm深さ37cmを測る。F 7-5号ピットは25×20cmの楕円形を呈する。F 7-3号ピットは北側を共同溝によって破壊されているが、東西40cmの楕円形を呈すると思われる。斜めに掘り込んでおり、深さは71cmである。F 7-7号ピット・G 6-2号土坑を切っている。F 7-4号ピットも共同溝に北側を破壊されているが東西40cmの楕円形を呈していたと思われ、深さは40cmである。F 7-7号ピットは大部分を共同溝によって破壊されており規模・平面形共に不明である。残存部分での深さは60cmを測る。

#### 第116図

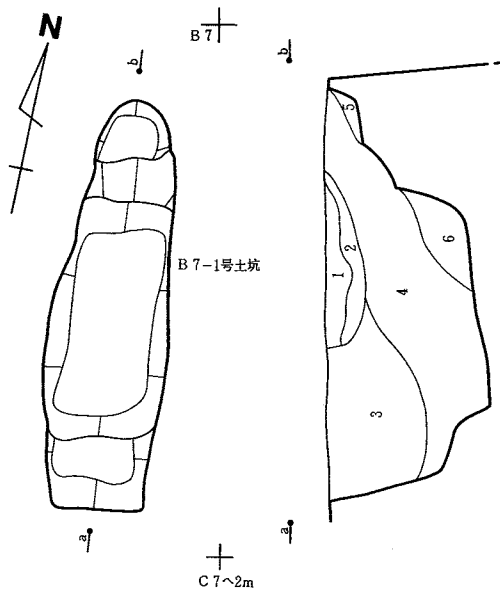
E 9-5号ピットは42×24cmの楕円形を呈し深さ44cmを測る。E 9-6号ピット・8号土坑を切っている。E 9-7号ピットはE 9-8号土坑の坑底から検出した。42×32cmの長方形を呈し、E 9-8号土坑坑底からの深さ7cmである。E 9-2号ピットは直径30cmの円形を呈し深さ45cmを測る。E 9-9号土坑を切っている。E 9-9号土坑は攪乱によって西側を破壊されている。東壁の長さは80cmを測り深さ10cmである。方形もしくは長方形を呈していたと思われる。E 9-3号ピットはG 7-7号遺構・E 9-6号土坑によって切られている。恐らく一辺24cm程の方形を呈していたと思われ、深さは33cmを測る。E 9-7号土坑はG 7-7号遺構に切られる楕円形を呈していたと思われるスリバチ状の土坑で、現存の最深部で深さ31cmを測る。E 9-4号ピットは46×41cmの楕円形を呈し深さ14cmを測る。E 9-8号ピットは10×6cmの楕円形を呈する。E 9-9号ピットは直径8cmの円形を呈し深さ8cmである。E 9-10号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ15cmである。E 9-11号ピットは直径8cmの円形を呈する。E 9

—12号ピットは直径25cmの円形を呈し深さ14cmである。E 9—13号ピットは直径9 cmの円形を呈し深さ22cmである。

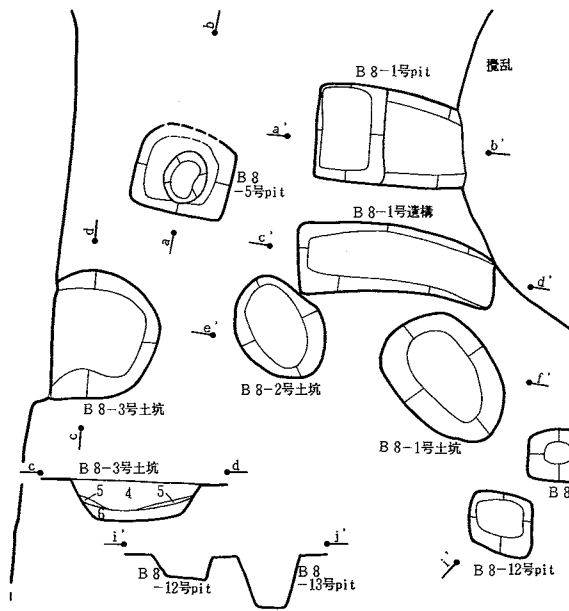
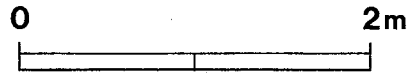
第117図

E 9—5号土坑はE 9—3号土坑を切り、E 9—4号土坑並びに旧図書館基礎に切られるため全形は不明である。E 9—4号土坑とした桶を埋置する為の掘り方の可能性もある。深さは50cmを測る。

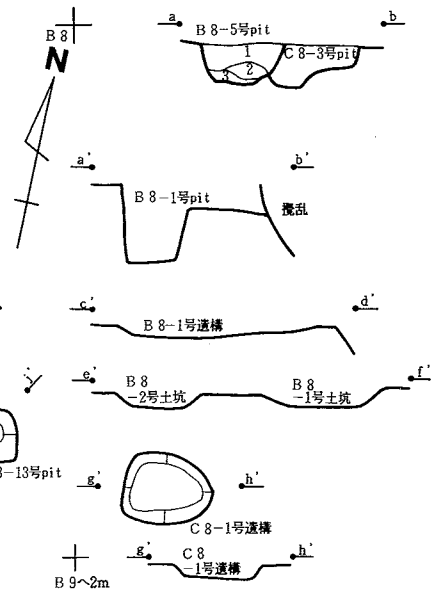
(菅谷 通保)



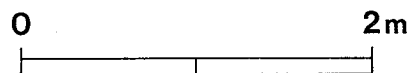
- B 7 - 1号土坑
- 1層 褐色土 (ローム粒子を少量含む)
  - 2層 暗黄褐色土 (ローム粒子を多量含む)
  - 3層 暗褐色土 (焼土粒子を少量、ローム粒子を含む)
  - 4層 暗灰褐色土 (瓦、炭化材を多量含む)
  - 5層 暗黄褐色土 (ローム粒子を多量含む)
  - 6層 暗褐色土
- (土層図の水準: 23.000m)



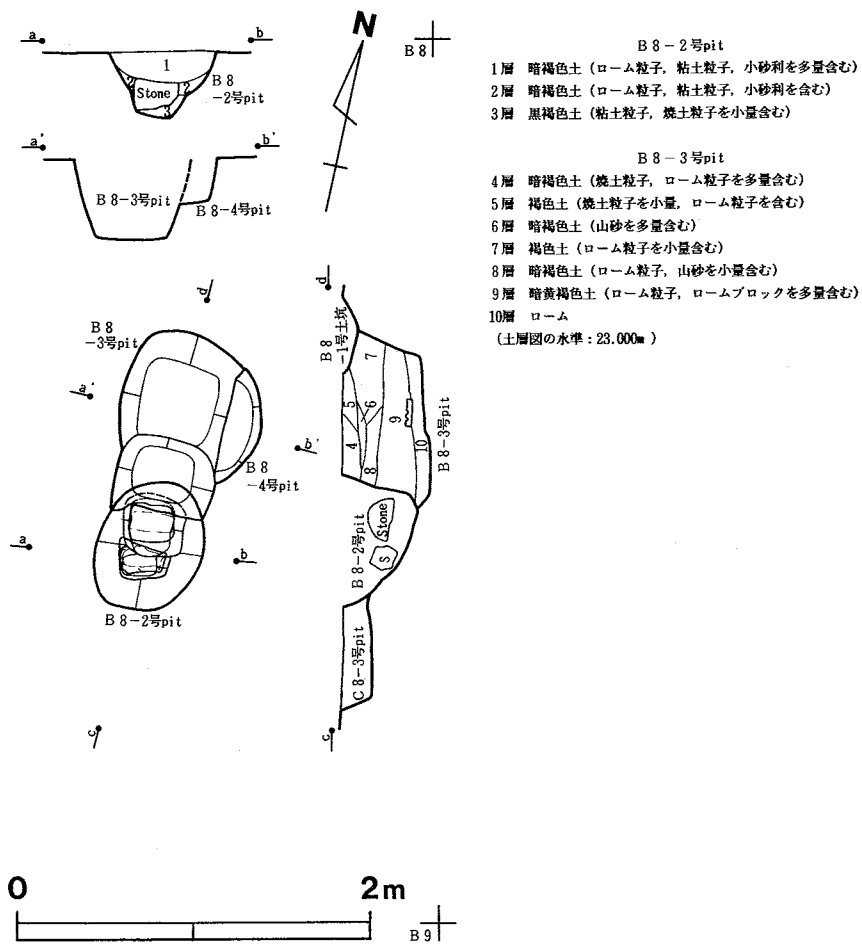
- B 8 - 3号土坑
- 4層 暗褐色土 (ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む)
  - 5層 褐色土 (ロームブロックを含む)
  - 6層 暗褐色土 (焼土粒子を少量、ローム粒子を含む)
- (土層図の水準: 23.000m)



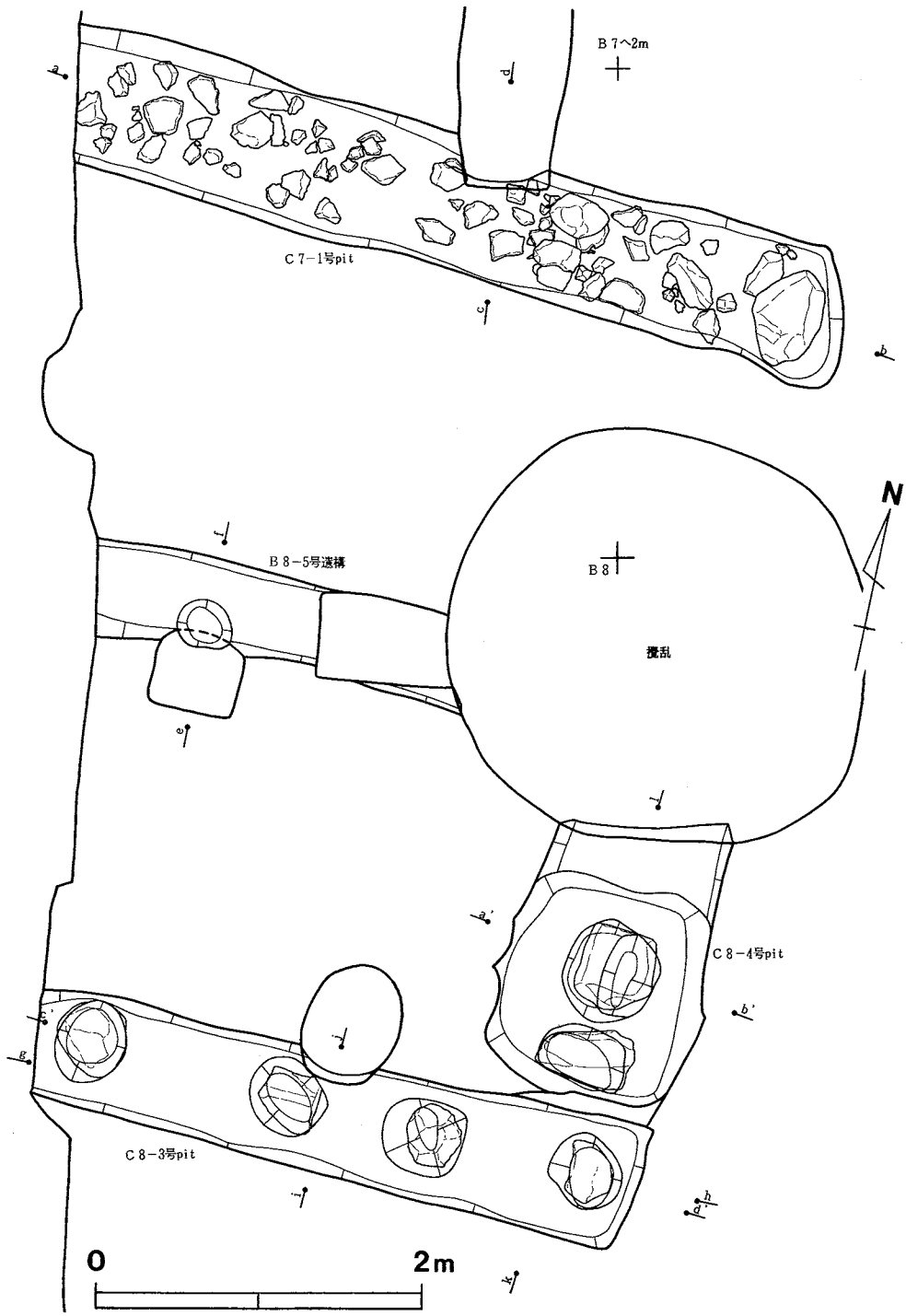
- B 8 - 5号pit
- 1層 褐色土 (ローム粒子、焼土粒子を含む)
  - 2層 暗褐色土 (ローム粒子を含む)
  - 3層 ローム



第78図 B~G=7~8区の遺構(1)



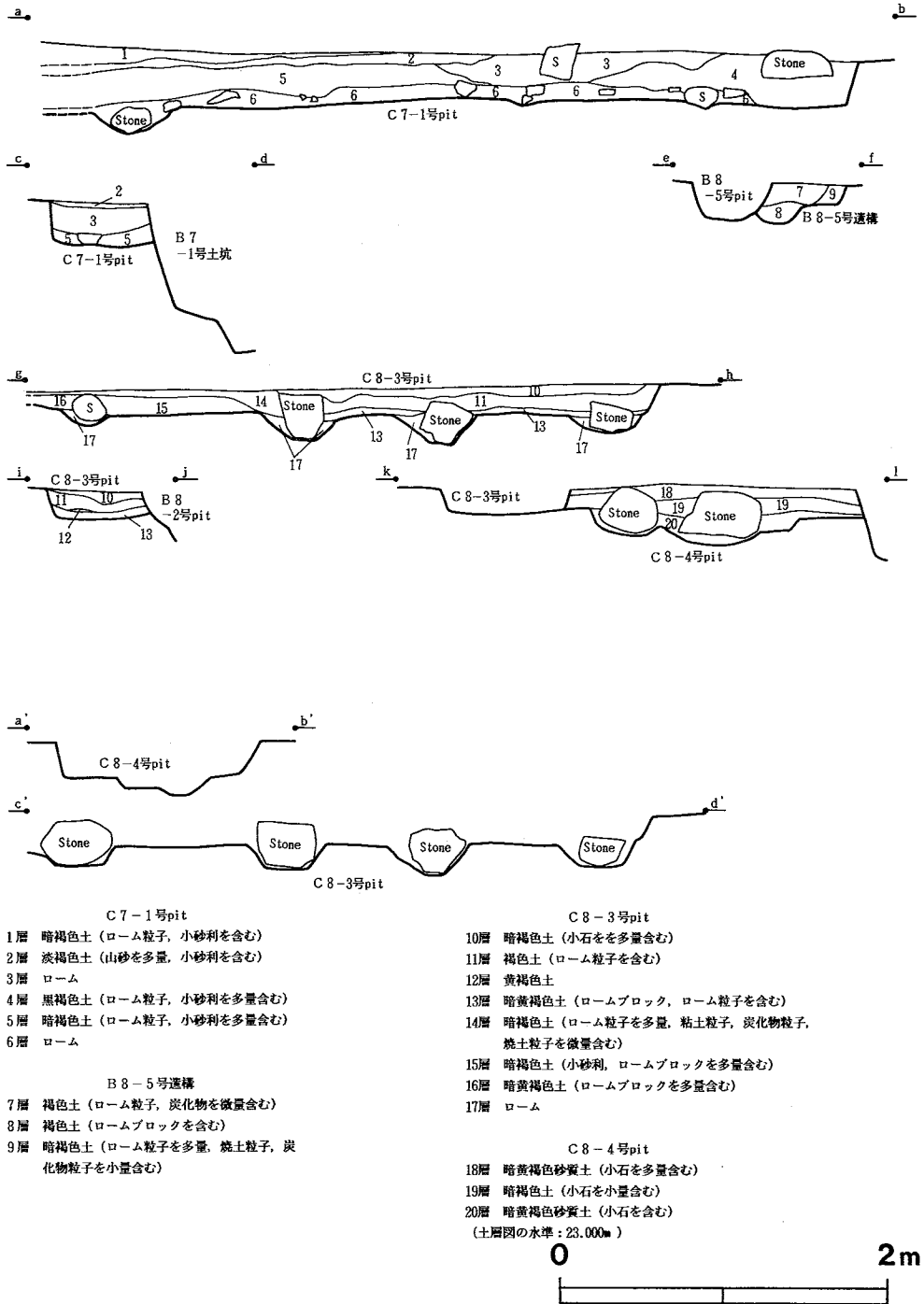
第79図 B~G=7~8区の遺構(2)



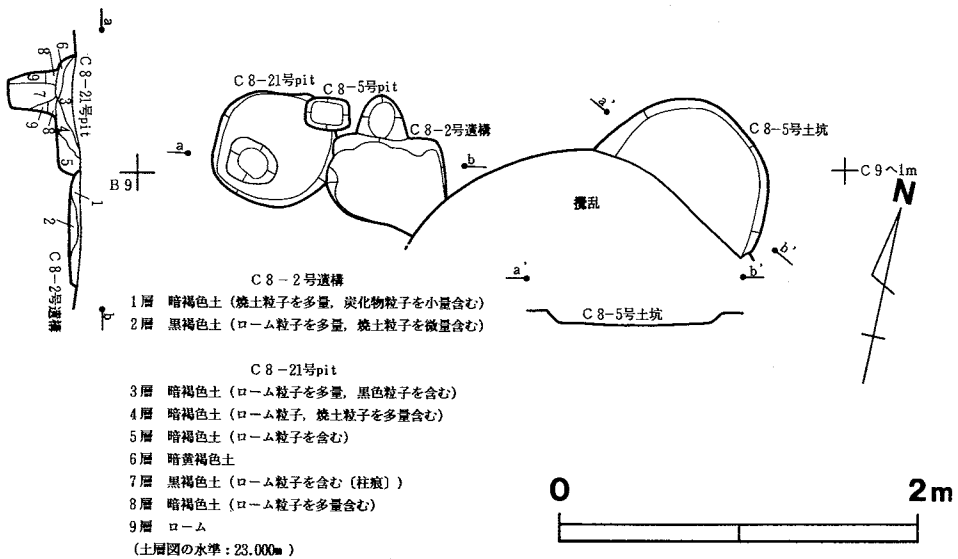
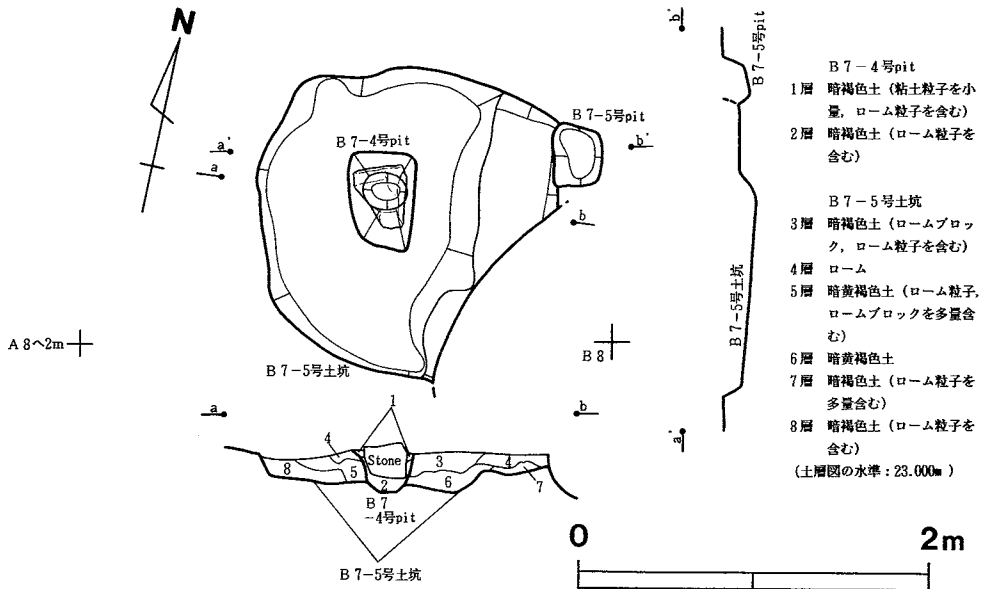
第80図 B~G=7~8区の遺構(3)



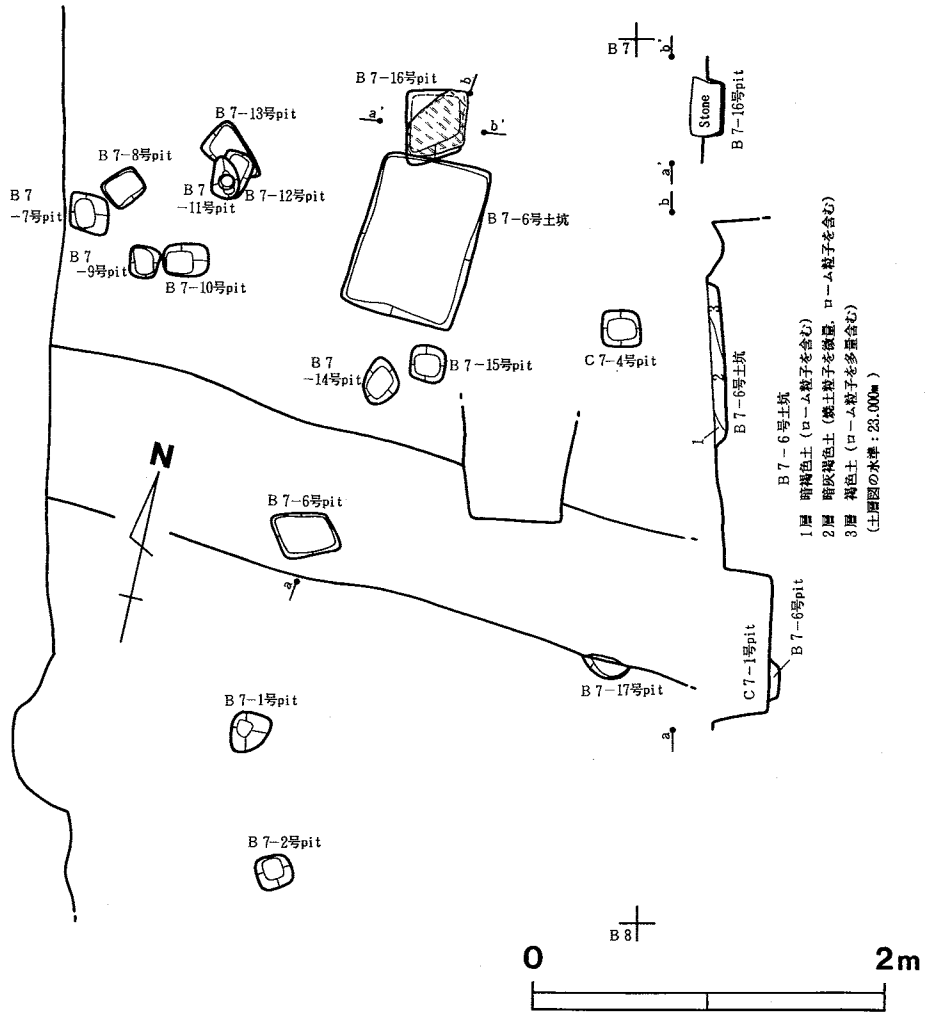
報告篇第三章 江戸時代の調査 I



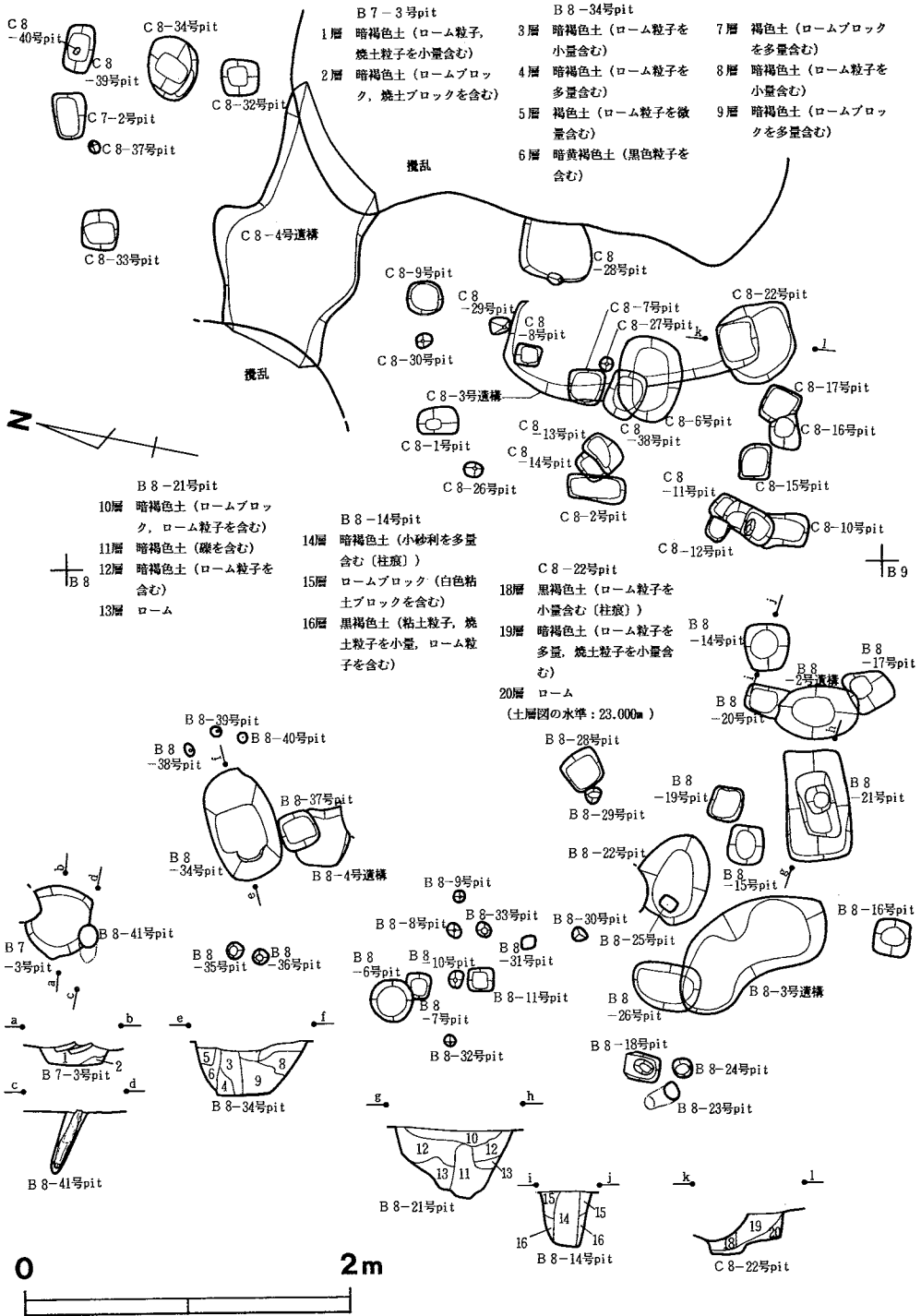
第81図 B~G=7~8区の遺構(4)



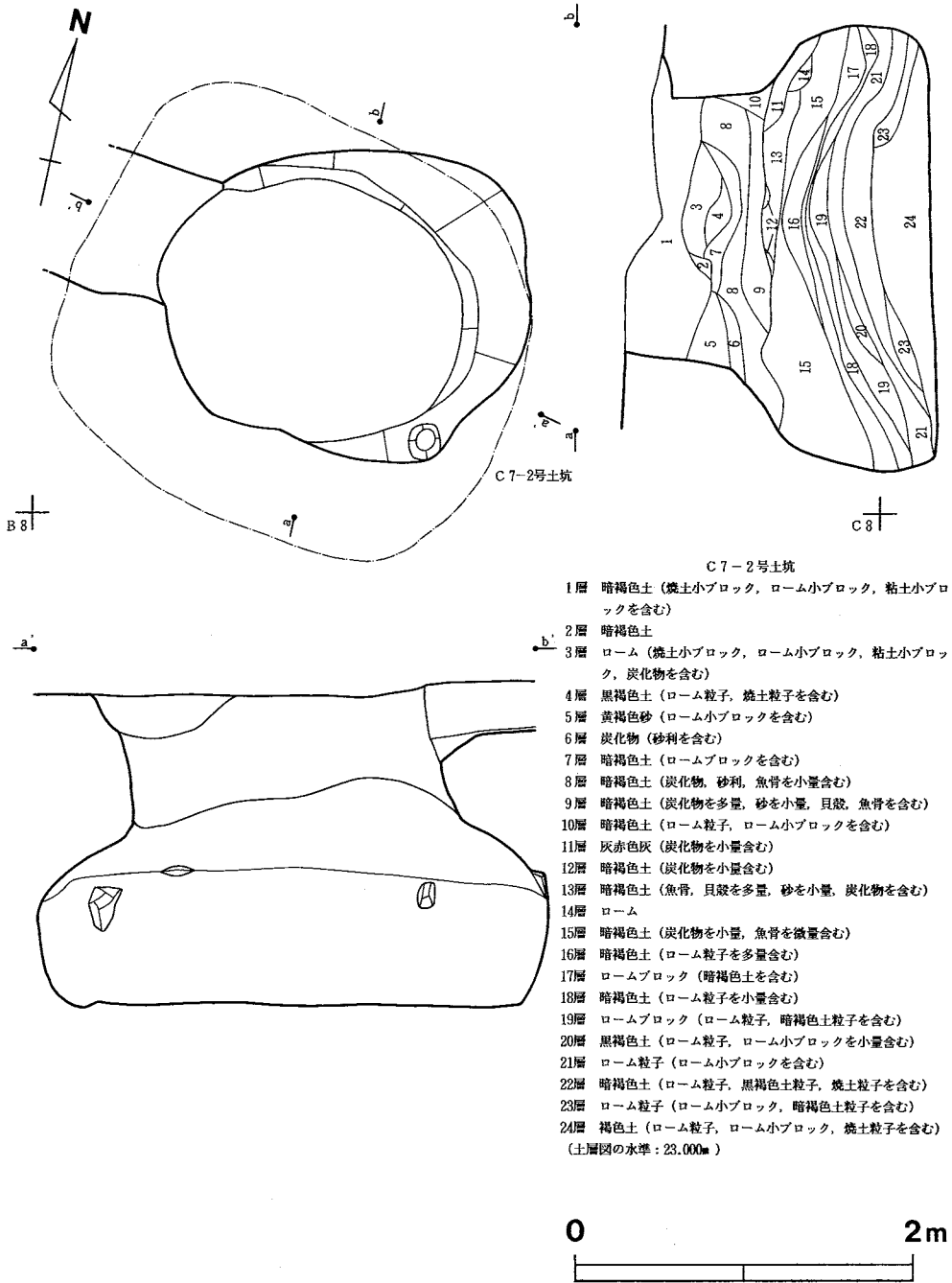
第82図 B~G=7~8区の遺構(5)



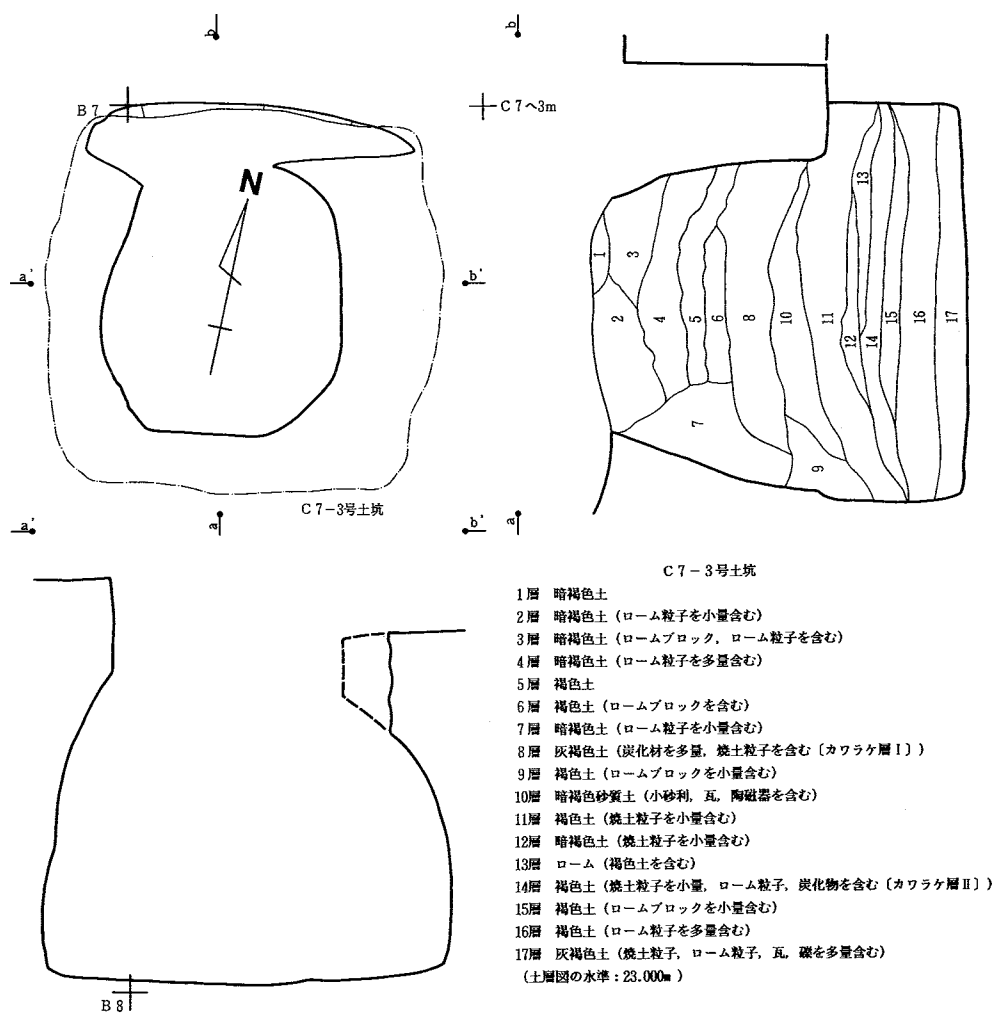
第83図 B~G=7~8区の遺構(6)



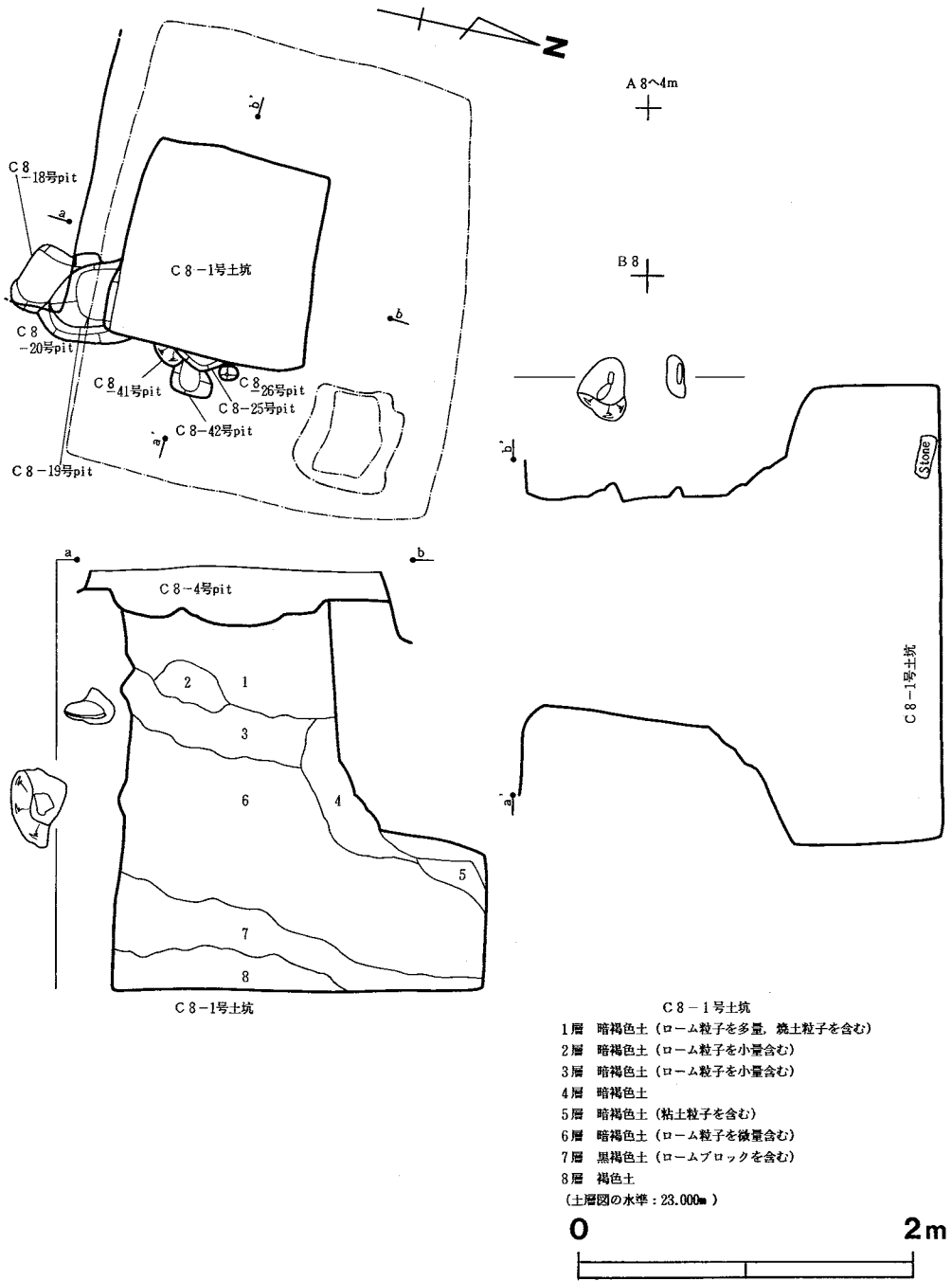
第84図 B~G=7~8区の遺構(7)



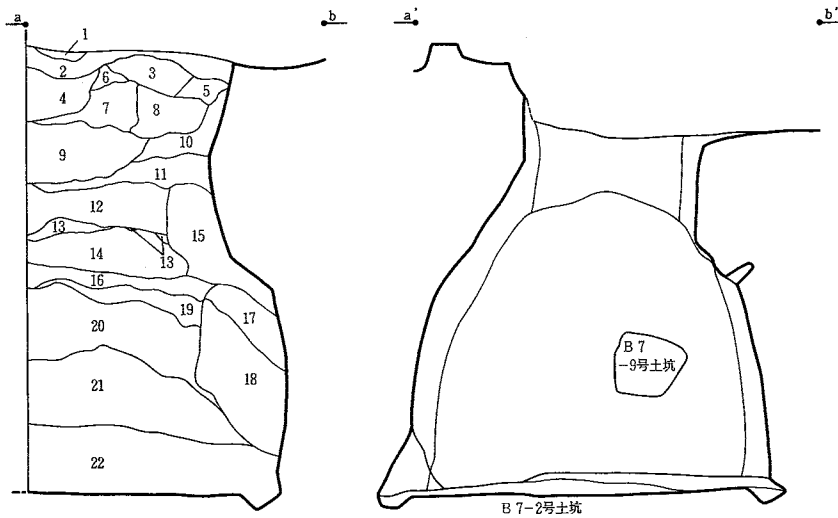
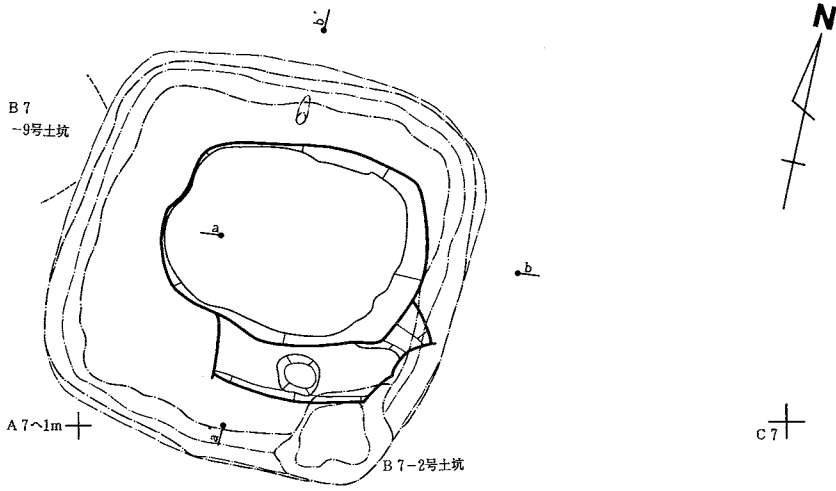
第85図 B~G=7~8区の遺構(8)



第86図 B~G=7~8区の遺構(9)



第87図 B~G=7~8区の遺構(10)



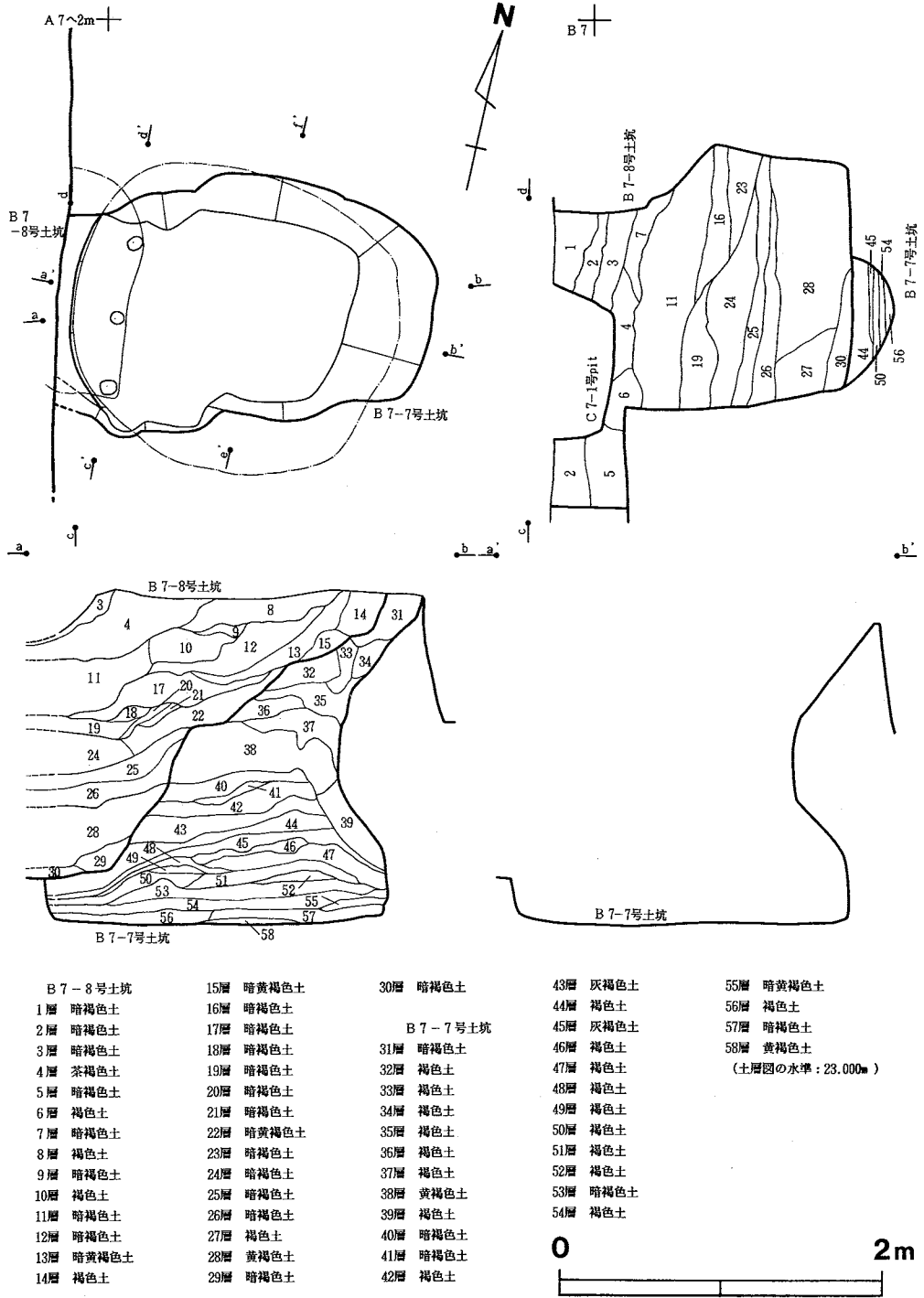
- B 7-2号土坑
- 1層 暗褐色土 (小砂利, ローム粒子を含む)
  - 2層 褐色土 (ローム粒子を含む)
  - 3層 褐色土 (ローム粒子を多量含む)
  - 4層 暗褐色土 (黒色粒子を多量, ローム粒子を含む)
  - 5層 暗褐色土 (ローム粒子を含む)
  - 6層 黒色土
  - 7層 暗黄褐色土
  - 8層 褐色土 (ローム粒子を含む)
  - 9層 黄褐色土
  - 10層 暗褐色土 (ローム粒子を少量含む)
  - 11層 暗褐色土 (ローム粒子を多量含む)
  - 12層 褐色土 (ローム粒子を多量含む)
  - 13層 暗黄褐色土

- 14層 褐色土 (ローム粒子, 灰褐色粘土を含む)
  - 15層 褐色土
  - 16層 褐色土 (ロームブロックを含む)
  - 17層 暗褐色土 (ローム粒子を含む)
  - 18層 暗黄褐色土 (ロームブロックを多量含む)
  - 19層 暗褐色砂
  - 20層 ロームブロック
  - 21層 ロームブロック
  - 22層 灰褐色土 (粘土ブロック, 炭化材, 砂粒, 瓦を多量含む)
- (土層図の水準: 23.000m)

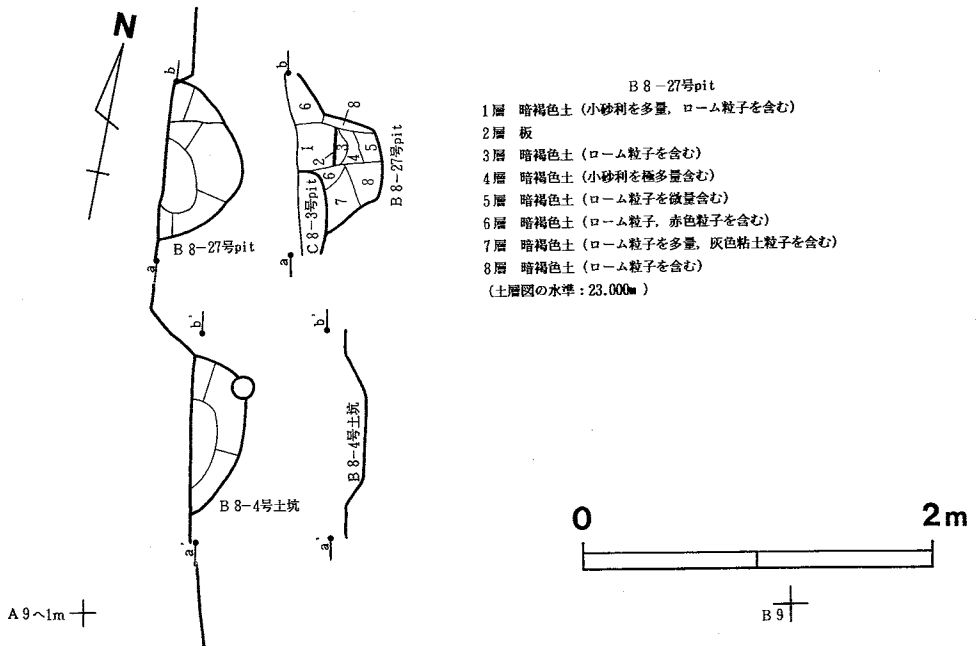
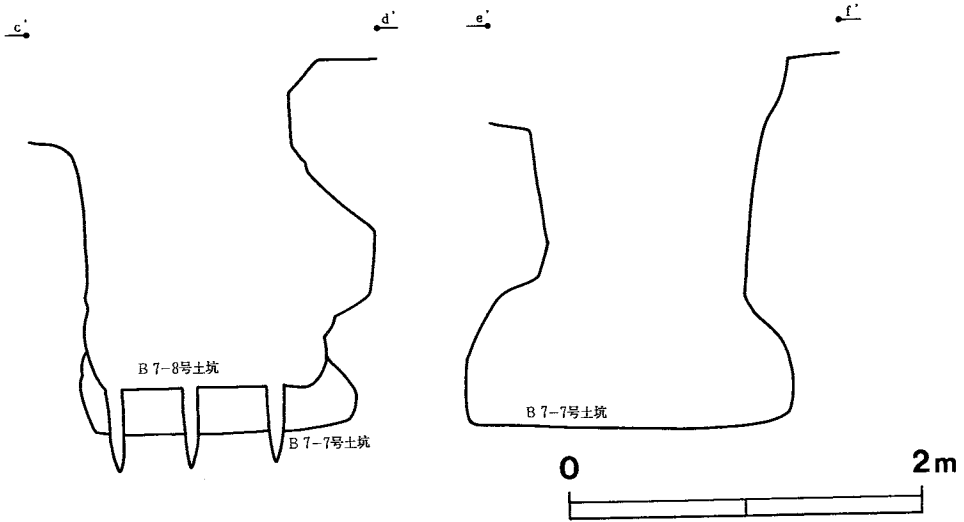


第88図 B~G=7~8区の遺構(11)

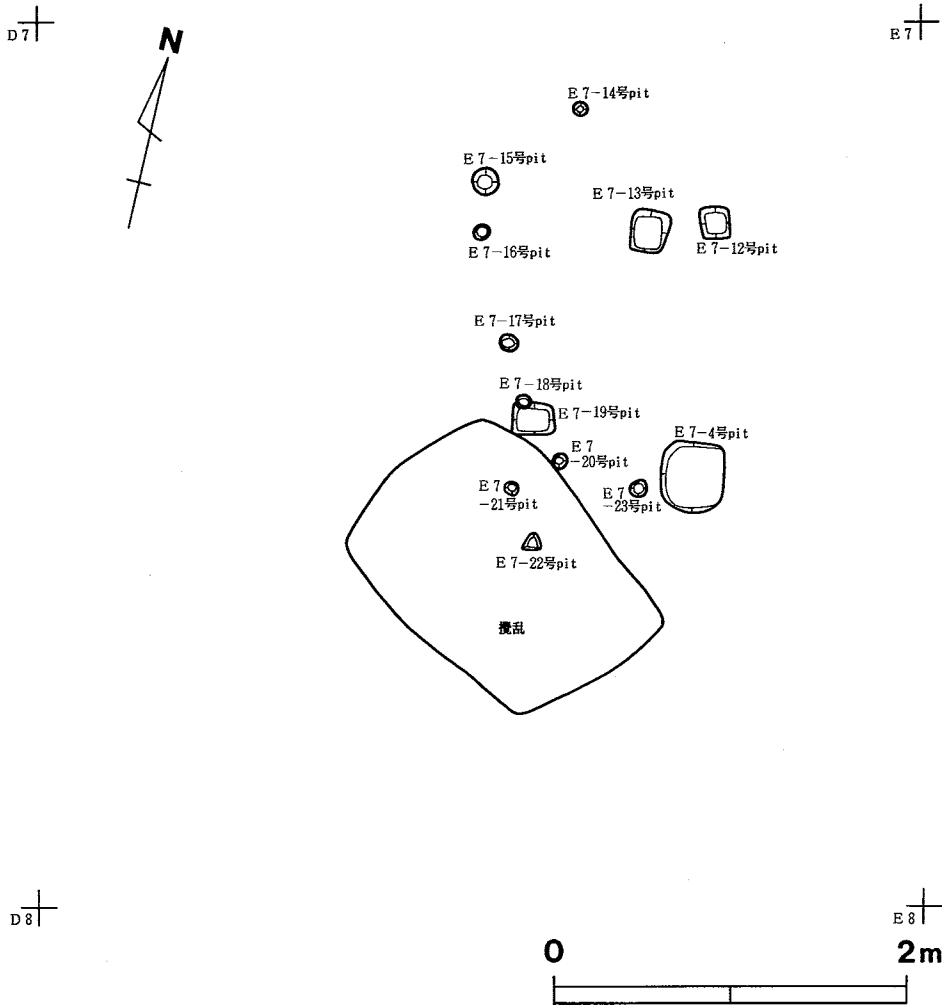




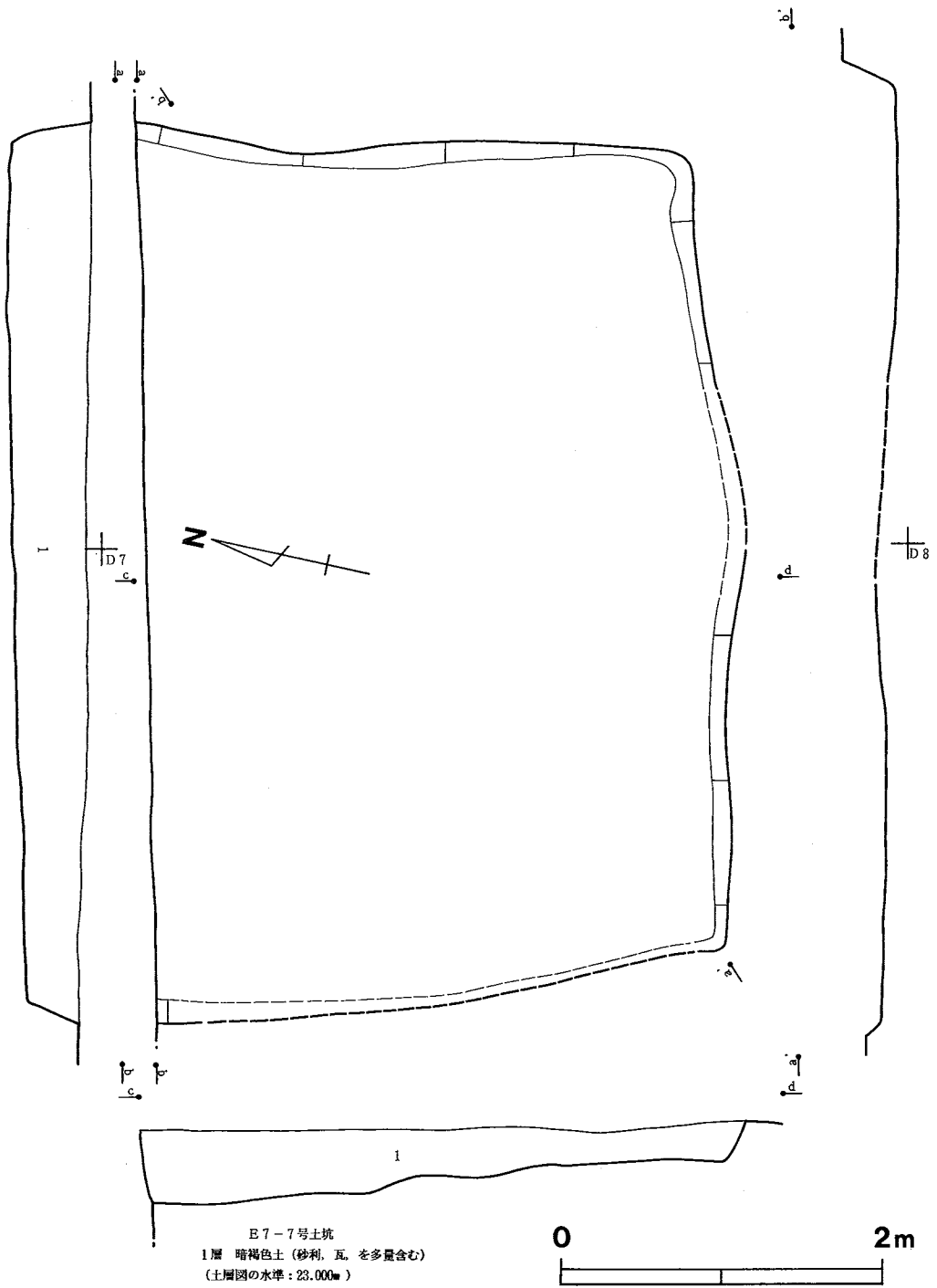
第89図 B~G = 7~8区の遺構(12)



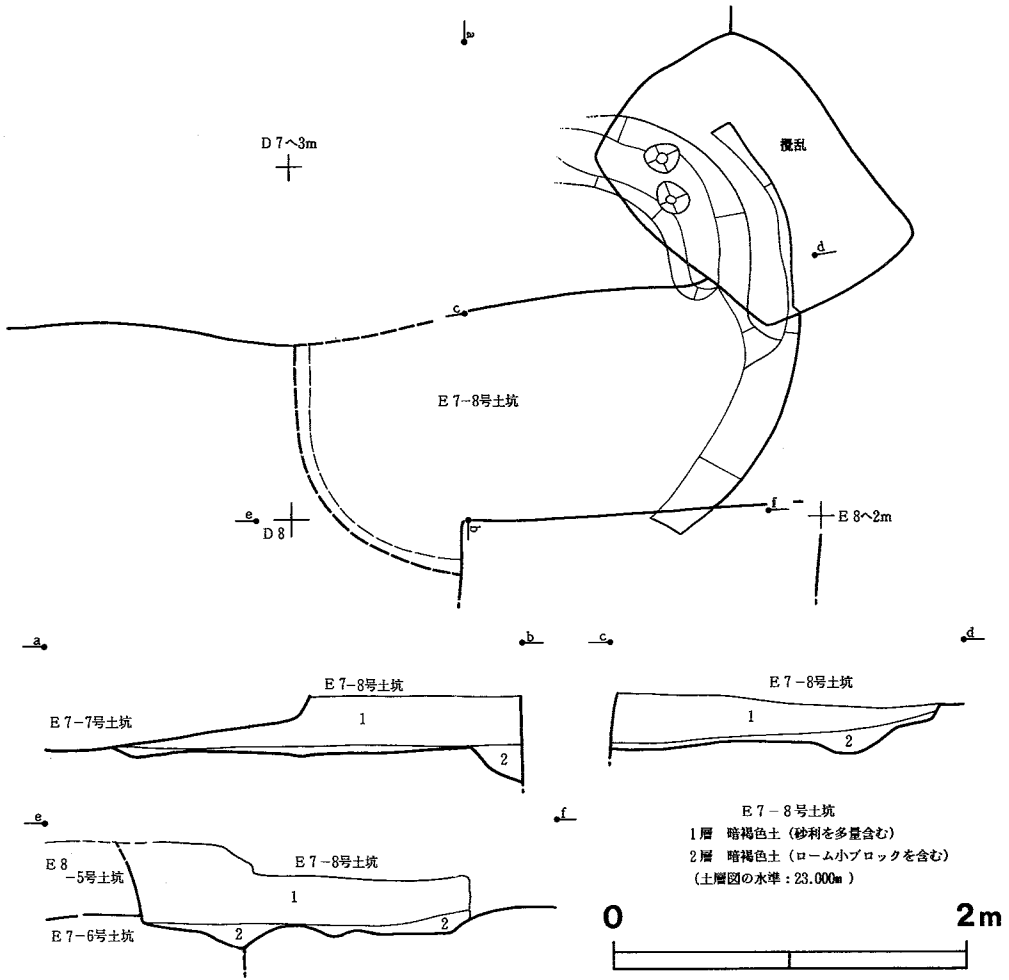
第90図 B ~ G = 7 ~ 8 区の遺構 (13)



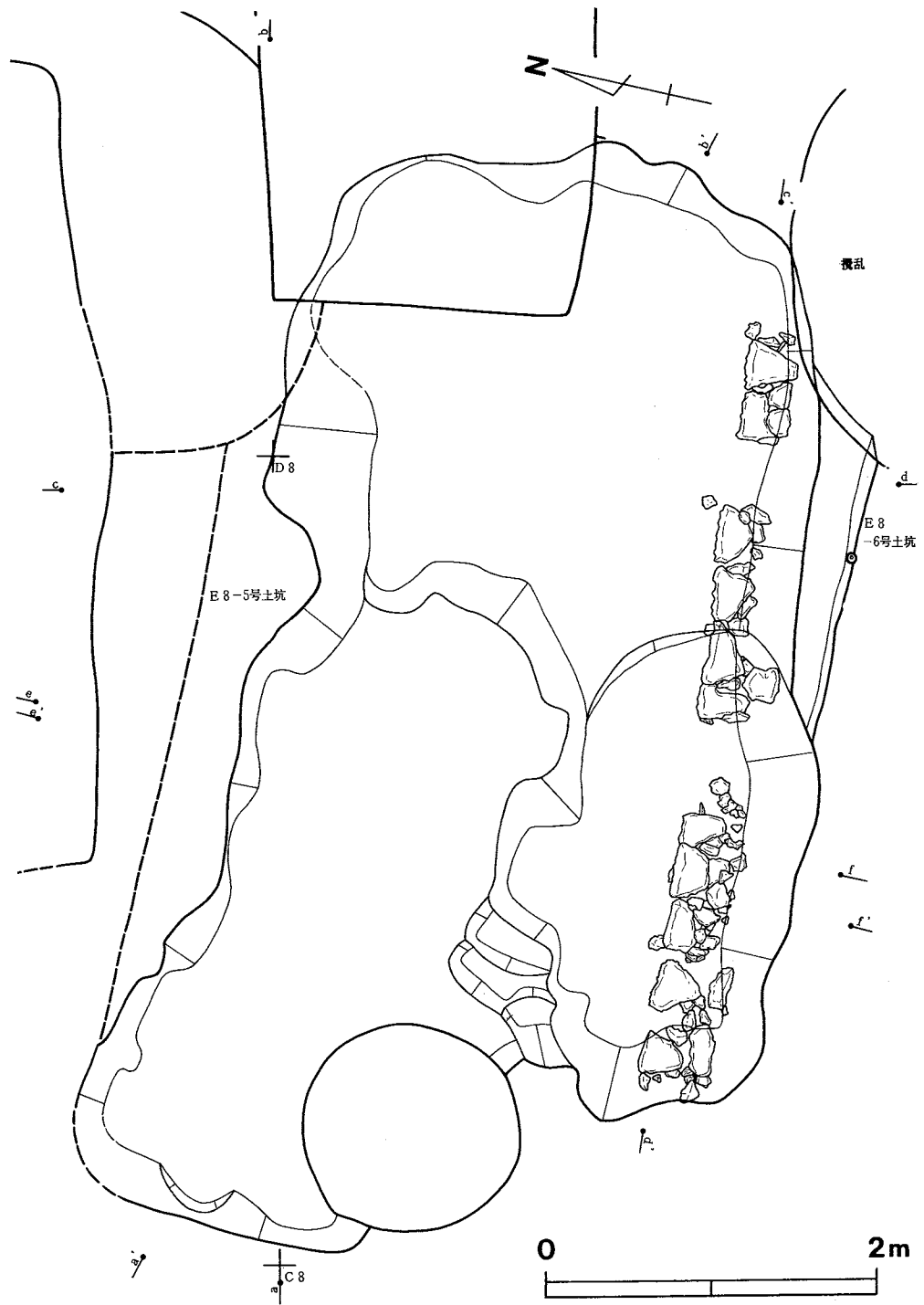
第91図 B~G=7~8区の遺構(14)



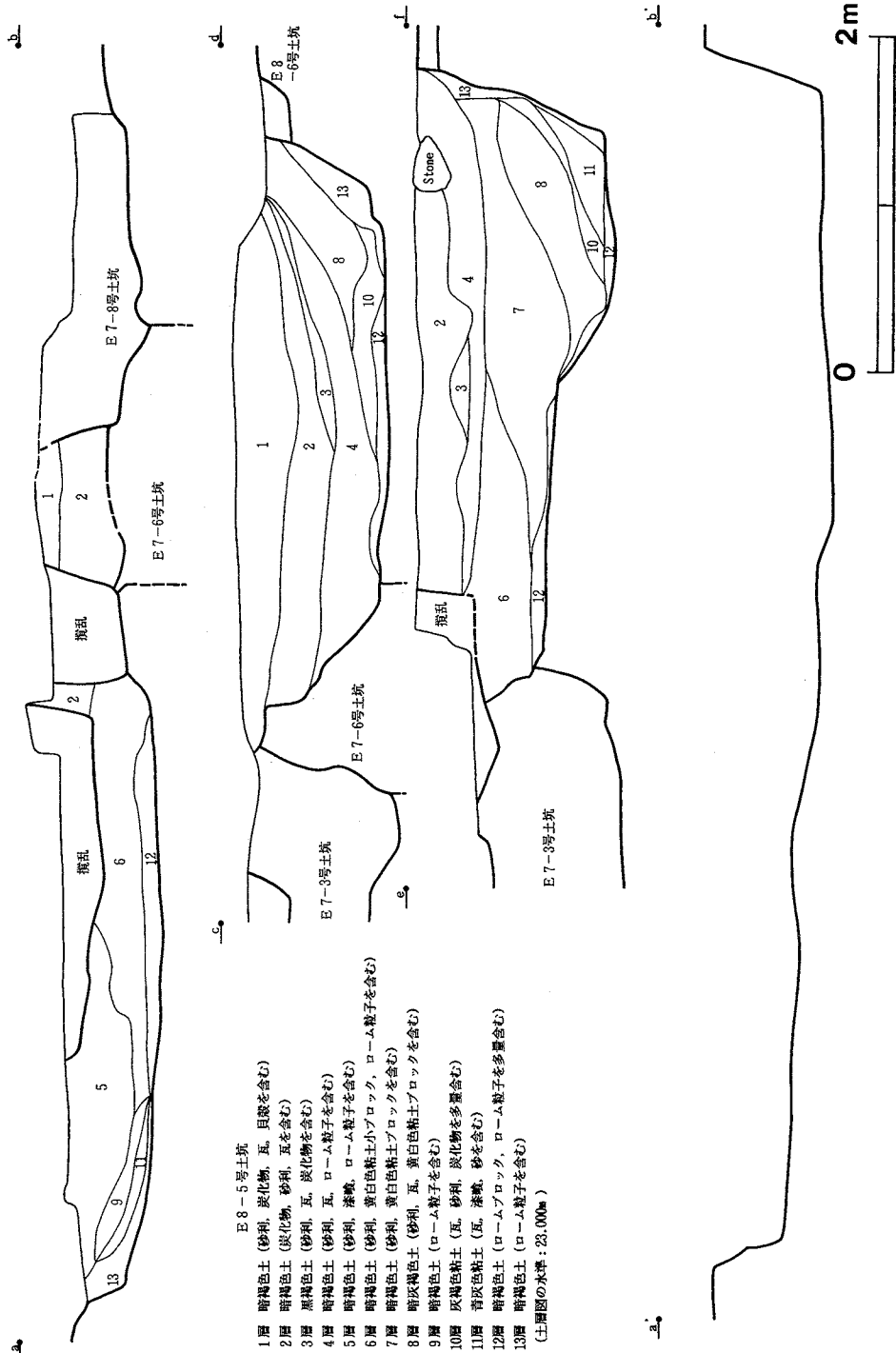
第92図 B~G = 7~8区の遺構(15)



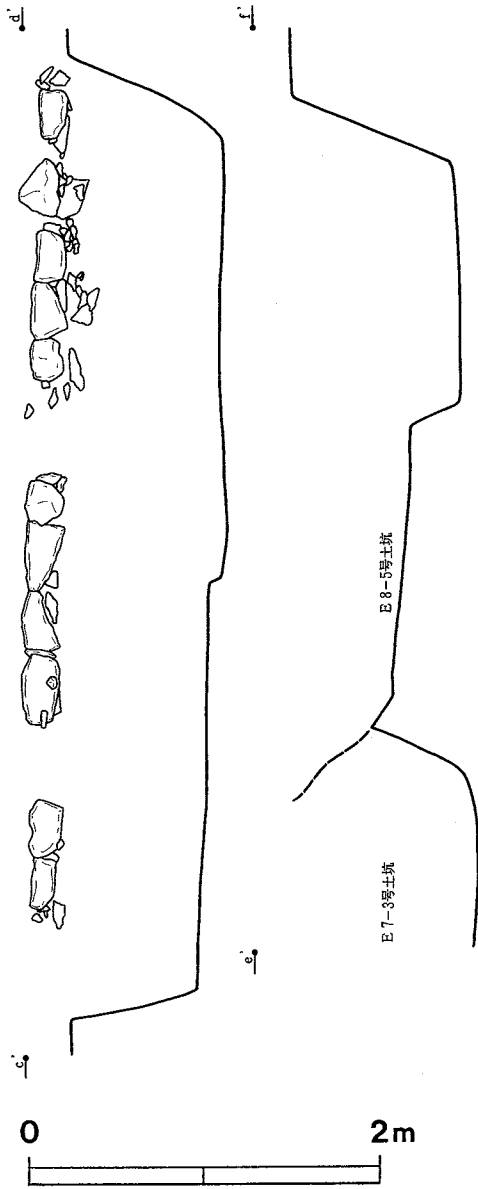
第93図 B~G=7~8区の遺構(16)



第94図 B~G=7~8区の遺構(17)

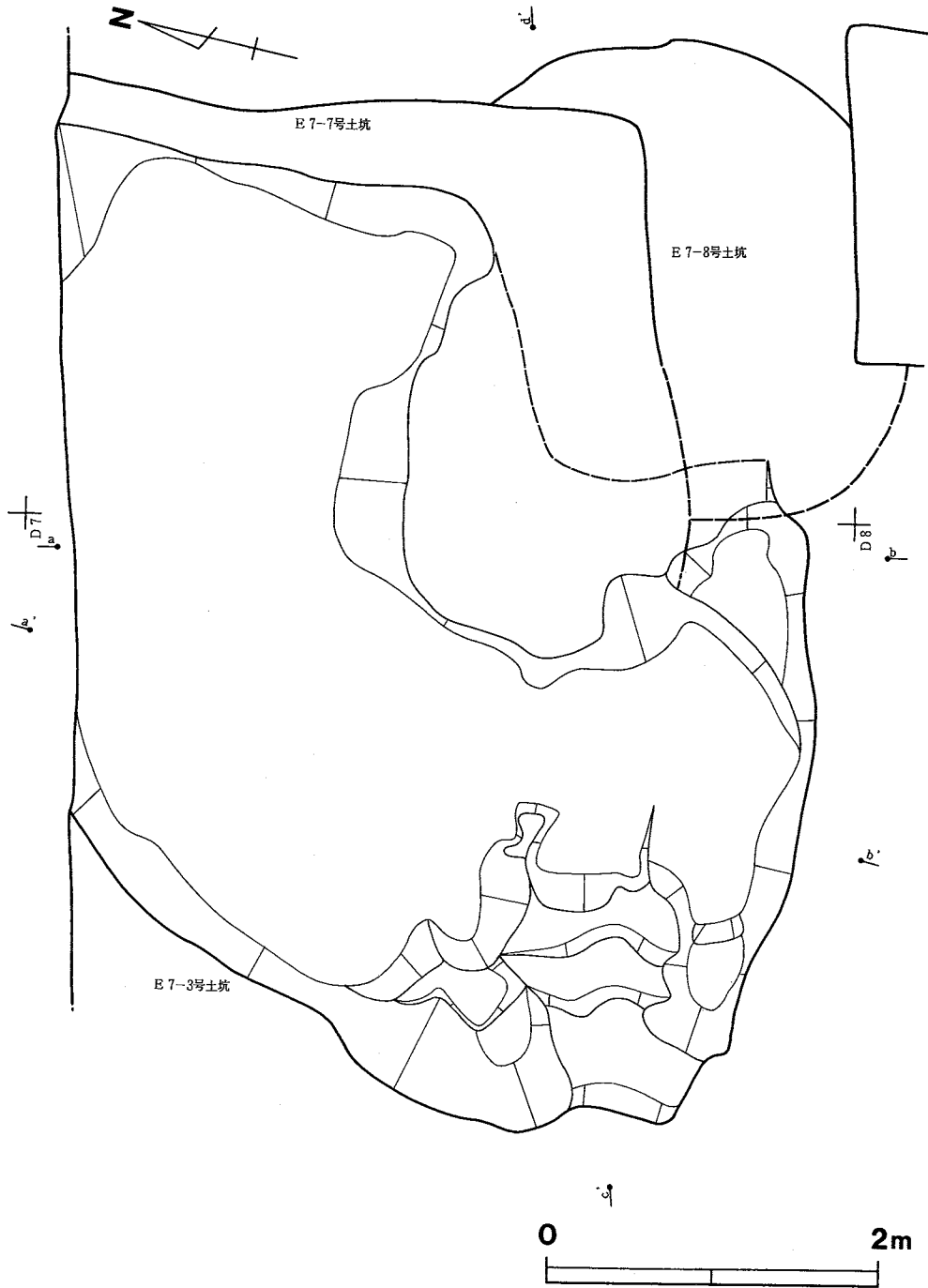


第95図 B ~ G = 7 ~ 8 区の遺構(18)

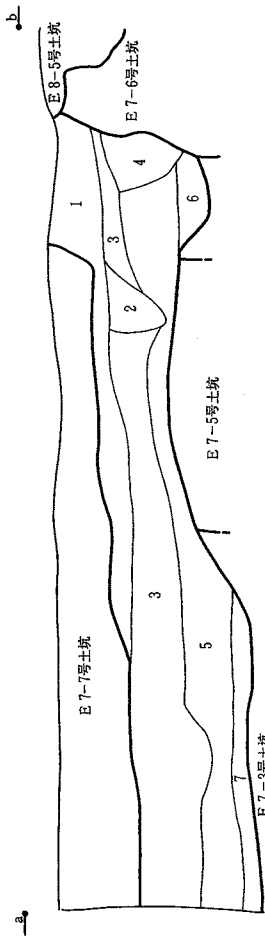


第96図 B~G=7~8区の遺構(19)

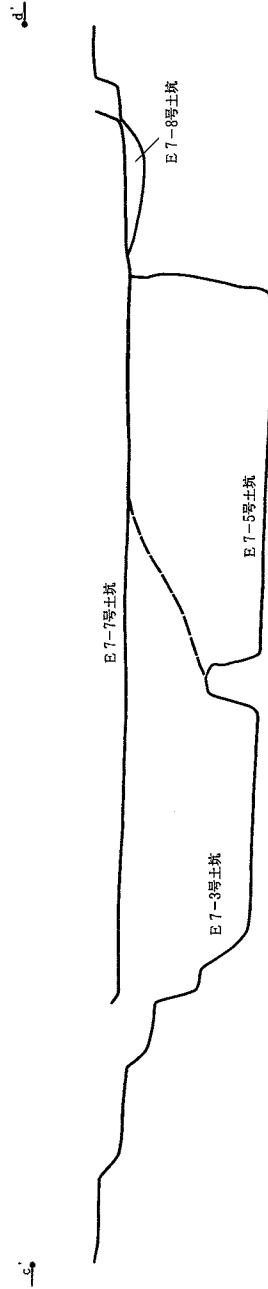




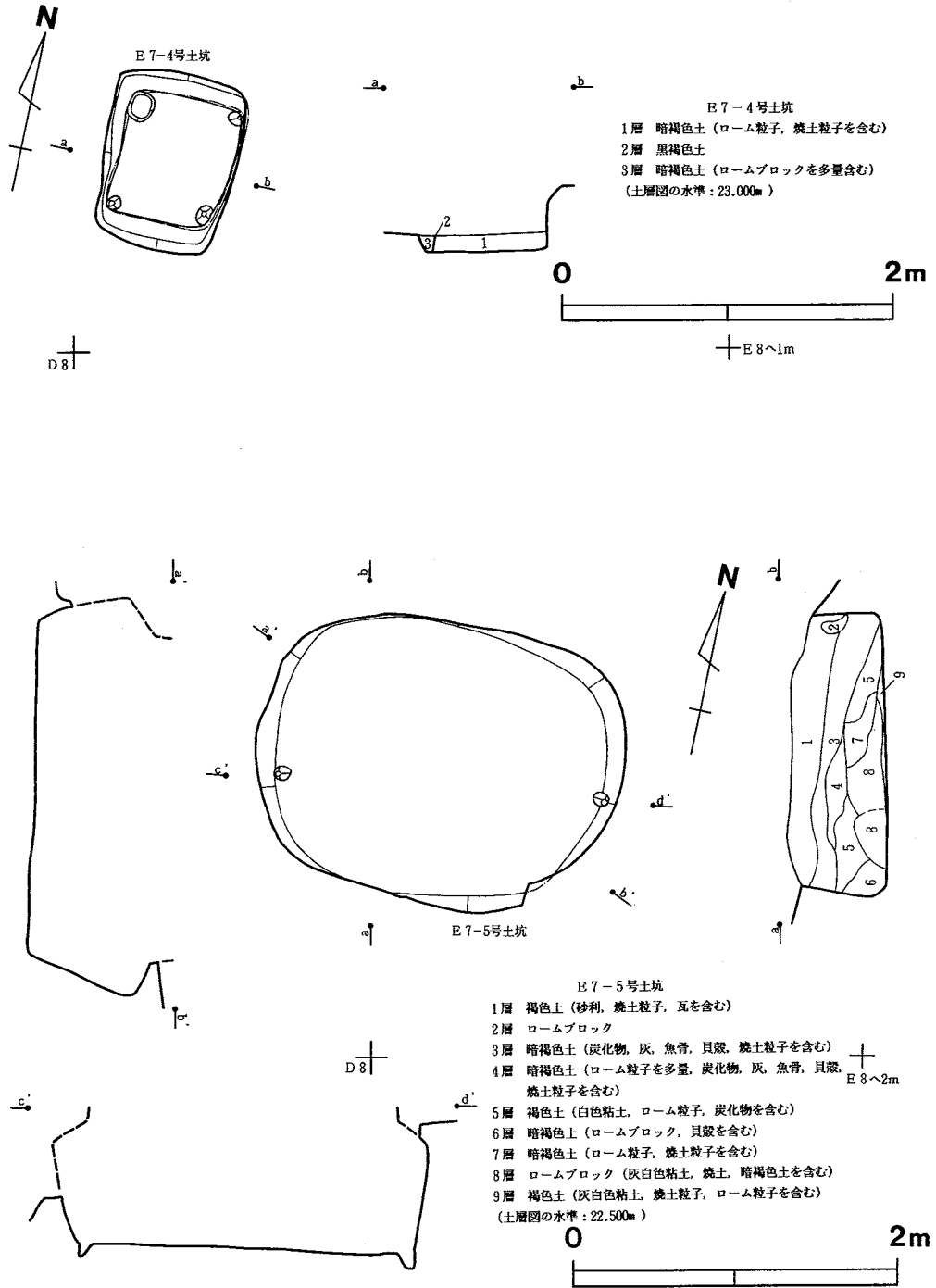
第97図 B~G=7~8区の遺構(20)



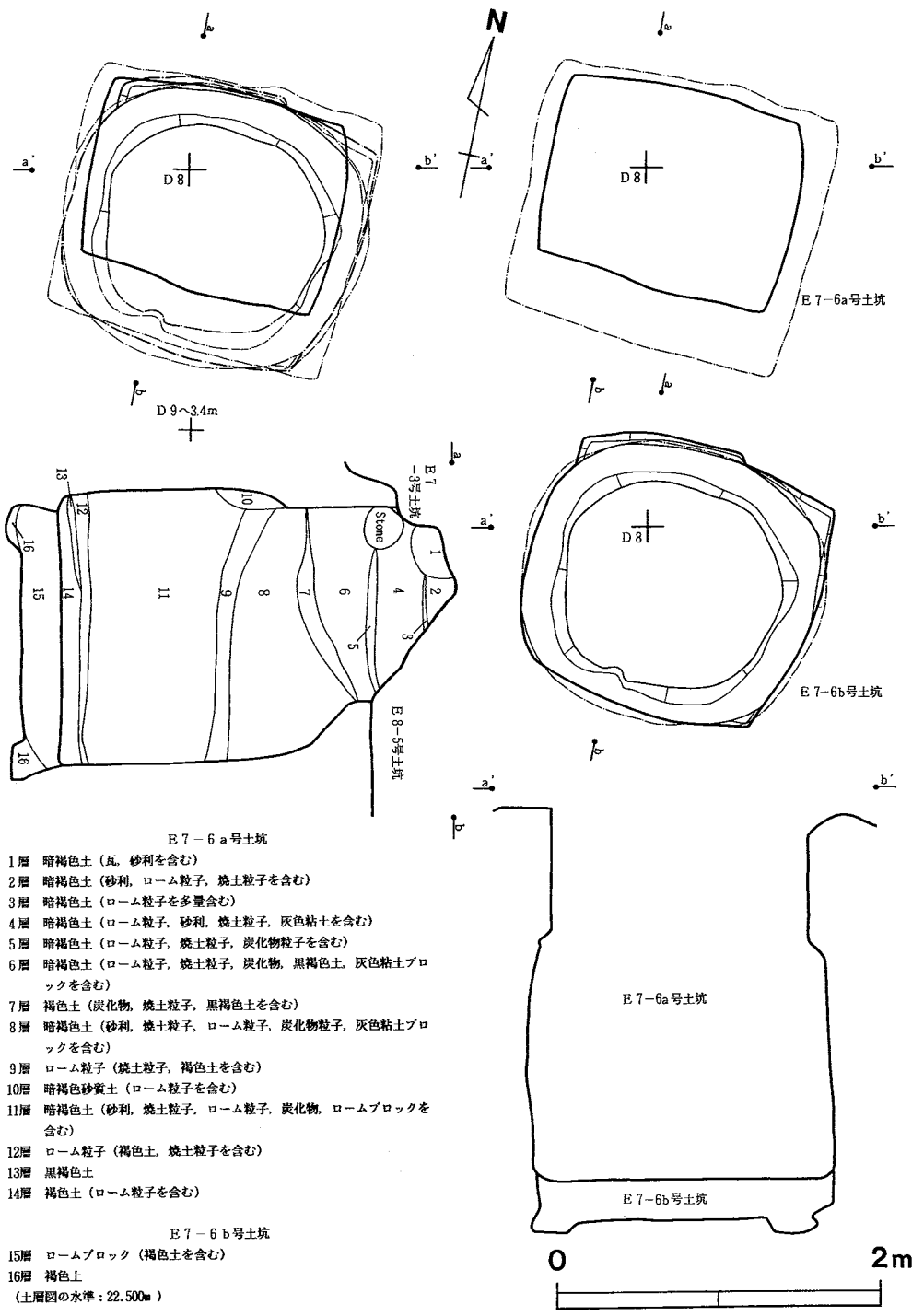
- E 7-3号土坑  
 1層 暗褐色土 (瓦, 炭化物, 砂利を含む)  
 2層 黒褐色土  
 3層 暗褐色土 (砂利, 瓦, 炭化物, 粘土小ブロック, 貝殻を含む)  
 4層 暗褐色土 (瓦, 砂利を含む)  
 5層 暗褐色土 (瓦, 砂利, 粘土粒子を含む)  
 6層 暗褐色土 (焼土粒子, ローム粒子, 炭化物を少量含む)  
 7層 暗褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを少量含む)  
 (土層間の水準: 23.000m)



第98図 B~G=7~8区の遺構(21)

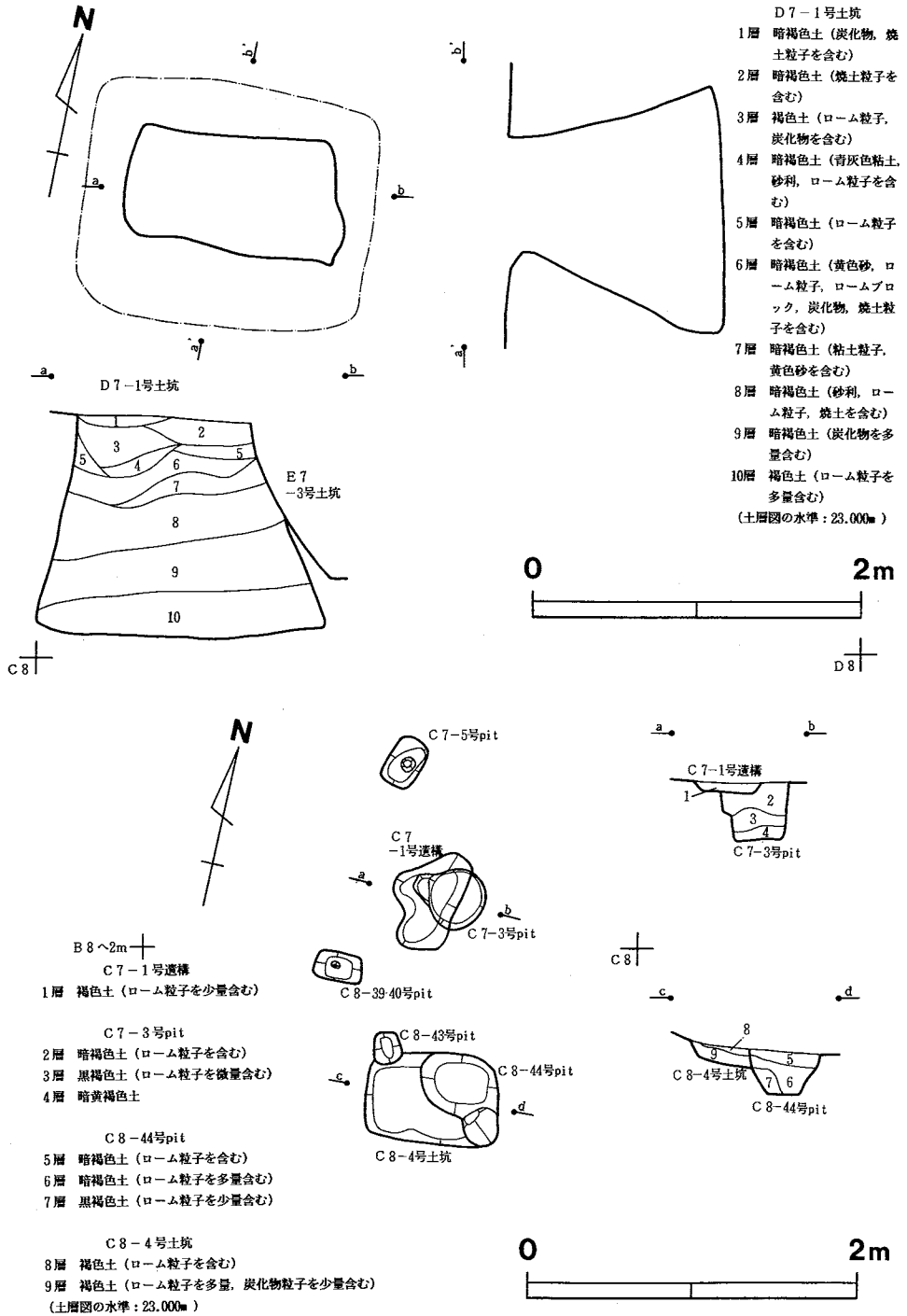


第99図 B~G=7~8区の遺構(22)

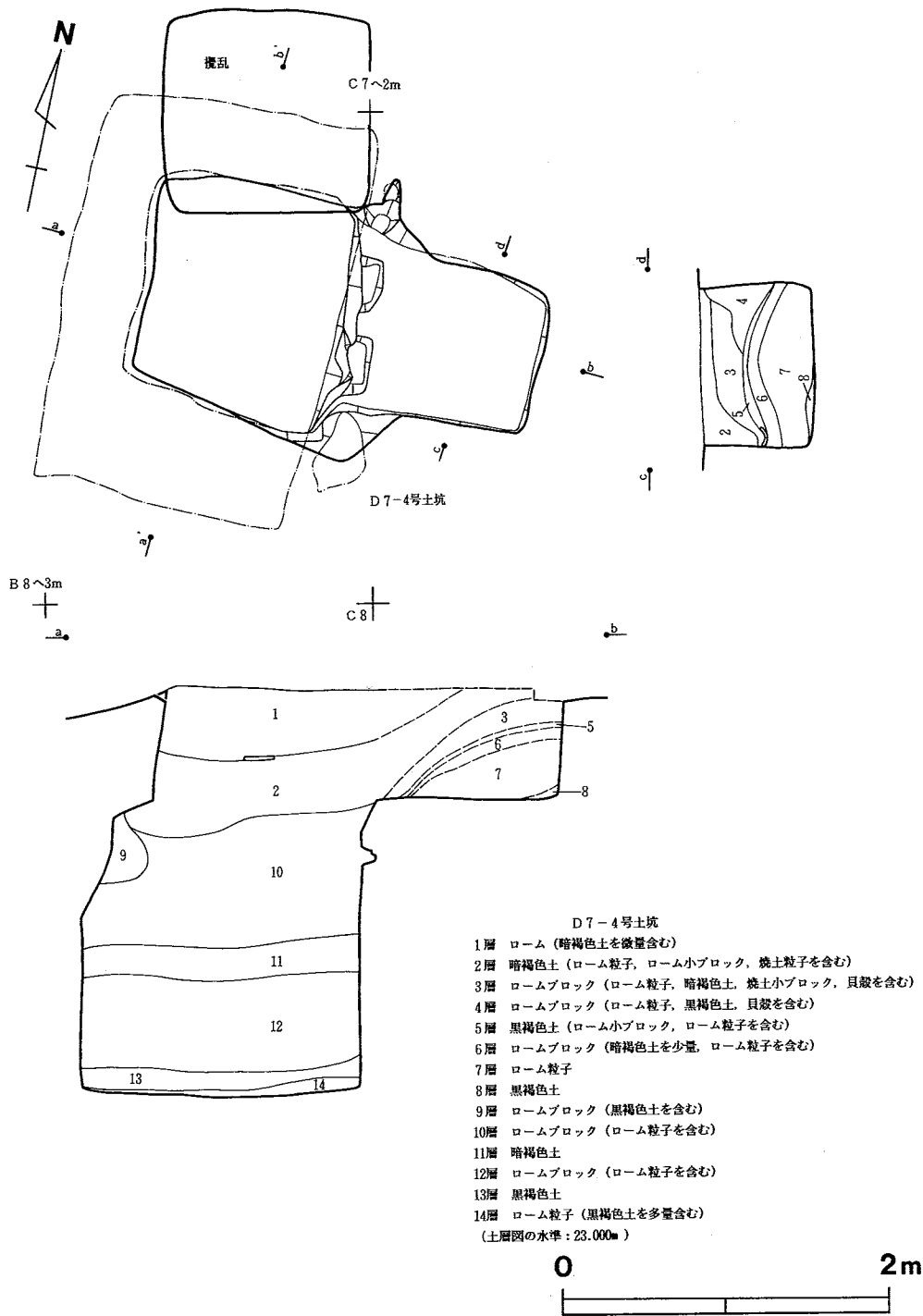


第100図 B~G=7~8区の遺構(23)

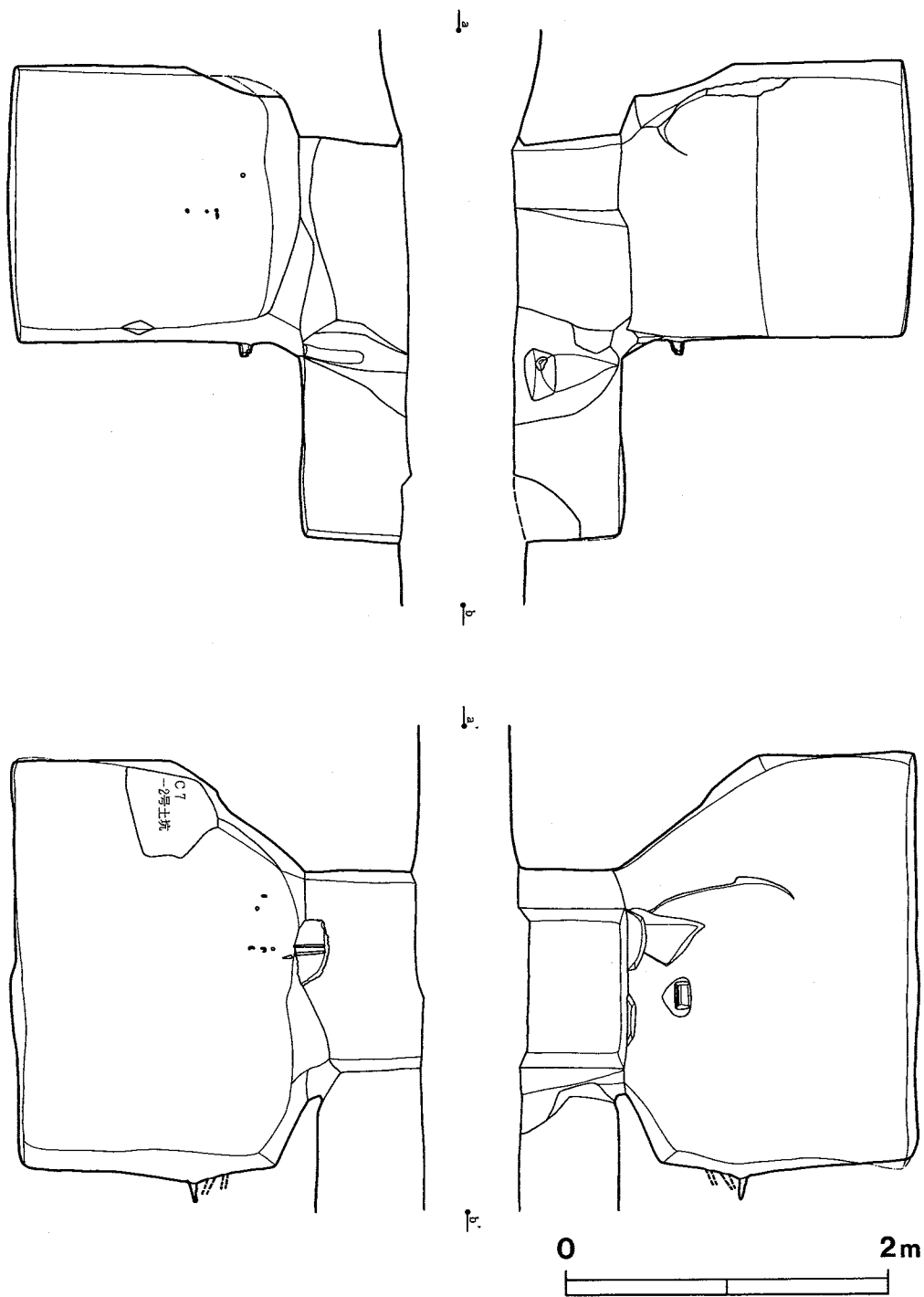
報告篇第三章 江戸時代の調査 I



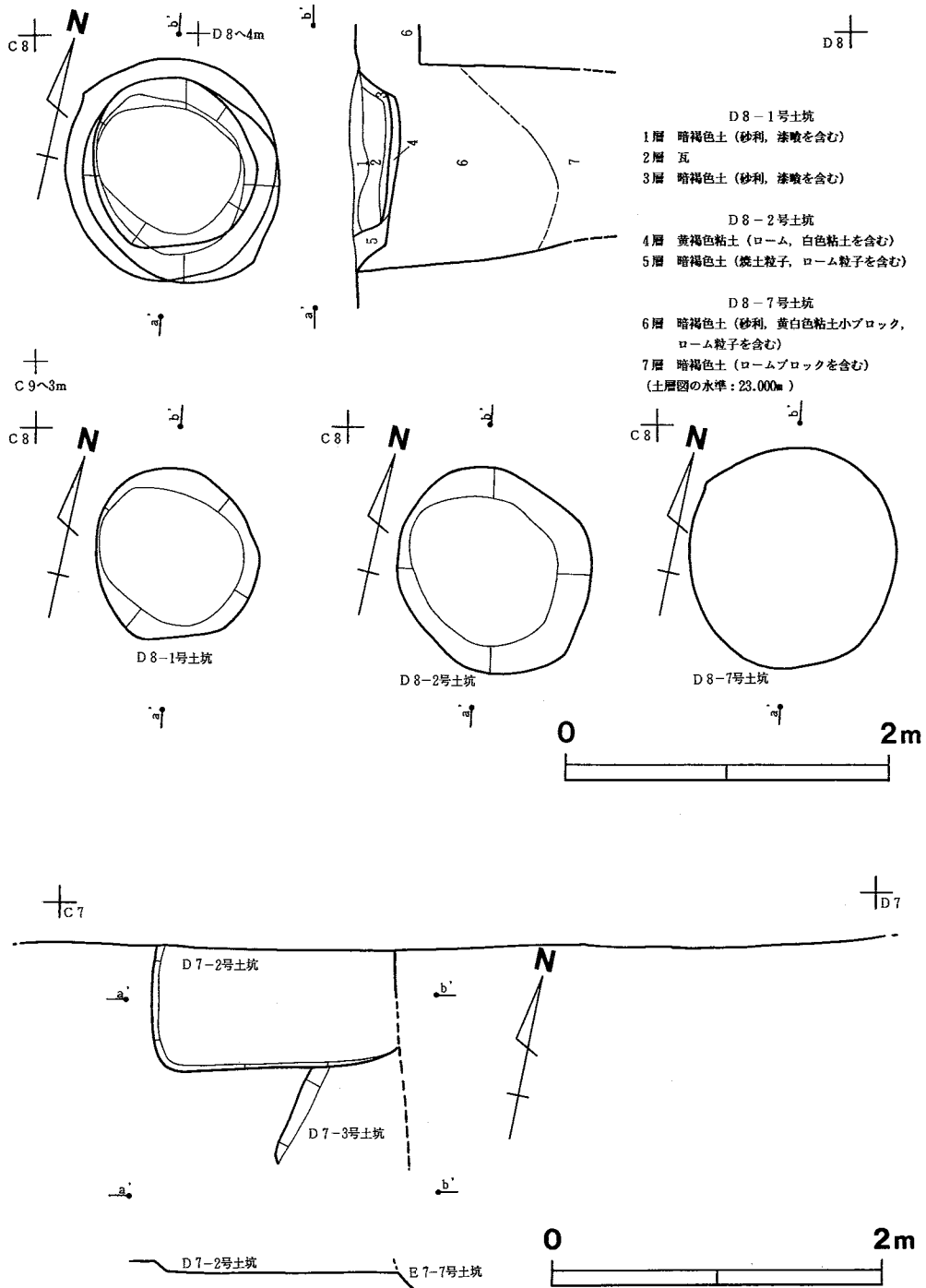
第101図 B~G=7~8区の遺構(24)



第102図 B~G = 7~8区の遺構(25)

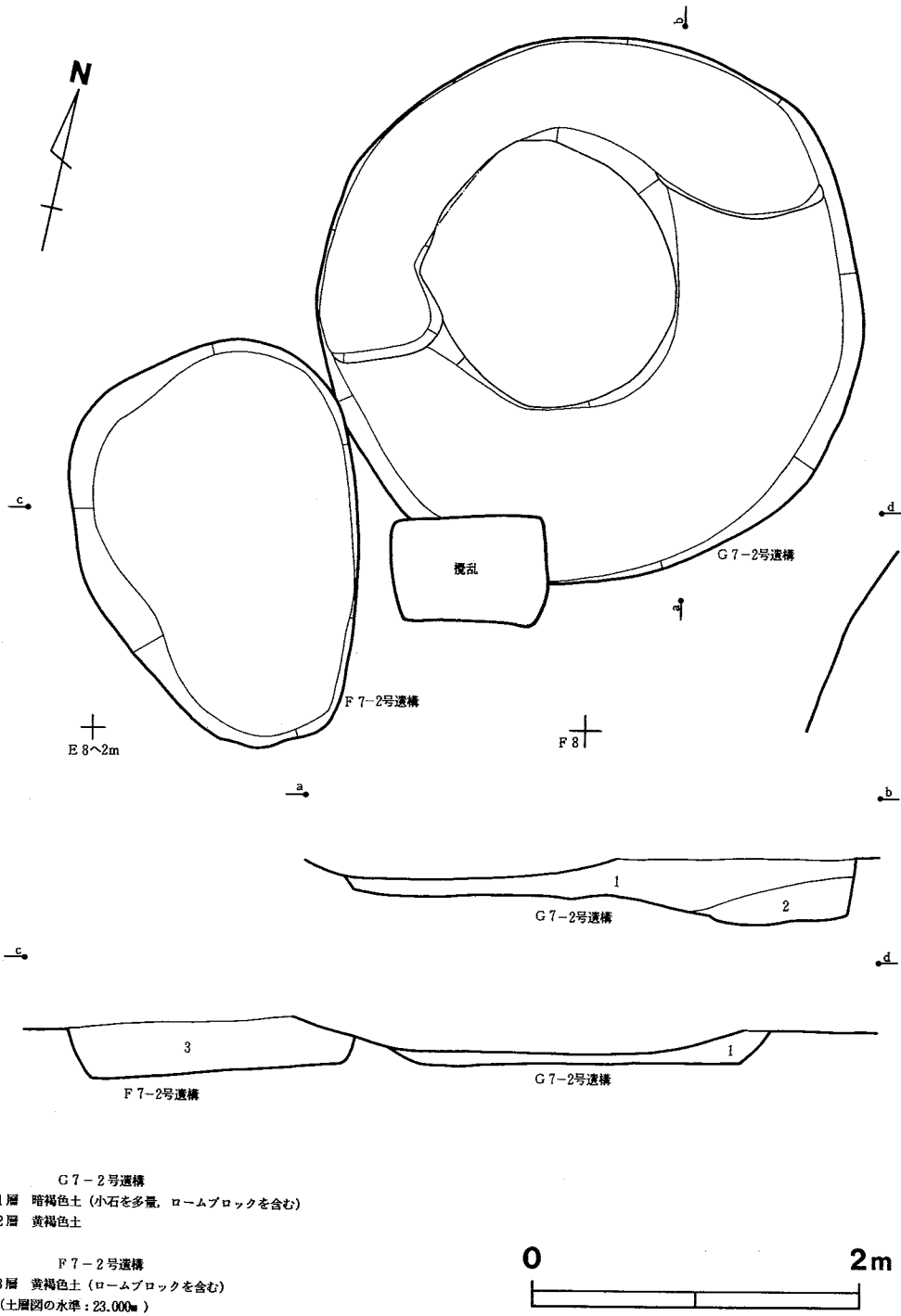


第103図 B~G=7~8区の遺構(26)

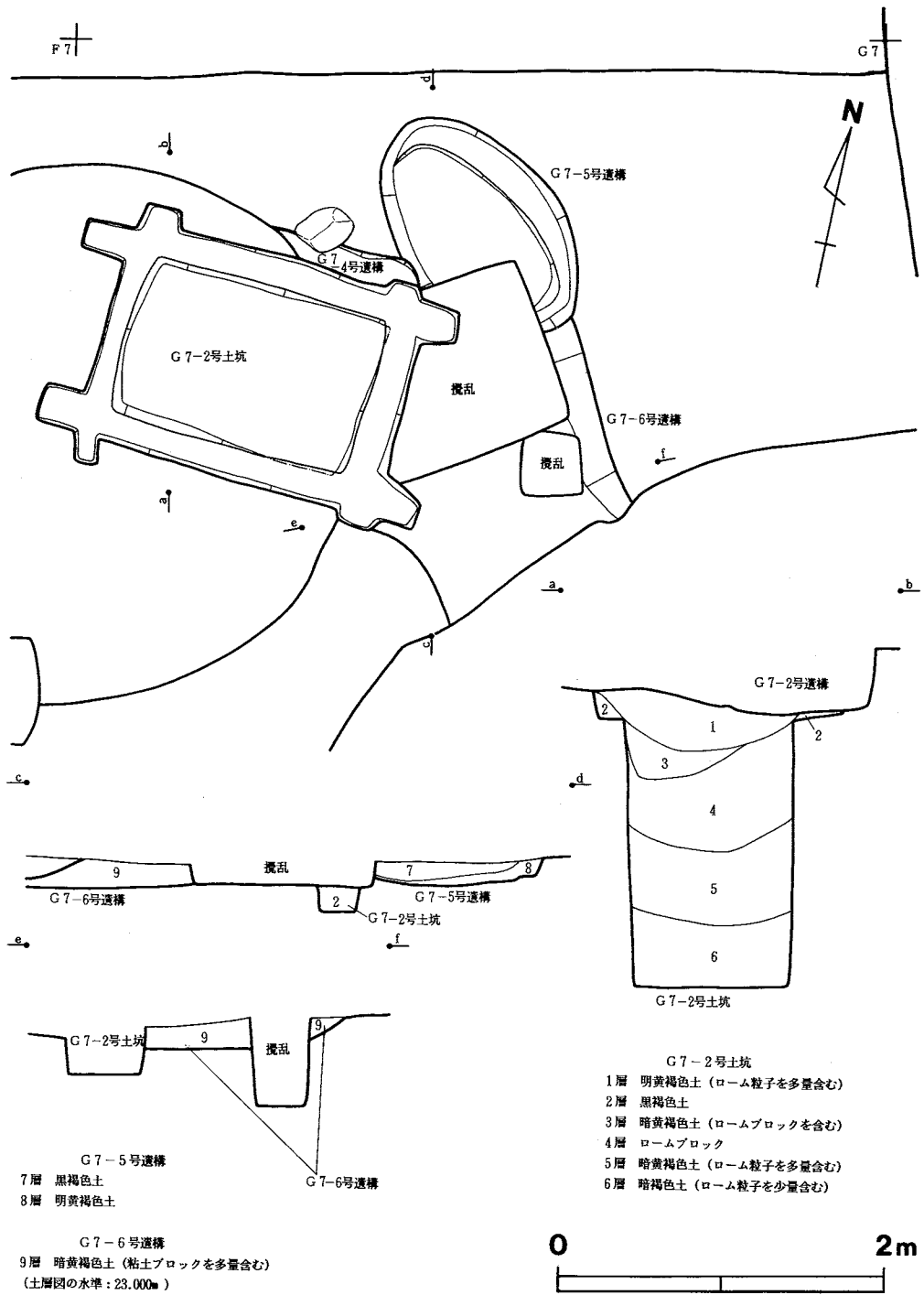


第104図 B~G=7~8区の遺構(27)

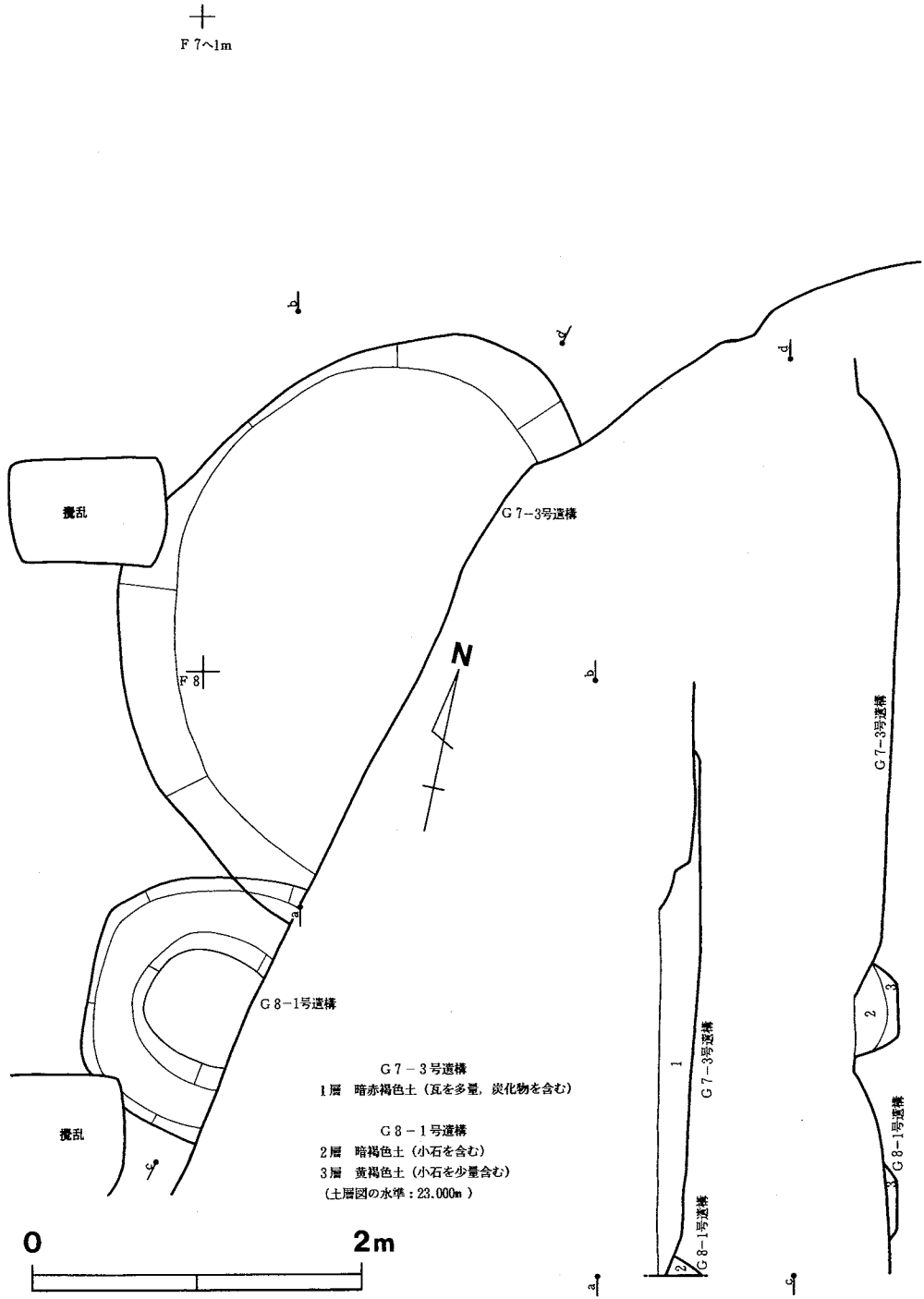




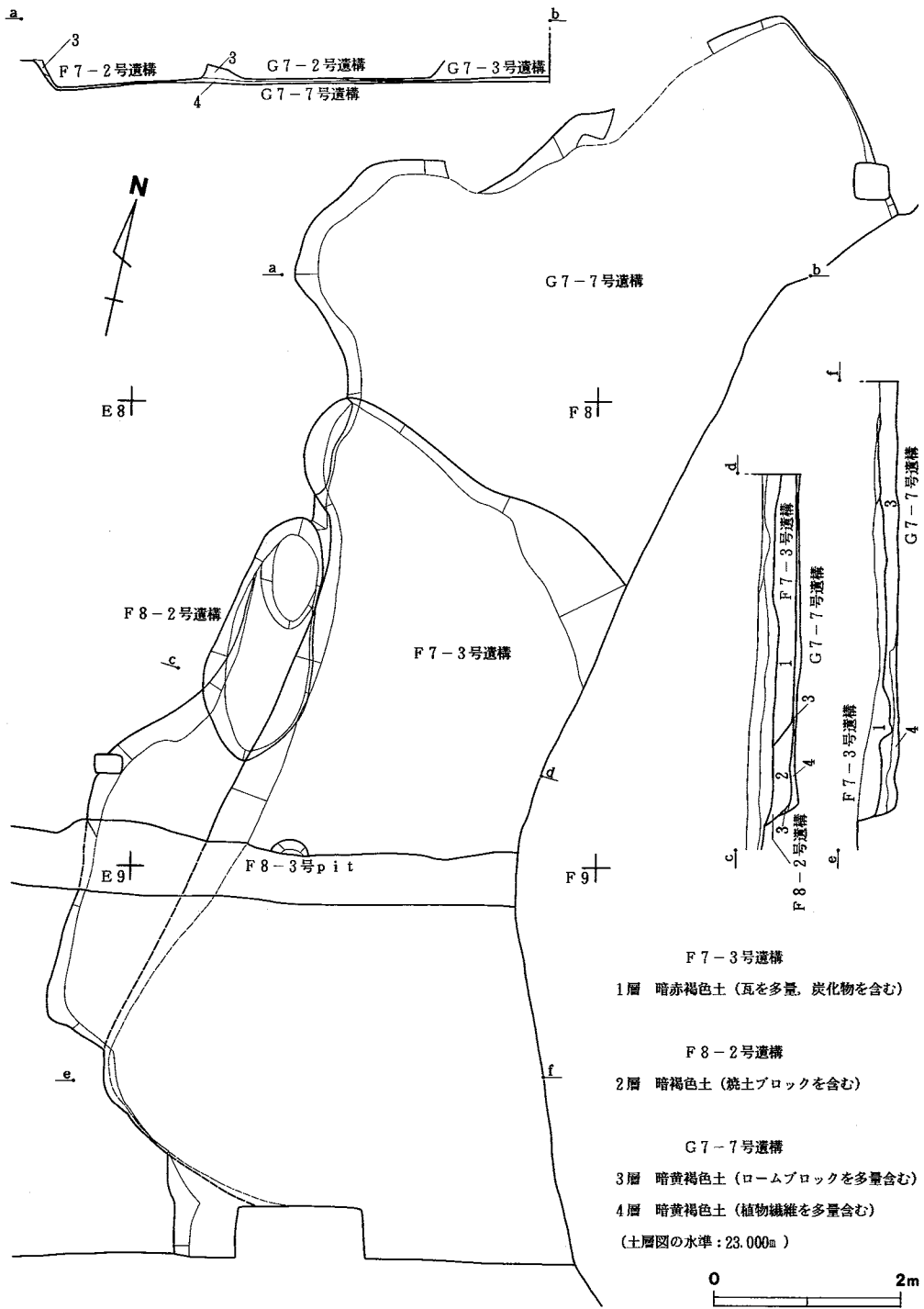
第105図 B~G=7~8区の遺構(28)



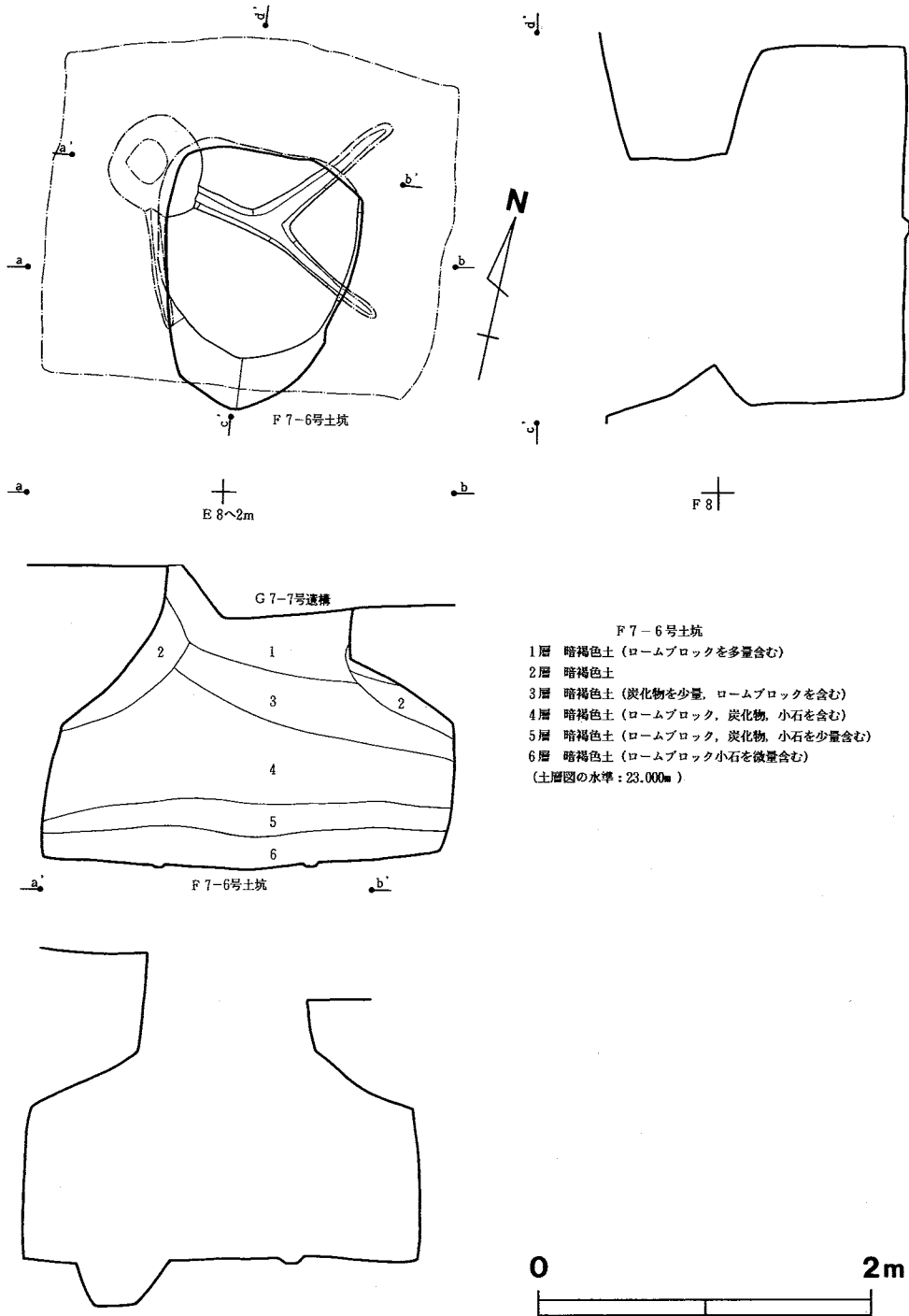
第106図 B~G=7~8区の遺構(29)



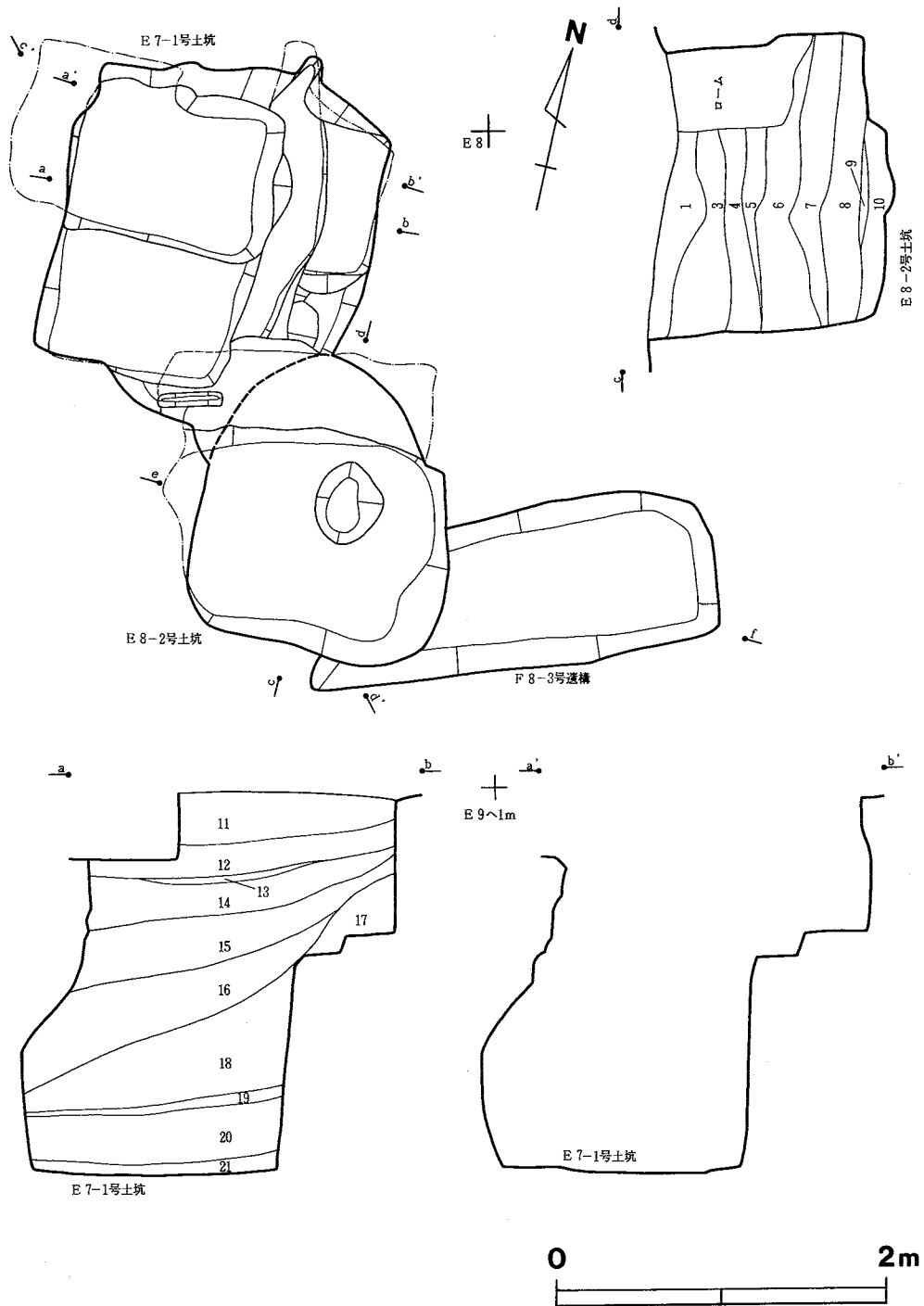
第107図 B~G=7~8区の遺構(30)



第108図 B～G＝7～8区の遺構(31)

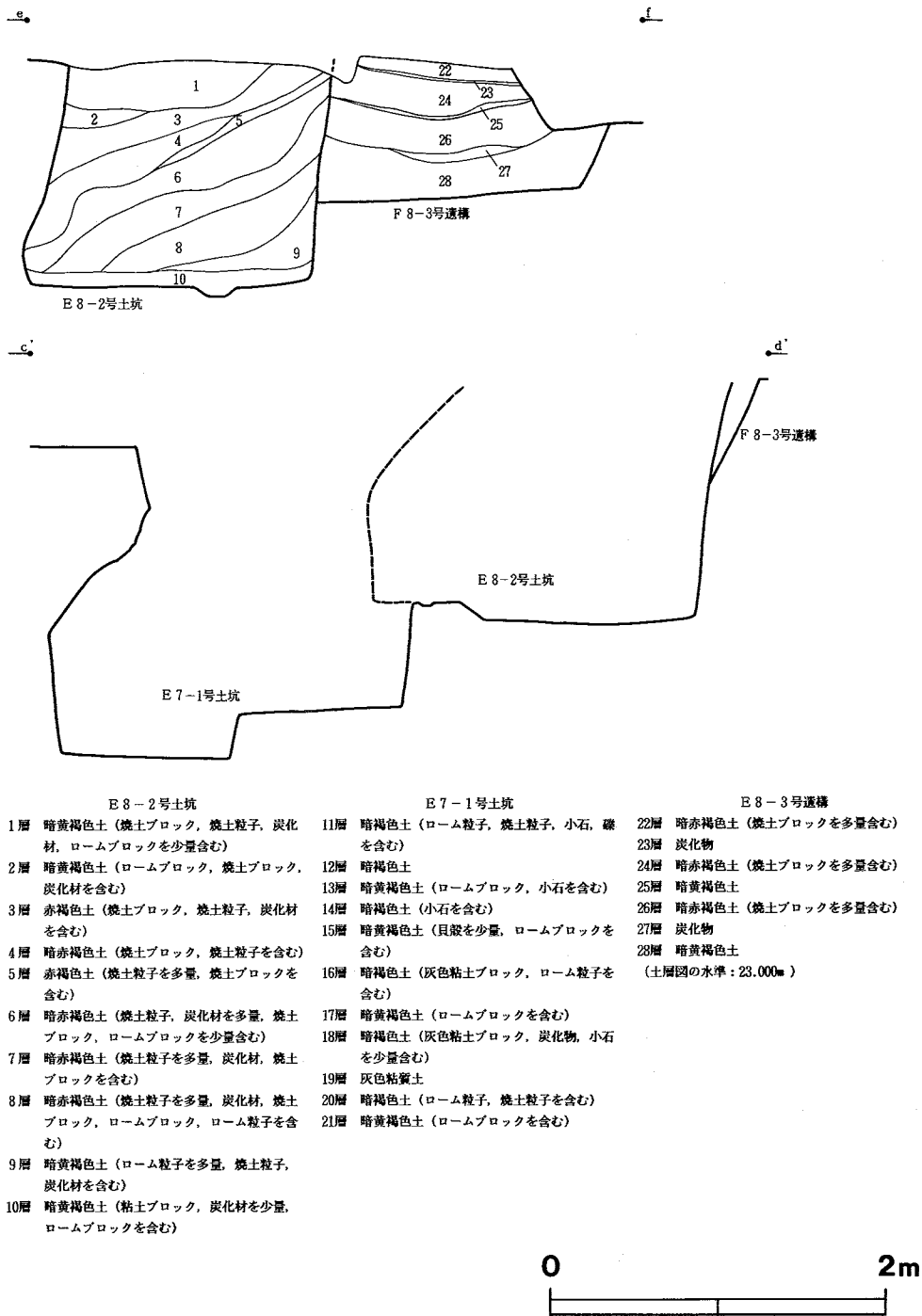


第109図 B~G=7~8区の遺構(32)



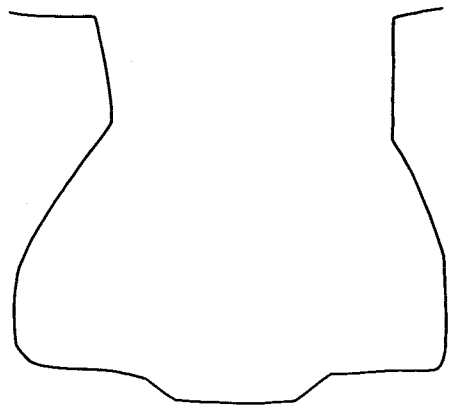
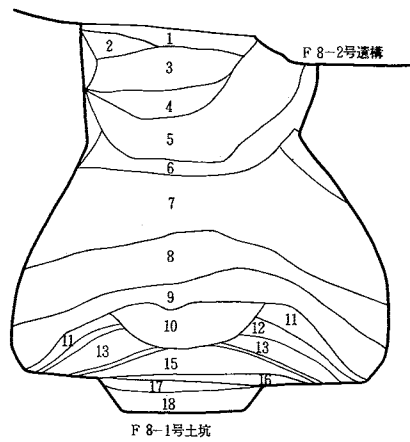
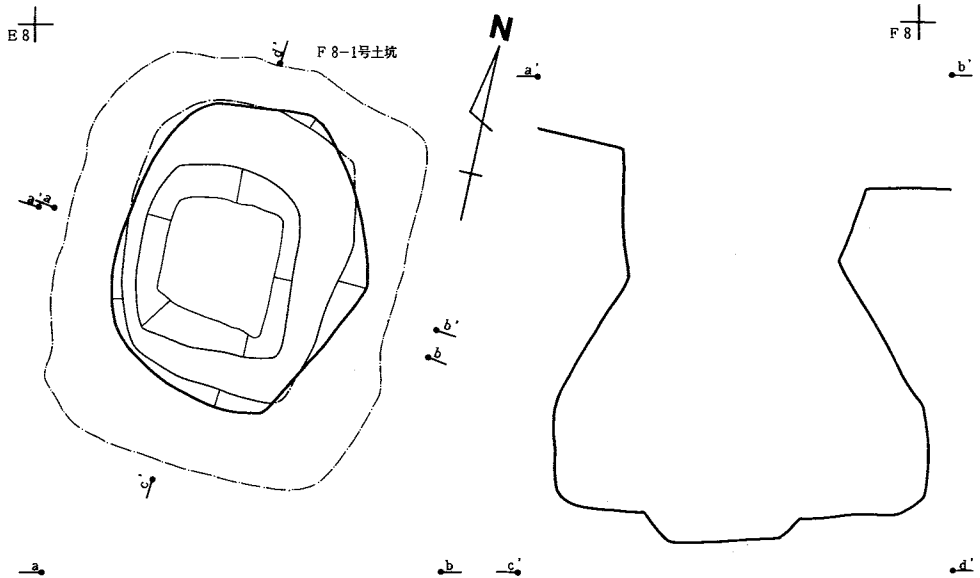
第110図 B~G=7~8区の遺構(33)

報告篇第三章 江戸時代の調査 I



E 8-2号土坑		E 7-1号土坑		E 8-3号遺構	
1層	暗黄褐色土 (焼土ブロック, 焼土粒子, 炭化材, ロームブロックを少量含む)	11層	暗褐色土 (ローム粒子, 焼土粒子, 小石, 礫を含む)	22層	暗褐色土 (焼土ブロックを多量含む)
2層	暗黄褐色土 (ロームブロック, 焼土ブロック, 炭化材を含む)	12層	暗褐色土	23層	炭化物
3層	赤褐色土 (焼土ブロック, 焼土粒子, 炭化材を含む)	13層	暗黄褐色土 (ロームブロック, 小石を含む)	24層	暗褐色土 (焼土ブロックを多量含む)
4層	暗赤褐色土 (焼土ブロック, 焼土粒子を含む)	14層	暗褐色土 (小石を含む)	25層	暗黄褐色土
5層	赤褐色土 (焼土粒子を多量, 焼土ブロックを含む)	15層	暗黄褐色土 (貝殻を少量, ロームブロックを含む)	26層	暗赤褐色土 (焼土ブロックを多量含む)
6層	暗赤褐色土 (焼土粒子, 炭化材を多量, 焼土ブロック, ロームブロックを少量含む)	16層	暗褐色土 (灰色粘土ブロック, ローム粒子を含む)	27層	炭化物
7層	暗赤褐色土 (焼土粒子を多量, 炭化材, 焼土ブロックを含む)	17層	暗黄褐色土 (ロームブロックを含む)	28層	暗黄褐色土 (土層図の水準: 23.000m)
8層	暗赤褐色土 (焼土粒子を多量, 炭化材, 焼土ブロック, ロームブロック, ローム粒子を含む)	18層	暗褐色土 (灰色粘土ブロック, 炭化物, 小石を少量含む)		
9層	暗黄褐色土 (ローム粒子を多量, 焼土粒子, 炭化材を含む)	19層	灰色粘質土		
10層	暗黄褐色土 (粘土ブロック, 炭化材を少量, ロームブロックを含む)	20層	暗褐色土 (ローム粒子, 焼土粒子を含む)		
		21層	暗黄褐色土 (ロームブロックを含む)		

第111図 B~G=7~8区の遺構(34)



- F8-1号土坑
- 1層 暗黄褐色土 (ローム粒子, 焼土粒子を多量含む)
  - 2層 暗褐色土 (ロームブロックを少量含む)
  - 3層 暗黄褐色土 (ローム粒子, 炭化物を少量含む)
  - 4層 暗黄褐色土 (ロームブロックを含む)
  - 5層 暗黄褐色土 (ロームブロック, 黒色土を含む)
  - 6層 暗褐色土 (小石を含む)
  - 7層 暗褐色土 (ロームブロック, 炭化物を多量, 礫を含む)
  - 8層 暗褐色土 (ローム粒子, 炭化物, 焼土, 小石を少量含む)
  - 9層 暗褐色土 (炭化材, 焼土, 魚骨, 獣骨, 貝殻を多量, ロームブロック, 粘土ブロックを含む) (カワラケ層)
  - 10層 暗黄褐色土 (ロームブロックを含む)

- 11層 暗黄褐色土 (焼土ブロックを含む)
  - 12層 暗褐色土 (ロームブロックを少量含む)
  - 13層 暗黄褐色土 (ロームブロックを含む)
  - 14層 暗褐色土 (焼土ブロック, ローム粒子を少量含む)
  - 15層 暗黄褐色土 (焼土ブロック, ロームブロックを多量含む)
  - 16層 暗黄褐色土 (ロームブロックを少量含む)
  - 17層 暗黄褐色土 (ロームブロック, 焼土ブロックを少量含む)
  - 18層 暗褐色土 (焼土ブロック, 炭化物を少量含む)
- (土層図の水準: 23.000m)

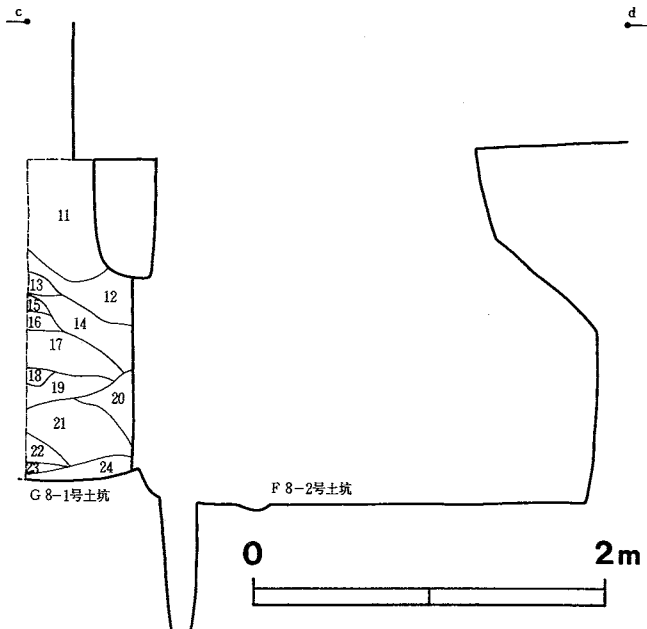


第112図 B~G=7~8区の遺構(35)



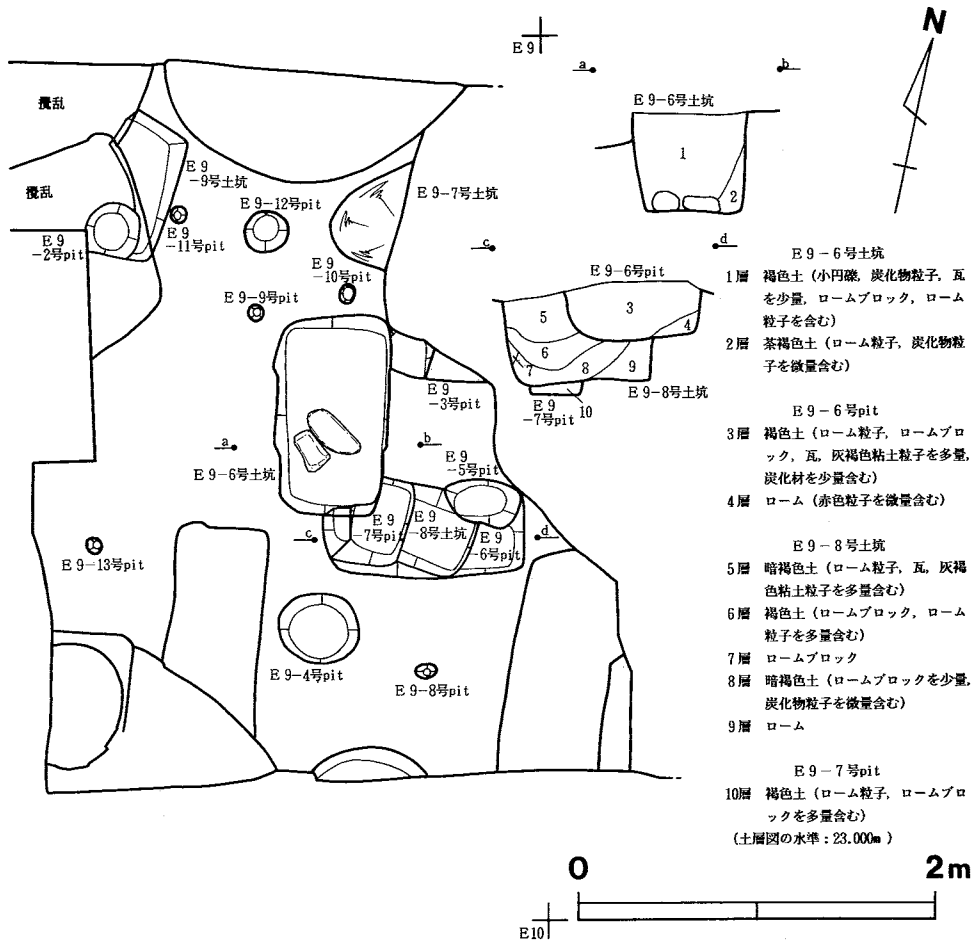


- G 8-1号土坑
- 11層 暗灰色粘質土
  - 12層 暗褐色土 (小石を少量, ロームブロックを含む)
  - 13層 黒褐色土 (小石を多量含む)
  - 14層 暗黄褐色土 (ロームブロックを多量, 小石を少量含む)
  - 15層 黒褐色土 (焼土, 小石を少量含む)
  - 16層 黒褐色土 (焼土粒子を少量含む)
  - 17層 暗褐色土 (魚骨, 炭化物, 貝殻を多量, ロームブロックを少量含む) (カワラケ層)
  - 18層 暗黄褐色土 (炭化物, 焼土粒子を少量含む)
  - 19層 暗褐色土 (ローム粒子, 炭化物, 小石を少量含む)
  - 20層 暗黄褐色土 (ロームブロック, 焼土ブロックを多量, 炭化物, 小石を少量含む)
  - 21層 暗黄褐色土 (ロームブロック, ローム粒子を多量, 焼土粒子, 炭化物を少量含む)
  - 22層 暗黄褐色土 (ロームブロック, 焼土ブロック, 炭化物を微量含む)
  - 23層 明黄褐色土 (ロームブロックを多量, 灰を少量含む)
  - 24層 明黄褐色土 (ロームブロックを多量含む)
- (土層図の水準: 23.000m)



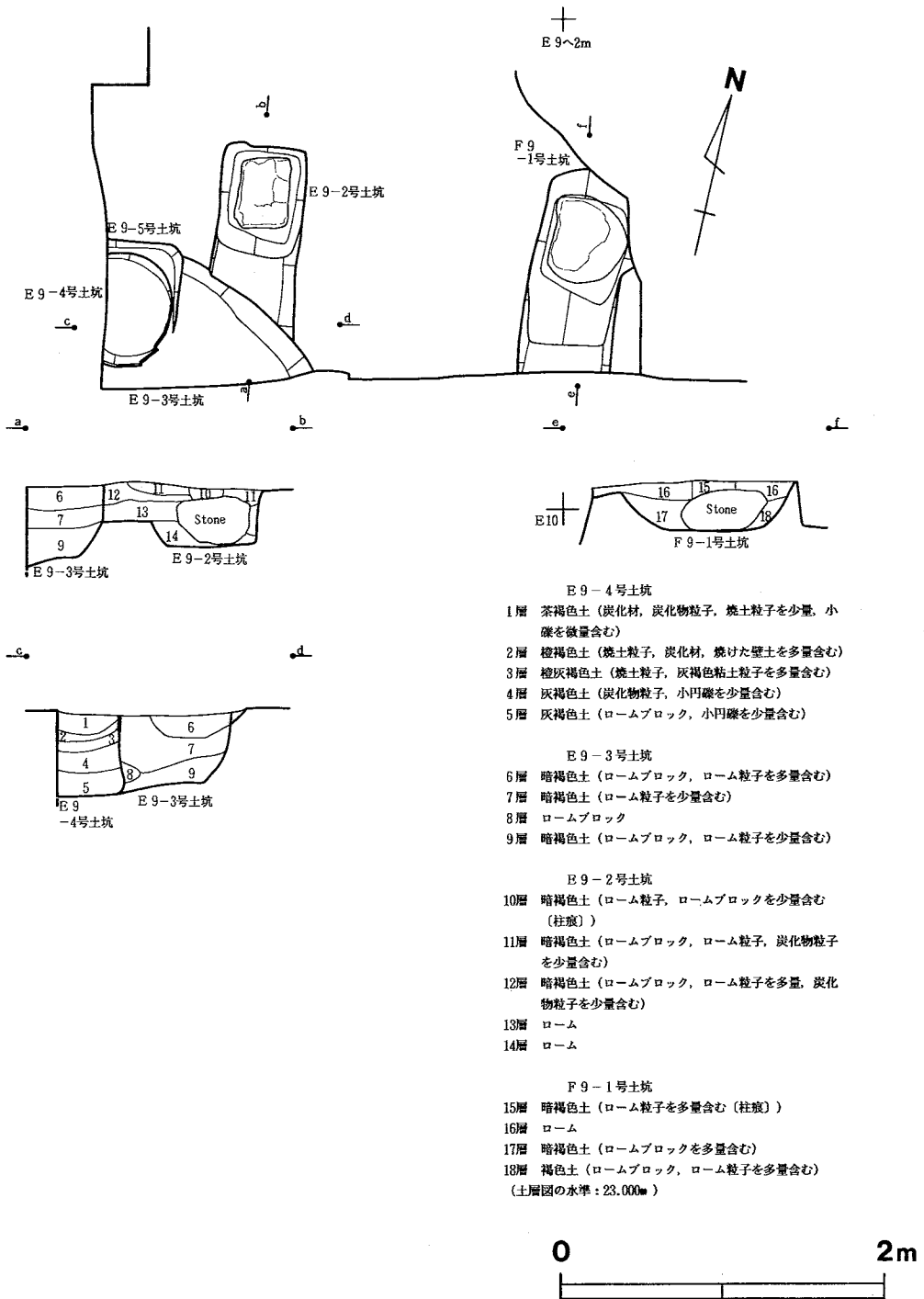
第114図 B~G=7~8区の遺構(37)





第116図 B~G = 7~8区の遺構(39)

報告篇第三章 江戸時代の調査 I



第117図 B~G=7~8区の遺構(40)

### (3) B~H=9~11区の遺構

B 9-4号・5号, C 9-3号, D 9-6号, E 9-2号, F 9-1号土坑, D 9-4号ピット (第117・119・120・130図)

最初に各遺構の規模について記述する。南北軸×東西軸(単位 cm)で示す。B 9-4号土坑: 250×70, B 9-5号土坑: 240×65, C 9-3号土坑: (165)×65, D 9-6号土坑: (185)×65, D 9-4号ピット: 60?×50, E 9-2号土坑: (120)×50, F 9-1号土坑: (125)×(60), となる。

礎石を有する柱穴が東西に7基並んでいる。そのうち形態を完全に把握できるのは2基にとどまるが、残りの5基に関しても位置、構造によりこれらの一群であると判断した。

南北に長軸を持つ長方形の土坑の両端に礎石を配置する。礎石間は150cmを測る。北側に置かれた礎石は南側のものと比較して大きく、最大のものでB 9-4号土坑に用いられた一辺50cmのものがある。これを置くために土坑北側の坑底をさらに掘り下げ、その中に礎石を埋め込み周囲をロームで固定している。それに対し、南側の礎石は長軸で約30cmと小さなものを用いており、掘り方も有さず坑底上に置かれロームで固定されている。このロームは礎石の固定にとどまらずほぼ遺構全体を埋め戻している。

礎石に利用された礫は角礫、偏平礫、平面形が三角形を呈する礫(石組に利用されていたと考えられる)などバラエティーに富み、不用になったものを再利用したものと考えられる。

詰められたロームの断面には柱痕が観察されたが、北側のものは一辺約25cmを測る方形の材であり、南側のものは一辺約15cmを測る方形の材であった。

これらの礎石を有する土坑はB 9-4号土坑よりC 9-3号土坑までは約200cm間隔, C 9-3号土坑からE 9-2号土坑までは約400cm間隔, E 9-2号土坑, F 9-11号土坑間は約200cm間隔で配置されている。約400cm間隔で並んでいるもののうち, D 9-6号土坑よりE 9-2号土坑までは, 各々の中間にあたる箇所に旧図書館の基礎が入っており, またC 9-3号土坑, D 9-6号土坑間にはC 9-4号ピット・4号遺構・5号土坑が存在しており, それらに破壊されたものと考えられる。よって, 近世, 近代の遺構に破壊され検出されなかったものを含めると, 少なくとも10基の存在が確認され, その全長は17m50cmを測る。

本遺構と対応する礎石列は確認されず, これ自体で単独の建造物になっていたものである。その構造より, 北側の礎石には主柱が建てられ, それに対し南側の礎石には北側の柱を補助するための支柱が建てられた可能性が強い。それらは土層断面で観察された柱痕が礎石に対し垂直に確認されたことより, 双方の柱に横木を配し組み立てられた塀と考えられる。また, 主柱が北側に位置することより, 北側を表にした塀である。 (成瀬 晃司)

C 9-4号土坑 (第119・120図)

南北170cm, 東西68cmを測る長方形の土坑である。C 9-4号遺構に南側約2/3が切られてい

る。また、C 9-5, 6号土坑, 4号ピットをそれぞれ切っている。東, 西各壁はほぼ垂直に立ち上がっているが, 南壁は緩やかに立ち上がる。また, 北壁及び西壁の北側約1/3は, 坑底上約40cmより約15cm オーバーハングしている。

坑底より北壁に接し南北40cm, 東西20cm, 厚さ15cmを測る切石が1点検出された。その長軸方位は土坑の主軸方位と一致しており, 本遺構に伴うものと思われる。おそらくこの切り石は礎石として用いられたものであるが, これと共伴する遺構は検出されていない。(成瀬 晃司)

#### C 9-5号土坑 (第121図)

東西116cm, 南北104cmを測る長方形の土坑である。壁は垂直に立ち上がり, 坑底はほぼ平坦である。確認面からの深さは86cmを測る。本遺構は北西部をC 9-1号土坑に, 南西部をC 9-4号土坑, 4号遺構によって切られている。その内C 9-4号土坑の坑底は, 本址の坑底にまで及んでいる。覆土の観察はC 9-4号土坑のため西側1/2でしか行なえなかったが, ローム粒, ロームブロックを含有する褐色土, あるいは暗褐色土が西から東へ傾斜する堆積を呈している。

遺物は, 瓦片, 陶磁器片等が検出された。(成瀬 晃司)

#### C 9-4号ピット (第121図)

東西90cm, 南北102cmを測り, ほぼ正方形のプランを呈する。坑底はほぼ平坦で, 壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは95cmを測る。東側がC 9-4号土坑, C 9-4号遺構によって切られている。

遺構確認時に本址北西部に24cm×20cmを測る長方形を呈する褐色土の範囲が確認されたため, 「いれこ」状にもう一基遺構が重複している可能性を考え, 該所を半載したところ, 南西側の壁に切石が上下2段に重なった状態で検出された。これをピットの付属施設と考え掘り方の確認を行なったが, 立ち上がりは確認されなかった。即ち, この切石はピットに伴うものでありながら, C 9-4号ピットの覆土中に埋設されたものである。したがって, ピット自体別遺構として捉えず, C 9-4号ピットに伴う柱痕として考えるべきである。

本遺構は正方形の掘り方を掘り, その北西部に角材を1本建てこれを埋め戻した。その途中段階で東側を補強するために幅50cm, 高さ24cm, 厚さ12cmを測る切石を二段埋設するといった構築方法がとられたのである。

本遺構周辺に共伴すると考えられる遺構が検出されなかったので推測の域を脱しえないが, 東側に比重が大きくかかる上屋構造をもっていた, または, 柱痕の位置が北西部に偏って存在していたため, 壁まで最も距離を有する東側に補強材を投入したのであろう。

覆土は, 多量のロームブロック, ローム粒を含有する褐色土が主体で, 北から南にかけてやや傾斜している。遺物は, 覆土中(詰められた土)より瓦片, 播鉢等の陶磁器片, 銅製品等が検出された。(成瀬 晃司)

#### C 9-6号土坑 (第121図)

北側をC 9-4号遺構に, 西側の大部分をC 9-4号ピットに切られているため遺存状態は悪

い。

平面形は長方形ないし正方形を呈していたと考えられ、残存部における規模は南北74cm、東西(34) cm、確認面からの深さ112cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、南壁には坑底と約40cmの段差を持つ南北幅16cmのテラスを有している。坑底はほぼ平坦であるが、中央部に向かいわずかに傾斜している。(成瀬 晃司)

#### B 9-13号, C 9-6~8号ピット (第122図)

これらは東西に並ぶ柱穴列と考えられ、その間隔はB 9-13, C 9-6号ピット間を除き約200 cmを測る。B 9-13号ピットは間隔に関しては異なった値を示すが、覆土(詰められた土)に関して他の3基と類似性をもっており、ここに加えることにする。

B 9-13号ピットは、東西50cm、南北62cmを測る長方形のプランを呈する。壁は緩やかに立ち上がり、坑底はほぼ平坦である。

C 9-6号ピットは、東西50cm、南北60cmを測る不整楕円形のプランを呈す。壁は垂直に立ち上がり、坑底はほぼ平坦である。

C 9-7号ピットは、東西74cm、南北(74) cmを測る方形(?)のプランを呈す。北壁はC 9-1号土坑に、南西部をC 9-2号土坑に、南東部をC 9-4号ピットに切られている。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底はやや丸味を持つ。また北壁に東西30cm、南北(20) cmを測る長方形のピット1基を有する。

C 9-8号ピットは(東西50)cm、南北72cmを測る隈丸方形のプランを呈す。西壁はC 9-4, 7号土坑に切られ不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、坑底は平坦である。

覆土は何れの遺構も同様のものが堆積している。3層に分層されるが、第2層が堆積しているのはC 9-7号ピットのみである。

覆土堆積状態より構築過程は次のように考えられる。

- ① 掘り方を掘る
- ② 掘り方の壁、坑底に沿って第3層の暗茶褐色ロームを貼る。
- ③ 第3層上の凹地にB 9-13号ピットでは破砕礫、C 9-7号ピットでは瓦片を利用し基礎を固める。
- ④ それを第1層の粘土ブロックを多量に含有する褐色土で覆う

第1層が、確認面にあたるため、第1層上に礎石が設置されたのか、別の方法を用いて柱を固定したのか不明である。

第3層に使用された暗茶褐色ロームはその色調、土質よりハードロームが変質したものと考えられるが、すでに変質したものを使用したのか、使用時に何らかの影響で変質したのかは不明である。

個々のピットは以上のような特徴を持つが、この柱穴列に伴う遺構は他に検出されなかったため、本遺構は塀址と考えられる。(成瀬 晃司)



**C 9—8号土坑 (第123図)**

B 9区, B10区, C 9区, C10区にまたがって位置し, 重複する八基の遺構 B 9—6号土坑, 7号土坑, 13号土坑, C 9—9号土坑, 10号土坑, 12号土坑, C10—2号土坑, 4号土坑の全てを切って構築されている。平面形は, 東西に長軸を有する楕円形を呈し, 規模は, 長径270cm, 短径220cm, 深さ最大70cmを計測する。壁は, かなりの凹凸を有する坑底よりほぼ直立する。覆土は, 六層に分層されるが, 上層の1, 2層の暗褐色土とその下層の大型のロームブロックを多量に含むロームで構成される土とに大別される。これら, 土層の堆積の状況及び坑底中央部がやや盛り上がる形態や, 遺物の混入の仕方などより本土坑は, 植木の移植の際に掘られた穴であろうと推測される。

遺物は, 瓦片, 陶磁器片が多く検出されている。

(堀内 秀樹)

**C 9—11号ピット (第124図)**

C 9区に位置する南北に長軸を持つ長方形のピットである。C 9—12号土坑を切って構築され, 規模は, 長辺40cm, 短辺24cm, 深さ120cmを測る。北側は, 柱の存在が想定される小ピットとしまりのない木片が混入する灰褐色土(図中5層)が認められることから, なんらかの構築物の柱穴であると考えられるが本ピットと対応される遺構は確認されていない。

遺物は, 検出されていない。

(堀内 秀樹)

**C 9—12号土坑 (第124図)**

C 9区, C10区に位置する平面形ほぼ円形を呈する土坑である。B 9—2号ピット, 12号ピット, 5号土坑, 6号土坑, 7号土坑, 11号土坑, 13号土坑, C 9—6号ピット, 11号ピット, 8号土坑, 6号遺構と重複しており, 新旧は, B 9—13号土坑より新である他は全てに旧である。規模は, 径約300cm, 深さ50cmを計測する。坑底は, 起伏が激しく, 中央には幅20~40cm, 深さ10~30cmの溝が, 環状に直径200cmほどで巡る。覆土は五層に分層され, いずれも多量のローム粒子, ロームブロックを混入する褐色土と暗褐色土で構成される。これら遺構の形状, 覆土の様子などより本遺構は植木の移植穴であると考えられる。

遺物は, 瓦片, 陶磁器片が十数点検出されている。

(堀内 秀樹)

**B 9—13号土坑 (第124図)**

調査区の南西側 B 9区, B10区に位置する。周囲には遺構が密に分布し, 近世の遺構八基と重複関係があり, また, 西側では近代以降の遺構によって削平を受けているため遺存状態はきわめて悪く, 坑底及び南東壁の一部を遺存しているに過ぎない。遺構間の新旧は, B 9—12号土坑, B10—2号土坑, C10—4号土坑より新で, B 9—2号土坑, 7号土坑, 12号土坑, B10—11号ピット, C 9—8号土坑, 12号土坑より旧である。遺存規模は, 東西100cm, 南北180cm, 深さは40cmを計測する。壁は, 凹凸のある坑底より緩やかに立ち上がり, その境は不明瞭である。土層は, 四層に分層され, 褐色土と暗褐色土が交互に, 壁際より中央に向かって傾斜を有して堆積している。遺物は, 陶磁器片が少量, かわらけ片が十数点検出されている。

(堀内 秀樹)

#### C10—4号土坑（第124図）

B10区、C10区にまたがって位置するややいびつな長方形を呈する土坑である。B9—13号土坑、B10—13号ピット、2号土坑、C9—8号土坑、C10—1号土坑、2号土坑、3号土坑、4号土坑と重複関係があり、新旧は、土層の堆積状態よりB10—2号土坑より新である他は全てに旧である。規模は、東西206cm、南北160cm、深さ39cmを計測する。坑底は、平坦に構築され、壁は、やや緩やかにち上がる。覆土は、下層の多量のロームを含む18～19層と、その上層の16層に大別される。遺物は、陶磁器片、瓦片等少量検出されている。（堀内 秀樹）

#### B9—1号土坑（第125図）

西側が調査区域外に達しており、約1/2を調査するにとどまる。その規模は最長部で南北150cm、東西45cm、確認面からの深さ18cmを測り、平面形は楕円形を呈すると思われる。

本遺構はローム粒を含有する暗褐色土面において確認されたが、土層断面の観察によっても当面より切り込んでいることが窺える。

壁はほぼ垂直に立ち上がる。坑底はほぼ平坦であるが、北部に楕円形を呈すると思われる落ち込みを有する。その規模は最長部で南北66cm、東西18cm、坑底からの深さ8cmを測る。覆土は、ロームブロックを含有する暗褐色土で瓦片が多量に検出された。これらの瓦片の出土状態は、表面を上にし平坦に並んでおり、個々の瓦片間には圧力によって破碎したと考えられる破片が散乱している状態を示す。これは瓦片が単に廃棄されたとするより、敷き詰められたと考えられる要素が強い。これらより本遺構は礎石の代用品として瓦を使用した柱穴であると考えられる。

（成瀬 晃司）

#### C9—9号土坑（第126図）

B9区、C9区に位置し、C9—10号土坑の上に構築されている。近世の遺構C9—5号ピット、9号ピット、6号土坑、8号土坑、10号土坑と重複関係にあり、新旧は、C9—10号土坑より新である他は、全てに切られており、さらに西側は、旧帝国大学の図書館の基礎によって削平を受けているため、南、東壁と北壁の一部しか遺存しておらず、遺構全体の様子は窺う事はできない。遺存規模は、東西160cm、南北173cm、深さ20cmを計測する。坑底は、フラットで、壁もほぼ直立する。覆土は、多量のロームブロック、ローム粒子を含む褐色土の一層である。

遺物は、瓦片が少量検出されている。

（堀内 秀樹）

#### C9—10号土坑（第126図）

B9区、C9区にまたがって位置し、C9—8号土坑、9号土坑、C10—2号土坑と重複関係にある。新旧は、C10—2号土坑より新である他は全ての遺構に切られ、遺存状態は悪い。平面形は、円形もしくは楕円形を呈していたと推定され、遺存規模は、東西200cm、南北300cm、深さは最大40cmを計測する。坑底は、全体に凹凸が激しく、また、幅20～30cm、深さ10～20cmのローム土を覆土にもつ溝が環状に直径180cmほどで巡っている。これら遺構の形態、土層などより、植木の移植穴としての性格が推定できよう。

遺物は、陶磁器片、瓦片が二十数点検出されている。 (堀内 秀樹)

#### C10-2号土坑 (第127図)

C10区に位置する土坑であるが、その東側を旧帝国大学の図書館の基礎によって削平を受けており、遺構の大半を失っている。また、周囲の近世の遺構 B10-3号土坑、C9-8号土坑、10号土坑、C10-1号土坑、3号土坑、4号土坑と重複関係にあり、新旧は、C10-3号土坑、4号土坑より新である他は全てに旧である。遺存規模は、東西190cm、南北200cm、深さは22cmを計測する。壁の状態は、ほとんど遺存していないため不明であるが、坑底は、比較的平坦である。覆土は、単層で暗褐色土を呈する。

遺物は、陶磁器片、かわらけ片が数点ずつ検出されている。 (堀内 秀樹)

#### C10-3号土坑 (第127図)

B10区、C10区に位置する長軸を東西方向に有する隅丸方形の土坑である。周囲の遺構七基と重複関係にあり、本土坑より古い時期の遺構は、B10-12号ピット、13号ピット、C10-4号土坑、5号土坑で、新しい時期の遺構は、B10-10号ピット、C10-1号土坑、2号土坑である。規模は、東西166cm、南北120cm、深さ70cmを計測する。坑底は、ほぼ平坦に構築され、壁も坑底より垂直に立ち上がる。また、建造物の礎石と考えられる大型の切り石が二個、東西に並んで面を上にした状態で配されている。東側の切り石は、方形の大型偏平で一辺80cm、厚さ20cm、西側の切り石は、一辺50cm、厚さ45cmを測り二個の石の面の比高差は15~20cmを有する。覆土は、切り石固定のための下込めのしまりが非常に強い下層の暗褐色土と、上層の暗い暗褐色土の二層に分層される。

遺物は、陶磁器片、かわらけ片、瓦片が多く検出されている。 (堀内 秀樹)

#### C10-5号土坑 (第127図)

B10区、C10区に位置する。重複する B10-10号ピット、C10-1号土坑、3号土坑に上部を切られており、さらに南、東側を旧帝国大学の図書館の基礎に削平され、北側のコーナーを遺存するだけである。遺存規模は、東西60cm、南北70cm、深さは、C10-3号土坑の坑底より約100cmを測る。坑底及び壁面は、丁寧に整形されており所々にその痕跡が観察される。壁は、確認面より若干オーバーハングしている。覆土は、遺構の遺存状態が不良であったため土層図の作成は行なえなかったが、上層より暗褐色土(しまりなし。砂利を含む。)~暗灰褐色土(粘性強く、しまりなし。円礫を多量に含む。)~円礫層~玉砂利層の堆積がみられる。

遺物は、陶磁器片、かわらけ片、瓦片が十数点検出されている。 (堀内 秀樹)

#### B10-2号土坑 (第127図：図版2)

調査区の南西側 B10区に位置する。南西側を、近代以降の遺構によって大きく削平を受けており、また、重複している B9-13号土坑、B10-13号ピット、4号土坑、C10-1号土坑、4号土坑のいずれより旧であるため遺存状態は悪く、全体の様子は窺うことはできない。遺存規模は、東西約180cm、南北約240cm、深さは最大50cmを計測する。壁及び坑底は、かなりの起伏を有し

ながらだらだら立ち上がるため、その境は不明瞭である。土層は、かわらけ片、貝、骨などの多量の遺物を含む層が、壁側より中央に向かって傾斜を有して三層認められる。

本土坑の特徴は、遺物が多量の出土をみたことである。種類としては、陶磁器、瓦、かわらけ、焼塩壺、土製品、煙管、銅製品、鉄製品、基石、砥石、骨など多種にわたっているが、特にかわらけは量において突出しており、遺構の遺存状態が不良であったにもかかわらず完形の個体数のみで50個体を超え、本土坑を削平して構築されている近代以降の攪乱中より出土している多量のかわらけ片も本土坑に伴う可能性がきわめて強いことから、当初はかなりの個体数が廃棄されていたと推定される。出土状況は、緩やかに立ち上がる壁や、坑底面直上より短時間の廃棄を想定されるようにそのまま土圧によって潰れている状態で出土している。一般的な粘土板の底部の上に轆轤回転を利用して体部をつくり出し、糸で底部を切り離すかわらけの他に、精製かわらけとも呼べそうな緻密な胎土を有し、全面丁寧に研磨して体部との接合痕などの作業の工程を消去しているものも数個体検出されており、また、かわらけ全体の法量も口径15cm 前後のもの、12cm 前後のもの、10cm 以下のもののおよそ三種が存在するようである。特異な例として、底部穿孔や、裏側より底部を釘が貫いている例もあり、灯明具としてのかわらけの使用法の一例を示す資料となると思われる。貝類は、アサリ、シジミなどの多量の二枚貝と、サザエ、アワビなどが検出され、南側のD11-1号溝において多量に出土したカキ、アカガイは認められなかった。骨は、魚骨、獣骨、鳥骨などが検出されている。

調査区全体でかわらけを多量に出土した他の遺構同様灰褐色土中に魚骨、獣骨、貝などが多量に検出されているが、異なっている点も多く、他の遺構では地下式坑などを二次利用して廃棄しているが、本土坑では、掘り込みも浅い他、坑底、壁もかなりの凹凸を有するなど、他の施設をゴミ穴として二次利用した可能性は少ないように思える。

本土坑で行なった土壌サンプリングは実際の層序とは必ずしも一致していないが便宜的に上から上、中、下、最下層とし、平面的には、東西セクションを境に北、南、遺構の中央付近を中央、それ以西を西、以東を東、調査を進めていく段階で本遺構であることが新たに確認された東側を拡張区とした。

(堀内 秀樹)

#### E 8-3号土坑 (第128図)

E 8-4号土坑を切る一方、明治時代以後の攪乱によって東側の一部が壊されているが、円形の掘り方をもつ土坑である。底面には歪だが円形に浅く溝が巡るようになっている。植木穴ではなかったろうか。小石混じりの暗褐色土で埋まっている。遺物はない。

(大塚 達朗)

#### E 8-4号土坑 (第128図)

明治時代以後の攪乱とE 8-3号土坑によって遺構の殆どを壊されていて、全形は窺い知れない。小石混じりの暗褐色土が埋土である。遺物はない。

(大塚 達朗)

#### D 9-3号土坑 (第129図)

D 9区に位置する平面方形もしくは長方形を呈すると思われる土坑であるが、D 9-2号土坑

に南側の一部を切られ、また、旧帝図大学の図書館の基礎によって、東側を削平されている為、遺存状態は不良である。遺存規模は、東西58cm、南北88cm、深さは100cmを計測する。坑底は、フラットでほぼ中央に大きき26×25cm、厚さ9cmを測る偏平な平石が配されている。また、坑底より約50cm浮いてそれと重なるように大きき28×21cm、厚さ12cmを測る台形の切り石が面を上に向けて設置され、二重の構造を呈している。覆土は、六層に分層されるが、平石間の固定のための処置であると推定される5層、6層とそれ以上の1～4層に大別できる。

遺物は、陶磁器片、瓦片が二十数点検出されている。(堀内 秀樹)

#### D 8-4号土坑 (第131図)

D 8区、D 9区にまたがって位置する平面形楕円形を呈する土坑である。主軸は、東西方向に有し、長径80cm、短径65cm、深さは最も深い南側で55cmを計測する。坑底にはテラス状の段が認められ、北側は南側より27cmほど高く、壁は、それよりやや開き気味に立ち上がる。覆土は、二層に分層されるが、多量の砂が混入する暗褐色土がほとんどである。

遺物は、陶磁器片少量、かわらけ片1点が検出されている。(堀内 秀樹)

#### D 9-5号土坑 (第131図)

D 9区に位置する平面形隅丸方形を呈する土坑である。D 9-12号ピットと西側で、D 9-6号土坑と南側で重複し、新旧はD 9-12号ピットより新で、D 9-6号土坑より旧である。規模は、東西90cm、南北80cm、深さは27cmを計測する。坑底は、南より北へ緩やかな傾斜を有し、壁は、それより開き気味に立ち上がる。土層は、単層で、暗褐色土(粘性、しまり共にあり。ローム粒子、カーボン粒子微量混入。)を呈する。

遺物は、陶磁器片、瓦片、かわらけ片が少量検出されている。(堀内 秀樹)

#### E 9-1号ピット (第133図)

E 9区、E10区にまたがって位置する方形を呈するピットである。規模は、東西45cm、南北50cm、深さ55cmを計測する。坑底は平坦で、それより壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土層は、三層に分層され、東壁付近には、柱の痕跡と思われる1層が明瞭に認められ、なんらかの上部建造物を想定されるが、本ピットに対応すると思われる遺構は確認されていない。

遺物は、陶磁器片、瓦片が少量と針金状銅製品が検出されている。(堀内 秀樹)

#### E 9-1号土坑 (第133図)

E 9区に位置する平面形方形もしくは長方形を呈すると思われる土坑であるが、東側を旧帝国大学の図書館の基礎に削平され、全体の様子は窺うことはできない。規模は、現存で東西74cm、南北200cm、深さ47cmを計測する。坑底および壁際には、木片が多量に貼りついており、さらに、木には木釘が打たれており、木板が固定され箱状を呈していたことが看取できる。土層は、多量の炭化物を含む灰褐色土と板の腐食した木片を多量に含む橙褐色土とに分層される。

遺物は、上層より白磁の壺がほぼ完形で出土した他、陶磁器片、瓦片、木釘などが多量に検出されている。(堀内 秀樹)

#### D11-1号溝 (第134図)

東西に伸びる溝状遺構である。

西側は調査区域外まで伸びており、全長は不明である。調査区域内における長さは12.8mを測り、幅は旧図書館基礎外では約94cm、基礎内では約80cmを測る。確認面からの深さは基礎外で約36cm、基礎内で約22cmを測る。但し、幅と深さに関しては旧図書館基礎内の遺構確認面が、攪乱により約20cm低いために一回り小さくなっている。両側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、溝先端部の東壁は緩やかに立ち上がっている。坑底はほぼ平坦であるが、緩やかに西へ傾斜している。

本遺構西部は調査区域外に及んでいる事もあり、基本土層との関係を把握する事ができた。当所における基本土層は、道路面構築層、焼土層（おそらく震災時のもの）黒色土層、粘土層、褐色土層、ローム層と続くが、本遺構は粘土層を切って構築されている。覆土は7層に分層されレンズ状堆積を呈している。第7層は、多量のローム粒を含有する黄褐色土である。これはその堆積状態より壁の剥落によるものと考えられるが、水による土質の変化はなく、また坑底にも水の流れた痕跡は認められず、上下水路として利用された根拠となるものは確認されなかった。故に本遺構は地界溝としての可能性も考えなければならない。第2層は貝層で、本遺構埋没途中に遺物廃棄が行われたものである。貝層は平面的には溝中央部に集中し、壁際にはみられない。これは第3層堆積後の凹地範囲に一致している。また基礎内にはその分布がほとんどみられないが、確認面が低いためであり、本来は同様な分布を示していたものと思われる。貝層はカキを主体としているが、その他にアワビ、サザエ、ハマグリ、魚骨などが検出されている。人工遺物は貝層中には含まれず、それを取り巻く状態で陶磁器片、瓦片などが検出された。遺物廃棄は平面及び垂直分布状態より、ごく短期間内に為されたものである。 (成瀬 晃司)

#### D10-5号遺構 (第138図)

D10-1号土坑及びD10-2号土坑に隣接し、北側の大半を旧図書館の基礎建設時に破壊され、残存するのは南側の1/4程である。D10-1号土坑、2号土坑を切っており、これらより新しい。深さ35cm程の底のほぼ平らな土坑である。埋土は5層より成るが、最上層の黒色土中には小礫が多数含まれていた。 (鷹野 光行)

#### D10-1号土坑 (第138図)

D10グリッドの西端にあり、一部C10グリッドにもかかる。旧図書館の基礎によって北～西側をこわされるとともに東側はD10-5号遺構が切っている。平面形が円形に近いものとする。残存部は1/3程になるが、推定で直径は2.20m程となる。深さは35cm程であるが中央部はこれよりも15cm程凹む部分がある。埋土は2層に分かれ、上層は黒褐色土を含む黄褐色土、下層は黄褐色土であった。埋土中より瓦、陶器片、炭などが出土している。 (鷹野 光行)

#### D10-2号土坑 (第138図)

D10グリッドの中央やや北西寄りにあり、D10-5号遺構に北側を切られている。埋土中にD10-4号遺構が掘られていた。直径1.60mの円形のプランで深さは29cmある。埋土は人為的に

埋め戻された形跡を示し、各層ともロームブロックを混じえていた。埋土中から瓦片が得られている。

(鷹野 光行)

**E10-2 a 号土坑 (第140図)**

E10グリッド北西隅近くにあり、北側を旧図書館基礎によって切られている。平面プランは方形だが、東西方向に60cmを測るのみで他の一辺は長さは不明である。深さは55cm程ある。埋土中からレンガ片、貝殻、炭などが出土した。

(鷹野 光行)

**E10-2 b 号土坑 (第140図)**

当初、E10-2 a 号土坑と一体として考えていたため、このように命名されたが、位置はD10グリッド内にある。2 a 号土坑と同様方形を呈し、深さもほぼ同規模で52cmを測る。埋土はやわらかい黒色土であった。底近くには小礫とともに木炭粒が含まれていた。レンガ片も出土している。

(鷹野 光行)

**E10-5 号ピット (第140図)**

D10区、E10区にまたがって位置し、E10-4号土坑を切って構築されている。平面形は、南北方向に長軸を有する長方形を呈し、規模は、長辺58cm、短辺32cm、深さ58cmを計測する。壁は、平坦な坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。土層は、おおよそ上下二層に分層され、共に褐色土であるが、上層は、しまりがあり、下層は、しまりのないボソボソの土である。

遺物は、陶磁器片、瓦片が少量出土している。

(堀内 秀樹)

**E10-4 号土坑 (第140図)**

E10区に位置する平面形隅丸方形を呈すると推定される土坑である。周囲のE10-3号ピット、5号ピット、6号ピット、7号土坑と重複関係にあり、新旧は、7号土坑より新である他は、全てに旧である。主軸は、東西方向に有し、規模は、長辺83cm、短辺64cm、深さ60cmを計測する。坑底は平坦で、壁は、ほぼ直立する。土層は、しまりのある茶褐色土の上層と、しまりの弱い褐色土の下層の二層に分層され、壁際より中央に向かって傾斜を有する。

遺物は、陶磁器片、瓦片が二十数点検出されている。

(堀内 秀樹)

**E10-7 号土坑 (第140図)**

E10区に位置するほぼ円形を呈する土坑であるが、近代以降の旧帝国大学の図書館の基礎に大きく切られ、遺存状態は不良である。また、西南側でE10-4号土坑、北東側でE10-6 c 土坑と重複関係にあり、新旧は、両遺構より旧である。規模は、径150~160cm、深さは、最大45cmを計測する。坑底は、若干の凹凸があり、壁はほぼ直立する。土層は、二層に分層され、上層は、暗褐色土、下層はロームブロックを多量に含むやや明るい暗褐色土を呈す。本遺構の性格は、やや小型であるが、壁や坑底の形態や、覆土の様子などより植木の移植穴であろうと推測される。

遺物は、陶磁器片1点、瓦片4点検出されている。

(堀内 秀樹)

**E10-1 a 号遺構 (第141図)**

調査区の南側E10区に位置するほぼ長方形の土坑であり、重複するE10-1 b 号遺構を切って

構築されている。主軸方位は、東西方向に有し、規模は、長辺100cm、短辺64cm、深さは、確認面より最大30cmを計測する。坑底は、かなりの凹凸を有し、北側より南に傾斜を持っている。壁は、坑底より緩やかに立ち上がる。覆土は、単層で、ローム粒子を含む暗褐色土を呈す。

遺物は、検出されていない。

(堀内 秀樹)

#### E10-1 b号遺構 (第141図)

調査区の南側 E10区に位置するやや不整な長方形を呈する土坑であり、南壁の一部を旧帝国大学の図書館の基礎によって削平を受けている。周囲の E10-1 a号遺構、F10-1 a号土坑と重複しており、新旧は E10-1a 遺構より旧で、F10-1 号土坑より新である。東西方向に主軸を有し、規模は、長辺110cm、短辺65cm、深さ50cmを計測する。坑底は、フラットで、壁は、それよりほぼ直立する。覆土は五層に分層されるが、ロームブロック、ローム粒子で構成されるボソボソの土が主である。遺物は、検出されていない。

(堀内 秀樹)

#### E10-3 a号土坑 (第141図)

E10区、F10区にまたがって位置し、東西方向に主軸を有するほぼ長方形の土坑である。周囲の E10-3 b号土坑、F10-1号遺構、2号遺構と重複しており、新旧は、土層の堆積状態より切り合っている遺構のすべてより新である。規模は、長辺が、やや張り出している北側で140cm、短辺70cm、深さ90cmを計測する。坑底は、平坦で、壁も平滑で坑底より直立する。土層は、三層に分層されるが、すべてローム粒子を含む暗褐色土である。

遺物は、3 b号土坑と合わせて、陶磁器片、瓦片が十数点検出されている。

(堀内 秀樹)

#### E10-3 b号土坑 (第141図)

E10区に位置する平面形ほぼ円形の土坑である。周囲の E10-3 a号土坑、F10-1号遺構と重複しており、新旧は、土層の堆積状態より E10-3 a号土坑より旧で、F10-1号遺構より新である。規模は、径180cm、深さ50cmを計測する。壁は、起伏がある坑底より直立する。土層は、ロームブロックを多量に含むローム再埋土であるが南側壁付近は、砂および黒色土が混じる。壁、坑底の構築状態やロームブロックが多く混じる覆土の様子などから、本土坑は植木の移植穴であると思われる。

遺物は、3 a号土坑と合わせて、陶磁器片、瓦片が十数点検出されている。

(堀内 秀樹)

#### E11-3号ピット (第142図)

調査区の南端 E11区に位置する平面形楕円形のピットである。E11-2号土坑、F11-1号土坑と重複関係にあり、新旧は、両遺構よりも新しい。南北に主軸を有し、規模は、長径55cm、短径45cm、深さ最大40cmを計測する。坑底は、平坦で、壁は、それよりほぼ直立する。覆土は、二層に分層され、上層はしまりのある暗褐色土、下層は、灰褐色粘土を多量に含むしまりの強い層である。遺物は、検出されていない。

(堀内 秀樹)

#### E11-4号ピット (第142図)

調査区南端 E11区に位置する東西方向に主軸を有する平面形隅丸方形のピットである。周囲の



E11-2号土坑, F11-1号土坑と重複関係にあり, 新旧は, 切り合っている両遺構より新である。規模は, 確認面で長辺73cm, 短辺37cm, 深さ27cm, 坑底は東側で一段高くなっており, 低い西側の部分では東西40cm, 南北28cm, テラス状の東側は東西15cmを計測する。壁は, 坑底よりやや開いて立ち上がる。覆土は, 二層に分層され, 上層は暗褐色土, 下層は褐色土を呈する。

遺物は, 陶磁器片, 瓦片が少量検出されている。(堀内 秀樹)

#### E11-2号土坑(第142図)

調査区の南端E11区に位置する。E11-3号ピット, 4号ピット, F11-1号土坑と重複関係にあり, 新旧はそのいずれよりも旧である。平面形は, 東西方向に長軸を有する長方形を呈し, 規模は, 長辺120cm, 短辺50cm, 深さ65cmを計測する。坑底は, 平坦で, 壁は, 東西はやや開きながら, 南北はほぼ垂直に立ち上がる。土層は, 六層に分層され, 東壁より西側に向かって傾斜を有している。遺物は, 検出されていない。(堀内 秀樹)

#### E11-1号土坑(第143・144図:図版2)

E11区北端の中央部に開口部を持つ地下式土坑であるが, 南側は発掘区域外にかかり, 完掘されていない。

開口部には浅い攪乱が入り, 厳密には開口部があるとはいえないが, ほぼ東西に1.5mの広がりを持つ。坑底はほぼ平らで, 東西に2.4m, 南北にはほぼ1.8m以上の広さである。開口部より北側の天井部は崩壊せずに残っていたところもあったが, 調査中に崩落したため, その形態などは記録できなかった。西壁の中間, 坑底から80cm程の高さの所に土層断面図に示されたような四角い掘り込みがある。この掘り込みの奥行は約70cm, 高さは55cm程を測る。また同様の掘り込みが北壁の中間, 坑底から90cmの高さの所にもある。こちらの掘り込みは奥行は70cmあり, 高さは土坑の天井部の崩落とともに上端が落ちてしまっただけで記録できなかったが, 50cm以上ある。どちらも中段の下端を一点鎖線で表示し, その位置を示した。

埋土を見ると, 33層の焼土を境にして下部に黄褐色土を基調とした土が堆積し, 上部に遺物を多量に含んだ黒色土や黒褐色土が堆積する形となっている。この土坑が放棄されて間もなく天井などの一部が崩落し, その後ゴミ穴として利用されたものであろうか。(鷹野 光行)

#### F10-3号土坑(第145図)

F10区に位置する木の移植穴様の土坑であるが, その北半を旧帝国大学の図書館の基礎に切られ, 遺存状態は不良である。また, 周囲の三基の遺構と重複関係を有し, 新旧はF10-2号土坑, 4号土坑より新で, G10-1号土坑より旧である。遺存規模は, 東西190cm, 南北50cm, 深さ18cmを測る。壁は, 凹凸がある坑底より, ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は, 上層暗褐色土, 下層は, ローム粒子, ロームブロックを多量に含む褐色土の二層に分層される。本遺構は, 坑底や壁の形態, 覆土の様子などより植木の移植穴であると思われる。

遺物は, 瓦片が数点検出している。(堀内 秀樹)

#### F10-2号土坑(第145図)

調査区の南西の端 F10区に位置する土坑であるが、東壁及び西壁の一部を旧帝国大学の図書館の基礎によって削平を受けている。また、南側において F10-3号土坑と重複しており、新旧は、F10-3号土坑より旧である。平面形は、ほぼ円形を呈し、遺存規模は、東西170cm、南北200cm、深さ最大38cmを測る。坑底は、かなり起伏に富み、中央には径100cm、深さ20cm程度の円形に落ち込みが認められる。壁は、坑底よりやや開き気味に立ち上がる。覆土は、上層の褐色土と一段落ち込んだ坑の黒褐色土の二層に分層されるが、両層とも多量のローム粒子、ロームブロックが混入している。遺構の形態、覆土の様子より本土坑は、植木の移植穴であろうと思われる。

遺物は、陶磁器片、瓦片が少量出土している。

(堀内 秀樹)

#### F10-6号土坑 (第146図)

調査区の南側 F10区に位置する平面形ほぼ円形を呈する土坑で、周囲の遺構 F10-2号ピット、6号ピット、5号土坑、8号土坑、G10-4号土坑と重複関係を有する。新旧は、F10-6号ピット、8号土坑より旧で、その他より新である。規模は、径140~150cm、深さは確認面より最大40cmを計測する。坑底は、凹凸が激しく、壁は、ほぼ直立する。土層は三層に分層されるが、何れも多量ローム粒子、ロームブロックが混入している。坑底、壁の形態、覆土の様子などより本土坑は、植木の移植穴であろうと推定される。

遺物は、陶磁器片、瓦片が少量検出されている。

(堀内 秀樹)

#### F10-5号土坑 (第146図)

調査区の南端 F10区に位置する平面形円形を呈すると思われる土坑であるが、南壁の一部は調査区域外になっている。周囲の F10-2号ピット、3号ピット、4号ピット、5号ピット、7号ピット、8号ピット、6号土坑、8号土坑、G10-5号土坑と重複関係を有し、新旧は、F10-2号ピットより新の他は、全てに旧である。遺存している規模は、東西220cm、南北190cm、深さは最大40cmを測る。坑底は、凹凸が激しく中央部はやや盛り上がりしており、壁は、それよりほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、ロームブロック、ローム粒子を多量に含む褐色土を呈す。坑底や壁の形態、覆土の様子などより、本遺構は植木の移植穴であると推定される。

遺物は、陶磁器片、瓦片が少量検出されている。

(堀内 秀樹)

#### G10-4号土坑 (第146図)

調査区の南側 F10区、G10区にまたがって位置し、周囲の F10-2号ピット、6号土坑、7号土坑、8号土坑、G10-5号土坑と重複関係にある。新旧は、F10-2号ピットより新である他は全てに旧である。平面形は、ほぼ円形を呈すると思われ、規模は、東西240cm、南北230cm、深さ最大50cmを測る。壁は、ほぼ直立し、坑底は、起伏が激しく、その中央には幅15~40cmの溝が直径約120cmで環状に巡っている。土層は、いずれもローム粒子、ロームブロックなどを多量に混入しているが、大まかに上層の暗褐色土と、下層の褐色土(ローム土)とに分層される。本遺構は坑底、壁の様子、覆土の堆積状態より、植木の移植穴であると思われる。

遺物は、陶磁器片十数点、瓦片数点が検出されている。

(堀内 秀樹)

## その他の遺構

これまで見てきた以外の小規模な遺構について、以下図版毎に概観して行く。

### 第118図

B 9-1号ピットは33×23cmの長方形を呈し深さ12cmである。B 9-2号ピットは20×16cmの長方形を呈し深さ10cmを測る。B 9-3号ピットは20×14cmの長方形を呈し深さ14cmである。B 9-4号ピットは直径20cmの円形を呈し深さ5cmである。B 9-5号ピットは一辺16cmの方形を呈し深さ13cmである。B 9-6号ピットは38×31cmの長方形を呈し深さ17cmを測る。鉛筆、煉瓦片を出土している。B 9-7号ピットは19×16cmの長方形を呈し深さ27cmである。B 9-8号ピットは30×26cmの長方形を呈し深さ26cmを測る。坑底南壁際に楕円形の小ピットが付属する。B 9-9号ピットは直径25cmの円形を呈し深さ10cmである。B 9-10号ピットは27×23cmの楕円形を呈し深さ23cmを測る。B 9-11号ピットは32×26cmの楕円形を呈し深さ10cmである。C 9-1号遺構は南北両端を攪乱によって破壊されており全形は不明である。現状では幅10cmの溝状で深さは4cmを測る。C 9-4号遺構は南北130cm、東西114cmの不整形で深さ14cmを測る。焼土を覆土としている。C 9-7号遺構はC 9-4号遺構に切られており規模・形状は不明である。深さは13cmを測り、焼土を覆土としている。C 9-5号遺構は30×24cmの不整形を呈し深さ4cmである。C 9-3号ピットは8×6cmの楕円形を呈し深さ24cmを測る。C 9-5号ピットは直径20cmの円形を呈し深さ12cmである。C 9-9号ピットは35×30cmの長方形を呈し深さ30cmを測る。瓦、陶磁器、貝類を出土している。C 9-10号ピットは49×39cmの長方形を呈し深さ40cmである。瓦片を出土している。D 9-7号土坑は旧図書館基礎と攪乱によって東・南側を破壊されており全形は不明である。深さは23cmを測る。

### 第122図

C 9-7号土坑はC 9-4号土坑に切られており全形は不明であるが、残存部分から考えて方形もしくは長方形の平面形を持っていたものと思われる。深さは13cmを測る。

### 第123図

B 9-6号土坑は攪乱とC 9-8号土坑によって切られており全形は不明であるが北西から南東にかけて長軸をもつ楕円形を呈していたと思われる。短軸で83cm、深さ17cmを測り、瓦と陶磁器を出土している。B 9-7号土坑はB 9-6号土坑とC 9-8号土坑によって切られている。残存部分から考えて直径80cm程の円形を呈していたと思われ、深さは20cmである。B 9-2号土坑は60×45cmの楕円形を呈し深さ11cmを測る。

### 第123・124図

B10-13号ピットはC10-3号土坑・5号土坑に切られB10-4号土坑を切っている。現状で30×26cmの長方形を呈し深さ28cmである。B10-12号ピットはC10-3号土坑に切られ、B10-4号土坑・14号ピットを切っている。35×30cmの長方形を呈し深さ30cmである。B 9-11

号土坑は B-5 号土坑に切られ C 9-12号土坑を切っており、全形は不明である。深さ18cm を測る。鉄製品、陶磁器、瓦等を出土している。B10-4 号土坑は B10-12号・13号ピットに切られ、B10-14号ピットを切っている。全形は不明で深さは24cm を測る。B10-14号ピットは B10-12号ピット・4 号土坑に切られるため全形は不明だが、残存部分から考えて一辺22cm 程の方形を呈すると思われる。深さは20cm である。

#### 第125図

B 9-3 号土坑は西側が発掘区外にかかるため全形は不明である。検出部分は南北66cm を測り、楕円形を呈すると思われる。深さは15cm である。B 9-12号土坑は攪乱によって大部分を削平されているため東側の壁以外は不明である。東壁の高さは11cm を測る。B 9-14号ピットは40×38cm のほぼ円形を呈し深さ25cm を測る。B 9-12号ピットは22×16cm の楕円形を呈し深さ13cm を測る。B 9-11号ピットは23×19cm の長方形を呈し深さ25cm を測る。C 9-6 号遺構は攪乱と B 9-5 号土坑に切られ全形は不明である。南北で76cm、深さ6 cm を測る。瓦片、陶器片を出土している。

#### 第126図

C10-1 号土坑は130×128cm の隅丸方形を呈し深さ11cm を測る。C10-10号ピットは C10-1 号土坑に切られ C10-1 号土坑・3号土坑を切っている。85×37cm 程の楕円形を呈していたと思われ、深さは30cm である。C10-6 号土坑は長方形を呈していたと思われるが大部分を旧図書館基礎によって切られており規模は不明である。深さは13cm を測る。陶磁器を出土している。

#### 第128図

E 8-2 号ピットは一辺5 cm の方形を呈し深さ10cm を測る。E 8-3 号ピットは10×5cm の楕円形を呈し深さ10cm である。E 8-4 号ピットは10×5 cm の楕円形を呈し深さ7 cm を測る。E 8-5 号ピットは一辺5 cm の方形を呈し深さ8 cm を測る。E 8-7 号ピットは20×10 cm の楕円形を呈し深さ7 cm を測る。E 8-8 号ピットは35×33cm の楕円形を呈し深さ34cm を測る。坑底は三段に深くなっている。E 8-9 号ピットは30×26cm の楕円形を呈し深さ29cm を測る。坑底は二段に深くなっている。E 8-10号ピットは直径18cm の円形を呈し深さ10cm を測る。E 8-12号ピットは19×15cm の長方形を呈し深さ33cm を測る。E 8-14号ピットは直径6 cm の円形を呈し深さ11cm を測る。E 8-15号ピットは直径5 cm の円形を呈し深さ11cm を測る。E 8-16号ピットは一辺8 cm の方形を呈し深さ8 cm である。E 8-17号ピットは一辺6 cm の方形を呈し深さ7 cm を測る。E 8-18号ピットは一辺6 cm の方形を呈し深さ9 cm である。E 8-19号ピットは一辺6 cm の方形を呈し深さ6 cm である。E 8-21号ピットは一辺6 cm の方形を呈し深さ8 cm を測る。E 8-23号ピットは一辺6 cm の方形を呈し深さ11cm を測る。E 8-24号ピットは17×16cm のほぼ円形を呈し深さ11cm を測る。E 8-25号ピットは直径13cm の円形を呈し深さ23cm である。E 8-26号ピットは22×20cm のほぼ円形を呈し深さ24cm

を測る。E 8-27号ピットは10×5 cmの楕円形を呈し深さ5 cmを測る。E 8-28号ピットは一辺12cmの菱形を呈し深さ6 cmである。以上はE 8-7号~10号・12号・24号~28号の10基を除き杭穴と思われる。

第129図

D 9-2号土坑は攪乱および旧図書館基礎によって切られ、D 9-3号土坑を切っている。全形は不明だが、南北の辺100cm、攪乱の底からの深さ20cmを測る長方形を呈する土坑と思われる。瓦片を出土している。D 9-2号ピットは65×50cmの長方形を呈する。攪乱によって上部を削平されており、攪乱の底からの深さは30cmを測る。瓦片を出土している。D 9-3号ピットはD 9-2号ピットによって切られており全形は不明だが、東西55cmの方形もしくは長方形を呈すると思われる。やはり攪乱によって上部を削平されており、攪乱の底からの深さは20cmを測る。瓦片を出土している。

第131図

C 8-3号土坑は攪乱によって西側を破壊されており全形は不明であるが、残存部から考えて楕円形を呈したものと思われ、深さ10cmを測る。C 8-2号土坑は62×40cmの楕円形を呈し深さ36cmを測る。D 8-10号ピットは40×35cmの楕円形を呈し深さ20cmを測る。D 8-5号土坑を切っている。陶磁器を出土している。D 8-3号土坑は74×72cmのほぼ円形を呈する。坑底は北側が深い二段になっており深さ26cmを測る。明治期の可能性もある。D 8-5号土坑を切っている。D 8-5号土坑は84×82cmのほぼ方形を呈し深さ30cmを測る。D 8-3号土坑・10号ピットに切られ、D 8-21号ピットを切っている。瓦、かわらけを出土している。D 8-21号ピットはD 8-5号土坑に切られるが、直径25cmほどの円形を呈すると思われ深さは20cmである。D 9-12号ピットはD 9-5号土坑に切られる。現状で南北52cmを測り本来は楕円形を呈していたと思われる。深さは16cmである。

第132図

C 8-23号ピットは直径7 cmの円形を呈し深さ10cmを測る。杭穴と思われる。C 8-24号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ20cmを測る。坑底は北側が深い二段になり、重複した2基の杭穴の可能性もある。

D 8-1号ピットは一辺6 cmの方形を呈し深さ8 cmである。D 8-2号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ26cmを測る。D 8-3号ピットは10×8 cmの楕円形を呈し深さ15cmを測る。D 8-4号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ22cmを測る。D 8-5号ピットは直径7 cmの円形を呈し深さ12cmを測る。D 8-6号ピットは一辺5 cmの方形を呈し深さ7 cmを測る。D 8-7号ピットは12×10cmの長方形を呈し深さ18cmを測る。D 8-8号ピットは直径6 cmの円形を呈し深さ5 cmである。D 8-9号ピットは一辺6 cmの方形を呈し深さ13cmを測る。D 8-11号ピットは直径7 cmの円形を呈し深さ12cmを測る。以上D 8-1号~9号・11号の10基は丸杭・角杭の杭穴と思われる。D 8-12号ピットは18×16cmの長方形を呈し深さ8 cmであ

る。D 8—13号ピットは20×14cmの長方形を呈し深さ17cmである。D 8—14号ピットは19×16cmの長方形を呈し深さ20cmを測る。D 8—15号ピットは直径9cmの円形を呈し深さ16cmを測る。D 8—16号ピットは14×12cmの長方形を呈し深さ5cmである。D 8—17号ピットは直径7cmの円形を呈し深さ6cmを測る。D 8—18号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ6cmを測る。D 8—19号ピットは直径6cmの円形を呈し深さ6cmである。D 8—20号ピットは直径6cmの円形を呈し深さ4cmを測る。以上のうちD 8—15号・17号～20号の5基は杭穴であろう。D 8—22号ピットは24×17cmの長方形を呈し深さ7cmを測る。坑底北側に2基の小ピットを確認している。D 8—23号ピットはE 8—5号土坑に切られる東西40cmを測るピットである。深さは49cmを測る。

D 9—6号ピットは一辺18cmの方形を呈し深さ10cmを測る。D 9—7号ピットは直径10cmの円形を呈し深さ25cmである。D 9—8号ピットは50×26cmの長方形を呈し深さ19cmを測る。坑底南西壁際に小ピットを確認している。D 9—9号ピットは直径21cmの円形を呈し深さ6cmである。D 9—10号ピットは直径8cmの円形を呈し深さ20cmを測る。D 9—11号ピットは直径8cmの円形を呈し深さ8cmを測る。D 9—13号ピットは24×13cmの楕円形を呈すると思われる深さ7cmである。

#### 第133図

D 9—5号ピットは33×21cmの長方形を呈し深さ41cmを測る。南東側の坑底が長方形に一段深くなっている。

#### 第135図

B10—1号ピットは直径30cmの円形を呈し深さ35cmを測る。B10—4号ピットを切る。B10—2号ピットは30×22cmの長方形を呈し深さ8cmを測る。B10—3号ピットは直径20cmの円形を呈し深さ20cmを測る。B10—4号ピットは36×32cmの長方形を呈し深さ43cmを測る。B10—1号ピットに切られる。B10—5号ピットは一辺20cmの方形を呈し深さ12cmを測る。坑底中央に深さ24cmの小ピットをもつ。B10—6号ピットは一辺20cmの方形を呈し深さ6cmである。坑底中央に深さ3cmの円形の落ち込みを持つ。B10—7号ピットは攪乱とB10—6号ピットに切られる。短軸16cm深さ10cmを測る。B10—8号ピットは50×20cmの楕円形を呈し深さ15cmを測る。坑底は二段で中央が深い。B10—9号ピットは一辺45cmの方形を呈し深さ50cmを測り、礎石を持つ。瓦片を多数検出している。B11—1号ピットは坑底で30×20cmを測る楕円形を呈し深さ38cmである。B11—2号ピットを切っている。B11—2号ピットは30×25cmの楕円形を呈し深さ30cmを測る。B11—3号ピットは28×18cmの楕円形を呈すると思われる、深さは15cmである。B11—1号・2号ピットに切られている。B11—4号ピットは直径13cmの円形を呈し深さ26cmを測る。坑底は逆三角錘状になっている。B11—5号ピットはD11—1号溝に切られB11—7号ピットを切る。短軸30cm深さ19cmを測り、恐らく楕円形を呈していたであろう。B11—6号ピットはB11—7号ピットを切っている。一辺20cmの方形を呈し深さ23cmである。

B11-7号ピットはD11-1号溝に大部分を壊され規模・平面形は不明である。深さは38cmを測る。B11-8号ピットはD11-1号溝・B11-7号ピットに上部を削平されている。50×25cmの長方形を呈しD11-1号溝坑底からの深さ54cmである。

第136図

C10-1号ピットは直径27cmの円形を呈し深さ10cmを測る。C10-2 a号ピットは旧図書館基礎に切られC10-2 b号ピットを切っている。全形は不明だが、残存部分から考えて方形もしくは長方形を呈したと思われる。深さは27cmである。C10-2 b号ピットは旧図書館基礎とC10-2 a号ピットに切られる。32×30cmの楕円形を呈し深さ36cmである。C10-3号ピットは直径19cmの円形を呈し深さ8cmである。C10-4号ピットは67×54cm、不整形を呈し深さ24cmである。C11-1号遺構は86×30cmの不整形を呈し深さ4cmを測る。D11-1号溝を切る。

第137図

D10-6号遺構は41×41cmの方形を呈し深さ42cmを測る。坑底からやや浮いて30×25cm厚さ10cmの礎石を検出した。D10-10号ピットは45×37cmの長方形を呈し深さ36cmを測る。坑底にはほぼ密着した状態で28×22cm厚さ12cmの礎石を検出している。D10-1号遺構は54×34cmの長方形を呈し深さ44cmを測る。坑底よりやや浮いた状態で30×22cm厚さ11cmの礎石を検出した。E10-7号ピットは44×32cmの長方形を呈し深さ36cmを測る。坑底に密着して28×18cm厚さ10cmの礎石を検出した。

以上4基のピットは何れも礎石を持ち、E10-7号ピット、D10-1号遺構、D10-6号遺構を結ぶ線がほぼ直線となり、これとD10-10号ピット、D10-6号遺構を結ぶ線は直交する。それぞれの規模や深さもほぼ共通しており、また各礎石の上面の標高は22.400m前後にあって等しいことなどから組み合う可能性が高い。ただしそれぞれのもつ主軸とそれぞれを結ぶ方向は現在の建物の方向とほぼ一致しており、今回の調査では攪乱として扱ったものと時期的に近いものと思われる。

第138図

D10-4号遺構は68×22cmの楕円形を呈し深さ24cmを測る。D10-2号土坑を切る。D10-13号ピットは旧図書館基礎によって大半を破壊され全形は不明であるが、残存部分からみて円形もしくは楕円形の平面形を呈したと思われる。深さは8cmを測る。D10-2号遺構は67×42cmの長方形を呈し深さ34cmを測る。坑底は北側壁際で円形にやや深くなっておりこの部分で34cmを測る。

第139図

C10-5号ピットは旧図書館基礎によって南半を破壊されているが、短径25cmほどの楕円形を呈すると思われる、深さは7cmを測る。C11-1号ピットは37×33cmのほぼ円形を呈し深さ8cmを測る。D10-1号ピットは北側を旧図書館基礎に破壊されているが、恐らくは直径28cm前後の円形を呈すると思われる、深さは10cmを測る。D10-2号ピットは24×15cmの長方形を呈し深さ

15cmを測る。D10-3号ピットは直径14cmの円形を呈し深さ5cmである。D10-4号ピットは41×35cmの長方形を呈し深さ53cmを測る。D10-5号ピットは直径11cmの円形を呈し深さ8cmを測る。D10-6号ピットは17×14cmの楕円形を呈し深さ16cmである。D10-7号ピットは29×25cmの方形を呈し深さ17cmを測る。北西壁際に小ピットがある。D10-8号ピットは直径22cm程の円形と思われ深さ7cmである。D10-9号ピットは直径26cm前後の円形と思われ、深さ18cmを測る。D10-11号ピットは不整形で規模は明らかでない。深さは4cmである。以上3基は何れも旧図書館基礎の一部を破壊されている。D10-12号ピットは46×36cmの台形を呈し深さ46cmでである。北側壁際の坑底が一段深くっており、この部分で柱痕を確認している(土層図3層)。D10-3号遺構は42×20cmの長方形を呈し深さ26cmを測る。南側壁際の坑底が一段低くなっている。D11-1号ピットは直径20cmの円形を呈し深さ5cmである。D11-2号ピットは35×30cmの楕円形を呈し深さ13cmを測る。坑底西側がやや高くテラス状になっている。D11-3号ピットは24×14cm長方形を呈し深さ36cmを測る。E10-1号ピットは25×23cmの楕円形を呈し深さ13cmである。E11-1号ピットは28×12cmの楕円形を呈し深さ10cmを測る。E11-2号ピットは16×14cmの楕円形を呈し深さ25cmを測る。

#### 第140図

E10-6号ピットは一辺32cm前後の方形を呈すると思われ、深さ53cmを測る。E10-3号ピットはE10-4号土坑に切られる。短辺34cmの長方形を呈し深さ35cmである。E10-8号ピットはE10-4号土坑・3号ピットにきられ全形は不明である。恐らく円形を呈すると思われ深さは24cmを測る。E10-4号ピットは42×35cmの楕円形を呈し深さ10cmである。E10-2号遺構は北側を旧図書館基礎に切られ、E10-6c号土坑を切っている。長方形を呈すると思われ、短径76cm深さ38cmを測る。E10-6a号土坑は円形を呈すると思われ深さは20cmである。E10-6b号土坑は円形を呈すると思われ深さは20cmである。E10-6c号土坑は240×220cmの円形を呈し深さ33cmである。以上3基は何れも6c号土坑中央の旧図書館基礎の一部を破壊されている。

#### 第141図

F10-2号遺構はE10-3a号土坑に切られている。深さは44cmで、東壁がオーバーハングする。

#### 第142図

F10-1号遺構は旧図書館基礎その他によって切られており全形は不明であるが、部分的に遺存した壁の状態からみて不整形円形もしくは半円形を呈するものと思われる。壁はグラグラと立ち上がり、底面も凹凸が激しい。深さは最深部で35cmを測る。F11-1号土坑北側は他の遺構によって破壊され、南側は調査範囲外にかかるため全形は不明である。深さ50cmを測る。

#### 第145図

G10-1号土坑は旧図書館基礎によって北側を破壊されており、全形は不明である。残存部分からはほぼ円形を呈するものと思われ、直径は4m以上であろう。深さ30cmを測る。G10-2号土坑、



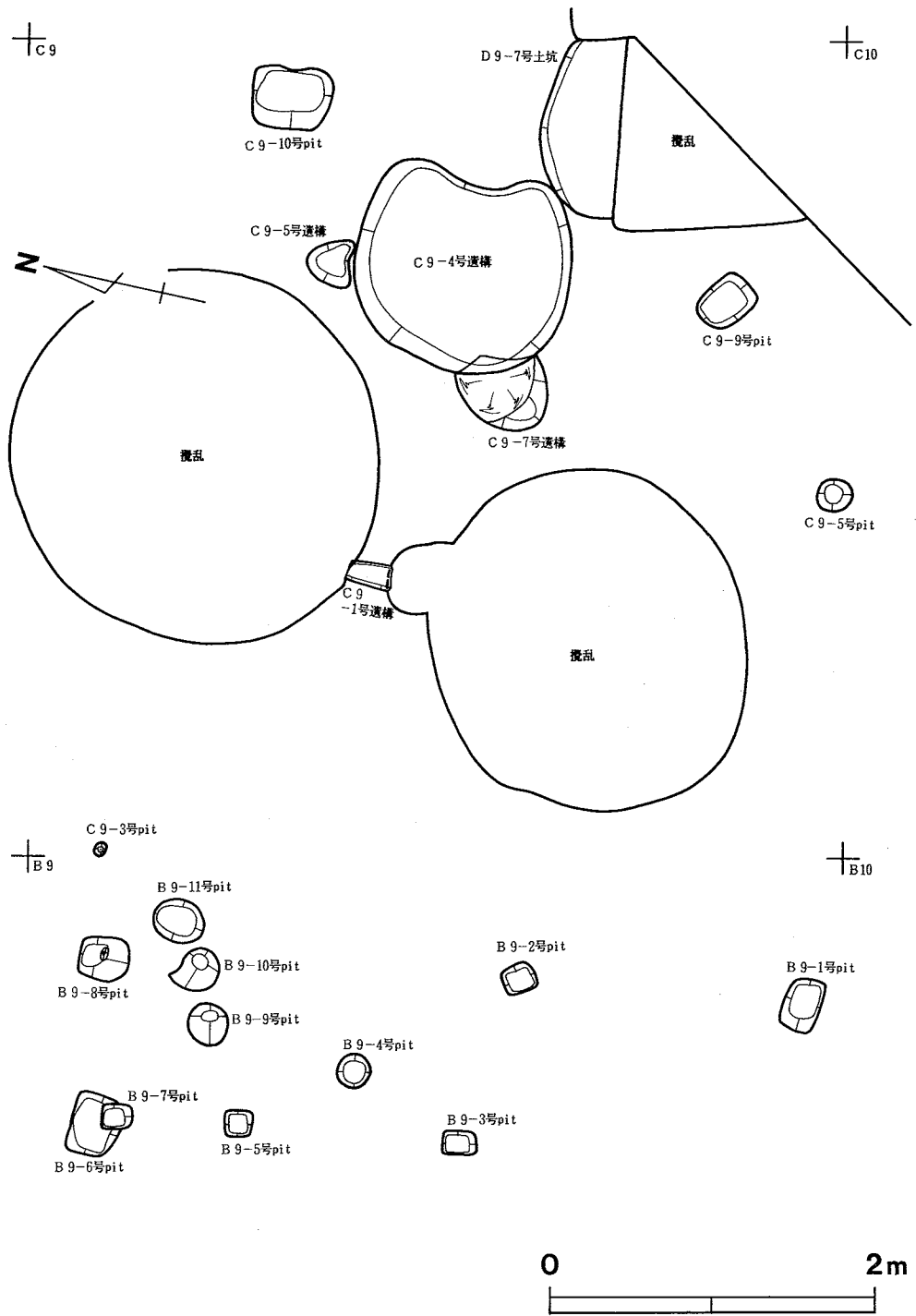
F10-3号土坑を切っている。G10-2号土坑は旧図書館基礎に切られ東側は調査区域外に掛かる。直径2m以上の円形を呈すると思われる。坑底は二段に落ち込んでおり、中央付近で深さ30cmを測る。F10-4号土坑は旧図書館基礎とF10-3号土坑に切られている。恐らく円形を呈すると思われる、深さは20cmである。F10-1号ピットは直径40cmの円形を呈し深さ50cmを測る。

第146図

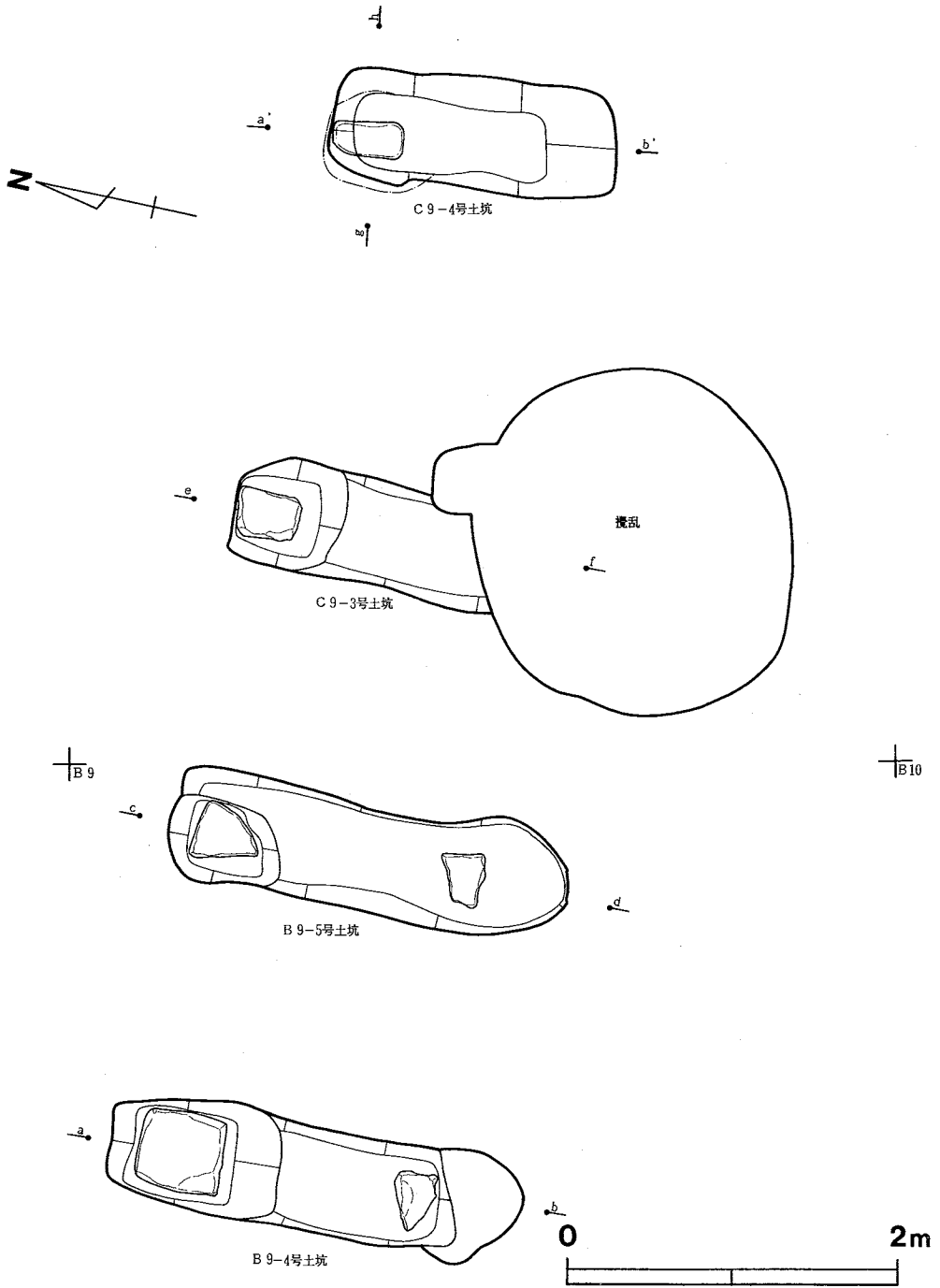
F10-3号ピットは直径12cmの円形を呈し深さ38cmである。F10-4号ピットは直径11cmの円形を呈し深さ22cmである。F10-6号ピットは直径13cmの円形を呈し深さ38cmである。F10-7号ピットは直径cmの円形を呈し深さ37cmを測る。F11-5号ピットは直径11cmの円形を呈し深さ49cmである。F11-8号ピットは直径14cmの円形を呈し深さ70cmである。以上の6基はほぼ1m四方の正方形に並ぶため組み合うものと思われるが、その場合軸が現在の建物に平行するので幕末以降のものである可能性が高い。F10-2号ピットはF10-6号土坑に切られており、全形は不明である。現存する部分から方形もしくは長方形を呈していたと思われ、深さは20cmである。F10-8号土坑はF10-5号・6号土坑、F10-2号ピット、G10-4号土坑を切っている。70×31cmの長方形を呈し深さ30cmを測る。F10-7号土坑は85×53cmの不整形を呈し深さ25cmを測る。G10-4号土坑を切っている。G10-5号土坑はG10-4号土坑に切られている。形状は不整形で深さ15cmを測る。

第147図

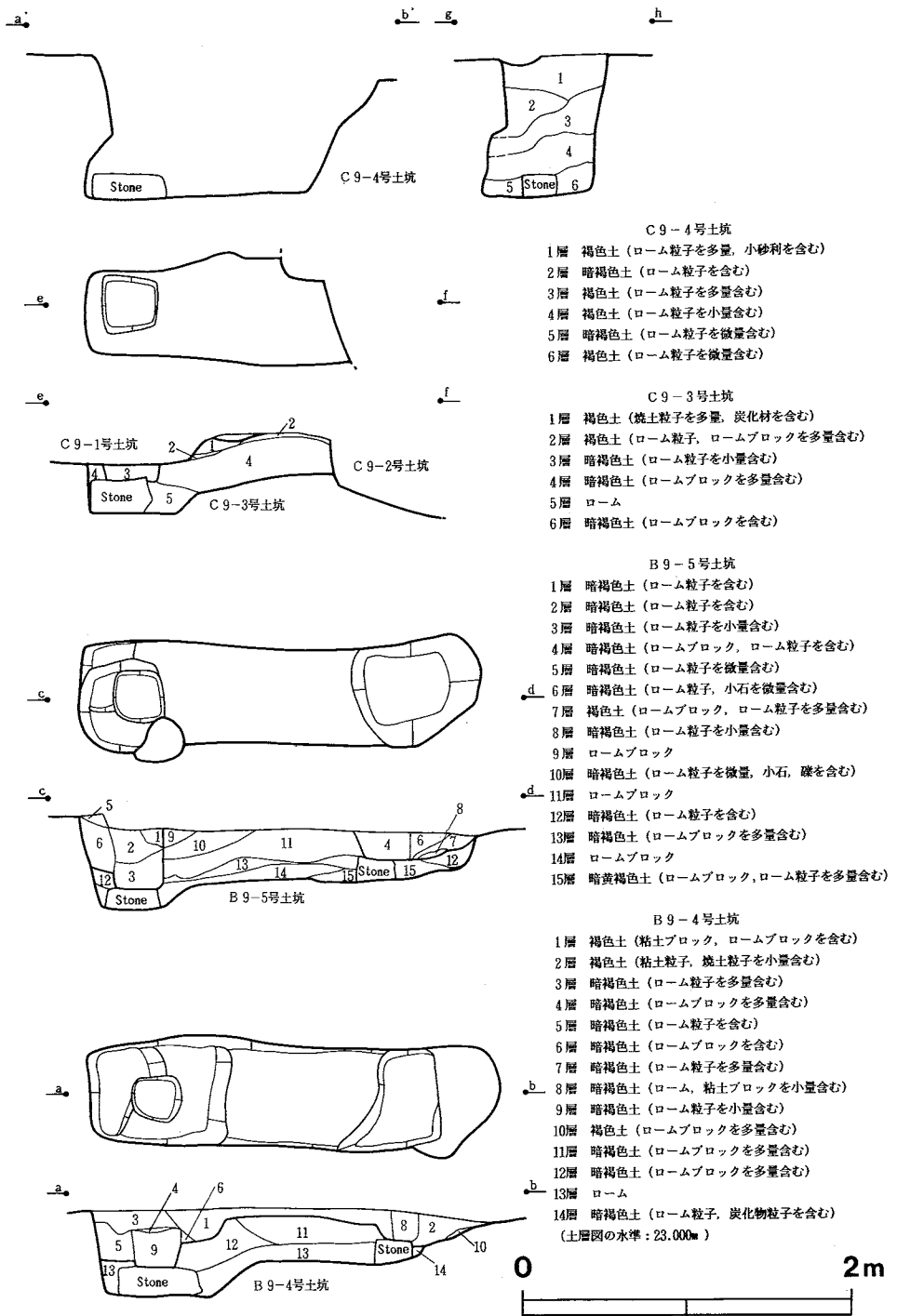
H10-1号土坑は北側が調査区域外にかかり全形は不明であるが、恐らく直径2m50cm前後の円形を呈すると思われ、深さは49cmを測る。G10-3号土坑・H10-2号土坑を切っている。G10-3号土坑は直径2m前後の不整形を呈するかと思われる。深さ20cmを測る。H10-2号土坑は大半が調査区域外にあるため規模・形状ともに不明である。確認された範囲で深さ30cmを測る。  
(菅谷 通保)



第118図 B~H=9~11区の遺構(1)

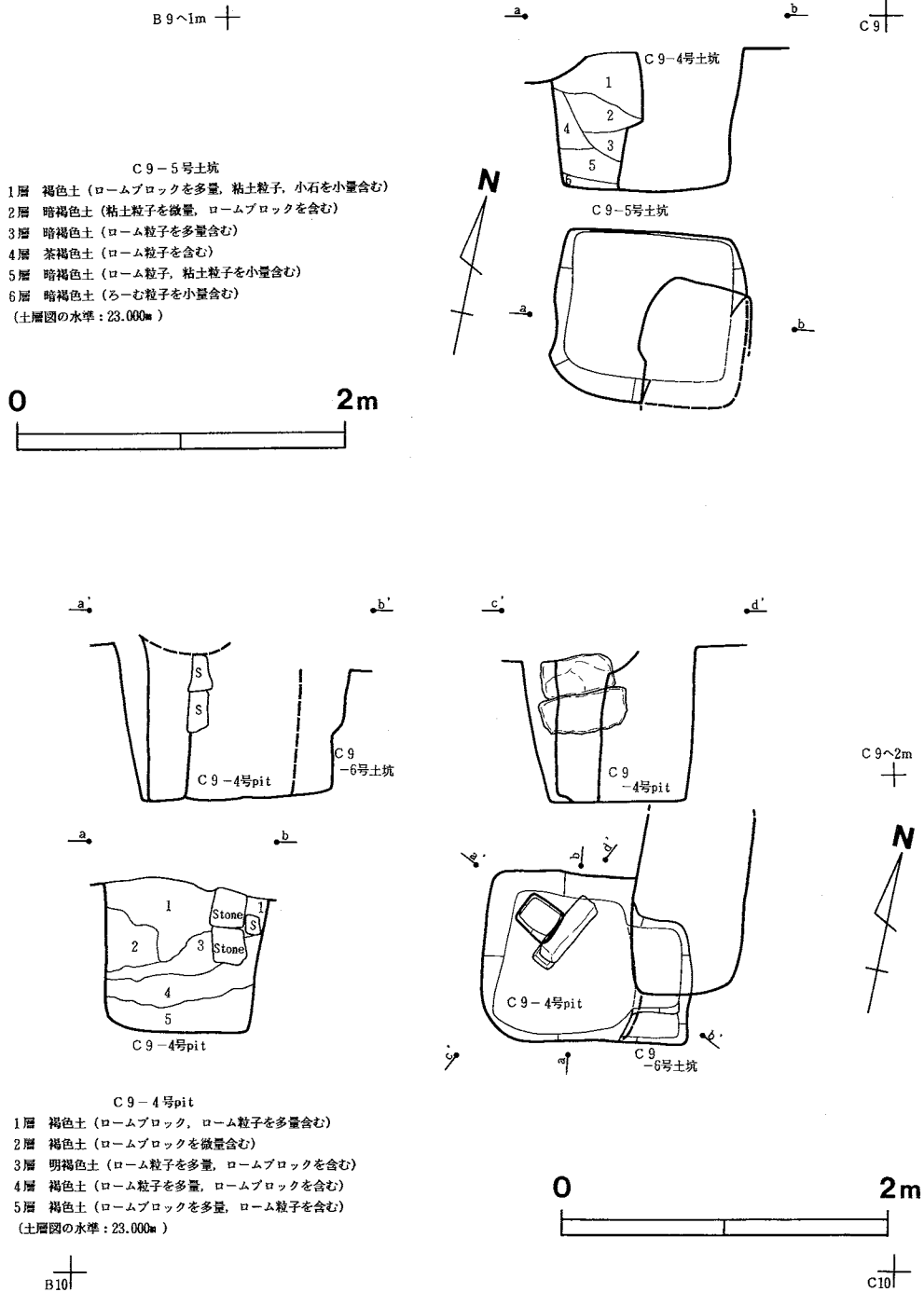


第119図 B~H=9~11区の遺構(2)

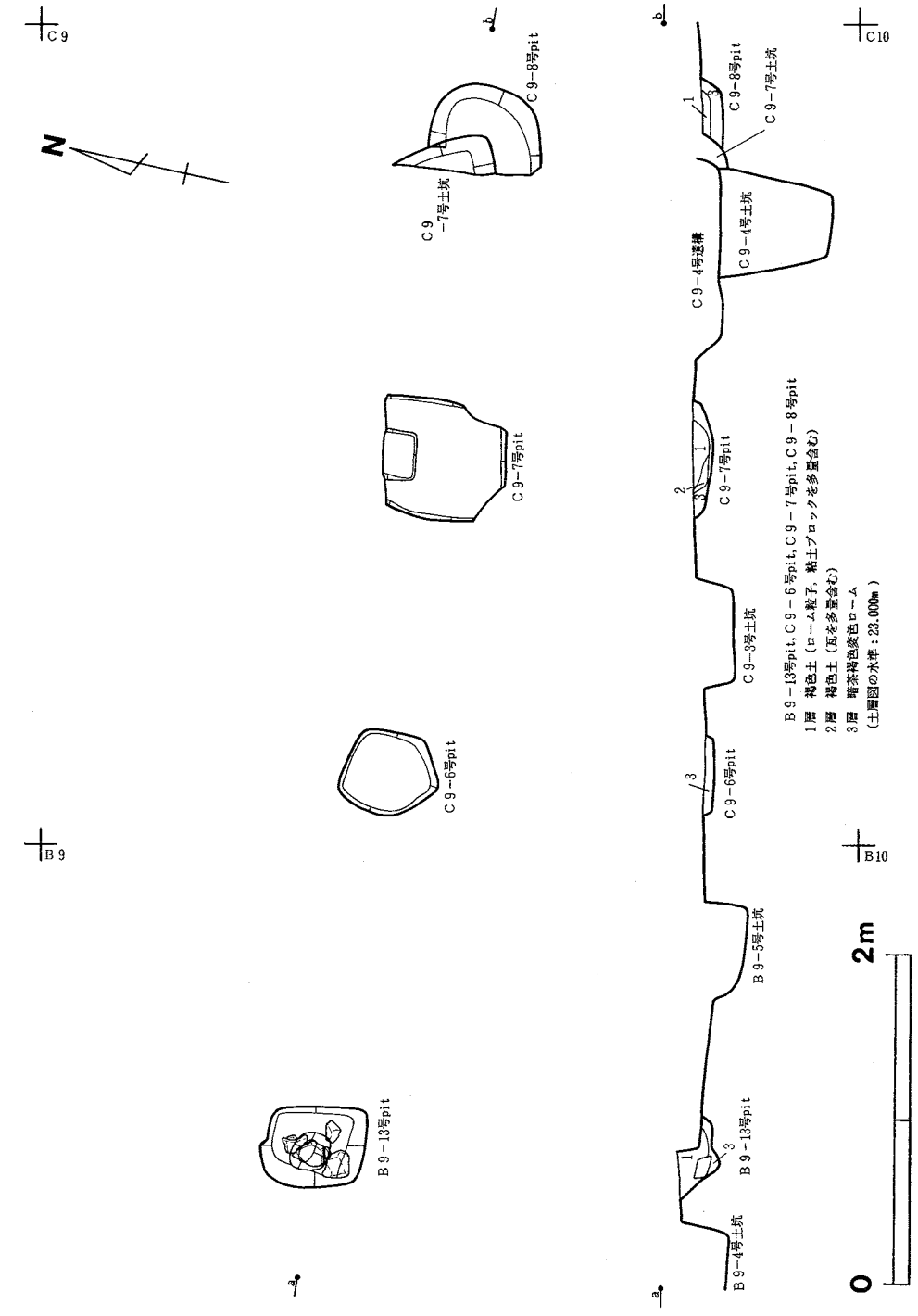


第120図 B~H=9~11区の遺構(3)

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

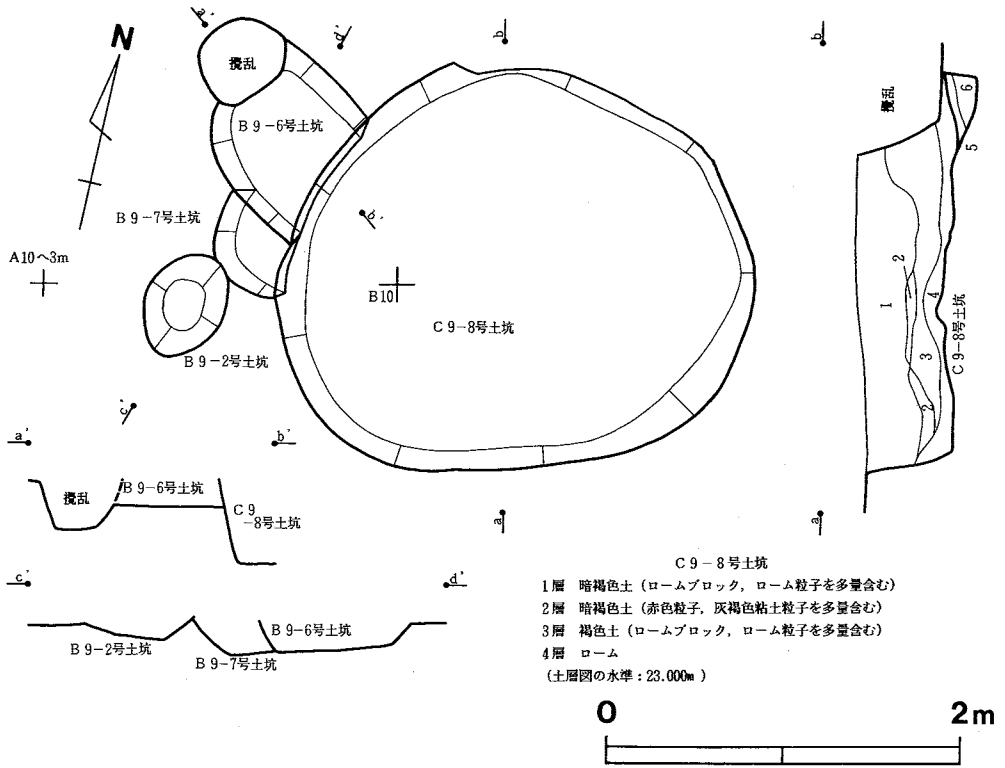


第121図 B~H=9~11区の遺構(4)



第122図 B~H=9~11区の遺構(5)

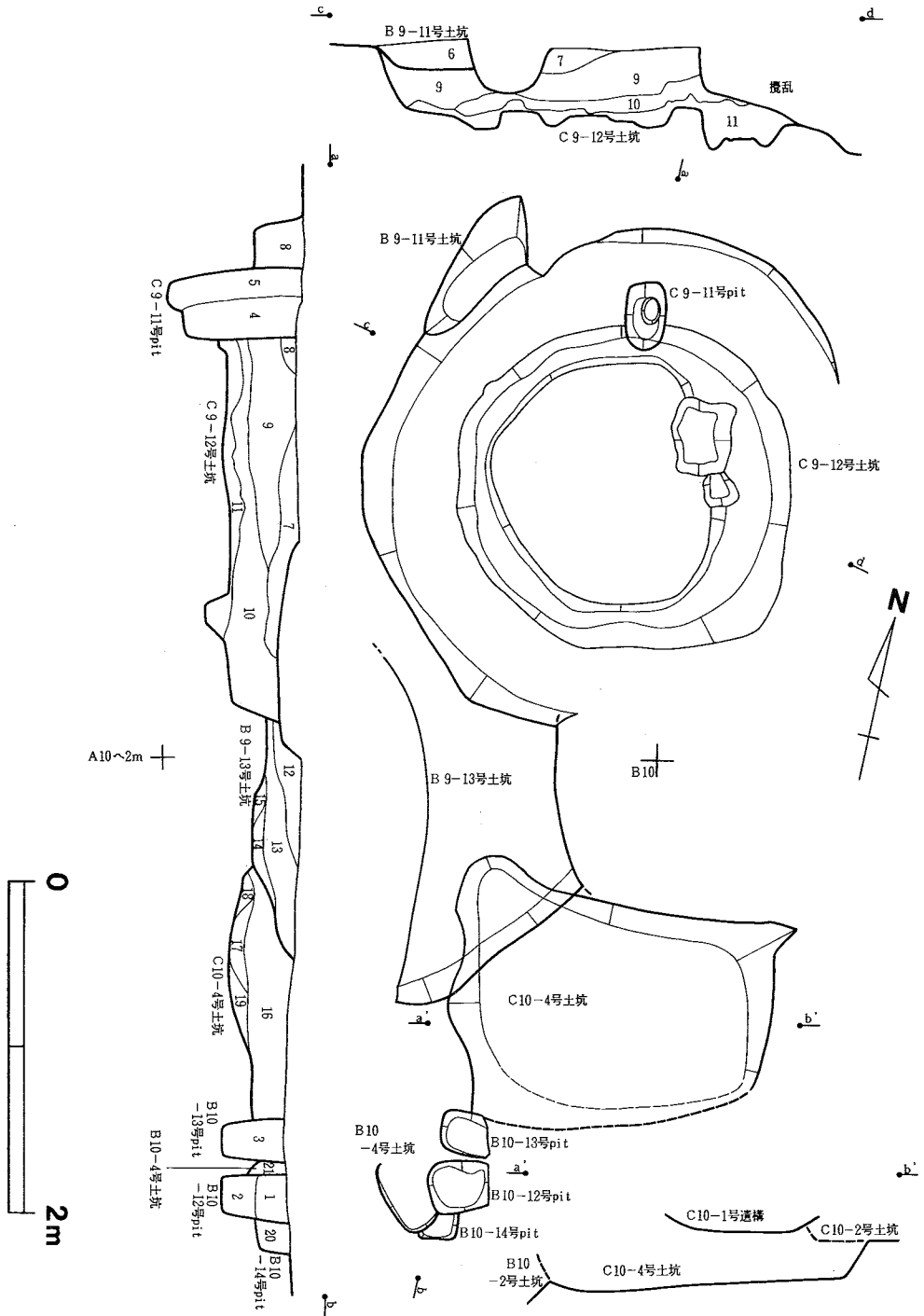
報告篇第三章 江戸時代の調査 I



- B10-12号pit**
- 1層 茶褐色土 (ローム粒子, 円礫, 炭化物粒子を多量含む)
  - 2層 ロームブロック, ローム粒子
- B10-13号pit**
- 3層 暗灰褐色土 (ロームブロック, 円礫, 灰褐色山砂様粘土を多量含む)
- C9-11号pit**
- 4層 褐色土 (円礫, 炭化物粒子, ローム粒子を少量含む)
  - 5層 暗灰褐色土 (円礫, 炭化物粒子, 木片を含む)
- B9-11号土坑**
- 6層 褐色土 (ローム粒子を多量, 小円礫を少量含む)
- C9-12号土坑**
- 7層 ローム
  - 8層 褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを多量含む)
  - 9層 暗褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを多量含む)
  - 10層 暗褐色土 (ローム粒子を多量, ロームブロックを少量, 小円礫を微量含む)
  - 11層 ロームブロック (ローム粒子を含む)

- C9-8号土坑**
- 1層 暗褐色土 (ロームブロック, ローム粒子を多量含む)
  - 2層 暗褐色土 (赤色粒子, 灰褐色粘土粒子を多量含む)
  - 3層 褐色土 (ロームブロック, ローム粒子を多量含む)
  - 4層 ローム
- (土層図の水準: 23.000m)
- B9-13号土坑**
- 12層 暗褐色土 (ローム粒子, 炭化物粒子を含む)
  - 13層 褐色土 (ローム粒子を多量, 赤色粒子, 炭化物粒子を微量含む)
  - 14層 暗褐色土 (ローム粒子を少量含む)
  - 15層 ロームブロック (ローム粒子を含む)
- C10-4号土坑**
- 16層 暗茶褐色土 (ロームブロック, ローム粒子, 赤色粒子, 炭化物粒子, 小円礫を少量含む)
  - 17層 黒褐色土 (ローム粒子を多量含む)
  - 18層 ローム粒子
  - 19層 暗褐色土 (ローム粒子, 赤色粒子, 小礫を少量含む)
- B10-14号pit**
- 20層 灰褐色土 (灰褐色粘土を多量含む)
- B10-4号土坑**
- 21層 暗褐色土 (円礫を多量, ロームブロック, 粘土を少量含む)
- (土層図の水準: 23.000m)

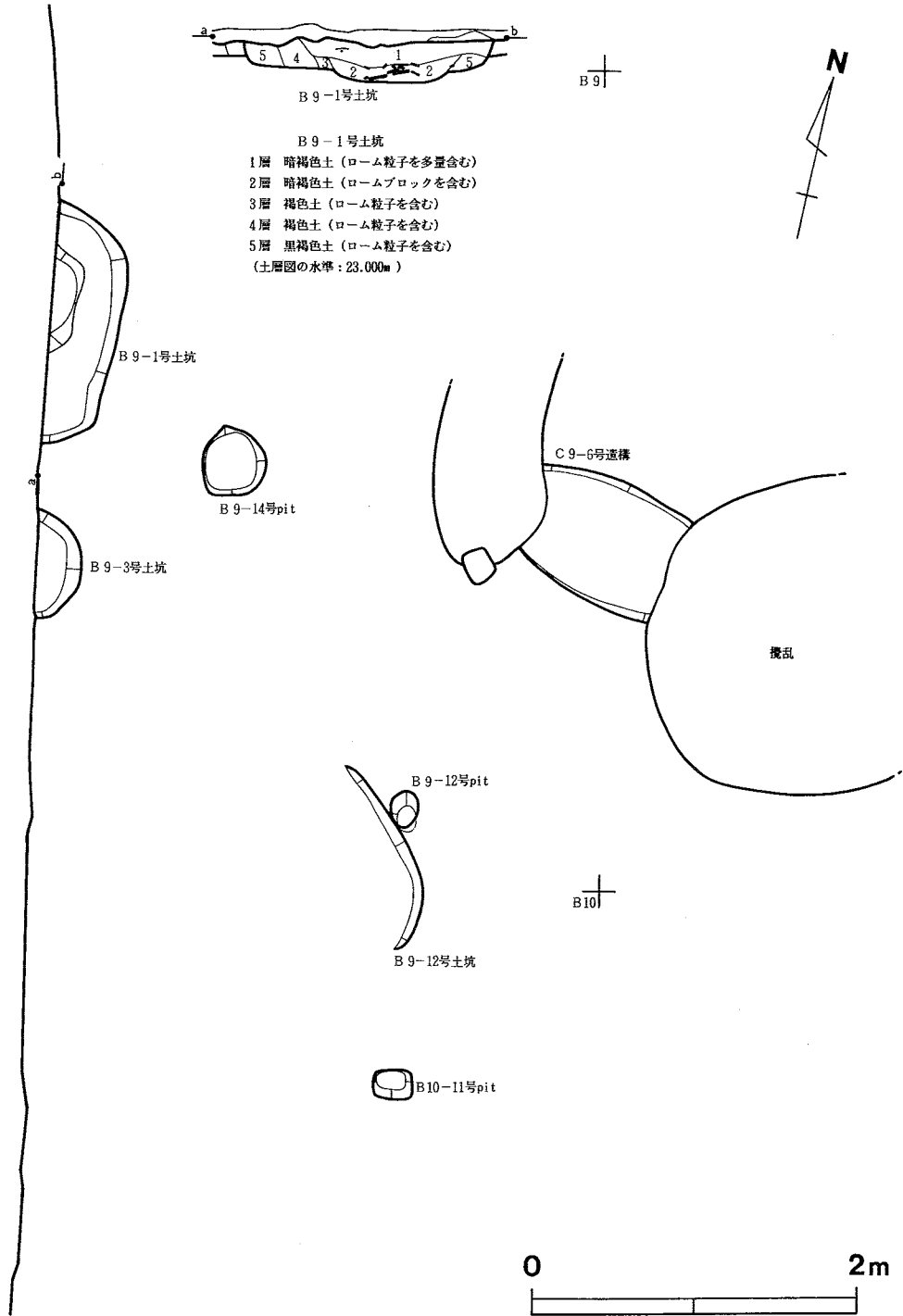
第123図 B~H=9~11区の遺構(6)



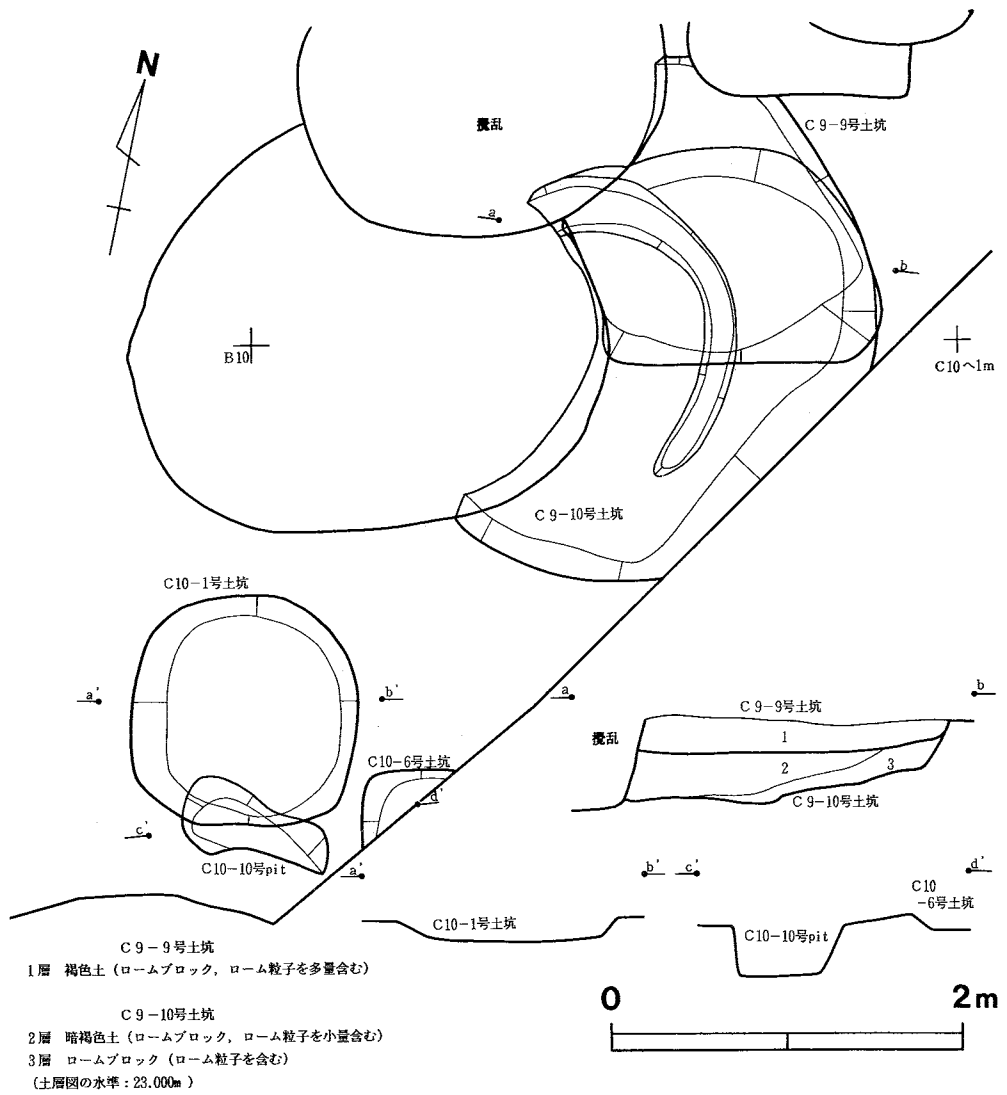
第124図 B~H=9~11区の遺構(7)



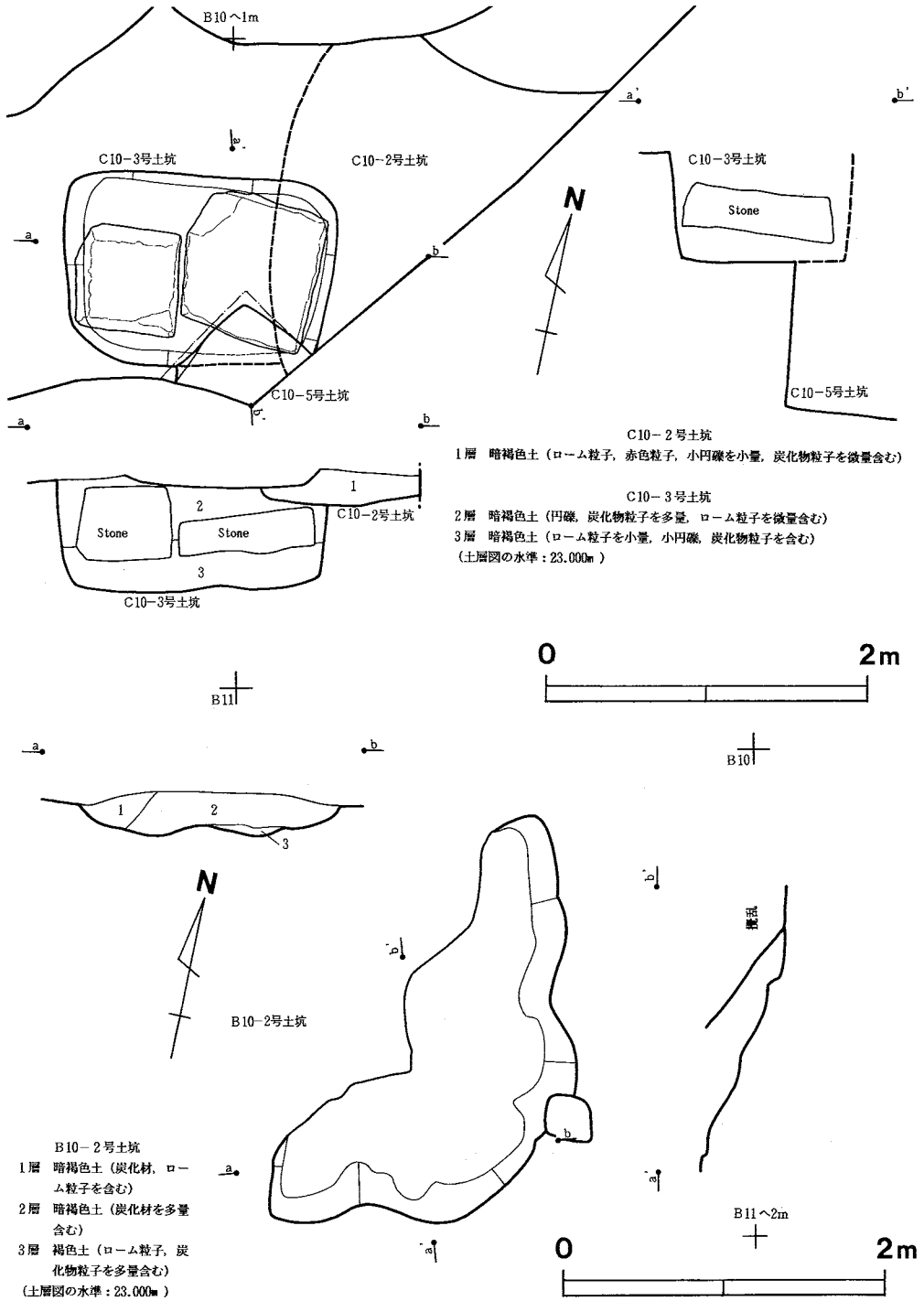
報告篇第三章 江戸時代の調査 I



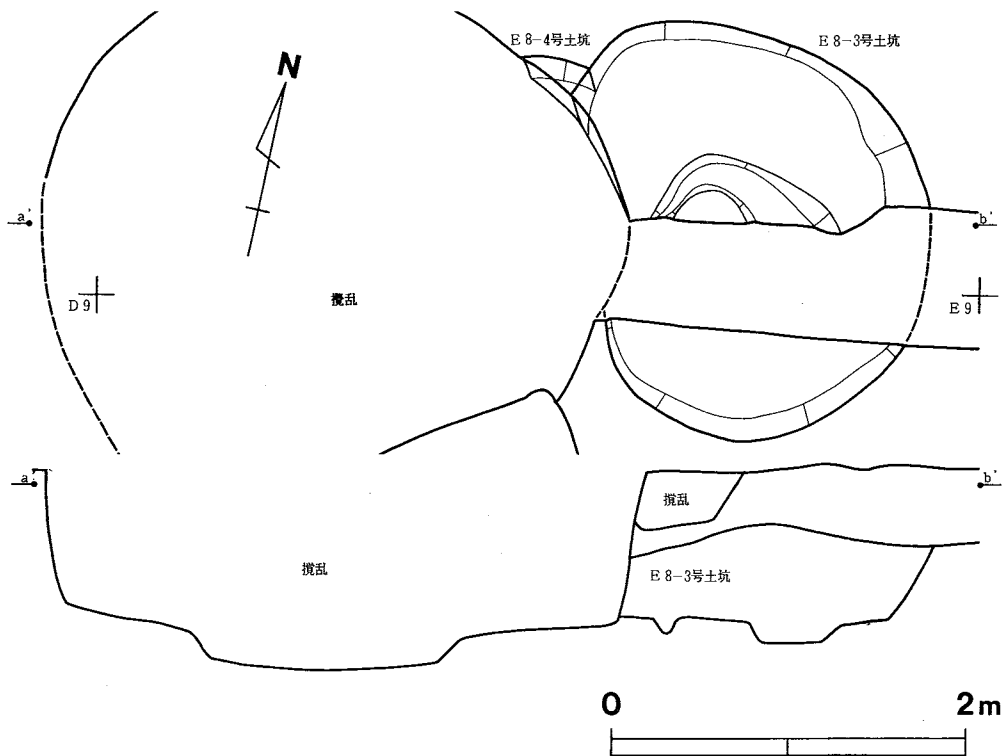
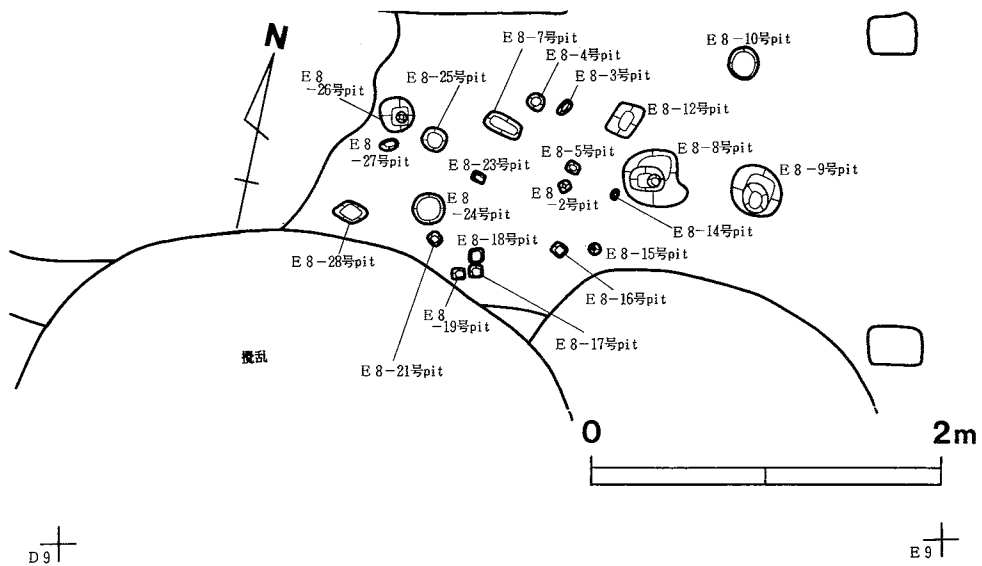
第125図 B～H=9～11区の遺構(8)



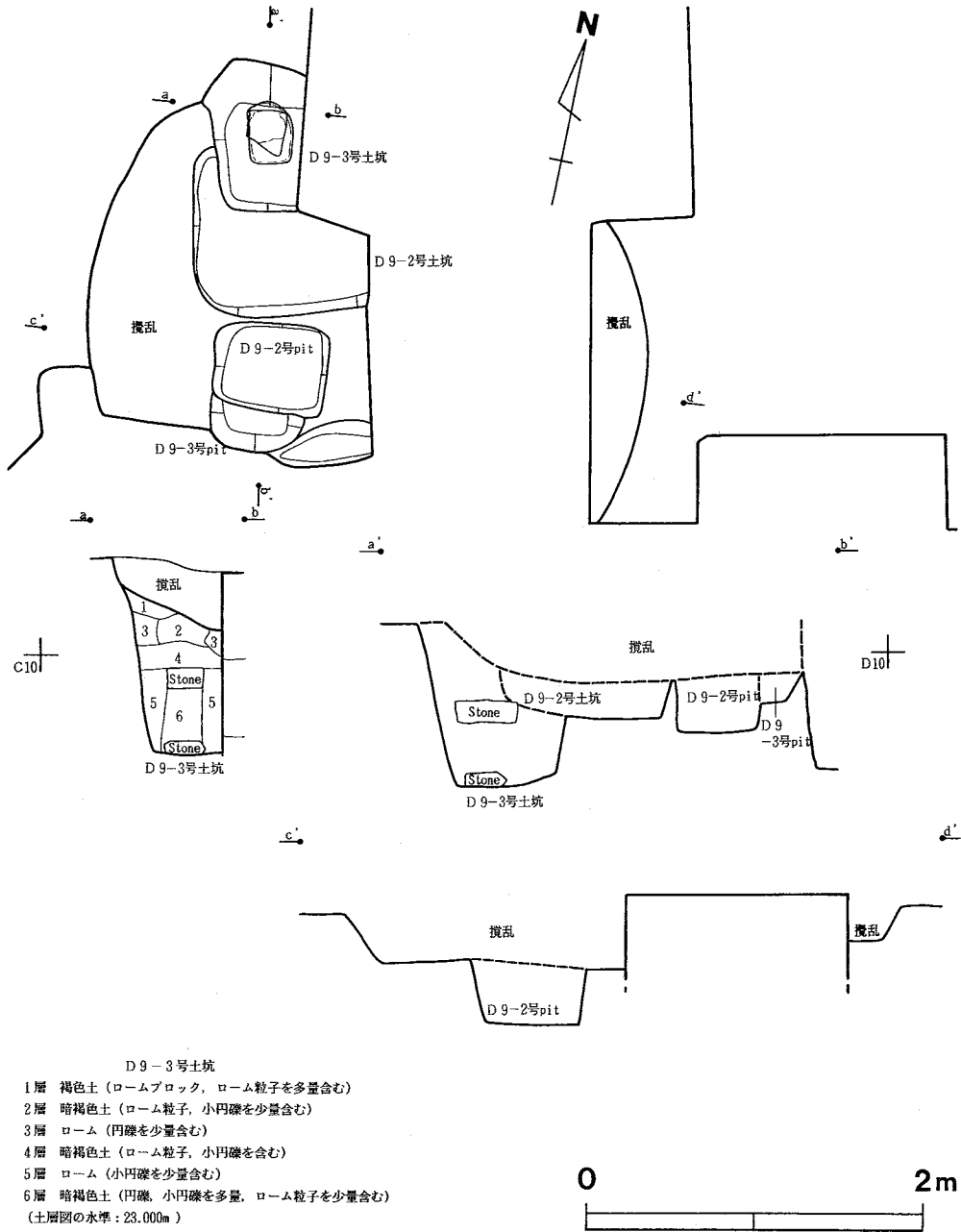
第126図 B~H=9~11区の遺構(9)



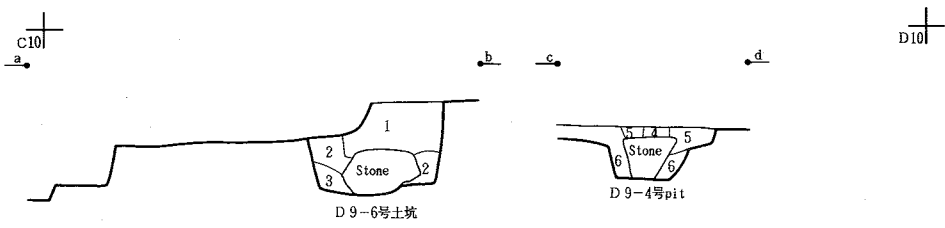
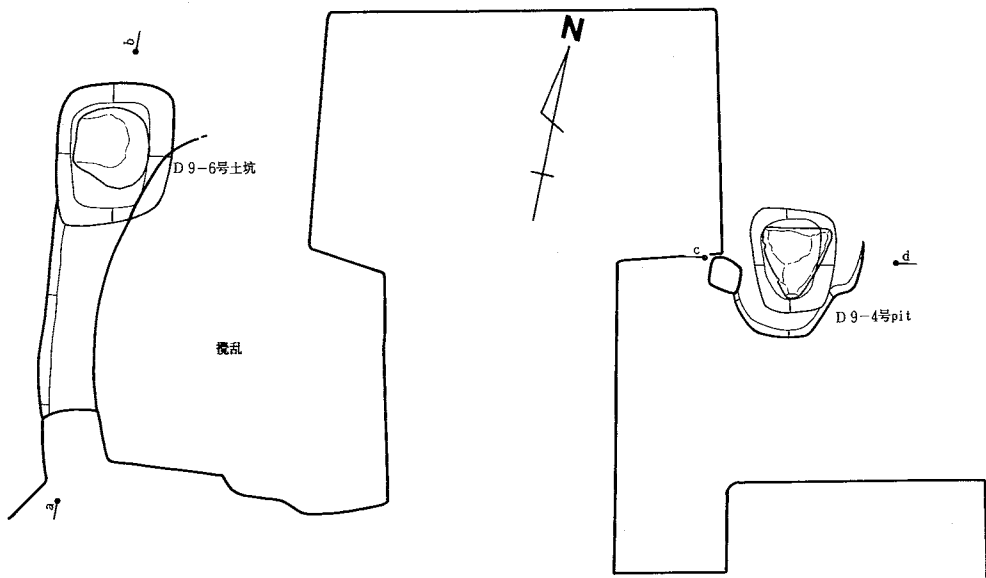
第127図 B~H=9~11区の遺構(10)



第128図 B~H=9~11区の遺構(11)

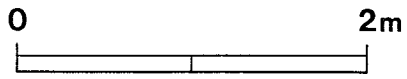


第129図 B~H=9~11区の遺構(12)

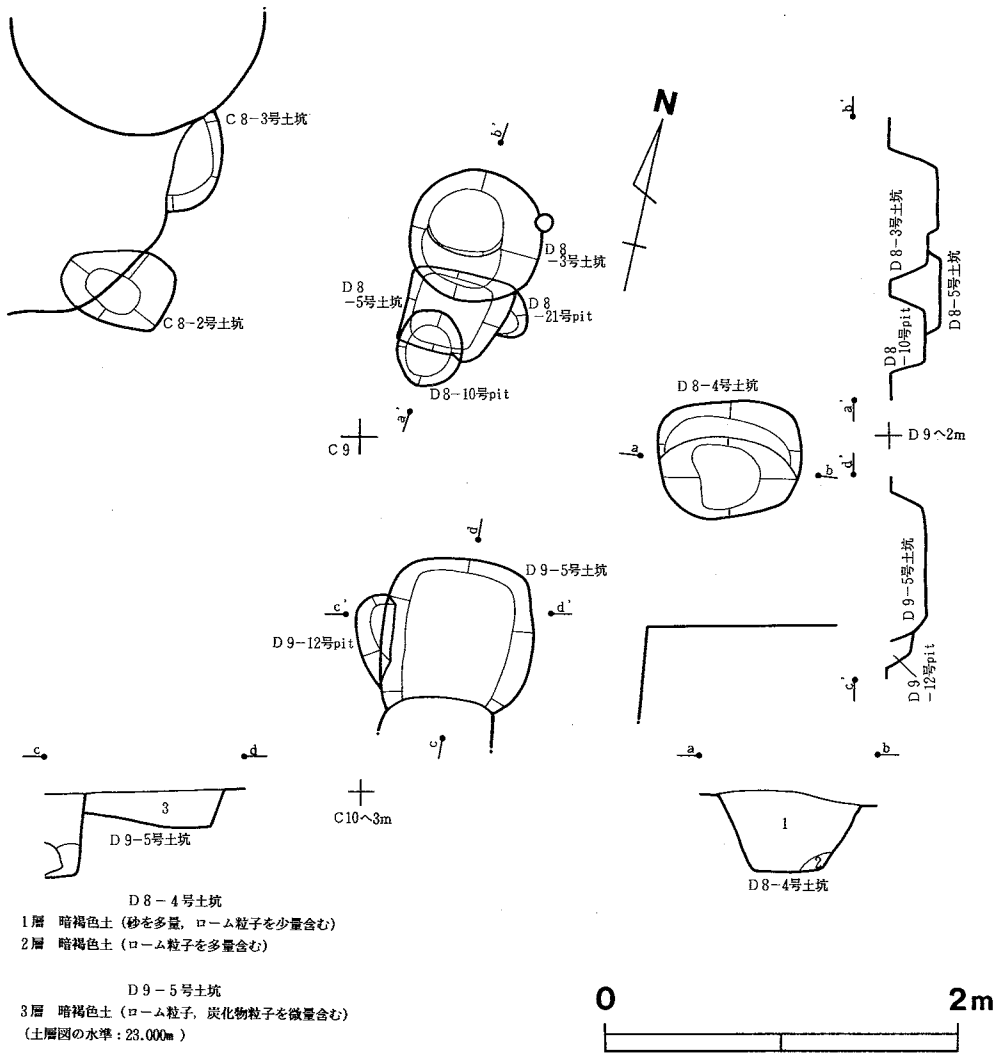


- D9-6号土坑**
- 1層 暗灰褐色土（瓦を多量、小礫、木片を少量含む〔柱痕〕）
  - 2層 ローム
  - 3層 ロームブロック（ローム粒子を含む）

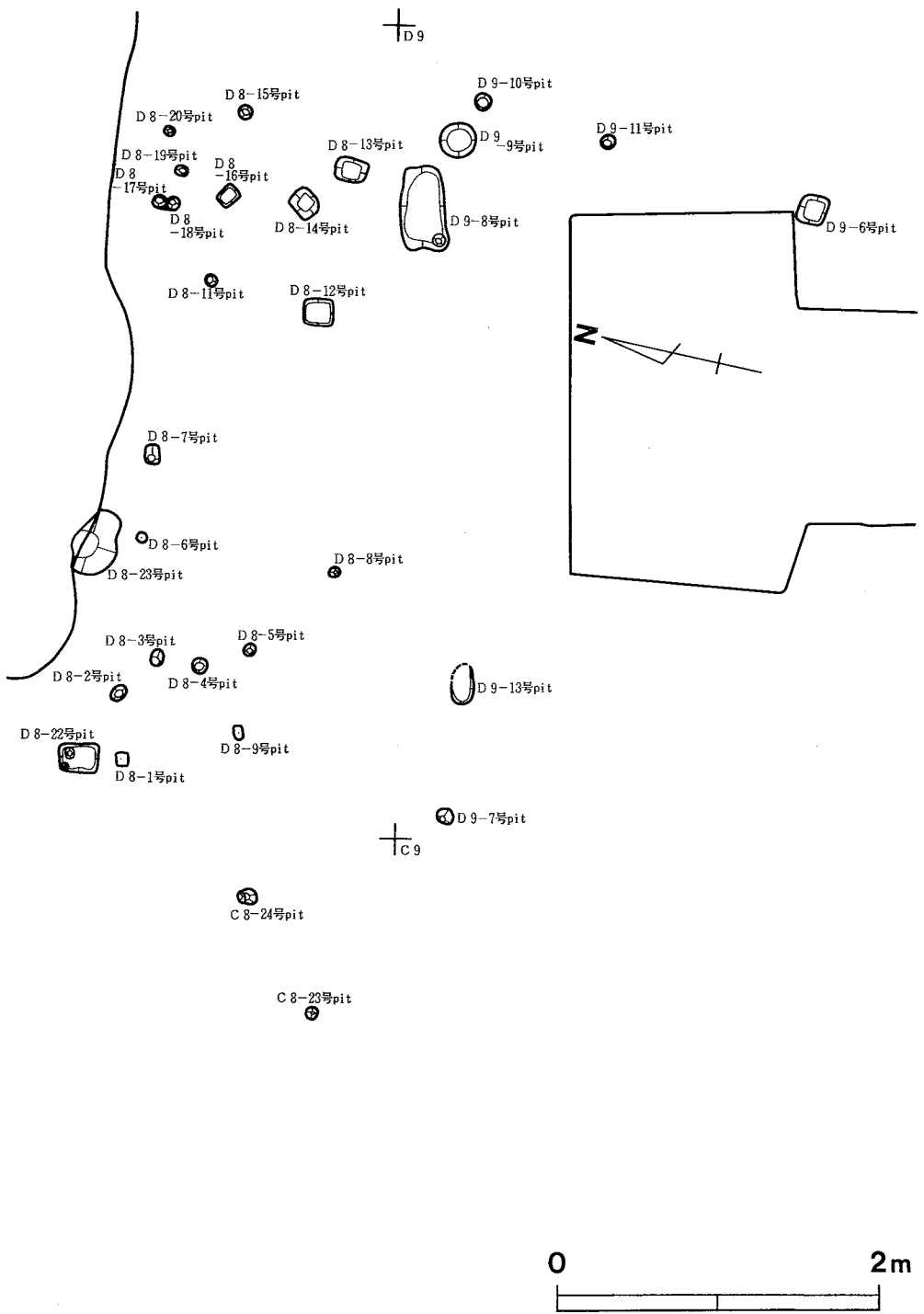
- D9-4号pit**
- 4層 暗褐色土（木片を多量含む〔柱痕〕）
  - 5層 暗褐色土（ローム粒子、赤色粒子、炭化物粒子を含む）
  - 6層 ローム（炭化物粒子を少量含む）
- （土層図の水準：23.000m）



第130図 B～H＝9～11区の遺構(13)

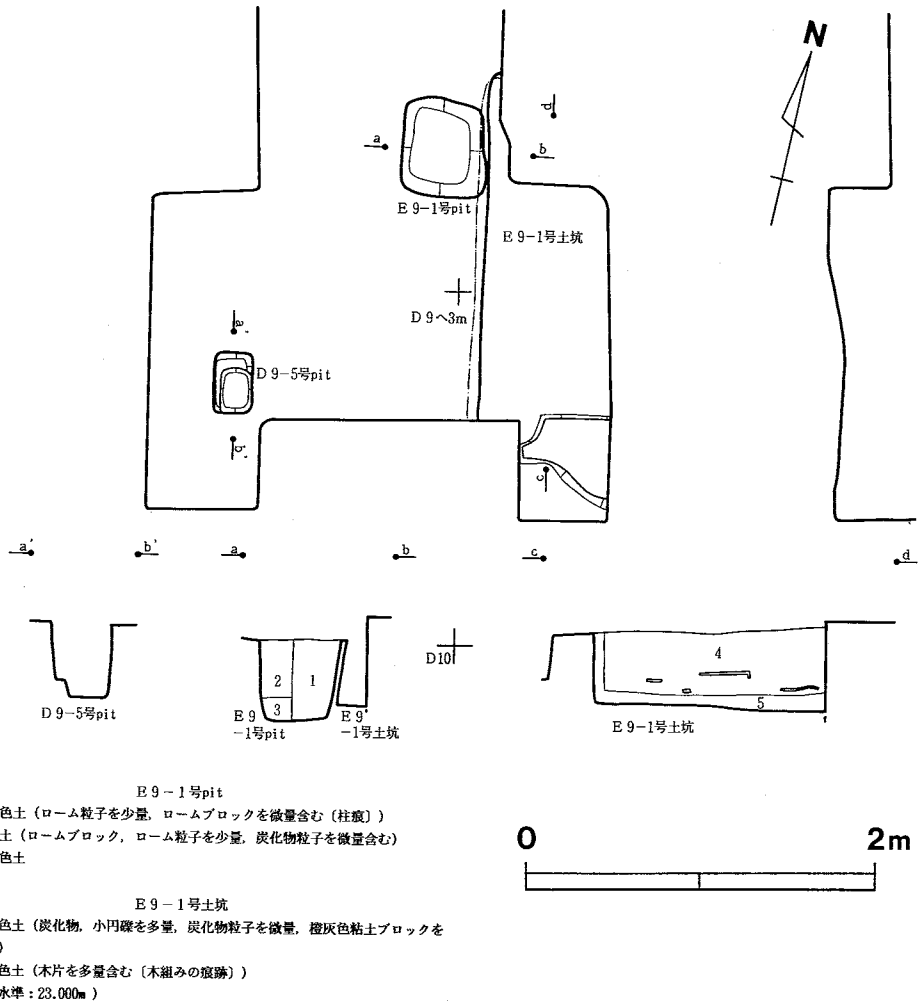


第131図 B~H=9~11区の遺構(14)



第132図 B~H=9~11区の遺構(15)

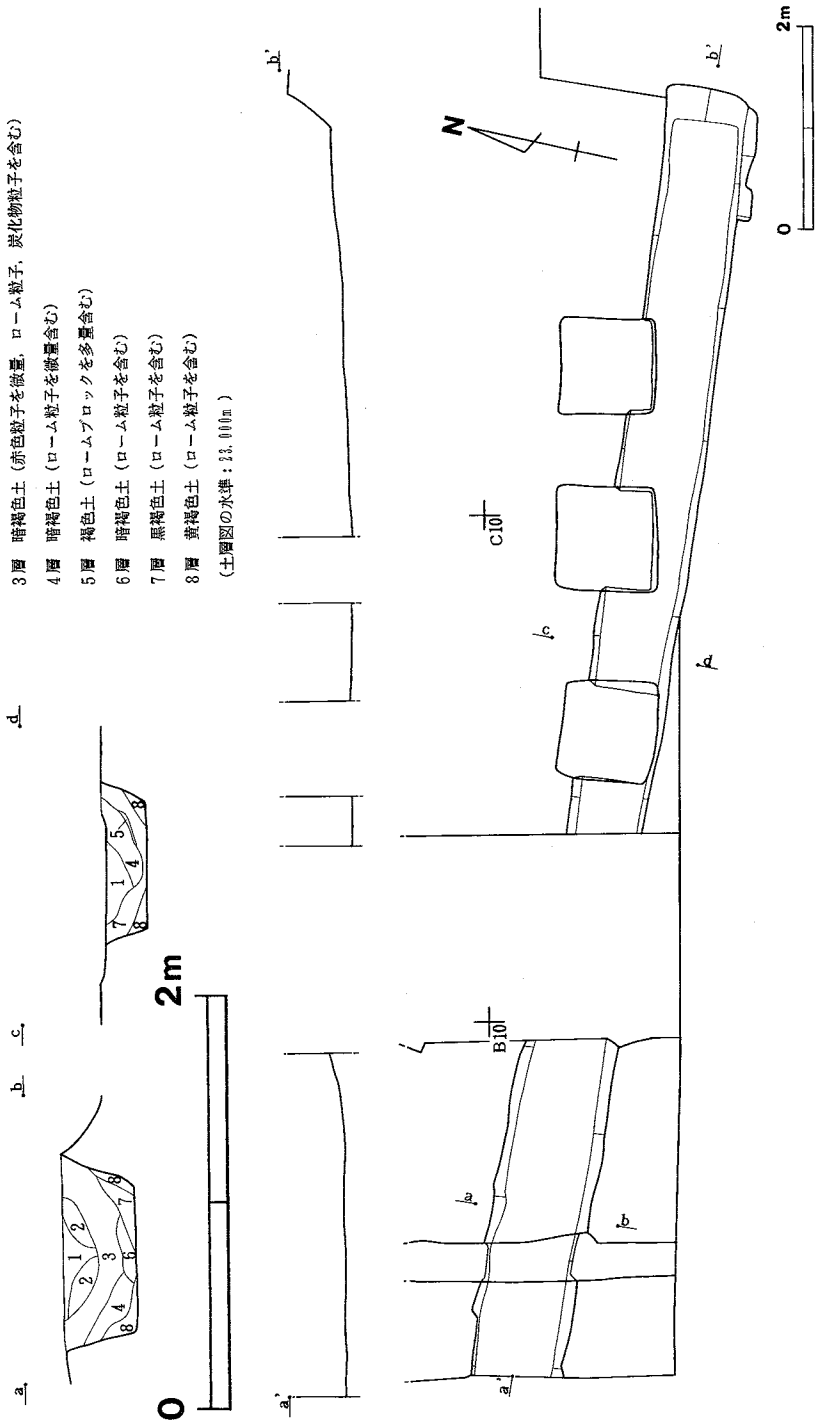




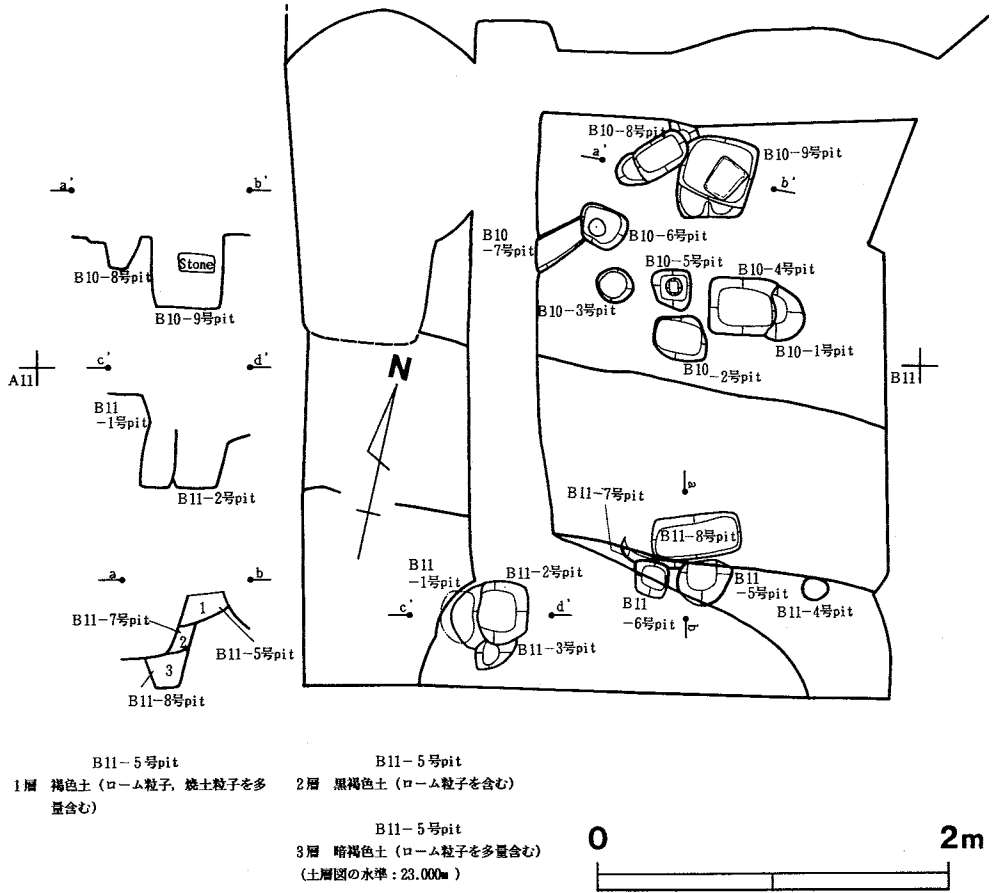
第133図 B～H=9～11区の遺構(16)

D11-1号溝

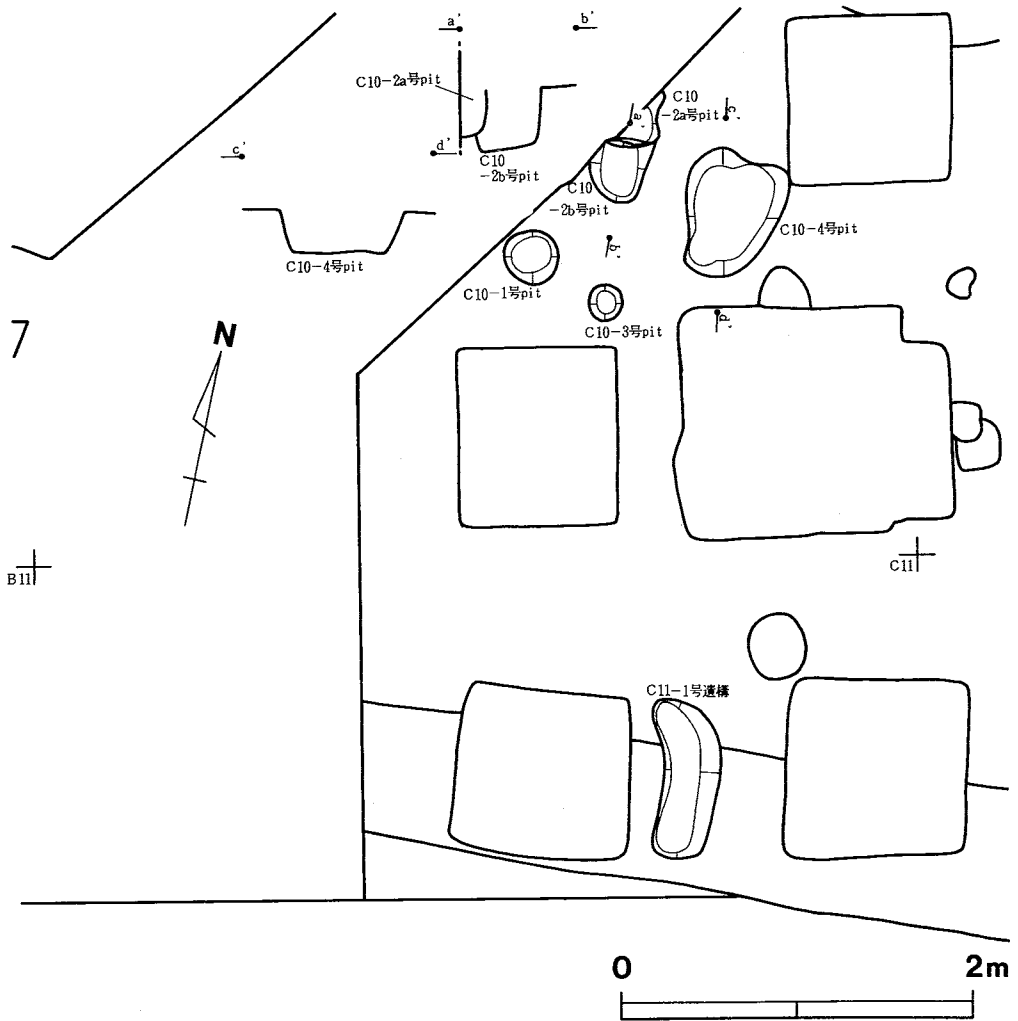
- 1層 明褐色土 (粘土粒子, 粘土ブロック, ローム粒子, 炭化物粒子を含む)
  - 2層 貝層 (カキを主体とする)
  - 3層 暗褐色土 (赤色粒子を微量, ローム粒子, 炭化物粒子を含む)
  - 4層 暗褐色土 (ローム粒子を微量含む)
  - 5層 褐色土 (ロームブロックを多量含む)
  - 6層 暗褐色土 (ローム粒子を含む)
  - 7層 黒褐色土 (ローム粒子を含む)
  - 8層 黄褐色土 (ローム粒子を含む)
- (土層図の水準: 22.00m)



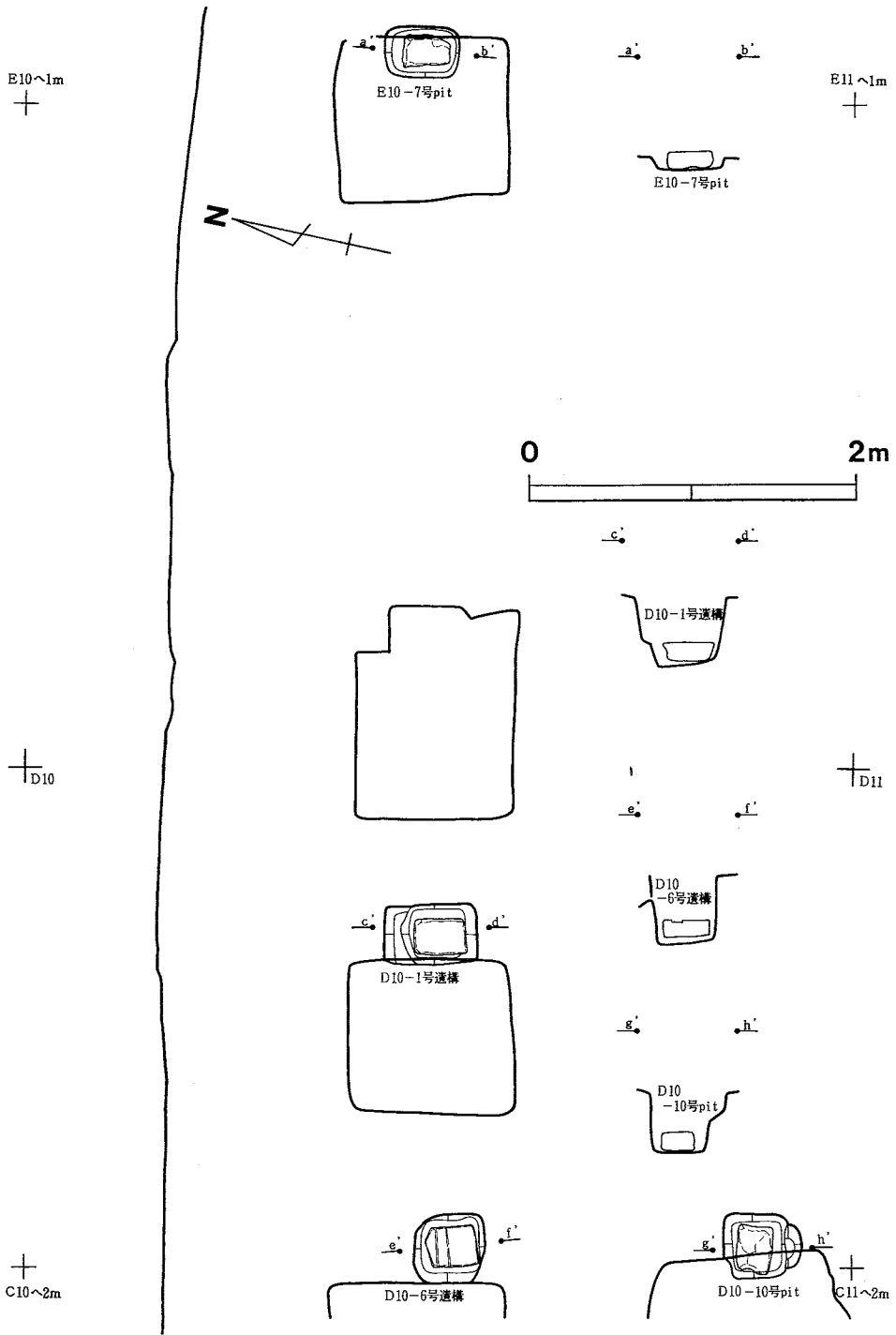
第134図 B~H=9~11区の遺構(17)



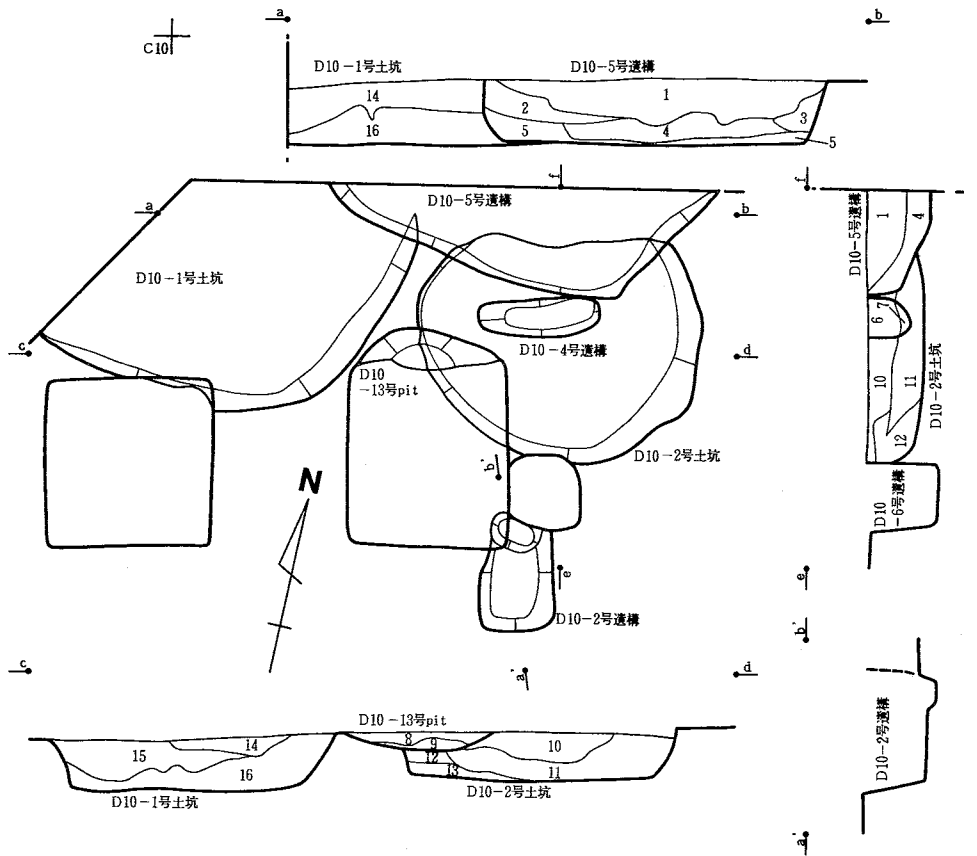
第135図 B~H=9~11区の遺構(18)



第136図 B~H=9~11区の遺構(19)



第137図 B~H=9~11区の遺構(20)



C11I

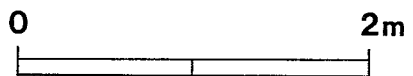
- D10-5号遺構
- 1層 黒色土 (砂利を多量含む)
  - 2層 黄褐色土 (黒褐色土を含む)
  - 3層 黄褐色土
  - 4層 黄褐色土
  - 5層 黄褐色土

- D10-4号遺構
- 6層 黒色土 (ロームを含む)
  - 7層 黒色土

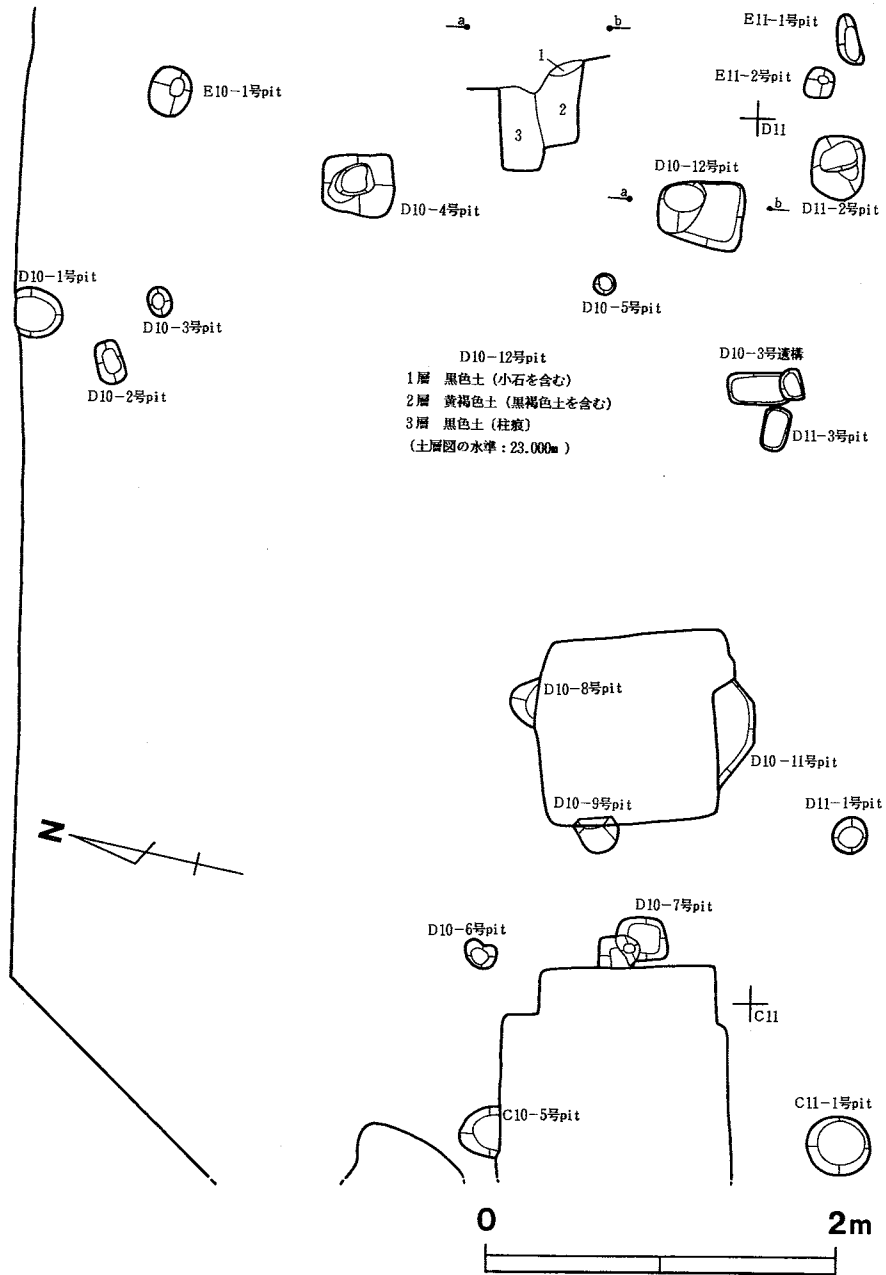
- D10-13号pit
- 8層 黒色土
  - 9層 黄褐色土

- D10-2号土坑
- 10層 褐色土 (ローム, 黄褐色土を多量含む)
  - 11層 黒色土 (ロームブロック, 砂を含む)
  - 12層 褐色砂質土 (ロームブロックを含む)
  - 13層 黒褐色土 (ロームブロックを含む)

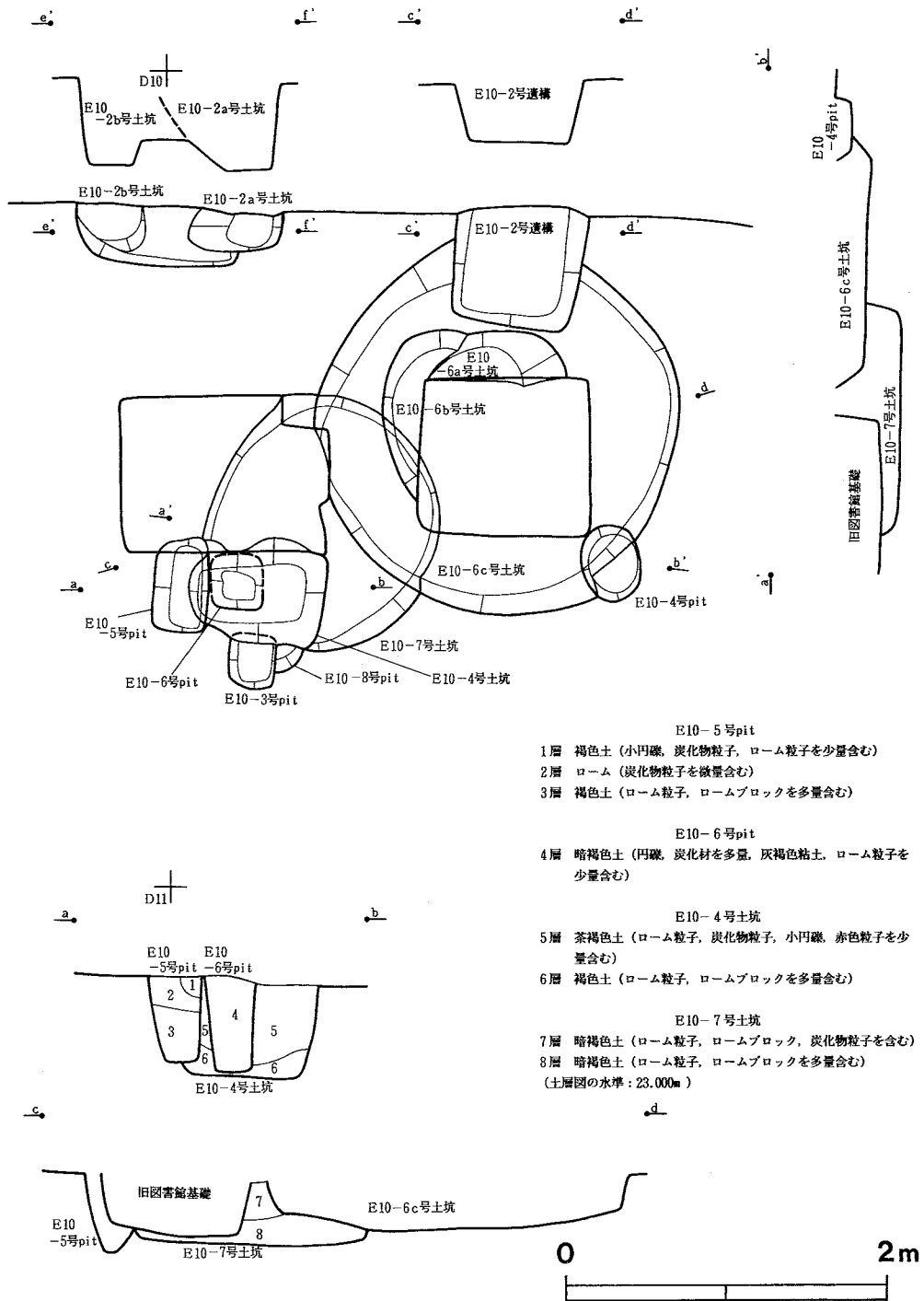
- D10-1号土坑
- 14層 黒褐色土 (黄褐色土を含む)
  - 15層 黒褐色土 (ロームブロックを含む)
  - 16層 黄褐色土 (ロームブロック, 黒褐色土を含む)
- (土層図の水準: 23.000m)



第138図 B~H=9~11区の遺構(21)

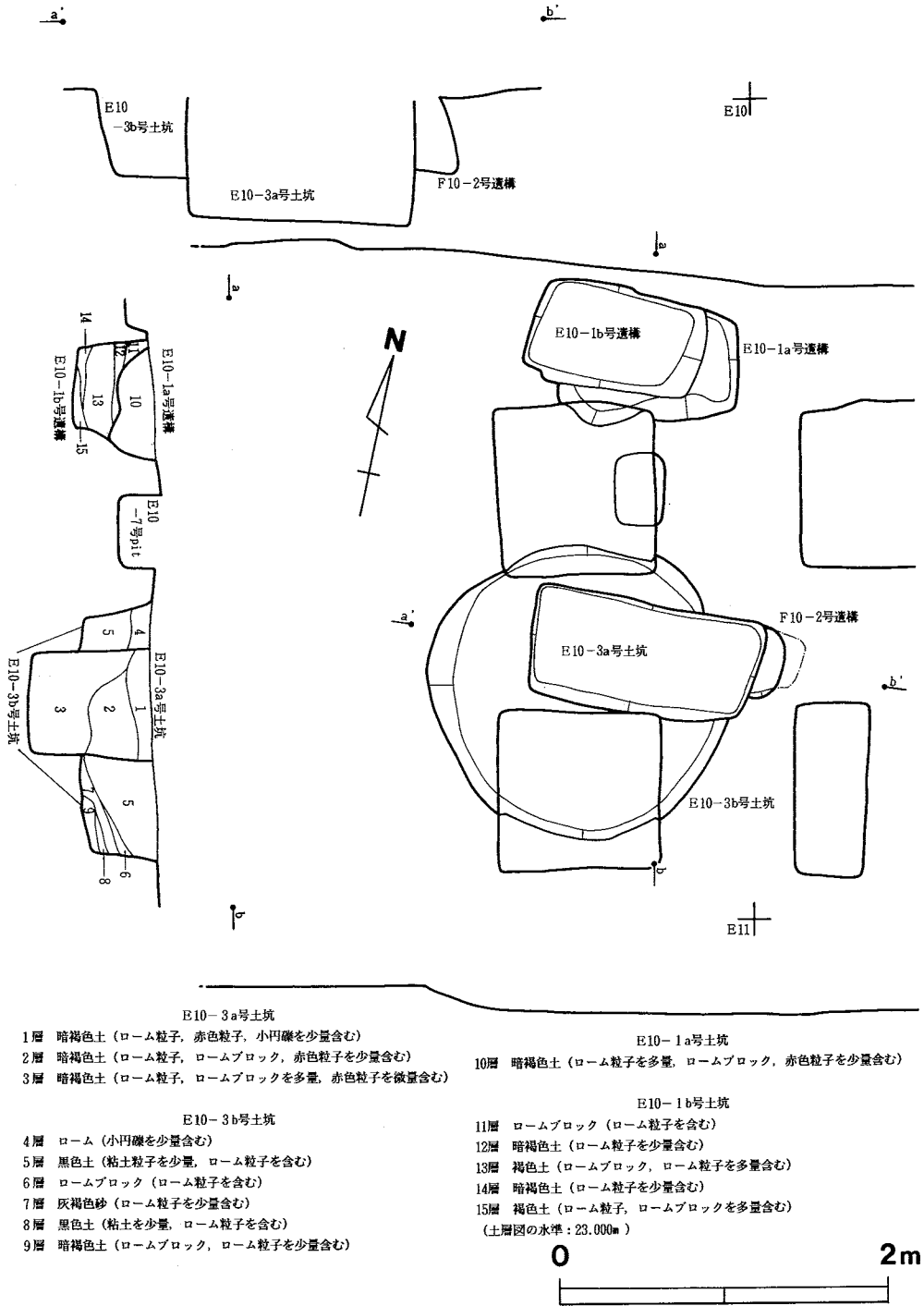


第139図 B~H = 9~11区の遺構(22)



第140図 B~H=9~11区の遺構(23)





E10-3a号土坑

- 1層 暗褐色土 (ローム粒子, 赤色粒子, 小円礫を少量含む)
- 2層 暗褐色土 (ローム粒子, ロームブロック, 赤色粒子を少量含む)
- 3層 暗褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを多量, 赤色粒子を微量含む)

E10-3b号土坑

- 4層 ローム (小円礫を少量含む)
- 5層 黒色土 (粘土粒子を少量, ローム粒子を含む)
- 6層 ロームブロック (ローム粒子を含む)
- 7層 灰褐色砂 (ローム粒子を少量含む)
- 8層 黒色土 (粘土を少量, ローム粒子を含む)
- 9層 暗褐色土 (ロームブロック, ローム粒子を少量含む)

E10-1a号土坑

- 10層 暗褐色土 (ローム粒子を多量, ロームブロック, 赤色粒子を少量含む)

E10-1b号土坑

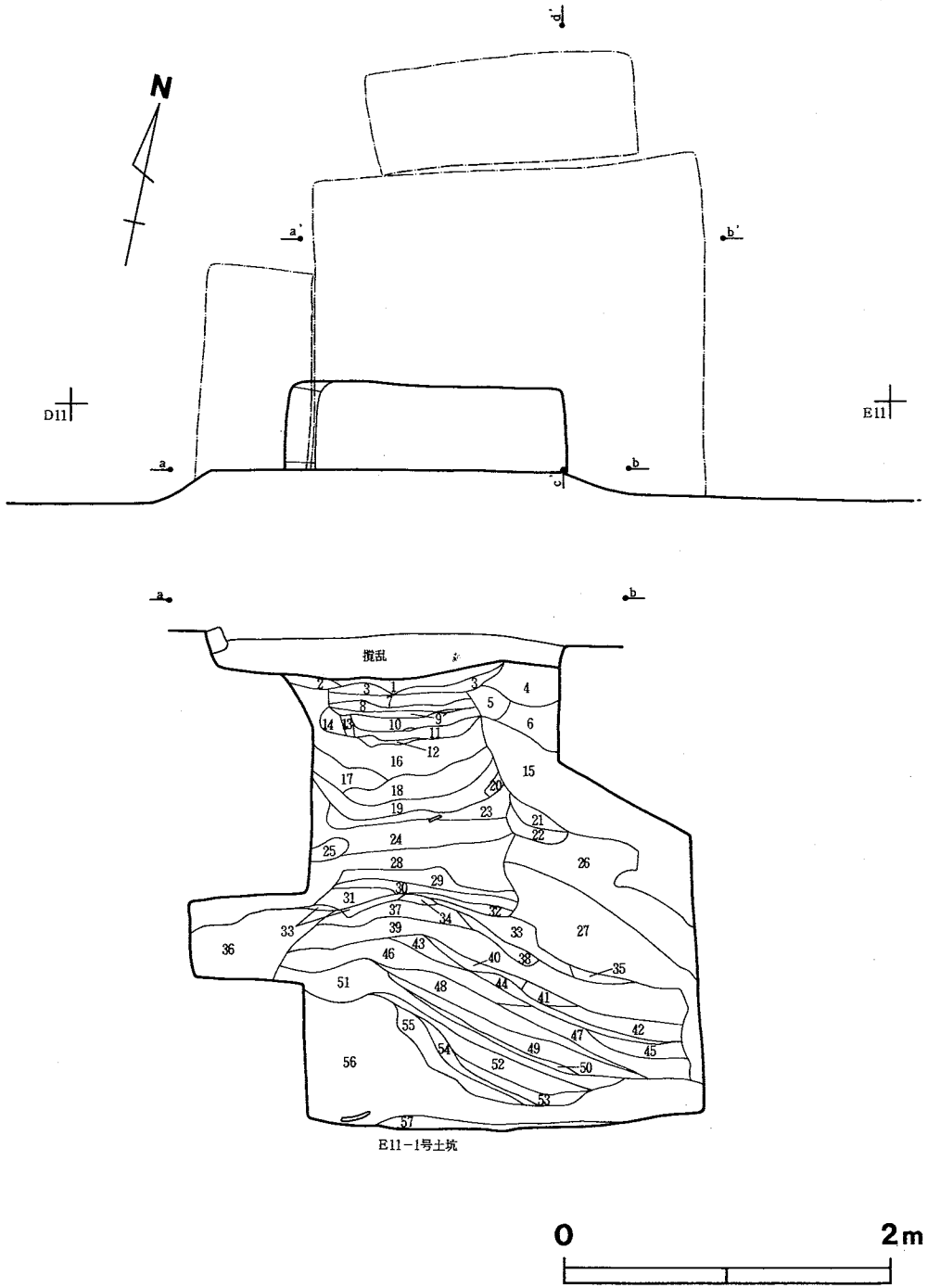
- 11層 ロームブロック (ローム粒子を含む)
- 12層 暗褐色土 (ローム粒子を少量含む)
- 13層 褐色土 (ロームブロック, ローム粒子を多量含む)
- 14層 暗褐色土 (ローム粒子を少量含む)
- 15層 褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを多量含む)

(土層図の水準: 23.000m)



第141図 B~H=9~11区の遺構(24)



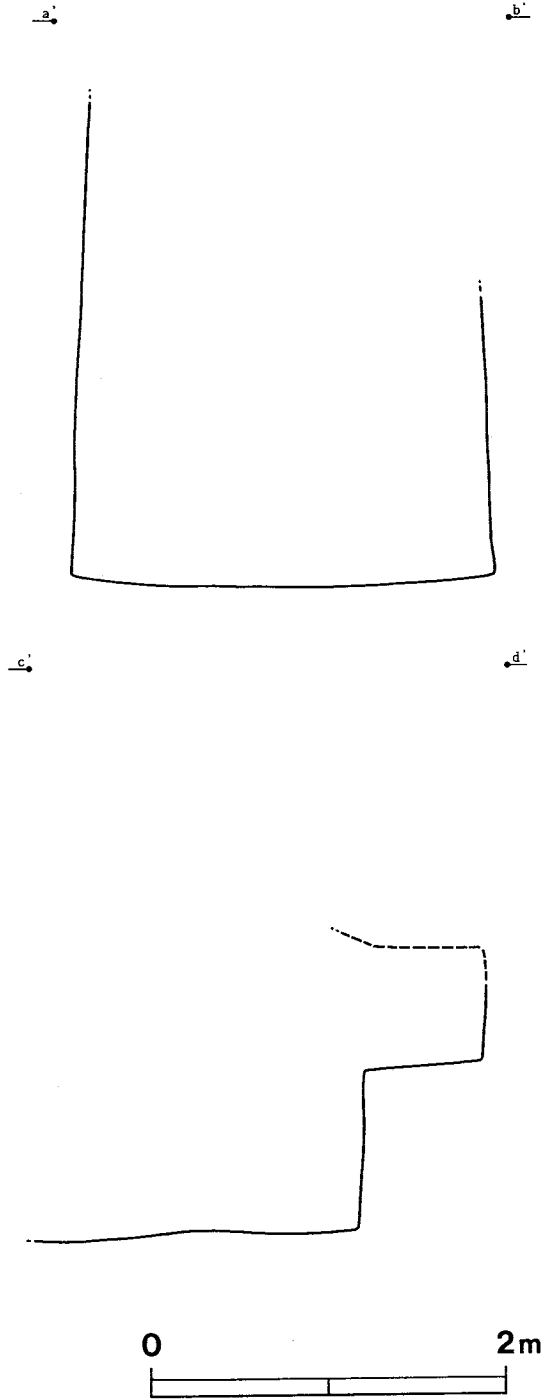


第143図 B~H=9~11区の遺構(26)

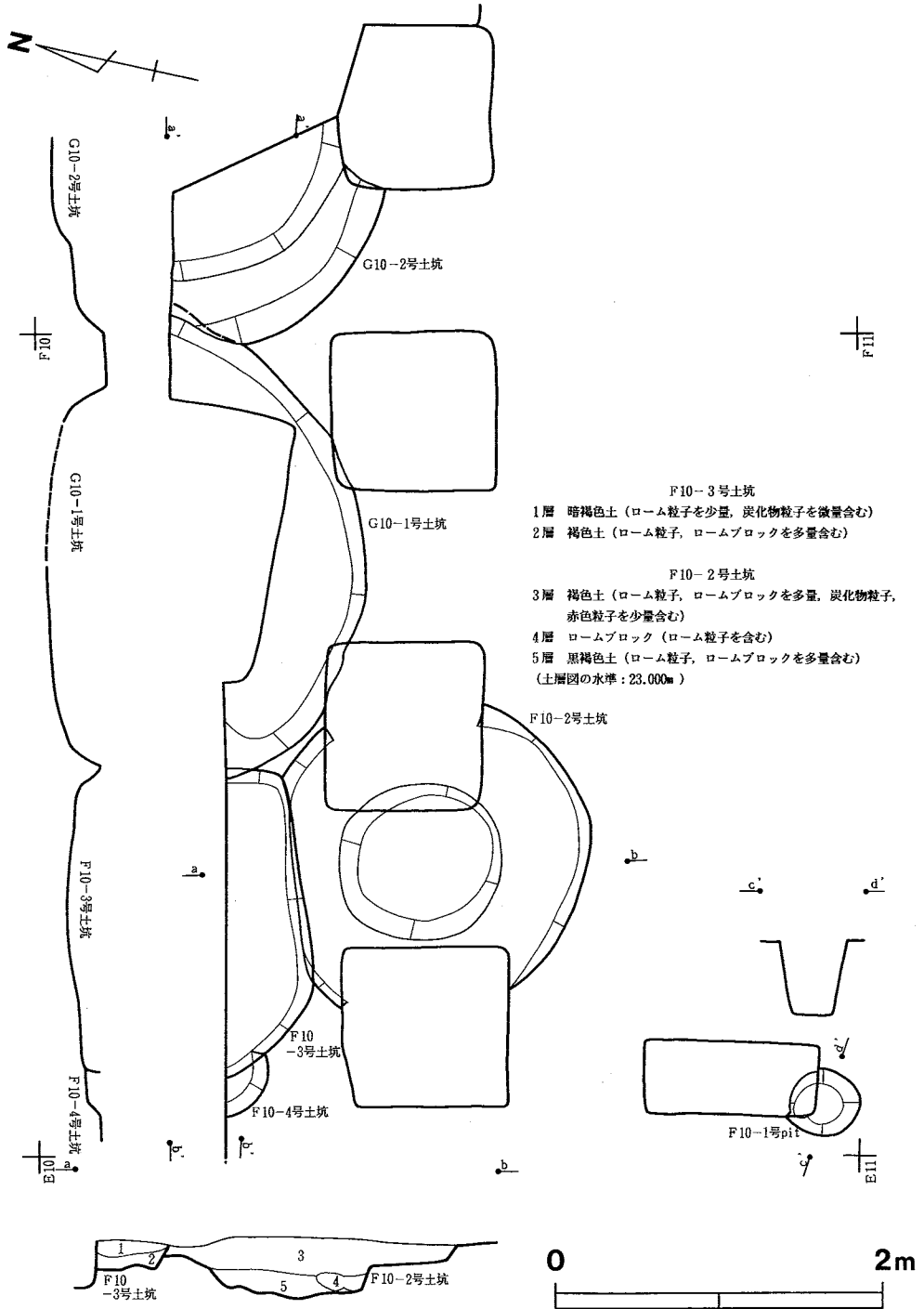
E11-1号土坑

- 1層 褐色土
- 2層 黄褐色土
- 3層 褐色土 (黄褐色土を含む)
- 4層 黒色土
- 5層 黒褐色粘質土
- 6層 黒色土 (小石を含む)
- 7層 褐色土 (焼土を含む)
- 8層 暗緑色焼土
- 9層 黒灰色土
- 10層 黄褐色土 (黒色土を含む)
- 11層 黄褐色ローム質土
- 12層 黒色土 (黄褐色土を含む)
- 13層 黒灰色土
- 14層 黄褐色土 (黒色土を含む)
- 15層 黒色土 (小石, 黄褐色土を含む)
- 16層 黒色土 (貝を含む)
- 17層 黒褐色土 (黄褐色土を含む)
- 18層 黒色土 (黄褐色土, 貝殻を含む)
- 19層 黒褐色土
- 20層 黒褐色土
- 21層 ロームブロック
- 22層 黒灰色土 (砂を含む)
- 23層 黄褐色土 (黒褐色土を含む)
- 24層 黒褐色土 (貝殻, 炭化物, 礫を含む)
- 25層 黒褐色土 (ロームを含む)
- 26層 ローム (黒色土を多量含む)
- 27層 ロームブロック (砂を含む)
- 28層 黒褐色土
- 29層 黒褐色土 (貝殻, 炭化物, 黄褐色土を含む)
- 30層 黒褐色土 (礫, 灰, 魚骨を含む)
- 31層 暗褐色土 (黄褐色土を含む)
- 32層 暗褐色土 (貝殻を含む)
- 33層 暗赤紫色焼土
- 34層 暗褐色土 (ロームブロックを含む)
- 35層 黄褐色土 (ロームブロックを含む)
- 36層 褐色土 (ロームブロックを多量含む)
- 37層 黒色土 (ロームブロックを含む)
- 38層 暗褐色土
- 39層 黄褐色土 (ロームブロックを多量, 炭化物を含む)
- 40層 黄褐色土 (ロームブロック, 黒灰色土を含む)
- 41層 褐色土 (ロームブロックを含む)
- 42層 黒褐色土 (黄褐色土を含む)
- 43層 黄褐色土 (ロームブロックを多量含む)
- 44層 黒灰色土
- 45層 黒灰色土 (ロームブロックを含む)
- 46層 黄褐色土 (ロームブロックを少量含む)
- 47層 褐色土 (ロームブロックを多量含む)
- 48層 黄褐色土
- 49層 褐色土 (ロームブロックを多量含む)
- 50層 褐色土
- 51層 褐色土 (ロームブロックを含む)
- 52層 褐色土 (黄褐色土を含む)
- 53層 褐色土 (ロームブロックを含む)
- 54層 暗褐色土 (ロームブロックを微量含む)
- 55層 褐色土 (ロームブロックを含む)
- 56層 黄褐色土 (褐色土を含む)
- 57層 黒褐色土

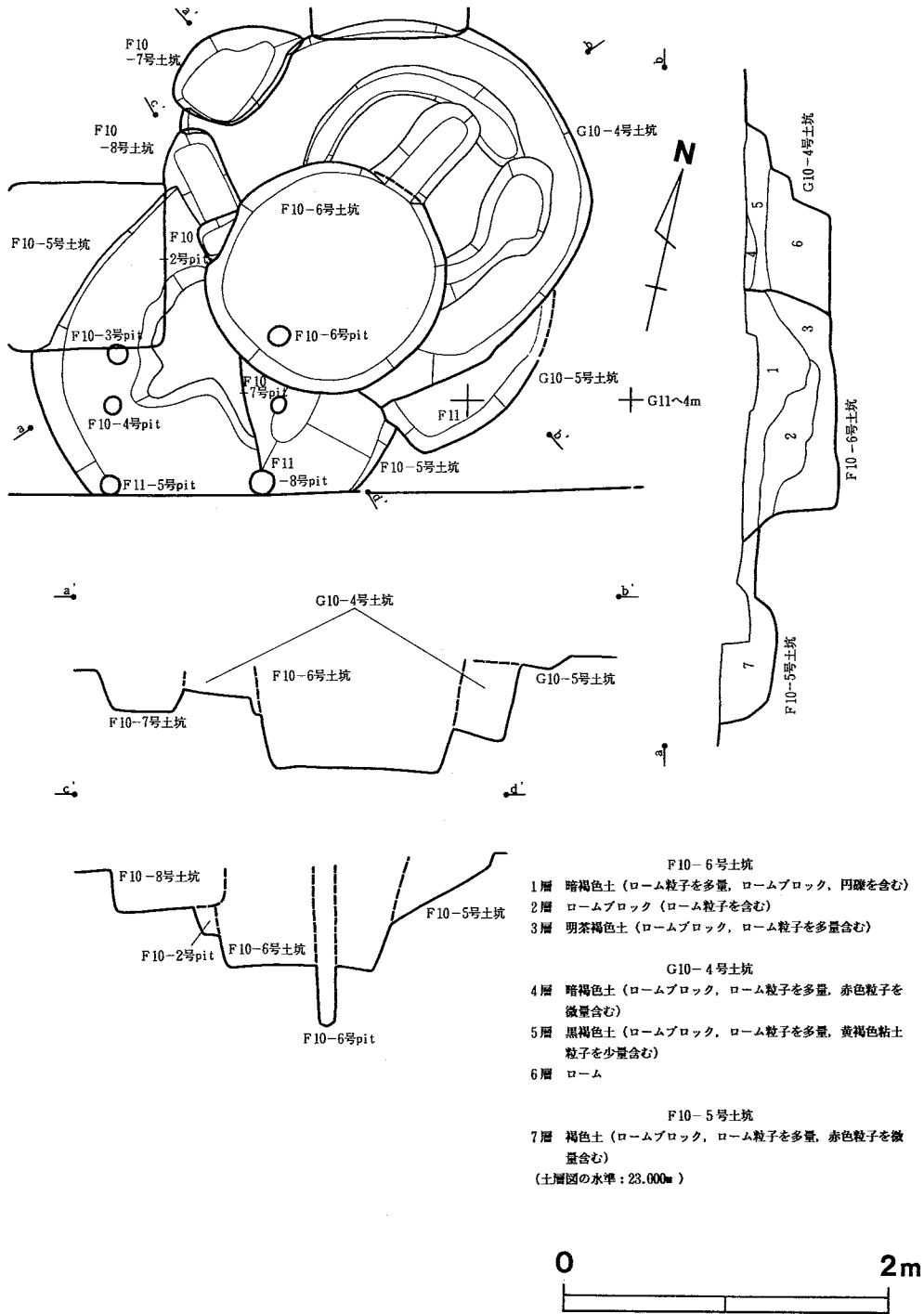
(土層図の水準: 23.000m)



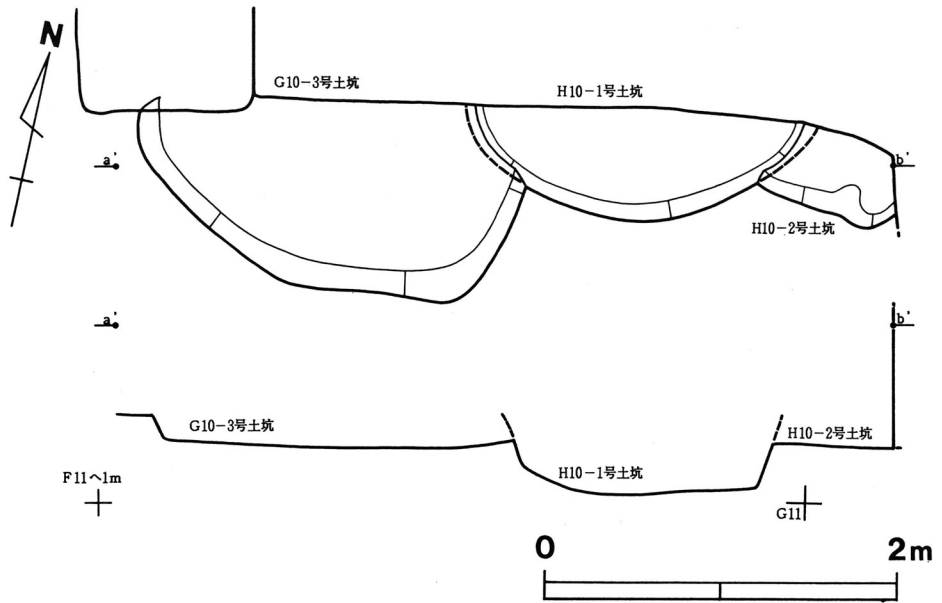
第144図 B~H=9~11区の遺構(27)



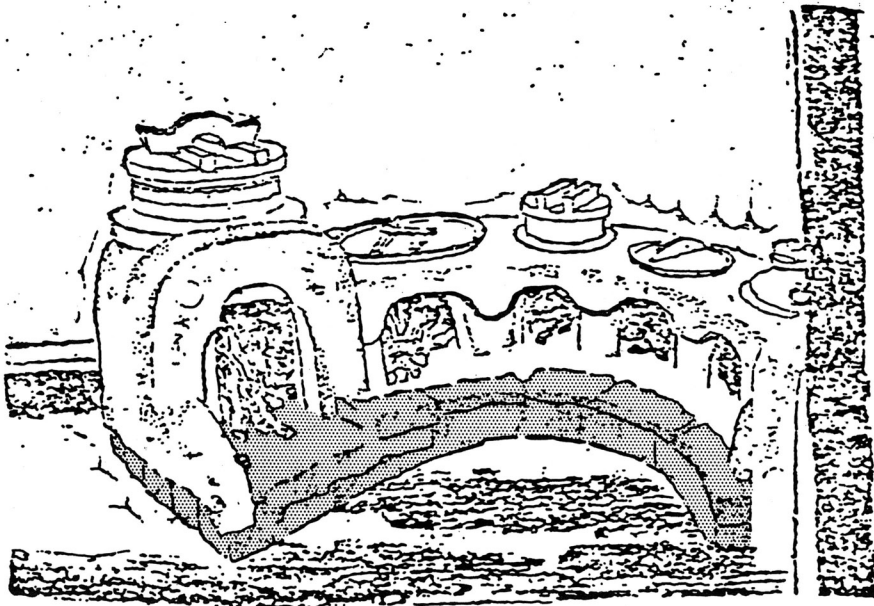
第145図 B~H=9~11区の遺構(28)



第146図 B~H=9~11区の遺構(29)



第147図 B~H=9~11区の遺構(30)



第148図 “五つ竈” (柳田國男, 1948, 『火の昔』 実業之日本社, 161頁, 一部改変)

## 第三節 遺物各説

### (1) 陶器・磁器・土器

本地区出土の陶磁器類は、碗・皿・德利・火鉢を中心にかなり多量出土している。出土遺構も多数に及んでいるが、地下式土坑・井戸等の土坑、あるいは大形の土坑である。特に大形の土坑からは多量に出土している。時期的にはほぼ江戸時代全般に亘り出しているが、主体を占めるのは18世紀～19世紀前半である。17世紀後半及び19世紀後半の遺物を出土する遺構も存在するが若干である。

陶磁器類の図示は主に完形及び全形を推定できる遺物を選定しているが、中国製品、印刻・墨書等を有する遺物は小片でも図示している。また遺物の大半が小片の遺構でもなるべく図示している。遺物は遺構単位で図示・説明を行なう。説明では観察表を作成し、概説を加える。遺構外出土の中国製品等も図示し、観察表による説明を行なう。

遺物を検討するに当たり器種分類を設定し、分類に基づいて以下説明を行う。分類は基本的に用途による。陶磁器類は主として飯食関係に関するものであるが、その他趣味・祭祠・光熱等多様な用途が考慮される。これらの用途を大別して（大分類：供膳具・調理具／茶道具・喫煙具／仏具／文房具・化粧具／灯火具／暖房具／その他）、各大分類を器形により分類し（中分類：碗類・皿類・小鉢類・瓶類・鍋類・壺類・甕類／小鉢類・鉢類・瓶類・壺類／碗類・小鉢類・鉢類・瓶類／皿類・瓶類／皿類・小鉢類・鉢類／鉢類・壺類／碗類・鉢類・瓶類）、更に、各中分類を具体的に用途による分類を行い（小分類：碗・小碗・猪口／皿／小鉢・中鉢・蓋物／片口・鉢・播鉢・焜炉・焙烙／德利・土瓶・水注／鍋／壺／甕・茶洗立／火入／花生／風炉／水指／茶入／仏餉具／香炉・合子／仏花瓶／紅皿・鬘盤／水滴・香油瓶／灯明皿／蠟燭／瓦燈／火鉢／火消壺／餌入／植木鉢／瘦瓶）、小分類に基づいて各遺物を説明する。尚、器種分類を設定するに当たり、長佐古真也氏のご指導を頂き、氏の陶磁器分類を基本に筆者等が内容を加味し作成している。従って、本分類における誤りは全て筆者等の責任である。

観察表による説明では、遺物の特徴・産地等を対象とする。法量については基本的には1口径、2底（高台）径、3器高を計測し、1・2・3の順に表記する。単位はcmである。ただし蓋等一部は計測の基準が相違する遺物があり、これらについては計測基準表・図を参照されたい（第235図）。なお計測基準表で左側に測点を説明し、右側には実例を掲載してある。計測不可能な部分については「—」と表記する。遺存については割合で示し、「完」は完形、「(完)」はほぼ完形を示す。なお遺物説明に関する器種分類・計測等は文学部3号館建設地区の説明（第四章第三節(1)）にも同じく適用される。

(小俣 悟, 津野 仁, 菅谷 通保, 石井 聖子)



## B～K= 2～6 区遺構出土の陶器・磁器・土器

### 第149図1：C 2—1号組石遺構

総量は約10点と少なく、遺存も大半は小片である。

1は瀬戸・美濃の小壺であり、おそらく双耳を有しよう。図示以外には瀬戸・美濃の徳利片等が出土している。

時期的には徳利等から18世紀後半を主体として19世紀に及ぼう。

### 第149図2～5：C 2—1号土坑

総量は数10点出土しているが、完形は少なく大半が小片である。

碗類では色絵・志野・天目茶碗等比較的多く出土しているが、その他には染付皿・色絵蓋等が少量見られる。瀬戸・美濃陶器を主体として肥前磁器等は少ない。また小片の為に図示しえないが中国呉須手皿が出土しており、色絵と思われる。

時期的には碗・染付皿等から17世紀後半を主体に比定されるが、一部18世紀前半に及ぼう。

### 第149図6・8～17, 第150図1～3・5：C 2—2号土坑

総量は数10点出土しており、比較的遺存良好で完形も見られる。一部は被熱している。

碗類がかなり多く出土しており、白磁・染付等肥前製品が主体である。他に染付仏餉具、青花皿・小鉢等磁器が多い。青花は共に体部小片であるが被熱している。全体的に肥前磁器は遺存良好である。また色絵合子は身だけではなく、蓋の小片も出土しているが図示しえない。

他は瀬戸・美濃の御深井釉蓋・瘦瓶、信楽系播鉢等が出土しているが遺存はあまり良好ではない。また土師質香炉も出土している。

時期的には肥前磁器等から17世紀後半を主体に比定されよう。

### 第150図4・6・7：C 2—3号土坑

総量は10数点と少なく、遺存も大半は小片である。

碗・皿類では瀬戸・美濃の菊皿以外見るべき物はない。その他では信楽系播鉢が出土しているが、遺存は極めて悪い。また瓦質の火鉢類が出土しているが、体部に弧状の条線を縦位に刻んでいる。遺存は悪く、類例も少ないが風炉の可能性もある。時期的には皿等から17世紀後半頃に比定されよう。

### 第151図1・2・5：C 2—4号土坑

総量は10数点と少ないが、ほぼ完形な物が多い。

碗・皿類では肥前の緑釉碗・皿が出土しており、掛分けでほぼ完形である。その他では瀬戸・美濃の鉄釉小壺が出土している。内面全体に鉄錆状の赤色付着物が見られ、鉄製品の容器として利用した物と思われる。

時期的には、肥前の碗・皿類等から17世紀後半～18世紀前半に比定されよう。

### 第152図3：B 3—1 a号土坑

総量は約10点と少なく、大半が小片である。

肥前の青磁香炉がほぼ完形で出土している。袴腰が明瞭であり、内面には墨書が見られるが不明瞭である。その他には京都系若松碗、瀬戸・美濃の灰釉徳利等が出土している。時期的には以上から、18世紀後半～19世紀前半に比定されよう。

#### 第151図3・4・6～11, 第152図1:B3-1b号土坑

総量は数10点出土しており、ほぼ完形な物も比較的多い。一部は被熱している。

碗・皿類は比較的多く出土している。肥前の陶胎染付碗、染付皿及び瀬戸・美濃の灰釉鉢碗・灰釉鉢皿は遺存もかなり良好であるが、全体的に磁器が少ない。鉢類もかなり多く出土しており、瀬戸・美濃の播鉢はほぼ完形である。その他では瀬戸・美濃の鉄釉半菊文の香炉・鬘盥、鉄釉徳利片、肥前の染付蓋等が出土している。

出土遺物にいくらか時期幅が見られるようであるが、遺構が重複しており、新しい時期の遺物は混在したものと思われる。新しい時期の遺物は小片が多く大半は図示できない。また古手の遺物に被熱が見られる。古手の遺物は、染付碗・灰釉鉢碗・皿等17世紀後半～18世紀前半に比定される。

#### 第152図2・4～9, 第153図1～4:B3-2号土坑

総量は数10点と比較的多く出土しており、ほぼ完形の物もなかり見られる。

碗・皿類はあまり多くはなく、遺存も悪い。比較的良好的な物は瀬戸・美濃の灰釉鉢碗である。他に染付皿等の小片も見られる。他には瀬戸・美濃の鉄釉及び灰釉徳利が完形で出土している。京都系色絵合子の身、備前系播鉢も出土しているが、全体的に磁器が少ない。

土師質の物もかなり出土しており、完形の物も多い。丸形火鉢や植木鉢の他灯明具が出土している。火鉢には底裏に墨書が見られ、一部欠損しているが「新番所」と読めよう、「所」は不明瞭であるが、火鉢の使用場所を明示しているものと思われ興味深い。また乗燭は肩部に一方に把手を有し、「吉」の印刻が見られる。この種の乗燭はほぼ同じ印刻を有するようである。

時期的には徳利等から、18世紀中葉頃に比定されるが、一部徳利片で18世紀後半の遺物も混在している。

#### 第153図5～9, 第154図1:B3-3号土坑

総量は10数点と少なく、小片の物が多い。

碗・皿類は少なく、肥前の染付皿・緑釉皿、瀬戸・美濃の灰釉碗の他中国の呉須手色絵皿が出土している。呉須手皿は底部周辺の小片であり、被熱の為に文様・彩色が明瞭ではないが、G5-1号土坑出土の呉須手色絵皿と同一の可能性もある。

徳利は数点出土しているが大半は瀬戸・美濃産の鉄釉・灰釉徳利であるが、志戸呂産も見られる。瀬戸・美濃の鉄釉徳利に釘書が見られるが、体部中位に左右に連続して記されている。その一方はサイコロの五の目を表わしているのであろう。

時期的には、碗・皿類及び鉄釉徳利等から18世紀前半頃に比定されよう。

第154図2・3・6：C3-1号土坑

総量は10数点と少なく、大半は小片である。

碗・皿類では瀬戸・美濃の灰釉碗、肥前の山水文皿の他、肥前の刷毛目碗・染付皿片も出土している。他には瀬戸・美濃の鉄釉德利等、青磁香炉片等が出土している。その他には小片で、瀬戸・美濃の播鉢・印刻を有する香炉等が見られるが磁器は少ない。

時期的には、碗・皿及び德利等から18世紀前半を主体に比定される。

第154図4, 7・9, 第155図1～4：C3-3号土坑

総量は数10点と比較的多いが、遺存はあまり良好ではなく小片が多い。

皿類はかなり出土しており、染付皿は五弁花を有し、山水文皿さ高台内に印刻を有する碗類では印判文の染付碗、灰釉碗片が出土している。

鉢類では青磁鉢の他瀬戸・美濃の播鉢片等が出土している。また瀬戸・美濃の鉄釉德利も出土している。土器では焙烙や乗燭も出土している。全体的に瀬戸・美濃は少ない。

時期的には、碗・皿類や德利等から18世紀前半を主体に比定される。

第155図8・10：C3-1号遺構

総量は10数点と少なく、遺存も大半は小片である。

瀬戸・美濃の灰釉碗、唐草文の染付皿等碗・皿類が主体であり、時期的には18世紀代の陶磁器類が多く出土している。しかし小片であるが、瀬戸・美濃の太白皿等19世紀の陶磁器類もいくらか見られる。18世紀代の陶磁器類には被熱している物も見られる。

第155図5～7：C3-4号土坑

総量は約10点と少なく、遺存も大半が小片である。

主体は碗類であり、特に染付が多い。染付碗は瀬戸・美濃産であり、端反小碗は肥前産である。他に小片で瀬戸・美濃の灰釉德利も出土している。以上から時期的に19世紀前半～中葉に比定される。

その他には印判文の染付碗等18世紀代の陶磁器類も極く少量混在している。

第155図9・11～13, 第156図, 第157図1・2：C4-1号土坑

総量は数10点と比較的多く、ほぼ完形の物も多い。

碗・皿類が主体であるが磁器は少ない。碗では肥前の呉須手碗、瀬戸・美濃の灰釉碗の他刷毛目碗等が出土している。皿では五弁花文の染付皿、蛇ノ目釉剥ぎの鉄釉皿は口縁輪花状である。山水文皿が4点出土しており、高台内に印刻を有するが一部墨書も有する。蛇ノ目釉剥ぎ皿にも墨書を有する。所有者を明示するものかとも思われる。他に色絵山水文皿片も出土しており、これも同様印刻を有し肥前系であろう。

他の器種はあまり多くはないが、瀬戸・美濃の播鉢、船德利、香炉、肥前の白磁壺等が出土している。船徳利の底部には印刻が見られる。時期的には、碗・皿等から17世紀後半～18世紀前半に比定される。

#### 第157図7：E 6—1号土坑

総量は約10点と少なく、大半は小片である。

鉄釉土瓶は比較的遺存が良好である。碗・皿類では染付筒型碗片等が見られるだけであり、その他には瀬戸・美濃の徳利片等が出土している。全体的に磁器は少ない。以上から時期的には18世紀後半～19世紀前半に比定されよう。

#### 第157図3・4・6：G 5—1号土坑

総量は数点と極めて少なく、図示以外極く小片である。

肥前の染付仏餉具は摺絵で葡萄文を有し、瀬戸・美濃の鉄釉茶入れは肩衝形である。更に小片であるが、中国産呉須手色絵皿が出土しており、B 3—3号土坑出土の呉須手色絵皿と同一個体の可能性がある。時期的には明瞭ではないが、以上から17世紀後半～18世紀前半頃に比定されようか。

#### 第157図8：G 5—2号土坑

出土は図示以外瀬戸・美濃の徳利片が出土しているのみである。

鉄釉双耳壺は瀬戸・美濃産であり、遺存はほぼ良好である。徳利は灰釉徳利であり、時期的には18世紀代に比定されよう。

#### 第157図5：G 5—3号土坑

総量は数点とあまり多くはなく、大半が小片である。

碗・皿類は比較的多く、特に紅皿等肥前染付が主体であるが、他に灰釉碗等も見られる。他には徳利類が多く、瀬戸・美濃の鉄釉・灰釉徳利片が出土している。時期的には明瞭ではないが、碗・皿等から18世紀前半～中葉を主体に比定される。

#### 第157図9～12、第158図1：G 6—4号土坑

総量は数10点と比較的多く出土しており、完形の物も見られる。

碗・皿類は比較的多く出土しており、肥前の山水文碗・皿の他染付も見られる。山水文皿には印刻が見られる。徳利類もかなり多く出土しており瀬戸・美濃の鉄釉徳利、志戸呂の徳利が見られる。他には志戸呂の灯明皿等が出土している。

時期的には、徳利片等にも古手の物が見られ17世紀後半～18世紀中葉に比定されるが、主体は18世紀前半～中葉である。

#### 第158図2～14：G 6—2号土坑

総量は数10点と比較的多いが、大半が小片であり遺存は悪い。

碗・皿類はかなり多く特に肥前産が主体である。染付皿・碗・白磁碗、呉須手碗の他山水文碗、緑釉皿等が出土している。瀬戸・美濃では菊皿、志野皿等が出土している。他に中国産青花皿が2個体出土しているが、松鶴文皿は呉須もかなり明瞭であり、遺存もかなり良好である。

他には白磁蓋物、信楽系播鉢や、青磁鉢等が出土している。土器では瓦燈や瓦質焙烙片が出土している。瓦質焙烙は体部小片であるが、瓦質であり形態等も中世的様相を残している。

時期的には、筒型染付碗等17世紀前半～中葉の陶磁器類も含むが、主体は17世紀後半である。

第158図15～19，第159図1～3：H 5—1号土坑

総量は数10点と比較的多く出土しており、ほぼ完形の物も見られる。

碗・皿類は比較的多く肥前産が主体である。染付碗・皿には唐草文等が見られ、山水文皿には印刻が見られる。また中国産青花皿片が出土している。高台内は無釉でカンナ目が顕著である。

瀬戸・美濃の鉄釉徳利は完形であり、仏花瓶と思われる小形の瓶は口縁部を欠損する。土器では方形火鉢等が出土している。

時期的には、碗・皿及び徳利等から18世紀前半～中葉を主体として比定される。

第159図4～9，第160図1・4：H 5—2土坑

総量は10数点と少ないが、小片の物は少ない。

碗・皿類が主体であり大半は肥前産である。刷毛目碗，染付皿，青磁皿，縁釉皿の他染付碗片も出土している。瀬戸・美濃では掛分碗の他灰釉碗も出土している。

他には肥前の象嵌鉢の他瀬戸・美濃の鉄釉徳利等が出土している。時期的には、碗・皿類や徳利等から18世紀前半を主体に比定されよう。

第160図2・3・5～9：I 5—2号土坑

総量は10数点と少ないが、完形もかなり多く出土している。

碗・皿類は比較的多く出土しているが、肥前の染付が主体である。染付碗の他色絵碗は筒型である。他に灰釉碗，染付皿等が出土している。

徳利はいずれも瀬戸・美濃の鉄釉徳利であり9は高台内に墨書を有する。他には灰釉蓋，志戸呂の香炉は出土しているが、底部片でありあるいは火入かも知れない。また土器では焙烙も出土している。

時期的には、碗・皿及び徳利等から18世紀前半～中葉に比定される。

第160図10：J 5—2号土坑

総量は数点を極めて少なく、大半が小片である。

10は瀬戸・美濃の灰釉皿であり、内面に鉄絵が見られる。その他は白磁鉢片等が出土しており、時期的に明瞭ではないが、18世紀代に比定されよう。

第160図11：K 5—1号土坑

総量は数点と極めて少なく、大半は小片である。

11は瀬戸・美濃の灰釉片口である。その他には碗・皿類では掛分碗，染付皿片等が出土している。また瀬戸・美濃の鉄釉徳利片も見られる。以上から時期的には18世紀中葉頃に比定されよう。

第160図12・13：K 5—2号土坑

総量は約10点と少なく、大半は小片である。

碗・皿類では染付小碗・皿が出土しており、小碗は高台が高い。その他には白磁蓋物等肥前磁器がやや多い。また瀬戸・美濃の鉄釉徳利・播鉢片等も出土しており、時期的には18世紀前半～中

葉に比定される。

## B～G＝7～8区遺構出土の陶器・磁器・土器

### 第161図1～3・7：B7-1号土坑

総量は10数点と少なく、大半は小片である。

山水文の染付碗、灰釉蓋、灰釉德利等、瀬戸・美濃産が主体である。灰釉德利は頸部が短かく、体部下端～底部が無釉であり墨書も見られる。色絵蓋はおそらく山水文土瓶の蓋であり、土瓶類は各地で生産されており特定するのが現状では困難である。

時期的には、染付碗、德利等から19世紀前半～中葉に比定される。

### 第161図4：B8-3号土坑

総量は数点と極めて少なく、大半は小片である。

松文の肥前染付皿以外には、同じく肥前の緑釉皿、染付鉢、また瀬戸・美濃の灰釉德利、鉢等が出土している。時期的には、緑釉皿等一部18世紀前半頃の遺物を含むが、主体は染付皿、德利等から19世紀前半頃である。

### 第161図5・6：C8-4号ピット

総量は数点と極めて少なく、大半は小片である。

5は底部片であるが呉須手の碗であろう。6は染付の水滴であり、瓜形であるが周縁部を欠損している。その他には信楽系播鉢片等が出土している。時期的には明瞭ではないが、18世紀代に比定されようか。

### 第161図8～18、第162図、第163図1～3：C7-2号土坑

総量は約50点とかなり多く出土しており、碗類の中心にはほぼ完形の物が多い。大半は多量のカワラケ・魚骨等と伴出している。

碗・皿類が大半を占めているが、特に碗類が圧倒的に多く出土している。主体は肥前の染付碗であり、文様は唐草文、梅文、山水文等を主とし印判による物も見られる。また高台内の銘に二重枠の渦福や「大明年製」が見られるが、「福」銘も見られる。他には瀬戸・美濃の灰釉碗、天目茶碗や肥前の刷毛目碗片、京都系色絵碗片等が出土している。皿類ではやはり肥前の染付皿が主であり、文様は草文、梅文等である。他には山水文碗や緑釉皿、京都系色絵皿等が出土している。

他には肥前の染付蓋が出土しており、文様は印判で紅葉文である。瀬戸・美濃産では灰釉片口、鉄釉香炉、御深井釉で流水文の線香立が出土しており、鉄釉香炉には高台内に墨書「一」を有する。数字と解釈すれば、組合せを表示するものとも思われる。また内面に鉄釉の釉溜が見られる。また志戸呂の灯明受皿も出土しており、2ヶ所の切込みを有する。土器では焙烙がほぼ完形で出土しており、内面に印刻を有する。

その他小片では鉄釉德利、火鉢等が出土している。

時期的には、碗・皿類等から17世紀後半～18世紀前半に比定されるが、主体は18世紀前半であ

る。

第163図4～14, 第164～166図, 第167図, 1・2 : C 7—3号土坑

総量は約50点とかなり多く出土しており, 碗・皿類を中心にほぼ完形の物が多い。多くは, 上・下層のカワラケ・魚骨等を含む層から伴出しているが, 特に上層に集中している。しかし他の層からも比較的出土しており, 各層間において接合する個体もかなり見られる。

碗・皿類はかなり出土しているが, 特に碗類が多い。主体は肥前染付碗であり, 文様は唐草文, 草花文, 雨降文を主とし印判による物も見られる。高台内には「大明年製」銘も見られる。他には肥前の呉須手碗, 瀬戸・美濃の灰釉碗・天目茶碗等が出土している。皿類ではやはり肥前の染付皿が主であり, 文様は梅樹文等であり, 見込には印判による五弁花も見られる。他に緑釉皿等も出土しており, 緑釉皿の高台内に花押と思われる墨書が見られる。碗・皿類等の底部には個人名等の墨書が見られ, この場合も特定の個人を表示する物であろう。その他に中国産青花碗・皿が出土している。共に小片であるが青花皿は芙蓉手である。明末～清初の時期である。

鉢類では肥前の, 花文を有する染付蓋物, 内面蛇ノ目釉剥ぎ, 浅い象嵌の鉢, あるいは瀬戸・美濃の灰釉片口, 摺鉢等が出土しているが量的には少ない。徳利類はやや多く出土しているが大半は小片である。瀬戸・美濃の鉄釉徳利が主であり, 他に灰釉徳利, 志戸呂の徳利あるいは染付型打の水注と思われる頸部片等も出土している。他には瀬戸・美濃の鬘盥, 志戸呂の灯明皿等が出土している。

土器では, 鉄釉を底面まで総掛けにした乗燭がほぼ完形で出土している。内面には芯受けと中央に円筒が付けられている。円筒は外面から空洞になっており, 釘等を差込み台に固定する為と思われる。焙烙も比較的多く出土しており, 蓋は大・小の形の物が出土している。身は大形の物以外復原できないが, 内耳を有する物とない物に分れる。更には口唇部を焼成以前に浅く削り, 片口状に成形した物も見られるが, 類例を知見しない。火鉢類はほとんど見られないが, 第165図2はあるいは火鉢かもしれない。土師質の口縁部片であり, 口唇は内削ぎで刻目を有し, 外面には刺突文が見られる。これも全く類例を知見せず, 形態, 規模等は不明である。

時期的には, 碗・皿等から17世紀後半～18世紀前半に比定されるが, 主体は大半の染付碗・皿類, 徳利等から18世紀前半である。

第167図3～7 : C 8—1号土坑

総量は10数点と少なく, 全て小片である。

碗・皿類は小片ながらもかなり多く出土している。鉄釉碗は京都系, 鉄絵の長石釉皿は瀬戸・美濃産である。他に中国産呉須手色絵皿が出土しているが, 極めて小片であり全体的に顕著に被熱しており, 文様等は不明である。また瀬戸・美濃の瘦瓶片も見られる。

その他には瀬戸・美濃の菊皿・灰釉皿の小片等瀬戸・美濃産が多いが, 肥前の染付等も少量出土している。時期的には小片の為に判断が困難な遺物も見られるが, 碗・皿等から17世紀後半に18世紀に及ぼう。

#### 第167図8～14, 第168・169図, 第170図1～6・8 : B 7—2号土坑

総量は数10点と多く出土しており, ほぼ完形の物も多い。特に下層から瓦と伴出している物が多く, 遺存もかなり良好である。

碗・皿類は比較的多く出土しているが, 皿類は遺存があまり良好ではない。碗類では肥前の染付碗が主であり, 文様は桐文, 山水文等が見られる。他に白磁碗, 瀬戸・美濃の灰釉碗や京焼風の染付碗も出土している。京焼風染付碗は高台内に墨書を有している。一部不明瞭な点も見られるが「風式表五拾四匁」と解読できるようである。「表」はおそらく「俵」のことと思われ, 価格を表示していると推測される。

鉢類では肥前の, 菊唐草文の染付蓋物, 瀬戸・美濃の灰釉草文鉢, 播鉢等が出土しているが量的には少ない。徳利類では瀬戸・美濃の鉄釉徳利を主として比較的多く出土している。他に志戸呂の徳利も見られる。また備前系の水指, 肥前染付の壺等も出土している。その他には瀬戸・美濃の鉄釉香炉, 志戸呂の灯明皿等も出土している。

土器もかなり多く出土しており, 火鉢や焙烙等は比較的遺存が良好である。火鉢類では外面赤彩した大形火鉢が主であるが, 器高が高い火鉢も出土している。外面には把手が退化し装飾化したと思われる貼付が見られる。また第170図6は火鉢の口縁部鏝状部分であり, 内外面赤彩され胎土は緻密である。類例が少なく特殊な形態であるが, おそらく底部には獣脚が三足付くと思われる。文学部地区では同一個体と思われる口縁と獣脚が出土している。瓦燈の蓋部が出土しているが比較的大形と思われる。また焙烙の蓋と身が出土しており, 身の内面には印刻が見られる。

時期的には, 碗類, 徳利等から18世紀前半～中葉に比定されよう。

#### 第170図7 : B 7—8号土坑

総量は約10点と少なく, 大半は小片である。

7は瀬戸・美濃の灰釉碗である。その他には碗・皿類では肥前の緑釉皿等が出土しており, また瀬戸・美濃の灰釉鉢, 播鉢等も見られる。時期的には, 碗・皿類等から18世紀前半に比定されよう。

#### 第170図9～12, 第171図1～5 : B 7—7号土坑

総量は数10点と比較的多く出土しており, ほぼ完形の物も見られる。

碗・皿類が主体であるが, 皿類は遺存があまり良好ではない。碗類では山水文等の染付碗が多いが, 瀬戸・美濃の灰釉碗等も出土している。皿類では肥前の染付皿, 緑釉皿等が出土している。

他には染付仏餉具, 志戸呂の灯明皿等が出土している。徳利, 鉢類は少なく志戸呂の徳利, 瀬戸・美濃の播鉢, 白磁壺等の小片が見られる。また青磁の香炉と思われる小片があり, 輪花状になるとと思われるが胎土は緻密である。土器では長方形火鉢が出土しており, やや正方形に近く口縁部は内面に突出し, 底部に四足を有する。

時期的には, 一重網目の染付碗等17世紀代の遺物を含むが, 主体は18世紀前半頃に比定されよう。



第172図1～8, 第173図, 第174図1・3～8 : E 7-7号土坑

総量は数10点出土しており、ほぼ完形の物も見られる。

碗類は多く遺存もかなり良好であるが、皿類はほとんど出土していない。碗では瀬戸・美濃が主であり、青釉掛灰釉碗、刷毛目碗等が出土している。他に京都系若松文の碗も数点出土しており、第172図2の高台内には「井口」の墨書が見られる。碗類の墨書は一般的には所有者の個人名を明示しているのが、「井口」は氏名であろう。皿類では瀬戸・美濃の石皿等が出土している。

鉢類では肥前の染付蓋物、瀬戸・美濃の灰釉蓋物等が出土している。他に大形の瀬戸・美濃の灰釉鉢が出土している。徳利類では瀬戸・美濃の灰釉徳利が主であるが、志戸呂の徳利も少量出土している。また小形の瀬戸・美濃の鉄釉壺も出土している。

土器では少量ではあるが焙烙や小形の鉢等が出土している。他に灯明皿や火鉢等が比較多く出土している。風炉は瓦質である。

時期的には、碗・皿類、徳利等から18世紀後半～19世紀前半に比定されるが、若松碗は小形であり、灰釉鉢等に比較的新しい様相が見られる。主体は19世紀代であろう。

第175図1～3 : E 8-1号組石遺構

総量は10数点と少なく、大半が小片である。

肥前の染付仏花瓶は唐草文を有する。瀬戸・美濃の灰釉徳利、白釉を施釉した土師質鉢も出土している。その他には染付碗、灰釉徳利等の小片を見られる。

時期的には、染付類、徳利から18世紀後半～19世紀前半に比定される。

第175図4～16, 第176～185図 : E 8-5号土坑

総量は約150点とかなり多量に出土しており、遺存も比較的良好であり、完形の物が多い。

碗・皿類は比較的多く出土しており、遺存もかなり良好である。碗は肥前染付、瀬戸・美濃、京都系が大半を占める。染付は主として小型の丸碗であり、他に青磁染付等の筒碗も見られる。京都系は主として若松文碗であり他に色絵丸碗等も見られる。瀬戸・美濃は多種出土している。灰釉碗、柳茶碗、刷毛目碗の他緑釉碗、鎧手碗も見られる。皿は染付が多く、凹形高台の皿もかなり出土している。他は瀬戸・美濃の御深井釉調の皿、太白手皿である。

鉢類では染付小鉢、志戸呂系蓋物の他は瀬戸・美濃である。多くは小鉢類であり遺存も良好である。備前系搦鉢も出土している。壺・水注等は瀬戸・美濃であるが、土瓶は多様な産地が見られるが確定しがたい、蓋も多様であり、陶器の山形蓋・落し蓋が主である。

徳利はかなり出土しており、完形も多い。大半は瀬戸・美濃の灰釉徳利であり、大形が比較的多い。体部には点状釘書きが見られるが、生産地で施すへう文字も見られる。体部は寸胴形であり、大形には肩部に数本の条線を有する。その他志戸呂の徳利も少量出土しており、体部及び底部に墨書が見られる。作りは粗雑である。

灯火具は土器及び瀬戸・美濃の鉄釉製品が主であり、志戸呂の受皿も見られる。土器製の灯明皿は施釉されており、受皿・台脚付もかなり見られる。また乗燭は無釉で小形である。鉄釉灯明

皿も受皿がかなり出土している。火鉢類は少量であり、主として瓦質土器である。火鉢の他風炉・火入が見られる。その他少量の焙烙が出土している。

第185図7の鉢は十能かもしれないが、見込に印刻があり、「楽」の可能性もある。胎土は土師質であり、楽焼系統か。その他碗・鉢等に墨書が見られる。碗は若松碗を主として一字、普通であり、個人名と思わせる。第185図3の香炉は「鳥（嶋か）幸右衛門」と読めそうであるが明瞭ではない。

他の遺物では玩具類、石製品等も比較的多いが、用途不明の製品がかなり見られる。石製品では硯の他板状石製品が見られる。

時期的には18世紀後半～19世紀前半であるが、若松碗、徳利等に新しい様相も見られ、比較的新しい時期を主体としよう。

#### 第186～204図、第205図1～6：E7-3号土坑

総量は約250点と多量出土しており、遺存も比較的良好であり、ほぼ完形の物が多い。

碗・皿類はかなり出土しており、遺存も大半は良好である。碗類は多く、主として肥前、瀬戸・美濃、京都系に集中する。肥前の物では大半は染付碗であるが、一部色絵碗等が見られる。多くは小形の丸碗であるが、筒碗も比較的多く、広東碗も出土している。瀬戸・美濃の物では灰釉碗が集中しており、大きさにかなり差がある。他に柳茶碗、刷毛目等が見られる。京都系は若松文が主であり、大形が多い。また「岩倉山」銘の印刻がある碗があり注目される。若松碗等の高台内に墨書が見られ、個人名と思われるがあまり多くはない。皿は比較的少なく大半は肥前の染付皿である。鉄釉磁器皿は時期的に類例が少なく珍しい。瀬戸・美濃では灰釉皿等の他馬ノ目皿も見られる。

鉢類では瀬戸・美濃が大半である。灰釉平鉢・浅鉢や捏鉢が主として出土している。灰釉蓋物も出土しており、墨書も見られる。肥前では色絵蓋物、白磁小鉢等が出土している。摺鉢は少量であり主として備前系であるが、瀬戸・美濃の小形摺鉢も出土している。

徳利は多量出土しており、完形も多い。大半が瀬戸・美濃の灰釉徳利であり、大形が多い。体部は寸胴形であり、大半は釘書きが見られるが、点状より連続状の釘書きが多い。大形には肩部に数条の条線を有する。また太首もかなり含まれる。他には鉄釉の油徳利、志戸呂の徳利は少量出土している。志戸呂の徳利は大形で底部等に墨書を有する。口縁は玉縁状である。

水注は少量であるが瀬戸・美濃の灰釉水注と京都系の色絵水注が出土している。土瓶は瀬戸・美濃や京都系色絵土瓶以外の物が多いが産地は特定しがたい。壺は少量である。壺には瀬戸・美濃の小形双耳壺が出土している。仏道具・仏花瓶等では瀬戸・美濃の掛分仏花瓶以外染付である。

土器製品も多量出土しているが、焙烙・火鉢等・灯火具が特に多い。しかし焙烙は身の遺存はあまり良好ではない。火鉢類は、土師質、瓦質、赤彩と多様であるが、比較的瓦質が多い。火鉢・風炉等の他火入、焜炉等が見られ、瓦質には体部に型押文が多く施文されている。第204図1は上部のみ遺存の為全体は不明だが、窓を有する等おそらく手焙りであろう。遺存部分全体に釘書き

が見られる。判断しがたいが「山」「巳」「尺」等多様な文字が読める。灯火具は灯明皿・灯明受皿・台脚付の他乗燭も多く、また瀬戸・美濃の鉄釉皿もかなり出土している。

他の遺物では玩具類、石製品等も比較的多く、石製品には硯・砥石以外に特殊な物出土しており、板状石製品の側面に刻字した物も見られる。

時期的には18世紀後半～19世紀前半であるが、灰釉碗、若松碗等の碗・皿類、徳利等に古い様相が見られ、主体は古手の時期であろう。

#### 第205図7～16：E 7—5号土坑

総量は数10点と多くは出土していないが、遺存はかなり良好である。大半は大量のカワラケや魚骨と伴出しているが、上層と下層に分れる。これらはほぼ完形の物が多い。

大半は碗類であり、特に染付碗が主体である。他は京都系や瀬戸・美濃の灰釉碗等が見られる。皿も染付皿が主である。徳利では志戸呂以外瀬戸・美濃と小片が見られる。

他には肥前の鉢類、瀬戸・美濃の播鉢が出土している。時期的には碗類から18世紀前半を主体としよう。

#### 第206図1～3・8：E 7—6号土坑

総量は10数点と少なく、ほぼ完形の物も見られる。

碗・皿類は比較的多く出土しており、肥前の刷毛目碗の他染付碗・皿、瀬戸・美濃の掛分碗の他灰釉碗、その他呉須手碗等が出土している。掛分碗の高台畳付部分には印刻が見られる。

鉢類では肥前の象嵌鉢の他瀬戸・美濃の播鉢が出土している。徳利類では志戸呂の徳利の他、瀬戸・美濃の鉄釉徳利等が出土している。

時期的には、碗・皿類及び徳利等から18世紀前半～中葉に比定される。

#### 第206図4～7・9，第207図1～10：D 7—1号土坑

総量は数10点と比較的多く出土しており、ほぼ完形の物も多い。特に下層からの出土が遺存良好である。

碗・皿類が比較的多く、特に肥前の染付碗・皿が多い。筒碗も1点出土している。文様は梅文、草花文等であり、見込には印判による五弁花も見られる。他に肥前の山水文系の皿、瀬戸・美濃の灰釉碗等が出土している。

鉢類では瀬戸・美濃の灰釉片口、播鉢片等が出土している。他には瀬戸・美濃の灰釉徳利、印判により桐文を有する染付仏飴具、京都系色絵鬘盤片等が出土している。また土器では小形の播鉢や火鉢等が出土している。

時期的には、碗・皿類等から18世紀前半を主体とし、染付筒碗等の出土から中葉頃に下がる。

#### 第207図11，第208図，第209図1・2：D 8—7号土坑

総量は10数点と少ないが、ほぼ完形の物も見られる。

碗・皿類は比較的多く出土しているが、肥前産を主体としている。碗類では刷毛目碗、印刻を有する山水碗等が出土している。皿類では緑釉皿、印判の五弁花を有する染付皿等が出土してい

る。

徳利もかなり多く出土しており、大半は瀬戸・美濃の灰釉徳利であるが、鉄釉徳利や志戸呂の徳利も出土している。他には瀬戸・美濃の灰釉鉢等、土器では焙烙等が出土している。

時期的には、碗・皿に17世紀後半以後の遺物を含むが、大半の碗・皿類、徳利等から18世紀中葉頃に比定されよう。

#### 第209図3～5：D 7-2号土坑

総量は約10点と少なく、大半は小片である。

碗・皿類では瀬戸・美濃の鎧手碗、灰釉皿も出土している。他には灰釉碗、染付碗・皿等の小片が見られる。

徳利では瀬戸・美濃の灰釉徳利が出土しており、他には志戸呂の徳利片も見られる。

時期的には、碗・皿及び徳利から18世紀後半頃に比定されよう。

#### 第210図1：F 7-3号土坑

陶磁器類は1の青花小碗のみであり、他は瓦片等が出土している。

青花小碗は口縁部を欠損しているが、底部は完存しており、高台内無釉でカナ目が見られる。明末～清初の時期のものである。

#### 第210図2：G 7-7号土坑

総量は数点と極めて少なく、大半は小片である。

2は瀬戸・美濃、京焼風碗である。高台内に、おそらく亀甲の枠に「清」の印刻が見られる。その脇には微かではあるが、同じ印刻と思われる痕跡が見られる。一度目が薄い為に押し直したものであろう。他には志戸呂の徳利片も出土している。時期的には不明瞭であるが、おそらく18世紀前半に比定されよう。

#### 第210図3～14, 第211図1・3～7：F 7-6号土坑

総量は数10点と多くはないが、遺存はかなり良好であり、ほぼ完形の物も見られる。

碗・皿類はかなり多く出土している。碗類では瀬戸・美濃が主体である。灰釉碗・掛分碗や京焼風碗等が出土している。京焼風碗は高台内に「清」の印刻を有する。肥前は染付碗の他・染付皿が出土している。

鉢類では染付鉢・蓋物の他、瀬戸・美濃の播鉢が出土している。徳利は完形の灰釉徳利の他鉄釉徳利や志戸呂の徳利も出土している。その他には水滴片や焙烙の蓋等も見られる。

時期的には18世紀前半～中葉となろう。

#### 第212～222図, 第223図1～5：E 8-2号土坑

総量は約150点と多量に出土しており、ほぼ完形の物もかなり見られ遺存は良好である。焼土と共に出土しており、大半が被熱している。特に顕著に被熱している物は、かなり変形あるいは表面が剥離している。

碗・皿類はかなり多く、特に碗類が多く出土しているが、大半は特異な碗である。これらは茶

碗と思われるが、現状では類例を知見しない。形態には各々相違があり、同一形態の物は見られない。また多少変形している物も比較的多い。主として丸形あるいは筒形が見られるが、平形の物も出土している。口縁部も直立する物が多いが、外反あるいは内湾する物もあり、その他片口状に作る物、方形状の物等も見られる。一方胎土は砂粒を含みやや緻密で、色調は灰褐色とほぼ類似し、釉調も同様である。また高台も一部を除きほぼ方形で、高台内は多くは縮面状である。故に生産地はほぼ同一であろう。文様は鉄絵による草花文・幾何学文等の他刷毛目、象嵌等多様な様相が見られる。特に注目されるのは鉄絵による和歌書きが5点出土していることである。完存の物はなく、一部のみの物も有り全てが判読できるわけではないが、全文を推定できた物もある。第213図3は「君可為め春日野に出而和可奈漬む我衣てに雪者ふり□□」と判読できる。この和歌は「古今和歌集」(910年頃成立の勅撰和歌集、撰者紀貫之等)収録の光孝天皇の和歌を写したものである。第213図9は「春日野の己可奈漬 為や白妙乃袖ふり奈へて人乃行羅ん」と判読できる。この和歌も同様に「古今和歌集」収録の紀貫之の和歌を写したものである。第213図6は「も春辺に奈 者佐囹可河波乃者囹 (以下欠損)」、第213図11は「ま□ □こし□ □為れ可(以下欠損)」、第213図12は「□鳥乃□により 囹 □奈く八□ □まし」と各々判読できる。後三者は末読な部分が多く本歌を特定できないが、前二者と同様にやはり著名な和歌を写したものと思われる。

以上形態・文様等これらの茶碗は量産品ではなく、特別に注文生産された可能性が高い。あるいは茶人自身使用する茶道具を製作することがあり、これらの茶碗も茶人により生産された物の可能性もある。和歌書きの存在、特その文体から後者の可能性も棄てがたい。この茶碗の注文主あるいは製作した茶人が、廃棄時の所有者とどのように関係するかは明らかにするのは困難ではあるが、茶道具は財産的価値もあり、収集あるいは贈答ということがかなり行なわれるものであり、状況により移動する可能性も高い。またその為にも伝世する可能性が高い物である。

他の碗類は極く少量であり、「朝日」銘を印刻する京都系の碗、肥前の染付碗、白磁碗、山水文の碗等が出土している。

皿類では大半が染付の小皿ではあるが、中皿も比較的多く見られる。文様は唐草文、草花文等で、見込には印判の五弁花が見られる。他に肥前の波状口縁等の緑釉皿や瀬戸・美濃の灰釉皿等も少量出土している。

鉢類では肥前の青磁鉢、象嵌鉢、刷毛目鉢、備前系あるいは志戸呂系の鉢、瀬戸・美濃の鉄釉片口等が出土している。播鉢では瀬戸・美濃や信楽系が出土している。蓋物では肥前の色絵、同文等の染付等が出土している。

徳利等も比較的多く、瀬戸・美濃、志戸呂段や備前系の徳利が出土している。第221図4は瀬戸・美濃の鉄釉徳利であるが、肩部に条線を二外有し古い様相を示す。備前系徳利は底部に印刻を有する物が多い。壺類では小形の肥前の染付・白磁壺が見られるが、大形の四耳壺で、おそらく「葉茶壺」と考えられる壺が出土している。主として胎土に長石を含む物は信楽系であろう。

その他瀬戸・美濃の風炉（？）葉研，花生や樂焼系の花生等が出土している。第222図2の樂焼系の花生には体部上半に，銅製の把手が付いている。

また土器では建水あるいは灰器と思われる鉢が出土しており，第223図1は体部に菊花を印刻した方形状の物である。他には風口，手焙と考えられる物等が出土している。

時期的には壺等一部17世紀中葉の物を含むが，皿類等から主体は17世紀後半～18世紀前半である。

本土坑からは他に良質な茶臼も出土しており，茶壺や花器等も含まれ，全体としてかなり上質な茶道具の一括資料と考えられる。茶道具等は一般的に伝世しやすく，特に高級な物ほどその可能性は高い。故に一括資料であっても生産年代に差が見られるが，本資料の多くは比較的時期幅がある可能性があり，使用年数がどれほどであるかは明瞭ではない。

#### 第223図6～12，第224～226図，第227図1：F 8—3号遺構

総量は約50点とかなり多量に出土しており，ほぼ完形の物も多く比較的良好である。大半が被熱しており，一部は被熱が著しい。

碗・皿類のかなり多く出土しているが，碗類はあまり多くはない。肥前磁器は同形同額が何個体か出土しており，基本的にな6個で1組となるようである。主として肥前磁器が出土しており，瀬戸・美濃は少量である。

碗類では色絵碗，染付八角碗，山水文碗，呉須手碗等が出土している。皿では染付皿が小・中形と出土している。型打染付皿や白磁皿も見られる。また瀬戸・美濃の長石釉皿も出土している。

鉢類では肥前系「清水」銘の印刻を有する小鉢が出土しており，組物である。形態は類例が見られず，肥前産とは断定できない。播鉢は少量でありしかも口縁部小片である。いずれも瀬戸・美濃である。

壺では四耳壺が出土しており「葉茶壺」と思われる。信楽系及び志戸呂産が見られ，また志戸呂の壺も遺存している。

他には焙烙が出土しているが，土器は少量である。

「葉茶壺」の出土等から茶道に関わる遺物群と考えられなくはないが，これらの陶磁器類が必ずしも茶器と考えなければならない様相はない。時期的には主として皿類から17世紀後半となろう。

#### 第227図2～16，第228図1～5・8・11：F 8—1号土坑

総量は数10点と多く出土しており，遺存はかなり良好である。カワラケ・魚骨が集中して出土しており，陶磁器類の出土も主としてカワラケ等と伴出しているが，それより上層からもかなり出土している。これらは完形の物が多い。

碗・皿類はかなり多く遺存も良好である。主体は肥前染付碗・皿であり，日の字鳳凰文の皿も出土している。他は京都系色絵碗，小片では瀬戸・美濃の灰釉碗も見られる。

その他では象嵌鉢，染付壺・仏花瓶あるいは瀬戸・美濃の徳利等が出土している。

時期的には17世紀後半を含むが主体は18世紀前半～中葉である。

第228図6・9：F 8—2号土坑

総量は約10点と少なく、大半が小片である。

6は肥前の染付蓋物である。9は呉須手の碗である。その他には染付碗、皿類、あるいは瀬戸・美濃の鉄釉徳利、香炉等の小片が出土している。時期的には碗等からおそらく、18世紀前半～中葉に比定されよう。

第228図7・10・12・13：G 8—1号土坑

総量は約10点と少なく、大半は小片である。

碗・皿類は比較的多く出土している。肥前の染付碗が主であり、山水文を有する。他には瀬戸・美濃の掛分碗等の小片も出土している。鉢類では瀬戸・美濃の播鉢底部片が出土している。また刷毛目鉢等の小片も出土している。

時期的には碗等から18世紀前半～中葉に比定される。

B～H=9～11区遺構出土の陶器・磁器・土器

第229図1・2：B 9—4号土坑

総量はかなり少なく、遺存もあまり良好ではない。

図示は肥前の染付皿及び瀬戸・美濃の香炉である。他には瀬戸・美濃の灰釉徳利、土瓶等の小片が見られる。時期的には18世紀後半～19世紀前半となろう。

第229図3・4：B 9—5号土坑

陶磁器類は図示のみであり、遺存もあまり良好ではない。

3は灰釉の碗で口縁部に青釉掛してある。4は染付香炉類であり、線香立てであろう。足は三足が付くと思われる。時期的には18世紀後半～19世紀前半であろう。

第229図5：C 9—6号土坑

総量は約10点と少なく、大半が小片である。

5は備前系播鉢であり、口縁部は二条帯を有しやや平坦である。時期的には明瞭ではないが、播鉢から18世紀後半頃に比定されよう。

第229図8：C10—4号土坑

総量は数点と少なく、遺存もかなり悪い。

8の播鉢は備前系であり口縁部片である。浅い片口を有し、そこに扇様枠に「上中」の印刻が見られる。口唇はやや丸みを有する。他には染付碗、青磁皿、火鉢等の小片が見られる。時期的には18世紀～19世紀にかけてである。

第229図6・7・9～17：B10—2号土坑

総量は数10点出土しており、ほぼ完形の物も見られる。

碗類が多く出土しており、大半は肥前の染付碗である。文様は梅文、印判による菊花文、草花

文等である。他に刷毛目碗等が出土している。皿も肥前の皿が主であり、五弁花を見込に有する染付皿、山水文皿等が出土している。他には口縁部小片であるが、中国産青花皿も出土している。

その他玩具類の土製品であるが、饅頭状で上面に印刻を有する用途不明の物が出土している。時期的には、碗類から18世紀前半～中葉に比定される。

#### 第230図 1・2 : D 9—3号土坑

総量は数点と少量であり、遺存もあまり良好ではない。

1は肥前の染付皿である。見込に蛇ノ目釉剥ぎが見られる。2は灰釉灯明受皿である。他には染付碗等の小片が見られる。時期的には18世紀後半～19世紀に比定される。

#### 第230図 3・4 : E 8—3号土坑

総量は約10点と少なく、遺存も悪い。

4は青磁皿の体部片である。3は土器の灯明受皿である。無釉である。その他には染付碗、青磁碗、灰釉蓋物の小片が出土している。時期的には18世紀中葉～後半に比定される。

#### 第230図 5 : D 9—5号土坑

総量は数点と少量であり、遺存もかなり悪い。

5は志戸呂の徳利の口縁部片であり、肥厚している。他は火鉢片のみ出土している。時期的には18世紀後半となろうか。

#### 第230図 6・7 : E 9—1号土坑

総量は約10点と多くはなく、遺存も良好ではない。

6は肥前の白磁壺で大形である。頸部を欠損する。7は瀬戸・美濃の灰釉徳利であり上半を欠損する。他には京都系碗、青釉土瓶等が見られる。以上から時期的には18世紀後半～19世紀前半と思われる。

#### 第231図 1～5 : D11—5号溝

総量は数10点と多く出土しているが、遺存はあまり良好ではなく、大半は小片である。

碗・皿類は比較的多く出土しているが、遺存は良好ではない。京都系色絵碗、瀬戸・美濃の灰釉碗の他肥前染付碗皿、呉須手碗が見られる。

その他では鉄絵小鉢、灰釉餌入、灯明受皿の他、鉄釉徳利、備前系播鉢等も見られる。時期的には碗・皿類等から18世紀前半～中葉を主体としよう。

#### 第231図 6～20, 第232図 1・2 : E11—1号土坑

総量は約50点出土しており、ほぼ完形の物もかなり多い。

碗・皿類はかなり多く出土している。特に碗類は肥前産を主体に多く見られるが、染付等磁器は少量である。染付では葉文を有する碗、白磁小碗等である。主体は鉄絵山水文を有する碗であり、高台内に様々な印刻を有する。胎土は緻密であり、暗褐色を帯する。他に呉須手碗が見られる。瀬戸・美濃では鉄釉・灰釉小碗が出土しており、また志戸呂の鉄釉掛分碗も出土している。鉄釉と灰釉を左右に掛分けている。



皿類では多様な物が出土している。肥前産では、見込に角福文を有する小皿や、高台内に「年製」銘を有する皿が見られる。「年製」銘の皿は見込に段を有している。その他緑釉皿等も出土している。第231図20、第232図1は特殊な形態の皿である。20は口縁部が水平に外折し方形を呈し、各角に瓢箪形の穿孔があり、各辺に平行に条線が見られる。1は口縁部の一端が内傾し、隣接して穿孔を有する。共に高台が小さく丸みを呈し、胎土はやや緻密で暗褐色を呈する。志戸呂産に類似しているが、類例を知見せず、産地は不明である。

第232図2は高台内に楕円形枠に「御室」の印刻を有し「京焼」の皿であろう。胎土は非常に緻密であり淡褐色を呈する。内面の釉は青味を帯、やや厚手である。他に瀬戸・美濃の灰釉皿等が出土している。

遺構外の遺物(第232図3～16、第234図)に触れる第232図5は中国産の大皿と思われる底部片である。かなり厚手であり、高台は外側が削られ三角形を呈し、畳付は極めて狭い。胎土は非常に緻密で平滑である。高台内を除き瑠璃釉を厚目に施釉し、白釉で外面に圏線を描き、内面に文様を描く、極めて類例の少ない物であるが、伝世資料である「大明宣徳年製」銘を有する白花牡丹文皿と同一の皿と推測される。

他の器種は少ないが、瀬戸・美濃の播鉢・水注・蓋等が出土している。蓋にはその他肥前の染付蓋や青磁蓋も見られる。第232図8は瀬戸・美濃の灰釉蓋であるが、長方形の板状であり、上面に皿足の銚痕を有する。また染付仏餉具等も出土している。その他には刷毛目鉢、灰釉徳利片も出土しているが、徳利はほとんど見られない。

土器では焙烙や火鉢類が出土している。焙烙は体部が直立気味で内耳を有さない種類であろう。火鉢は長方形で口縁は内側に折れ、底部にはおそらく皿足を有しよう。また獣面付の土器片もおそらく火鉢であろう。口縁は内面に折り返えされている。

時期的には、明瞭でない物もかなり見られるが、碗・皿類等から17世紀中葉を含むが、主体は17世紀後半である。

(小俣 悟, 津野 仁, 菅谷 通保, 石井 聖子)

### 法学部地点出土陶磁器類のまとめ

近世史研究において従来文献史学を中心に進められ社会状況もかなり解明されている。しかし生活等の分野では未解明な部分が多いが、最近の考古学的調査により除々に解明されている。特に陶磁器類を中心とした遺物が、生活解明に果す役割は大きい。

従来も陶磁器類の研究は行なわれていたが、骨董的観点から中国産等輸入陶磁器及び肥前産、瀬戸・美濃等の優品あるいは茶・花道具等の趣味的な特殊な物への美術的研究が中心である。最近では生産地の調査が増加し、瀬戸・美濃の陶器、肥前の陶磁器を中心に研究が進展している。しかし大半は中世との関連から17世紀代を対象としており、肥前産及び瀬戸・美濃産においてようやく18世紀以降が追及されつつある。また消費側においては、多量の資料を生産地の研究に対比することが主であり、独自の研究は未だ不十分である。

ここでは消費地出土の陶磁器類の特徴をまとめることで、陶磁器研究の一助としたい。尚陶磁器類の器種の特徴、年代観等については、肥前及び瀬戸・美濃を中心とした生産地側の研究、更に近世遺跡の調査等を参考にしている。

消費地遺跡における遺物の研究として重要な面は、まず時期的な様相を明確にすることである。それにより当時の生活や社会状況等を解明することできよう。遺物の時期的様相を明確にする為には一括出土遺物の検討が必要である。

法学部地点においては多数の遺構から陶磁器類が出土している。中でも地下式土坑及び井戸等から多くの陶磁器が出土しており、一部少片を除いて大半は遺存良好である。遺存良好な陶磁器類は火災によると思われる被熱した状態を示す遺物群も見られる。

以下量的に多く、遺存良好な物を多く見られる遺物群を中心に肥前の研究、徳利を中心とした瀬戸・美濃の研究、焙烙等の土器の研究成果を援用し、遺物群の時期的様相を検討したい。現状では大別して5時期に区分されるが、個々の遺物の詳細な検討から更に細分される可能性もあり、今後の課題としたい。

**第I期** 瀬戸・美濃の灰釉系徳利（いわゆる高田徳利、貧乏徳利）出現以前の段階である。肥前磁器では型紙摺り、印判文の染付が見られず、型打ち成型皿が見られる。

碗・皿類を中心に肥前が多いが、皿は少ない。碗は白磁碗、天目茶碗等も見られ、高台が高い。染付皿は貼付高台もある。他に瀬戸・美濃の長石皿、菊皿等も見られる。その他赤絵一重網目文の小碗、京焼風陶器と見られる。京焼風陶器は小鉢であり、浅い高台内に「清水」の印刻を有する。

搗鉢は瀬戸・美濃の茶褐色鉄釉搗鉢の他、信楽系搗鉢が見られる。壺類では信楽及び志戸呂の四耳壺が見られる。

土器では土師質の焙烙が出現しているが、体部は直立気味である。内耳を持たない。

F 8—3号遺構、G 6—2号土坑、C 2—2号土坑等の陶磁器類が該当するが、多くが被熱している。量的に少なく全体的な様相は明確にできない。

**第II期** 瀬戸・美濃の灰釉系徳利が出現した段階であり、志戸呂の徳利を伴出する。肥前の碗・皿類では型紙摺り、印判文染付が見られ、京焼風陶器が一般的である。

碗類は磁器は多くはなく染付が主である。肥前陶器が中心であり、鉄絵山水文の京焼風碗は高台内に「清水」等多様な印刻を有する。更に京焼風呉須手碗が見られ、高台内は湾曲している。他に特殊な物として象嵌・刷毛目の茶碗が多量に出土している。小碗・猪口では染付が中心であるが白磁等も見られる。また瀬戸・美濃の灰釉碗も出現しており、大型で器高が高い。

皿類はあまり多くはないがやはり肥前産が中心である。染付では見込に五弁花を有する物がある。高台内を印刻を有する京焼風山水文皿の他、見込を蛇ノ目状に釉剥ぎする緑釉皿が多い。その他瀬戸・美濃産では菊皿・灰釉皿も見られる。

鉢類では染付・赤絵の蓋物、象嵌手の鉢が見られ、象嵌手の鉢は高台内外端が削がれている。

瀬戸・美濃の片口が見られ、片口部分は上向きであり、鉄釉はこの段階では全体的に黒味が強い。

播鉢は瀬戸・美濃の鉄釉播鉢、信楽系播鉢が見られる。

徳利が見られる。瀬戸・美濃では輪高台で肩部に条線（二重が主）を有し鉄釉に灰釉を掛ける大型の物と、碁笥底で灰釉掛けの小型の物が見られる。他に口縁部に鉄釉を掛ける志戸呂産の大型徳利、底部に印刻を有する備前産の小型の徳利も見られる。共に口縁部は外反しナデ肩である。

壺類では染付、白磁の小型壺、信楽産の大型四耳壺が見られる。

仏具等では染付仏餉具、菊花文の鉄釉香炉、御深井釉鬘盥が見える。

土器では土師質焙烙や瓦質火鉢等が見られる。火鉢には方形もある。瓦燈も見られる。

E 8-2号土坑, E11-1号土坑, B 3-1b号土坑, C 4-1号土坑等の地下式土坑の陶磁器類が該当する。E 8-2号土坑の遺物は茶道具関係と推測され、茶碗等特殊な物も多い。また E 8-2号土坑等被熱する物も見られる。

**第Ⅲ期** 瀬戸・美濃の灰釉系徳利が増加し一般化する段階である。肥前染付では波佐見系のくらわんか碗が一般的である。

碗類は肥前染付を中心に多く出土している。染付は印判文、くらわんか等が見られる。高台は浅く小さい物が多く有田系である。また陶胎質染付もかなり見られる。京焼風陶器も見られるが、山水文碗は高台内に印判がなく、鉄絵・釉調も不鮮明な物が主体である。呉須手碗は高台内が平底気味である。他に現川系刷毛目碗も見られる。瀬戸・美濃産では灰釉碗が主であり、天目茶碗、掛分碗も見られる。天目茶碗は小型である。掛分碗は器高が高く、体部に指押が見られる。京焼系鉄絵碗も見られ、高台内に「清」の印刻を有する。

皿類もかなり出土している。やはり肥前産が中心で、染付は見込に五弁花を印判した物が主である。また山水文皿は碗同様高台内無印で、鉄絵等が不鮮明な物が主体である。他に見込蛇ノ目釉剥ぎの緑釉皿も見られる。瀬戸・美濃では灰釉、御深井釉摺絵皿が一般的である。他に小片の青花皿も見られる。

鉢類では肥前の象嵌手鉢、瀬戸・美濃の灰釉鉢等や鉄釉片口が見られる。この段階の鉄釉は全体的に黄味が強く飴釉である。

播鉢では瀬戸・美濃の鉄釉播鉢の他備前系播鉢も見られる。

徳利では瀬戸・美濃の徳利が一般的になり、鉄釉徳利は肩部の条線が1重になる。灰釉徳利及び志戸呂の徳利と共に口縁部の外反は弱くなり、ナデ肩も弱い。瀬戸・美濃の徳利の体部には釘書（幅広い）が見られ、志戸呂の徳利には墨書が見られる。他に瀬戸・美濃の鉄釉船徳利も見られる。

壺類は小型の双耳壺が見られる。瀬戸・美濃産で鉄釉、灰釉が見られる。

仏具等では肥前染付の仏花瓶・仏餉具、瀬戸・美濃御深井釉の線香立等が見られる。

焙烙は口縁部が内湾する物も見られ、体部が低い。内耳は体部に貼付されるが、内耳を持たない焙烙も増加している。内面底部に記号状の印刻を有する焙烙もある。また蓋といわれる物も一

一般的に見られるが、大小が見られ、小型に適合する身は見られない。

火鉢も増加し、土師質火鉢が一般的であるが大半は小型である体部は外傾するが、一部胴膨りの形態が見られる。また器高が高い形態があり、体部上位に一对の貼付けが見られる。底面には三足を貼付ける。瓦質方形火鉢も見られるが平面形は前期よりも方形に近い。口縁部は内折し、四足を貼付ける。他に正方形で無足の形態がかなり見られる。口縁部は外折し鏝状で幅広い。土師質で内面及び鏝の上面は磨かれ赤彩されている。火鉢の一般的形態とは異質であるが、民俗事例で炬燵の内部施設として使用されることもあるようである。

灯明具では志戸呂の灯明皿が見られるが、大半は土製である。灯明受皿もかなり見られ、土製は上から1ケの切込み、志戸呂産では窓状に一对見られる。他に施釉した特殊な秉燭も見られる。瓦燈も見られ、蓋外面は赤彩してある。

他には土製の植木鉢や香炉も見られ、底部に三足を貼付け土師質である。

大半の地下式土坑や井戸等が該当する。C7-2号土坑、C7-3号土坑、E7-5号土坑、F8-1号土坑等は多量のカワラケ、魚骨を地出ししている。その他ではB3-2号土坑、B7-2号土坑、D7-1号土坑、F7-6号土坑等があり、法学部4号館建設地区の主要な時期である。

**第IV期** 瀬戸・美濃の灰釉徳利が寸胴形の形態になり、多量に出土する段階である。肥前の染付碗では青磁染付碗、筒形碗、小型丸碗等が見られる。

碗類では肥前染付碗、瀬戸・美濃、京都系が大半である。染付碗は大半が小型の丸碗及小広東型碗である。筒形碗は極めて少なく、また広東碗も少量ではあるが出現している。文様では蛸唐草、二重網目、線描き等多様であるが、前期からの梅花文等は少ない。また内面口縁部に四方禰文が多く見られる。青磁染付筒型は大き目であるが染付筒形碗は小型である。全体的に小型化する状況で広東碗が出現するようである。一部は九谷産か。

瀬戸・美濃産では初め灰釉碗が残るが、器高が低く小型の碗が一般的である。掛分碗も小型化し、体部の指押は消える。体部が外傾し掛分けする鎧手碗も見える。また黒色鉄釉の拳骨茶碗も見える。体部が外傾する形態は他に柳茶碗、刷毛目碗、ルス釉碗が見られ、出土も多い、ルス釉は鎧手碗の内面にも見られるが、この時期から一般的に施釉される。

京都系では若松碗が多く出土する。初めは大き目であるが徐々に小型化し無文となる。また丸めの碗も見られる。これらは胎土が半磁器であり信楽産の可能性もある。他に小型丸碗で色絵笹文の形態も見られるが少ない。若松碗を主とし碗の高台内に墨書する例が多い。漢字1字あるいは2字で個人名と推測される。所有を表示するものであろう。

皿類は多くはなく大半が小皿である。肥前染付皿が主体であり、見込蛇ノ目釉剥ぎ、凹形高台の深皿等も多い。深皿の凹面はあまり深くないが、後出の形態は深くなる。青磁染付も見られる。高台内に渦福銘が見られるが崩れている。瀬戸・美濃の灰釉摺絵皿もかなり見られるが、摺絵は不鮮明である。

鉢類は主として瀬戸・美濃産である。「半胴甕」といわれる深めの鉄釉鉢が多く見られる。後出

の形態は小型である。植木鉢に転用される物もある。大型の捏鉢あるいは手水鉢といわれる鉢も見られるが多くはない。

播鉢は大半が備前系の播鉢であるが、かなり小型の播鉢片も見られ、瀬戸・美濃系である。

徳利は瀬戸・美濃の灰釉系徳利は大型も黄褐色となり小型と共に寸胴型となる。底部付近の釉拭取りも簡略となる。また大型の形態は肩部の条線が3本位となる。体部の釘書は細線となり更に点列となる。生産時におけるへう書きも出現しており、後には鉄絵文字となる。へう書きも釘書と同様に屋号であり、購入者の注問によるものであろう。志戸呂徳利も少量見られ、やはり寸胴形となる。他に瀬戸・美濃の油徳利が見られる。胴部がへこむ銹釉の徳利も見られる。灰釉系徳利を主に多量出土しており、飲酒等が一般的になったものと推測される。

土瓶もかなり出土しており、煎茶が一般化したものと推測される。瀬戸・美濃産以外に多様な産地の物が見られる。鉄釉系目土瓶、灰釉土瓶の他に摺絵土瓶、鉄釉厚手で胎土に小石を含む土瓶等がある。壺は鉄釉で主として瀬戸・美濃産であろう。水注は瀬戸・美濃産灰釉水注、京都系色絵水注が見られる。

壺類では瀬戸・美濃の灰釉双耳壺が見られるが小型化している。仏花瓶では瀬戸・美濃の鉄釉掛分仏花瓶が見られ小型化している。また肥前染付花瓶も見られる。

焙烙は多量に出土しているが完型になる物はない。口縁部は内湾が強く内側に肥厚する一方体部が低くなる。内耳を有する形態は少ない。

火鉢も多量に出土しており、瓦質が急増する。瓦質火鉢は磨かれ、器面に沈線や回転文を施す。土師質と共に口縁部が内湾し、口唇が肥厚気味である。土師質火鉢には器高の高い形態、赤彩して円筒状で器面に点列を施す形態もある。また体部を4ヶ所削る物もあり、箱状の物に收容して使用したことを示すのであろうか。口唇部の敲打痕は前期よりも顕著であり一般的に火入として転用されている。火入は瓦質と土師質が見られる。瓦質は無足で筒型で器面に回転文が見られる。土師質は口縁部が内湾し底面基筒状であり、赤彩されている。使用により多様化している。

風炉もかなり増加し瓦質である。多くは筒型であり一般的に内面に突起を貼付けて、器面に回転文を有する。他に瓦質焜炉も見られ、器面に回転文を有する。

灯明具類では瀬戸・美濃の鉄釉灯明皿・受皿が出現している。受皿の切込みは方形で1ヶ所であり、後出する形態は底径が小さい。土製は小型で施釉している。また台脚付灯明皿も土製で施釉している。乗燭は土製で小型であり施釉されている物もある。筒型の形態は小型化する傾向である。底部の刺込穴もなくなる。

その他瀬戸・美濃の灰釉蓋物・香炉、ルス釉植木鉢等が見える。

E 7-3・7号土坑、E 8-5号土坑等が該当し、E 7-3号土坑よりE 8-5号土坑の遺物群は若干新しい様相を示すようであり、遺構の切合からも認定される。

遺構数が少ない割に多量の遺物が出土し、特に碗・徳利・火鉢等は多く需要の多さを推測され

る。更に器種も多様化し生活の多様性を示すものであろう。また陶器の生産地が多様化し始めており、V期には磁器も拡散される。

第V期 瀬戸・美濃の灰釉系徳利では大型の肩部条線が消え、小型は底部無釉の段階である。磁器は端反碗が出現し広東碗も一般的であり、瀬戸・美濃も出現する。

碗類では肥前、瀬戸・美濃系の丸型の湯呑碗、端反小碗等が見られる。陶器では瀬戸・美濃の太白手碗等が見られる。

皿類では染付深皿の凹形高台が深くなる。瀬戸・美濃の太白手皿、馬ノ目皿等が見られる。

鉢類では瀬戸・美濃の手水鉢等が見られる。土製の鉢も見られ、白釉を施釉してある物もある。

徳利は瀬戸・美濃の灰釉系徳利では、大型は肩部の条線が消え、小型は底部付近に施釉せず、無釉部分に屋号等を墨書している物も出現する。頸部は短い。

土瓶は山水文土瓶等が見られる。また急須も出現するようになる。鍋では把手の付く行平が出現する。染付花瓶等も見られる。

火鉢類では瓦質火鉢等がわずかに見られる。

灯明具では瀬戸・美濃産あるいは信楽産と推測される灰釉灯明皿・受皿及び台脚付受皿が一般的である。

B7-1号土坑、B8-3号土坑等が刻当するが遺物量は少ない。

次に播鉢の様相を補足する。法学部4号館建設地区では主要な物としては瀬戸・美濃、信楽系、備前系が見られ、他に土製もあるが少ない。文学部3号館建設地区では更に肥前系そして志戸呂系と推測される播鉢も少量出土している。

瀬戸・美濃産は鉄釉播鉢であり、中世から近世初期は紫黒色を呈し、17世紀は黒味が強く、18世紀以降赤味が強くなる。口縁形態は内面の突起が17世紀には消え、三角状に折返し更に頸部に段を有する。18世紀には口縁部が長くなる。播目もまばらから17世紀にはかなり密になり、底面は渦巻状である。18世紀頃には播目は内面全体に見られ、底面は円弧と放射状で構成される。底部は糸切底である。

信楽系播鉢は無釉で体部がロクロ調整される形態と指頭を明瞭に残す形態がある。胎土は小石を含み信楽産、丹波産等が考慮されるが現状では、窯跡等の調査が不十分であり産地を断定できない。口縁部は17世紀には三角状であり、17世紀後半頃から備前系播鉢の影響からか板状となる。播目もまばらから密になる。

備前系播鉢は胎土が小石を含み粗く、備前産陶器と比較して雑であり、従来から産地に疑問が持たれていたが、形態等から備前系と推測されていた。しかし近年堺からこの種播鉢を生産していたと推測される遺跡が調査されており、堺産の可能性が高まっている。

基本的には無釉で板状口縁を有し、底部は平底であるが、一部施釉される形態や高台を有する形態が見られる。また底部にへう書きを有する物もあり、口縁部片口に扇形枠に「上」「長上」と印刻する例も見られる。近世前半は板状口縁が短かく口唇が丸く、内面の突出も明瞭であるが、

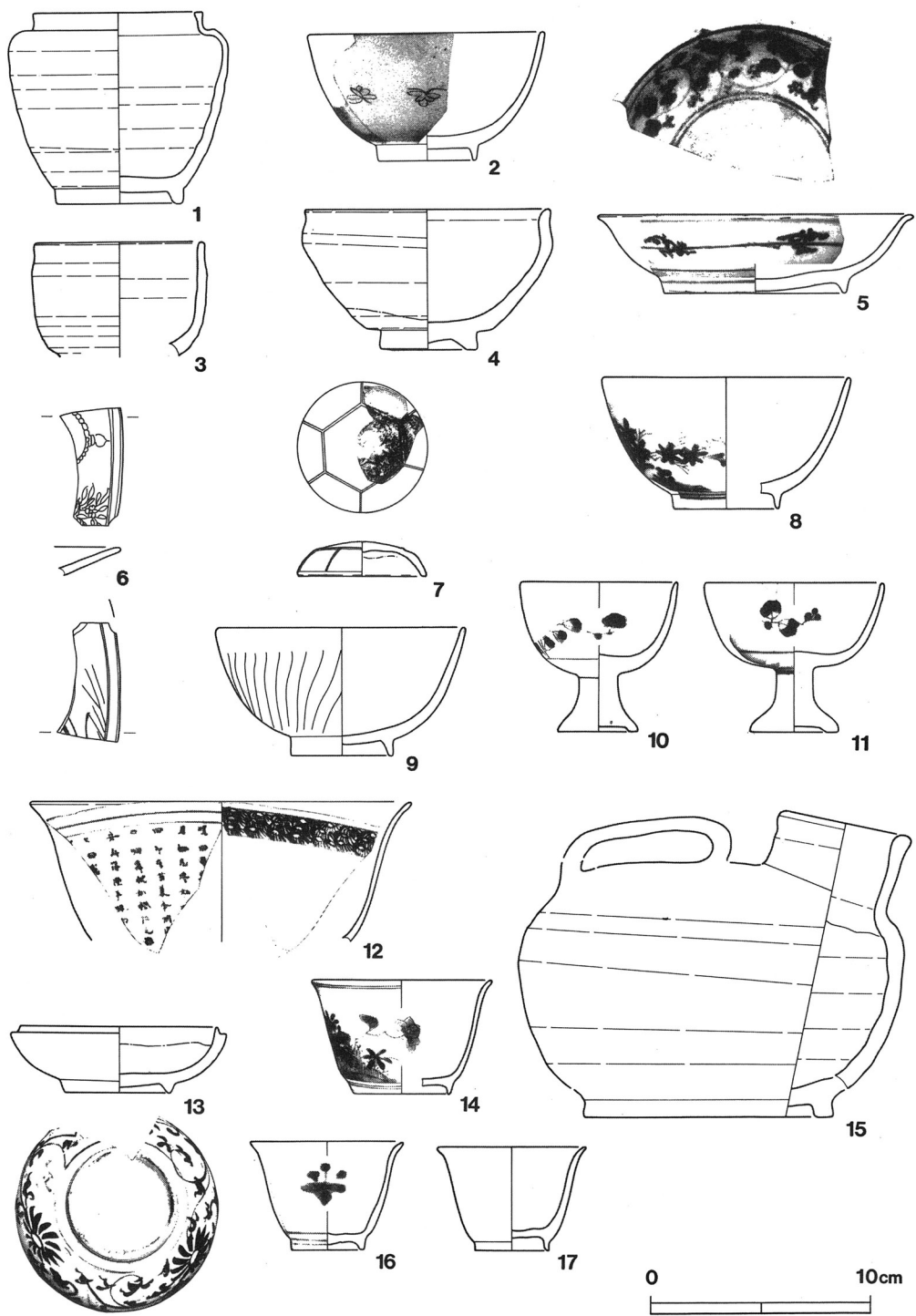
### 報告篇第三章 江戸時代の調査 I

後半は口縁下端が突出し、口唇が平偏となり、内面の突出も弱くなる。底面の播目が前半では3本を交差させるが、後半は3本の弧状に三角形を作る。更にその内1本の弧を内側に受けて施こすようである。文学部地区には小型の形態も出土している。

今回の調査においては、I～III期には瀬戸・美濃産播鉢が主体で、信楽系播鉢を伴出する。一方III期には備前系播鉢が出現し、IV期は備前系播鉢が主体となる。おそらく備前系播鉢の強度が重要な要因であろう。

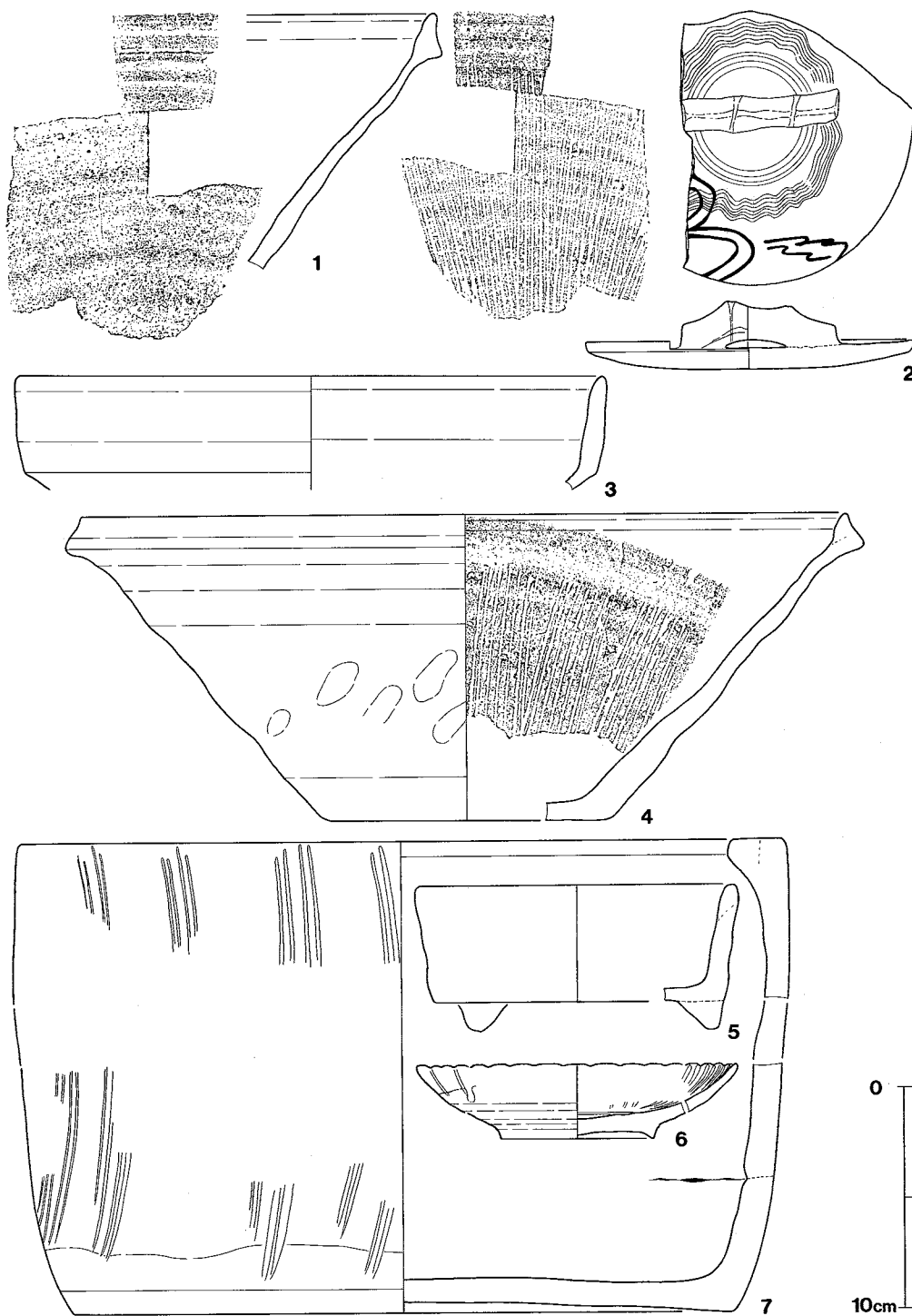
以上概略をまとめ時期的様相に不十分ながら言及した。近年の遺物研究及び銅銭の鑄造年代等からあえて年代を与えるならば、第I期は17世紀後半、第II期は17世紀後半～18世紀前半、第III期は18世紀前半～中葉、第IV期は18世紀後半～19世紀初頭、第V期は19世紀前半～中葉と推定される。

(小俣 悟)

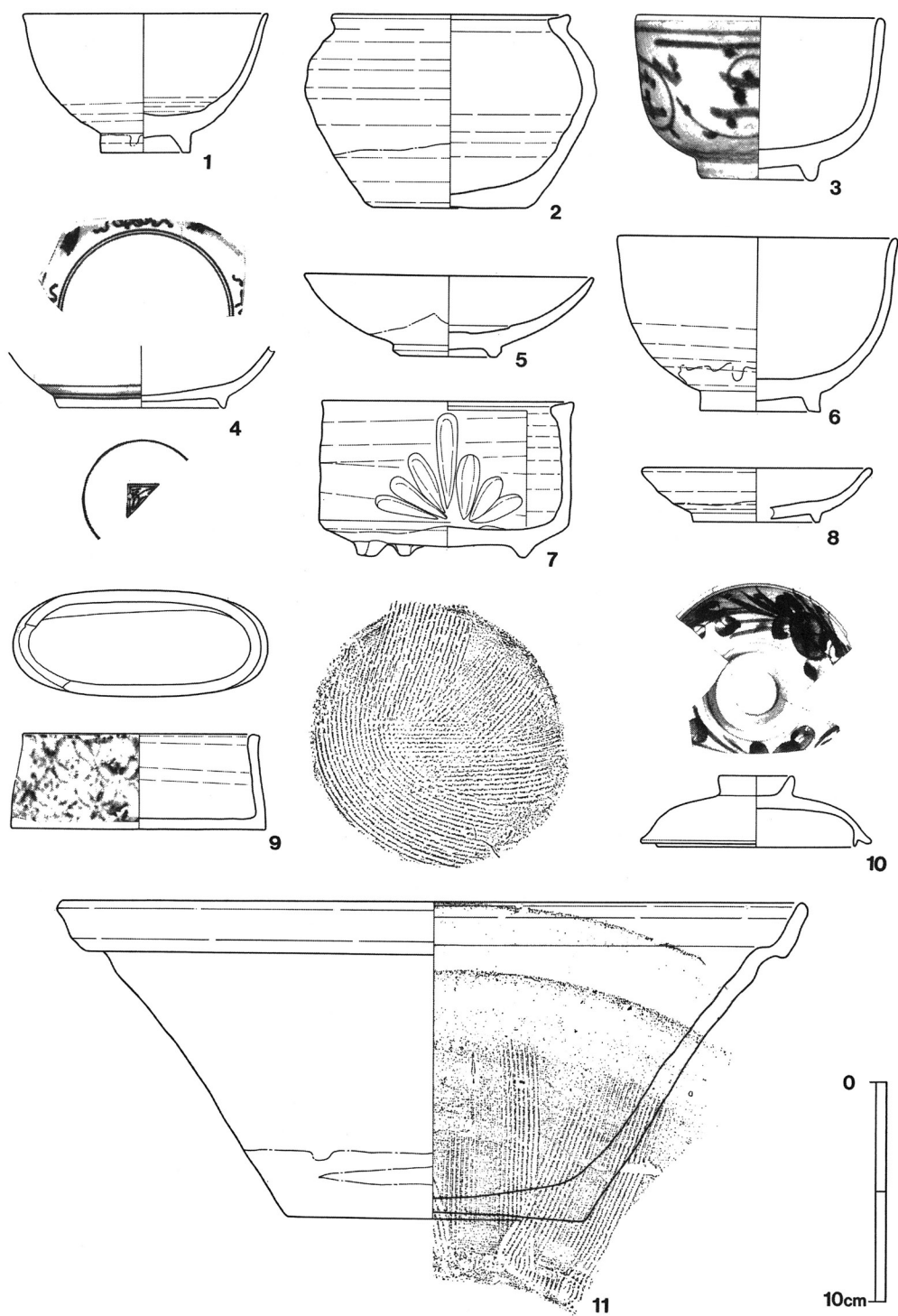


第149図 陶器・磁器・土器(1)

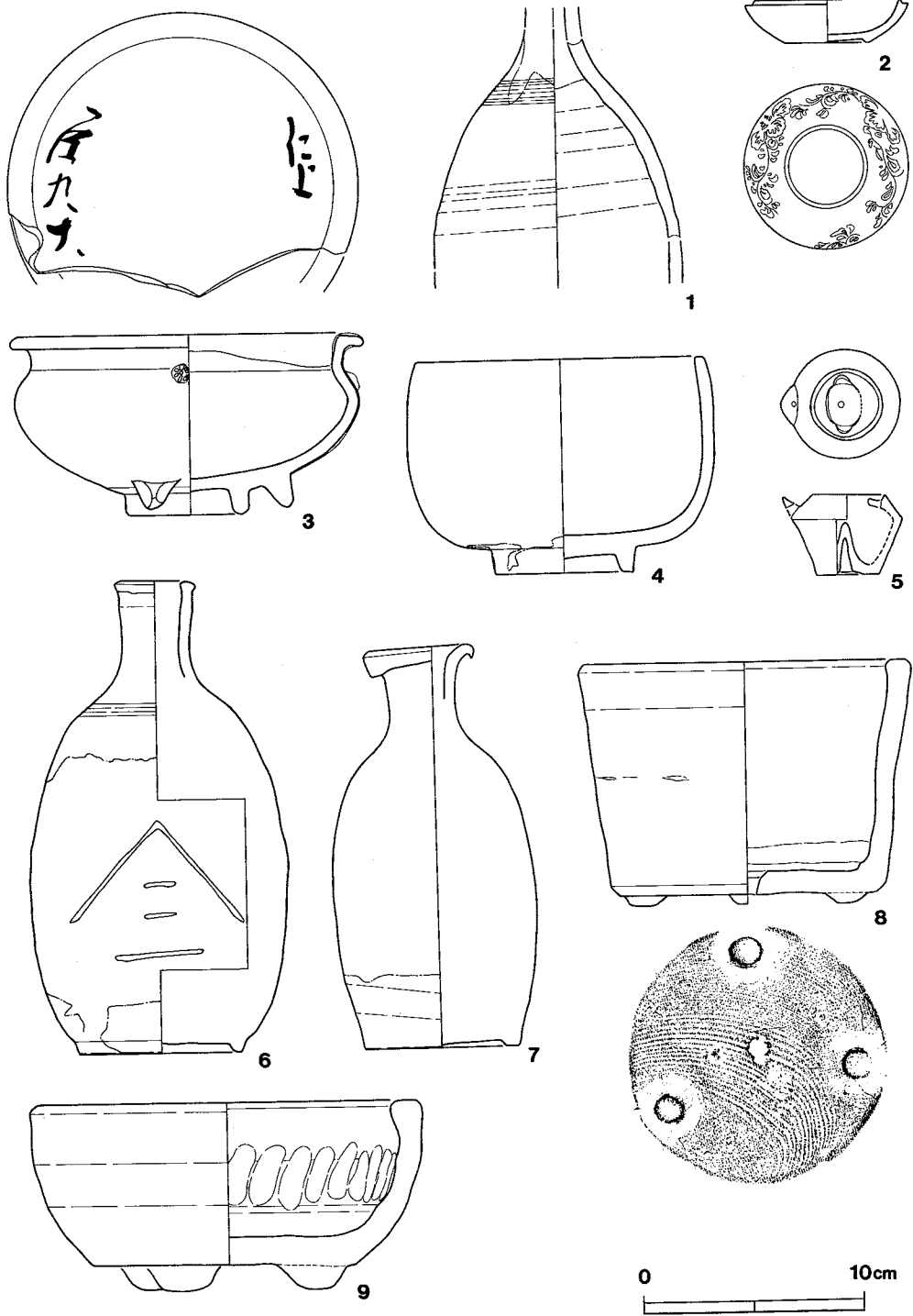




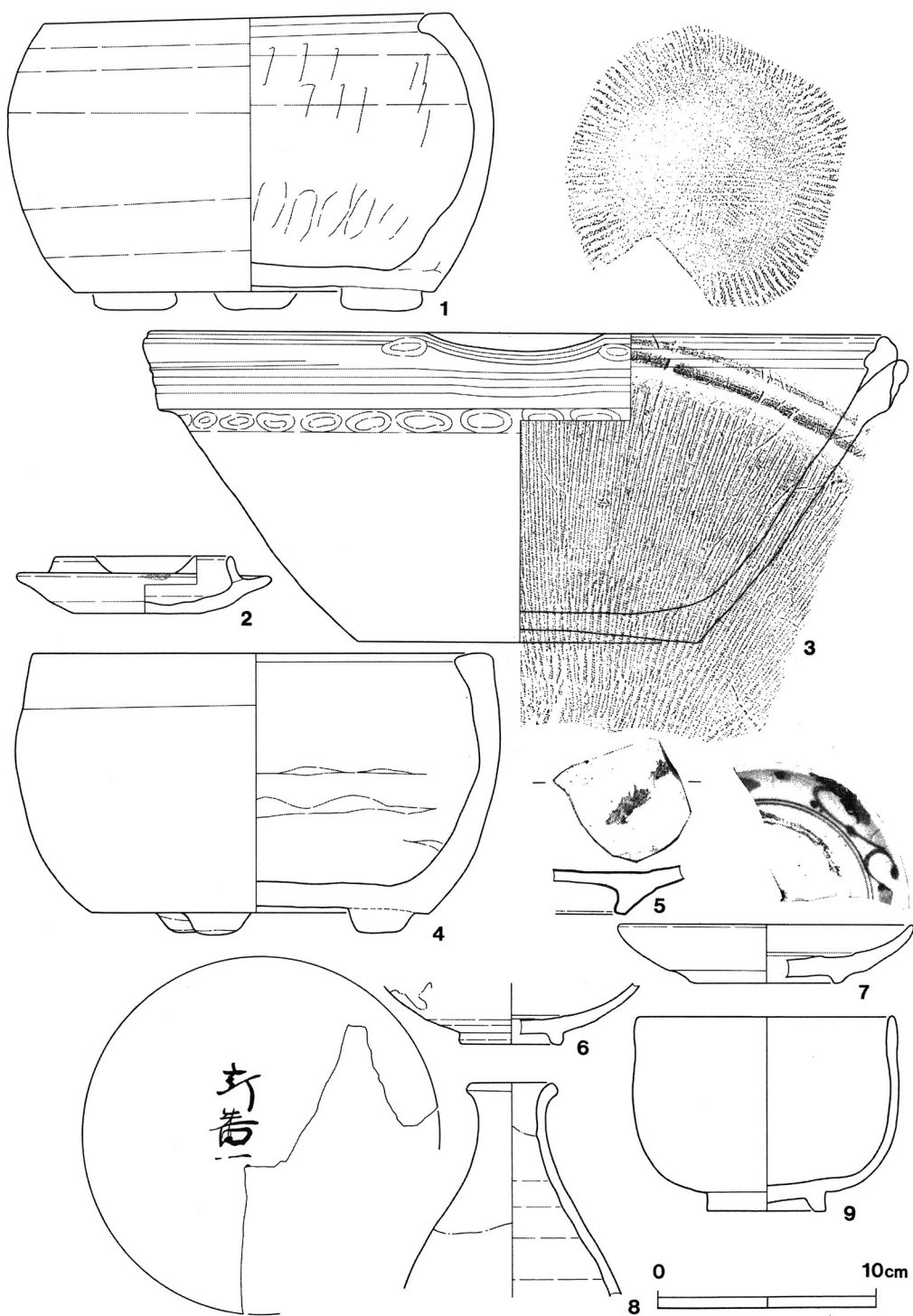
第150図 陶器・磁器・土器(2)



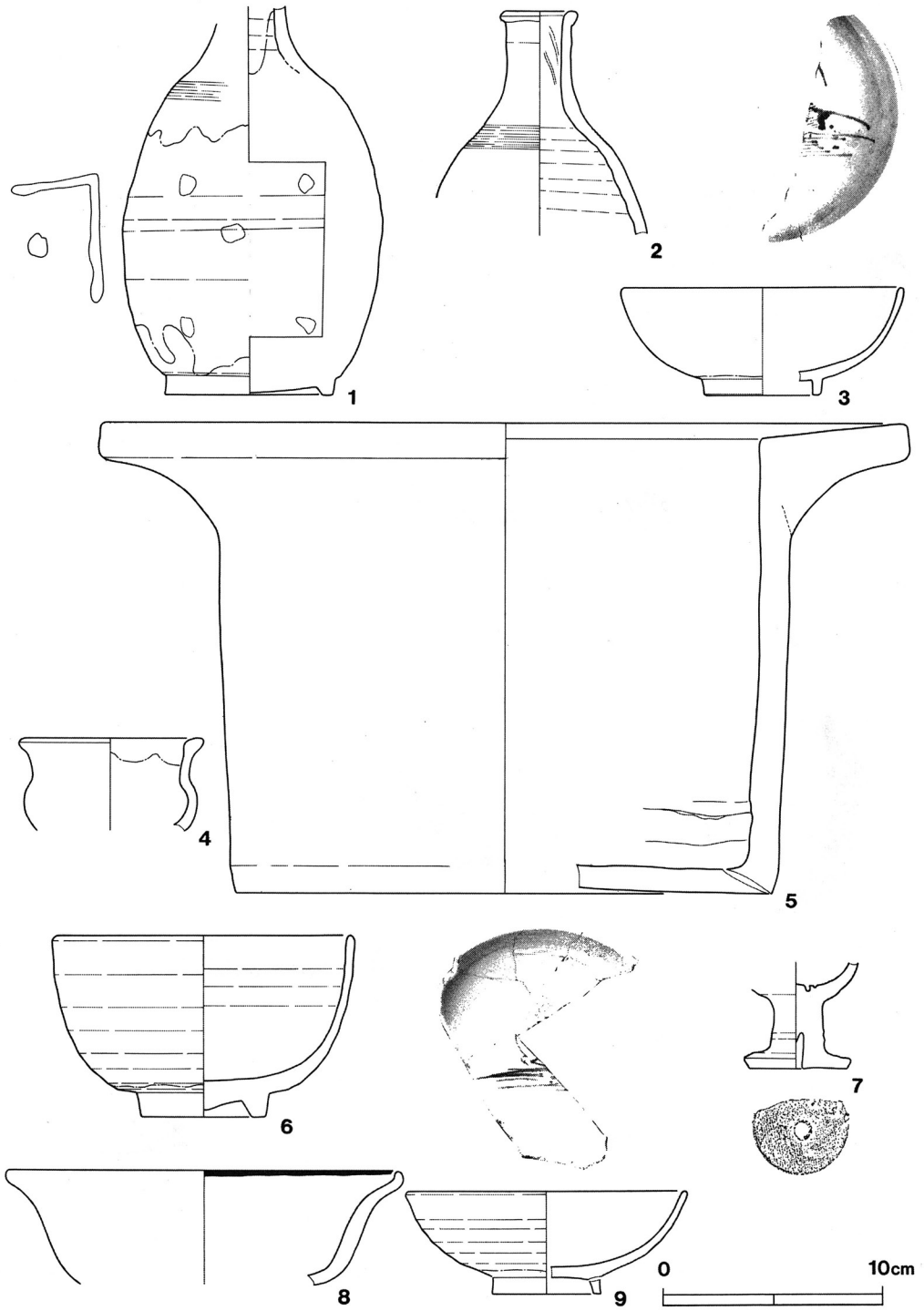
第151図 陶器・磁器・土器(3)



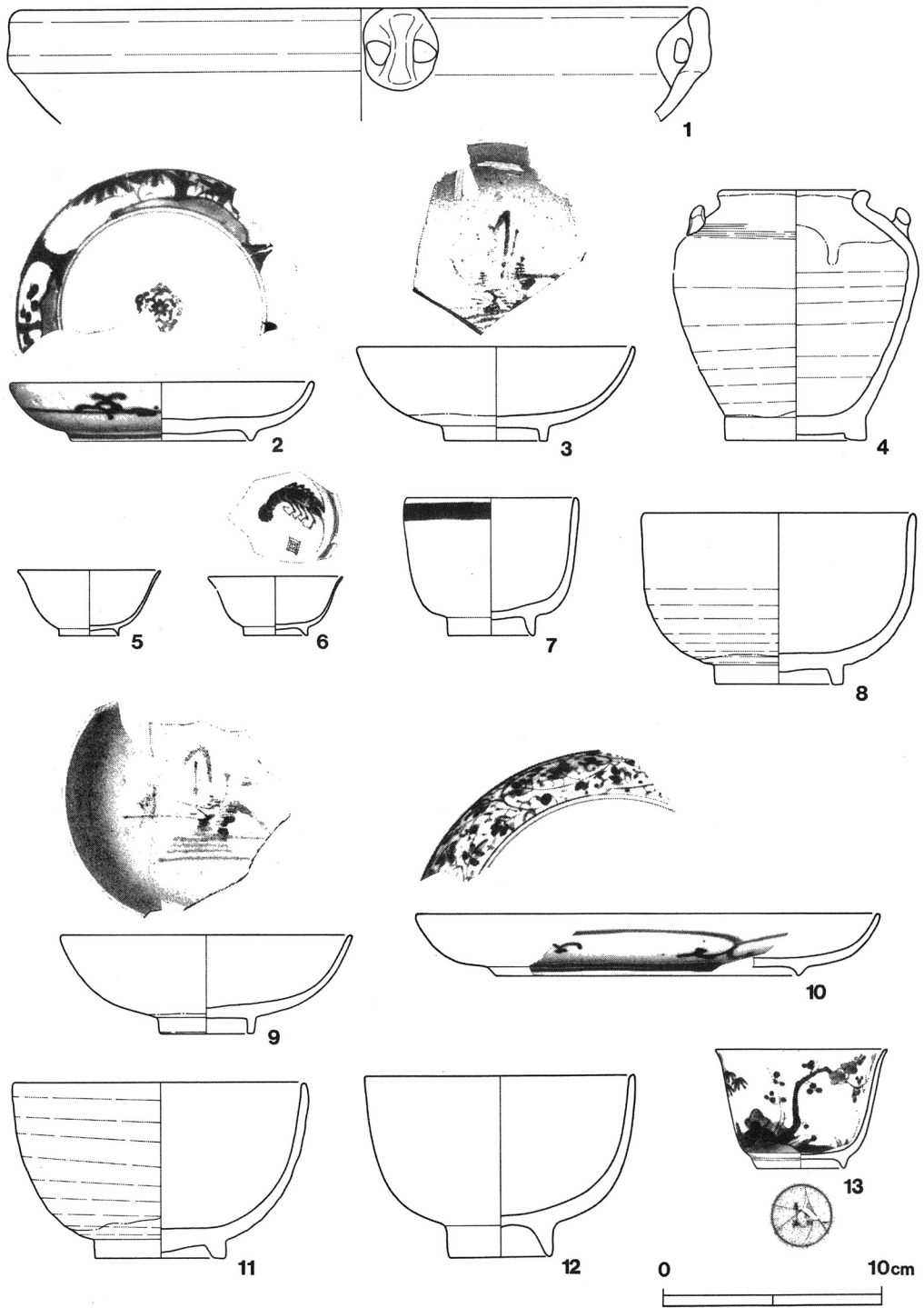
第152図 陶器・磁器・土器(4)



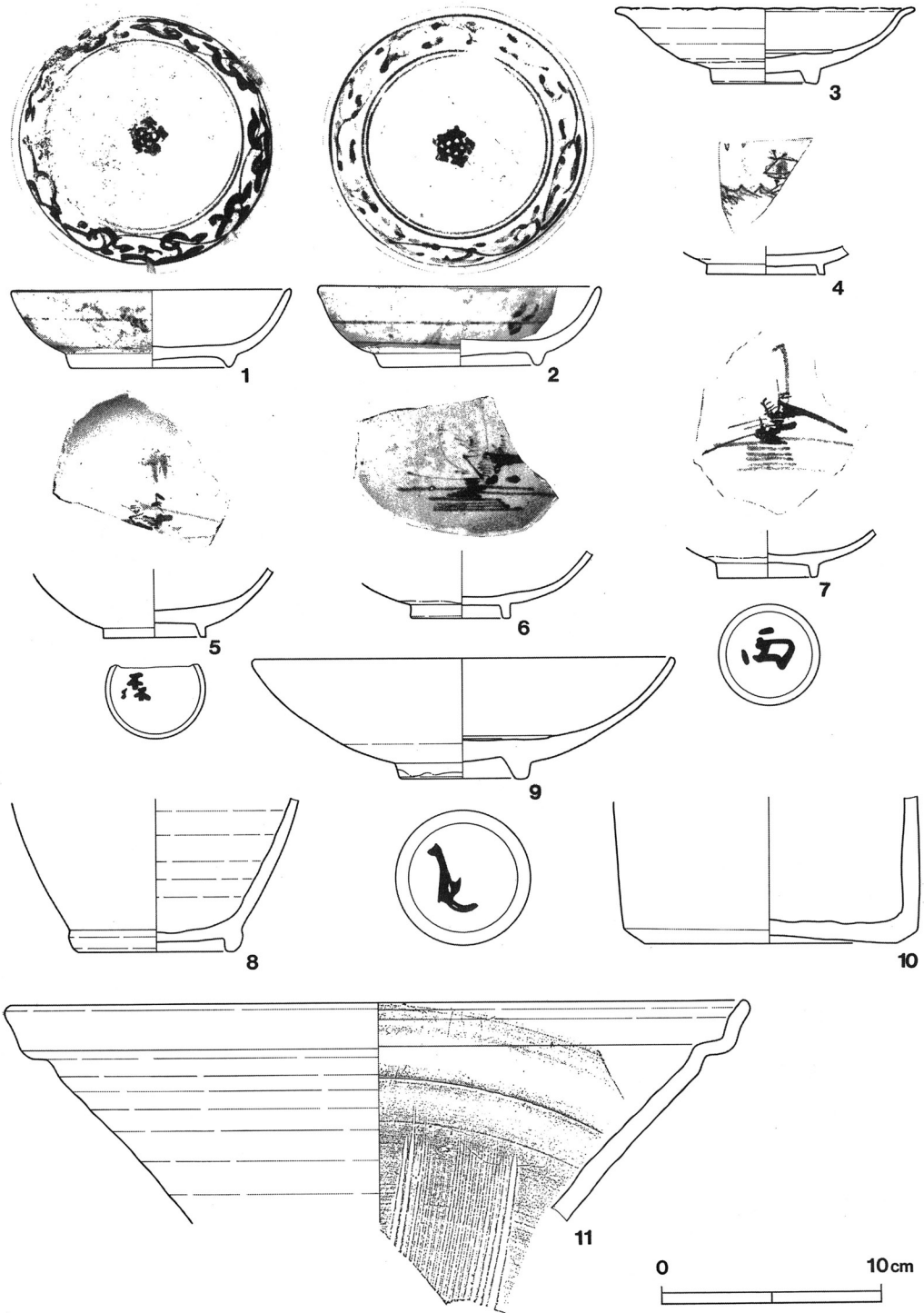
第153图 陶器·磁器·土器(5)



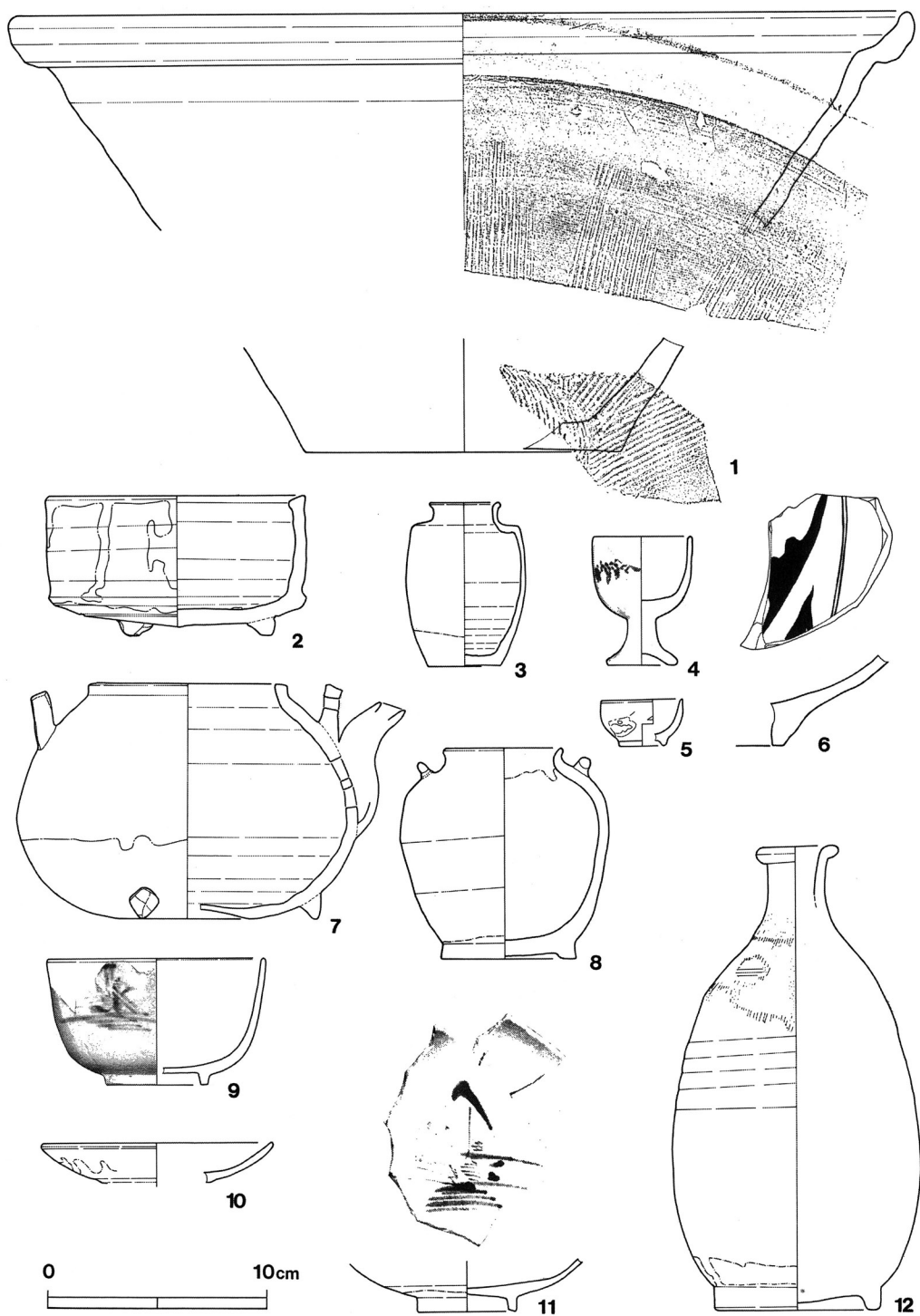
第154図 陶器・磁器・土器(6)



第155図 陶器・磁器・土器(7)

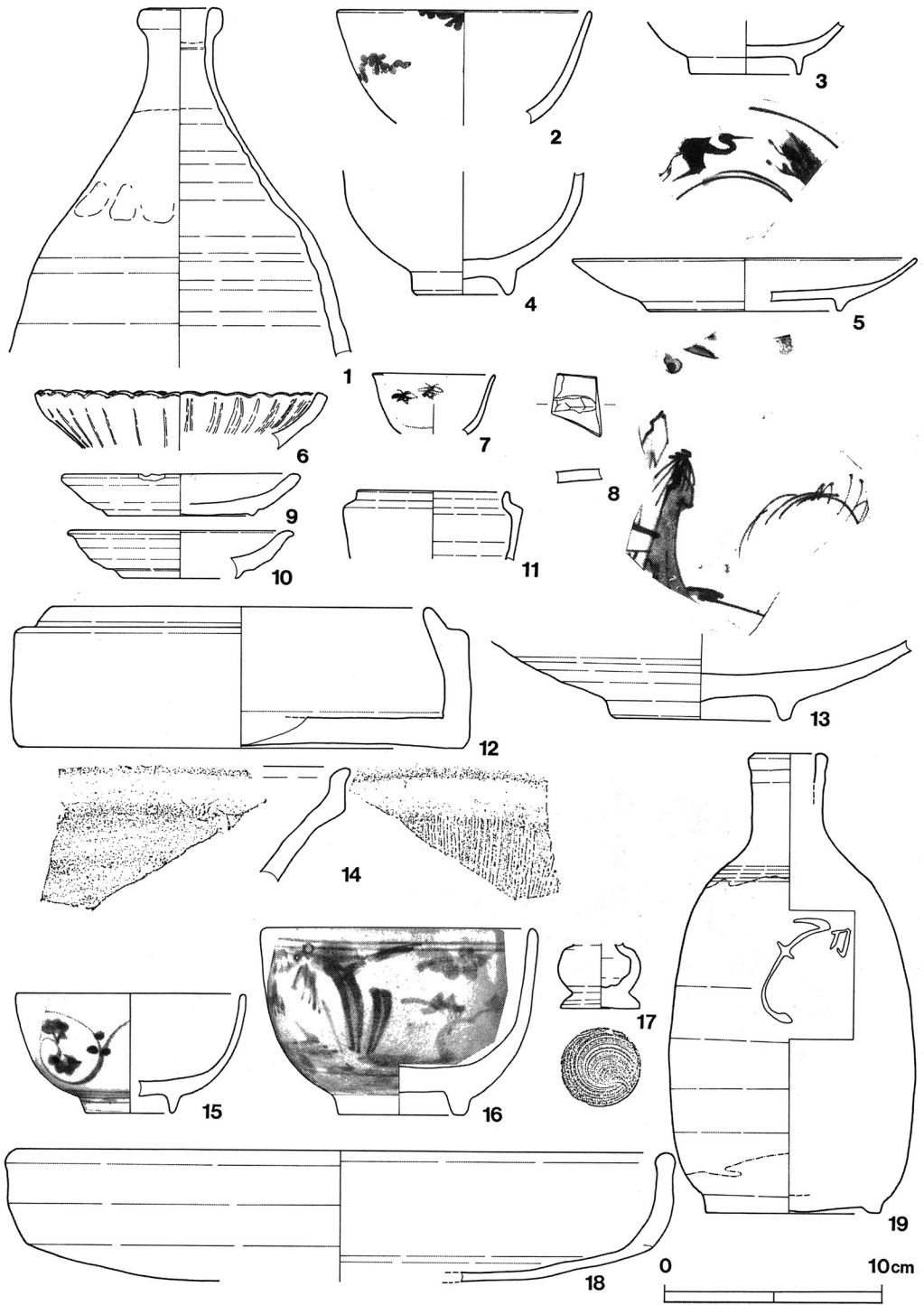


第156図 陶器・磁器・土器(8)

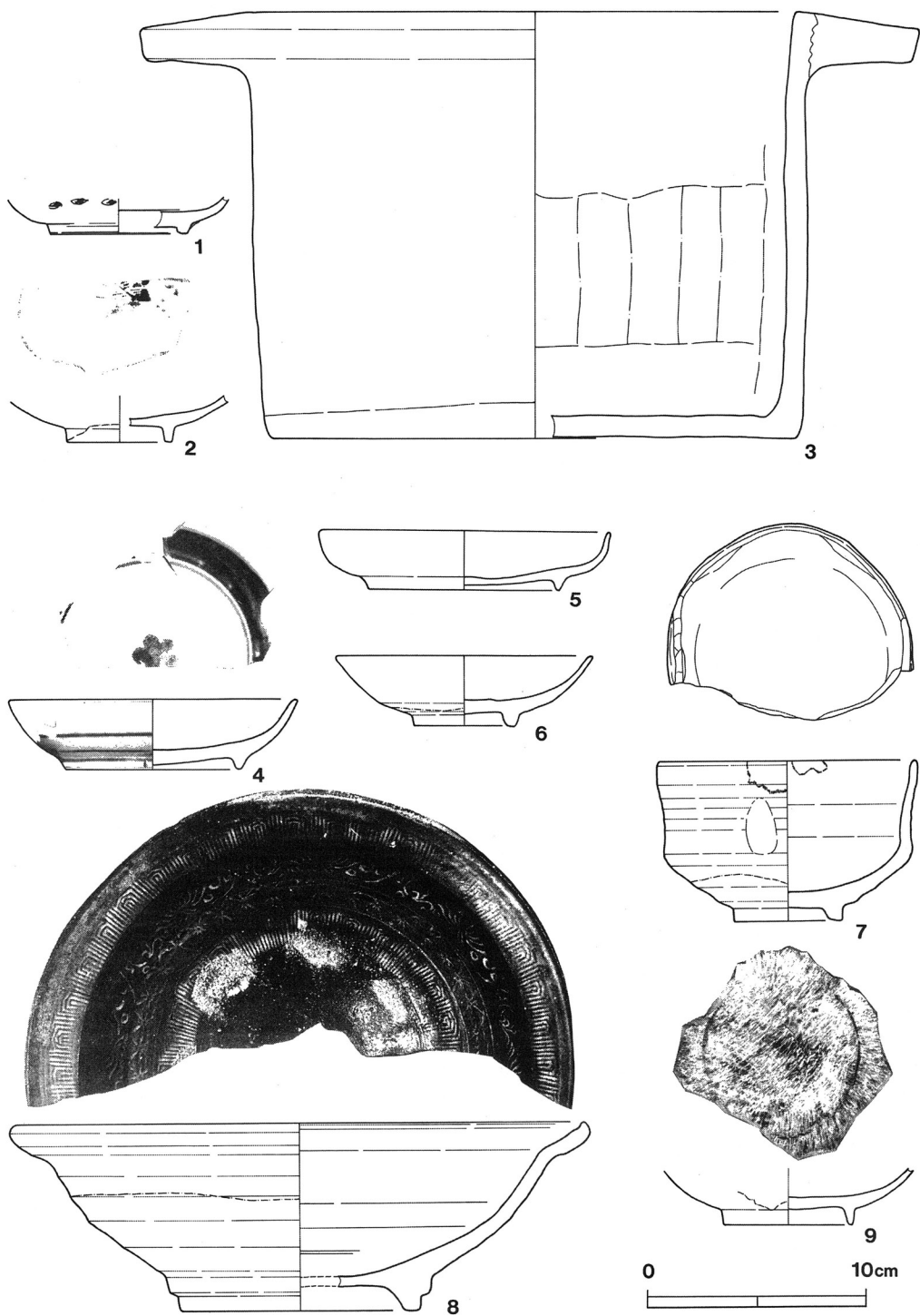


第157図 陶器・磁器・土器(9)

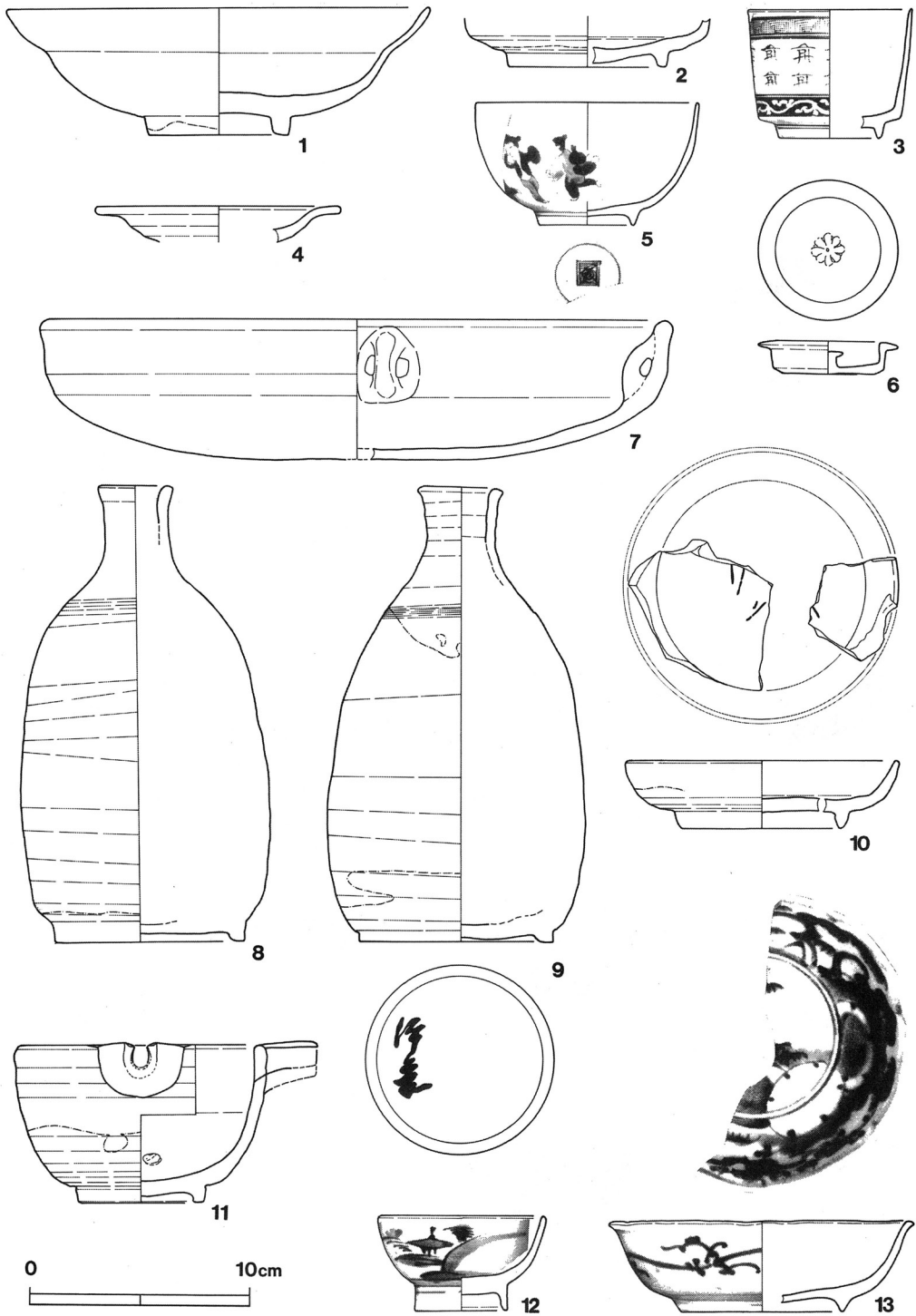




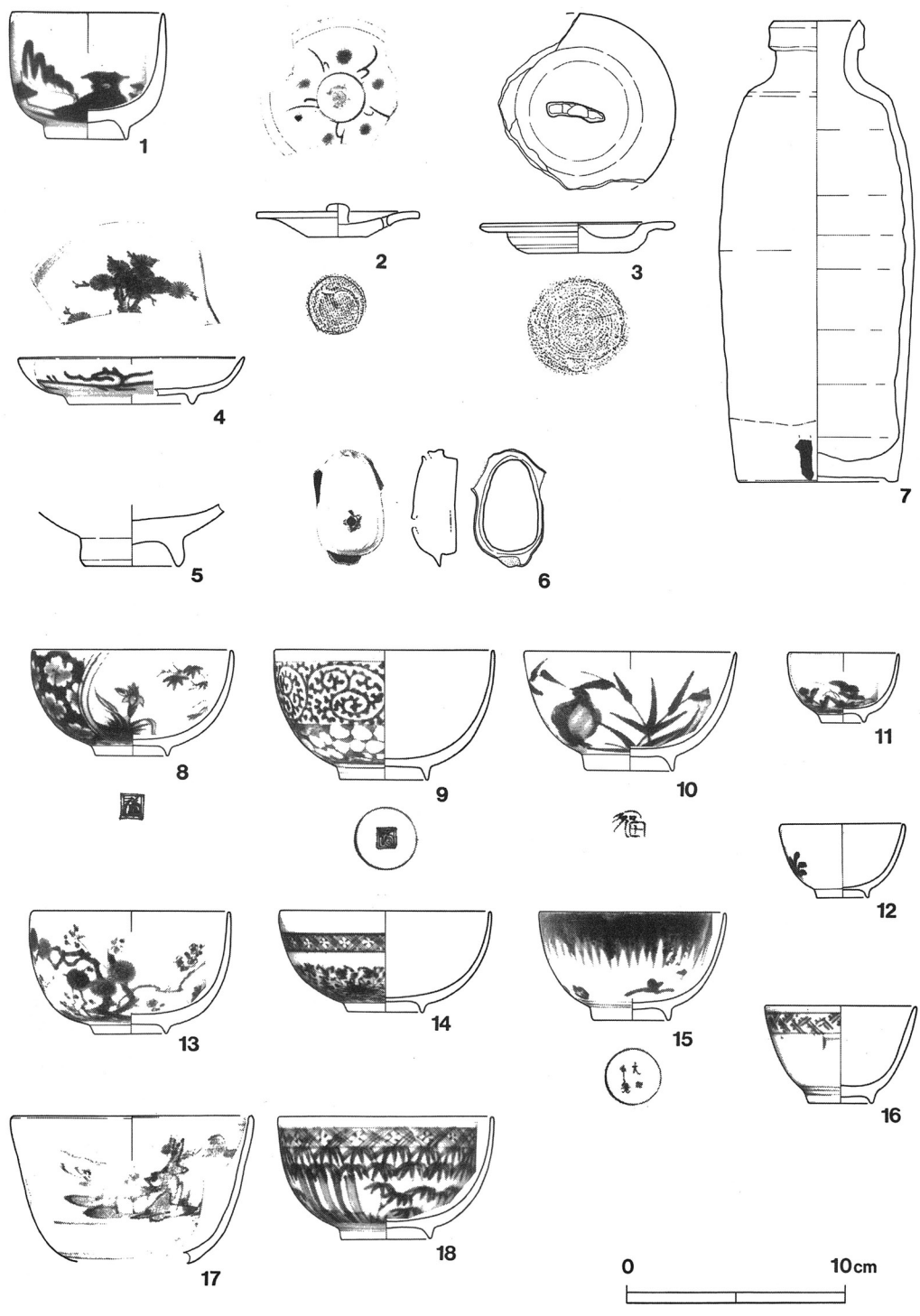
第158図 陶器・磁器・土器(10)



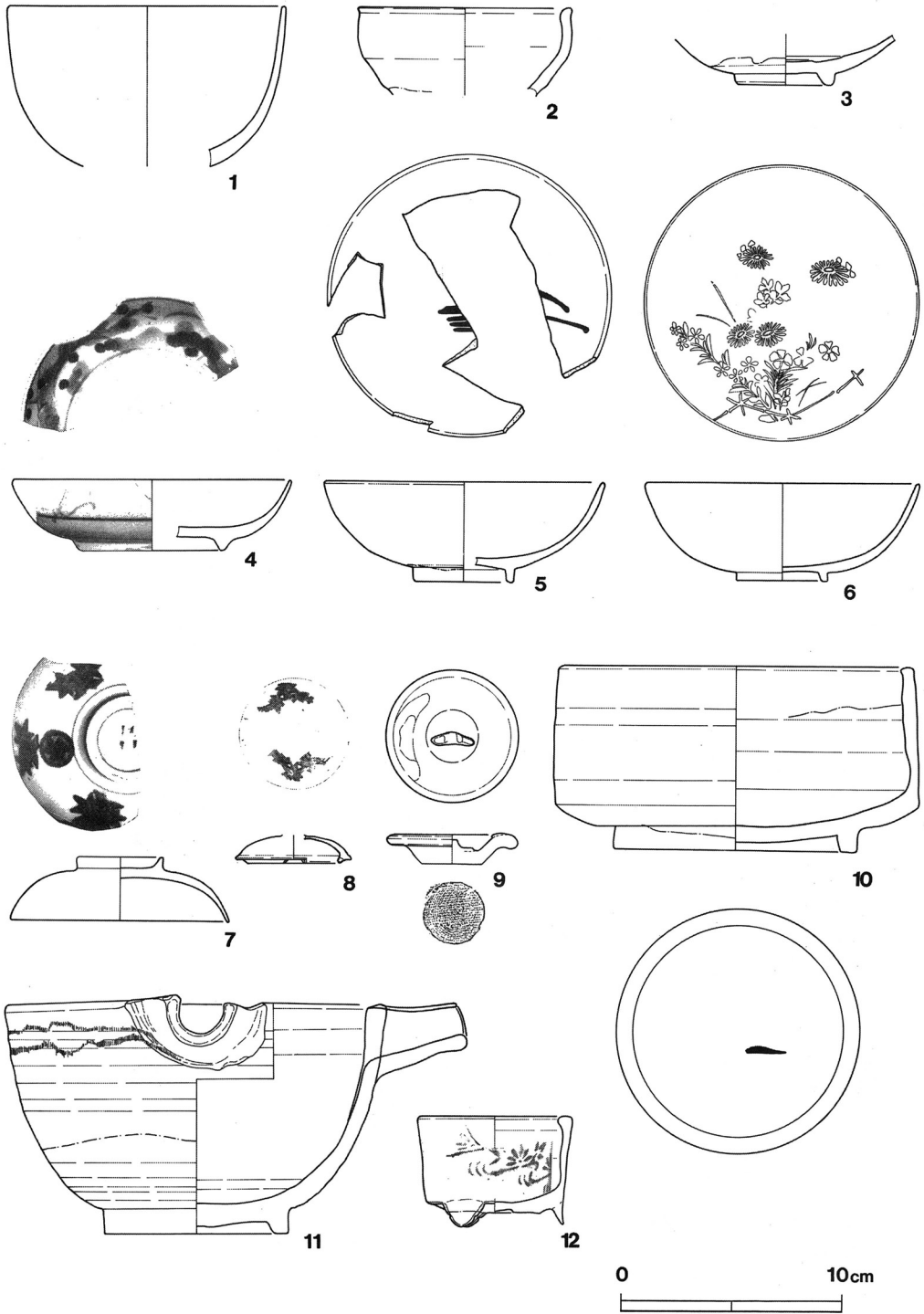
第159图 陶器·磁器·土器(11)



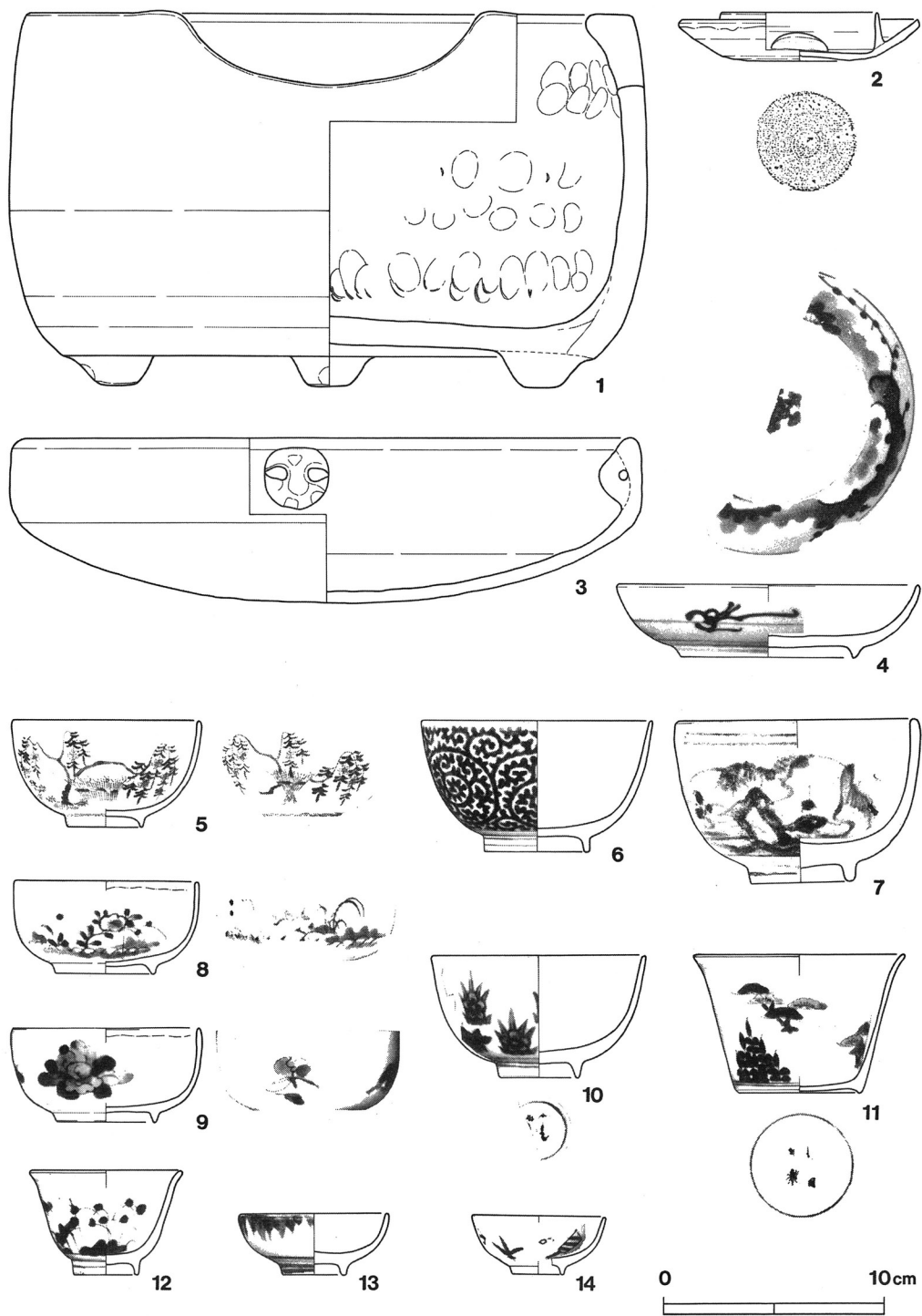
第160図 陶器・磁器・土器(12)



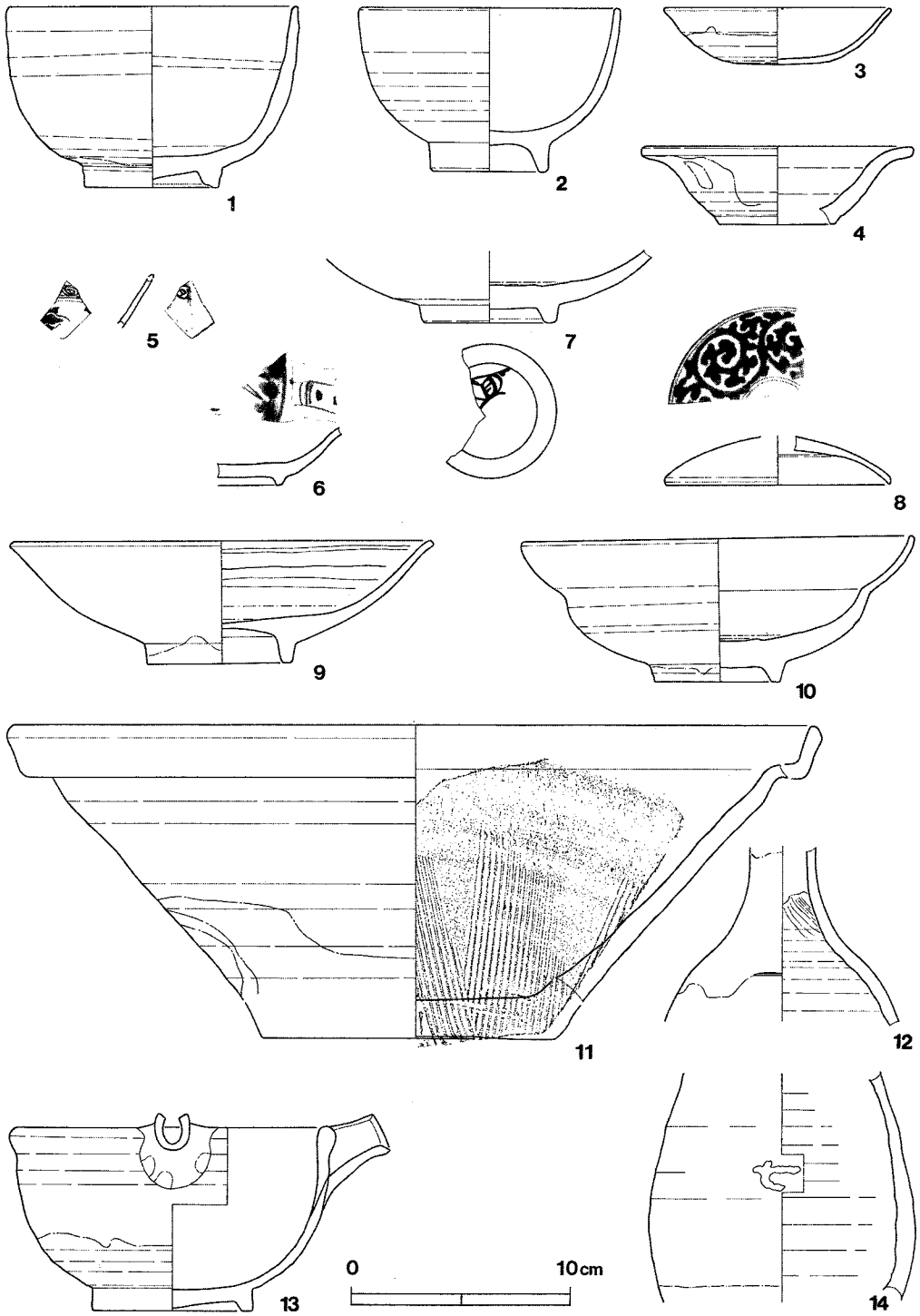
第161图 陶器·磁器·土器(13)



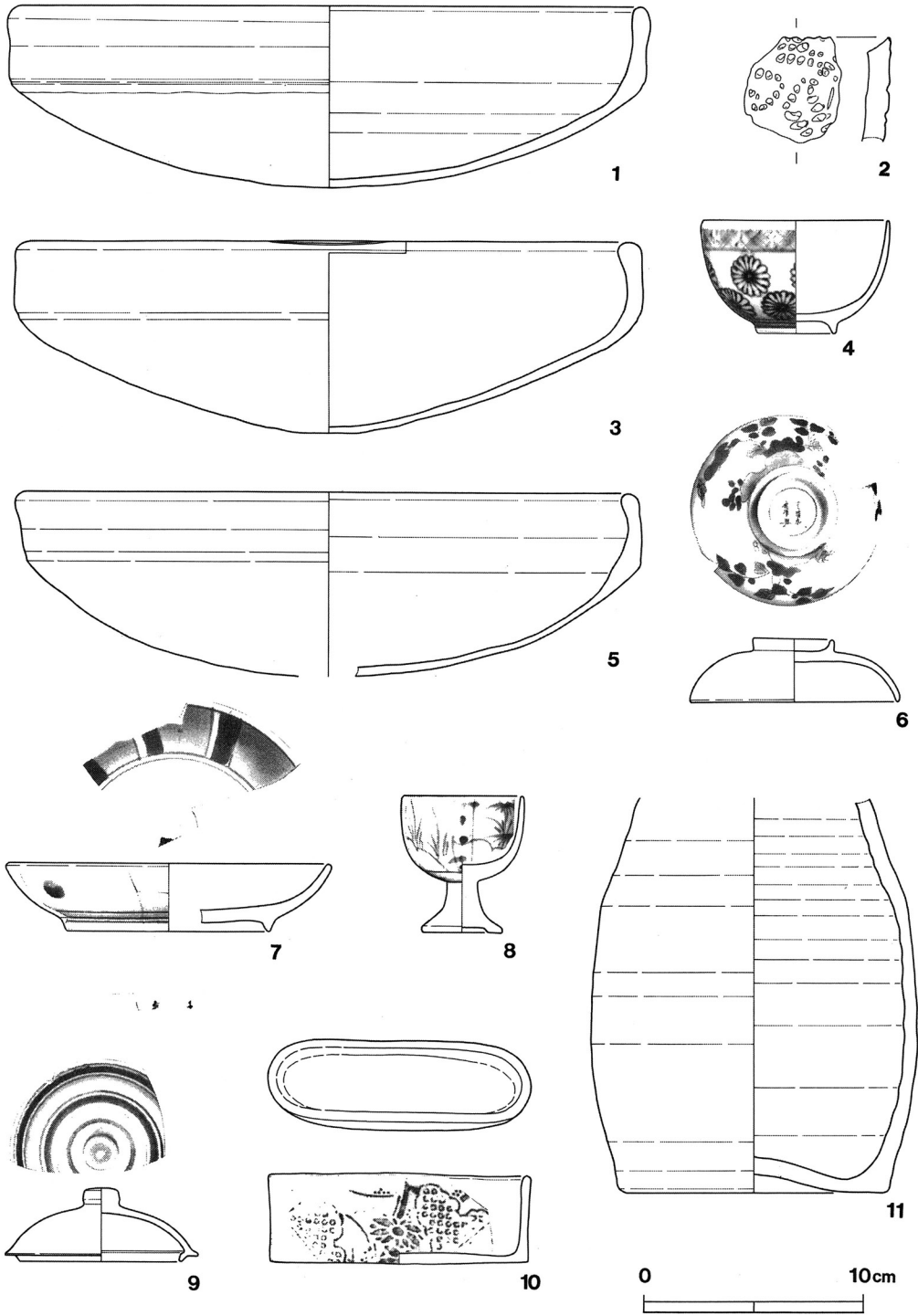
第162図 陶器・磁器・土器(14)



第163図 陶器・磁器・土器(15)

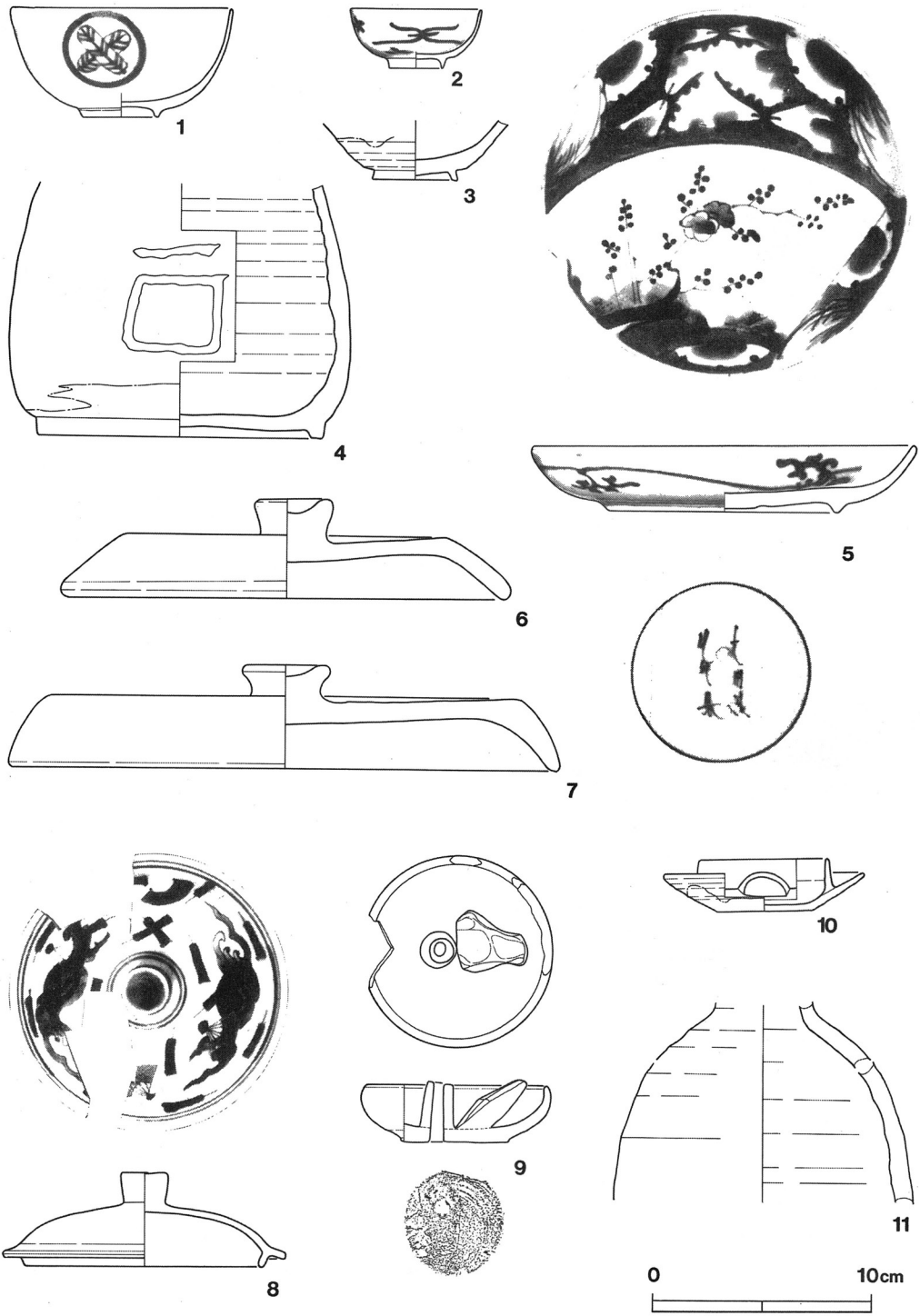


第164図 陶器・磁器・土器(16)

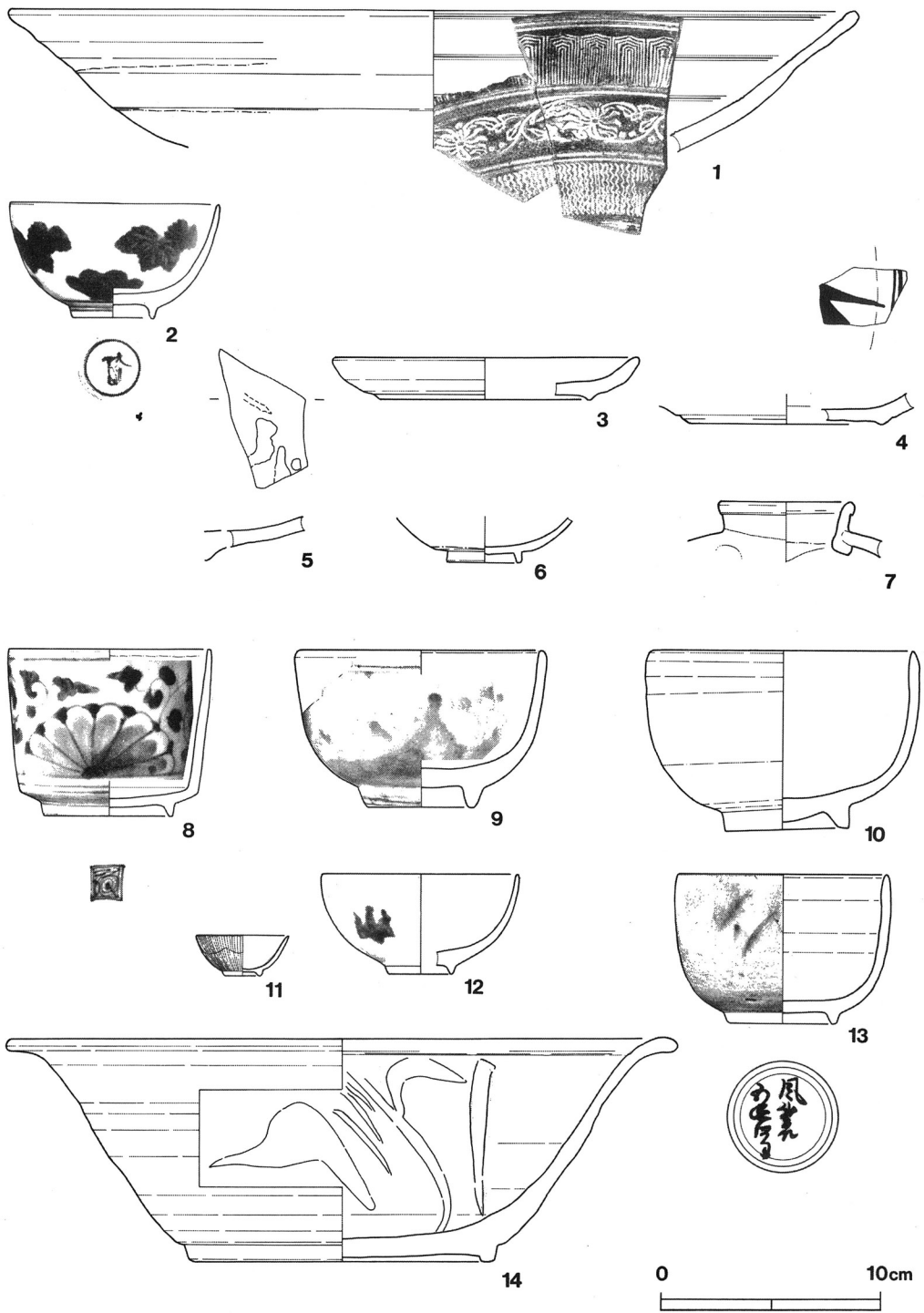


第165图 陶器·磁器·土器(17)

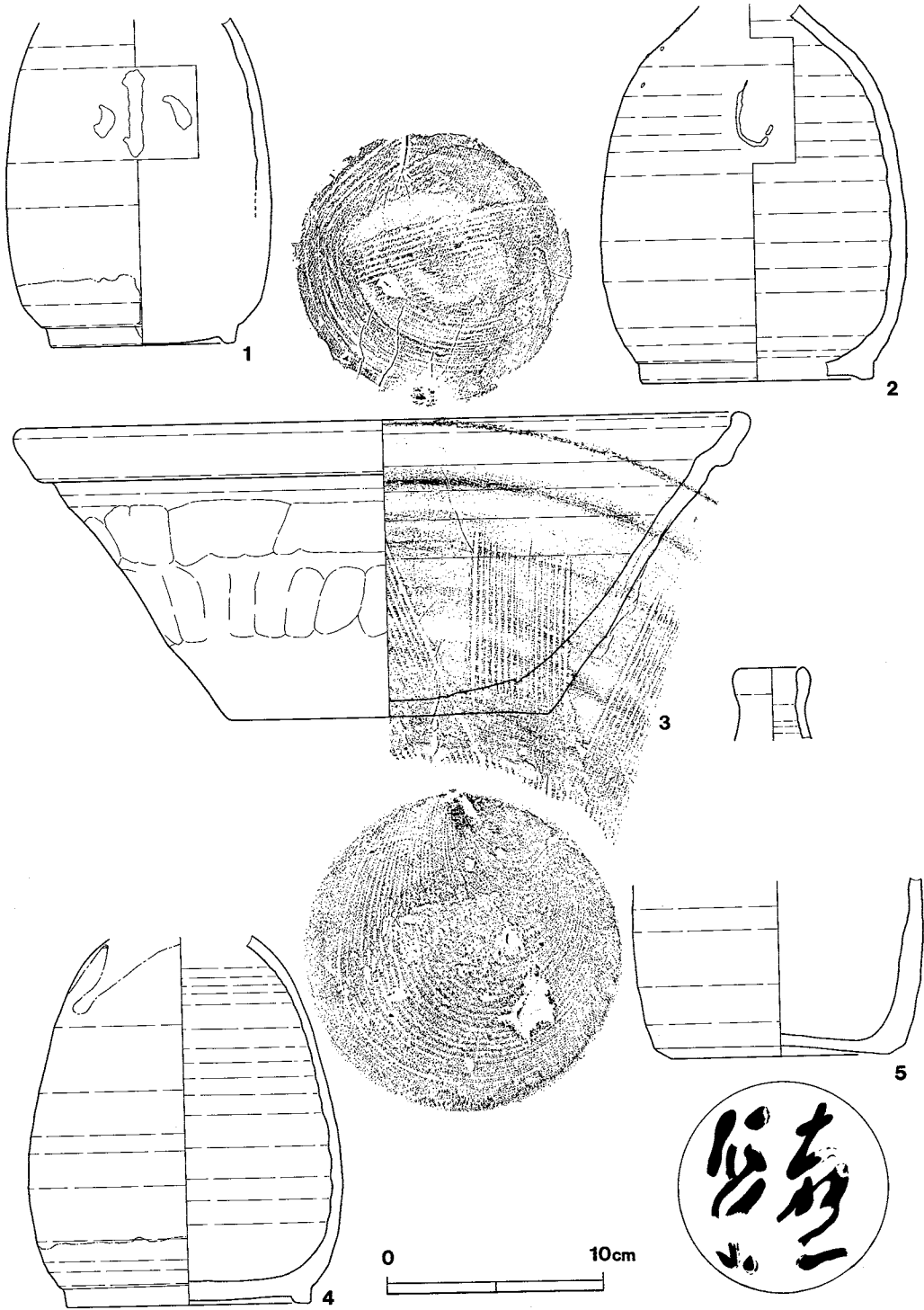




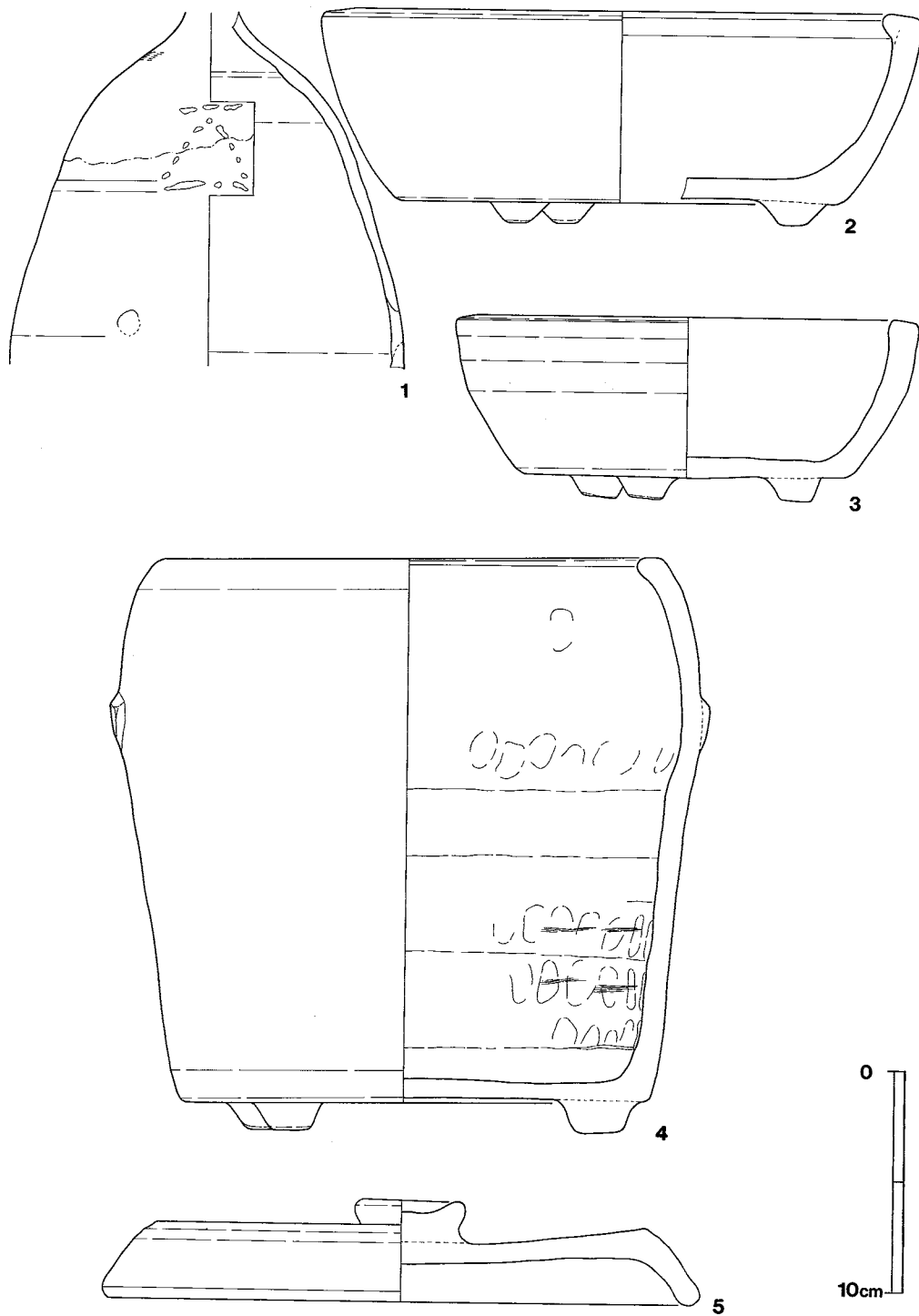
第166図 陶器・磁器・土器(18)



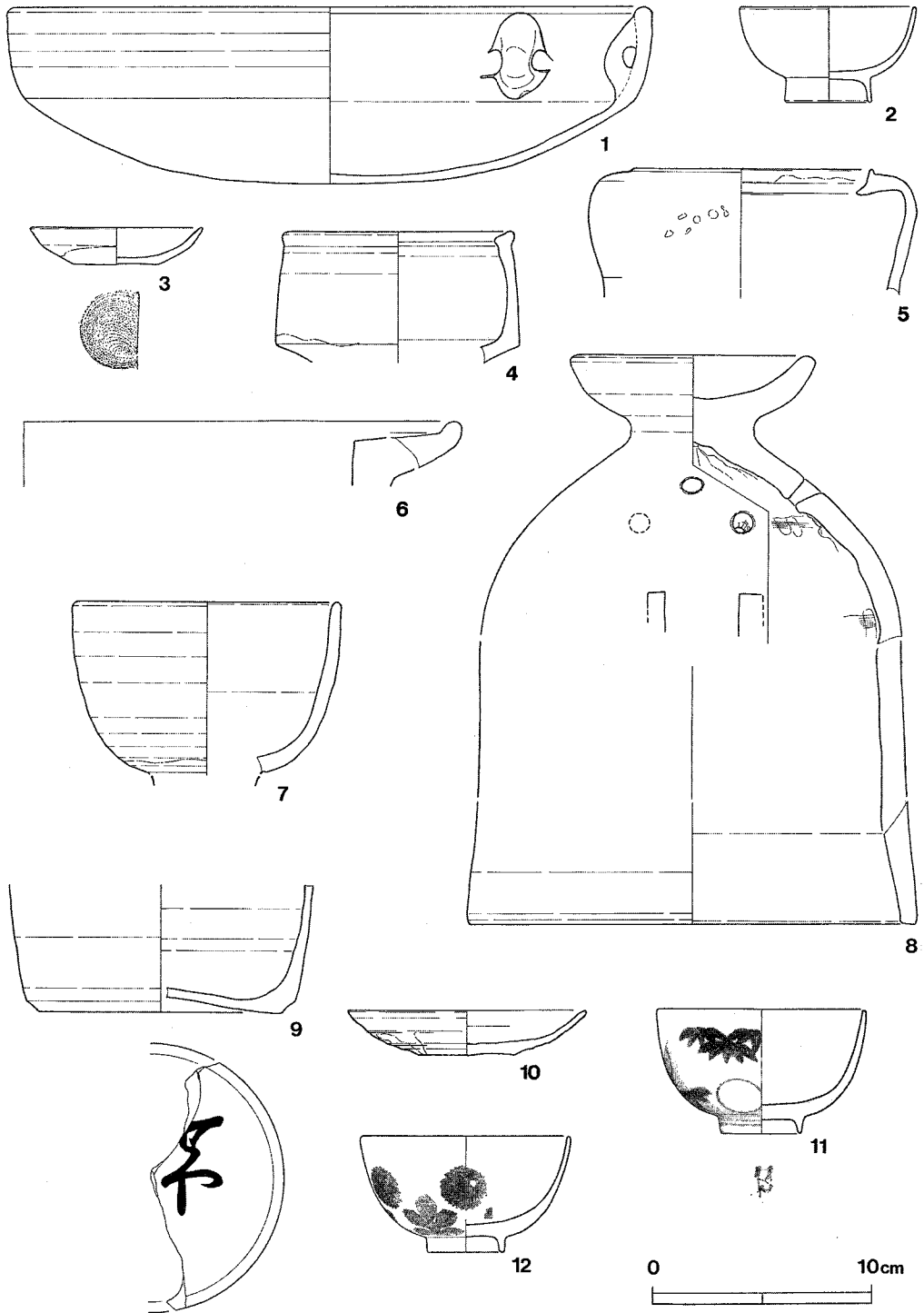
第167図 陶器・磁器・土器(19)



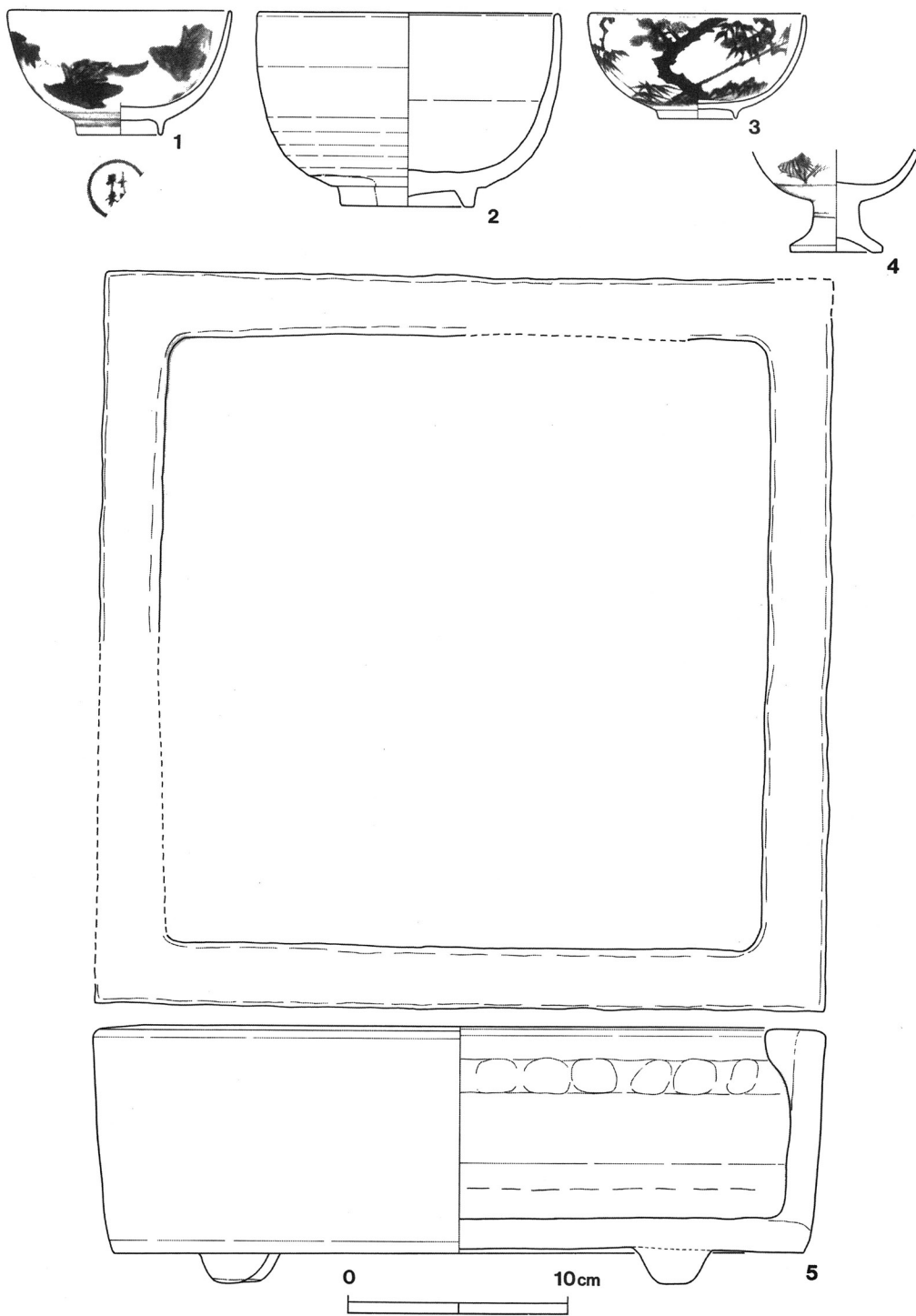
第168図 陶器・磁器・土器(20)



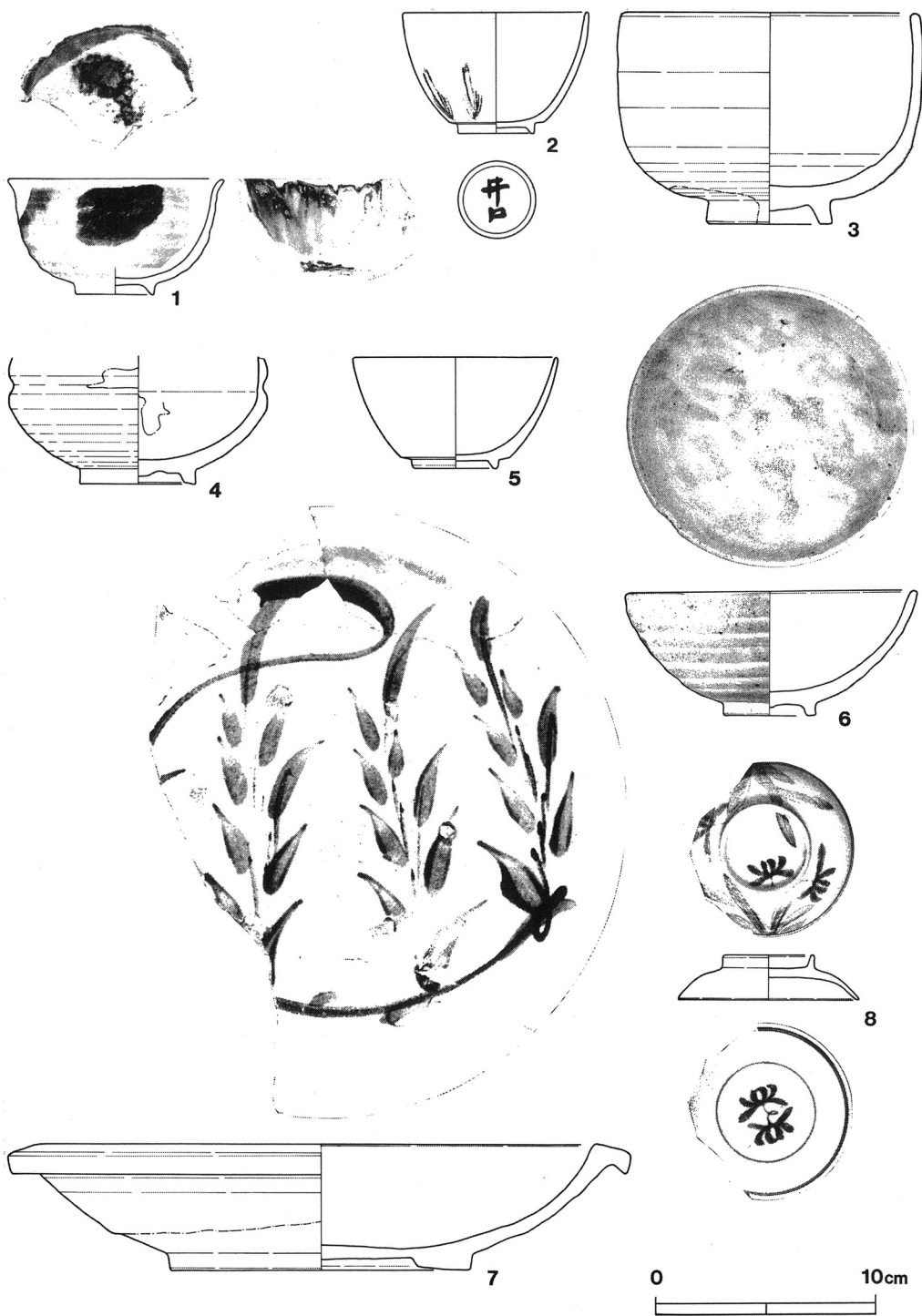
第169図 陶器・磁器・土器(21)



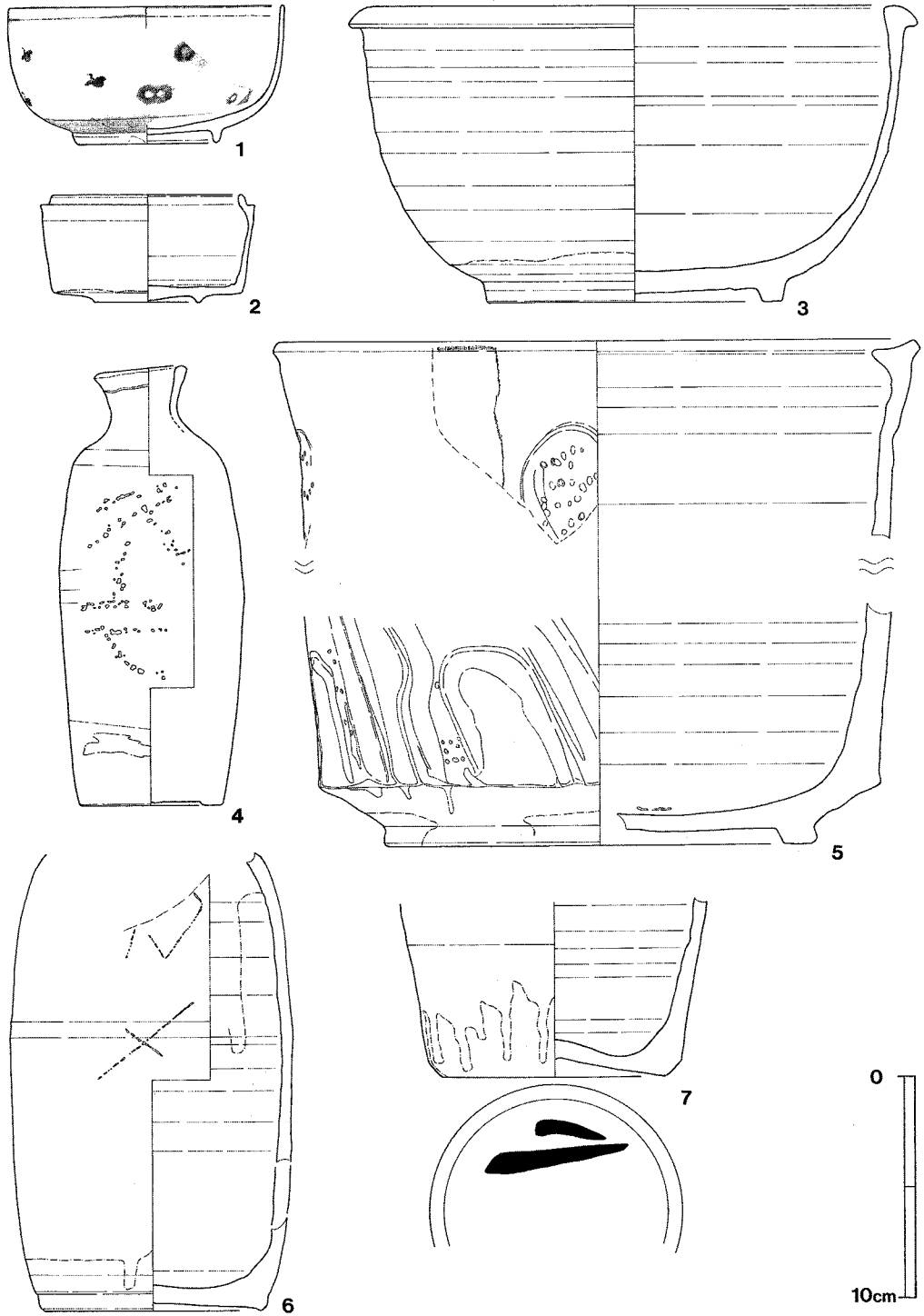
第170図 陶器・磁器・土器(22)



第171図 陶器・磁器・土器(23)

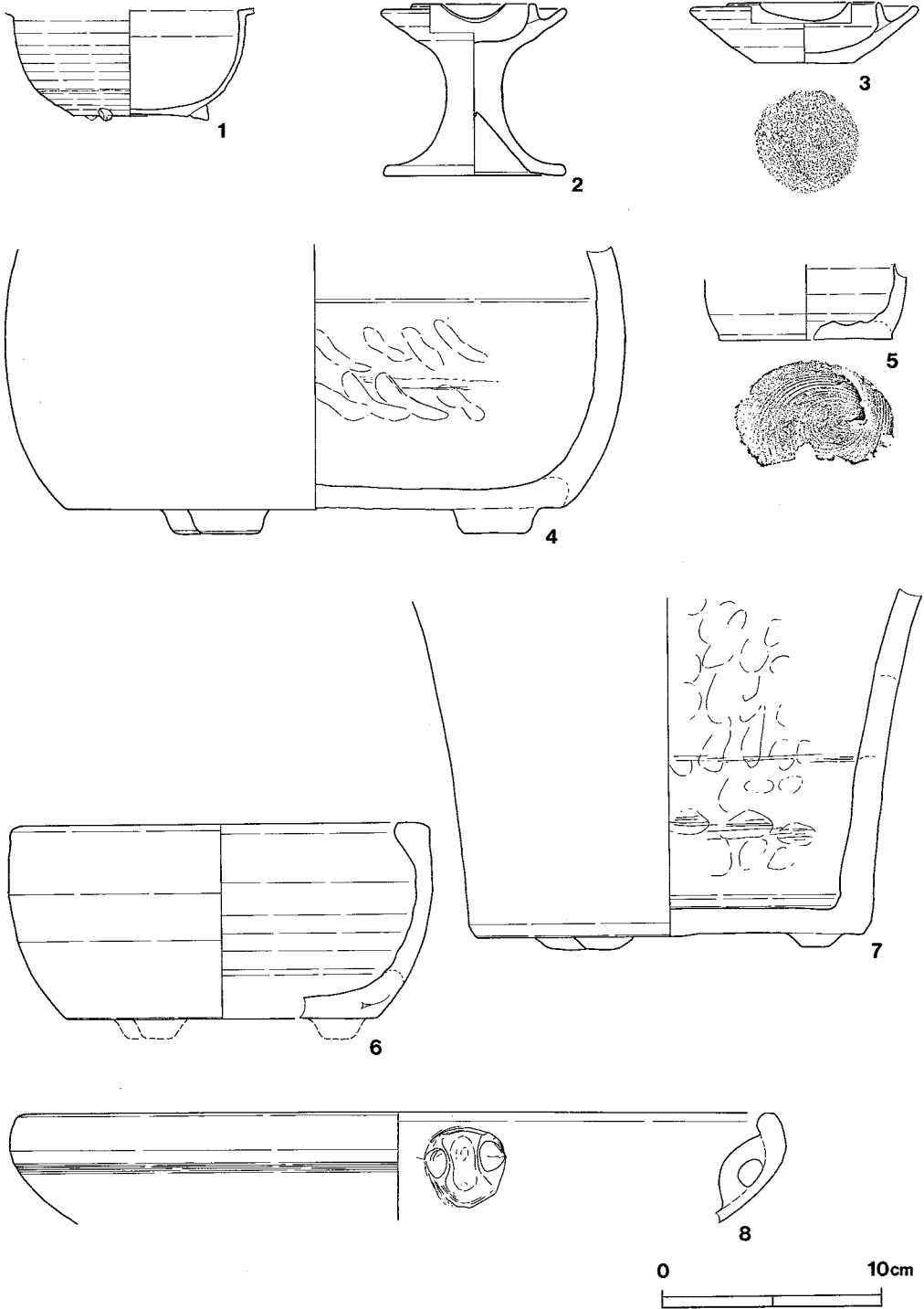


第172図 陶器・磁器・土器(24)

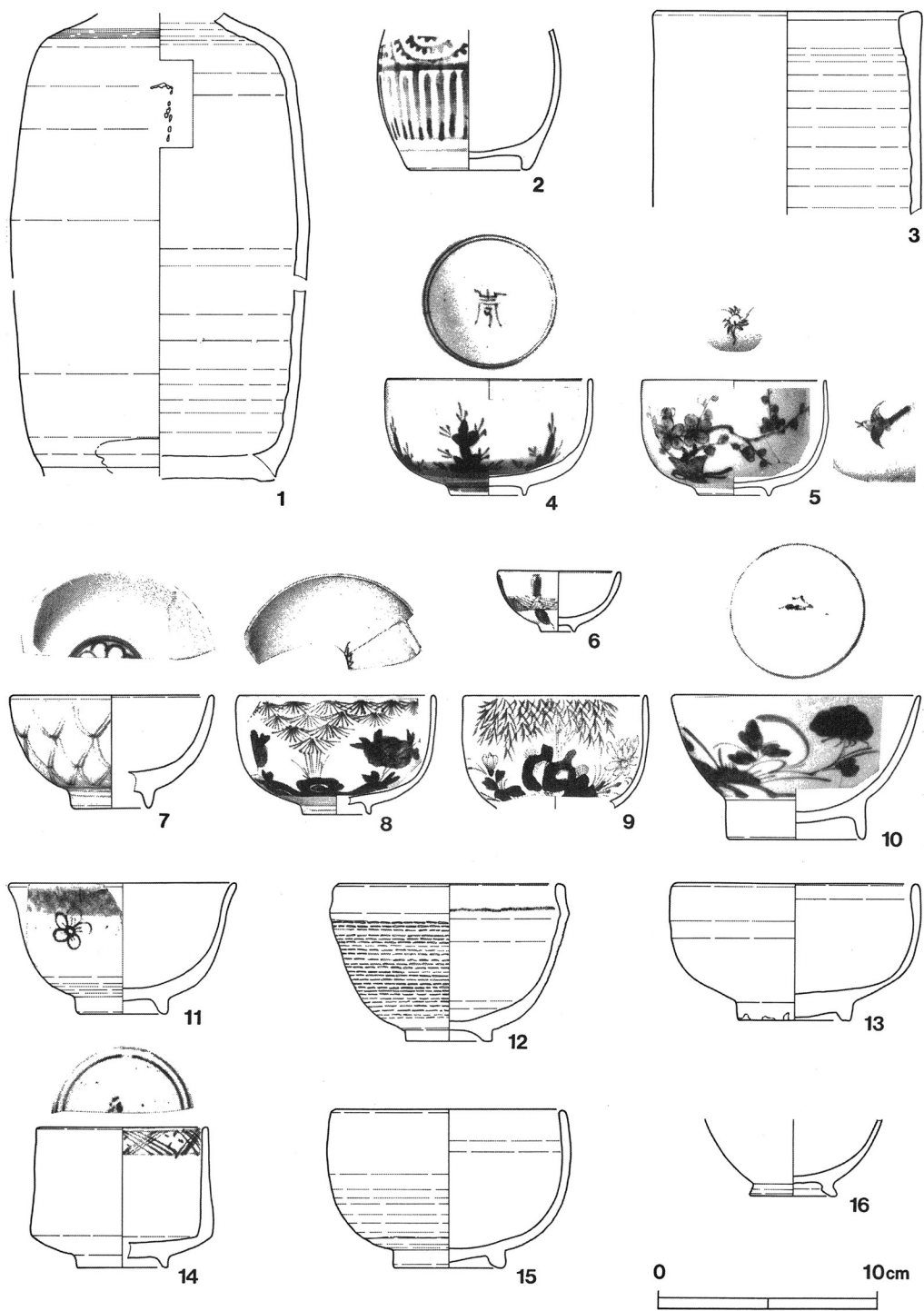


第173図 陶器・磁器・土器(25)

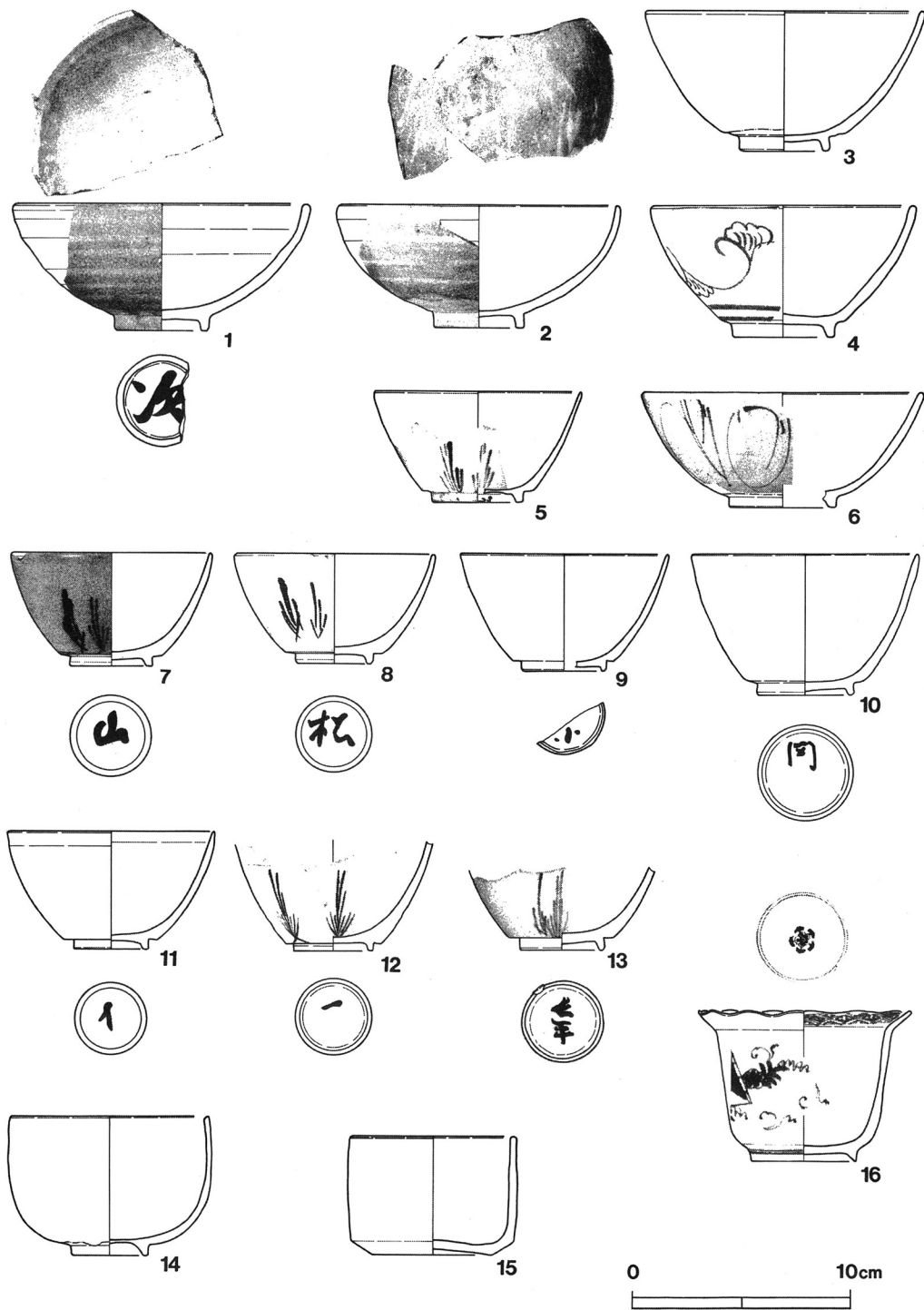




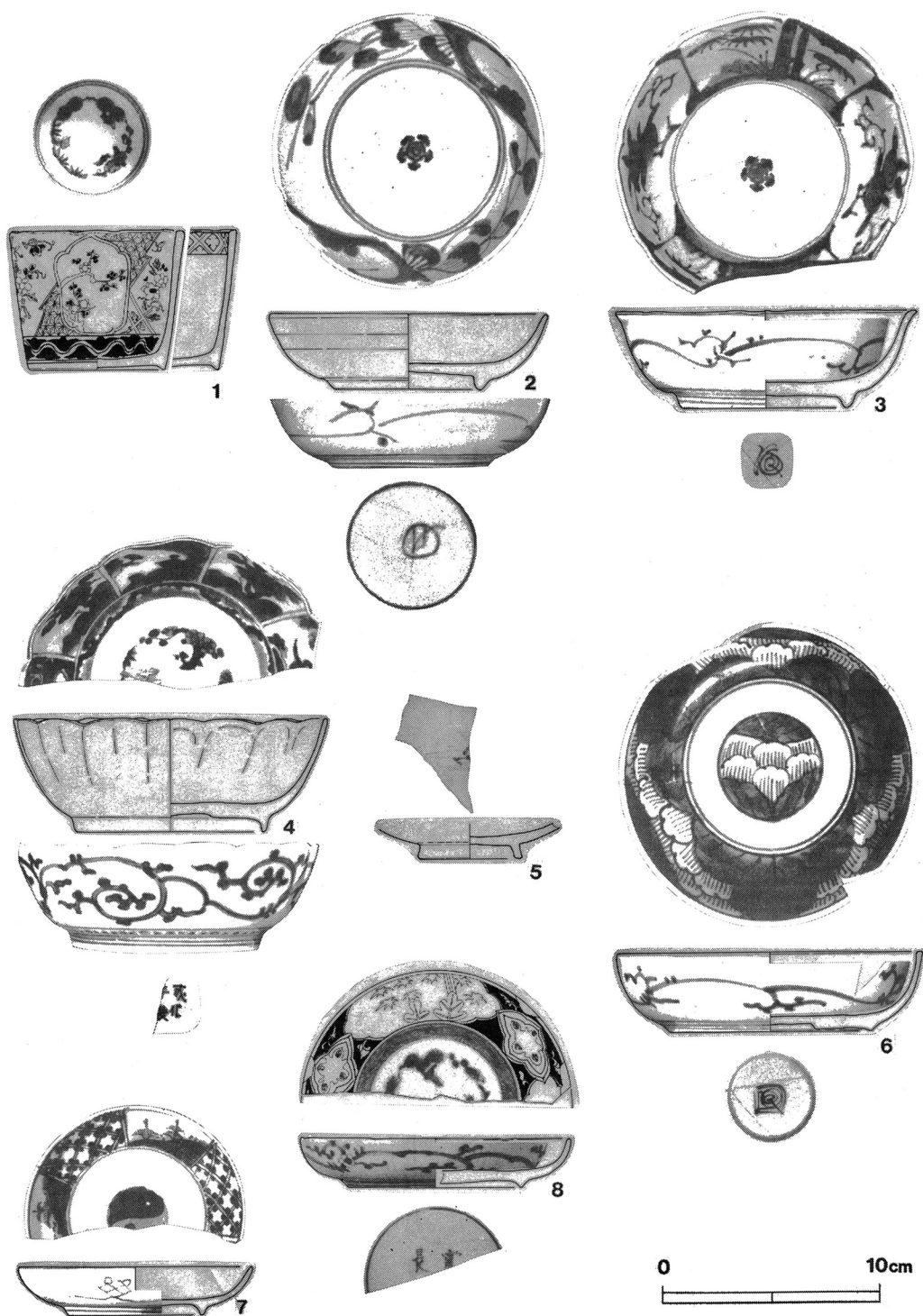
第174図 陶器・磁器・土器(26)



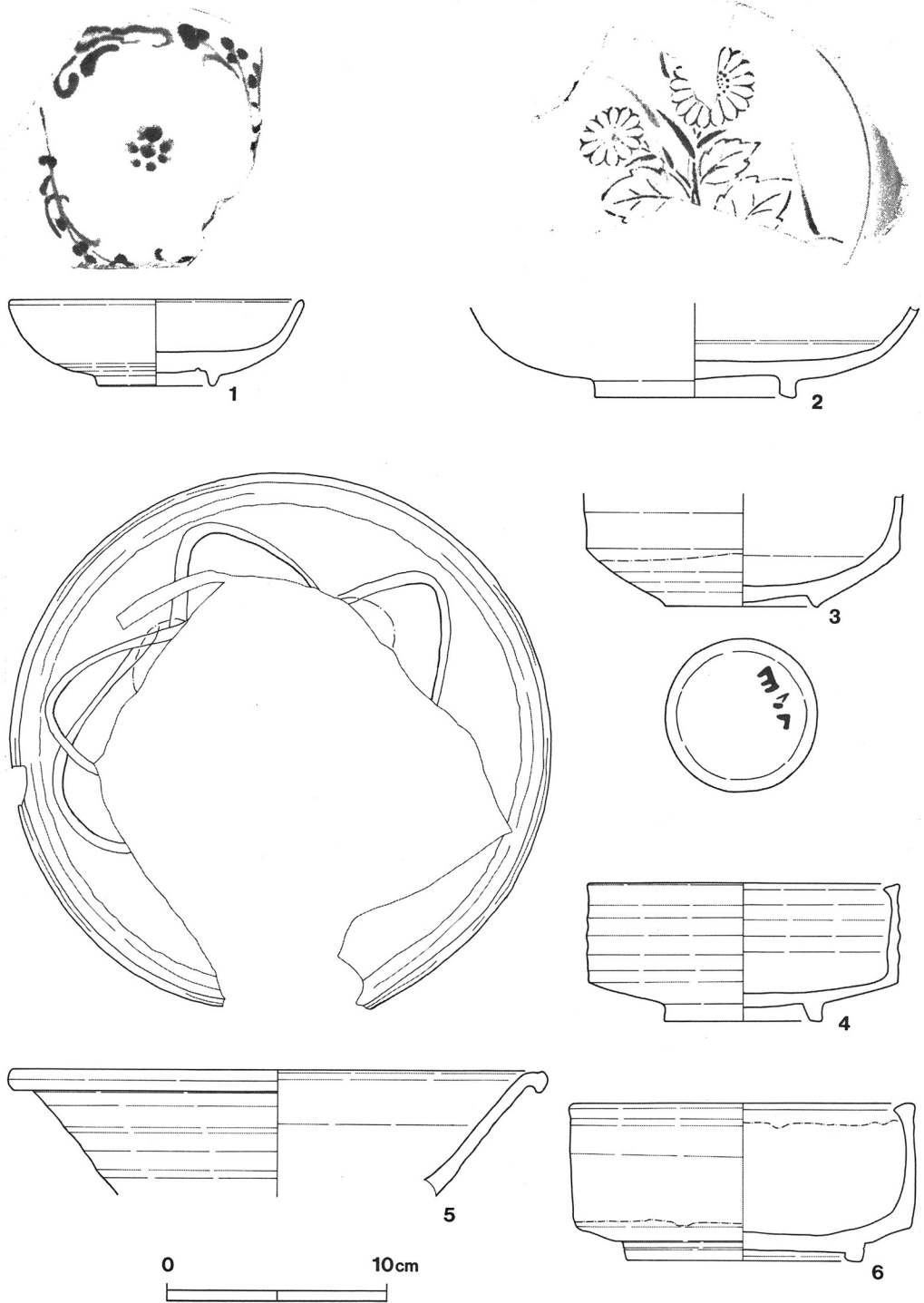
第175图 陶器·磁器·土器(27)



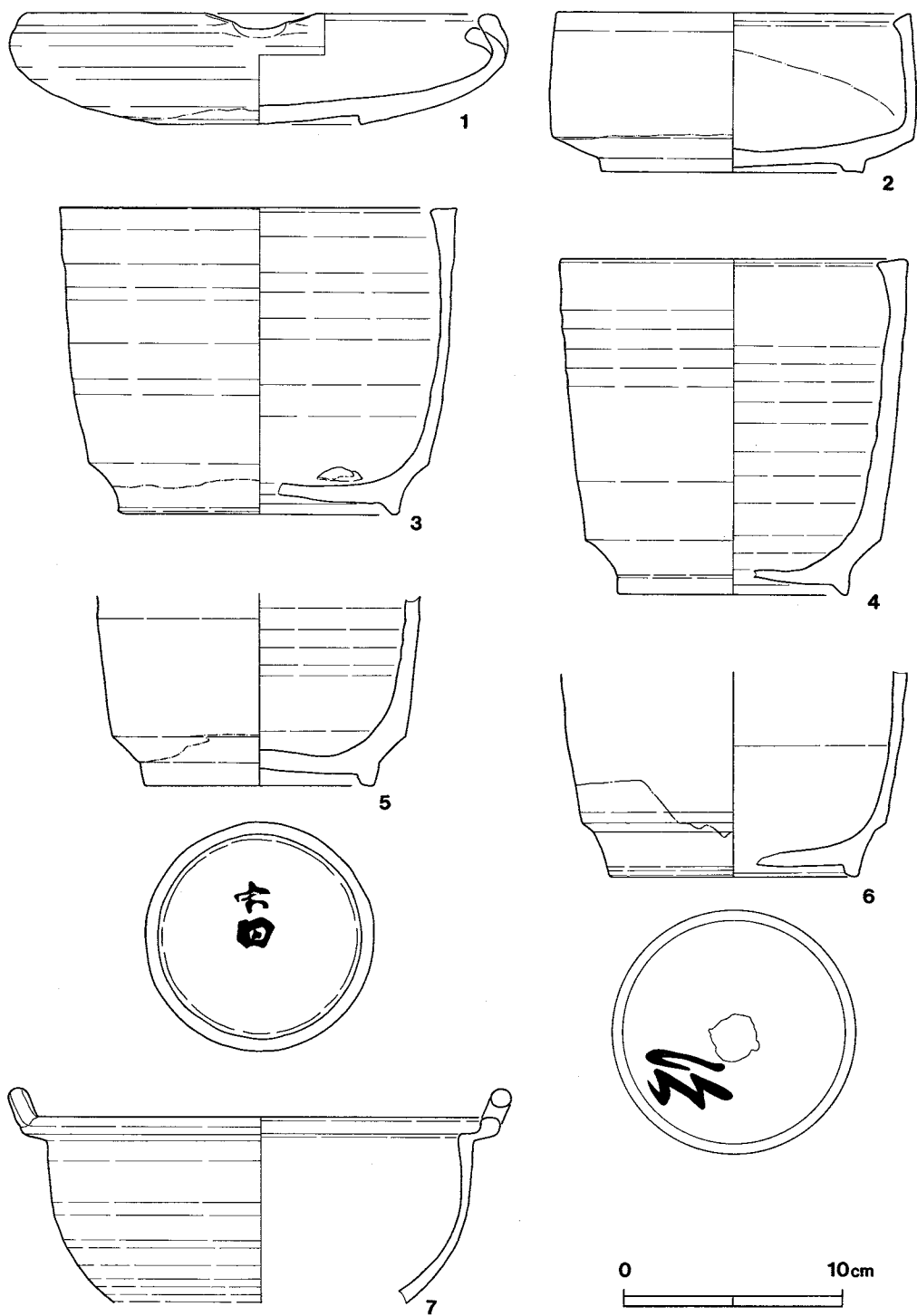
第176図 陶器・磁器・土器(28)



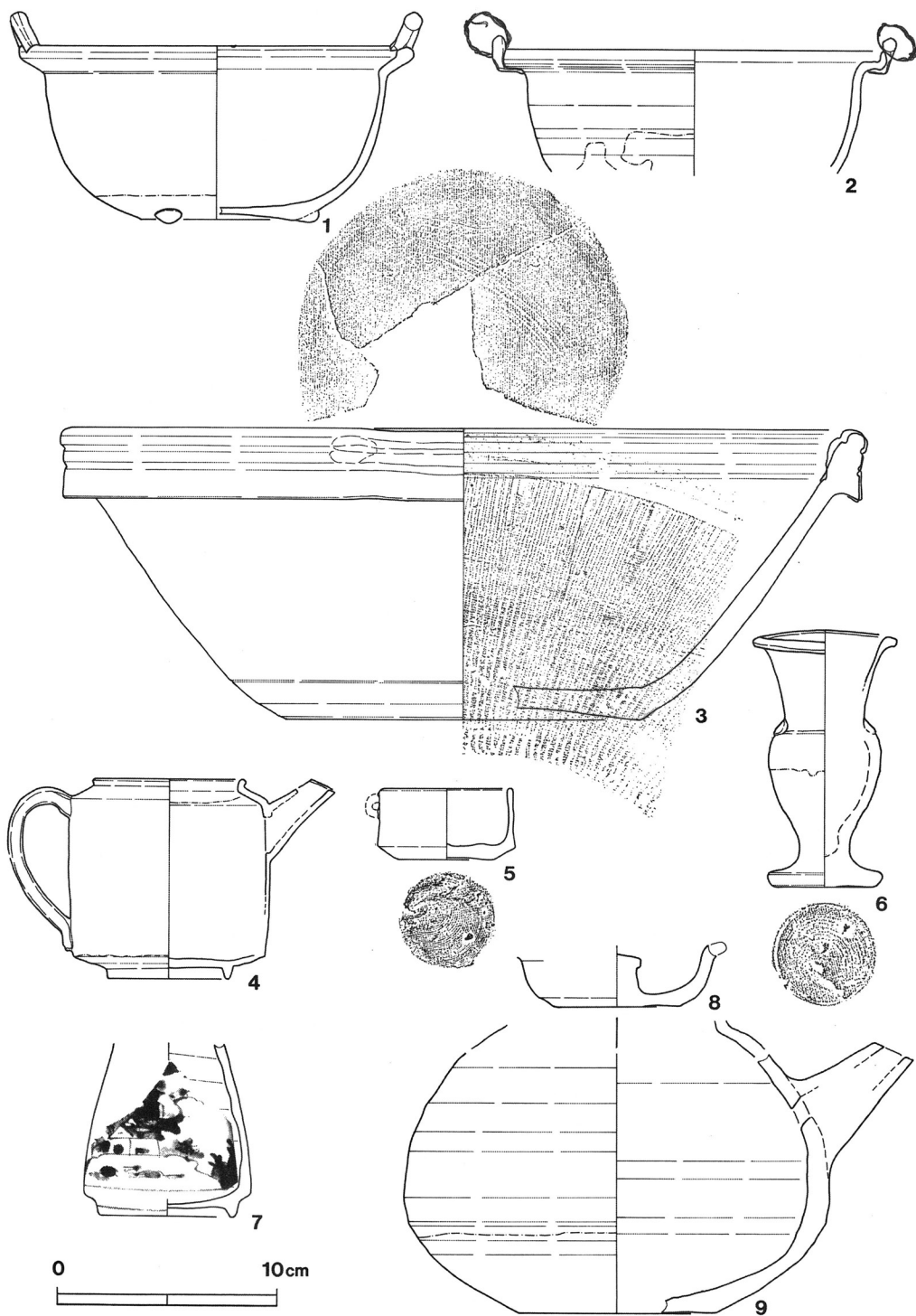
第177図 陶器・磁器・土器(29)



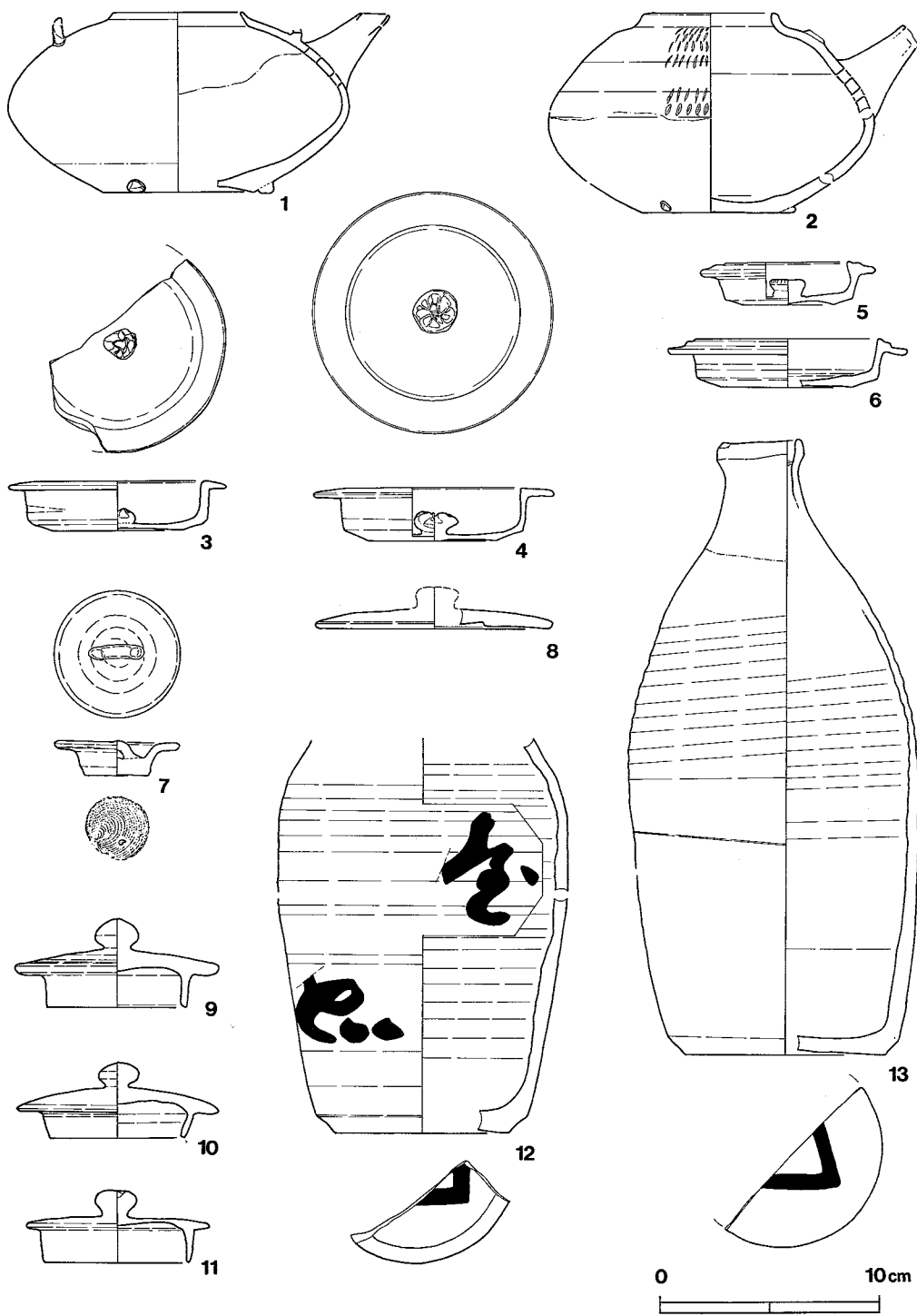
第178図 陶器・磁器・土器(30)



第179図 陶器・磁器・土器(31)

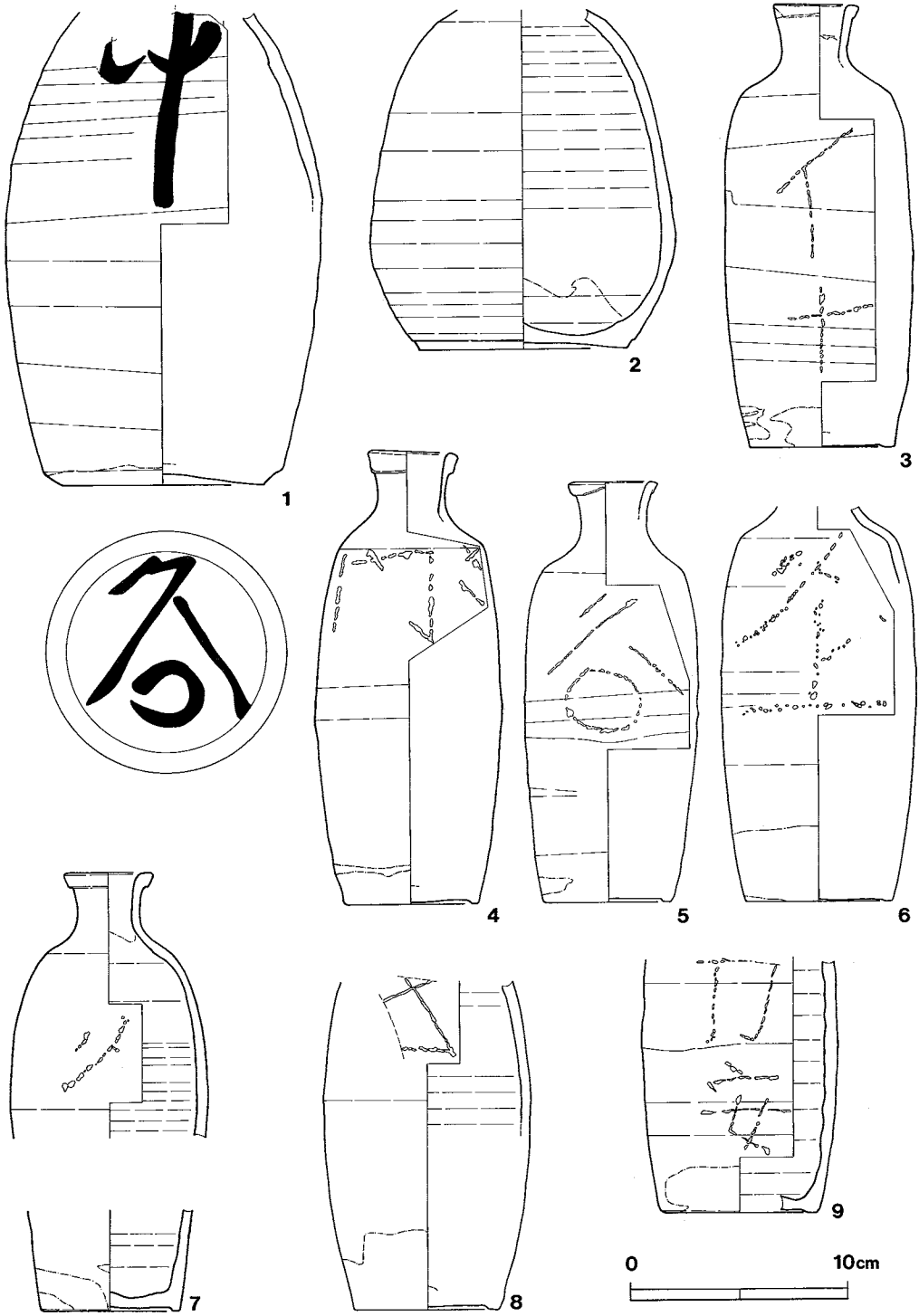


第180図 陶器・磁器・土器(32)

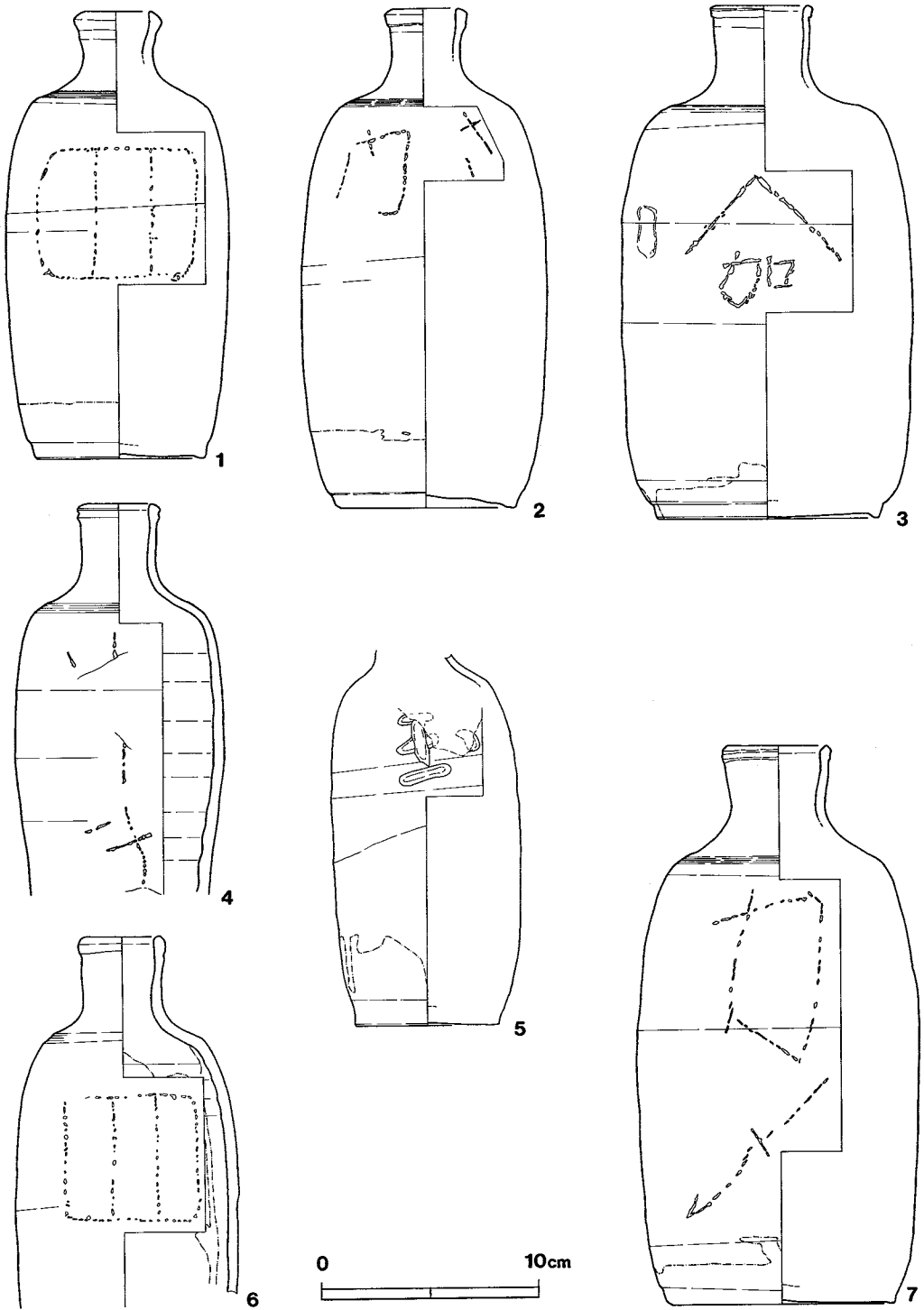


第181图 陶器·磁器·土器(33)

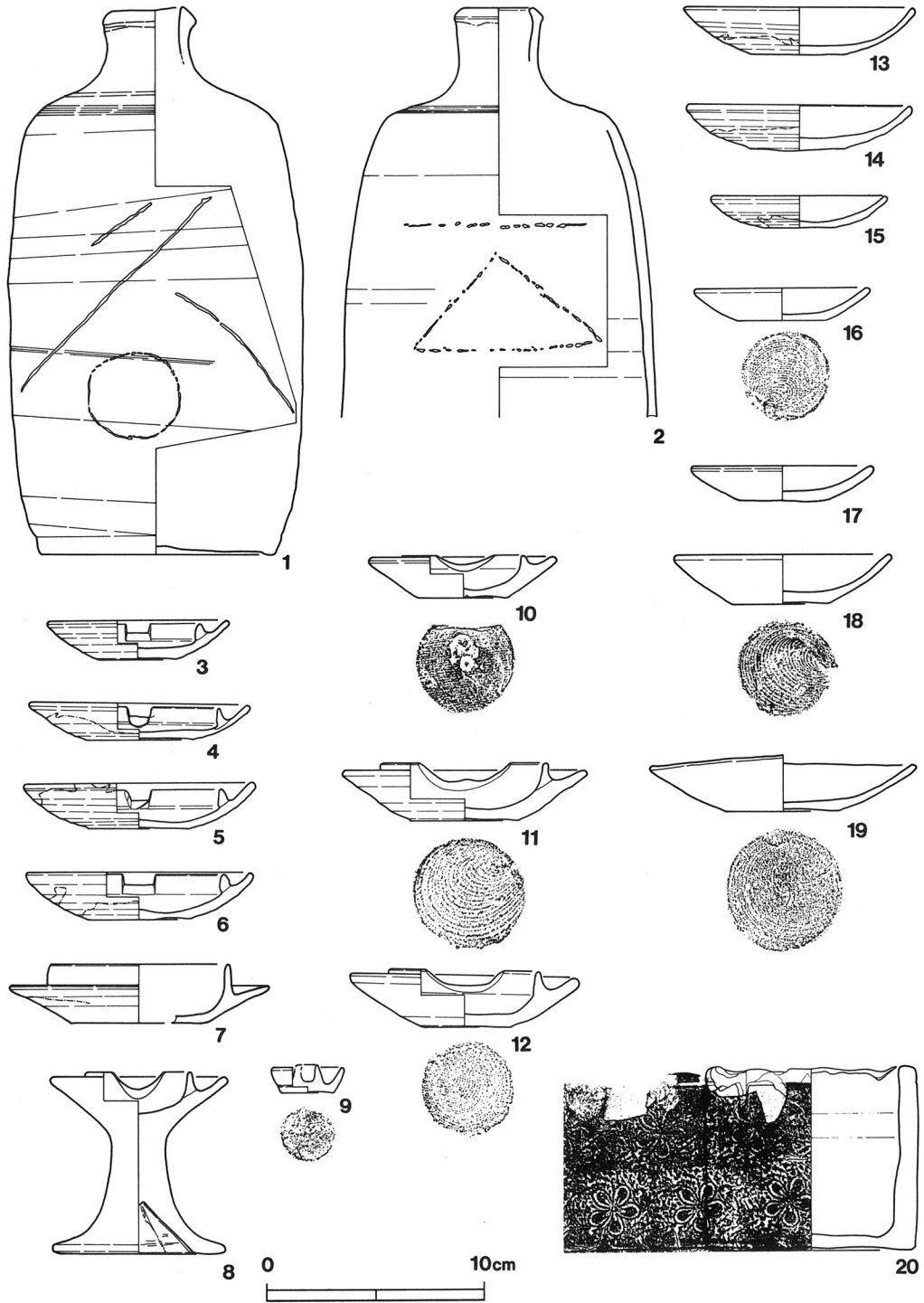




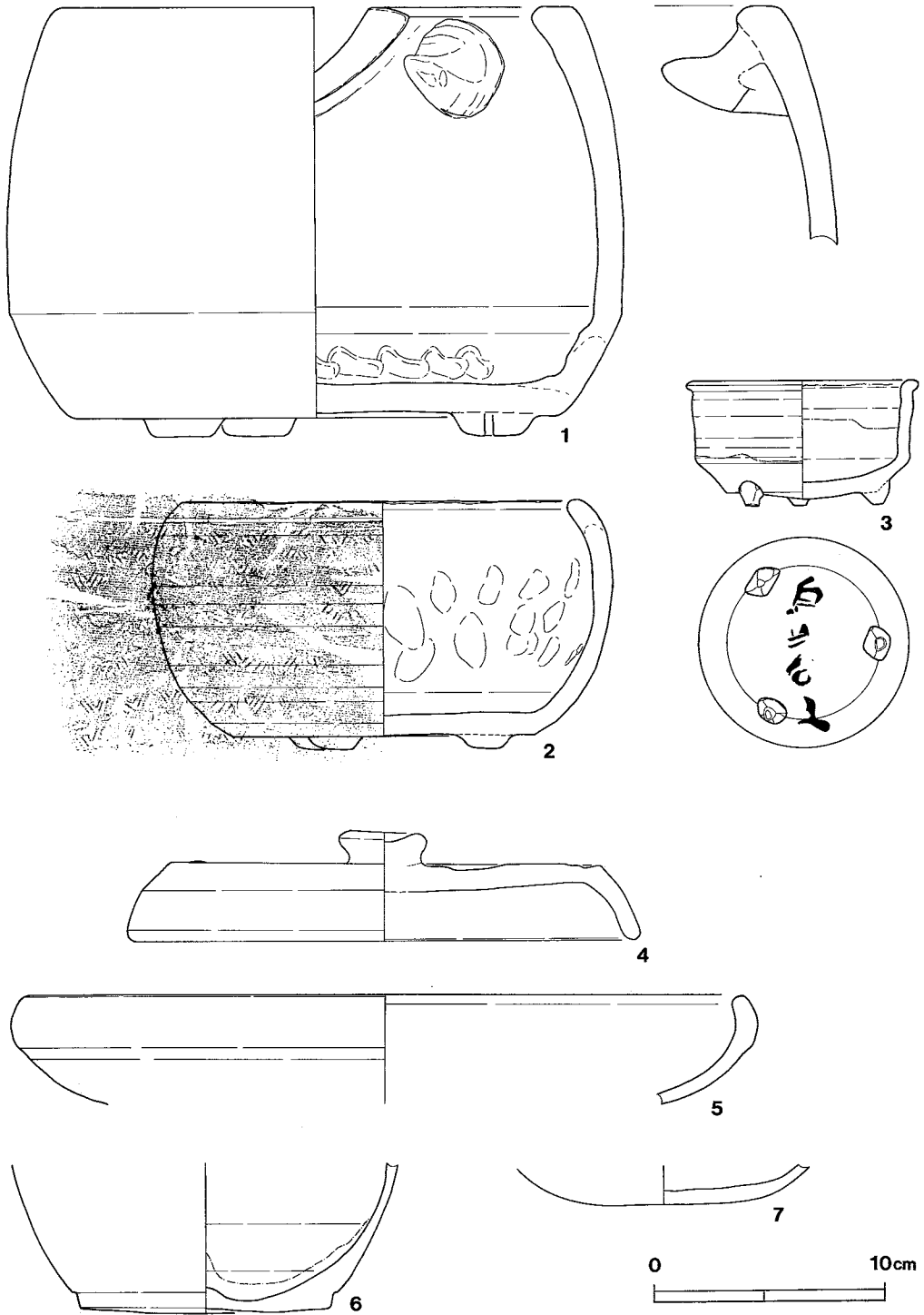
第182図 陶器・磁器・土器(34)



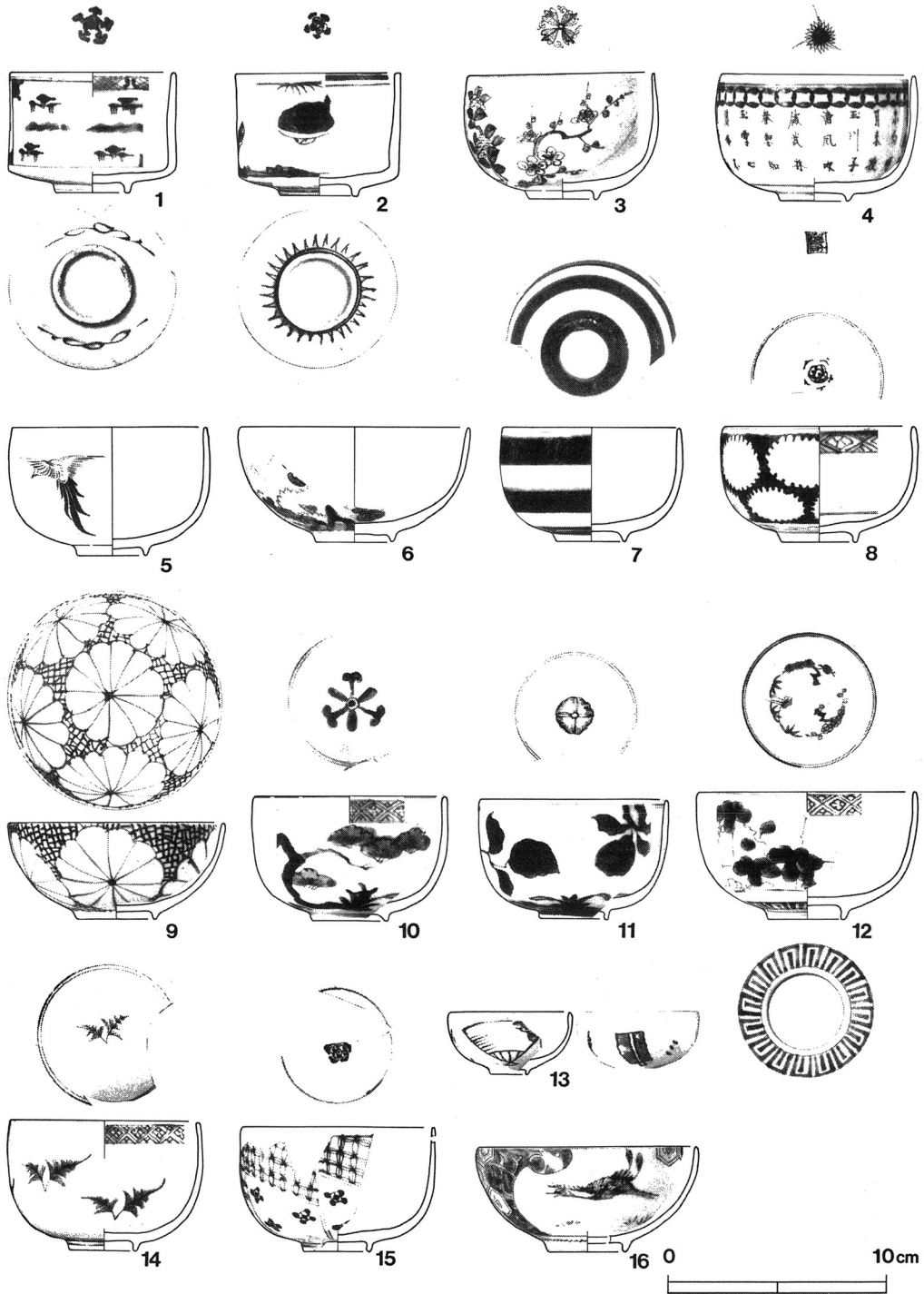
第183図 陶器・磁器・土器(35)



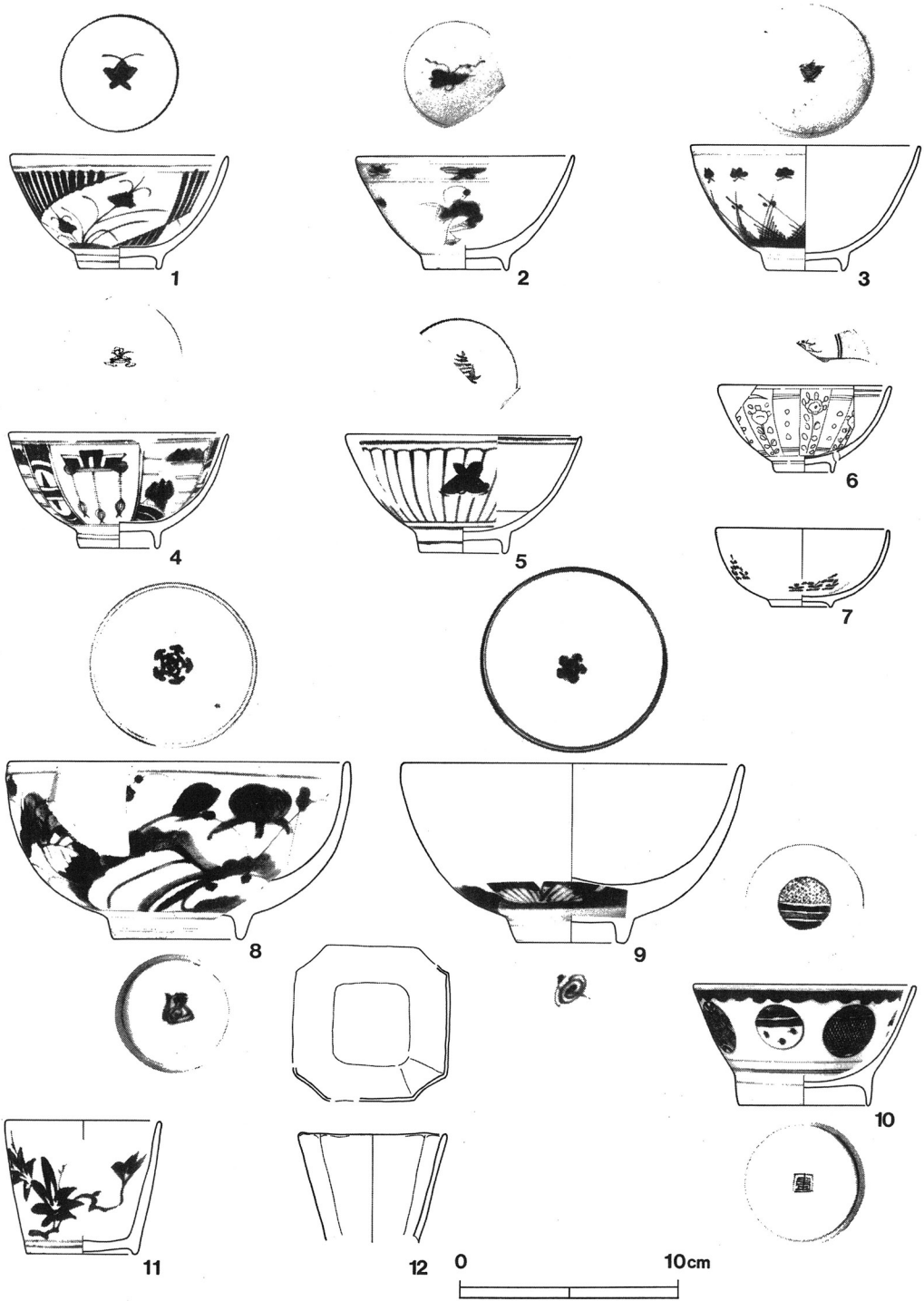
第184図 陶器・磁器・土器(36)



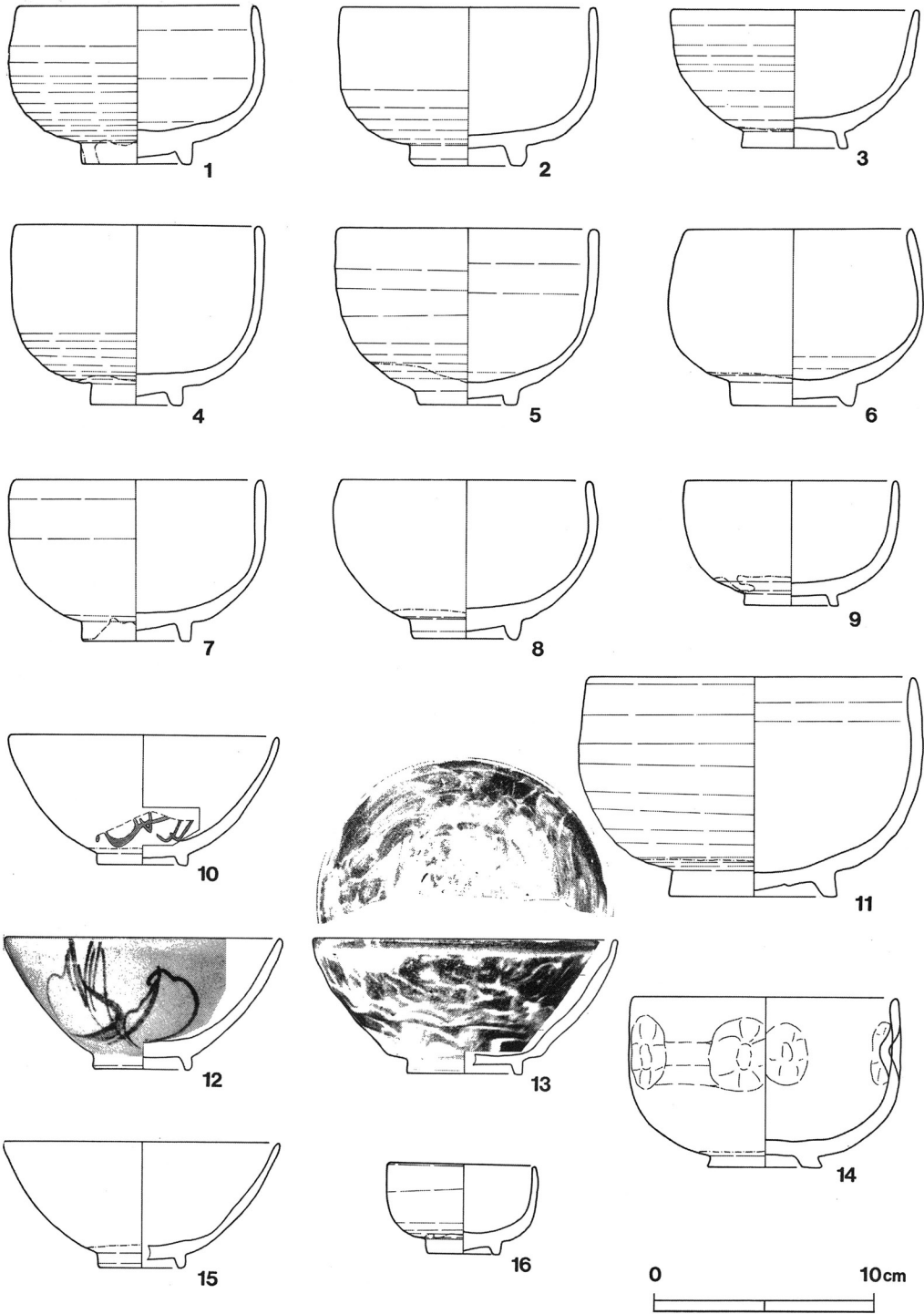
第185图 陶器·磁器·土器(37)



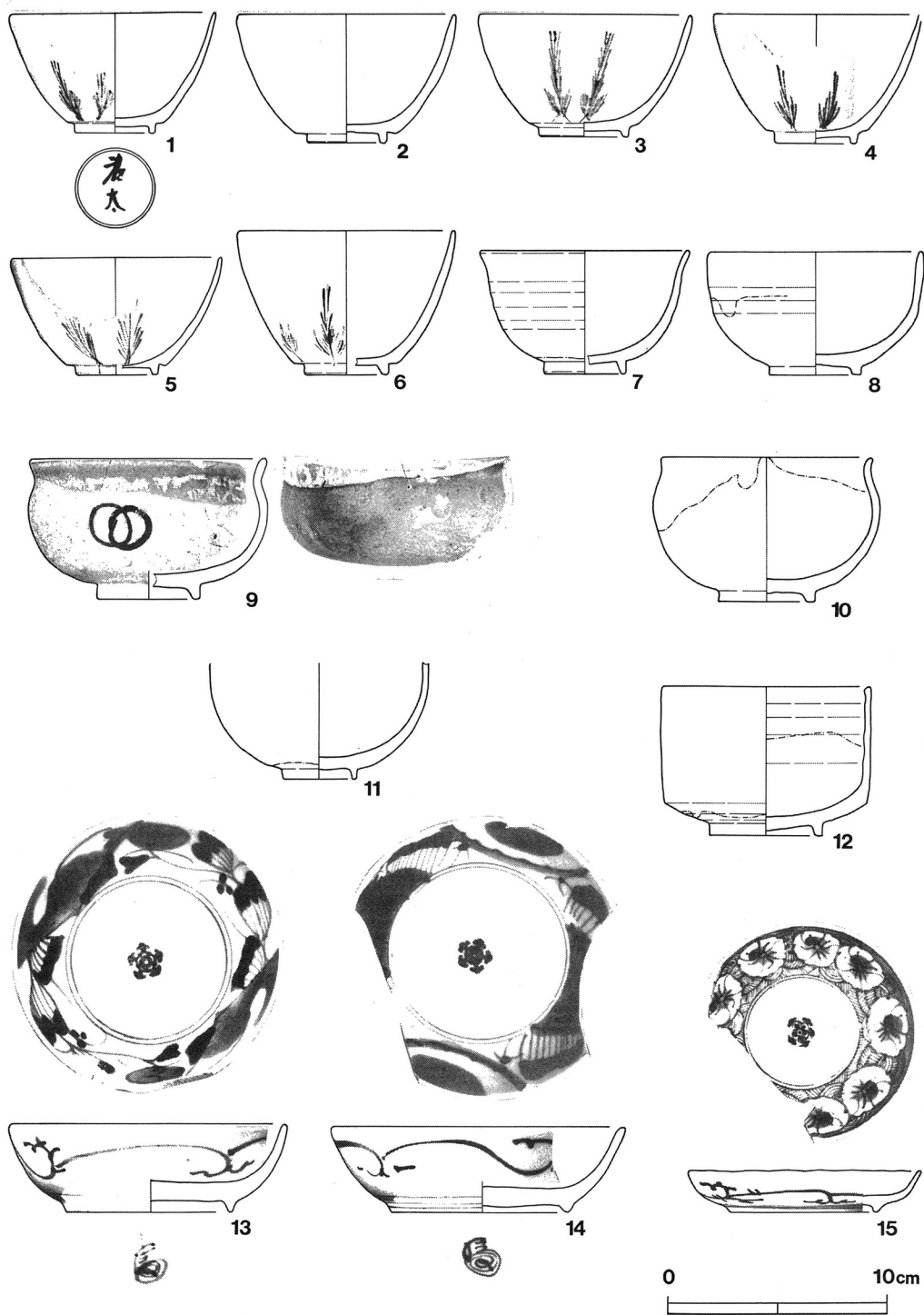
第186図 陶器・磁器・土器(38)



第187图 陶器·磁器·土器(39)

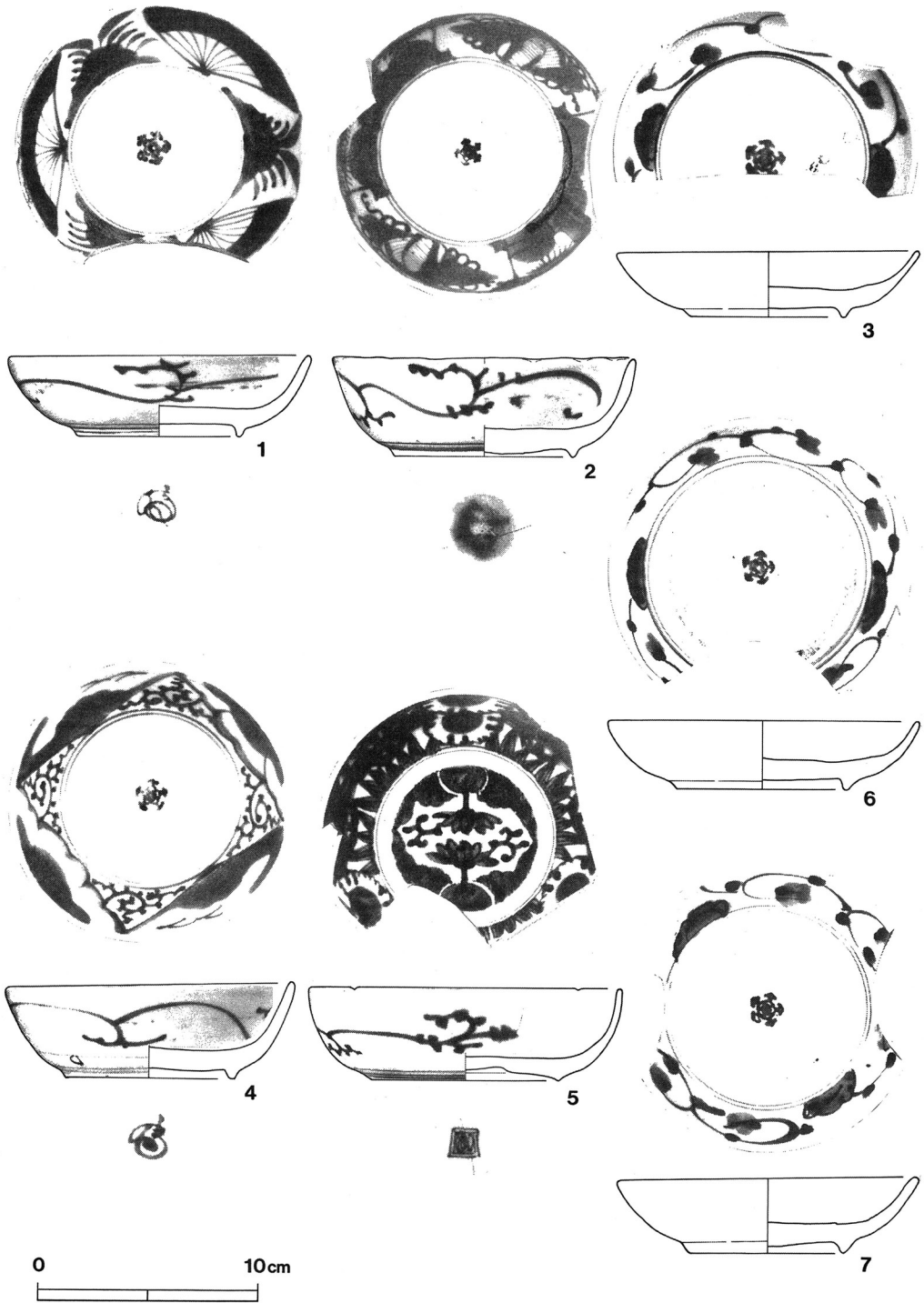


第188図 陶器・磁器・土器(40)

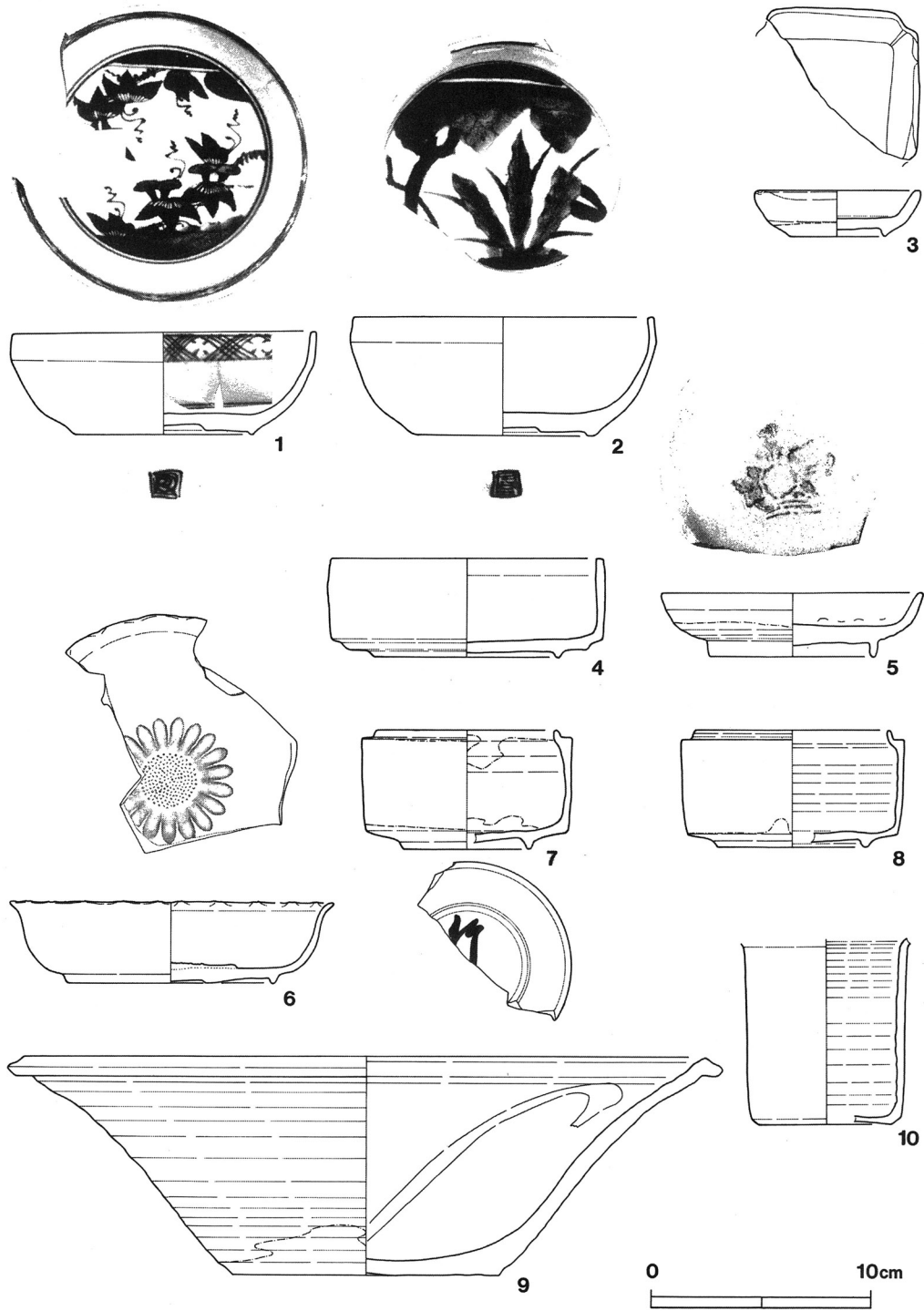


第189図 陶器・磁器・土器(41)

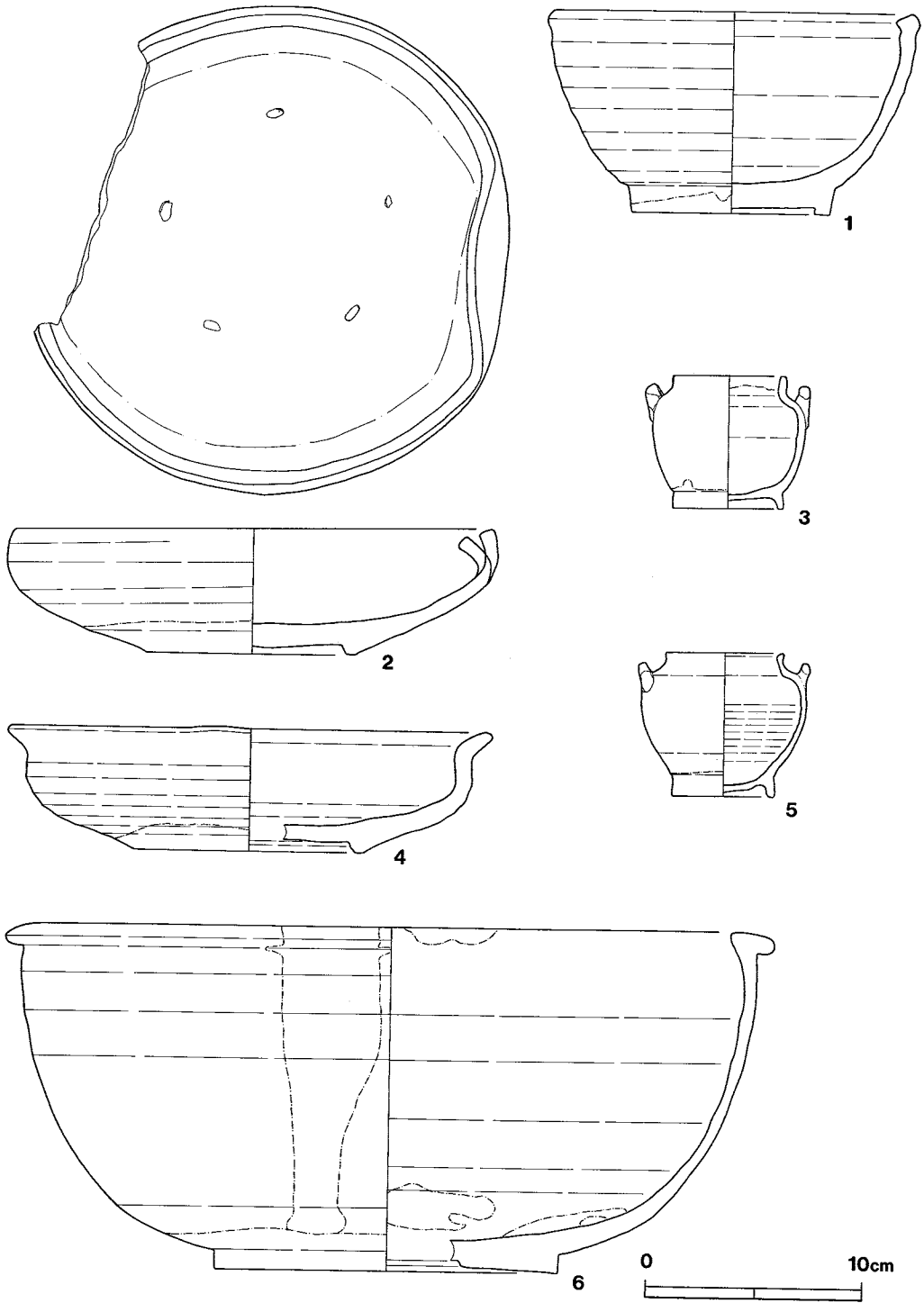




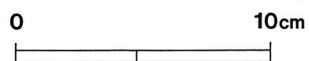
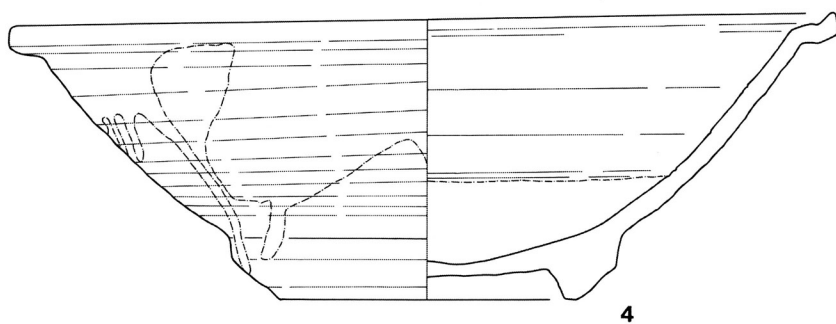
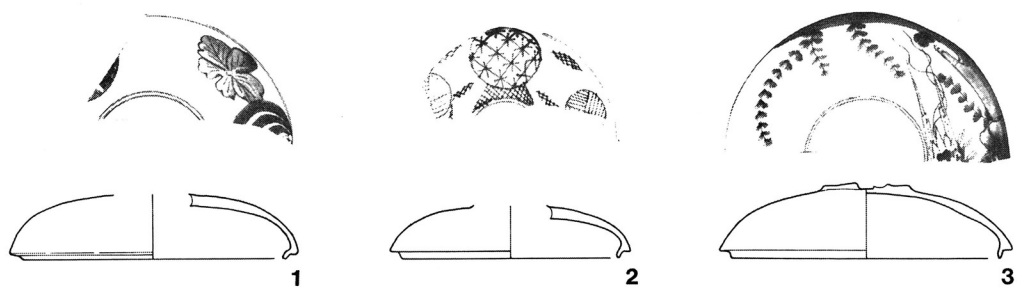
第190図 陶器・磁器・土器(42)



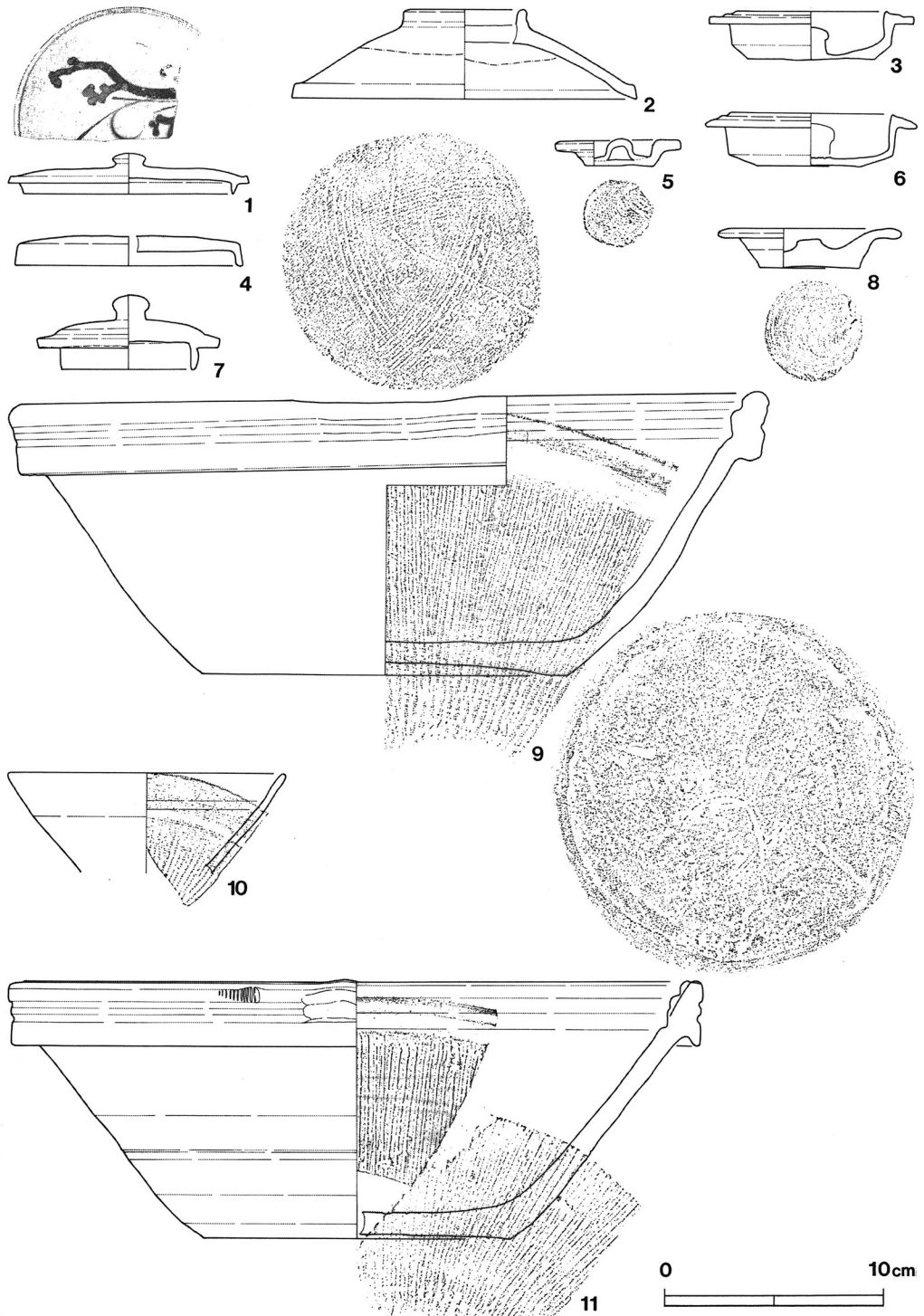
第191図 陶器・磁器・土器(43)



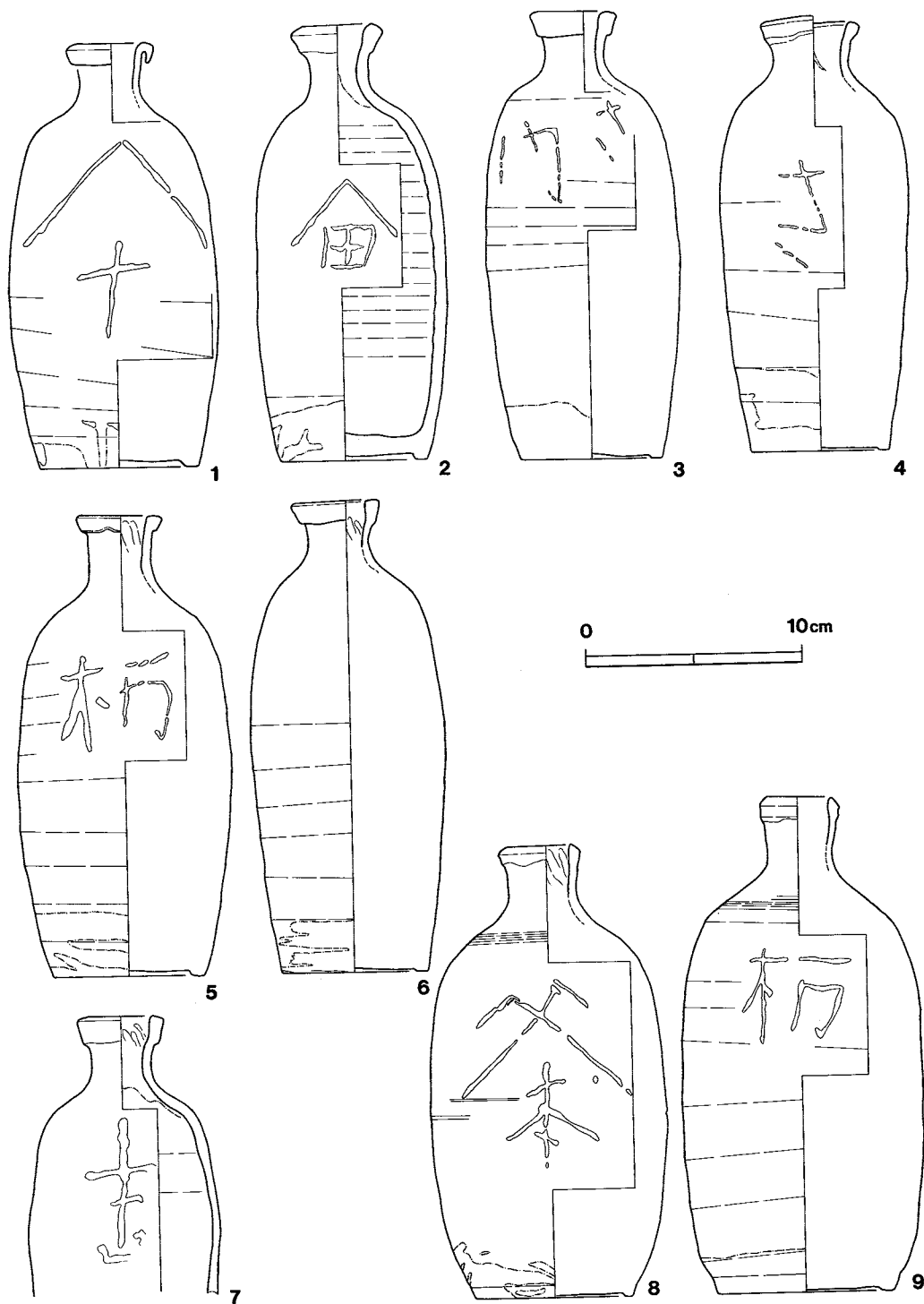
第192図 陶器・磁器・土器(44)



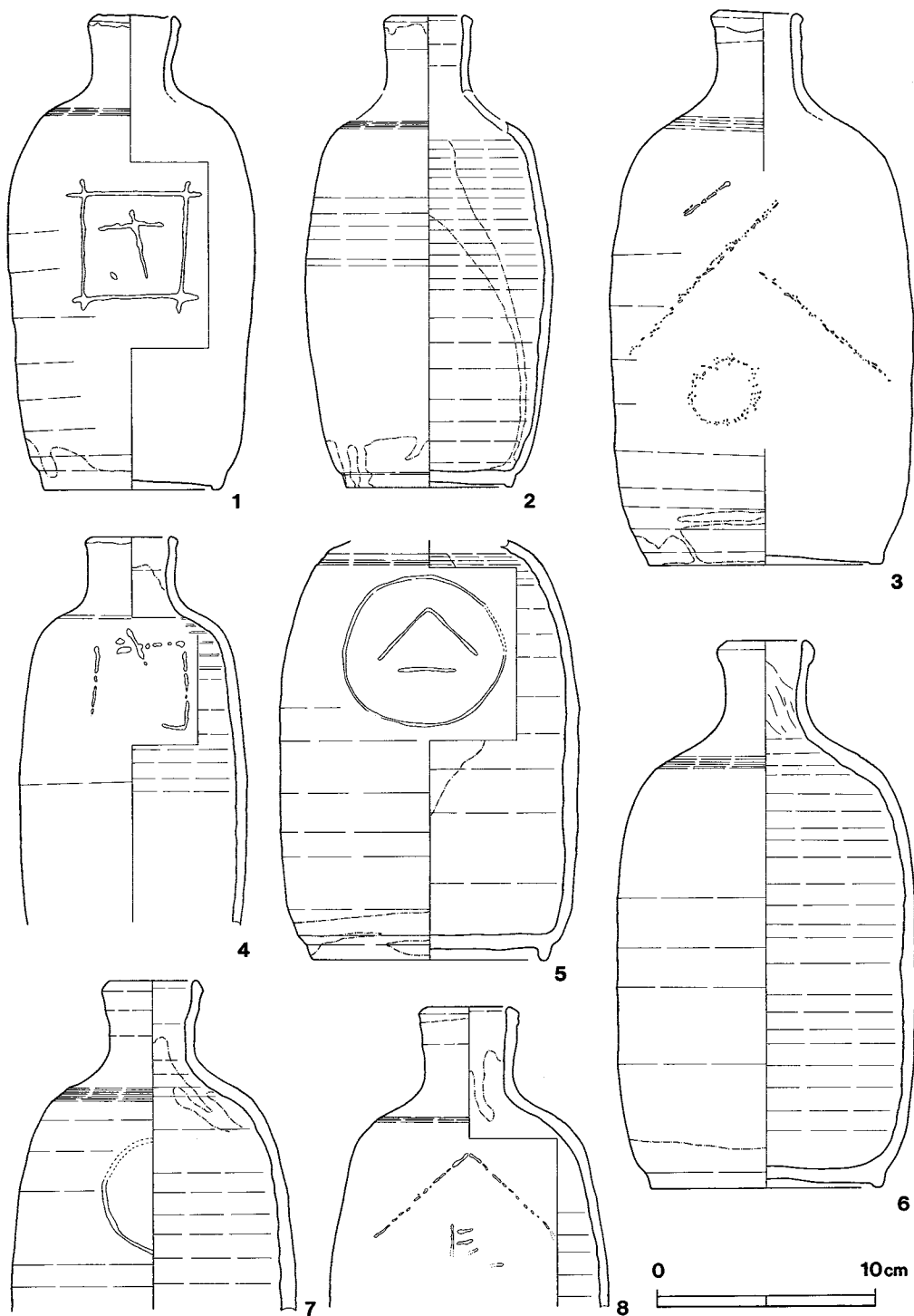
第193图 陶器·磁器·土器(45)



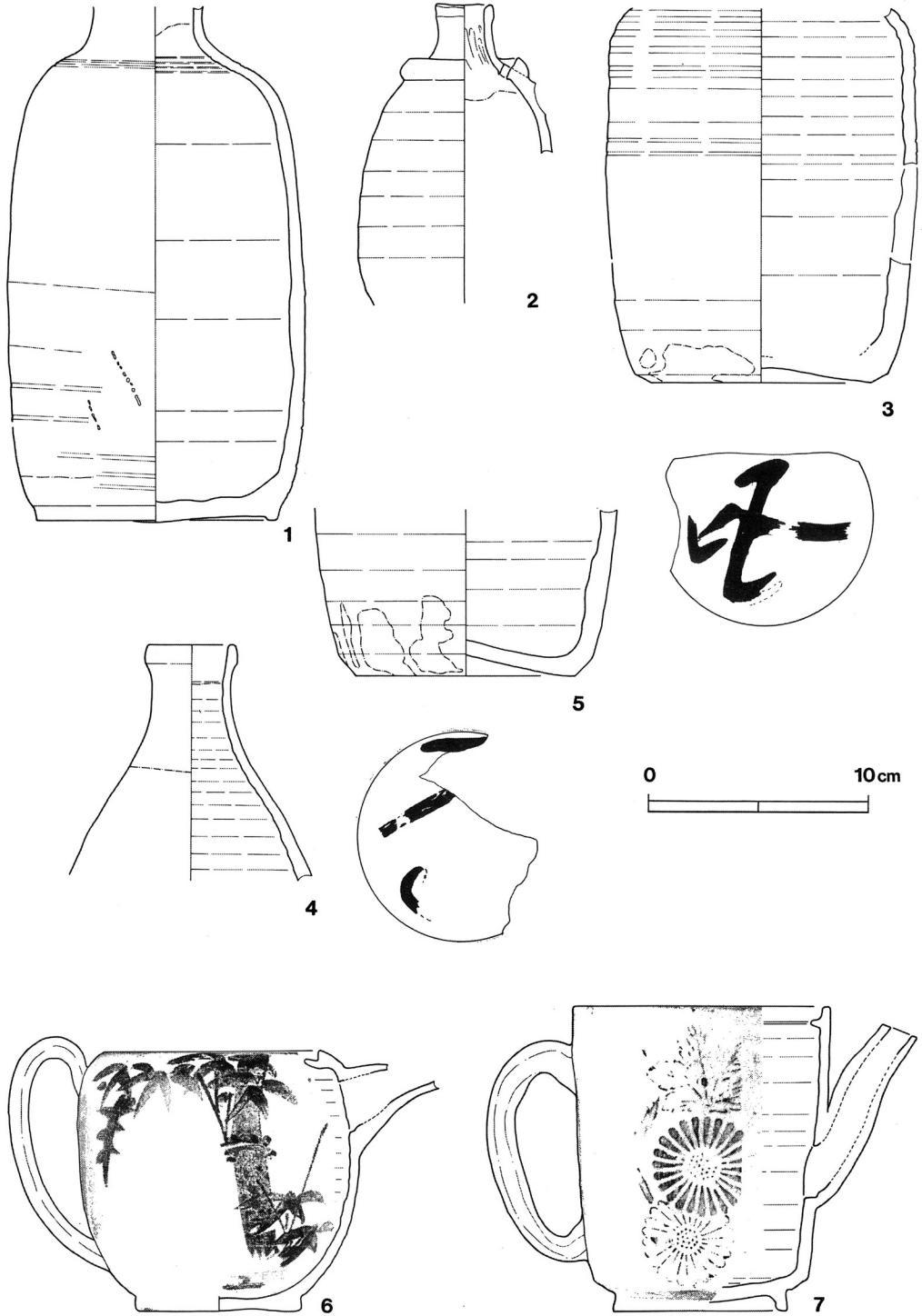
第194図 陶器・磁器・土器(46)



第195図 陶器・磁器・土器(47)

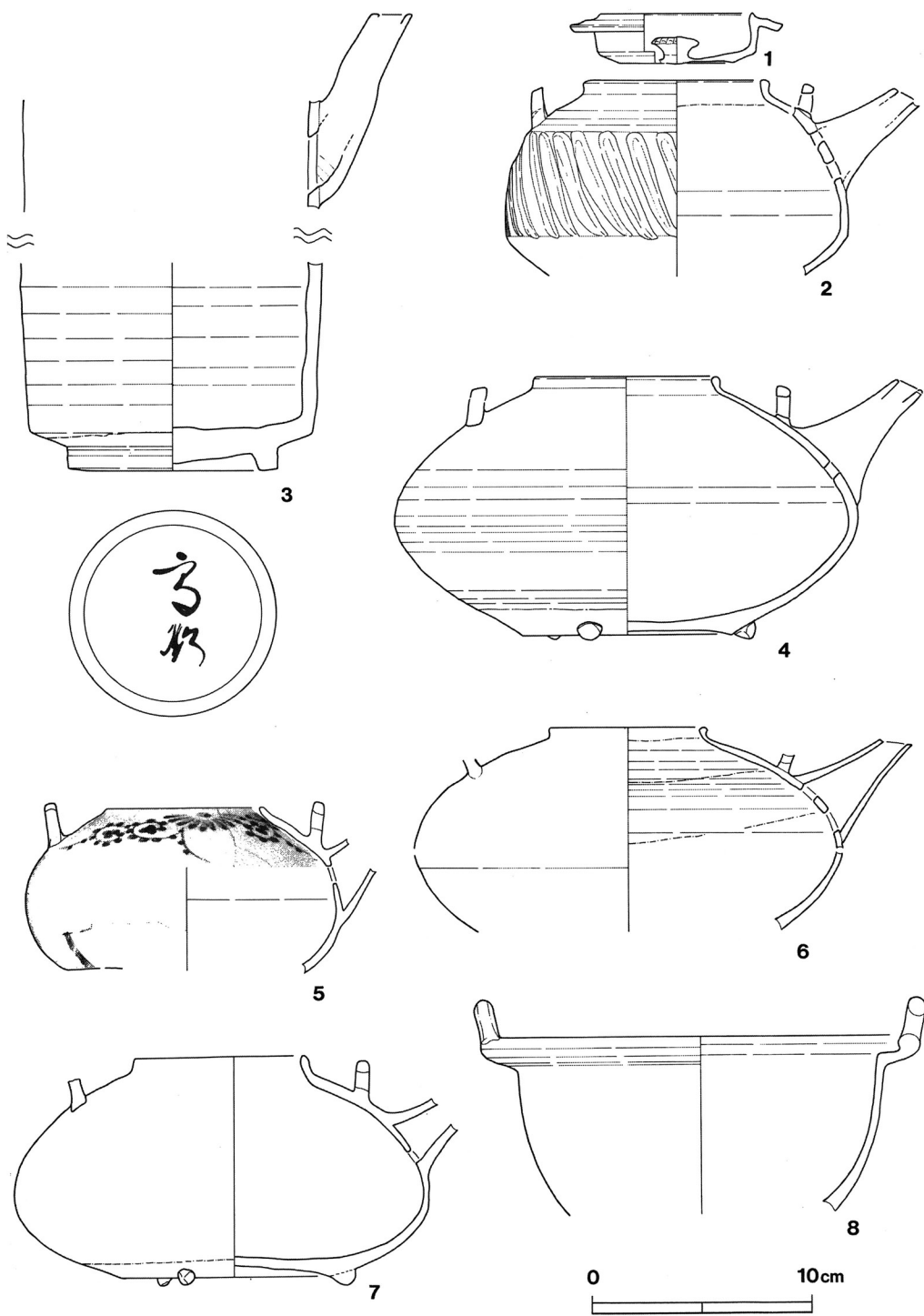


第196図 陶器・磁器・土器(48)

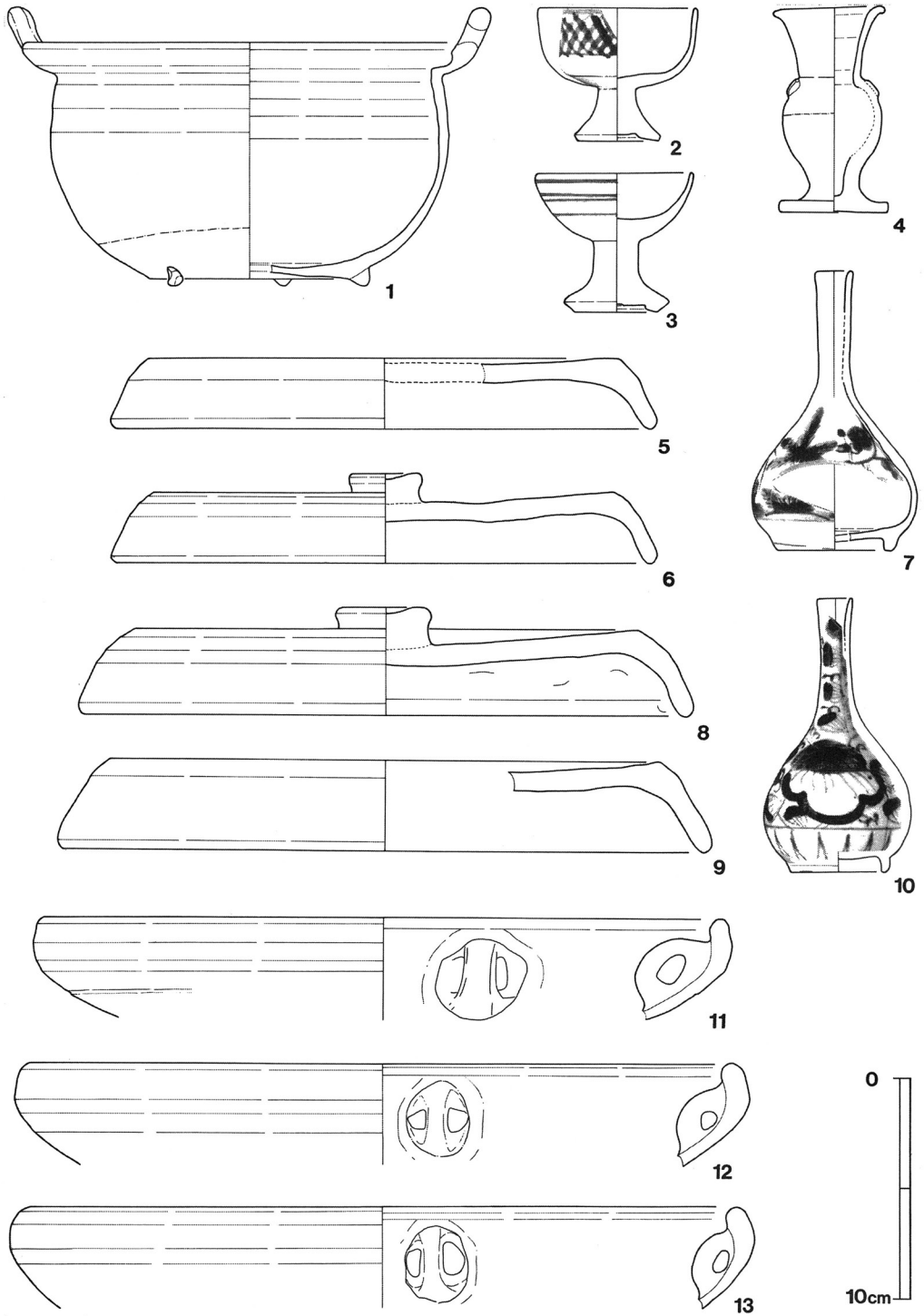


第197图 陶器·磁器·土器(49)

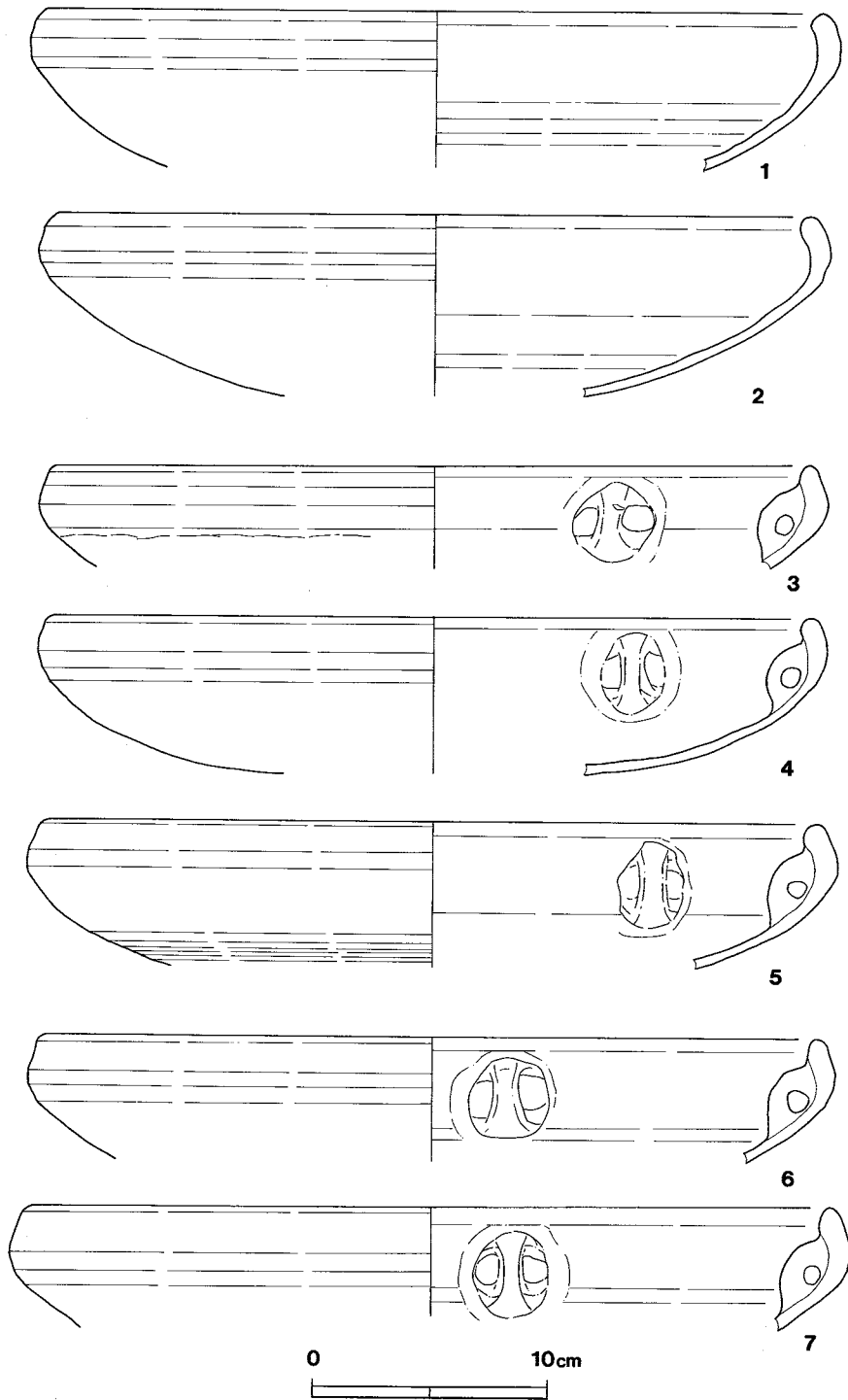




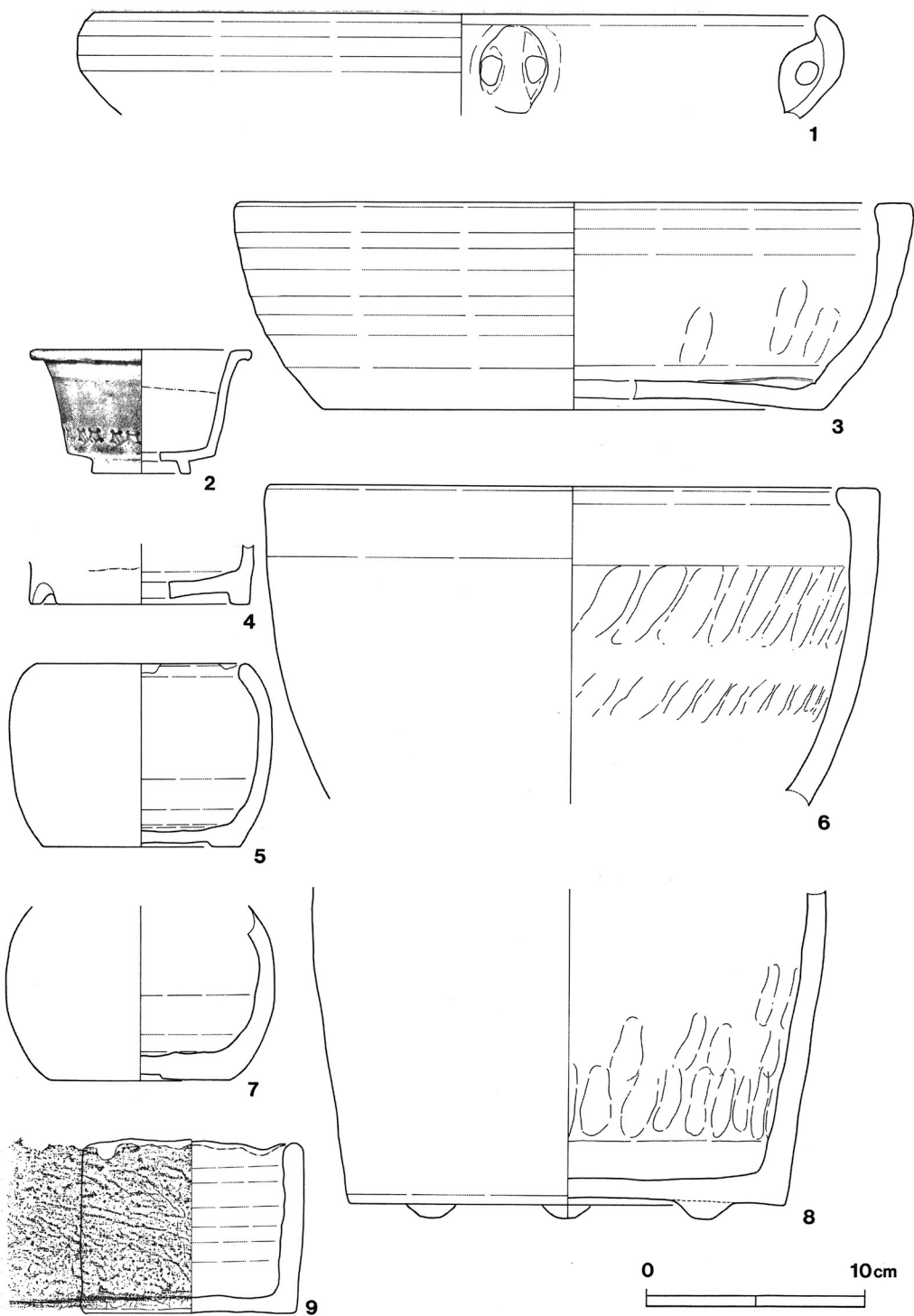
第198図 陶器・磁器・土器(50)



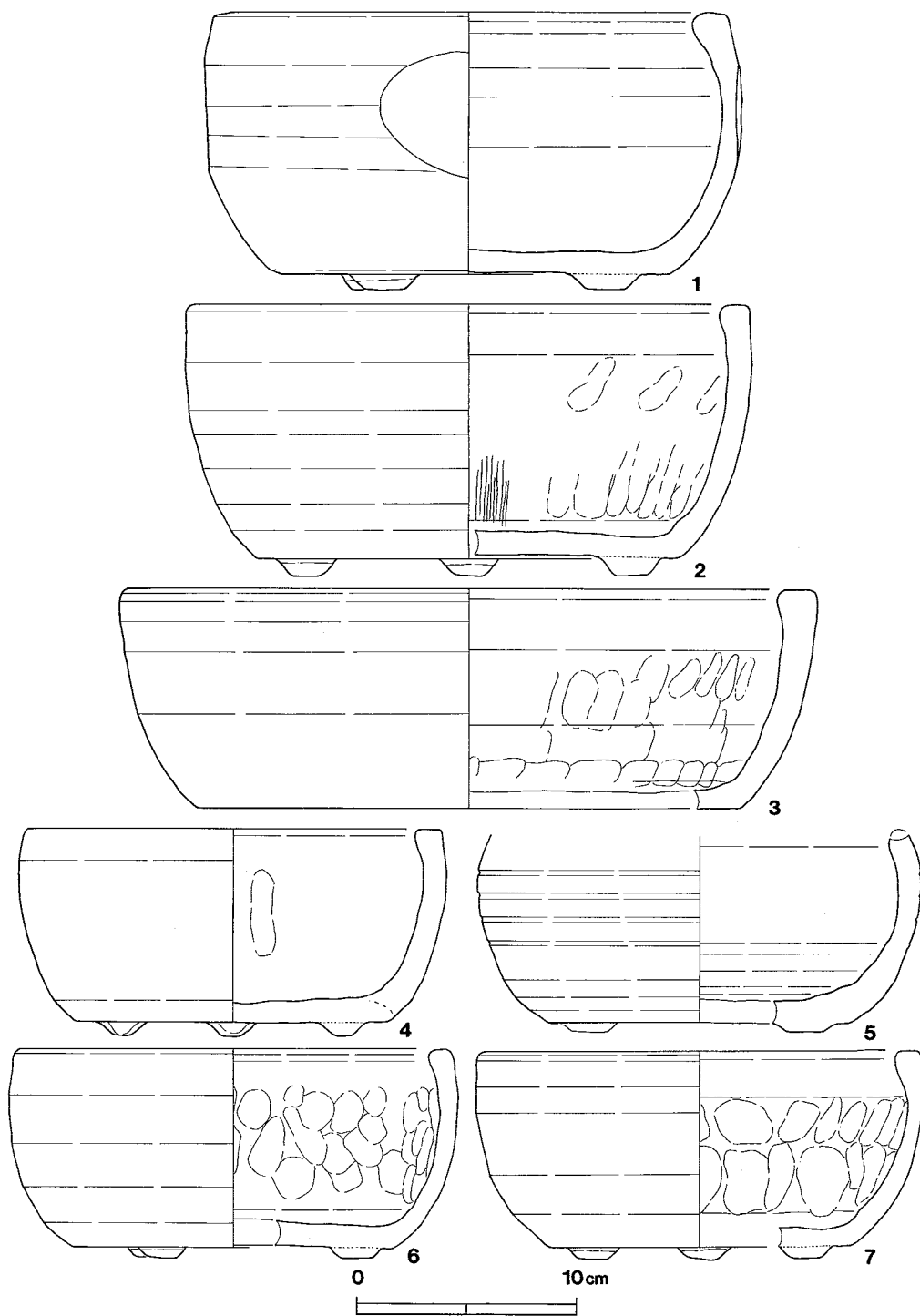
第199图 陶器·磁器·土器(51)



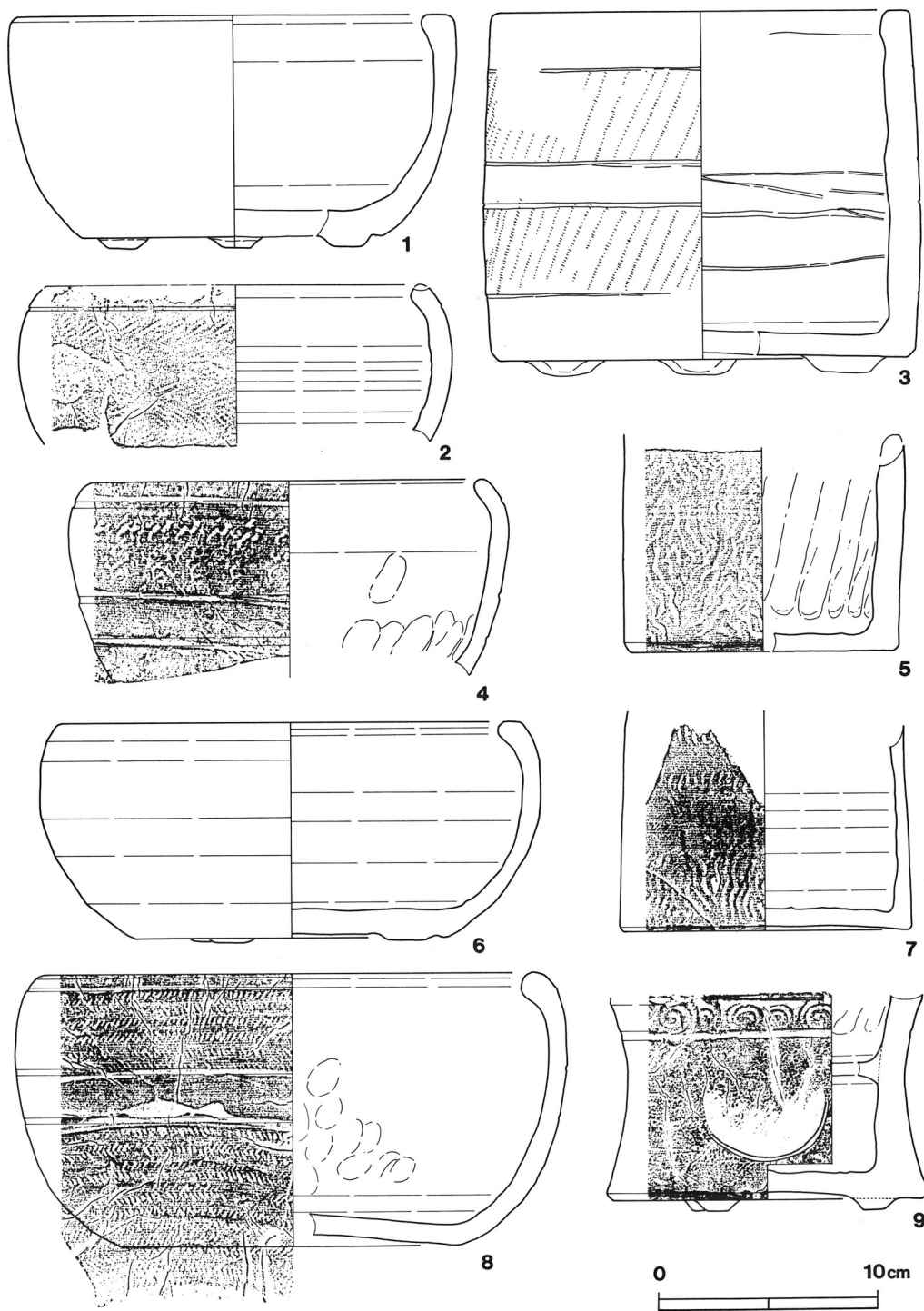
第200図 陶器・磁器・土器(52)



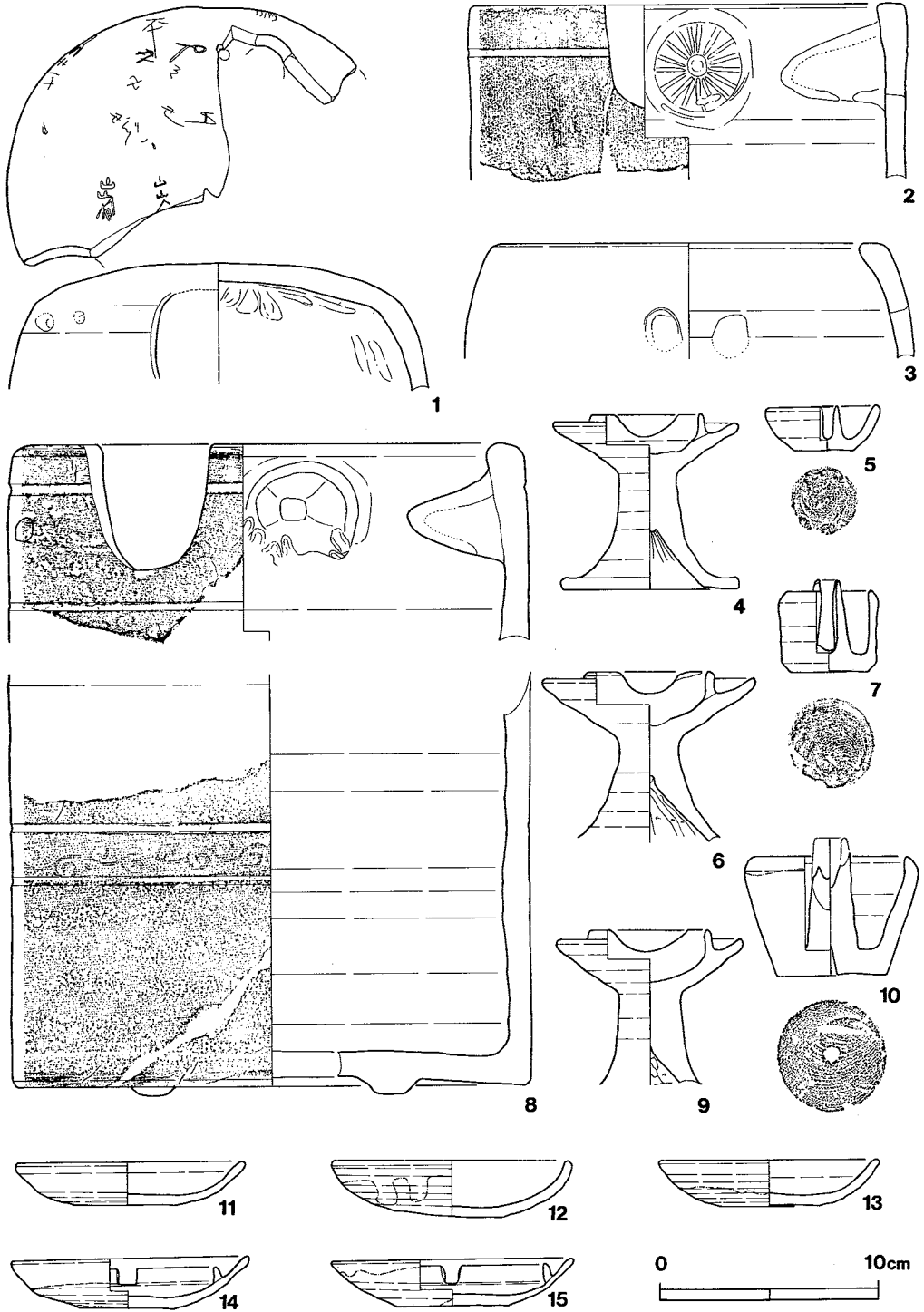
第201图 陶器·磁器·土器(53)



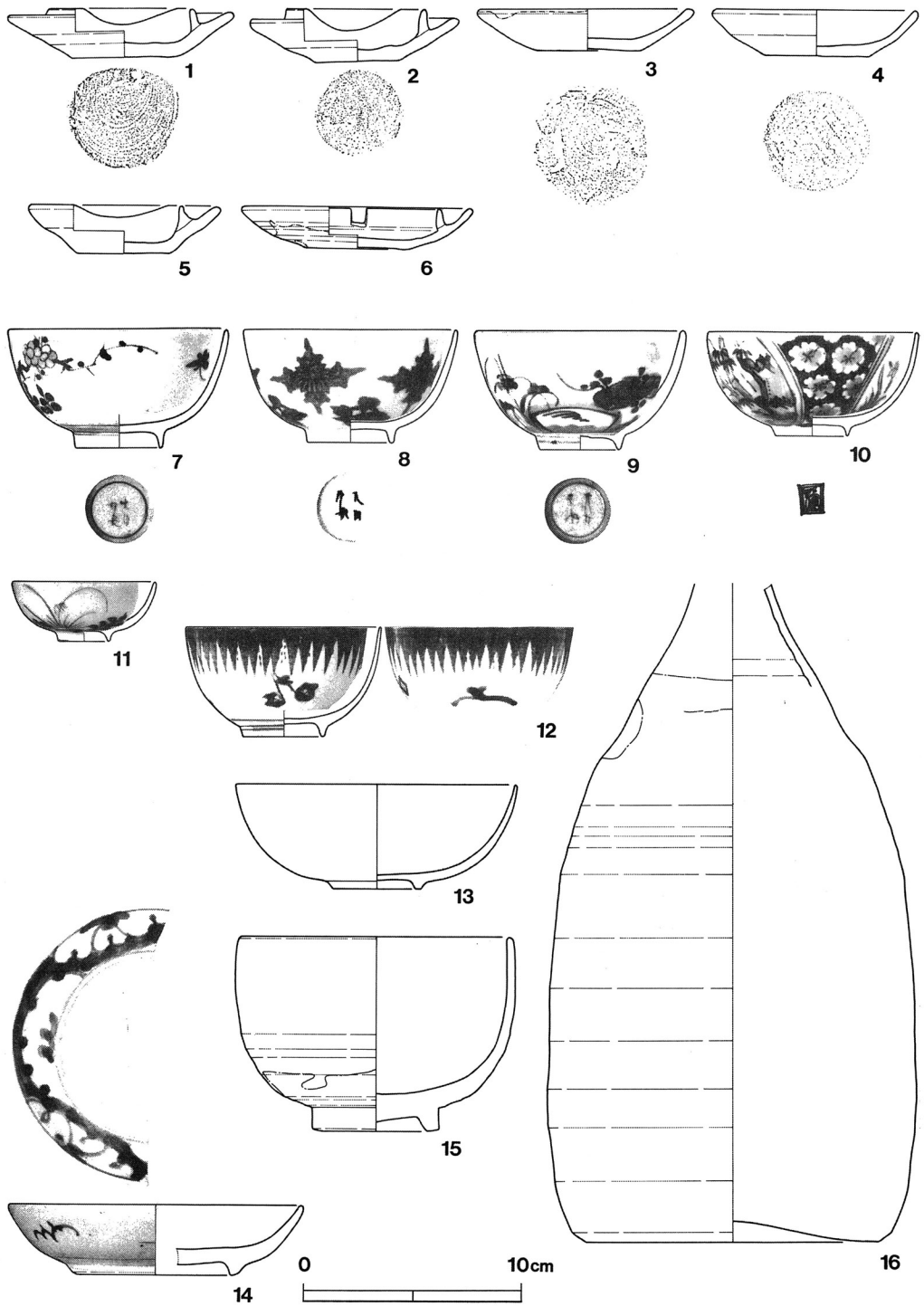
第202図 陶器・磁器・土器(54)



第203图 陶器·磁器·土器(55)



第204図 陶器・磁器・土器(56)

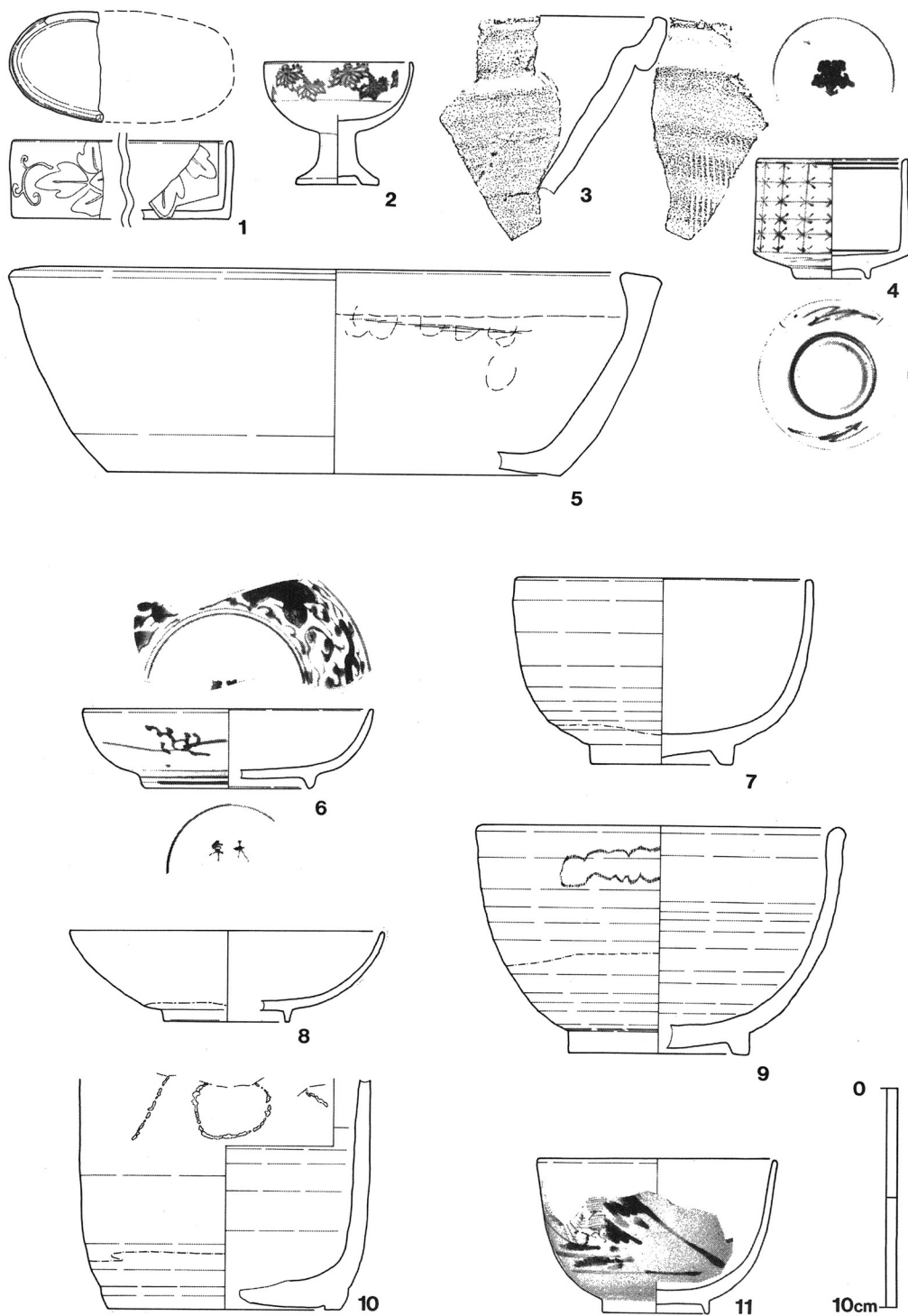


第205图 陶器·磁器·土器(57)

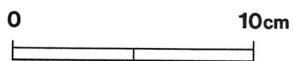
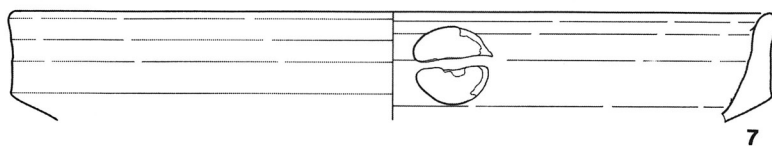
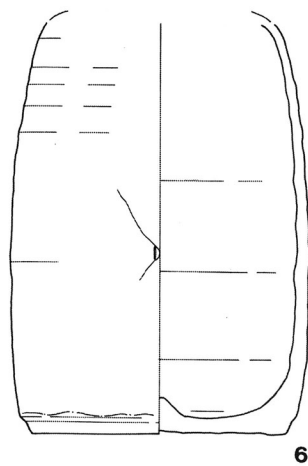
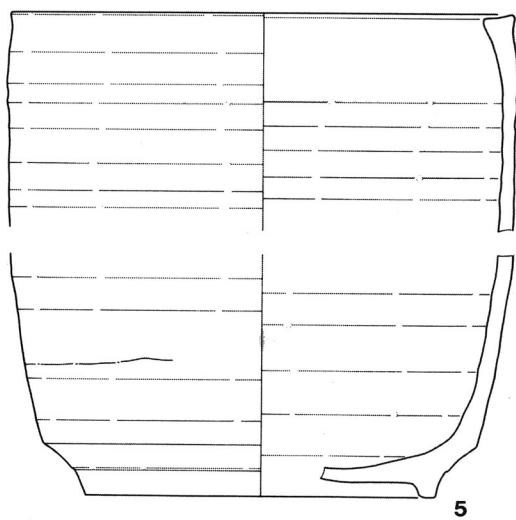
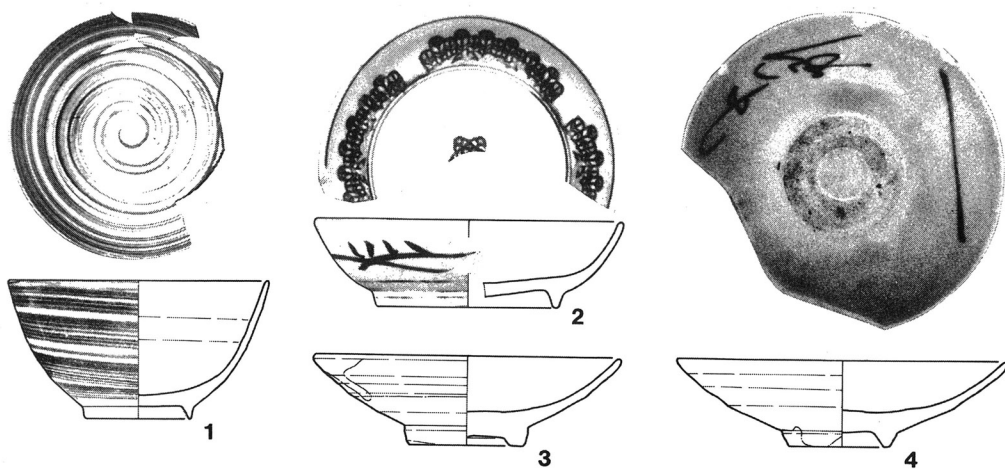




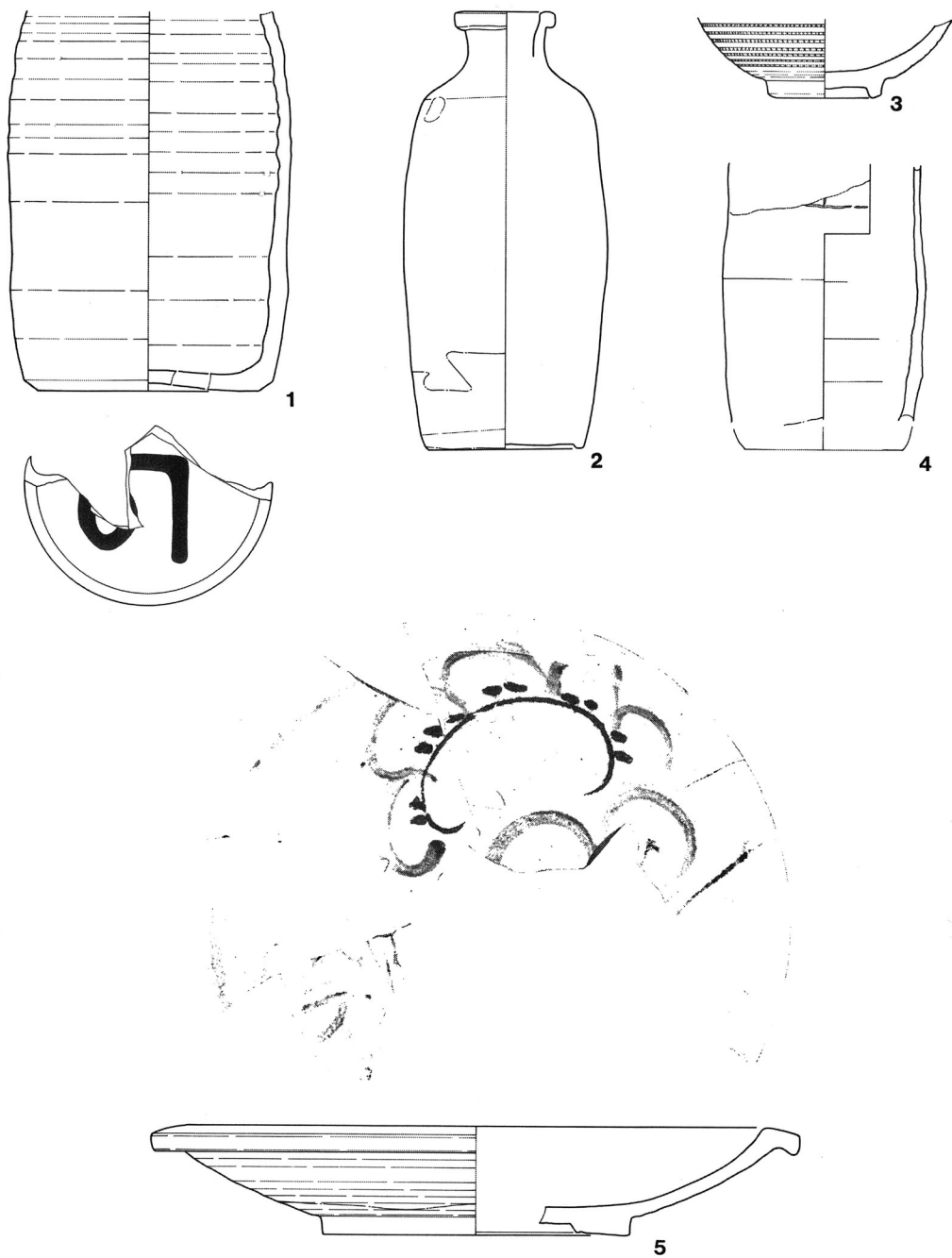
第206図 陶器・磁器・土器(58)



第207图 陶器·磁器·土器(59)

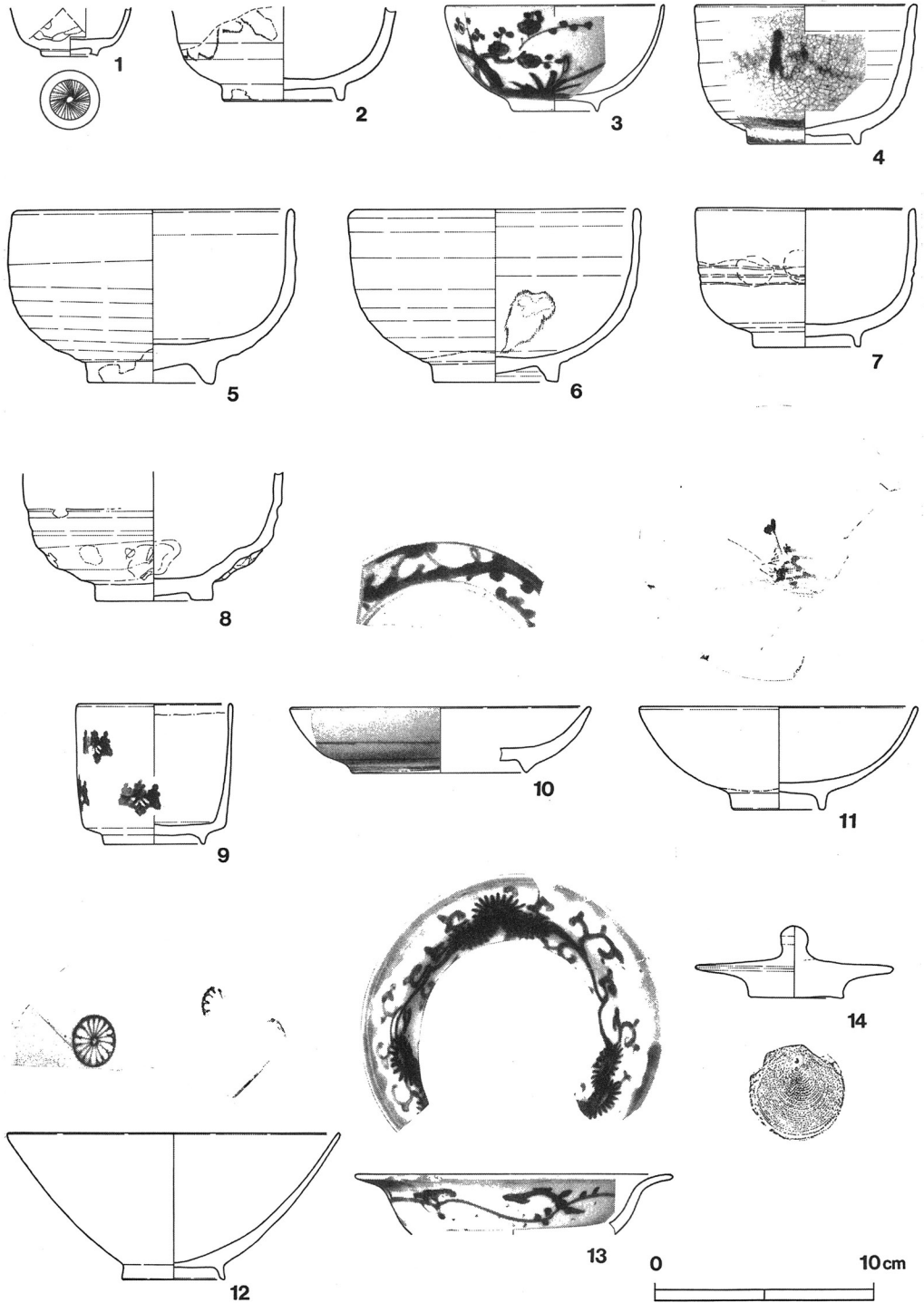


第208図 陶器・磁器・土器(60)

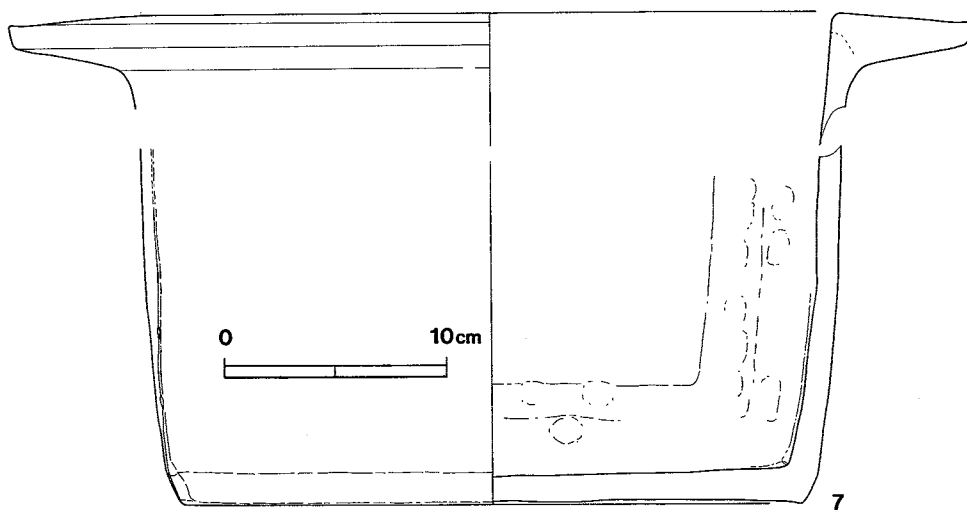
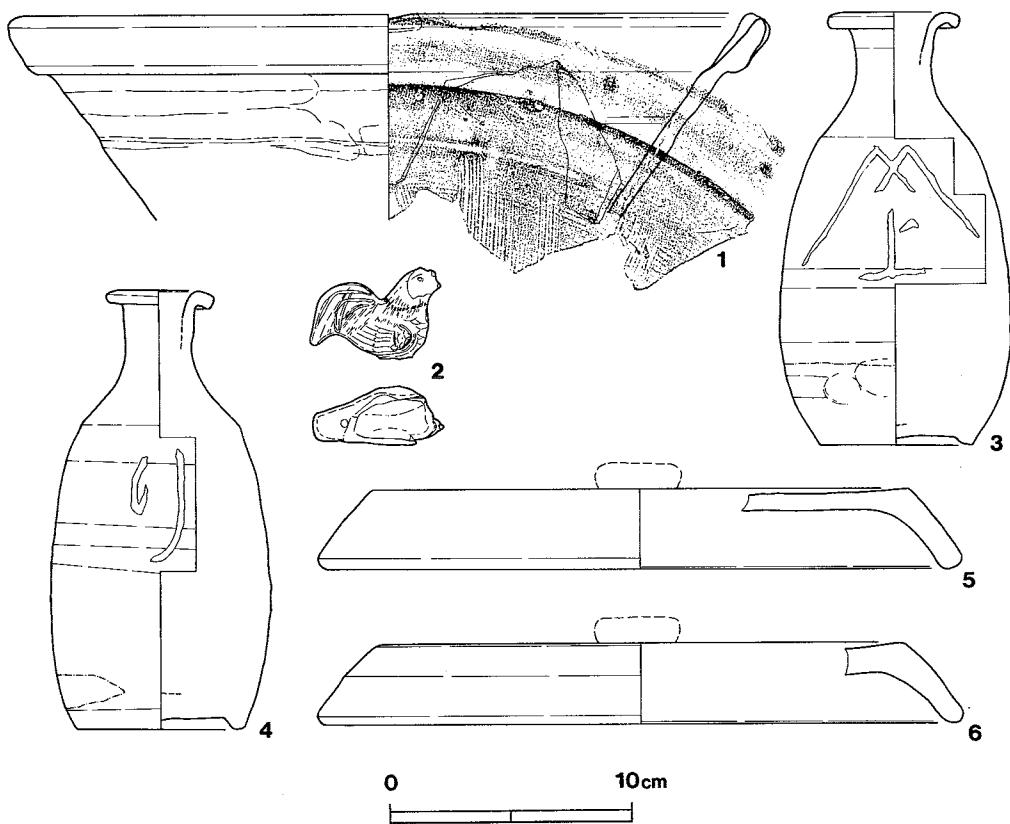


第209図 陶器・磁器・土器(61)

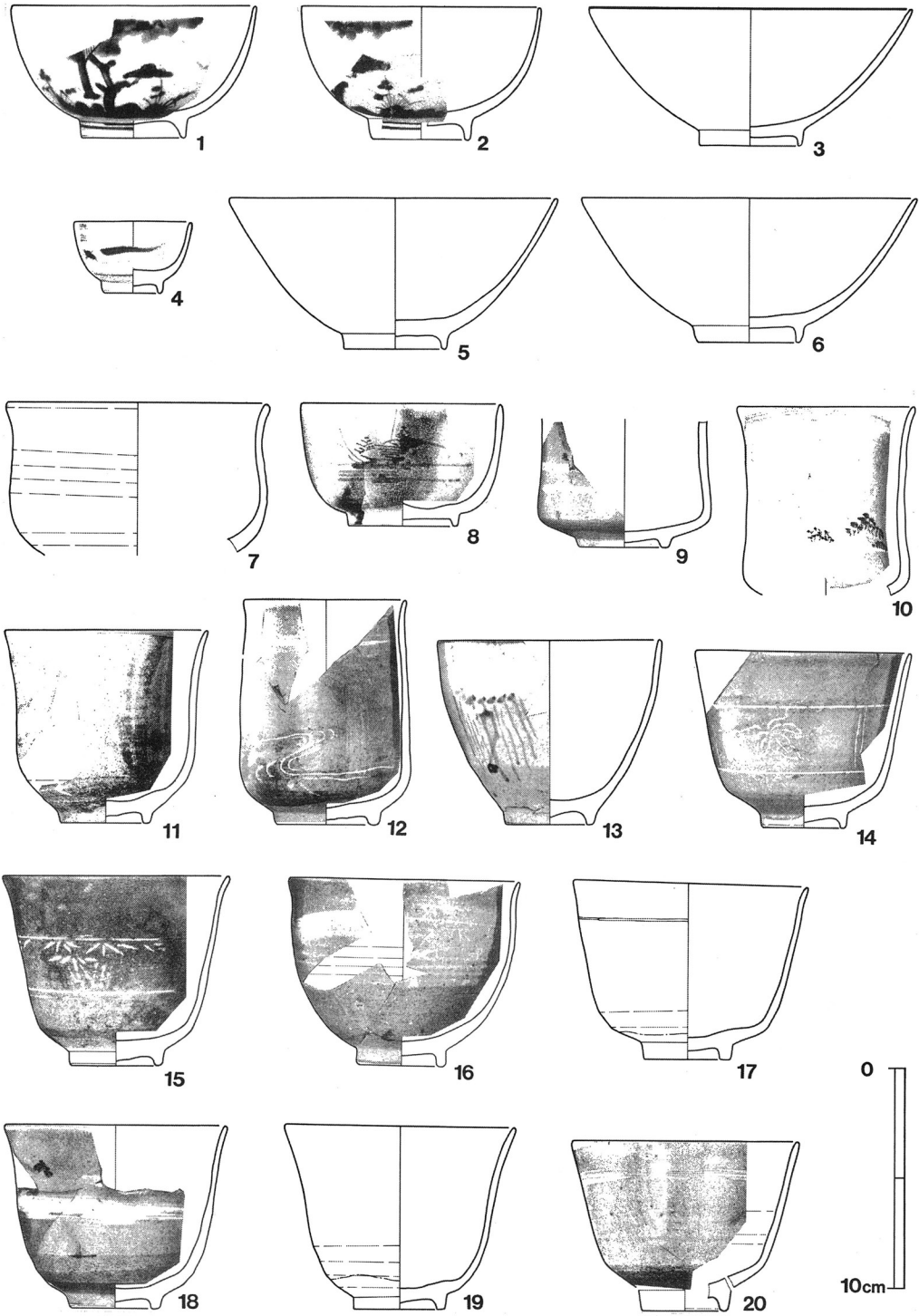
報告篇第三章 江戸時代の調査 I



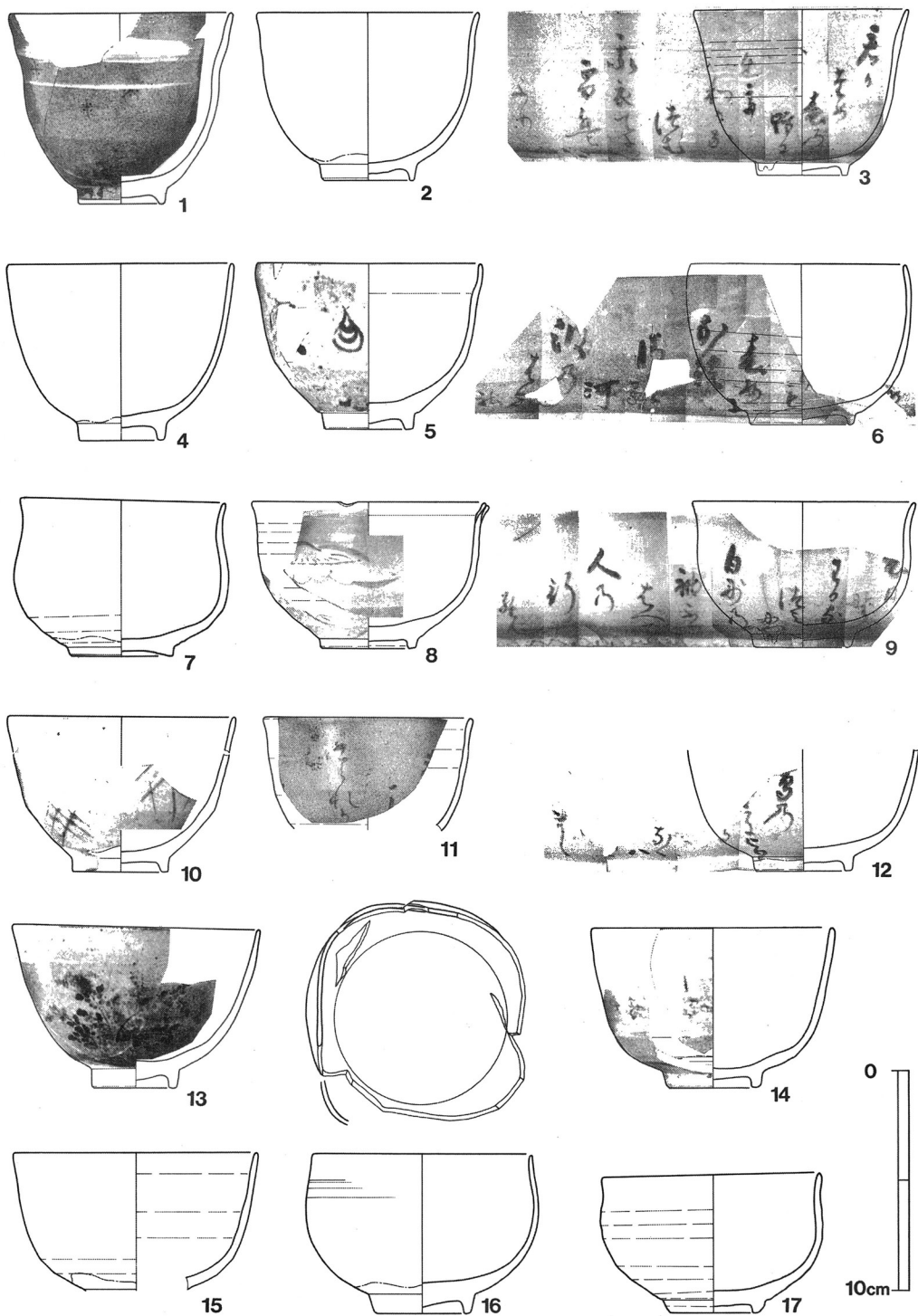
第210図 陶器・磁器・土器(62)



第211図 陶器・磁器・土器(63)

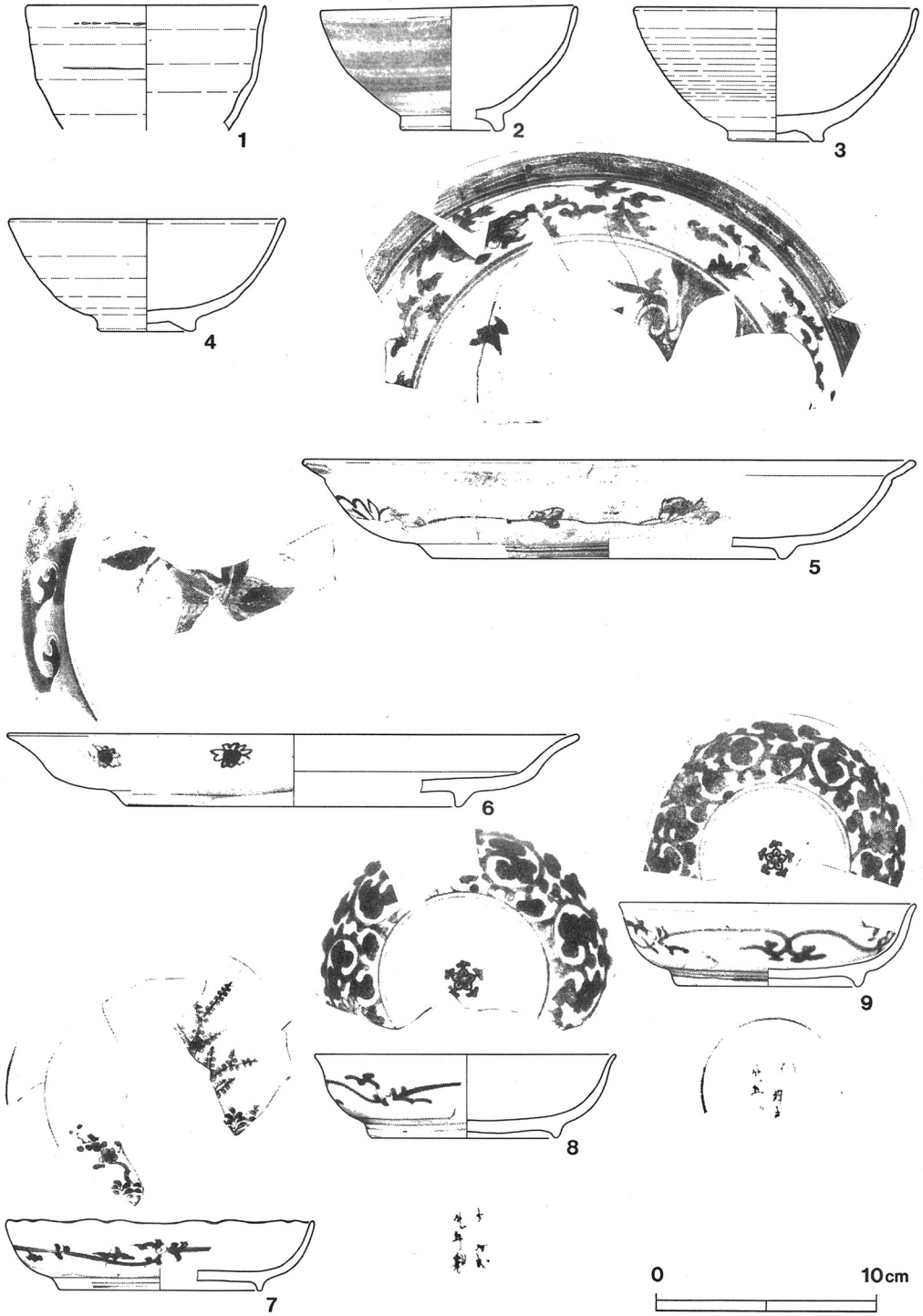


第212図 陶器・磁器・土器(64)

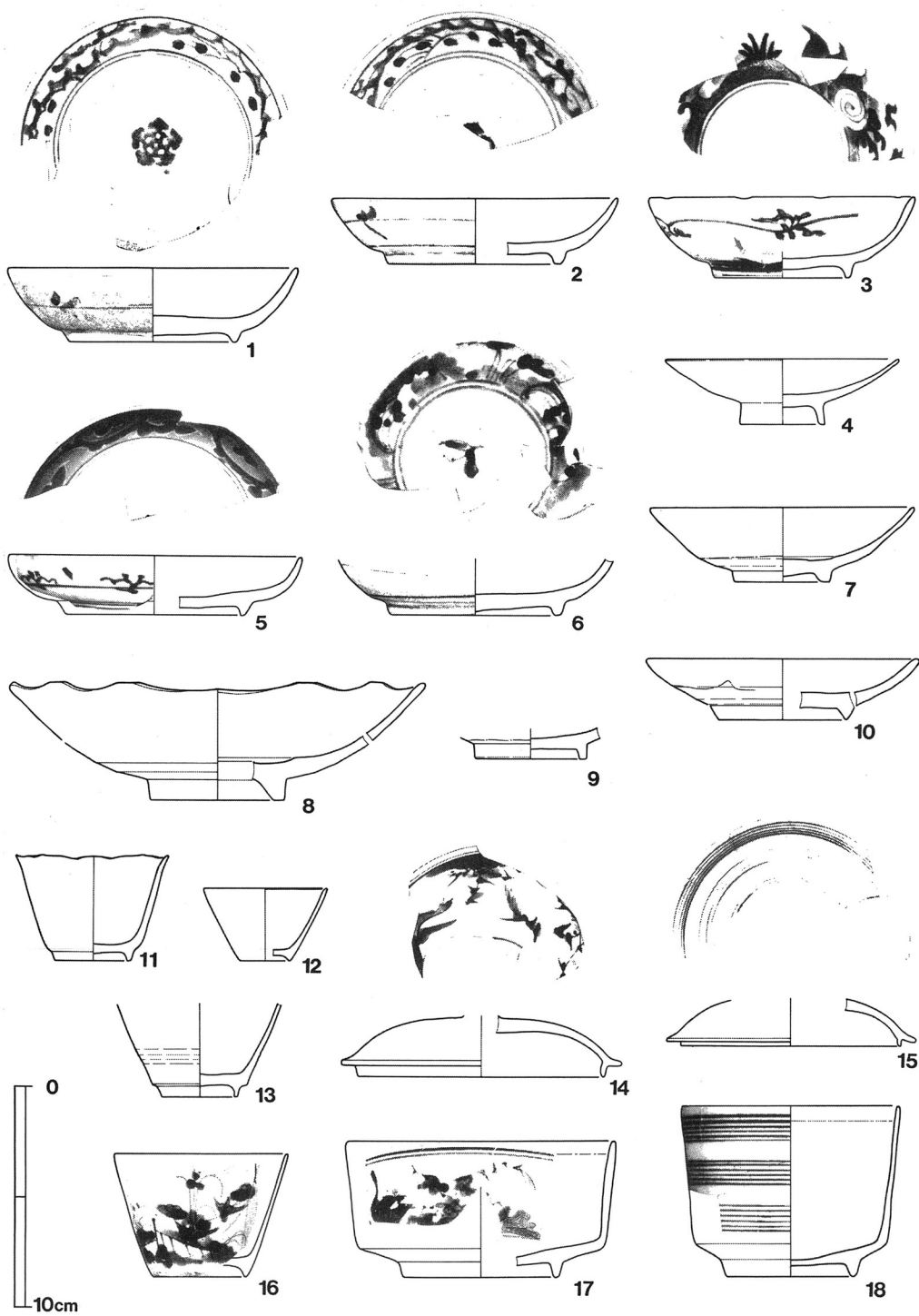


第213図 陶器・磁器・土器(65)

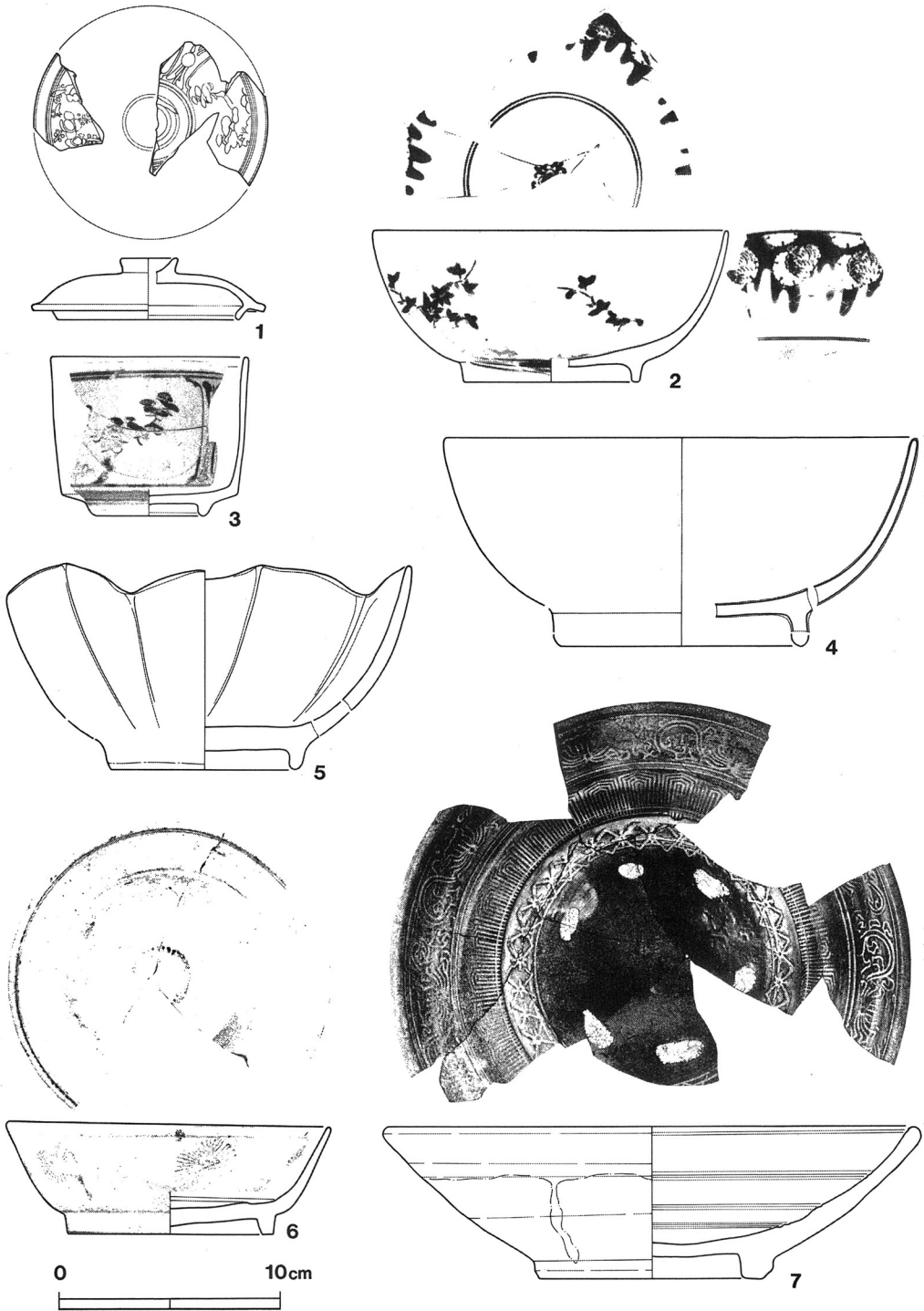




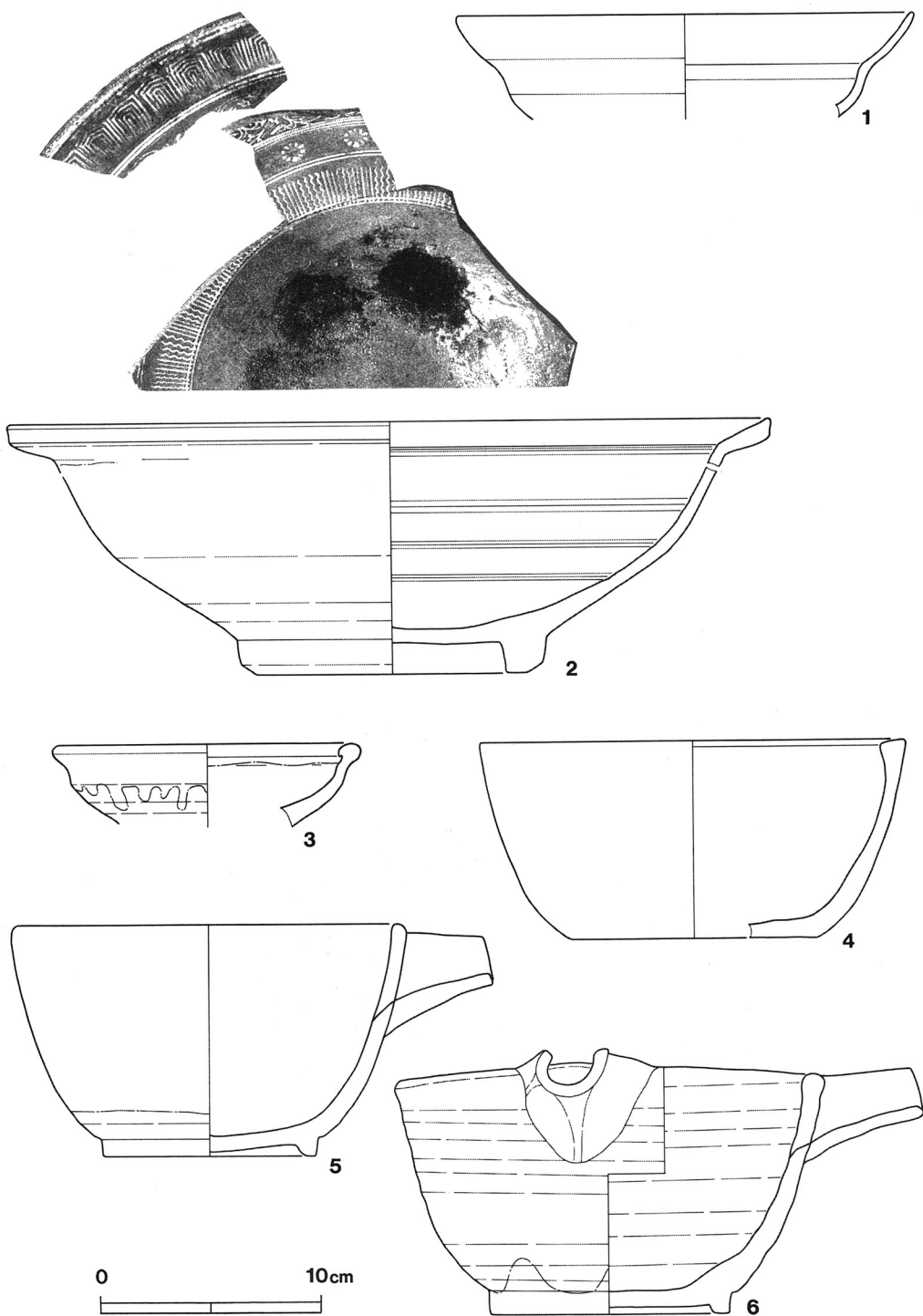
第214図 陶器・磁器・土器(66)



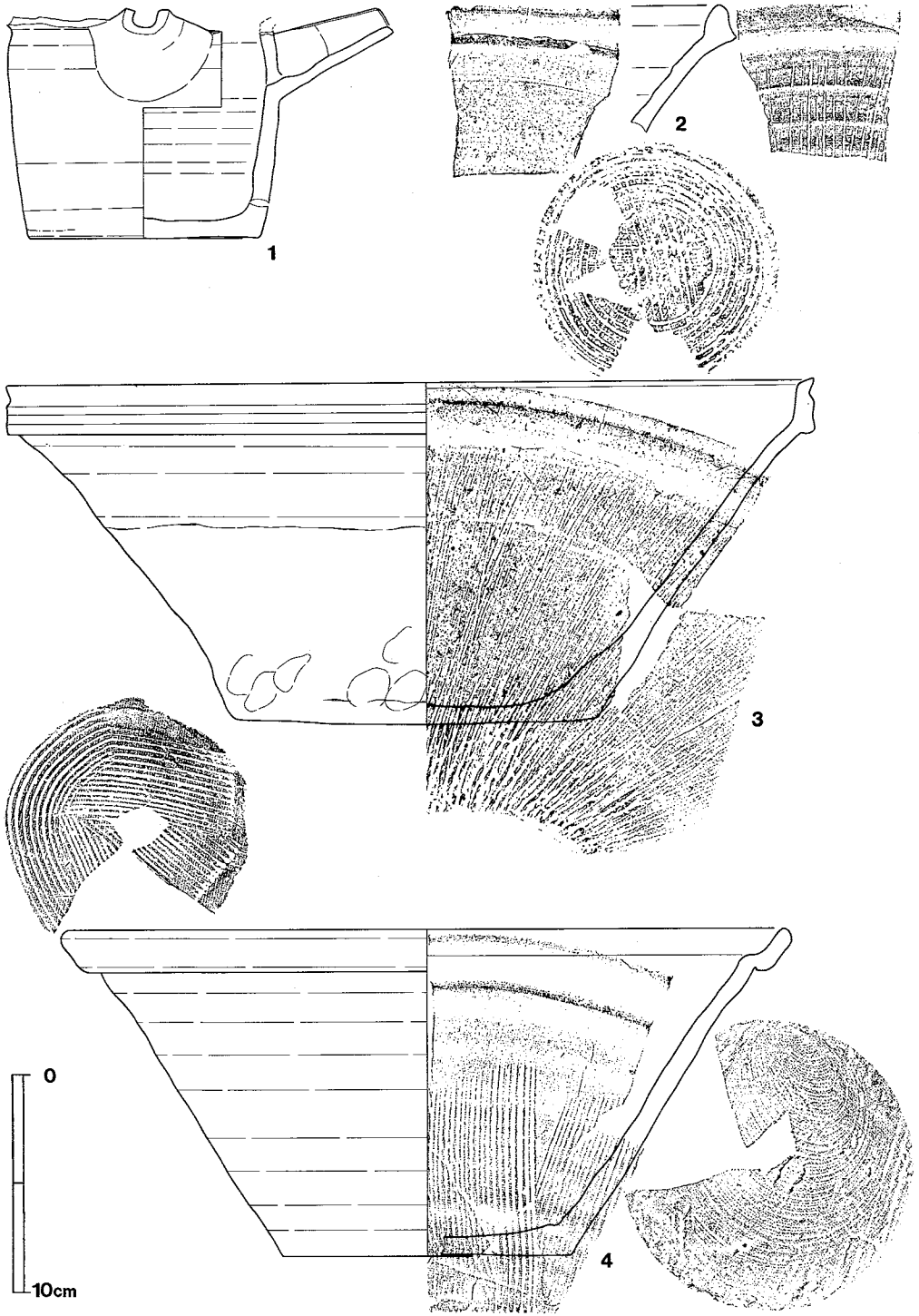
第215图 陶器·磁器·土器(67)



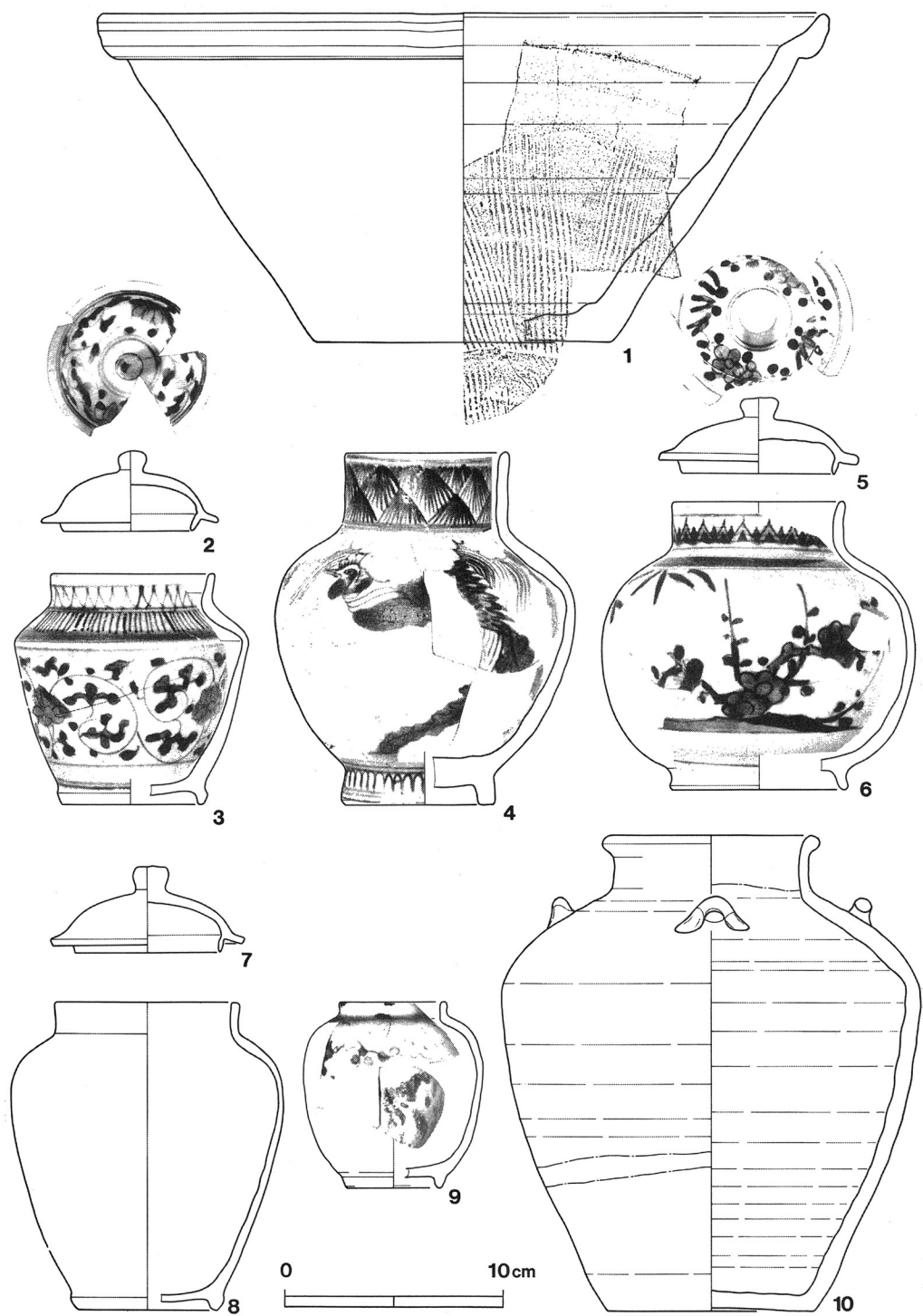
第216図 陶器・磁器・土器(68)



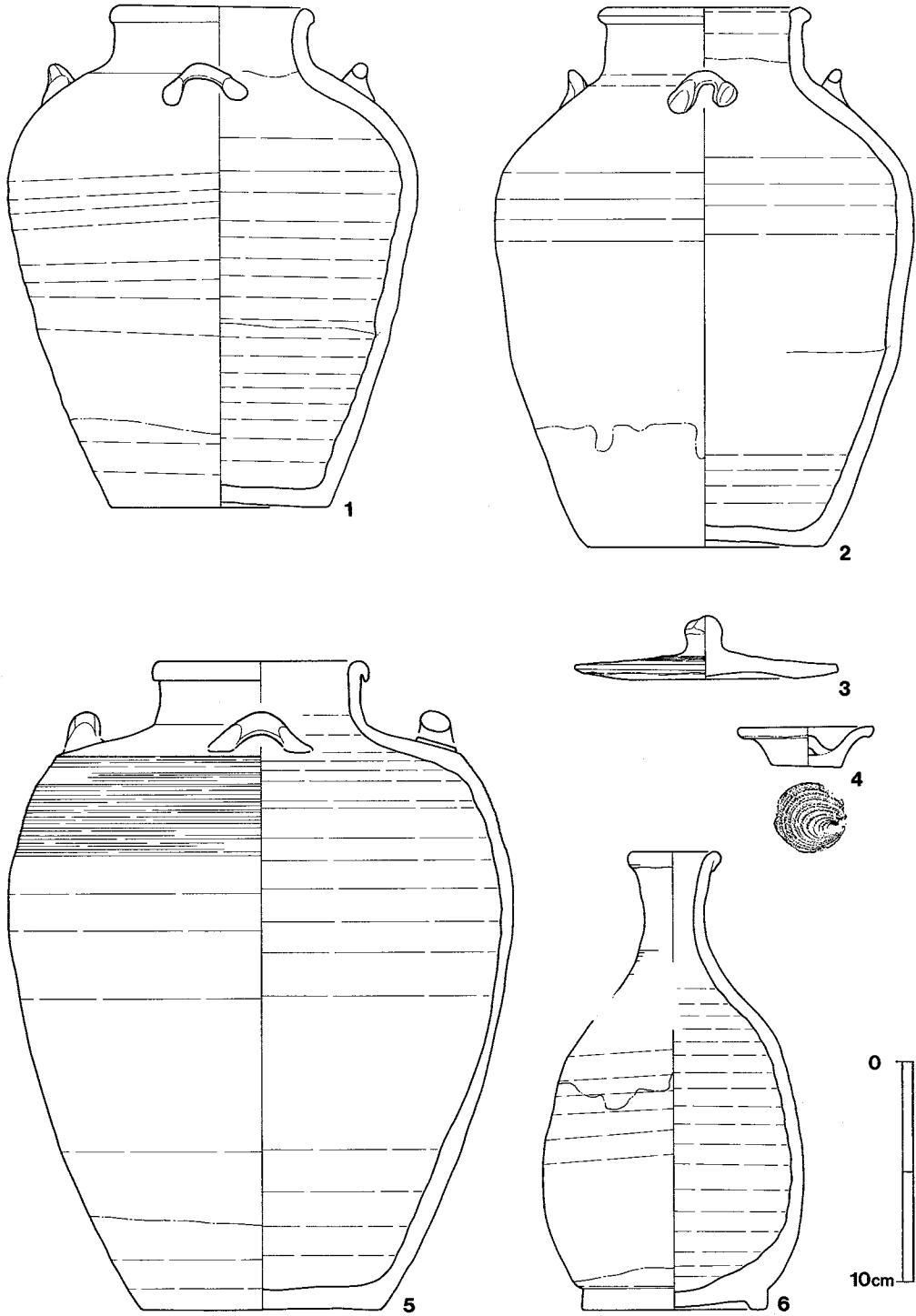
第217图 陶器·磁器·土器(69)



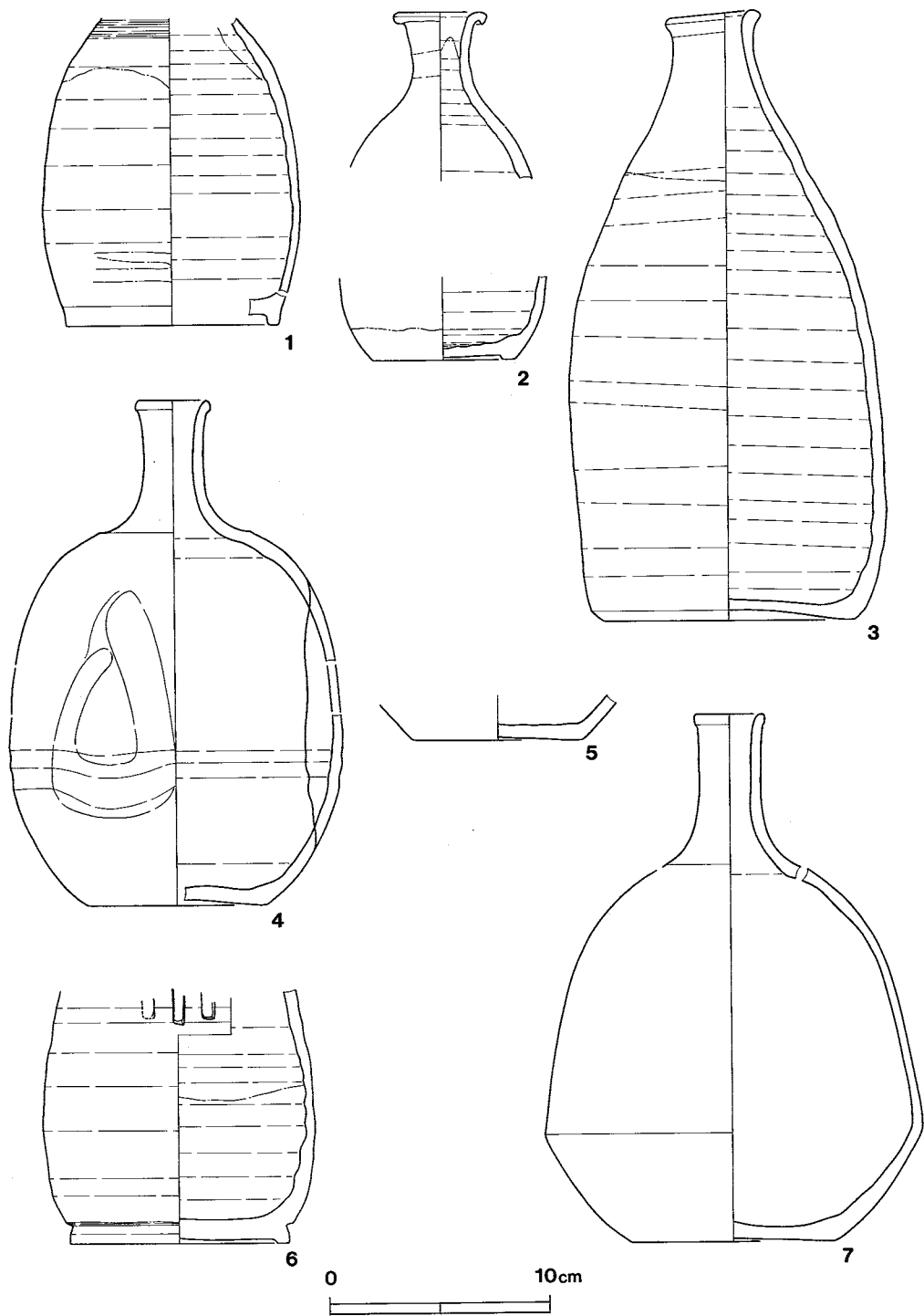
第218図 陶器・磁器・土器(70)



第219图 陶器·磁器·土器(71)

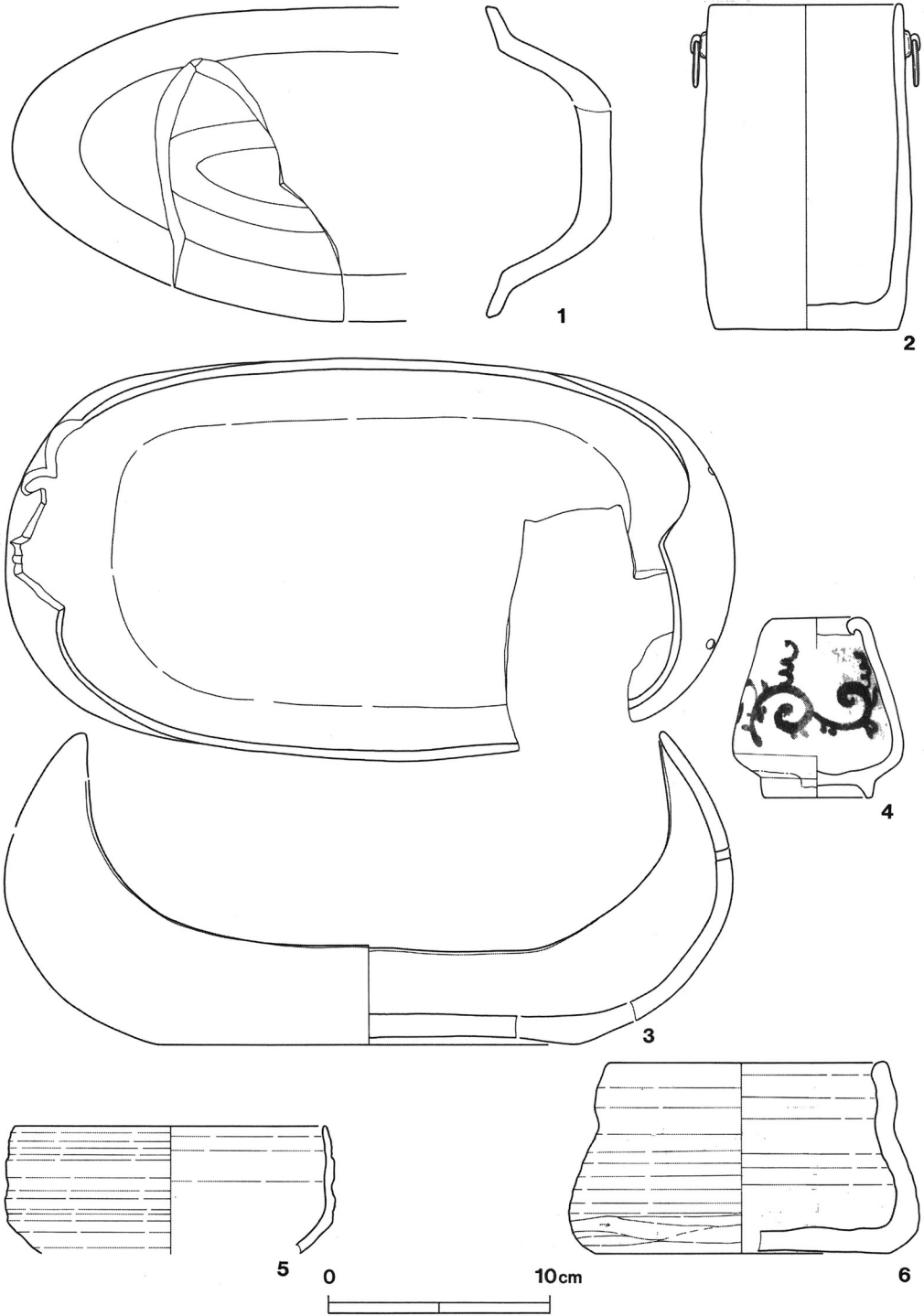


第220図 陶器・磁器・土器(72)

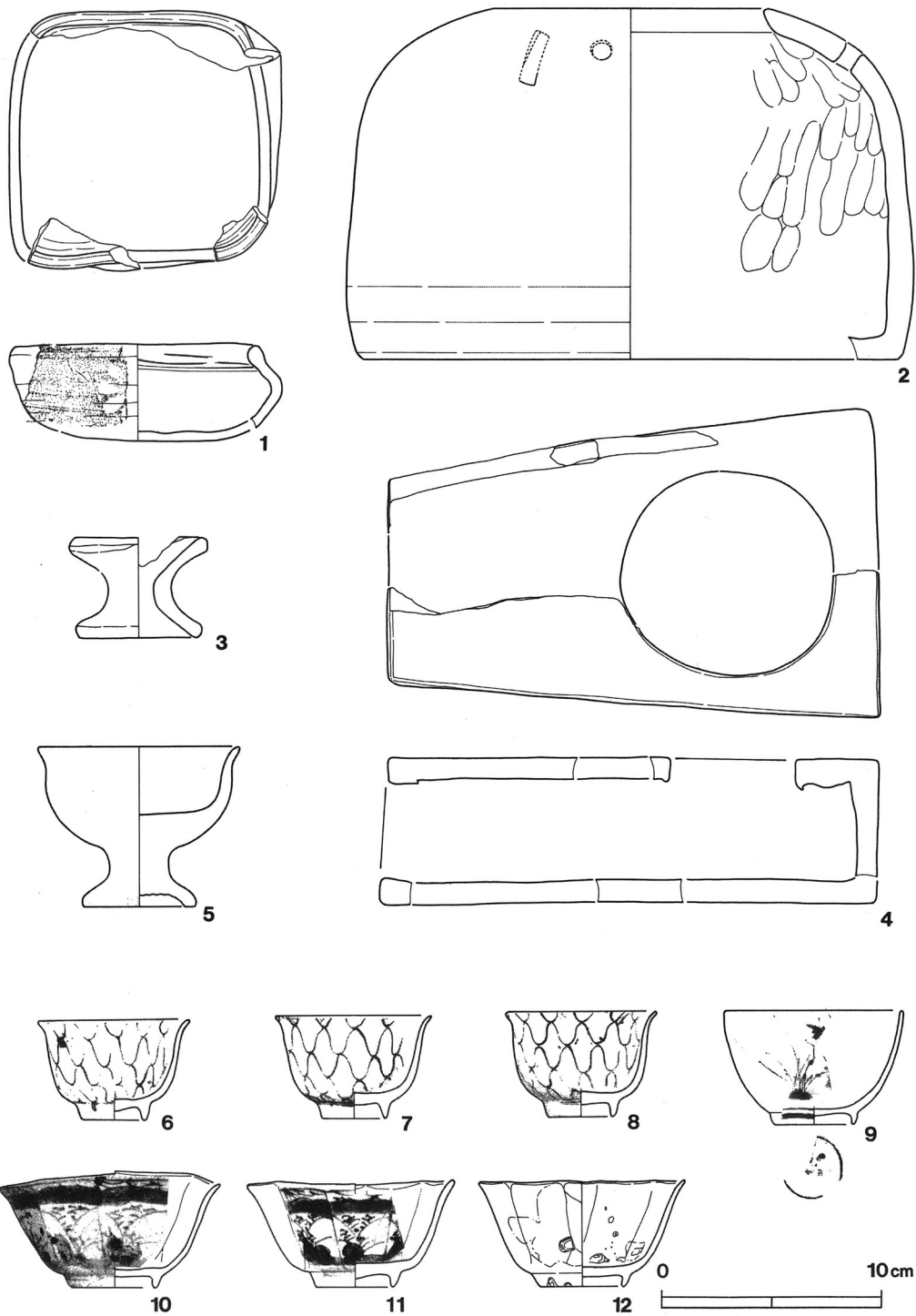


第221图 陶器·磁器·土器(73)

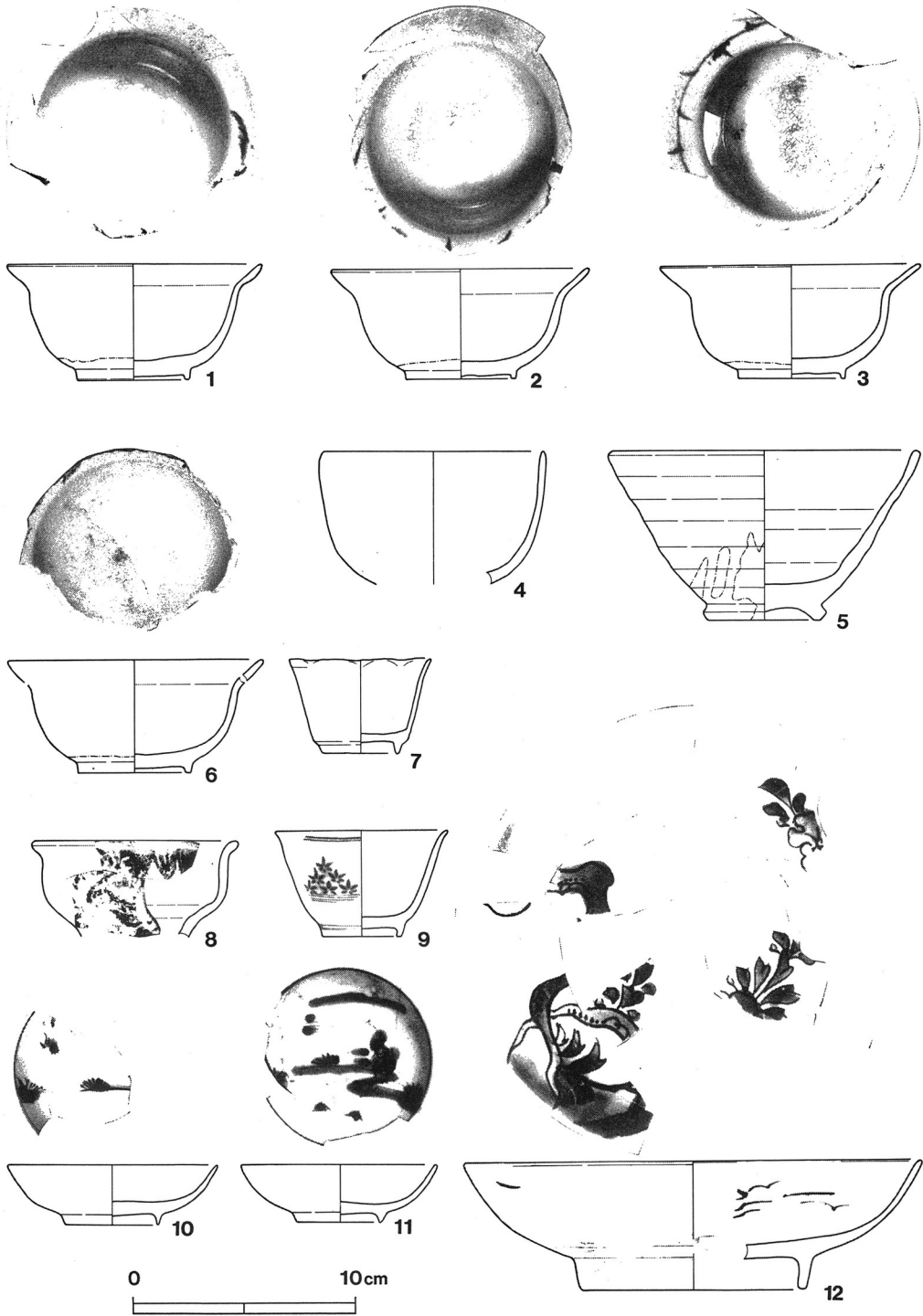




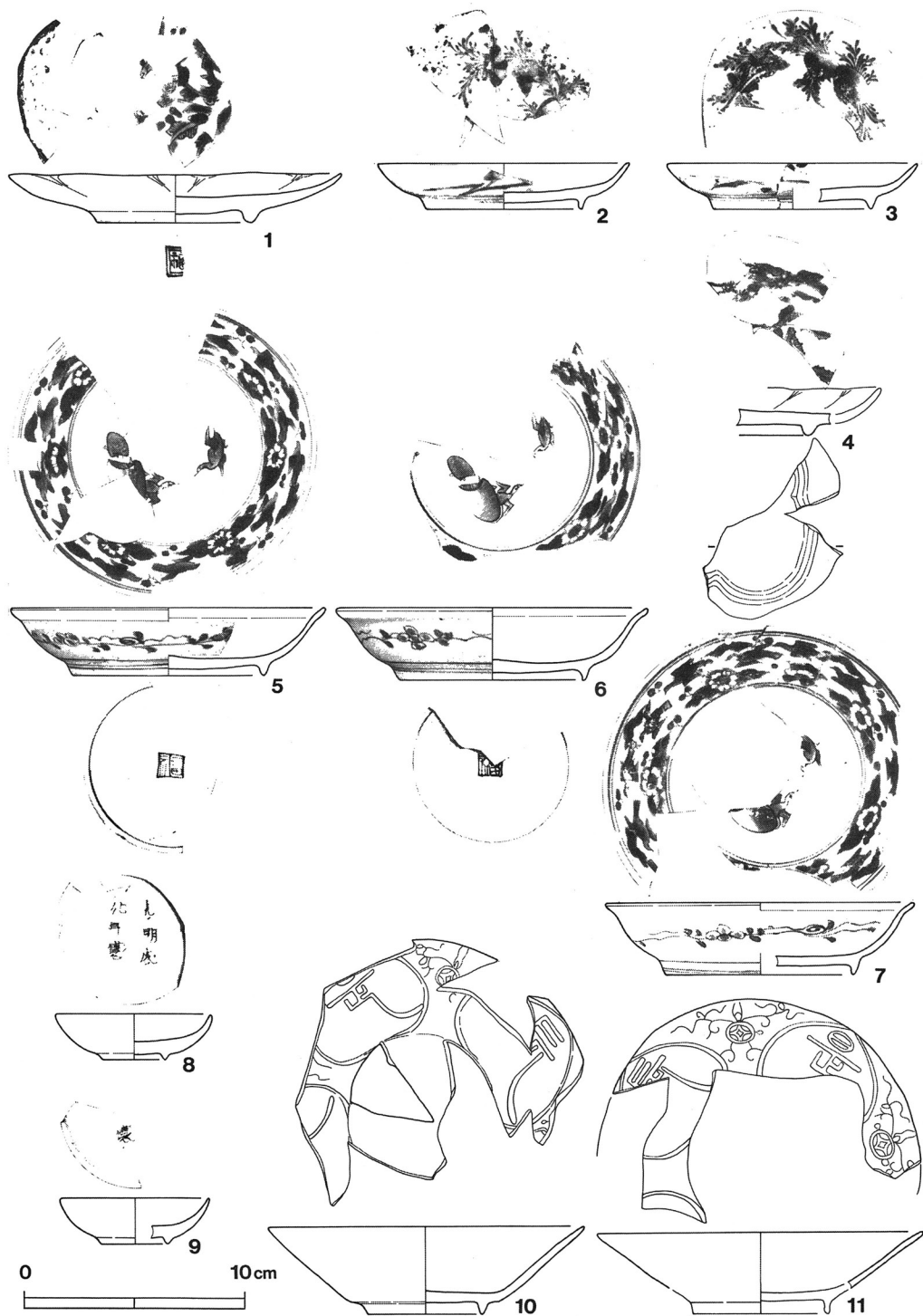
第222図 陶器・磁器・土器(74)



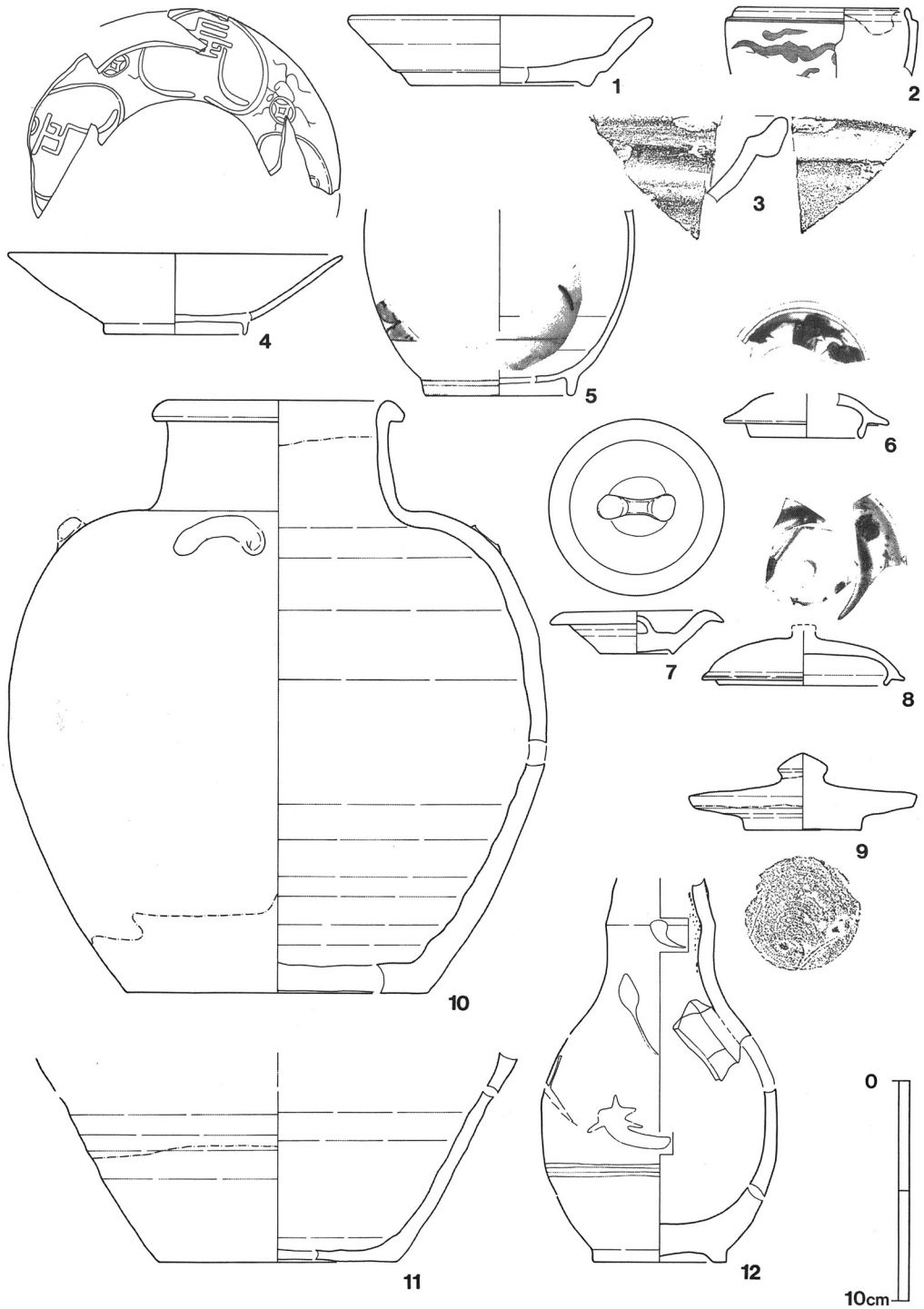
第223图 陶器·磁器·土器(75)



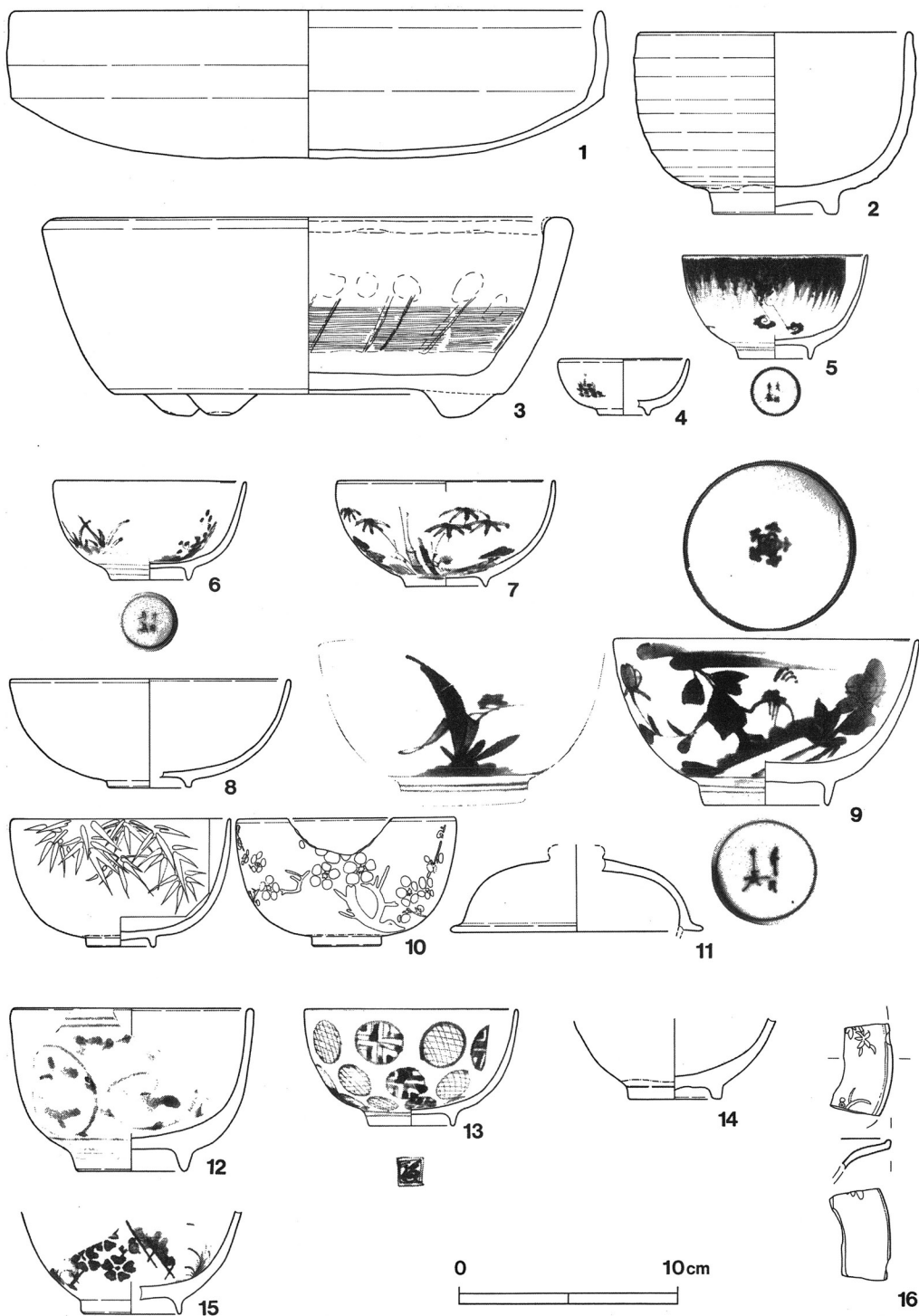
第224図 陶器・磁器・土器(76)



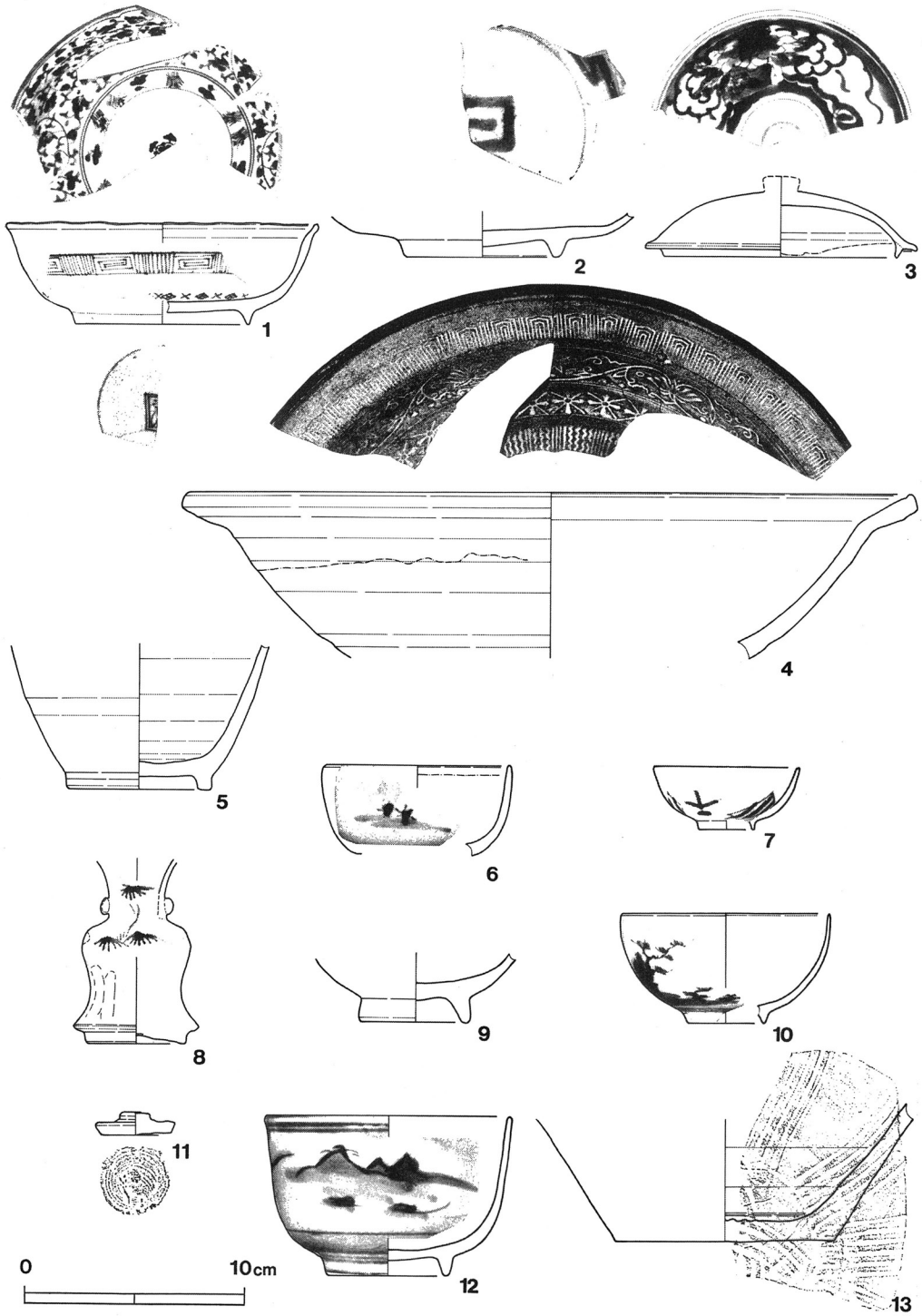
第225图 陶器·磁器·土器(77)



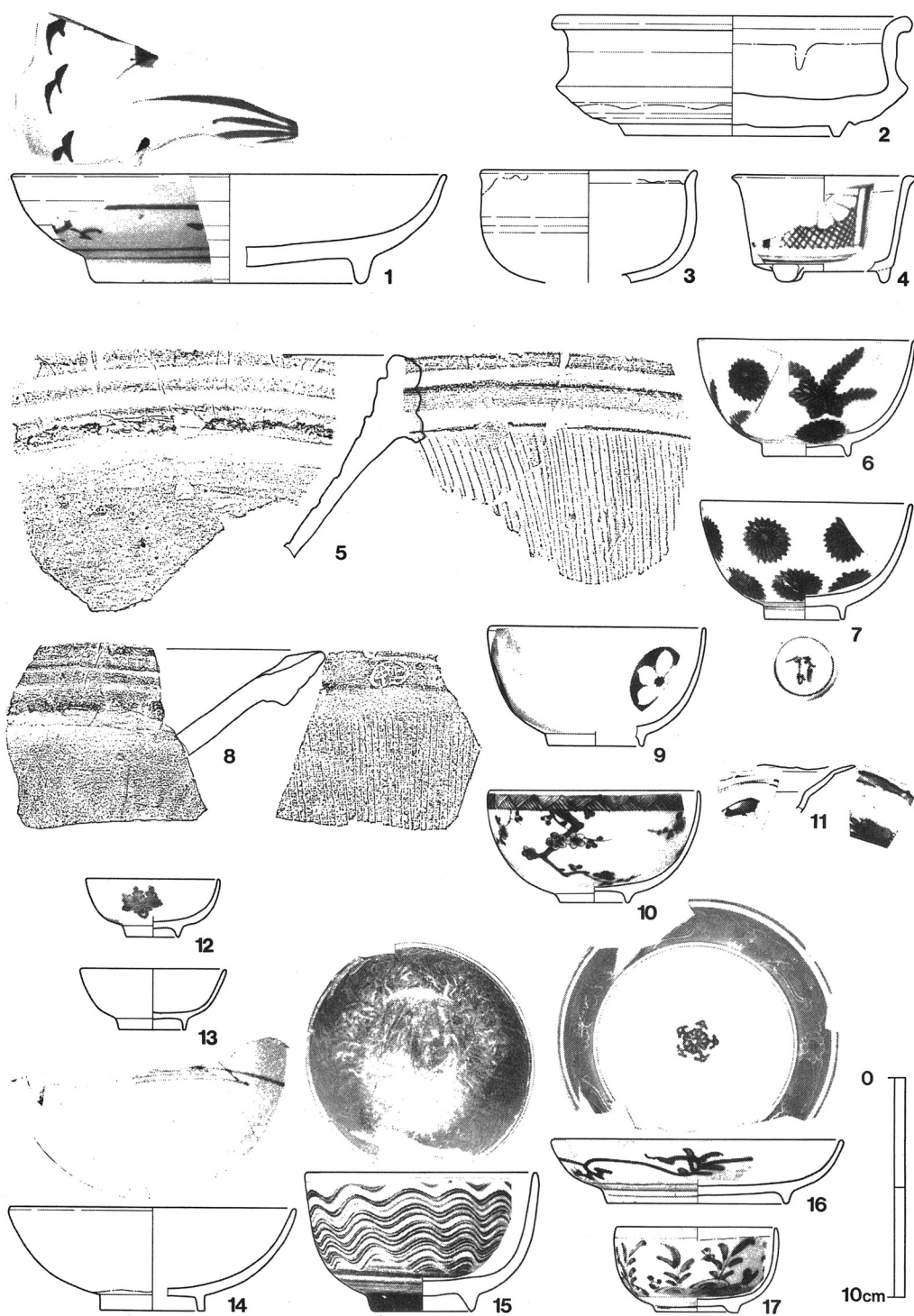
第226図 陶器・磁器・土器(78)



第227图 陶器・磁器・土器(79)

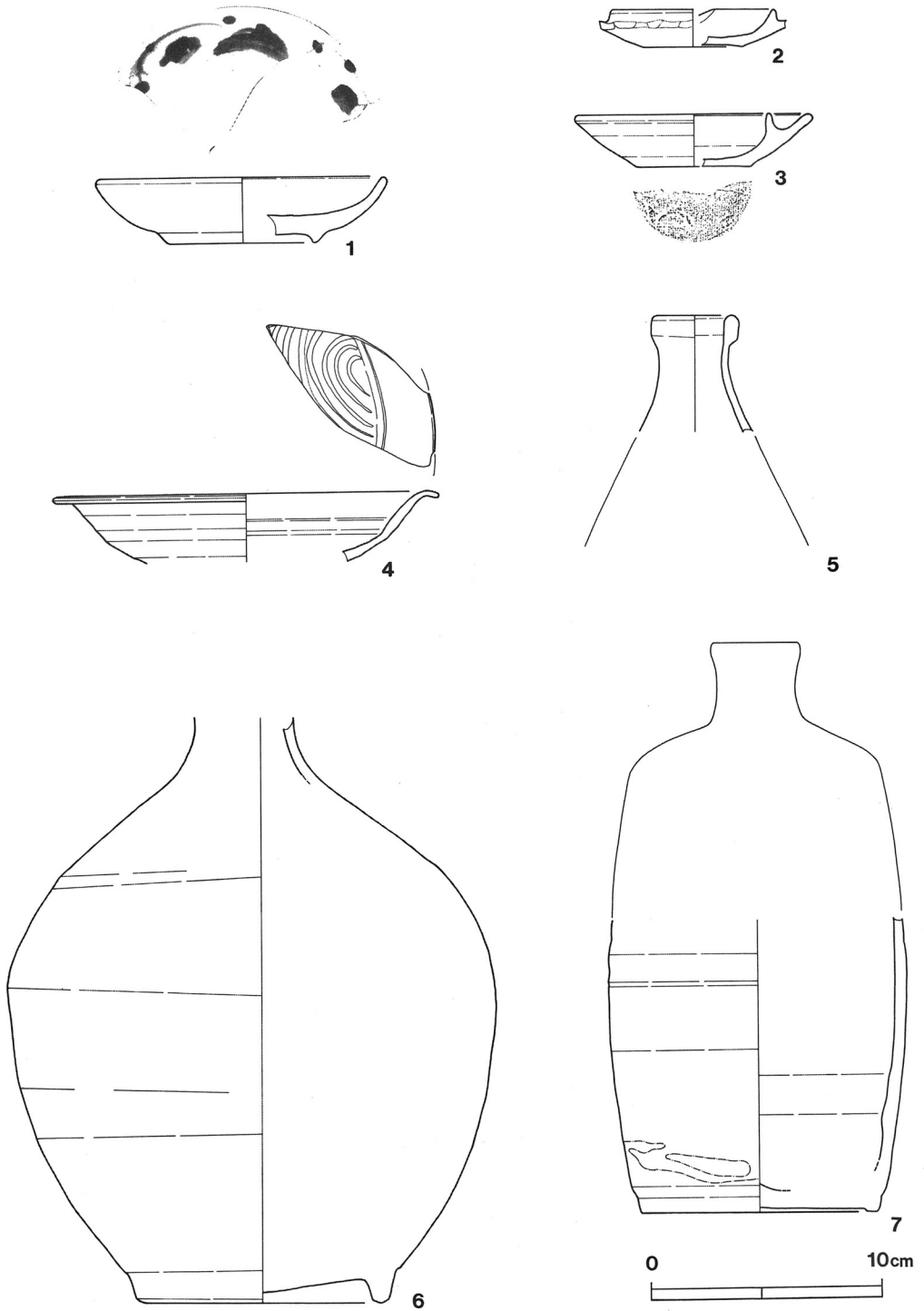


第228図 陶器・磁器・土器(80)

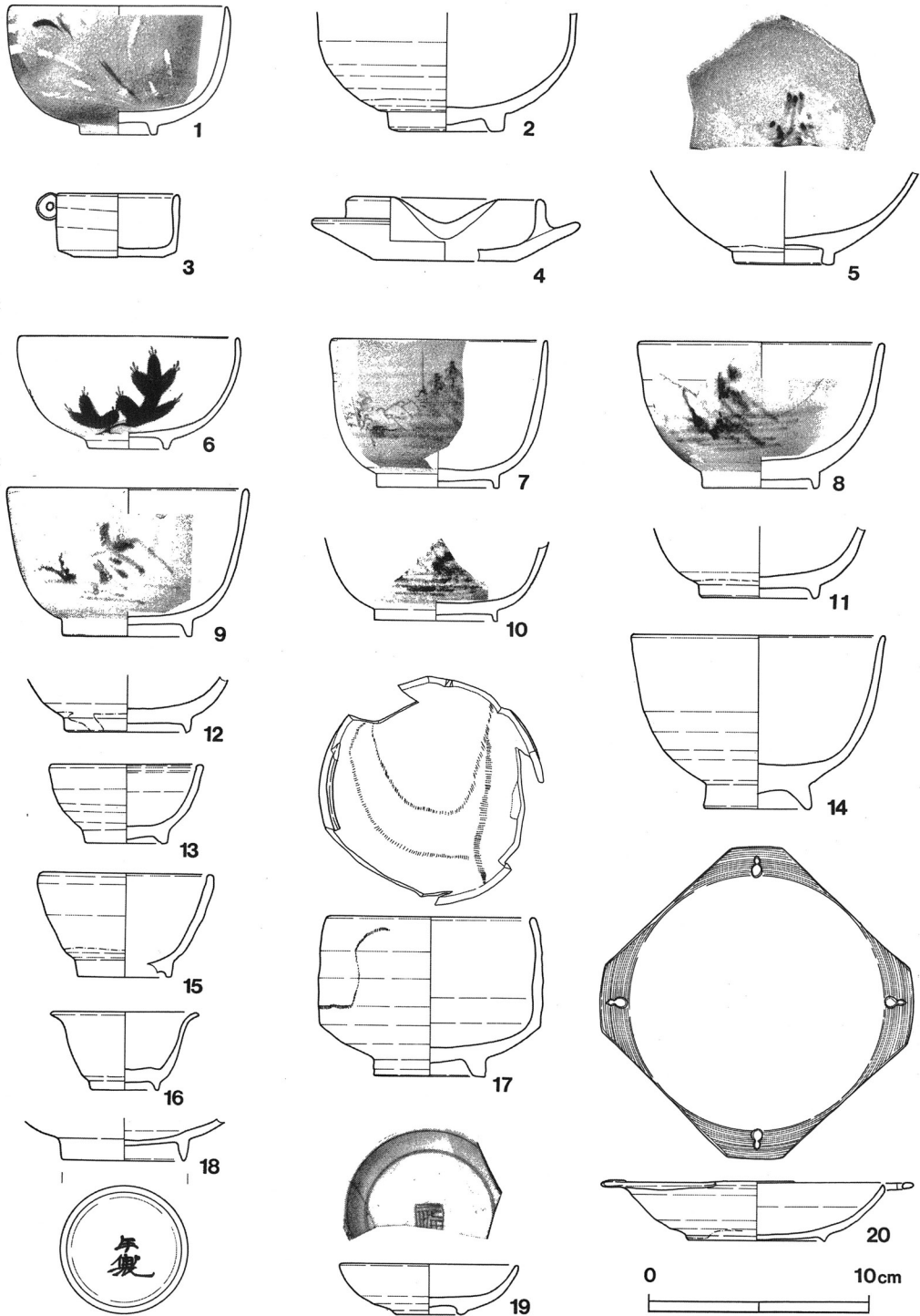


第229图 陶器·磁器·土器(81)

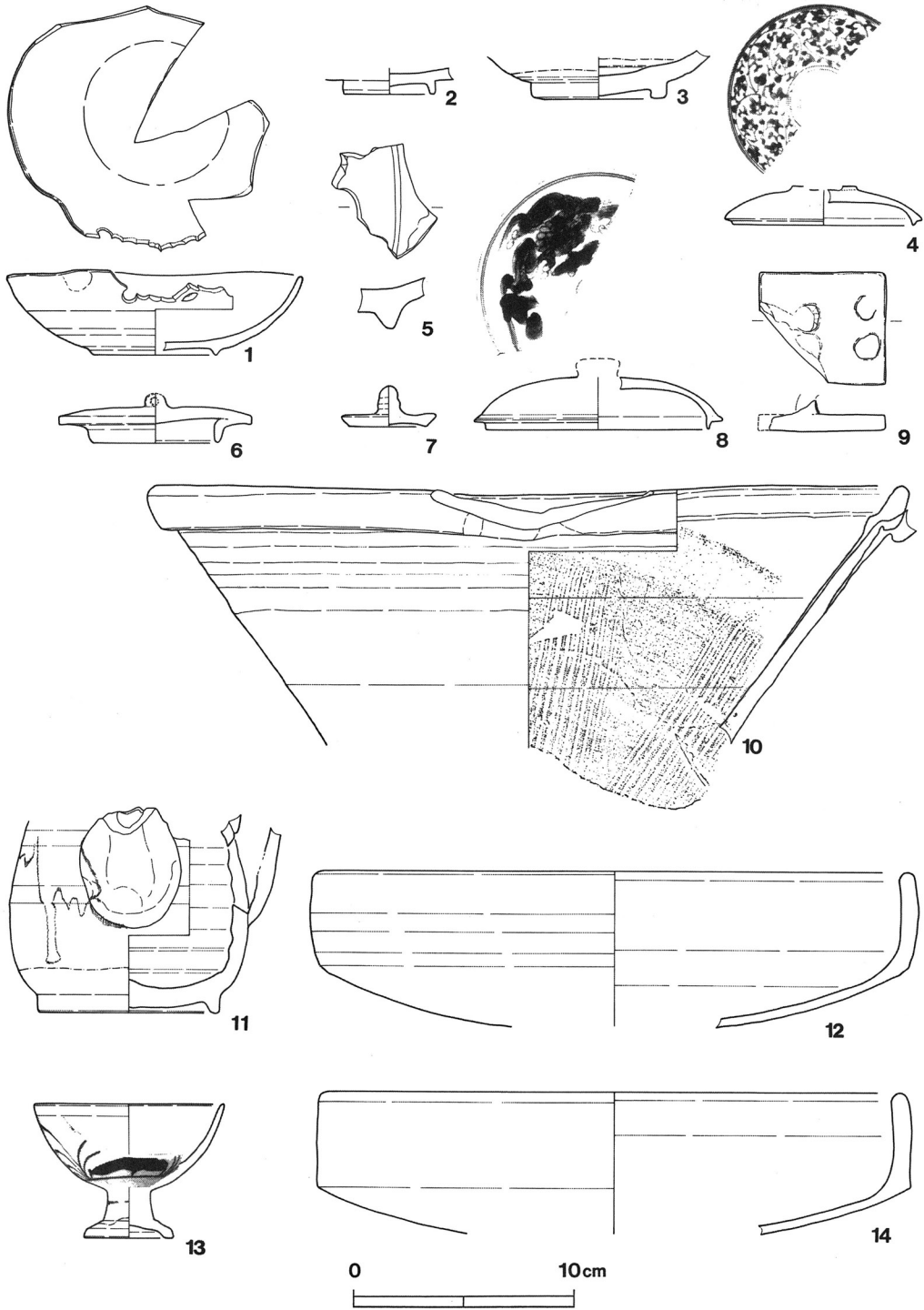




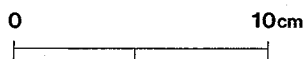
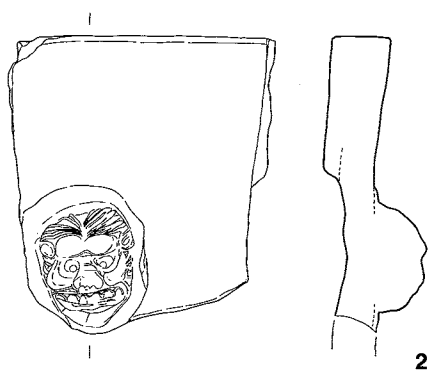
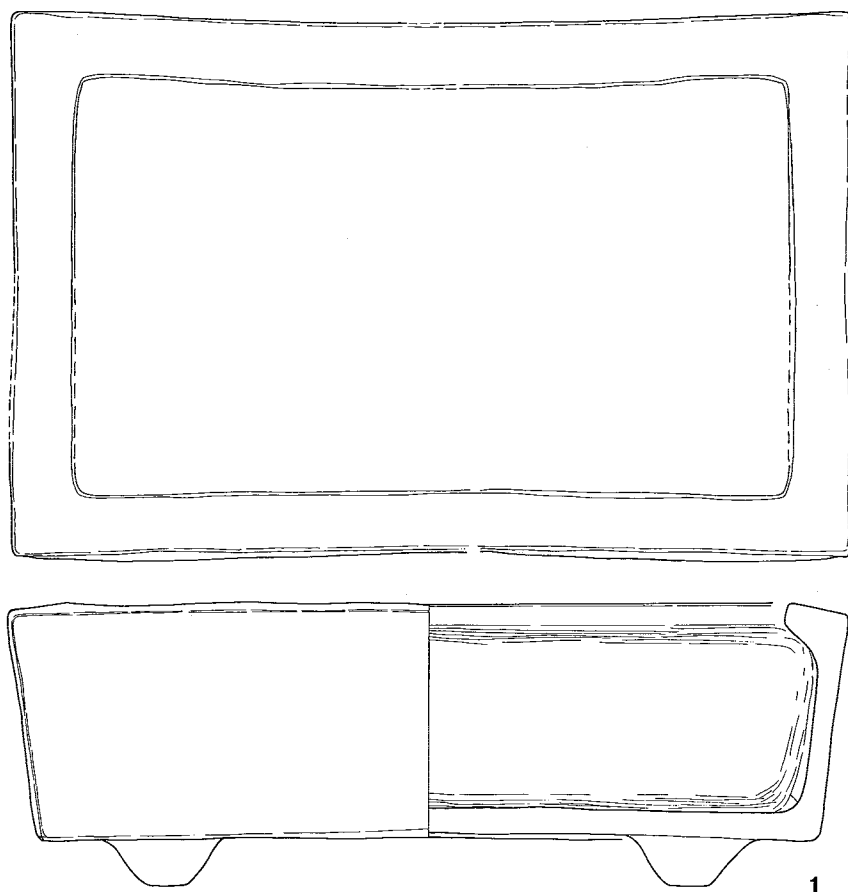
第230図 陶器・磁器・土器(82)



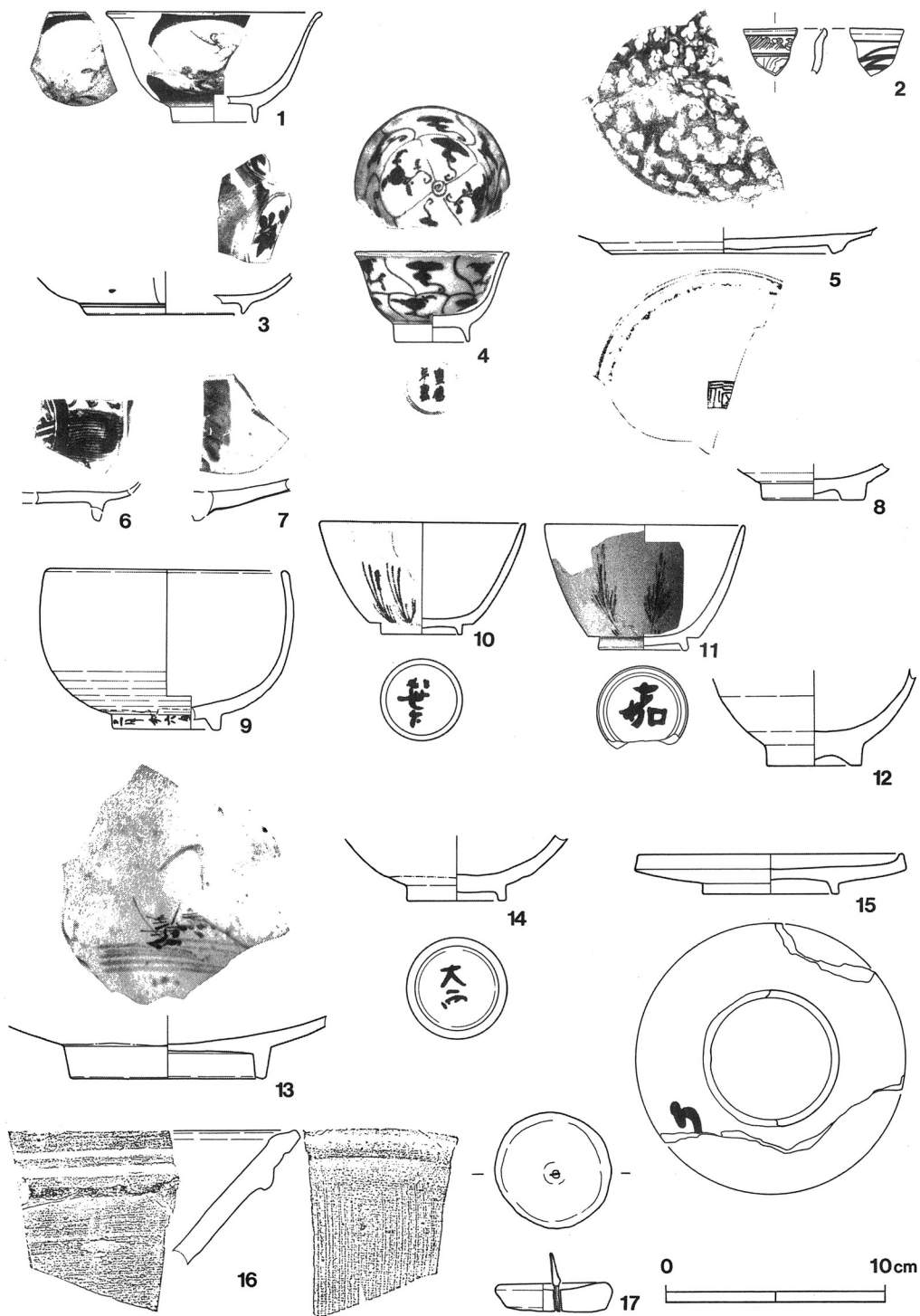
第231図 陶器・磁器・土器(83)



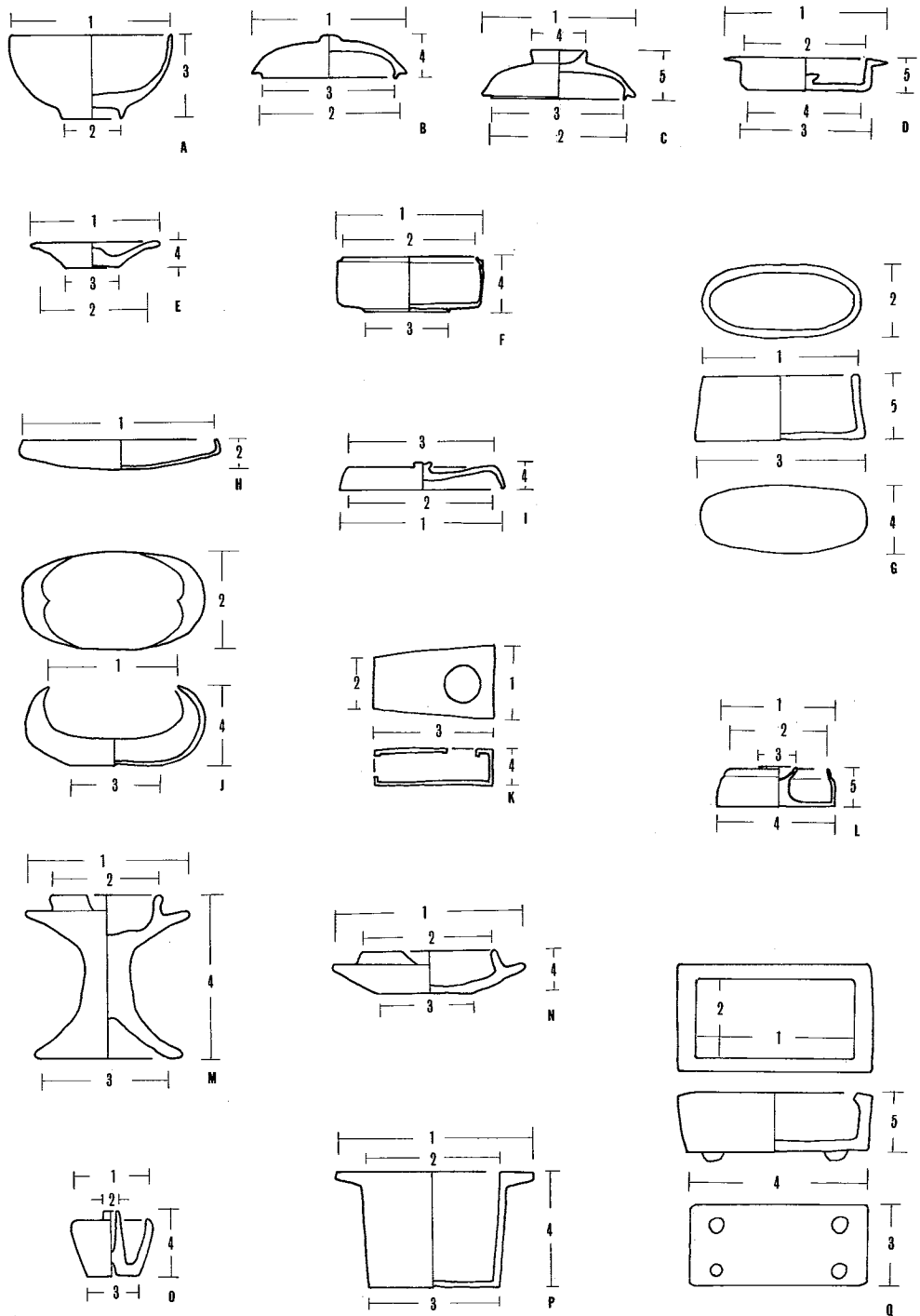
第232図 陶器・磁器・土器(84)



第233図 陶器・磁器・土器(85)



第234図 陶器・磁器・土器(86)



第235図 陶器・磁器・土器の計測点

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

表1 陶器・磁器・土器観察表

番号	器種	法量・遺存	成形・調整	施釉・文様等	産地	備考
1図1	壺 陶器	7.6 5.6 8.7 底部完	高台削出し, 体部削り, 肩部に耳貼付痕有り	灰釉施釉, 体部中に沈線	瀬戸・美濃	
1図2	碗 陶器	10.6 4.4 5.8 1/3	高台削出し, 砂熔着	色絵, 赤・黒で蝶と草花文高台内施釉	京都系	
1図3	碗 陶器	7.5 — — 口縁部 1/3	高台削出し	長石釉施釉	瀬戸・美濃	志野, 被熱
1図4	碗 陶器	11.0 4.4 6.4 (完)	高台削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	天目, 被熱
1図5	皿 磁器	7.5 — —	高台削出し	染付, 内面に唐草文	肥前	被熱
1図6	皿 磁器	— — —	胎土は若干粗く, 白色	青花, 内面に花瓶	中国	南京染付か
1図7	蓋 磁器	6.8 1.6 1/4	外面型打ち成形	色絵, 外面青・黄で花文と地文彩色, 分割線は黒彩	肥前	被熱
1図8	碗 磁器	11.2 4.8 6.0 1/2	高台削出し	染付, 外面に樹文	肥前	
1図9	碗 磁器	11.2 4.6 5.8 完	高台削出し	白磁, 外面に斜位の竖筋文	肥前	
1図10	仏餉具 磁器	7.0 3.7 6.8 口縁部 1/3	台脚底部削出し	染付, 外面に花文	肥前	
1図11	仏餉具 磁器	8.0 4.0 6.8 口縁部 1/3	台脚底部削出し	染付, 外面に花文	肥前	
1図12	小鉢 磁器	17.2 — — 口縁部 1/5	口縁部は端反り, 胎土は緻密で白色	青花, 外面に漢詩文	中国	被熱
1図13	合子 磁器	9.7 8.9 4.7 (完)	高台削出し	色絵, 外面に赤で唐草文	肥前	身の部分
1図14	小碗 磁器	8.2 4.4 5.2 口縁部 (完)	高台削出し	染付, 外面に花文, 高台内に銘「宣徳年製」か	肥前	
1図15	搜瓶 陶器	5.6 11.2 13.9 体部 2/3	注口貼付け, 把手貼付け痕有り	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	被熱
1図16	小碗 磁器	7.0 3.4 4.9 1/2	高台削出し	染付, 外面に花文	肥前	
1図17	小碗 磁器	6.6 3.4 4.7 完	高台削出し	白磁	肥前	
2図1	播鉢 陶器	— — — 体部 1/4	輪積み成形,	播目7条	信楽系	
2図2	壺 陶器	14.1 3.1 1/4	中央厚手, 竹節状把手を貼付	灰釉施釉, 外面に鉄摺絵で流水文及クシ描き波状文	瀬戸・美濃	御深井系
2図3	焙烙土器	26.6 — — 体部 1/4	輪積み成形, 体部外面に指頭痕顯著	播目7条	信楽系	スス付着著しい
2図4	播鉢 陶器	— — — 体部 1/5	輪積み成形か, 足貼付け			被熱, 内面に付着物有
2図5	香土器	14.4 13.0 — 口縁部 1/3	高台削出し, 体部型打ち成形	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
2図6	菊皿 陶器	14.6 7.0 3.4 底部 1/2	高台削出し, 体部型打ち成形	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
2図7	火鉢 土器	34.8 30.2 — 1/5	輪積み成形, 口唇は内側に突出	瓦質, 外面に2条2組の条線を縦位に施す		
3図1	碗 陶器	11.2 4.1 6.4 口縁部 2/3	高台削出し	外面に緑釉, 内面透明釉掛分け	肥前	
3図2	壺 陶器	10.8 7.1 8.9 口縁部 1/4	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	内面に鉄錆付着物有
3図3	碗 陶器	11.3 5.2 7.5 口縁部 1/3	高台削出し	染付, 外面唐草文, 釉は厚手	肥前	
3図4	皿 陶器	— — — 底部 1/2	高台削出し	染付, 内面に草文, 高台内に渦福銘	肥前	
3図5	皿 陶器	13.3 4.5 3.7 口縁部 2/3	高台削出し	外面透明釉, 内面緑釉掛分け, 見込蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	

3図6	碗 陶器	12.8	5.5	8.0	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
3図7	香炉 陶器	11.5	8.4	8.0	三足貼付け、見込に三足ビン痕	鉄釉施釉、外面にノミ彫りで半菊文	瀬戸・美濃	
3図8	皿 陶器	10.4	5.8	2.5	高台削出し、見込・高台内にビン痕	灰釉施釉	瀬戸・美濃	被熱
3図9	餐盤 陶器	10.5×	4.9	11.7	板作り成形、底面ナデ	灰釉施釉、外面に鉄摺絵で四方棒文	瀬戸・美濃	御深井系、被熱
3図10	蓋 磁器	10.6	9.3	9.1	環状鈕削出し	染付、外面に花卉文	肥前	
3図11	掃鉢 陶器	34.1	13.8	14.6	体部下半削り、底部回転糸切痕残す	鉄釉施釉、掃目21条	瀬戸・美濃	
4図1	德利 陶器	—	—	—	ナデ肩顕著	鉄釉施釉後灰釉掛け、肩部に条線	瀬戸・美濃	
4図2	合子 陶器	7.4	6.6	4.7	碁筭底削出し	色絵、金・緑・赤で唐草文	京都系	
4図3	香炉 磁器	15.2	5.1	8.2	高台・三足貼付け、見込みに泥漿塗布	青磁、肩部に菊花文貼付け4方か、足は型打ち獸面か	肥前	見込みに墨書
4図4	碗 陶器	13.0	6.2	9.7	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
4図5	乗燭 土器	3.3	—	2.8	ロクロ調整、肩部に把手・内面に突起貼付け	外面全体に施釉後緑釉掛け肩部に印刻、亀甲枠に「吉」		口唇部にスス附着
4図6	德利 陶器	3.0	7.3	21.4	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛け、肩部に条線	瀬戸・美濃	
4図7	德利 陶器	4.3	6.9	18.2	碁筭底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
4図8	植木鉢 土器	14.6	11.6	11.0	輪積み成形後ロクロナデ、底部静止糸切り後三足貼付			
4図9	火鉢 土器	17.2	12.0	8.5	輪積み成形、三足貼付け、口唇部ミガキ			
5図1	火鉢 土器	21.0	15.5	12.9	輪積み成形、足貼付三足か、口唇部ミガキか			
5図2	灯明皿 土器	11.4	8.0	5.8	ロクロ成形、受部貼付け			
5図3	掃鉢 陶器	33.7	15.7	14.2	口縁帯二条線有り、体部削り	掃目9条	備前系	
5図4	火鉢 土器	18.6	16.4	—	輪積み成形、足貼付三足か、口唇部ミガキ			底部に墨書
5図5	皿 磁器	—	—	—	高台貼付けか、砂熔着、見込に段を有する	色絵、青で葉文か、畳付施釉し高台内払取り	中国	呉須手、被熱
5図6	皿 陶器	—	4.6	—	高台削出し	緑釉、外面灰釉掛分け	肥前	
5図7	皿 磁器	13.4	6.8	2.7	高台削出し	染付、内面に梅花文、見込蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	
5図8	德利 陶器	3.8	—	—	口縁部外反	鉄釉施釉	志戸呂	
5図9	碗 陶器	11.6	5.4	8.9	高台削出し、見込にビン痕		瀬戸・美濃	
6図1	德利 陶器	—	7.6	—	高台削出し、体部削り顕著	鉄釉施釉後灰釉掛け、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
6図2	德利 陶器	3.2	—	—	肩部ナデ肩	鉄釉施釉後灰釉掛け、肩部に条線	瀬戸・美濃	
6図3	皿 陶器	12.6	5.2	4.9	高台削出し	透明釉施釉、見込に鉄絵で山水文	肥前	
6図4	香炉 磁器	7.8	—	—	口縁部外側に肥厚	青磁	肥前	
6図5	火鉢 土器	36.2	23.2	24.2	板組み成形、口縁部・内面ミガキ	口縁部黒彩か		
6図6	碗 陶器	13.3	5.5	8.2	高台削出し		瀬戸・美濃	



報告篇第三章 江戸時代の調査 I

6図7	乗 土 燭 器	—	4.4	—	台脚部に回転糸切痕明瞭、坏部に灯心立痕有り	鉄釉、台脚部底面まで施釉		
6図8	小 磁 鉢 器	17.6	—	—	口縁部は外反し、口唇部は小さく立ち上がる	青磁、口銜有り	肥前	
6図9	皿 陶 器	12.6	4.8	4.7	高台削出し、見込蛇ノ目釉剥ぎ	緑釉・外面透明釉掛分け	肥前	
7図1	焙 土 焙 器	30.8	—	—	ロクロ調整、内耳貼付け			外面にスス付着
7図2	皿 磁 器	13.6	8.2	2.7	高台削出し、砂熔着	染付、内面に竹文、見込に五弁花	肥前	
7図3	皿 陶 器	12.6	4.7	4.3	高台削出し	透明釉施釉、見込に鉄絵で山水文、高台内に刻印「柴」	肥前	
7図4	壺 陶 器	6.4	6.4	11.4	高台削出し、双耳貼付け(完)	鉄釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	
7図5	小 磁 碗 器	6.5	2.7	3.0	高台削出し、薄手	白磁	肥前	端反形
7図6	小 磁 碗 器	6.1	2.9	2.7	高台削出し、薄手	染付、見込に海老文	肥前	端反形
7図7	碗 磁 器	7.7	3.8	6.3	高台削出し	染付、外面口縁部に雷文	瀬戸・美濃	
7図8	碗 陶 器	12.4	5.8	7.8	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
7図9	皿 陶 器	13.2	4.2	4.5	高台削出し	透明釉施釉、見込に鉄絵で山水文、高台内印刻「木下弥」	肥前	
7図10	皿 磁 器	21.0	13.8	2.8	高台削出し	染付、内面に唐草文	肥前	
7図11	碗 陶 器	13.2	5.9	8.0	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
7図12	碗 陶 器	12.2	4.6	8.3	高台削出し	高台内施釉	肥前	呉須手
7図13	小 磁 碗 器	7.9	4.1	5.4	高台削出し	染付、外面に梅花・笹文、高台内に「大明年製」銘	肥前	
8図1	皿 磁 器	12.6	7.2	3.6	高台削出し	染付、内面に唐草文、見込に印判で五弁花	肥前	焼成不良
8図2	皿 磁 器	12.8	7.8	3.7	高台削出し	染付、内面に唐草文、見込に印判で五弁花	肥前	焼成不良
8図3	皿 陶 器	13.4	4.7	3.5	高台削出し、口唇部輪花、内外面に砂目	鉄釉施釉、見込ノ目釉剥ぎ	肥前	
8図4	皿 陶 器	—	5.4	—	高台削出し	色絵、見込に鉄下絵で楼閣山水文、高台内に印刻	肥前	
8図5	皿 陶 器	—	4.6	—	高台削出し	透明釉施釉、見込に鉄絵で山水文、高台内に印刻「清水」	肥前	高台内に墨書
8図6	皿 陶 器	—	4.4	—	高台削出し	透明釉施釉、見込に鉄絵で山水文、高台内に印刻「柴」	肥前	
8図7	皿 陶 器	—	4.6	—	高台削出し	透明釉施釉、見込に鉄絵で山水文、高台内に印刻「清水」白磁	肥前	高台内に墨書
8図8	壺 磁 器	—	7.0	—	高台削出し	白磁	肥前	
8図9	皿 陶 器	19.0	5.6	5.5	高台削出し	透明釉施釉、見込蛇ノ目釉施釉剥ぎ	肥前	高台内に墨書
8図10	徳 陶 器	—	11.5	—	底部削出し	鉄釉施釉、底部に印刻丸棒に「本」	瀬戸・美濃	
8図11	播 陶 器	33.6	—	—		鉄釉施釉、播目19条	瀬戸・美濃	
9図1	播 陶 器	42.4	14.4	—	底部回転糸切痕残す	鉄釉施釉、播目15条か	瀬戸・美濃	
9図2	香 陶 器	11.6	—	6.4	肩部に双耳・注口、底部に三足貼付け	灰釉施釉、胎土は砂粒多く灰褐色		
9図3	茶 陶 器	3.0	3.3	7.5	底部回転糸切痕残す	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	肩衝形

9図4	仏 磁器	4.5 口縁部	3.1 1/4	5.9	台脚部底面削出し	染付, 外面に摺絵で葡萄文	肥前	
9図5	紅 磁器	3.7	2.0	2.1	高台削出し	染付	肥前	
9図6	皿	—	—	—	高台貼付か, 砂熔着, 見込に段を有する	色絵, 青で葉文か, 赤で圏線, 畳付も施釉	中国	呉須手, 被熱
9図7	土 陶器	8.2	6.0	10.7	肩部に双耳・注口, 底部に三足貼付け	灰釉施釉, 胎土は砂粒多く淡褐色		
9図8	壺 陶器	5.3	6.2	9.6	高台削出し, 双耳貼付け, 畳付に回転糸切痕残す	鉄釉施釉後灰釉掛け	瀬戸・美濃	
9図9	碗 陶器	9.8	4.6	5.8	高台削出し	透明釉施釉, 外面に鉄絵で山水文	肥前	
9図10	灯明皿 陶器	10.4	—	—	—	鉄釉施釉	志戸呂	
9図11	皿 陶器	—	4.4	—	高台削出し	透明釉施釉, 見込に鉄絵で山水文, 高台内に印刻「新」	肥前	
9図12	徳 陶器	3.0	7.3	21.2	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛け	瀬戸・美濃	
10図1	徳 陶器	2.8	—	—	頸部に段を有する	口縁部に鉄釉施釉	志戸呂	
10図2	碗 磁器	11.5	—	—	—	染付, 葉文	肥前	
10図3	碗 磁器	—	5.0	—	高台削出し	白磁	肥前	
10図4	碗 陶器	—	4.3	—	高台削出し	高台内施釉	肥前	呉須手
10図5	皿 磁器	15.6	8.7	2.4	高台削出し, 胎土は少し粗く白色	青花, 内面に松鶴文	中国	
10図6	皿 陶器	12.5	—	—	体部菊花, ノミ彫り	灰釉施釉	瀬戸・美濃	菊皿
10図7	小 磁器	5.6	—	—	—	染付, 蝶文	肥前	
10図8	皿 磁器	—	—	—	底部片, 胎土は少し粗く灰味を帯す	青花, 見込に樹文か	中国	
10図9	皿 陶器	10.6	6.7	1.9	高台削出し	長石釉施釉	瀬戸・美濃	
10図10	皿 陶器	9.9	5.4	2.2	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
10図11	蓋 磁器	8.2	6.9	—	—	白磁	肥前	
10図12	瓦 土器	20.8	17.2	—	輪積み成形か, 内面に受皿痕有り			被熱著しい
10図13	皿 陶器	—	7.7	—	高台削出し	染付, 見込に山水文	肥前	
10図14	播 陶器	—	—	—	口縁部三角状		信楽系	
10図15	碗 磁器	10.4	4.0	5.5	高台削出し	染付, 外面に花唐草文	肥前	
10図16	碗 陶器	12.2	5.8	8.6	高台削出し, 砂熔着	染付, 外面に松竹梅文	肥前	
10図17	仏 陶器	—	3.7	—	腰部削出し, 底部回転糸切痕残す	透明釉施釉	肥前系	
10図18	塔 土器	29.8	—	—	口縁部			
10図19	徳 陶器	3.0	8.0	21.0	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛け, 肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書き
11図1	皿 磁器	—	6.2	—	高台削出し, 高台内カンナ目顯著, 胎土は平滑で白色	青花, 高台内無釉, 外面に花文	中国	
11図2	皿 陶器	—	4.8	—	高台削出し	透明釉施釉, 見込鉄絵で山水文, 高台内印刻「次」	肥前	

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

11図3	火鉢 土器	35.2 19.5	23.9 底部(完)	24.0	板組み成形、口縁部・内面ミガキ			
11図4	皿 磁器	13.0	7.8	3.2	高台削出し	染付	肥前	
11図5	皿 磁器	13.2	8.8	2.7	高台削出し、見込に低い段を有する	青磁	肥前	
11図6	皿 陶器	11.6	4.6	3.2	高台削出し	緑釉、外面に透明釉を施釉、見込蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	被熱
11図7	碗 陶器	11.8	5.0	7.3	高台削出し		瀬戸・美濃	
11図8	平鉢 陶器	26.0	10.6	8.5	高台削出し、口縁部外折、見込に砂目	透明釉施釉、内面に象嵌	肥前	被熱
11図9	碗 陶器	—	5.8	—	高台削出し	刷毛目	肥前	
12図1	小鉢 陶器	19.1	6.3	5.8	高台削出し、体部に稜を有する	透明釉施釉、見込蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	
12図2	香炉 陶器	—	7.2	—	高台削出し	鉄釉施釉	志戸呂	
12図3	碗 磁器	7.4	4.6	5.9	高台削出し	色絵、外面に赤で文字	肥前	
12図4	蓋 陶器	11.2	9.0	—	鏝付き	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
12図5	碗 磁器	10.1	4.2	5.6	高台削出し	染付、外面に唐人、高台内に渦福銘	肥前	
12図6	蓋 陶器	6.4	4.8	5.4	鈕貼付け	灰釉施釉、鈕は菊花		
12図7	焙土器	28.0	6.4	—	ロクロ調整			内面にスス付着
12図8	德利器 陶器	3.3	8.8	20.8	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛け、肩部に条線	瀬戸・美濃	
12図9	德利器 陶器	3.1	8.6	20.9	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛け、肩部に条線	瀬戸・美濃	高台内に墨書
12図10	皿 陶器	12.2	7.4	3.1	高台削出し	灰釉施釉、見込に鉄摺絵で樹文か	瀬戸・美濃	
12図11	片口 陶器	10.8	5.4	7.2	高台削出し、片口貼付、見込にピン痕2ヶ所	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
12図12	小碗 磁器	7.4	4.2	4.3	高台削出し	染付、外面に楼閣山水文	肥前	
12図13	皿 磁器	13.6	7.3	4.1	高台削出し	染付、見込に松竹梅文、高台内に銘有り	肥前	
13図1	碗 磁器	7.0	3.8	5.8	高台削出し	染付、外面に楼閣山水文	瀬戸・美濃	
13図2	蓋 陶器	7.4	6.6	2.7	口縁部 回転糸切痕残す、胎土は緻密で淡桃色	灰釉施釉、外面に鉄と緑で巴文		
13図3	蓋 陶器	9.0	7.0	4.6	回転糸切痕明瞭、把手貼付け	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
13図4	皿 磁器	10.2	5.8	2.2	高台削出し	染付、内面に松文	肥前	
13図5	碗 陶器	—	4.3	—	高台削出し	灰釉、高台内施釉		
13図6	水滴 磁器	5.4×	3.4	2.1	型打ち成形(完)	染付	肥前	
13図7	德利器 陶器	4.4	7.4	21.2	碁箱底削出し(完)	灰釉施釉、体部下端～底部無釉	瀬戸・美濃	
13図8	碗 磁器	9.1	3.3	4.9	高台削出し(完)	染付、外面に竹に梅文、高台内に渦福銘	肥前	
13図9	碗 磁器	10.0	4.0	6.0	高台削出し(完)	染付、外面に蛸唐草文、高台内に渦福銘	肥前	
13図10	碗 磁器	9.6	3.9	5.5	高台削出し(完)	染付、外面に印判で鶉と草文、高台内に「福」銘	肥前	

13図11	小磁器	5.0	2.0	3.3	高台削出し	染付, 外面に草文	肥前	
13図12	小磁器	5.0	2.3	3.4	高台削出し	染付, 外面に草文	肥前	
13図13	磁器	8.9	3.3	5.7	高台削出し	染付, 外面に梅樹文	肥前	
13図14	磁器	9.7	3.5	4.7	高台削出し	染付, 外面に唐草文	肥前	
13図15	磁器	8.5	3.4	5.0	高台削出し	染付, 外面に摺絵で雨降文, 高台内に「大明年製」銘	肥前	
13図16	小磁器	6.9	3.0	4.5	高台削出し	染付, 外面口縁部に四方纏文	肥前	
13図17	碗陶器	11.0	—	—	高台削出し	染付, 外面に山水文	肥前	
13図18	碗磁器	9.8	4.1	5.6	高台削出し	染付, 外面に笹竹文	肥前	
14図1	碗陶器	12.4	—	—	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
14図2	碗陶器	9.5	—	—	口縁部くびれ顕著	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	天目形
14図3	皿陶器	—	4.5	—	高台削出し	緑釉, 外面に灰釉	肥前	
14図4	皿磁器	12.5	6.2	3.3	高台削出し	染付, 内面に梅樹文	肥前	
14図5	皿陶器	12.6	4.4	4.6	高台削出し	透明釉施釉, 見込に鉄絵で山水文か	肥前	
14図6	皿陶器	12.3	4.1	4.5	高台削出し	色絵, 見込に金・青で菊花文	京都系	上絵付は大 半剥離
14図7	蓋磁器	10.0	3.9	2.9	環状鈕削出し	染付, 外面に印判で紅葉文	肥前	
14図8	蓋磁器	5.2	4.6	4.2	受部に切込み有り	染付, 外面に印判で紅葉文	肥前	
14図9	蓋陶器	6.0	4.6	2.8	回転糸切痕残す, 把手貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
14図10	香炉陶器	15.6	11.1	8.4	高台削出し	鉄釉施釉	陶器	高台内に墨書
14図11	片口陶器	18.8	8.3	10.4	高台削出し	灰釉施釉後緑釉掛け	瀬戸・美濃	
14図12	香炉陶器	6.7	4.2	5.0	高台削出し, 三足貼付け	灰釉施釉, 外面に摺絵で流水	陶器	御深井系
15図1	風土器	27.2	24.1	17.1	輪積み成形, 足貼付二足残る, 外面ミガキ	外面赤彩か		
15図2	灯明陶器	10.9	7.0	7.7	底部中央に回転糸切痕残す, 受部貼付け後窓穿孔	鉄釉施釉	志戸呂	
15図3	焙烙土器	28.6	7.6	—	ロクロ調整, 内耳貼付	底部内面に印刻「O」		
15図4	皿磁器	13.6	7.9	3.4	高台削出し	染付, 内面に梅樹文, 見込に印判で五弁花	肥前	
15図5	碗磁器	8.4	3.4	4.9	高台削出し	染付, 外面に樹文	肥前	
15図6	碗磁器	10.4	4.8	6.8	高台削出し	染付, 外面に蛸唐草文	肥前	
15図7	碗陶器	10.7	4.5	7.5	高台削出し	染付, 外面に山水文	肥前	
15図8	蓋物磁器	8.4	4.5	4.2	高台削出し	染付, 外面に草花文, 口縁部釉剥ぎ	肥前	
15図9	蓋物磁器	8.5	4.5	4.3	高台削出し	染付, 外面に花卉文, 口縁部釉剥ぎ	肥前	
15図10	碗磁器	9.7	3.6	5.5	高台削出し	染付, 外面に印判で花卉文, 高台内に「大明年製」銘	肥前	

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

15図11	猪口磁器	9.7	5.5	6.3	高台削出し	染付, 外面に松文, 商台内に「大明年製」銘	肥前	
15図12	小碗磁器	6.7	3.0	4.7	高台削出し	染付, 外面に草花文	肥前	
15図13	小碗磁器	6.7	3.0	2.8	高台削出し	染付, 外面に雨降文	肥前	
15図14	小碗磁器	6.0	2.3	2.7	高台削出し	染付, 外面に羽子板と羽根文	肥前	
16図1	碗陶器	13.0	6.2	8.4	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
16図2	碗陶器	11.7	5.2	7.5	高台削出し	高台内施釉	肥前	呉須手
16図3	灯明皿陶器	10.3	4.0	2.6	底部丸味, 削出し	鉄釉施釉	志戸呂	
16図4	蓋陶器	12.4	5.3	3.6	回転糸切痕残す	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
16図5	碗磁器	—	—	—	口縁部片, 胎土は緻密で白色	青花, 外面に靈芝文	中国	
16図6	皿磁器	—	—	—	高台削出し, 高台内カンナ目頭著, 胎土は緻密で灰味	青花, 見込に草文	中国	芙蓉手
16図7	皿陶器	—	6.2	—	高台削出し	緑釉, 外面透明釉掛分け, 見込蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	高台内に墨書
16図8	蓋磁器	10.4	—	—	底部完	染付, 外面に蛸唐草文	肥前	
16図9	小鉢陶器	19.0	6.6	5.6	高台削出し	内面刷毛目, 見込蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	
16図10	小鉢陶器	17.8	5.7	6.6	高台削出し	透明釉, 見込中央に緑釉掛分け, 見込蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	
16図11	播鉢陶器	—	—	—	—	鉄釉施釉, 播目17条	瀬戸・美濃	
16図12	德利陶器	—	—	—	頸部	鉄釉施釉後灰釉掛け, 肩部に条線	瀬戸・美濃	16図14と同一か
16図13	片口陶器	13.9	7.3	9.1	高台削出し, 見込に三足ピン痕	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
16図14	德利陶器	—	—	—	口縁部	鉄釉施釉後灰釉掛け	瀬戸・美濃	体部に釘書
17図1	焙烙土器	28.1	8.3	—	ロクロ調整	—	—	内面中央にスス著しい火鉢か
17図2	土器	—	—	—	—	—	—	—
17図3	焙烙土器	20.7	8.7	—	ロクロ調整	—	—	—
17図4	碗磁器	8.4	3.6	5.2	高台削出し	染付, 外面に菊花文	肥前	
17図5	焙烙土器	27.1	8.4	—	ロクロ調整	—	—	—
17図6	蓋磁器	9.4	3.6	2.9	環状鈕削出し	染付, 外面に草花文, 鈕内に「大明成化年製」銘	肥前	
17図7	皿磁器	14.5	4.1	3.1	高台削出し	染付, 内面に区画文, 見込に五弁花, 高台内に銘	肥前	
17図8	仏龕具磁器	5.4	3.6	6.2	台脚底部削出し	染付, 外面, 区画に草文	肥前	
17図9	蓋磁器	8.7	7.8	7.2	ボタン状鈕付け	染付, 外面に同心円文	瀬戸・美濃	
17図10	饗密陶器	11.5×	3.7	11.7	板作り成形	灰釉施釉, 外面に鉄摺絵で菊花文	瀬戸・美濃	
17図11	德利陶器	—	12.3	—	底部削出し	—	志戸呂	
18図1	碗磁器	9.9	3.3	5.0	高台削出し	染付, 外面, 丸に違い鷹羽	肥前	

18図2	小碗 磁器	5.9	2.4	2.7 (完)	高台削出し	染付, 外面に花卉文	肥前	
18図3	碗 陶器	—	3.9	— 底部(完)	高台削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	天目
18図4	德利 陶器	—	12.8	— 底部完	高台削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
18図5	皿 磁器	17.4	10.5	3.0 完	高台削出し 高台内にハリ痕	染付, 外面に梅樹文, 高台内に「大明成化年製」銘	肥前	
18図6	蓋 土器	19.7	13.9	14.6 (完)	ロクロ調整			
18図7	蓋 土器	24.9	19.3	21.7 (完)	ロクロ調整			
18図8	蓋 磁器	12.9	11.3	10.5 3/4	ボタン状紐付け	染付け, 外面に扇子と雲文	肥前	
18図9	乗燭 土器	8.2	1.2	4.9 (完)	底部回転糸切痕残す, 芯立等貼付け	鉄釉, 底部も施釉		
18図10	灯明皿 陶器	9.0	5.7	4.3 (完)	受付き	鉄釉施釉	志戸呂	
18図11	壺 陶器	—	—	— 体部 1/3		鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
19図1	中鉢 磁器	—	—	—		内面に浅い印刻後象嵌	肥前	
19図2	碗 磁器	9.5	3.7	5.3 完	高台削出し	染付, 外面に草文, 高台内に「大明年製」銘	肥前	
19図3	皿 陶器	13.8	9.6	1.9 1/5	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
19図4	皿 陶器	—	8.8	— 1/5	高台削出し	長石釉施釉, 見込に重圈線内に鉄絵で毘文 色絵, 内面に青彩	瀬戸・美濃	
19図5	皿 陶器	—	—	—	体部片		中国	呉須手, 被熱
19図6	碗 陶器	—	3.3	— 底部完		鉄釉施釉	京都系	
19図7	渡瓶 陶器	5.8	—	— 口縁部 1/4	体部に口縁部貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
19図8	蓋物 陶器	9.2	5.8	7.6 2/3	高台削出し	染付, 外面に半菊唐草文	肥前	
19図9	碗 陶器	11.5	4.9	7.2 1/2	高台削出し	染付, 外面に山水文	肥前	
19図10	碗 陶器	12.5	5.6	8.2 口縁部 3/4	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
19図11	紅皿 磁器	4.2	1.7	1.8 3/4	高台削出し	白磁, 外面に型打ちで菊花状文	肥前	
19図12	碗 磁器	9.1	2.9	4.6 1/2	高台削出し	染付, 外面に桐葉文	肥前	
19図13	碗 陶器	9.6	5.0	6.8 口縁部 3/4	高台削出し	灰釉施釉, 外面に呉須絵	瀬戸・美濃	高台内に墨書
19図14	鉢 陶器	30.6	13.9	10.3 1/3	高台削出し, 口縁部外反	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
20図1	德利 陶器	—	8.5	— 底部完	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛付け	瀬戸・美濃	体部に釘書
20図2	德利 陶器	—	10.8	— 底部 1/3	高台削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
20図3	播摺 陶器	34.1	14.1	13.7 1/2	底部回転糸切痕残す	鉄釉施釉, 播目16条	瀬戸・美濃	
20図4	德利 陶器	—	11.3	— 底部完	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛付け, 肩部に条線	瀬戸・美濃	
20図5	德利 陶器	3.6	—	10.2 底部完	底部削出し, 口縁部玉縁状	口縁部鉄釉施釉	志戸呂	被熱
21図1	德利 陶器	—	—	— 体部(完)	大形	鉄釉施釉後灰釉掛付け, 肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

21図2	火鉢 土器	25.2	19.9	9.7	輪積み成形, 底部三足貼付け, 外面ミガキ	外面赤彩か		
21図3	火鉢 土器	19.0	14.8	8.3	輪積み成形, 底部三足貼付け, 外面ミガキ	外面赤彩		
21図4	火鉢 土器	22.9	21.0	26.3	輪積み成形, 底部三足貼付け, 体部上位に双耳貼付け			
21図5	蓋 土器	26.6	21.6	22.4	口クロ調整, 鈕貼付け			
22図1	焙烙 土器	4.3	—	—	口クロ調整			
22図2	碗 磁器	29.4	8.1	—	口クロ調整	底部内面に印刻「O」		
22図3	灯明皿 陶器	8.1	4.0	4.4	高台削出し	白磁	肥前	
22図4	香炉 陶器	7.8	3.8	1.7	底部に回転糸切痕明瞭	鉄釉施釉	志戸呂	
22図5	水指 陶器	10.4	—	—	体部は内傾	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
22図6	火鉢 土器	—	—	—	口縁部			
22図7	碗 陶器	11.8	—	—	内面に受付け			備前系
22図8	火鉢 土器	(39.2)	—	—	鏝状口縁部, 口唇は肥厚, 全面ミガキ	上面赤彩	瀬戸・美濃	
22図9	碗 陶器	12.2	—	—		灰釉施釉	瀬戸・美濃	
22図10	瓦燈 土器	20.3	10.2	—	輪積み成形, 上部に受皿付き	外面赤彩か		
22図11	德利 陶器	—	11.2	—	底部削出し		志戸呂	底部に墨書
22図12	灯明皿 陶器	10.9	4.4	2.1	底部削出し		志戸呂	
23図1	碗 磁器	9.6	3.7	5.7	高台削出し	染付, 外面に印判で笹と円文, 高台内に「大明年製」	肥前	
23図2	碗 磁器	9.6	3.5	5.3	高台削出し	染付, 外面に印判で草花文	肥前	
23図3	碗 磁器	10.2	3.8	5.2	高台削出し	染付, 外面に印判で紅葉文	肥前	
23図4	碗 陶器	13.8	6.0	8.9	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
23図5	碗 磁器	9.9	3.6	4.8	高台削出し	染付, 外面に松竹梅文	肥前	
23図6	仏龕具 磁器	—	4.2	—	台脚底部削出し	染付	肥前	被熱
23図7	火鉢 土器	29.1×31.6	29.1	31.6	輪積み成形			
24図1	碗 陶器	9.6	3.3	5.3	高台削出し	灰釉施釉後鉄・青釉掛け, 高台内施釉	瀬戸・美濃	
24図2	碗 陶器	8.4	3.4	5.1	高台削出し	透明釉施釉, 外面に鉄絵で若松文	京都系	高台内墨書
24図3	碗 陶器	13.1	5.5	9.7	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
24図4	碗 陶器	—	5.2	—	高台内螺旋状削出し, 体部に段有り	灰釉施釉後鉄釉掛け	瀬戸・美濃	
24図5	碗 陶器	9.3	3.8	5.1	高台内削出し	透明釉施釉, 外面に鉄絵で若松文	京都系	
24図6	碗 陶器	12.9	4.0	5.7	高台削出し	内外面に刷毛目, 外面螺旋文	瀬戸・美濃	
24図7	皿 陶器	25.1	13.6	5.7	蛇ノ目高台削出し, 口縁部外折	灰釉施釉, 見込に鉄・呉須絵で柳文	瀬戸・美濃	石皿
24図8	蓋 磁器	8.2	4.0	2.0	環状鈕削出し	染付, 内外面に菊花文	肥前	
25図1	蓋物 磁器	12.4	6.2	6.3	高台削出し	染付, 外面に水鳥文, 口縁内面釉剥ぎ	肥前	

25図2	蓋物 陶器	9.8 4.9	8.5 (完)	4.7	高台削出し、蓋受有り	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
25図3	鉢 陶器	23.7	13.3	13.5	高台削出し、口縁部外側へ折返し、見込に釉剥ぎ3ヶ	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
25図4	德利 陶器	3.6	6.4	19.9	碁筭底削出し、口縁部外傾	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
25図5	鉢 陶器	29.1	19.2	—	高台削出し、口縁部内外面へ突出、見込に胎土目	灰釉施釉後鉄釉掛け	瀬戸・美濃	
25図6	德利 陶器	—	9.8	—	底部完		瀬戸・美濃	体部に釘書
25図7	德利 陶器	—	10.2	—	底部削出し		志戸呂	底部に墨書
26図1	埴 陶器	—	5.2	—	底部三足貼付け	鉄釉施釉		
26図2	灯明皿 土器	8.1	5.1	8.1	台脚付			
26図3	灯明皿 土器	10.0	6.8	4.6	受部貼付け、底部に回転系切痕残す			
26図4	風炉 土器	—	22.2	—	輪積み成形、内面指頭痕残す、底部に足貼付け	瓦質		
26図5	鉢 土器	—	7.6	—	ロクロ調整、底部に回転系切痕顕著			底部穿孔
26図6	火鉢 土器	18.2	13.9	—	輪積み成形、口縁部内側に肥厚			
26図7	火鉢 土器	—	17.4	—	輪積み成形、内面指頭痕顕著、底部に三足貼付け			
26図8	焙烙 土器	33.8	—	—	ロクロ調整、内耳貼付け			
27図1	德利 陶器	—	—	—	体部 1/2	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
27図2	仏花瓶 磁器	—	5.1	—	碁筭底削出し	染付、外面に蛸唐草文	肥前	
27図3	鉢 土器	11.9	—	—	内面にロクロ痕顕著、口縁部内面は肥厚	外面に白釉施釉		
27図4	碗 磁器	9.2	3.4	5.3	高台削出し	染付、外面に松文、見込に文字文	肥前	
27図5	碗 磁器	8.3	3.2	5.3	高台削出し	染付、外面に梅樹文、見込に火炎文	肥前	
27図6	小碗 磁器	5.4	1.5	2.8	高台削出し	染付、外面に車輪文	肥前	
27図7	碗 磁器	9.1	3.7	5.2	高台削出し	染付、外面に二重網目文、見込に菊花文か	肥前	
27図8	碗 磁器	8.9	3.1	5.5	高台削出し	染付、外面に牡丹と竹文	肥前	
27図9	碗 磁器	8.3	—	—	口縁部完	染付外面に牡丹と竹文	肥前	
27図10	碗 磁器	11.1	6.1	6.6	高台削出し	染付、外面に牡丹と蝶文	肥前	広東形
27図11	碗 陶器	10.2	3.8	6.0	高台削出し、見込にビン痕	長石釉、高台内も施釉、外面鉄絵で梅花文	瀬戸・美濃	口縁部に淡青釉掛け
27図12	碗 陶器	10.2	3.9	7.2	高台削出し、口縁下括れる、見込にビン痕	外面鉄釉、内面灰釉施釉掛分、外面銀手文	瀬戸・美濃	
27図13	碗 陶器	10.9	5.1	6.2	高台削出し 見込にビン痕	灰釉施釉	瀬戸・美濃	被熱
27図14	碗 磁器	7.5	4.1	6.4	高台削出し	外面青磁、内面染付、口縁部に四方樺文、見込五弁花	肥前	
27図15	碗 陶器	10.3	5.0	7.2	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
27図16	碗 陶器	—	3.9	—	高台削出し、胎土は黒色粒子を含み緻密で淡褐色	鉄釉施釉、高台内に印刻で「朝日」銘	京都系	



報告篇第三章 江戸時代の調査 I

28図1	碗 陶器	13.2	4.2	5.8	高台削出し	刷毛目、外面に螺線文	瀬戸・美濃	高台内に墨書
28図2	碗 陶器	12.7	4.2	5.6	高台削出し	刷毛目、外面に螺線文	瀬戸・美濃	
28図3	碗 陶器	12.6	3.6	6.4	高台削出し	緑釉施釉	瀬戸・美濃	底部にスス著しい
28図4	碗 陶器	11.8	4.5	6.0	高台削出し	長石釉、高台内も施釉、外面に鉄絵で唐草文、口錆	瀬戸・美濃	
28図5	碗 陶器	9.4	4.1	5.1	高台削出し	透明釉施釉、外面に鉄絵で若松文	京都系	高台内側に墨書
28図6	碗 陶器	12.7	4.8	5.3	高台削出し	灰釉施釉、外面に鉄絵で柳文	瀬戸・美濃	
28図7	碗 陶器	8.9	3.7	5.2	高台削出し	透明釉施釉、外面に鉄絵で若松文	京都系	高台内に墨書
28図8	碗 陶器	9.0	3.4	5.1	高台削出し	透明釉施釉、外面に鉄絵で若松文	京都系	高台内に墨書
28図9	碗 陶器	10.4	3.7	5.4	高台削出し	透明釉施釉	京都系	高台内に墨書
28図10	碗 陶器	10.3	4.3	6.4	高台削出し	透明釉施釉	京都系	高台内に墨書
28図11	碗 陶器	9.3	3.3	5.4	高台削出し	透明釉施釉、外面に鉄絵で若松文	京都系	高台内に墨書
28図12	碗 陶器	—	3.5	—	高台削出し	透明釉施釉、外面に鉄絵で若松文	京都系	高台内に墨書
28図13	碗 陶器	—	3.7	—	高台削出し	透明釉施釉、外面に鉄絵で若松文	京都系	高台内に墨書
28図14	碗 陶器	8.9	3.4	6.3	高台削出し、丸腰	透明釉施釉、貫入顕著	京都系	
28図15	壺 陶器	7.2	5.5	5.4	底部・腰部削出し	鉄釉施釉、口縁部内面釉剥ぎ	志戸呂系	
28図16	小鉢 磁器	9.6	4.8	6.9	高台削出し、口縁部は強く外折し	染付、外面に唐草文、見込に五弁花	肥前	
29図1	猪口 磁器	7.6	6.1	6.4	碁筈底削出し	色絵、外面窓枠に赤・黒・金で梅樹文、見込松竹梅文	肥前	
29図2	皿 磁器	12.6	6.6	3.5	高台削出し	染付、内面に唐草文	肥前	
29図3	皿 磁器	13.7	7.4	4.5	高台削出し	染付、内面竹・柿文と印判で五弁花、高台内に渦福銘	肥前	
29図4	皿 磁器	14.1	8.6	5.2	蛇ノ目凹型高台、体部は型打ちで	染付、内面牡丹・山水文、見込に松竹梅文	肥前	高台内に「成化年製」
29図5	皿 磁器	—	4.6	—	高台削出し	透明釉施釉、見込に鉄絵で山水文、高台内印刻「富永」	肥前	
29図6	皿 磁器	13.9	10.2	3.6	蛇ノ目凹型高台	染付、内面に草花文、高台内に渦福銘	肥前	
29図7	皿 磁器	10.6	5.9	2.2	高台削出し	染付、内面に松と垣根文	肥前	
29図8	皿 磁器	12.3	7.9	2.3	高台削出し	色絵、内面に赤・黒・金で窓枠と松文、見込に松竹梅	肥前	高台内に「富貴長春」
30図1	皿 磁器	13.5	5.0	4.0	高台削出し、底部厚手	灰釉施釉、内面に呉須で唐草文、見込に七弁花	瀬戸・美濃	太白手
30図2	皿 磁器	—	9.2	—	蛇ノ目高台削出し、内面に稜有り、見込にハリ痕	灰釉施釉、見込に呉須と鉄摺絵で菊文、高台内施釉	瀬戸・美濃	御深井系
30図3	鉢 陶器	—	7.0	—	碁筈底削出し、腰部削出し	外面灰釉施釉	瀬戸・美濃	底部に墨書
30図4	鉢 陶器	14.2	7.2	6.3	高台削出し、体部クロ痕顕著	灰釉施釉、見込中央釉剥ぎ	瀬戸・美濃	御深井系
30図5	鉢 陶器	24.3	—	—	口縁部は強く外反	灰釉施釉、内面に櫛目波状文	瀬戸・美濃	
30図6	鉢 陶器	15.5	10.8	7.2	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	

31図1	鉢 陶器	20.8	9.4	5.1	基筒底削出し, 片口を有する, 見込に胎土目	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
31図2	鉢 陶器	16.1	12.0	7.3	蛇ノ目高台削出し, 見込に重ね痕, 胎土は砂粒多い	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
31図3	鉢 陶器	18.1	12.0	14.0	高台削出し, 腰部丸く削出し, 見込に目痕3ヶ	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	底部を穿孔
31図4	鉢 陶器	15.8	10.5	15.3	高台削出し, 腰部丸く削出し, 見込に目痕1ヶ	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	底部穿孔か
31図5	鉢 陶器	—	10.5	—	高台削出し, 腰部丸く削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	高台内墨書
31図6	鉢 陶器	—	11.2	—	高台削出し, 腰部丸く削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	高台内墨書 穿孔
31図7	埴 陶器	21.1	—	—	口縁部肥厚し双耳貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
32図1	埴 陶器	17.5	7.0	8.1	口縁部肥厚し双耳貼付け, 底部に足貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
32図2	埴 陶器	17.4	—	—	口縁部に双耳貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	耳に鉄輪有
32図3	播鉢 陶器	36.0	16.2	13.4	体部削り, 口縁部に二条線下端三角形, 口唇は平坦	播目9条	備前系	
32図4	水注 陶器	6.6	5.6	9.2	高台削出し, 体部に注口・把手貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
32図5	緋入 陶器	5.8	4.4	3.3	底部に回転糸切痕顕著, 体部に把手貼付け	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
32図6	仏花瓶 陶器	6.1	4.2	11.5	台脚底部に回転糸切痕残す, 肩部に双耳貼付け	口縁部灰釉・体部鉄釉掛分	瀬戸・美濃	
32図7	仏花瓶 陶器	—	6.2	—	高台削出し	染付, 外面に風景文	肥前	
32図8	同上蓋 陶器	—	—	5.8	紐貼付け, 回転糸切痕残す	鉄釉施釉		
32図9	土瓶 陶器	—	9.0	—	体部に注口貼付け	鉄釉施釉		
33図1	土瓶 陶器	5.9	6.9	8.2	体部に注口・双耳, 底部に三足貼付け	灰釉施釉		
33図2	土瓶 陶器	5.6	6.2	9.2	体部に注口貼付け, 肩部に稜を有する	透明釉施釉, 外面に竖筋文		
33図3	蓋 陶器	9.9	7.8	8.4	鐏・鈕付き	灰釉施釉		
33図4	蓋 陶器	11.0	8.0	5.8	鐏・花卉状鈕付き	灰釉施釉		
33図5	蓋 陶器	8.0	5.5	4.2	鐏・菊花状鈕付き	鉄釉施釉		
33図6	蓋 陶器	11.0	8.3	8.9	鐏付き	鉄釉施釉		
33図7	蓋 陶器	5.8	2.2	(完)	底部回転糸切痕残す, 鐏・把手状鈕付き	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
33図8	蓋 陶器	10.8	—	—	中央削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
33図9	蓋 陶器	9.3	7.0	6.4	かえり・ボタン状鈕付き, 胎土は砂粒多く粗い	鉄釉施釉		
33図10	蓋 陶器	9.2	7.0	6.2	かえり・ボタン状鈕付き, 胎土は砂粒多く粗い	鉄釉施釉		
33図11	蓋 陶器	8.1	7.1	6.7	かえり・ボタン状鈕付き	灰釉施釉		
33図12	德利 陶器	—	8.0	—	体部削り 肩部やや膨む		志戸呂	体部・底部に墨書
33図13	德利 陶器	3.4	9.2	28.1	底部削出し	口縁部灰釉施釉	志戸呂	底部に墨書
34図1	德利 陶器	—	9.2	—	底部削出し, 体部中央膨む		志戸呂	体部・底部に墨書

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

34図2	德利陶器	—	9.6	—	高台削出し、体部下半に稜を有する	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
34図3	德利陶器	3.6	6.7	20.3	碁笥底削出し、口縁部肥厚	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
34図4	德利陶器	3.5	6.1	20.7	碁笥底削出し、口縁部肥厚	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
34図5	德利陶器	3.5	5.9	19.2	碁笥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
34図6	德利陶器	—	6.4	—	碁笥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
34図7	德利陶器	3.4	6.4	—	碁笥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
34図8	德利陶器	—	6.6	—	碁笥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
34図9	德利陶器	—	7.2	—	碁笥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
35図1	德利陶器	3.0	7.6	20.6	高台削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
35図2	德利陶器	3.0	8.0	22.9	高台削出し、口縁部肥厚	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
35図3	德利陶器	4.2	10.1	23.6	高台削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
35図4	德利陶器	2.9	—	—	碁笥底削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
35図5	德利陶器	—	6.6	—	碁笥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部にへら文字
35図6	德利陶器	3.4	—	—	碁笥底削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
35図7	德利陶器	4.5	10.3	20.7	高台削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
36図1	德利陶器	3.3	10.6	25.1	高台削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
36図2	德利陶器	3.1	—	—	碁笥底削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
36図3	灯明皿陶器	8.1	5.7	3.6	受部貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
36図4	灯明皿陶器	9.9	7.3	4.9	受部貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
36図5	灯明皿陶器	10.4	7.6	4.6	受部貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
36図6	灯明皿陶器	10.2	7.7	4.6	受部貼付け、外面に重積み痕	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
36図7	灯明皿陶器	11.7	8.1	6.2	受部貼付け	鉄釉施釉	志戸呂	
36図8	灯明皿土器	7.8	4.7	7.8	台脚付、受部貼付け	透明釉施釉		
36図9	秉燭土器	3.2	0.8	2.5	灯芯立貼付け、底部に回転糸切痕残す			
36図10	灯明皿土器	8.3	5.6	4.2	受部貼付け	透明釉施釉		
36図11	灯明皿土器	10.9	7.5	5.0	受部貼付け、底部に回転糸切痕残す	透明釉施釉		
36図12	灯明皿土器	10.2	6.8	3.5	受部貼付け、底部に回転糸切痕残す	透明釉施釉		
36図13	灯明皿陶器	10.4	4.4	2.2	底部削出し、見込に重積み痕有り	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
36図14	灯明皿陶器	10.2	4.4	2.1	底部削出し、見込に重積み痕有り	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
36図15	灯明皿陶器	8.0	3.3	1.5	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	

36図16	灯明皿 土器	7.8	4.2	1.5	底部回転糸切痕残す (完)	透明釉施釉		
36図17	灯明皿 土器	8.2	4.3	1.6	ロクロ成形, 底部に回転糸切痕残す 底部完	透明釉施釉		
36図18	灯明皿 土器	9.7	4.4	2.3	ロクロ成形, 底部に回転糸切痕残す (完)	透明釉施釉		
36図19	灯明皿 土器	11.9	5.2	2.1	底部回転糸切痕残す 完	透明釉施釉		
36図20	火入器 土器	8.9	9.1	8.4	輪積み成形 完	瓦質, 外面に型押で桜花文		口唇に敲打痕
37図1	風炉 土器	20.8	21.8	19.6	輪積み成形, 三足貼付, 足に穿孔, 内面に把手貼付け 底部 2/3	瓦質		
37図2	火鉢 土器	17.5	13.8	11.3	輪積み成形, 底部に三足貼付け, 内面指頭痕顕著 完	瓦質, 外面に型押でへの字文		口唇に敲打痕
37図3	香炉 陶器	8.5	—	—	底部削出し, 三足貼付け (完)	灰釉施釉	瀬戸・美濃	底部に墨書
37図4	壺 土器	23.0	18.4	19.9	ロクロ調整, 紐貼付け 5.0 3/4			
37図5	焙烙 土器	32.5	—	—	ロクロ調整 1/5			
37図6	德利 陶器	—	11.4	—	高台削出し 底部完	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
37図7	鉢 土器	—	5.4	—	底部削出し, 丸底 底部 1/3	見込に印刻有り「楽」か		楽焼か
38図1	碗 磁器	7.5	3.3	5.5	高台削出し, 腰部に稜を有する, 砂溶着 3/4	染付, 外面に水鳥文, 見込に印判 で五弁花	肥前	筒形
38図2	碗 磁器	7.6	3.5	5.6	高台削出し, 腰部に稜を有する 底部完	染付, 外面に松文, 見込に五弁花	肥前	筒形
38図3	碗 磁器	8.5	3.1	5.8	高台削出し (完)	染付, 外面に梅樹文, 見込みに四 葉文	肥前	
38図4	碗 磁器	8.8	3.1	5.8	高台削出し 完	染付, 外面に漢詩文, 高台内に枠 に「子贖」	肥前	
38図5	碗 磁器	8.8	3.2	5.9	高台削出し 2/3	染付, 外面に鳳凰文	肥前	
38図6	碗 磁器	10.4	3.6	5.3	高台削出し 底部完	染付, 外面に草文	肥前	焼成不良
38図7	碗 磁器	7.9	3.0	5.2	高台削出し 底部完	染付, 外面に同心円文	肥前	
38図8	碗 磁器	8.7	3.3	5.3	高台削出し 1/2	染付, 外面に雪輪文, 見込に五弁 花	肥前	
38図9	碗 磁器	9.8	3.7	4.4	高台削出し 完	染付, 内外面に菊花散し文, 見込 に花文	肥前	
38図10	碗 磁器	8.5	3.4	5.7	高台削出し (完)	染付, 外面に鶴と松文, 見込に幾 何文	肥前	
38図11	碗 磁器	8.5	3.1	5.5	高台削出し 底部完	染付, 外面に樹文, 見込に幾何文	肥前	
38図12	碗 磁器	10.0	3.6	5.8	高台削出し 底部完	染付 外面に朝顔文, 見込に松竹 梅文	肥前	
38図13	碗 磁器	5.5	1.6	2.9	高台削出し (完)	色絵, 外面に赤・黒で扇文	肥前	
38図14	碗 磁器	8.6	3.0	5.9	高台削出し 3/4	染付, 外面に松葉文, 見込に松葉 文	肥前	
38図15	碗 磁器	8.7	3.1	7.7	高台削出し 1/2	染付, 外面に七宝継ぎ文, 見込に 五弁花	肥前	
38図16	碗 磁器	10.0	3.4	4.8	高台削出し 1/3	色絵, 外面に具須で鶴, 赤・金で 亀甲文	肥前	
39図1	碗 磁器	9.8	3.7	5.2	高台削出し 完	染付, 外面に草文, 見込に蝶文	肥前	
39図2	碗 磁器	9.9	3.8	5.2	高台削出し 底部完	染付, 外面に唐子文, 見込に葉文	肥前	

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

39図3	碗 磁器	10.4	3.6	5.8	高台削出し 底部完	染付, 外面に草に蝶文, 見込に抽象文	肥前	
39図4	碗 磁器	10.1	3.6	5.3	高台削出し 底部完	染付, 外面に花文	肥前	
39図5	碗 磁器	10.8	4.0	5.4	高台削出し 1/4	染付, 外面に虫筆文, 見込に寿字文	肥前	
39図6	碗 磁器	7.9	2.6	4.0	高台削出し 1/3	色絵, 外面に窓絵で赤・金で亀甲・呉須で鶴	肥前	
39図7	碗 磁器	7.8	2.8	3.6	高台削出し 底部完	染付, 外面に五葉重ね文	肥前	
39図8	碗 陶器	15.5	5.8	8.1	高台削出し (完)	染付, 外面草文, 見込五弁花, 高台内渦福銘	肥前	
39図9	碗 磁器	15.6	5.0	8.2	高台削出し 底部完	染付, 外面草文, 見込五弁花高台内渦福銘	肥前	
39図10	碗 磁器	10.2	5.9	5.5	高台削出し (完)	染付, 外面・見込に丸文, 高台内銘有り	肥前	広東形
39図11	猪口 磁器	7.0	5.0	6.1	碁箱底削出し 1/3	染付, 外面に葉文	肥前	
39図12	小鉢 磁器	6.7	—	—	型打ちで隅丸四角形 口縁部 1/3	白磁	肥前	
40図1	碗 陶器	10.7	4.8	7.2	高台削出し 底部完	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
40図3	碗 陶器	11.2	4.8	6.3	高台削出し, 胎土は白色粒子を多量含み, 灰褐色 2/3	透明釉施釉, 高台内に印刻「岩倉山」銘	京都系	
40図4	碗 陶器	11.0	4.1	8.2	高台削出し, 胎土は白色粒子を多量含み, 灰褐色 底部完	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
40図5	碗 陶器	11.7	4.4	8.0	高台削出し (完)	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
40図6	碗 陶器	10.3	5.4	8.1	高台削出し (完)	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
40図7	碗 陶器	11.2	4.8	7.3	高台削出し 完	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
40図8	碗 陶器	11.5	4.8	7.2	高台削出し 底部完	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
40図9	碗 陶器	9.6	4.3	5.7	高台削出し 底部完	灰釉施釉, 外面に呉須絵	瀬戸・美濃	内面荒れる
40図10	碗 陶器	12.2	4.0	5.9	高台削出し 底部完	灰釉施釉, 外面に鉄絵で柳文	瀬戸・美濃	
40図11	碗 陶器	14.7	7.5	10.0	高台削出し, 高台内に段有り (完)	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
40図12	碗 陶器	12.5	4.3	6.0	高台削出し 底部完	灰釉施釉, 外面に鉄絵で柳文	瀬戸・美濃	
40図13	碗 陶器	13.8	5.2	6.1	高台削出し 1/2	刷毛目	瀬戸・美濃	
40図14	碗 陶器	12.0	5.1	7.7	蛇ノ目高台削出し, 体部に指押え有り (完)	鉄釉施釉, 畳付に印刻, 菊花文有り	瀬戸・美濃	
40図15	碗 陶器	12.5	3.8	5.7	高台削出し 1/2		瀬戸・美濃	
40図16	小碗 陶器	6.6	3.3	4.1	高台削出し 完	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
41図1	碗 陶器	9.3	3.6	5.5	高台削出し 底部完	透明釉施釉	京都系	高台内墨書
41図2	碗 陶器	9.8	3.4	5.9	高台削出し 底部完	透明釉施釉, 外面に鉄絵で若松文	京都系	
41図3	碗 陶器	9.8	4.1	5.6	高台削出し 底部(完)	透明釉施釉, 外面に鉄絵で若松文	京都系	
41図4	碗 陶器	9.4	3.3	5.9	高台削出し (完)	透明釉施釉, 外面に鉄絵で若松文	京都系	
41図5	碗 陶器	9.4	3.6	5.4	高台削出し 底部 1/3	透明釉施釉, 外面に鉄絵で若松文	京都系	

41図6	碗 陶器	9.8	3.7	6.6	高台削出し	透明釉施釉, 外面に鉄絵で若松文	京都系	
41図7	碗 陶器	9.5	3.6	5.6	高台削出し, 口縁部外反	透明釉施釉, 貫入顕著		
41図8	碗 陶器	9.6	4.1	5.6	高台削出し, 体部中位に条線	外面鉄釉, 内面灰釉掛分け	瀬戸・美濃	
41図9	碗 陶器	10.6	4.6	6.4	高台削出し, 口縁部外反	外面, 高台内も長石釉・口縁部青釉, 鉄絵で輪文	瀬戸・美濃	内面赤彩
41図10	碗 陶器	9.6	4.3	6.6	高台削出し 口縁部外反	灰釉, 口縁部青釉掛分け	瀬戸・美濃	
41図11	碗 陶器	—	3.3	—	高台削出し	透明釉施釉	京都系	高台内に墨書か
41図12	碗 陶器	9.4	5.1	6.8	高台削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
41図13	皿 磁器	12.5	7.5	4.0	高台削出し	染付, 外面に草花文, 見込に印判で五弁花	肥前	高台内に渦福銘
41図14	皿 磁器	13.3	8.1	3.9	高台削出し, 砂溶着	染付, 内面草花文線印判五弁花, 高台内渦福	肥前	
41図15	皿 磁器	10.5	6.7	1.9	高台削出し	染付, 内面に花文, 見込に五弁花	肥前	
42図1	皿 磁器	13.5	7.3	3.7	高台削出し, 砂溶着	染付, 内面唐文と印判五弁花, 高台内渦福銘	肥前	
42図2	皿 磁器	13.7	8.2	4.5	高台削出し, 輪花状口縁	染付, 内面草文と五弁花, 高台内に銘有り	肥前	
42図3	皿 磁器	13.7	7.1	3.1	高台削出し, 見込蛇ノ目釉剥ぎ	染付, 内面唐草文, 見込印判で五弁花	肥前	
42図4	皿 磁器	13.0	7.6	4.4	高台削出し	染付, 内面草文と五弁花, 高台内渦福銘	肥前	
42図5	皿 磁器	14.2	8.6	4.2	蛇ノ目凹形高台削出し	染付, 内面に草花文, 高台内に渦福銘	肥前	
42図6	皿 磁器	14.1	7.8	3.1	高台削出し, 見込蛇ノ目釉剥ぎ	染付, 内面に唐草文, 見込に印判で五弁花	肥前	
42図7	皿 磁器	13.6	7.1	3.5	高台削出し, 見込蛇ノ目釉剥ぎ	染付, 内面に唐草文, 見込に印判で五弁花	肥前	
43図1	皿 磁器	13.8	8.1	4.7	蛇ノ目凹形高台削出し	外面青磁・内面染付	肥前	
43図2	皿 磁器	13.7	8.0	5.4	蛇ノ目凹形高台削出し	外面青磁・内面染付, 草木文, 高台内「簡江」銘	肥前	
43図3	皿 陶器	7.6	4.3	2.1	碁箱底削出し, 体部は方形	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
43図4	蓋物 磁器	12.4	8.4	4.5	高台削出し, 腰部に段を有する, 砂溶着	色絵, 赤・青・金で牡丹文と赤・緑で草文	肥前	
43図5	皿 陶器	11.8	7.5	2.9	貼付高台, 見込に三足ピン痕	灰釉施釉, 見込に鉄摺絵で花文	瀬戸・美濃	
43図6	皿 磁器	14.6	9.4	3.7	蛇ノ目凹形高台削出し, 口縁部外反し輪花状	鉄釉施釉, 見込に型打ちで菊花貼付け	肥前	
43図7	蓋物 陶器	9.6	8.2	5.8	高台削出し, 受部を有する	灰釉施釉	瀬戸・美濃	高台内墨書
43図8	蓋物 陶器	10.2	8.8	6.8	高台削出し, 受部を有する	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
43図9	鉢 陶器	31.0	12.2	9.9	高台削出し, 口縁部外折	灰釉施釉, 内面に鉄絵で草文	瀬戸・美濃	
43図10	鉢 陶器	—	6.0	—	底部削出し	透明釉施釉	京都系	
44図1	片口 陶器	16.5	9.1	9.1	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
44図2	鉢 陶器	22.0	9.6	5.9	碁箱底削出し片口を有する, 見込に目痕5ヶ	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
44図3	壺 陶器	5.2	5.1	6.1	高台削出し, 双耳貼付け	灰釉施釉	瀬戸・美濃	

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

44図4	鉢 陶器	21.8	10.6	5.7	1/4	碁笥底削出し、口縁部外反	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
44図5	壺 陶器	5.4	4.6	6.6		高台削出し、双耳貼付け	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
44図6	鉢 陶器	31.4	15.7	15.7	1/3	蛇ノ目高台削出し、口縁部外折し、見込目痕釉剥ぎ	灰釉施釉後緑釉掛け	瀬戸・美濃	
45図1	蓋 磁器	12.0	11.2	10.8	1/4	かえり・把手状鈕付き	染付、外面に葉文	肥前	
45図2	蓋 磁器	10.0	9.3	9.0	1/4	かえり付き	染付、外面に丸文	肥前	
45図3	蓋 磁器	12.2	11.4	11.2	1/2	かえり・把手状鈕付き	染付、外面に水草文	肥前	
45図4	鉢 陶器	34.1	12.3	11.9	完	高台削出し・三角形、口縁部くびれ直立	透明釉施釉、内面に象嵌浅い	肥前	
46図1	蓋 陶器	11.0	10.0	9.6	1/3	かえり・ボタン状鈕付き	透明釉施釉、外面に鉄・呉須で樹文		
46図2	蓋 陶器	15.8	5.2	4.1	1/3	環状鈕付き、口縁部外反	灰釉施釉、内外面中央無釉	瀬戸・美濃	
46図3	蓋 陶器	9.4	6.9	7.6	完	罌・菊花状鈕付き	鉄釉施釉		
46図4	蓋 陶器	10.4	9.7	1.4	1/2	かえり付き	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
46図5	蓋 陶器	5.4	4.6	6.6	完	底部に回転糸切痕残す、把手貼付	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
46図6	蓋 陶器	9.7	7.4	7.9	2/3	罌付き	鉄釉施釉		
46図7	蓋 陶器	11.5	5.0	7.2	完	かえり・ボタン状鈕付き	鉄釉施釉	陶器	
46図8	蓋 陶器	8.4	6.0	4.6	完	底部に回転糸切痕残す、罌・ボタン状鈕付き		瀬戸・美濃	
46図9	播磨 陶器	33.9	16.7	13.1	完	体部削り、口縁帯二条線、下端幅広	底部にヘラ記号「七」、播目9条	備前系	
46図10	播磨 陶器	12.6	—	—	1/3	小形である	鉄釉施釉、播目4条か	瀬戸・美濃	
46図11	播磨 陶器	30.4	14.1	11.7	1/3	体部削り、口縁帯に二条線・下端に交出	播目7条	備前系	
47図1	徳利 陶器	3.0	7.3	19.7	完	碁笥底削出し、口縁部折返し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
47図2	徳利 陶器	3.2	6.7	20.2	底部完	碁笥底削出し、口縁部肥厚	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
47図3	徳利 陶器	3.3	6.5	20.8	完	碁笥底削出し、口縁部折返し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
47図4	徳利 陶器	4.1	6.5	19.9	完	碁笥底削出し、口縁部肥厚	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
47図5	徳利 陶器	3.3	7.0	21.4	完	碁笥底削出し、口縁部肥厚	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
47図6	徳利 陶器	3.1	6.7	21.9	完	碁笥底削出し、口縁部肥厚	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
47図7	徳利 陶器	3.0	—	—	口縁部完	口縁部肥厚	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
47図8	徳利 陶器	2.9	7.2	21.0	完	高台削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
47図9	徳利 陶器	3.0	8.2	23.0	完	高台削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
48図1	徳利 陶器	3.5	8.0	21.8	完	高台削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
48図2	徳利 陶器	3.3	7.6	21.5	底部完	高台削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	
48図3	徳利 陶器	3.5	10.7	25.4	完	高台削出し	灰釉施釉、肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書

48図4	德利陶器	3.6	—	—		灰釉施釉, 肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
48図5	德利陶器	—	10.9	—	高台削出し	鉄釉施釉, 肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
48図6	德利陶器	3.4	10.5	25.1	高台削出し	灰釉施釉, 肩部に条線	瀬戸・美濃	
48図7	德利陶器	3.8	—	—		灰釉施釉, 肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
48図8	德利陶器	3.6	—	—		灰釉施釉, 肩部に条線	瀬戸・美濃	体部に釘書
49図1	德利陶器	—	10.9	—	高台削出し	灰釉施釉, 肩部に条線	瀬戸・美濃	
49図2	德利陶器	2.5	—	—	肩部に受け貼付け, 穿孔有り	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
49図3	德利陶器	—	10.0	—	底部削出し		志戸呂	底部に墨書
49図4	德利陶器	3.9	—	—	底部削出し, 口縁部肥厚	口縁部灰釉施釉	志戸呂	
49図5	德利陶器	—	10.0	—	底部削出し		志戸呂	
49図6	水注陶器	9.8	7.2	11.8	底部削出し, 体部に注口・把手貼付け	色絵外面に樹文	京都系	体部に墨書
49図7	水注陶器	11.7	7.9	14.0	高台削出し, 体部に注口・把手貼付け	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
50図1	土瓶陶器	9.7	6.9	7.6	底部削出し, 鈕貼付け	鉄釉施釉, 鈕は菊花文		
50図2	土瓶陶器	5.2	2.3	2/3				
50図2	土瓶陶器	8.0	—	—	体部に注口・双耳貼付け	鉄釉施釉, 体部にノミ彫りで斜文		
50図3	水注陶器	—	9.4	—	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	高台内墨書注口も有り
50図4	土瓶陶器	8.3	9.5	12.0	体部に注口・双耳貼付け, 底部に三足貼付け	灰釉施釉		
50図5	土瓶陶器	7.3	—	—	体部に注口・双耳貼付け	透明釉施釉, 外面に鉄・呉須で菊唐草文	京都系	
50図6	土瓶陶器	7.2	—	—	体部に注口・双耳貼付け	灰釉施釉		
50図7	土瓶陶器	7.8	9.3	10.4	体部に注口・双耳貼付け, 底部に三足貼付け			
50図8	壺陶器	19.0	—	—	口縁部肥厚し双耳貼付け	鉄釉施釉		
51図1	壺陶器	20.8	9.1	11.1	口縁部肥厚し双耳貼付け, 底部足貼付け	鉄釉施釉, 底部に印刻「音羽」銘	京都系	
51図2	仏鉢磁器	7.2	3.8	6.1	台脚底部削出し	染付, 外面に格子文	肥前	
51図3	仏鉢磁器	7.1	3.7	6.4	台脚底部削出し	染付, 外面に横線文	肥前	
51図4	仏花瓶磁器	4.8	4.8	9.5	台脚底部に回転糸切痕顕著, 肩部に双耳貼付け	口縁部灰釉, 体部鉄釉掛分	瀬戸・美濃	
51図5	蓋土器	24.4	20.0	21.6	ロクロ調整			
51図6	蓋土器	24.6	20.2	21.0	ロクロ調整, 鈕貼付け			
51図7	仏花瓶磁器	4.1	—	—				
51図7	仏花瓶磁器	1.6	5.0	12.8	高台削出し	染付, 外面に松竹梅文	肥前	
51図8	蓋土器	27.6	22.0	22.8	ロクロ調整, 鈕貼付け			
51図9	蓋土器	4.1	—	—				
51図9	蓋土器	29.4	23.4	25.0	ロクロ調整			
51図10	仏花瓶磁器	1.5	4.3	12.5	高台削出し	染付, 外面に花唐草	肥前	



報告篇第三章 江戸時代の調査 I

51図11	焙土器	31.0	—	1/4	ロクロ調整, 内耳貼付け			
51図12	焙土器	32.2	—	1/5	ロクロ調整, 内耳貼付け			
51図13	焙土器	32.2	—	1/4	ロクロ調整, 内耳貼付け			
52図1	焙土器	33.2	—	1/4	ロクロ調整			
52図2	焙土器	32.4	—	1/5	ロクロ調整			
52図3	焙土器	32.4	—	1/5	ロクロ調整, 内耳貼付け			
52図4	焙土器	32.4	—	1/3	ロクロ調整, 内耳貼付け			
52図5	焙土器	32.8	—	1/5	ロクロ調整, 内耳貼付け			
52図6	焙土器	33.0	—	1/4	ロクロ調整, 内耳貼付け			
52図7	焙土器	34.0	—	1/5	ロクロ調整, 内耳貼付け			
53図1	焙土器	33.6	—	1/5	ロクロ調整, 内耳貼付け			
53図2	植木鉢陶器	9.4	4.4	5.7	高台削出し, 底部中央穿孔 (完)	緑釉施釉, 体部下端に印刻文	瀬戸・美濃	
53図3	火鉢土器	31.0	23.0	9.5	輪積み成形, 内面指頭痕有り			
53図4	植木鉢陶器	—	10.0	—	高台に穿孔有り 底部完	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
53図5	火鉢土器	9.4	9.0	8.4	蛇ノ目高台削出し, 外面ミガキ 完	外面に赤彩		
53図6	火鉢土器	27.8	—	—	輪積み成形, 内面指頭痕顕著	瓦質		
53図7	火鉢土器	18.4	—	—	蛇ノ目高台削出し, 外面ミガキ 底部完	外面に赤彩		
53図8	火鉢土器	—	20.0	—	輪積み成形, 内面指頭痕顕著, 底部三足貼付け 底部(完)			
53図9	火鉢土器	—	9.5	—	輪積み成形, 平底, 外面ミガキ 完	瓦質, 外面に蒔目文		口唇に敲投痕
54図1	火鉢土器	23.6	17.7	12.6	輪積み成形, 底部三足貼付け 底部完	体部四方に削り痕	内面に墨書	
54図2	火鉢土器	25.4	19.4	12.3	輪積み成形, 底部に足貼付け (完)			
54図3	火鉢土器	30.8	24.6	10.0	輪積み成形, 内面に指頭痕顕著 底部三足貼付け (完)			
54図4	火鉢土器	18.8	14.2	9.4	輪積み成形, 底部三足貼付け (完)			
54図5	火鉢土器	—	13.6	—	輪積み成形, 底部に足貼付け 1/4			
54図6	火鉢土器	19.5	14.5	9.5	輪積み成形, 内面に指頭痕顕著, 底部に足貼付け 1/4			
54図7	火鉢土器	19.8	13.8	9.5	輪積み成形, 内面に指頭痕顕著, 底部に足貼付け 1/4			
55図1	火鉢土器	19.6	13.6	10.6	輪積み成形, 底部三足貼付け 1/2			
55図2	火鉢土器	16.8	—	—	輪積み成形 口縁部 1/3	瓦質, 体部に沈線, 八の字文		
55図3	火鉢土器	19.0	18.6	—	輪積み成形, 底部三足痕有り, 外面ミガキ 底部 2/3	外面赤彩, 沈線による区画内に列点文		
55図4	火鉢土器	17.8	—	—	輪積み成形 口縁部 1/3	瓦質		

55図5	火入 土器	—	12.1	—	輪積み成形, 内面指頭痕残す, 外面ミガキ	瓦質, 外面に型押しで波文	
55図6	火鉢 土器	21.0	14.2	9.9 1/3	輪積み成形, 底部三足貼付け	瓦質, 外面に蓆目文	
55図7	火入 土器	—	13.1	—	輪積み成形, 外面ミガキ	瓦質, 外面に型押しで木目文	
55図8	火鉢 土器	22.2	15.3	—	輪積み成形, 底部三足痕有り, 外面ミガキ	瓦質, 外面に沈線・八の字文	
55図9	焔炉 土器	—	14.0	—	輪積み成形, 下半に窓, 内面に棚, 底部に三足貼付け	瓦質, 体部に型押しで沈線間に唐草・他蓆目	
56図1	火鉢 土器	—	—	—	輪積み成形, 上部は丸く, 端部に小孔, 側面に窓を有する	瓦質	全面に釘書
56図2	風炉 土器	19.6	—	—	輪積み成形, 外面ミガキ, 内面に菊花状把手貼付け	瓦質, 外面に沈線と型押しで蓆目文	
56図3	風炉 土器	17.4	—	—	輪積み成形, 外面ミガキ, 小孔を有する	瓦質	
56図4	灯明皿 土器	8.2	5.0	8.0	台脚付き	透明釉施釉	
56図5	乗燭 土器	4.9	0.8	2.7	底部に回転糸切痕残す, 内面に灯芯立貼付け	透明釉施釉	
56図6	灯明皿 土器	9.4	5.4	—	台脚付き, 受部貼付け	透明釉施釉	
56図7	乗燭 土器	3.8	1.0	3.6	底部に回転糸切痕残す, 内面に灯心貼付け		
56図8	風炉 土器	21.0	23.2	—	輪積み成形, 外面ミガキ, 内面に把手・底部に足貼付け	瓦質, 外面に型押しで沈線間唐草, 他は蓆目	外面赤彩
56図9	灯明皿 土器	8.2	5.4	—	台脚付き, 受部貼付け	透明釉施釉	
56図10	乗燭 土器	7.0	—	5.0	底部に回転糸切痕残す, 内面に灯心立貼付け	透明釉施釉	
56図11	灯明皿 陶器	10.2	4.6	2.0	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃
56図12	灯明皿 陶器	10.7	4.9	2.6	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃
56図13	灯明皿 陶器	10.0	4.5	2.1	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃
56図14	灯明皿 陶器	10.7	9.8	4.3	受部貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃
56図15	灯明皿 陶器	11.2	8.4	5.1	受部貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃
57図1	灯明皿 土器	10.3	6.5	4.8	受部貼付け, 底部に回転糸切痕残す		
57図2	灯明皿 土器	9.5	6.2	3.8	受部貼付け, 底部に回転糸切痕残す	透明釉施釉	
57図3	灯明皿 土器	9.7	5.1	1.9	底部に回転糸切痕残す	透明釉施釉	
57図4	灯明皿 土器	9.1	4.8	2.1	底部に回転糸切痕残す	透明釉施釉	
57図5	灯明皿 土器	8.8	5.4	4.2	受部貼付け, 底部に回転糸切痕残す	透明釉施釉	
57図6	灯明皿 土器	10.3	7.4	4.5	受部貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃
57図7	碗 磁器	9.9	3.7	5.5	高台削出し	染付, 外面に花樹文, 高台内に「大明年製」	肥前
57図8	碗 磁器	9.6	3.7	5.3	高台削出し	染付, 外面印判で花卉文, 高台内「大明年製」銘	肥前
57図9	碗 磁器	9.4	3.5	5.5	高台削出し	染付, 外面に草花文, 高台内「大明年製」銘	肥前
57図10	碗 磁器	9.6	3.3	4.8	高台削出し	染付, 外面に梅・竹文, 高台内に渦福文	肥前

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

57図11	小碗 磁器	6.5	2.2	2.8	高台削出し (完)	染付, 外面に草文	肥前	
57図12	碗 磁器	8.9	3.6	5.1	高台削出し	染付	肥前	
57図13	皿 陶器	12.8	4.1	4.8	高台削出し 口縁部 1/4	透明釉施釉	京都系	
57図14	皿 磁器	13.4	7.1	3.3	高台削出し	染付, 内面に半菊文	肥前	
57図15	碗 磁器	12.3	4.8	8.9	高台削出し 口縁部 1/3	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
57図16	徳利 陶器	—	13.4	—	底部削出し, 肩部に段有り	口縁部鉄釉施釉	志戸呂	
58図1	碗 陶器	14.9	5.1	7.5	高台削出し 1/3	刷毛目, 外面波状文	肥前	
58図2	鉢 陶器	25.6	10.0	7.9	高台削出し, 高台は台形, 口縁部 外折, 見込に砂目	透明釉・外面下半に鉄釉施釉, 内 面に象嵌	肥前	
58図3	碗 陶器	11.3	4.8	7.4	高台削出し, 体部条線上に 指押し	外面鉄釉・内面灰釉掛分け, 疊付 に印刻	瀬戸・美濃	
58図4	碗 磁器	10.2	4.2	5.5	高台削出し (完)	染付, 外面桜花文, 高台内に銘	肥前	
58図5	碗 陶器	9.6	4.0	5.3	高台削出し	染付, 外面に草花文, 高台内に「大 明年製」	肥前	
58図6	碗 磁器	8.5	2.9	4.3	高台削出し (完)	染付, 外面に丸文	肥前	
58図7	猪口 磁器	7.9	4.9	5.8	高台削出し 1/2	染付, 外面に梅樹文	肥前	
58図8	徳利 陶器	—	10.6	—	底部削出し		志戸呂	体部に墨書
58図9	播鉢 土器	16.8	7.6	5.6	底部に回転糸切痕残す 底部完	透明釉施釉		
59図1	鬚盥 陶器	—	—	3.6	板作り成形	色絵, 外面に青で花唐草文	京都系	
59図2	仏具 磁器	6.9	3.9	5.7	台脚底部削出し 口縁部 1/3	染付, 外面に印判で桐葉文	肥前	
59図3	播鉢 陶器	—	—	—	口縁部折返し	鉄釉施釉, 播目12条か	瀬戸・美濃	
59図4	碗 磁器	7.0	3.5	5.5	高台削出し (完)	染付, 外面に格子文, 見込に印判 で五花弁	肥前	筒形
59図5	火鉢 土器	26.5	20.8	—	輪積み成形, 口縁部内面肥厚 1/4			
59図6	皿 磁器	13.4	7.7	3.7	高台削出し 底部 1/2	染付, 内面に草文か, 高台内「大 明年製」銘	肥前	口綫
59図7	碗 陶器	13.7	6.6	8.6	高台削出し, 見込に三足ピン痕 口縁部 1/4	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
59図8	皿 陶器	14.4	5.8	4.2	高台削出し 底部 1/3	透明釉施釉	肥前	
59図9	片口 陶器	17.0	4.3	10.5	高台削出し 底部完	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
59図10	徳利 陶器	—	10.6	—	高台削出し 底部(完)	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書 底部を穿孔
59図11	碗 陶器	11.1	4.9	7.1	高台削出し 底部完	透明釉施釉, 外面に鉄絵で山水文 高台内「清水」	肥前	
60図1	碗 陶器	10.8	4.4	5.8	高台削出し 底部完	刷毛目, 内外面縹線文, 高台内施 釉	肥前	
60図2	皿 磁器	12.8	7.6	3.2	高台削出し, 砂熔着 2/3	染付, 内面に草文, 見込に印判で 五花弁	肥前	
60図3	皿 陶器	12.8	4.8	3.7	高台削出し, 見込蛇ノ目釉剥ぎ, 底部完	緑釉, 外面灰釉掛分け	肥前	
60図4	皿 陶器	13.8	4.2	3.6	高台削出し, 見込蛇ノ目釉剥ぎ (完)	染付, 内面に線文	肥前	

60図5	鉢	20.8	14.5	—	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
60図6	徳利 陶器	—	—	10.4	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
60図7	焙烙 土器	31.7	—	—	ロクロ調整, 内面に内耳貼付け			
61図1	徳利 陶器	—	9.7	—	底部削出し		志呂戸	底部に墨書
61図2	徳利 陶器	4.4	6.9	19.2	碁筭底削出し, 口縁部肥厚	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
61図3	碗 陶器	—	4.2	—	高台削出し	鉄釉, 内面緑釉掛分, 高台内施釉, 外面刺突	瀬戸・美濃	鎧手
61図4	徳利 陶器	—	—	—		灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
61図5	皿 陶器	25.4	13.5	4.8	蛇ノ目高台削出し, 見込に目痕	灰釉施釉, 見込に呉須・鉄絵で唐草文	瀬戸・美濃	
62図1	小碗 磁器	—	2.4	—	高台削出し, 高台内カンナ目顕著, 胎土は緻密で白色	青花, 外面に梅花文か	中国	
62図2	碗 陶器	—	5.3	—	高台削出し	灰釉施釉, 外面呉須絵, 高台内亀甲枠に「清」	瀬戸・美濃	
62図3	碗 磁器	10.0	3.9	4.9	高台削出し	染付, 外面に梅樹文	肥前	
62図4	碗 陶器	10.0	5.1	6.4	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
62図5	碗 陶器	12.6	5.4	7.9	高台削出し 見込に三足ピン痕	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
62図6	碗 陶器	12.9	5.7	7.9	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
62図7	碗 陶器	9.9	5.1	6.4	高台削出し 見込にピン痕	外面鉄釉, 内面灰釉施釉掛分け, 体部条線上に指押し	陶器	
62図8	碗 陶器	—	3.4	—	蛇ノ目高台削出し, 体部条線下に指押し	外面鉄釉, 内面灰釉掛分け, 鉄釉上に灰釉掛け	瀬戸・美濃	
62図9	蓋物 磁器	6.9	4.4	6.4	高台削出し	染付, 外面に印判で桐葉文	肥前	
62図10	皿 陶器	13.6	8.0	3.0	高台削出し	染付, 内面に梅花文	肥前	
62図11	皿 陶器	12.7	4.2	4.7	高台削出し	透明釉施釉, 見込に山水文	肥前	
62図12	小鉢 磁器	15.0	4.6	6.7	高台削出し	染付, 内面に丸に菊文	肥前	
62図13	小鉢 磁器	14.5	—	—	口縁部外反	染付, 内面に花唐草文	肥前	
62図14	蓋物 陶器	9.1	5.2	4.4	底部回転糸切痕残る	鉄釉施釉		
63図1	播鉢 陶器	31.4	—	—	頸部が屈曲	鉄釉施釉, 播目15条	瀬戸・美濃	
63図2	水滴 磁器	5.4×	3.3	2.5	型打ち成形, 鶏形	色絵, 赤彩	肥前	
63図3	徳利 陶器	4.3	6.3	17.0	碁筭底削出し, 口縁部外反	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
63図4	徳利 陶器	3.3	6.9	17.3	碁筭底削出し, 口縁部外反	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
63図5	蓋 土器	26.0	20.0	22.0	ロクロ調整			
63図6	蓋 土器	26.3	20.0	22.0	ロクロ調整			
63図7	火鉢 土器	—	29.0	—	板組み成形, 口縁部・内面ミガキ	口縁部・内面赤彩		
64図1	碗 磁器	11.0	4.6	6.1	高台削出し	染付, 外面に松文	肥前	

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

64図2	碗 磁器	10.8	4.4	6.1	高台削出し	染付, 外面に松文	肥前	
64図3	碗 磁器	14.8	4.6	6.3	高台削出し	白磁, 口錆	肥前	被熱
64図4	小碗 磁器	5.4	2.6	3.3	高台削出し	染付	肥前	
64図5	碗 磁器	14.9	4.6	6.9	高台削出し	白磁	肥前	被熱
64図6	碗 磁器	15.4	4.6	6.6	高台削出し	白磁	肥前	
64図7	小鉢 磁器	11.8	—	—	口縁部緩く外反, 体部にロクロ痕 明瞭	白磁	肥前	被熱
64図8	碗 陶器	9.1	5.0	5.6	高台削出し	透明釉施釉, 外面に鉄絵で山水文, 高台内印刻「森」	肥前	被熱
64図9	碗 陶器	—	4.0	—	高台削出し	透明釉施釉, 外面に刷毛目		
64図10	碗 陶器	8.0	—	—		透明釉施釉, 外面に刷毛目と鉄絵 で松林		
64図11	碗 陶器	9.4	4.1	8.8	高台削出し	透明釉施釉, 外面に刷毛目		
64図12	碗 陶器	7.3	4.5	10.3	高台削出し	透明釉施釉, 外面に刷毛目と抽象 文で雲水文		
64図13	碗 陶器	10.2	3.9	8.4	高台削出し	透明釉施釉, 外面に呉須で宝珠文		
64図14	碗 陶器	9.8	3.7	8.1	高台削出し	透明釉施釉, 外面に象嵌で葉文		
64図15	碗 陶器	10.2	4.0	8.7	高台削出し	透明釉施釉, 外面に象嵌で竹文		
64図16	碗 陶器	10.4	3.8	8.5	高台削出し, 口縁部一部内湾	透明釉施釉, 外面に刷毛目		
64図17	碗 陶器	10.7	3.9	8.2	高台削出し	透明釉施釉, 外面に刷毛目		
64図18	碗 陶器	10.0	4.0	8.4	高台削出し	透明釉施釉, 外面に刷毛目		被熱
64図19	碗 陶器	10.4	4.1	8.4	高台削出し	透明釉施釉		
64図20	碗 陶器	10.2	3.8	7.8	高台削出し	透明釉施釉, 外面に刷毛目		
65図1	碗 陶器	10.1	3.9	8.8	高台削出し	透明釉施釉, 外面に刷毛目		
65図2	碗 陶器	10.0	4.0	7.7	高台削出し	透明釉施釉		
65図3	碗 陶器	9.7	4.0	7.6	高台削出し	透明釉施釉, 外面に呉須で和歌書 き		
65図4	碗 陶器	10.2	3.8	8.1	高台削出し	透明釉施釉, 外面に鉄絵		
65図5	碗 陶器	10.2	3.9	7.6	高台削出し	透明釉施釉, 外面に鉄絵		
65図6	碗 陶器	9.9	4.6	7.3	高台削出し	透明釉施釉, 外面に呉須で和歌書 き		
65図7	碗 陶器	9.2	4.6	7.3	高台削出し	透明釉施釉		被熱
65図8	碗 陶器	10.7	4.2	6.7	高台削出し	透明釉施釉外面に鉄絵		
65図9	碗 陶器	10.0	4.3	6.7	高台削出し	透明釉施釉, 外面に呉須で和歌書 き		
65図10	碗 陶器	10.3	4.4	7.1	高台削出し	透明釉施釉, 外面に鉄絵で垣根		被熱
65図11	碗 陶器	9.4	—	—		透明釉施釉, 外面に呉須で和歌書 き		

65図12	碗	—	4.3	—	高台削出し	透明釉施釉，外面に呉須で和歌書き		
	陶器			底部完				
65図13	碗	11.2	3.8	7.5	高台削出し	透明釉施釉，外面に鉄絵で秋草文		
	陶器			底部完				
65図14	碗	11.0	4.0	7.3	高台削出し	透明釉施釉，外面に刷毛目		
	陶器			底部完				
65図15	碗	11.0	—	—		透明釉施釉		被熱
	陶器			1/2				
65図16	碗	10.0	4.2	7.3	高台削出し，口縁部方形	透明釉施釉，外面に刷毛目		
	陶器			底部完				
65図17	碗	10.0	4.0	6.4	高台削出し	透明釉施釉		
	陶器			(完)				
66図1	碗	10.8	—	—	体部中位に稜有り	透明釉施釉，外面に刷毛目		
	陶器			1/2				
66図2	碗	11.6	4.5	5.7	高台削出し	透明釉，高台内も施釉，内外面螺旋状刷毛目	京都系	
	陶器			2/3				
66図3	碗	12.8	4.2	7.1	蛇ノ目高台出し，壘付き目痕	透明釉，高台内も施釉，高台内に印刻痕	京都系	
	陶器			1/2				
66図4	碗	12.4	4.2	5.1	蛇ノ目高台削出し	透明釉，高台内も施釉，高台内に印刻「朝日」銘	京都系	被熱著しい
	陶器			3/4				
66図5	皿	27.5	16.0	4.5	高台削出し，折縁	染付，内面唐草文	肥前	被熱
	磁器			1/2				
66図6	皿	25.6	15.0	3.3	高台削出し	染付，内面墨弾き波文，見込葉文，高台内銘有り	肥前	
	磁器			口縁部	1/3			
66図7	皿	13.8	9.2	3.2	高台削出し，口縁部輪花状，高台内にハリ痕	染付，見込に梅樹文	肥前	
	磁器			2/3				
66図8	皿	13.8	8.4	3.8	高台削出し，口縁部輪花状，高台内にハリ痕	染付，内面菊唐草文と五弁花，高台内「大明成化年製」	肥前	
	磁器			2/3				
66図9	皿	13.8	8.4	3.8	高台削出し，口縁部輪花状，高台内にハリ痕	染付，内面菊唐草文と五弁花高台内「大明成化年製」	肥前	被熱
	磁器			2/3				
67図1	皿	13.0	7.0	3.4	高台削出し	染付，内面に唐草文，見込に印判	肥前	
	陶器			2/3		で五弁花		
67図2	皿	13.0	7.8	3.0	高台削出し	染付，内面に唐草文，見込に印判	肥前	
	磁器			1/3		で五弁花		
67図3	皿	12.0	6.2	3.7	高台削出し，口縁部輪花状	染付，内面に渦巻文	肥前	被熱
	磁器			2/3				
67図4	皿	10.6	8.0	2.7	高台削出し	白磁，口銹有り	肥前	
	磁器			底部(完)				
67図5	皿	13.2	8.0	2.7	高台削出し	染付，内面に墨弾きで波文	肥前	
	磁器			1/3				
67図6	皿	—	7.8	—	高台削出し	染付，内面に梅樹文，見込に花文	肥前	
	磁器			2/3				
67図7	皿	12.0	4.3	3.4	高台削出し，見込蛇ノ目釉剥ぎ	緑釉・外面透明釉掛分け	肥前	被熱
	陶器			1/2				
67図8	皿	19.8	6.0	5.4	高台削出し，見込蛇ノ目釉剥ぎ，口縁部輪花状	緑釉・外面透明釉掛分	肥前	被熱
	陶器			1/2				
67図9	皿	—	5.0	—	高台削出し	透明釉施釉，見込鉄絵で山水文，高台内印刻「木下弥」	肥前	
	陶器			底部	2/3			
67図10	皿	12.4	5.8	2.8	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
	陶器			1/3				
67図11	小碗	7.0	3.5	4.8	高台削出し	白磁	肥前	被熱
	磁器			底部完				
67図12	猪口	5.7	2.3	3.3	萁筒底削出し	白磁 口銹	肥前	内面被熱
	磁器			1/3				
67図13	猪口	7.9	4.2	5.6	萁筒底削出し		肥前	
	磁器			(完)				
67図14	同上蓋	12.8	11.5	11.2	かえり付き	染付，外面に鶴に草文	肥前	
	磁器			1/3				
67図15	蓋物蓋	11.5	10.2	10.0	かえり付き	染付，外面に同心円丈	肥前	被熱
	磁器			1/3				

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

67図16	小磁器	—	5.4	—	高台削出し	白磁	肥前	
				底部完				
67図17	蓋物磁器	12.2	7.0	6.2	高台削出し	染付, 外面に鶴に草文	肥前	
				2/3				
67図18	蓋物磁器	9.8	5.8	7.8	高台削出し	染付, 外面に円心円文	肥前	被熱
				(完)				
68図1	蓋物磁器	10.6	9.0	8.2	かえり・環状鈕付き	色絵, 外面に赤・青・金で松文	肥前	被熱
				1/3				
68図2	磁器	16.0	8.0	6.9	高台削出し	染付, 内面に摺絵で雪輪文, 見込に五弁花, 高台内角幅	肥前	
				2/3				
68図3	蓋物磁器	8.8	4.8	7.2	高台削出し	色絵, 外面に赤・青・金で松文	肥前	被熱
				1/3				
68図4	鉢磁器	21.4	—	—	高台削出し	青磁	肥前	
				1/3				
68図5	鉢磁器	18.4	8.5	8.5	高台削出し, 体部型打ちで五弁花	青磁	肥前	被熱
				(完)				
68図6	小鉢陶器	14.6	9.3	5.1	高台削出し, 見込蛇ノ目釉剥ぎ	灰釉施釉, 内外面・見込に摺絵で菊花文	瀬戸・美濃	御深井系, 被熱
				3/4				
68図7	小鉢陶器	24.0	10.2	6.9	高台削出し, 見込に胎土目, 有段	透明釉施釉	肥前	被熱
				3/4				
69図1	陶器	20.6	—	—		外面透明釉, 内面緑釉掛分け	肥前	
				1/3				
69図2	鉢陶器	34.8	13.6	11.5	高台削出し, 見込に砂目	透明釉施釉	肥前	
				底部 3/4				
69図3	鉢陶器	13.4	—	—		口縁部灰釉施釉	志戸呂系	被熱
				口縁部 3/4				
69図4	鉢陶器	19.2	11.2	9.0	底部削出し		備前系	
				1/2				
69図5	片口陶器	17.3	9.7	10.5	高台削出し, 見込に目痕3ヶ所	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	被熱
				底部(完)				
69図6	片口陶器	18.7	9.8	11.2	高台削出し, 見込に三足ピン痕		瀬戸・美濃	被熱
				(完)				
70図1	片口陶器	—	10.4	—	底部削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	被熱
				1/2				
70図2	播鉢陶器	—	—	—	口縁三角状	播目7条	信楽系	
70図3	播鉢陶器	37.0	16.6	15.8	口縁帯に二条線	播目9条	信楽系	
				(完)				
70図4	播鉢陶器	32.8	13.2	14.9	底部に回転糸切痕残す	鉄釉施釉, 播目19条	瀬戸・美濃	被熱
				底部完				
71図1	播鉢陶器	33.0	13.6	15.1	底部に回転糸切痕残す	鉄釉施釉, 播目15条	瀬戸・美濃	
				1/3				
71図2	同上蓋磁器	8.1	6.3	5.5	かえり・鈕付き	染付, 外面に牡丹唐草文	肥前	
				(完)				
71図3	壺磁器	7.2	6.2	10.6	高台削出し	染付, 外面に牡丹唐草文	肥前	
				口縁部(完)				
71図4	壺磁器	7.4	6.8	16.1	高台削出し	染付, 外面に鳳凰文	肥前	被熱
				体部(完)				
71図5	壺蓋磁器	9.1	7.4	6.9	かえり・鈕付き	染付, 外面に梅樹文	肥前	
				3/4				
71図6	壺磁器	7.6	8.0	13.2	高台削出し	染付, 外面に梅樹文	肥前	
				体部(完)				
71図7	壺蓋磁器	8.8	7.6	6.6	かえり・鈕付き	白磁	肥前	
				(完)				
71図8	壺磁器	8.2	6.4	14.1	高台削出し	白磁	肥前	被熱
				(完)				
71図9	壺磁器	4.8	4.3	8.5	高台削出し	染付, 外面に草文	被熱	
				底部 1/4				
71図10	壺陶器	9.0	9.6	21.8	高台削出し, 肩部に四耳貼付け	鉄釉施釉	信楽系	
				(完)				

72図1	壺 陶器	8.4	9.8	23.0 (完)	底部削出し, 肩部に四耳貼付け	鉄釉施釉	信楽系	
72図2	壺 陶器	8.6	10.8	24.7 (完)	底部削出し, 肩部に四耳貼付け	鉄釉施釉	信楽系	
72図3	壺 陶器	12.1	7.2	2.9 (完)	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	被熱
72図4	壺 陶器	6.2	5.2	3.1 完	底部に回転糸切痕残す	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	被熱
72図5	壺 陶器	9.0	10.8	29.6 (完)	底部削出し, 肩部に四耳貼付け	鉄釉施釉		
72図6	徳利 陶器	3.8	8.3	20.9 (完)	高台削出し, 口縁部外反し折返し	鉄釉施釉後灰釉掛け, 肩と頸部に 条線	瀬戸・美濃	被熱
73図1	徳利 陶器	—	9.6	—	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛け	瀬戸・美濃	
73図2	徳利 陶器	3.6	6.4	—	碁箱底削出し 口縁部完	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
73図3	徳利 陶器	3.7	11.4	27.9 (完)	底部削出し	口縁部鉄釉施釉	志戸呂	被熱
73図4	徳利 陶器	3.0	8.0	23.0 底部 1/2	底部削出し, 体部にへこみ三ヶ所	底部に印刻で丸棒に「万」銘	備前系	
73図5	徳利 陶器	—	7.8	—	底部削出し	底部に印刻で丸棒に「井」銘	備前系	
73図6	風炉 陶器	—	10.0	—	高台削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
73図7	徳利 陶器	3.0	9.2	24.0 底部 1/3	底部削出し		備前系	
74図1	粟 陶器	—	—	—	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
74図2	花生 陶器	8.6	8.3	14.7 底部完	内面指頭痕, 胎土砂粒含み淡褐色	鉄釉施釉	京都系	被熱
74図3	花生 陶器	33.1× 12.2	18.2 14.1	19.0 (完)	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	被熱
74図4	茶洗 陶器	4.1	4.9	8.2 完	高台削出し	透明釉施釉		
74図5	小鉢 土器	14.0	—	—	ロクロ痕顕著			
74図6	小鉢 土器	12.4	13.3	8.7 2/3	体部中位でくびれる。腰部削り			
75図1	小鉢 土器	10.9	—	—	隅丸方形	体部一面に菊花印刻		
75図2	風呂 土器	12.4	21.4	16.0 1/3	輪積み成形			
75図3	器台 土器	5.8	5.3	4.6 (完)		透明釉施釉		被熱
75図4	風口 土器	14.1	9.0	22.4 1/3	板組み成形, 上面に円孔, 側短面 に方形孔有り			
75図5	仏餉 磁器	9.0	5.0	7.3 底部完	台脚底部削出し	白磁	肥前	
75図6	碗 磁器	6.8	2.8	4.6 (完)	高台削出し, 口縁部外反	色絵, 外面に赤で一重網目文	肥前	被熱
75図7	碗 磁器	7.0	2.9	4.7 底部完	高台削出し, 口縁部外反	色絵, 外面に赤で一重網目文	肥前	被熱
75図8	碗 磁器	6.8	2.9	4.8 底部完	高台削出し, 口縁部外反	色絵, 外面に赤で一重網目文	肥前	
75図9	碗 磁器	8.0	3.6	5.2 1/3	高台削出し	染付, 外面に草に蝶文	被熱	
75図10	碗 磁器	9.9	3.8	4.9 2/3	体部型打ち成形で八角形, 高台削 出し	染付, 外面に山水文	肥前	被熱著しい
75図11	碗 磁器	9.3	3.8	4.8 底部完	体部型打ち成形で八角形, 高台削 出し	染付, 外面に山水文	肥前	被熱



報告篇第三章 江戸時代の調査 I

75図12	碗 磁器	9.3	3.4	4.9	底部型打ち成形で八角形, 高台削出し	染付, 外面き山水文	肥前	被熱著しい
76図1	小鉢 陶器	11.5	5.0	5.3	高台削出し	透明釉施釉	肥前	被熱
76図2	小鉢 陶器	11.6	5.0	5.0	高台削出し	透明釉施釉	肥前	被熱
76図3	小鉢 陶器	11.8	4.9	5.2	高台削出し	透明釉施釉, 内面呉須で草文, 高台内印刻「清水」銘	肥前	被熱
76図4	碗 陶器	10.0	—	—	口縁部 1/4	透明釉施釉, 外面鉄絵で山水文	肥前	被熱著しい
76図5	碗 陶器	13.8	5.2	7.7	高台削出し	透明釉施釉	肥前系	被熱著しい
78図6	小鉢 陶器	—	5.1	—	高台削出し	透明釉施釉, 内面呉須で草文, 高台内印刻「清水」銘	肥前	被熱
76図7	小碗 磁器	6.4	3.3	—	高台削出し, 口縁部輪花状	白磁	肥前	
76図8	小鉢 磁器	9.0	—	—	高台削出し	染付, 不明	肥前	被熱著しい
76図9	小碗 磁器	7.8	5.5	4.8	高台削出し	染付, 外面に草文	肥前	
76図10	皿 磁器	9.5	2.2	2.7	高台削出し	染付, 見込に雲水文	肥前	
76図11	皿 磁器	8.9	3.8	2.6	高台削出し	染付, 見込に雲水文	肥前	
76図12	皿 磁器	20.7	9.9	5.9	高台削出し, 見込にハリ痕	染付, 見込に樹文	肥前	
77図1	皿 磁器	15.2	7.0	2.2	型打ち成形で輪花	染付, 見込に草と蝶文, 口綫	肥前	被熱
77図2	皿 磁器	11.4	7.1	2.1	高台削出し	染付, 見込に蕪文	肥前	被熱
77図3	皿 磁器	11.5	7.2	2.1	高台削出し	染付, 見込に蕪文	肥前	被熱
77図4	皿 磁器	—	—	—	型打ち成形で輪花, 変形高台貼付け	染付, 見込に草文	肥前	
77図5	皿 磁器	14.2	8.8	3.1	高台削出し	染付, 内面に花と鳥文, 高台内に角福銘	肥前	
77図6	皿 磁器	14.2	8.4	3.3	高台削出し	染付, 内面に花と鳥文, 高台内に角福銘	肥前	被熱
77図7	皿 磁器	14.2	8.6	3.3	高台削出し	染付, 内面に花と鳥文, 高台内に角福銘	肥前	被熱
77図8	皿 磁器	7.0	2.9	2.1	高台削出し	染付, 見込に「大明成化年製」銘	肥前	
77図9	皿 磁器	6.8	3.0	2.1	高台削出し	染付, 見込に「製」銘	肥前	77図8と同種
77図10	皿 磁器	14.6	5.2	4.0	高台削出し	白磁	肥前	
77図11	皿 磁器	15.0	—	—	口縁部 1/4	白磁	肥前	
78図1	皿 磁器	13.6	8.0	3.2	高台削出し, 見込高台内にピン痕	長石釉施釉	瀬戸・美濃	
78図2	蓋物 磁器	8.7	7.8	—	受け付き	色絵, 青・金?で波文か	肥前	被熱
78図3	播鉢 陶器	—	—	—	頸部強く屈曲	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
78図4	皿 磁器	15.0	—	—	口縁部 1/3	白磁, 内面型打ちで文字と花文	肥前	被熱
78図5	壺 陶器	—	6.7	—	高台削出し	染付, 外面に山水文か	肥前	
78図6	壺 磁器	7.5	5.7	5.0	かえり付き	染付, 外面に山水文か	肥前	被熱

78図7	蓋 磁器	8.0 2.0	6.8 完	3.3 完	底部削出し	鉄釉施釉後	瀬戸・美濃	
78図8	蓋 磁器	9.2	8.1	7.6 1/3	かえり付き	染付, 外面に松文か	肥前	
78図9	同上蓋 陶器	10.4	5.5	5.3 (完)	底部に回転糸切痕残す	鉄釉施釉	志戸呂	
78図10	壺 陶器	10.0	13.6	27.1 1/4	底部削出し, 肩部に耳付き	鉄釉施釉	志戸呂	被熱
78図11	壺 陶器	—	10.8	— 1/4	底部削出し	鉄釉施釉	信楽系	
78図12	仏花瓶 磁器	—	6.1	— 1/4	蛇ノ目高台削出し	染付	肥前	
79図1	焙烙 土器	26.8	6.8	— 1/3	ロクロ調整			
79図2	碗 陶器	12.4	5.6	8.3 (完)	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
79図3	火鉢 土器	22.4	17.7	9.2 完	輪積み成形			
79図4	碗 磁器	6.0	2.4	2.6 1/3	高台削出し	染付, 外面に若葉重ね文	肥前	
79図5	碗 磁器	8.7	3.4	4.8 完	高台削出し	染付, 外面に摺絵で雨降文, 高台内に「大明年製」銘	肥前	
79図6	碗 磁器	8.7	3.4	4.6 底部完	高台削出し	染付, 外面に草木文, 高台内に「大明年製」	肥前	
79図7	碗 磁器	9.9	3.7	4.9 底部完	高台削出し	染付, 外面に松竹文	肥前	
79図8	碗 陶器	12.7	3.8	5.0 底部(完)	高台削出し	透明釉施釉	肥前	
79図9	碗 磁器	13.9	5.8	7.2 (完)	高台削出し	染付, 外面草花文	肥前	
79図10	碗 陶器	9.9	3.1	5.9 (完)	高台削出し	色絵	京都系	
79図11	蓋 磁器	11.6	9.8	— 1/2		白磁	肥前	
79図12	碗 陶器	10.7	4.9	7.5 底部完	高台削出し	染付, 外面に唐草文	肥前	
79図13	碗 磁器	9.6	3.8	5.4 底部 3/4	高台削出し	染付, 外面に丸文, 高台内に渦福文	肥前	
79図14	碗 陶器	—	4.2	— 底部完	高台削出し	灰釉施釉		
79図15	碗 磁器	—	4.4	— 底部 1/3	高台削出し	染付, 外面に摺絵で桜文	肥前	
79図16	皿 磁器	—	—	—		色絵, 内面に赤で葉文	肥前	柿右衛門窯系, 木瓜形
80図1	皿 磁器	14.1	7.8	4.7 底部 2/3	高台削出し	染付, 内面に唐草文と五弁花, 高台内に渦福銘か	肥前	
80図2	皿 磁器	—	6.8	— 1/3	高台削出し	染付, 内面に日の字鳳凰文か	肥前	
80図3	蓋 磁器	12.5	11.2	10.7 1/3	かえり付き	染付, 外面に牡丹文	肥前	被熱
80図4	鉢 陶器	32.9	—	— 1/3	折縁	透明釉施釉, 内面に象嵌	肥前	被熱
80図5	壺 磁器	—	6.5	— 底部完	高台削出し	染付	肥前	
80図6	蓋物 磁器	8.5	—	— 1/3		染付, 口縁部内面釉剥ぎ, 外面に帆掛船	肥前	
30図7	小碗 磁器	6.6	2.6	2.9 (完)	高台削出し	染付, 外面に羽子板と羽文	肥前	
80図8	仏花瓶 磁器	—	4.5	— 底部完	碁笥底	染付, 外面に笹文	肥前	

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

80図9	碗 陶器	—	4.8	—	高台削出し	灰釉施釉		呉須手
				底部完				
80図10	碗 磁器	9.5	3.5	5.0	高台削出し	染付, 外面に山水文	肥前	
				1/3				
80図11	蓋 陶器	3.7	3.2	1.0	底部回転糸切痕残す		瀬戸・美濃	
				完				
80図12	碗 磁器	11.2	5.5	7.3	高台削出し	染付, 外面に山水文	肥前	
				底部完				
80図13	播鉢 陶器	—	10.0	—	底部に回転糸切痕残す	鉾釉施釉, 播目7条		
				底部 1/2				
81図1	皿 磁器	19.8	12.2	5.0	高台削出し	染付, 内面に草文	肥前	
				1/5				
81図2	香炉 陶器	16.0	9.9	5.5	高台削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
				1/2				
81図3	碗 陶器	9.7	—	—	口縁外反	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
				1/2				
81図4	香炉 磁器	7.8	4.9	4.9	底部に足貼付け	染付, 外面に菊花文	肥前	
				1/4				
81図5	播鉢 陶器	—	—	—	口縁部に二条線, 口唇はやや平坦	播目9条	備前系	
				—				
81図6	碗 磁器	10.1	4.1	5.4	高台削出し	染付, 外面に印判で菊花と桐葉文	肥前	
				底部完				
81図7	碗 磁器	9.8	3.7	5.4	高台削出し	染付, 外面に印判で菊花文, 高台内「大明年製」銘	肥前	
				口縁部 1/4				
81図8	播鉢 陶器	—	—	—	口縁部に二条線	口縁部内面に印判, 扇枠に「上中」, 播目7条か	備前系	
				—				
81図9	碗 磁器	10.1	4.4	5.5	高台削出し	染付, 外面に葉文	肥前	
				口縁部 2/3				
81図10	碗 磁器	9.7	3.3	5.2	高台削出し	染付, 外面に梅樹文	肥前	
				口縁部 1/3				
81図11	皿 磁器	—	—	—	口縁部外折	青花	中国	
				—				
81図12	碗 磁器	6.1	2.5	2.7	高台削出し	染付, 外面に印判で草花文	肥前	
				1/2				
81図13	碗 磁器	6.7	3.1	2.8	高台削出し	白磁	肥前	
				口縁部 3/4				
81図14	皿 陶器	13.2	4.8	4.8	高台削出し	透明釉施釉, 見込に鉄絵で山水文	肥前	
				1/3				
81図15	碗 陶器	10.8	4.6	6.4	高台削出し	高台内施釉, 刷毛目外面波状文	肥前	
				口縁部 3/4				
81図16	皿 磁器	13.4	8.4	2.9	高台削出し	透明釉施釉, 内面に墨弾き雲文, 見込に印判で五弁花	肥前	
				口縁部 1/3				
81図17	蓋物 磁器	7.3	3.8	3.9	蛇ノ目高台削出し	染付, 外面に草文	肥前	
				口縁部 2/3				
82図1	皿 磁器	13.0	6.6	3.0	高台削出し, 見込蛇ノ目釉剥ぎ	染付, 内面に唐草文	肥前	口銹
				1/4				
82図2	灯明皿 陶器	—	7.4	4.5	受け付き, 底部削出し	灰釉施釉		
				1/3				
82図3	灯明皿 土器	10.6	6.8	5.2	受け付き, 底部に回転糸切痕残す		肥前	
				1/3				
82図4	皿 磁器	16.4	—	—	口縁外反	青磁, 内面に渦巻文	肥前	
				1/3				
82図5	德利 陶器	3.3	—	—		灰釉施釉	志戸呂	
				口縁部完				
82図6	壺 磁器	—	10.6	—	高台削出し	白磁	肥前	
				底部完				
82図7	德利 陶器	—	10.8	—	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
				底部完				
83図1	碗 磁器	9.7	3.5	5.9	高台削出し	染付, 外面に唐草文	瀬戸・美濃	
				1/2				

83図2	碗 陶器	— 5.2 —	—	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
83図3	鉢 陶器	5.3 4.0 2.9	底部完	体部に把手貼付け	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
83図4	灯明皿 土器	11.9 8.4 6.5	—	受け付き、底部に回転糸切痕残す			
83図5	小鉢 陶器	— 4.1 —	—	高台削出し	透明釉施釉、内面に鉄絵		
83図6	碗 磁器	9.8 3.5 5.1	—	高台削出し	染付、外面に葉文	肥前	
83図7	碗 陶器	9.7 5.6 6.7	—	高台削出し	透明釉施釉、鉄絵で山水文、高台	肥前	
83図8	碗 陶器	11.0 5.2 6.7	口縁部 1/4	高台削出し	透明釉施釉、鉄絵で山水文、高台	肥前	
83図9	碗 陶器	10.8 5.8 6.7	口縁部 1/3	高台削出し	透明釉施釉、鉄絵で山水文、高台	肥前	
83図10	碗 陶器	— 5.6 —	—	高台削出し	透明釉施釉、鉄絵で山水文、高台	肥前	
83図11	碗 陶器	— 4.9 —	底部完	高台削出し	透明釉施釉	肥前	
83図12	碗 陶器	— 5.7 —	—	高台削出し	透明釉施釉、高台内印刻で「雲」	肥前	
83図13	碗 陶器	6.8 5.7 3.6	—	高台削出し 内面に沈線有り	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
83図14	碗 陶器	11.4 4.9 7.8	—	高台削出し	透明釉施釉	肥前	呉須手
83図15	碗 陶器	7.7 4.2 4.7	口縁部 1/4	高台削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
83図16	小碗 磁器	6.4 3.0 3.5	—	高台削出し、口縁部外反、砂塔着	白磁	肥前	
83図17	碗 陶器	9.2 5.1 7.2	—	蛇ノ目高台削出し、砂塔着	左右に鉄釉、灰釉掛分	志戸呂	
83図18	皿 磁器	— 5.6 —	—	高台削出し	染付、高台内に「年製」銘	肥前	
83図19	皿 磁器	8.0 3.0 2.3	—	高台削出し	染付、見込に角福銘	肥前	
83図20	皿 陶器	14.2 6.3 2.7	口縁部 1/3	高台削出し、口縁部外折し方形、各辺に透孔	灰釉施釉		
84図1	皿 陶器	13.4 5.5 3.8	—	高台削出し、口縁部一部内湾、透孔有り	灰釉施釉		
84図2	皿 陶器	— 4.1 —	—	高台削出し	透明釉施釉、高台内印刻、円杵に「御室」銘	京都系	
84図3	皿 陶器	— 6.2 —	—	高台削出し、見込蛇ノ目釉剥ぎ、中央凹面	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
84図4	壺 磁器	9.0 8.6 8.2	—	かえり付き、把手痕有り	染付、外面に唐草文	肥前	
84図5	皿 磁器	— — —	—	高台削出し	瑠璃釉施釉、白抜き	中国	明朝宣徳か
84図6	壺 磁器	8.7 6.3 5.3	—	かえり、ボタン状紐付き	青磁	肥前	
84図7	壺 陶器	4.3 3.6 1.8	—	肩部削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
84図8	壺 磁器	11.3 10.4 10.2	—	かえり付き	染付、外面に菊水文	肥前	
84図9	蓋 陶器	5.1× 5.8 —	—	長方形板状、把手痕4ヶ所	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
84図10	播鉢 陶器	34.8 — —	—	頸部屈曲し口縁部折返し	鉄釉施釉、播目12条	瀬戸・美濃	
84図11	水注 陶器	— 8.2 —	—	高台削出し、注口貼付け	灰釉施釉後鉄釉掛け	瀬戸・美濃	

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

84図12	焙 土 器	27.3	—	—	1/4	ロクロ調整				
84図13	仏 鉢 磁 器	8.5	4.0	6.1	底部完	台脚底部削出し	染付, 外面に草文	肥前		
84図14	焙 土 器	27.0	—	—	口縁部 2/3	ロクロ調整				
85図1	火 鉢 土 器	35.0	22.5	23.2	×22.6 11.7 1/3	板組み成形				
85図2	火 鉢 土 器	—	—	—	—	輪積み成形, 口縁内側折返	外面に獣面貼付け			
86図1	碗 磁 器	9.8	3.8	5.1	底部 1/3	高台削出し 口縁部外反	色絵, 外面窓枠に桃で梅文, 地は赤彩	中国	清朝, 被熱	
86図2	小 碗 磁 器	—	—	—	—	口縁部片	青花, 口鏽	中国		
86図3	皿 磁 器	—	7.1	—	底部 1/5	高台削出し	青花	中国	芙蓉手	
86図4	碗 磁 器	6.9	3.4	4.1	完	高台削出し, 口縁部外反	青花, 外面に靈芝文, 高台内に「宣徳年製」銘	中国	清朝	
86図5	皿 磁 器	—	10.2	—	底部 1/2	高台削出し, 砂溶着	青花, 見込に雲鶴文, 高台内に角福銘	中国	被熱	
86図6	皿 磁 器	—	—	—	—	高台削出し, 砂溶着	青花	中国	芙蓉手, 景德鎮窯か	
86図7	皿 磁 器	—	—	—	—	高台削出し	青花	中国	呉須手	
86図8	碗 陶 器	—	4.6	—	底部完	高台削出し	高台内鉄釉・内面灰釉掛分, 疊付に印刻丸枠に「新山」	瀬戸・美濃		
86図9	碗 陶 器	10.8	4.8	7.3	1/3	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	高台側面に墨書	
86図10	碗 陶 器	9.2	3.6	5.1	3/4	高台削出し	透明釉施釉, 外面に鉄絵で若松文	京都系	高台内墨書	
86図11	碗 陶 器	9.2	4.0	5.7	3/4	高台削出し	透明釉施釉, 外面に鉄絵で若松文	京都系	高台内墨書	
86図12	碗 陶 器	—	4.4	—	底部完	高台削出し, 砂目	高台内施釉		呉須手	
86図13	皿 陶 器	—	8.7	—	底部完	高台削出し	透明釉施釉, 見込鉄絵で山水文, 高台内印刻「森」銘	肥前		
86図14	碗 陶 器	—	4.4	—	底部完	高台削出し	緑釉施釉	瀬戸・美濃	高台内墨書	
86図15	皿 陶 器	12.1	6.2	1.9	3/4	高台削出し	白釉施釉, 底部に鉄絵	京都系	楽焼か	
86図16	播 鉢 陶 器	—	—	—	—	口縁帯	口縁部に印刻, 扇枠に「中」, 播目10条か	備前系		
86図17	灯 火 土 器	5.4	4.5	1.3	完	ロクロ調整, 中央に穿孔し銅製芯立を挿入				

## (2) かわらけ

本項で取り扱う「かわらけ」とは、灯明具または供膳具と考えられる小型（口径20cm以内）の素焼きの土器のことである。概ね口径に比べて器高の小さい（1/3以下）皿型を呈する。一部器高の大きい碗型を呈するものもあるが、胎土、調整等が皿型のものの一部と一致すること、別項を設けるには2個体と少数であること等により、本項に含めた。

本地区の大型の土坑には最高で推定400個体以上にも及ぶかわらけが単一の層から纏まって出土しているものもあり、短期間の組み合わせが知られる好資料であると思われる。本項ではこのような共伴関係が見やすいように、実測図は底部、体部共1/2以上遺存している個体の内の約半数をランダムに抽出して、特に大型の土坑出土のものは1枚の図版に、その他のものも遺構毎に纏めるようにした。しかしながら、底部の糸切り痕は変異に乏しいため、第四章に1類1個体に限って文学部地区出土のものと併せて底部の拓本を載せた（表18、第400図）。拓本と実測図は別個に選択したため実測図が載せられていない個体の拓本もあるが各遺構各類最低一個の実測図を載せているので同一遺構内のほぼ同法量の個体を参照して頂きたい。

本地区出土のかわらけは、調整でA、Bの2類に大別され、器形でB類がI～IIIの3類に、法量でA I類がa～n、B I類がa～eの5類に細別され、更に細部の特徴で分けられる種類もある。以下はその概要である。なお、236-1は第236図1の意味である。

A類は、底面が回転糸切り（殆どが左回転、稀に中心糸切り、極稀に右回転）のまま、体部内外面及び底部内面が回転ナデ調整されるもので、本地点では皿型を呈するA I類のみ出土であるが、法量ではa～nの14類に細分される。

A I a類(236-1)：口径5.6～5.8cm，底径3.3～3.7cm，器高1.2～1.4cmで、ほぼ平底の底部から短く直線的に立ち上がる。底部内面は平らに近く、中央がやや窪む。体部下端と底面は明瞭な稜をなす。

A I b類(236-2, 237-1, 240-37)：口径6.0～6.5cm，底部3.1～3.7cm，器高1.2～1.5cmで、ほぼ平底の底部からやや丸みを持って立ち上がる。底部内面は僅かに凹凸があるものと、I a類と同様に平らに近くて中央がやや窪むものがある。

A I c類(236-3, 238-2, 3, 240-24)：口径7.7～8.3cm，底部3.6～4.4cm，器高1.6～2.0cmで、ほぼ平底または僅かに上底気味の底部から直接的又は外反気味に立ち上がる。底部内面はやや凹凸があるもの、平らに近いもの、中央が窪むものと多様である。

A I d類：口径9.5～11.3cm，底径4.8～6.3cm，器高1.7～2.4cmで、ほぼ平底または僅かに上底気味の底部からやや丸みを持って立ち上がるもの(236-4～6, 237-2～5, 238-4～8, 239-1～6)と、底径がやや小、器高がやや大で外反気味に立ち上がるもの(236-7～38, 237-41, 238-9～32, 49～60, 239-7～46, 240-1～5, 19～22, 25～31)の2

種がある。底部内面は中央と周囲が高く、その間と体部との境が凹むという二重の同心円状の凹凸が見られる。

A I e 類(238—33, 239—47)：口径12.3～12.7cm, 底径7.2～7.9cm, 器高2.5～2.8cm で、やや上底気味の底部から直線的に立ち上がる。底部内面中央から右回りに渦巻状の凹凸が見られる。

A I f 類(236—39, 237—42～47, 238—34, 240—23, 44, 241—9)：口径13.2～13.9cm, 底径7.2～7.3cm, 器高2.5～2.8cm で、やや上底気味の底部からやや丸みを持つか直線的に立ち上がる。底部内面は中心から右回りの渦巻き状の凹凸が見られるが、凹凸が弱く平らに近いものもある。

A I g 類(236—40～44, 237—48～55, 238—35～37, 61, 239—48, 240—6～16, 43)：口径14.5～16.5cm, 底径8.6～9.3cm, 器高2.8～3.4cm で、ほぼ平底またはやや上底気味の底部から直線的に立ち上がる。底部内面は中心から右回りの渦巻き状の凹凸が見られるが、凹凸が弱く平らに近いものもある。

A I h 類(236—45)：口径19.2～19.7cm, 底径11.8～12.4cm, 器高3.9～4.2cm で、ほぼ平底の底部から直線的に立ち上がる。底部内面は極軽い渦巻き状の凹凸が見られる。

A I i 類(241—31)：口径4.9cm, 底径2.5cm, 器高0.9cm と本遺跡最小で、ほぼ平底の底部からやや丸みを持って立ち上がり、口唇外面が直立気味になる。底部内面は同心円状の凹凸が見られる。

A I j 類(本地区での出土無)：第四章第三節(2)参照

A I k 類(241—24～28, 34～41)：口径6.9～7.4cm, 底径3.4～4.2cm, 器高1.1～1.5cm で、ほぼ平底または僅かに上底気味の底部から直線的に立ち上がる。底部内面は軽い円心円状の凹凸があるか、平らに近くて中央が窪む。小型かつ薄手で軽い。

A I l 類(241—32)：口径7.6cm, 底径3.6cm, 器高1.8cm で、ほぼ平底の底部から外反気味に立ち上がり、口唇やや肥厚する。底部内面と体部内面の境がなく、内面全体が球面状を呈する。

A I m 類(241—1～8, 14～18, 20, 21)：口径7.6～8.6cm, 底部3.9～4.9cm, 器高1.3～1.8cm で、I c 類と法量は重なるが、体部の立ち上がりと底部内面の形状が異なり、ほぼ平底または僅かに上底気味の底部からやや丸みを持って立ち上がるものと外反気味に立ち上がるものがある。底部内面は極軽い同心円状の凹凸があったり中央が窪むものもあるが、概して平らである。しばしば底面に「大」、「中」、「小」の墨書が付される。

A I n 類(241—12, 30)：口径10.0～10.3cm, 底径4.1～5.2cm, 器高2.1～2.4cm で、僅かに上底気味の底部からやや丸みを持って立ち上がる。底部内面と体部内面の境がなく、内面全体が球面上を呈する。

A I o 類(240—39～42, 241—13, 22, 23)：口径10.6～12.0cm, 底径5.2～6.5cm, 器高2.1～2.6

cm で、ほぼ平底または僅かに上底気味の底部から直線的に立ち上がる。底面が通常の左回転糸切りのもので中心糸切りのものである。底部内面は同心円状の凹凸があるもの、平らなもの、中央が窪むものと多様である。

B 類は底面から体部外面が回転ヘラ削り調整、内面が回転ナデ調整されるもので、赤っぽい色調を呈し、胎土は精選され、器面が平滑なものである。皿型を呈する B I 類、椀型を呈する B II 類、耳皿型を呈する B III 類があり、法量で B I 類が a~e の 5 類に、本地点では 1 個体だけの出土であるが他地点に別法量のものである B II 類が a, b の 2 類に細別される。

B I a 類(241—10, 11)：口径10.6~11.3cm, 底径5.4~6.0cm, 器高1.9~2.4cm で、平らな底部から丸みを持って立ち上がる。器厚平均1.5mm と薄手だがやや厚手のものもある。中心から右回りに底面~体部外面に回転ヘラ削り、内面に回転ナデ調整が施される。内面のナデは底部から体部まで一連のもので、内面は底部と体部の境が不明瞭な球面状を呈する。底部内外面は煤で黒色のものとそのままのものがある。

B I b 類(239—49)：口径10.5~10.7cm, 底部5.7~6.1cm, 器高2.1~2.3cm で、平らな底部から丸みを持って立ち上がるが、器厚3~4mm と厚手となっていること、底部内面と体部内面の境が凹線となっていることが B I a 類と異なり、形態だけを見れば A I d 類に近い。

B I c 類(236—46, 47, 237—57, 58, 238—38~40, 62, 239—50~56, 240—17)：口径10.4~11.2cm, 底径5.6~6.6cm, 器高2.5~2.9cm で、平らな底部から丸みを持って立ち上がる。器厚5~6mm と口唇に至るまで厚く、口唇は丸い。体部外面に回転ヘラ削り、内面に回転ナデ調整が施されるが、底面は幅1mm 強の溝が中心から右回りに巡る。この溝は幅4~7mm の間の3~5本が1単位となっていることが明らかなものもある。底部内面は回転ナデ調整に伴う極軽い渦巻き状の凹凸が見られる。

B I d 類(236—48, 49, 51, 52, 237—56, 238—41, 42, 239—57~59)：口径12.2cm~13.5cm, 底径7.0~7.8cm, 器高2.8~3.6cm で、平らな底部から丸みを持って立ち上がり、形態は I c 類を横に延ばしただけのようなものであるが、I c 類と異なり底面は溝が巡らず、中心から右回りの渦巻き状に削られたままである。

B I e 類(236—50)：口径13.8~14.4cm, 底径8.2~8.6cm, 器高2.8~3.6cm で、B I d 類と同様の形態・調整で、口径では B I d 類との間に断絶がなく器高その範囲内であり、出土点数も少数であることから、B I d 類の偏倚の内かとも思われるが、これを B I d 類に含めると口径の範囲が2cm 近くに及びやや広過ぎること、底径においてやや断絶があること等により本類を設けた。

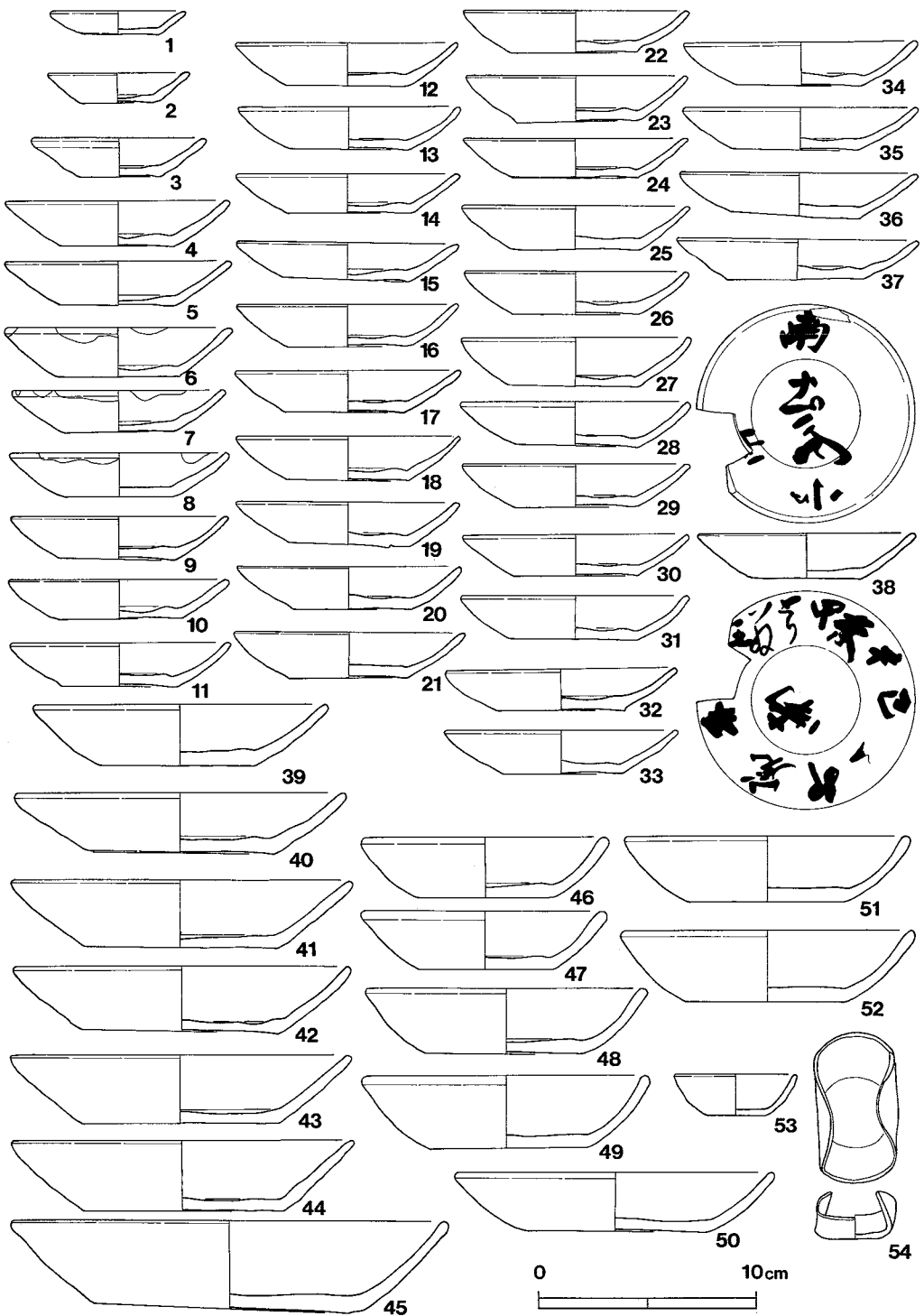
B II a 類(236—53)：口径5.5cm, 底径2.8cm, 器高2.4cm, 平らな底部から丸みを持って立ち上がる。底面~体部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデで、いずれも回転の方向は中心から右回りである。底部内面は平らに近いが中央は僅かに窪む。底部内面は平らに近いが中央は僅かに窪む。底部内面と体部内面の境は凹線となっており明瞭である。



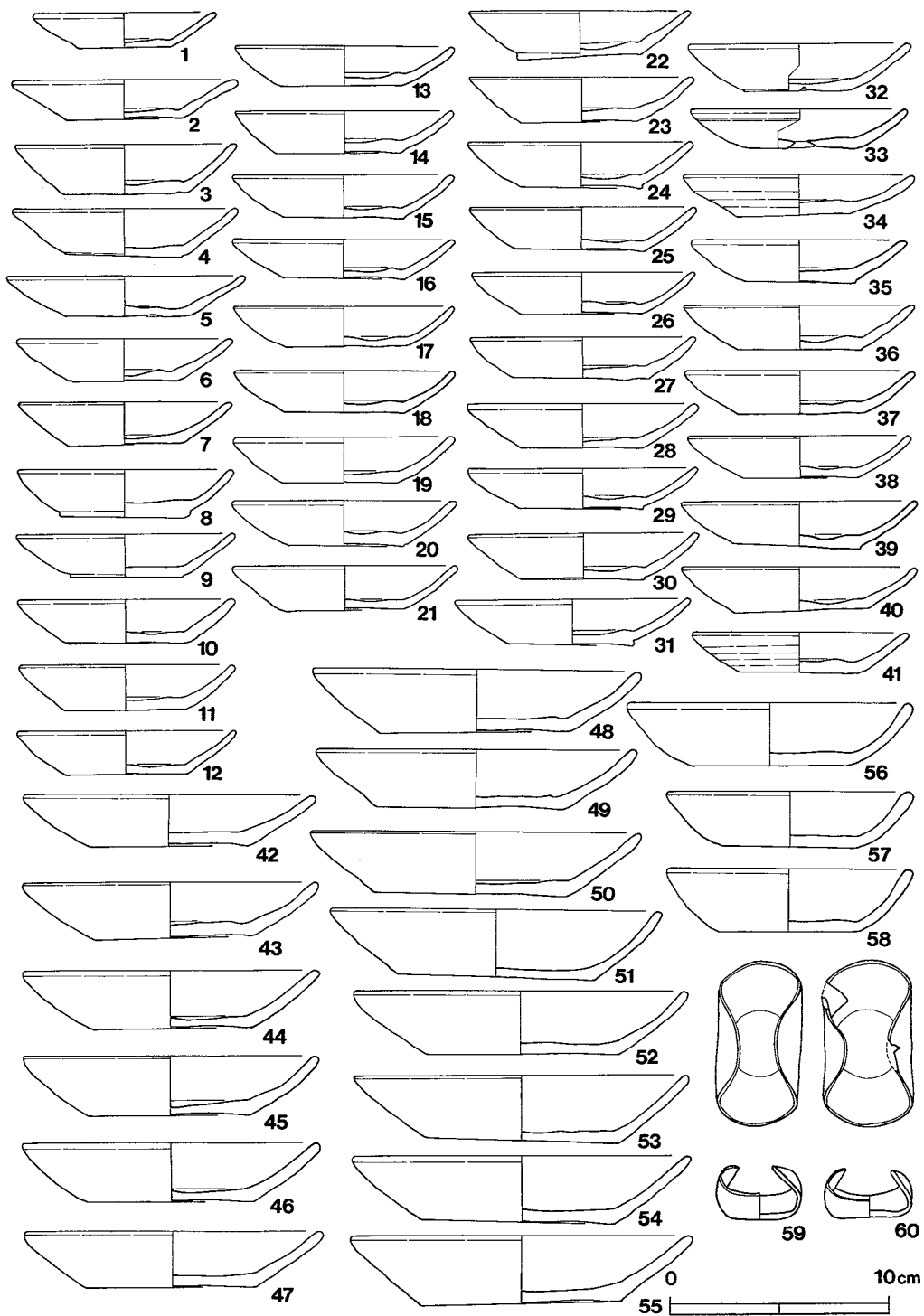
B III類(236—54, 237—59, 60)：長径7.0～7.6cm, 短径3.8～4.8cm, 底径2.3～2.3cm, 器高2.2～2.5cmで、底面は回転ヘラ削りまたは回転ナデ調整, 体部内外面及び底部内面は回転ナデ調整で、いずれも中心から右回りである。底部内面は極軽く窪んでいるが平らに近く、底部内面と体部内面の境は底面がヘラ削りされるものは凹線となっていて明瞭なのに対して、底面がナデ調整されるのでは不明瞭である。

本遺跡ではこれらの器種の組成の変化によってかわらけの編年が可能であると考えられるが、それについては研究篇第七章を参照されたい。遺物の観察表は取り上げた個体が非常に多数に上ったため、枠の関係上、調整等極簡単にしか記述出来なかったが、ここでは特に重量を属性として取り入れた。これは、完形品重量との対比による遺存率の客観的表示と同時に、かわらけの小型化及び薄手化に伴う軽量化の問題が存在すると考えられたからである。これも研究篇第七章で詳述するが、ランダムサンプルである本項によっても検証されたい。その他、様々な操作に耐えられるよう、可能な限り多くの個体を本項に取り上げた。

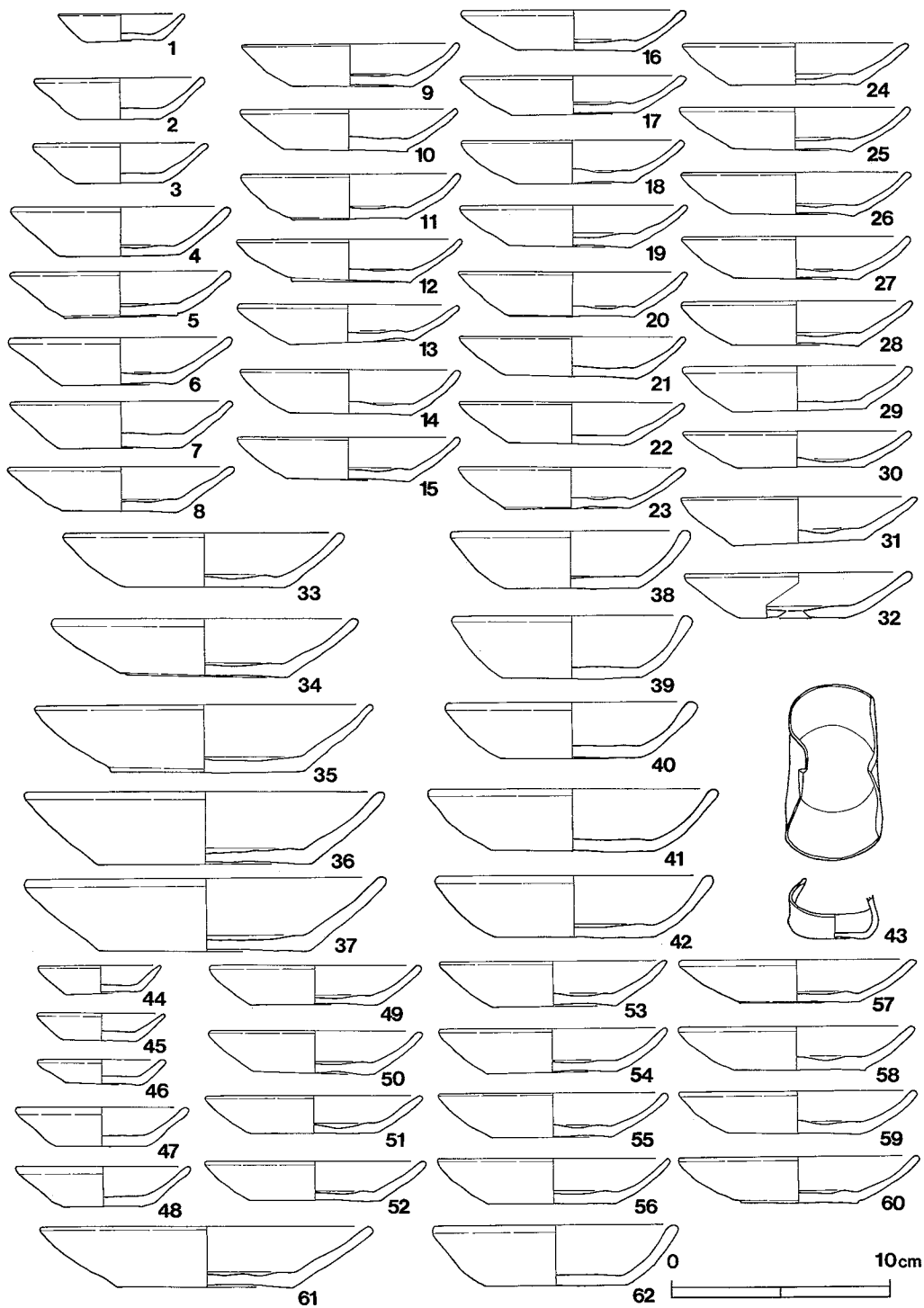
(上田 真)



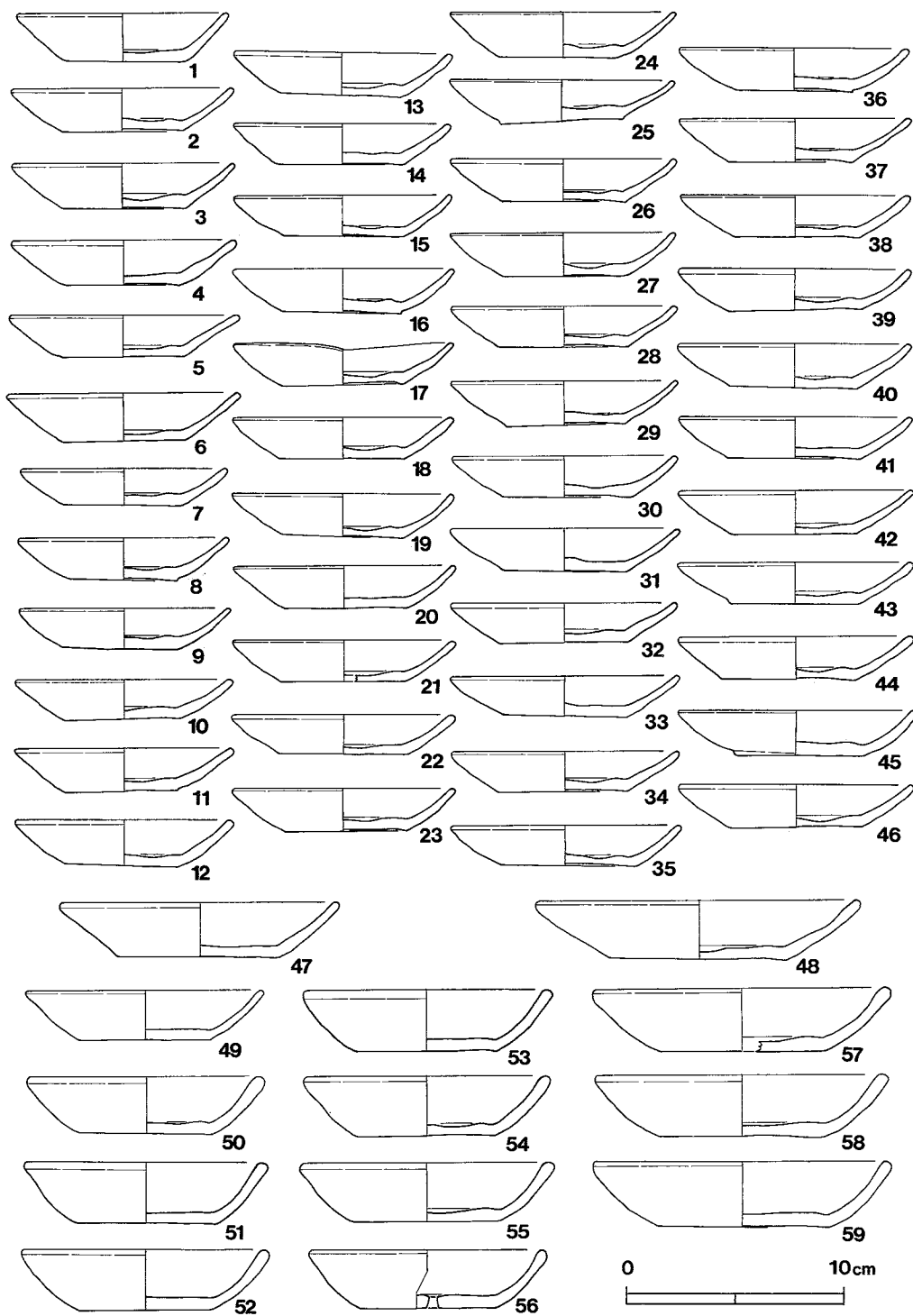
第236図 かわらけ(1)



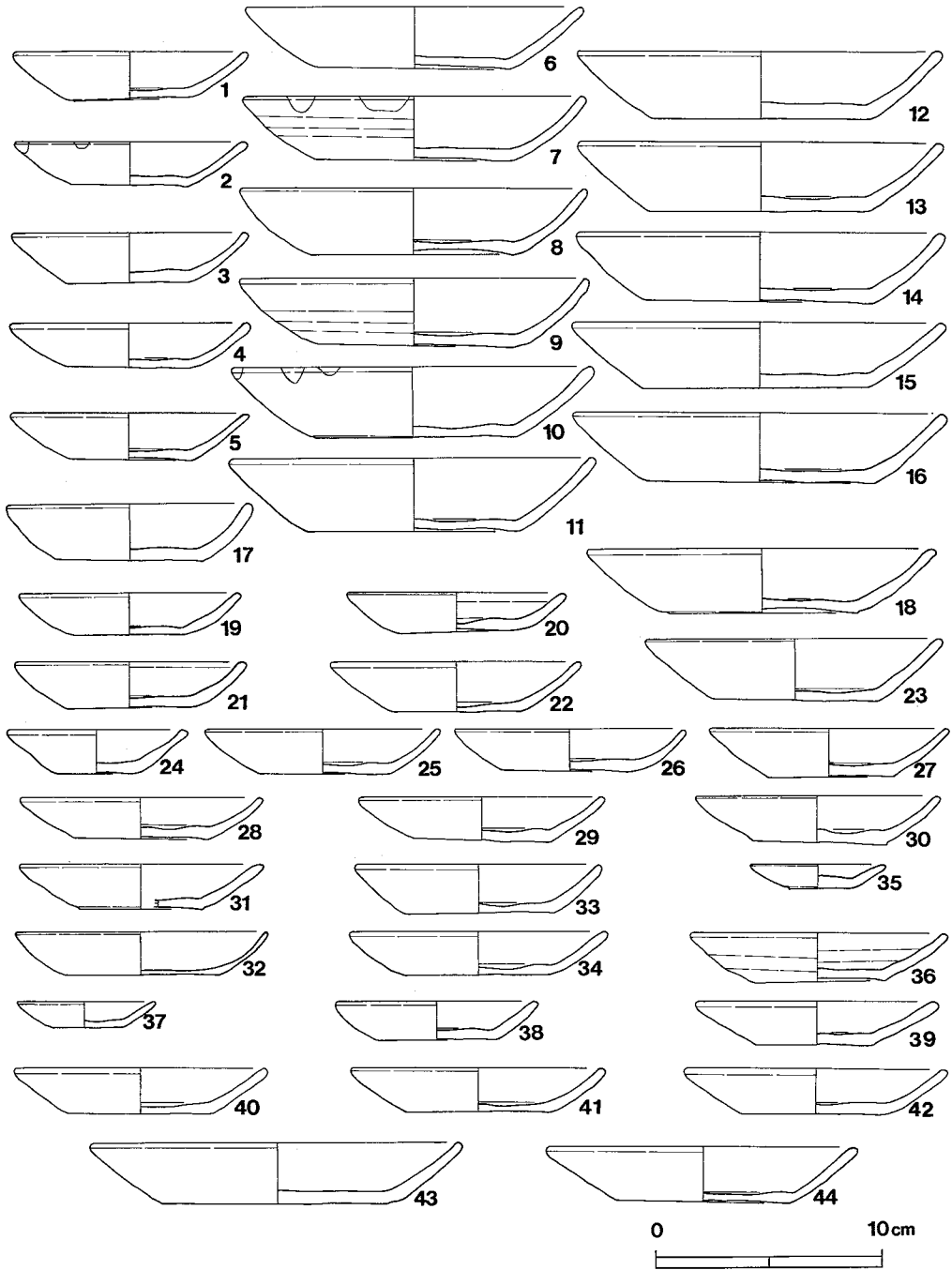
第237図 かわらけ(2)



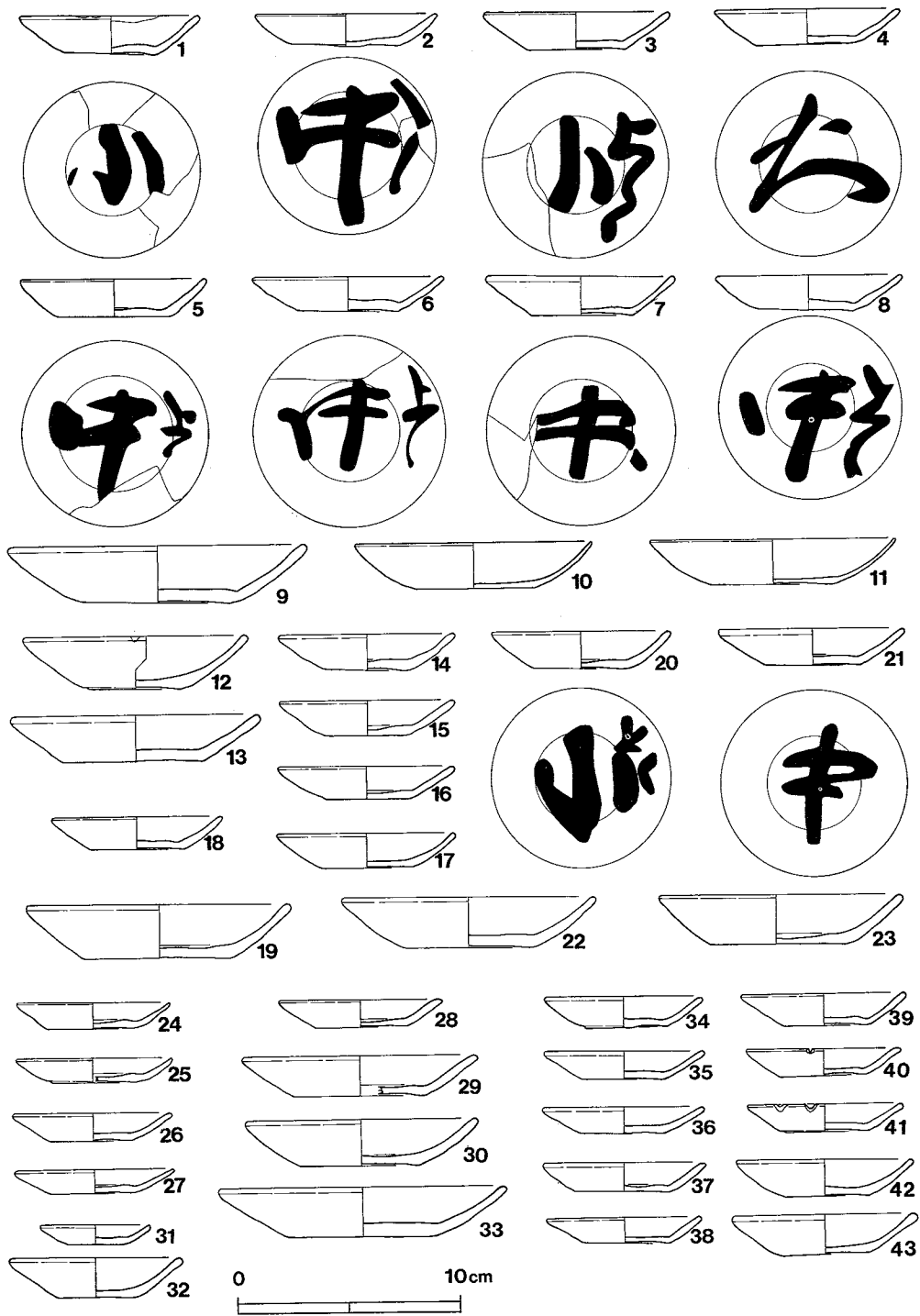
第238図 かわらけ(3)



第239図 かわらけ(4)



第240図 かわらけ(5)



第241図 かわらけ(6)

表 2 かわらけ計測表

図版 番号	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	底面	外面	内面	備考
(1)-1	C7-2号土坑	6.1	3.7	1.1	16.5	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	完形 灯芯油痕
2	"	6.4	3.3	1.4	16.6	"	"	"	完形
3	"	7.8	3.6	1.8	27.3	"	"	"	"
4	"	10.1	5.2	2.1	63.9	"	"	"	ほぼ完形
5	"	10.3	5.4	2.1	57.8	"	"	"	完形
6	"	10.1	5.6	2.3	57.8	"	"	"	灯芯油痕
7	"	9.6	5.0	1.9	?	"	"	"	完形、鉄製品付着
8	"	9.8	5.0	2.0	65.5	"	"	"	灯芯油痕
9	"	9.8	5.3	2.0	52.4	"	"	"	完形 灯芯油痕
10	"	9.9	5.6	1.8	57.7	"	"	"	底部穿孔
11	"	10.0	5.3	2.0	56.1	"	"	"	"
12	"	10.0	5.4	2.0	46.0	"	"	"	"
13	"	10.0	5.4	2.0	54.5	"	"	"	"
14	"	10.0	5.6	1.8	55.6	"	"	"	"
15	"	10.0	5.7	1.8	33.2	"	"	"	"
16	"	10.0	5.8	2.0	56.0	"	"	"	"
17	"	10.1	5.5	2.0	48.6	"	"	"	"
18	"	10.1	5.5	2.1	56.1	"	"	"	"
19	"	10.1	5.6	2.1	66.5	"	"	"	ほぼ完形
20	"	10.2	5.5	2.0	60.8	"	"	"	"
21	"	10.2	5.6	2.1	58.2	"	"	"	"
22	"	10.2	5.7	2.0	59.7	"	"	"	ほぼ完形
23	"	10.2	5.7	2.2	60.0	"	"	"	ほぼ完形
24	"	10.2	5.8	1.8	33.2	"	"	"	"
25	"	10.2	5.8	2.0	53.9	"	"	"	"
26	"	10.2	5.8	2.0	59.6	"	"	"	"
27	"	10.2	6.2	2.2	52.4	"	"	"	"
28	"	10.3	5.5	2.1	48.5	"	"	"	"
29	"	10.3	5.6	2.0	62.2	"	"	"	"
30	"	10.3	5.8	1.9	54.0	"	"	"	"
31	"	10.3	5.9	2.0	57.0	"	"	"	"
32	"	10.5	6.0	1.9	45.4	"	"	"	"
33	"	10.6	5.5	2.0	66.8	"	"	"	"
34	"	10.6	5.7	2.1	65.1	"	"	"	ほぼ完形
35	"	10.7	5.9	2.0	55.4	"	"	"	"
36	"	10.8	5.9	2.1	48.5	"	"	"	"
37	"	11.0	6.3	2.0	53.0	"	"	"	"
38	"	9.8	5.0	2.1	53.2	"	"	"	底面墨書「南」、十
39	"	13.4	7.1	2.8	123.9	"	"	"	二支他
40	"	15.0	8.3	2.8	155.0	"	"	"	灯芯油痕
41	"	15.2	8.9	3.1	100.1	"	"	"	"
42	"	15.2	9.0	3.1	154.5	"	"	"	灯芯油痕
43	"	15.5	9.0	3.1	147.6	"	"	"	"
44	"	15.5	9.2	3.2	171.8	"	"	"	完形、灯芯油痕
45	"	19.7	11.8	4.2	255.4	"	"	"	"
46	"	11.0	6.3	2.7	111.2	渦巻状の溝	回転ヘラ削り	回転ナデ	ほぼ完形
47	"	11.0	6.3	2.8	97.9	"	"	"	"
48	"	12.8	7.3	3.0	141.5	回転ヘラ削り	"	"	ほぼ完形
49	"	12.8	7.3	3.3	149.6	"	"	"	"
50	"	14.4	8.2	2.8	128.0	"	"	"	灯芯油痕
51	"	12.9	7.3	3.0	139.5	"	"	"	ほぼ完形
52	"	13.2	7.3	3.3	156.9	"	"	"	"
53	"	5.5	2.8	2.4	9.4	"	"	"	"
54	"	7.0	2.1	2.2	17.5	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ完形
(2)-1	C7-3号土坑	8.2	4.3	1.6	23.2	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	"
2	"	10.0	5.2	1.8	58.3	"	"	"	完形
3	"	10.0	5.5	2.3	63.2	"	"	"	"
4	"	10.2	5.3	2.2	57.8	"	"	"	"
5	"	10.7	6.0	1.9	64.5	"	"	"	ほぼ完形
6	"	9.6	4.7	2.0	48.7	"	"	"	"
7	"	9.6	5.1	2.0	42.1	"	"	"	灯芯油痕



報告篇第三章 江戸時代の調査 I

8	"	9.6	6.0	2.2	51.6	"	"	"	
9	"	9.8	5.2	2.0	45.2	"	"	"	
10	"	9.8	5.3	2.0	67.7	"	"	"	完形
11	"	9.8	5.5	2.1	58.3	"	"	"	完形
12	"	9.8	5.6	2.0	53.5	"	"	"	完形
13	"	9.9	5.5	1.9	47.1	"	"	"	
14	"	9.9	5.6	1.9	49.5	"	"	"	
15	"	10.0	5.2	2.1	51.1	"	"	"	
16	"	10.0	5.5	1.8	44.7	"	"	"	灯芯油痕
17	"	10.0	5.5	1.9	57.3	"	"	"	ほぼ完形
18	"	10.0	5.5	1.9	56.9	"	"	"	
19	"	10.0	5.7	2.1	51.6	"	"	"	
20	"	10.1	5.2	2.1	57.1	"	"	"	完形
21	"	10.1	5.4	2.2	44.2	"	"	"	
22	"	10.1	5.6	2.3	65.6	"	"	"	完形
23	"	10.2	5.4	2.1	61.9	"	"	"	完形
24	"	10.2	5.6	2.1	64.4	"	"	"	
25	"	10.2	6.1	2.0	42.0	"	"	"	
26	"	10.3	5.4	2.3	40.1	"	"	"	
27	"	10.3	6.3	2.0	66.6	"	"	"	完形
28	"	10.4	5.5	2.0	59.7	"	"	"	完形
29	"	10.4	5.7	1.9	54.1	"	"	"	
30	"	10.4	5.7	2.1	63.7	"	"	"	
31	"	10.7	5.7	2.2	70.9	"	"	"	完形
32	"	10.0	5.5	2.1	53.6	"	"	"	底部穿孔未成
33	"	9.8	5.1	1.8	56.0	"	"	"	底部穿孔
34	"	10.5	5.2	2.0	72.0	"	"	"	糖糰目強
35	"	9.8	5.1	2.0	55.3	"	"	"	13層出土、ほぼ完形
36	"	10.2	5.2	1.9	48.3	"	"	"	"、灯芯油痕
37	"	10.4	5.7	2.0	46.7	"	"	"	"
38	"	10.4	5.7	2.1	59.7	"	"	"	"
39	"	10.7	5.7	2.2	67.2	"	"	"	"
40	"	10.7	6.2	2.1	49.2	"	"	"	"
41	"	9.8	5.4	1.9	40.9	"	"	"	"
42	"	13.3	7.2	2.5	105.6	"	"	"	灯芯油痕
43	"	13.3	7.6	2.6	102.3	"	"	"	"
44	"	13.4	7.2	2.7	134.1	"	"	"	完形、灯芯油痕
45	"	13.5	7.4	2.8	132.8	"	"	"	
46	"	13.5	7.6	2.7	121.2	"	"	"	灯芯油痕
47	"	13.5	7.7	2.6	100.2	"	"	"	"
48	"	14.5	8.6	2.7	131.3	"	"	"	"
49	"	14.8	8.7	3.0	171.1	"	"	"	"、ほぼ完形
50	"	15.0	8.8	2.9	150.1	"	"	"	"
51	"	15.0	9.1	3.2	157.0	"	"	"	"
52	"	15.2	8.7	2.9	151.7	"	"	"	"
53	"	15.2	8.8	3.1	161.2	"	"	"	"、完形
54	"	15.3	8.9	3.1	127.1	"	"	"	"
55	"	15.5	9.3	3.2	150.5	"	"	"	"
56	"	12.8	7.0	2.9	125.9	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	回転ナデ	
57	"	11.0	6.1	2.6	92.0	渦巻状の溝	"	"	
58	"	11.0	6.3	2.9	103.2	"	"	"	完形
59	"	7.6	2.6	2.5	26.2	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
60	"	7.6	2.6	2.3	22.4	"	"	"	
(3)-1	E7-5号土坑	5.7	3.7	1.3	17.6	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	完形
2	"	7.7	3.6	1.9	38.7	"	"	"	完形
3	"	7.8	4.0	1.9	33.6	"	"	"	
4	"	9.8	5.6	2.3	66.3	"	"	"	ほぼ完形
5	"	9.9	5.2	2.2	57.0	"	"	"	
6	"	10.0	5.1	2.2	65.7	"	"	"	ほぼ完形
7	"	10.0	5.6	2.2	47.3	"	"	"	
8	"	10.2	5.3	2.1	49.8	"	"	"	
9	"	9.8	5.4	2.0	54.5	"	"	"	完形
10	"	9.8	5.6	2.0	63.1	"	"	"	完形
11	"	10.0	5.2	2.1	51.7	"	"	"	
12	"	10.0	5.5	2.0	47.9	"	"	"	
13	"	10.0	5.6	1.9	45.2	"	"	"	

14	"	10.0	5.7	2.1	62.9	"	"	"	完形
15	"	10.1	5.6	2.0	54.6	"	"	"	完形
16	"	10.2	5.4	1.9	40.0	"	"	"	灯芯油痕
17	"	10.2	5.6	1.8	46.0	"	"	"	灯芯油痕
18	"	10.2	5.5	2.0	64.5	"	"	"	
19	"	10.2	5.7	2.0	57.7	"	"	"	完形, 灯芯油痕
20	"	10.2	5.8	2.1	59.8	"	"	"	
21	"	10.2	6.0	1.9	43.5	"	"	"	
22	"	10.3	5.0	1.9	54.7	"	"	"	
23	"	10.3	5.6	2.0	52.8	"	"	"	
24	"	10.3	6.0	1.9	45.6	"	"	"	
25	"	10.4	5.4	2.0	56.9	"	"	"	
26	"	10.4	5.7	2.0	62.5	"	"	"	完形
27	"	10.4	5.8	2.0	43.5	"	"	"	
28	"	10.4	5.8	2.1	58.7	"	"	"	
29	"	10.4	6.0	1.7	48.8	"	"	"	
30	"	10.4	6.2	2.1	55.5	"	"	"	
31	"	10.7	5.7	2.2	75.1	"	"	"	ほぼ完形
32	"	10.5	5.2	2.1	57.6	"	"	"	底部穿孔
33	"	12.7	7.3	2.5	105.8	"	"	"	灯芯油痕
34	"	13.8	7.4	2.7	123.6	"	"	"	"
35	"	15.3	8.9	3.1	128.4	"	"	"	"
36	"	16.3	9.8	3.3	185.8	中心糸切り	"	"	"
37	"	16.4	9.5	3.4	229.8	"	"	"	"
38	"	10.8	6.2	2.7	104.0	渦巻状の溝	回転ヘラ削り	回転ナデ	
39	"	10.8	6.5	2.9	94.2	"	"	"	
40	"	11.3	6.4	2.6	110.9	"	"	"	
41	"	12.5	6.4	2.8	132.3	回転ヘラ削り	"	"	完形
42	"	13.1	7.2	2.9	135.8	"	"	"	ほぼ完形
43	"	8.1	3.6	2.8	28.0	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
44	"	5.6	3.4	1.3	12.9	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	
45	"	5.7	3.4	1.3	17.0	"	"	"	
46	"	5.8	3.3	1.2	17.8	"	"	"	
47	"	7.8	4.2	1.8	39.7	"	"	"	
48	"	8.0	3.7	1.9	37.0	"	"	"	
49	"	9.6	5.7	1.8	44.1	"	"	"	
50	"	9.7	5.7	2.0	46.3	"	"	"	
51	"	9.8	5.7	1.7	36.0	"	"	"	
52	"	10.0	6.0	1.8	41.4	"	"	"	
53	"	10.2	6.1	2.0	68.9	"	"	"	
54	"	10.3	5.8	1.9	60.0	"	"	"	完形
55	"	10.4	6.0	2.1	48.2	"	"	"	
56	"	10.6	5.9	2.1	60.5	"	"	"	
57	"	10.7	5.4	2.0	63.2	"	"	"	
58	"	10.7	6.0	2.0	61.5	"	"	"	
59	"	10.8	6.1	2.1	62.9	"	"	"	
60	"	11.0	5.4	2.2	57.7	"	"	"	
61	"	15.2	6.1	2.8	112.3	"	"	"	灯芯油痕
62	"	10.7	6.4	2.7	96.5	渦巻状の溝	回転ヘラ削り	回転ナデ	
(4)-1	F 8-1号土坑	9.6	5.3	2.3	39.4	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	
2	"	9.9	5.5	2.0	60.2	"	"	"	完形
3	"	10.1	5.6	2.1	67.4	"	"	"	ほぼ完形
4	"	10.2	5.2	2.1	52.5	"	"	"	
5	"	10.3	5.6	2.0	46.7	"	"	"	
6	"	10.5	5.6	2.2	62.1	"	"	"	
7	"	9.3	5.4	1.7	45.4	"	"	"	
8	"	9.4	5.8	2.0	38.4	"	"	"	
9	"	9.5	5.4	1.9	57.4	"	"	"	
10	"	9.8	5.1	1.9	45.5	"	"	"	
11	"	9.8	5.1	2.0	45.4	"	"	"	
12	"	9.8	5.1	2.2	54.0	"	"	"	
13	"	9.8	5.6	2.0	47.1	"	"	"	
14	"	9.8	5.7	1.9	54.3	"	"	"	
15	"	9.9	5.5	1.9	51.6	"	"	"	完形, 灯芯油痕
16	"	10.0	5.4	2.0	63.3	"	"	"	完形
17	"	10.0	5.6	1.8	57.4	"	"	"	完形

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

18	"	10.0	5.8	1.9	51.0	"	"	"	
19	"	10.1	5.6	2.0	40.3	"	"	"	
20	"	10.1	5.6	2.1	62.0	"	"	"	ほぼ完形
21	"	10.1	5.7	1.9	47.7	"	"	"	
22	"	10.1	5.8	1.8	52.6	"	"	"	
23	"	10.2	5.6	2.0	56.4	"	"	"	ほぼ完形
24	"	10.2	5.6	2.1	71.3	"	"	"	
25	"	10.2	5.6	2.1	72.7	"	"	"	ほぼ完形
26	"	10.2	5.7	2.0	31.2	"	"	"	
27	"	10.2	5.8	2.0	63.1	"	"	"	
28	"	10.2	5.9	1.9	59.4	"	"	"	
29	"	10.2	5.9	1.9	58.9	"	"	"	
30	"	10.2	6.2	2.1	60.5	"	"	"	
31	"	10.3	5.7	2.0	52.2	"	"	"	
32	"	10.3	5.8	1.8	57.1	"	"	"	
33	"	10.4	5.7	2.0	47.8	"	"	"	
34	"	10.4	6.0	1.9	48.2	"	"	"	
35	"	10.4	6.2	1.8	62.6	"	"	"	ほぼ完形
36	"	10.5	5.4	2.0	61.3	"	"	"	灯芯油痕
37	"	10.5	5.6	2.0	50.0	"	"	"	
38	"	10.5	5.8	1.9	56.1	"	"	"	
39	"	10.5	6.1	2.0	61.7	"	"	"	ほぼ完形
40	"	10.6	5.9	2.1	67.1	"	"	"	
41	"	10.6	6.1	1.9	67.2	"	"	"	
42	"	10.7	5.7	2.0	61.1	"	"	"	
43	"	10.7	5.8	1.9	43.9	"	"	"	
44	"	10.7	6.1	2.0	54.6	"	"	"	
45	"	10.8	6.0	2.2	58.3	"	"	"	
46	"	10.8	6.1	2.0	40.6	"	"	"	
47	"	12.6	7.3	2.5	94.8	"	"	"	
48	"	14.7	8.2	2.7	117.6	"	"	"	
49	"	10.7	6.1	2.3	67.4	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	回転ナデ	ほぼ完形
50	"	10.6	6.1	2.7	97.1	渦巻状の溝	"	"	
51	"	10.8	6.4	2.8	95.3	"	"	"	完形
52	"	11.0	6.0	2.8	109.9	"	"	"	ほぼ完形
53	"	11.0	6.4	2.8	113.8	"	"	"	ほぼ完形
54	"	11.1	6.4	2.7	110.5	"	"	"	
55	"	11.2	6.5	2.7	111.3	"	"	"	
56	"	10.6	6.2	2.7	100.5	"	"	"	完形、底部穿孔
57	"	12.6	7.6	2.9	128.4	回転ヘラ削り	"	"	
58	"	13.2	7.5	2.9	115.5	"	"	"	
59	"	13.5	7.7	3.1	169.5	"	"	"	ほぼ完形
(5)-1	B10-2号土坑	10.1	5.1	2.2	55.1	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	
2	"	10.2	5.2	2.0	52.3	"	"	"	灯芯油痕
3	"	10.2	5.4	2.3	54.0	"	"	"	
4	"	10.4	5.4	2.0	62.4	"	"	"	
5	"	10.4	6.0	2.1	42.7	"	"	"	
6	"	14.7	8.4	2.8	92.0	"	"	"	
7	"	14.9	8.6	2.9	129.9	"	"	"	灯芯油痕
8	"	15.2	8.7	3.1	164.4	"	"	"	
9	"	15.2	9.0	3.0	152.7	"	"	"	灯芯油痕
10	"	15.8	8.9	3.1	142.5	"	"	"	"
11	"	15.9	9.4	3.2	107.8	"	"	"	灯芯油痕
12	"	15.9	9.6	3.0	197.7	"	"	"	ほぼ完形
13	"	16.0	9.7	3.1	182.4	"	"	"	
14	"	16.0	10.1	3.1	191.7	"	"	"	
15	"	16.1	10.1	2.9	188.3	"	"	"	
16	"	16.3	10.1	3.1	163.1	"	"	"	
17	"	10.6	6.4	2.6	74.3	渦巻状の溝	回転ヘラ削り	回転ナデ	
18	B10-1号遺構	15.3	6.4	2.9	149.5	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	
19	D7-1号土坑	9.6	4.8	1.9	54.0	"	"	"	
20	"	9.6	5.1	1.8	51.4	"	"	"	
21	"	10.0	5.6	2.1	68.3	"	"	"	
22	"	11.0	5.6	2.2	65.5	"	"	"	灯芯油痕
23	"	12.9	7.3	2.8	79.8	"	"	"	灯芯油痕
24	G8-1号土坑	7.7	3.6	2.0	24.0	"	"	"	

25	"	10.2	5.7	2.0	54.1	"	"	"	
26	"	10.2	6.0	1.9	44.8	"	"	"	
27	"	10.4	5.5	2.2	69.8	"	"	"	
28	"	10.5	5.8	1.9	58.1	"	"	"	
29	"	10.7	6.0	2.0	63.1	"	"	"	
30	"	10.7	6.0	2.1	56.7	"	"	"	
31	E8-2号土坑	10.6	5.4	2.0	16.9	"	"	"	
32	"	11.0	6.6	1.9	23.3	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	回転ナデ	
33	F8-3号遺構	10.7	6.6	2.2	82.1	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灯芯油痕
34	"	11.2	6.2	1.9	53.8	"	"	"	
35	E9-1号土坑	5.9	2.8	1.1	22.0	"	"	"	
36	C2-3号土坑	11.1	5.7	2.2	63.2	"	"	"	
37	E11-1号土坑	6.0	3.1	1.2	11.7	"	"	"	
38	"	8.8	5.0	1.7	46.0	"	"	"	
39	"	10.6	5.2	1.9	45.7	"	"	"	
40	"	10.9	6.3	2.1	68.5	"	"	"	底面にタール付着
41	"	11.1	6.5	2.1	68.6	"	"	"	"
42	"	11.4	6.3	2.0	49.0	"	"	"	
43	"	16.2	9.8	2.7	160.4	"	"	"	
44	D11-1号溝	13.5	7.0	2.5	109.7	"	"	"	灯芯油痕
(6)-1	B7-2号土坑	8.0	4.2	1.8	26.5	"	"	"	底面墨書「小」
2	"	8.0	4.9	1.5	35.4	"	"	"	"「中」
3	"	8.2	4.4	1.8	29.7	"	"	"	"「小」
4	"	8.2	4.5	1.6	34.2	"	"	"	"「大」
5	"	8.2	5.2	1.7	35.1	"	"	"	"「中」
6	"	8.4	4.4	1.6	34.0	"	"	"	"「中」
7	"	8.4	4.6	1.8	31.4	"	"	"	"「中」
8	"	8.3	4.1	1.7	37.5	"	"	"	"「中」，ほぼ完形
9	"	13.2	7.0	2.5	121.0	"	"	"	
10	"	10.6	5.4	2.1	42.2	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	回転ナデ	底部内外面黒色処理
11	"	11.0	5.4	2.1	39.4	"	"	"	"
12	D8-7号土坑	10.0	4.1	2.4	56.4	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灯芯油痕
13	"	11.0	6.3	2.1	68.6	"	"	"	"
14	包含層	7.7	3.8	1.5	21.5	"	"	"	"
15	"	7.8	3.7	1.6	30.4	"	"	"	"，ほぼ完形
16	"	7.8	3.8	1.5	21.5	"	"	"	"
17	"	7.9	3.9	1.6	23.3	"	"	"	"
18	H5-1号土坑	7.6	4.2	1.5	29.8	"	"	"	"
19	包含層	11.8	6.7	2.5	79.7	"	"	"	"
20	F7-6号土坑	8.0	4.2	1.7	32.1	"	"	"	底面墨書「小」
21	"	8.3	4.3	1.7	33.5	"	"	"	"「大」，灯芯油痕
22	"	11.4	5.6	2.3	64.0	"	"	"	
23	"	11.5	5.9	2.2	50.4	"	"	"	
24	E8-5号土坑	6.9	3.7	1.2	12.3	"	"	"	
25	"	7.0	3.4	1.1	14.6	"	"	"	
26	"	7.1	3.8	1.3	21.5	"	"	"	
27	"	7.1	3.9	1.1	17.1	"	"	"	
28	E7-3号土坑	7.4	4.2	1.3	16.3	"	"	"	灯芯油痕
29	"	10.4	5.9	1.8	16.9	"	"	"	
30	"	10.3	5.2	2.1	25.3	"	"	"	灯芯油痕
31	E7-7号土坑	4.9	2.5	0.9	6.0	"	"	"	
32	"	7.6	3.6	1.8	40.6	"	"	"	
33	"	12.8	6.7	2.3	65.9	中心糸切り	"	"	
34	包含層	7.0	3.6	1.4	21.6	左回転糸切り	"	"	灯芯油痕
35	"	7.0	3.8	1.2	13.7	"	"	"	
36	"	7.1	3.8	1.3	24.3	"	"	"	完形，灯芯油痕
37	"	7.2	4.3	1.3	26.8	"	"	"	完形
38	"	7.0	3.8	1.2	19.8	"	"	"	
39	"	7.3	3.7	1.5	21.7	"	"	"	灯芯油痕
40	"	6.9	3.8	1.3	19.6	"	"	"	"，灯芯油痕
41	"	7.0	3.7	1.3	21.4	"	"	"	完形，口唇切込
42	"	7.8	3.7	1.7	27.6	"	"	"	灯芯油痕，ニス塗り
43	"	8.2	3.9	1.8	35.5	"	"	"	完形，灯芯油痕

### (3) 瓦類

瓦類は、軒丸瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、熨斗瓦、面戸瓦、輪違い、谷平瓦、鬼瓦、埴、海鼠瓦がみられる。瓦の種々の属性については第266・267図を参照のこと。

#### 1. 軒丸瓦 (第242~246図, 第247図1~4)

軒丸瓦は、無剣梅鉢紋、剣梅鉢紋、連珠三つ巴文、三つ葉葵紋の4種類がみられる。

無剣梅鉢紋は円形の中心に5つの円形の花弁が軸によって結ばれている。

花弁の断面形によって3種類に細分できる。

#### 1類 花弁の断面形に稜線があり長方形をなす。

范型1：復元した瓦当径160mm, 文様区径110mm, 花弁径32mm, 中心径は不明である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。C 8-1号土坑から1点検出された。(242-3)

范型2：復元した瓦当径114mm, 文様区径82mm, 花弁径22mm, 中心径は15mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。B 7-3号土坑から13, C 9-4号遺構から1点検出された。(242-5)

#### 2類 花弁の断面形に稜線があり台形をなす。

范型1：復元した瓦当径172mm, 文様区径118mm, 花弁径35mm, 中心径は23mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。1点表採された。242-2の資料には丸瓦部との接合痕がみられ、縦に櫛目が刻まれている。

#### 3類 花弁の断面形に稜線がなくかまぼこ状をなす。

范型1：復元した瓦当径159mm, 文様区径115mm, 花弁径29mm, 中心径は21mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。C 2-3号土坑, C 2-4号土坑, B 3-1号土坑, B 7-7号土坑, F 8-1号土坑から1点ずつ検出された。(242-1)

剣梅鉢紋は無剣梅鉢の軸間に剣菱を5つ配している。

#### 1類 花弁の断面形に稜線があり長方形をなす。

花弁と剣のみが残存している。剣は菱状でなく棒状に近い。花弁径は34mm。被火熱により燈変色している。C 3-1号土坑から1点検出された。(242-6)

#### 2類 花弁の断面形に稜線がなくかまぼこ状をなす。13范型が確認できる。

范型1：瓦当径162mm, 文様区径112mm, 花弁径30mm, 中心径は21mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。一部に被熱による燈変色がみられる。C 7-3号土坑から8点, B 7-2号土坑から7点, C 4-1号土坑から2点, E11-1

号土坑から2点, B 7-1号土坑, B 7-7号土坑, C 3-1号土坑, D 8-13号土坑, E 7-6号土坑, E 8-2号土坑, E 8-3号土坑, F 8-1号土坑, G 7-1遺構から1点ずつ, 計30点検出された。(242-4)

范型2: 瓦当径163mm, 文様区径112mm, 花卉径32mm, 中心径は20mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。C 7-3号土坑から2点, C 4-1号土坑, B 8-3号土坑ピットから1点ずつ, 計4点検出された。(242-8)

范型3: 瓦当径161mm, 文様区径110mm, 花卉径35mm, 中心径は21mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。B 7-2号土坑から8点, B 7-4号土坑, E 8-5号土坑, F 8-1号土坑, I 5-2号土坑から1点ずつ, 表採1点, 計13点。(242-7)

范型4: 瓦当径160mm, 文様区径110mm, 花卉径33mm, 中心径は22mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。B 7-2号土坑から2点, C 3-1号遺構, F 7-6号土坑から1点ずつ, 計4点。(242-10)

范型5: 瓦当径160mm, 文様区径116mm, 花卉径28mm, 中心径は22mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。B 7-2号土坑から1点検出された。体部は, 全長428mm, 体長398mm, 釘穴が体部中央と玉縁寄りに2ヶ所みられる。凹面布袋痕には刺し縫いが全面にみられる。(244-1)

范型6: 瓦当径160mm, 文様区径104mm, 花卉径31mm, 中心径は20mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。B 7-2号土坑から1点検出された。(245-1)

范型7: 瓦当径160mm, 文様区径114mm, 花卉径28mm, 中心径は20mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。E11-1号土坑から1点検出された。(243-2)

范型8: 復元した瓦当径162mm, 文様区径106mm, 花卉径31mm, 中心径は20mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。E 7-1号土坑から1点検出された。(243-5)

范型9: 瓦当径160mm, 文様区径114mm, 花卉径29mm, 中心径は23mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。E 7-3号土坑から2点, E 8-5号土坑から1点。凹面布袋痕には刺し縫いが全面にみられる。(243-1)

范型10: 瓦当径156mm, 文様区径114mm, 花卉径32mm, 中心径は23mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。E 8-5号土坑から3点。F 8-1号土坑から1点, 計4点検出された。(242-9)

范型11: 瓦当径154mm, 文様区径114mm, 花卉径31mm, 中心径は15mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。E 8-5号土坑から1点検出された。

(243—3)

范型12：復元した瓦当径155mm，文様区径103mm，花卉径30mm，中心径は20mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。E 8—5号土坑から1点検出された。(243—4)

范型13：瓦当径155mm，文様区径109mm，花卉径31mm，中心径は21mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。1点表採された。(245—2)

連珠三つ巴には14文様みられる。

巴と圏線によって3種類に小分類できる。A類：圏線の回るもの

B類 圏線と巴の尾が接するもの

C類 圏線のないもの

また、巴の尾の方向（尾から頭）によって右回りと左回りとに分けられる。

- 1類 A右。復元した瓦当径160mm，内区径74mm，珠文数16個である。巴長は約3分の2周と長めで，断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は青灰色で白色粒子を含む。焼成は良好。C 2—2号土坑から1点検出された。(245—3)
- 2類 A右。復元した瓦当径152mm，内区径108mm，珠文数14個。巴長は半周弱，断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で径2mmの砂粒を含む。焼成は良好。245—5では范崩れのため木目痕が観察できる。E 7—3号土坑から2点検出された。(245—4・5)
- 3類 A左。復元した瓦当径160mm，内区径82mm，珠文数は16個。巴長はかなり長めで3分の2周以上になると思われ，断面は三角形状を示す。色調は暗灰色。胎土は内部が暗灰色，外側が明灰色。焼成は良。1点表採された。(245—6)
- 4類 C右。瓦当径160～162mm，内区径76mm，珠文数は16個。巴長は半周径強，断面形はドーム状である。珠文数は16個，246—1は丸瓦部が完存し，全長380mm，体長346mm，玉縁長は32mmである。釘穴は2か所，径は10mmと小さい。凹面の布袋痕には全面に刺し縫いがなされている。左側縁には凸レンズの模骨痕がみられる。C 2—2号土坑，C 2—4号土坑から1点ずつ，表採1点，計3点検出された。(246—1・2)
- 5類 C右。復元した瓦当径156mm，内区径60mm，珠文数は15個と奇数である。巴長は半周強，断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は青灰色。焼成は良好。E 7—6号土坑から1点検出された。(245—7)
- 6類 C右。瓦当径151mm，内区径73mm，珠文数は16個。巴長は3分の2周強，断面形はドーム状である。5—3は丸部の接合痕が明瞭で，縦方向に櫛目が施されている。色調は暗灰色。胎土は灰色。焼成は良好。D 8—1号土坑から1点検出された。(246—3)
- 7類 C右。復元した瓦当径150mm，内区径60mm，珠文数14個。巴長は3分の2周弱，断面形は三角形状である。被熱により燈変色しているため，色調，胎土，焼成は不明。F 7—3号土坑

から3点検出された。(247-1・2)

8類 C右。復元した瓦当径154mm, 内径60mm, 珠文数は14個, 径は15mm。巴長は計測不能, 断面形は三角形状である。被熱により燈変色しているため, 色調, 胎土, 焼成は不明。C7-1号土坑, E8-5号土坑から1点ずつ検出された。(246-4, 247-3)

9 (246-5)・10類 (246-6) はいずれも小片で, A右と確認できる。巴の断面形は三角形状を呈し, 珠文は15mmと大きい。瓦当面は燻しによる銀化が著しい。色調は銀灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。1点ずつ表採された。

三つ葉葵紋は1点のみみられる。文様は葉が1枚半残存しているが, 摩耗しているために葉の外形のみ観察でき, 葉脈の状態は不明である。瓦当径は116mmと小型で, 無剣梅鉢b類に近い。色調は暗灰色。胎土は灰色。焼成は良好。1点表採された。(247-4)

## 2. 軒平瓦 (第247図5~10, 第248図13)

軒平瓦には3種類みられる。

1類 中心飾りと唐草と子葉から構成されている。中心飾りは, 点珠に上部が三叉に分れる中央, Y字状の脇部, への字状の萼によって構成される。唐草は巻き込み部で太くなり, 中央にむかって長く伸びている。子葉は枝分れし外線が長い。文様区幅は192mm, 瓦当厚は56mmと大型である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。F8-1号土坑から1点検出された。(247-5)

2類 5範型みられる。文様は中心飾りと上下2反転する唐草と子葉からなる。中心飾りは, 点珠に8の字状にくびれがあり, 縦に沈線によって分割されている中央部に, 重線で内湾し, 外線にくびれをもつ脇部からなる。唐草は重線で短く, 子葉は単線で短い。b類には文様区に瓦当範の木目痕跡がみられる。瓦当幅は244~250mm, 瓦当厚42~49mm, 文様区幅142~147mmと差がみられる。平部との接合は, 広端側の凸面を斜めに切断し, 櫛目を刻み接合し易くしている。色調は灰色~暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。

範型1: C4-1号土坑から8点, F8-1号土坑から3点, B7-2号土坑, C7-3号土坑, E11-1号土坑から2点ずつ, C7-2号土坑, F7-6号土坑, D8-1号土坑, F10-6号土坑から1点ずつ, 表採3点, 計23点検出された。(247-7)

範型2: C4-1号土坑から1点検出された。(247-6)

範型3: C4-1号土坑から1点検出された。(247-8)

範型4: B7-2号土坑から1点検出された。(247-9)

範型5: I5-2号土坑から1点検出された。(247-10)

3類 文様構成は2類と同じであり, 各部の表現が異なる。中心飾りでは, 中央の8の字状に沈線がなく上部が大きくなり, 脇は単線になっている。唐草は単線で太く, 子葉は短く上部が



分かれている。瓦当幅245mm，瓦当厚42mm，文様幅141mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。D 8—1号土坑から1点検出された。3類は棧瓦と共伴して検出されていることからみて、棧瓦葺の袖瓦として使用された資料である。(248—13)

### 3. 軒棧瓦 (第248図1～12, 第249図, 第250図1～10)

軒棧瓦は軒平部13種類，軒丸部13種類がみられる。軒平部1類から10類までは軒平瓦2類と文様構成は同じで各部の表現が異なるだけである。軒丸部は、三つ巴と連珠三つ巴文がみられる。

軒平部1類 中心飾りは軒平瓦2類と文様構成が同一である。唐草が単線で巻き込みが太くなり先端は尖っている。子葉は重線で内線が屈曲している。瓦当厚48mm，文様区幅146mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。E 8—5号土坑から1点検出された。(248—1)

軒平部2類 中心飾りは軒平瓦2類と文様構成が同一である。唐草が単線で細く巻き込み先端が丸みを帯び若干膨らんでいる。瓦当厚46mm，文様区幅140mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。D 8—1号土坑から1点検出された。(248—4)

軒平部3類 中心飾りは軒平瓦2類と文様構成が同一であるが，中央は丸みを帯びて，上部先端がつながっている。唐草は単線で巻き込みが少なく先端が丸みを帯び膨らんでいる。瓦当厚45mm，文様区幅138mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。E 7—3号土坑から1点検出された。(248—2)

軒平部4類 3範型みられる。中心飾りは同文で，唐草は巻き込み部が肥大し円盤状になっている。子葉はやや長めになる。文様全体が肉厚になっている。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。

範型1：1点表採された。(248—3)

範型2：C 9—1号土坑から1点，表採1点，計2点検出された。(248—5)

範型3：C 9—1号土坑，C 9—3号遺構から1点ずつ，計2点検出された。(248—6)

軒平部5類 中心飾りは軒平瓦2類と文様構成が同一であるが，脇が太くなる。唐草は山が小さくなり，巻き込み部が肥大化し円盤状になる。子葉は太く長く唐草まで伸びている。文様全体が肉厚になっている。瓦当厚42mm，文様区幅144mmである。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。1点表採された。(248—7)

軒平部6類 2範型みられる。中心飾りの中央8の字形は沈線がなく，下部がやや大きい。唐草と子葉は4類と同文である。

範型1：248—8・9は瓦当厚40mm，文様区幅140mmである。軒丸部が三つ巴文C右類であり，瓦当径71mm，巴長は2分の1周で断面形は三角形状である。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。被熱による燈変色した資料が多数を占める。F 7—3号土坑から27

点, E 7-3号土坑から6点, G 7-3号遺構から2点, E 8-5号土坑, E 9-5号土坑, F 7-1号遺構, F 7-6号土坑から1点ずつ, 表採7点, 計46点が検出された。

范型2: 瓦当厚40mm, 文様区幅140mmである。色調は黒灰色, 胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。被熱により燈変色した資料が多数を占める。F 7-3号土坑から3点, E 7-2号土坑, E 7-3号土坑, E 7-7号土坑, E 8-5号土坑から1点ずつ, 計7点が検出された。(248-10)

軒平部7類 中心飾りの8の字形は沈線がなく上部が大きい。脇は外線が太く肉厚である。唐草は4類と同文である。瓦当厚43mmである。色調は黒灰色。焼成は良好堅緻。B 7-1号土坑から1点検出された。(248-11)

軒平部8類 中心飾りの中央8の字形は沈線がなく, くびれが大きい。脇は単線でくびれが大きい。唐草と子葉は4類と同文である。瓦当厚45mm, 文様区幅140mmである。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。B 7-7号土坑から1点検出された。(248-12)

軒平部9類 中心飾りは中央が宝珠形になる。唐草は4類と同文である。子葉は長く唐草までのびている。全体に文様が肉厚である。瓦当幅283mm, 瓦当厚42mm, 文様区幅144mmである。棧瓦部が完存し, 全長258mm, 棧部切り込み側幅227mm, 棧部切り込み長75mm, 同幅38mmである。棧部切り込み側中央に釘穴がみられ, 釘が残存している。軒丸部は連珠三つ巴文C右類である。瓦当径は76mm 巴長は2分の1周弱, 珠文は10個, 径は7mmである。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。検出された遺構と点数は, E 9-1号土坑から4点, B 7-1号土坑, C 6-1号土坑, C 9-4号ピット, E 8-5号土坑から1点ずつ, 表採1点, 計9点検出された。(249-6)

軒平部10類 中心飾りは点珠に達磨状の中央, 先端が膨らむ脇が2単位によって構成されている。唐草はほとんど巻き込みがなく巻き込み部が膨らんでいる。子葉は短い。文様は全体に肉厚で丸味がある。瓦当厚42mm, 文様区幅142mmである。軒丸部は三つ巴文C右類である。瓦当径75mm, 巴長は2分の1周, 尾は細く, 断面形は三角形状である。被熱により燈変色しているため, 色調, 胎土, 焼成は不明。検出された遺構と点数は E 7-3号土坑から3点, A 7-3号遺構から1点, 計4点検出された。(249-1・2)

軒平部11類 中心飾りと唐草と子葉からなる。中心飾りは点珠に達磨状の中央, Y字状の脇とY字状の萼によって構成される。唐草は上向きで, 巻き込み部が太くなり先端は尖っている。子葉もY字状である。瓦当厚45mm, 文様区幅144mmである。被熱により燈変色しているため色調, 胎土, 焼成は不明。検出された遺構と点数は, E 7-3号土坑から2点, F 7-3号遺構から3点, 表採1点, 計6点検出された。(249-3)

軒平部12類 2范型みられる。文様構成は11類と同じである。中心飾りの萼がへの字状であり, 子葉が単線である。被熱により燈変色しているため, 色調, 胎土, 焼成は不明。

范型1: 瓦当厚43mm。F 7-3号遺構から2点, E 8-5号土坑から1点, 計3点検出された。

(249-4)

箆型 2 : 瓦当厚42mm, 文様区幅146mmである。B 7-8号土坑から1点検出された。

(249-5)

軒丸部三つ巴文は3箆型みられ、いずれもC右である。

軒丸部1類 瓦当径75mm, 内区径47mm。巴長が3分の2周弱と長く尾が細く、断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。C 9-8号土坑から2点検出された。(250-3)

軒丸部2類 瓦当径78mm, 内区径38mm。巴長は2分の1周弱、断面形はドーム状である。被熱により澄変色しているため、色調、胎土、焼成は不明。E 8-5号土坑から3点、E 7-3号土坑、F 7-3号遺構から1点ずつ、計5点検出された。(250-2)

軒丸部3類 瓦当径71mm, 内区径44mm。250-1は巴長は4分の1周と短く、断面形が台形状である。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。E 8-5号土坑から2点が検出された。

軒丸部連珠三つ巴文は7箆型みられ、7類が左以外はC右である。

軒丸部4類 瓦当径74mm, 内区径27mm。珠文数8個。巴長は短く、断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。B 8-1号土坑から1点検出された。(250-4)

軒丸部5類 瓦当径77mm, 内区径28mm。珠文数8個。巴長は2分の1周弱、断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。B 8-1号土坑から1点検出された。(250-5)

軒丸部6類 瓦当径77mm, 内区径27mm。珠文数8個。巴長は2分の1周弱、断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。B 8-1号土坑から1点検出された。(250-6)

軒丸部7類 瓦当径75mm, 内区径23mm。珠文数9個。巴長は3分の1周弱、断面形は三角形である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。B 8-1号土坑から1点検出された。(250-7)

軒丸部8類 瓦当径86mm, 内区径39mm。珠文数9個。巴長は2分の1周弱、断面形はドーム状である。色調は暗灰色。焼成は良好堅緻。軒平部左周縁に「山に庄十」の刻印がみられる。1点表採された。(250-8)

軒丸部9類 瓦当径94mm, 内区径31mm。珠文数9個。巴長は2分の1周弱、断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。1点表採された。(250-10)

軒丸部10類 瓦当径92mm, 内区径35mm。珠文数10個。巴長は2分の1周弱、断面形は台形である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。1点表採された。(250-9)

#### 4. 丸瓦 (第250図11, 第251~253図)

丸瓦は4種類みられる。資料は幅と玉縁長が計測可能なものとした。すべての丸瓦は凸面に縦方向のへらなでがなされ、凹面では玉縁、側縁で2度、頭部で1度面取りがなされている。分類は法量(玉縁長など)、凹面の布袋痕、製作痕による。

1類 幅160mm, 玉縁長は31mmである。布袋痕は全体に刺し縫いがなされ、刺し縫いの間から布目がみられる。斜めに抜き取り紐痕がみられる。色調は灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。

C 7-3号土坑から1点検出された。(251-1)

2類 幅150mm前後, 玉縁長30mm以上である。布袋痕は全体刺し縫いがみられ、布目の観察できる資料もある。凸レンズ状に模骨痕もみられる。棒状圧痕は2点みられるが、いずれも右端に4・5本で、先端が丸味帯びている。釘穴をもつ資料は1点みられる。253-1は、全長のわかる資料で、341mmと長く特殊な資料とみられる。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。検出された遺構と点数は、C 4-1号土坑から4点、C 7-3号土坑から3点、C 2-2号土坑から3点、I 5-2号土坑、E11-1号土坑から1点、計12点。(250-11・251-2)

3類 全長300mm前後, 幅150mm前後, 玉縁長26mm以下である。布袋痕は全体に刺し縫いがなされているが、押し潰されて不明瞭になる。棒状圧痕をもつ資料も多く、圧痕は全体にみられ、先端が平坦である。釘穴をもつ資料は10点みられ、軒丸瓦剣梅鉢6類の丸部と同類と考えられる。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。検出された遺構と点数は、B 7-2号土坑から18点、C 7-3号土坑、E 7-3号土坑から2点ずつ、E 8-5号土坑から1点、計23点。(252-1・2)

4類 幅115mm, 玉縁長30・32mmである。玉縁の付け根に幅10mmの溝がある。凹面布袋目は観察できず、棒状圧痕のみがはっきりとわかる。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。

C 3-1号土坑, C 3-3号土坑から1点ずつ検出された。(253-2・3)

#### 5. 平瓦 (第254・255図)

平瓦は法量のわかるものを資料化し、3種類に分類した。

平瓦は、凹面が丁寧に磨かれ狭端、側縁は面取りがなされている。凸面は軽く撫でられる程度で砂粒がみられる。狭端側には弓状の圧痕がみられる。狭端面、側面は丁寧に磨かれ、広端面のみに砂粒などが付着している。3種類ともに色調は灰色~暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。

3類のみ被熱により一部が燈変色している。

1類 全長243mm, 広端幅219mm, 狭端幅206mm, 厚さ18mmと小型である。G 6-2号土坑から1点検出された。(254-1)

2類 全長268~275mm, 広端幅254~254mm, 狭端幅233~240mm, 厚さ17~20mmと中型である。F 8-3号遺構から254-2を含めて3点、C 7-3号土坑から254-3を含めて3点、C 3-3号土坑から255-2を含めて3点、F 8-1号土坑から255-1が1点、E 7-1号土

坑, F 7-2 号土坑, E 7-3 号土坑から 1 点ずつ, 計13点検出された。(254-2・3, 255-1・2)

3類 狭端幅のみわかる資料で282mm, 厚さ23mmと大型である。被熱により一部が燈変色している。C 2-2 号土坑から 1 点検出された。(255-3)

## 6. 棧瓦

棧瓦は軒棧瓦 9 類の棧瓦部として完形が検出された以外は, いずれも小片であり接合することができなかったために資料化にいたらなかった。

軒棧瓦 9 類の棧瓦部249-6 は, 全長258mm, 棧部切り込み側端幅227mm, 棧部切り込み長75mm, 同幅38mm である。棧部切り込み側中央に釘穴がみられ, 釘が残存している。E 9-1 号土坑から検出されている。

## 7. 熨斗瓦 (第256~258図, 第259図 1・2)

熨斗瓦は文様が 8 種類みられる, いずれも均唐草文である。

1類 中心飾りと二反転する唐草と子葉からなる。中心飾りは 8 の字状の中央に外側にくびれをもつ脇区からなり, 唐草は巻き込みが小さく, 子葉は上側にくびれをもち, 湾曲する。1類は凹面に分割線が焼成前に刻まれ, 焼成後に分割されている。色調は灰色~暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。1類は凹面に交差する櫛目があるかないかで細分でき, ある資料を A 類, ない資料を B 類とする。

A 類: 左子葉の違いにより 2 範型が確認できた。凹凸面ともに軽く撫でられたのみで, 砂粒が付着している。厚さ25~27mm, 分割幅158mm である。C 4-1 号土坑から 5 点(256-1・2), E11-1 号土坑から 2 点(256-3), B 3-3 号土坑, B 7-7 号土坑, B 8-2 号土坑, C 3-1 号遺構, C 7-3 号土坑, D11-1 号構, E 8-2 号土坑, E 8-5 号土坑, F 8-1 号土坑から 1 点ずつ, 計15点検出された。(256-1・2・3)

B 類: 中心飾り, 右子葉, 左子葉ともに 5 範型が確認できた。いずれも小片のため三者の関係は不明である。凹面には砂粒の付着があまりみられない。厚さ25~30mm, 分割幅は140mm 前後である。C 4-1 号土坑(256-9, 257-5・6)から10点, C 3-1 号遺構から 5 点, C 2-2 号土坑(256-5), C 7-3 号土坑(256-11, 257-1) E11-1 号土坑(256「4)から 4 点ずつ, C 3-3 号土坑, E 7-1 号土坑, F 8-1 号土坑から 3 点, B 7-2 号土坑(256-6), B 7-7 号土坑(256-12), C 2-1 号土坑, C 2-3 号土坑(256-10, 257-3) D 7-1 号土坑(256-7), D 8-1 号土坑(257-4), D 8-13号ピット(256-8) D 9-1 号土坑から 2 点ずつ, B 3-1 号土坑(257-2), C 7-2 号土坑, E 7-6 号土坑, F 8-2 号土坑, I 5-2 号土坑から 1 点ずつ, 表採 7 点, 計63点検出された。(256-4~12, 257-1~6)

- 2類 1類と文様構成は同じであるが、中心飾りに点珠がみられ、子葉が長くなり線が細めになり全体にシャープになっている。中心飾りで2範型確認でき、25点みられる。分割線は1類と同じである。凹面はへら磨きがなされている。分割幅は138mmである。色調は灰色～暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。C4-1号土坑から6点(257-7~9)、C7-3号土坑、F8-1号土坑から2点ずつ、B3-1号土坑、B3-3号土坑、B7-2号土坑、B7-7号土坑、C3-1号遺構、C3-3号土坑、C8-1号土坑、C9-8号土坑、D9-1号土坑、D11-1、号溝、E7-3号土坑、E11-1号土坑、H5-1号土坑から1点ずつ、計25点検出された。(257-7~9)
- 3類 達磨形の中心飾りと、巻き込みの深い唐草が4反転する。1範型のみである。分割線は1類と同じである。凹面には砂粒の付着がみられる。分割幅は147~154mmであり、分割前の平面形が台形のためである。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。E8-5号土坑から8点検出された。(258-1・2)
- 4類 1類と文様構成が同じであるが、中心飾りの円形の2単位になり脇区が下方で完全につながっている。2範型みられる。子葉は2類よりも長い。線は全体に細くなっている分割線は凸面にみられる。凹面はへら磨きがなされている。全長361mm、全幅245mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。E8-5号土坑から4点(259-1・2)、E7-5号土坑、E7-6号土坑、C9-8号土坑から1点ずつ、計7点検出された。
- 5類 中心飾りに2反転する唐草と子葉2単位からなる。文様がすべてつながっている。258-7・8と258-9・10の2範型みられる。中心飾りは、中央に円形が2単位、脇区は下部でつながり、上部で先端が接している。子葉は山が2つで先端は上を向いている。分割線は凸面に刻まれている。凹凸面ともにへら磨きがされている。同範で法量の違いがみられ、258-7は全長379mm、分割幅146mmと258-8は全長340mm、分割幅109mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。被熱により燈変色して資料が多い。F7-3号遺構から34点、E8-5号土坑から5点(258-7・8)、F9-1号土坑から2点、B7-1号土坑、B7-6号土坑、C3-1号遺構、D8-1号土坑(258-9)から1点ずつ、表採6点(258-10)、計51点検出された。
- 6類 小片で、中心飾りの一部と唐草が残存している。唐草はつながっている。全体に線が細い。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。C3-1号遺構から1点検出された。(258-3)
- 7類 小片で、波打つ唐草に子葉が2枚みられる。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。7類は文学部に良好な資料がみられる。1点表採された。(258-4)
- 8類 文様が陽刻である。文様は重線の唐草と重線の三ヶ月状で外線に突起がみられる唐草のみ確認できる。凹面に細い櫛目がみられる。厚さは5が40mm、6が36mmと厚い。色調は暗灰色。胎土は内部が暗灰色で外側が明灰色。焼成は良好。258-5がF7-6号土坑、258-6がC3-3号土坑から1点ずつ検出された。(258-5・6)

8. 特殊瓦 (第259図3～5)

- 1類 平面形が長方形で、断面形は側縁近くで屈曲し細くなっている。凹面は全体に布目が残りに、側縁は平たく面取りがされている。凸面は丁寧に磨かれている。中央に溝がみられる。資料にはみられないが、反対側の木口が凹面側に突起をもち、凸面溝と噛み合わせられるようになっている。平瓦として使用されたと思われる。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。G 6-4号土坑から1点検出された。(259-5)
- 2類 平瓦か棧瓦である。木口に砂粒が付着しているので広端側と思われる。凸面に5条の櫛目が横に刻まれている。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。B 7-1号土坑(259-3)、F 7-3号遺構(259-4)から1点ずつ検出された。

9. 道具瓦 (第260・261図)

輪違い瓦、面戸瓦、筋違瓦がみられる。

輪違いは棟込み瓦の一種である。2種類に分類できる。

- 1類 平面形は台形になるもの。(260-1～4)

型造りで湾曲を与え、凸面をへらけずりし、凹面は側縁と広端側を面取りする。凹面には布袋痕が見られず、横筋が明瞭にみられる。法量にはばらつきがあり、長さ107～125mm 広端幅140～156mm 狭端幅86～123mm である。被熱により燈変色しているため、色調、胎土、焼成は不明。F 7-3号遺構から17点、F 9-1号遺構から1点、計18点が検出された。

- 2類 平面形は六角形になるもの。(260-5)

凸面の面取りが全体にわたって5単位みられ、全体に刺し縫いが施されている布袋痕がみられる。丸瓦を焼成前に切断して製作したものとおもわれる。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。B 7-2号土坑から1点検出された。

面戸瓦は棟に丸瓦と平瓦が接するさいにできる隙間を埋めるために使用される。

凸面はへらけずりがなされ、凹面は側縁木口ともに面取りされ、布袋痕がみられる。丸瓦を切断して製作されたと思われる。法量が3種類みられ、幅110mm, 127mm, 153mm である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。261-1はC 4-1号土坑から1点、261-2・3はB 7-2号土坑から1点ずつ検出された。(261-1～3)

筋違瓦は屋根の谷筋に使用される。

平瓦を斜めに切断し、三角形にし切断面に垂れを接合する。接合面には櫛目が刻まれ接合し易くなっている。色調は灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。1点表採された。(261-4)

10. 鬼瓦 (第262図1～4)

鬼瓦は破片が多いため、部位のわかる4点を資料化した。

262-1・2は若草部の残存であり、表面は突線により文様が表現され、丁寧に仕上げられている。

る。裏面は製作痕がよく残っているが、周縁は内外ともに面取りされている。色調が暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。1はE11-1号土坑、2はE7-6号土坑から検出された。

262-3は部位は不明だが、表面は突線で文様が表わされている。被熱により燈変色。F7-3号遺構から検出された。

262-4は飾り瓦の腕と思われる。腕は中空になっており、付け根に固定するための穴がみられる。色調が銀灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。表採された。

#### 11. 塼 (第262図5)

断面が85mmと厚く塼として使用されていま可能性がある。片面が傾斜をもち薄くなっている。平坦の面は丁寧に磨かれている。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。B7-7号土坑から検出された。

#### 12. 海鼠瓦 (第263・264図)

海鼠瓦は4種類みられる。海鼠瓦は屈曲がなく板状で、正方形である。

1類 辺の中央にくぼみがあり、釘で瓦を固定するために使用されていた。表面はへら磨きされ縁が面取りされていて、辺にそって漆喰痕が帯状に残っている。裏面は軽くなでられている。辺長は282mm、厚さ20mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。1は被熱による部分的に燈変色している。263-1はB10-3号土坑、263-2はC4-1号土坑から検出された。(263-1・2)

2類 表面がなでられ、縁が面取りされている。釘穴、くぼみはみられない。また漆喰痕も明瞭でない。辺長は241mmと1類に比して短い。厚さ19mm。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。F8-3号遺構から検出された。(264-1)

3類 釘穴のみみられ、表面では擂鉢状に落ち込み、径8mmで真直落ち込む。厚さ21mm。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。G6-4号土坑から検出された。(264-2)

4類 三角形の粘土板に長方形の粘土板を接合している。接合面には櫛目が刻まれている。三角形の裏面は楕円形にくりぬかれ、長方形との接合付近に釘穴が見られる。長方形の表面は磨かれている。厚さ43mm、長方形の短幅69mm。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。B3-1号土坑から検出された。(263-3)

#### 13. 刻印 (第265図)

丸瓦に7種類、平瓦に4種類、棧瓦に14種類、軒棧瓦に1種類みられる。

丸瓦(265-1~8)は凸面玉縁よりの中央に刻印が捺されている。1は「丸輪」、2は「丸に二」、3・4は「四つ菱」、5は「山に庄」、6は「太」、7は「九つ菱」、8は「12弁の菊花」。6のみ被熱により燈変色している。



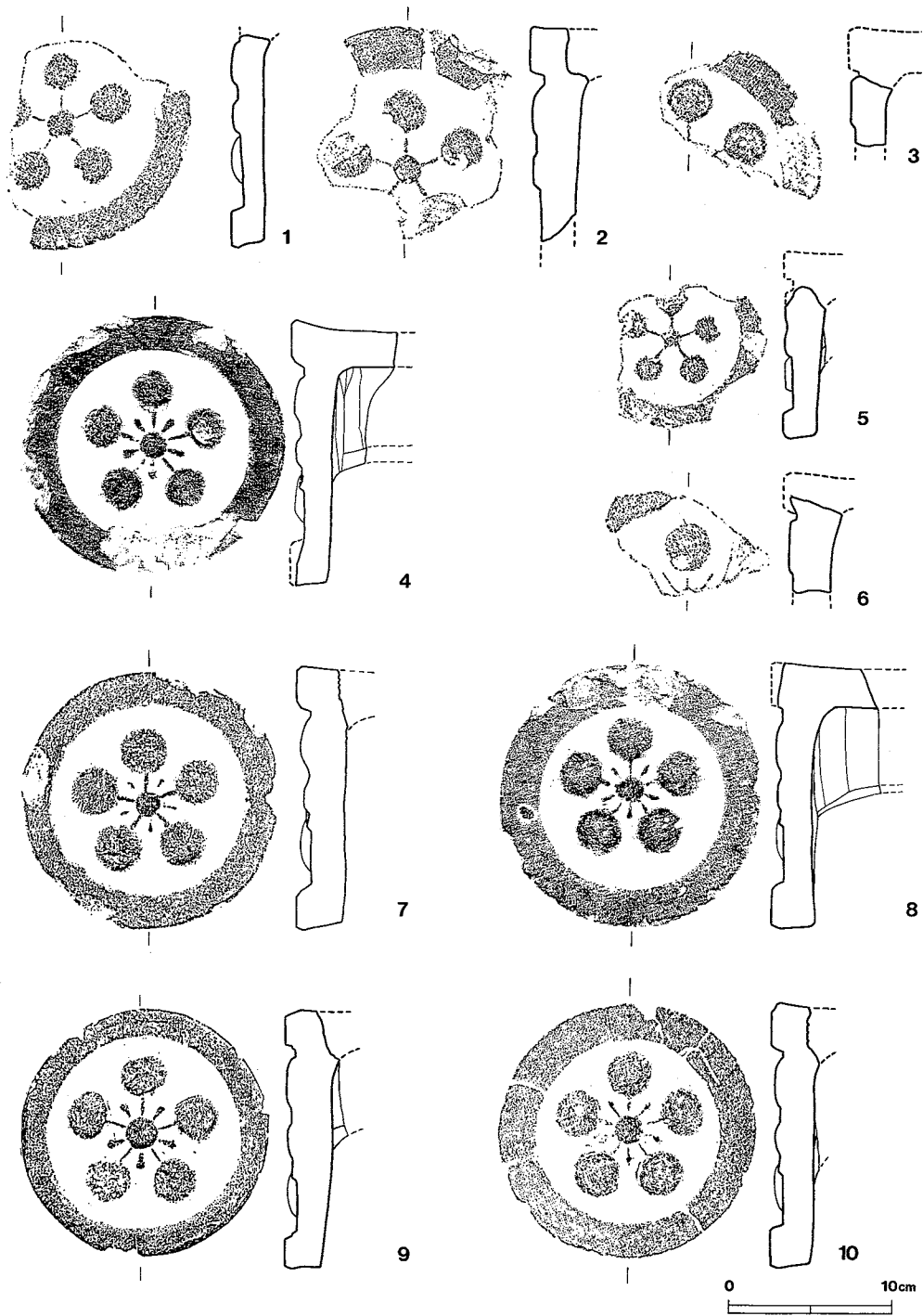
### 報告篇第三章 江戸時代の調査 I

平瓦 (265-9~12) は 9 は狭端面左端近く, 10 が狭端面右端近く, 11・12 は狭端面中央に捺されている。9 は「三角」, 10 は「8 弁の菊花」, 11 は「丸輪」, 12 は「丸に点」。

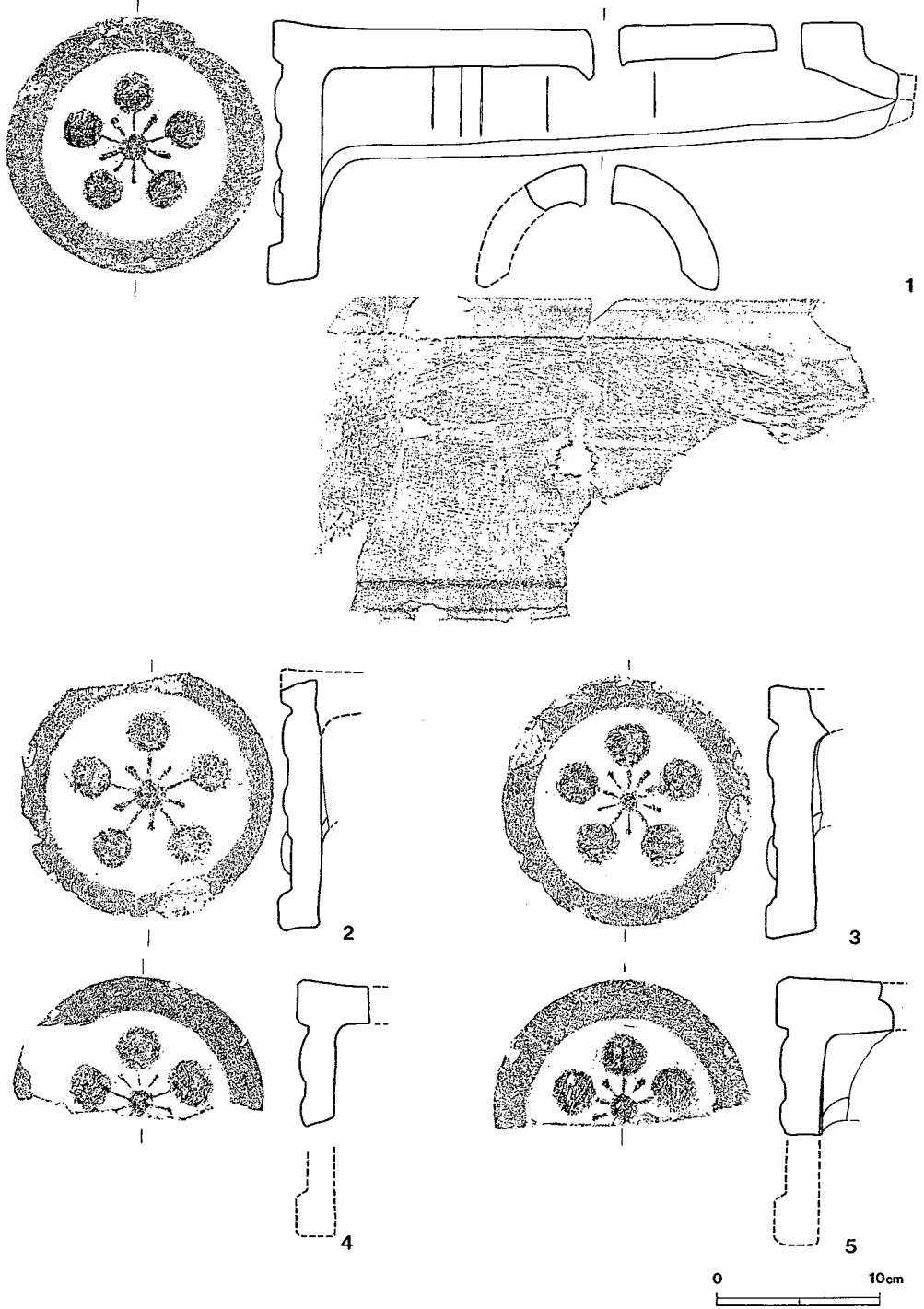
棧瓦 (265-13~31) は平部切り込み側の中央に捺されている。13~16 は「四角に音」, 17・18 は「山に庄」, 19 は「山に庄三」, 20 は「山に庄六」, 21 は「山に庄七」, 22 は「山に庄十四」, 23 は「山に庄十九」 24. 「四角に斜線」, 25 は「太」, 26 は「丸に太」, 27・28 は「丸に二」, 30 は「四角に藤尾」, 31. は「四角に参濃美」。13 と 30 のみ被熱により燈変色している。

軒棧瓦は 32 が右周縁に 33 が左周縁に 33 が左周縁に捺されている。32 は「丸に長」。33 は「山に庄十」。

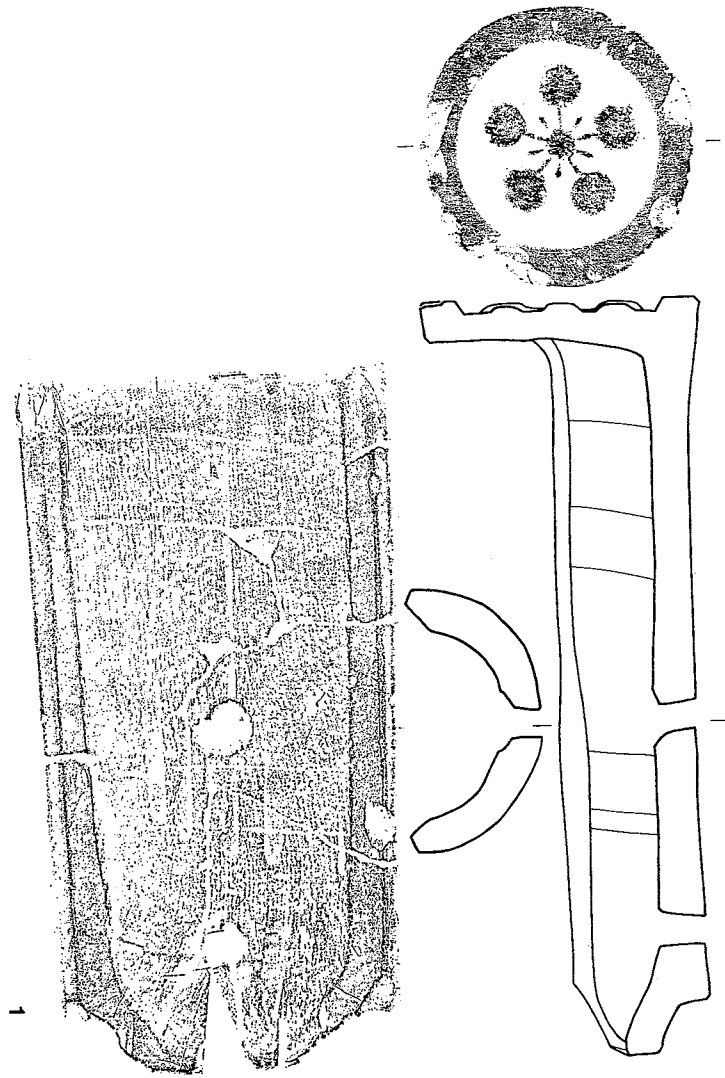
B 3-1 号土坑から 14・20・32, B 7-1 号土坑から 17・18・19・21・23・30・31, C 3-1 号遺構から 11・27, C 4-1 号土坑から 4・7・12, C 6-1 号土坑から 15・16・C 6-1 号溝から 15, D 7-1 号土坑から 3, D 8-1 号土坑から 5, D 9-1 号土坑から 28, D11-1 号溝から 9・13・25, E 7-1 号土坑から 24, E11-1 号土坑から 8, F 8-1 号土坑から 1・2, I 5-2 号土坑から 10 が検出された。6・22・26・33 は表採された。 (加藤 晃)



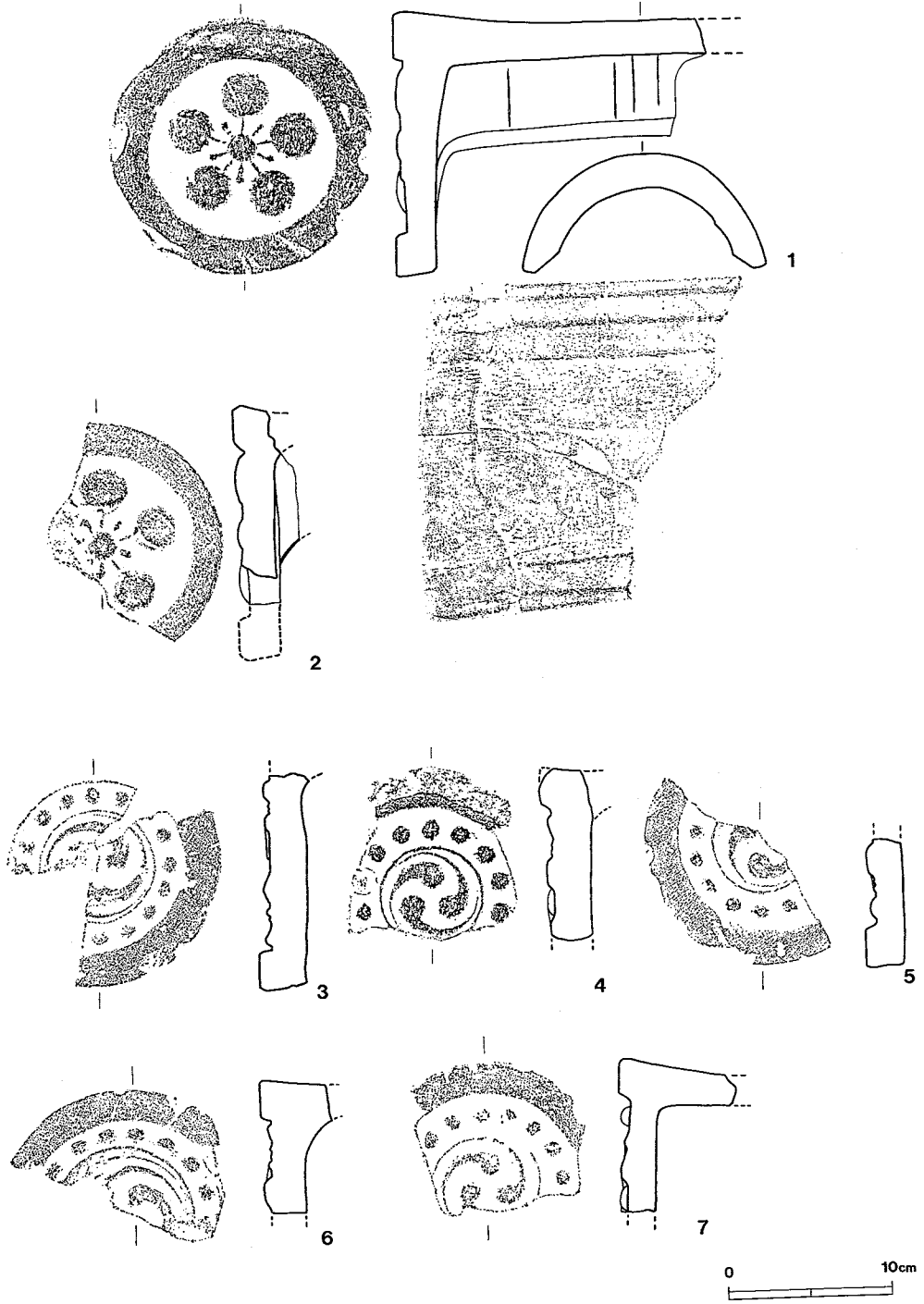
第242図 瓦(1)



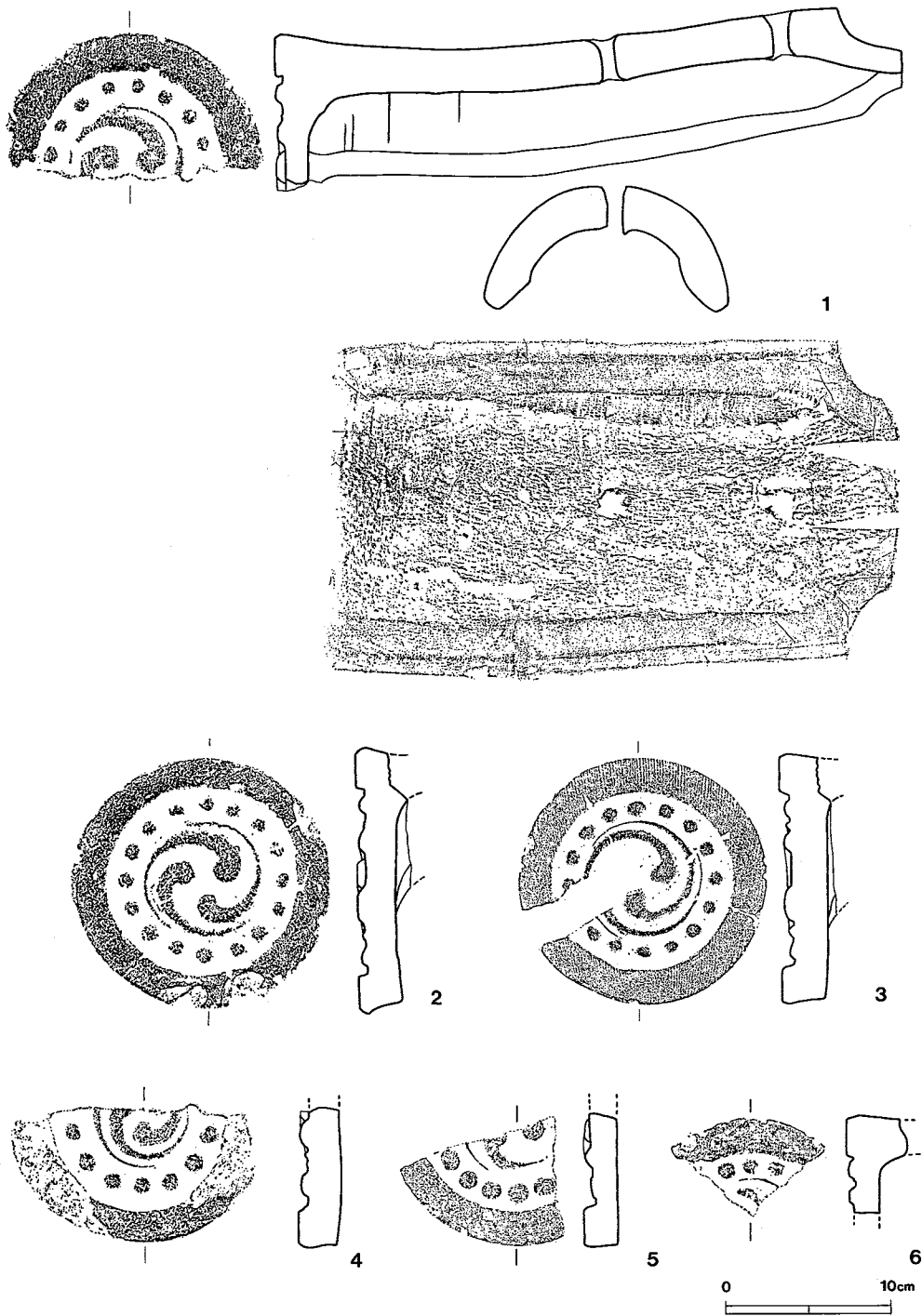
第243図 瓦(2)



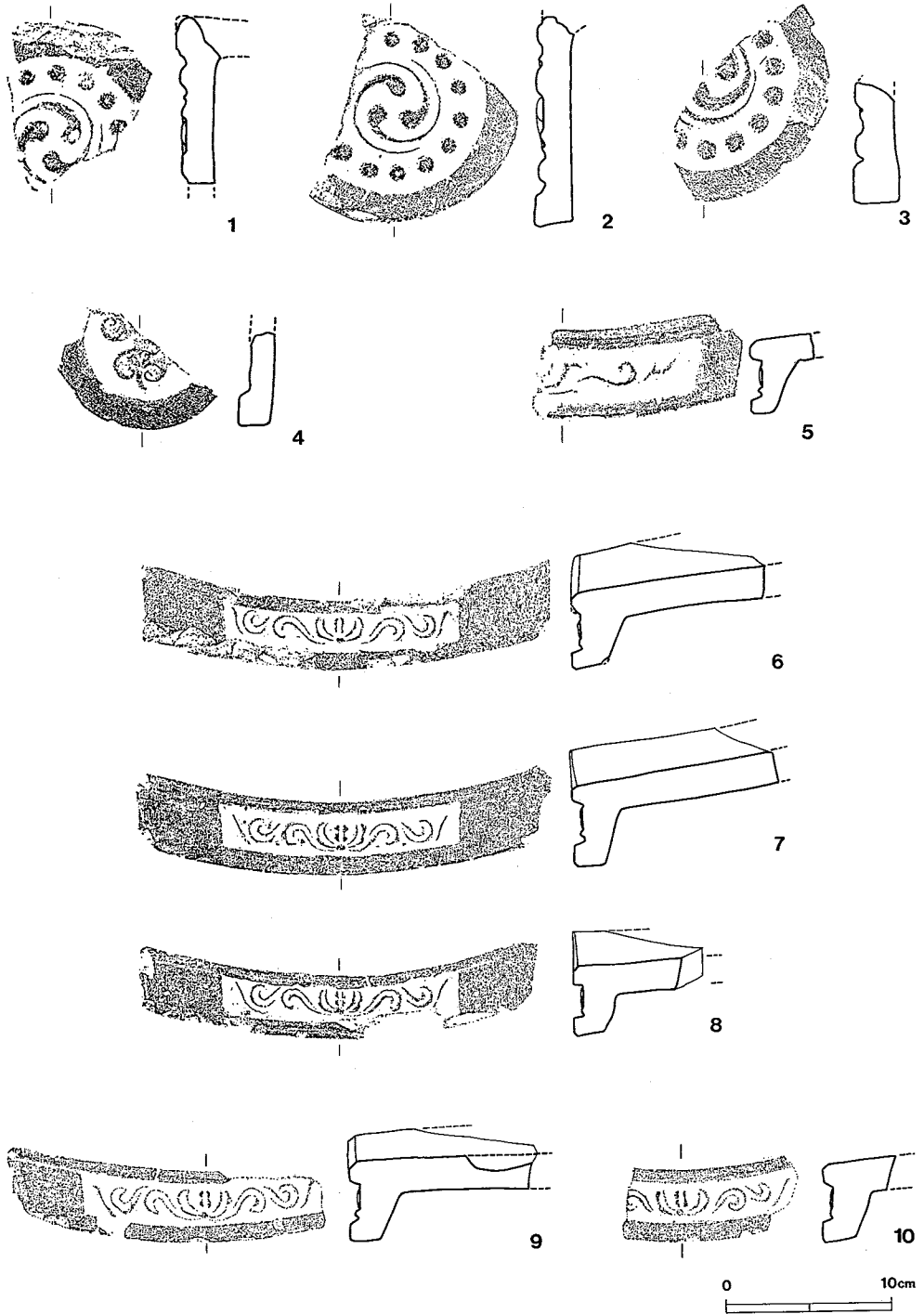
第244図 瓦(3)



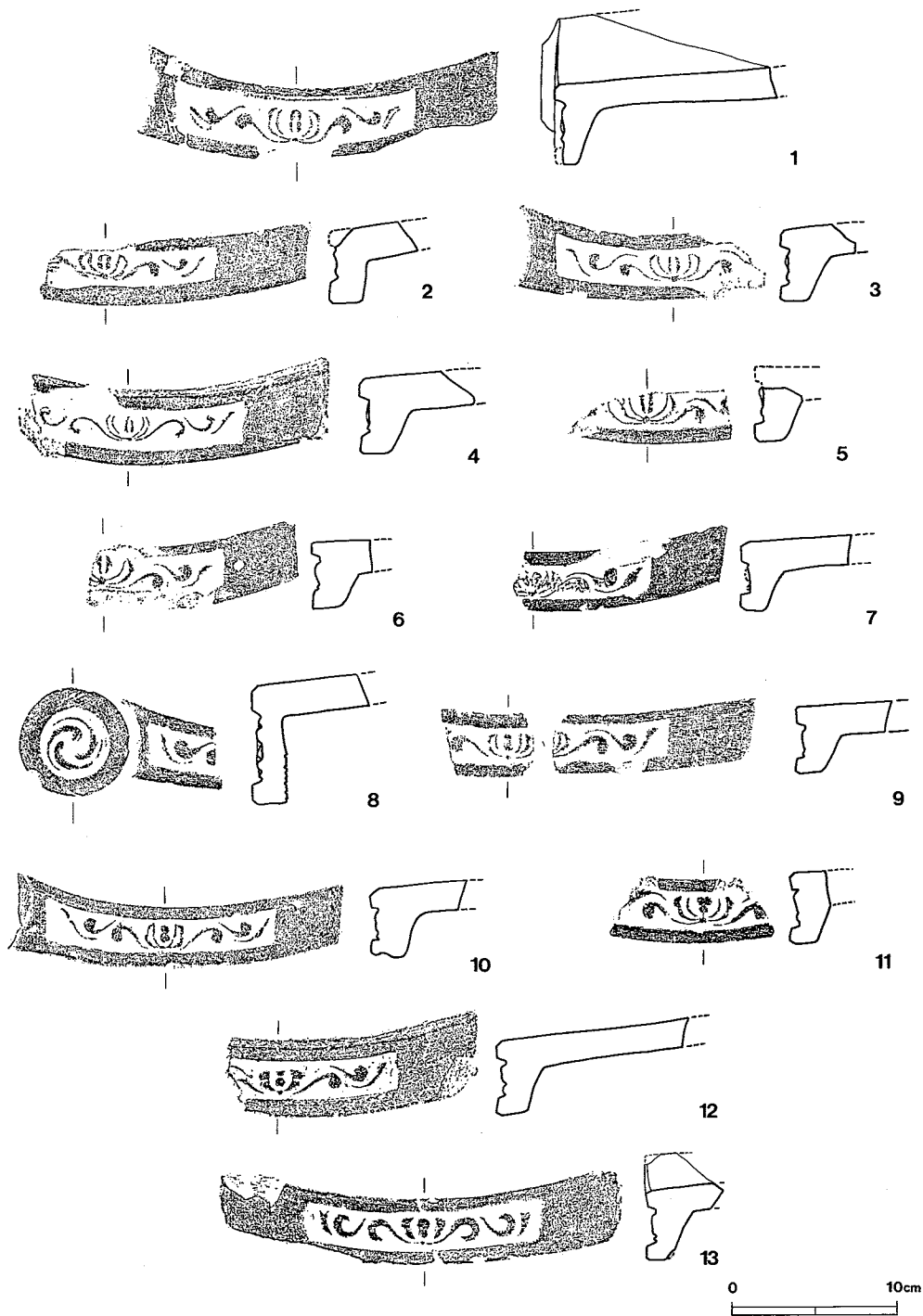
第245図 瓦(4)



第246图 瓦(5)

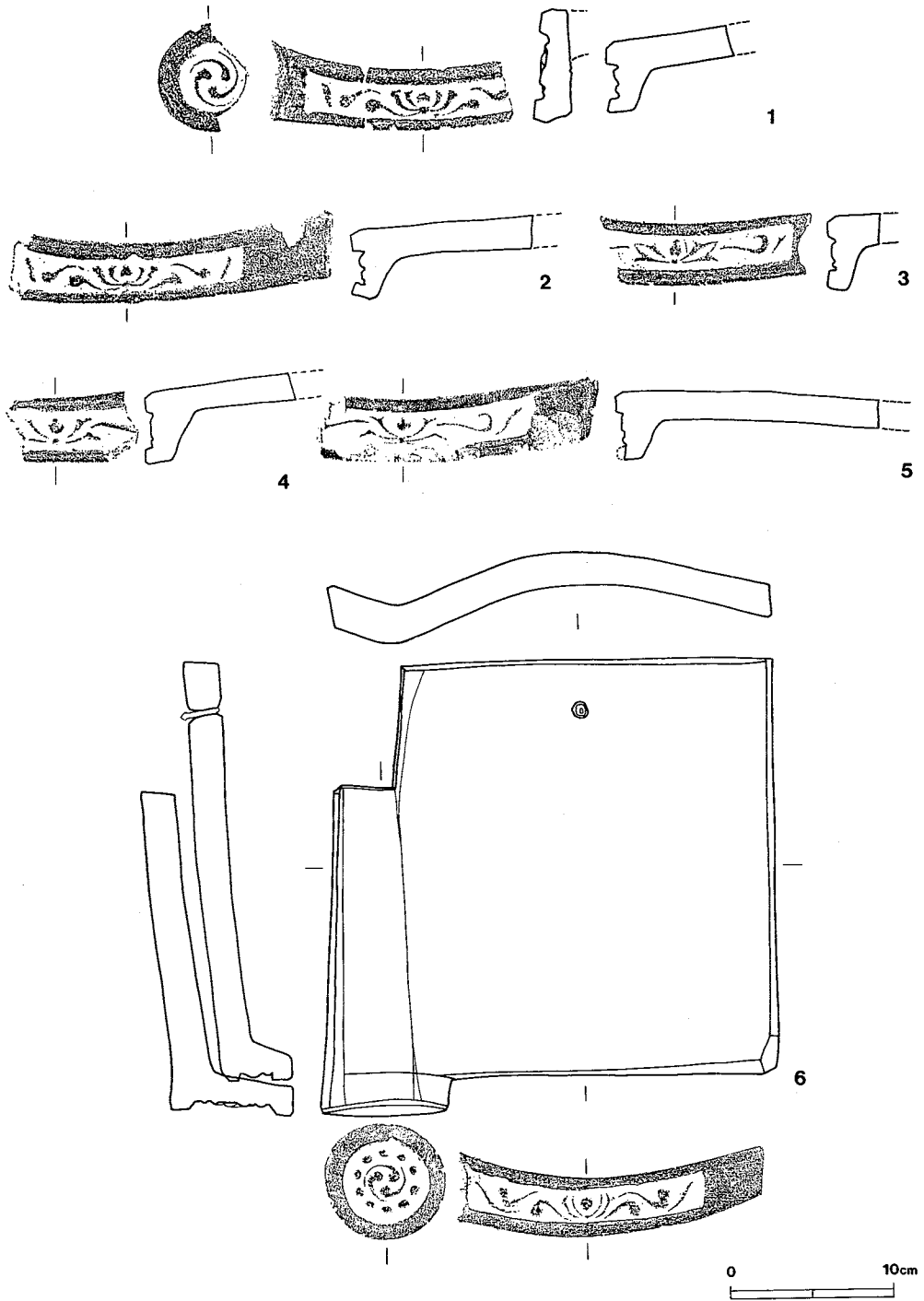


第247図 瓦(6)

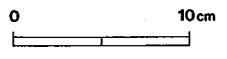
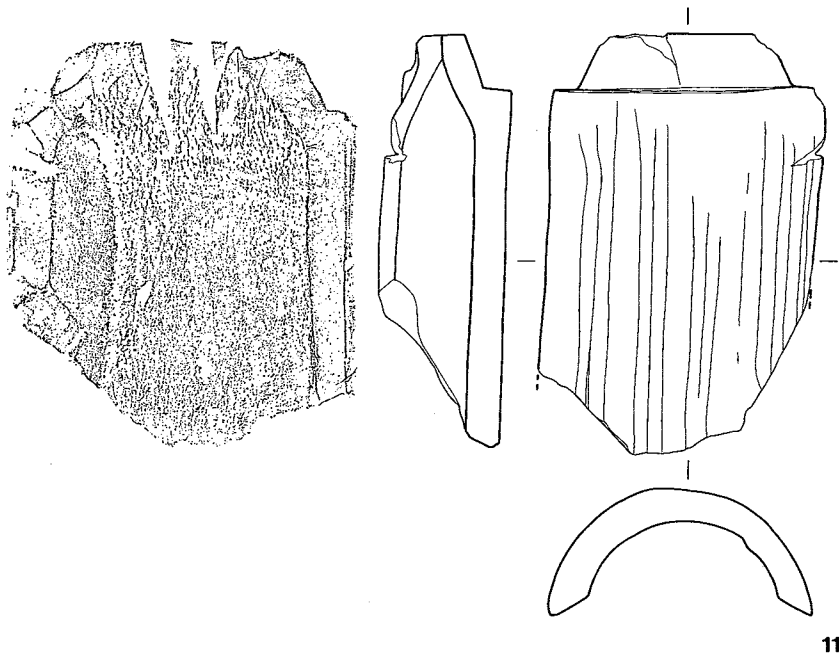
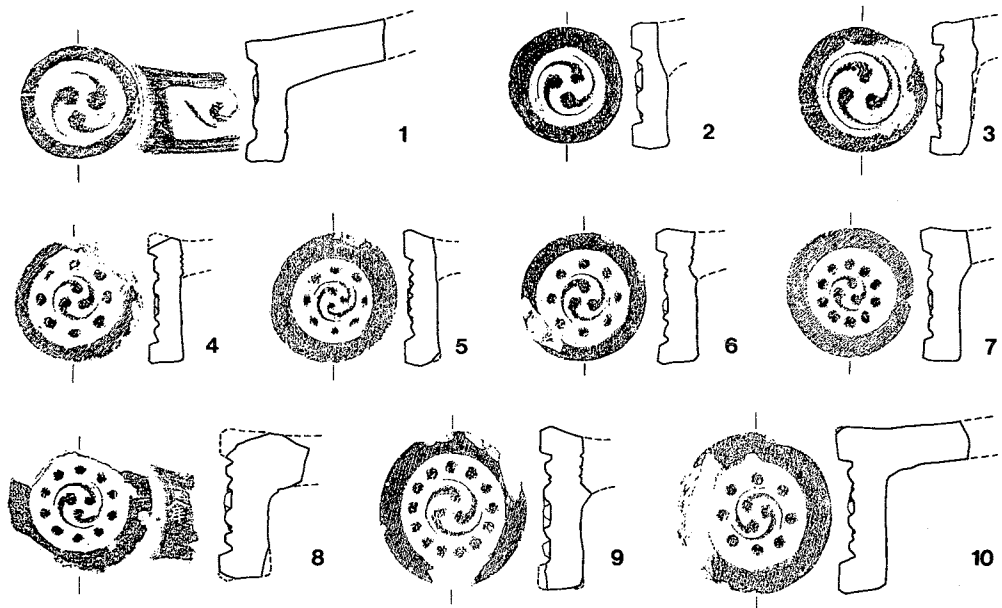


第248图 瓦(7)

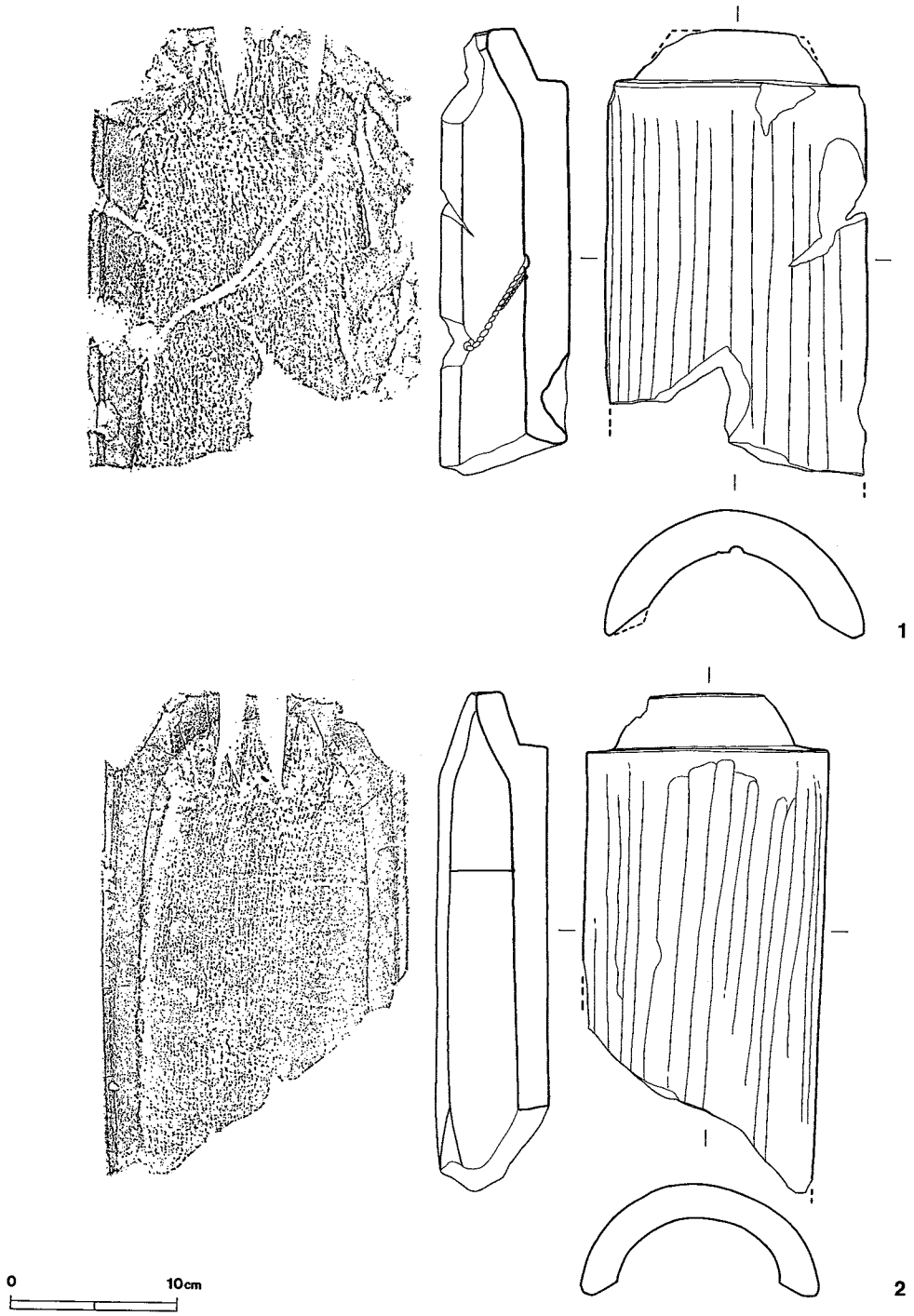




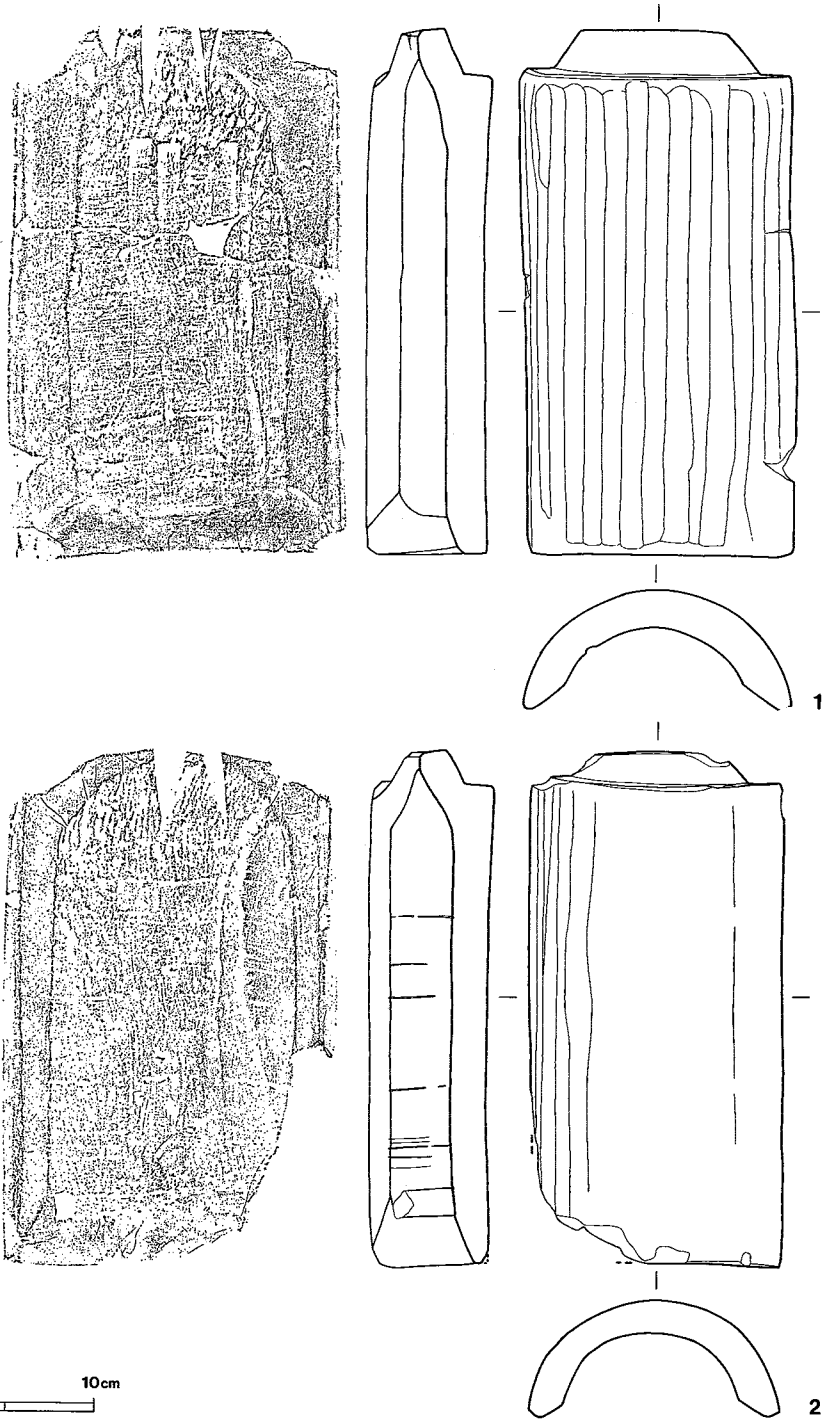
第249図 瓦(8)



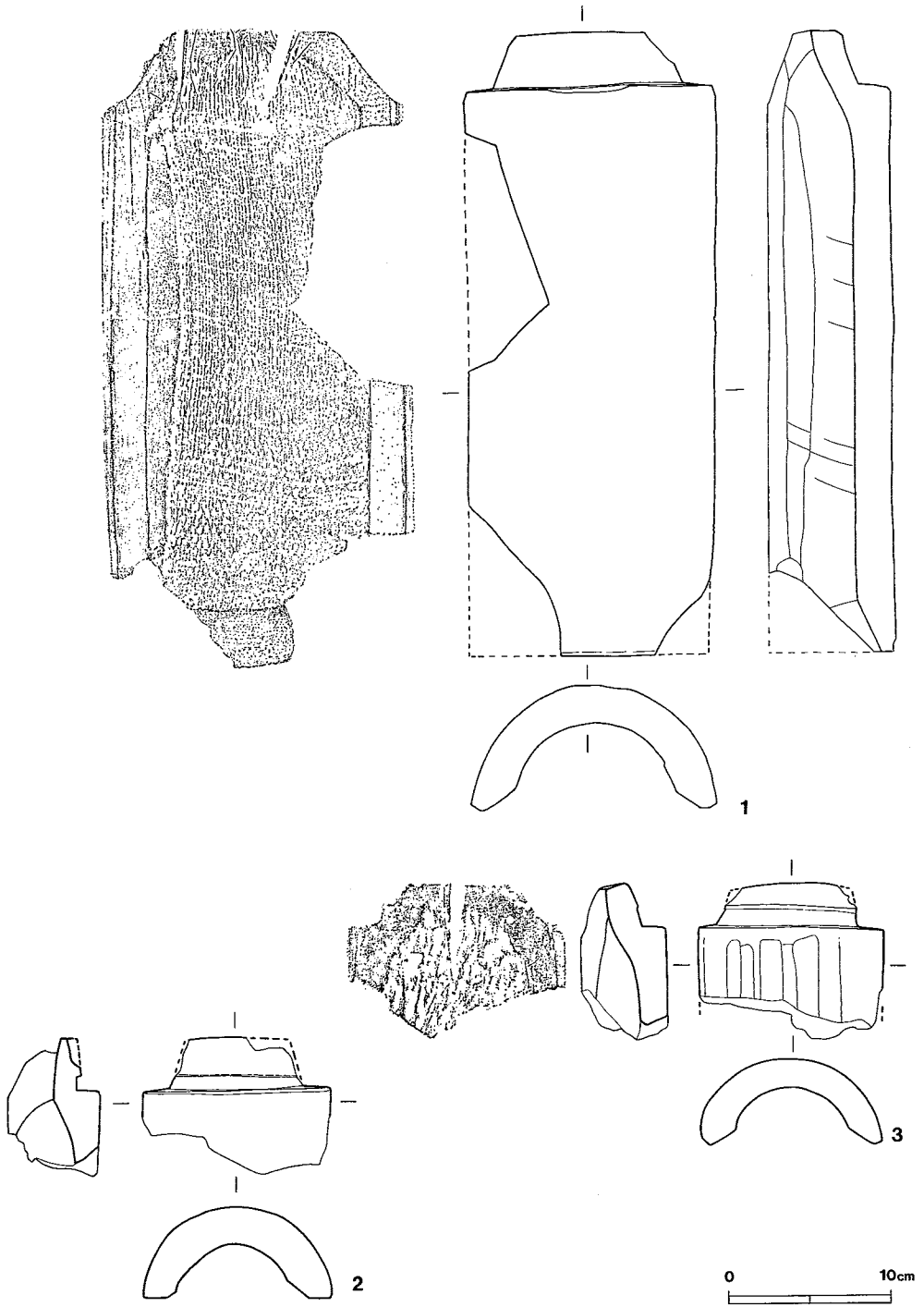
第250图 瓦(9)



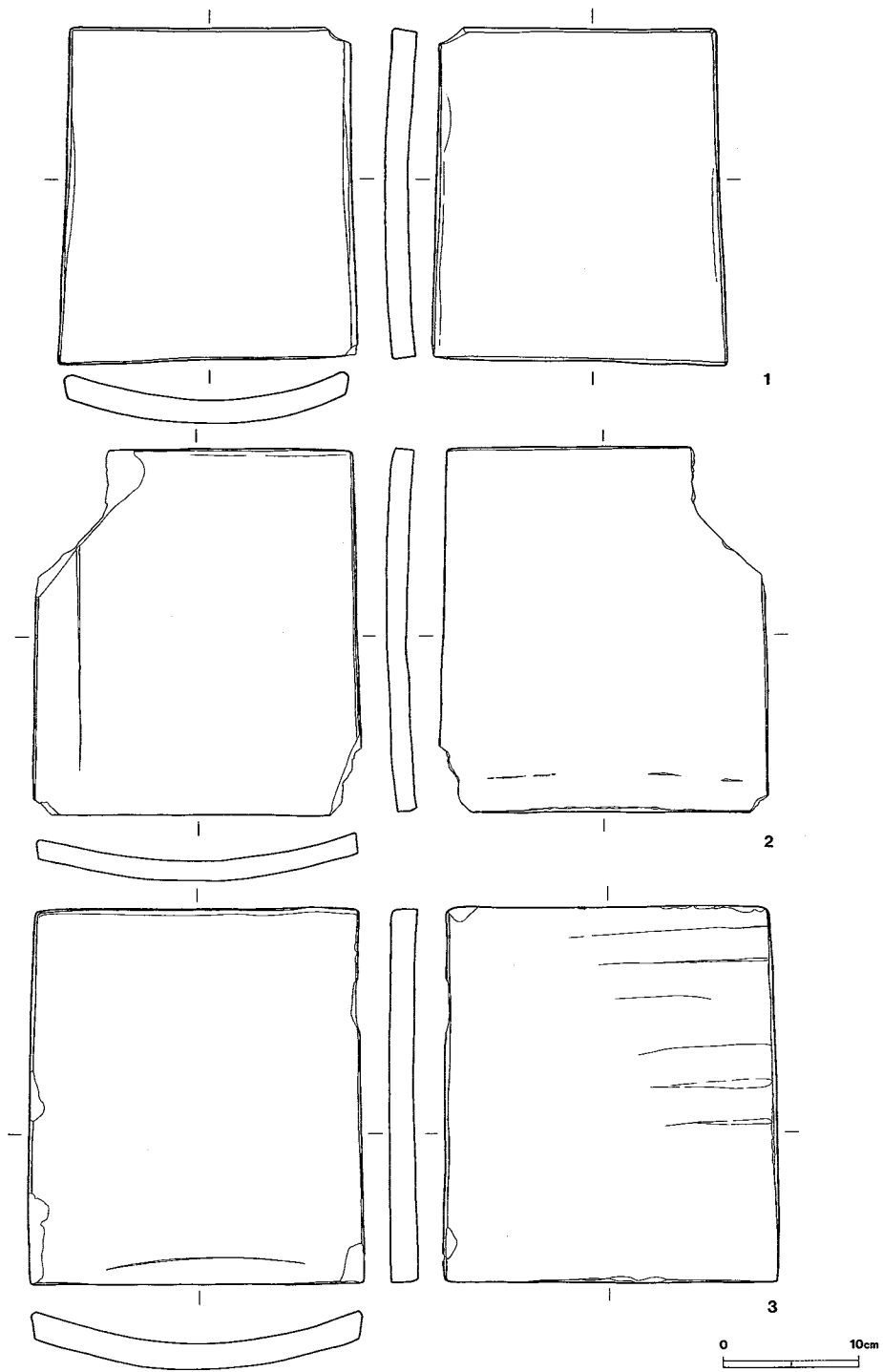
第251図 瓦(10)



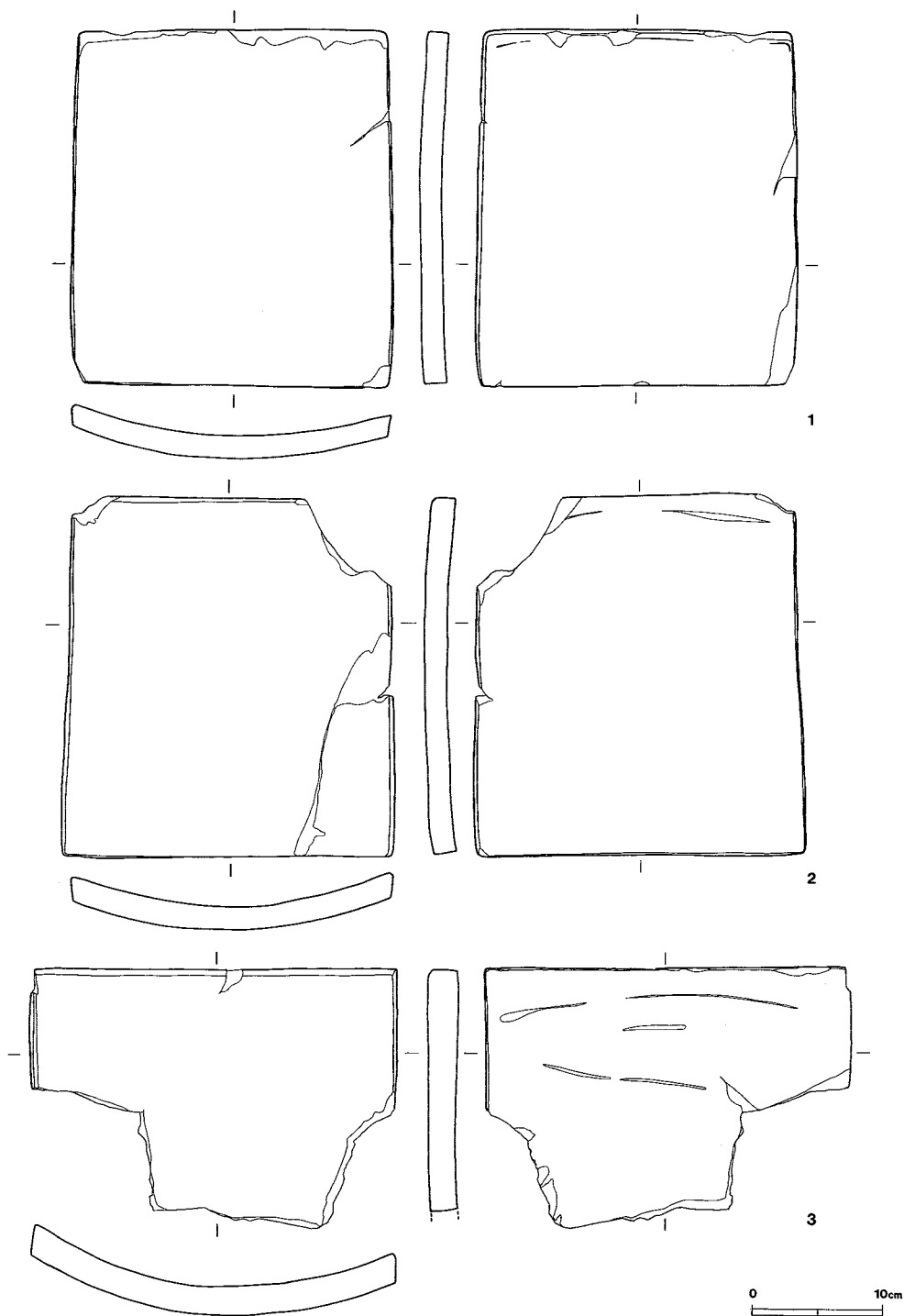
第252図 瓦(11)



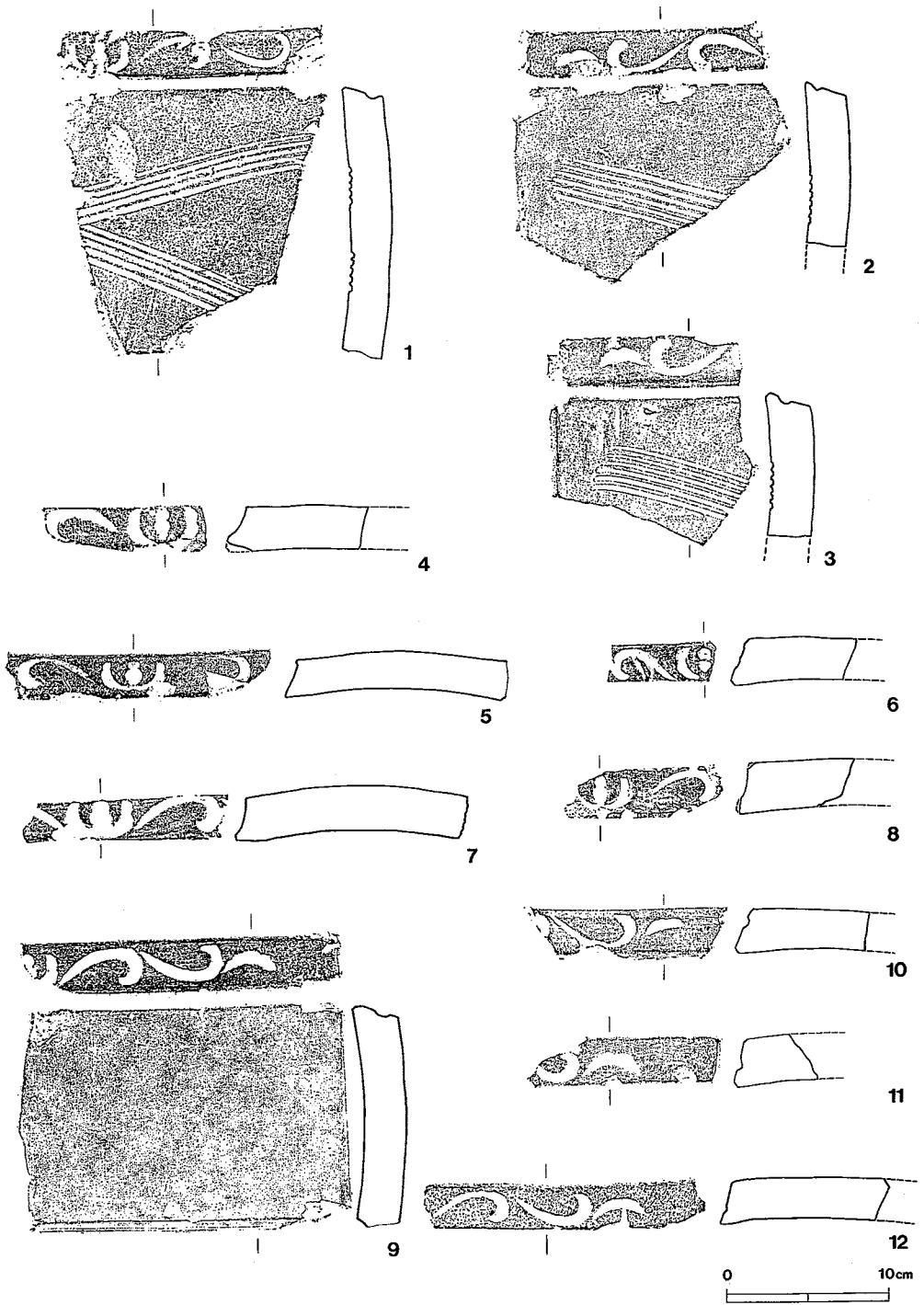
第253図 瓦(12)



第254图 瓦(13)

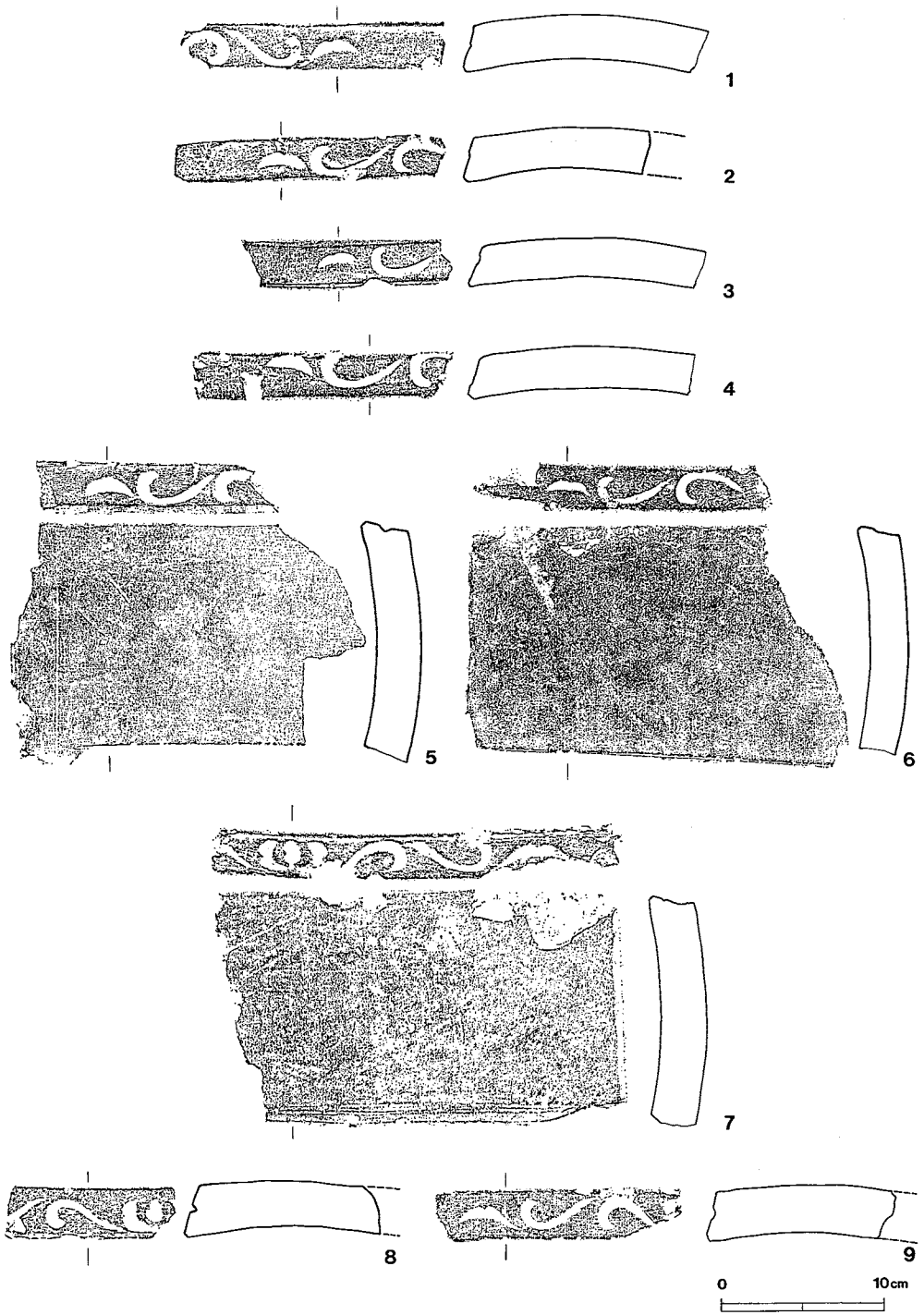


第255図 瓦(14)

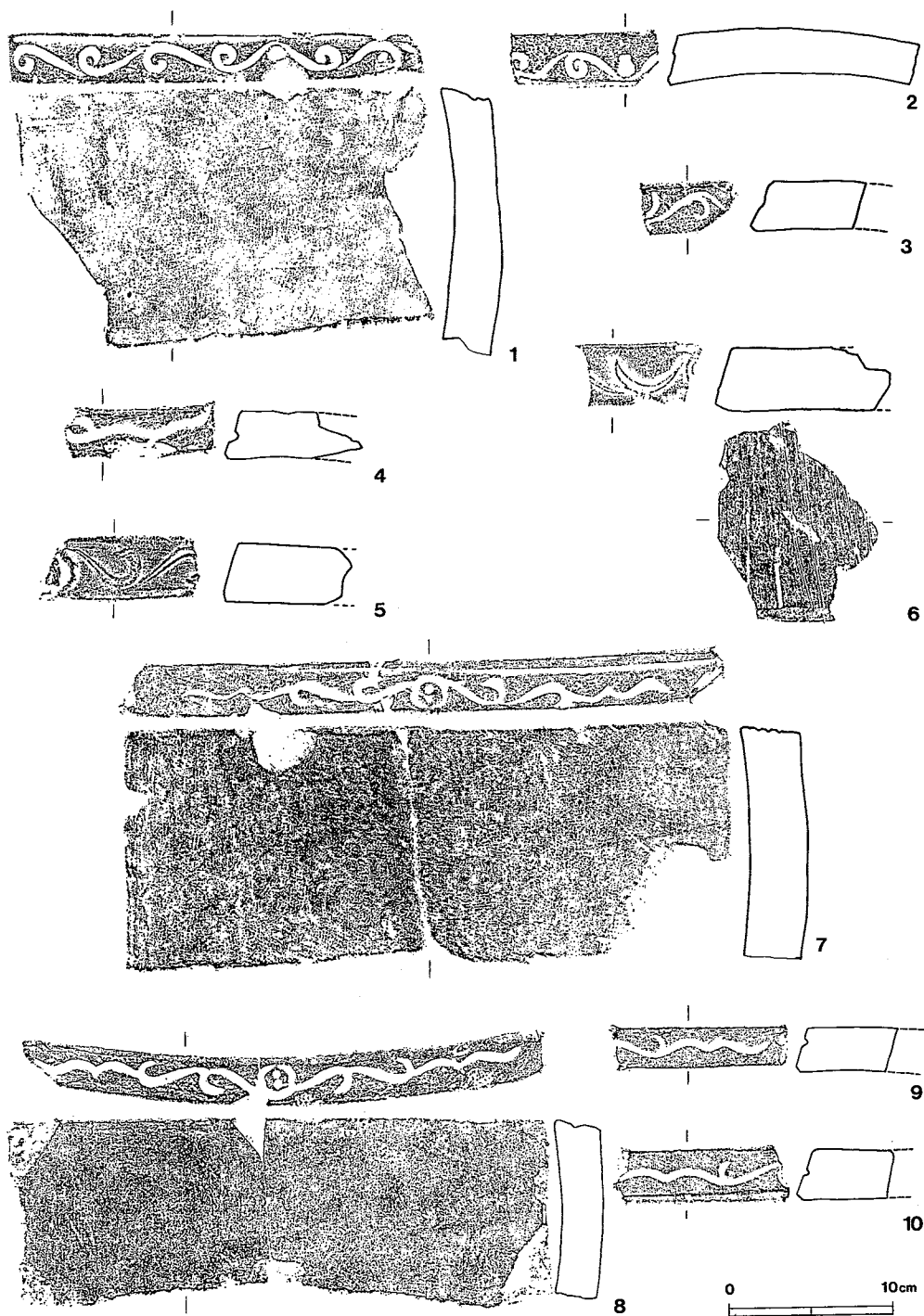


第256图 瓦(15)

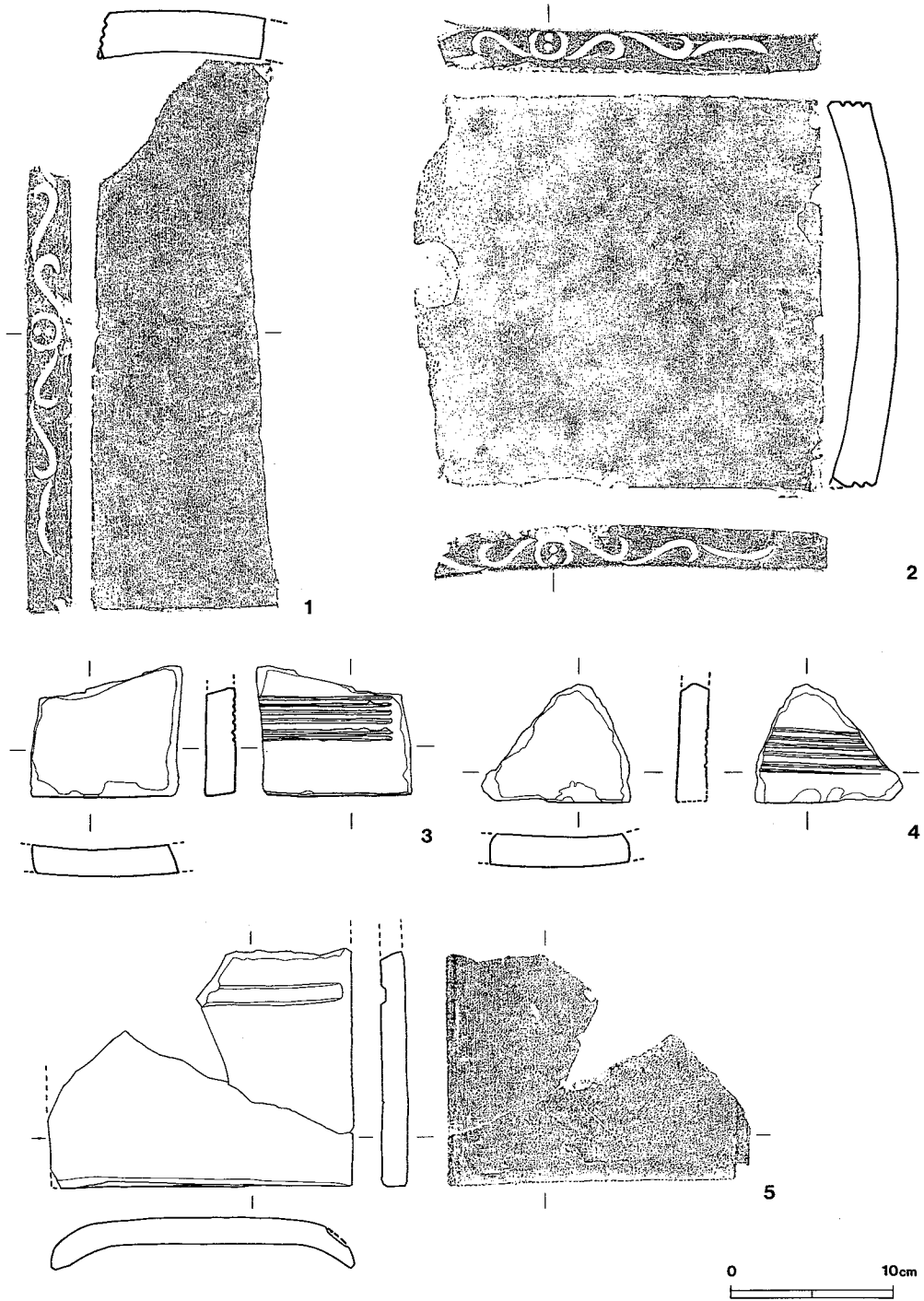




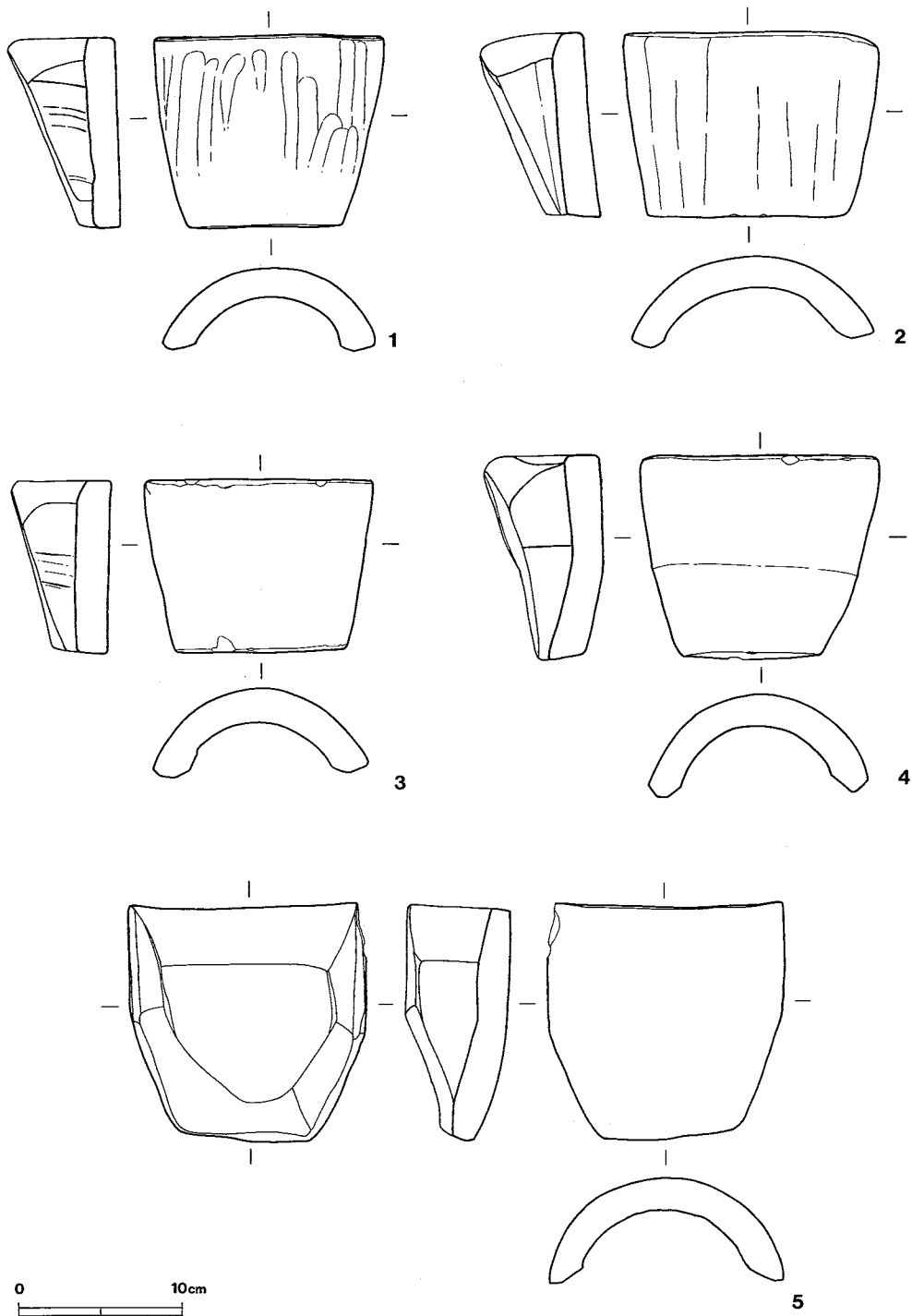
第257図 瓦(16)



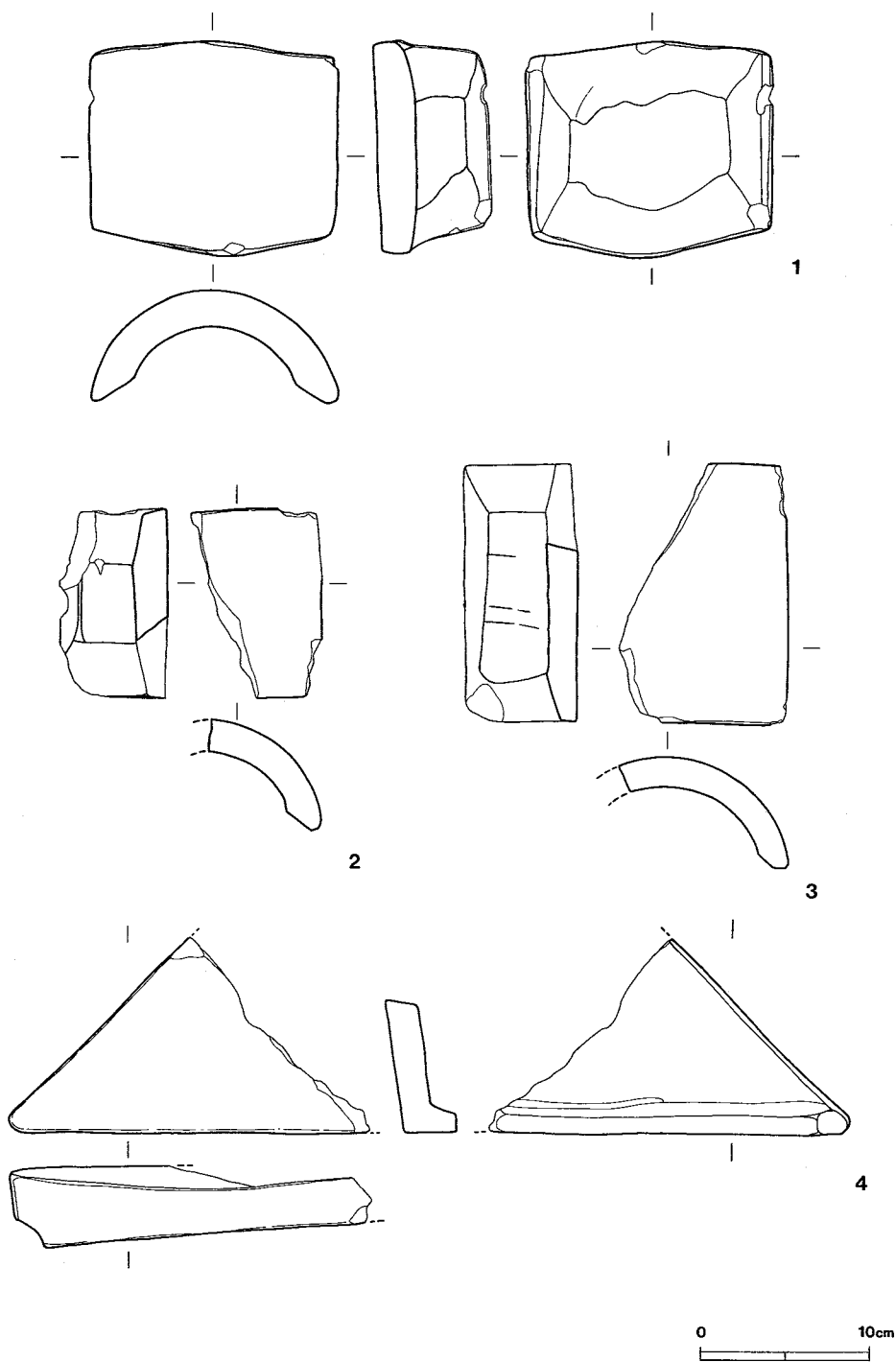
第258图 瓦(17)



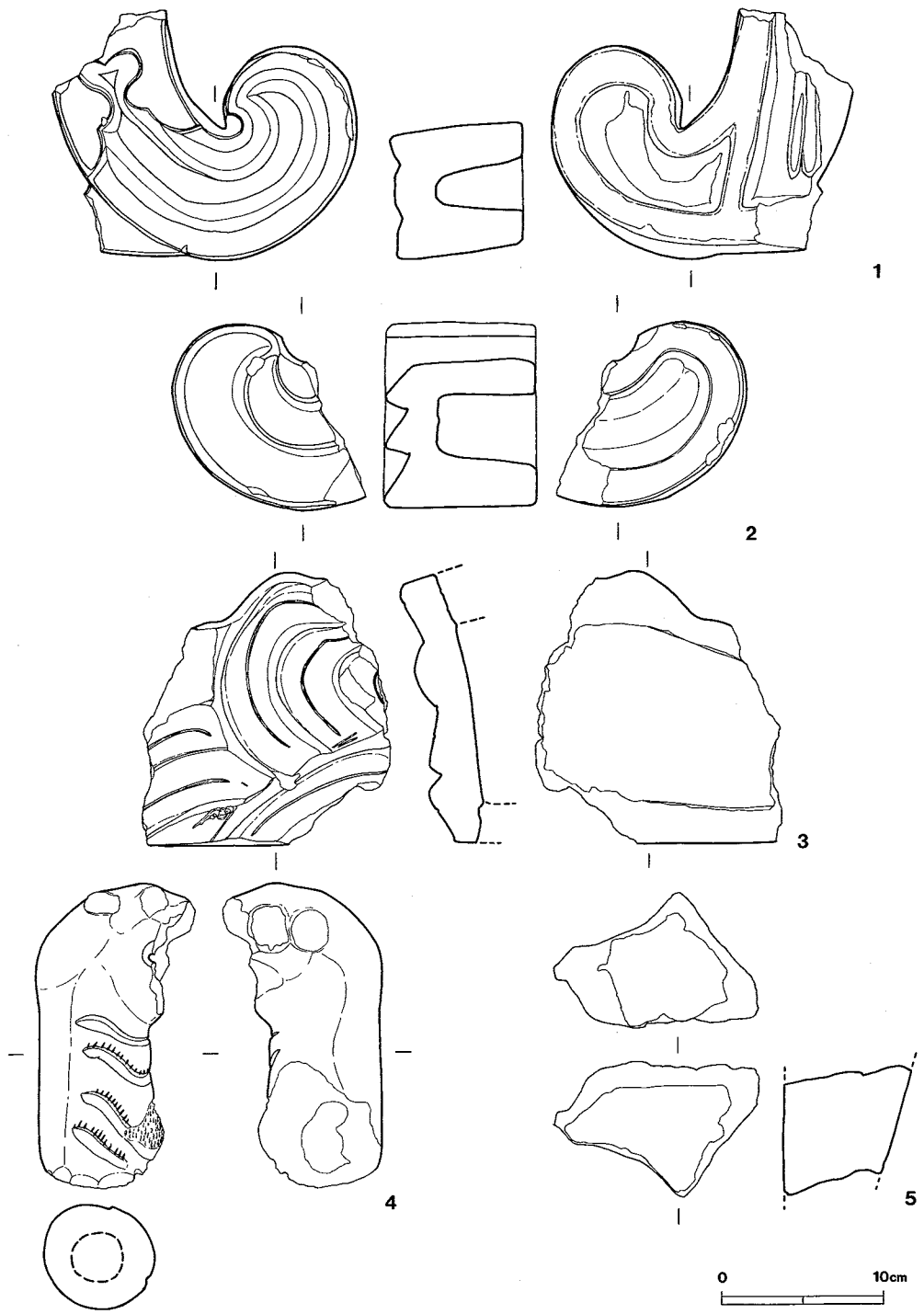
第259図 瓦(18)



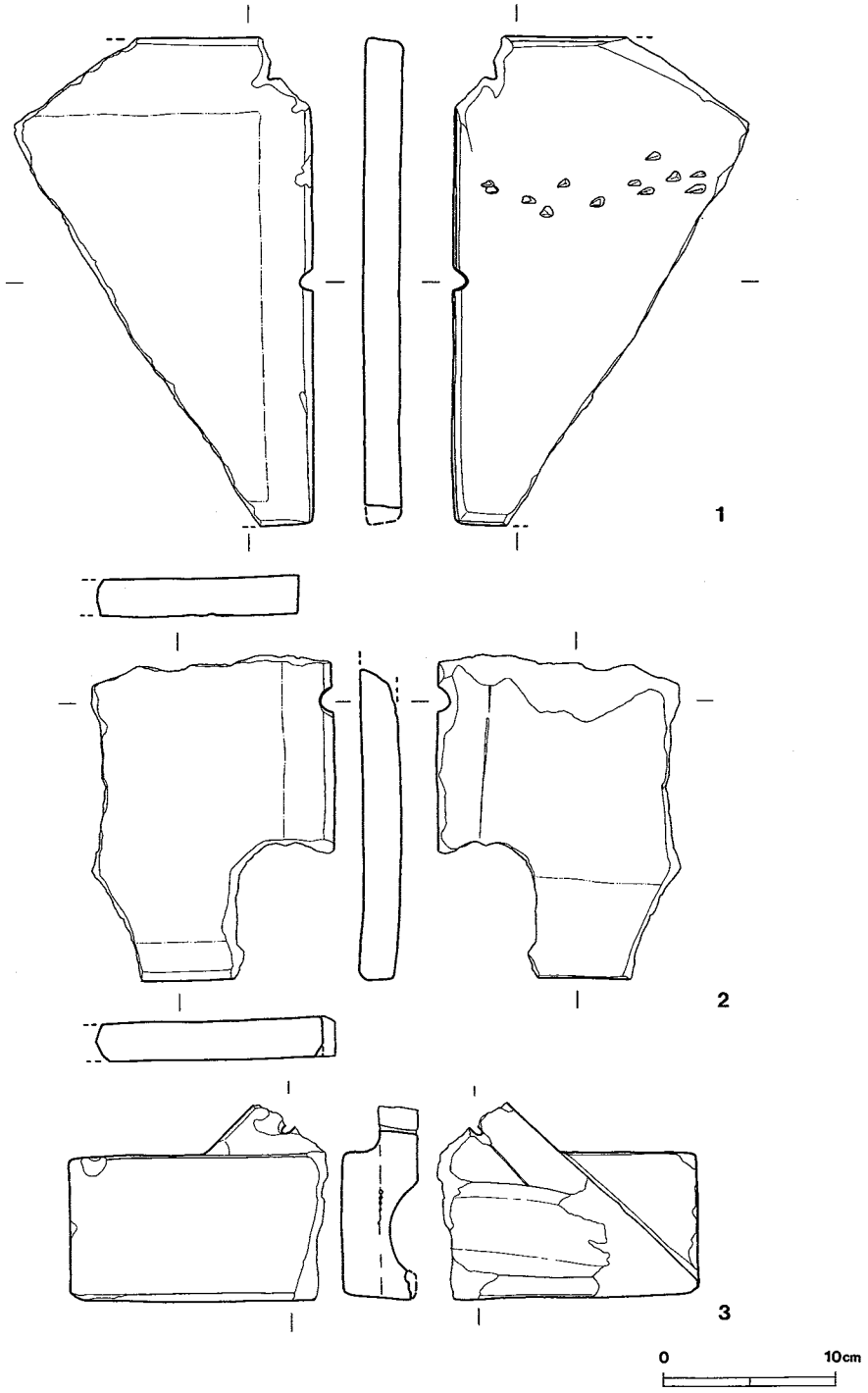
第260图 瓦(19)



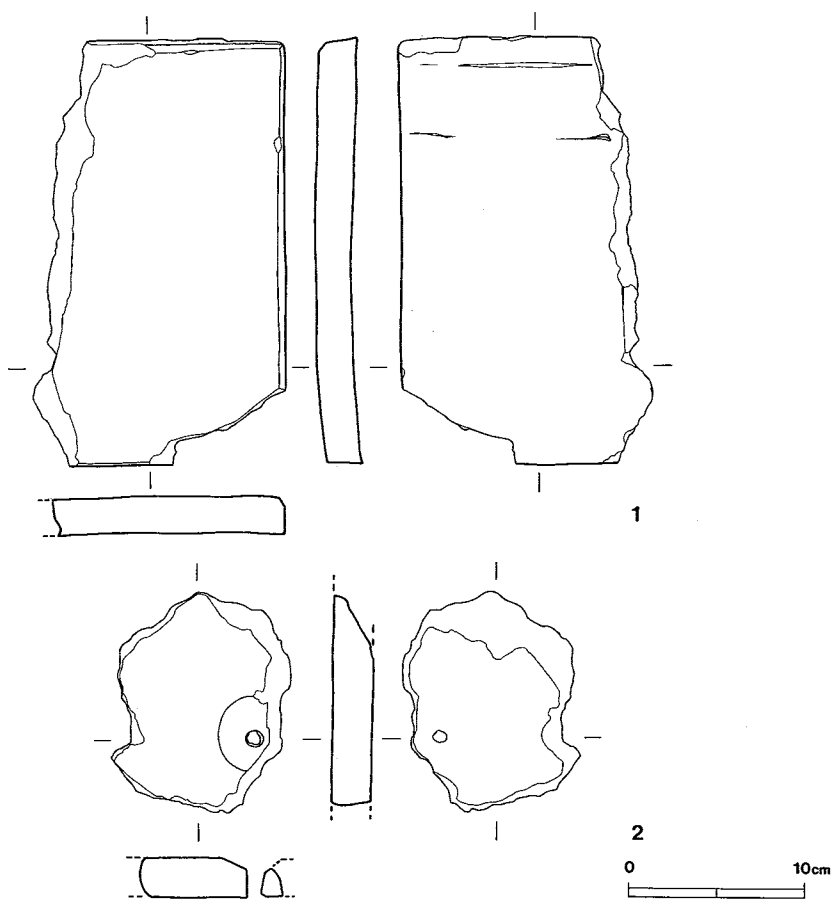
第261図 瓦(20)



第262图 瓦(21)



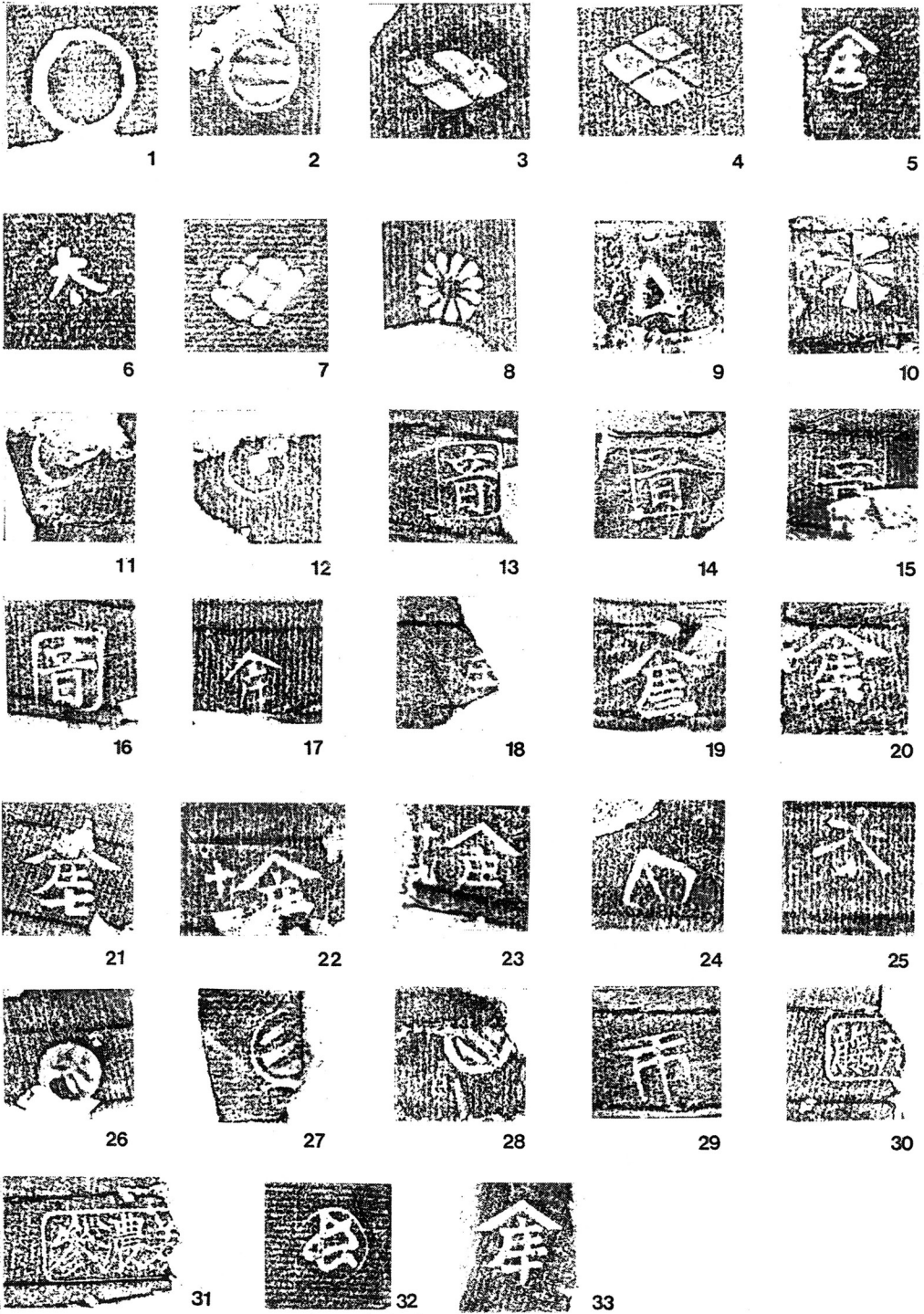
第263図 瓦(22)



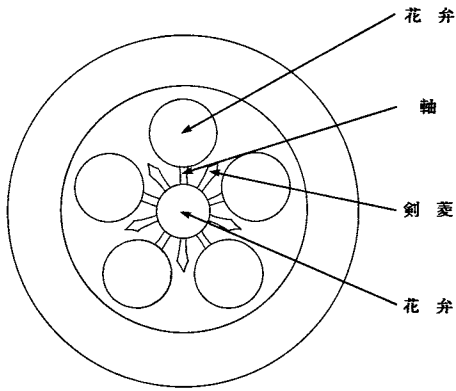
第264图 瓦(23)



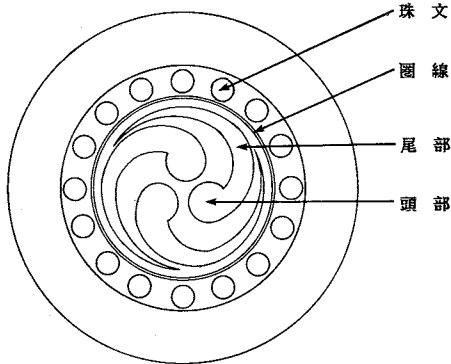
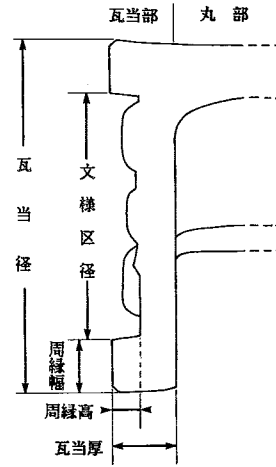
報告篇第三章 江戸時代の調査 I



第265図 瓦の刻印



梅鉢紋の名称・計測点



・圈線による分類

- A: 圈線のあるもの
- B: 圈線に尾が接するもの
- C: 圈線の無いもの

・巻き込みによる分類

- 尾から頭の方へ
- 右と左に分類

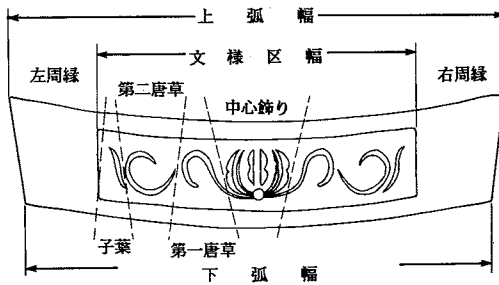
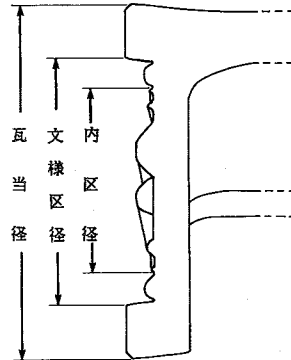
・尾の断面形

- A: ドーム状
- B: 三角形
- C: 台形状

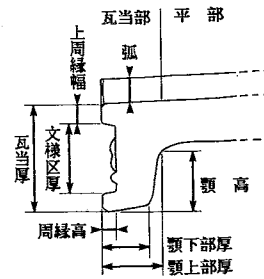
・面取り

- : けずり
- △: なで
- ×: 無調整

三つ巴文の名称・計測点・分類

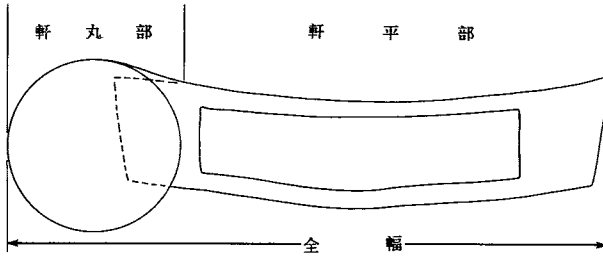


軒平瓦の名称・計測点



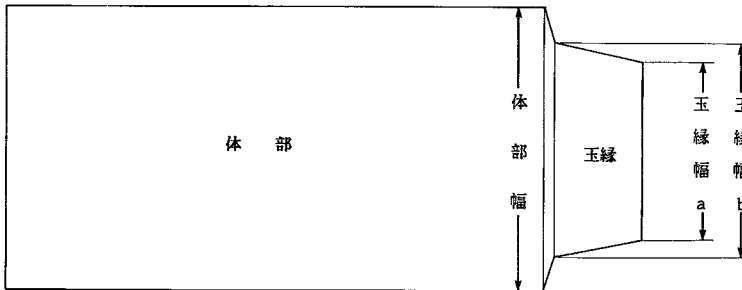
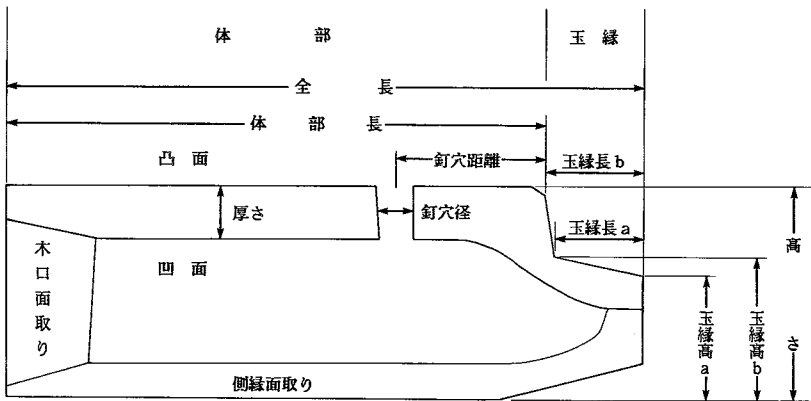
第266図 瓦の部分名称及び計測点(1)

報告篇第三章 江戸時代の調査 I



※軒丸部・軒平部の名称、計測点はそれぞれ、軒丸瓦三つ巴文と軒平瓦の名称・計測点に準じる。

軒棧瓦の名称・計測点



丸瓦の名称・計測点

第267図 瓦の部分名称及び計測点(2)

表3 軒丸瓦梅鉢紋計測値

分類	図版 番号	遺構	瓦当		文様 区径	周縁・面取り				花弁 径	中心 径	軸		剣	
			径	厚		幅	高	内	外			長	幅	長	幅
無剣梅鉢1a	1-3	C8-1号土坑	<u>160</u>	23	<u>110</u>	25	6	△	○	32	*	11	4	*	*
無剣梅鉢1b	1-5	E7-3号土坑	<u>114</u>	23	<u>82</u>	16	6	△	○	22	15	7	4	*	*
無剣梅鉢3a	1-1	B7-7号土坑	<u>159</u>	21	<u>115</u>	22	6	△	○	29	21	10	4	*	*
無剣梅鉢2a	1-2	表採	<u>172</u>	30	<u>118</u>	27	8	△	○	35	23	11	5	*	*
剣梅鉢1	1-6	C3-1号遺構	*	30	*	21	8	△	*	34	*	6	3	17	5
剣梅鉢2a	1-4	C4-1号土坑	162	23	112	25	8	△	○	30	21	12	3	13	9
剣梅鉢2b	1-8	C7-3号土坑	163	26	112	24	7	△	○	32	20	9	4	10	6
剣梅鉢2c	1-7	B7-2号土坑	161	30	110	25	9	△	○	35	21	11	5	11	5
剣梅鉢2d	1-10	B7-2号土坑	160	27	110	25	8	△	○	33	22	10	4	12	7
剣梅鉢2e	3-1	B7-2号土坑	160	23	116	22	8	△	○	28	22	11	4	10	6
剣梅鉢2f	4-1	B7-2号土坑	160	29	104	28	6	△	○	31	20	9	4	13	6
剣梅鉢2g	2-2	E11-1号土坑	160	32	114	23	8	△	○	28	20	11	4	15	7
剣梅鉢2h	2-5	E7-1号土坑	<u>162</u>	28	<u>106</u>	28	7	△	○	31	20	10	4	9	7
剣梅鉢2i	2-1	E8-5号土坑	160	27	114	23	7	△	○	29	23	15	5	13	7
剣梅鉢2j	1-9	E8-5号土坑	156	29	114	21	7	△	○	32	23	12	4	13	8
剣梅鉢2k	2-3	E8-5号土坑	154	30	114	20	7	△	○	31	15	12	6	15	7
剣梅鉢2l	2-4	E8-5号土坑	<u>155</u>	22	<u>103</u>	26	7	△	○	30	20	9	3	8	6
剣梅鉢2m	4-2	表採	155	29	109	23	7	△	○	31	20	11	5	11	6

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

表4 軒丸瓦連珠三つ巴文計測値

分類	図版 番号	遺構	瓦当		文様 区径	内 区 径	周縁・面取り				珠文		巴	
			径	厚			幅	高	内	外	径	数	長	断面
1 A右	4-3	C2-2号土坑	<u>160</u>	29	112	72	24	7	○	○	12	16	0.64	A
2 A右	4-4	E7-3号土坑	<u>152</u>	30	<u>108</u>	66	22	7	△	○	14	14	0.47	A
2 A右	4-5	E7-3号土坑	<u>153</u>	24	<u>108</u>	<u>66</u>	23	7	△	○	14	14	*	A
3 A左	4-6	表採	<u>160</u>	26	<u>112</u>	<u>82</u>	24	7	△	○	12	16	*	B
4 C右	5-1	C2-4号土坑	<u>162</u>	22	<u>114</u>	<u>73</u>	24	7	△	○	12	16	*	A
4 C右	5-2	C2-2号土坑	160	26	114	73	23	6	△	○	12	16	0.56	A
5 C右	4-7	E7-6号土坑	<u>156</u>	23	<u>114</u>	60	21	7	△	○	13	15	0.53	A
6 C右	5-3	D8-1号土坑	151	29	107	73	22	6	△	○	12	16	0.68	A
7 C右	6-1	E8-5号土坑	<u>150</u>	23	<u>110</u>	<u>60</u>	20	6	△	○	14	14	0.61	B
7 C右	6-2	C7-1号土坑	<u>150</u>	22	<u>108</u>	<u>59</u>	21	6	△	○	14	14	0.61	B
8 C右	6-3	F7-3号遺構	<u>154</u>	26	<u>110</u>	<u>60</u>	22	6	△	○	15	14	*	B
8 C右	5-4	F7-3号遺構	<u>154</u>	28	<u>110</u>	<u>61</u>	22	6	△	○	15	14	*	B
9 C右	5-5	表採	*	21	*	*	24	6	×	○	15	*	*	B
10 C右	5-6	表採	*	20	*	*	24	6	×	○	15	*	*	B

表5 軒平瓦計測値

分類	図版 番号	遺構	瓦当				文様区		周縁 (面取り)								額							
			上 弧 幅	下 弧 幅	厚 さ	弧 深	幅	厚 さ	上 外	内 外	下 外	内 外	左 外	内 外	右 外	内 外	高	上 部	下 部	厚 さ				
1	6-5	F8-1号土坑	*	*	56	*	192	32	12	×	○	12	×	○	*	*	*	*	8	34	24	30		
2a	6-6	C4-1号土坑	248	245	46	24	143	25	12	×	○	10	×	○	50	×	○	55	×	○	6	34	21	32
2b	6-7	C4-1号土坑	250	242	49	22	147	26	9	△	○	14	△	○	49	△	○	54	△	○	7	25	19	33
2c	6-8	C4-1号土坑	244	238	42	21	142	20	11	×	○	11	×	○	51	×	○	51	×	○	6	26	19	25
2d	6-9	B7-2号土坑	*	*	48	*	*	27	11	×	○	10	×	○	*	*	*	*	7	33	19	29		
2e	6-10	I5-2号土坑	*	*	47	*	*	24	11	×	○	12	×	○	*	*	*	*	6	30	19	30		
3	7-13	D8-1号土坑	245	243	42	22	141	24	10	×	○	8	×	○	53	×	○	51	×	○	6	30	16	29

表6 軒棧瓦軒丸部計測値

分類	図版番号	遺構	瓦当		文様区径	内区径	周縁・面取り				珠文		巴	
			径	厚			幅	高	内	外	径	数	長	断面
軒平部6	7-8	F7-3号遺構	71	21	44	38	14	6	△	○			0.50	A
軒平部10	8-1	E7-3号土坑	72	22	48	34	12	6	△	○			0.50	A
1 C右	9-3	C9-8号土坑	75	23	52	47	11	6	△	○			0.61	A
2 C右	9-2	E8-5号土坑	78	23	48	38	10	7	△	○			0.47	A
3 C右	9-1	E8-5号土坑	71	21	44	36	13	6	△	○			0.25	B
軒平部9	8-6	E9-1号土坑	76	20	54	27	11	6	△	○	8	10	0.45	A
4 C右	9-4	B7-1号土坑	74	20	52	27	11	6	△	○	9	8	0.38	A
5 C右	9-6	B7-1号土坑	77	20	54	28	11	6	△	○	7	8	0.42	A
6 C右	9-5	B7-1号土坑	77	23	48	27	14	6	△	○	8	8	0.45	A
7 C右	9-7	B7-1号土坑	75	22	50	23	12	6	△	○	9	10	0.33	C
8 C右	9-8	表採	86	29	56	39	15	7	△	○	9	10	0.45	A
9 C右	9-10	表採	94	28	59	31	17	10	△	○	9	8	0.47	A
10 C右	9-9	表採	92	26	63	35	14	7	△	○	10	13	0.43	B

表7 丸瓦計測値

分類	図版番号	遺構	全長	体長	幅	高さ	玉縁長		玉縁高		玉縁幅		側縁		釘穴		釘穴	
							b	c	a	b	a	b	左	右	距離	径	距離	径
劍梅6	3-1	B7-2号土坑	428	398	152	70	26	30	42	54	<u>76</u>	117	42	48	40	16	164	16
劍梅10	2-1	E8-5号土坑	*	360	148	65	*	*	*	48	*	114	40	37	46	15	148	16
連珠巴 4	5-1	C2-4号土坑	380	346	148	67	32	34	33	49	70	114	43	40	36	9	141	8
1	10-1	C7-3号土坑	*	*	160	78	31	32	44	58	<u>86</u>	120	32	31				
2	9-11	C4-1号土坑	*	*	158	72	30	31	49	59	93	123	32	30				
2	10-2	C2-2号土坑	*	*	155	68	32	33	38	48	75	113	30	28				
2	12-1	C4-1号土坑	341	306	155	74	33	35	47	54	<u>86</u>	114	35	35				
3	11-1	B7-2号土坑	297	270	155	69	26	27	41	52	84	115	38	35				
3	11-2	B7-2号土坑	290	270	144	68	19	20	42	51	82	102	30	35				
4	12-2	C3-3号土坑	*	*	116	57	32	32	*	42	*	82	*	40				
4	12-3	C3-1号土坑	*	*	114	52	27	27	29	37	73	88	33	34				

## (4) 焼塩壺

本地区出土焼塩壺は容器の種類からみて三種類ある。即ち、前田長三郎氏の分類案に従うならば、「筒状モノ」(型に粘土板をからめ底部を作りその上に粘土紐を積み上げて体部と口縁部をつくるもの)、「蓋掛リノアルモノ」(布を巻きつけた型に粘土板を巻きつけて容器の体部を作り、体部の一方に栓をするかのように粘土塊を詰めて底部をつくり、他方は蓋を受ける部分を削り出しているもので、蓋受けの部分が退化的のものもこの容器の範疇に含める)、そして、ロクロによって成形されているものの三者である。銘を有している例は16例あり、内訳は「御壺塩師堺湊伊織」銘が1例、「泉州麻生」銘(外側長方形・内側二段角の長方形の枠)が15例あった(第268~271図、図版31~35)。

「筒状モノ」(第269図1)を先ず取り上げよう。G10-4号土坑から破片が一点出土した。口縁部の破片で、推定口径6.2cmである。赤褐色を呈し、胎土には雲母がみられる。口唇部はやや尖るようになるが、体部から口縁部にかけて比較的直線的に立ち上がっていくようなので、この種の容器では一番新しい「天下一御壺塩師堺見など伊織」銘をもつ身と考えている。

「蓋掛リノアルモノ」は量的に多く得られただけでなく、編年学的な検討のためにも重要な出土状況に関する情報を提供してくれた。一つは、異なる銘を持つ容器との共伴、もうひとつは、同一銘の容器のみが単純に出土することである。さらに、別種類の容器であるロクロによって成形されているものと伴出していることがあげられる。この順に記載していく。

E7-5号土坑からは「御壺塩師堺湊伊織」銘の焼塩壺(第269図3:図版31)と外側長方形・内側二段角の長方形の枠の「泉州麻生」銘の焼塩壺(第269図4:図版32)と蓋(第274図1・4)と一緒に検出できた(第268図)。第269図3は完形の土器で口径(蓋受けとして削り出されて突出している部分)6cm、底径5.9cm、最大径6.8cm、器高9.0cmである。色調は赤褐色で、胎土には白色粒子、雲母が目立つ。芯に粘土板を巻きつけて体部を作るのであるが、その時に芯と体部が脱着しやすいように芯に布を被せているので、土器の内面に布の圧痕が残っている。また、芯に被せている布はとじあわせられて筒状になっている。とじあわせられたこの布の上・下縁は折って巻き込まれているようである。かがっているかもしれない。この例では刺し縫いが縦に間隔を開けずに密に施されているのが特徴のようである(以上図版31参照)。体部外面は底部から肩部まで均等に軽くロクロ(回転)ナデがほどこされ、所々指頭押さえの跡も見られる。受部は狭く、立ち上がり部がやや長い。底部付近はやや張り出すようである。「蓋掛リノアルモノ」は出来上がった裁頭円錐状の粘土筒の一方に粘土塊を詰めて栓をするようにして底が形成される点で、底が始めから作られていく「筒状モノ」とは異なるのだが、この土器の場合は小さな粘土塊が栓となるように受ける部分がしっかりとつくられている(筒端の内側に粘土紐を張りつけている)。粘土の栓は内側から入れられ、布がまかれた棒状工具によって強く押し込められ、この栓の受け部に圧着させられている。そのためにこの粘土栓上にはその際の布の跡が残り周囲が捲り上がって

る。そして、さらに、外から底部の粘土の栓を指頭で押しつけて器面に馴染ませようとしているのが見てとれる（以上、図版31—1a・b・c参照）。第269図4も完形の土器で口径（蓋受け部）6.8cm、底径5.8cm、最大径7.7cm、器高9.3cmである。色調は明黄褐色～明褐色で斑状に変わっていて、胎土にはやや荒い白色砂粒が見られる。先に挙げた土器とは銘が異なるだけでなく、色調、胎土、大きさも違うようである。違いは他にも目に付く。内面に見られる布の圧痕から判断すると、筒状に布が完全にとじあわせられているのではなく、土器の口縁部付近ではとじあわせられていないで少し開いた状態になっている。これは3とは違う。さらに、縦に間隔をあけて粗く刺し縫いが施されている一方、横方向にも同様に刺し縫いが施されているのが特徴である。これは密な刺し縫いが施されている3とは違う。また観察できる範囲では土器の口縁部側の布の端部はばらけたままになっている。これも3とは違う。器面外面には指頭の痕がよく観察出来るが、その他に器面にはロクロ（回転）ナデが施されているが特に口縁部から肩部にかけてその調整痕が強調されている点も違いであろう。底部の作り方を見ると粘土栓を受ける部分はあまりきちんとは作られてはいない。恐らく、筒状に成形した体部を台の上に置き、その中に粘土栓を入れて、棒状工具で押さえて体部と密着させているのであろう（粘土栓のその部分には布の圧痕が残っている）。その工程だけで底の部分が出来上がっていて、3の「御壺塩師堺湊伊織」銘の焼塩壺のように外からも粘土栓を指で押しつけることはしていないことにも留意すべきである。繰り返すならば、筒状の体部を台の上に置き、その中に入れた粘土栓を棒で突いて体部に圧着させただけで底が仕上がっているのである（図版32—2 a・b参照）。

少しまとめるならば、焼塩壺（メーカー）を異にする「御壺塩師堺湊伊織」銘の焼塩壺と「泉州麻生」銘焼塩壺とは「蓋掛リノアルモノ」という点では共通するが、胎土、色調が違うのみならず、「蓋掛リノアルモノ」に於いては工夫しなければならない底部の作り方に関しても違うのを指摘しておきたいのである。この点は「蓋掛リノアルモノ」自体の分類・弁別に於いて基本的視点となると考えている。更に、芯にかぶせる筒状の布も各種の点で相違がある。

第274図1・4は伴う蓋である。断面形は逆凹字状で、胎土の特徴は「泉州麻生」銘の土器と同じである。「泉州麻生」銘の土器の蓋と考えている。1は完形品で口径8.0cm、器高1.8cm。天井面は比較的平坦で浅く板目状の圧痕が垣間見られるが、そのあとナデられていて平滑に仕上がっている。側面はロクロ（回転）ナデのあと指頭の痕が見られ、内面には布の圧痕があり、その上をロクロ（回転）ナデしている。返りの部分はへら削りされていて内削ぎ状になっている。4は半分が残っていて、口径8.0cm、器高1.8cm。やはり、天井面は比較的平坦で、指頭の押さえの後ロクロ（回転）ナデされている。側面はロクロ（回転）ナデのあと指頭の押圧痕が残っている。天井内面には布の圧痕と墨書があるが判読できない。天井内面から周辺から返り部にかけてロクロ（回転）ナデが施されている。要するに、身と同様に型作りによって成形される蓋なのである。

C 7—2号土坑の焼塩壺（第270図6、第271図1～6、第274図2・5・7～8・10～11）、C 7—3号土坑の焼塩壺（第270図1～4・7、第274図3・6・9）は外側長方形・内側二段角の長



方形の枠の「泉州麻生」銘の土器群で構成されているようである。とくに C 7-2 号土坑の焼塩壺はすべて完形品でこの銘を有している。蓋も完形品が揃っていて身と蓋のセット関係を考える上で重要であろう。

C 7-2 号土坑の焼塩壺は蓋も含めて胎土・色調ともよく似ている（第270図6：口径6.5cm，底径5.0cm，最大径7.7cm，器高9.6cm，第271図1：口径6.7cm，底径5.6cm，最大径7.8cm，器高10.1cm，同2：口径6.4cm，底径5.6cm，最大径7.6cm，器高9.9cm，同3：口径6.4cm，底径5.0cm，最大径7.6cm，器高9.9cm，同4：口径6.2cm，底径5.4cm，最大径7.2cm，器高9.6cm，同5：口径6.4cm，底径5.4cm，最大径7.5cm，器高9.8cm，同6：口径6.9cm，底径5.3cm，最大径7.8cm，器高9.6cm，第274図2：口径8.2cm，器高1.7cm，同5：口径7.6cm，器高1.7cm，同7：口径7.6cm，器高1.8cm，同8：口径8.4cm，器高1.8cm，同10：口径7.9cm，器高1.9cm，同11：口径7.8cm，器高1.9cm）。胎土にはやや荒い白色砂粒が見られ，雲母は含まれておらず，色調は明黄褐色～明褐色が斑状に現れている点でよく似ているのである。次に身となる土器について見ると，先に指摘した底部作りの工夫に於いてもみな同一のやり方であった。つまり，型に粘土板を巻きつけて出来た筒状の体部の一方を栓が出来るように少し整えて，その粘土筒を台に置き，その中に栓となる粘土塊を入れて，棒の先で突いて体部に圧着させているのである（図版33参照）。全ての土器がなかから棒で突くという行為で底部作りを完了しているのである（この点も第269図4例と同じである）。土器の内面には，縦に間隔をあけて粗く刺し縫いが施されている一方，横方向にも同様に刺し縫いが施されている布の圧痕がみられる例（第270図6，第271図3），横方向のみに刺し縫いが粗く施された布の圧痕と縦方向にラセン状に粘土の隆起した襷がみられるもの（第271図1・2・4），横方向のみに刺し縫いが粗く施された布の圧痕をもつがラセン状に粘土の隆起した襷がみられないもの（第271図6），縦に粗い刺し縫いが施された布の圧痕をもつ例（第271図5：本例には内面には，粘土板を切り取る際についたと思われる砂粒の移動の跡が観察される）の別があるので，型から外しやすくする際に用いる布の種類にはやや違いがみられるのであろう。分類学的見地からは，「蓋掛リノアルモノ」が容器として形が全うされるためには必須である土器底部の作りを上位に置き土器内面の様相の違いはより下位の分類階梯を与えるべきであろう。さらに，分類学的問題に関連するならば，肩部の強調されるロクロ（回転）ナデ調整痕が幅広いもの（第271図6）とそうでないもの（第270図6，第271図1～5）とがある。第271図1～3・5はその中ではより狭いものである。これらは，出土状況から判断して大量のカワラケ，食物残滓と伴に一括廃棄されたものであり，生産・販売から使用・消費までさしたる時間的間隙のないとされる焼塩壺の性格とを鑑みると極めて重要な資料であろう。さらに付け加えるならば，第271図1・2は底部の作り方・内面の様相・器面の調整でのクセの次元で極似している（図版33，図版32-3 c・4 c参照）上に，同一の特徴（「泉」の「白」の部分の中の横線がない）をもった刻印，つまり同じ刻印が押されているようである（図版32-3 c・4 c参照）。その一括性に対してかなり信頼していいものであろうことの傍証となろう。因みに，蓋は逆凹字状の断面形

態を呈するのが特徴で E 7-5 号土坑例とやはり同じで内面に布痕を残し作り方も同じである。当遺構例では天井面にみな板目状圧痕を残している。

これを要するに、底部の作り方では皆共通するが、内面の圧痕、肩部のロクロ（回転）ナデ調整の強調の仕方ではやや様相をことにするものが同時に存在していたと考えるべきなのである。

このことに関し、C 7-3 号土坑のやはり大量のカワラケ、食物残渣と伴に一括廃棄された焼塩壺(第270図1：口径6.7cm, 底径5.6cm, 最大径7.7cm, 器高9.5cm, 同2：口径6.8cm, 底径5.2cm, 最大径7.7cm, 器高9.5cm, 同3：推定口径7.4cm, 推定底径5.6cm, 推定最大径8.1cm, 器高9.9cm, 同4：推定口径6.8cm, 推定最大径7.4cm, 同7：推定底径5.0cm, 第274図3：口径7.6cm, 器高2.1cm, 同6：推定口径7.8cm, 器高2.1cm, 同9：推定口径8.0cm, 器高2.0cm)が重要な情報を提供している（ここでも、土器の作り方がクセのレベルで極めてよく似ていて、且つ、同一の刻印によって押されたとしか見えない土器第270図1と2の二個体があり、その一括性の認識を有効ならしめてくれている：図版34参照）。ここでも身と蓋と胎土、色調、器面調整とも相互によく似ていると同時に C 7-2 号土坑例ともよく似ていることを強調したい。さて、その身である土器群は底部の作り方は全く同じであるが、一方、肩部のロクロ（回転）ナデ調整の強調の仕方の度合いの違いはやはり存在しているのである。やはり広く強調する例がある(第270図4)。C 7-2 号土坑例に於ける肩部のロクロ（回転）ナデ調整の強調の変異を支持している資料として評価できるであろう。即ち、肩部のロクロ（回転）ナデ調整の強調の度合いの違いは時期差として考えるのは一応差し控えるべきであろうと思われる。当土坑例の内面にのこる圧痕は、縦に間隔をあけて粗く刺し縫いが施されている一方、横方向にも同様の刺し縫いが施されている布の圧痕が窺われる例（第270図4）、横方向のみに刺し縫いが粗く施された布の圧痕をもつが、ラセン状に粘土の隆起した髷がみられないもの（第270図1・2）、縦に粗い刺し縫いが施された布の圧痕がある例（第270図3・7）の別がある。蓋は逆凹字状の断面形態を呈するのが特徴で E 7-5 号土坑例とやはり同じで内面に布痕を残し作り方も同じである。当遺構例では天井面に板目状圧痕は見られないようである。

C 7-2 号土坑・C 7-3 号土坑の纏まりを一つの階梯と考えるもう一つの根拠はそれぞれの焼塩壺を包含する層から出土した陶磁器のうち三個体が両遺構間で接合することである。その時、位置が違う E 7-5 号土坑例とどういう関係になるか問題であるが、大きさがひとまわり C 7-2 号土坑・C 7-3 号土坑例の方が大きい点から時期差ではないかと考えている。さらに C 7-2 号土坑・C 7-3 号土坑を含めた一連の遺構間接合の在り方からみて、E 7-5 号土坑を切っている土坑がその遺構間接合を担っていることを鑑みると、E 7-5 号土坑例の方が古いと考えられよう。

遺構から単独出土の同銘焼塩壺はどう考えるべきであろうか。B 3-3 号土坑例(第269図6：口径6.0cm, 底径5.5cm, 最大径7.4cm, 器高9.9cm)、B10-2 号土坑例(第269図5：口径6.5cm, 底径4.8cm, 最大径8.1cm, 器高10.3cm)は比較的幅広く肩部にロクロ（回転）ナデ調整が強調

して施され、内面に縦に間隔をあけて粗く刺し縫いが施されている一方、横方向にも同様に刺し縫いが施されている布の圧痕が観られ、C 7-3号土坑例(第271図4)に対比できるであろう。攪乱出土例(第269図5:口径6.8cm, 底径5.6cm, 最大径8.1cm, 器高9.8cm)は肩部のロクロ(回転)ナデ調整の強調は幅狭く、内面には縦に粗い刺し縫いが施された布の圧痕をもち、さらには、粘土板を切り取る際についたと思われる砂粒の移動の跡が観察され、C 7-2号土坑例(第272図5)に対比できる。G 5-3号土坑例(第269図2:口径6.6cm, 底径5.5cm, 最大径8.1cm, 器高10.0cm)の内面の圧痕から判断すると、布を筒状にする際の合わせ目は観察できるが、刺し縫いは施されていないかもしれない。肩部のロクロ(回転)ナデ調整の強調は幅狭い。これらはC 7-2号土坑・C 7-3号土坑例と同時期であろう。B 7-2号土坑例(第269図7:推定口径6.6cm, 最大径8.2cm)は内面に縦に粗い刺し縫いが施された布の圧痕があるが、体部上半に施されるロクロ(回転)ナデ調整の強調部が狭く凹線状に二段になる点、器壁が直線的に真っ直ぐに立ち上がるかのような点である点を考慮してより新しい時期的位置付けを考えたい。F 8-1号土坑出土の蓋(第274図13:口径7.9cm, 器高1.9cm)、表採例(第274図14:口径7.8cm, 器高2.0cm)は胎土、色調、調整、断面形等から「泉州麻生」銘焼塩壺の蓋であると判断している。但し、表採例(第274図15:口径7.7cm, 器高1.8cm)は「泉州麻生」銘焼塩壺の蓋の胎土・色調とは異なり、赤褐色で雲母を含んでいる。難波屋の焼塩壺であろう。どの銘に対応するかは分からない。つまり、本調査区の「泉州麻生」銘焼塩壺は古い部分(第269図4・第269図1・4・第269図3を伴う)・中くらいの部分(第269図2~6・第270図1~6・第271図1~6・第272図2~12)・新しい部分(第269図7)に分けて考えるとよいであろう。第274図15の蓋は難波屋系列の焼塩壺の蓋だが表採であり難波屋系列のどの銘の焼塩壺と組み合わせるか分からないし、「泉州麻生」銘焼塩壺との関係も分からない。

次に取り上げるのは、ロクロによって成形されるものである。E 7-3号土坑、E 8-5号土坑、E 7-7号土坑より検出されている。身も蓋もすべて明赤褐色を呈し、スコリア、雲母を胎土に含んでいる。そして、身の体部は内外ともロクロ目を残し、底部は回転糸切りによって切り離されている。

遺物が出土した三遺構の関係は重複状況から、E 7-3号土坑→E 8-5号土坑→E 7-7号土坑という先後関係が把握されているのは重要であろう。

E 7-3号土坑の当該焼塩壺(第272図2~9, 第273図1~5)は「蓋掛リノアルモノ」の退化した様相を示す例も伴っている(第272図1)。この土器は口径5.0cm, 底径4.7cm, 最大径6.8cm, 器高7.4cmで、明褐色を呈し、砂粒、雲母等を胎土に含んでいる。内面には、刺し縫いを縦に密に施された布目痕を残し、外面はロクロ(回転)ナデが施されている。蓋掛りが退格的あるいは痕跡的であるうえに、底部の作り方もいままで取り上げてきたものとは違う。この場合は粘土塊の栓を外側から入れるのである。底部には板目状の圧痕が残っていることから判断して、板状工具でなでつけて平らにしたようである。佐々木達夫氏報告の東京都千代田区日枝神社境内遺跡例

(佐々木1977, 図1-2)が最も近いであろう。第272図2-9, 第273図1-5は口縁部の形態からいくつかに分けられる。まず, 第272図2(口径6.5cm, 底径5.5cm, 器高6.5cm), 第273図1(口径7.0cm)~2(口径6.4cm)のように口唇部内側がまだ高く痕跡的な受け部をもつものである。次は第272図3(推定口径6.4cm, 底径5.6cm, 器高6.7cm)のように口唇内側が高く口唇外側が低く, 断面形を見れば明らかなようにその儘斜めになるものである。さらにもう一つ違うものがある。口唇部が外側に尖り, 蓋掛かりの全くないものを弁別しておきたい(第273図4:口径6.6cm, 底径5.6cm, 器高6.5cm, 同5:口径6.4cm, 底径5.0cm, 器高6.5cm, 同6:口径6.2cm, 底径5.6cm, 器高6.5cm, 同7:口径6.7cm, 底径5.7cm, 器高6.1cm, 同8:口径6.6cm, 底径5.0cm, 器高6.1cm, 同9:口径6.5cm, 底径5.5cm, 器高5.8cm)。第274図16の蓋(口径7.0cm, 器高1.2cm)は内面に布目痕をもち, その周辺から口縁部から側面にかけてロクロ(回転)ナデが施され, 天井部にはナデがみられる。極短い口縁部があり, 断面逆凹状形態のなれのはてのようなものである。同19(口径7.2cm, 器高1.2cm)と同22(口径7.4cm, 器高1.3cm)は偏平ながら断面台形を呈するかの如くである。前者は内面に布目痕を残し, その周辺から口縁にかけては無調整で, 側面にはロクロ(回転)ナデの痕があり, 天井部にはナデ調整がほどこされていて, 後者は内面に布目痕をもち, その周辺から口縁部, 側面部, 天井部にかけてはナデ調整の痕がみられる。同17(口径7.5cm, 器高1.3cm)は偏平な円板と言ったほうがよいような形である。内面には布目痕があり, その周辺から口縁部, 側面部にかけてロクロ(回転)ナデが施され, 天井部は布目の圧痕を消すかのようにナデ調整の痕が見られる。

E7-3号土坑より後に構築されたE8-5号土坑の焼塩壺(第273図6:口径6.5cm, 底径5.0cm, 器高5.7cm, 同7:口径6.4cm, 底径5.0cm, 器高6.1cm, 同8:口径6.1cm, 底径5.2cm, 器高5.3cm, 同9:推定口径6.8cm, 推定底径5.4cm, 器高5.7cm, 同10:口径6.3cm, 底径4.9cm, 器高6.0cm)はE7-3号土坑のそれと比較するならば, きわめて単純な様相である。即ち, 口唇部が外側に尖り, 蓋掛かりの全くないものだけで構成されているのである。また, E8-5号土坑より後に構築されたE7-7号土坑の焼塩壺(第274図11:口径6.2cm, 底径4.8cm, 器高5.3cm)もE8-5号土坑と同じである。E7-3号土坑→E8-5号土坑→E7-7号土坑という先後関係と遺物の様相の違いを鑑みると, 別形式もともない, 口唇部形態から複数の種類が共存する段階と口唇部が外側に尖り, 蓋掛かりの全くないものだけで構成される段階を設定して考えるべきであろう。

以上を纏めると, 当調査区からは, 数基の遺構から焼塩壺の完形品が良好な出土状況の下に比較的多く得られている。第一は, 大量の食物残滓(魚骨・鳥獣骨・貝殻), 及び多量のカワラケ, そして, 陶磁器類, 金属製品と共に一括廃棄されたと考えられるものである。C7-2号土坑, C7-3号土坑, E7-5号土坑の遺物がそれに相当する。第二は, 多量の陶磁器類(特に徳利)と一緒に廃棄されたもので, E7-3号土坑, E8-5号土坑の遺物が該当する。他は遺構からの単体の出土であったり, 第269図5例のように攪乱からの出土であるが, 本例は本来B10-2号土坑

の出土と思われる。

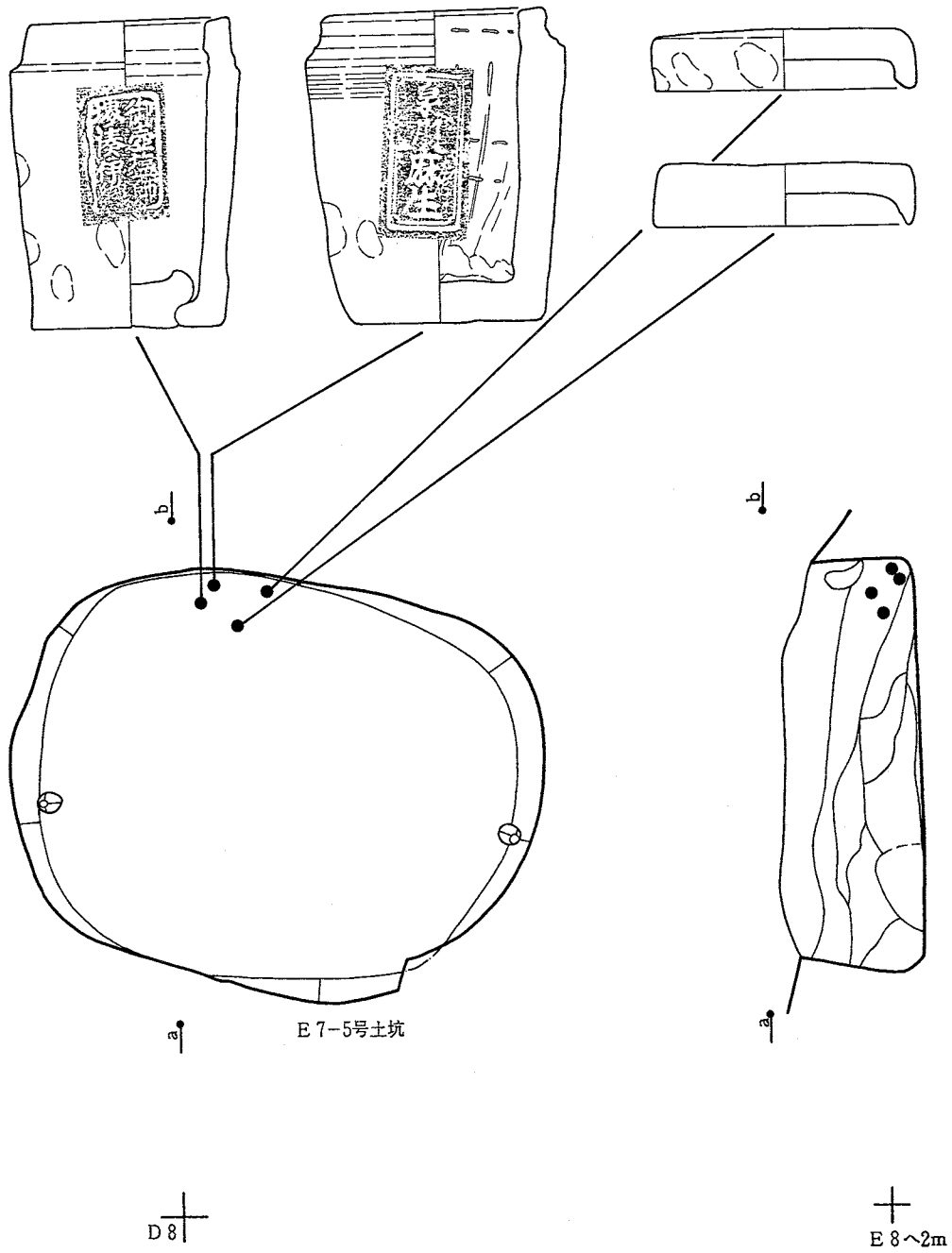
出土状況から見て特記すべきは、C 7-2号土坑、C 7-3号土坑の焼塩壺の内容である。二遺構の遺物すべて、「泉州麻生」銘を持つものだけで構成されており、身と蓋との対応もかなりはっきりしていると言えよう。即ち、容器の種類（仮に形式とする）としても同一のものだけで構成されている。特に、C 7-2号土坑の第270図1・2は同一の特徴（「泉」の「白」の部分の中の横線がない）をもった刻印、つまり同じ刻印が押されているようである。その上に作り方のクセもよく似ている。C 7-3号土坑の第271図1・2も作り方のクセ、銘がそっくりである。これを同一個人製の製作物の製作時の同時性という観点で評価することが許されるならば、その一括性に対してかなり信頼していいものであろう。そうであるならば、「泉州麻生」銘の身と蓋のかなり信頼性の高い組み合わせとして重視すべきであろう。

次は、E 7-5号土坑の異系列銘の共伴の評価が問題となろう（第269図参照）。具体的には、「泉州麻生」銘の焼塩壺と「御壺塩師堺湊伊織」銘の焼塩壺と一緒に捨てられており、容器としては同一形式で異系列銘の、即ちメーカーが異なるものの構成を示す。これについては、他遺構で組み合う例があるか否かを探る必要がある。

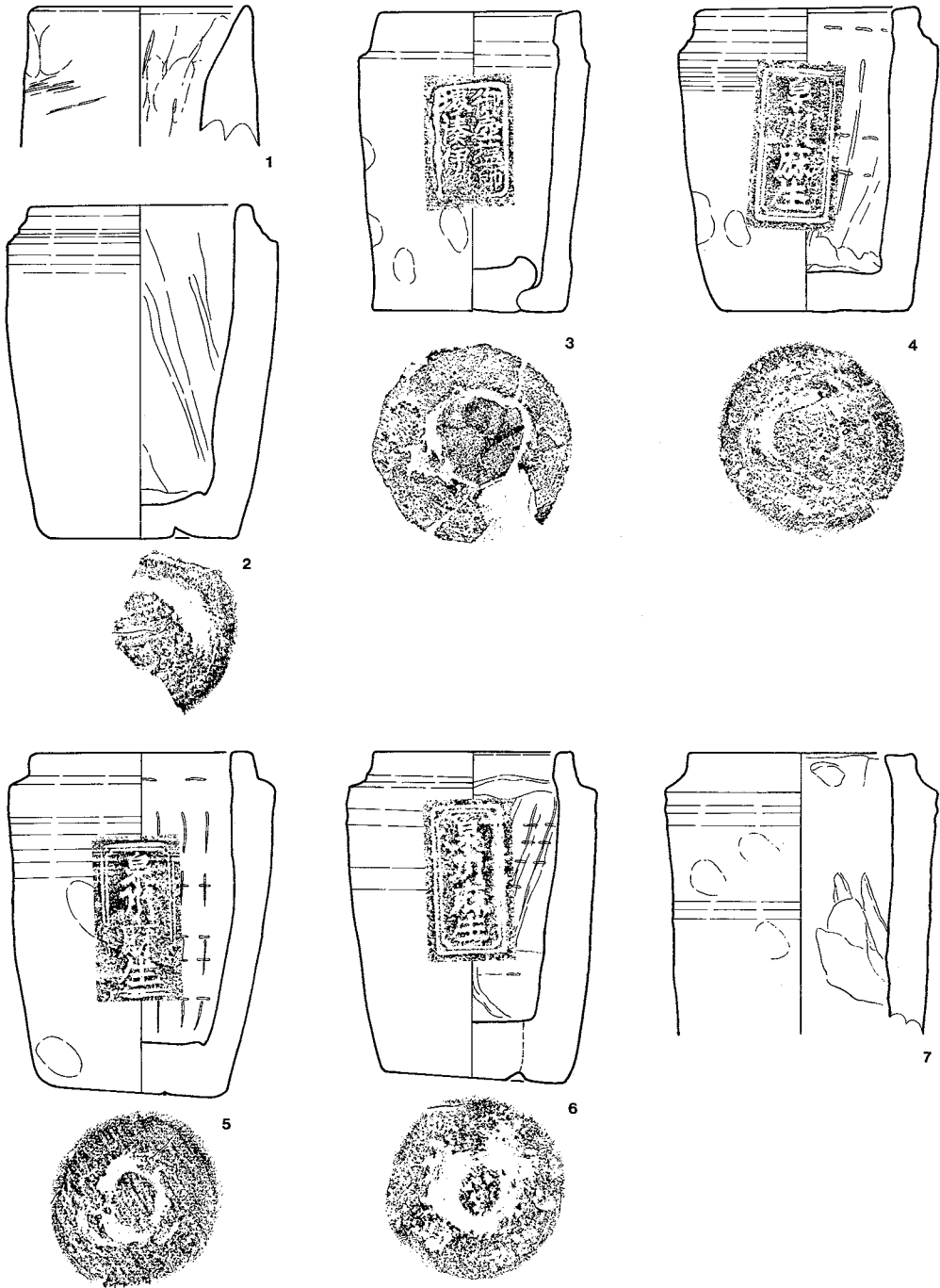
やはり、組み合わせの内容で問題となるのは、E 7-3号土坑の焼塩壺の在り方である。この場合は、同形式異系列銘ではなく、異形式の、即ち容器の種類が違う焼塩壺が共伴することの是非である。

長々とこのような検討課題を先に提出しておいたのは、焼塩壺をどう分類、記載するかにかわるからである（詳細は研究篇の大塚論文を参照されたい）。

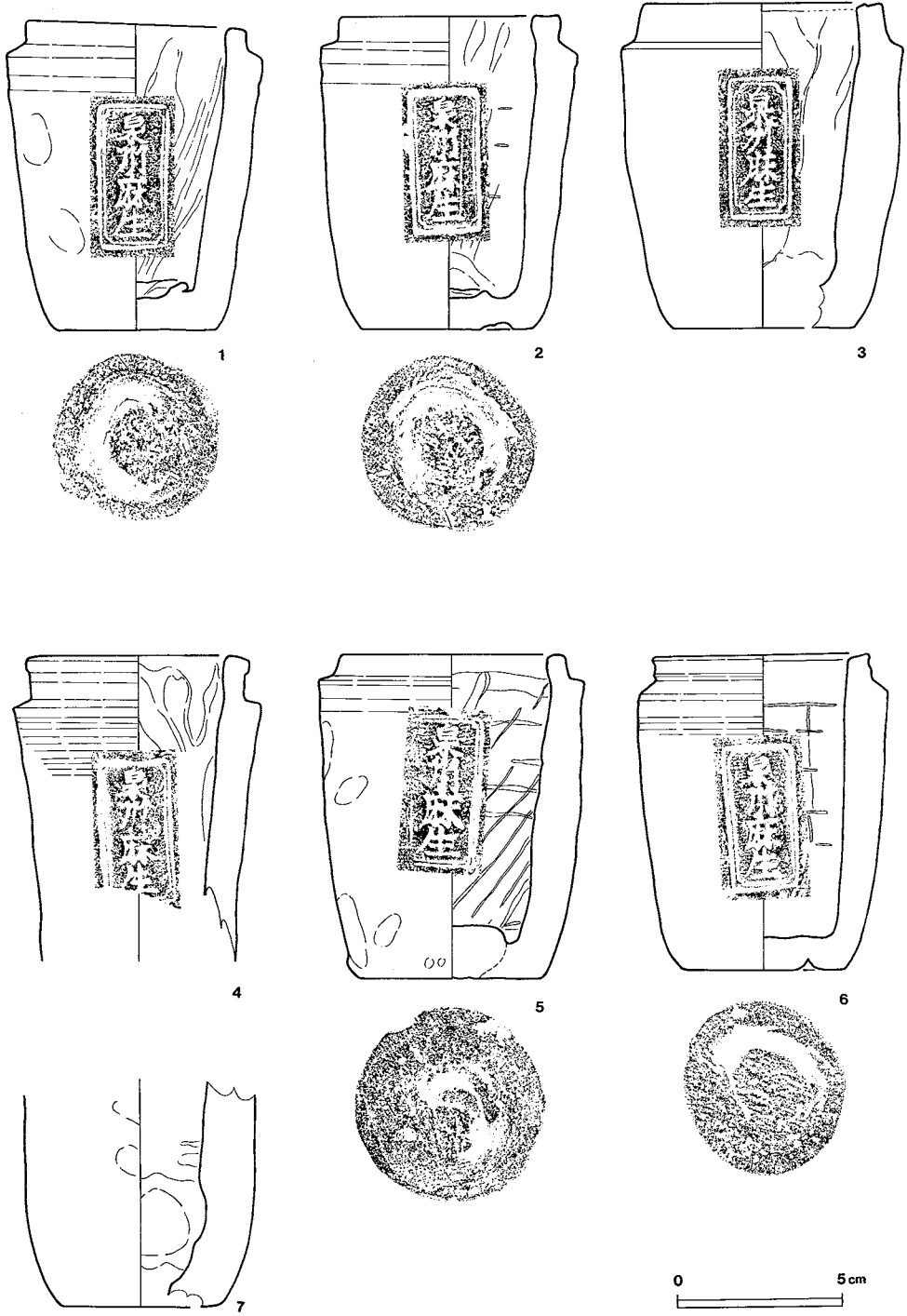
最後に貨幣の伴出が絡む問題を挙げておく。渡辺誠氏の研究によって「泉州麻生」銘焼塩壺の下限年代が最大1738年という説が提出されているが（渡辺1985a）、C 7-3号土坑、B 7-2号土坑の焼塩壺出土層から新寛永銭（輪十後打：初鑄1739年）も伴っていることをどう評価するか今後の問題となろう。この共伴関係が他の遺跡でも安定した関係として把握できるなら「泉州麻生」銘焼塩壺の下限年代はより新しくなる可能性を考えなければならないであろう（註：引用文献については研究篇の大塚論文に纏めておいた。そちらを参照して頂きたい）。（大塚 達朗）



第268図 銘を異にする焼塩壺の出土状況

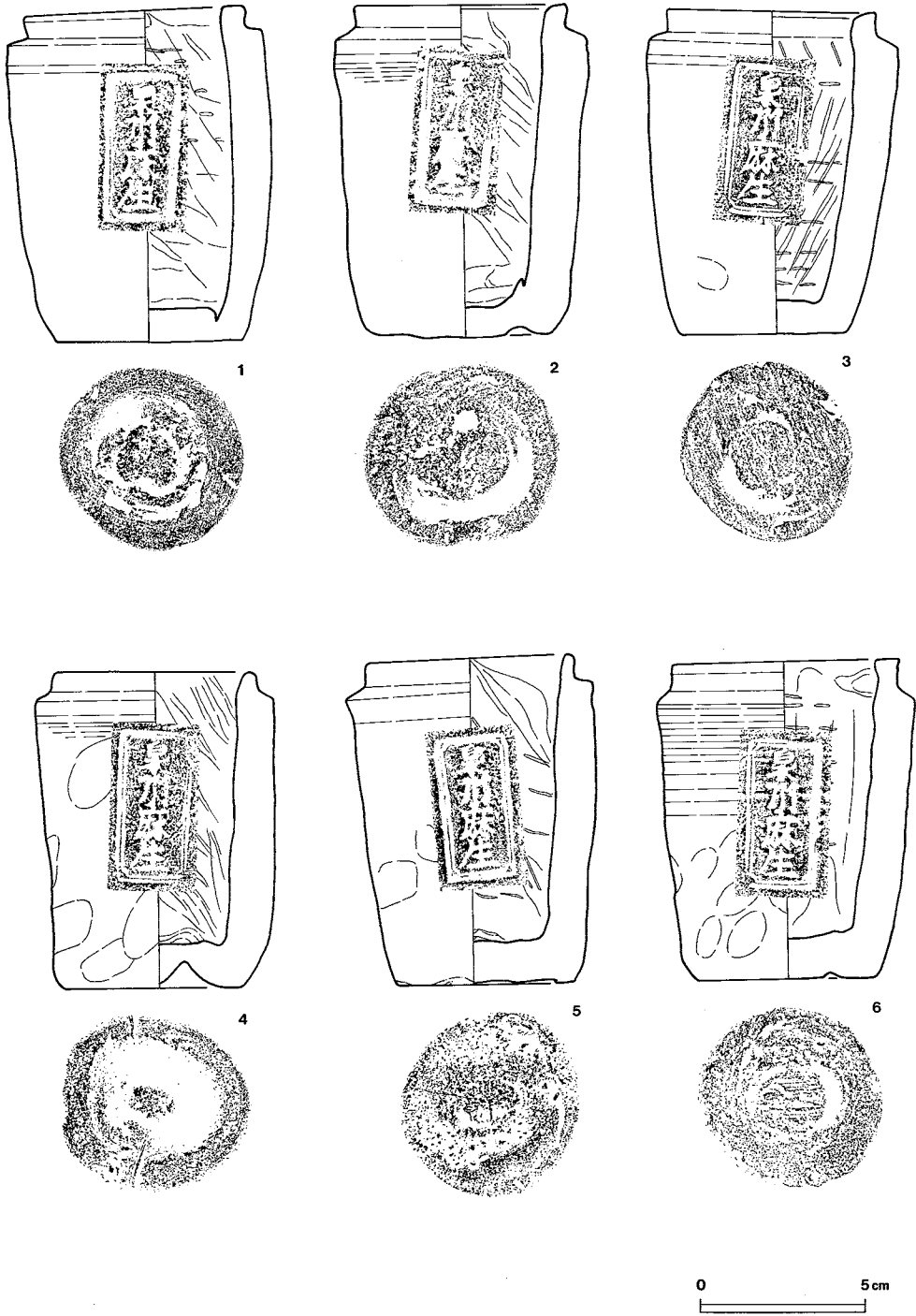


第269図 焼塩壺(1)

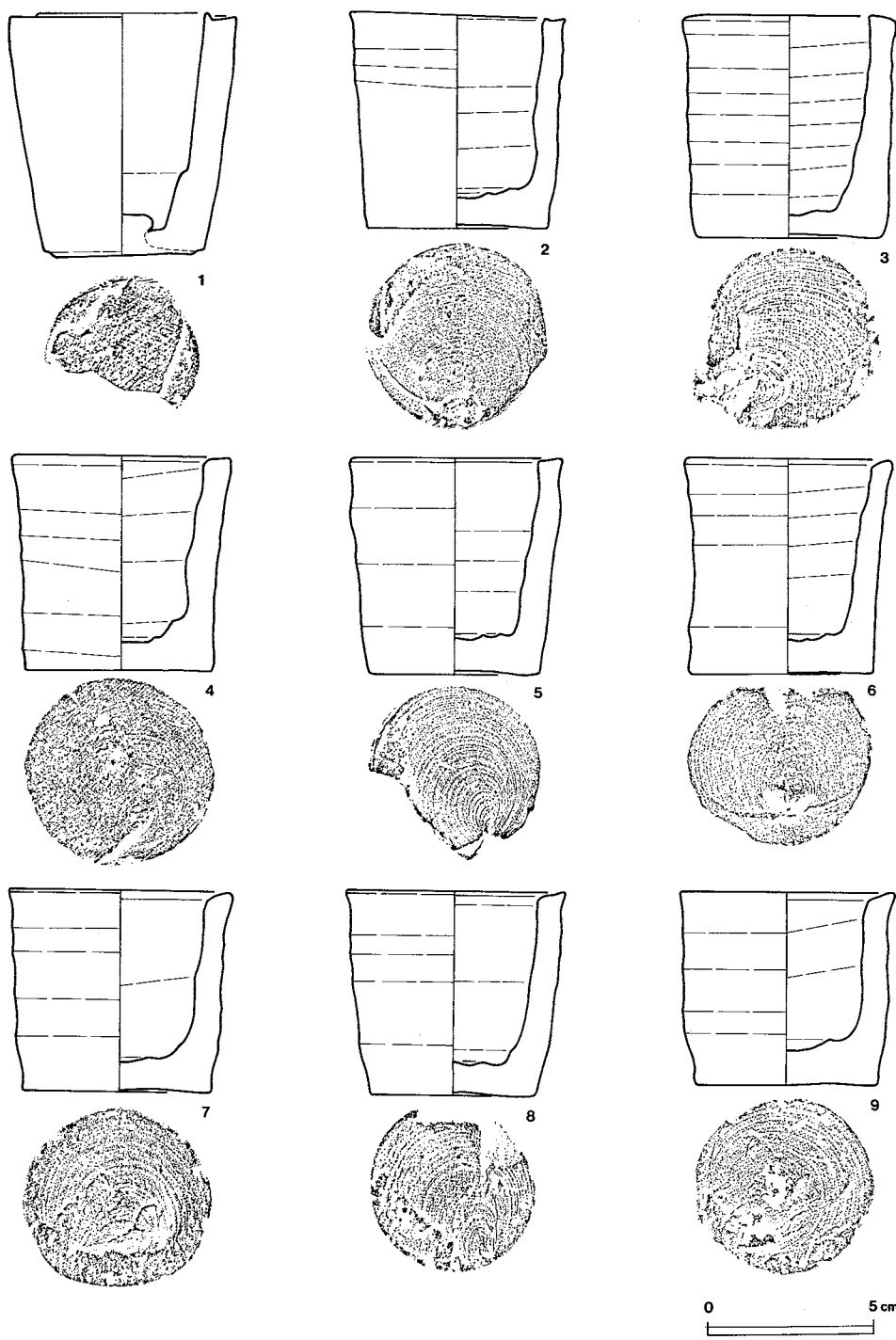


第270图 烧塩壺(2)

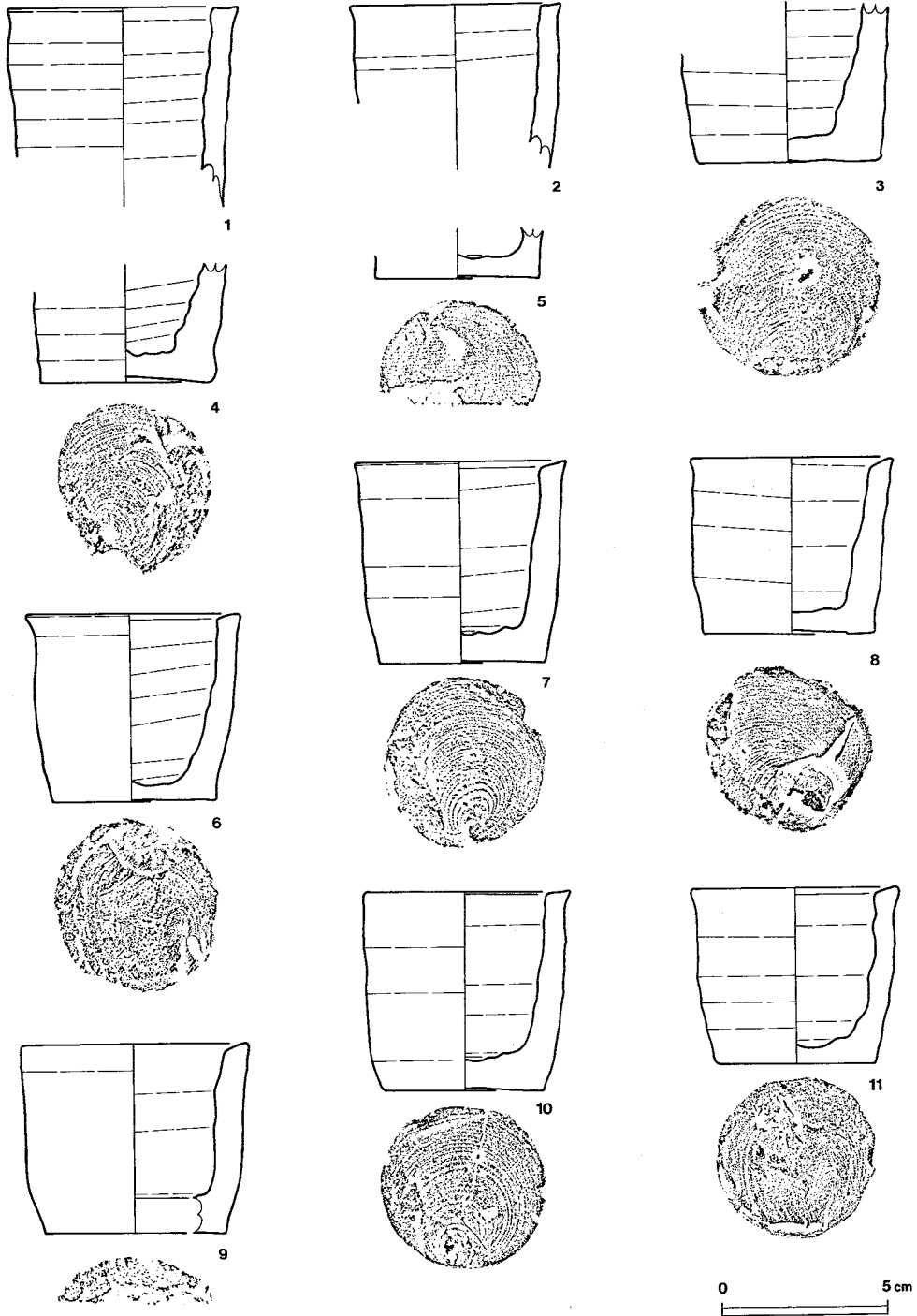




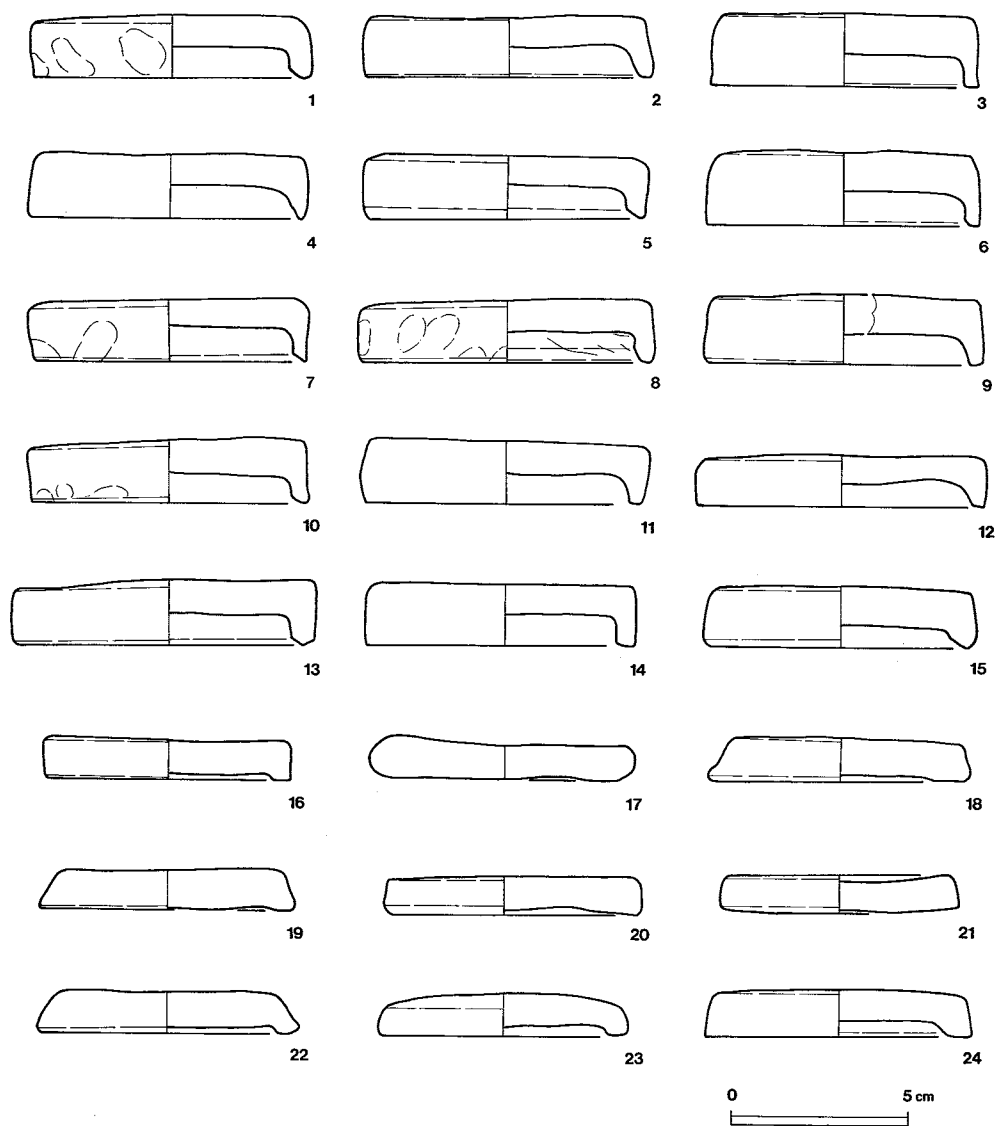
第271図 焼塩壺(3)



第272図 焼塩壺(4)



第273図 焼塩壺(5)



第274図 焼塩壺(6)

### (5) 玩具類

本項では遺構から出土した、陶磁器類の玩具類を対象とする(第275図：図27上)。

多様な形態が見られるが大別すると、ミニチュア・人形・遊具・その他用途不明品に分けられる。

ミニチュア 1は土器製の土瓶であり口縁部を欠損する。底径4.1cmで底面に回転糸切痕を残す。外面全体に透明釉を施釉。E7-3号土坑出土。2は土器製仏花瓶であり口縁部を欠損する。底径2.4cmで体部は六面を作る。おそらく型作りであり、半面を貼付けてある。体部に各面花文が見られ緑釉を施釉。E7-3号土坑出土。3は陶器製徳利で完形である。口径7.8cm, 底径5.5cm, 器高4.8cmで底部に回転糸切痕を残す。F8-3号遺構出土。

人形 4~6が該当しいずれも土製品である。4は顔面のみ残存し、長3.9cm, 幅2.2cmで型作りである。E8-5号土坑出土。5は頭部を欠損し、現存長6.7cm, 幅2.6cmで型作り成形である。E7-3号土坑出土。6は頭部のみ残存し、長4.3cm, 幅1.9cmで型作り成形である。

遊具 9~13は「おはじき」あるいは碁石と推測される。大半は土製品であるが、12は磁器の転用品である。9は径2.2cm, 厚さ0.6cmである。D11-1号溝出土。10は径3.3cm, 厚1.2cmである。D11-1号溝出土。11はやや楕円形で径1.7×1.4cm。厚0.4cm。12は染付を打ち欠いて転用したものである。径は1.4cm, 厚0.4cmである。E11-1号土坑出土。13は径2.0cm, 厚0.5cmである。C7-3号土坑出土。

(小俣 悟)



(6) 石製品

本項では茶臼・硯・砥石その他用途不明の石製品を対象とする。

茶臼 第276図1は上臼でほぼ半存し、芯受穴が見られる。また側面には挽手孔がある。推定径21.0cm, 高11.8cmで目数は7条。遺構外。同2は下臼片であり受部が見られる。遺構外。同3は上臼で被熱しており、かなり破碎されて出土しており、全体は復元できない。中央部は欠損しているが側面に挽手孔が見られる。推定径24.3cm, 高11.0cmで目数は13条。E 8-2号土坑出土。同4(図版27)は下臼で3と同様に被熱しており、かなり破碎されて出土しており、全体は復元できない。やはり中央部は欠損しているが受部が残存している。推定底径31.8cm, 受部径38.0cmで底面は凹凸が顕著であるが、全体的に極めて平滑である。E 8-2号土坑出土。

1・2は砂岩質である。E 8-2号土坑より出土している3・4は、石質が緻密でかなり硬質である。また共に調整が丁寧で全面平滑でかなり良質の物と思われ、3・4は上下に組合うであろう。E 8-2号土坑からは茶器と推定される陶磁器類が出土しており、茶臼の存在から茶道具の廃棄が想定される。

硯 多様な時期の遺構から多量に出土しており遺存もかなり良好である。

第277図1は被熱しており、かなり破碎された状態で出土しており、硯陰を欠損している。長14.7cm, 幅7.7cmで青緑色を呈するが一部赤く変色している。E 8-2号土坑。同2は長15.1cm, 幅6.3cmで青緑色を呈する。E 8-5号土坑出土。同3は長14.9cm, 幅5.9cm, 高2.0cmで青緑色を呈する。硯陰に凹面が見られる。E 7-3号土坑出土。同5は長13.6cm, 幅7.3cm, 高2.3cmで黒色を呈する。E 7-3号土坑出土。同6は長13.9cm, 幅6.5cm, 高1.7cmで黄褐色を呈する。E 7-3号土坑出土。同7は長7.8cm, 幅4.2cm, 高1.5cmで灰緑色を呈する。遺構外。同8は長12.1cm, 幅4.7cm, 高1.3cmで灰緑色を呈する。硯陰に凹面が見られ、「本高嶋虎斑石」と刻字されている。E 7-3号土坑出土。同9は長10.2cm, 幅4.4cm, 高2.1cmで青緑色を呈する。遺構外。第278図1は長13.2cm, 幅4.6cm, 高1.5cmで灰緑色を呈する。硯陰に「上々高田石」の刻字が見られる。B 7-2号土坑出土。同2は海側を欠損する。幅4.5cmで灰緑色を呈する。E 8-3号土坑出土。同4は両端を欠損する。幅6.4cmで黒色を呈する。硯陰に年号の刻字が見られ、「保四年正月(以下欠損)」と判読できる。遺構外。

第277図8の刻字「本高嶋虎斑石」及び第278図1の「上々高田石」は、硯の生産地を明示するものであろう。「上々高田石」の「上々」は上質を意味するものと思われる。「本高嶋虎斑石」は近江国高嶋郡(現滋賀県高島郡高島町)の「虎斑石」を表わす。「虎斑石」とは石材が虎の斑状を呈し、「高嶋硯」として江戸初期から著名な硯石である。

第278図4に刻字されている年号「保四年」は1字目が不明だが、江戸時代に限定されるとすれば「正保」「享保」「寛保」「天保」が候補に上がる。これらの年号の中で四年を有するものは「正保四年(1647)」「享保四年(1719)」「天保四年(1833)」が該当する。18世紀後半以降と推測され

る瓦溜りからの出土である為、明確には比定できない。しかし同時に出土したものと思われる陶磁器類は、くらわんか手の染付碗等18世紀前半を中心とする物が多い。ゆえにあえて推測すれば「享保四年」の可能性が高い。以上、図版28を参照願いたい。

砥石 多様な時期の遺構から多量出土しており、形態も多様である。しかし主として扁平で硬質な仕上げ砥と、棒状で軟質な砂岩質・凝灰岩質の荒砥に分類される。

第278図5は長10.2cm、幅3.8cm、厚1.2cmで灰青色を呈する。G 8-1号土坑出土。同6は長11.0cm、幅5.1cm、厚1.7cmで淡褐色を呈する。B 7-2号土坑出土。同7は長12.9cm、幅4.1cm、厚1.1cmで茶褐色を呈する。C 7-3号土坑出土。同8は長9.6cm、幅3.9cm、厚0.8cmで赤褐色を呈する。D 7-1号土坑出土。同9は長7.2cm、幅5.5cm、厚2.0cmで黄白色を呈する。G 6-4号土坑。同10は長5.7cm、幅3.2cm、厚1.1cmで淡褐色を呈する。E 7-3号土坑。同11は長5.3cm、幅3.6cm、厚1.1cmで灰青色を呈する。同12は長8.2cm、幅3.4cm、厚1.0cmで赤褐色を呈する。B 3-3号土坑出土。第279図1は長12.8cm、幅3.1cm、厚2.4cmで青白色を呈する。C 7-3号土坑出土。同2は長10.1cm、幅4.0cm、厚2.1cmで淡褐色を呈する。B 7-2号土坑出土。同3は長7.7cm、幅2.5cm、厚2.4cmで黄白色を呈する。H 5-1号土坑出土。同4は長6.2cm、幅3.6cm、厚2.7cmで淡褐色を呈する。B 3-1号土坑出土。同5は長6.2cm、幅4.0cm、厚3.4cmで黄白色を呈する。C 7-2号土坑出土。同6は長4.6cm、幅3.8cm、厚2.7cmで淡黄色を呈する。E 7-3号土坑出土。同7は長10.5cm、幅8.7cm、厚4.9cmで灰青色を呈する。C 4-1号土坑出土。同8は長14.4cm、幅13.6cm、厚6.2cmで灰青色を呈する。K 5-2号土坑出土。

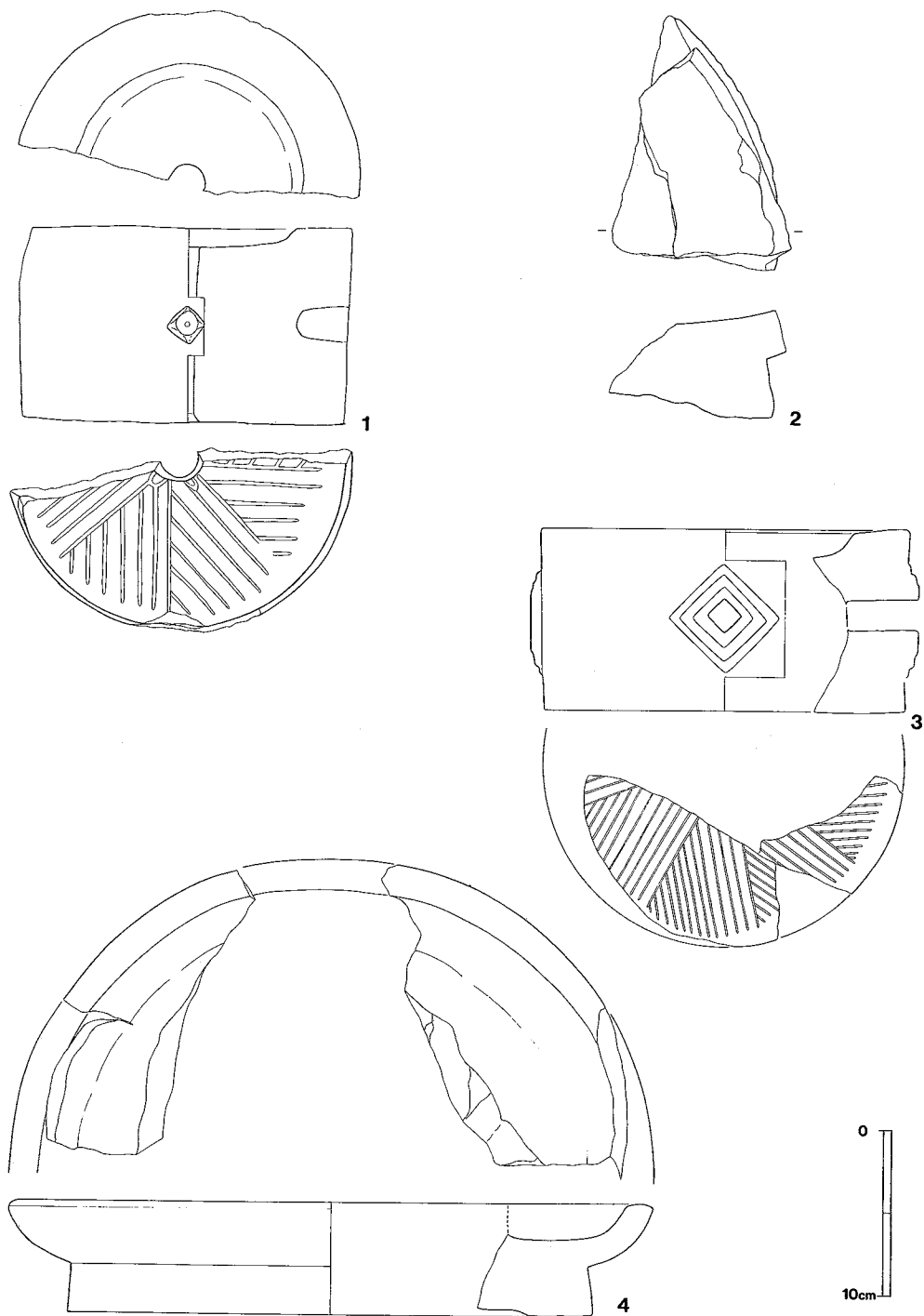
その他の石製品 第278図3・第279図9はほぼ同形の板状石製品である。3は長10.8cm、幅5.9cm、厚1.7cmで黒青色を呈する。外面は全体的に平滑に調整されており、一方の短辺側に穿孔を有する。E 8-5号土坑出土。9は下方を欠損しており、幅5.8cm、厚1.7cmで青緑色を呈する。側面に太目の線刻が見られ逆字であるが「仁岸氏」と判読される。人名と推測され、印鑑として使用された可能性がある。

第280図6・7（図版27下）は火打石と推測される。共に石英質であり、三角錐形であり、稜が部分的に磨滅している。共にC 7-3号土坑出土。

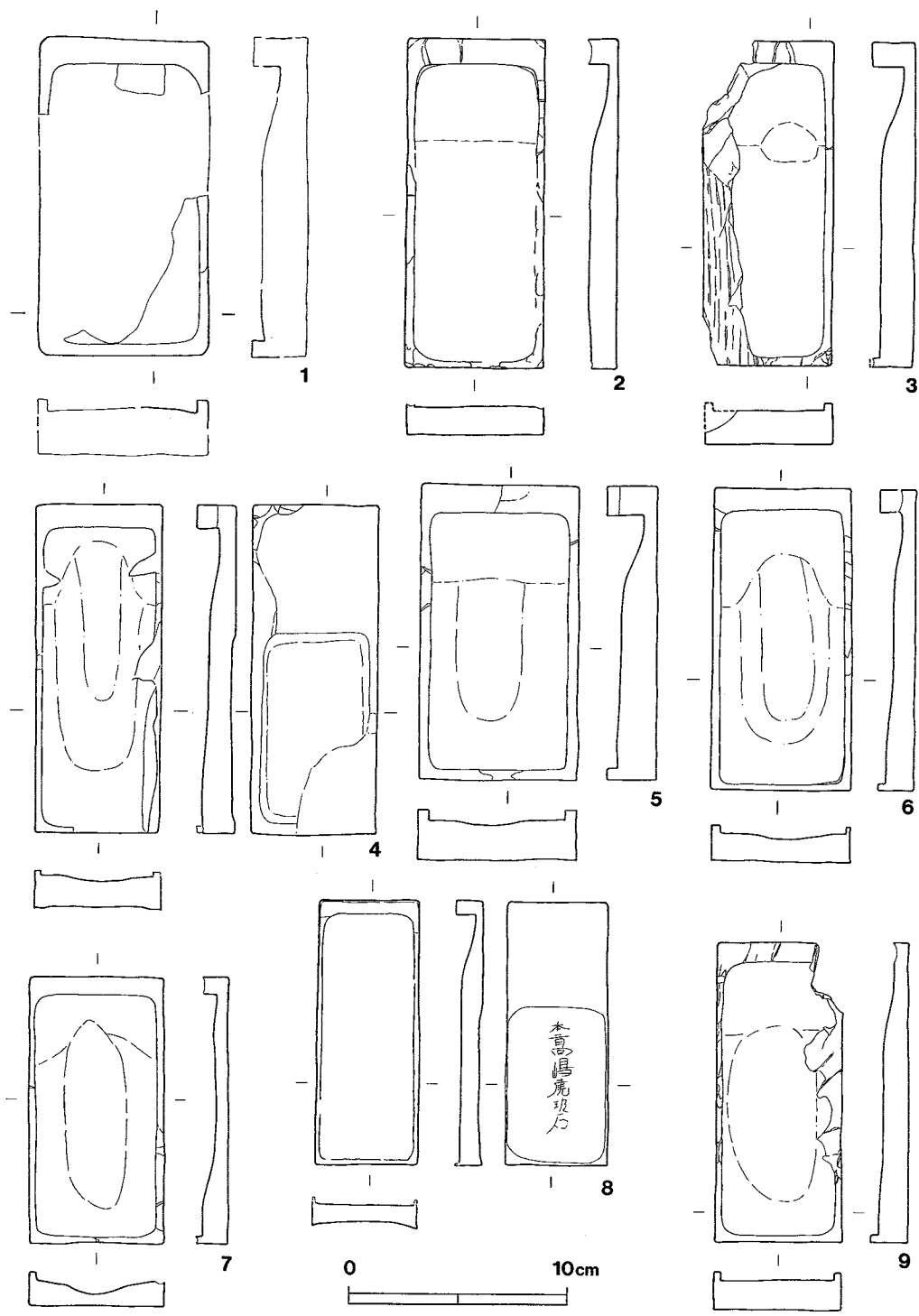
第280図2・3は軽石状石製品である。2は三角状で長6.2cm、幅3.9cm、高3.2cmである。遺構外。3は扁平な楕円形であり、長13.3cm、幅8.9cm、高3.6cmである。G 6-4号土坑出土。

第279図10は糸巻き状で径3.3cm、高3.5cmで淡褐色を呈する。E 8-5号土坑。第280図1は砂岩質で人形状である。高11.5cm、幅8.2cm、厚6.7cmである。C 3-3号土坑出土。同4は厚手の八角形で径4.7cm、厚1.9cmである。E 7-3号土坑。同5は八角柱状であるが一部欠損している。径3.0cm、厚3.8cmで黄白色を呈する。B10-2号土坑出土。 (小俣 悟)

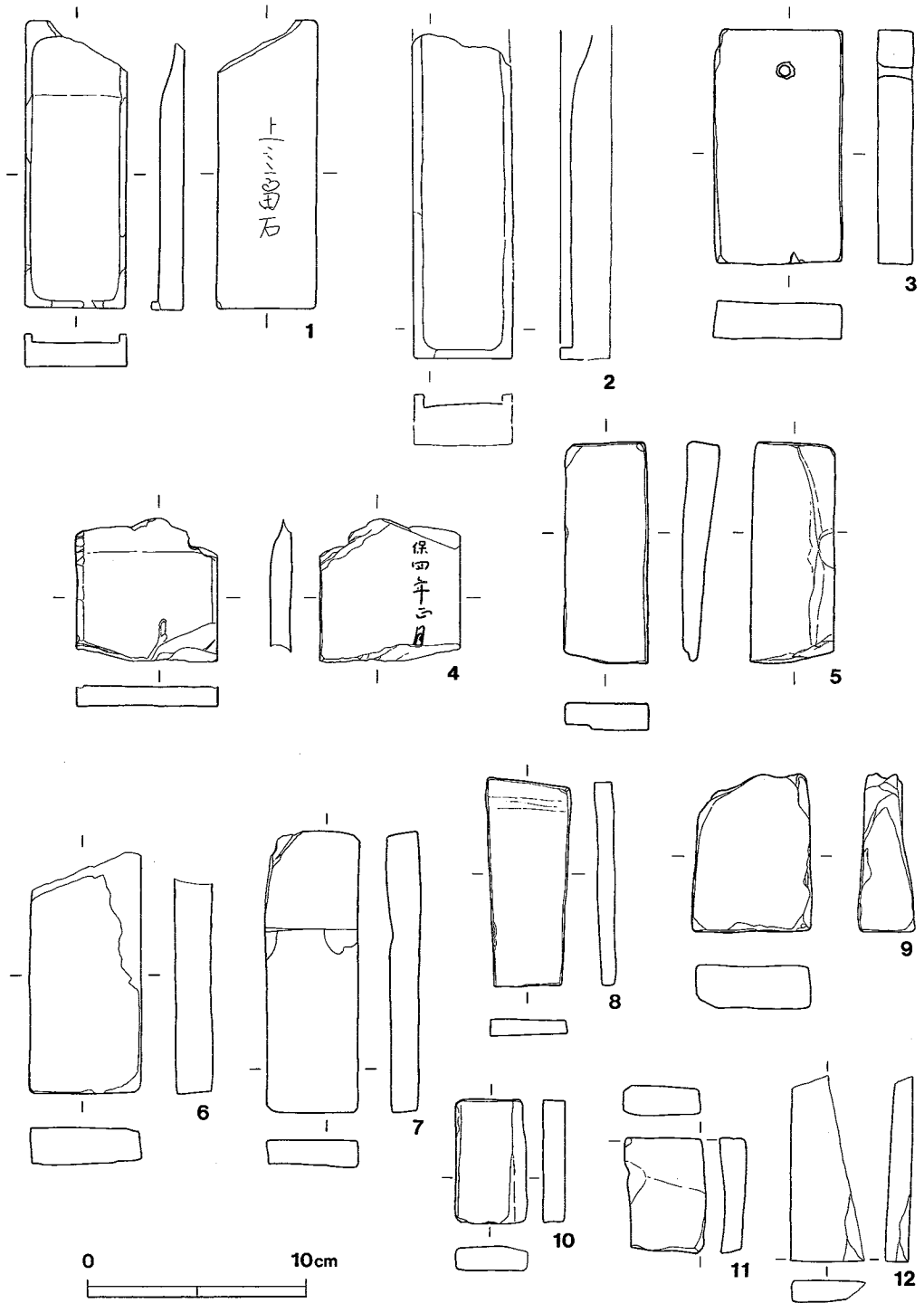




第276図 石製品(1)



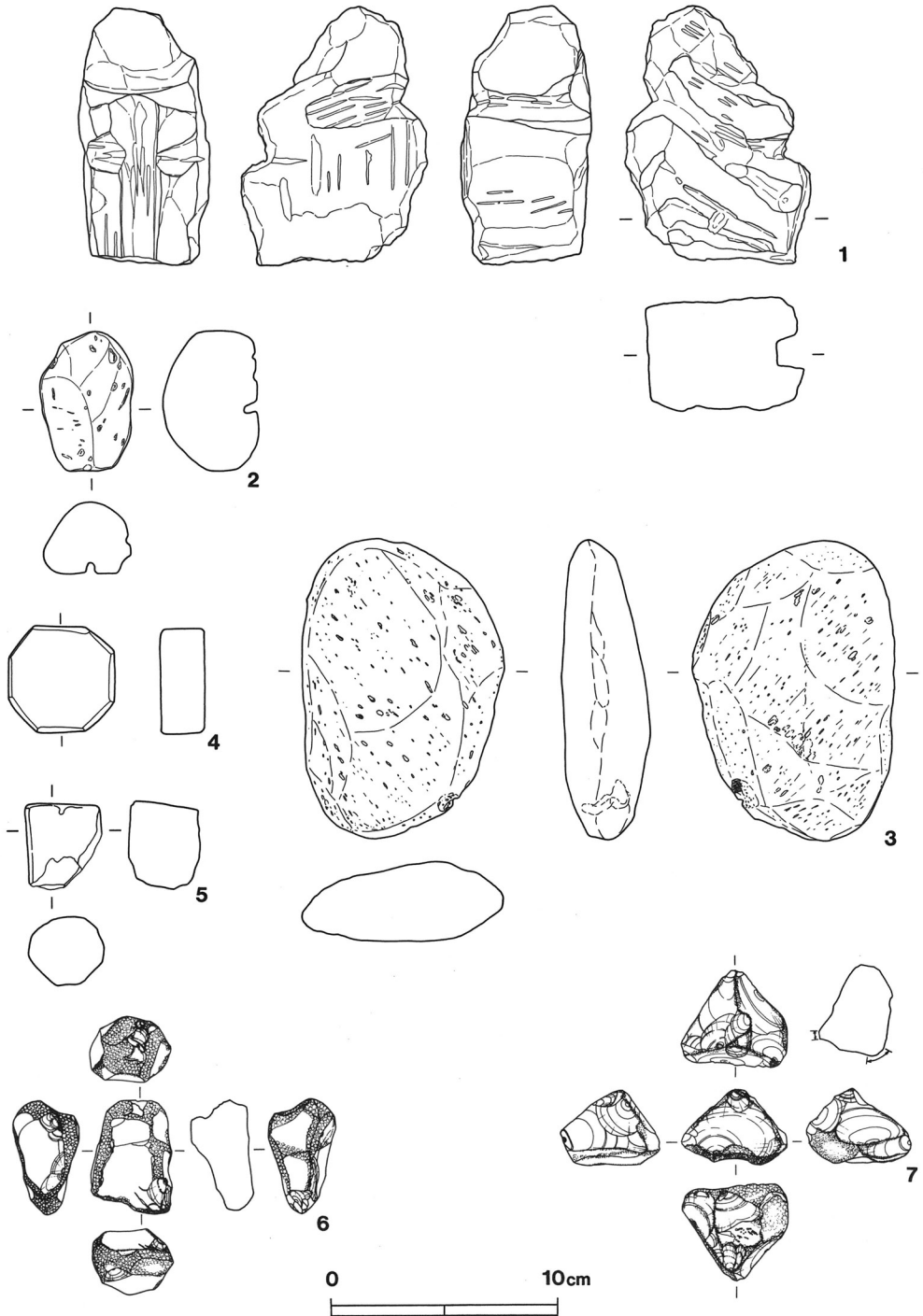
第277図 石製品(2)



第278図 石製品(3)



第279図 石製品(4)



第280図 石製品(5)

## (7) 金属製品

本地区出土の金属製品は他の遺物と同様かなり多量に上るが、破損や錆化等で遺存状態の悪いものが多く、図示したものは全体の20%程度である。

鉄製品は建築用材、就中、和釘が多く(283-1~40, 45, 46, 284-1~88, 281-1~24)他に錠(283-41~43)、鉤針(283-44)と南蛮鋏と思われるもの(283-47)がある。土坑出土のものは前述のように遺存状態が悪く包含層出土のものに比較的状态の良いものがあり、ここでは遺存状態が良く数的にもまとまって出土しているE8区の包含層出土のもののみ計測表を添付した。南蛮鋏とは『和漢三才図会』巻第二十四・百工具に見られる柄を頭部にT字状に付けて振る大鑽のことで本地区出土のものがそれに当たると思われる。

他の鉄製品には錠前(281-25)、容器(281-26)、刃器(281-27, 28)、刀身(281-29)、鋏具(283-37)、錠の掛け金具(281-38)の外、用途の不明なもの(281-30~36)も多い。刃器(281-27, 28)は刃部背面に木製の柄が残存している。

銅製品は飾り金具が多く(282-7~22)、他盥状容器(282-1)、鋏(282-3~6)、釣針状製品(282-23)、鈕状製品(282-24)、小柄(282-25)、針金状製品(282-26~28)などが各遺構、包含層から少量ずつ出土している。釣針状製品は基部側3箇所にも彫りの花文が、小柄は刀身を欠失しているが草様の浮き彫りが施されている。

煙管は、大型土坑からまとまって出土する場合が多い。状態のよいものから約半数を選んで図示した。吸い口には、肩に段の付くもの(282-29, 31, 63)と付かないもの(それ以外)があり更に段は付かないものの接合痕が見られるもの(282-61)までであるのに、雁首はすべて段も接合痕も付かないものである。木製のラウの根本が中に残っているものもある。(上田 真)

付記 第283図47例については東京大学名誉教授村松貞次郎氏からも石工用の鑽であろうとの御教示を頂いた。

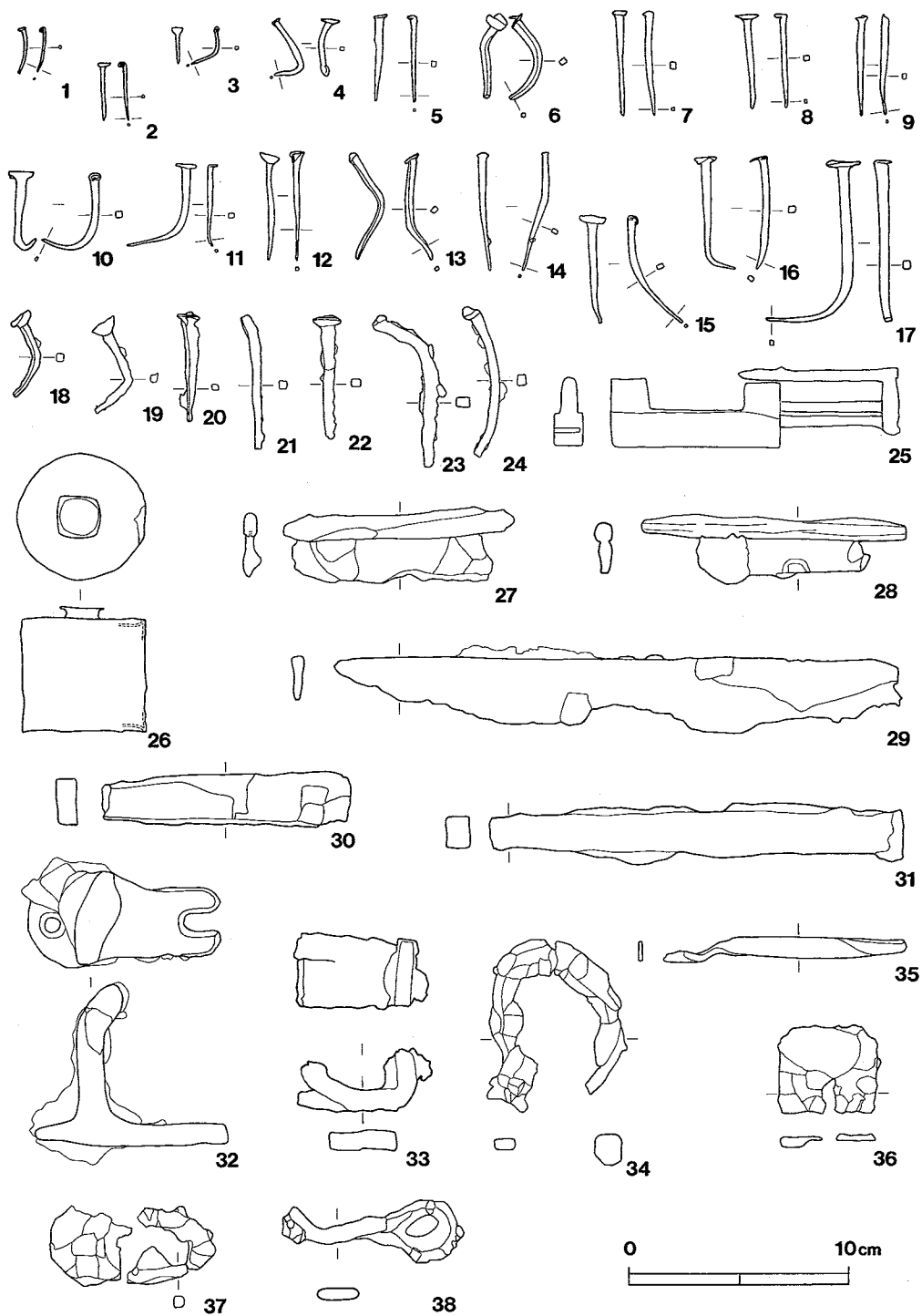
表8 金属製品出土遺構

図版番号	出土遺構	32 C3-1号遺構	13 C9-4号遺構	29 D8-2号土坑
(1)-1~25	F7-3号遺構	33 表採	14 C7-3号土坑	30, 31 G6-2号土坑
26~40	E8-2号土坑	34 C7-3号土坑	15 C7-3号土坑	32, 33 D8包含層
41, 42	表採	35 E7-3号土坑	16 B7-2号土坑	34~36 B10-2号土坑
43	C7包含層	36 C6-1号土坑	17 B9-4号土坑	37~39 C7-2号土坑
44	E7-1号土坑	37 C7-3号土坑	18, 19 E11-1号土坑	40~42 C7-3号土坑
45	F7-6号土坑	38 B9-7号土坑	20 G6-2号土坑	43~45 E7-5号土坑
46	E10-4号遺構	(4)-1 F7-6号土坑	21 C7-3号土坑	46 E8-2号土坑
47	F7-3号遺構	2 C8-1号土坑	22 E11-1号土坑	47~49 F8-1号土坑
(2)-1~88	E8包含層	3, 4 C7-2号土坑	23 C7-1号土坑	50~55 B7-2号土坑
(3)-1~25	F8包含層	5 C8-1号土坑	24 C7-3号土坑	56 C8-1号土坑
26	表採	6 C7-2号土坑	25 C2-2号土坑	57~64 E7-5号土坑
27, 28	C7-3号土坑	7 C7包含層	26 E7-3号土坑	65, 66 F7-6号土坑
29~31	表採	8~10 E8包含層	27 E8-5号土坑	
		11, 12 C7-3号土坑	28 C11包含層	

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

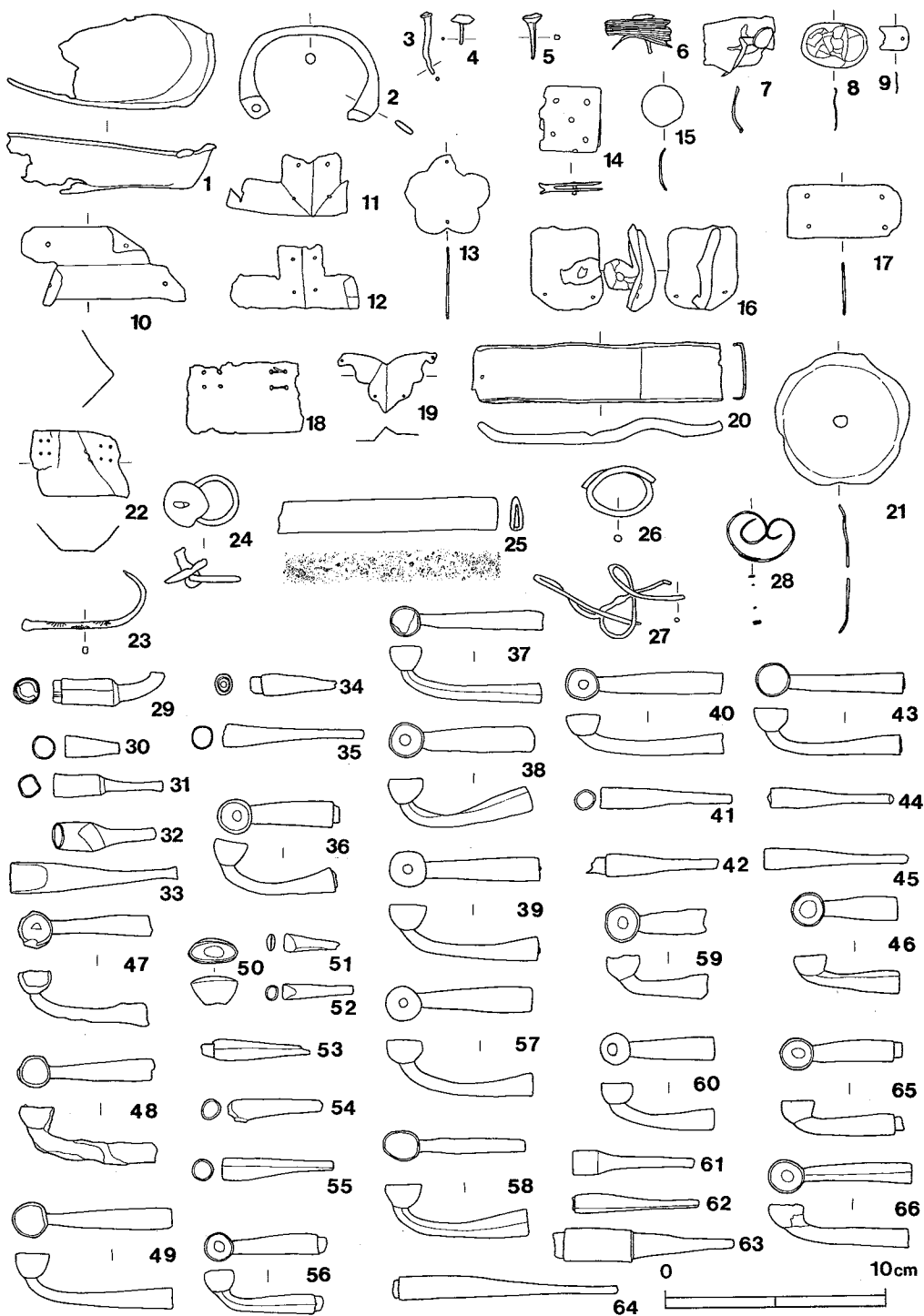
表9 E8包含層出土和釘計測表

図版 番号	最大長 (cm)	基 部 径 (mm)	頭 部 大 (mm)	重 量 (g)					
					44	5.8	3.0×2.5	5.0×4.0	2.6
					45	(6.0)	3.5×3.5	—	(2.8)
					46	5.2	2.5×2.5	10.5×4.5	2.3
(2)-1	—	—	—	0.3	47	5.4	3.5×3.5	9.5×5.0	2.9
2	2.1	2.0×1.5	4.5×3.5	0.5	48	6.2	4.0×3.5	11.0×5.0	3.7
3	(2.8)	2.0×1.5	5.0×3.0	(0.5)	49	4.5	3.0×2.5	9.0×4.5	2.0
4	2.4	2.0×1.5	6.0×4.0	0.6	50	5.4	3.5×3.0	11.0×6.0	3.1
5	2.5	1.5×1.5	4.5×2.0	0.4	51	5.6	3.0×2.5	8.0×4.0	2.7
6	2.3	2.0×1.5	4.0×1.0	0.4	52	4.4	3.5×3.0	—	2.0
7	2.0	2.0×1.5	4.5×1.5	0.4	53	5.2	3.0×2.5	10.5×5.0	2.6
8	2.2	1.5×1.5	5.0×2.5	0.4	54	5.8	3.0×3.0	9.5×5.0	2.4
9	2.3	2.0×2.0	6.5×2.5	0.5	55	4.9	3.0×2.5	11.0×4.5	2.1
10	2.4	2.0×1.5	4.0×2.5	0.4	56	6.4	3.0×2.5	10.0×4.0	2.8
11	(2.1)	2.0×2.0	6.0×4.0	(0.5)	57	5.7	3.5×3.0	11.0×5.5	3.7
12	2.5	2.0×2.0	6.0×4.0	0.7	58	5.8	3.5×3.0	13.0×6.5	2.9
13	2.5	2.5×1.5	6.0×3.0	0.6	59	5.7	3.5×2.5	9.5×4.0	3.2
14	2.3	1.5×1.5	7.0×3.0	0.6	60	5.7	3.0×2.5	9.5×4.5	2.3
15	(3.7)	3.0×2.5	9.0×5.0	(1.5)	61	5.7	2.5×2.5	9.0×5.0	2.1
16	2.7	2.0×2.0	7.0×4.0	0.6	62	5.3	3.0×2.5	9.0×4.0	2.2
17	2.5	2.5×1.5	6.0×3.0	(0.6)	63	6.5	3.5×3.0	12.5×6.0	4.4
18	2.2	2.0×1.5	6.0×3.0	(0.5)	64	5.7	3.0×3.0	11.0×5.0	3.1
19	(2.7)	2.5×2.0	10.0×5.0	(1.0)	65	7.0	3.0×3.0	13.0×5.0	3.7
20	2.6	2.0×1.5	6.0×4.0	0.7	66	6.0	3.0×3.0	9.0×4.0	2.8
21	2.7	2.0×1.5	7.0×2.0	0.5	67	5.9	3.0×2.5	11.0×5.5	2.5
22	2.6	2.0×1.5	5.0×2.5	0.7	68	5.7	3.0×3.0	10.0×4.0	3.0
23	3.0	2.0×1.5	6.0×2.5	(0.7)	69	5.8	3.5×3.0	11.0×6.0	2.9
24	(2.6)	3.0×2.5	11.5×3.5	(1.6)	70	5.6	3.5×3.0	11.5×5.0	3.1
25	3.6	3.0×3.0	5.0×3.5	1.5	71	5.1	3.0×2.5	10.5×6.0	2.0
26	3.8	2.5×2.5	9.5×5.0	1.4	72	6.2	3.5×3.0	11.4×4.5	2.9
27	3.9	3.0×2.5	5.5×4.0	1.4	73	4.3	3.0×2.5	10.5×5.0	1.4
28	4.3	3.0×2.5	6.0×3.5	1.8	74	5.5	3.0×3.0	9.0×4.5	2.4
29	4.7	2.5×2.0	10.5×5.0	1.4	75	6.0	3.5×3.0	11.0×5.5	3.2
30	4.4	3.0×2.5	10.0×3.5	1.8	76	6.0	3.5×3.0	12.0×5.5	2.9
31	4.3	3.0×2.5	10.5×1.5	1.6	77	5.5	3.0×2.5	8.5×3.5	2.2
32	4.7	2.5×2.5	4.5×2.5	1.5	78	6.4	3.5×3.0	10.0×6.0	3.4
33	4.4	2.5×2.5	9.0×4.0	1.5	79	5.7	4.0×3.5	10.5×5.0	—
34	4.4	3.0×2.5	10.0×3.5	1.7	80	(7.3)	6.0×4.5	—	—
35	5.6	3.5×3.0	7.0×4.0	(2.8)	81	(6.4)	5.5×4.0	—	—
36	4.1	3.0×2.5	6.0×3.0	1.7	82	5.2	3.5×3.0	—	—
37	4.3	3.0×2.5	8.0×3.5	1.6	83	—	—	—	—
38	4.1	3.0×2.5	9.0×3.5	1.5	84	8.2	4.5×4.0	12.5×5.5	6.9
39	4.7	3.0×3.0	10.0×5.5	1.9	85	7.1	4.0×4.0	11.0×5.5	7.1
40	4.6	2.5×2.5	5.5×3.0	2.0	86	8.7	5.0×4.0	13.0×5.0	7.6
41	5.4	3.0×3.0	9.5×4.0	2.9	87	7.4	4.0×4.0	13.0×8.0	5.5
42	5.7	3.0×3.0	11.0×5.0	3.1	88	9.8	5.0×4.0	18.0×7.0	11.9
43	5.6	3.5×3.5	9.5×4.5	2.6					

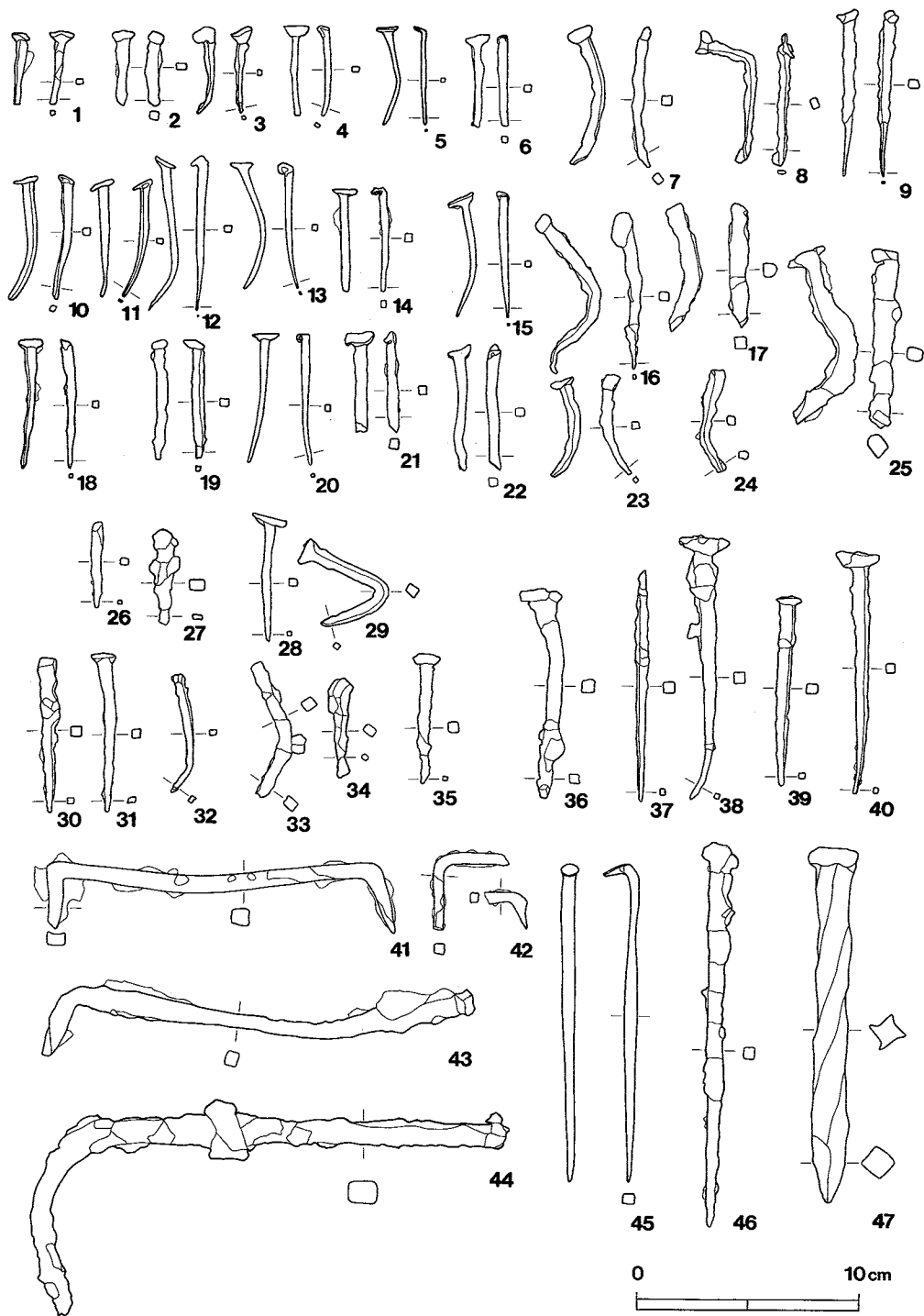


第281図 金属製品(1)

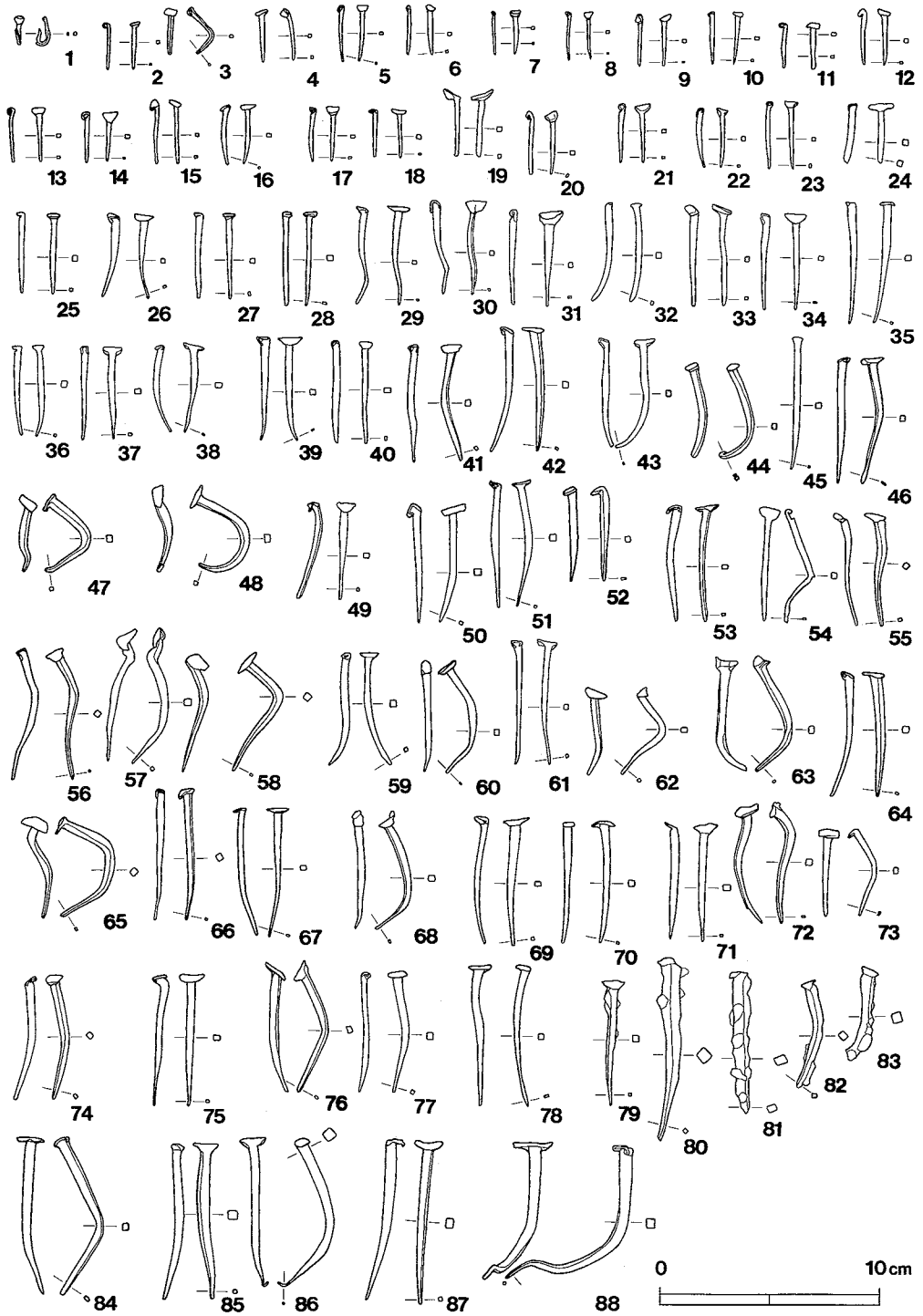




第282図 金属製品(2)



第283図 金属製品(3)



第284図 金属製品(4)

## (8) 古 銭

本地区出土の古銭は表採品も含めて総数49枚に上り、その殆どが寛永通寶である。他には、表採品の五銭銅貨と、宋銭、明銭があるが、渡来銭はかなりの長期間流通していたようで磨減がひどく、拓図を示すことが出来なかった。寛永通寶も含めて拓図を示すことが出来なかったものが約半数に上り、表10・11では遺構毎に全ての出土古銭を類別しているので参照されたい。

本地区では、B 7-2号土坑から計11枚の宋銭及び寛永通寶が出土しているが、他は数枚程度でありなかでも1~2枚の例が多く、埋納というよりも混入と考えられるものが多い。複数の古銭が出土しているものでは、宋・明銭または古寛永銭のみが出土する遺構はなく、新寛永銭のみが出土するD 7-1号土坑、E 9-1号土坑も出土古銭は各2枚で偶然とも考えられるもので、様々な鑄造年代の銭貨が同時に通用していた状況が推察されると共に、少数の古銭の出土によって、遺構の年代を推定することの危険性を思い知らされるのである。

尚、本項中の古銭の分類は住谷昭洋氏の手を煩わせた。

(上田 真)

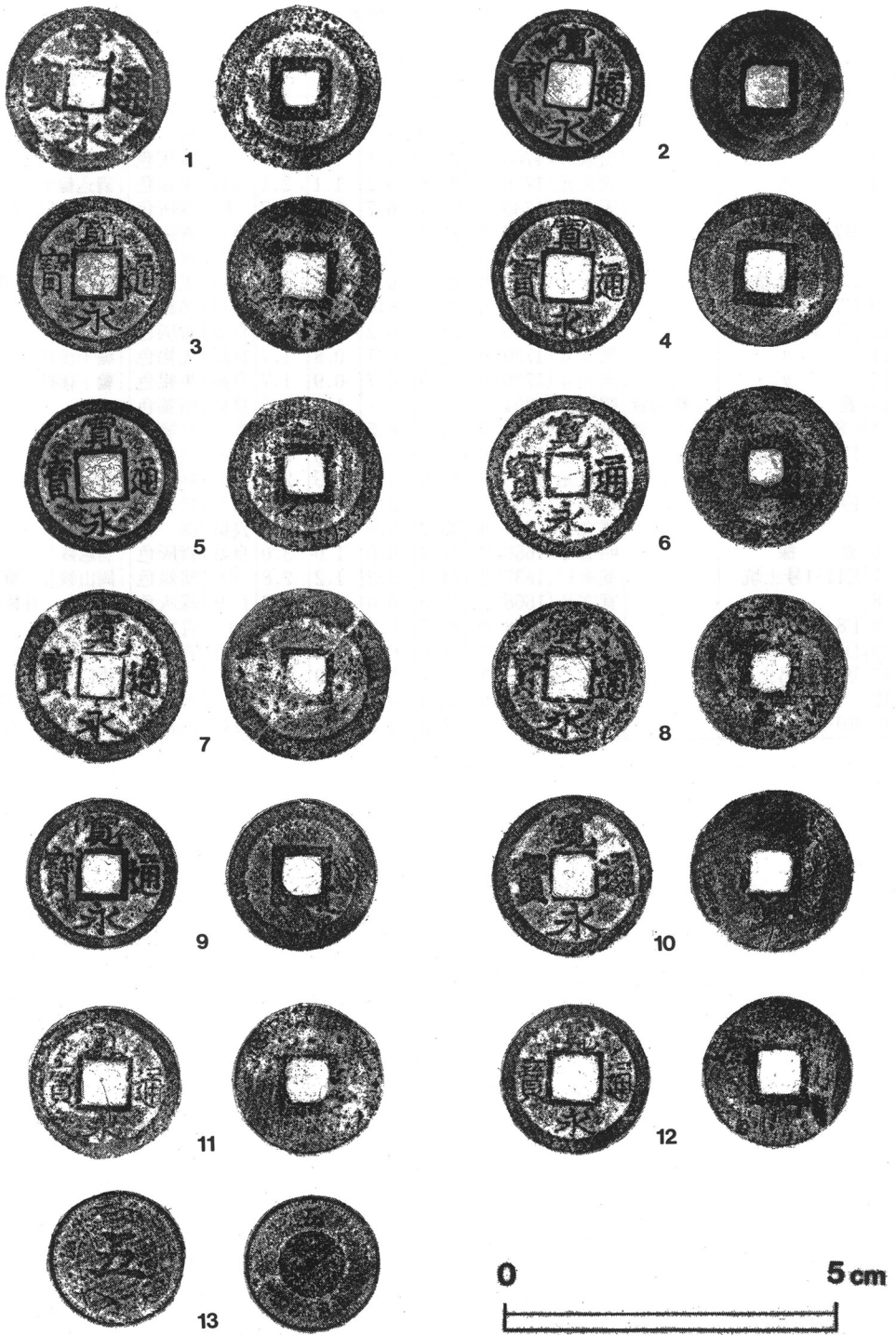
表10 古銭一覧

種類 出土遺構	宋 銭		明 銭		古 寛 永 銭						新 寛 永 銭						五 銭 銅 貨	計		
	皇 宋 通 寶	不 明 宋 銭	洪 武 通 寶	永 樂 通 寶	水 戸 銭	岡 山 銭	虎 ノ 尾 銭	建 仁 寺 銭	鳥 越 銭	沓 谷 銭	不 明 古 寛 永 銭	文 銭	潤 縁 文 無 背	四 ツ 宝 銭	不 旧 手	鑄 込 輪 十			輪 十 後 打	四 文 銭
B7-2号土坑	1							1	1	1			4	1	1	1			11	
B7-7号土坑		1				1						1			1	1			5	
C2-4号土坑															1				1	
C4-1号土坑													1						1	
C7-2号土坑			1										1		1				3	
C7-3号土坑					1		1				1				2	3			8	
C8-19号ピット							1												1	
D7-1号土坑													1		1				2	
E8-2号土坑									1		1								2	
E9-1号土坑																	2		2	
E11-1号土坑						1					1								2	
F7-6号土坑				1											1				2	
F8-1号土坑													1						1	
K5-2号土坑																1			1	
D11-1号溝												1							1	
包 層								1			1		2						4	
採 表									1									1	2	
計	1	1	1	1	1	2	1	2	2	2	1	4	2	10	1	8	6	2	1	49

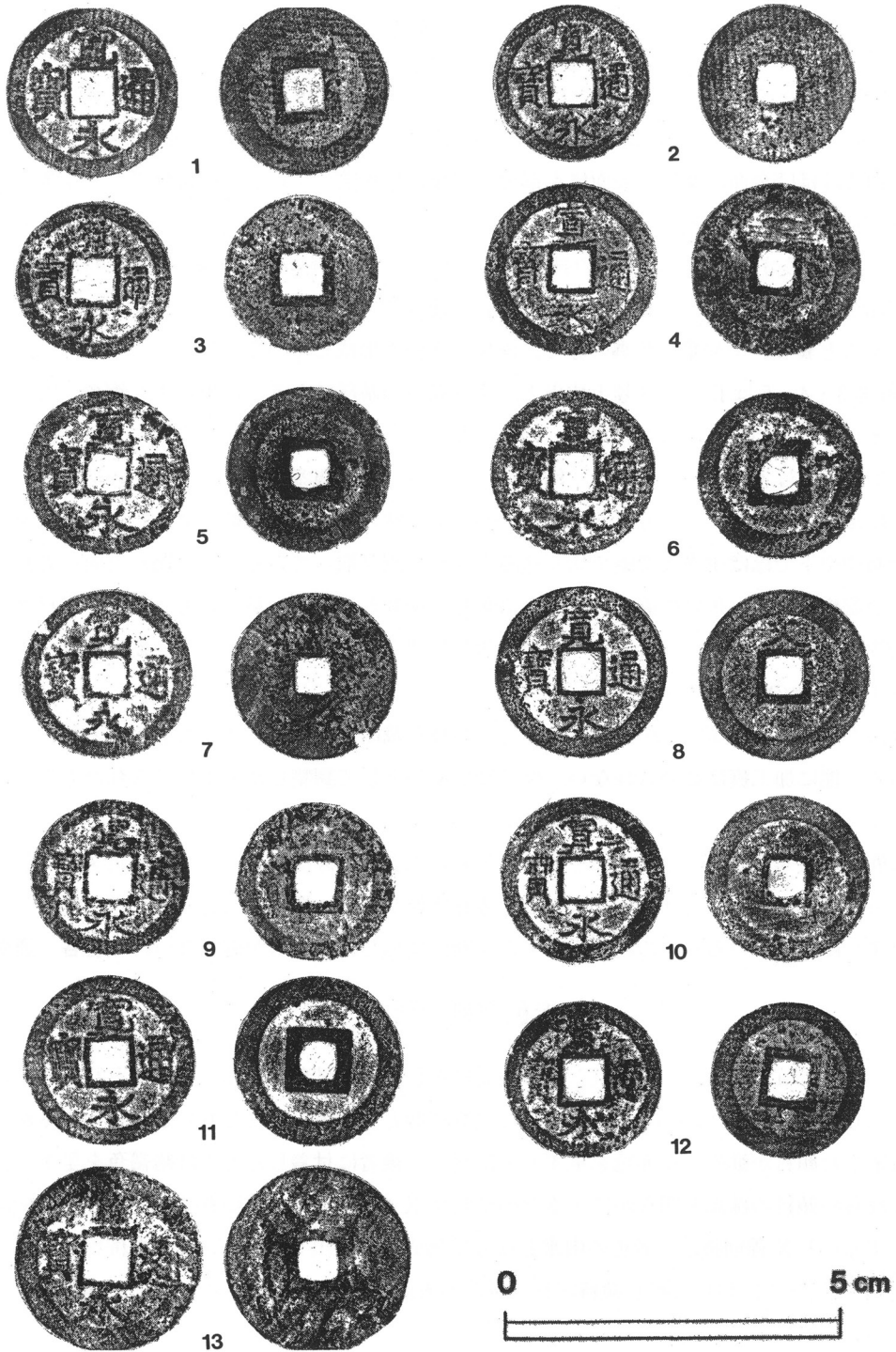
報告篇第三章 江戸時代の調査 I

表11 古銭観察表

図版 番号	出土遺構	種類	初 鑄 年 代	銭径 (mm)	穿径 (mm)	銭厚 (mm)	重量 (g)	遺存 状態	色 調	備 考	
(1)-1	B7-2号土坑	寛永通寶	明暦2(1656)年	24.2	5.3	1.1	3.4	良好	暗緑色	「沓谷銭」	
2	"	"	宝永5(1708)年	22.2	6.7	0.8	2.0	良好	褐色	「四ツ宝銭」	
3	"	"	宝永5(1708)年	23.2	6.1	1.1	2.7	良好	緑灰色	「四ツ宝銭」, 肉厚	
4	"	"	天文元(1736)年	22.8	6.2	1.1	2.1	良好	暗緑色	「鑄込輪十」	
5	"	"	天文4(1739)年	22.9	6.7	0.9	1.2	中	緑灰色	「輪十後打」, 「永」字右	
6	B7-7号土坑	"	寛永14(1637)年	23.2	5.5	1.1	2.2	良好	青灰色	「岡山銭」 にス穴	
7	"	"	延宝元(1637)年	25.2	6.1	1.3	2.5	中	緑灰色	「濶縁文無背」	
8	C4-1号土坑	"	宝永5(1708)年	22.8	6.2	1.2	2.6	良好	黒褐色	「四ツ宝銭」, 肉厚	
9	C7-2号土坑	"	宝永5(1708)年	22.2	6.0	1.0	2.7	良好	暗緑色	「四ツ宝銭」	
10	C7-3号土坑	"	寛永13(1636)年	24.0	6.2	1.1	2.6	良好	青灰色	「水戸銭」	
11	"	"	天文4(1739)年	22.2	6.7	0.8	1.7	良好	黒褐色	「輪十後打」	
12	"	"	天文4(1739)年	23.0	6.7	0.9	1.7	良好	黒褐色	「輪十後打」	
13	表 採	五銭銅貨	明治27(1894)年	20.2	—	—	1.7	4.3	良好	暗茶色	
(2)-1	C8-19号ピット	寛永通寶	承応2(1653)年	24.8	6.5	1.0	3.1	良好	暗緑色	「建仁寺銭」	
2	D7-1号土坑	"	宝永5(1708)年	23.0	6.1	0.8	2.3	良好	暗緑色	「四ツ宝銭」	
3	"	"	天文元(1736)年	22.5	6.6	0.9	2.0	良好	緑 色	「鑄込輪十」	
4	E8-2号土坑	"	明暦2(1656)年	24.2	5.6	0.9	3.3	良好	黒褐色	「沓谷銭」	
5	"	"	寛文8(1668)年	25.2	5.6	1.3	3.6	良好	緑 色	「文銭」	
6	表 採	"	明暦2(1656)年	24.2	6.0	1.0	3.0	良好	青灰色	「鳥越銭」	
7	E11-1号土坑	"	寛永14(1637)年	24.2	5.2	1.2	2.8	中	暗緑色	「岡山銭」, 「寶」字上	
8	"	"	寛文8(1668)年	25.0	6.0	0.9	3.3	良好	緑灰色	「文銭」 外輪部欠損	
9	F8-1号土坑	"	宝永5(1708)年	22.7	6.2	1.1	2.5	中	青灰色	「四ツ宝銭」	
10	D11-1号溝	"	延宝元(1673)年	24.0	6.0	1.2	3.4	良好	青灰色	「濶縁文無背」	
11	包含層出土	"	承応2(1653)年	24.7	5.9	0.9	3.3	良好	緑灰色	「建仁寺銭」	
12	"	"	宝永5(1708)年	23.0	6.2	0.8	2.6	良好	青灰色	「四ツ宝銭」, 肉厚	
13	E9-1号土坑	"	明和5(1768)年	27.5	5.3	1.3	6.1	良好	黒褐色	「四文銭」, 背十一波」	



第285図 古銭(1)



第286図 古銭(2)

## (9) 貝・角製品

法学部側調査区では角、貝を素材した遺物を五点検出した（第287図）。

第287図1はB7-7号土坑出土の貝製顔料容器で、アカガイの左殻を使用している。顔料の痕跡は内面ではほぼ全面に及び、表面にも部分的に僅かに付着している。顔料は鮮やかな赤色で、さらさらした印象を受ける。

第287図2はE8-5号土坑出土の貝製顔料容器で、アカガイの左殻を使用している。顔料の痕跡は内面全面に及んでいたと思われるが、現在は部分的に剝離してしまっている。顔料は1に見られたものと異なりやや暗い色調の赤で、漆様の塗膜を形成している。

第287図3・4・5はE7-13号土坑出土、3は鹿角の基部である。角坐直下を鋸で二方向から切り落としているので、落角を利用したのではないようである。第1枝を根本から切り落としており、切断面では下から上に向かって鋸が進んでいることが観察できる。又、この切断面にはほぼ垂直に加えられた鈍らしき刃痕がある。角幹は第1枝の直上を鋸で切り落とし、さらに第1枝の反対側やや下ではほぼ中央まで鋸で切り込みを入れて割り取っている。この割れた面にも鈍らしい刃痕が認められる。角坐の直上の自然面に著しく摩耗した部分が見られる。鹿角を素材として細工物等を製作した際の残りであろう。尚、角幹に残された鋸の痕からみて、使用された鋸は歯の厚さ1mm弱のものである。

5は長さ32mm、直径最大17mmを計る、鹿角の枝を裁断し自然面を綺麗に磨き落としているものである。他に加工痕は認められない。細工物の原料として調整したまま捨てられたものかと思われる。

4は鹿角の角座部分であるが、3と異なり角座に工具痕を確認できないので落角を利用したと思われる。角座の直上を切り落としている。遺存状態が非常に悪く、海綿体部分は風化して穴が開いたようになっている。その為角座直上の切断に使用した工具も明確でない。（菅谷 通保）

### 赤色顔料の同定

B7-7号土坑、D8-5号土坑からは内面に赤色顔料が付着した赤貝の殻がそれぞれひとつずつ出土している（第287図1、2）。両者は顔料容器として用いられたものと考えられるが、前者に付着した顔料が鮮やかな赤色を呈するのに対し、後者に付着したものは暗褐色を呈する。そこでこれらの顔料の種類を明らかにするために蛍光X線分析法（赤色顔料の主成分元素の検出を目的とする）とX線回折法（赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的とする）を併用し、顔料の同定を試みた（註1）。測定に際し顔料試料は貝殻内表面から採取したが、それ以上の細粉化は行っていない。

第287図1例に付着した顔料はX線回折により辰砂（赤色硫化水銀）が、また蛍光X線分析により水銀が検出されたので、朱（HgS）と同定される。一方第287図2例に付着した顔料はX線回



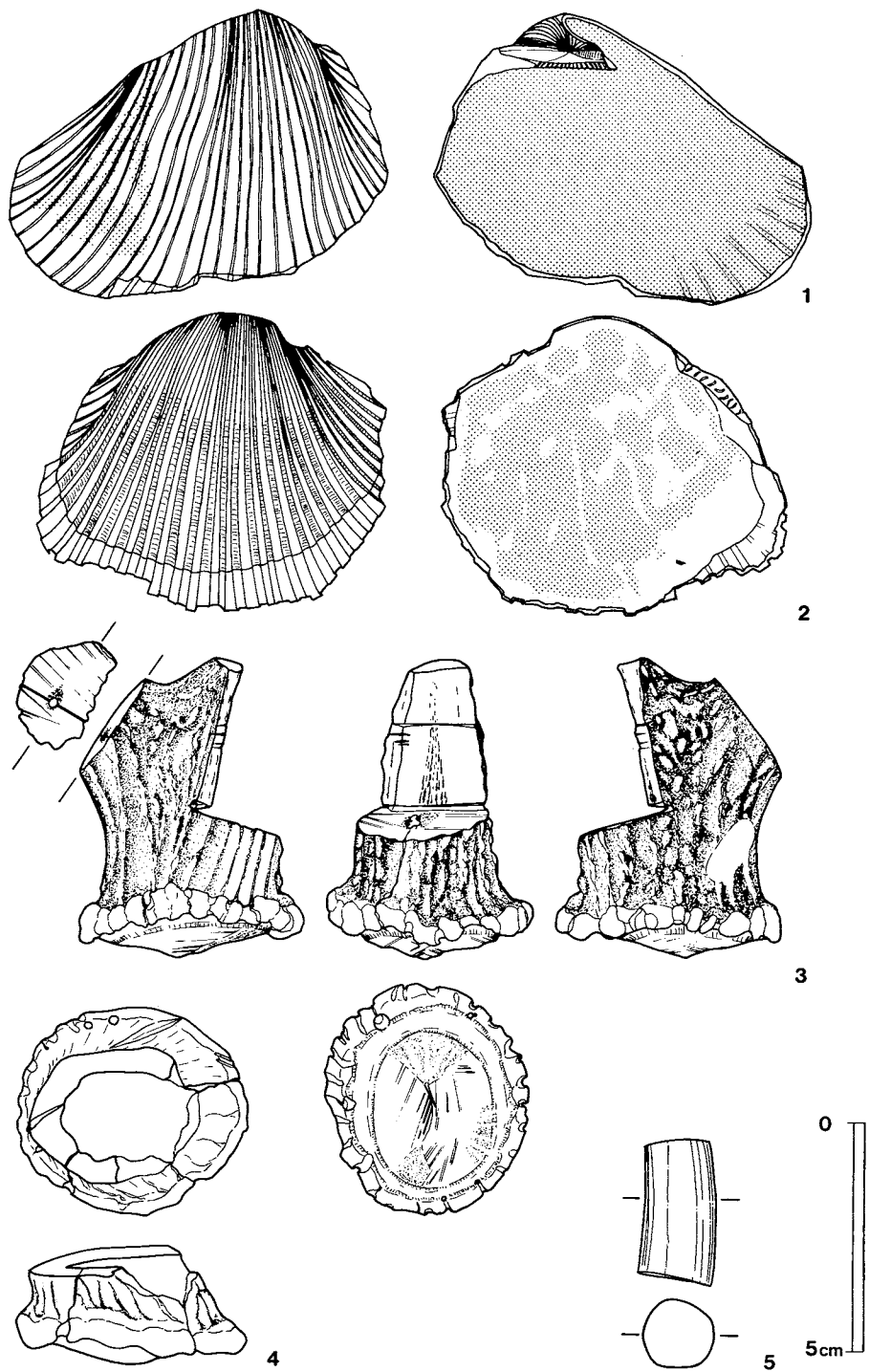
折により赤鉄鉱が、また蛍光 X 線分析により、鉄が検出されたのでベンガラ ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) と同定される。  
(成瀬 正和)

註

- 1) 蛍光 X 線分析は理学電機工業製全自動蛍光 X 線分析装置システム3511 (波長分散型, 大型試料台付き) を用い, X 線管球; クロム, 分光結晶; フッ化リチウム, 印加電圧—電流; 40kV—20mA, 検出器; シンチレーション計数管, 測定雰囲気; 大気, 測定範囲 ( $2\theta$ );  $10\sim 65^\circ$ , の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。水銀の確認には  $\text{HgL}\alpha$  線 ( $2\theta=35.91^\circ$ ),  $\text{HgL}\beta$  線 ( $30.19^\circ$ ) などを用い, 鉄の確認には  $\text{FeK}\alpha$  ( $57.52^\circ$ ) 線,  $\text{FeK}\beta$  ( $51.73^\circ$ ) 線を用いた。

X 線回折は理学電機製文化財測定用 X 線回折装置を用い, X 線管球; クロム, フィルター; パナジウム, 印加電圧—電流; 25kV—10mA, 検出器; シンチレーション計数管, 発散側および受光側ソーラスリット;  $0.34^\circ$ , 照射野制限マスク (通路幅); 4 mm, 測定範囲 ( $2\theta$ );  $10\sim 160^\circ$  ( $d=13.14\sim 1.16\text{ \AA}$ ) の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。辰砂の確認には  $d=3.86\text{ \AA}$ ,  $d=2.86\text{ \AA}$ ,  $d=1.98\text{ \AA}$  などの回折線を用い, 赤鉄鉱の確認には  $d=2.70\text{ \AA}$ ,  $d=2.52\text{ \AA}$ ,  $d=1.70\text{ \AA}$  などの回折線を用いた。

いずれも装置は宮内庁正倉院事務所設置のものを使用した。



第287图 貝・角製品

## (10) 動物遺存体

本地点における動物遺存体は、44か所において検出された土坑中に発見されたが、それらのうちC7-3号土坑及びB10-2号土坑において大量に出土し、それ以外の土坑においては極めて少ない量であった。このことから、この二つの土坑における骨類の集積は、当時の鳥、魚食に関する様々な慣習を知る上で重要な資料を提供するものと思われるのである。もちろん、それ以外の土坑内の貝、魚骨についても、それらが上述のC7-3号、B10-2号土坑と極めて近い年代的位置にあるので無関係とは云い難く、調理の前後において廃棄されていく過程を、これらの土坑中の僅かな資料によって知り得るということもあるかも知れない。こうした点については、動物骨髄の今後さらに入念な形質上の、あるいは数量的な比較検討をすることによって、その間の事情をかなりの程度にまで知る得る可能性もあるのではないかと考えている。

### 1. 貝類

#### B10-2号土坑の貝類

本土坑から出土した貝類は特に多いものではない。大型のアワビ、サザエは少なかったが、ヤマトシジミのまとまった量のあったのが特徴である。

#### 腹足綱

##### ミミガイ科

##### クロアワビ

殻径102mm程の中型の殻が1点あったのみ。

##### リュテンサザエ科

##### サザエ

高さ100mmを僅かに出るような大型殻のみが3個、同じ位の殻のふたが1点、2つのブロックに同じ数があった。

##### 二枚貝綱

##### フネガイ科

##### サルボウガイ

一般に本遺跡でのサルボウガイの出土は稀である。意図的に採るといよりも混在したのではないと思われる。左右対になる3個分がある。小型。

##### シジミガイ科

##### ヤマトシジミ

主としてすてられていたのはヤマトシジミである。二つのブロックがあったようである。20個程と100個程と量はかなり違う。殻長25.0mmの大きさは変らない。

##### マルスダレガイ科

**アサリ**

殻長40～45.0mmの大きさがあるが少ない。

**ハマグリ**

殻長50.0mmよりやや大きい。4～5点がブロックに含まれていた。

**C7-2号土坑の貝類**

保存の良いアカガイ、本遺跡では珍しいアカニシ、それにサザエ、アワビ少量、ヤマトシジミがやや多くのこされていた。

**腹足綱**

**ミミガイ科**

**クロアワビ**

殻径120mm前後の殻が2個。

**リュウテンサザエ科**

**サザエ**

殻柱をのこすのみの標本、殻高100mm。

**アクキガイ科**

**アカニシ**

殻高120mmに達する大形の殻。

**二枚貝綱**

**フネガイ科**

**アカガイ**

殻長90mm, 7個。

**イタヤガイ科**

**イタヤガイ**

右殻、破損した小片であるために確認できないが貝柄杓の容器であろう。本遺跡ではこれが唯一の検出品である。

**ウグイスガイ科**

**タイラギ**

破片のみである。本遺跡では唯一の出土例である。

**シジミガイ科**

**ヤマトシジミ**

二つのブロックにそれぞれ32, 55個分が検出される。殻長20.0mm前後が平均。

**マルスダレガイ科**

**アサリ**

殻長大型45.0mm, 平均35.0mm 前後, 少量。

ハマグリ

殻長75.0mm 前後のもの少量, 35.0mm 前後が普通。

C 7-3号土坑の貝類

多くの貝殻が出土した土坑である。

腹足綱

ミミガイ科

アワビ類 (クロ, メカイを含む)

殻径180~200mm になる大型のアワビのみである。数は少ない6個位と推測される。

リュウテンサザエ科

サザエ

30個の殻が出土している。「ふた」の方は9個である。殻と「ふた」の数に開きがある。別に処理されているのがあるからであろう。殻高は100~110mm 前後が最も多い。

ウミニナ科

ウミニナ

僅かに1個が検出されている。おそらく偶然の混在なのでであろう。

二枚貝綱

フネガイ科

アカガイ

幾つかのブロックで埋存していたようである。少ない場合は1個, 多い場合は7~8個があったらしい。どの程度が廃棄の単位であったか, その都度数が違っていたのであろうが, 多くても7~8個が一回分ではなかったかと思う。

殻長114mm, 90~100mm 位のが普通で, 80mm 程度のものが若干ある。

イタボガキ科

マガキ

左右殻が1点出土している。

シジミガイ科

ヤマトシジミ

右殻1点が出土されているのみである。

マルスダレガイ科

アサリ

2~3個もしくは同じ位の個体(左右の合い貝)が散布していたらしい。殻長は30mm 前後。

ハマグリ

特に多くの殻があったわけではない。10数個から多くて20個体分位のかたまりがあったようである。このようなかたまりは、殻長55.0から20.0mm位までの大きさの殻が含まれるが、数の多いのは殻長30～40mm前後である。

バカガイ科

シオフキガイ

ごく少数があったのみである。

#### D11-1号溝の貝類

この土坑は二枚貝を主とする貝を埋存していたもので、この遺跡でも特徴的な在り方を示す。ただしその量は多いものではない。

腹足綱

ミミガイ科

アワビ類

破片が検出されたのみである。

リュウテンサザエ科

サザエ

1個のみ。

ウミニナ科

ウミニナ

2個検出。

二枚貝綱

フネガイ科

サルボウガイ

殻長50.0前後のもの4個体、アカガイと思われる破片もある。

ナミマガシワガイ科

ナミマガシワガイ

おそらくこれはカキなどといっしょに採られたものなのであろう。

イタボガキ科

マガキ

2つのブロックにマガキの集まりがあったようである。殻高が80.0mm位になるのが大型殻で、小さいのは20.0mmにみたない。平均すると50.0mm前後に殻である。ブロックは20個から50個の集積であった。

シジミガイ科

ヤマトシジミ

ごく少数である。

フナガタガイ科

ウネナシトマヤガイ

ごく少数である、本種もカキの間に着生していたのがいっしょに採られたのであろう。

マルスグレガイ科

アサリ

やや多い貝殻が在ったようである。殻長45.0mm 位が最大。

ハマグリ

ごく少ない。

バカガイ科

ミルクイ

破片1。

## 2. 魚 類

### B10-2号土坑の魚骨

本土坑からも多数の魚骨が出土した。保存のよい標本が多数あり、1点1点をよく観察することができた。同じように多くの骨を出土したC7-3号土坑8層の魚骨に比べると、大型の魚類(ここではマダイ、タラ、ハタなど)の骨のまとまる例が少なく、遊離した部分骨になっていることが多かった。これに対して、土層サンプルをふるいにかけて検出した骨は極めて多く、特に小型の魚がその中に目立っていた。標本の検出は、この大型の標本を主とした場合と小型の魚骨を主としたサンプル土からの検出の二通りによって行われている。もちろん、これらは一つの層の中でのことであるが、遺物の採取条件に相違があるので、二つに分けて記述することにする。

#### (1) 大型の魚骨を主体とした標本

軟骨魚綱

エイ目・科属不明

椎体を検出しているのみである。

硬骨魚綱

ニシン目・ニシン科

マイワシ

ニシン科の中では主体を占める魚種である。検出される骨は大部分が椎体であるが、第1腹椎の個数から7個体が推測される。他の腹椎も総計でもその範囲内である。

ニシン目・カタクチイワシ科

カタクチイワシ

マイワシと比べてやや少ない個体数であるらしい。椎体よりも歯骨、舌顎骨などで確認してい

るので頭骨の埋存が考えられる。土層サンプル中によくのこされる。

ボラ目・ボラ科

#### ボラ

椎体を主とした出土で、少数の内臓骨が検出されている。比較的多い標本である。数の多い椎体によると、椎体長10.0mm 前後、体長300mm 未満のと、それよりもかなり小さい1年魚のイナ級の椎体も検出されている。

ボラ目・カマス科

#### カマス属

検出した骨は極めて少なく椎体に限られた。

タラ目・タラ科

#### マダラ

この土坑でマダラの出土は少ない。別にのべているC 7—3号土坑と対照的である。No. 379の前上顎骨左右、上顎骨右、その他は同一個体の一括遺棄であろう。これを除くといずれも部分的な遊離骨であった。

スズキ目・アマダイ科

#### アマダイ属

鋤骨と前上顎骨の一括出土例がある。鋤骨は大きく、別に検出(C 7—3号土坑)しているのと変らない。その他には標本を検出していない。

スズキ目・スズキ科

#### スズキ

本土坑では遊離骨であるが大型のスズキの骨が出土していて注目された。歯骨、主鰓蓋骨などである。歯骨は体長700mm になる大型の個体、主鰓蓋骨はそれより小さく600mm 位の個体である。

この他に舌顎骨があり、この標本はスズキではなく、ヒラスズキ *Lateolabrax latus* の可能性もある。これも大型である。

スズキ属は少なくとも2個体はあり、いずれも大型であった。

#### ハタ類

本遺構では断片的な骨を幾つか検出できたのみである。大・小の個体がある。骨は前鰓蓋骨、主鰓蓋骨、方骨といった鰓蓋部とそのつづきの肩帯、顎骨の一部のみで、前上顎とか歯骨がなかった。解体上の手法と関連があるのではないかと考えている。

スズキ目・ニベ科

#### キス属

部分的に遊離した骨が幾つかのブロックで検出されている。1ブロックで椎体1～2点であるので、全体としてもものこされた骨の量は少ない。



イシモチ or ニベ

No. 144は、前上顎、上顎、舌顎、歯骨と尾椎1があり、頭骨があったらしい。他に内臓骨の一部と椎体あるいは椎体のみがブロックより検出されている。それぞれの骨はすべて小さく、体長200mm位の個体が推測される程度である。

スズキ目・タイ科

マダイ

中型の魚としては最も多くの骨が検出されている。またある程度のまとまった骨の出土もあった。

No. 1008は、歯骨1個と角骨が4点もあり、角骨の方に斜めから切り込む切痕がみられた。しかし、このような例は少なく、単独の遊離骨の場合にはるかに多かった。それらにはしばしば切断の痕跡がみられ、特に前鰓蓋、前頭骨と上後頭骨には縦方向への切断がよくみられた。

標本は大部分が大型で、体長400~500mmに達する個体のものであるが、稀に(サンプル a-12)前上顎骨20.0mmの小型のものもある。

クロダイ

極めて僅かな骨が検出されているのみである。

No. 981の口蓋、舌顎、方骨の右側の一括は同一個体のもので解体されたもので、おそらく解体時には、これらの骨がその間にある翼状骨とともに一つながりの骨であったに違いない。このような例はマダイなどにもしばしばみる。

クロダイは他にもみた例のように大型のものである。

スズキ目・アジ科

マアジ

小型の魚種の中では多くの骨を出土している。特に土層サンプル中に多く、内臓骨、椎体がよくのこされる。体長130~180mm前後のものが含まれ、大小の個体のもものが利用されている。

ムロアジ

マアジに比べると数は少ないかと思われる。これにも体長130~170mm前後位の個体が見られる。前上顎、上顎骨を伴出し、2~3の椎体を伴うことが多い。ムロアジとマアジの椎体が共伴している状態もあるが、採集ブロック単位で骨をみていると、マアジとムロアジが別々に検出されているように見える。これは漁獲の条件も考えて注意しておく必要がある。

ブリ

検出した骨は極めて少ない。腹椎1点、椎体長は10.0mmであった。体長300mm足らずのものである。

スズキ目・サバ科

カツオ類

他の土坑と同様に検出される骨は極めて少ない。最下層部で検出された椎体は、椎体長8.05の

もので体長300mm 前後が推定される。他に僅かに出土している本遺跡の例とほぼ同じである。

#### ソウダカツオ

本種もまたその骨の検出は稀である。最下層 No. 147に椎体1点がある。

#### サバ属

小型もしくは中型の小さい部類にはいる魚のなかでは最も多くの骨が検出されている。ただし、保存されている骨の大部分は椎体であって、土坑内に埋存していた殆んどすべての骨が回収されているにもかかわらず、検出された骨の中に内臓骨を含むことは特に多くない。おそらく椎骨に見合う程度の数ではないかと思われる。一ブロックの出土で多い場合には5～6点の椎体があった場合とそれに内臓骨の一つが伴する場合、内臓骨例えば前上顎骨と角骨が各々1点ずつある場合などが骨の伴出状況である。

椎体は大型のもので椎体長9.0～9.5mm、小さいもので5.0～5.5mmである。体長は大きいもので300mm 前後になる。

#### フグ目・マフグ科

#### フグ類

最下層の採集とされた標本中には、フグ類の骨をかなりみることができた。採集ブロック中に内臓骨1～2、椎体1～2を含むといった埋存が普通であったが、前上顎、舌顎、鰓蓋主骨の一つまとまりがある場合もあった。前上顎骨の全長（水平位置で計測）22.0mm というのが大型の例、椎体長では全長11.0～13.0mm になるのが大型の例である。トラフグで尾椎体11.0mm 前後の個体の体長は370mm に達する。意識的に食べられていたに違いない。

#### カサゴ目・カサゴ科

#### カサゴ類

検出された骨は少ない。No. 981のカサゴ類歯骨と角骨は関節した状態で出土しているが、歯骨の先（吻端）にたたかれたような傷痕がつく。調理、解体の際の加工とは思えないものである。

上述のカサゴは歯骨全長（水平位置）56.0mm、全長320mm 前後、これよりもはるかに小さい個体の標本もある。

#### カサゴ目・アイナメ科

#### アイナメ類

極めて稀である。小さい個体の前上顎骨1点を検出している。体長180mm 前後。

#### カサゴ目・コチ科

#### コチ

標本はかなり断片的であり、また少ない。鎖骨が検出されている。

#### カサゴ目・ホウボウ科

#### ホウボウ or カナガシラ

土層サンプルからの検出標本であるので断片的な骨になっている。

### カレイ目

本目と考えられる骨の検出は多くなく、しかも殆んど椎体に限られた。椎体は長さ2.0~3.0mmのもので小さなものである。本遺跡でのカレイ目は少数のヒラメの骨を除くとすべて、このようなカレイ目の骨であった。

#### (2) 土壌サンプル内検出土の魚骨

本遺構における魚骨の出土は法文系遺跡において最も多く、特に土壌サンプルのふるいによって多くの小型の魚の骨を得ている。本遺構の魚骨は、どちらかという、マダイ、ハタ類、タラなどの大型の骨は総数量においては少なく、むしろ小型のアジ類、イワシ類などが相当に多かった。遺構内の発掘の各小区画から検出された魚骨は、それぞれのサンプル中に5~6種類から10種類に近い魚種が含まれ、各種類は確認される骨格部位が頭部から胴部にわたっていた。これは限られた区画内に短期間の間に入れられ、またその後流動などの変化がなかったことによるのであろう。検出された骨や貝はすべて同一層内の堆積ではあるが、骨や土壌の採取のために細分された区画や層序がつけられているので、標本はすべてそれに従っておいた。以下に、魚種の分類に従ってそれぞれの魚の骨の遺存状況について説明しておく。数量の詳細については別表を参照されたい。

#### 軟骨魚綱

##### エイ目

##### 属・種不明

椎体径5.0mmの椎体が数点検出されているだけである。エイの椎体は背丈の低い円筒形であり、僅かな長さでもその数は多くなる。何故僅かな数個だけであったのか、魚による骨の扱い方の違いであるのかあるいは単に偶然の混入であったのかも知れない。

#### 硬骨魚綱

##### ニシン目・ニシン科

##### マイワシ

イワシ類としてはもっとも多い。土壌サンプル中から検出されているもので、椎体が1~2個程度は含まれることが多いが、a-2のように腹椎4、尾椎8、他に主鰓蓋骨や歯骨があり、またa-12のように環椎4というようにまとまった数が検出できた場合もあった。なお、この場合でも、歯骨とか舌顎骨は左右各1個程度であるのは、破損する率が高かったこのを示すのであろう。

##### カタクチイワシ科

##### カタクチイワシ

マイワシに比べて少なく、出土することも稀であり、またその数も歯骨などを1個みる程度である。椎体の検出が少ないのは、検出法に問題があるかも知れない。

##### サケ目・サケ科

この種の標本は稀である。椎体を2点検出したに止まる。その他の部位の骨も、調べた限りで

は発見できなかった。

ボラ目・ボラ科

ボラ

比較的多く検出された種類である。舌顎骨、前鰓蓋骨、主鰓蓋骨などの内臓骨の出土もあったが、それらは全体でも5点程で、椎体がやや多かった。椎体は大きいもので長さが10.0mmに近いものが多かった。他の部位の骨も大体この程度の大きさに成育した個体であった。

ボラ目・カマス科

カマス

検出される骨は稀である。

タラ目・タラ科

マダラ

本遺構でのマダラの出土は少ない。大型の標本としては、No.379に前上顎骨、上顎骨、その他が左・右、もしくはいずれか片側を含むものの一括の標本であった。おそらく同一個体のものと思われる。このような例は、この他には検出されなかった。

スズキ目・アマダイ科

アマダイ

椎体を検出するに止まったが、尾椎体長7.8mmはあったので、別の遺構で出土している標本とほぼ同じ大きさといえる。

スズキ科

スズキ

検出標本は少ない。歯骨と主鰓蓋骨を各1点検出しているが、これは体長60cmになる大きさである。この二点を除くと見るべき標本は殆んどなかった。

ハタ類

本遺構においてもハタ類はマダイとともに重要な魚種となっている。マダイのように3乃至4点の内臓諸骨が一括出土することはなかったが、比較的近位置にある骨、あるいは位置関係とは関係なく2点位の骨が伴出することもあった。大型の個体のもので、主鰓蓋骨には解体の切断痕をのこす標本もあった。また検出されている骨には共伴した標本でなくとも同一個体の左右の骨と認められるものもあり、数個体のももの埋存が予想されるものと思う。

キス科

キス

小型の魚種の中では出土量の稀な種類である。歯骨2点と散在した椎体であった。椎体の出土が散在的であるのは他の魚にもみるところであるが、内臓骨が歯骨のみというように片寄りのあるのは解体あるいは調理の際の庖丁のさばきによる可能性もある。

スズキ目・ニベ科

### ニベ or イシモチ類

全般的な出土量は少ないが、標本のまとまった出土があった。最下層出土の標本としたものの中にまとまっていたのは廃棄の時間的な関係を示すものといえよう。南・No. 144採集土壌中には、多分2個体分の頭部があったようである。そして、その周囲に同一個体のものが散在した可能性がある。体長15cm程の個体である。

#### スズキ目・タイ科

##### マダイ

大型の魚種としては最も多くの骨が出土している。埋存率も高く、マダイの骨の含まれていたブロック土壌は最も多い。また、一ブロック土壌中に含まれるマダイの骨の数も多く、No. 112では歯骨1点に角骨が4点もあり、No. 993のは右歯骨及び角骨の共伴の出土であった。角骨の方骨との関節部に切断痕がつく。

前頭骨及び上後頭骨の出土の多いのは、その保存の条件が良かったからであるが、これにはしばしば体軸に沿う方向での切断痕がみられ、従って、前頭骨で完存する骨はなかった。

出土したマダイの骨はいずれも大きく、計測のできた前上顎骨、上顎骨から推定される体長は、大型のもので400mm前後と推定される。なお、角骨の一例には体長300mm未滿の個体のもと思われる標本もあるが、おそらくこのような個体は少なかったと思われる。

#### スズキ目・タイ科

##### クロダイ

確認できた標本はマダイと比べて極めて少ない。遊離した前上顎、歯骨が数点検出された他は、C-2で、口蓋骨、舌顎骨が左・右いずれかの側で揃っていたのは珍しいことであった。大きさもマダイよりは小さいものである。

#### スズキ目・アジ科

##### アジ

小型の魚種のなかではアジ類は多くの骨を検出した。サンプル土壌の大部分の中にアジの骨を認めることができ、また複数の部位の内臓骨と腹椎、尾椎が共伴していた。層位的な出土について明瞭なことはいえないが、最下層としたサンプル中での出土はやや少ないように思われた。椎体長についての計測によると、4.0~6.0mm位の大きが多い。体長170mm前後の中型のアジである。ところで、これだけの骨があり、個体数も少なはないのに、アジの楯鱗が殆んど検出されていない。このことはこの魚の鱗が別の場所ではがさされているとみななければならぬ。しかし、アジの側線上に多数付く楕状の鱗が殆んどないということは、ここに棄てられた時には既に鱗の付いていない状態、つまり食後のものであったのであろう。あるいは、ここに運び込まれる前に鱗が完全にとられていたということになる。アジの鱗については、どの遺構においても検出状況は同じように思える。この点については他の地点の出土資料とも比較してみる必要があろう。

### ムロアジ

他のアジと同様に最下層での土壌サンプル中からの検出が多い。椎体を除いた他の部分の検出が現状では充分でないので、表示したものが検出標本のすべてではないと思う。しかし、個体数として他のアジと比べて少ないので、良好な標本を多く望むのは難しいかも知れない。

アジ類はC 7-3号土坑8層の魚骨中では極く少なく、このB10-2号遺構、Q 6-1号組石遺構などで出土し、ムロアジを伴出するのが通例のようである。ムロアジは伊豆七島方面の産として知られるが、初夏から秋までの間東京湾口水域にもはいる、漁獲があったようである。遺構内の堆積層の季節性を表示するものとなれば興味を持たれる。

### ブリ

ブリの検出は稀である。本遺構では1点のみ腹椎が検出された。椎体長11.0mm弱で、体長25cm位のいわゆるいなだと呼ぶ大きさである。

イナダ釣り自体それ程さかんでなかったことによるのであろう。

スズキ目・サバ科

### ソウダカツオ類

これも僅かな標本があるだけである。椎体1点が確認されている。

### カツオ

カツオ類の出土も限定される。検出されている3~4点の椎体はいずれも尾部のもので、同一の個体のものである可能性がある。尾部のはじめに切断されて廃棄されたのであろう。他の尾椎、腹椎についての処理や行方が気になるのである。

### サバ類

中~小型の魚としては最も多くの骨を残していた。土壌サンプルとして採集された中には、どのサンプル中にもサバ類の骨を含み、かつ椎体の場合には大きさの異なる標本も伴出しているので、大・小の個体が処理されている。前上顎骨、歯骨、舌顎骨等の内蔵骨の保存も比較的よかったのは骨が大きいこともあったと思われる。

椎体長は大きい例で、9.0~10.0mm、小さいのは4.0~5.0mmである。大きなので体長30cm位になろう。東京湾口は秋サバの好漁場となり、多くの漁獲があったものであろう。

フグ目・マフグ科

### フグ類

本遺構におけるフグ類の骨の出土は比較的多い方であった。特徴的な歯の部分をもつ顎骨では、歯骨の数は1点に留まったが、内臓骨、椎体は数点ずつではあるが土壌ブロック中に含まれる頻度は高い。それらは解体された部分が散在した可能性もあるが、個体差もあり、ある程度の量が料理に使われていることは確かである。

前上顎、歯骨はいずれも薄手の形態である。他の部位も検出されているが種名を明らかにするまでに至っていない。

前上顎、歯骨の歯冠部の最大長は22.0mm((1)の項と殆んど同じ大きさで、同じ左前上顎骨が検出されている)。を計測するが、体長20cm程の個体であろう。他の骨もほぼこの程度の大きさの個体と思われるが、椎体の一例には腹椎体長13.0mmを計測する標本があり、この大きさになる体長は35cmを越すと考えられる。このような大きさの椎体はこれ一例だけなので、この魚についても一個体がかかなり分割・分散していることが予測される。

カサゴ目・コチ科

マゴチ

擬鎖骨と上顎骨を検出したのみである。

カサゴ目・ホウボウ科

ホウボウ or カナガシラ

標本の出土は少ない。内臓骨4点程であるが、硬的の甲状の骨が断片となって検出されている。前頭部分もある。

カレイ目・カレイ科

カレイ類

この種の魚の検出部位は殆んど椎体であって、しかも小さいものに限られる。

### B 7-1号土坑の魚骨

タイ類、カツオ、コチ、ホウボウの遊離骨からなるが、その数は至って少ない。しかし、全くの断片的な骨はごく少量で、その他は部分的な骨ではあるが、完存もしくはそれに近いものであった。

スズキ目・タイ科

マダイ

1つは小さい上後頭骨で、その全長22.0mm程で、体長16cm前後であろう。このような小型のマダイは大変珍しいものである。

他の一点は後頭基底骨のほぼ1/2をのこすもので、第1頸椎との関節部をのこす。この骨は縦方向に真半に切断されている。

チダイ

厚味のある上後頭骨の部分である。ほぼ全体ののこるもので、長さが35.0mmはあったものである。マダイに匹敵するような大きさである。一般にチダイの出土は珍しいもので、本遺跡においてもこれが唯一の例である。

スズキ目・サバ科

カツオ

主鰓蓋骨と舌骨は完存していないが、骨質の非常に薄い部分が欠損しているので、元々はさらに原形に近くのこっていたものではないかと推測される。体長40cm余りの個体である。

カサゴ目・コチ科

コチ

尾椎長12.5mm。体長33cm 前後。

カサゴ目・ホウボウ科

ホウボウ

眼下骨の先（吻部寄り）が切断されている。体長30cm になる。

### C7-3号土坑 8層の魚骨

3号土坑8層から出土した魚骨は、他の土坑出土のそれと比べて量的にも多く、また保存良好のものが含まれていた。トラ、マダイ、ハタなどの中～大型魚骨の保存の状況を通じて、当時のこれらの魚の解体、廃棄の状況を知るには、極めて良い資料といえよう。これらの骨は1～73までの番号を付されて、その出土の小単位毎に採取されている。ここでは資料の分類と記録もまたその出土別の小単位毎にカード化し、それを表記することにした。標本が多種類に及ぶために、各ブロック間の標本の検討は現段階では行われていない。また、骨の分類に当たっても、完全なものとはいいい切れない。不明のもの、不確かなものが残されたが、これについても今後の調査に待ちたいと思う。なお、表記に当たっても、かなりの制約を受けねばならなかった。これについても今後工夫をしていきたいと考えている。

先ず、それぞれの魚種遺存骨の概要を述べておく。

ニシン目・ニシン科

イワシ

検出されている標本が極めて少なく、腹椎を1点みたのみである。他の土坑においてもイワシ類は必ずしも多いものではない。

サケ目・サケ科

サケ属

椎体のみを検出している。1個あるいは数個のものがブロックに散在していた。椎体を輪切りをしているので、小さな切身として食べられていたようである。椎体径が6.5mm 前後である。

コイ目・コイ科

コイ

検出された骨は極めて僅かである。主鰓蓋骨と鋸歯をもつコイ科の鱗棘を数点検出しているのみである。主鰓蓋骨は破損して原形を復すことができないが、体長50cm 程になる大きさであり、鱗棘もまた同程度の個体のものと思われる。

フナ

フナは咽頭骨を1個検出している。小さな個体のものである。

ボラ目・ボラ科



## ボラ

個体数を推定できる標本としては主鰓蓋骨、舌顎骨が1点ずつあったのみで、他には椎骨が2～3点ずつブロックにみるに留まった。同ブロック中の主鰓蓋骨と舌顎骨は同一個体のものであろう。この骨から推定される体長は350mm程度のものであり、他の椎体も尾椎体長7.0～10.0mm程度であり、体長は250～300mm位であろう。

## タラ目・タラ科

多くの骨が出土している。出土例の多いこと、また魚の大きいことから云って、この時期の魚食の主要種であったことは間違いない。おそらくマダラであり、スケトウタラは含まれていないと思われる。

## マダラ

この土坑内のブロックではしばしば頭骨を主体とする埋存があった。例えば、No. 28の鋤骨、主鰓蓋骨、後側頭骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨、角舌骨と頭蓋骨片があり、これらは同一個体の頭骨がひとかたまりとなって埋存していたことを示すのではないと思われる。そして、これにはかなりの量になる鰓弓部が含まれていないことから、別にこの鰓の部分を取り除かれていたことが考えられる。

No. 48のマダラは、一括に出土しているが、副楔骨及び後頭基底骨と舌頭骨、前鰓蓋骨及び若干の頭蓋骨が同一個体、それに前上顎、角骨がより大きい個体の同じ個体のもと思われる。前上顎骨、歯骨はみることができない。

左右の骨が幾つか組になって出土することは別にもあり、解体と調理への利用法を示すものとみてよいであろう。

椎体では、短ければ3対、長い場合には副楔骨・後頭基底骨と腹椎12、尾椎3個 (No. 68—g) という出土例があり、さらにその腹椎には輪切りの切断痕をもつ例が3個もあることから、頭部を切断、さらにそれにつづく腹椎部分つまり腹部に当る部分がこの位に切断されているのである。

なお、頭部の切断による解体は、さらにいろいろな場所でみられたようである。前鰓蓋骨から鎖骨、角骨などにみられており、頭蓋を縦割りにし、その左右を幾つかに切るという工程なのであろう。従って、細分割のための切断は必ずしも外側面からの切断ではなく、内側を向けて切ることもあるのである。

食用に当てられたマダラは、その大部分が大型のもので、体長550mm以上になるのが普通であったが、多少小さい個体もあった。

## スズキ目・アマダイ科

## アマダイ属 (キアマダイを含む)

保存の良い標本が出土している。特に頭蓋部の出土例 (No. 70—a) は貴重でもあり、興味深い。その他前上顎、上顎骨の一括 (No. 70—b) と遊離した内臓骨が検出されている。

No. 70—aの頭蓋は、マダイやタラのように切断されることなく殆んど完全で出土、眼球を入れ

る軟骨質の半球状のものも検出されている位である。この標本はキアマダイであって、本州中部以南の産である。上後頭骨稜の後端より中篩骨突起の先端までの全長75.4mm, おそらく体長300mmに達するであろう。頭蓋は破損がないが、内臓諸骨が同時に検出されていないので、やはり煮るかして骨が脱れた後で、この頭蓋がすくい出されたのであろう。あるいは特に頭蓋だけ別にして扱われるということもあったのであろう。なお、遊離したほぼ同大になる個体の前上顎、歯骨などが出土している。

アマダイの検出はまだ江戸期遺跡でも限られるようである。今後の資料の増加を待ってその扱い方、入手例について考える必要がある。

#### スズキ目・スズキ科

##### スズキ

スズキの骨の検出は極めて少なかった。これは東京湾という漁場を目前にしてやや特異のよう  
に思えたのである。しかも検出できた骨は目立たない。角骨、舌頭骨、鎖骨などであったのは何故であろうか。ただし、標本は大型になる個体のものであったと思う。

スズキの骨の少ないことは別の土坑においての魚骨の出土状況からもいえることと思う。大体、スズキ漁は石器時代から東京湾内において特に多いものであったことは、貝塚の魚骨についてみることができよう。そして、時代が新しくなる程、湾内における環境はスズキの生息に不適な状況に変わっていったのではなかろうか。

##### ハタ類

本遺跡での重要魚種である。また保存の良い前上顎、上顎、歯骨、前鰓蓋、主鰓蓋骨その他の骨がしばしば出土し、解体や調理の研究に貴重な資料を呈供することになる。

出土状況での好例は、主鰓蓋骨、前上顎骨、歯骨、舌頭骨の一括(No. 70-k)、前鰓蓋右2個、鰓蓋主骨一括(No. 68-c)、前上顎、上顎骨一括(70-c)などであった。顎骨から鰓蓋部にかけて保存が多い。この部分は骨の保存し易いこともある。そして、これらの骨には必ず縦、横、斜めの方向につく切断をみる。これらの切断は当然一つのまとまった頭部の切断であるから幾つかの骨が関節していた状態があったわけであり、(70-c)例はその一例である。タラでみたような内側に切断痕をみる例もある。

このような切断や部位の検出できた標本はいずれも大型のもので体長400mm以上に達するものと考えられる。

#### スズキ目・キス科

##### キス属

小型の魚であり、骨も小さいので標本の検出を終了しているとはいえない。ただ骨の検出は多くないのではないかとみている。これについても検討の必要はある。

#### スズキ目・タイ科

##### マダイ

多くの出土例と保存の良い標本を得ている。この科の魚のかなり頑丈な骨質、大型になることなどからこのような標本をのこしているが、何よりマダイが当時の魚の中での最重要種であったことによるのであろう。

マダイの骨の出土で特徴的なのは、頭骨の諸骨が幾つか一括となっていることであって、タラその他の魚にもそうした出土例があったものの、タイ程に多くの部位が検出され、また検出例の多いことはないようである。それだけタイだけが単独で扱われ、その機会の多かったことを示すのであろう。

No. 61は前頭骨1個に対して(左右の両側を縦に切断している)、前上顎、上顎骨は各1、歯骨は3、方骨、上鎖骨、後側頭骨各1が一括したものである。No. 72—bも、前頭骨を縦に切った左側、前上顎、上顎、前鰓蓋、鰓蓋、舌頭、上鎖、後側頭骨、間鎖そして角骨などがすべて同個体左側の一括であった。このような出土は、頭骨を縦に半截したそのままの状態に調理にまわされ、その後にもまたひとまとまりのものとして廃棄しているのである。これといっしょに椎体があるが、その数は1個程度であるから、頭部のみを主体とした扱いであった。

この他に前上顎・上顎骨、歯骨と角骨などの同一個体の骨の出土例は多くの例があり、頭骨が幾つかに分断されたことを示している。

このような分断を明らかに示すのが骨にみられる切断痕であって、上記の骨のどれかには必ずみることができる。前上顎骨の近位部、上顎骨の近、遠位部、主鰓蓋骨の上縁、後側頭骨の下部を、方骨を縦方向に、鎖骨は水平もしくは斜め方向に上方あるいは下方にといった切断である。前頭骨の切断例は資料的に少ないようである。上後頭骨を中心として、縦方向に切断する方法が普通であった。

ここで出土するマダイはその多くが大型のもので体長400~500mmに達するものが大部分であり、キダイ、チダイにみるような小型マダイを少なくとも頭部の諸骨で確認することはなかった。

#### チダイ

確認された標本は上後頭骨1点である。チダイの上後頭骨の上縁はこの種独特の肥大化が観察される。この部分を除いて他の部位骨を発見できていない。これについては他の骨の精査がなお問題としてのこされているが、僅かに含まれていたものと思われる。

#### キダイ

本種もまた標本としては少ないが、チダイよりは数も多く意図的に食用とされていた可能性がありそうである。遊離した骨が知られているのみである。

歯骨に大小の二点があり、小さい方は全長20.0mm足らず、大きい方は41.0mmを計測する。この大型の標本はキダイとしては最大型になるのではないかと思われる。

スズキ目・アジ科

#### マアジ

前上顎骨を1個検出したのみである。この土坑でのマアジの埋存はごく少ないようである。

#### ブリ

前上顎骨1個を検出したのみである。大型の標本で、おそらく体長650mmになるブリであったろう。これ程のブリでありながら、椎体などは全く検出していない。

スズキ目・サバ科

#### カツオ

カツオの骨の検出も少ない。いわゆる尾部棒状骨を5点と内臓骨では歯骨2点を検出している。この2点は左右で同一個体のものと思われる(No. 69-c)。体長は400mmに近い個体のものと考えられ、別に出土している数個の椎体も同程度の大きさである。全部の標本からも1個体以上は考えられない。

#### サバ類

小型の魚として出土数も多く、また比較的まとまった出土の状況を示していた。しかし、骨が小さくかつ薄いために骨の折断などの解体痕を確認するまでに至っていない。

骨のまとまっていた例としては、前上顎、上顎、歯、角骨のすべて左(No. 72-c)、前上顎、舌顎、歯、方骨、これは左右混交(No. 69-c)、前鰓蓋、主鰓蓋、角、方骨の左を主(No. 39)とし、方骨、前鰓蓋、主鰓蓋骨がそれぞれ左右、それに主鰓蓋、舌顎骨が右(No. 60-b)といった出土例によれば、頭部は左右に分けるような解体もあったことも考えられるが、そのまま切られることも考えられる。例えば開きにしたような場合には左右が別々になる可能性がある。もちろん、その場合にも廃棄の方法によれば左・右揃うことも考えられよう。

椎体の出土は上記の内臓骨の出土に比べると少ない。これはサバに限ることではなく、多量に出土しているタイ類についても云える。廃棄の方法に違いのあったことは考えられないだろうか。

#### フグ目・マフグ科の一種

尾部に近い尾椎を1点検出したのみである。本土坑ではフグ類の骨の大変少ないのが特徴である。

#### カサゴ目・カサゴ科の一種

ハタ類よりは少ないが、大型になる骨を出土している。いずれも離れた部分的な骨であって、まとまって出土するようなことはなかった。

カサゴ類は大きな三角形の鋸歯状の突起を並べる前鰓蓋骨が特徴的であり、その他歯骨が検出されている。これはいずれも大型で、最大のもの400mmに近く、普通にみるのも体長310~320mm位の個体のものとなろう。

カサゴ目・コチ科

#### コチ

検出されている骨は少ない。No. 61の主鰓蓋骨と歯骨の右側一括は同一個体、体長310~320mm位の個体のものとみてよい。コチの骨も上記の内臓骨格を除くと、脊椎などは一点も検出するこ

とはできなかった。

カサゴ目・ホウボウ科

ホウボウ

検出されている骨の量は少ないが、幾つか本種に特徴的な部厚い骨質の前頭骨、特有の棘突起をもつ鎖骨などが出土している。No. 72—bは左側の前額骨と額骨、No. 10のは左鎖骨、でどちらも体長350mmは下らない大きさのものである。しかし、これだけの大きさがありながら、同個体の骨が内臓骨だけでは少なすぎる。

カレイ目・ヒラメ科

ヒラメ

大型の歯骨が1個 (No. 72—a) 出土している。標本は歯骨の遠位端を欠くが、この部分は斜めに切断されたようである。これも体長が500mmを下らない個体のものであったろう。

アンコウ目・アンコウ科

アンコウ

断片的な骨であるが、ここからは10数片の内臓骨格と椎体2個が検出されている。椎体は腹椎で頭部に近い位置のもの。前上顎、歯骨などは3～5 cm位の長さに切断されている。体長400mm以上になる個体のものであり、すべて同一の個体ではないかと思われる。

### C 7—3号土坑 13層の魚骨

ここからも保存の良い骨が多数検出されている。マダイ、ハタ類、ホウボウというのがその主要な魚種であった。

スズキ目・スズキ科

ハタ類

前上顎骨1点の他は前鰓蓋、主鰓蓋骨と椎体4点である。主鰓蓋骨の上部に切断痕が走る。このサンプル中には多くの鱗棘が含まれていた。おそらくハタ類のものであろう。

マダイ

前頭骨は縦割り、主鰓蓋骨と上・間・下の鰓蓋骨と歯骨と角骨が主な検出部位であり、鰓蓋部が主になっている。主鰓蓋骨に切断痕が著しい。

カサゴ目・カサゴ科

カサゴ

歯骨と角骨があるが、歯骨のみで全長80mm。

スズキ目・ホウボウ科

ホウボウ

頭蓋部の骨を主としといるもので、非常に保存の良好なのこり方である。ホウボウの硬い骨には切痕などが全くみられない。マダイのような利用の仕方をやらなかったからである。2つのブ

ロックがあったが、それぞれに大きさの異なる別個体の骨が混在しており、少なくとも2個体以上はあった。

### C7-2号土坑の魚骨

豊富なかつまとまった魚骨の埋存した遺構である。特にマダイと大型のハタが目立った。

タラ目・タラ科

#### マダラ

舌顎、後側頭、角骨と椎体の共伴である。頭蓋から顎骨、鰓蓋部の脱れたあとにのこった部位である。椎体が腹椎と尾椎とで10個になるのは珍しいことである。どのような出土の状態であったか興味を持たれるのであるが。

スズキ目・スズキ科

#### ハタ類

大型のハタ類が遺存している。特に歯骨と左右の主鰓蓋骨の保存が良い。前鰓蓋部からも鰓蓋、鎖骨の出土があり、やはり鰓骨中心の部分からなる。歯骨の全長は100mmになり、角骨が共伴している。主鰓蓋骨の左・右はおそらく同一の個体のものとみられるが、大型の歯骨と比べると小さすぎるようであり、左の上顎骨も歯骨とは一致せず、むしろ鰓蓋骨の大きさに合う。椎体が4点あるが、おそらく主鰓蓋骨の方に合う大きさである。

スズキ目・タイ科

#### マダイ

多くの骨が出土している。5個体分の骨である。前頭骨以下内臓諸骨が検出されているが、前上顎、歯骨のような保存のよい骨が少ない。特に前上顎骨は1点であった。これには調理上での扱い方の違いがあったのではないかと思われる。前頭骨はすべて切断痕をもち、その他の骨にも切痕が多くみられた。マダイはすべて大型の個体であった。

#### チダイ

口蓋骨と舌顎骨の2点であるが、小さい個体のものである。

スズキ目・アマダイ科

#### アマダイ類

鋤骨部分だけの小断片である。しかし、原標本は十分に大きい個体のものである。

カサゴ目・コチ科

#### コチ

のこされている標本はごく僅かであるが、右主鰓蓋骨2点がある。小型で、体長27.0cm位ではないかと思われる。

カサゴ目・ハウボウ科

#### ハウボウ

3 個体分はあるらしい。後頭部分をのこす標本は骨質が特殊で種は不明、その他ののは普通のホウボウであろう。

ボラ目・ボラ科

### ボラ

舌顎骨は1点、椎体が15点あり、これらは同じ個体のもの。このボラはイナと云われるような若い個体で、体長20.0cm程度。

この土坑内魚骨の特徴は、大型のハタ、マダイなどの骨がかなりあったのに対して、比較的小さいチダイ、ボラ、コチなどのあったのが特徴的である。

なお、上述した骨格標本とは別に、鰓弓部分の骨格、鰭棘、肋骨などがある。その量は上述した魚の個体数とするにははるかに少ないもので、このような当初からの廃棄部分であったと思われる鰓弓部分（えら）、鰭（ひれ）や肋骨がどのように処分されたのか、それらが個体数に見合う量で残っていないのは、幾度かに分けて処理されているのか、いわゆるゴミ処理の問題と係わることになろう。

また、魚の料理上の問題としても、例えば椎体部分が著しく少ないこと、血管間棘、神経間棘の少ないことに気付く。おそらくこれは、はじめに魚を三枚におろした時、頭部を除いて体部は別に扱われるようになったのであろう。

## E 7-5号土坑の魚骨

やや多い骨の埋存が認められた。やはり骨の保存は良好で、他の遺構にはみない骨ものこされていた。

タラ目・タラ科

### マダラ

腰椎と尾椎であって、同程度の大きさである。

スズキ目・スズキ科

### スズキ

大型の主鰓蓋骨があるが、前方位置が打ち割られたような痕跡を留めている。切れ口は凹凸である。庖丁などによる解体痕とは違う。体長60.0cm近いもの。スズキは他に何も骨はなかった。

スズキ目・タイ科

### マダイ

内臓骨と椎体を含む多くの骨がのこされていた。前上顎、上顎、歯骨、舌骨のそれぞれはほぼ同大で2個体分があったものと思われる。ただ舌顎骨のみこれよりも小さい個体のものである。このような標本をみると大きさを揃えようとしていることがわかるが、中にはより小さいもの（体長21.0cm位）も加えており、それもまたそれなりの意図があったのであろう（大きい方は体長45cm位）。

スズキ目・スズキ科

#### ハタ類

大型のハタの前鰓蓋骨左右2個体分、擬鎖骨左右、後翼状骨右などがあった。顎骨を含む吻端部の骨がないので、鰓蓋部分が先にはずされたことも考えられる。おそらくそれは鰓の部分つまり鰓弓、舌骨部分を取り去り、その後の調理をやり易くしたのではなかろうか。

なお、前鰓蓋骨の上・中・下部にわたってこれを切断した切痕、あるいは切り傷がみられるのも、上述のような加工の過程でついたものと思われる。

スズキ目・サバ科

#### サバ類

保存の良い歯骨とそれと同一個体の角骨があり、2個体分がある。

カサゴ目・ホウボウ科

左側の前頭骨と左右の眼下骨があり、おそらく同一個体のものであろう。右眼下骨は前後の両端を欠損しているが、その損傷面は新しい。

カレイ目・カレイ科

#### カレイ類

カレイ類の骨で、本遺跡でこれ程大きいのはこの標本位である。体長は30cm位になるであろうか。

アンコウ目・アンコウ科

#### アンコウ類

左右の歯骨があり、同一個体のものであろう。ただし、破損が著しい。

以上の他に各種魚類の鱗棘が多く埋存していた。これらの部分は早くに切断されたものではないかと思われる。その一端に切痕をみるものがあるからである。

### E11-1号土坑の魚骨

マダラ、マダイ、ホウボウ、ヒラメの部分的な骨が集められていたものである。

タラ目・タラ科

#### マダラ

二つの腹椎があるが別個体のものである。

スズキ目・タイ科

#### マダイ

上後頭骨は縦に半截されたものの左側である。尾鰭椎前椎体 ( $preu_1$ ) は前方部半分が切断されている。つまり、切断された尾部があった可能性がある。骨瘤をつけた棘に断痕がのこる。

カサゴ目・ホウボウ科

#### ホウボウ



擬鎖骨 2 点は体長 20cm 程の近世の魚としては小さい個体のもの。

カレイ目・ヒラメ科

ヒラメ

本遺跡としては珍しいヒラメの骨である。

### G 8-1 号土坑の魚骨

少数の部分骨があったのみであるが、そのいずれも極めて保存の良好のものである。

スズキ目・スズキ科

ハタ類

前上顎骨長(復原) 55.0mm, 方骨も同一の個体と推定される。角骨は割れていて大きさがはっきりしない。やや小さい個体か。上記のハタは体長 40cm 以上になる。

スズキ目・タイ科

マダイ

上後頭骨 2 個のうち 1 点は、中央よりやや前方位置で長軸に直交する形で切断されている。その他に骨表面に突き刺したような痕がある。

前上顎骨と上顎骨は左右が異なるがほぼ同一個体のもの、上後頭骨の小さい方も一致する。尾椎体 4 点のうち 3 点が揃う一組は上顎骨と別個体のやや小さい個体のもの。解体されたマダイの複数のものがあつたわけで、料理に使った場合の幾つかのわんの中身になるかと思われる。

## 3. 鳥 類

本地域遺構から出土した鳥骨は殆んどが C 7-3 号土坑の 8 層より検出したもので、その他の遺構から検出することはあつたが全く少ないものであつた。このことは鳥を素材とした料理あるいは鳥との何らかの結びをもつた時点が極めて限られたことを示すものであり(考古学的な資料に基づく限り)、注意しなければならないことになろう。

### C 7-3 号土坑 8 層鳥骨

ガンカモ目・ガンカモ科

ガン類

本遺跡出土の大型のカモ類であつて、ほぼマガンの大きさに匹敵するが、骨形状の上で異なる点もあり、種名については検討の要がある。

検出部位は上腕骨、中手骨、大腿骨に限られ、中手骨がほぼ完存する他は、どの標本も著しく破損していた。これらの破損骨の中で、その当初の破損形状をうかがい得る標本が幾つかある。その一つは No. 68 の上腕骨であつて、骨体のほぼ中央から割れているが、この破損は、骨幹部を強くたたいて打ち割つた際の割れ口である。一方の端は近位端で、ここには金属刃物による切痕

が幾つも見られる。まず上腕骨の外側につく上腕骨骨稜には3ヶ所に並ぶように斜め方向からの切痕がつく。鋭い刃痕である。この部分には上腕骨と体部をつなぐ幾つかの筋肉がつくので、それを切断するための切り込みであろう。さらにその反対側の上部に骨をそぎ取したような切痕がつく。ここには強い靭帯がつく。靭帯の方が筋肉質のものよりも強く骨に付着するので、骨ごと切断してしまうようになるのであろう。このような骨にのこる切痕をみると、能率的にその要所を切断していることがわかる。

上腕骨の今一つの例では近位端が破損してのこらないが(この破損は解体痕とは違う)、骨幹には上記した例と同じ割れ口が観察される。

### マガン

標本の出土は最も多い。形態、大きさなどマガンに一致する。ただしマガンと骨格の上でよく似るカルガモなどの含まれる可能性もあることを付記しておく。

のこされた骨格の部位は、若干の頭骨と上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、胫骨、中足骨と基節骨に殆んど限られる。

椎骨は極めて少なかった。烏口骨と胸骨、骨盤の骨は全く発見されなかった。肩甲骨、鎖骨ももちろんなく、椎体も極めて少なかった。

上腕骨の完存するのはなく、尺骨、中手骨、大腿骨、中足骨、基節骨に完存するものがある。基本的には、これらの骨を打ち割る必要がなかったのであろう。大腿骨と胫骨では、その間に刃物を入れて解体するような処置をとる。C 7-3号土坑8層, No. 67は、大腿骨の近位端と遠位端、胫骨の近位端が金属刃で切られている。この大腿骨と胫骨は同一の側(右)で、同じブロックから出土しているので、骨盤から切り離された下肢が、次の段階で大部と胫骨に分離され、肉がおりされて、いっしょに棄てられている。また、No. 70では左の胫骨遠位端と中足骨近位端があり、これには切断痕はなく、棄てられるときにはつながっていた可能性がある。これらが同一個体のものかどうかの判定は難しいが、大きさからみる限りではその可能性はあるようである。この場合、それぞれの骨が非常に小さい単位で棄てられているのが元々の在り方のようなようである。これは別の鳥についても云える。調理の進行の一端がうかがえるような出土である。

なお、頭蓋と歯骨が出土しているが、これらが特に調理に使われた痕跡はなさそうである。しかし、胸骨がなく頭骨だけあるのは、特別な扱いがあったからであろうか。

### コガモ

大型のカモに比べて出土する量は少ない。部位は同様に上腕骨、尺骨、中手骨、大腿骨、胫骨、中足骨である。コガモの場合にも、左右いずれか片側の前肢もしくは後肢が組となって出土している。切痕をみる骨は少ないが大腿骨の例(C 7-2号土坑 No. 1)では近、遠位両端が切られていた。切断の方法は大型カモと変らない。全く同じように扱っているのである。

キジ目・キジ科

### ウズラ

ウズラはカモ類に次いで多く出土した鳥で、調理の中で重要な役割を果たしたものであったことが推察される。

ウズラの骨の出土も基本的にはカモ類と全く異なるところがなく、極く少数の頭蓋と前肢である上腕骨と橈骨、尺骨があり、後肢骨には大腿骨と脛骨があり、それに基節・中節骨位までが伴っていた。

小さい骨であるので、切断などの加工を確めることはできなかった。

骨の保存がカモ類と変るところがなければ、その扱い方についてもほぼ同じであったといつてよいのであろう。まず、左・右の骨の組合せがカモと同様極めて明瞭に出土することが確認される。主要肢骨（上腕・尺・中手・大腿・脛・中足の諸骨）が単数出土の場合には確認し難いのはもちろんであるが、複数個出土している例では、左・右のいずれか、あるいは二組の左・右が出来る。このような組の出来たのが15組（二組以上のある例も1例として）、単独の骨の出土が7個であることをみても、ウズラの骨は、左・右の肢帯がそれぞれ別々に出土していたとみてよい。そして、前・後肢のそれぞれが小さいだけあって、1組だけでなく、二組以上のものもあり、この場合は前・後肢が組合せられることもあったが、二組以上ということはなかった。そして前・後肢が左・右の組合せであれば一個体分の可能性もあったが、そのような例は1例のみであった。

#### キジ目・キジ科

##### キジ

キジの出土は少なく、僅かに脛骨と中足骨の各一個を検出しただけであった。脛骨は遠位骨端を切断しているものである。脛骨は雄、中足骨は雌のものであるらしい。

#### チドリ目・チドリ科

##### タゲリ

ケリ類の骨の出土は少ない。出土はコマドリのような小型の鳥にまぎっていたが、おそらくそれは偶然の混在なのであろう。しかし、タゲリの場合にも解体の最小単位ともいふべき、前・後肢骨をみることができた。

#### スズメ目・モズ科

##### モズ類

本種は、ガン・カモ類、ウズラに次いで多くの骨を出土している。本邦産のモズには、やや大きいオオモズ *Lanius excubitor bianchii* (モンゴル、中国に棲息し、稀に本州、九州で採集されたシベリアオオモズ *L.e. mollis* もいる)、オオカラモズ *L. sphenocercus* s.と、やや小さいアカモズ *L. cristatus superciliosus*、モズ *L. bucephalus* b.がいる。本遺跡出土のモズ類の骨の多くは前者に相当し、極く少数後者の小型のモズも含むようである。

遺構から検出されたモズ類の骨は、頭蓋こそなかったが、鳥口骨、肩甲骨、胸骨など、あるいは中足骨などが破損されずにのこされており、食用にしたガン・カモ類やウズラとは骨の遺存状況が異なっていた。このことから、これらのモズは食用に当てられたものではなかったのではな

いかと推定される。ただ、飼い鳥であったかどうかについては若干疑問がのこる。モズは食物が昆虫や小動物であり、声はあまり美しいとは云えないようである。「絹を裂くような」鋭い鳴き声である。タカに似た鋭い「くちばし」で小鳥やネズミ、ヘビ、カエル、トカゲ、コウロギ、イナゴ、イモムシを捕る。捕えた獲物を鋭くとがった枝の切口などに突きさす。モズの「早にえ」である。この習性は飼っていてもやる。性質も荒い。モズを飼い馴らしてけんかをさせることがあるという。武家の屋敷の中では、こんな遊びのためにモズが飼われることもあったのであろう。

スズメ目の標本については国立科学博物館の小野慶一氏に御教示いただくことがあった。記して御礼を上げたい。

#### 4. 哺乳類

E 8—5号土坑よりイヌの骨が一点検出されている。

哺乳綱

食肉目・イヌ科

イヌ

部分的に欠損する骨があるが、ほぼ全身の骨が揃う。おそらく意図的に埋葬されたものと思われる。埋葬は土坑の隅に側臥の姿勢で埋められていたという。性別は不明。18世紀末葉期のものである。骨の修復が終わっていないので概要のみ記す。

頭蓋基底全長135~140mm。下顎骨全長 (ig~cp) 110mm 前後。下顎体高  $M_1$  後部) 186.0mm, 下顎体厚 ( $M_1$  中央) 7.9mm。  $P^4$  (近遠心径) 14.45mm, 同 (頬舌径) 6.09mm,  $M^1$  (近遠心径) 9.39mm, 同頬舌径12.29mm,  $M_1$  (近遠心径) 16.74mm, 同頬舌径6.59mm。

小型犬できゃしゃな骨体である。下顎骨体厚もうすい。上顎第三切歯の磨滅が始っていないので、現代犬の一般的な咬耗からみた年令推定は4.5才である。

四肢骨のうち主要骨は左右がのこるが、完行する骨は少ない。上腕骨全長134.37mm, 骨幹最小径10.00mm (左側), 遠位端最大幅25.44mm (右側)。

胫骨全長143.30mm, 骨幹最少径9.80mm, 遠位端幅17.70mm。

主要四肢骨の近位骨端が完全に骨化していない。全体に非常にきゃしゃで、細長い感じのする四肢骨である。またこのイヌの左側の橈骨と尺骨の同じ位置に病変部分がみられる。遠位端から35.0mm 程の位置を中心として骨増殖で骨体が大きくふくらむ。この病変部分は橈骨では殆んど骨全体の半分に達する程である。しかし、このような病変があるにもかかわらず、骨の全体の長さには大きな変化はなさそうである。このような骨の部分的な異状増殖は、骨折の場合などにしばしばみられるが、その場合には骨折部が骨が折れ曲ったり、ずれたりする様子がみられる。本資料の場合、その様な変形のみられないのは、何らかの処置をしていることも考えられる。なお同じ側の上腕骨には特に目立った変異を認めることはできない (若干右側に比べてきゃしゃであるが)。

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

本遺跡での獣骨の出土は、上述のイヌと他に鹿角を切断した小片が目についた主要なものであった。

イヌは江戸の市街地の遺跡では埋葬例なども含めて比較的多いのが普通である。この点本遺跡では、多くの遺構が検出されているにもかかわらず、イヌその他の獣骨の出土が少なかったのは、藩邸内でのこうした動物の処理の方法がきちんと決められていたからなのであろう。それだけ広大な藩邸を擁していたということにもなる。

出土したイヌに似た小型できゃしゃな四肢をもつイヌは他にも類例がある。愛玩用に飼われていたイヌであったのであろう。既述したように左前肢にかなりの傷を受けたのは何故だったのであろうか。またそれが治癒するまで介抱されていたのである。藩邸内での生活の一齣をみる思いである。

(金子 浩昌)

表12 貝類の遺構別出土量表 (fr 破片)

土坑	貝種 L:R	アワビ		サザエ		アカニシ		アカガイ		マガキ		ヤマトシジミ		ハマグリ		アサリ		ミルクイ		サルボウガイ		備考	計
		L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				
B3-1								1				3	2	1	1								8
B3-2		1	6			2	2					33	35	1	2			1	1				47
B3-3			6			1		1											1				9
B7-1	(1)							1	1						5	8					1		10
"	(2)									1	14	16					11	11					28
"	計					1	1			1	14	16			5	8	11	11			1		38
B10-2	(1)	1	3	1																			4
"	(2)			2										3	5	1	1				1		9
"	その他		3											37	38	1	1			2	2	アカニシ 1	149
"	計	1	6	3										40	43	2	2			2	3	アカニシ 1	161
C2-1			9					1															10
C2-2	(1)		7																				7
"	(2)		3					1															4
"	計		10					1															11
C2-3			3																				3
C3-1		1	1																				2
C3-3			5	1		1	2					2	1	1	2				1			ボウシュウボラ半欠	13
C3-4			1							1	12	15	13	16			1					バイガイ 1	35
C4-1			14									15	15										29
C6-1										1	49	34					1						51
C7-2	(1)	2	3		1	5	6				30	32	6	3	26	24						イタヤガイ fr	75
"	サンプル					1	1				3	3	2	4	10	10						タイラギ fr	14
"	(2)			3							50	55	1		7	9							68
"	計	2	3	3	1	6	7				83	90	9	7	43	43							155
C7-3	8層	2	11	7		18	14	1	1		1	43	40	3	1							ウミニナ 1 ナミマガシワ 1	81





表13 C7-3号土坑8層の魚類遺存体出土量表

△印：解体のときの切痕をもつ。( )の数字の骨は同一個体であることを示す。  
 bao 基底後頭骨, para 副蝶形骨, cra 頭蓋, ifo 眼下骨

種類	地点	頭骨 skull		内臓骨 visceral skelton										脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder girdle				備考	
		鋤骨 vo	前頭骨 上後頭骨 fro supo	前上 顎骨 prem	上顎 骨 max	口蓋 骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎 骨 hyo	前鰓 蓋骨 preo	主鰓 蓋骨 ope	下・ 間鰓 蓋骨 sub imop	腹推体 abd	尾推体 cau	後側 頭骨 ptem	上擬 鎖骨 scf	擬鎖 骨 cl	肩甲 骨 sc		
マイワシ	11	r												1							
	23	r													1						
	25	r													1						
	計	r												1	2						
コイ	15	r																			鋸歯鱗棘 1
	32	r																			" 1
	34	r	bao																		" 1
	66	r	1																		" 1
	計	r	bao 1																		" 4
フナ	1	r																			pha 1
ハモ	54	r	1※																		※前上顎・篩・鋤骨板
ホ	32	r													1						
	34	r													2						※椎体長7.5, 10.0
	41	r											1	1							※椎体長7.0, 7.0
	54	r													1						※椎体長10.0
	55	r													1						
	56	r									1	1									
ラ	57	r													1						※椎体長8.5
	58	r													3						※椎体長6.0, 7.0, 10.0









マ グ ラ	69d	r															22 2 個 体 分	1				
		l	1																			
	70f	r		1			1															
		l		1			1															
	70i	r																3				
		l																				
	70j	r																5 Δ				
		l																				
	70k	r			1			1		1	1											
		l	1																			
	70l	r							1		1											
		l																				
	70m	r																				
		l							1													
70n	r	1			1		1	1		1											1 Δ	
	l	1		1	1		1															
70o	r	crani																				
	l						1															
72b	r																5	3				
	l	1																				
計	r	3	6	4	4	1	5	4	4	2	3	1					88	104			1	ver. 6
	l		cra.1 para 2	5	3	1	3	5	4	1	1	2										
ア マ グ イ	6	r																1 ※				※椎体長8.0
		l																				
	8	r	1																			
		l																				
	17	r																	1 ※			※椎体長10.0
		l																				
	21	r					1															
		l																				
	34	r																				
		l					1															
	43	r				1						1										
		l																				
	54	r																		1 ※		※椎体長7.0
		l																				
63b	r		1			1																
	l		1					1														
64b	r																					
	l		1 Δ																			
66	r																		1 ※		※椎体長10.0	
	l																					
68c	r										1											
	l																					
69c	r		1																			
	l																					

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

ア マ ダ イ	70a	r l	crani.																
	70d	r l		1	1														
	70f	r l				1													
	70k	r l	ifo						1	1	1							1	舌骨
	70n	r l		1	1		1	1											
	70o	r l					1											1	
	70	r l	crani.	1	1		1	1		1	1	1						1	舌骨 } 同一個体
	小計	r l		1	1		1	1		1	1	1						1	
	24	r l					1												
	計	r l	<sup>1</sup> ifo crani	3 4	2 1		4 2	1 1		1 2	1 1	2 1			1 -1-		3 -3		1 1
ス ズ キ	7	r l																1	
	29	r l												1 s		1 s			
	41	r l												1					
	47	r l														1			
	65a	r l					1△				1								
	計	r l					1				1				2		2		1
ハ タ 類	6	r l					1												
	11	r l		1				1											
	21	r l		1															
	24	r l		1							1								
	60b	r l									1								
	62	r l		1	1						1							1	
	63a	r l									1								
	63b	r l					1△												
	64a	r						1											









報告篇第三章 江戸時代の調査 I

		l																1△		
	70l	r	1△			1		1								1				
		l	1																	
	70m	r																		
		l															1			
	70n	r			1△					1									角舌骨	
		l																	" 1	
マ	72a	r																		
		l	1	1	1															
グ	72b	r																	遊離神経棘 2	
		l	1	1				1	1	1	1	1		1	1					
イ	73	r																		
		l			1△															
	計	r	8	2	6	4	3	3	5	4	9	5	2			4	18	5	6	1
		l	2	12	4	4	6	9	6	5	5	7	6	4				6	7	1
																				舌骨 5 para 1 遊離神経棘 2
チ	68h	r																		
ケ		l	1																	
イ	10	r																		
		l					1													
	23	r	1																	
		l																		
	25	r	1																	
		l	1																	
キ	33	r																		
		l					1 s													
グ	34	r													2	3			腎臓間棘	
		l		1	1														いずれも小型の標本	
イ	42	r					1	1												
		l																		
	64b	r																		
		l					1 s							1	1					
	計	r	2				1	1							3	4				
		l	1	1	1		3													
		r													3	4				
		l																		
	25	r					?													
		l																		
	37	r								1	1									
		l																		
マ	39	r						1												
		l						(1	1	1)										
ア	42	r																		
		l		1																
シ	53	r													1	1				
		l																		
	47	r													1					
		l																		



報告篇第三章 江戸時代の調査 I

		l	cra.fr,	3	2		2	3	2		1	1		4	5			
フ シ 類	10	r																
		l													1			
カ	1	r																
		l		1	1													
サ	4	r									1							
		l																
ゴ	7	r																
		l					1											
類	14	r		1														
		l																
カ	17	r								1								
		l																
サ	20	r			1												1	
		l																
ゴ	21	r																
		l			1△													
カ	23	r			1													
		l																
サ	24	r					1											
		l					1	1										
ゴ	28	r																
		l															s	
カ	32	r																
		l			1													
サ	35	r																
		l			1												1	
ゴ	39	r																
		l							1								1	
カ	41	r																
		l																1
サ	43	r																
		l																1
ゴ	45	r			1													
		l										1						
カ	47	r																
		l																6
サ	25b	r										1						
		l																
ゴ	66	r																
		l										1						
カ	70h	r							1									
		l																上舌骨
サ	70n	r										1	s					
		l			1													
ゴ	72b	r																
		l																1△

	計	r		1	3		1		2		2	1			1			舌骨
		l		2	4		2	1	1		1	1		-11		1	1	
コ	61	r																
チ		l				1						1						
ホ	10	r														1		
ウ		l																
ボ	38	r			ifo													
ウ		l			1													
(	72b	r	1															
カ		l																
ナ	計	r	1		ifo													
カ		l			1											1		
シ		ラ																
ラ	29	r													1			椎体長11.0
メ		l																
	67b	r													1			椎体長10.0
		l																
	72a	r																
		l					1											
	計	r													1	1		
		l					1											
ア	21	r			1△													
		l																
ン	22	r																
		l			1	fr												
コ	27	r																fr. 1
		l																
ウ	28	r					1											
		l																
コ	29	r			1													
		l																
ウ	31	r																fr. 1
		l																
類	64a	r													2			その他の内臓骨
		l																
	67a	r																
		l			1	1	1											
	68f	r			1													1.上顎骨板片
		l																
	計	r			3										4	2		fr. 2, その他
		l			1	1	1	2										1.上顎骨板片

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

表14 C7-3号土坑8層の鳥類遺存体出土量表

P: 近位部, : 骨幹部, d: 遠位部, cra.頭蓋部, inc.切歯部, den.歯骨, art.間接骨  
 △印: 解体のときの切痕をもつ

種類	地点	頭蓋骨 cra	歯骨 den	脊椎骨 肋骨*2 vert vib	肩甲骨 scap p@d	上腕骨 hum p@d	橈骨 rad p@d	尺骨 ul p@d	中手骨 mc p@d	寛骨 pel p@d	大腿骨 fe p@d	脛骨 tib p@d	腓骨 fib p@d	中足骨 mt p@d	指骨 dig I①II	備考	
ガ ン	40	r															※外側顛こげる
	l									※1							
	62	r															
	l					①?											
	66	r				1											
	l																
	67	r					①△										
	l																
68	r					1△											
l																	
?	r								1								
l																	
計	r					1②					1						
l						1②			1								
マ ガ モ	29	r								1							
	l																
	41	r			Cer △												
	l																
	44	r			Cer 2												口蓋骨片 他2
	l																
	47	r														中節骨	
	l																
	57	r														第3指基節骨	
	l																
	61	r														基節骨3	
	l													1			
	62	r					1									基節 中節 各2	
l																	
64	r										1		1				
l		den1															
67	r										1	1	1				
l																	
68	r					1											
l																	
69	r cra		den1	Cer													art. 2
l		den1															art. 1
70	r															基節骨	
l														1	1		
72	r					1	1	1	1								
l																	
?	r																

	l				1	1	1											
計	r	cra	den1	Cer4	1	1	1	1				2	1	1	1	1	指骨10	art. 2
	l		den2		1	1	1	1							1	1	1	art. 1
コ ガ モ	37	r											1					
	l																	
	62	r																
	l						1											
	63	r					1											
	l																	
	65	r												1		1		
l																		
66	r				1	1	1	1									第3指基節	
l																		
計	r				1	1	1	1	1		1						指骨2	
	l							1				2			1			
ウ ツ ラ	1	r															基節中節	
	l																	
	3	r															中節	
	l						~1								1~			
	4	r								1							基節4中節1	基節1(大)
	l																	
	5	r						1				1			1	2		
	l					1												
	6	r							1			1						末節(大)
	l																	
	8	r				1△			1							1		
	l					1△						1						
	9	r										2			1			
l																		
12	r																※RL?	
l					①※													
16	r														1		第3指基節	
l																		
28	r																	
l							1											
35	r																	
l							1											
37	r				1	1	1											
l																		
39	r				1		1										基節骨	
l																		
46	r					1	1											
l																		
52	r																基節骨	
l							1											
53	r				①		1	1									基節骨(大)	
l																		

報告篇第三章 江戸時代の調査 I

ウ ツ ラ	60	r l										1		
	62	r l			1	1	1 1	1					1	中節骨
	63	r l				1	1 1						2	
	64	r l	st.		1	1	1					1	2	
	65	r l			1		1	1 1						基節骨3
	69	r l			1		2							
	70	r l			1									
	?	r l			1	1	1	1					1	基節骨 3第3指 基節骨
	計	r l	st		1 2 6 1 6 2	1 5 1	1 9 3	1 6 1 1				2 2 3	2 4 2 2 1 3 1	指骨 18
	キ ジ	63	r l										1	基節骨 3中節骨 1
69		r l									△1			
計		r l									1	1	指骨 4	
タ シ ギ	11	r l						1						
	63	r l			1		1							
	66	r l	st			1	1					1		
	69	r l									1	1		
	?	r l			1	1※	1					1	1 1	※別個体
	計	r l	st		2 1	2 1	1 1	2 1			2 1 1	2 2 1 1 1	指骨 8	
モ ズ 類	7	r l						1						第3 指基 節骨
	15	r l					1							基節骨 中節骨 各2
	21	r l	co.1 co.1		1	1	1	1				1		基節骨
	22	r l			2 1		1 1	1 1 1			1 1	1 1	1 1	st.3
	24	r l					1				1			
	25	r incl			1		1				2			

モ ズ 類		l	den1												1		1			
	26	r													1					
			l												1					
	29	r					1		1	1					①					
			l									1			1			1		
	30	r					1													
			l												①					
	33	r																		
			l				co.1	1												
	35	r					co.1												基節骨	※co, mcは別個体
			l												※1					
	38	r																		
			l																	
	39	r						1								1	1		2	
			l	den1			1	1	1	1	1	2			1	2	1	1	1	
	46	r cra																		
			l																	
	49	r														1				
			l																	
	56	r					co.2	1	1	1	1	1				1	1			st.1
		l				co.1	1		1	1	1				1					
65	r cra																			
		l																		
計	r incl					co.4	6	1	2	1	2	5			6	2	2	2	3	
	l cra2	den2				co. <sup>3</sup> scl	1	4	1	1	1	3	6	1	2	4	1	3	3	4

表15 その他の遺構の鳥類遺存体出土量表

種類	地点	頭蓋骨 cra	歯骨 den	脊椎骨 肋骨*2 vert vib	肩甲骨 scap p@d	上腕骨 hum p@d	橈骨 rad p@d	尺骨 ul p@d	中手骨 mc p@d	寛骨 pel p@d	大腿骨 fe p@d	脛骨 tib p@d	腓骨 fib p@d	中足骨 mt p@d	指骨 dig I①②③	備考
ガン	E7-3号	r							1							
		l														
マガ	C7-2号	r												1		
		l						1								
モ	E7-3号	r						1								
		l							1							
モ	B10-2号	r						1								
		l														
モ	Q9-1号	r						1								
		l							1							
モ	計	r						1						1		
		l						1	2							
コガモ	C7-2号	r									1					
		l														